

一般国道159号改築（鹿島バイパス）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

羽咋市

# 四柳白山下遺跡Ⅴ

〔本文編〕

2019

石 川 県 教 育 委 員 会

(公財)石川県埋蔵文化財センター

よつやなぎはくさんした  
四柳白山下遺跡Ⅴ  
〔本文編〕

2019

石 川 県 教 育 委 員 会  
(公財)石川県埋蔵文化財センター



遺跡遠景(平成9年度撮影、北から)



遺跡全景(平成6年度撮影、南西から)



G地区 第0・I面全景



G地区 第0・I面全景 (北東から)



G地区 第Ⅲ-1 面北半完掘状況



G地区 第Ⅲ-1 面水田301～303完掘状況(南西から)



G地区 第三-1面河跡3001 (新) 完掘状況 (北西から)



G地区 第三-1面河跡3001 (新) 完掘状況 (南西から)



G地区 第IV面南半完掘状況



G地区 第IV面北半完掘状況

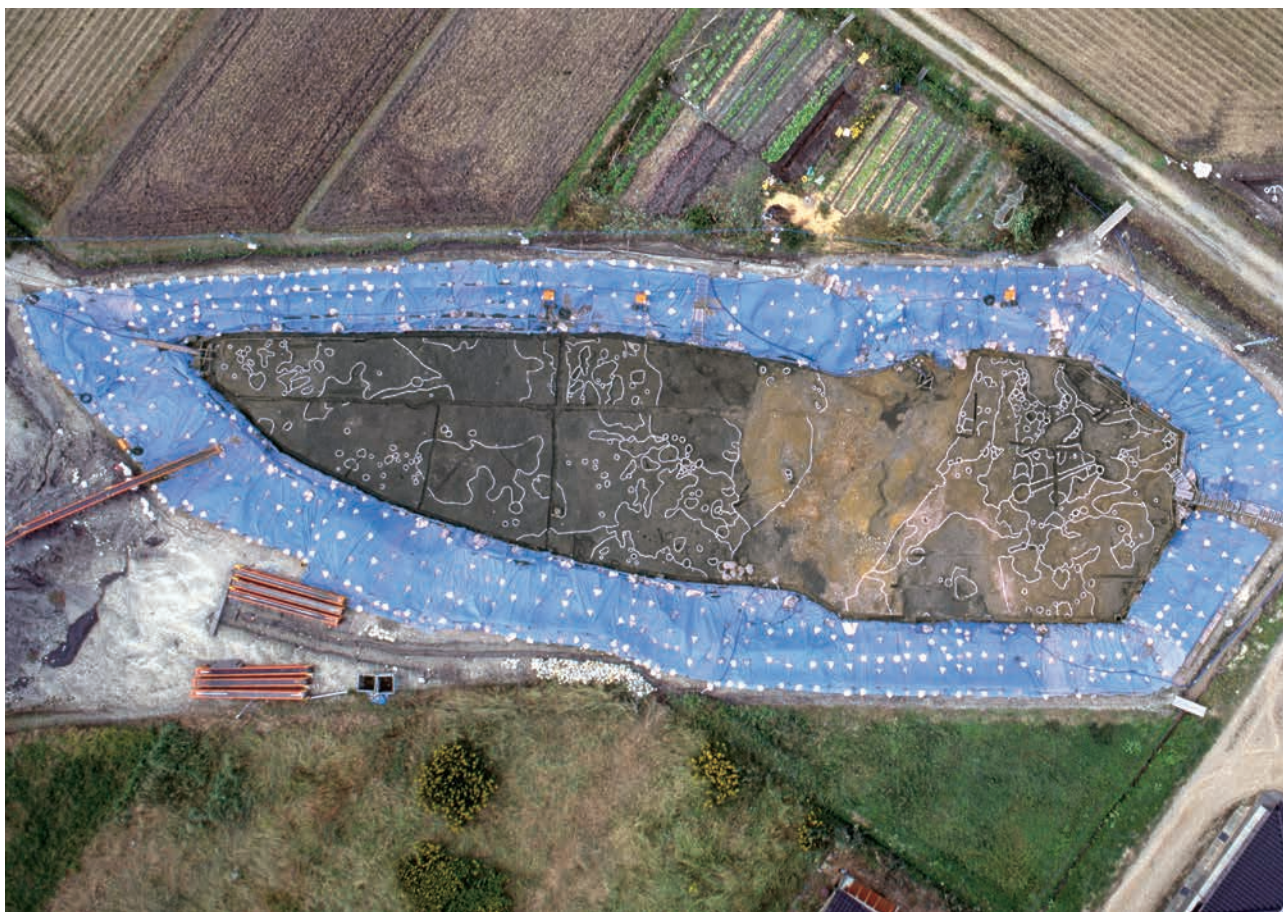


G地区 第V面全景(南から)



G地区 第V面水田区画完掘状況(東から)





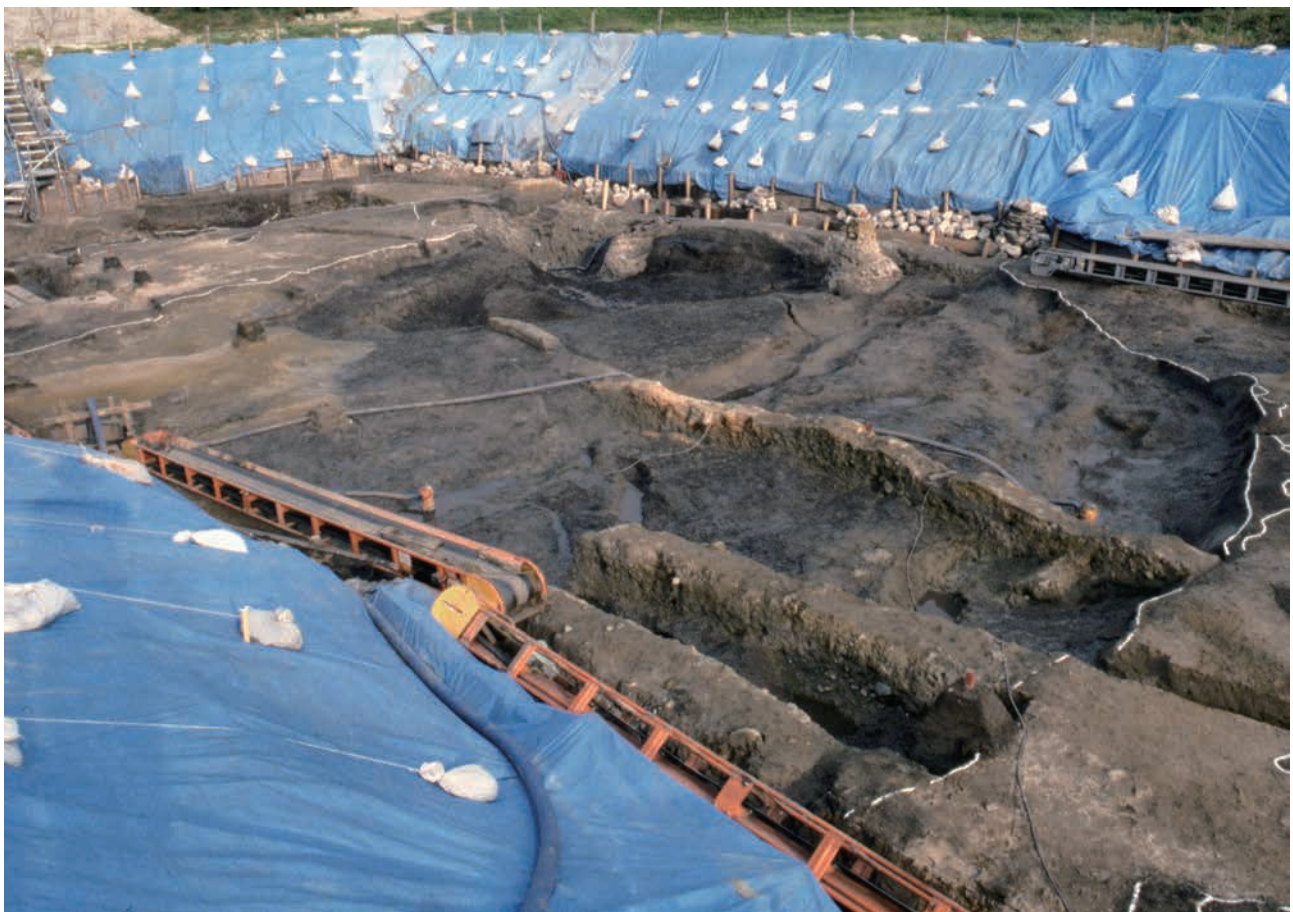
G地区 第VI-2面全景



G地区 第VI-2面SI651完掘状況(北東から)



G地区 第VI-3・VII-1面完掘状況(北東から)



G地区 第VI-3面完掘状況(西から)

## 例 言

- 1 本書は四柳白山下遺跡第4・5次調査G地区に係る発掘調査報告書〔本文編〕である。
- 2 遺跡の所在地は羽咋市四柳町地内である。
- 3 調査原因は一般国道159号改築(鹿島バイパス)であり、同工事を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所(旧建設省北陸地方建設局金沢工事事務所)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 現地調査は、石川県教育委員会からの委託を受けて、平成9(1997)年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が、平成10(1998)年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターがそれぞれ実施した。また、平成14(2002)～17(2005)年度及び平成28(2016)年度に出土品整理を、平成25・28～30(2013・16～18)年度に報告書原稿作成を、平成30(2018)年度に報告書編集・刊行を、公益財団法人石川県埋蔵文化財センター(平成24年度まで財団法人石川県埋蔵文化財センター)が、石川県教育委員会からそれぞれ委託を受けて実施した。
- 5 調査に係る費用は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査の期間・面積・担当課・担当者は次のとおりである。

〔第4次調査〕 期 間 平成9年4月10日～同年12月24日 面 積 2,800㎡(G地区)  
担 当 調査課調査第1係 担当者 川畑 誠(主任)、白田義彦(主任)

〔第5次調査〕 期 間 平成10年5月12日～同年12月28日 面 積 7,900㎡  
担 当 調査部調査第1課 担当者 川畑 誠(主任主事)、加藤克郎(主事)
- 7 出土品整理は、企画部整理課(平成12～17年度)、調査部特定事業調査グループ(平成28年度)が担当した。
- 8 自然科学的分析として、木製品の樹種同定を平成17年度に(株)パレオ・ラボ、同28年度に(株)古環境研究所にそれぞれ委託して実施した。
- 9 報告書の作成は平成25・28～30年度に、編集・刊行は平成30年度に実施し、調査部国関係調査グループが担当した。執筆分担は次のとおりで、遺物の写真撮影は池田拓が行った。

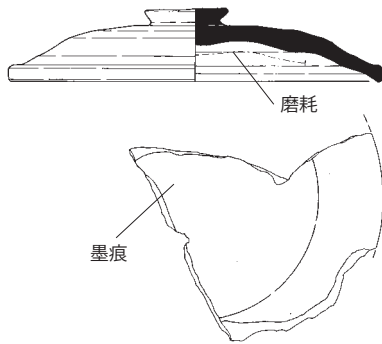
第1～5章、第7章 川畑 誠(調査部国関係調査グループ)  
第6章 (株)パレオ・ラボ、(株)古環境研究所
- 10 調査には下記の機関、個人の協力を得た(五十音順、敬称略)。

国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所、羽咋市教育委員会、出越茂和、中野知幸、加藤克郎
- 11 調査に関する記録と出土品は、石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記および次頁のとおりである。
  - (1)遺構実測図等の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
  - (2)水平水準はT.P(東京湾平均海面標高)による。
  - (3)遺構の名称は第3章第1節の略記号で表記し、遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。
  - (4)写真図版の遺構、遺物は、任意の縮尺である。

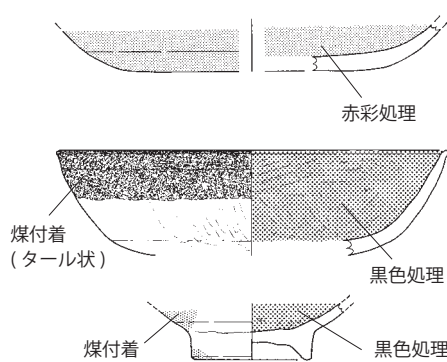
【挿図等凡例】

- 1 遺構図版は縮尺1/60、1/80を基本とし、規模や図版の性格により縮尺1/30、1/40等を適宜用いた。
- 2 土器等遺物図版は縮尺1/3を基本とし、縮尺が異なる個体は都度縮尺を付した。断面の塗りわけ・トーン等による表現は、須恵器が断面黒塗り、その他は白抜きとし、トーン等の表現は次のとおりである。

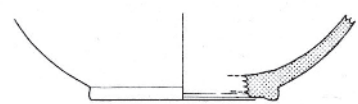
須恵器



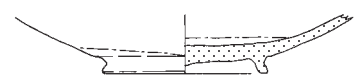
土師器



緑釉陶器



灰釉陶器



- 3 木製品実測図の木取り等を示すために木目を描き込んでいるが、木目の間隔は目の詰まり具合を表現する程度で、実際の木目間隔を記したものではない。
- 4 遺物観察表のうち、須恵器、土師器の胎土については、次の表のとおり分類を行った。

須恵器

胎土分類	特徴	推定産地
a	・素地は粘性に乏しく、海綿骨片は混ざらない。 ・白色微砂粒と1～3mm大の角張った石英・長石等の砂礫が混ざる。 ・割れ口はばさつき、コンクリートの質感をもつ。	鳥屋窯跡群 (中能登町北部)
b	・素地は粘性に富み、海綿骨片が混ざる。 ・赤紫色粒(シャモットか)が多く混ざる。 ・小さな気泡(焼きぶくれ)をもち、淡灰色の色調をもつことが多い。	羽咋窯跡群
c	・素地は粘質で緻密な印象を受ける。海綿骨片は混ざらない。 ・白色微砂粒の他、2mm程度の崩れた長石・石英・赤色粒が若干混ざる。	能登 (高松窯跡群か)
d	・素地は粘質で、海綿骨片が混ざる。 ・多量の微砂粒の他、1～2mm大の長石が混ざる。 ・割れ口はばさつき、コンクリートの質感をもつ。	鳥屋窯跡群か
e	・素地は粘質で、しっとりとした質感をもつ。海綿骨片は混ざらない。 ・微砂粒は少なく、1～3mm大の角張った石英・長石等の砂礫が混ざる。	鳥屋窯跡群 (中能登町北部)
f	・素地は粘質で、しっとりとした質感をもつ。 ・微砂粒、1～4mm大の角張った石英・長石等の砂礫が多量に混ざる。	鳥屋窯跡群 (中能登町北部)
g	・bと類似。素地は粘性に富み、海綿骨片が多く混ざる。 ・微砂粒、石英粒がほとんど混ざらない。 ・気泡をもち、淡灰色の色調をもつことが多い。	羽咋窯跡群
h	・素地は粘質で、海綿骨片が混ざらない。 ・多量の微砂粒の他、1～2mm大の長石が若干混ざる。 ・割れ口はざらつく。	鳥屋窯跡群 (中能登町西部)
i	・素地は粘質に富み、しっとりとした質感をもつ。海綿骨片は混ざらない。 ・微砂粒の他、1～5mm程度の崩れた長石を主体とした砂礫が混ざる。	能登 (高松窯跡群か)
j	・素地は粘性に乏しく、砂っぽい質感をもつ。海綿骨片が混ざる。 ・1～3mm大の角張った石英・長石が多く混ざる。 ・割れ口はざらつく。土師器分類オに類似。	鳥屋窯跡群
k	・素地は粘性に富み、海綿骨片が混ざる。 ・石英質の微砂粒、2mm大の石英粒が少し混ざる。 ・気泡が目立つ。	羽咋窯跡群か
l	・素地は粘質で、キメが細かい。海綿骨片は混ざらない。 ・白色微砂粒、1mm大の石英粒がごく少量混ざる。	鳥屋窯跡群か
x	・その他	不明

土師器

胎土分類	特徴	備考
ア	・素地は粒子が粗く、砂っぽい質感をもつ。海綿骨片が多く混ざる。 ・1～3mm大の角張った石英・長石・金雲母等の砂礫が多く混ざる。	主に 食膳具
イ	・素地は粒子がやや粗い。海綿骨片が混ざる。 ・1～3mm以下の長石細砂粒を主体に、角張った1～3mm大の石英・長石等の砂礫が混ざる。	
ウ	・素地は粘質で、海綿骨片が多く混ざる。 ・比較的粒径が揃った1mm大の石英・長石・赤色粒が混ざる。	
エ	・素地は粘質で、海綿骨片が多く混ざる。 ・0.5mm大の赤色粒を含む細砂粒が混ざる。	主に 煮炊具
オ	・素地は砂っぽく、海綿骨片が混ざらない。 ・1～2mm大の石英・長石が多く混ざる。 ・気泡があり、割れ口はばさついたコンクリートの質感をもつ。	
カ	・素地は粒子が粗く、砂っぽい印象を受ける。海綿骨片が混ざる。 ・微砂粒に加え、1～3mm大の角張った石英・長石・赤色粒等が混ざる。	
キ	・素地は粘質で、海綿骨片が若干混ざる。 ・石英、赤色粒等の微砂粒が混ざる。 ・細かい気泡が目立つ。	
ク	・素地は粘質で、海綿骨片が多く混ざる。 ・1～3mm大の角張った石英・長石・赤色粒等が混ざる。	
ケ	・素地は粒子が粗く、海綿骨片が混ざらない。 ・微砂粒に加え、金雲母、1～3mm大の角張った石英・長石等が混ざる。	

# 目 次

## 〔本文編〕

第1章 調査の経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理等作業の経過	5
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の方法と基本層序	13
第1節 調査の方法	13
第2節 基本層序	16
第4章 G地区の遺構と遺物	21
第1節 調査の概要	21
第2節 第0・I面の遺構と遺物	23
第3節 第Ⅲ-1面の遺構と遺物	115
第4節 第Ⅲ-2面の遺構と遺物	154
第5節 第Ⅳ面の遺構と遺物	212
第6節 第Ⅴ面の遺構と遺物	306
第7節 第Ⅵ-1面の遺構と遺物	333
第8節 第Ⅵ-2面の遺構と遺物	357
第9節 第Ⅵ-3面・第Ⅶ-1面の遺構と遺物	395
第10節 第Ⅶ-2面の遺構と遺物	409
第5章 H地区の遺構と遺物	420
第1節 調査の概要	420
第2節 第0・I面の遺構と遺物	421
第3節 第Ⅲ-1・2面の遺構と遺物	425
第4節 第Ⅳ面の遺構と遺物	434
第6章 自然科学的分析	445
第7章 総 括	455
第1節 G地区第Ⅲ面の存続年代について	455
第2節 G・H地区の変遷	457
第3節 周辺の古代集落遺跡との比較検討	470
第4節 総括－古代の四柳白山下遺跡の評価を中心として－	489

## 挿図目次

<p>第1図 調査地区区割り図(S=1/2,500) …………… 3</p> <p>第2図 遺跡の位置 …………… 6</p> <p>第3図 周辺の地勢 …………… 7</p> <p>第4図 周辺の遺跡分布図(S=1/25,000) …………… 9</p> <p>第5図 調査地区グリッド配置図(S=1/500・2,000) …………… 14</p> <p>第6図 G地区グリッド配置・土層柱状図位置図 (S=1/600) …………… 15</p> <p>第7図 第1～7次調査の主な調査(生活)面の高さ 模式図 …………… 16</p> <p>第8図 G地区東壁土層柱状図(S=1/60) …………… 18</p> <p>第9図 G地区第0・I面全体図(S=1/300) …………… 24</p> <p>第10図 G地区第0・I面SB・SA配置図(S=1/300) …………… 25</p> <p>第11図 G地区第0・I面SE・SK・SD他配置図 (S=1/300) …………… 26</p> <p>第12図 G地区第0・I面平面図1(S=1/80) …………… 27</p> <p>第13図 G地区第0・I面平面図2・3(S=1/80) …………… 28</p> <p>第14図 G地区第0・I面平面図4(S=1/80) …………… 29</p> <p>第15図 G地区第0・I面平面図5(S=1/80) …………… 30</p> <p>第16図 G地区第0・I面平面図6・7(S=1/80) …………… 31</p> <p>第17図 G地区第0・I面平面図8(S=1/80) …………… 32</p> <p>第18図 G地区第0・I面平面図9・10(S=1/80) …… 33</p> <p>第19図 G地区第0・I面平面図11(S=1/80) …… 34</p> <p>第20図 G地区第0・I面平面図12(S=1/80) …… 35</p> <p>第21図 G地区第0・I面平面図13(S=1/80) …… 36</p> <p>第22図 G地区第0・I面平面図14・15(S=1/80) …… 37</p> <p>第23図 G地区第0・I面F地区SB104平面図・ 土層断面図(S=1/60) …………… 39</p> <p>第24図 G地区第0・I面SB101平面図・断面図 (S=1/60) …………… 40</p> <p>第25図 G地区第0・I面SB102平面図・断面図 (S=1/60) …………… 42</p> <p>第26図 G地区第0・I面SB103平面図・断面図 (S=1/60) …………… 42</p> <p>第27図 G地区第0・I面SB104平面図・土層断面図 (S=1/60) …………… 43</p> <p>第28図 G地区第0・I面SB105平面図・土層断面図 (S=1/60) …………… 44</p> <p>第29図 G地区第0・I面SB106平面図・土層断面図 (S=1/60) …………… 45</p>	<p>第30図 G地区第0・I面SB107平面図・土層断面図 (S=1/60) …………… 47</p> <p>第31図 G地区第0・I面SB108平面図・土層断面図 (S=1/60) …………… 48</p> <p>第32図 G地区第0・I面SB109平面図・土層断面図 (S=1/60) …………… 49</p> <p>第33図 G地区第0・I面SB110、SA103・105平面図 (S=1/60) …………… 50</p> <p>第34図 G地区第0・I面SB110、SA103土層断面図 (S=1/60) …………… 51</p> <p>第35図 G地区第0・I面SB110、SA105土層断面図 (S=1/60) …………… 52</p> <p>第36図 G地区第0・I面SB111平面図・土層断面図 (S=1/60) …………… 53</p> <p>第37図 G地区第0・I面SB112・113平面図・断面図 (S=1/60) …………… 54</p> <p>第38図 G地区第0・I面SB114平面図・断面図 (S=1/60) …………… 55</p> <p>第39図 G地区第0・I面SB115平面図・断面図 (S=1/60) …………… 56</p> <p>第40図 G地区第0・I面SB116平面図・土層断面図 (S=1/60) …………… 57</p> <p>第41図 G地区第0・I面SB117・SA106平面図・ 土層断面図(S=1/60) …………… 58</p> <p>第42図 G地区第0・I面SB118平面図・断面図 (S=1/60) …………… 59</p> <p>第43図 G地区第0・I面SB119平面図・土層断面図 (S=1/60) …………… 60</p> <p>第44図 G地区第0・I面SB120平面図・断面図 (S=1/60) …………… 61</p> <p>第45図 G地区第0・I面SA101・102平面図・土層断面 図(S=1/60) …………… 62</p> <p>第46図 G地区第0・I面SA104等平面図・土層断面図 (S=1/60・100) …………… 63</p> <p>第47図 G地区第0・I面SB出土遺物実測図1 (S=1/3・1/6) …………… 64</p> <p>第48図 G地区第0・I面SB出土遺物実測図2 (S=1/3・1/6) …………… 65</p> <p>第49図 G地区第0・I面SB・SA出土遺物実測図 (S=1/6) …………… 66</p> <p>第50図 G地区第0・I面SA出土遺物実測図(S=1/6) …………… 67</p>
---	---

第51図	G地区第0・I面SE平面図・土層断面図1 (S = 1/30) ……………	70	第73図	G地区第0・I面下確認調査概略図 (S = 1/500) ……………	106
第52図	G地区第0・I面SE平面図・土層断面図2 (S = 1/30) ……………	71	第74図	G地区第0・I面下確認調査土層断面図 (S = 1/60) ……………	106
第53図	G地区第0・I面SE平面図・土層断面図3 (S = 1/30) ……………	73	第75図	G地区第0・I面下確認調査出土遺物1 (S = 1/3) ……………	107
第54図	G地区第0・I面SE・SK平面図・土層断面図 (S = 1/30) ……………	75	第76図	G地区第0・I面下確認調査出土遺物1 (S = 1/3) ……………	108
第55図	G地区第0・I面SE出土遺物実測図 (S = 1/3・1/6) ……………	76	第77図	G地区第0・I面建物等変遷案(S = 1/500) ……………	113
第56図	G地区第0・I面SK平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……………	78	第78図	G地区第Ⅲ-1面全体図(S = 1/300) ……	116
第57図	G地区第0・I面SK出土遺物実測図1 (S = 1/3・1/6) ……………	79	第79図	G地区第Ⅲ-1面主要遺構配置図(S = 1/300) ……………	117
第58図	G地区第0・I面SK出土遺物実測図2 (S = 1/3・1/6) ……………	80	第80図	G地区第Ⅲ-1面平面図1(S = 1/80) ……	118
第59図	G地区第0・I面ピット土層断面図(S = 1/60) ……………	82	第81図	G地区第Ⅲ-1面平面図2・3(S = 1/80) ……	119
第60図	G地区第0・I面ピット・SD土層断面図 (S = 1/60) ……………	83	第82図	G地区第Ⅲ-1面平面図4(S = 1/80) ……	120
第61図	G地区第0・I面ピット出土遺物実測図1 (S = 1/2・1/3・1/6) ……………	85	第83図	G地区第Ⅲ-1面平面図5(S = 1/80) ……	121
第62図	G地区第0・I面ピット出土遺物実測図2 (S = 1/3・1/6) ……………	86	第84図	G地区第Ⅲ-1面平面図6・7(S = 1/80) ……	122
第63図	G地区第0・I面SD土層断面図(S = 1/60) ……………	88	第85図	G地区第Ⅲ-1面平面図8(S = 1/80) ……	123
第64図	G地区第0・I面SD出土遺物実測図(S = 1/3) ……………	89	第86図	G地区第Ⅲ-1面平面図9・10(S = 1/80) ……	124
第65図	G地区第0・I面整地土・暗渠排水配置図 (S = 1/500) ……………	92	第87図	G地区第Ⅲ-1面平面図11(S = 1/80) ……	125
第66図	G地区第0・I面整地土土層断面図1 (S = 1/60) ……………	93	第88図	G地区第Ⅲ-1面平面図12(S = 1/80) ……	126
第67図	G地区第0・I面整地土土層断面図2 (S = 1/60) ……………	94	第89図	G地区第Ⅲ-1面平面図13(S = 1/80) ……	127
第68図	G地区第0・I面整地土等出土遺物実測図 (S = 1/2・1/3) ……………	95	第90図	G地区第Ⅲ-1面平面図14(S = 1/80) ……	128
第69図	G地区第0・I面包含層等出土遺物実測図1 (S = 1/3) ……………	96	第91図	G地区第Ⅲ-1面平面図15(S = 1/80) ……	129
第70図	G地区第0・I面包含層等出土遺物実測図2 (S = 1/3) ……………	97	第92図	G地区第Ⅲ-1面SB・ピット平面図・ 土層断面図(S = 1/60) ……………	131
第71図	G地区第0・I面包含層等出土遺物実測図3 (S = 1/2・1/3・1/6) ……………	99	第93図	G地区第Ⅲ-1面SB・ピット出土遺物実測図 (S = 1/3) ……………	132
第72図	G地区第0・I面包含層等出土遺物実測図4 (S = 1/3) ……………	100	第94図	G地区第Ⅲ-1面F20・21区SD平面図 (S = 1/60) ……………	133
			第95図	G地区第Ⅲ-1面SD土層断面図1(S = 1/60) ……………	134
			第96図	G地区第Ⅲ-1面SD土層断面図2(S = 1/60) ……………	135
			第97図	G地区第Ⅲ-1面SD出土遺物実測図(S = 1/3) ……………	137
			第98図	G地区第Ⅲ-1面水田301～303平面図 (S = 1/100) ……………	138
			第99図	G地区第Ⅲ-1面水田等土層断面図1 (S = 1/60) ……………	139
			第100図	G地区第Ⅲ-1面水田等土層断面図2 (S = 1/60) ……………	140
			第101図	G地区第Ⅲ-1面河跡3001(新)出土遺物 実測図1(S = 1/3) ……………	142

第102图	G地区第Ⅲ-1面河跡3001(新)出土遺物 実測図2(S = 1/3 · 1/6) .....	143	第127图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図1(S = 1/3) .....	175
第103图	G地区第Ⅲ-1面SX他平面図·土層断面図 (S = 1/60) .....	145	第128图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図2(S = 1/3·1/6) .....	176
第104图	G地区第Ⅲ-1面SX他出土遺物実測図 (S = 1/3) .....	145	第129图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図3(S = 1/3·1/6) .....	177
第105图	G地区第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図1 (S = 1/3) .....	147	第130图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図4(S = 1/3·1/6) .....	178
第106图	G地区第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図2 (S = 1/2·1/3) .....	148	第131图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図5(S = 1/3) .....	179
第107图	G地区第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図3 (S = 1/3) .....	149	第132图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図6(S = 1/3) .....	180
第108图	G地区第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図4 (S = 1/2·1/3) .....	150	第133图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図7(S = 1/3) .....	181
第109图	G地区第Ⅲ-2面全体図(S = 1/150) .....	154	第134图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図8(S = 1/3) .....	182
第110图	G地区第Ⅲ-2面平面図1(S = 1/80) .....	155	第135图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図9(S = 1/3) .....	183
第111图	G地区第Ⅲ-2面平面図2(S = 1/80) .....	156	第136图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図10(S = 1/3) .....	185
第112图	G地区第Ⅲ-2面平面図3(S = 1/80) .....	157	第137图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図11(S = 1/3) .....	186
第113图	G地区第Ⅲ-2面平面図4(S = 1/80) .....	158	第138图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図12(S = 1/3·1/6) .....	187
第114图	G地区第Ⅲ-2面耕作单位復元図(S = 1/300) .....	159	第139图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図13(S = 1/3) .....	188
第115图	G地区第Ⅲ-2面SD土層断面図1(S = 1/60) .....	161	第140图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図14(S = 1/3·1/6) .....	189
第116图	G地区第Ⅲ-2面SD土層断面図2(S = 1/60) .....	163	第141图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図1 (S = 1/3) .....	191
第117图	G地区第Ⅲ-2面SD等出土遺物実測図 (S = 1/3) .....	163	第142图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図2 (S = 1/3) .....	192
第118图	G地区第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図1 (S = 1/3) .....	164	第143图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図3 (S = 1/3) .....	193
第119图	G地区第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図2 (S = 1/3·1/6) .....	165	第144图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図4 (S = 1/3) .....	194
第120图	G地区第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図3 (S = 1/3·1/6) .....	166	第145图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図5 (S = 1/3) .....	195
第121图	G地区第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図4 (S = 1/3) .....	167	第146图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図6 (S = 1/3) .....	196
第122图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001(古)完掘狀況 平面図(S = 1/200) .....	168	第147图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図7 (S = 1/3) .....	198
第123图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001(新)完掘狀況 平面図(S = 1/200) .....	169	第148图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図8 (S = 1/3) .....	199
第124图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001土層断面図1 (S = 1/80) .....	171			
第125图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001土層断面図2 (S = 1/80) .....	172			
第126图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001土層断面図3 (S = 1/80) .....	173			



第149図	G地区第Ⅲ面変遷案(S = 1/500) ……	201	第178図	G地区第Ⅳ面SB417平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	244
第150図	G地区第Ⅳ面全体図(S = 1/300) ……	213	第179図	G地区第Ⅳ面SB418平面図・断面図 (S = 1/60) ……	245
第151図	G地区第Ⅳ面主要遺構配置図(S = 1/300) ……………	214	第180図	G地区第Ⅳ面SB419平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	246
第152図	G地区第Ⅳ面平面図1(S = 1/80) ……	215	第181図	G地区第Ⅳ面SB420平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	247
第153図	G地区第Ⅳ面平面図2(S = 1/80) ……	216	第182図	G地区第Ⅳ面SB421平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	248
第154図	G地区第Ⅳ面平面図3・4(S = 1/80) ……	217	第183図	G地区第Ⅳ面SB422平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	249
第155図	G地区第Ⅳ面平面図5・6(S = 1/80) ……	218	第184図	G地区第Ⅳ面SB423平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	250
第156図	G地区第Ⅳ面平面図7(S = 1/80) ……	219	第185図	G地区第Ⅳ面SB424平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	251
第157図	G地区第Ⅳ面平面図8・9(S = 1/80) ……	220	第186図	G地区第Ⅳ面SB425平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	252
第158図	G地区第Ⅳ面平面図10(S = 1/80) ……	221	第187図	G地区第Ⅳ面SB426平面図・断面図 (S = 1/60) ……	253
第159図	G地区第Ⅳ面平面図11(S = 1/80) ……	222	第188図	G地区第Ⅳ面SA402・403平面図・ 土層断面図(S = 1/60) ……	255
第160図	G地区第Ⅳ面平面図12(S = 1/80) ……	223	第189図	G地区第Ⅳ面SA404～406平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	256
第161図	G地区第Ⅳ面平面図13(S = 1/80) ……	224	第190図	G地区第Ⅳ面SA407平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	257
第162図	G地区第Ⅳ面平面図14(S = 1/80) ……	225	第191図	G地区第Ⅳ面SB出土遺物実測図1(S = 1/3) ……………	258
第163図	G地区第Ⅳ面SB401平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	226	第192図	G地区第Ⅳ面SB出土遺物実測図2(S = 1/3) ……………	259
第164図	G地区第Ⅳ面SB402平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	228	第193図	G地区第Ⅳ面SB出土遺物実測図3(S = 1/3) ……………	260
第165図	G地区第Ⅳ面SB403平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	230	第194図	G地区第Ⅳ面ピット土層断面図(S = 1/60) ……………	261
第166図	G地区第Ⅳ面SB404・405平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	231	第195図	G地区第Ⅳ面SB・ピット出土遺物実測図 (S = 1/3) ……	262
第167図	G地区第Ⅳ面SB406平面図・断面図 (S = 1/60) ……	232	第196図	G地区第Ⅳ面ピット出土遺物実測図 (S = 1/3・1/6) ……	263
第168図	G地区第Ⅳ面SB407平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	234	第197図	G地区第Ⅳ面SE4001平面図・断面図 (S = 1/40) ……	265
第169図	G地区第Ⅳ面SB408・SA401平面図・ 土層断面図(S = 1/60) ……	235	第198図	G地区第Ⅳ面SE4001出土井戸枿材実測図1 (S = 1/12) ……	266
第170図	G地区第Ⅳ面SB409平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	236	第199図	G地区第Ⅳ面SE4001出土井戸枿材実測図2 (S = 1/12) ……	267
第171図	G地区第Ⅳ面SB410平面図・断面図 (S = 1/60) ……	237			
第172図	G地区第Ⅳ面SB411平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	238			
第173図	G地区第Ⅳ面SB412平面図・断面図 (S = 1/60) ……	239			
第174図	G地区第Ⅳ面SB413平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	240			
第175図	G地区第Ⅳ面SB414平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	241			
第176図	G地区第Ⅳ面SB415平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	242			
第177図	G地区第Ⅳ面SB416平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	243			

第200図	G地区第IV面SE4001出土井戸枳材実測図3 (S = 1/1/6・1/12) ……………	268	第225図	G地区第V面平面図5(S = 1/80) ……………	313
第201図	G地区第IV面SE4001出土遺物実測図 (S = 1/1/3・1/6) ……………	269	第226図	G地区第V面平面図6(S = 1/80) ……………	314
第202図	G地区第IV面SD土層断面図1(S = 1/60) ……………	272	第227図	G地区第V面平面図7(S = 1/80) ……………	315
第203図	G地区第IV面SD土層断面図2(S = 1/60) ……………	273	第228図	G地区第V面平面図8(S = 1/80) ……………	316
第204図	G地区第IV面SD出土遺物実測図(S = 1/3) ……………	274	第229図	G地区第V面平面図9(S = 1/80) ……………	317
第205図	G地区第IV面SX平面図・土層断面図1 (S = 1/30・1/60) ……………	276	第230図	G地区第V面平面図10(S = 1/80) ……	318
第206図	G地区第IV面SX平面図・土層断面図2 (S = 1/30・1/60) ……………	277	第231図	G地区第V・VI面土層断面図1(S = 1/60) ……………	319
第207図	G地区第IV面SX出土遺物実測図(S = 1/3) ……………	278	第232図	G地区第V・VI面土層断面図2(S = 1/60) ……………	320
第208図	G地区第IV面包含層出土遺物実測図1 (S = 1/3) ……………	280	第233図	G地区第V・VI面土層断面図3(S = 1/60) ……………	321
第209図	G地区第IV面包含層出土遺物実測図2 (S = 1/3) ……………	281	第234図	G地区第V面水田区画平面図(S = 1/100) ……………	323
第210図	G地区第IV面包含層出土遺物実測図3 (S = 1/3) ……………	282	第235図	G地区第V面水田区画断面図1(S = 1/60) ……………	325
第211図	G地区第IV面包含層出土遺物実測図4 (S = 1/3) ……………	283	第236図	G地区第V面水田区画断面図2(S = 1/60) ……………	326
第212図	G地区第IV面包含層出土遺物実測図5 (S = 1/3) ……………	285	第237図	G地区第V面SD土層断面図(S = 1/60) ……………	327
第213図	G地区第IV面包含層出土遺物実測図6 (S = 1/3) ……………	286	第238図	G地区第V面出土遺物実測図(S = 1/3・1/6) ……………	328
第214図	G地区第IV面包含層出土遺物実測図7 (S = 1/3) ……………	288	第239図	G地区第V面変遷図(S = 1/600) ……………	330
第215図	G地区第IV面包含層出土遺物実測図8 (S = 1/3) ……………	289	第240図	G地区D・F・G地区水田区画配置図 (S = 1/600) ……………	331
第216図	G地区第IV面包含層等出土遺物実測図9 (S = 1/3) ……………	290	第241図	金沢市梅田B遺跡水田区画全体図 (S = 1/800) ……………	332
第217図	G地区第IV面主要遺構変遷図1(S = 1/500) ……………	295	第242図	G地区第VI-1面全体図(S = 1/250) ……	334
第218図	G地区第IV面主要遺構変遷図2(S = 1/500) ……………	296	第243図	G地区第VI-1面平面図1(S = 1/80) ……	335
第219図	G地区第V面全体図(S = 1/300) ……………	307	第244図	G地区第VI-1面平面図2(S = 1/80) ……	336
第220図	G地区第V面遺構等配置図(S = 1/300) ……………	308	第245図	G地区第VI-1面平面図3(S = 1/80) ……	337
第221図	G地区第V面平面図1(S = 1/80) ……………	309	第246図	G地区第VI-1面平面図4(S = 1/80) ……	338
第222図	G地区第V面平面図2(S = 1/80) ……………	310	第247図	G地区第VI-1面平面図5(S = 1/80) ……	339
第223図	G地区第V面平面図3(S = 1/80) ……………	311	第248図	G地区第VI-1面SK、ピット平面図、 土層断面図(S = 1/40・1/60) ……………	340
第224図	G地区第V面平面図4(S = 1/80) ……………	312	第249図	G地区第VI-1面SD実測図(S = 1/40・1/60) ……………	342
			第250図	G地区第VI-1面SD土層断面図(S = 1/60) ……………	343
			第251図	G地区第VI-1面SD等土層断面図(S = 1/60) ……………	344
			第252図	G地区第VI-1面ピット、SD出土遺物実測図 (S = 1/3) ……………	345
			第253図	G地区第VI-1面SD、SX出土遺物実測図 (S = 1/3) ……………	346

第254図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図1 (S = 1/3) .....	347	第281図	G地区第VI-2面出土遺物実測図2 (S = 1/3) .....	381
第255図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図2 (S = 1/3) .....	348	第282図	G地区第VI-2面出土土器分類図(S = 1/6) .....	386
第256図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図3 (S = 1/3) .....	350	第283図	周辺の弥生時代の集落遺跡分布図 (S = 1/60,000) .....	388
第257図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図4 (S = 1/2・1/3) .....	351	第284図	周辺の弥生時代の集落遺跡の消長模式図1 (S = 1/140,000) .....	390
第258図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図5 (S = 1/3) .....	352	第285図	周辺の弥生時代の集落遺跡の消長模式図2 (S = 1/140,000) .....	391
第259図	G地区第VI-1面主要遺構復元案(S = 1/300) .....	354	第286図	G地区第VI-3・VII-1面全体図(S = 1/300) .....	396
第260図	G地区第VI-2面全体図(S = 1/300) .....	358	第287図	G地区第VI-3・VII-1面平面図1(S = 1/80) .....	397
第261図	G地区第VI-2面平面図1(S = 1/80) .....	359	第288図	G地区第VI-3・VII-1面平面図2(S = 1/80) .....	398
第262図	G地区第VI-2面平面図2(S = 1/80) .....	360	第289図	G地区第VI-3・VII-1面平面図3(S = 1/80) .....	399
第263図	G地区第VI-2面平面図3(S = 1/80) .....	361	第290図	G地区第VI-3・VII-1面平面図4(S = 1/80) .....	400
第264図	G地区第VI-2面平面図4(S = 1/80) .....	362	第291図	G地区第VI-3・VII-1面平面図5(S = 1/80) .....	401
第265図	G地区第VI-2面平面図5(S = 1/80) .....	363	第292図	G地区第VI-3面土層断面図(S = 1/60) .....	402
第266図	G地区第VI-2面平面図6(S = 1/80) .....	364	第293図	G地区第VI-3面出土遺物実測図(S = 1/3) .....	403
第267図	G地区第VI-2面平面図7(S = 1/80) .....	365	第294図	G地区第VII-1面SK・SD平面図・土層断面図 (S = 1/60) .....	405
第268図	G地区第VI-2面平面図8(S = 1/80) .....	366	第295図	G地区第VII-1面円形建物復元案(S = 1/60) .....	406
第269図	G地区第VI-2面～VII-2面土層断面図1 (S = 1/60) .....	367	第296図	G地区第VII-1面土層断面図(S = 1/60) .....	407
第270図	G地区第VI-2面～VII-2面土層断面図2 (S = 1/60) .....	368	第297図	G地区第VII-1面出土遺物実測図(S = 1/3) .....	407
第271図	G地区第VI-2面SI651平面図・土層断面図 (S = 1/60) .....	369	第298図	G地区第VII-2面全体図(S = 1/300) .....	410
第272図	G地区第VI-2面SI651・SK平面図・ 土層断面図(S = 1/60) .....	370	第299図	G地区第VII-2面平面図1(S = 1/80) .....	411
第273図	G地区第VI-2面SI651出土遺物実測図1 (S = 1/3) .....	372	第300図	G地区第VII-2面平面図2(S = 1/80) .....	412
第274図	G地区第VI-2面SI651出土遺物実測図2 (S = 1/3) .....	373	第301図	G地区第VII-2面平面図3(S = 1/80) .....	413
第275図	G地区第VI-2面SI651・SK出土遺物実測図 (S = 1/2・1/3) .....	374	第302図	G地区第VII-2面平面図4(S = 1/80) .....	414
第276図	G地区第VI-2面ピット、SD土層断面図 (S = 1/60) .....	376	第303図	G地区第VII-2面平面図5(S = 1/80) .....	415
第277図	G地区第VI-2面SD、SX土層断面図 (S = 1/60) .....	377	第304図	G地区第VII-2面平面図・土層断面図 (S = 1/60) .....	416
第278図	G地区第VI-2面SX6502実測図 (S = 1/30・1/60) .....	379	第305図	G地区第VII-2面出土遺物実測図(S = 1/3) .....	417
第279図	G地区第VI-2面建物の可能性をもつ 遺構復元案(S = 1/200) .....	379	第306図	調査区と周辺の遺跡(S = 1/15,000) .....	419
第280図	G地区第VI-2面出土遺物実測図1 (S = 1/3) .....	380	第307図	H地区グリッド配置図(S = 1/200) .....	420
			第308図	H地区西壁土層柱状図(S = 1/60) .....	421

第309図	H地区第0・I面平面図(S=1/80)……………	422	第329図	G地区調査面模式図(S=1/600)……………	458
第310図	H地区第0・I面土層断面図(S=1/60) ……………	423	第330図	C・D・F～H地区変遷図1(S=1/800) ……………	459
第311図	H地区第0・I面出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)……………	424	第331図	C・D・F～H地区変遷図2(S=1/800) ……………	461
第312図	H地区第Ⅲ-1面平面図(S=1/80)……………	426	第332図	C・D・F～H地区変遷図3(S=1/800) ……………	462
第313図	H地区第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図1 (S=1/3)……………	427	第333図	C・D・F～H地区変遷図4(S=1/800) ……………	465
第314図	H地区第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図2 (S=1/3)……………	429	第334図	C・D・F～H地区変遷図5(S=1/800) ……………	467
第315図	H地区第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図3 (S=1/3)……………	430	第335図	C・D・F～H地区変遷図6(S=1/800) ……………	469
第316図	H地区第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図4 (S=1/3)……………	431	第336図	旧邑知潟周辺の古代集落遺跡分布図 (S=1/60,000)……………	471
第317図	H地区第Ⅳ面平面図(S=1/80)……………	435	第337図	旧邑知潟周辺の古代集落遺跡消長模式図1 (S=1/140,000)……………	473
第318図	H地区第Ⅳ面SB平面図・土層断面図1 (S=1/60)……………	436	第338図	旧邑知潟周辺の古代集落遺跡消長模式図2 (S=1/140,000)……………	476
第319図	H地区第Ⅳ面SB平面図・土層断面図2 (S=1/60)……………	437	第339図	杉野屋遺跡群の文字共有等関係図 (S=1/16,000)……………	486
第320図	H地区第Ⅳ面SB、ピット平面図・土層断面図 (S=1/60)……………	438	第340図	杉野屋遺跡、杉野屋専光寺遺跡出土 墨書土器実測図(S=1/5)……………	487
第321図	H地区第Ⅳ面出土遺物実測図1(S=1/3) ……………	439	第341図	杉野屋専光寺遺跡「院」復元案 (S=1/400・1/1,000)……………	487
第322図	H地区第Ⅳ面出土遺物実測図2(S=1/6) ……………	440	第342図	旧邑知潟周辺の荘園、公領分布想定図 (S=1/60,000)……………	490
第323図	H地区第Ⅳ面出土遺物実測図3(S=1/3) ……………	442	第343図	杉野屋遺跡群の発掘調査地点位置図 (S=1/16,000)……………	491
第324図	出土木製品樹種同定分析木材写真1 ……	449	第344図	古代の旧邑知潟周辺の公的景観模式図 ……………	492
第325図	出土木製品樹種同定分析木材写真2 ……	450			
第326図	出土木製品樹種同定分析木材写真3 ……	451			
第327図	出土木製品樹種同定分析木材写真4 ……	452			
第328図	F・G地区第Ⅲ・Ⅳ面出土土器実測図(S=1/5) ……………	456			

## 表 目 次

第 1 表	各年度の調査概要一覧表	2	第 42 表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表1	299
第 2 表	調査体制	3	第 43 表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表2	300
第 3 表	整理体制	3	第 44 表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表3	301
第 4 表	遺跡周辺の主な発掘調査	8	第 45 表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表4	302
第 5 表	周辺の遺跡一覧表	10	第 46 表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表5	303
第 6 表	主な調査面の対応関係	13	第 47 表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表6	304
第 7 表	G地区調査面の概要一覧表	19	第 48 表	G地区第Ⅳ面出土石製品観察表	304
第 8 表	G地区第 0・I 面SB・SA規模等一覧表	38	第 49 表	G地区第Ⅳ面出土金属製品観察表	304
第 9 表	G地区第 0・I 面SE規模等一覧表	69	第 50 表	G地区第Ⅳ面出土木製品観察表	305
第 10 表	G地区第 0・I 面出土土器類観察表1	101	第 51 表	G地区第Ⅴ面水田区画規模等一覧表	324
第 11 表	G地区第 0・I 面出土土器類観察表2	102	第 52 表	G地区第Ⅴ面出土土器観察表	329
第 12 表	G地区第 0・I 面出土土器類観察表3	103	第 53 表	G地区第Ⅴ面出土石製品観察表	329
第 13 表	G地区第 0・I 面出土石製品観察表	103	第 54 表	G地区第Ⅴ面出土木製品観察表	329
第 14 表	G地区第 0・I 面出土木製品観察表1	104	第 55 表	G地区第Ⅵ-1 面SD規模等一覧表	341
第 15 表	G地区第 0・I 面出土木製品観察表2	105	第 56 表	G地区第Ⅵ-1 面出土土器観察表1	355
第 16 表	G地区第 0・I 面出土金属製品観察表	105	第 57 表	G地区第Ⅵ-1 面出土土器観察表2	356
第 17 表	G地区第 0・I 面下確認調査出土土器類 観察表	109	第 58 表	G地区第Ⅵ-1 面出土石器観察表	356
第 18 表	G地区第 0・I 面建物等の変遷案	112	第 59 表	G地区第Ⅵ-2 面出土土器類観察表1	383
第 19 表	G地区第Ⅲ-1 面SB規模等一覧表	132	第 60 表	G地区第Ⅵ-2 面出土土器類観察表2	384
第 20 表	G地区第Ⅲ-1 面出土土器類観察表1	151	第 61 表	G地区第Ⅵ-2 面出土土器類観察表3	385
第 21 表	G地区第Ⅲ-1 面出土土器類観察表2	152	第 62 表	G地区第Ⅵ-2 面出土石器観察表	385
第 22 表	G地区第Ⅲ-1 面出土土器類観察表3	153	第 63 表	周辺の弥生時代の集落遺跡消長一覧表 .....	389
第 23 表	G地区第Ⅲ-1 面出土石製品観察表	153	第 64 表	G地区第Ⅵ-3 面出土土器観察表	403
第 24 表	G地区第Ⅲ-1 面出土木製品観察表	153	第 65 表	G地区第Ⅶ-1 面出土土器観察表	408
第 25 表	G地区第Ⅲ-1 面出土金属製品観察表	153	第 66 表	G地区第Ⅶ-2 面出土土器観察表	417
第 26 表	G地区第Ⅲ-2 面SD規模等一覧表	160	第 67 表	四柳貝塚等の盛衰対比略表	419
第 27 表	G地区第Ⅲ-2 面出土土器類観察表1	203	第 68 表	H地区第 0・I 面、第Ⅲ-1・2 面出土土器 観察表	432
第 28 表	G地区第Ⅲ-2 面出土土器類観察表2	204	第 69 表	H地区第Ⅲ-2 面出土土器観察表	433
第 29 表	G地区第Ⅲ-2 面出土土器類観察表3	205	第 70 表	H地区第 0・I 面、第Ⅲ-2 面出土木製品観察表 .....	433
第 30 表	G地区第Ⅲ-2 面出土土器類観察表4	206	第 71 表	H地区第Ⅳ面SB規模等一覧表	439
第 31 表	G地区第Ⅲ-2 面出土土器類観察表5	207	第 72 表	H地区第Ⅳ面出土土器観察表	443
第 32 表	G地区第Ⅲ-2 面出土土器類観察表6	208	第 73 表	H地区第Ⅳ面出土木製品観察表	444
第 33 表	G地区第Ⅲ-2 面出土土器類観察表7	209	第 74 表	出土木製品樹種同定結果一覧表1(平成28年 度実施分)	447
第 34 表	G地区第Ⅲ-2 面出土土器類観察表8	210	第 75 表	出土木製品樹種同定結果一覧表2(平成17年 度実施分)	453
第 35 表	G地区第Ⅲ-2 面出土土器類観察表9	211	第 76 表	G・H地区出土木製品樹種同定結果一覧表 .....	453
第 36 表	G地区第Ⅲ-2 面出土木製品観察表	211			
第 37 表	G地区第Ⅳ面SB・SA規模等一覧表	227			
第 38 表	G地区第Ⅳ面SD規模等一覧表	271			
第 39 表	古代集落の時間的位置付け	291			
第 40 表	G地区出土墨書土器等一覧表	293			
第 41 表	G地区出土特徴的な遺物一覧表	294			

第77表	加賀・能登の在地形式の編年と暦年代対比表 .....	455	第84表	四柳白山下遺跡出土墨書土器内容別一覧表2 .....	482
第78表	旧邑知潟周辺の古代集落遺跡の消長表 .....	472	第85表	旧邑知潟周辺の出土墨書土器内容一覧表1 .....	483
第79表	県内他地域との消長比較表 .....	477	第86表	旧邑知潟周辺の出土墨書土器内容一覧表2 .....	484
第80表	北陸道の集落遺跡数の推移表 .....	477	第87表	旧邑知潟周辺の特徴的な遺物出土一覧表 .....	484
第81表	県調査D・F地区、羽咋市1～4次調査 出土墨書土器一覧表 .....	479	第88表	記載順の比較 .....	490
第82表	四柳白山下遺跡出土墨書土器集計表 .....	480			
第83表	四柳白山下遺跡出土墨書土器内容別一覧表1 .....	480			

## 巻頭図版目次

巻頭図版1	上 遺跡遠景(平成9年度撮影、北から)	下 遺跡全景(平成6年度撮影、南西から)
巻頭図版2	上 G地区第0・I面全景	下 G地区第0・I面全景(北東から)
巻頭図版3	上 G地区第Ⅲ-1面北半完掘状況	下 G地区第Ⅲ-1面水田301～303完掘状況(南西から)
巻頭図版4	上 G地区第Ⅲ-1面河跡3001(新)完掘状況(北西から)	下 G地区第Ⅲ-1面河跡3001(新)完掘状況(南西から)
巻頭図版5	上 G地区第Ⅳ面南半完掘状況	下 G地区第Ⅳ面北半完掘状況
巻頭図版6	上 G地区第Ⅴ面全景(南から)	下 G地区第Ⅴ面水田区画完掘状況(東から)
巻頭図版7	上 G地区第Ⅵ-2面全景	下 G地区第Ⅵ-2面SI651完掘状況(北東から)
巻頭図版8	上 G地区第Ⅵ-3・Ⅶ-1面完掘状況(北東から)	下 G地区第Ⅵ-3面完掘状況(西から)

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査の経過

一般国道159号改築(鹿島バイパス)工事は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所(旧建設省北陸地方建設局金沢工事事務所)が所管する事業である。一般国道159号線は、七尾市を起点とし羽咋市、津幡町などを経て金沢市に至る延長約70kmの主要幹線道路で、金沢市と中能登地域を結ぶ大動脈の役割を担っている。そのうち鹿島バイパスは、昭和48(1973)年度に七尾市八幡町から羽咋市四柳町(延長約13.3km)の慢性的な交通渋滞の解消を目指して事業化されたものであり、昭和48年度の国土交通省(当時、建設省)から石川県教育委員会(以下、県教委)に埋蔵文化財の所在についての照会に始まり、中能登町(当時、鹿島町)地内の10ヶ所の遺跡で、順次発掘調査が実施されてきた。

このような開発事業に際して周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する場合、事業者は文化財保護法第94条の規定にもとづき、その保護措置を執ることが求められる。県教委では、埋蔵文化財の保護と開発事業との調整を図るため、各年度に国・県等の関係機関・部局の協力を得て、次年度以降の開発事業計画の早期把握と、必要に応じて分布調査等により埋蔵文化財の有無を確認することで、工事着手前段階での埋蔵文化財の正確な把握と、新たな埋蔵文化財包蔵地が確認された場合の保護措置に関する事業者と調整を行っている。これは、工事中の埋蔵文化財の不時発見は十分な保護措置が実施できない恐れがあるばかりでなく、それに協力する側も予算措置等の準備を含めた対応に時間を要すること、さらに工事自体の中断に伴う事業進行への影響を避けるための措置である。

本遺跡は、昭和23(1948)年の耕地整理の際に地元住民の手により古代の須恵器などが採集されていたものの、遺跡としては周知されていなかった。遺跡としての認定は、平成元(1989)年度に羽咋市教育委員会が同市四柳地内で鹿島バイパスに伴う個人住宅などの移転計画に対して埋蔵文化財の確認調査を実施、奈良時代を中心とする遺跡の広がりを確認したことに始まる。鹿島バイパス事業地内については、昭和62年10月26日付け建北金二調第864号で建設省北陸地方建設局金沢工事事務所長(当時)より石川県立埋蔵文化財センター(当時)に分布調査の依頼があった。それを受けて、平成元(1989)年3月8日～11日に石川県立埋蔵文化財センターが、事業区域内延長約800mに対して重機による分布調査を実施し、羽咋市内で大町A遺跡など4遺跡の存在を確認した。うち四柳白山下遺跡については、延長約350mを測る区間で中世および奈良・平安時代の遺物包含層を2層確認し、仮称遺跡名「四柳宮の越遺跡・四柳やちだ遺跡」として約12,000㎡が保護対象となる旨、平成元年3月24日付け埋文第205号で建設省金沢工事事務所長に回答をおこなっている。なお、この仮称遺跡名「四柳宮の越遺跡・四柳やちだ遺跡」は、隣接する既存の集落遺跡名を仮名称として回答したものである。正式の遺跡名称は、羽咋市教育委員会と協議のうえ、周知の埋蔵文化財「四柳やちだ遺跡(現、県遺跡番号0711200)」「四柳宮の越古銭遺跡(同0711800)」とは異なる、調査区周辺の小字名「白山下」を付した新規の集落遺跡「四柳白山下遺跡(同0711700)」としている。

その後、県教委は、建設省金沢工事事務所と協議を行い、埋蔵文化財への影響を軽減する道路線形の変更が困難であることから、これらの事業地内の埋蔵文化財について記録保存措置(発掘調査)を実施することとなった。

現地での発掘調査は、当初、平成6(1994)年度以降の2ヶ年で終了する計画が策定され、平成6年度から県教委の依頼を受けて社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が発掘調査に着手している。しかしな

がら、平成7(1995)年度以降の発掘調査により、石動山系から流出する小河川の度重なる氾濫に伴う土砂で埋没した縄文時代～近世に至る集落・耕作地が良好に遺存することが次第に明らかとなり、結果として平成12(2000)年までの足かけ7ヶ年、発掘調査延面積45,900㎡におよぶ長期の調査となった。各調査年度の調査箇所・面積等は、第1表、第1図を参照されたい。

本書に報告する調査地の出土品については、遺失物法第4条第1項の規定にもとづき、平成9年度は石川県立埋蔵文化財センターが、平成10年度は(財)石川県埋蔵文化財センターが、それぞれ羽咋警察署に埋蔵物の発見届を提出し、羽咋警察署から発掘届の通知を受けた県教委により文化財認定が行われている。現在、出土品は石川県埋蔵文化財センターで収蔵・保管のうえ公開・活用を図っている。

なお、平成6～9年度に実施したA～F地区の発掘調査の成果については、平成16・17・29年度に県教委・(公財)石川県埋蔵文化財センターが3冊の発掘調査報告書を刊行している。

第1表 各年度の調査概要一覧表

調査回数	調査年度	調査地区・面	調査面積(㎡)	調査主体	主な時代	掲載報告書
第1次	平成6(1994)	A・B地区、 C・D地区第0・I面	5,800	(社)石川県埋蔵文化財保存協会	奈良～平安前期、中世	白山下Ⅰ
第2次	平成7(1995)	C地区第Ⅱ～Ⅴ面、 D地区第Ⅱ～Ⅳ面、E地区	8,400		弥生～古墳、奈良～中世	白山下Ⅱ
		平安、中世			白山下Ⅲ	
第3次	平成8(1996)	D地区第Ⅴ～Ⅶ面、 F地区第0・Ⅰ～Ⅴ面	6,200		縄文、弥生、古墳、奈良～平安前期、平安中期、中世	白山下Ⅳ
第4次	平成9(1997)	F地区第Ⅵ～Ⅶ面	2,400	縄文、弥生～古墳		
		G地区第0・Ⅰ面、Ⅲ-1面	2,800	平安、中世～近世	本書 (白山下Ⅴ)	
第5次	平成10(1998)	G地区第Ⅲ-2～Ⅶ-2面、 H地区	7,900	(財)石川県埋蔵文化財センター		縄文、弥生、古墳、奈良～平安前期、平安中期、中世～近世
第6次	平成11(1999)	I地区、 J地区第Ⅰ～Ⅵ-1面	7,400	(財)石川県埋蔵文化財センター	古墳、奈良～平安、中世～近世	白山下Ⅵ
第7次	平成12(2000)	J地区第Ⅵ-2～4面、 K地区	5,000		古墳、奈良～平安、中世～近世	

※網掛け、ゴチック文字は、本報告書掲載。

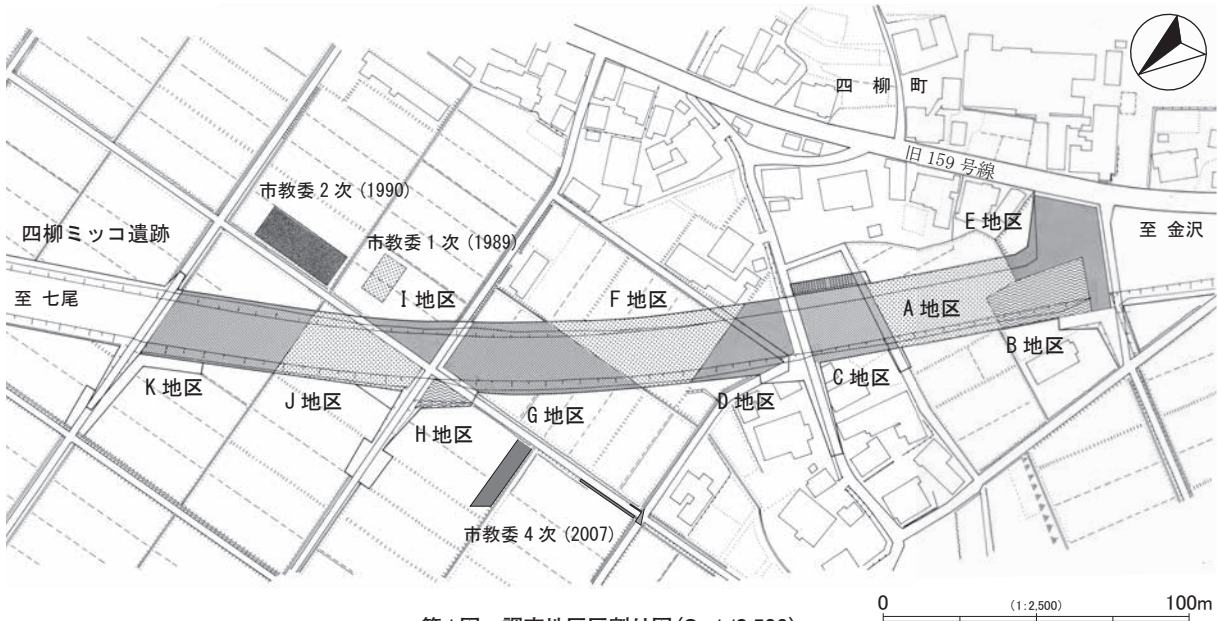
## 第2節 発掘作業の経過

本書に報告する発掘調査は、県教委の委託事業として、平成9年度に(社)石川県埋蔵文化財保存協会が、平成10年度に(財)石川県埋蔵文化財センターがそれぞれ実施した。各年度の調査体制は第2表のとおりである。

### 第4次調査G地区第0・Ⅰ面、第Ⅲ-1面(平成9年度(1997))

現地調査は、平成9年4月10日～同年12月24日に、F地区第Ⅵ～Ⅶ面(計2面、各面1,400㎡)、G地区第0・Ⅰ面、第Ⅲ-1面(計2面、各面1,400㎡)を対象に実施し、調査面積は5,200㎡を測る。担当は、調査課調査第1係の川畑 誠、白田義彦である。以下、G地区に係る調査日誌抄を記す。なお、F地区の調査日誌抄は『四柳白山下遺跡Ⅳ』を参照されたい。また、関係する機関名等は、当時のままとした。





第1図 調査地区区割り図(S=1/2,500)

第2表 調査体制

平成9年度(1997) [第4次調査]		平成10年度(1998) [第5次調査]	
調査期間	平成9年4月10日～同年12月24日	調査期間	平成10年5月12日～同年12月28日
調査主体	社団法人石川県埋蔵文化財保存協会 (理事長：濱岡賢太郎)	調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：西 貞夫)
総括	大西外美雄(事務局長)	総括	北村義男(専務理事)
事務	田嶋明人(次長)	事務	油屋好樹(事務局長)
	辻口明広(総務課長)		新屋康夫(総務課長)
調査	三浦純夫(調査課長)		辻口明広(経理課長)
	岡本恭一(調査第2係長)	調査	谷内尾晋司(所長)
担当	川畑 誠(調査第1係主任)		小嶋芳孝(調査部長)
	白田義彦(調査第1係主任)		中島俊一(調査第1課長)
		担当	川畑 誠(調査第1課主任主事)
			加藤克郎(調査第1課主事)

第3表 整理体制

平成14年度(2002)		平成15年度(2003)	
整理期間	平成15年2月4日～同年3月31日	整理期間	平成15年4月1日～同年10月7日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：山岸 勇)	調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：山岸 勇)
総括	武田寿夫(専務理事)	総括	林 正信(専務理事)
事務	松柳 拓(事務局長)	事務	松柳 拓(事務局長)
	井田徳久(総務課長)		井田徳久(総務課長)
	繁田吉彦(経理課長)		繁田吉彦(経理課長)
整理	谷内尾晋司(所長)	整理	谷内尾晋司(所長)
	湯尻修平(企画部長)		湯尻修平(企画部長)
	小嶋芳孝(調査部長)		小嶋芳孝(調査部長)
	澤田まさ子(整理課長)		藤田邦雄(整理課長)
	中島俊一(調査第1課長)		中島俊一(調査第1課長)
担当	川畑 誠(企画課調査専門員)	担当	川畑 誠(調査第3課調査専門員)
作業	松田智恵子(主任技術員)、宮本巳恵(嘱託)、戸淵かがり(日々雇用)、 田村由美(日々雇用)、丸山美紀(日々雇用)、松本由美子(日々雇用)、 中尾望徳(日々雇用)、土生久美子(日々雇用)	作業	松田智恵子(主任技術員)、黒田和子(主任技術員)、宮本巳恵(嘱託)、 大西祥恵(嘱託)、芝山美知代(嘱託)、河崎真帆(嘱託)、 高瀬小百合(日々雇用)、北野清美(日々雇用)、丸山美紀(日々雇用)、 林かおる(日々雇用)、半田裕子(日々雇用)、宮野眞利(日々雇用)
平成16年度(2004)		平成17年度(2005)	
整理期間	平成16年4月1日～17年1月7日	整理期間	平成17年4月1日～18年3月31日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：山岸 勇)	調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：山岸 勇)
総括	林 正信(専務理事)	総括	堀 日出夫(専務理事)
事務	山下淳映(事務局長)	事務	山下淳映(事務局長)
	井田徳久(総務課長)		宅崎仁芳(総務課長)
	繁田吉彦(経理課長)		熊谷省吾(経理課長)
整理	谷内尾晋司(所長)	整理	谷内尾晋司(所長)
	湯尻修平(企画部長)		中島俊一(企画部長)
	小嶋芳孝(調査部長)		湯尻修平(調査部長)
	藤田邦雄(整理課長)		垣内光次郎(整理課長)
	中島俊一(調査第1課長)		三浦純夫(調査第1課長)
担当	宮川勝次(調査第3課主事)	担当	宮川勝次(調査第3課主事)
作業	新谷由子(主任技術員)、馬場正子(主任技術員)、宮本巳恵(嘱託)、 北 香織(嘱託)、芝山美知代(嘱託)、朝倉佳子(嘱託)、 村上泰子(日々雇用)、田中裕子(日々雇用)、村田宏美(日々雇用)、 北野清美(日々雇用)、廣瀬稔恵(日々雇用)、吉野良子(日々雇用)	作業	新谷由子(主任技術員)、北 寿栄(嘱託)、表 容子(日々雇用)、 村上泰子(日々雇用)、土生久美子(日々雇用)、伊藤好美(日々雇用)

## 第2節 発掘作業の経過

- 4月10日～5月14日 10日に建設省担当と現地打合せの後、プレハブ設営等の準備作業、重機による排土の移動。
- 5月15日～9月10日 F地区第Ⅵ面から作業員による包含層掘削、遺構検出、遺構掘り下げ、図面作成等の作業を進める。7月1日に第Ⅵ面、8月29日に第Ⅶ面のラジオコントロールヘリコプター(以下、ラジコン)による空中写真測量を実施する。9月10日までに重機による埋め戻し作業を行い、F地区の調査を完了する。
- 9月11日～9月18日 9月11日よりG地区第0・Ⅰ面の調査に着手する。重機による表土除去作業と並行して、調査区周辺的环境整備作業、調査区排水溝掘削作業を実施する。
- 9月19日～10月2日 人力による包含層掘削、遺構検出作業を進め、遺構密度が高いことから、2日にラジコンによる遺構検出状況写真撮影を行う。
- 10月3日～11月5日 遺構掘り下げ作業及びE-24～26区の整地土の掘り下げ作業を行う。15日からE-24～26区の遺構検出、掘り下げ作業に着手し、合わせて図面作成、写真撮影作業を行う。
- 11月6日～11月10日 G地区第0・Ⅰ面の完掘写真撮影作業を経て、10日にヘリコプターによる空中写真測量を実施。
- 11月11日～11月21日 第0・Ⅰ面の石組井戸の実測作業と並行して、重機により第Ⅲ面までの間層除去作業を進める。
- 11月25日～12月16日 第Ⅲ-1面の遺構検出作業により、耕作に伴う小溝群、河川跡、水田跡を確認する。引き続き、遺構掘り下げ作業と図面作成作業を行う。第0・Ⅰ面の井戸実測作業は11月28日に完了する。12月15日に第Ⅲ-1面のヘリコプターによる空中写真測量を実施する。
- 12月17日～12月24日 21日に現地説明会を開催する。図面作成作業と並行して機材撤収準備作業を行う。24日に調査区を引き渡し、現地での作業を終了した。

### 第5次調査G地区第Ⅲ-2～第Ⅶ-2面(平成10年度(1998))

現地調査は、平成10年5月12日～同年12月28日に、G地区第Ⅲ-2面～Ⅶ-2面(計7面、第Ⅲ-2面・第Ⅵ-1面各800㎡、その他各面1,200㎡)、H地区第0・Ⅰ面～第Ⅳ面(計3面、各面100㎡)を対象に実施し、調査面積は7,900㎡を測る。担当は、調査部調査第1課の川畑 誠、加藤克郎で、大藤雅夫の協力を得ている。以下、調査日誌抄を記す。

- 5月7日 7日に建設省担当と現地打合せ後、プレハブ設営等の準備作業、重機による排土の移動。
- 5月20日～6月12日 機材搬入後、重機によりG地区第Ⅲ-2面の調査に着手する。人力による包含層掘削、遺構検出・掘り下げ作業を並行して進める。第Ⅲ-2面は、順次平面図・断面図を作成し、8日に完掘写真を撮影する。6月3日に羽咋市立余喜小学校6年生27名が現場見学を、また6月10日に羽咋市小中学校教諭社会科部会13名が発掘体験を行う。
- 6月16日～6月29日 G地区河跡の掘削に時間を要する。29日にラジコンによる第1回空中写真測量作業を行う。
- 6月30日～7月23日 G地区第Ⅳ面の遺構検出・掘り下げ作業と図面作成作業を進める。7日に県教委文化財課と現地打合せ、15日に余喜地区老人会15名が現場見学。17日にラジコンによる第2回空中写真測量作業を実施。斎串、錐柄等が出土したSE4001の図面作成を行う。
- 7月24日～8月12日 G地区第Ⅳ面SE4001側板の取り上げ作業と、人力による第Ⅴ面覆土(洪水砂か)の掘削作業に着手する。水田区画を慎重に掘り下げ、12日にラジコンによる第3回空中写真測量作業を行う。
- 8月18日～9月7日 G地区第Ⅵ-1面の包含層掘削・遺構検出作業に着手する。29日に親と子の発掘体験教室を開催し、18組40名の参加者を得る。4日までに遺構の掘り下げ作業を完了し、7日にラジコンによる第3回空中写真測量作業を行う。

- 9月8日～10月5日 G地区第Ⅵ-1面の図面作成作業と並行して、第Ⅵ-2面の調査に着手する。調査面が深くなり、台風シーズンでもあり調査区壁の保全、排水溝の維持を慎重に行う。包含層掘削・遺構検出を経て、10月5日から遺構掘り下げ、図面作成作業を進める。また、同日にH地区第Ⅶ-1面の重機による表土除去作業を実施する。
- 10月6日～10月20日 9日までにG地区第Ⅵ-2面、14日までにH地区第Ⅶ-1面の遺構掘り下げ作業を完了。接近する台風の対策に追われながら、20日にラジコンによる第4回空中写真測量作業を行う。
- 10月21日～11月12日 21・22日にG地区のⅥ-3面・H地区第Ⅶ-1面下の遺構面について、人力による状況確認調査を行い、G地区第Ⅵ-3面(河川跡)・Ⅶ-1面、H地区第Ⅲ-1面の包含層等掘削作業に着手する。28日までにH地区第Ⅲ-1面の覆土掘り下げ作業を完了し、職員・調査補助員等による平面図等作成作業を経て、引き続き第Ⅲ-2面調査を進める。G地区は第Ⅵ-3面、第Ⅶ-1面の遺構検出・掘り下げ作業、職員・調査補助員による平面図等作成作業を順次行う。11月12日にG地区第Ⅶ-1面下について人力による状況確認調査を行い、第Ⅶ-2面の存在を確認する。
- 11月13日～12月9日 13日にG地区第Ⅶ-2面まで重機による間層除去作業を実施する。14日からH地区第Ⅳ面、G地区第Ⅶ-2面の包含層掘削・遺構検出作業を進める。11月17日に建設省(当時)担当、県教委と現地打合せを行い、調査状況等について説明を行う。初冬の悪天候に悩まされながら、11月24日から遺構掘り下げ作業を行った。12月9日にG地区第Ⅶ-2面、H地区第Ⅳ面のラジコンによる第5回空中写真測量作業を行う。併せて、出土した木製品のバック作業を進める。
- 12月10日～12月28日 10日にG地区第Ⅶ-3面下の生活面の有無について人力によるトレンチ調査を行い、生活面がないことを確認する。G地区は調査区東壁5ヶ所で土層柱状図作成を行う。H地区は、調査区が狭小であるため、県教委と協議のうえ、第Ⅴ面以下はトレンチ2ヶ所での土層確認調査にとどめる。調査は約2m掘り下げ、G地区第Ⅴ面に相当する土層までを確認した。引き続き、図面作成作業を進める。14～24日までにH・G地区の重機による埋戻し作業、機材撤収準備作業を行う。28日に調査区を引き渡し、現地での作業を終了する。

### 第3節 整理等作業の経過

出土品の整理作業は、平成14(2002)～17(2005)年度、同25(2013)、28(2016)年度に(公財)石川県埋蔵文化財センター(平成24年度以前は(財)石川県埋蔵文化財センター)が石川県教育委員会の委託事業として実施した。各年度の調査体制は第3表のとおりである。

整理の内容については、平成14年度が第4次調査出土遺物の記名・分類・接合、平成15年度が第4次調査出土金属・木・石製遺物の実測・トレース、土器の復元、遺構図のトレース、平成16年度が第4次調査出土土器及び金属・木・石製遺物の実測・トレース、第5次調査出土遺物の記名・分類・接合、土器の復元、土器の実測・トレース、平成17年度が第4・5次調査出土土器及び金属・木・石製遺物の実測・トレースを、それぞれ実施した。また、出土木製品の樹種同定を平成17年度に(株)パレオ・ラボに、平成28年度に(株)古環境研究所に委託してそれぞれ実施した。平成28～30年度に報告書作成作業を行い、平成30年度に本書を編集・刊行した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

四柳白山下遺跡は、石川県羽咋市四柳町地内に所在する。石川県は、東を富山県、南東を岐阜県、南西を福井県にそれぞれ接し、北および北西は日本海に面する。県土は、平安時代前期までに成立した加賀国・能登国の領域をほぼ踏襲した加賀・能登の2地域に分かれ、うち能登地域は日本海に大きく突出した能登半島が大部分を占め、古くから日本海交流の重要な結節点の一つとなる。羽咋市は、この能登半島の基部西側に位置し、東西約10km、南北約12km、面積約82km<sup>2</sup>を測る。人口は約2.2万人を数え、産業として農業、繊維産業の他、観光業、鉄鋼・金属業、電子部品産業等が盛んである。遺跡の所在する四柳町は市域北東端に位置し、北側で同市大町および鹿島郡中能登町小金森に接する。

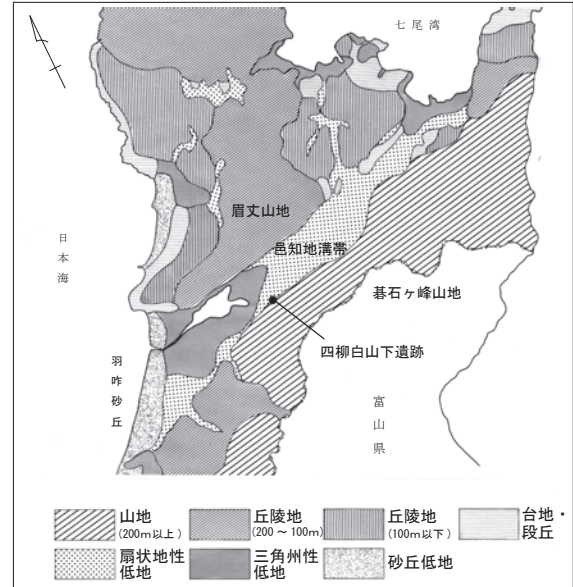
遺跡周辺の地形は、第3図のとおり、東側から碁石ヶ峰山地、邑知地溝帯、眉丈山地(標高50～120m)、羽咋砂丘(幅約1km)が北東—南西方向に連なり、西側で日本海に接する。本遺跡周辺の地形断面をみれば、東側の碁石ヶ峰山地から西側の旧邑知潟に向けて次第に標高を減じ、土地利用は山林、雑木林・畑地、旧内浦街道に沿って発達した街村をなす集落域・畑地、そして水田へと移行する。東側で富山県に接する碁石ヶ峰山地は、石動山地の一角をなし、市域内では標高400m前後(最高点の標高461m)を測る丘陵性低山に分類される。その山腹は急傾斜で、山地を形づくる土質が花崗岩、片麻岩等の粗い粒子の礫岩層(高島礫岩層)であることから、県内でも有数の地滑り多発地帯となっており、本遺跡をはじめとして山地前縁に形成された集落・耕作地の盛衰に大きな影響を及ぼしている。邑知地溝帯は、並走する2条の断層帯により切断された土地が沈降してできたと思われる低地帯であり、羽咋市—七尾市間を幅約2～4km、延長約30kmにわたり直線的にのびる。能登地域で最大の带状平野であり、現在では豊かな穀倉地帯を形成している。本遺跡が属する地溝帯南東部は、碁石ヶ峰山地を開析して流下する二ノ宮川、長曾川、久江川、酒井川、永光寺川等の中小河川が運んだ土砂が堆積した小規模で急峻な合成扇状地が碁石ヶ峰山地山裾に連なり、本遺跡も四柳大谷川水系が形成した扇径約600mを測る小扇状地上のほぼ全域に北東—南西方向約500mの規模で立地する。一方、地溝帯南西部には吉崎川、子浦川等の合成扇状地と、邑知潟に起因する三角州性低地が発達している。邑知潟は、縄文時代前期のいわゆる縄文海進で入り江状に入り込んだ海が、海岸砂丘(羽咋砂丘)の発達により外海から隔絶してできた海跡湖である。かつては周囲約14.5km、水面面積約4.65km<sup>2</sup>、最深部約1.4mを測ったが、近世末以降の新田開発に加え、昭和23年(1948)～43年(1968)に実施された国営干拓事業により、放水路部分を除いて水田として利用されている。

このような地理的環境にある邑知地溝帯に立地する集落遺跡には、いくつかの共通する特徴がみいだせる。まず、集落遺跡は、碁石ヶ峰山地・眉丈山地の前縁に張り出した微高地と、それより続く合成小扇状地という極めて狭い集落適地に、等高線に沿って带状に点在する。すなわち、山沿いの各小扇状地上に立地する現在の集落域とほぼ重複する位置に、複数の時代の集落遺跡が継起的に営まれる。



第2図 遺跡の位置

この特徴は、本遺跡や発掘調査が行われた四柳ミッコ遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡、徳丸遺跡等で確認でき、おそらく地溝帯の各小扇状地・微高地を一つの単位集団とした継続的な集落形成のあり方が復元可能である。例えば、邑知潟東縁で見れば、現在の中能登町高島、羽咋市四柳町、同市酒井町、同市本江町の旧集落が立地する各扇状地上で地点を変えながら、各時代の集落域が営まれたと考えられる。これら各時代の集落を支える基盤として、邑知潟が内水面漁業の場を、邑知潟より続く三角州性低地や扇状地が良好な耕作地を、さらに集落域背後の山地が林業資源を提供したと考えられる。二つ目の特徴に、崩壊しやすい山地と山裾に分布する集落域が近接するため、山地からの土砂の流入・堆積、特に断続的に発生した大小さまざまな土石流災害が、集落の営み及び耕作地の盛衰に大きく影響していることがある。本遺跡の7次にわたる発掘調査では、第4表のとおり、各時代の生活面の間に短期間で流入・堆積した無遺物土層や河川・溝跡を検出している。第4・5次調査G地区では、縄文時代中・後期の生活面から現在の生活面まで厚さは約4mに達する。さらに、集落を支える基盤として、古来より能登地域の中核地域である羽咋と七尾(鹿島)を最短距離で結ぶ陸上交通路や、邑知潟と中小河川を利用した水上交通路も重要な位置を占めている。本遺跡の場合、邑知潟を眼前に控えた水陸交通の結節点として物資・情報の集積も、その一因と考えられる。



第3図 周辺の地勢(『土地分類17(石川県)』より作成)

## 第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する邑知地溝帯は、県内でも有数の遺跡稠密地帯である(第4図、第4・5表)。ただし、第1節で述べたとおり、各時代の集落域は現集落域と重複し、かつ地中深く埋まっている場合が多く、採集された資料は断片的であり、実態の解明は必ずしも進んでいない。その中で、本遺跡(第4図、第5表No.1(以下、同じ))は小扇状地のほぼ全域に北東―南西方向約500mという規模をもち、かつ北側に隣接する四柳ミッコ遺跡(2)と併せて縄文時代中期～近世までの集落域・耕作域が良好に残ることから、地溝帯における人々の営みの一典型を復元しうる重要な資料を提供している。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡は、碁石ヶ峰・眉丈山両山地から続く微高地緩斜面上に点在する。前期では杉谷チャノバタケ遺跡(13、前期初頭)、中能登町高島カンジダ遺跡(前期前葉)や眉丈山地南縁の台地周辺等で断片的に資料が確認されている。中期に入ると、碁石ヶ峰山地側で四柳貝塚(56)、四柳中の堂遺跡(58)、本書で報告する本遺跡D・F地区、中能登町藤井A遺跡、小田中寺屋敷遺跡が、また邑知潟を挟んだ眉丈山山地側で同町徳丸遺跡、中大門川遺跡等が確認できる。このうち四柳貝塚、四柳中の堂遺跡、本遺跡D・F地区は、微妙な時期差を示しながら同一微高地上に近接しており、比較的小規模な集落が少しずつ居住域を変えながら営まれたものと考えられる。四柳貝塚は、本遺跡の北側約100mにある舌状台地(標高25～30m)に鎮座する四柳神社境内に立地し、県立羽咋高等学校地歴部の調査により東西約100m、南北約50mの範囲に、最大厚約20cmを測るシジミ層をもつ淡水貝塚であることが判明している。隣接する四柳中の堂遺跡では土器片、磨製石斧、石鏃等が表面採集されており、

第2節 歴史的環境

本遺跡D・F地区では石組炉をもつ竪穴建物2棟等を検出している。後期は酒井バンドウマエ遺跡(66)が、晩期では洪水土砂で一度に埋没した河川跡を検出した本遺跡F・G地区、円形・方形建物12棟以上を確認した四柳ミッコ遺跡(2)、円形建物や多量の輝石安山岩の製作剥片が出土した曾祢C遺跡(47)、土器棺墓が出土した小金森ヘイナイメB遺跡(52)等が分布する。

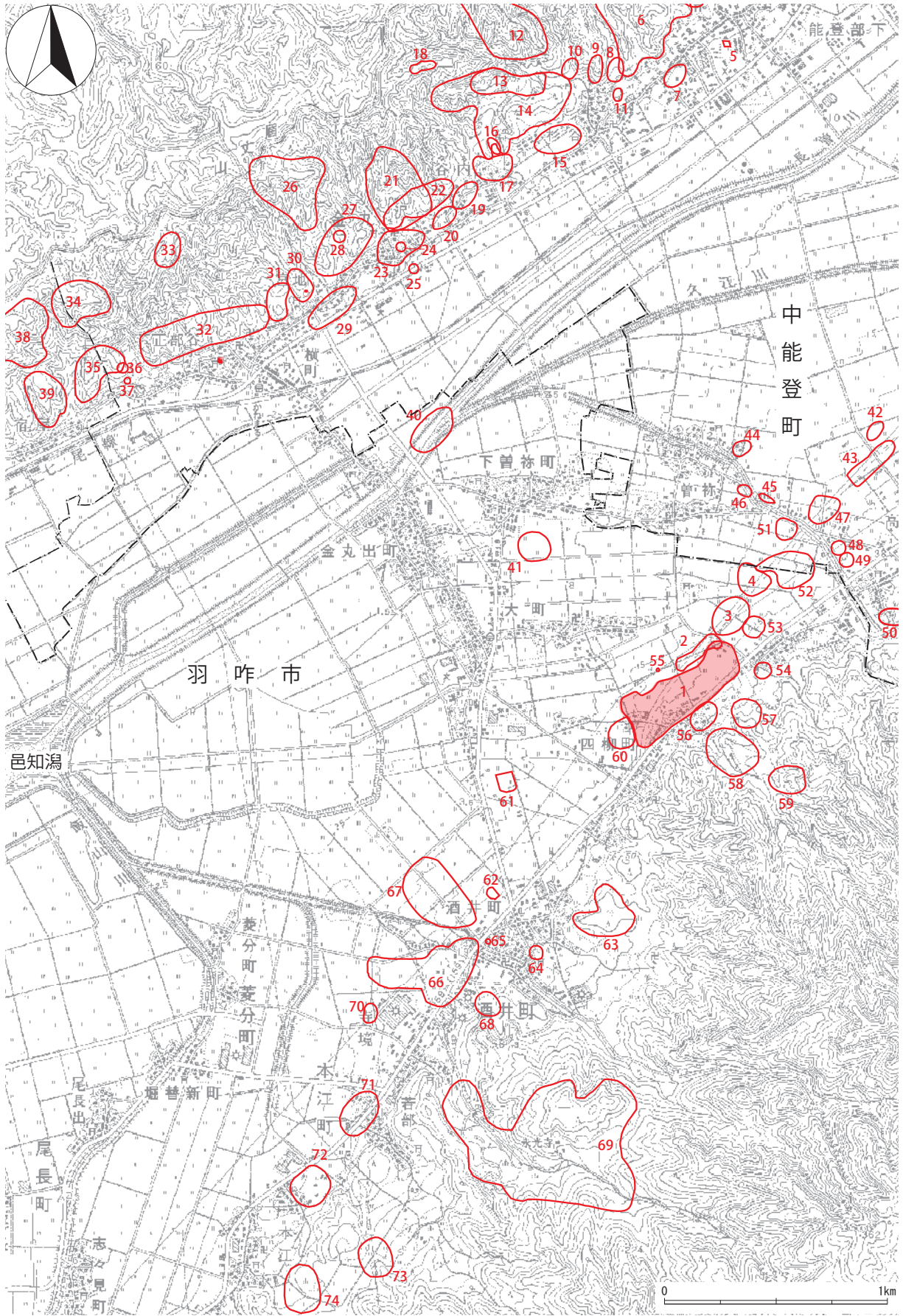
**弥生時代** 弥生文化は、県内でも早い段階に、邑知潟に面した平野部で伝播・定着をみる。邑知潟南岸の微高地に立地する国指定史跡吉崎・次場遺跡では、前期新段階に集落が成立し、古墳時代初頭まで広域流通の一翼を担う中核的集落として存続する。中期後半には、断片的だが本遺跡G地区、曾祢C遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡(17)等の検出事例が増加傾向を示す。県内の弥生時代後期後半～末は、湖沼や中小河川流域を中心として短期存続型の集落が急増する時期であり、その基盤となる水田経営でも画期をもつ時期と指摘されている。本遺跡の一連の発掘調査では集落形成は低調であるが、調査区外東側から流れ込んだ土器片の出土状況から、山沿いの微高地に一定規模の集落が存在する可能性が高い。また周辺地域では四柳貝塚、小金森ヘイナイメB遺跡、中能登町藤井サンジョガリ遺跡、高島カンジダ遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡等が分布する他、杉谷チャノバタケ遺跡では後期後半に大規模な空濠をもつ高地性集落が営まれる。

**古墳時代** 基石ヶ峰山地、眉丈山地において継続的に相当数の古墳が築かれる。中でも4世紀後半～5世紀前半には雨の宮1・2号墳(前方後方墳70m/前方後円墳75m、国史跡)、小田中親王塚古墳・亀塚古墳(円墳か？67m/前方後方墳61m)、杉谷ガメ塚古墳(14、前方後円墳60m)、水白鍋山古墳(前方後円墳64m)等の大型古墳を盟主墳とする古墳群が相次いで築造され、これらは能登地域全域に影響力を

遺跡名	地区名	調査年度	調査主体	縄文時代			弥生時代				古墳時代			飛鳥					奈良・平安時代					鎌倉時代		室町時代		近世									
				前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	末	前期	中期	後期	7c	8c	9c	10c	11c	12c	13c	14c	15c	16c	17c												
<b>白山下 時期区分</b>				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18																
四柳白山下	E地区	平成7(1995)	協												IV	V			III																		
	A地区	平成6(1994)	協													下	中																				
	B地区	平成6(1994)	協													下	中																				
	C地区	平成6・7(1994~95)	協							V						IV							III	II	I												
	D地区	平成6～8(1994～96)	協							VI						IV							III	II	I												
	F地区	平成8・9(1996~97)	協							VI						IV							III	II	I												
	G地区	平成9・10(1997~98)	協・財							VI-2						IV							III	II	I												
	H地区	平成10(1998)	財							VI-1						IV							III	II	I												
	I地区	平成11(1999)	財							VI-0						IV							III	II	I												
	J地区	平成11・12(1999~2000)	財							VI-0～4						IV							III	II	I												
	K地区	平成12(2000)	財													IV							III	II	I												
羽咋市1・2次	平成元・2(1989~90)	市													IV							III	II	I													
四柳貝塚	昭和46~47(1971~72)	羽																																			
四柳中の堂	昭和44(1969)	羽																																			
四柳ミッコ	A地区	平成9(1997)	協・財																																		
	B地区	平成9・10(1997~98)	協・財																																		
	C地区	平成9(1997)	協																																		
	D地区	平成10(1998)	財																																		
	E地区	平成10(1998)	財																																		
	F地区	平成11(1999)	財																																		
	G地区	平成13(2001)	財																																		
羽咋市3次	平成5(1993)	市																																			
大町ダイジンクウ	平成11・12(1999~2000)	財																																			
大町ゴンジョガリ	平成12(2000)	財																																			
大町C	平成3(1991)	セ																																			
小金森ヘイナイメA	平成4(1992)	セ																																			
小金森ヘイナイメB	平成4(1992)	セ																																			
曾祢C	平成4(1992)	協																																			

協：(社)石川県埋蔵文化財保存協会 羽：石川県立羽咋高校地歴部他  
財：(財)石川県埋蔵文化財センター 市：羽咋市教育委員会  
セ：石川県立埋蔵文化財センター  
■ 集落域 〇 耕作地  
□ 集落域の縁辺部または不明(土器出土含む)  
★印は、検出した土石流痕跡を示す。

第4表 遺跡周辺の主な発掘調査



第4図 周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)

第2節 歴史的環境

第5表 周辺の遺跡一覧表

番号	県番号	遺跡名称	所在地	種別	時代	備考
1	711700	四柳山山下遺跡	羽咋市四柳町	集落・生産遺跡	縄文～近世	1989・90・93・2007年度市発掘調査、1994～97年度県(埋保)・1998～2000年度県(財理)調査
2	711900	四柳ミッコ遺跡	羽咋市四柳町	集落	弥生～古代	1997年度県(埋保)、98・99・2001年度県(財理)調査
3	712100	大町ダイジングウ遺跡	羽咋市大町	集落	中・近世	1999・2000年度県(財理)調査。庭園(池跡)をもつ中世館跡
4	712400	大町ゴンジョリ遺跡	羽咋市大町	散布地 集落	古墳・古代	2000年度県(財理)発掘調査
5	1729400	能登部下仲町遺跡	中能登町能登部下	生産遺跡	弥生～古代	1997年度県(埋七)発掘調査
6	1725200	能登部姫塚1～3号墳	中能登町能登部下	古墳	古墳	円墳3基(径18～27m)
7	1725100	杉谷ヤサカ遺跡	中能登町金丸杉谷	散布地	不詳	
8	1725000	杉谷遺跡	中能登町金丸杉谷	散布地	不詳	
9	1724800	杉谷C古墳群	中能登町金丸杉谷	古墳	古墳	円墳2基
10	1724500	金丸杉谷川遺跡	中能登町金丸杉谷	散布地	弥生	杉谷川より土器採集
11	1724900	杉谷ヒガン遺跡	中能登町金丸杉谷	散布地	不詳	
12	1724700	杉谷B古墳群	中能登町金丸杉谷	古墳	古墳	前方後方墳1基、円墳8基
13	1724400	杉谷チャノバタケ遺跡	中能登町金丸杉谷	集落	縄文～近世	1986～88年度県(埋七)調査。弥生時代の環濠集落を含む。チマキ炭化米出土
14	1724600	杉谷A古墳群	中能登町金丸杉谷	古墳	古墳	1986～88年度県(埋七)調査。前方後円墳1基(杉谷ガメ塚古墳、全長60m、墓石)、円墳13基、方墳8基
15	1724300	金丸杉谷遺跡	中能登町金丸杉谷	散布地	弥生～中世	1989年度県(埋七)調査
16	1731800	金丸テラダヤチ遺跡	中能登町金丸	散布地・集落・ その他の墓	縄文～中世	2001年度町調査。平安時代、中世の墓地を含む
17	1724200	谷内ブンガヤチ遺跡	中能登町金丸谷内	散布地・集落	縄文～近世	1985～89年度県(埋七)調査
18	1731900	金丸ゴロジヤマ遺跡	中能登町金丸	散布地・その他の墓	弥生	2000年度町調査。弥生土器、直刀出土
19	1724100	谷内コショウジ遺跡	中能登町金丸谷内	散布地	古代	
20	1724000	沢遺跡	中能登町金丸沢	散布地	古代	
21	1723400	金丸城跡	中能登町金丸沢	城館	中世	鎌倉時代
22	1723900	谷内古墳群	中能登町金丸谷内	古墳	古墳	円墳3基
23	1723800	金丸地頭館跡	中能登町金丸沢	城館	中世	
24	1723700	専願寺跡	中能登町金丸沢	社寺	中世	
25	1731900	沢ソウケダ遺跡	中能登町金丸	集落	古代	1998年度町調査
26	1723500	沢A古墳群	中能登町金丸沢	古墳	古墳	円墳5基
27	1723300	仏性山天平寺跡	中能登町金丸沢	社寺	中世	鎌倉時代
28	1723600	沢B古墳群	中能登町金丸沢	古墳	古墳	円墳3基、方墳1基
29	1723200	金丸宮地遺跡	中能登町金丸宮地	散布地・集落	弥生～中世	1960年度石考研、1983年度県埋文、98・99年度町、2000年度県(財理)発掘調査
30	1723101～3	金丸宮地1～3号墳	中能登町金丸宮地	古墳	古墳	円墳3基・横穴式石室1号墳は町指定史跡
31	1723000	宿那彦神像石横遺跡	中能登町金丸宮地	散布地	中世	土師器出土
32	1722900	正部谷B古墳群	中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	円墳9基
33	1722800	正部谷A古墳群	中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	円墳1基
34	710600	宿屋B1・2号墳	羽咋市鹿島路町・ 中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	円墳
35	710501～4	宿屋A1～4号墳	羽咋市鹿島路町・ 中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	1号墳は前方後円墳(全長26m)。他は円墳
36	1722700	金丸正部谷遺跡	中能登町金丸正部谷	散布地	古代	しじみの混土層
37	1722600	金丸正部谷横穴	中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	地下式横穴
38	710701～6	宿屋C1～6号墳	羽咋市鹿島路町	古墳	古墳	円墳
39	710801～9	宿屋D1～9号墳	羽咋市鹿島路町	古墳	古墳	円墳7基・方墳2基
40	715400	下曾祢ウチマチ遺跡	羽咋市下曾祢町	散布地	弥生・古墳	白鳥残留地で発見
41	713500	大町C遺跡	羽咋市大町	集落	古代	1991年度県(埋七)調査。「大町」墨書土器出土
42	1729500	高島C遺跡	中能登町高島	散布地・集落	弥生～古代	1991年度県(埋七)調査
43	1711400	高島カタタ・スキモト遺跡	中能登町高島・曾祢	散布地・集落	弥生～中世	1990・91年度県(埋七)、96年度県(埋七)調査
44	1729600	曾祢D遺跡	中能登町曾祢	集落	弥生・古墳	1996年度県(埋七)調査
45	1710400	曾祢堂田遺跡	中能登町曾祢	散布地	弥生	曾祢弥生遺跡を改称
46	1710300	曾祢大坪遺跡	中能登町曾祢	散布地	弥生	曾祢遺跡(A)を改称
47	1710500	曾祢C遺跡	中能登町曾祢	散布地・集落・ その他の墓	縄文～中世	1992年度県(埋保)・96年度県(埋七)調査。中世の積石墓1基あり
48	1710600	小金森仏教遺跡	中能登町小金森	散布地	中世	耕地整理で鏡出土
49	1710700	小金森宮田遺跡	中能登町小金森	散布地	古墳	曾祢遺跡(B)を改称
50	1710801～3	曾祢1～3号墳	中能登町小金森	古墳	古墳	円墳。双龍文環頭大刀、耳環、鉄斧、須惠器出土
51	1710100	小金森ヘイナイメA遺跡	中能登町小金森	散布地	古代・中世	1992年度県(埋七)調査
52	1710200	小金森ヘイナイメB遺跡	中能登町小金森	散布地・その他の墓	縄文・弥生	1992年度県(埋七)調査。縄文晩期の甕棺墓1基確認
53	712200	大町ナツタ遺跡	羽咋市大町	散布地	不詳	1978年、耕地整理時に長頸壺採集(詳細地点不明)
54	712000	大町横穴群	羽咋市大町上野	横穴墓	古墳	2基以上
55	711800	四柳宮の腰古銭遺跡	羽咋市四柳町	散布地	中世	珠洲焼の大壺に入った36貫の渡来銭出土
56	711300	四柳貝塚	羽咋市四柳町	貝塚	縄文～古代	1971～72年度羽咋高校が調査
57	711600	四柳横穴群	羽咋市四柳町	横穴墓	古墳	7基
58	711400	四柳中の堂遺跡	羽咋市四柳町	散布地	縄文 古墳	1958年発見
59	711500	四柳中世墓群	羽咋市四柳町	その他の墓	中世	板碑、五輪塔、四耳壺
60	711200	四柳やちだ遺跡	羽咋市四柳町	散布地	古墳	1958年耕地整理時に高坏等を採集
61	714600	酒井ノギワ遺跡	羽咋市酒井町	集落	古代・中世	2013年度市発掘調査
62	714800	酒井トダ遺跡	羽咋市酒井町	散布地	弥生	
63	711100	酒井東古墳群	羽咋市酒井町	古墳	古墳	2基以上
64	711000	酒井中世墓群	羽咋市酒井町	その他の墓	中世	五輪塔、板碑
65	710900	酒井古墳	羽咋市酒井町	古墳	古墳	円墳、横穴式石室
66	714700	酒井バンドウマエ遺跡	羽咋市酒井町	集落	縄文・古墳～中世	2013年度市、15年度県(公財)調査。酒井国道遺跡(旧県No.703700)を統合
67	715700	酒井シノカワ遺跡	羽咋市酒井町	散布地・集落	古代・中世	
68	703600	酒井丸和工場内遺跡	羽咋市酒井町	散布地	古墳	工場造成時に須惠器等を採集
69	703500	永光寺遺跡	羽咋市酒井町	社寺	中世	1987・94・98年度市、90～96年度県(埋七)調査。寺域は県指定史跡
70	714500	寺境タビ遺跡	羽咋市寺境町	集落	中世	
71	703400	若部遺跡	羽咋市若部町	散布地	古代・中世	1957年の耕地整理で須惠器等採集
72	703300	本江アブラデン遺跡	羽咋市本江町	散布地	縄文・弥生・古墳	本江B遺跡を改称
73	714400	本江中世墓	羽咋市本江町	その他の墓	中世	五輪塔、板碑
74	703200	本江カラチヤマ遺跡	羽咋市本江町	散布地	縄文・古墳	本江遺跡を改称



もつ広域支配者層の奥津域と位置付けられている。この政治的中心域の動向を反映する主要古墳群の築造は、5世紀後半以降に邑知地溝帯両端の羽咋・七尾の臨海地域に分離・移行し、6世紀以降は羽咋の勢力が優位性を保持したと考えられている。この2大勢力は、国造本紀にある「能等国造」能登臣、「羽咋国造」羽咋公に繋がり、さらには律令期の郡司層に引き継がれる。

さて、本遺跡周辺での古墳の築造は、古墳が立地しうる山麓裾部の土砂崩落に伴う確認しづらさを考慮しても、総じて低調である。現在、曾祢1～3号墳(50)、高島経塚古墳(円墳・径10m)、酒井古墳(65)、酒井東古墳群(63)、大町横穴群(54)、四柳横穴群(57)等の後期に属する古墳が点在する程度である。このうち、7世紀前葉の円墳である曾祢1号墳からは金銅製双竜式環頭太刀、耳環等が、7世紀前後に築造された高島経塚古墳からは金銅製圭頭太刀、銅鏡等が出土している。

集落遺跡については、本遺跡が中心域を変えながら継起的に営まれる他、前期では高島カタタスギモト遺跡(43)、大町ゴンジョガリ遺跡(4)、中期では前述2遺跡や四柳ミッコ遺跡、金丸宮地遺跡(29)、後期では大町ゴンジョガリ遺跡、7世紀前半代の曾祢C遺跡、高島遺跡等が知られている。発掘調査が実施された高島カタタスギモト遺跡、大町ゴンジョガリ遺跡では竪穴建物群を、四柳ミッコ遺跡では初期須恵器を伴い小鍛冶や祭祀行為を行った10棟の竪穴建物群をそれぞれ検出している。また、曾祢C遺跡では、計画的に配された掘立柱建物群を検出し、曾祢古墳群と深い関連をもつ比較的上位階層の居住域と位置付けられている。さらに、鹿島パイパス工事に伴う一連の発掘調査では、本遺跡F・G地区等で洪水土砂に被覆された水田、大町ゴンジョガリ遺跡(後期)で堅果類の水さらし場や祭祀痕跡を検出する等、集落域縁辺での生活の一端も次第に明らかになりつつある。

**奈良・平安時代** 本遺跡が属する能登国は、養老2年(718)に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の4郡を割いて立国するが、国司の任命がないまま天平13年(741)に越中国に併合、さらに天平勝宝9年(757)に前述の4郡8郷を能登国として再立国させる経緯をたどる。また、古代北陸道から分岐して能登国府(現在の七尾市古府町・国分町周辺)に向かう支道ルートは、10世紀初頭に成立した『和名抄』等に加賀郡横山駅、能登国撰才駅、同越蘇駅(現在の七尾市江曾町周辺)とあることから、邑知地溝帯東側を走ると考えられている。

与木郷、撰才駅については、延喜式内社「余喜比古神社」の同名社が大町に鎮座すること等から、本遺跡～大町周辺に比定する説がある。一方、余喜比古神社が他地から移転していること、古代能登郡与木(与支、与岐)郷を継承したと考えられる与木院(承久3年「能登国四郡公田田数目録案」等記載)が七尾市田鶴浜北部に比定しうること、また撰才駅を駅家間距離の検討から羽咋市飯山町周辺とする説も有力であり、本遺跡の位置付けを検討するうえで「与木郷」、「撰才駅」という事象は慎重に扱うことが妥当であろう。いずれにしても、本遺跡に代表される邑知渦東縁に連なる各小扇状地における集落活動の活発化は、県内他地域と同様に古代交通路の整備に象徴される律令制の浸透・定着と軌を一にしたものといえる。

本遺跡は、奈良時代初頭～平安時代前期にかけて、その活動域をもっとも広げる。四柳ミッコ遺跡、大町ゴンジョガリ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡等の邑知渦東縁(標高20～25m)の各微高地に立地する遺跡も同じ様相を示す。本遺跡は、第4表のとおり調査地区ごとに若干の様相差をみせつつ、四柳ミッコ遺跡よりやや遅れて成立し、奈良時代後半に集落域としてピークを迎える。その規模は北東～南西方向で約300mという広範な範囲であり、その規模や出土遺物の内容等から、四柳ミッコ遺跡と一体となって周辺地域の中核的地位を占めた集落域と考えられる。さらに、四柳貝塚で奈良～平安時代前期の須恵器が採取されており、古代前半の集落域は、扇状地扇頂方向に向けても、かなりの広がりをもつと推定できる。

また、本遺跡の一連の調査では、「寺」墨書、銅鏡片、多種の施設名墨書、木沓、帯金具、木製食膳具の出土や、護岸をもつ河川跡(G地区)、水田遺構の検出(E地区等)等、中核的な集落や耕作地に関する注目すべき新しい知見も多く得ている。これらの集落域は、県内他地域と同様に9世紀中頃以降は再編・縮小

方向に向かい、10世紀中頃までに本遺跡F地区及び羽咋市教委第4次調査区周辺に集約されたと考えられる。F地区では、第4・5次調査で一定量の施釉陶器が出土している。また、邑知湯縁の低地に立地する大町C遺跡(41)からは「大町」「前宅」墨書土器が出土している。「大町」墨書は本遺跡からも数点が出土しており、その関係が注目される。集落域の再編・集約後は、主に耕作地として利用されたようだ。この律令制に基盤を置いた集落形態の変容は、平安時代前期に顕在化する郡郷の解体および国衙による院、保といった単位への再編成過程と考えられる。

**鎌倉・室町時代** 鎌倉時代初頭の能登国守護には北条一門の名越氏が任じられる。また鎌倉時代後期の正和元年(1312)に瑩山紹瑾により曹洞宗永光寺が本遺跡南方約2.5kmの山中に創建される。平安時代後期の国衙領を継承したとされる承久3年(1221)の能登国田数注文には「四柳保」の名がみえる。四柳保は、承久元年の立券であり、もとは5町5段であったが同3年には2町1段に減少する。また、文明5年(1473)の北野社領諸国所々目録に「四柳庄」の記載や、文明8年(1476)に能登国石動山(天平等寺)に来遊した京都聖護院門跡道興が「柳のあまた侍りければ立よりて、里人の鞠の庭にはしめねともいともなつかしよつ柳かな」と詠じている。

鎌倉時代後期～室町時代前期は、邑知地溝帯縁辺の本江・四柳・吉崎等の村々に鎮座する産土神勧請伝承が集中する時期であることから、開発の一つのピークと考えられており、本遺跡C地区や四柳ミッコ遺跡、大町ダイジグウ遺跡(3)、大町ゴンジョガリ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡等でも新たな集落・耕作地の形成が始まる。このうち、大町ダイジグウ遺跡では、16世紀代に築かれた「ひょうたん」形の池跡や計画的に配された2つの掘立柱建物群の検出、多数の金属製品と鑄造道具の出土等から、本遺跡等の一般的な農村的集落と異なり、調査区に隣接する余喜比古神社関連施設と考えられている。また、本遺跡、四柳ミッコ遺跡で14・15世紀頃の整然と区画された良好な水田遺構を検出した他、板碑・五輪塔よりなる四柳中世墓群(59)や、宋・明銭36貫を入れた珠洲焼甕の単独出土である四柳宮の腰古銭遺跡(55)等も注目される。

**近世** 集落域は、街村形態を示す現在の集落とほぼ重複すると考えられるが、その一部を本遺跡や大町ダイジグウ遺跡等で確認した他、四柳ミッコ遺跡で耕作域を検出している。以下では、主に文献に記載された交通路と産業を記し、周辺地域の様相を考える一助としたい。陸路としては、能登街道がある。能登街道は、河北郡津幡宿で北陸道から分岐し、さらに羽咋郡今宿で子浦村・飯山村・酒井村・高島村等の邑知地溝帯東側の村々を経て所口(七尾)に向かう内浦街道と、海岸沿いに能登半島西側を北上する外浦街道に分かれる。また内浦街道は、酒井村で田鶴浜往来に分岐し、四柳村は内浦街道に、大町村は田鶴浜往来に面する村であった。また、水路については、周辺の年貢米を大町村、金丸村に集め、邑知湯・羽咋川を経て塵濱、さらに金沢市犀川河口の宮腰に海運される。周辺の産業として稲作の他、山地での山菜・タケノコ採取、四柳村・大町村等15村の入会であった邑知湯での鯉・鮒・小エビ等、肥料に用いる湯藻採取が記録に残る。

(引用・参考文献)

- 羽咋市史編さん委員会1973『羽咋市史 原始・古代編』羽咋市役所
- (財)石川県埋蔵文化財センター1999～2002『石川県埋蔵文化財センター情報』第2～7号
- 川畑 誠・中島俊一1994『大町C遺跡 小金森ヘイナイメA・B遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 岡本恭一・久田正弘1995『曾祢C遺跡発掘調査報告書』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 布尾和史・澤辺利明他2005『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 澤辺利明他2006『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅱ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 今井淳一1990『四柳白山下遺跡Ⅰ』羽咋市教育委員会
- 今井淳一他1991『四柳白山下遺跡Ⅱ』羽咋市教育委員会
- 今井淳一・牧山直樹1994『四柳白山下遺跡Ⅲ』羽咋市教育委員会
- 牧山直樹・宮下栄仁2008『四柳白山下遺跡Ⅳ』羽咋市教育委員会
- 中野知幸・牧山直樹2015『酒井ノギワ遺跡・酒井バンドウマエ遺跡』羽咋市教育委員会
- 林 大智他2015『羽咋市 四柳ミッコ遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- 川畑 誠2017『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅲ』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- 白田義彦他2018『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅳ』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

## 第3章 調査の方法と基本層序

### 第1節 調査の方法

**調査区区割り・調査面** 発掘調査対象地は、工事により遺跡が損壊を受ける幅約25m、延長約370mにわたる区間に設定され、北側で四柳ミッコ遺跡に接する。平成6年度(1994)の第1次調査時点で、複数年次にわたる調査が計画されたことや、調査区が道路や農道、農業用水路で分断されること等から、調査グリッドと調査地区を併用した区割りとし、この区割りは第1次～第7次調査まで統一している。

まず、調査グリッドは、平成6年度(第1次調査)着手段階に、バイパス路線が直線を保つ部分における道路中心線の延長線を基準ラインに設定した(第5図)。その延長線上にある建設省(当時)が設定した道路中心点(第5図IR12)を起点に、道路中心延長線と直交するラインを配し、調査予定地全体に対して平面直角座標第Ⅶ系を用いながら、10m方眼を単位とする正方形のグリッドを設定した。そしてグリッドを画する基準杭(交点)に、北西方向から南東方向に向けてA～Qまでのアルファベット番号を、また南西方向から北東方向に向けてアラビア数字1～41を付し、その交点は例えば「E-23」基準杭のように両者を組み合わせた呼称をした。結果として、基準ライン(調査区長軸方向)はN-41° Eを示し、起点としたIR12地点はE-25基準杭に、その南西方向の延長線上にE-1基準杭を、E-1基準杭の北西方向の延長線上にA-1基準杭をそれぞれ設定したことになる。また、調査区を分割する10mグリッド区の呼称については、その南西方向にある基準杭(交点)名と定めた。さらに、第1次調査開始後、遺物出土量が多いことが判明したため、各グリッド区を5×5mの小区画で四等分し、南西よりアラビア数字1～4の枝番号を加えた。例えば、E-23基準杭、E-23区およびE-23-1～4区的位置関係は、第5図右上のとおりである。主要なグリッド杭の国家座標上の位置は、平面直角座標Ⅶ系でE地区M-3杭：X座標102,814.821・Y座標-27,471.787、B地区K-10杭：X座標102,880.467・Y座標-27,440.312、F地区H-20杭：X座標102,975.194・Y座標-27,396.418、G地区F-23杭：X座標103,010.910・Y座標-27,394.473、J地区D-30杭：X座標103,076.544・Y座標-27,360.003、K地区D-39杭：X座標103,143.895・Y座標-27,300.294となる。

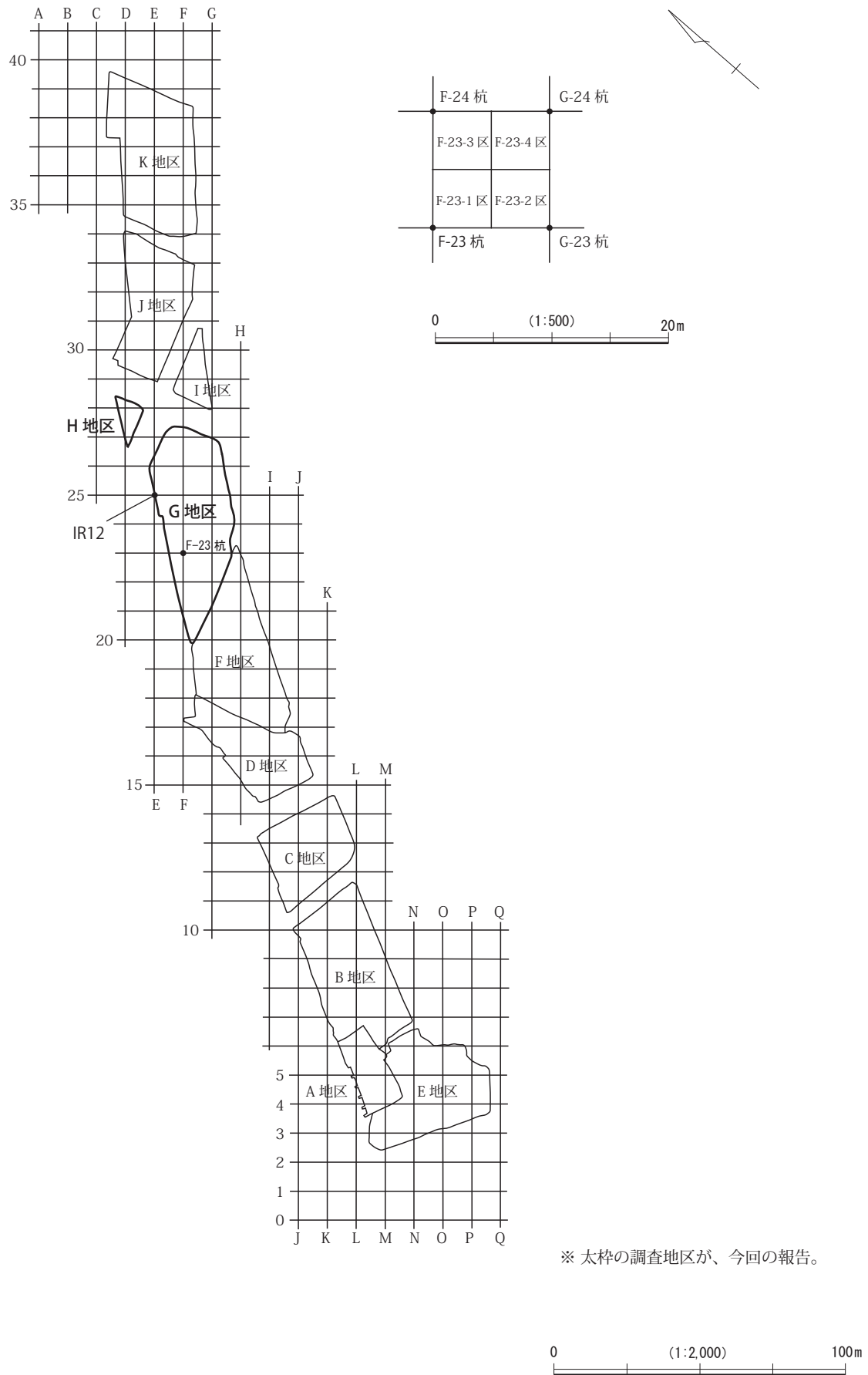
次に調査地区は、調査時も機能を維持する必要があった既存の道路や農道、農業用排水路により区切られる範囲を単位に設定した。第1次調査着手時に南側より順にA～D地区と呼称し、第2次調査以降も北側に向けてF～K地区を順次設定している。また、第1次調査の成果から、A地区南側にも本遺跡が延びることが判明し、A・B地区南側に隣接してE地区を設定している。なお、現地調査時点で供用が続く道路や農道、農業用排水路は、迂回が可能であった一部の農業用排水路を除いて、県教委文化財課と協議のうえ、発掘調査の対象から除外している。

また、第2次調査着手以降、本遺跡の特徴の一つでもある土石流を想起させる大量の土砂に度々埋没しながら、縄文時代中期～近世初頭にいたる集落・耕作地等の生活面が垂直方向に累積する様相が、次第に明らかとなった。そのため、新しい時代(上層)から順次、ローマ数字で第0、I、II～VII面といった調査面(生活面)を順次設定している。さらに各調査面(生活面)で複数の小生活面が検出できた場合は、第

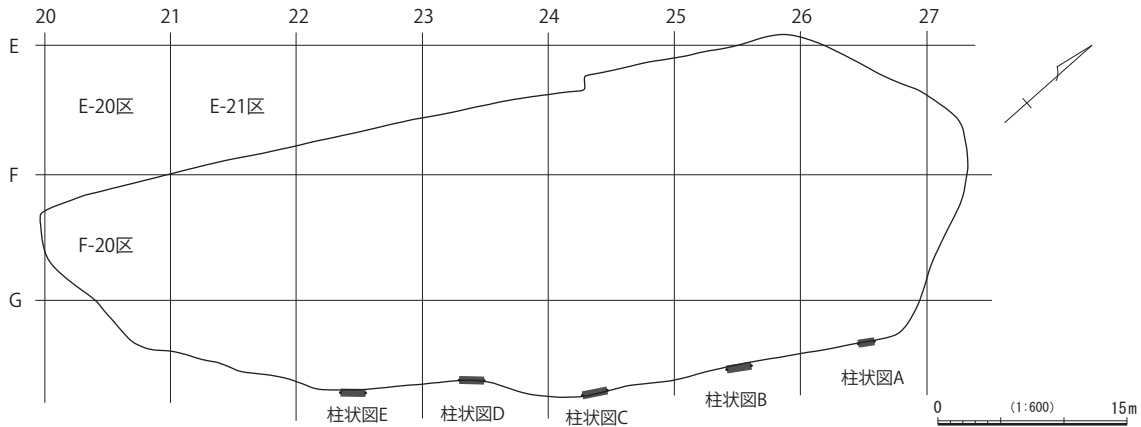
第6表 主な調査面の対応関係

C地区以降 調査面	第1次 A・B地区	推定する 主な存続時期
第0面		近世以降
第I面		中世後半
第II面	上層	14世紀中頃
第III面		平安中期～中世前半
第IV面	中・下層	古墳後期～平安前期
第V面		弥生後期～古墳前期
第VI面		弥生中期
第VII面		縄文中期～晩期

第1節 調査の方法



第5図 調査地区グリッド配置図(S=1/500・2,000)



第6図 G地区 グリッド配置・土層柱状図位置図(S=1/600)

Ⅲ-1面、第Ⅲ-2面のとおり枝番を付して調査を実施した。各調査面(生活面)の主な存続時期と、第1次調査A・B地区で呼称した上・中・下層との対応関係は第6表のとおりである。

結果として、各調査面における遺構の記録及び出土遺物の取上げについては、例えば「E地区第Ⅲ面E-23-3区83溝(SD83)」、「G地区第Ⅴ面E-23-3区包含層」のとおり、調査地区・調査面(生活面)・調査グリッド区・遺構番号を組み合わせた呼称を基本としている。なお、調査面(生活面)のうち、第0面と第Ⅰ面は、同一生活面で連続して営まれ、峻別が難しく第0・Ⅰ面として調査するが多かった。

**調査の方法** 表土及び各調査面間に流入・堆積している無遺物層、出土遺物が比較的少ない遺物包含層の一部については、作業の効率化を測るため重機を用いて除去作業を実施した。その後、人力により遺物包含層の掘削作業と、遺構検出面の精査および遺構面の精査・遺構検出作業を行った。遺構番号は、各調査地区で現地調査時に推定した遺構の性格を反映した略記号SE(井戸)、SK(土坑)、SD(溝)、P(ピット)などを、主に遺物が出土した遺構を対象として、検出順に1番から連続する通し番号を付与している。この遺構番号は、各遺構の固有番号として、出土遺物の取り上げ、土層等の記録、遺物整理作業、出土遺物の管理に使用している。また、G地区以北(第4次調査以降)においては、引き続き遺構密度が高いことが予想されたため、各調査面が分かるよう4桁の遺構番号に変更した。具体的には、第0・Ⅰ面ではSE1001、SE1002・・・、P1001、P1002・・・、第Ⅲ-1面ではSD3001、SD3002・・・、第Ⅲ-2面では500番台から始めておりSD3501、SD3502・・・となる。

検出した各遺構は、調査地区・調査面ごとに遺構概略図(縮尺1/100)を作成し、位置や遺構番号、遺構覆土などに関する所見を記録しながら、その主軸を基準に半裁または土層観察用の畔を残して調査作業員による人力での掘り下げ作業を行った。その後、各遺構について土層を観察のうえ、必要に応じて断面・立面図の作成と写真撮影(主に35mmカラーネガ、カラーリバーサル、白黒の各フィルム)で記録作業を実施した。遺構図面は縮尺1/20を基本とし、遺物の出土状況等の微細な表現が必要な場合は縮尺1/10の図化作業で行った。また、各調査面の遺構完掘後、遺構平面図(縮尺1/20)を効率的に作成するため、ヘリコプターまたはラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量図化作業を委託にて実施している。

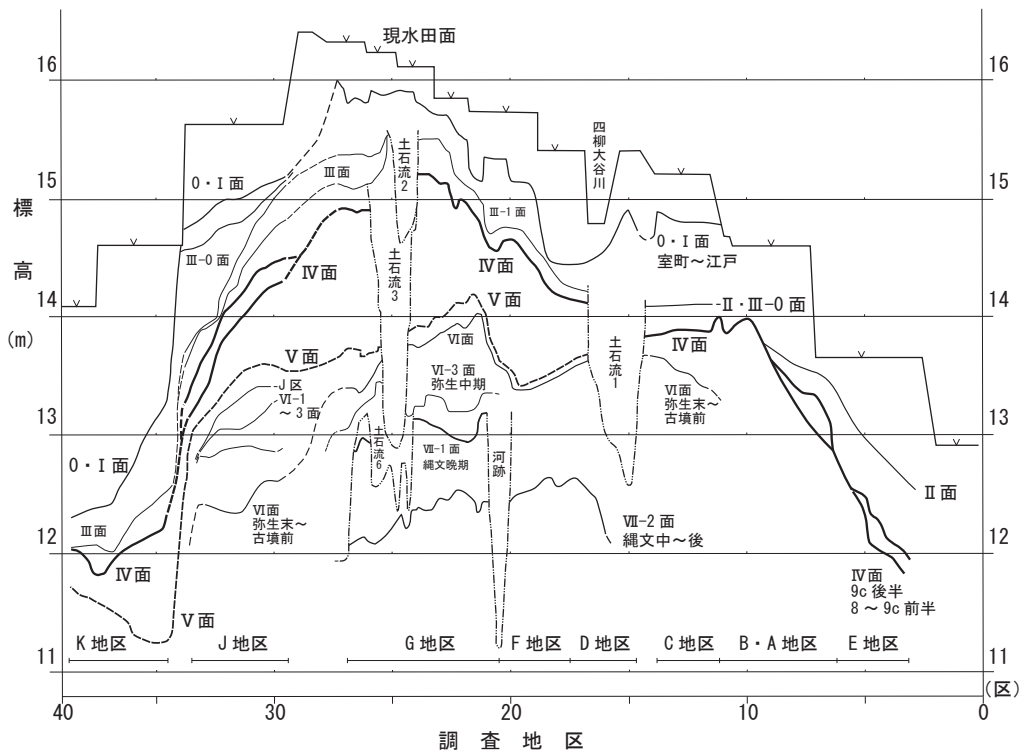
報告書作成に際して、調査時及び整理時の所見を踏まえ、掘立柱建物(SB)、柵列(SA)については、F地区(第4次調査以降)、調査面ごとに新たに3桁の通し番号を付与している(各柱穴番号は現地調査時の遺構番号のまま記載)。具体的には、第0・Ⅰ面ではSB101、SB102・・・、第Ⅳ面ではSB401、SB402・・・となる。本書の記載は、建物跡(SB、SI)、柵列(SA)、井戸(SE)、土坑(SK)については、基

本的に平面図および断面図を組み合わせるものとし、単独の小穴(P)、溝(SD)等の平面図は遺構全体の分割図(縮尺1/80)および必要に応じて断面図を用いて説明を加えるものとする。また、遺物が多出した遺構については遺物出土状況を示している。

## 第2節 基本層序

**基本層序** 本遺跡は、扇径約300m、比高差約20mを測る小扇状地上に立地する。第7図は、第1～7次調査のバイパス路線センター付近における主な遺構検出面の標高の概略を図示したものである。本遺跡においては、標高12m台を測る小扇状地中央付近(D・F・G地区)で形成された縄文時代中・後期の集落域の形成を皮切りに、度重なる小河川の大規模な氾濫で埋没しながらも、調査区外東・西側を含めた小扇状上において生活中心域を少しずつ変えて、継起的に集落域・耕作域が営まれ続けた状況がわかる。小扇状地を形成した小河川本流が流下したと考えられる扇状地中央ライン(D・F・G地区)を中心に土砂堆積が進んでおり、第5次調査G地区で確認した縄文時代後期の遺構検出面と、調査着手前の水田の標高差は4m以上に達する(写真図版1)。これは、東側に位置する碁石ヶ峰山地(石動山山地)が急峻で崩壊しやすい花崗岩質の土質をもつことに加え、集落域を形成しうる土地が碁石ヶ峰山地前縁に張り出した微高地・小扇状地にほぼ限定されることに起因する。この邑知地溝帯における集落形成のあり方は、四柳ミッコ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡や、邑知地溝帯対岸の眉丈山系前縁の微高地で営まれた中能登町金丸杉谷遺跡、徳丸遺跡でも確認されており、旧邑知潟に面した邑知地溝帯南側に通有の集落形成であったと考えられる。

各調査面(生活面)における基本土層層序は、A層：無遺物層で、短期間のうちに河川氾濫等で流入・堆積した淡灰～淡灰黄色を基調とする礫・砂利・粗砂・砂質土・シルトと、B層：遺物包含層(または耕作



第7図 第1～7次調査の主な調査(生活)面の高さ模式図

土層)の垂直方向での累積堆積で構成されている。B層は、A層が生活(または耕作)に伴い土壌化したものであり、黒灰・暗灰～暗灰褐色を呈する粗砂・砂質土・シルトを基調とする。各調査面においては、B層上面が集落域・耕作域の生活面または耕作域の遺構検出面、A層上面(B層下面)が集落域における遺構検出面となり、後世の耕作地造成や河川氾濫による浸食等で削平された箇所も少なからず認められた。また、扇状地中央付近(D・F・G地区)で礫・砂利等の粒径の大きい堆積土砂が主体となるのに対して、扇状地裾付近(E・J・K地区)では砂質土・細砂・シルト等の粒径の小さい堆積土砂が主体となる傾向を示すものの、A層の形成状況(土石流の規模や影響範囲)により、必ずしも一様でない。さらに、地形の傾斜が強い扇状地裾付近(E・J・K地区)は、古墳時代中期以降、主に耕作域としての土地利用が確認されており、一部(E地区)では水田耕作に伴う整地作業も認められる。

**G地区基本土層層序** 本書で報告するG・H地区の基本土層層序については、G地区東壁の土層層序をもって説明を行う(第7・8図、第7表)。G地区は、小扇状地の扇状部扇端寄りに位置し、調査着手前は水田であった。周辺の地勢は、北側から南側および東側から西側に向けて標高を下げるものの、他地区より緩い傾斜具合を示す。調査着手前の地表面の標高は、調査区北側水田で約16.5m、南側水田で約15.6m、東側水田で約16.5m、西側水田で約16.2mをそれぞれ測る。

基本土層層序は、概ね整合的に堆積し、現在までに短期間で発生した大量の土砂流入・堆積(洪水・土石流等を想定)を7回(洪水堆積土(ア)～(キ))と、その間の土壌化(集落域・耕作域に利用)の過程を9回程度繰り返したと推定される。以下、調査区東壁柱状図(第8図)の状況を上層から述べる。

**[現水田] 1～3層**：調査着手前までの耕作土・床土層で、近・現代施工の耕地整理後の水田覆土。

**[第0・I面] 6～8層**：中世後半～近世(近代含む)の遺物包含層・遺構覆土で、ベース土が粒状に混ざる濁褐～暗褐色系の砂質土を基本とする。6層上面が生活面(耕地整理での一部削平を想定)、また6層下面が遺構検出面となる。厚さ10～25cmを測る。

**[洪水堆積土(ア：土石流災害1)] 9～15層**：東側から短期間に流入・堆積した粗砂～細砂層で、基本的に無遺物層となる。柱状図B・Cで確認でき、柱状図A・Dは後世の削平のためか存在しない。柱状図C付近に流入経路の一つが存在するようで、堆積土の厚さは約95cmを測る。

**[(生活面)] 16層**：柱状図Bのみで確認した生活面で、17層の土壌化層となる。炭粒が多く混ざる濁灰色粗砂を基本とし、C地区第Ⅲ面で検出した中世前半の集落域に対応する可能性が高い。調査時は、耕地整理による造成のため明確に生活面として把握できず、第0・I面と同時に検出・調査を行っている。

**[洪水堆積土(イ)：土石流災害2] 17～19層**：柱状図B・Dで確認した粗砂～砂利層で、短期間に流入・堆積した無遺物層である。第Ⅲ-1面を被覆する。上下の層位から10世紀後葉～11世紀前葉に形成されたと考えられる。

**[第Ⅲ-1・2面] 20～22層**：洪水堆積土(イ)に埋没した段階(北側是水田、南側は畠地)を第Ⅲ-1面、遺物包含層20～22層を除去した段階(畠地)を第Ⅲ-2面としている。炭粒が多く混ざる濁暗灰～灰褐色系の砂質土を基本とする。第Ⅲ-1面は比較的短期間のうちに放棄され、一定期間を経たのちに洪水堆積土(イ)に被覆される。第Ⅲ-1面はF地区との連続性から10世紀中葉頃を中心にした時期を想定したい。

**[洪水堆積土(ウ)：土石流災害3] 23～31層**：調査区中央付近を東西に貫流する土石流痕跡で、その影響は本流南側が目立つ。本流は幅20～25m、深さ2m強を測り、複雑に堆積した1mを超える石・礫が多く混ざる砂利、粗砂を覆土とする。G地区第Ⅳ面の集落・耕作域廃絶後の10世紀初頭に発生する。なお、F地区周辺(羽咋市教委第4次調査区を含む)は、土石流災害の影響は比較的軽微であり、以降10世紀初頭も集落・耕作域が存続する。

**[第Ⅳ面] 32～36層**：長期にわたり比較的安定した生活面を維持しており、特に8世紀初頭～9世紀





第7表 G地区調査面の概要一覧表

調査面	存続年代	性格	主な遺構	遺構検出面の標高 (m)	遺構番号	備考	
近・現代 (調査前)	-	耕作域 (水田)	-	15.67 ~ 16.45 m	-	2度の耕地整理痕跡	
第0・I面	中世～近世初頭	16世紀後半～17世紀代	集落域	SB16棟、SA6条、SE13基、SK6基、ビット	15.20 ~ 16.00 m	1000番台 (SB、SAは100番台)	
		14世紀中頃か：中央付近で大規模な土砂流入・堆積 (ア；土石流災害1)					C地区第II面被覆土砂に対応か
	12～13世紀前半代	集落域	SB5棟	15.50 ~ 15.75 m	1000番台 (SBは100番台)	C地区第III面に対応か	
10世紀後葉～11世紀前葉：大規模な土砂流入・堆積 (イ；土石流災害2；河跡3001 (新)) で第III-1面は廃絶							
第III-1面	10世紀中葉頃	南側：耕作域 (畠地)	耕作に伴う小溝約25条	14.54 ~ 15.75 m	3000番台 (SB、水田は300番台)	F地区に畠地が連続	
		北側：耕作域 (水田)	堤防・護岸、水田3枚以上			H地区に水田が連続	
第III-2面	10世紀前葉頃	南側：集落、耕作域 (畠地)	SB2棟、耕作に伴う小溝群約10条	14.50 ~ 15.64 m	3500番台 (SBは300番台)		
		北側：耕作域 (畠地)	堤防・護岸、耕作に伴う小溝群約60条				
10世紀初頭：大規模な土砂流入・堆積 (ウ；土石流災害3；河跡3001 (古)) により第IV面集落域は廃絶							
第IV面	7世紀末～9世紀末	耕作域 (畠地)	耕作に伴う小溝約60条	14.26 ~ 15.30 m	4000番台 (SB、SAは400番台)	SE4001は横板井籠組集落5期に対応	
		集落域	SB26棟、SA7条、SE1基、耕作に伴う小溝約60条			集落1～4期に対応	
古墳時代中期初頃：大規模な土砂流入・堆積 (エ；土石流災害4) により第V面水田は廃絶 古墳時代後期にも土石流あり。							
第V面	古墳時代中期末	耕作域 (水田)	水田約27枚、SD3条	13.30 ~ 14.30 m	5000番台	D・F・K地区に水田が連続	
調査区北側で小規模な土砂流入・堆積							
第VI-1面	弥生時代後期後半～古墳時代前期前半	南側：集落域	堅穴状遺構1基、SK4基、SD25条	13.10 ~ 14.10 m	6000番台	F地区で銅鏡片出土	
		北側：未利用					
大規模な土砂流入・堆積 (オ；土石流災害5)							
第VI-2面	弥生中期後葉	北側：集落域	平地建物1棟、SK4基、SD14条	12.85 ~ 13.60 m	6500番台 (SIは650番台)		
弥生時代中期中葉：調査区北側で大規模な土砂流入・堆積 (カ；土石流災害6) [第VI-3面：河跡2条]							
第VII-1面	縄文時代晩期後半～末	南側：集落域 北側：不明	堅穴状遺構1基、SK4基	12.52 ~ 13.24 m	7000番台 (SIは700番台)	円形建物を含む可能性あり	
大規模な土砂流入・堆積 (キ) 中期中葉頃、晩期末頃の2回確認							
第VII-2面	縄文時代中期～後期前葉	集落域縁辺	SK2基	11.80 ~ 12.68 m	7500番台	F地区で堅穴建物を検出	

末は本遺跡の最盛期となる。遺物包含層・遺構覆土は、北側が濁灰～暗灰色砂質土を基調とするのに対して、南側は洪水堆積土(ウ)による流出で包含層を欠き、遺構覆土は炭粒が多く混ざる淡灰～灰色系砂質土を基本とする。G・F・D地区では、多くの掘立柱建物が展開し、多量の遺物が出土する。**[洪水堆積土(エ)：土石流災害4] 37～48層**：第IV面ベース土で、上面が第IV面遺構検出面、下面が第V面検出面となる。淡灰色～灰緑色を呈した細砂・粗砂・砂利が厚さ60～100cmで水平堆積する無遺物層である。

**[第V・VI-1面] 49～52層**：炭粒が混ざる暗灰色砂質土を基調とする。洪水堆積土(エ)に被覆される段階の遺構面を第V面、また遺物包含層52層を除去した段階で検出した遺構面を第VI-1面としている。第V面では一定期間放棄された古墳時代中期末の小区画水田域を、また第VI-1面では弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落域縁辺の様相を検出している。

**[洪水堆積土(オ)：土石流災害5] 53～55層**：第VI-1面ベース土で、柱状図Aを除いて、ほぼ水平な堆積を確認している(厚さ30～50cm)。淡灰オリーブ～灰褐色を基調とする粗砂・細砂・シルトで、北側に向かうにつれ、粒子が細くなる傾向を示す。無遺物層。

**[第VI-2面] 56～58層**：本遺跡で初めて確認した弥生時代中期後葉の遺物包含層で、厚さ20～40cm程度がほぼ水平に堆積する。遺構・遺物が偏在する調査区北側では炭粒が混ざる濁淡灰～灰褐色を基調とするシルト・細砂であるのに対して、遺構が希薄な南側は暗灰色砂質土を基本とする。

**[洪水堆積土(カ)＝第VI-3面] 59～63層**：調査区北側(柱状図A・B)で確認した第VI-2面のベースとなる河川堆積土である。生活面ではないものの、弥生時代中期中葉の土器を包含する層であることから、第VI-3面として調査を実施した。灰オリーブ～灰褐色を基調とするシルト～粗砂・砂利が堆積し、

北側ほど厚さを増す。

**〔第Ⅶ-1面〕64～67層**：縄文時代晩期後半～末の遺物包含層である。柱状図C～Dで確認できるものの、柱状図A・Bでは洪水堆積土(カ)により流出したため検出できない。粘性に富んだ暗灰緑～灰オリーブ色砂質土を基本とし、下層ほど炭粒が多く混ざる。包含層を除去して検出した遺構は比較的希薄である。

**〔洪水堆積土(キ)〕68～70層**：柱状図C・Dで確認した無遺物層、第Ⅶ-2面を被覆する。固くしまった暗褐～褐灰色第砂質土を基本とし、F地区の様相から数回にわたり発生する。

**〔第Ⅶ-2面〕71～73層**：縄文時代中期～後期前葉を中心とする遺物包含層で、淡灰緑～暗褐灰色砂質土を基調とする。遺物の混ざりは比較的少なく、ベース土となる74・75層上面で検出できた遺構も限られる。調査区外東側・南側(F地区Ⅶ面を含む)に中心をもつ集落域縁辺部の様相を示す。

**〔第Ⅶ-2面ベース土〕74～75層**：上面は第Ⅶ-2面遺構検出面となる。北側で褐色強粘質土(74層)、南側で灰オリーブ色砂質土(75層)となる。

なお、G地区第Ⅶ-2面の調査終了後に、県教委と協議のうえ、第Ⅶ-2面ベース土(第8図74・75層)以下における遺物包含層の有無を確認する試掘調査を実施した。試掘調査は、G地区内3ヶ所で重機により約1～1.5mの深さまで掘削し、土層観察および記録作業を行った。いずれの試掘坑でも、一時期に堆積した粗砂・砂利層と、土地が比較的安定した際に繁茂した植物が腐植・堆積したピート層がほぼ水平に堆積しており、第Ⅶ-2面より下部に集落・耕作地を形成しうる安定した生活面や遺構の落ち込みは確認できなかった。

## 第4章 G地区の遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

G地区は、F地区北側に設定した調査区であり、本遺跡で最も標高が高い調査区となる。調査杭グリッドでいえば、D-25・26区、D～G-20～27区にあたる(第6図)。調査対象平面積は約1,400㎡(南西-北東方向最長約75m、南東-北西方向最長約27m)を測り、調査区法面に安定勾配を保ちながら順次下面の調査を進めたことから、下面に向かうほど実調査面積は縮小する。調査対象面積は、第4次調査(1997)が2面(第0・I面、第Ⅲ-1面)で2,800㎡、第5次調査(1998)が第Ⅲ-2面～第Ⅶ-2面の7面(第Ⅲ-2面・第Ⅵ-1面各800㎡、他面が各1,200㎡)で7,600㎡を測り、2ヶ年計10,400㎡となる。

調査の結果、F・G地区より連続する第0・I面、第Ⅲ-2面(F地区第Ⅲ面に対応)、第Ⅳ面、第Ⅴ面、第Ⅵ-1面(F地区第Ⅵ面に対応)、第Ⅶ-2面(F地区第Ⅶ面に対応)の各生活面に加え、新たに第Ⅲ-2面、第Ⅵ-2面、第Ⅶ-1面の3つの生活面と、第Ⅶ-1面・第Ⅵ-2面の間で発生した大規模な土石流災害痕(第Ⅵ-3面：土石流災害7)を確認している。これらの新たな調査面を確認した理由については、本地区中央付近に土石流災害の本流の一つ(南東方向から北西方向に流下、通常は水無川か)が横断すること、F地区とは異なり扇状地形が北側にも傾斜する地形に転ずることに起因し、より土砂の流入・堆積頻度が高かったためと考えられる。なお、土石流災害を引き起こす本・支流は、本地区中央付近の他にC地区とD地区の間(現、四柳大谷川付近)、E地区南側の緩やかな谷地形付近で確認している。

各調査面の存続年代、検出遺構、遺構番号、遺構検出面の標高や、大規模な土石流災害痕跡の概要については、第7表に示したとおりであり、最下面の第Ⅶ-2面(縄文時代中・後期)は、現地地表下約4mに存在したこととなる。

第0・I面は、F地区と同様に現耕作面直下で検出した最上層の生活面で、耕作や過去の耕地整理等のため、遺存状態はあまりよくない。掘立柱建物16棟、柵6条を復元した他、石組井戸を主体とした井戸13基、土坑6基等を検出した。遺物は、陶磁器、土師器小皿や、柱根、漆器碗等の木製品、銅銭等の金属製品、砥石等の石製品が少量出土した。これらは、14世紀中頃と想定できる土石流災害1を挟んで、12～13世紀前半に中心をもつ掘立柱建物群と、14世紀後半～17世紀代の掘立柱建物と小型の井戸で構成される一般的な農村集落域に大別できる。また、後者はC・D・F地区第0・I面で検出した集落域(14世紀後半～16世紀前半)が縮小に向かう一方、G地区北側に新たに建物群を形成する。

第Ⅲ-1面は、新たに確認した生活面であり、10世紀末葉～11世紀前葉<sup>(1)</sup>に発生した土石流災害2(河跡3001(新))で一度に埋没する。調査区中央付近の河跡3001(新)(第Ⅲ-2面で右岸に護岸・堤防)の北側で水田(第Ⅲ-2面畠地から転換)を、河跡3001(新)南側で畠地と考えられる小溝群を検出しており、いずれも第Ⅲ-2面との関係から短期間の経営であったと考えられる。また、土石流災害2直前まで耕作を維持した小規模水田は調査区北隅の3枚に限られ、その続きをH地区第Ⅲ-1面で検出している。

第Ⅲ-2面は、右岸(北岸)に多量の自然石を用いて護岸・堤防を築く河跡3001(古)を挟んで、南側の調査区で畠地と考えられる小溝群と小規模な掘立柱建物2棟を、北側の調査区で畠地と考えられる小溝約60条を検出した。河跡3001(古)右岸に築かれた石組の護岸・堤防は、調査区内で延長21m、幅5.6～6mの規模をもつ大がかりなものであり、北側で検出した小溝群と一体をなす。また、河跡3001(古)南側で検出した小溝群は、調査区南隅に偏在し、F地区第Ⅲ面の小溝群と一体的に経営される。第Ⅲ-2面の存続時期は、10世紀前葉頃の比較的短い期間を想定している。

第IV面は、本遺跡の最盛期であり、集落規模は南西-北東方向で約300mに及び、出土遺物の量・内容を含めて、周辺地域の中で屈指の規模をもつ。さらに本遺跡北側には、四柳ミッコ遺跡、大町ゴンジョガリ遺跡、小金森ヘイナイメA遺跡等が展開する。本地区で検出した主な遺構は、掘立柱建物26棟、柵7条、本遺跡初例となる相欠式横板組(横板蒸籠組)井戸1基、畠地と考えられる小溝群約60条、整地痕跡3ヶ所等であり、多数のピットの存在から建物棟数はさらに多くなると考えられる。これらの遺構は、7世紀末～9世紀末の200年強の間で大きく5期の変遷を復元でき、9世紀中頃まで存続した集落域(集落1～4期)が、9世紀後葉に耕作域(畠地)に転換(集落5期)、10世紀初頭に発生した大規模な土石流災害3(河跡3001(古))で一度に埋没する。遺物は、「乙上」「田地」「酒田」「東」「寺」「罌本□」「梗女」等の墨書土器や、円面硯・転用硯を含む多数の須恵器・土師器、灰釉陶器1点、製塩土器、土錘、砥石、鉄滓、フイゴの羽口、鉄刀、柱根が、さらに井戸から祭祀に用いた齋串5本、錐柄、横櫛等が出土している。また、第Ⅲ-1面で出土した銅製巡方も、本面に属すると考えられる。

第V面は、緩斜面を利用した小区画水田で、D・F地区第V面で検出した水田と一体的・計画的に造られる。河跡3001(古)北側の調査区で残存した小区画水田は27枚(平均面積約8.1㎡、最大20.3㎡以上、最小約3.1㎡)を数え、水田間を排水用の溝が流下する。畦畔の残存状況から埋没直前の時期には、耕作が放棄されていた可能性が高い。また、河跡3001(古)南側の調査区では、約20m間隔で水田区画の軸と考えられる溝2条(水田区画は未造成)を検出した。いずれも古墳時代中期初め頃に発生した土石流災害4で一度に埋没する。

第Ⅵ-1面は、F地区第Ⅵ面より続く生活面であり、河跡3001(古)以南で古墳時代前期を中心とする竪穴状遺構1基、土坑4基、溝25条等を検出した。屈曲する溝の一部は、柱穴を確定できないものの、平地建物の外周溝の可能性を考えている。遺物量は少なく、集落域の中でも縁辺に近い印象を受ける。一方、河跡3001(古)以北は未利用の土地と考えられ、少量の弥生時代後期後半の土器が出土したにとどまる。なお、F地区第Ⅵ面から仿製乳文鏡の破鏡が出土している。

第Ⅵ-2面は、本遺跡で初めて確認した弥生時代中期後葉の生活面である。河跡3001(古)以北に偏在して周溝をもつ建物1棟、土坑4基、ピット多数等を検出、建物内で黒色のガラス質安山岩を用いて石器製作を行う。

調査区北半の第Ⅵ-3面と、南半の第Ⅶ-1面は、同時に検出している。両面の関係は、第Ⅶ-1面(縄文時代晩期後半～末の集落域)の北半斜面を、弥生時代中期中葉に3条の土石流痕跡(土石流災害6)が幅約25mにわたり浸食、その3条の土石流痕跡を第Ⅵ-3面とした。3条の土石流で流入・堆積した土砂層は、第Ⅵ-2面ベース土を形成するとともに、調査区外東側(山側)に集落が存在した可能性が高い。調査区南半の第Ⅶ-1面は、竪穴状遺構1基、土坑4基、溝1条、ピット多数を検出し、ピットの一部は円形建物柱穴の可能性をもつ。また、調査区南端で検出した縄文時代晩期末の河跡は、F地区第Ⅶ面2101・02号河跡、D地区河跡と一体性が高いと考えられる。

第Ⅶ-2面は、縄文時代中期～後期前葉の生活面で、F地区第Ⅶ面から続く集落域の縁辺部と考えられる。F地区で中期中葉～後葉の竪穴建物2棟を確認したのに対して、G地区は土坑2基等を検出したにとどまる。出土遺物は少ないものの、前期中葉や中期～後期前葉の土器片から、調査区外東側(山側)に立地する四柳貝塚、四柳中の堂遺跡周辺の集落存続時期を考える一助となる。なお、第Ⅶ-2面調査完了後、試掘調査を実施し、第Ⅶ-2面より下に生活面が存在しないことを確認している。

## 第2節 第0・I面の遺構と遺物（第9～77図、第8～18表）

第0・I面は、第4次調査(1997)において現耕作土直下で検出した最上層の生活面で、12世紀以降17世紀代にかけて、断続的に営まれた集落域となる。遺構・出土遺物の様相から、12世紀～13世紀前半、14世紀後半～16世紀前半、16世紀後半～17世紀代に、それぞれ小規模な建物群が中心域を違えて確認できる。いずれも、現代に至るまでの耕作や、明治時代以降の大規模な耕地整理<sup>(2)</sup>により、遺構の遺存状況は比較的良好でない。調査の結果、掘立柱建物(SB)21棟、柵(SA)6条、小型の井戸(SE)13基、土坑(SK)6基、溝(SD)、ピット(P)多数、整地土4ヶ所等を確認し、整地土と大部分の溝は近代以降に属する。

遺物は、食膳・調理・貯蔵に用いられた陶磁器、土師器や、建物の柱根、漆器椀、曲物、部材等の木製品、石臼、銅銭、金属製品、石製品の他、古代に属する須恵器、土師器、石製品等が出土しており、遺物量は耕地整理の影響でそれほど多くない。

### 1 掘立柱建物(SB)、柵(SA) (遺構：第23～46図・第8表、遺物：第47～50・72図・第10・12・14表)

復元した掘立柱建物は、総柱構造の建物5棟、側柱構造の建物16棟(1×1間含む)の計21棟である。総柱構造の建物(F地区SB104、SB101・109・113・114)は、調査区外西側に展開するため、全体規模が判明した建物は、F地区につながるF地区SB104(4×3間、54.3㎡)に限られる。柱穴は、平面不整形円形を呈するものが多く、径30～50cmと比較的小振りである。調査区南西隅のF地区SB104は、F地区調査成果から14世紀後半～16世紀前半に位置付けられる他、調査区北西側の整地土103除去後に検出したSB109・113・114等は出土遺物等から12世紀～13世紀前半に建てられた可能性が高い。

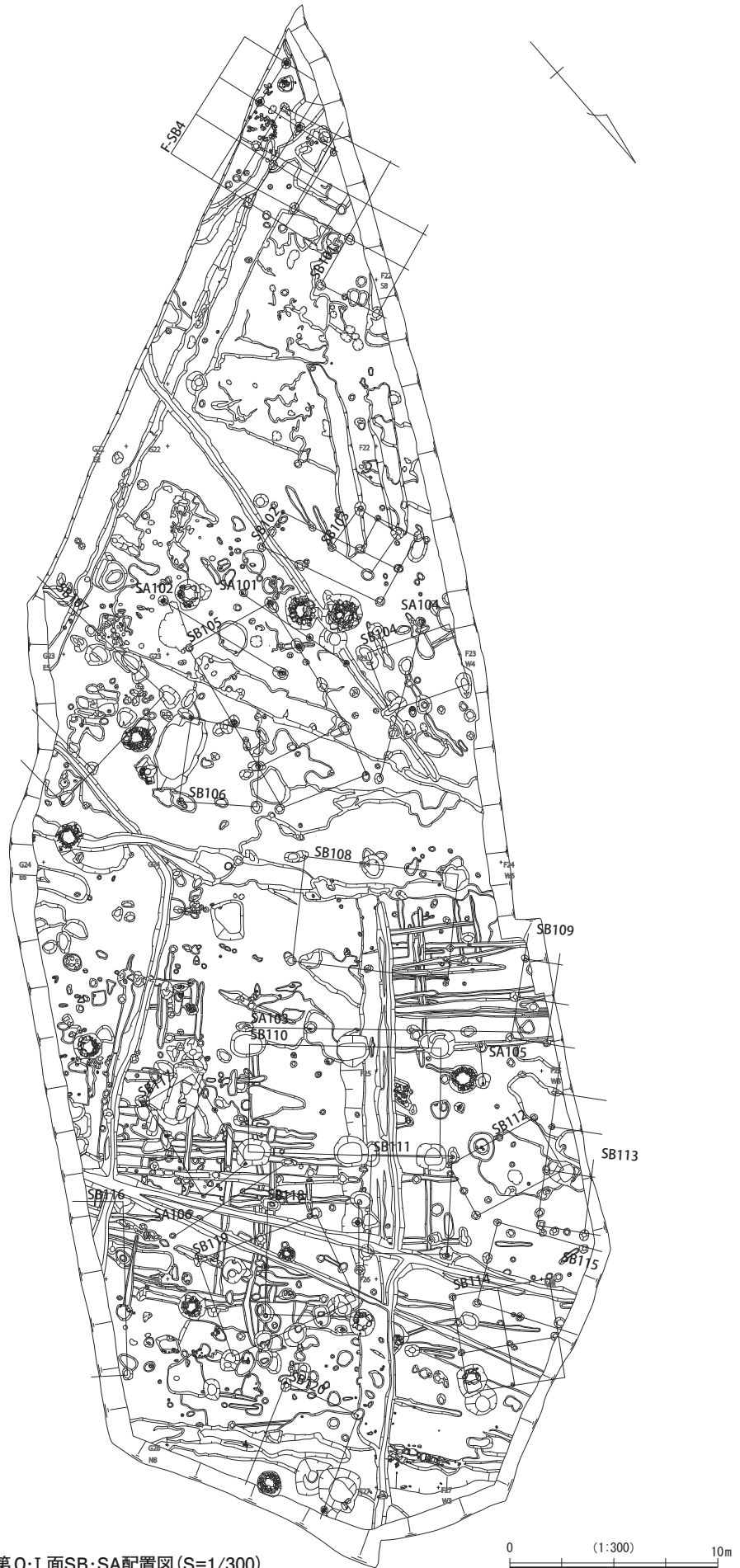
側柱構造の建物は、桁行が1～3間、梁間1または2間で、最大棟のSB110でも平面積48.3㎡と、比較的小規模な建物で構成される。柱穴は比較的大きく、長軸1mを超えるものも存在する。また、出土遺物は、柱根が中心であり、土器類は古代に属する須恵器・土師器を除くと、極めて少量であった。なお、現地調査では耕地整理による基盤土の削平等により明確な平面プランを認識できた建物は限られ、特に側柱建物についてはD・F地区と同様に整理段階で復元した建物が少なからずある。そのため、建物となりうるか不安を残す建物については、各遺構の説明に付記しており、今後の類例の増加を待ちたい。また、掘立柱建物として復元した柱穴以外にも、柱根や柱痕跡の残る柱穴が一定数存在することから、掘立柱建物数はさらに多くなるものと推定している。

#### F-SB104(遺構：第23図、遺物：第47図)

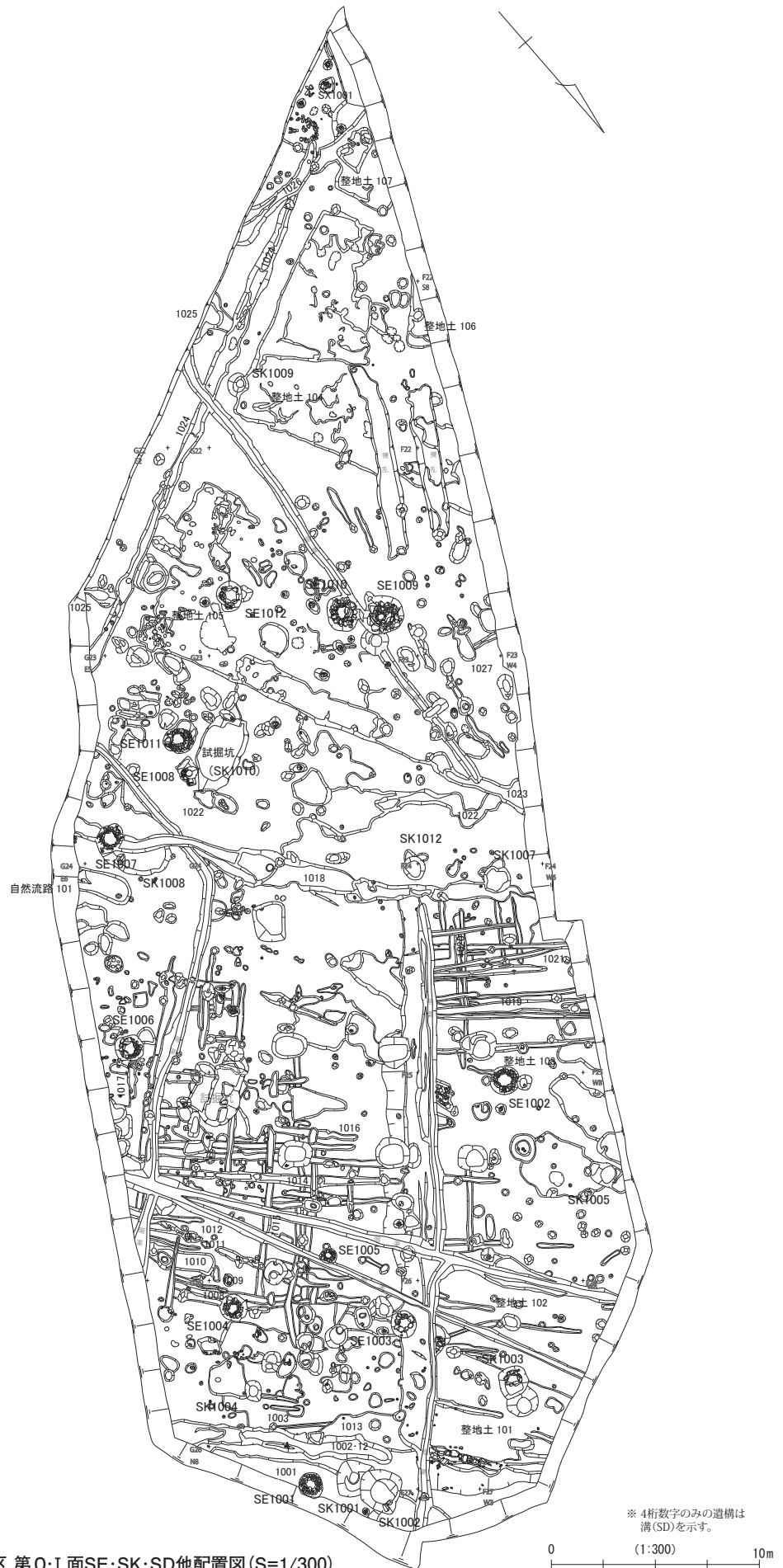
F-19・20区で検出した総柱構造の掘立柱建物で、第3次調査F地区および調査区外西側に延びる。主軸方位はN-16°Wを示し、桁行4間(8.30m)×梁間3間(6.55m)、床面積54.3㎡を測る。桁行の柱間寸法は北端が1.85m、その他が2.05～2.30m、梁間の柱間寸法は2.10～2.25mとなり、北端桁1間は廂と考えられる。その他の桁行と梁間の柱間寸法に大きな差異は認められず、柱筋の通りは比較的良好。柱穴の平面形態は不整形円形を呈するものが主体で、P1087が長径50cm、短径44cm、深さ27cm、P1136が径約42cm、深さ33cmを測る。柱穴覆土はベース土が粒状に混ざる暗灰褐色砂質土を基本とする。P1087～89に柱根が残り、遺構の切り合い関係はSX1001より新しく、整地土107より古い。P1087～89出土の柱根第47図1～3は芯持ちのマツ属複雑管束亜属(クロマツまたはアカマツ)材を用いた丸柱である。残存長30～39cm、径16～20cmを測り、底面は丁寧な加工で平坦に仕上げる。他にP1136から第Ⅲ面以下の非ロクロ土師器甕細片が出土した。



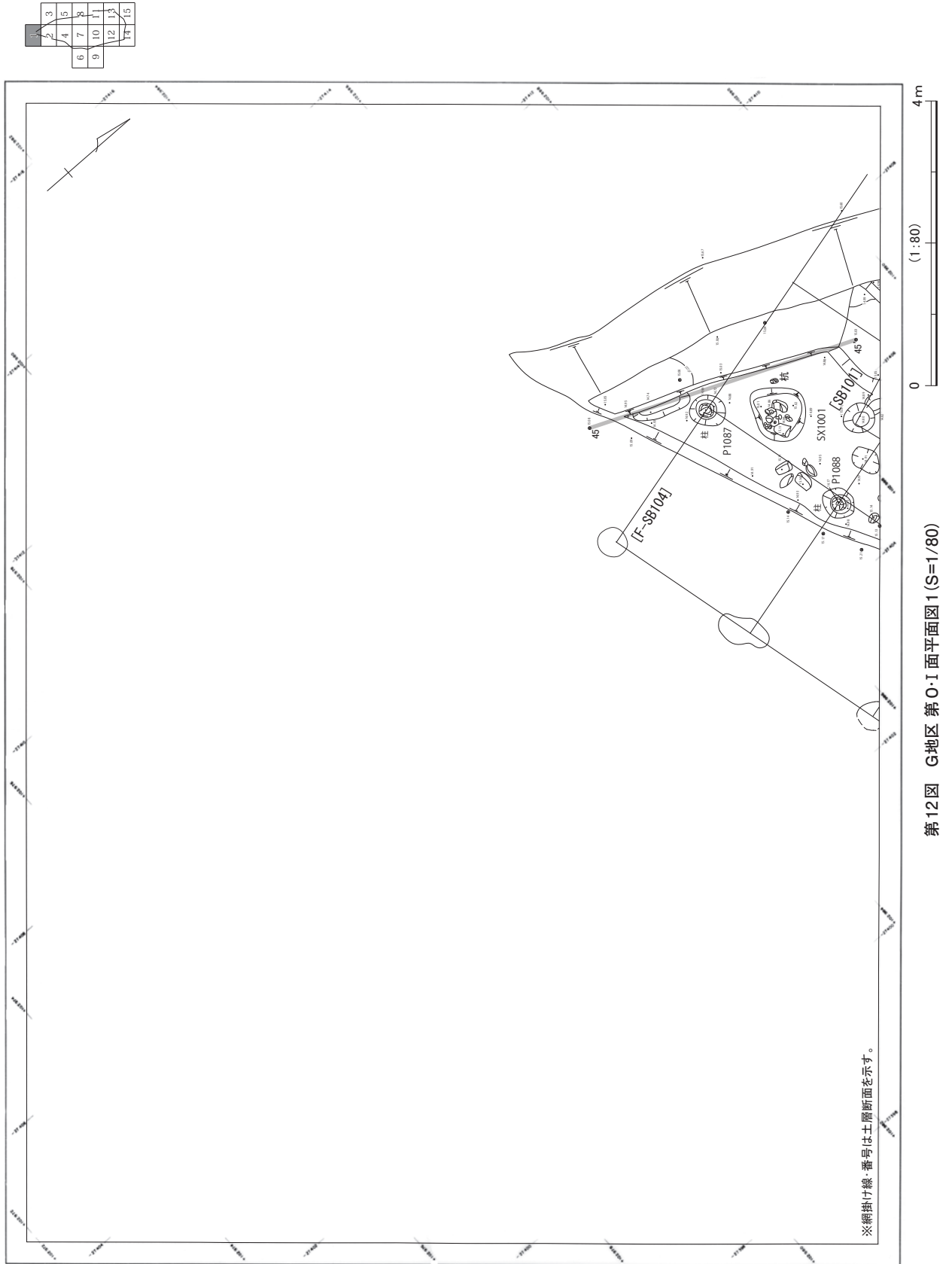
第9図 G地区 第0・I面全体図(S=1/300)

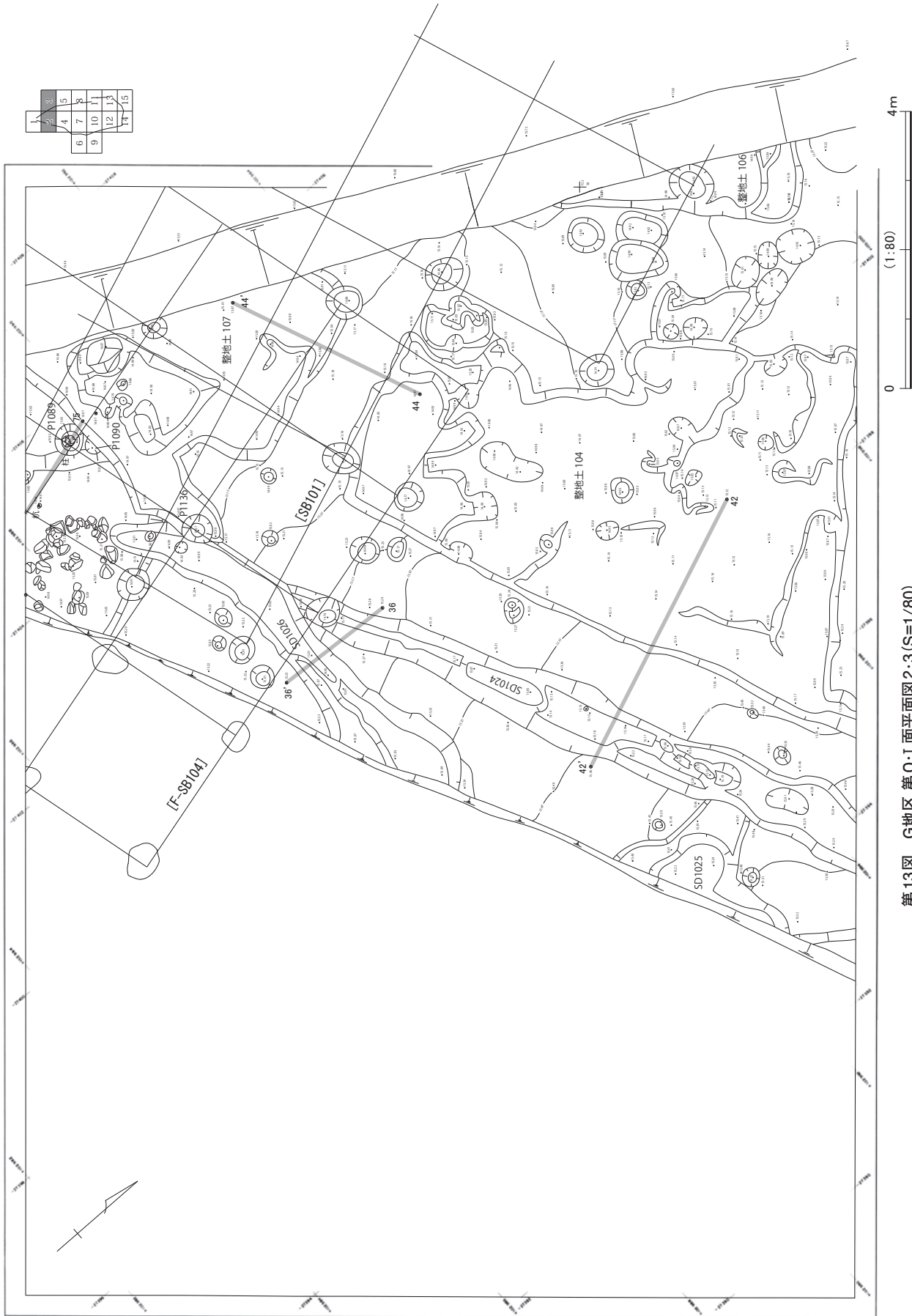


第10図 G地区 第0・I面SB・SA配置図(S=1/300)

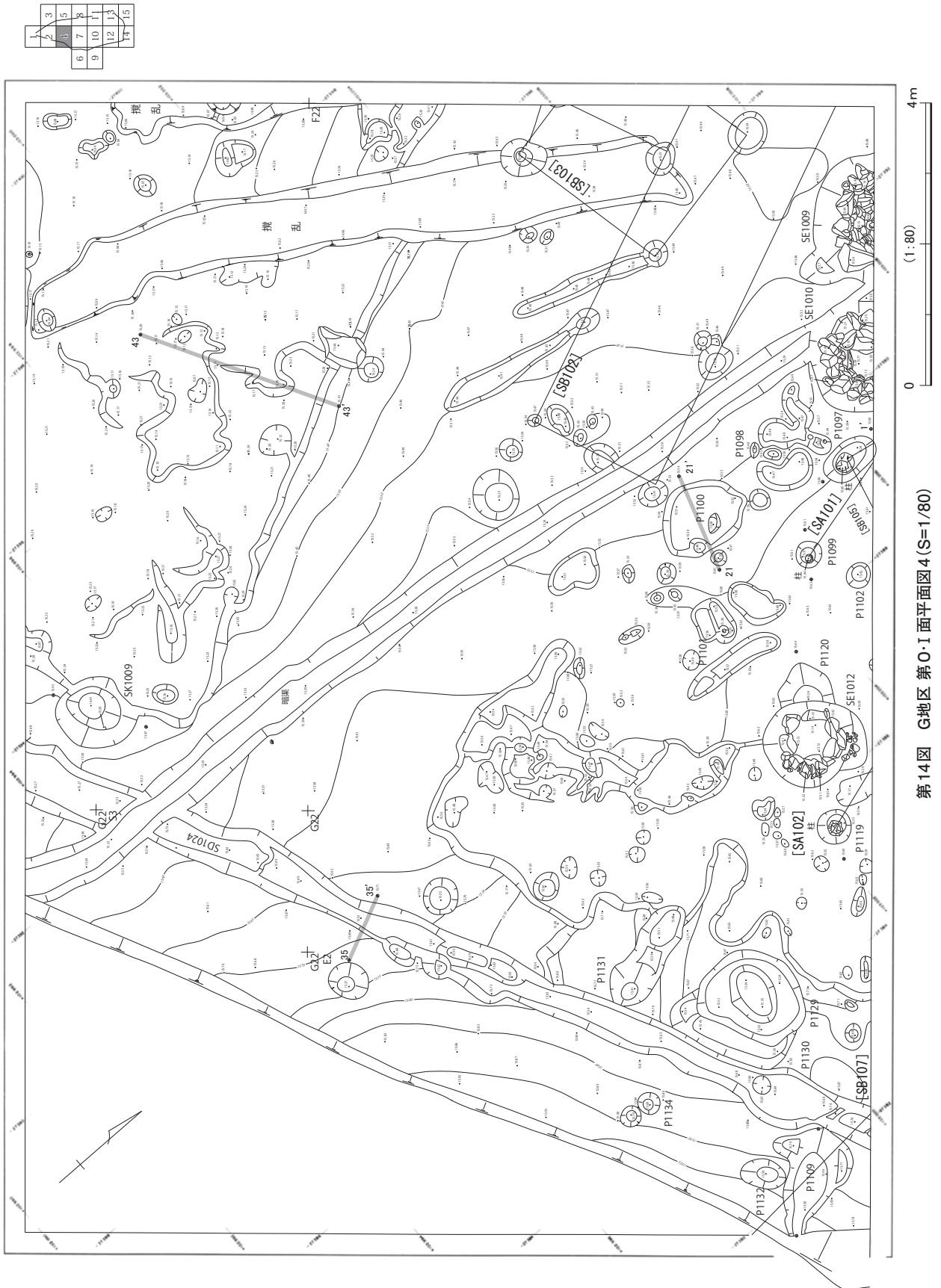




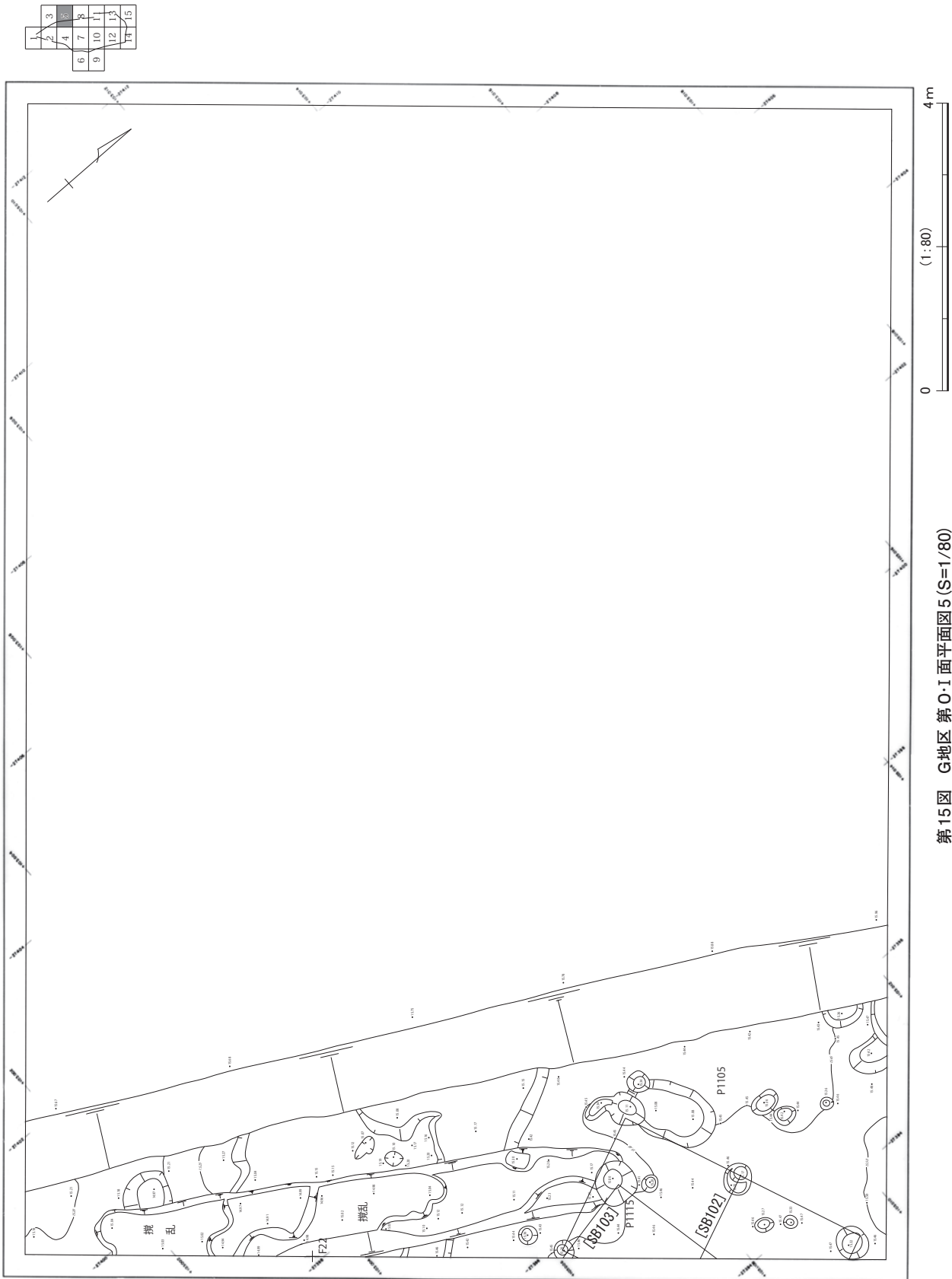




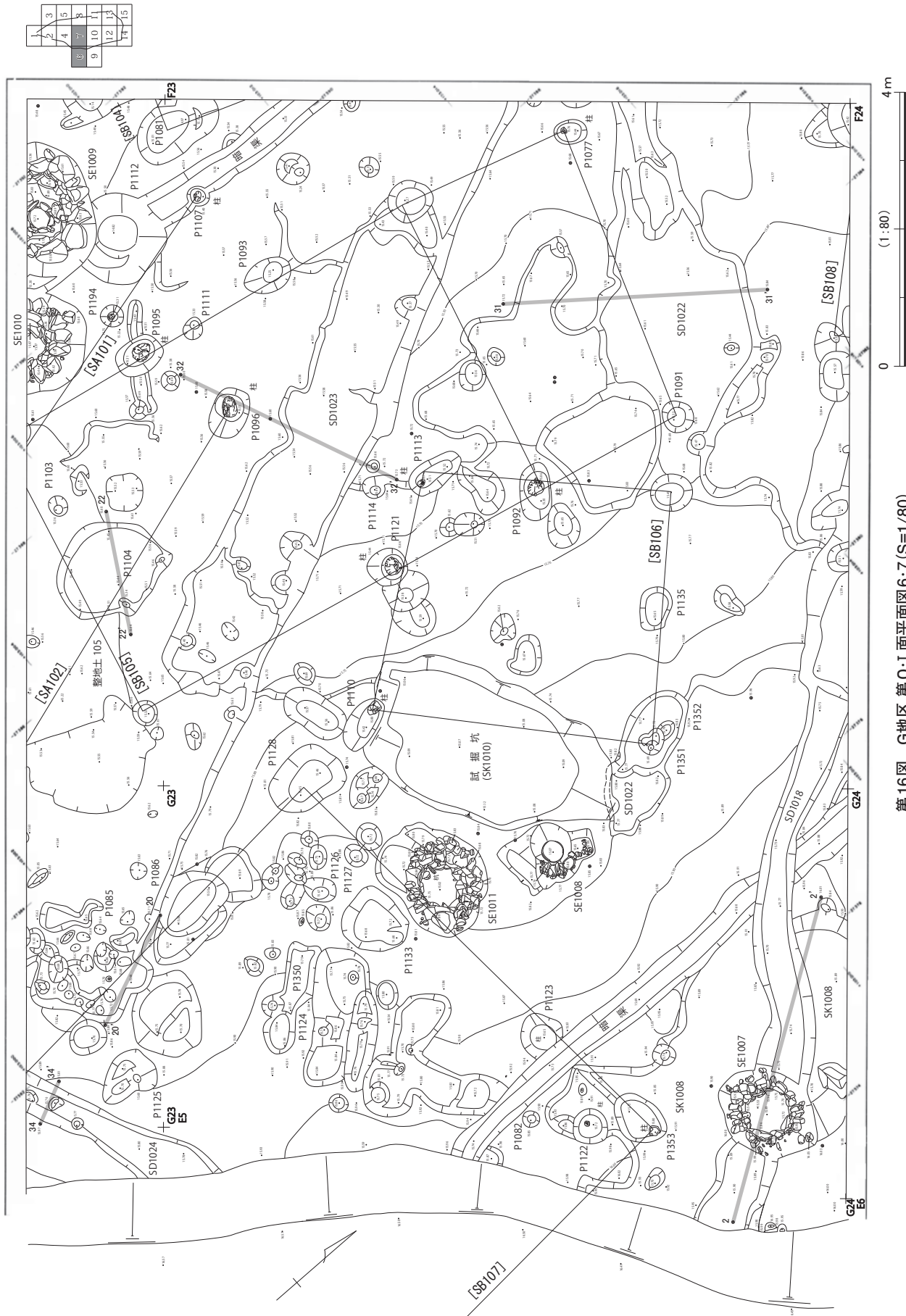
第13図 G地区 第0・I面平面図2・3(S=1/80)



第14図 G地区 第O-1面平面図4(S=1/80)

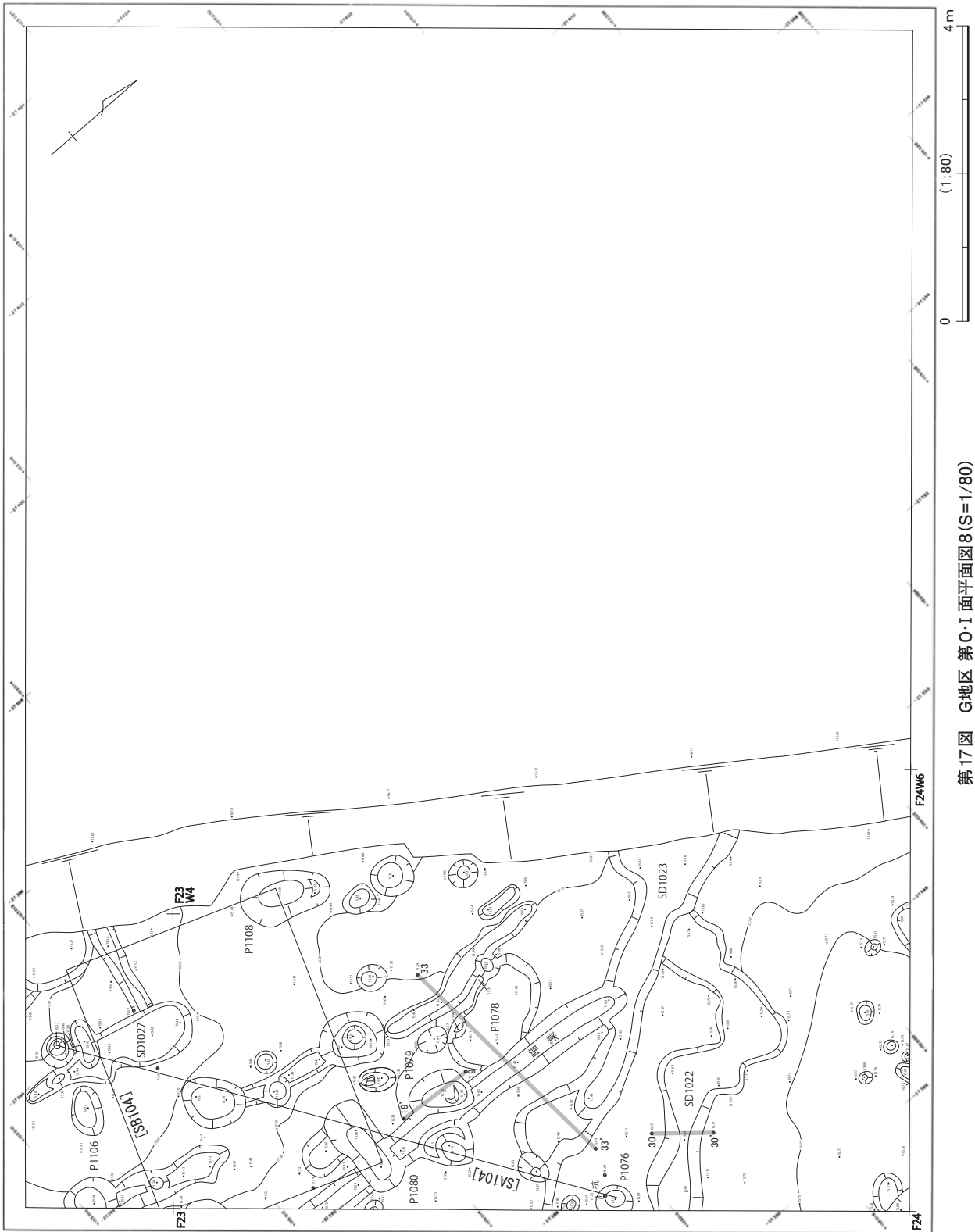


第15図 G地区 第0・I面平面図5 (S=1/80)

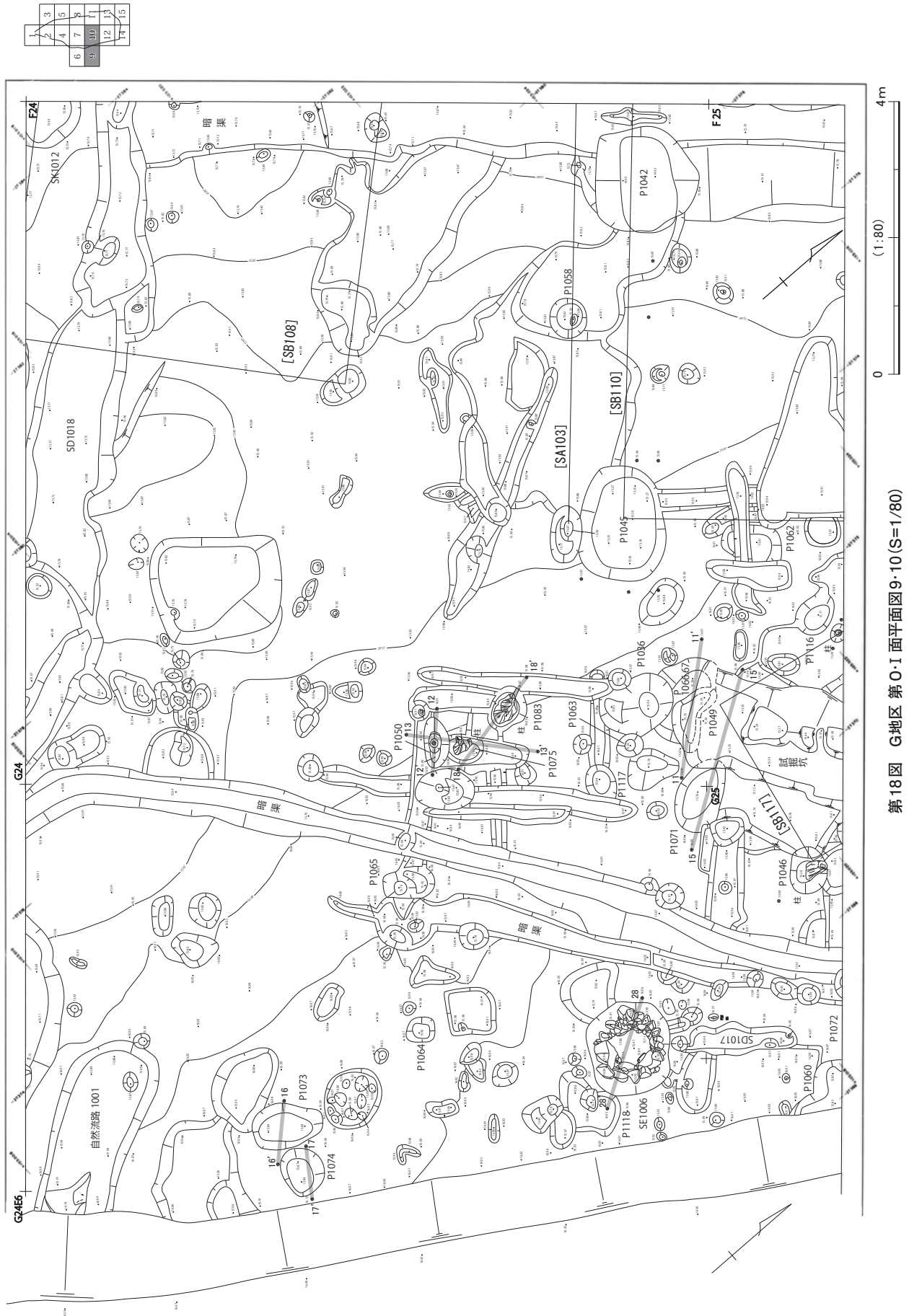


第16図 G地区 第O・I面平面図6・7 (S=1/80)

1	3	
2	4	15
6	7	8
9	10	11
12	13	14
		15

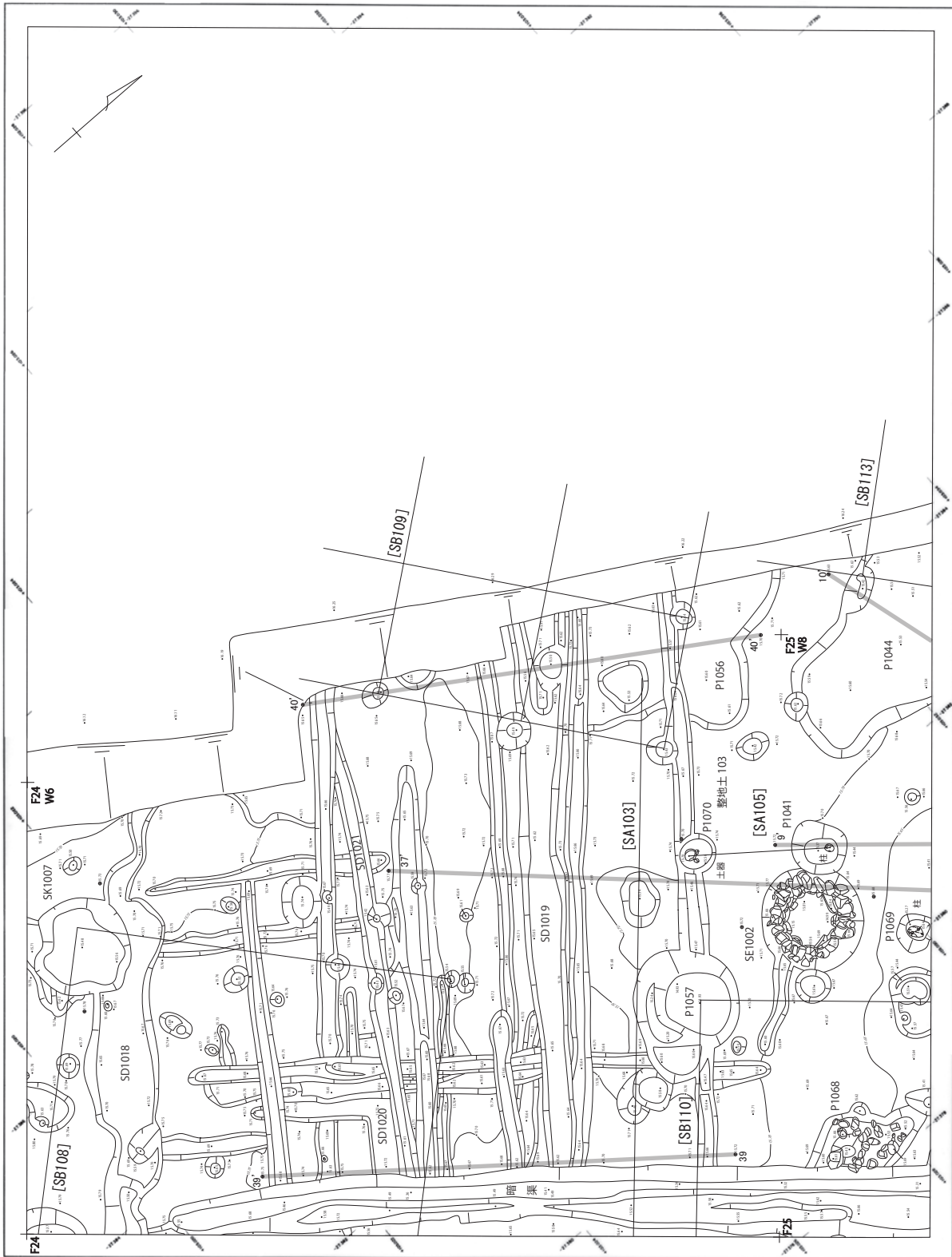


第17図 G地区 第0・I面平面図8(S=1/80)



第18図 G地区 第O-I 面平面図9・10(S=1/80)

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15

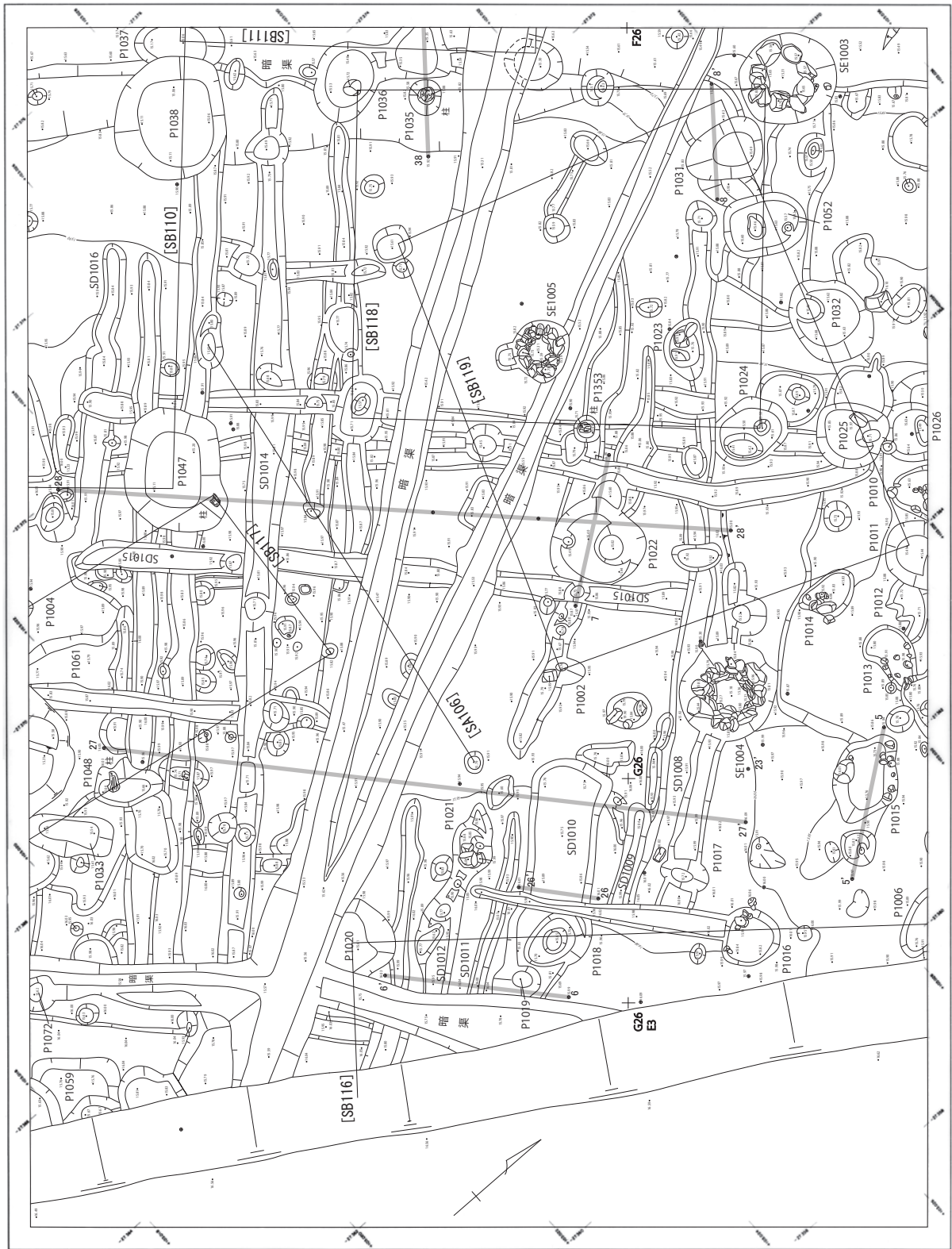


0 (1:80) 4m

第19図 G地区 第0・I面平面図11 (S=1/80)



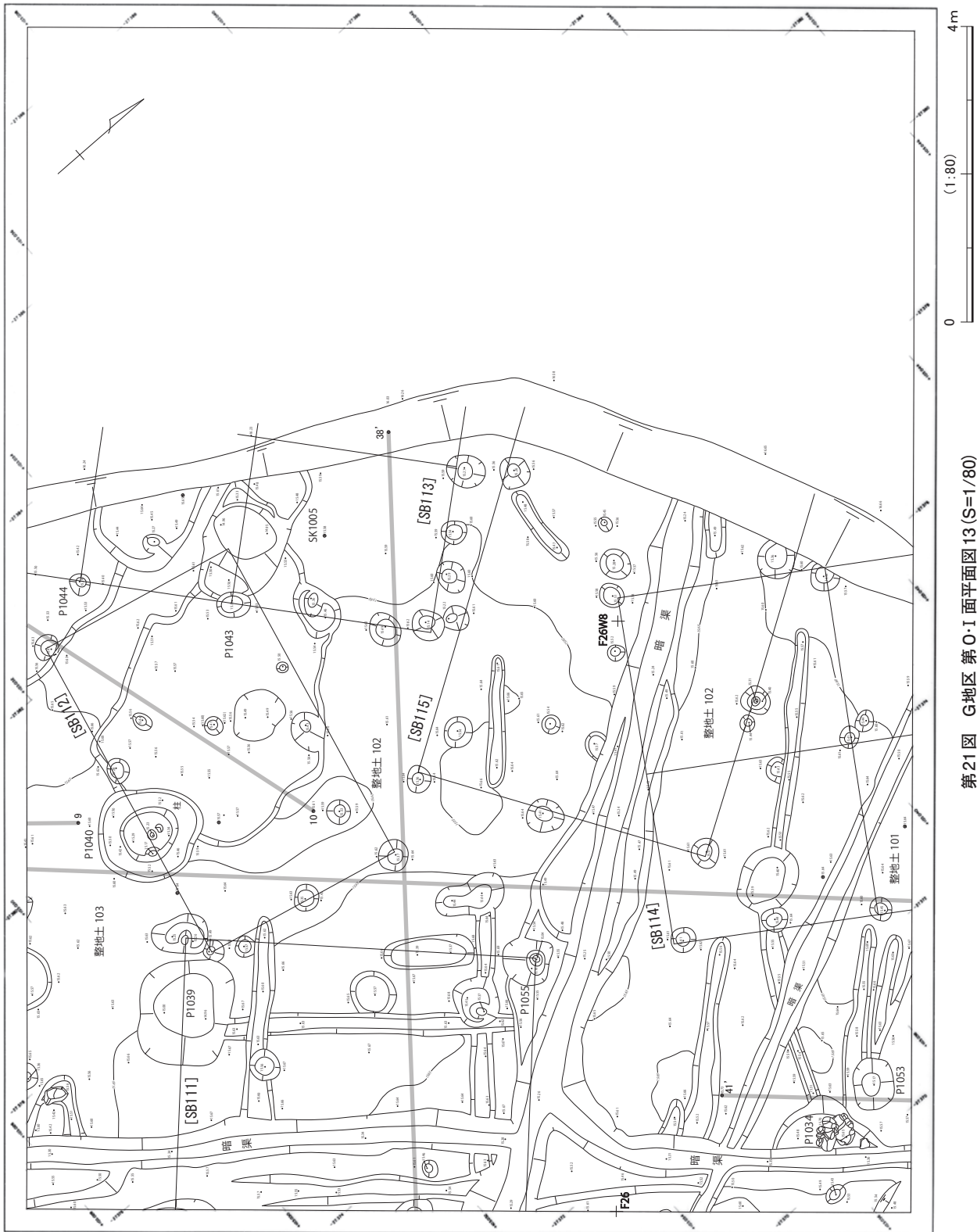
1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15



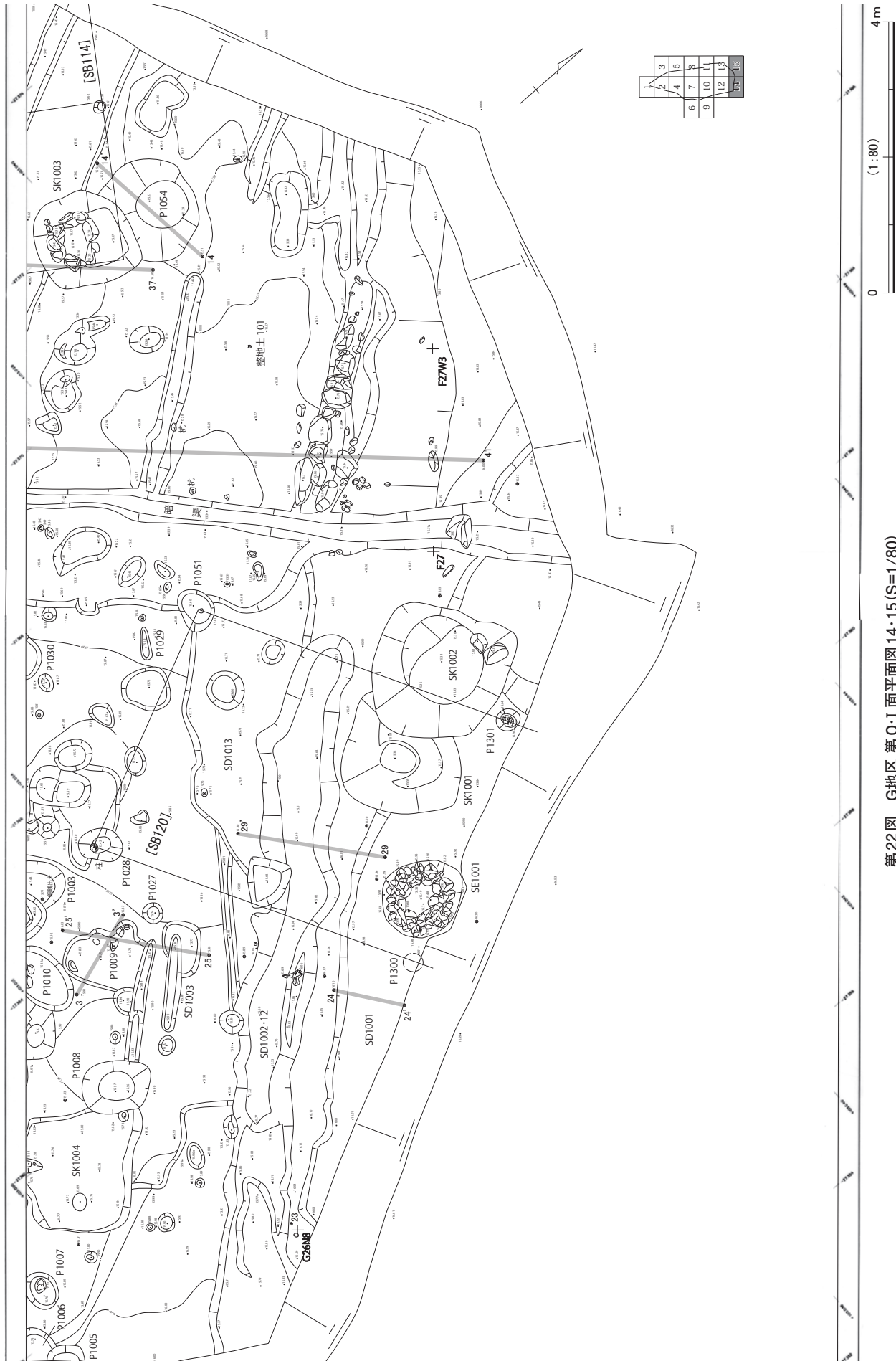
0 4m  
(1:80)

第20図 G地区 第O-I面平面図12 (S=1/80)

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15



第21図 G地区 第0・I面平面図13 (S=1/80)



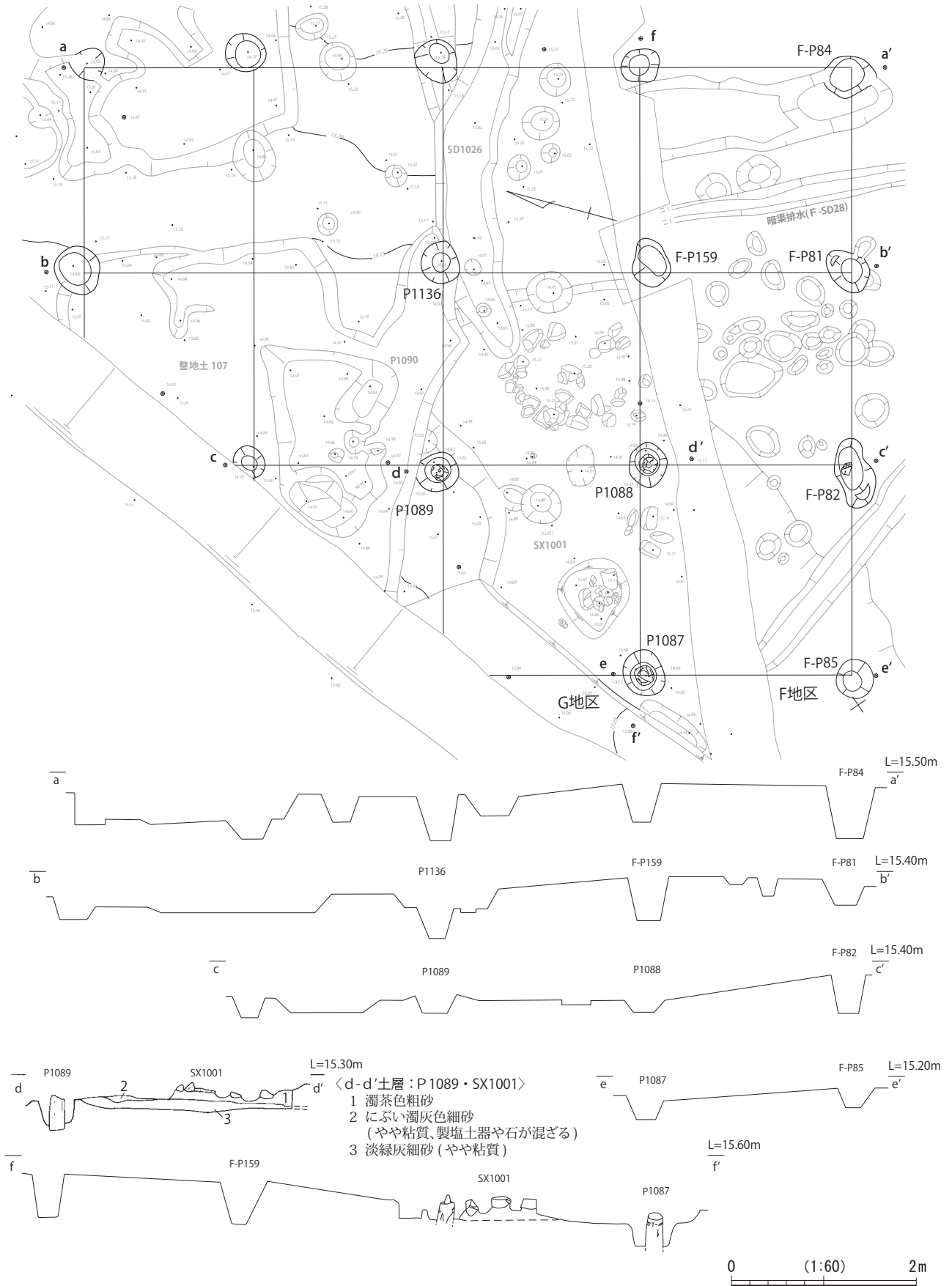
第22図 G地区 第O-1 面平面図14・15(S=1/80)

第2節 第0・I面の遺構と遺物

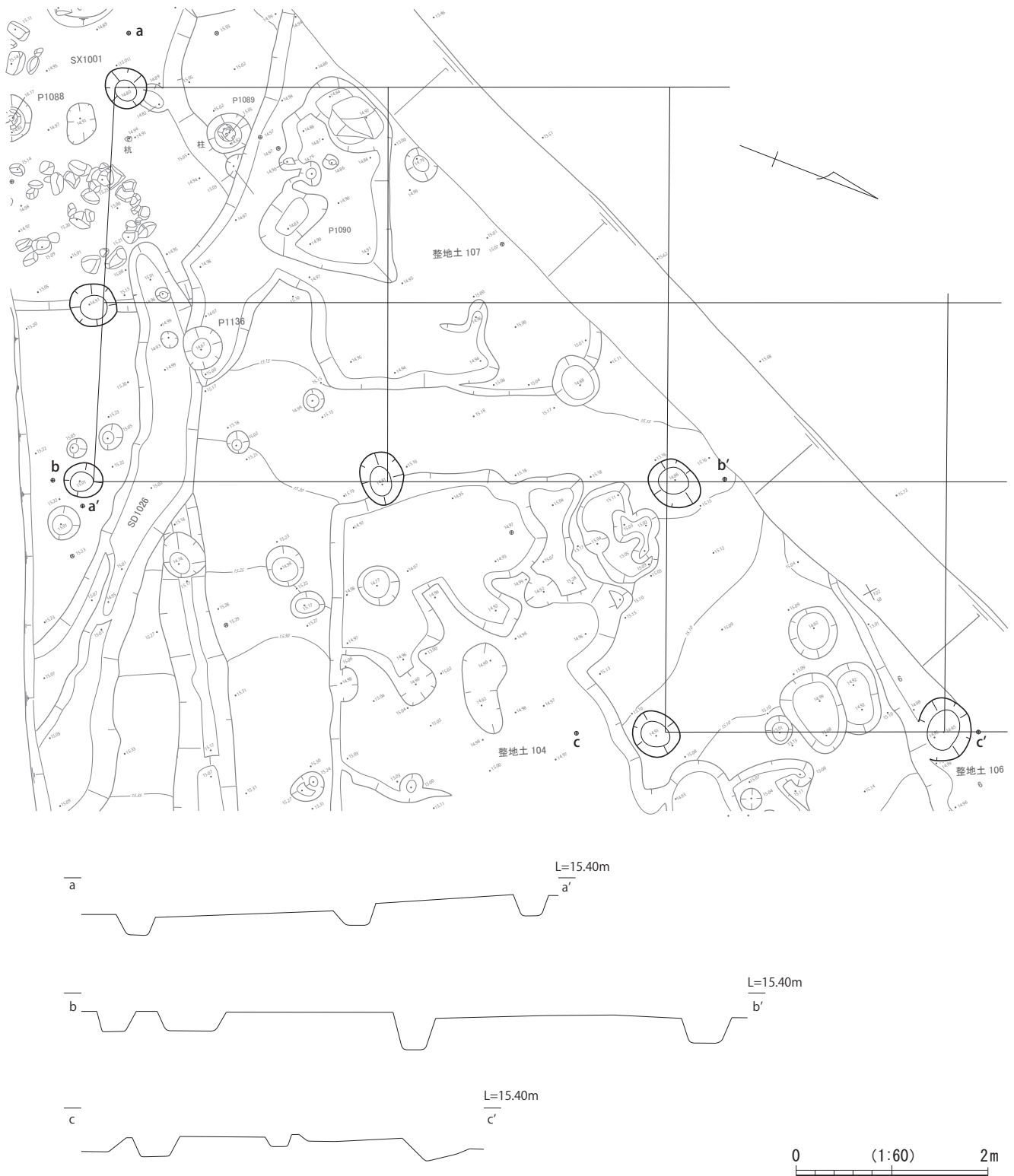
第8表 第0・I面SB・SA規模等一覧表

※ 柱間寸法は北端から南端柱穴、または東端から西端柱穴の順に計測。( )は推測値。

遺構名	図No	グリッド名	柱構造	柱配置	床面積 (m <sup>2</sup> )	桁行長 (m)	桁行柱間寸法 (m)	梁間長 (m)	梁間柱間寸法 (m)	主軸方位	柱穴の平面形態	柱根の有無	出土土器類	備考
F地区 SB104	23	F-19・20	総柱	4×3間	54.3	8.30	〔東桁〕 1.85+2.05+2.10+2.30	6.55	〔南梁〕 2.20+2.10+2.25	N-16.0°西	不整形円形	あり (4本)	土師器	F地区に延びる。規模は廂1間を含む。SX1001より新
SB101	24	E-20・21、 F-21	総柱	3～×2間	36.2～	8.85～	〔東桁〕 +2.90+2.90+3.05	4.10	〔南梁〕 1.85+1.25	N-21.0°西	不整形円形	なし	なし	東側桁行に廂(柱間寸法2.60m)
SB102	25	E・F-22	側柱	3×1間	12.3	6.30	〔東桁〕 (2.10)+(2.10)+2.10	1.95	〔南梁〕 1.95	N-22.0°西	不整形円形	なし	なし	柱穴に欠あり。西側桁行に廂(柱間寸法1.85m)
SB103	26	E・F-22	側柱	1×1間	5.2	2.40	〔北桁〕 2.40	2.15	〔西梁〕 2.15	N-15.0°西	不整形円形 略円形	あり (1本)	須恵器、 土師器	
SB104	27	E・F- 22・23	側柱	1×1間	12.0	3.95	〔北桁〕 3.95	3.05	〔東梁〕 3.05	N-69.0°西	不整形長楕円形	なし	須恵器、 土師器	P1005は関連か
SB105	28	F-22・23	側柱	3×1間	31.1	6.75	〔西桁〕 2.20+2.20+2.35	4.60	〔北梁〕 4.60	N-9.0°東	不整形楕円形、 不整形円形	あり (4本)	須恵器、 土師器	北側梁行に廂。SB106より新
SB106	29	F-23	側柱	2×2間	13.3	3.70	〔北東桁〕 2.00+1.70	3.60	〔北西梁〕 1.95+1.65	〔東桁〕 N-45.5°西 〔西桁〕 N-37.5°西	不整形楕円形、 不整形円形	あり (3本)	ロクロ土師 器小皿等	平面プランはゆがむ。SB105(P1121)より古
SB107	30	G-22・23	側柱	3～×3間	50.0～	7.05～	〔西桁〕 2.35+(2.35)+(2.35)+	7.10	〔北梁〕 2.10+(2.50)+(2.50)	N-5.5°西	不整形円形 不整形楕円形	あり (2本)	非ロクロ土 師器小皿 (14c)等	柱穴を欠き、建物でない可能性あり。P1109は攪乱される。SE1011より古
SB108	31	E-24、F- 23・24	側柱	2×1間	38.0	7.60	〔北西桁〕 3.80+3.80	5.00	〔南東梁〕 5.00	N-41.0°西	不整形円形、 不整形楕円形	なし	土師器	東側柱列掘方は小規模
SB109	32	E-24	総柱	2～×1～間	6.3～	3.70～	〔南西桁〕 1.90+1.80+	1.75～	〔北西梁〕 1.75+	N-50.0°東 (N-40.0°西)	略円形 不整形円形	なし	なし	
SB110	33～35	E・F- 24・25	側柱	2×1間	48.3	9.20	〔南西桁〕 4.60+4.60	5.25	〔北西梁〕 5.25	N-47.0°西	不整形円形、 不整形方形	なし	珠洲焼、鉄 軸瓶(16c -)等	掘方は大きい。SB111より新 SA103・105は関連施設
SB111	36	E・F-25	側柱	1×1間	17.9	4.70	〔北西桁〕 4.70	3.80	〔南西梁〕 4.70	N-47.5°西	不整形楕円形 不整形円形	なし	珠洲焼すり 鉢(14c)	SB110より古
SB112	37	E-25	側柱	3?×2?間	13.2	4.70	〔南桁〕 (1.40)+(1.40)+1.80	2.80	〔東梁〕 1.40+1.40	N-77.0°西 (N-13.0°東)	不整形円形 略円形	なし	なし	柱穴に欠あり。
SB113	37	E-25	総柱	3～×1～間	13.4～	6.40～	〔南東桁〕 2.70+2.05+(1.65)+	2.10～	〔北東梁〕 2.10+	N-41.0°西 (N-49.0°東)	不整形円形 略円形	なし	ロクロ土師 器小皿(12 c)	SK1005より新
SB114	38	E-26	総柱	2×2間	22.3	4.75	〔南東桁〕 1.95+2.80	4.70	〔南西梁〕 2.30+2.40	N-56.0°西	不整形円形 略円形	なし	なし	SK1003より古
SB115	39	E-25・26	側柱	2～×2間	17.2～	4.30～	〔西桁〕 2.15+2.15+	4.00	〔南梁〕 2.20+1.80	N-31.0°西	不整形円形	なし	なし	
SB116	40	G-25・26	側柱か	3×?間	-	8.35	〔北西桁〕 2.80+2.80+2.75	-	-	N-40.0°東	不整形円形 略方形	なし	珠洲焼甕等	建物でない可能性あり
SB117	41	F・G-25	側柱	2×1間	14.2	5.25	〔東桁〕 3.35+1.90 〔西桁〕 3.00+2.00	2.70	〔南梁〕 2.70 〔北梁〕 2.60	N-10.0°東	不整形楕円形 不整形円形	あり (4本)	須恵器、土 師器	平面プランはゆがむ
SB118	42	F-25・26	側柱	2×1間	23.7	5.45	〔北西桁〕 2.20+3.25	4.35	〔南西梁〕 4.35	N-43.0°東	不整形楕円形 不整形円形	あり (2本)	非ロクロ土 師器小皿 (14c)等	P1052も柱穴の可能性あり
SB119	43	F-25・26	側柱	2×2間	31.7	6.40	〔北桁〕 3.20+3.20 〔南桁〕 3.05+3.05	4.95	〔東梁〕 2.45+2.50 〔北梁〕 1.95+2.80	〔北桁〕 N-72.0°西 〔南桁〕 N-69.0°西	不整形円形 略方形	なし	須恵器、土 師器	平面プランはゆがむ
SB120	44	F-26・27	側柱	2?×1間	18.2～	4.80～	〔北桁〕 (2.40)+(2.40)+	3.80	〔西梁〕 3.80	N-61.5°東	不整形円形	あり (2本)	なし	建物でない可能性あり
SA101	45	F-22・23	-	3間	-	6.05	2.15+(1.95)+(1.95)	-	-	N-15.0°西	略円形	あり (3本)	なし	
SA102	45	F・G-22、 F-23	-	2間	-	6.80	(3.40)+(3.40)	-	-	N-17.5°西	略円形 略長方形	あり (2本)	須恵器、土 師器	
SA103	33	E・F-24	-	5間	-	13.50	2.57+2.70+2.75+ 2.30+3.00	-	-	N-47.0°西	略円形 不整形楕円形	なし	須恵器、土 師器	SB110南西側桁と並行
SA104	46	E-22・23	-	3間	-	7.75	2.25+2.30+2.30	-	-	N-57.0°東	不整形円形	なし	なし	
SA105	33	E-24・25	-	1間	-	1.85	1.85	-	-	N-36.0°東	不整形円形 略円形	あり (2本)	なし	SB110とほぼ並行。SE1002より新
SA106	41	F・G-25	-	3間	-	6.50	1.50+2.45+2.50	-	-	N-81.5°西	不整形円形 不整形楕円形	なし	なし	SB117北側に並行か



第23図 G地区 第0・I面F地区SB104平面図・土層断面図(S=1/60)



第24図 G地区 第0・I面SB101平面図・断面図(S=1/60)

**SB101**(遺構：第24図)

E・F-20・21区で検出した総柱構造の掘立柱建物で、調査区外西側に延びる。主軸方位はN-21° Wを示し、桁行3間以上(8.85m以上)×梁間2間(4.10m)、床面積36.2㎡以上で、東側桁行に廂が付すと考えられる。柱間寸法は、桁行が2.90～3.05m、梁間が1.85m・2.25m・廂2.60mであり、梁間の柱間寸法と柱筋の通りはやや乱れる。柱穴の平面形態は不整円形を基本とし、南西隅の柱穴が径42～44cm、

深さ25cm、廂南東端の柱穴が径42～46cm、深さ25cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土は濁灰褐～暗灰褐色砂質土である。遺構の切り合い関係は、SX1001より新しく、整地土106・107より古い。柱穴から遺物は出土していない。

#### SB102(遺構：第25図)

E・F-22区で検出した小規模な掘立柱建物で、柱穴の一部を欠き、西側桁行北隅に1間分の廂が付す。主軸方位はN-22° Wを示し、桁行3間(6.30m)×梁間1間(1.95m)、床面積12.3㎡を測る。柱間寸法は桁行が2.10m、梁間が1.95m・廂1.85mで、梁間の柱間寸法が若干狭く、柱筋の通りはやや乱れる。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、北東隅の柱穴が径44～48cm、深さ15cm、南西隅の柱穴が径16～18cm、深さ7cmを測る。柱根、柱痕跡とも残存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁灰褐～暗灰色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係は、廂北西隅柱穴がP1105より新しい。柱穴から出土遺物はない。

#### SB103(遺構：第26図、遺物：第62図)

E・F-22区で検出した1×1間の小規模な掘立柱建物である。主軸方位はN-15° Wを示し、桁行寸法2.40m、梁間寸法2.15m、床面積5.2㎡を測る。柱穴の平面形態は不整円形または略円形を呈し、P1115が径54～58cm、深さ44cm、南東隅の柱穴が径約36cm、深さ36cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁灰褐～暗灰色砂質土を基本とした柱抜取埋土である。P1115から第62図79の粗粒砂岩を用いた磨石が出土した。79は側面を敲打、両面を磨りに使用し、重さ936.9gを測る。他にP1115から第Ⅲ面以下に属する須恵器・土師器片10数点が出土した。

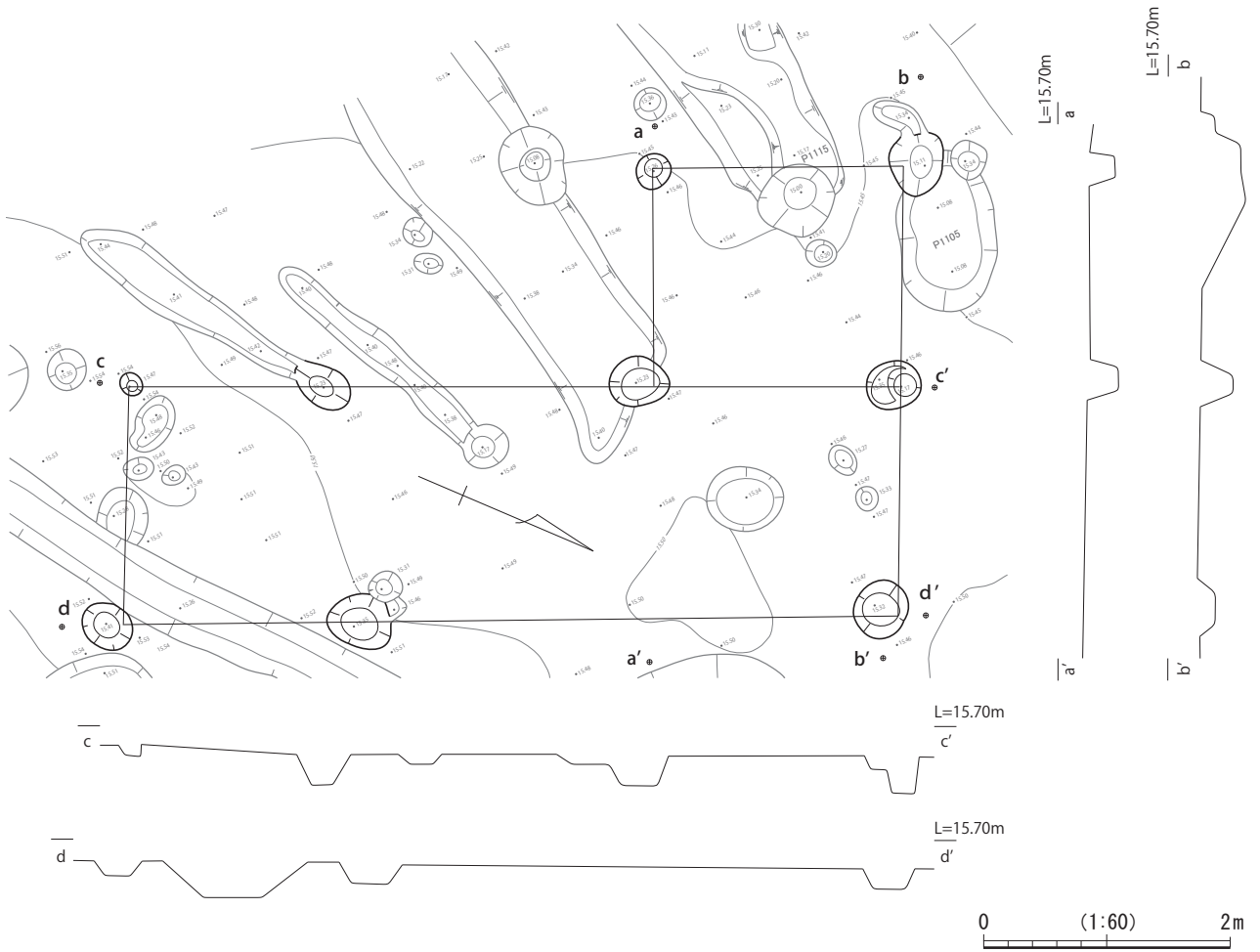
#### SB104(遺構：第27図)

E・F-22・23区において整理時に復元した1×1間の小規模な掘立柱建物で、桁行が調査区外西側に延びる可能性をもつ。主軸方位はN-69° Wを示し、桁行寸法3.95m、梁間寸法3.05m、床面積12.0㎡を測り、柱間寸法はかなり広く、床束が存在した可能性をもつ。柱穴の平面形態は、建物主軸方向を指向した不整長楕円形を呈するものが主体で、P1081が長軸130cm、短軸76cm、深さ53cm、P1108が長軸122cm、短軸74cm、深さ41cmと、SB101・102と比して、かなり大振りな掘方を呈する。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁褐色または青灰色を呈する砂質土で、柱抜取埋土と考えられる。遺物は、P1080・81から第Ⅲ面以下に属する須恵器・土師器細片約30点が出土したにとどまる。なお、建物主軸線上にP1005があり、SB104に関連した柱穴の可能性をもつ。

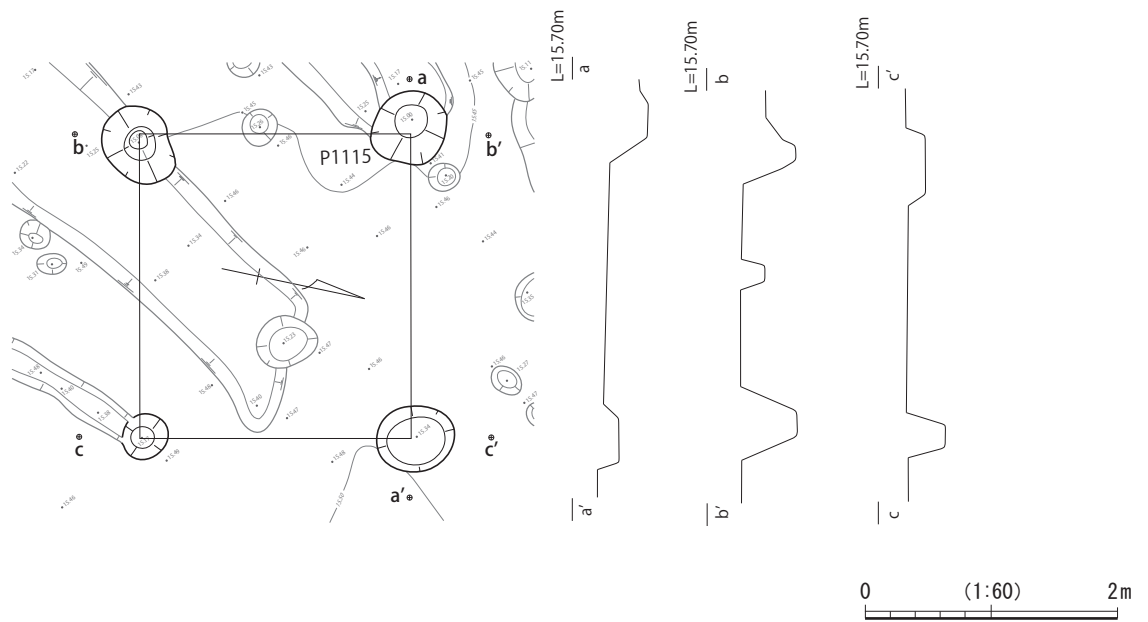
#### SB105(遺構：第28図、遺物：第47・48・62図)

F-22・23区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、北側梁間に廂(桁行寸法2.20m・2.60m)が付すと考えられる。主軸方位はN-9° Eを示し、桁行3間(6.75m)×梁間1間(4.40m・4.60m)、床面積31.1㎡を測る。桁行の柱間寸法は2.20～2.35mと、梁間寸法の約半分となり、梁間に床束が用いた可能性が高い。柱筋の通りは比較的よいものの、廂部分はいびつである。柱穴の平面形態は不整楕円形または不整円形を呈するものが主体で、P1091が径46～50cm、深さ38cmを、P1097が長軸82cm、短軸48cm、深さ36cmを、P1121が径56～60cm、深さ27cmを測る。柱根は、P1097・1195等5本が残存、いずれも径約25cmを測る丸柱で、ベース土に若干沈みこむ。柱穴覆土は濁灰褐～灰褐色砂質土とベース土の混合土を基本とし、遺構の切り合い関係は整地土105・SD1023より古く、SB106より新しい。

出土遺物のうち、第47図4～第48図9、第62図77を図化した。P1097出土の4は須恵器無台坏細片で、底部外面中央に記された墨書は判読できない。柱根は、腐食が著しいP1077出土の5を除き、残存長36～57cm、径約25cmを測る丸柱である。いずれも底面を平坦に加工しており、P1095出土の6上部には切断痕が認められる。樹種はマツ属複雑管束亜属(クロマツまたはアカマツ)である。P1091出土の須恵器無台坏第62図77は、底部外面に墨書され、その文字は「文」にみえる。他に各柱穴から古代

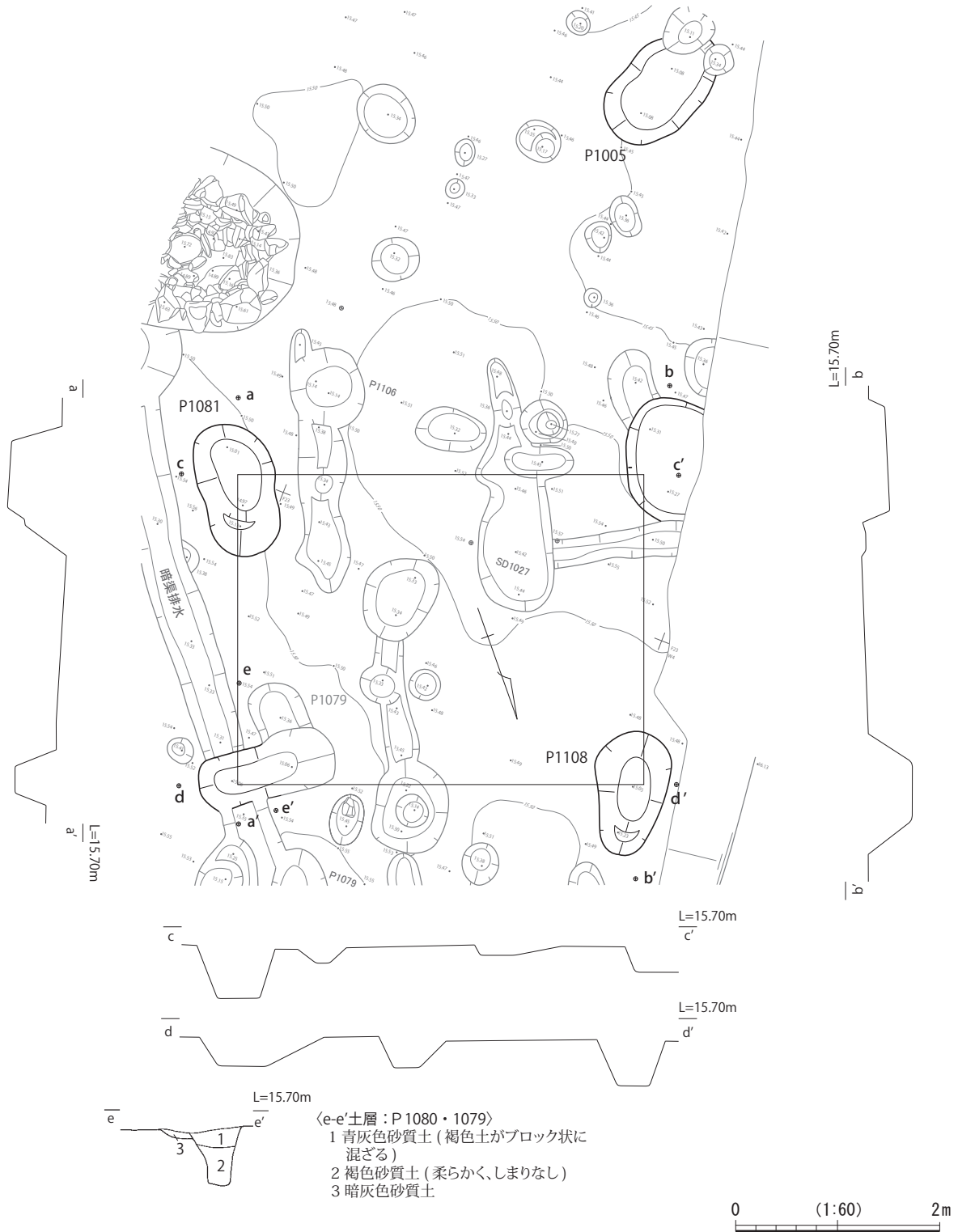


第25図 G地区 第0・I面SB102平面図・断面図(S=1/60)



第26図 G地区 第0・I面SB103平面図・断面図(S=1/60)



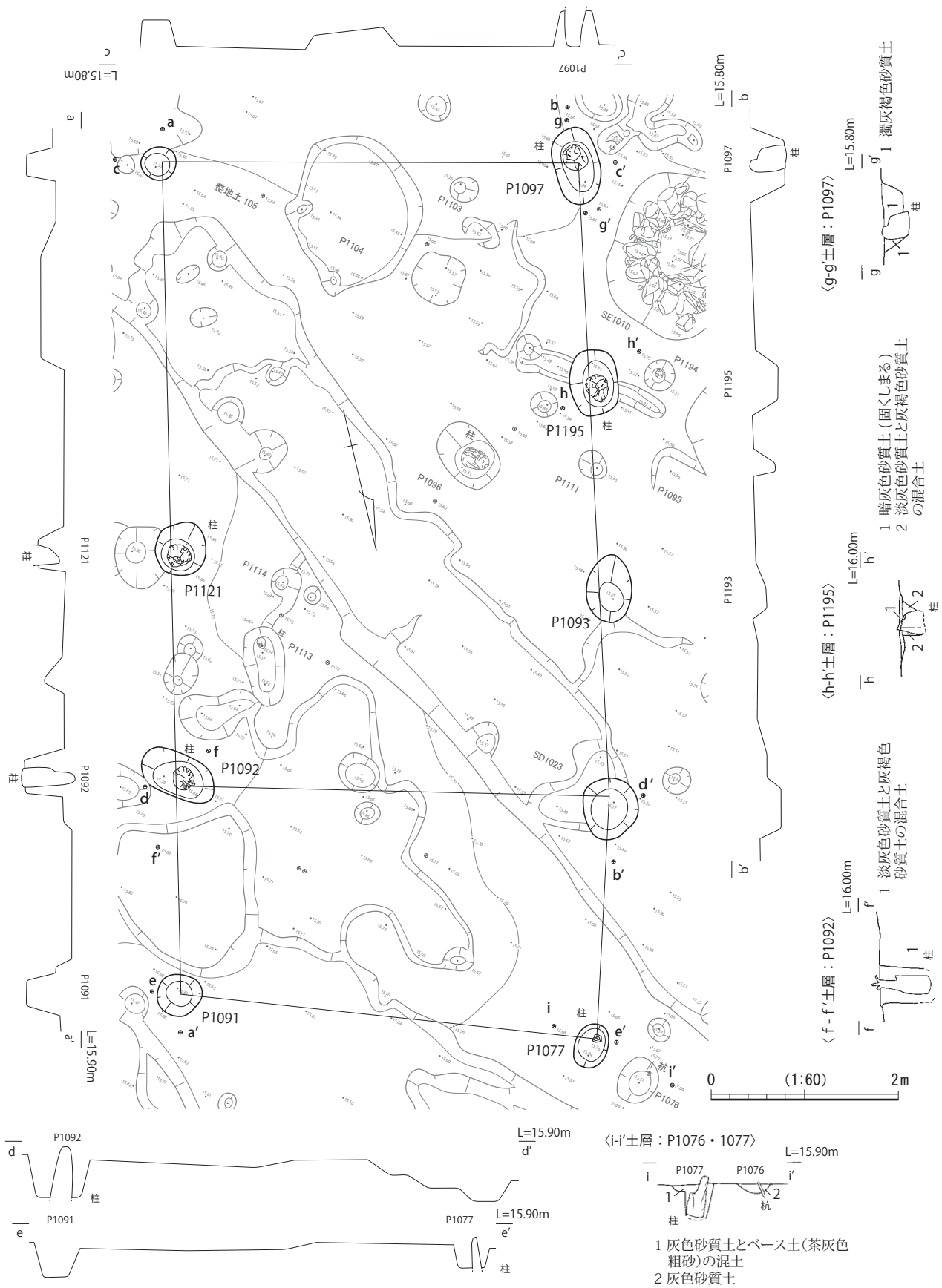


第27図 G地区 第0・I面SB104平面図・土層断面図(S=1/60)

に属する須恵器・土師器細片が少量出土した。

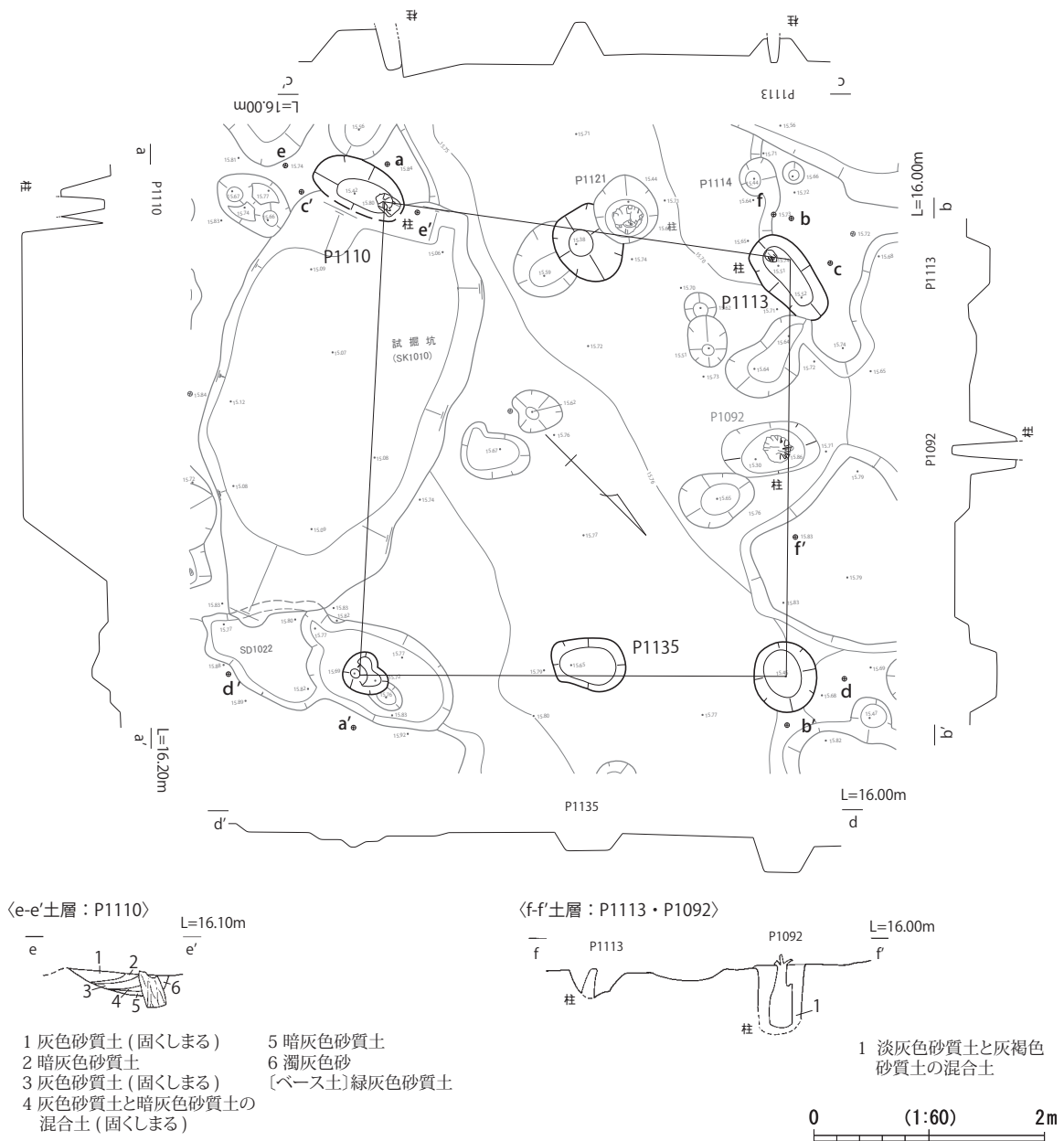
**SB106**(遺構：第29図、遺物：第48・72図)

F-23区で検出した側柱構造の掘立柱建物である。復元プランがやや歪むため、南隅柱をP1110ではなく、より北東側の試掘坑(SK1010)内に想定する復元案も考えられる。東桁の主軸方位はN-45.5° Wを示し、桁行2間(3.70m)×梁間2間(3.60m)、床面積13.3㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.70m・2.00m、



第28図 G地区 第0・I面SB105平面図・土層断面図(S=1/60)

梁間の柱間寸法は1.65m・1.95mで、柱間寸法に差異が認められる。柱穴の平面形態は不整楕円形または不整形円形を呈し、P1113が長軸84cm、短軸44cm、深さ21cm、P1135が長軸64cm、短軸46cm、深さ14cmを測る。柱根はP1092・1110・1113で残存し、径14～21cmを測る。柱穴覆土は、硬くしまった灰～暗灰色砂質土または灰色砂質土とベース土の混合土を基本とする。遺構の切り合い関係は、南西桁行中間の柱穴がSB105を構成するP1121より古い。遺物は、第48図10・13の柱根と第72図176のロクロ土師器小皿を図化した。P1110出土の芯持ち丸柱10は残存長45.5cm、径21.5cmを測り、底面を平坦に加工する。材は、マツ属複維管束亜属(クロマツまたはアカマツ)を用いる。P1113出土の13はクリ材を用いた丸柱で、P1110柱根に比して細い。P1110出土の176は口径8.3cm、器高1.9cmを測り、胎土は粉っぽい印象を受ける。他にP1110・35から第三面以下に属する須恵器・土師器細片が出土した。



第29図 G地区 第0・I面SB106平面図・土層断面面(S=1/60)

**SB107**(遺構：第30図、遺物：第72図)

G-22・23区に位置し、整理時に側柱構造の掘立柱建物を復元したが、建物とならない可能性を残す。主軸方位はN-5.5° Wを示し、桁行3間以上(7.05m～)×梁間3間(7.10m)、床面積14.1㎡以上を測る。桁行の柱間寸法は2.35m、梁間の柱間寸法は2.10～2.50mで、柱筋は乱れる。柱穴の平面形態は不整円形または不整楕円形を呈するものが主体で、P1109は後世の攪乱を受ける。P1086が長軸110cm、短軸80cm、深さ25cmを、P1353が径64～88cm、深さ25cmを測る。また、P1123・1353で柱根の樹皮のみが残存し、その柱径は約15cmに復元できる。柱穴覆土は暗灰色砂質土を基本とし、遺構の切り合い関係はSB107よりSE1011が新しい。出土遺物のうち、P1086出土の第72図177の非ロクロ土師器小皿片を図化した。177は体部中程をヨコナデで屈曲させ、14世紀後半に位置付けられる。他にP1086・1128から古代の須恵器・土師器片約10点が出土した。

**SB108**(遺構：第31図)

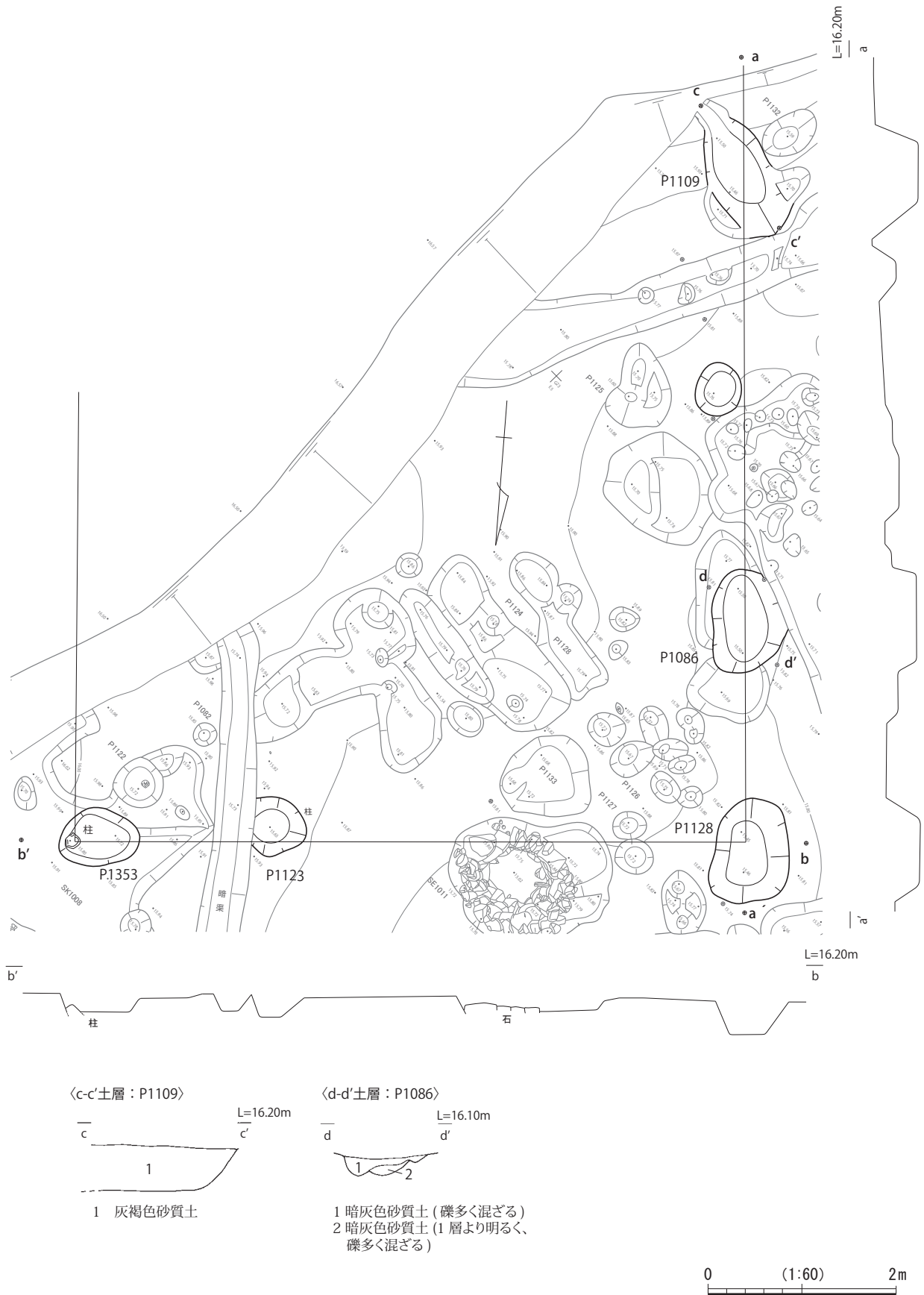
E・F-23・24区で復元した側柱構造の掘立柱建物である。主軸方位はN-41° Wを示し、桁行2間(7.60m)×梁間1間(5.00m)、床面積38.0㎡を測る。桁行の柱間寸法は3.80m等間で、桁行と梁間の柱間寸法に大きな差異をもつ。柱穴の平面形態は、不整円形または不整楕円形を呈するものが多く、規模は整地土103の削平を受けた北西側桁行が東側桁列より小振りとなる。SK1012が径105～115cm、深さ40cm、北西隅柱穴が径約20cm、深さ15cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土はSK1012が濁茶灰色砂質土と灰色砂質土が層状堆積、その他は暗灰褐～灰色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係は整地土103より古く、遺物はSK1012から古代の非ロクロ土師器甕片1点が出土したにとどまる。

**SB109**(遺構：第32図)

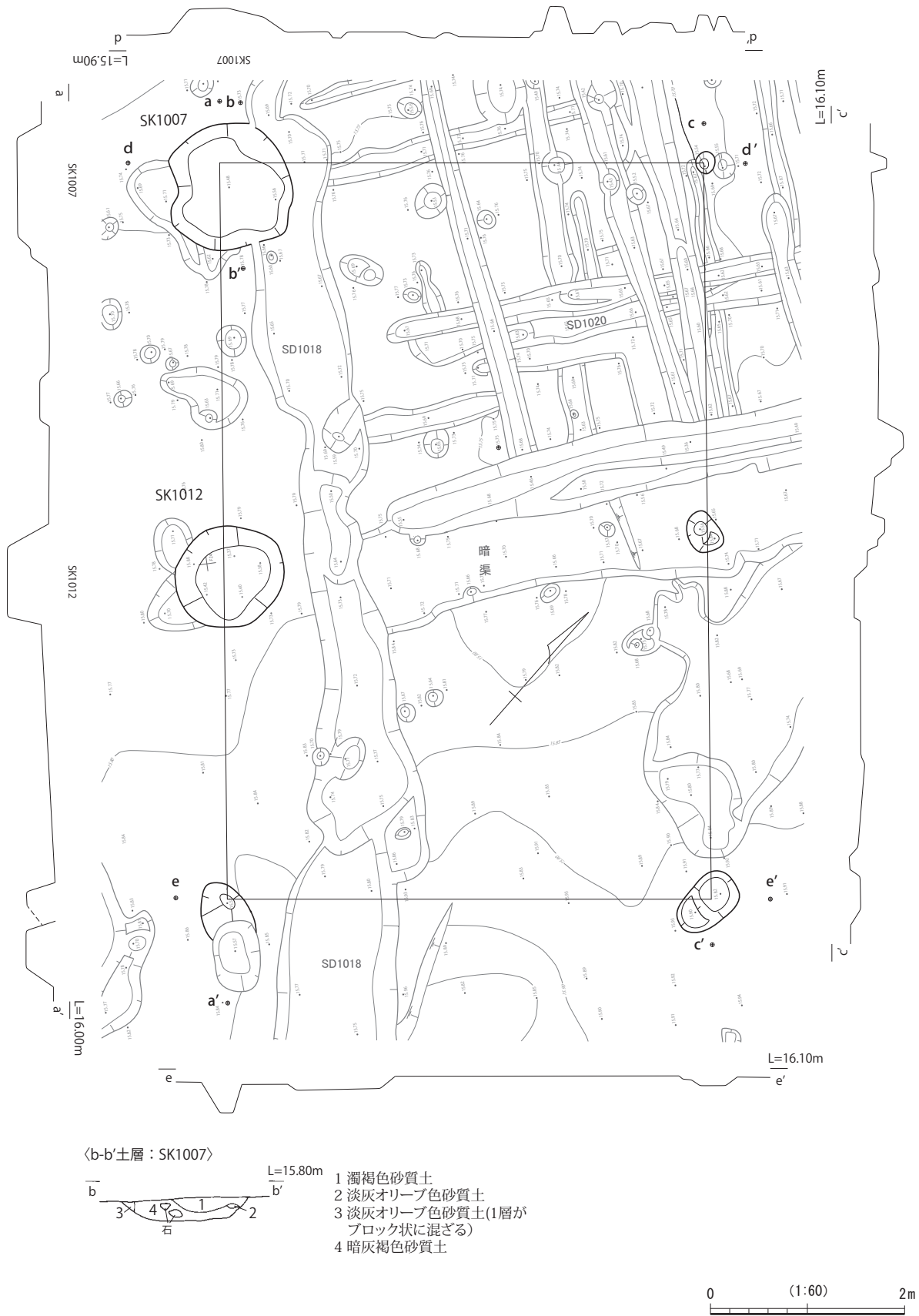
E-24区の整地土103除去後に検出した総柱構造と考えられる掘立柱建物で、調査区外西側に延びる。主軸方位はN-50° Eを示し、SB113と近似する。桁行2間以上(3.7m～)×梁間1間以上(1.75m～)を測る。桁行の柱間寸法は1.80m、1.90m、梁間の柱間寸法は1.75mで、桁行と梁間の柱間寸法に大きな差異は認められず、柱筋の通りはよいものと考えられる。柱穴の平面形態は略円形または不整円形を呈し、径28～52cm、深さ21～28cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土は濁褐～暗灰色砂質土を基本とする。柱穴から遺物は出土していない。

**SB110・SA103・105**(遺構：第33～35図、遺物：第48・50・72図)

E・F-24・25区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、検出した建物の中で最も規模が大きい。南西側桁行に近接してSA103が、北西側梁間と並行してSA105が位置する。SB110の主軸方位はN-47° Wを示し、桁行2間(9.20m)×梁間1間(5.25m)、床面積48.3㎡を測る。また、桁行の柱間寸法は4.60m等間で、特定はできなかったが梁間を含めて床束が存在した可能性をもつ。柱穴の平面形態は不整円形または不整隅丸方形を呈し、長軸140～170cm、短軸120～150cm、深さ80～90cmを測る。柱根はP1045で柱表皮残欠が出土しており、P1042断面図の柱痕跡(第35図第2層)から径16cm程度の柱が建てられたと推定する。覆土は、柱掘方埋土と柱抜取埋土が観察でき、第34図P1039では第1～5層が柱抜取埋土、第6・7層が柱掘方埋土、P1038では第9・10層が柱抜取埋土、第11層が柱掘方埋土、第35図P1057では第4～8層が柱抜取埋土、第9・10層が柱掘方埋土となる。柱掘方埋土は、濁暗灰色や淡灰色を呈する粗砂・砂質土に径30cm以下の自然石を混ぜることを基本とし、P1042・57のように底面や側面に自然石を配した根固め作業も確認できる。柱抜取埋土は、濁暗灰～灰色または茶褐色を呈する砂質土とベース土に自然石の混合土を基本に、沈降を防ぐ目的で黄色粘土を混ぜた土(P1039第4層、P1038第9層、P1057第8層)を定量用いる。遺構の切り合い関係は、SB110を構成するP1038が、SB111を構成するP1037より後出する。



第30図 G地区 第0・I面SB107平面図・土層断面図 (S=1/60)



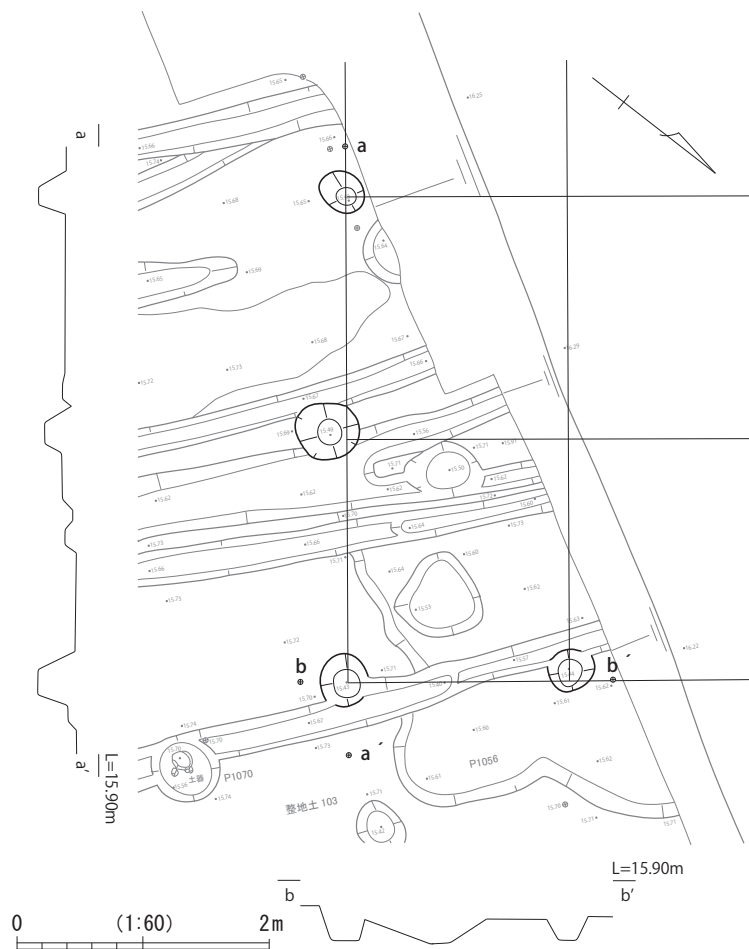
第31図 G地区 第0・I面SB108平面図・土層断面図 (S=1/60)

出土遺物のうち、P1045出土の第Ⅲ面以下に属する須恵器(第48図11・12)と、P1038出土の非口クロ土師器小皿(第72図178)を図化した。坏蓋11は口径18.5cmを測り、天井部内面は使用に伴い磨耗する。厚手の瓶12の内面には黒色の付着物が認められる。小皿178の体部は内湾しながら立ち上がり、16世紀後半頃に位置付けられよう。また、中世以降の遺物として、P1038から珠洲焼と産地不明のすり鉢片が各1点、P1039から珠洲焼甕胴部片1点、P1042から珠洲焼甕胴部片、16世紀中頃以降の鉄釉陶器瓶片が各1点、P1045から15世紀代の白磁坏片1点が出土しており、いずれも細片のため建物の所属時期を示すか不明である。なお、北西側梁間に近いP1069はSB110に関連をもつ柱穴の可能性をもち、第48図14の柱根を図示した。マツ属複維管束亜属(クロマツまたはアカマツ)を用いた丸柱14は径15.5cmを測り、底面を3方向から尖らせ気味に加工する。

SA103は、SB110南西側桁行に約85cm離れて並行する。5間(13.50m)を復元しており、柱間寸法は2.57～3.00mと不均等である。柱穴の平面形態は略円形または不整楕円形を呈し、北東隅柱穴が長軸84cm、短軸48cm、深さ20cmを、P1058が径約56cm、深さ23cmを測る。柱根は出土していないが、北東隅柱穴とP1058で径約8cmの柱痕跡が残る。覆土はベース土が混ざる濁褐色砂質土を基本とする。P1058から第Ⅲ面以下の須恵器・土師器片数点が出土した。SA105は、SB110北西側梁間に約2m離れて並行する。柱根が残る1間分(柱間寸法1.85m)を復元したが、P1040も一体をなす可能性を残す。柱穴の平面形態は略円形または不整形円形を呈し、P1041が径約70cm、深さ23cmを、P1070が径約50cm、深さ20cmを測る。覆土は濁褐～灰色砂質土とベース土の混合土であり、遺構の切り合い関係はSE1002より新しい。柱穴より土器類は出土せず、第50図26・27の柱根を図化した。いずれも径約9cmを測り、底面を2方向から杭状に尖らせる。26はスギ材、27はクリ材である。

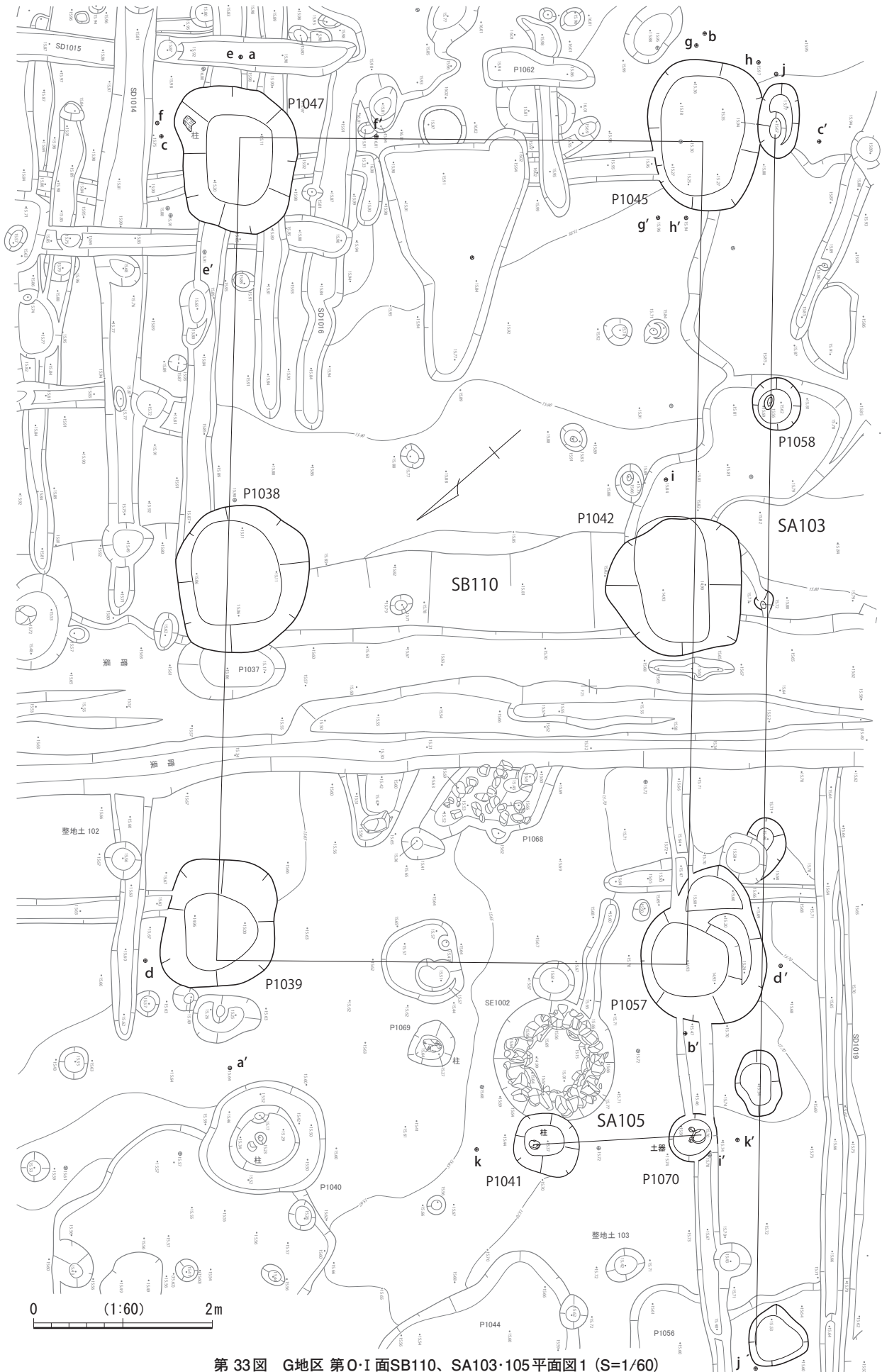
**SB111(遺構：第36図)**

E・F-25区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、主軸方位はN47.5°Wを示す。桁行1間(4.70m)×梁間1間(3.80m)、床面積17.9㎡を測り、柱間寸法が長いことから床束を用いたと考えられる。柱穴の平面形態は不整形円形または不整楕円形を呈し、P1037が長軸122cm、短軸70cm、深さ53cmを、P1055が径約60cm、深さ40cmを測る。柱根は残存しないが、P1055等で径約10cmの柱痕跡が確認できる。柱穴覆土は濁暗灰褐～灰色砂質土とベース土の混合土で、遺構の切り合い関係はSB110より古い。遺物は、P1055から14世紀後半代の珠洲焼すり鉢片1点が出土したが、細片のため建物の所属時期を示すか不明である。



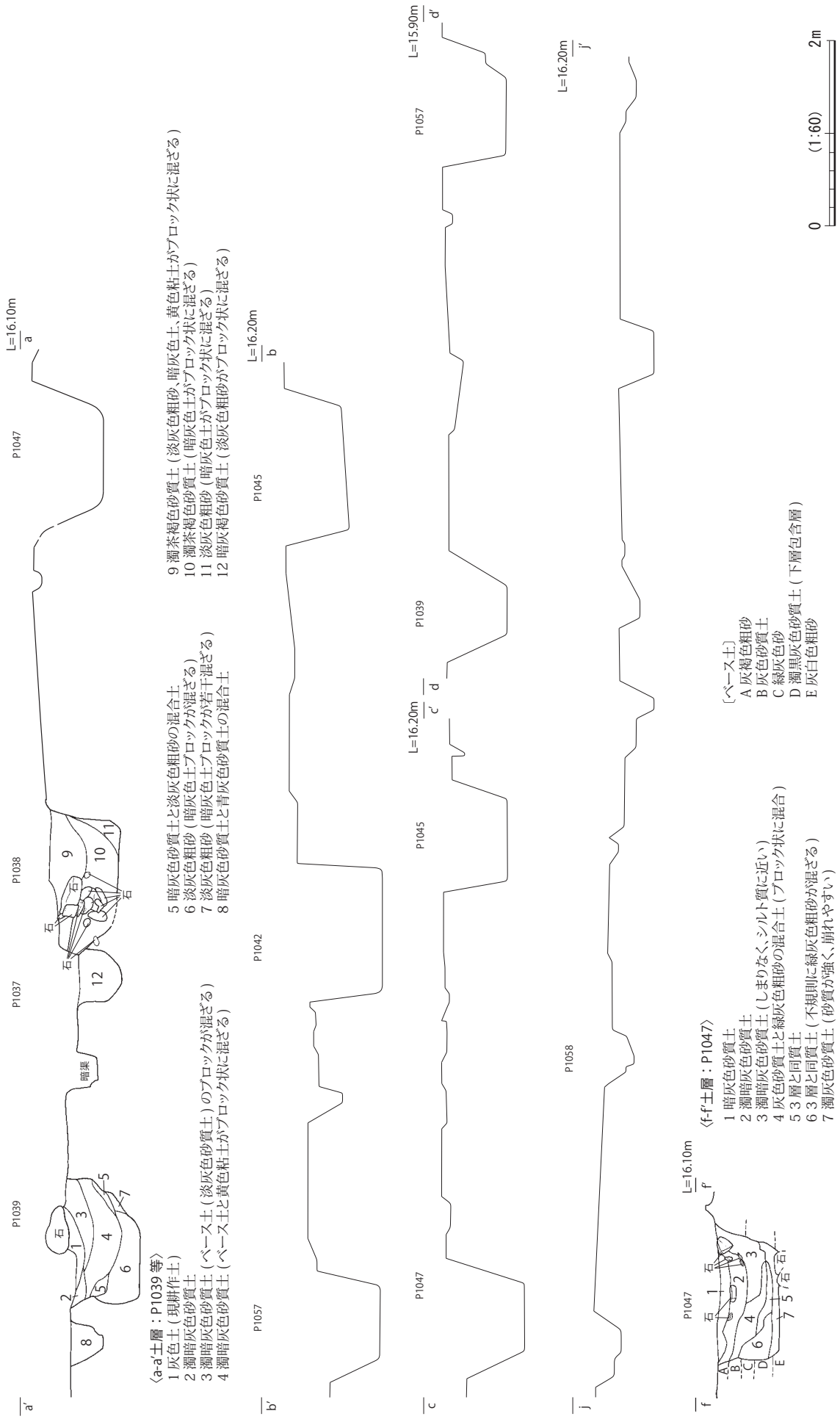
第32図 G地区 第0・I面SB109平面図・断面図(S=1/60)

第2節 第0・I面の遺構と遺物

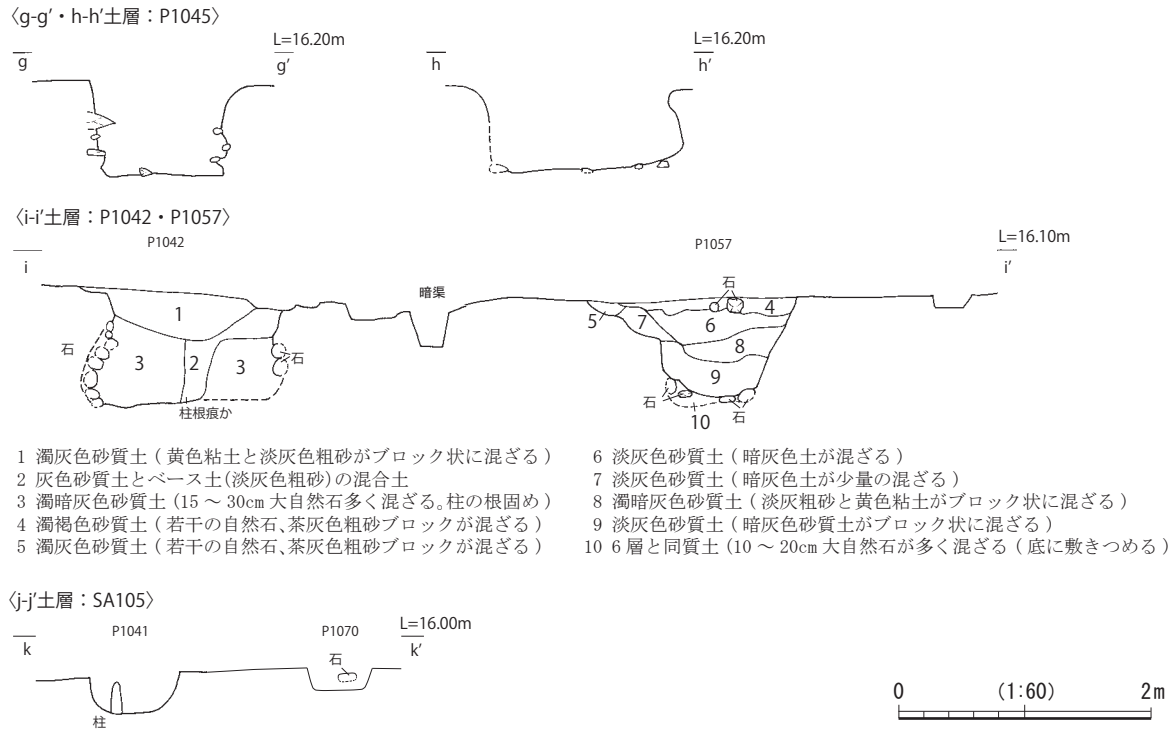


第33図 G地区 第0・I面SB110、SA103・105平面図1 (S=1/60)





第34図 G地区 第0・I面SB110、SA103土層断面図1 (S=1/60)



第35図 G地区 第0・I面SB110、SA105土層断面図(S=1/60)

**SB112**(遺構：第37図)

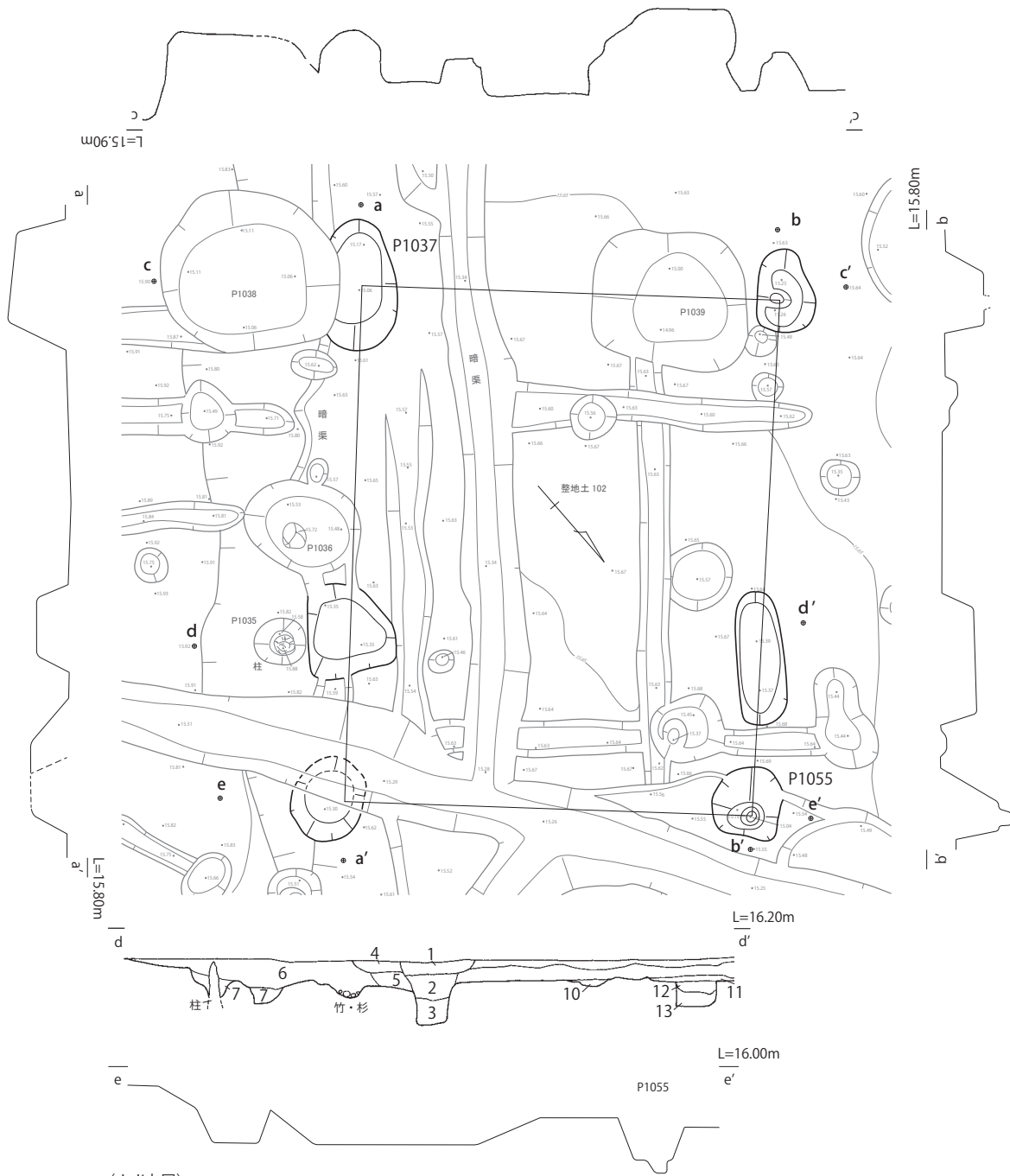
E-25区の整地土103除去後に検出した側柱構造の掘立柱建物で、柱穴に複数の抜けがあるため建物でない可能性を残す。主軸方位はN-77° Wを示し、桁行3間(4.70m)×梁間2間(2.80m)、床面積13.2㎡を測る。柱間寸法は、桁行が1.40～1.80m、梁間が1.40m等間であり、柱筋の通りは若干乱れる。柱穴の平面形態は略円形または不整円形を呈し、径16～40cm、深さ10～28cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土は暗灰～暗灰褐色砂質土である。SK1005との切り合いは不明で、出土遺物はない。

**SB113**(遺構：第37図)

E-25区の整地土103除去後に検出した総柱構造と考えられる掘立柱建物で、調査区外西側に延びる。主軸方位はN-41° Wを示し、SB109と近似する。桁行3間以上(6.40m～)×梁間1間以上(2.10m～)、床面積13.4㎡以上を測る。桁行の柱間寸法は1.65～2.70mと不均等であり、南西端の柱穴が建物を構成しない可能性を残す。柱穴の平面形態は略円形または不整円形を呈し、径28～52cm、深さ28～48cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁暗灰～暗灰褐色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係では、P1043がSK1005より新しくなる。遺物は、P1043から12世紀代のロクロ土師器皿細片2点が出土した。

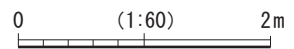
**SB114**(遺構：第38図)

E-26区の整地土101・102除去後に検出した総柱構造の掘立柱建物である。主軸方位はN-56° Wを示し、桁行2間(4.75m)×梁間2間(4.70m)、床面積22.3㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.95m・2.80m、梁間の柱間寸法は2.30m・2.40mで、平面プランは若干乱れる。柱穴の平面形態は略円形または不整円形を呈し、径18～38cm、深さ7～21cmと、耕地整地の削平度合いで差異を示す。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁黒灰色～灰色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係はSK1003(SE1013)より古く、出土遺物はない。



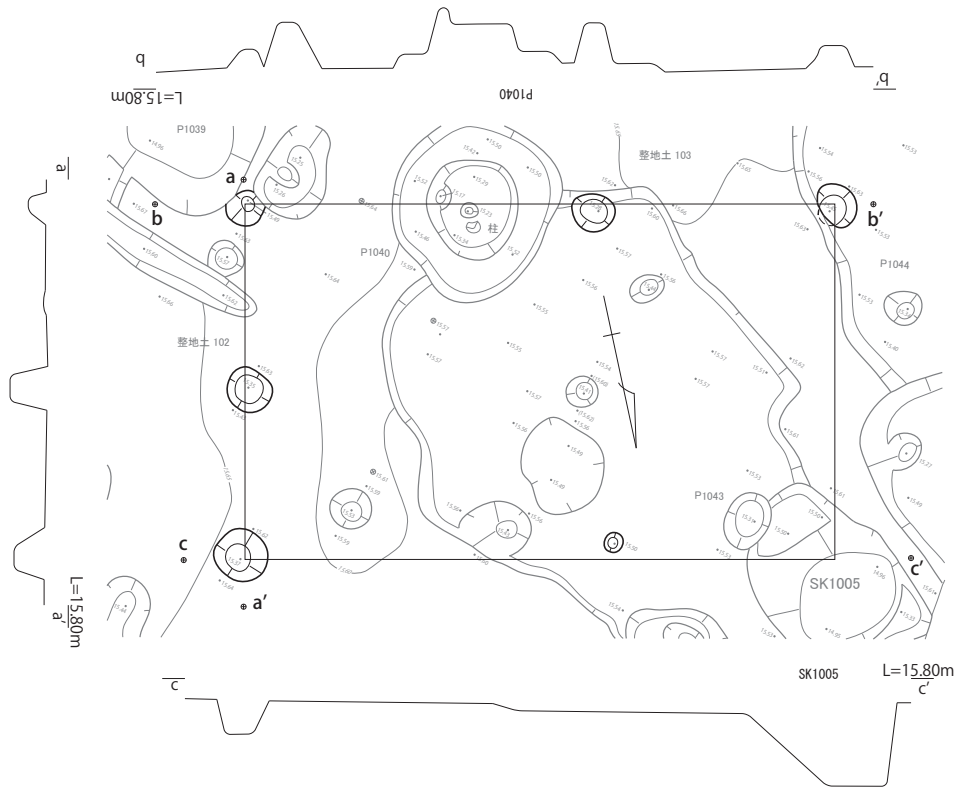
〈d-d'土層〉

- |                              |                          |
|------------------------------|--------------------------|
| 1 濁褐色土 (淡灰色粗砂が混ざる)           | 7 暗褐色砂質土と淡灰色粗砂の混合土       |
| 2 淡灰色粗砂 (褐色土がブロック状に混ざる)      | 8 淡灰色砂質土と暗茶褐色砂質土の混合土     |
| 3 暗灰褐色砂質土 (しまりない)            | 9 暗灰褐色砂質土 (層状に淡灰色粗砂が混ざる) |
| 4 濁褐色土                       | 10 暗灰褐色砂質土               |
| 5 濁灰色砂質土                     | 11 青灰色砂質土と淡灰色粗砂の混合土      |
| 6 濁暗茶褐色砂質土 (淡灰色粗砂がブロック状に混ざる) |                          |

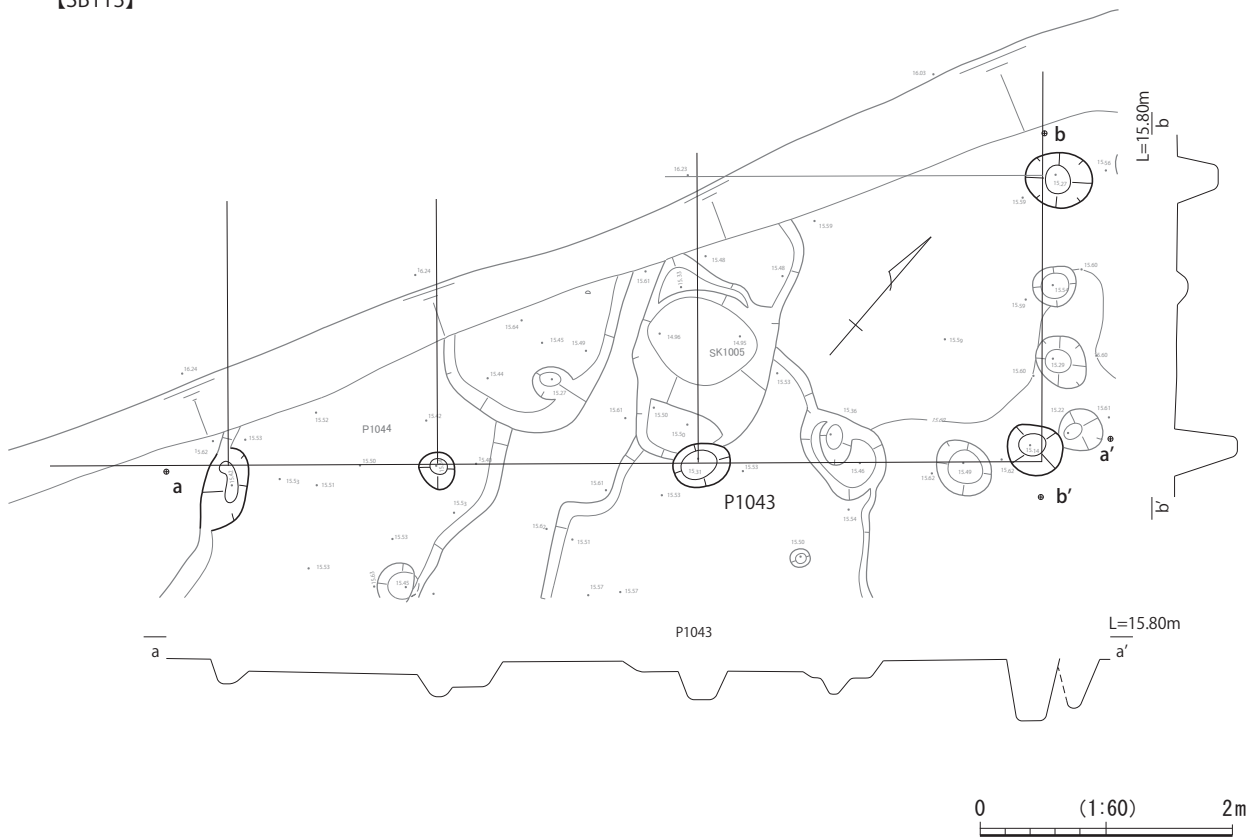


第36図 G地区 第0・I面SB111平面図・土層断面図(S=1/60)

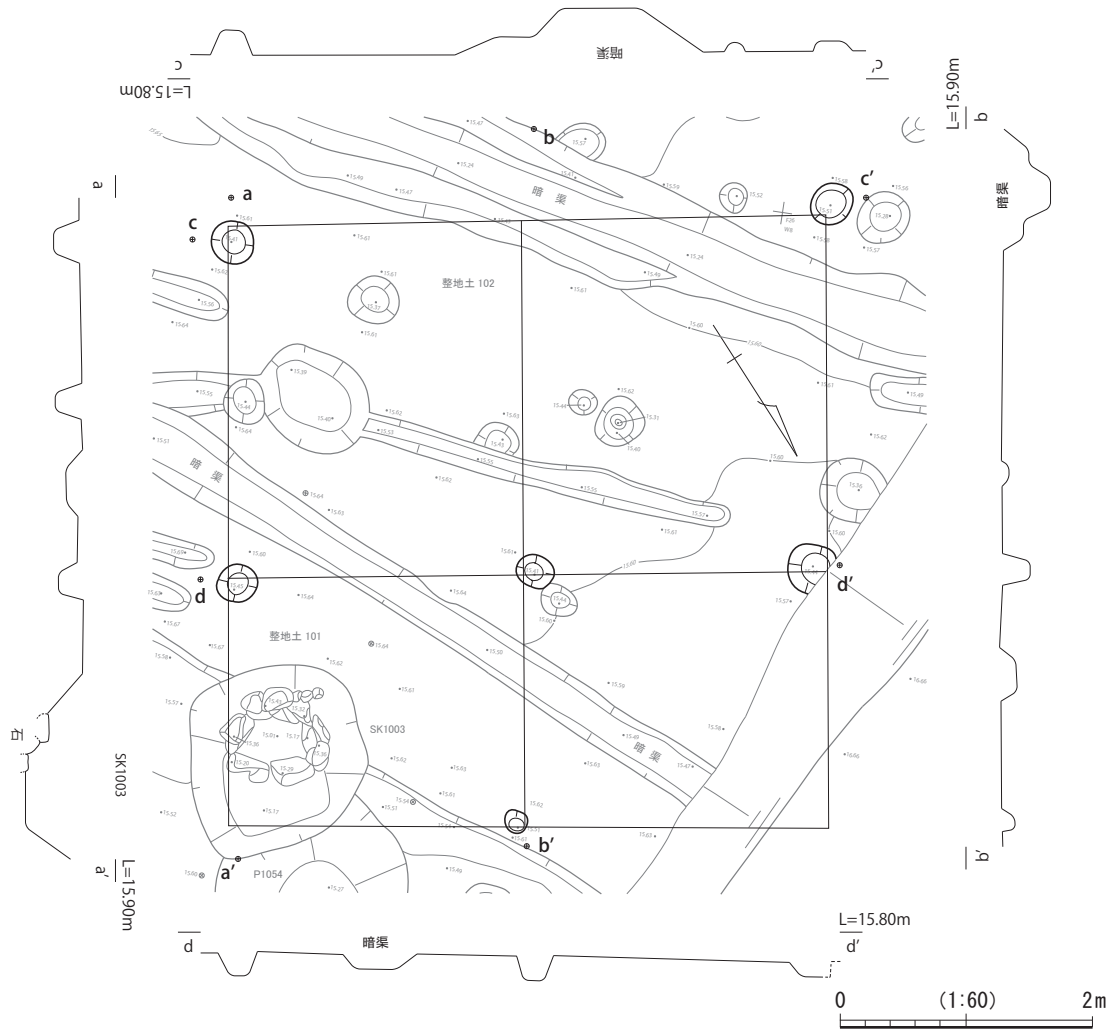
【SB112】



【SB113】



第37図 G地区 第0・I面SB112・113平面図・断面図(S=1/60)



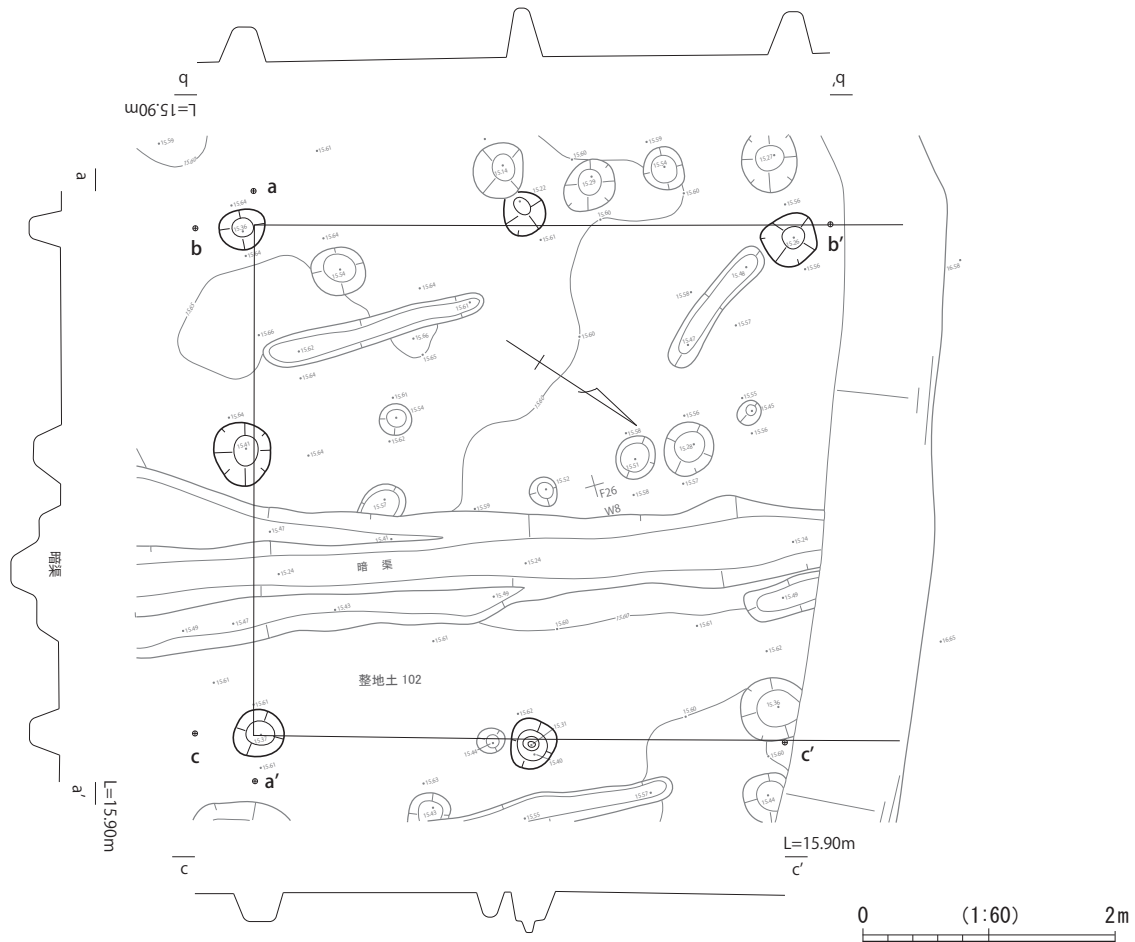
第38図 G地区 第0・I面SB114平面図・断面図(S=1/60)

**SB115**(遺構：第39図)

E-25・26区で整地土102・103除去後に検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外北西側に延びる。主軸方位はN-31° Wを示し、桁行2間以上(4.30m～)×梁間2間(4.00m)、床面積17.2㎡以上を測る。柱間寸法は、桁行が2.15m等間、梁間が1.80m・2.20mで、桁行と梁間の柱間寸法に大きな寸法差は認められず、柱筋の通りは比較的よい。柱穴の平面形態は不整円形を呈するものが主体で、径32～50cm、深さ22～32cmを測り、柱根は遺存しないものの柱痕跡から径約10cmの円柱が推定できる。柱穴覆土は暗灰色砂質土とベース土の混合土である。他遺構の切り合い関係と出土遺物はない。

**SB116**(遺構：第40図)

G-25・26区に位置し、調査区外東側に延びる掘立柱建物を想定した。主軸方位はN-31° Wを示し、桁行3間(8.35m)、桁行の柱間寸法2.75～2.80mを測る。柱穴の平面形態は略方形または不整円形を呈し、P1005が一辺48～56cm、深さ34cmを、P1018が径72～88cm、深さ34cmを測る。柱根は遺存しないものの、柱痕跡から径30cm程度の円柱が推定できる。柱穴覆土は、濁暗灰～灰色砂質土を基本とし、P1016は円石が多く混ざる濁茶褐色細砂質土となる。遺構の切り合い関係では、P1018がSD1010より古い。P1005・18・20から第三面以下に属する須恵器・土師器片の他、P1018から珠洲焼甕胴部片1点が出土した。



第39図 G地区 第0・I面SB115平面図・断面図(S=1/60)

**SB117・SA106**(遺構：第41図、遺物：第49図)

SB117は、F・G-25区で復元した小規模な掘立柱建物で、平面プランは歪みをもつ。主軸方位はN-10° Eを示し、桁行2間(5.25 m)×梁間1間(2.70 m)、床面積14.2㎡を測る。桁行の柱間寸法は、北側が3.00～3.35 m、南側が1.90～2.00 mと、柱間寸法に大きな差異をもつ。柱穴の平面形態は不整楕円形または不整円形を呈し、P1004が径24～28 cm、深さ8 cmを、P1048が長軸92 cm、短軸50 cm、深さ32 cmを測る。柱根はP1004・46・48で残存した他、P1004から腐朽した柱根の残欠が、SB110を構成するP1047と重複する柱穴から柱残欠と考えられるマツ様の樹皮片がそれぞれ出土した。柱穴覆土は、濁暗灰～灰色砂質土を基本とする。SB117北西隅柱穴と、SB110を構成するP1047との切り合い関係は不明である。遺物は、第49図15・16の柱根を図化した。隅柱であるP1046出土の15は、クリ材を用いた芯持ち丸柱で径21～25 cmを測る。平坦に加工された底面には砂が圧着する。P1048出土の16はコナラ節の芯持ち材を用いた丸柱で、径約13 cmと一回り細くなる。他にP1004・43・48から古代の須恵器・土師器片が出土した。

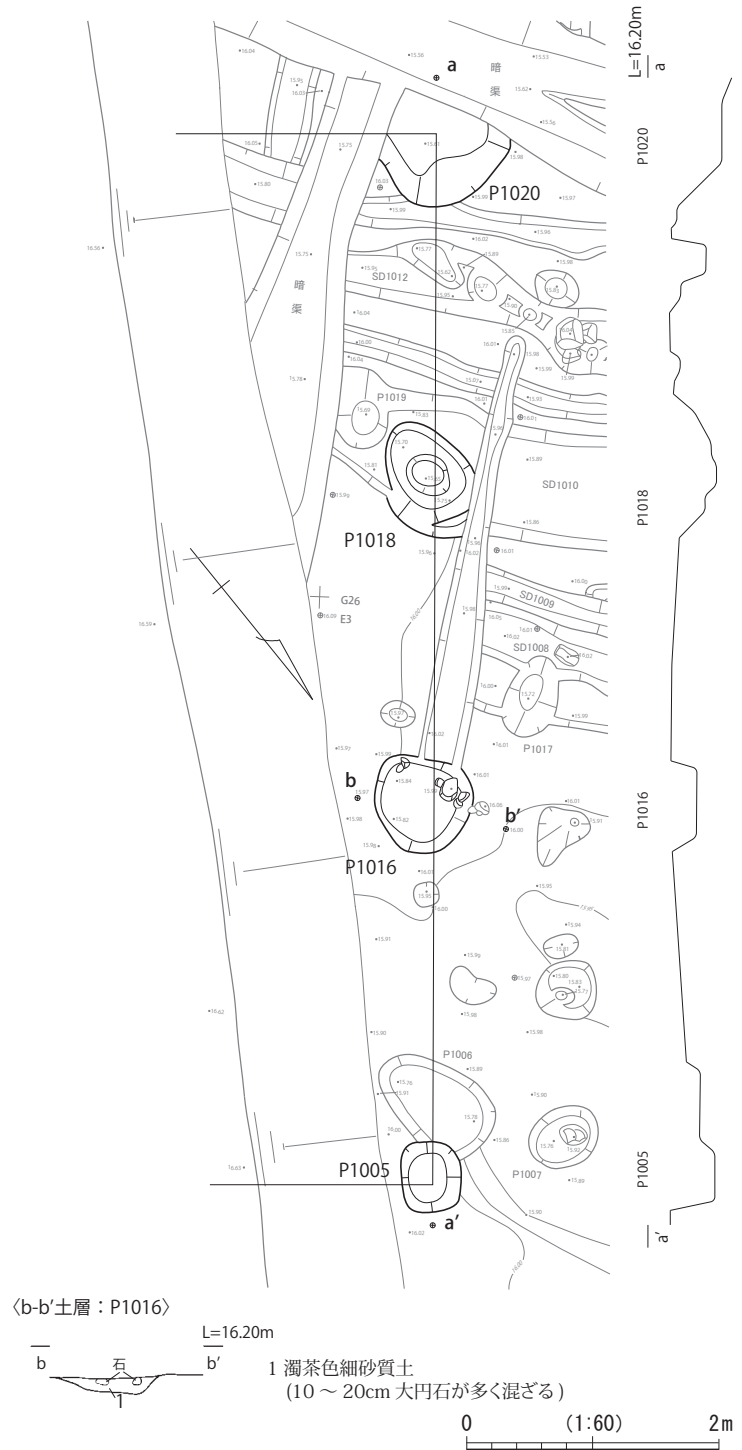
SA106は、SB117の北側梁間の北側80～100 cmに位置する。3間(6.50 m)を復元しており、柱間寸法は1.50～2.50 mと不均等である。柱穴の平面形態は略円形または不整楕円形を呈し、北西隅柱穴が長軸54 cm、短軸34 cm、深さ24 cmを、北東隅柱が径24～30 cm、深さ25 cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土は暗灰色砂質土である。SD1014と並行する溝より古く、出土遺物はない。

**SB118**(遺構:第42図、遺物:第72図)

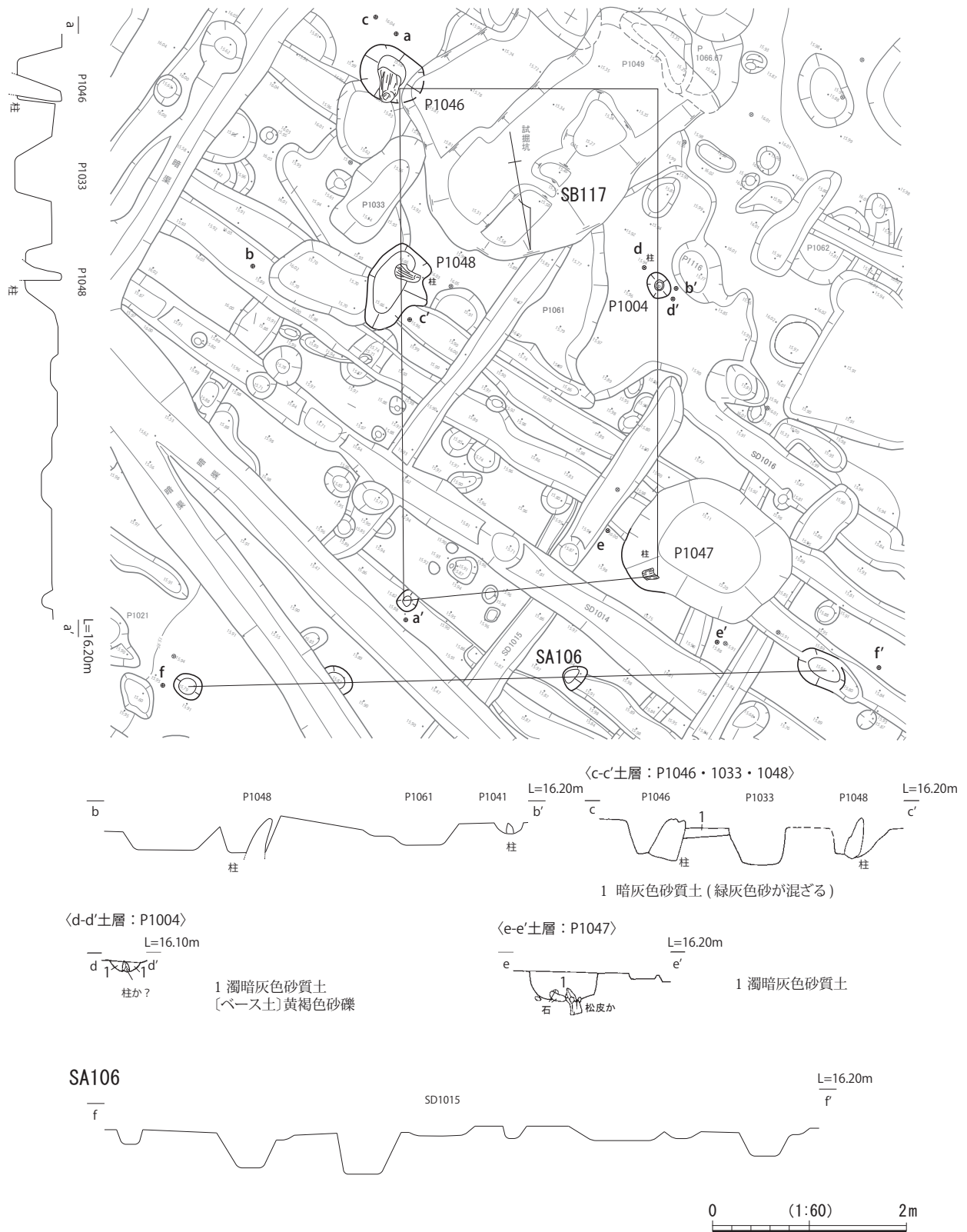
F-22・26区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、SB119と重複する位置関係にある。主軸方位はN-43° Eを示し、桁行2間(5.45m)×梁間1間(4.35m)、床面積23.7㎡を測る。桁行の柱間寸法は2.20m・2.35mで、梁間には床束が用いられたと考える。柱穴の平面形態は不整楕円形または不整円形を呈し、桁行中間柱穴の掘方は隅柱穴より小さい。P1036で長軸110cm、短軸88cm、深さ43cm、P1353で径約34cm、深さ30cmを測る。柱根は、P1036・53でベース面に沈み込んだ状態で出土した他、残る柱穴にも柱痕跡が確認できる。柱根は、P1036が径約25cm、P1053が径約20cmを測る。柱穴覆土は、ベース土が混ざる濁灰～暗灰色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係は、SE1003より古い可能性をもつ。遺物は、P1036出土の非ロクロ土師器小皿(第72図179)を図化したが、細片のため建物の所属時期を示すか不安を残す。179は腰部で屈曲し、14世紀後半代に位置付けられる。他にP1024・36・52から古代の須恵器・土師器片数点が出土した。

**SB119**(遺構:第43図)

F-25・26区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、SB118と重複する位置関係にある。主軸方位はN-約70° Wを示し、桁行2間(6.40m)×梁間2間(4.95m)、床面積31.7㎡を測る。桁行の柱間寸法は3.05～3.20m、梁間の柱間寸法は1.95～2.80mと不均等である。柱穴の平面形態は不整円形または略方形を呈し、南側桁行に比して北側桁行は小振りである。南西隅の柱穴が一辺46～50cm、深さ33cm、P1011が一辺94～108cm、深さ53cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基本とする柱抜取埋土となる。遺構の切り合い関係はP1010・31より古く、P1002・11から古代の須恵器・土師器片が出土したにとどまる。

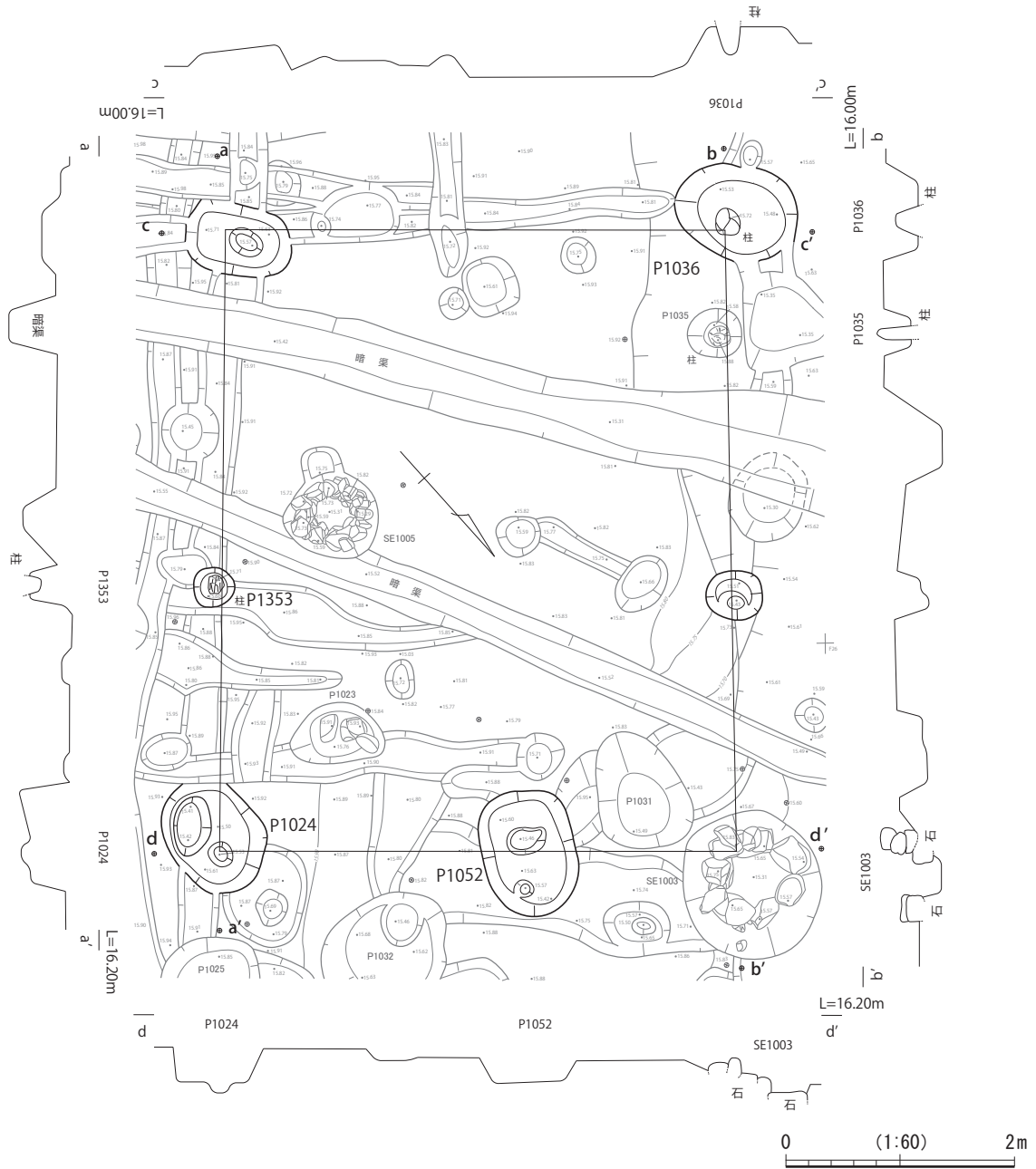


第40図 G地区 第0・I面SB116平面図・土層断面図(S=1/60)



第41図 G地区 第0・I面SB117・SA106平面図・土層断面図(S=1/60)

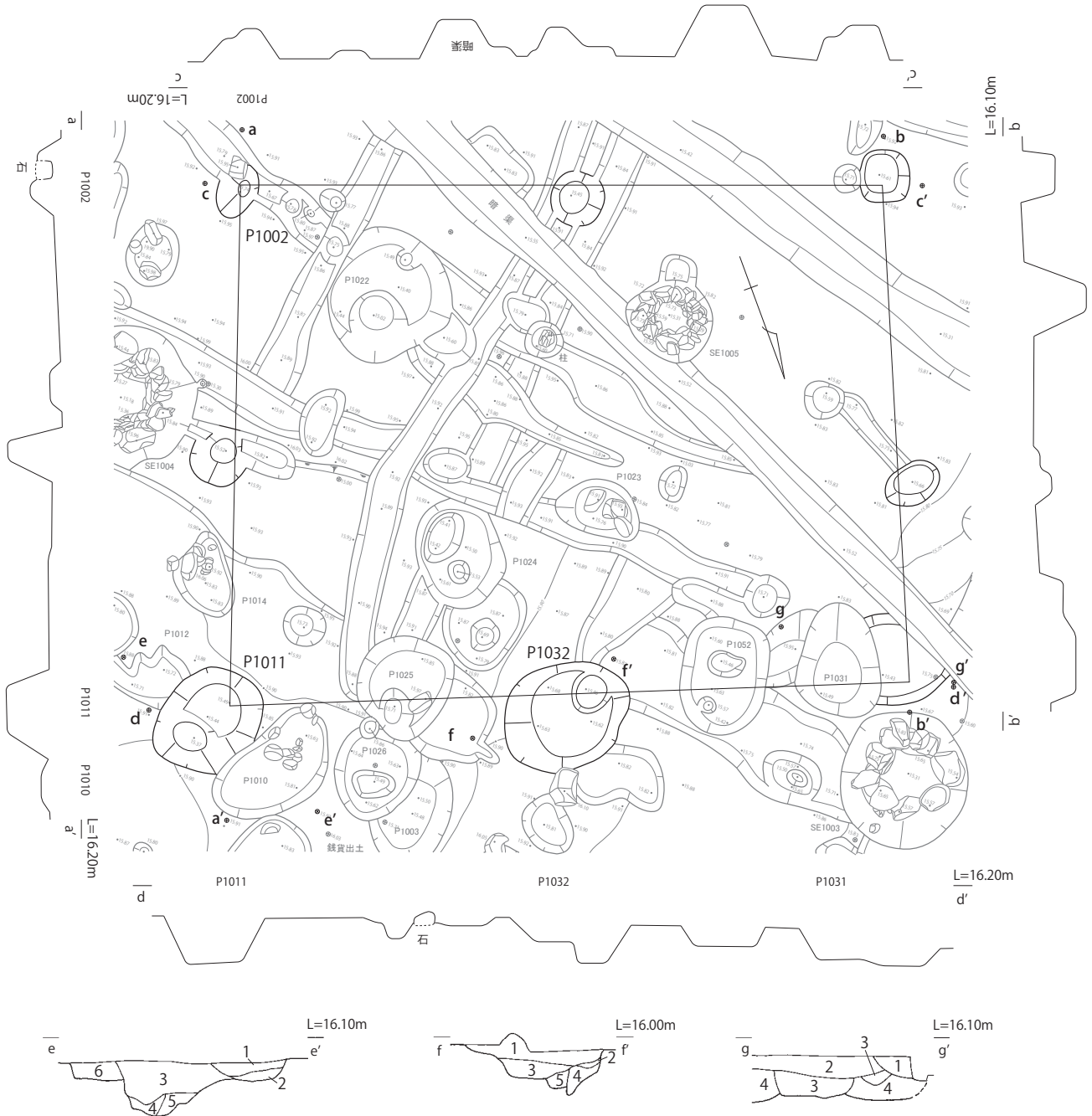




第42図 G地区 第0-I面SB118平面図・断面図(S=1/60)

**SB120**(遺構：第44図、遺物：第49図)

F-25・26区に位置し、整理時に復元した側柱構造の掘立柱建物で、柱穴が複数欠落するため建物としない可能性を残す。主軸方位はN-61.5° Eを示し、桁行2間以上か(4.80m～)×梁間1間(3.80m)を測る。桁行の柱間寸法は、柱穴の削平を前提とすれば約2.40mと考えられる。柱穴の平面形態は不整形を呈するものが主体で、P1028が径46～66cm、深さ24cmを、P1051が径50～62cm、深さ21cmを測る。柱根は、P1028・1051・1301で残存し、径10cm前後を測る。柱穴から土器類は出土せず、第49図17～20の木製品を図化した。P1028出土の17は3ヶ所に切断痕を残すスギ材である。P1051出土の杭18はスギ材を、径約11cmを測る柱根19はクリ材を用いる。P1301出土の柱根20は径約13cmを測るクリ材で、底面を4方向から粗く加工する。



〈e-e'土層：P1010～P1012〉

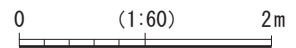
- 1 濁灰色砂質土 (暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 2 暗灰色砂質土 (灰色土がブロック状に混ざる)
- 3 1層と同質土 (やや明るい)
- 4 濁淡灰色粗砂 (暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 5 濁暗灰色砂質土
- 6 灰色砂質土

〈f-f'土層：P1032〉

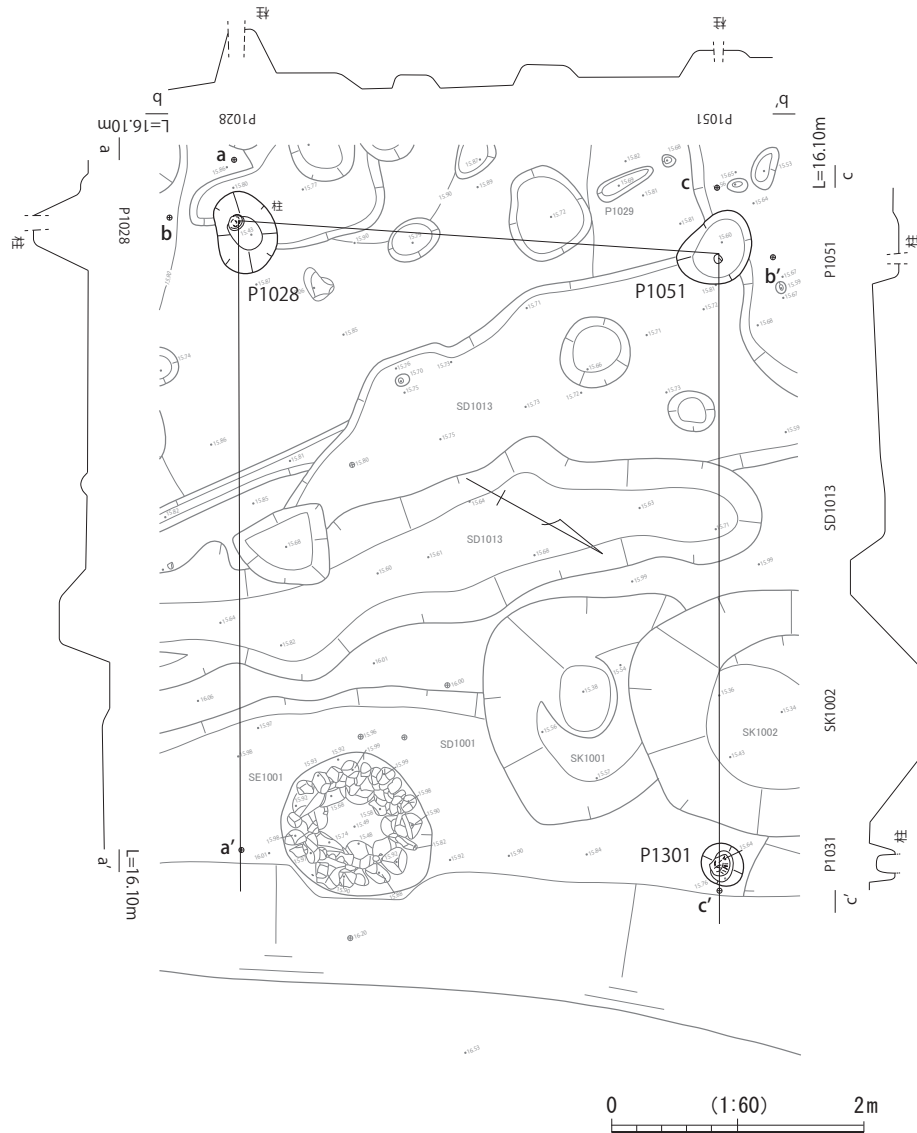
- 1 濁灰茶色砂質土 (暗灰色土、淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 2 濁淡灰色粗砂
- 3 灰色砂質土 (暗灰色土、淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 4 濁暗灰色砂質土 (淡灰色土がブロック状に混ざる)
- 5 濁淡灰色粗砂

〈g-g'土層：P1031〉

- 1 整地土 101 覆土
- 2 灰茶色砂質土 (暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 3 灰色砂質土 (暗灰色土、淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 4 濁黒灰色砂質土



第43図 G地区 第0・I面SB119平面図・土層断面図(S=1/60)



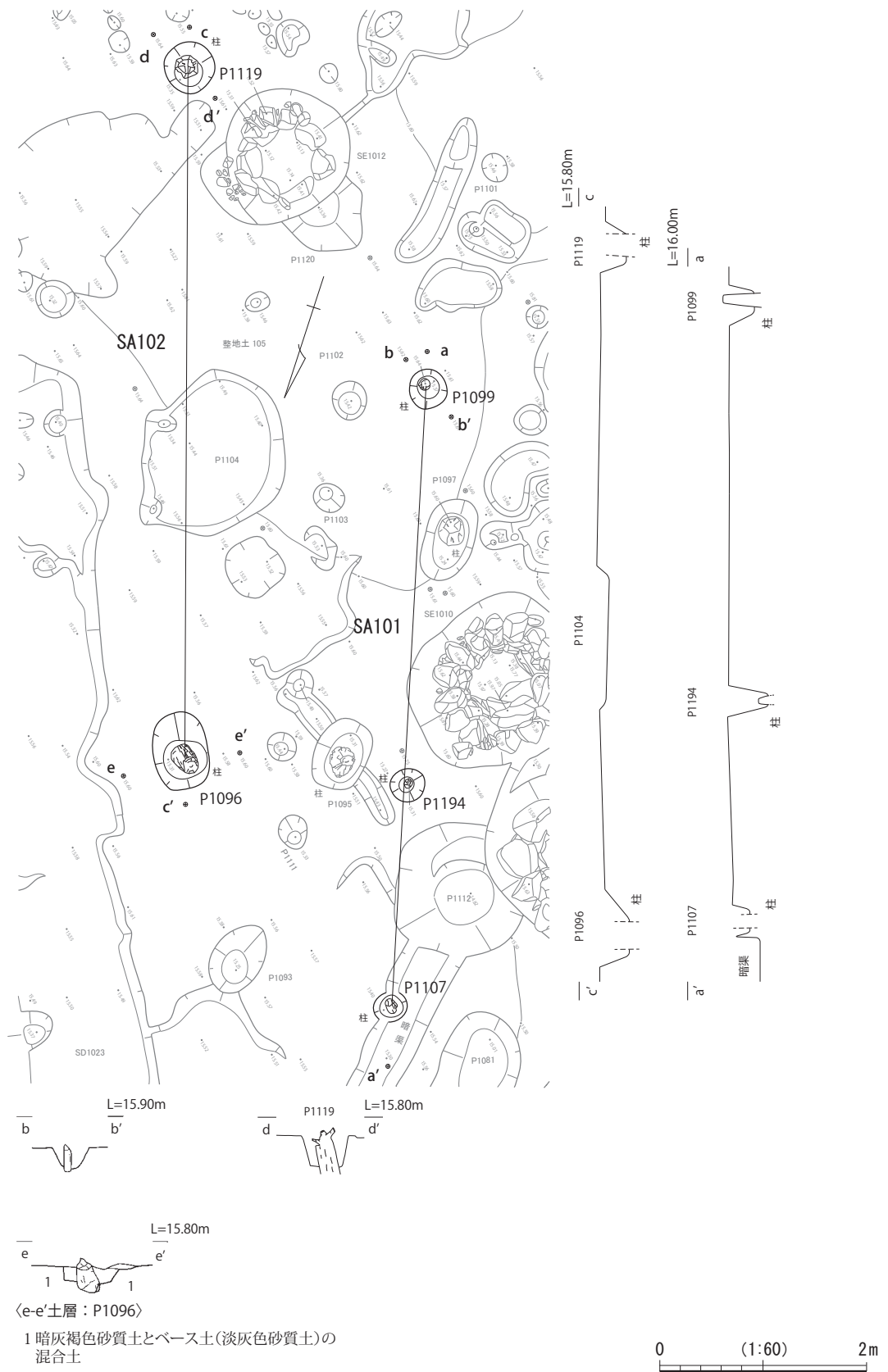
第44図 G地区 第0・I面SB120平面図・断面図(S=1/60)

**SA101**(遺構：第45図、遺物：第49図)

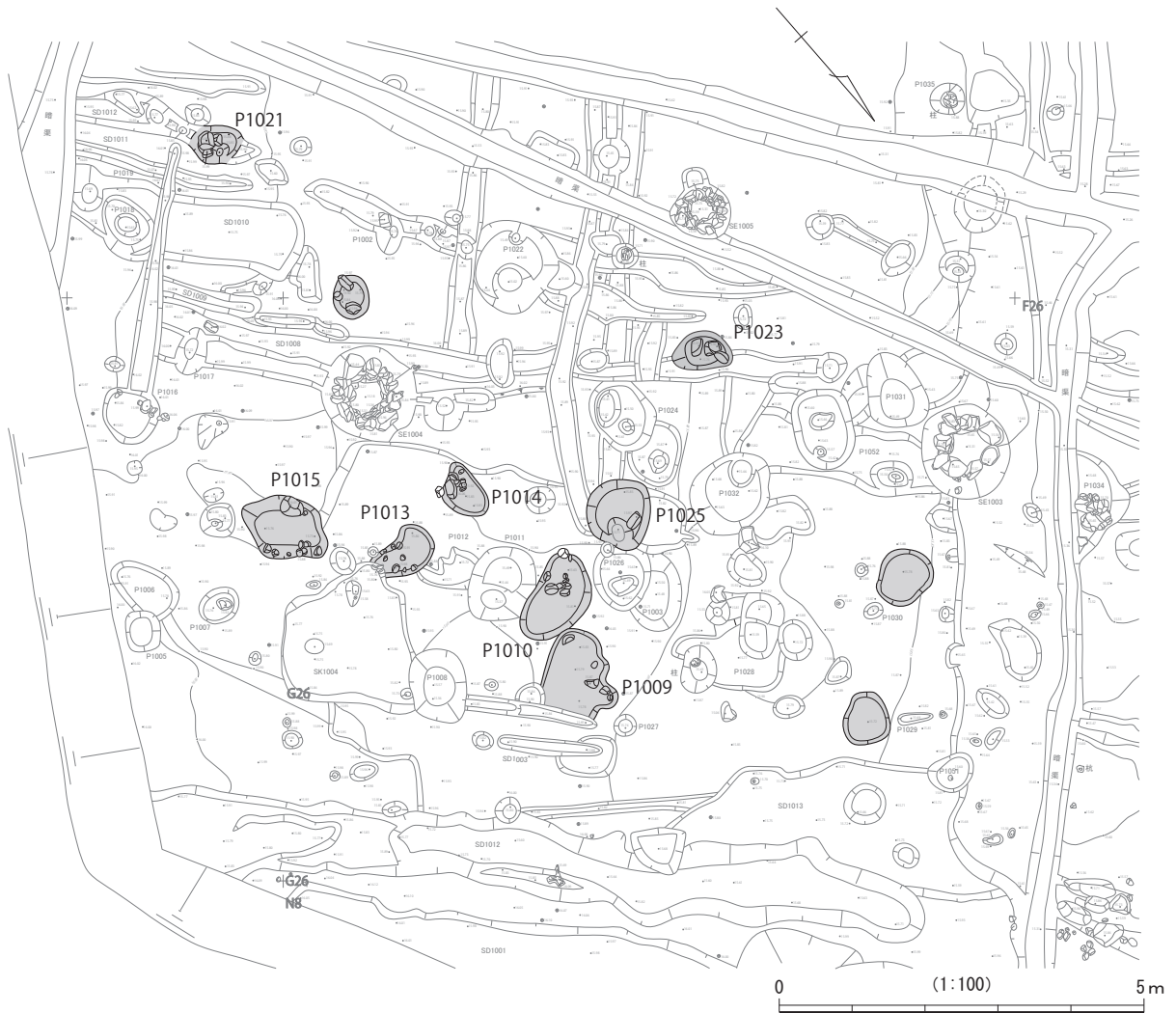
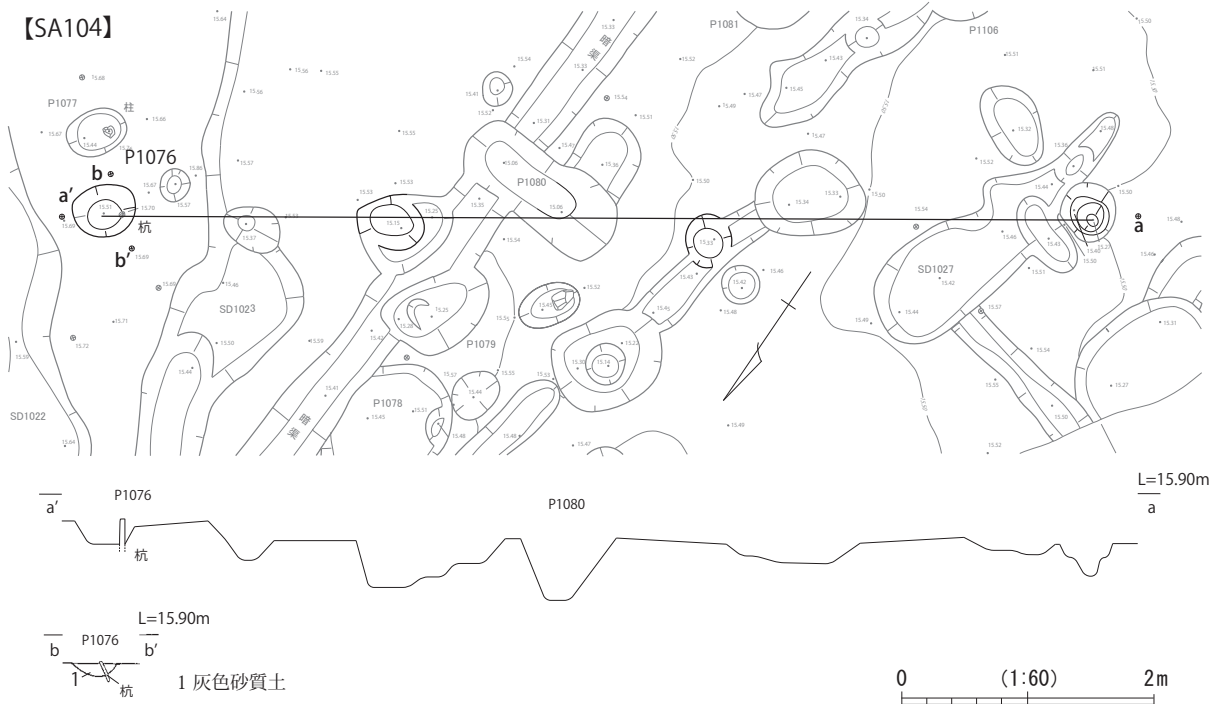
F・22・23区に位置し、一部の柱穴を欠くが3間分(6.05m)の柵を復元した。柱間寸法1.95～2.05m、柱穴は径約35cm、深さ17～35cmを測る。柱穴の平面形態は略円形を呈し、覆土は濁暗灰～灰色砂質土である。柱穴から土器類は出土せず、柱根2点(第49図21・22)を図化した。ともにクリ材を用いており、保存状態は良好である。P1094出土の21は径約9cmを測り、平坦に加工された底面に砂が圧着する。P1107出土の22は径約13cmを測り、底面の加工は粗い印象を受ける。

**SA102**(遺構：第45図、遺物：第50図)

G・F・22・23区で検出し、SA102にほぼ並行する。中間柱は未検出で、延長6.80mを測る。平面略長方形を呈するP1096が長軸74cm、短軸52cm、深さ24cm、平面略円形を呈するP1096が径約40cm、深さ24cmを測る。覆土はベース土が混ざる濁灰～暗灰褐色砂質土で、遺存した2本の芯持ち丸柱はベース土に沈みこむ。P1119出土の第50図23は径約22cmを、P1096出土の24は径16～18cmを測り、マツ属複雑管束亜属材を用いる。各柱穴から古代の須恵器・土師器片が定量出土した。



第45図 G地区 第0・I面SA101・102平面図・土層断面図(S=1/60)

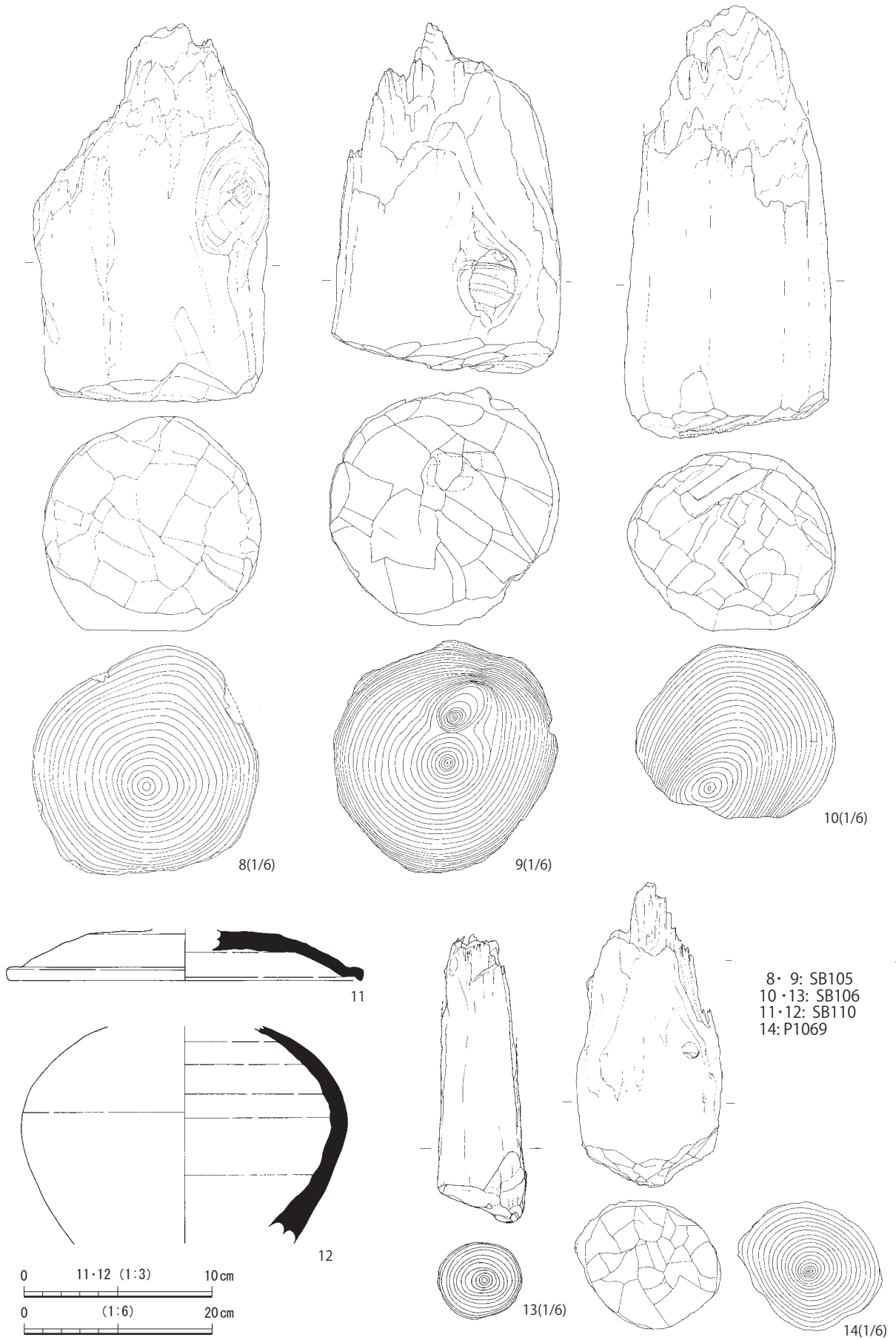


第46図 G地区 第0・I面SA104等平面図・土層断面図(S=1/60・100)

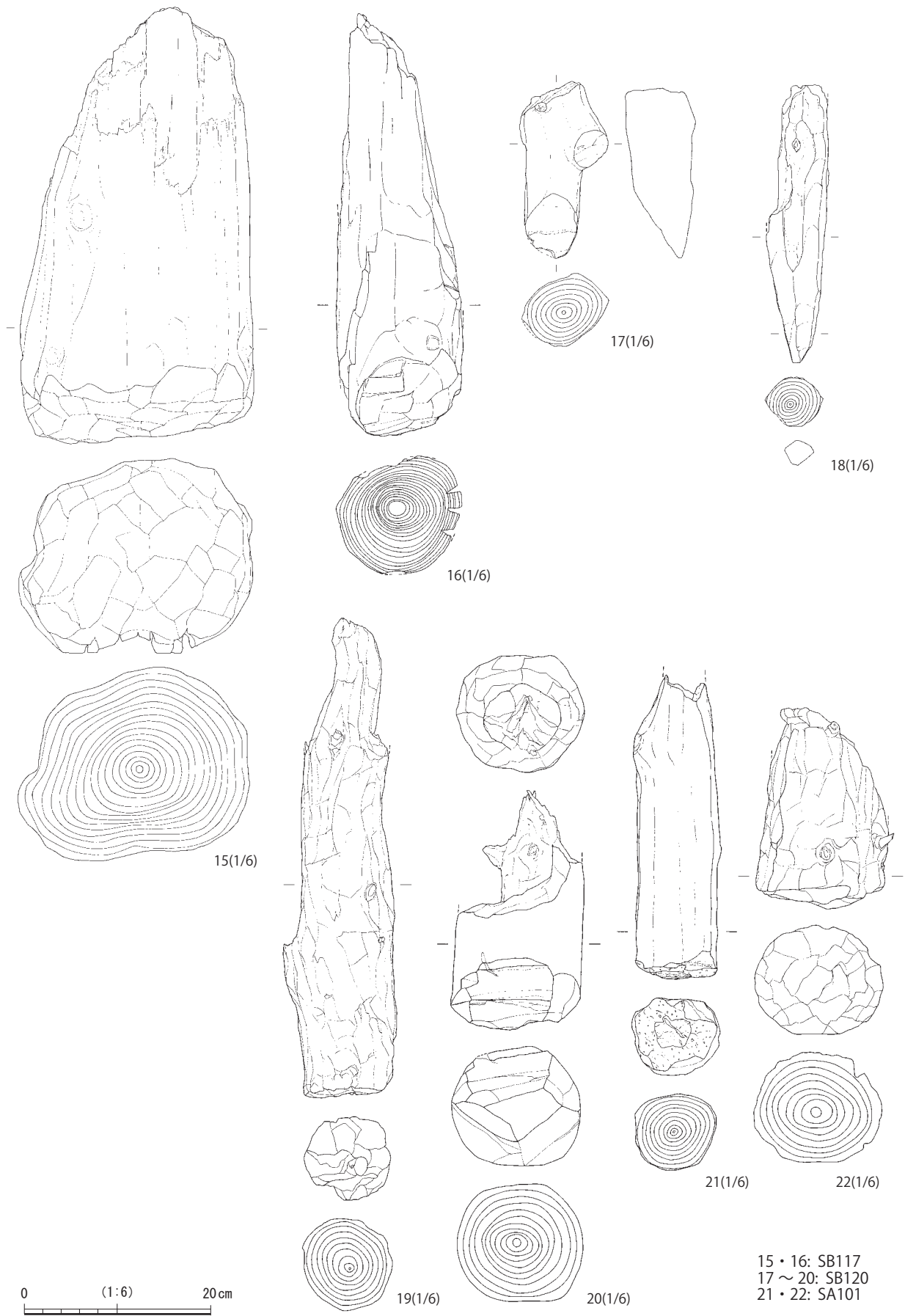
1～3: F地区 SB104  
4～7: SB105



第47図 G地区 第0・I面SB出土遺物実測図1(S=1/3・1/6)

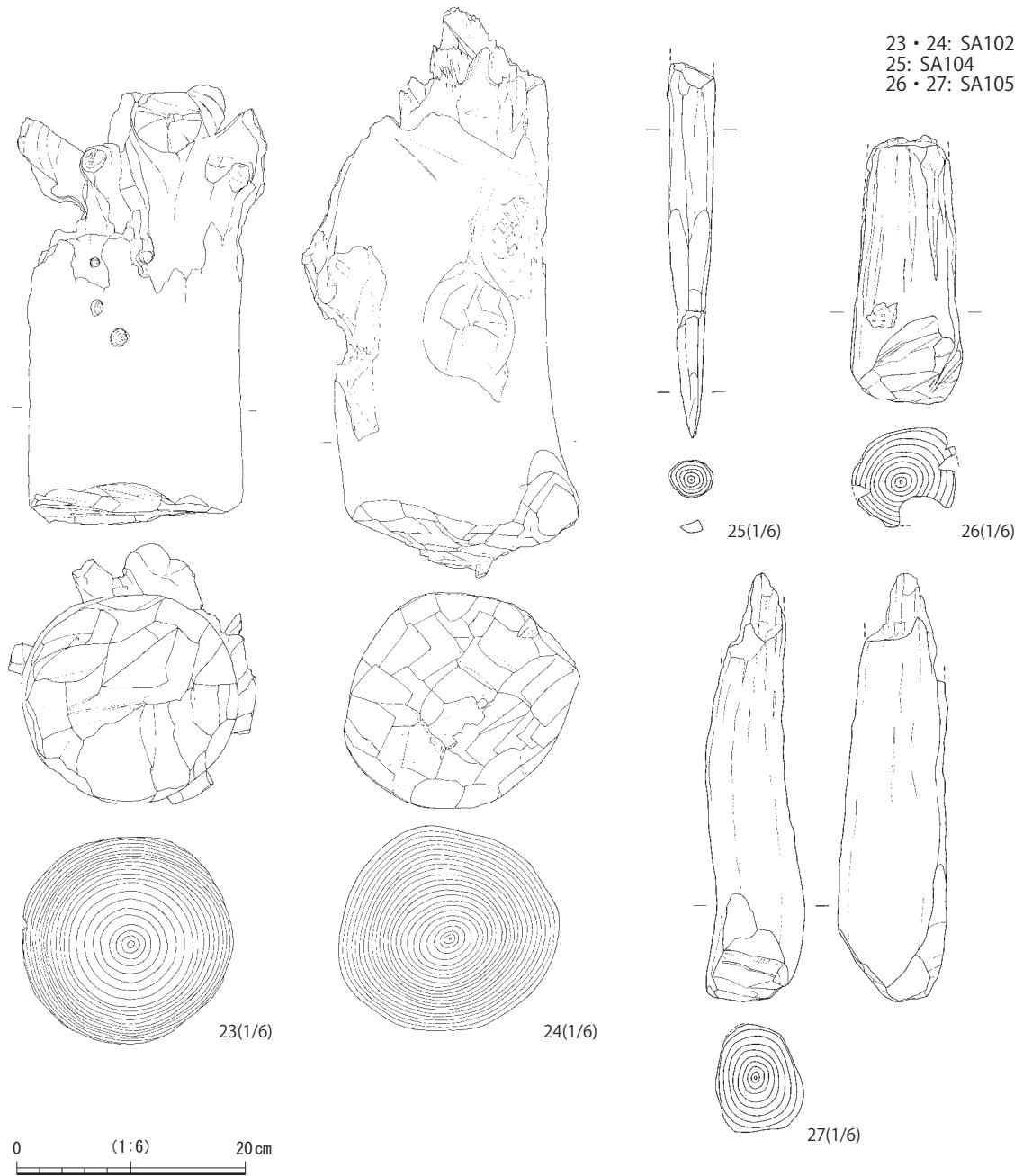


第48図 G地区 第0・I面SB出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)



第49図 G地区 第0・I面SB・SA出土遺物実測図(S=1/6)





第50図 G地区 第0・I面SA出土遺物実測図(S=1/6)

**SA104**(遺構：第46図、遺物：第50図)

F・23区で3間分(7.75m)の柵を復元した。柱間寸法2.25～2.30m、平面略円形を呈する柱穴は径約45cm、深さ30～42cmを測り、覆土は濁褐灰～灰色砂質土である。柱穴から土器類は出土せず、P1076出土の杭(第50図25)を図化した。25はクリ材を用いて、2方向から先端を鋭く加工する。

**基礎様ピット群**(遺構：第46・59図、遺物：第61図)

E・F・22区において、遺構検出・掘削作業当初に礎石建ち建物等の根固め石を想起させる浅いピット群を確認した。ピット群は、10～20cm大の自然石が多く混ざる特徴をもち、ほぼ南北方向または南東-北西方向に主軸方向を示すが、礎石建ち建物とする明確な平面プランを提示できなかった。基礎様ピット群として報告し、類例の増加を待ちたい。ピット群は、第46図のとおり不整形円形または不整形な平面プランを呈し、11穴を数える。規模は、長軸60～80cm、短軸50～70cm、深さ15～

20cmを測るものが主体を占め、最も大きいP1009が長軸約110cm、短軸約80cm、深さ11cmを測る。覆土は自然石が混ざる濁茶色砂質土である。遺物は、P1013から第61図64、P1015から同図65・66・68が、P1025から同図69が出土した。64の銅銭は摩滅が著しく、文字は判読できない。ロクロ土師器小甕65は底部外面に静止糸切り痕は残る。ロクロ土師器甕66は口径23.5cmを測り、口縁端部を内屈気味に仕上げる。須恵器無台盤68は口径14.5cm、器高2.5cmを測り、体部は外反気味に立ち上がる。灰釉陶器製の灯明受皿69は口径10.4cm、器高2.0cmを測り、19世紀代に位置付けられる。他にP1009・10・14・15・23・25から古代の須恵器・土師器が、P1015から珠洲焼甕片1点が、P1025から珠洲焼甕片、肥前陶器片各1点がそれぞれ出土した。

### 3 井戸(遺構：第51～54図、第9表、遺物：第55・57・58図、第10・14・15表)

現地調査時に土坑(SK)と分類した遺構を含めて13基の井戸を検出した。曲物側板を井戸側材に用いるSE1008以外の井戸は、石組みの井戸である。分布は、F-22区に3基、G-23区に3基、G-24区・E-25区・F-25区・E-25区に各1基、E-26区に3基と偏在傾向を示し、敷地割りを反映した可能性が高いと考える。比較的高い地下水位のため、第9表のとおり上端内径(石組内径)35～80cm、深さ80cm以下を測る小型の井戸が主体を占める。平面形態は、略方形のSE1009以外は円形または略円形を呈し、すり鉢状の掘方をもつ。石組は、井戸内面の仕上がりを強く意識して、調査区内外で採集できる未加工の自然石を5cm以下の裏込め石を用いながら、4～6段積み上げることが基本とする。掘方埋土は、ベース土と黒褐色砂質土の混合土が多い。また、SE1006・09には、底面の水溜施設に用いた曲物側板が遺存していた。出土遺物は総じて少ないものの、井戸の存続時期は16世紀後半～17世紀代を中心にするかと推定できる。なお、土坑、ピットの中には、石組みをもたないものの同程度の規模・底面レベルをもち、現地調査時に恒常的な湧水を認めた遺構が存在する。このような素掘り井戸の可能性をもつ遺構については、各遺構の説明で付記している。

#### SE1001(遺構：第51図)

調査区北端F-26・27区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は、石組に近接しており、井戸側の石組は上端内径65～80cm、深さ44cm、底面の標高15.48mを測る。石組は4段が残存し、底から1・2段目が長軸25～40cm大を測る比較的大振りの自然石をしっかりと長手積み、3～4段目が10～25cm大の小振りな石を小口積み風に積み上げる。井戸覆土は、植物遺体が多く混ざった、しまりのない暗灰色シルト質土が堆積した後に、井戸側上部の石組を含むと考えられる10～30cm大の自然石が混ざる土で埋め戻される。他遺構との切り合い関係はSD1001より前出し、出土遺物はない。

#### SE1002(遺構：第51図、遺物：第55図)

E-24・25区で検出した比較的深めの石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は、石組に近接し、井戸側の石組は上端内径75～85cm、深さ76cm、底面は北側で10cm程度深くなり標高14.93mを測る。石組は6段が残存し、底から1段目をやや内側に据えた後、2～6段目を丁寧にほぼ垂直に積み上げる。使用した自然石は、西側の1石(長軸約30cm)を除いて、10～20cm強を測る略円形の自然石が主体をなし、用いる側石の大きさをそろえた印象が強い。裏込め石はほとんど認められない。井戸覆土は、下層から機能時に堆積した淡灰色粗砂と褐色腐植土の交互堆積層、埋戻し土である濁灰色弱粘質土(上位に多くの10～30cm大自然石を詰める(写真図版9))となる。また、埋戻しに用いた石で周囲を固めながら、第55図31の径約11cmを測る柱根を据え置くことから、埋戻し直後に構造物を建てた可能性が高い。他遺構の切り合い関係は、整地土103、P1041より前出する。

第9表 G地区 第O・I面SE規模等一覧表

遺構番号	グリッド	平面形態	掘方上端 径 (cm)	上端内径 (cm)	検出面から の深さ (cm)	井戸底面の 標高 (m)	石組残 存段数	水溜施設	出土土器類	備考
SE1001	F-26・27	略円形	120	65~80	44	15.48	3~4	なし	なし	自然石等で埋戻し
SE1002	E-24・25	略円形	135~140	75~85	76	14.93	6	なし	備前焼すり鉢 (16c末~17 c初)	自然石等で埋戻し SA1005より古
SE1003	F-26	略円形	120~130	45~50	49	15.31	1~3	なし	なし	側石は一部抜き取り
SE1004	F-26	略円形	130~140	55~65	77	15.18	5	なし	須恵器、土師 器等	自然石等で埋戻し
SE1005	F-25	略円形	75~82	35~40	50	15.32	4	(あり)	瀬戸・美濃天 目碗 (16c後)	一部損壊。自然石等で埋 戻し
SE1006	G-24	略円形	113~138	65~80	56	15.47	2~5	あり(曲物)	染付碗 (16c)	側石は一部抜き取り。自 然石等で埋戻し
SE1007	G-23	略円形	120~160	80	48	15.48	3~5	なし	須恵器、土師 器	側石は一部抜き取り。裏 込め石あり
SE1008	G-23	円形	60~92	60~67	74	15.09	0	あり(曲物)	瀬戸美濃焼瓶、 非ロクロ土師 器小皿等	側材に数段の曲物か
SE1009	F-22	略方形	辺180~200	辺110~120	96	14.65	5~6	あり(曲物)	土師器	裏込め石あり
SE1010	F-22	略円形	155~180	80~90	78	14.80	4~5	なし	須恵器、土師 器	裏込め石あり
SE1011	G-23	略円形	120~155	75~85	82	15.03	6	なし	須恵器	補強の杭あり。裏込め石 5~10cm大。SB107より新
SE1012	F-22	略円形	120~135	70~75	49	15.11	2	なし	肥前系磁器染 付碗	上部は損壊
SK1003 (SK1013)	E-26	不整形円形	[上半] 140~150 [下半] 90~95	40~60	52	15.13	2	なし	珠洲焼甕等	底面にコモ。上部は損壊

覆土から出土した遺物のうち、第55図28~31を図化した。28は、第2層出土の須恵器有台坏で底部と体部の境で明瞭に屈曲、体部は大きく外傾する。29は覆土第2層最上面出土の備前焼すり鉢で口径23.5cm、器高10.1cmを測り、器面は赤褐色を呈する。肥厚した口縁部は内傾した面をもち、内面に10条1単位のおろし目を密に施す。16世紀末~17世紀初めに位置付けられる。覆土第1層上面出土の柱根30・31は、30が井戸埋め戻し時の廃棄品、31は井戸廃棄後に据え置かれたものである。30はニレ属の材で樹皮が残る。31は節のある部分を下にした芯持ち丸柱である。他に須恵器・土師器片が各1点出土した。

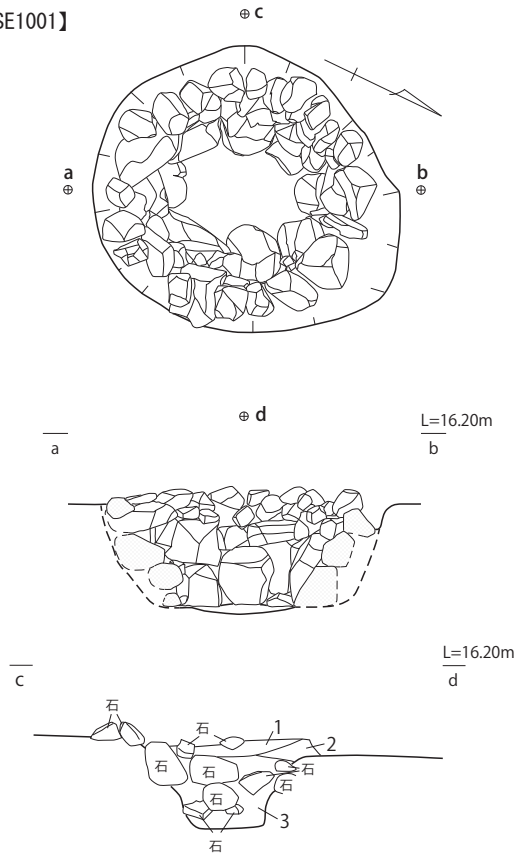
#### SE1003(遺構：第51図)

F-26区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は、上部が比較的大きく、井戸側の石組は上端内径45~50cm、深さ49cm、底面の標高15.31mを測る。石組は、底から1段目が完存するが、2・3段目は廃絶以降に抜き取られたため一部が残存するにとどまる。底から1段目は長軸30~40cm大を測る大振り自然石をしっかりと長手積みし、2・3段目は20~30cm大のやや小振りな石を小口積み風に積みあげる。井戸覆土は、淡灰色粗砂の褐色腐植土が自然に交互堆積した後に、周囲に15~30cm大の自然石を配しながら、40~45cmを測る大きな自然石1石を中心に据え置き、しっかりと塞いで埋め戻す。他遺構との切り合い関係は整地土103より前出し、出土遺物はない。

#### SE1004(遺構：第52図)

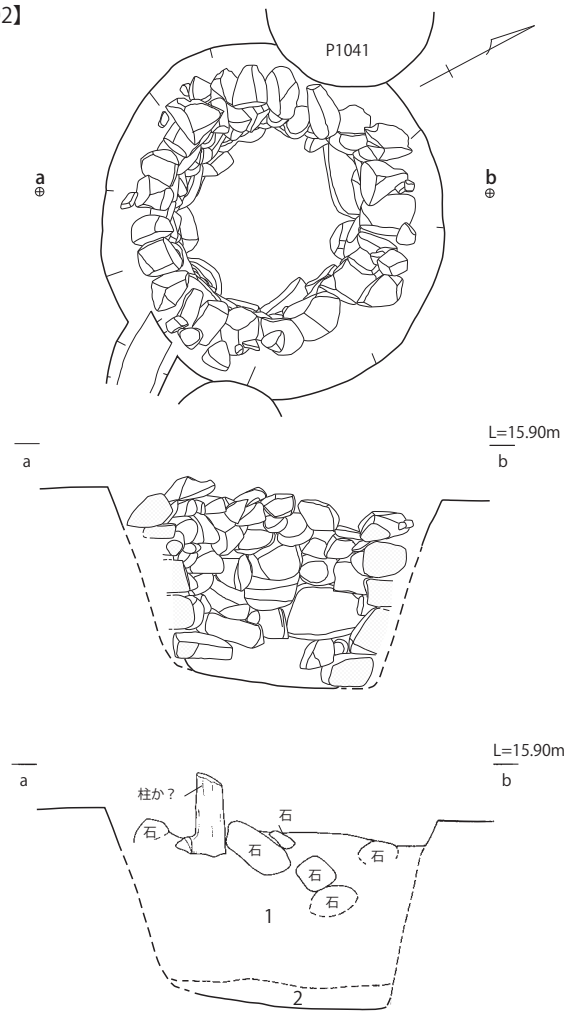
F-26区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は石組に近接し、井戸側の石組は上端内径55~65cm、深さ77cm、底面の標高15.18mを測る。石組は5段が残存し、南東側が30~40cm大を測る比較的大きな自然石の長手積みを中心とする一方、北西側が15~20cm大を測る自然

【SE1001】



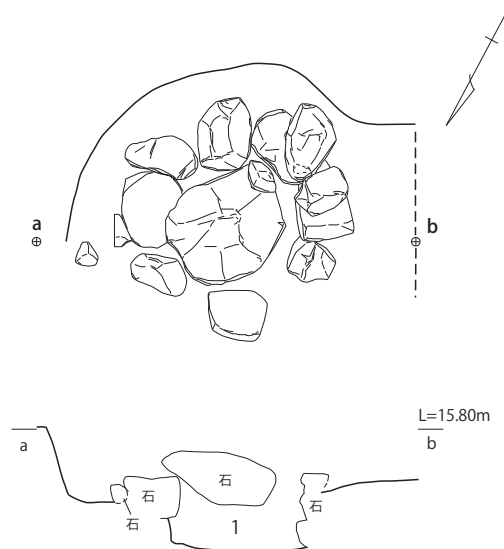
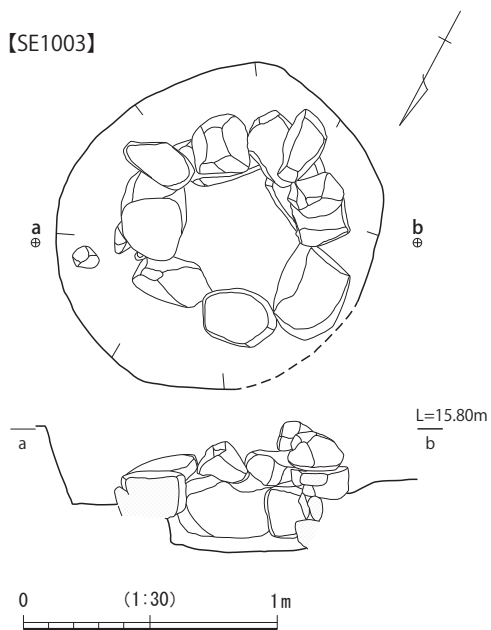
- 1 暗灰色シルト質土 (植物遺物が多く混ざる)
- 2 暗灰色シルト質土 (1層と同質土。やや明るい)
- 3 暗灰色シルト質土 (1層と同質土。やや暗い)

【SE1002】



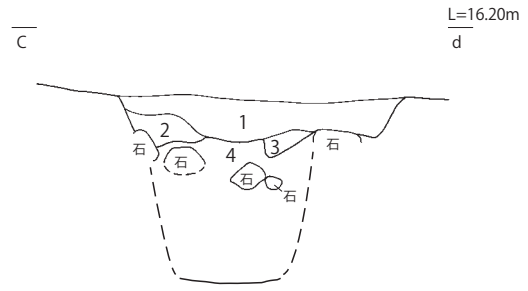
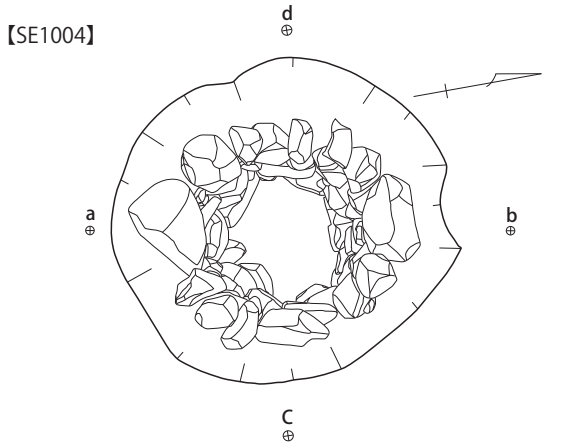
- 1 濁灰色弱粘質土 (10~30cm大の自然石が多く混ざる。埋土)
- 2 淡灰色粗砂と褐色腐植土砂質の交互堆積互層 (1層と2層の境より備前すり鉢 (No.29) 出土)

【SE1003】

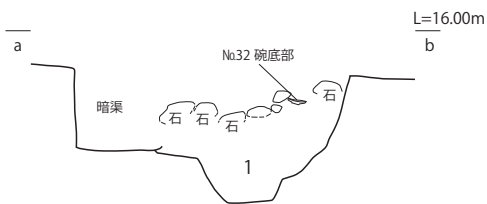
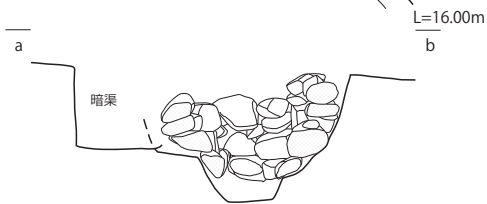
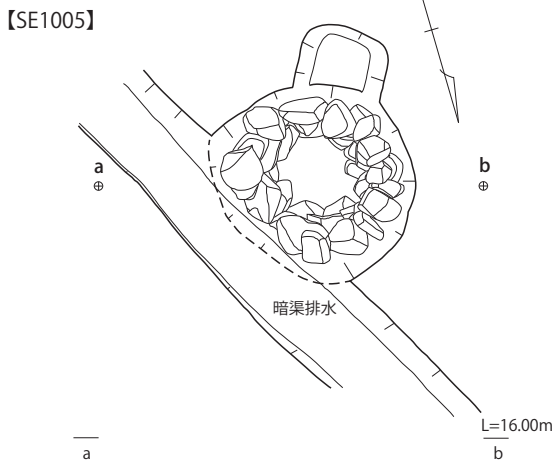
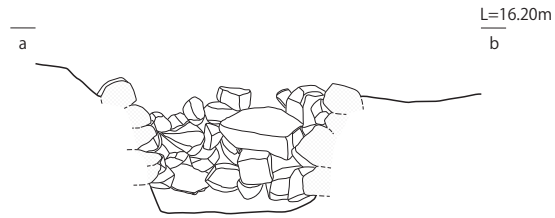
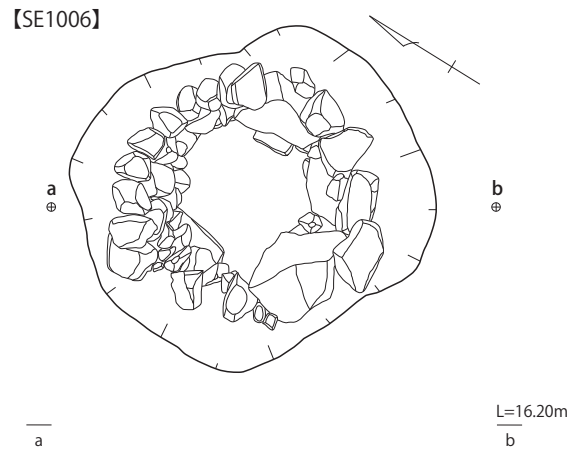
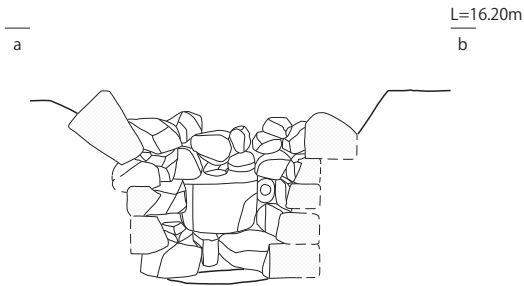


- 1 淡灰色粗砂と褐色腐植土の交互堆積層  
[ベース土] 青灰色砂質土

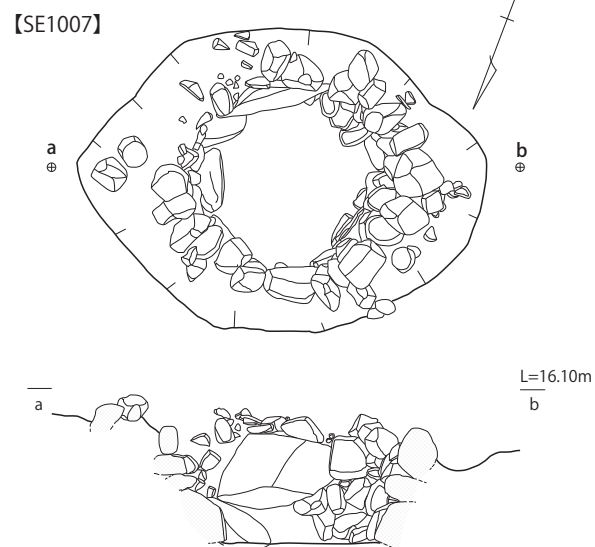
第51図 G地区 第0・I面SE平面図・土層断面図1 (S=1/30)



- 1 濁茶灰色砂質土 (淡灰色粗砂が混ざる)
- 2 濁暗灰色砂質土 (炭化物、淡灰色粗砂が混ざる)
- 3 灰色砂質土
- 4 にぶい灰褐色細砂と淡灰色粗砂の交互堆積層 (10~20cm 大自然石が多く混ざる。埋土)



1 暗灰色砂質土 (固くしまる)



第52図 G地区 第0・I面SE平面図・土層断面図2(S=1/30)

0 (1:30) 1m

石を小口積み風に積み上げる傾向を示す。また、5段目は南北方向2ヶ所に長軸35～40cmの自然石を配し、その間を15～20cm大の自然石を配する。井戸覆土は、下層から10～20cm大の自然石が多く混ざる灰褐色細砂と淡灰色粗砂が交互に自然堆積した後、濁暗灰～灰色を呈する砂質土、ベース土である淡灰色粗砂が混ざる濁茶灰色砂質土(埋土)となる。他遺構との切り合い関係は、SD1008より前出する。古代の須恵器坏類、土師器甕類数点の他、尖底と考えられる製塩土器片1点が出土した。

**SE1005**(遺構：第52図、遺物：第55図)

F-25区で検出した石組井戸で、東側は近代の暗渠排水で一部損壊する。平面形態は略円形を呈し、検出した井戸の中でも規模が小さい。井戸の掘方は石組に極めて近接しており、井戸側の石組は上端内径35～40cm、深さ50cm、底面の標高15.32mを測る。石組は4段が残存し、10～15cm大を主体(最長22cm)とする平面楕円形の自然石を小口積み風に積み上げる。また、底面は1段深くなり、遺存しないものの曲物等の水溜施設が存在した可能性が高い。底面が湧水のない固くしまった濁青灰色砂質土層内に留まることから、水溜的機能が強いものと考えられる。井戸覆土は、ベース土である淡灰色粗砂と褐色腐植土層が交互に自然堆積後、8～15cm大の自然石と暗灰色砂質土でしっかりと埋め戻す。井戸覆土第2層(検出面より約10cm下がった自然石の間)から第55図32の瀬戸・美濃の鉄釉天目碗が出土した。32は暗赤褐色の釉の後に、厚みをもつ黒～黒褐色の釉を施し、16世紀後半に位置付けられる。他に出土遺物はない。

**SE1006**(遺構：第52図、遺物：第55図)

G-24区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は石組に近接し、平面不整形長方形を呈する。井戸側の石組は、上端内径65～80cm、深さ56cm、底面の標高15.47mを測る。井戸側の石組は最大で5段、西側は崩落等により2段のみが残る。石組は、南～東側は面を意識しながら20～40cm大の自然石を比較的粗く積み上げる一方、北～西側は10～20cm大の小振りな自然石を密に積み上げる。井戸底から曲物側板残片が出土しており、水溜施設が存在したと考えられる。廃絶時には、10～20cm大の自然石と濁暗灰色砂質土でしっかりと埋め戻される。他遺構との切り合い関係は、東側のP1118より新しい。遺物は、覆土から16世紀代の中国製染付碗細片(第55図33)が出土したにとどまる。

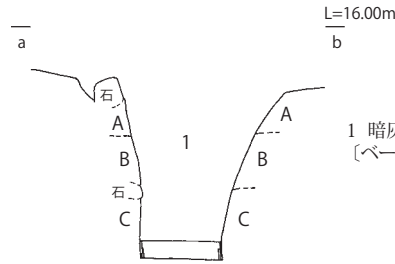
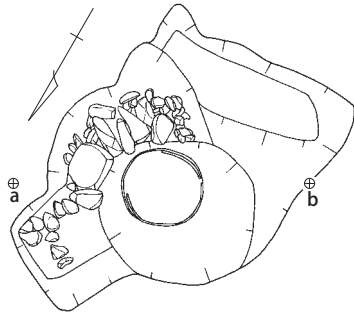
**SE1007**(遺構：第52図、遺物：第55図)

G-23区で検出した石組井戸である。平面形態は略円形を呈し、石組西側はSD1018掘削時に一部が抜き取られ、損壊する。井戸の掘方は石組に近接し、平面不整形楕円形を呈する。井戸側の石組は、上端内径約80cm、深さ48cm、底面の標高15.48mを測る。石組は5段が残存し、内面の仕上がりを意識した南東側の1石(長さ約45cm、高さ約30cm)を除いて、10cm強～25cm程度の自然石を下段は長手積みに、上段は小口積み風に積み上げる。また、上段の石組には4cm程度の大きさをもつ裏込め石が一部で確認できる。廃絶時に10～30cm大の自然石と濁暗灰色砂質土でしっかりと埋め戻す。他遺構との切り合い関係では、SD1018、SK1008より前出する。井戸の掘方から須恵器・土師器数点が出土しており、第55図34の須恵器坏蓋を図化した。扁平な34は口径13.7cmを測り、ナデ調整を加えた天井部は広い印象を受ける。

**SE1008**(遺構：第53図)

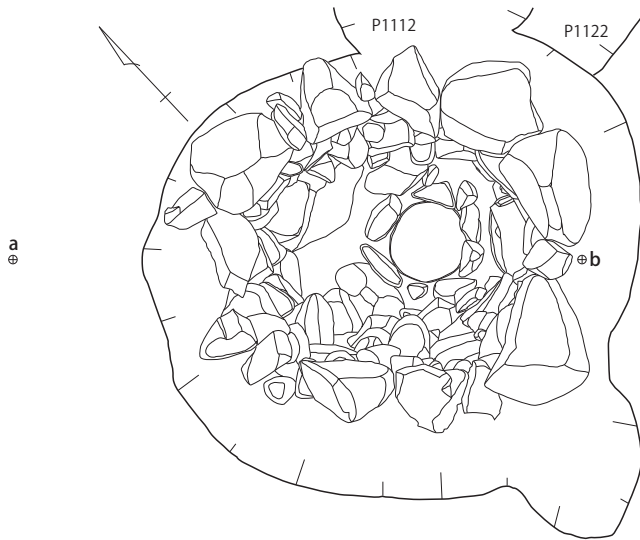
G-23区で検出した小型井戸で、井戸側材に曲物側板を用いる。平面形態は円形を呈し、西側を除いて張り出しが存在する。井戸の掘方は、下方ほど垂直に近く、上端径60～67cm、下端径33cm、深さ74cm、底面の標高15.09mを測る。井戸底に径33cm、高さ7cmの曲物側板が残存した他、掘り下げ作業中に高さ30cm程度の曲物側板を確認したこと(井戸側の崩落により断片のみ取上げ)や、掘方の形状から、井

【SE1008】

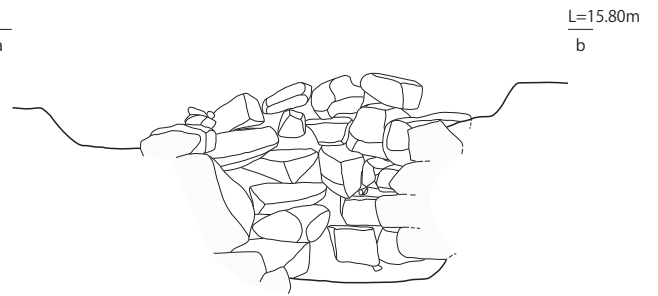
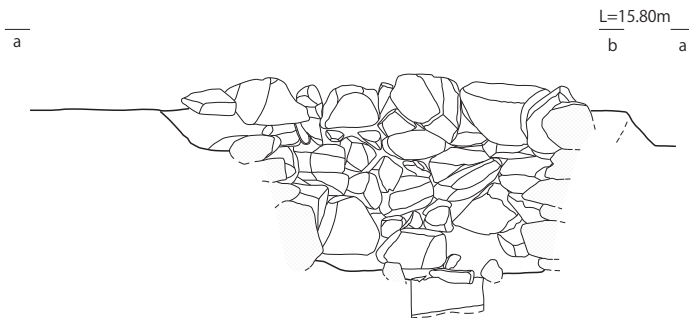
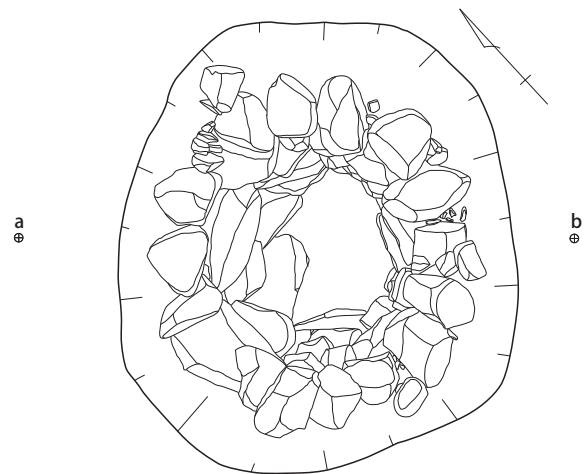


- 1 暗灰色シルト質土と緑灰色砂の混合土  
 [(ベース土) A 明灰色砂質土  
 B 暗灰色シルト質土  
 C 灰白色粗砂 (礫多く混ざる。崩れやすい)]

【SE1009】



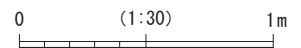
【SE1010】



【SE1009・1010】(第14・16図)



- 1 灰色砂質土  
 2 暗灰色弱粘質土 (柔らかい)  
 3 濁茶灰色粗砂と灰色砂質土の混合土  
 4 濁灰色砂質土  
 5 濁青灰色砂質土  
 6 灰色弱粘質土(30~40cm大の自然礫混ざる。埋土)



第53図 G地区 第0・I面SE平面図・土層断面図3(S=1/30)

戸側材として数段の曲物側板を用いたと考える。また、東側の張り出しは、5cm大及び10～15cmの自然石を用いて、幅約25cmにわたり井戸縁を補強しており、北側張り出し(深さ約15cm)には5～10cm大の自然石を敷き詰めた可能性が高い。廃絶時に暗灰色シルト質土と淡灰緑色砂で埋めるが、他の井戸とは異なり、自然石はほとんど混ざらない。他遺構との切り合い関係はなく、古代の須恵器坏蓋・非ロクロ土師器甕片や、中世の瀬戸美濃焼瓶類胴部片、被熱した非ロクロ土師器皿底部片が出土した。

**SE1009**(遺構：第53図、遺物：第55図)

F-22区で検出した最も大きな石組井戸で、平面形態は胴の張った略方形を呈する。井戸の掘方は石組に近接しており、上端辺180～200cmを測る。井戸側の石組は、上端内辺110～120cm、深さ96cm、底面の標高14.65mを測る。石組は、40～50cm大の自然石の間に10～30cm大の自然石を配しながら、比較的粗く5～6段積み上げ、最上段のみは仕上がり面を意識して30～50cm大の自然石を長手積みする。また、底面中央を1段掘り下げ、水溜施設として曲物側板(径30cm、残存高14cm)を据え置き、その外縁を10～20cm大の自然石を丁寧に配しながら、しっかりと固定する。廃絶時は、30～40cm大の自然石が混ざる灰色弱粘質土で埋めた後に、暗灰色弱粘質土、灰色砂質土が自然堆積する。東側でSE1010と隣接し、他遺構との切り合い関係は暗渠排水、整地土105より古く、17世紀中葉の肥前系陶器天目碗(第72図181)が出土したP1112より新しく位置付けられる。

出土遺物のうち、井戸底付近から出土した曲物底板(第55図35)、井戸側材に用いた曲物側板片(同図36)を図化した。35は径13.8cm、厚さ1.0cmを測る。側面13ヶ所に木釘痕(うち6ヶ所に木釘残存)があり、破損等により側板を取替えた痕跡と考えられる。36は高さ6.7cmを測り、内面には密にケビキを入れる。ともにスギ材を用いる。他に古代の土師器甕片数点が出土した。

**SE1010**(遺構：第53図)

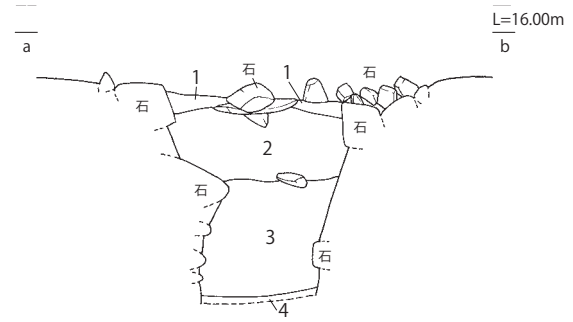
F-22区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は石組に近接し、平面不整円形を呈する。井戸側の石組は、上端内径80～90cm、深さ78cm、底面の標高14.80mを測る。石組は5段が残存し、30～40cm大の自然石を長手積みと小口積みを織り交ぜながら、仕上がり面を意識して丁寧に時計回りで積み上げる。また、上段の石組には4cm程度の大きさの裏込め石が確認できる。廃絶時に、下層から30～40cm大の自然石が混ざる灰色弱粘質土、濁灰色砂質土、濁茶灰色粗砂と灰色砂質土の混合土でしっかりと埋め戻す。他遺構との切り合い関係は暗渠排水、整地土105に前出し、古代の須恵器坏片、土師器甕細片が出土した。

**SE1011**(遺構：第54図、遺物：第55図)

G-23区で検出した石組井戸で、西側に張り出しが存在する。井戸の掘方は石組に近接し、不整楕円形を呈する。井戸側の石組は、すり鉢状に緩く、上端内径75～85cm、深さ82cm、底面の標高15.03mを測る。石組は6段が残存し、仕上がり面を意識しながら下から5段目までは15～30cm大の自然石の長手積みを基本に積み上げた後、6段目のみ長軸20～40cm大の自然石をしっかりと小口積みする。上段の石組には5～10cm程度の大きさの裏込め石が確認できる。また、石組に内接して2本の杭が打込まれており、失われたものの板等を用いた方形の井戸側材の設置が想定できる。井戸覆土は、下層から緑灰色粗砂、暗緑灰色粗砂～砂質土が堆積した後に、10cm大の石が多く混ざる明灰色砂質土、10～30cm大の石が混ざる灰褐色砂質土で埋め戻す。他遺構との切り合い関係はなく、井戸側に添った杭(第55図37・38)を図化した。37は残存長80.7cm、径約6cmを測る芯持ちのクリ材、38はコナラ節の材を用いた芯去りの分割材である。他に古代の須恵器坏蓋1点が出土した。

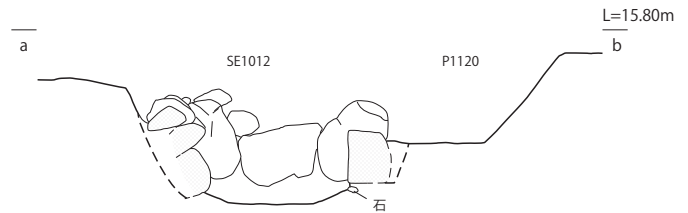
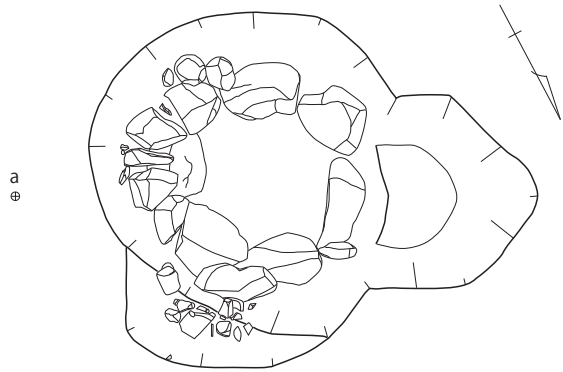
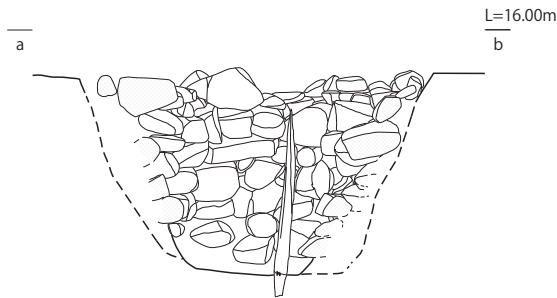


【SE1011】

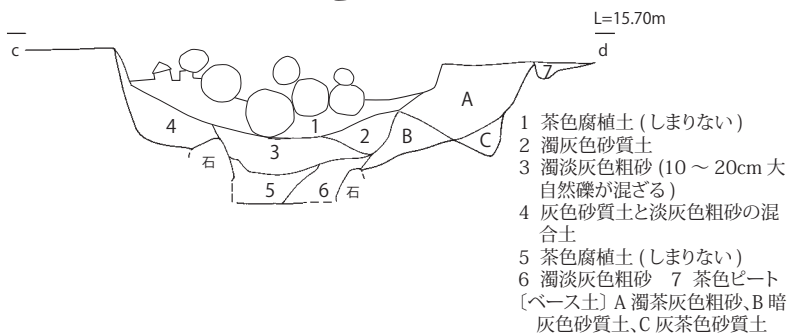
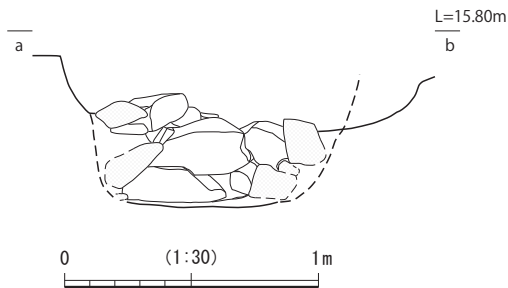
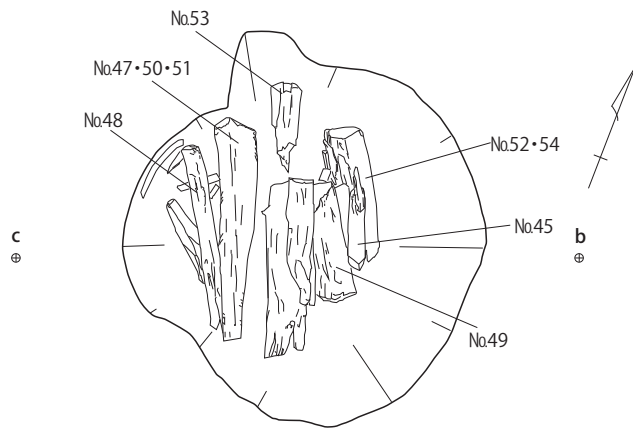
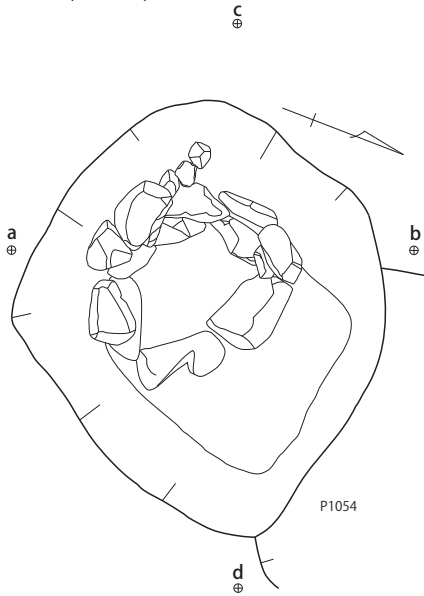


- 1 灰褐色砂質土 (10 ~ 30cm 大の自然石が混ざる。10cm 程度が多い)
- 2 明灰色細砂質土 (やや粘性あり。10cm 程度の石が多く混ざる)
- 3 暗緑灰色砂質土 (粗砂塊、5cm 以下の小石が多く混ざる)
- 4 緑灰色粗砂

【SE1012】

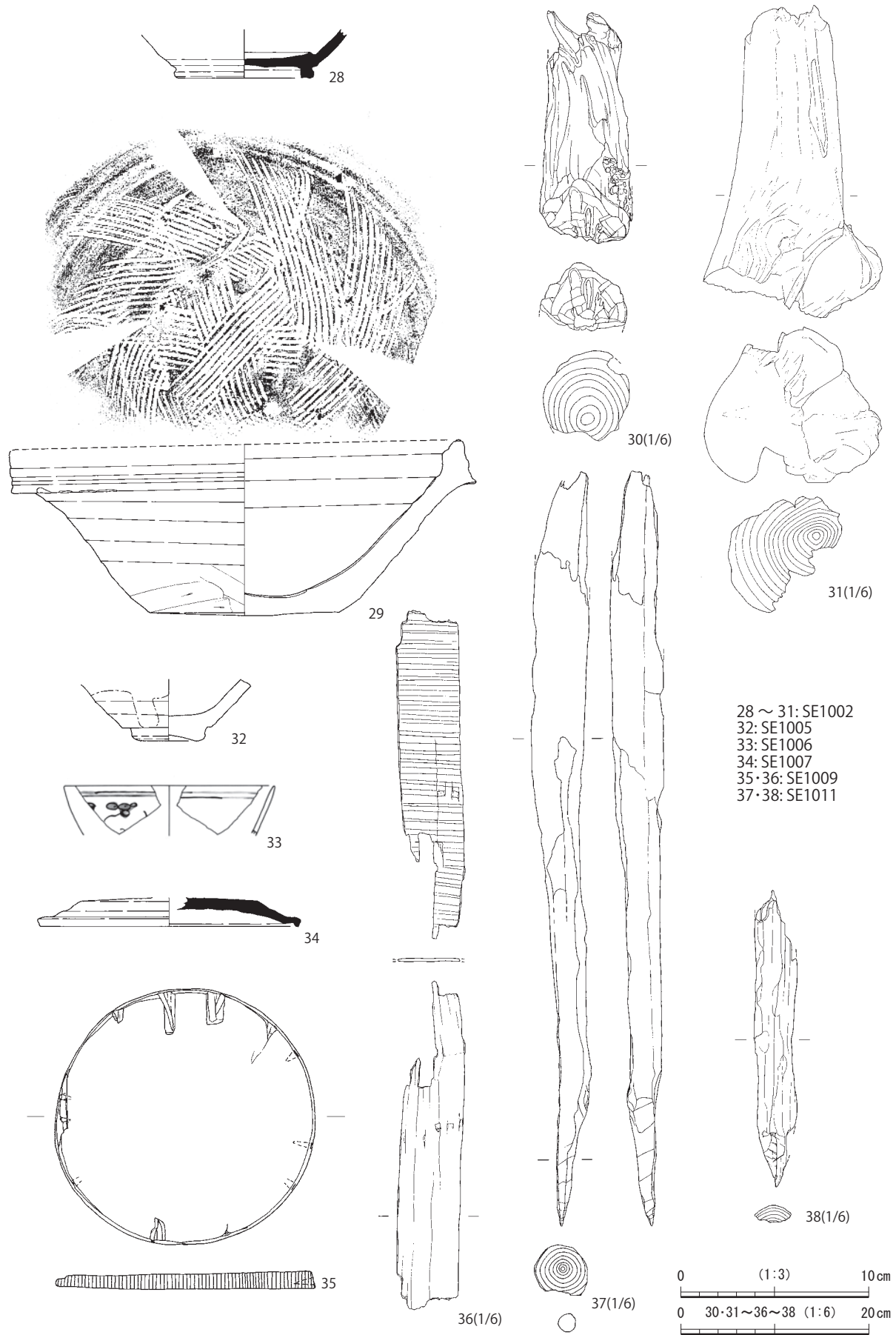


【SK1003(SE1013)】



- 1 茶色腐植土 (しまりない)
- 2 濁灰色砂質土
- 3 濁淡灰色粗砂 (10 ~ 20cm 大 自然礫が混ざる)
- 4 灰色砂質土と淡灰色粗砂の混 合土
- 5 茶色腐植土 (しまりない)
- 6 濁淡灰色粗砂 7 茶色ピート [ベース土] A 濁茶灰色粗砂、B 暗 灰色砂質土、C 灰茶色砂質土

第54図 G地区 第0・I面SE・SK平面図・土層断面図 (S=1/30)



第55図 第0・I面SE出土遺物実測図(S=1/3・1/6)

**SE1012**(遺構：第54図)

F-22区で検出した平面略円形を呈する石組井戸で、整地土105の造成により上部を損壊する。井戸の掘方は石組に近接し、井戸側の石組は上端内径70～75cm、深さ49cm、底面の標高15.11mを測る。石組は2段が残存し、1段目は長軸30～40cm大の自然石を長手積みに据え置き、2段目に20cm大の自然石を小口積みする。裏込め石はほとんど存在しない。覆土は濁暗灰色砂質土の単層である。他遺構との切り合い関係は、P1120より新しく、暗渠排水、整地土105より古い。遺物は、重複する整地土105覆土出土の可能性を残す近世肥前系磁器の染付碗細片(未図化)の他、古代の須恵器・土師器片が出土した。

**SK1003(SE1013)**(遺構：第54図、遺物：第57・58図)

E-26区で検出した。平面略円形を呈する石組井戸と、整地土101造成に伴う平面略方形の廃棄坑が重複しており、井戸上部は損壊する。井戸の掘方は井戸組石に近接して平面略円形を呈する。井戸側の石組は平面略五角形を呈し、上端内径40～60cm、深さ52cm、底面の標高15.13mを測る。仕上がり面を強く意識した石組は2段が残存し、長軸20～40cmを測る大振りの自然石を長手積みで据え置き、裏込め石は確認できない。また、腐食と湧水が著しく取上げできなかったが、底面にワラで編んだコモ片を確認している(写真図版11)。井戸覆土は、下層から濁淡灰色粗砂、しまりのない茶色腐植土が自然堆積した後、10～20cm大の自然石が混ざる濁淡灰色粗砂～砂質土で埋める。その後、水田造成の際に石組み上部を外して、沈降防止や廃棄を目的に長さ16～70cm台を測る12本以上の柱根等を同一方向に整然と据えきながら、しまりのない茶色腐植土とともに埋める。これらの柱根等は、水田造成時に周辺の遺構から抜き取られ、きれいに並べて一括廃棄されたものと考えられる。他遺構との切り合い関係はP1054より新しく、井戸本体は整地土101より古い。

第1層から出土した一括廃棄の木製品12点(第57図45～第58図56)を図化した。木製品は、径5cm前後の杭・部材等(45、46、54)、径7cm前後を測る柵等に用いたと考えられる柱根(48、55、56)、径11～20cmを測る柱根(47、49～53)、角材と考えられる54に大別でき、前二者は底面を斜め方向に加工する。また、54(スギ材)以外は、芯持ち材(45：コナラ節、46・55：スギ、47：ニレ属、48～52：マツ属複雑管束亜属(クロマツまたはアカマツ)、53：クリ、56：ケヤキ)を用いる。他に古代の須恵器・土師器片数点と、摩滅した珠洲焼甕胴部片1点が出土した。

## 4 土 坑(遺構：第56図、遺物：第57・58図、第10・12表)

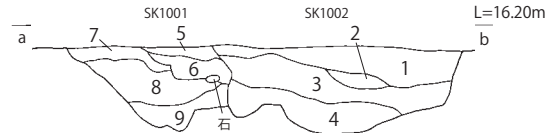
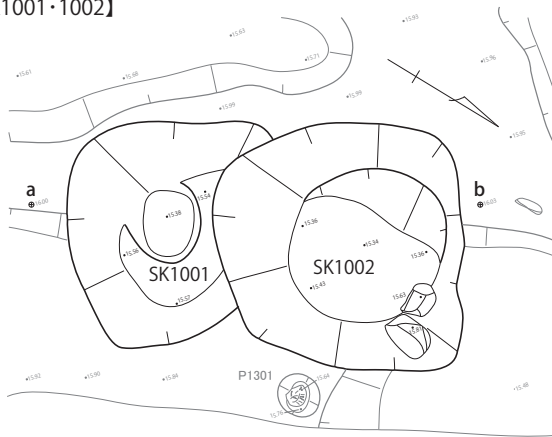
土坑(SK)は6基を確認している(SK1003・06・07は井戸に種別変更したため欠番)。平面形態から、楕円形～略方形を呈して素掘り井戸や廃棄坑の可能性をもつもの(SK1001・02・05・09)と、不整形な落ち込み(SK1004・1008)に大別できる。また、SK1005は12世紀代に、SK1001・02は近代以降に、それぞれ属する。

**SK1001**(遺構：第56図、遺物：第57・72図)

F-26-3区・F-27-1区で検出した平面不整形方形を呈する近代以降の土坑である。長辺178cm、短軸172cm、深さ65cmを測り、中央部は一段深くなる。底面に暗灰色砂質土が堆積した後、一度に埋められる。遺構の切り合い関係では、SK1002より古く、SD1001より新しい。覆土から出土した遺物のうち、第57図39の須恵器有台坏、第72図180の肥前系磁器染付碗を図化した。39は厚手で、外展する体部に扁平な台部を貼り付ける。180は淡い色調の呉須で梅・唐草文を描き、18世紀代に位置付けられる。他に須恵器・土師器片、15世紀後半のすり鉢を含む珠洲焼片数点、越前焼甕・すり鉢片各1点、古瀬戸皿片1点等が出土した。

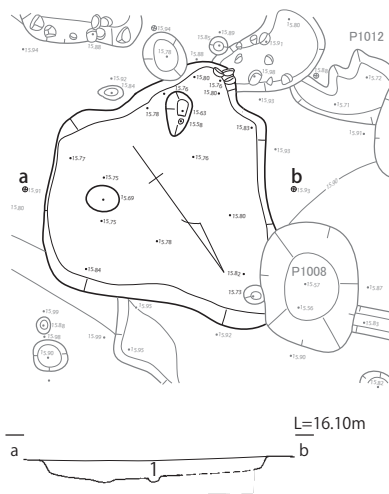
第2節 第0・I面の遺構と遺物

【SK1001・1002】



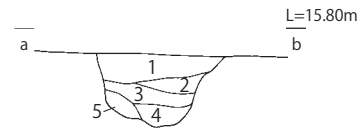
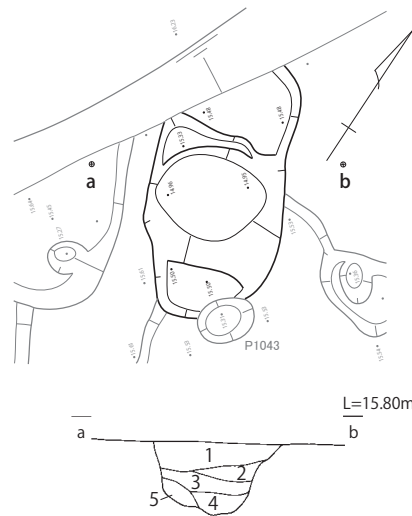
- 1 灰色砂質土 (黒色土がブロック状に混ざる)
- 2 1層と同質土 (1層より暗い)
- 3 灰色砂質土と黒色砂質土の混合土
- 4 にぶい灰色砂質土 (しまりない)
- 5 濁淡灰色砂質土 (灰色土がブロック状に混ざる)
- 6 濁灰褐色砂質土 (自然石が混ざる)
- 7 3層と同質土
- 8 灰色砂質土
- 9 にぶい暗灰色砂質土 (しまりない)

【SK1004】



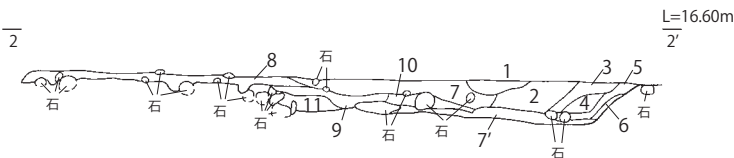
- 1 濁淡茶灰色粗砂と砂利の混合土

【SK1005】



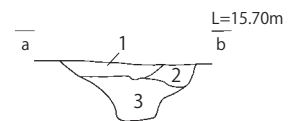
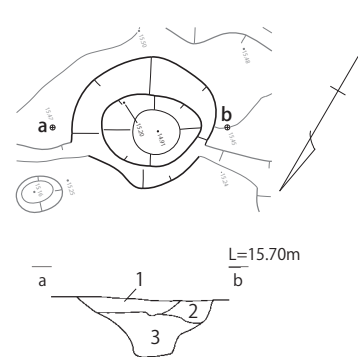
- 1 濁灰色砂質土、淡灰色砂質土、砂利の混合土 (固くしまる)
- 2 暗灰色砂質土と淡灰色砂質土の混合土 (粒子細かい)
- 3 暗灰色砂質土 (淡灰色砂質土ブロックが混ざる)
- 4 3層と同質土 (3層より暗い)
- 5 濁茶灰色砂質土 (砂利が混ざる。ベース土の崩落)

【SK1008】(第16図)

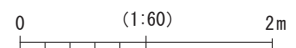


- 1 暗灰色砂質土
- 2 1層と同質土 (1層より明るい)
- 3 1層と同質土 (2層より明るい)
- 4 暗灰色砂質土 (褐色粗砂が混ざる)
- 5 灰色砂質土
- 6 暗灰色細砂
- 7 濁暗灰色シルト質土 (砂質が強い)
- 7' 濁暗灰色シルト質土 (腐植植物が多く混ざる)
- 8 灰褐色砂質土
- 9 暗灰色砂質土
- 10 暗灰色砂質土 (灰白色砂が混ざる)
- 11 暗灰色砂質土 (暗緑灰色砂が混ざる)

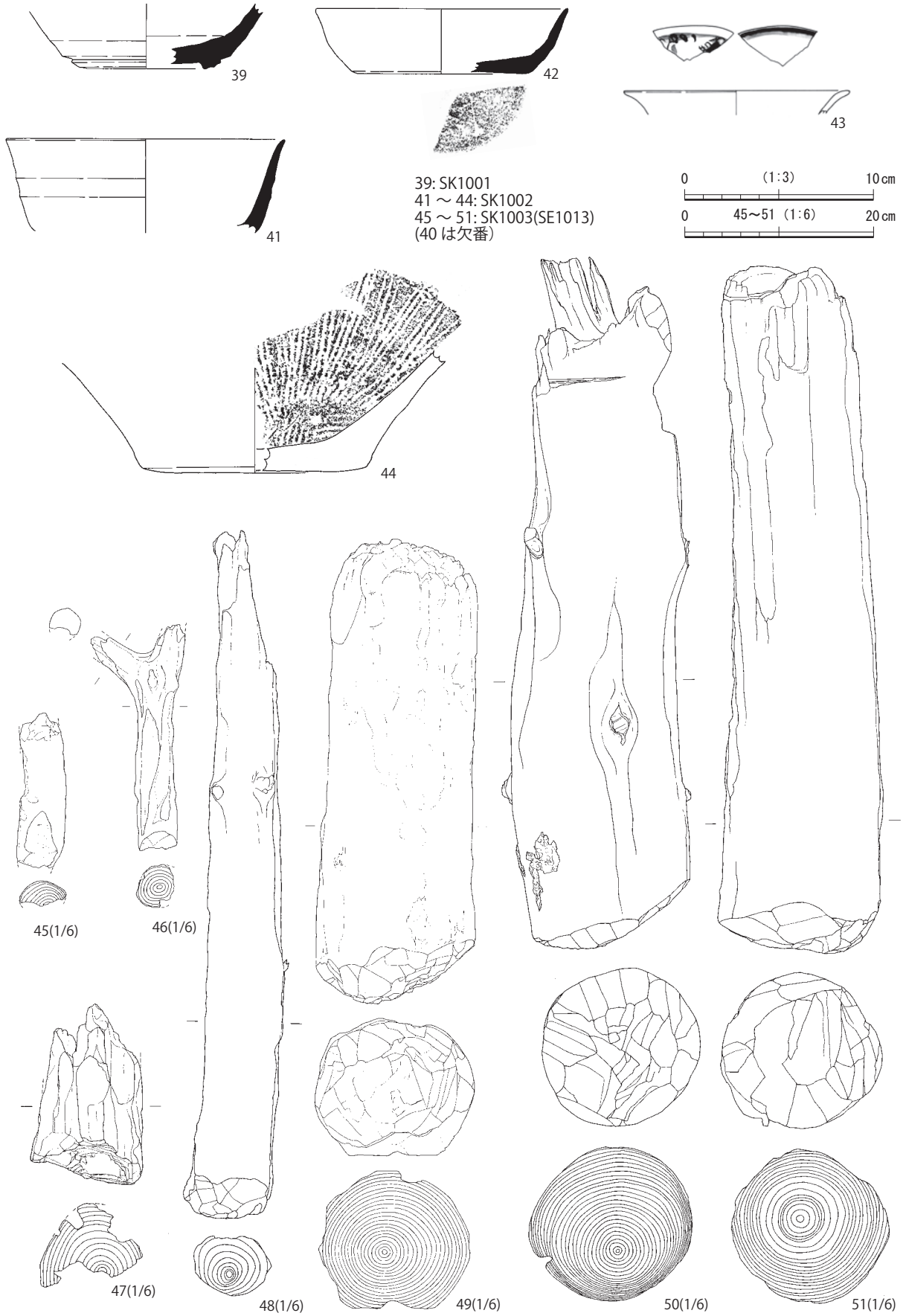
【SK1009】



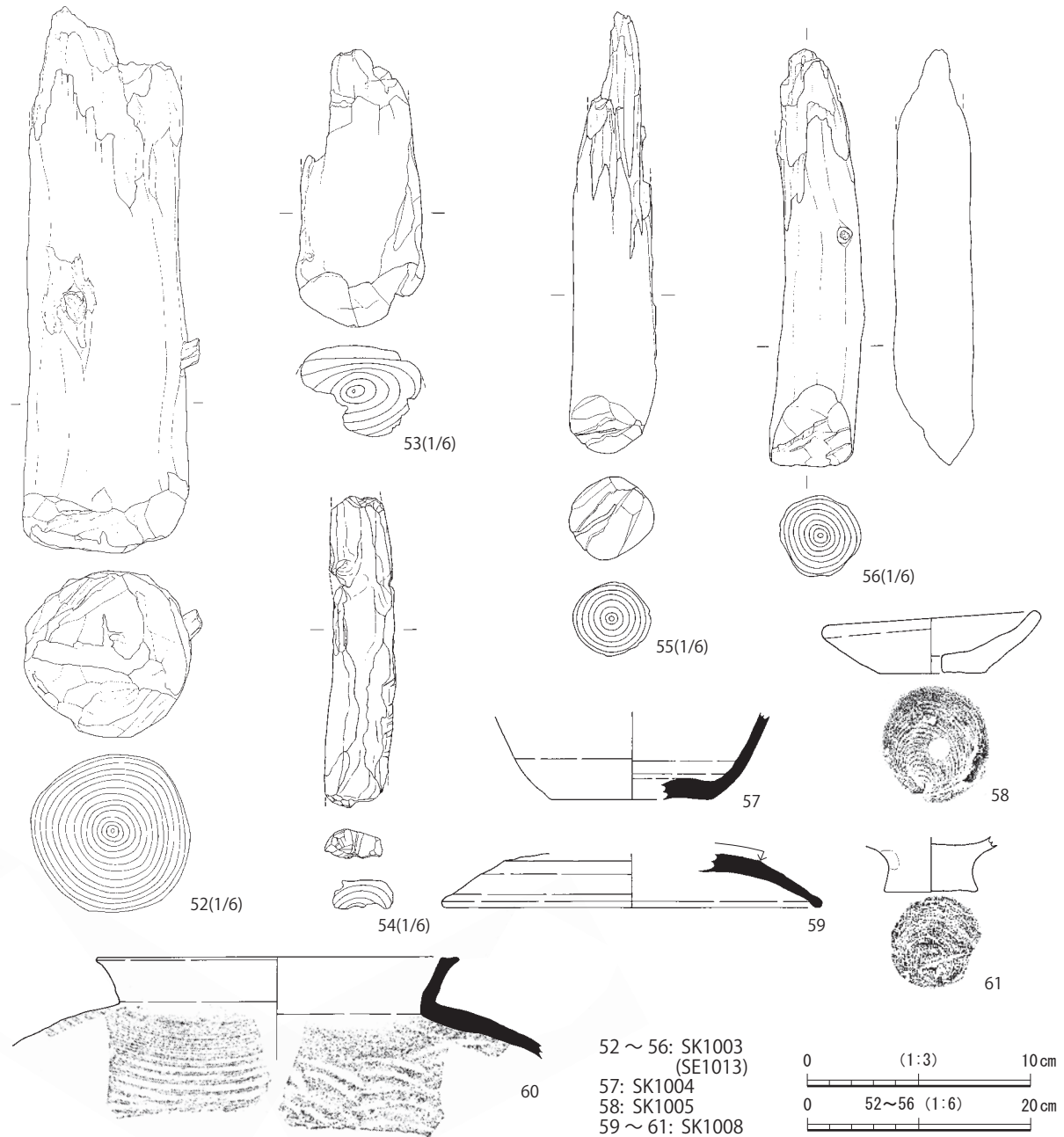
- 1 褐色弱粘質土と青灰色細砂の混合土
- 2 濁茶灰色粗砂 (褐色弱粘質土がブロック状に混ざる)
- 3 褐色腐植土と茶灰色粗砂がレンズ状に堆積



第56図 G地区 第0・I面SK平面図・土層断面図(S=1/60)



第57図 G地区 第0・I面SK出土遺物実測図1(S=1/3・1/6)



第58図 G地区 第0・I面SK出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)

SK1002(遺構：第56図、遺物：第57図)

F-26-3区・F-27-1区で検出した平面不整形を呈する近代以降の土坑である。長辺206cm、短辺196cm、深さ約70cmを測り、底面は起伏をもつ。底面に灰色砂質土が堆積した後、埋められる。遺構の切り合い関係はSK1001、SD1001より新しい。覆土から比較的多くの遺物が出土、第57図41～44を図化した。須恵器有台坏41は口径14.6cmを測る。還元の弱い須恵器無台坏42は口径13.3cm、器高3.4cmを測り、底部外面は使用に伴い磨耗する。中国製の染付碗43は、口縁部は端反りする。内面に被熱痕を残し、15世紀後半～16世紀代に位置付けられる。越前焼すり鉢44は、内外面に赤褐色のサビ釉を施し、使用に伴う磨耗が著しい。また、煮沸容器に転用されたため、水平方向に煤が付着する。16～17世紀代に位置付けられる。他に須恵器・土師器、珠洲焼、越前焼、明治時代以降を含む陶磁器片多数が出土した。

**SK1004**(遺構：第56図、遺物：第58図)

F-26-2区で検出した不整形な浅い落ち込みである。長軸約195cm、短軸約185cm、深さ17cmを測り、底面は平坦である。濁淡茶灰色粗砂と砂利で埋められ、他遺構の切り合い関係はP1008より古い。覆土から古代の須恵器・土師器片約40点が出土、うち第58図57の深身の須恵器坏類57を図化した。

**SK1005**(遺構：第56図、遺物：第58図)

E-25-1・3区で検出した平面隅丸長方形を呈する土坑である。長軸200cm以上、短軸約95cm、深さ約65cmを測り、平面略円形を呈する中央部が一段深くなる。覆土は埋土を基本とし、他遺構との切り合い関係は整地土101、SB113より古い。覆土から完形のロクロ土師器小皿第58図58が出土し、祭祀的行為として埋納した可能性が高い。口径9.3cm、器高2.8cmを測り、焼成前に底部穿孔を行う。12世紀前半に位置付けられる。他に古代の土師器甕片が出土した。

**SK1008**(遺構：第16・18・56図、遺物：第58図)

G-23-3・4区で検出した平面不整形を呈する落ち込みである。長軸420cm以上、短軸約160cm、深さ約30cmを測り、底面は比較的平坦である。覆土は、暗灰～灰褐色系の砂質土とシルト質土が複雑に堆積する。遺構の切り合い関係はSD1018より古く、SE1007より新しい。出土遺物のうち、第58図59～61を図化した。須恵器坏蓋59は口径16.5cmを測り、口縁端部を丸くおさめる。須恵器甕60は口縁部内端が使用に伴い著しく磨耗する。底部柱状を呈するロクロ土師器皿61は、二次被熱で煤が付着する。他に須恵器・土師器約40点、珠洲焼甕片4点、在地系と考えられる土師器すり鉢片1点が出土した。

**SK1009**(遺構：第56図)

F-21-4区で検出した平面不整形を呈する土坑で、素掘り井戸の可能性をもつ。径100～104cm、深さ44cm、底面の標高14.91mを測る。上部はすり鉢状の掘方もち、井戸とした場合は底面に曲物側板等の水溜施設が想定できる。褐色腐植土と茶灰色粗砂が自然堆積した後に埋められており、遺構の切り合い関係では整地土104より古い。古代の須恵器・土師器片が出土した。

## 5 ピ ッ ト

調査区全体で多数のピットを検出しており、復元できなかった建物等構造物の柱穴や素掘り井戸を含むものと考えられる。現地で作成した断面図は第59・60図に載せてある。以下では、主に遺物を実測した特徴的なピットについて記す。

**P1003**(遺構：第22図、遺物：第61図)

F-26-1区で検出し、平面略円形を呈する。長径110cm、短径約70cm、深さ約42cmを測り、覆土はベース土が混ざる暗灰色砂質土である。遺構の切り合い関係はP1025・26より古い。覆土上層南東寄り(標高15.84m)で裏面を上方に向けた銅銭2点が重ねて埋められる。第61図62は摩滅が著しいが、北宋銭で真書体の天聖元寶と考えられる。63は背宣・上月の開元通寶である。他に須恵器・土師器片約10点が出土した。

**P1019**(遺構：第20・59図)

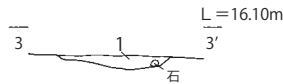
G25-4区で検出し、平面略楕円形を呈する。径45～60cm、深さ27cmを測り、ベース土が混ざる濁灰色砂質土で埋められる。SD1010より古い柱穴で、出土遺物はない。

**P1022**(遺構：第20・59図)

F25-3区で検出し、平面略円形を呈する。径120～130cm、深さ75cmを測り、中央部は1段深くなる。断面形状からSE1008と類似した曲物側板を用いた井戸の可能性もち、遺構の切り合い関係は耕作に伴う小溝群より古い。遺物は第Ⅲ面以下に属する須恵器・土師器片約20点、13世紀代の非ロクロ土師

第2節 第0・I面の遺構と遺物

【F26区-2 P1009】(第22図)



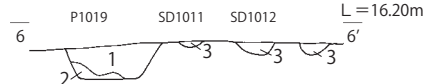
- 1 濁茶色砂質土 (10～20cm 大の自然石が多く混ざる)

【G26区-1 P1015】(第20図)



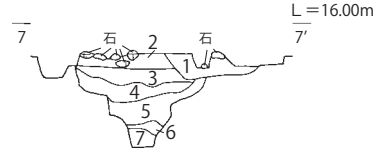
- 1 濁茶色砂質土 (10～20cm 大の自然石が多く混ざる)
- 2 灰色砂質土と淡灰色粗砂 (ベース土) の混土 (10cm 大自然石が混ざる)

【G25区-4 P1019】(第20図)



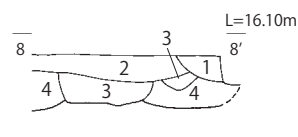
- 1 濁灰色砂質土 (ベース土 (淡青灰色砂質土) がブロック状に混ざる)
- 2 濁青灰色砂質土 (灰色土がブロック状に混ざる)
- 3 濁茶色砂質土 (淡灰色細砂層状に入る)

【F25区-3 P1022】(第20図)



- 1 灰茶色砂質土
- 2 灰茶色砂質土 (やや暗い)
- 3 灰色砂質土と淡灰色粗砂の混合土
- 4 暗灰色砂質土 (淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 5 灰色粗砂 (暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 6 濁暗灰色砂質土 (やや汚れる)
- 7 6層と淡灰色粗砂の混合土

【F26区-3 P1031】(第20図)



- 1 整地土 101 覆土
- 2 灰茶色砂質土 (暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 3 灰色砂質土 (暗灰色土・淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 4 濁黒灰色砂質土

【E25区-3 P1040】(第19・21図)

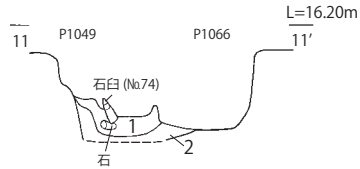


【E25区-3 P1044】(第19・21図)



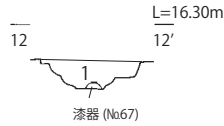
- 1 濁灰褐色砂質土 (ベース土 (緑灰色砂質土) が混ざる)
- 2 暗灰色砂質土と緑灰色砂質土の混合土
- 3 濁褐色砂質土 (10～20cm 大の自然石が多く混ざる)

【F24区-2 P1049・66】(第18図)



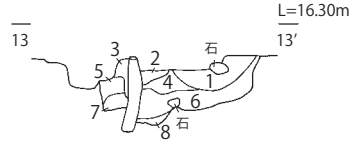
- 1 暗灰色粗砂
- 2 灰白色粗砂

【F24区-2 P1050】(第18図)



- 1 暗灰色砂質土 (少量の緑灰色細砂が不規則に混ざる)

【F24区-2 P1050・P1075】(第18図)



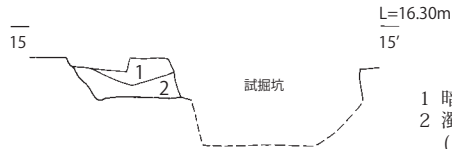
- 1 暗灰色砂質土 (漆喰か。緑灰色細砂が不規則に混ざる)
- 2 緑灰色砂 (暗灰色砂質土が不規則に混ざる)
- 3 暗灰色砂質土 (固くしめる)
- 4 2層と同質土 (2層より明るく、暗灰色砂が少量混ざる)
- 5 2層と同質土
- 6 1層と同質土 (1層より明るく、緑灰色砂が少量混ざる)
- 7 灰白色粗砂 (緑灰色砂が少量混ざる)
- 8 濁暗灰色砂質土

【E26区-4 P1054】(第22図)



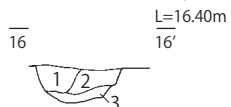
- 1 濁灰褐色砂質土 (ベース土 (淡灰色粗砂) がブロック状に混ざる。しまりなし)
- 2 淡灰色粗砂 (灰褐色土がブロック状に混ざる)

【G24区-4 P1071・試掘坑】(第18図)



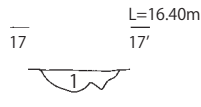
- 1 暗灰色砂質土
- 2 濁暗灰色砂質土 (不規則に緑灰色砂が混ざる)

【G24区-1 P1073】(第18図)

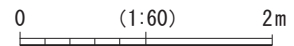


- 1 暗灰色砂質土 (不規則に緑灰色砂が混ざる)
- 2 1層と同質土 (やや明るい。不規則に緑灰色砂混ざる)
- 3 灰白色粗砂 (暗灰色砂質土が混ざる)

【G24区-1 P1074】(第18図)



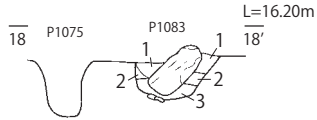
- 1 暗灰色砂質土



第59図 G地区 第0・I面ピット土層断面図(S=1/60)

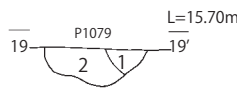


【F24区-4 P1075・1083】(第18図)



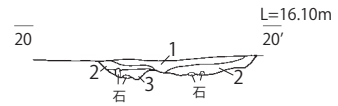
- 1 淡黄褐色砂質土
- 2 濁緑灰色砂質土
- 3 暗灰色砂質土

【E23区-1 P1079】(第17図)



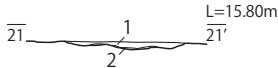
- 1 濁茶灰色粗砂～砂利
- 2 濁灰褐色砂質土(ベース土(淡灰色砂質土)が混ざる)

【G22区-4 P1085】(第16図)



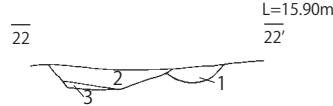
- 1 明灰褐色砂
- 2 1層と同質土(1層より明るい)
- 3 暗灰色砂質土(しまりあり)

【F22区-4 P1100】(第14図)



- 1 濁灰色粗砂
- 2 黒色灰層

【F22区-4 P1104】(第16図)



- 1 暗灰色砂質土(固くしまる)
- 2 青灰色砂質土と暗灰褐色砂質土の混合土
- 3 濁淡灰オリーブ色細砂

【F26区 SD1002・1006】(第20・22図)



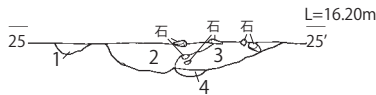
- 1 暗灰色砂質土
- 2 濁暗灰色砂質土
- 3 暗褐色砂質土
- 4 3層と同質土(やや明るい)

【F26区 SD1001】(第22図)



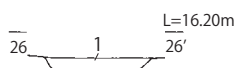
- 1 濁暗灰色シルト質土(湿地状の堆積)
- 2 明褐色砂質土
- 3 2層と同質土(やや明るい)
- 4 暗灰色砂質土

【F26区-4 SD1003・1004】(第22図)



- 1 暗灰色砂質土
- 2 暗灰色砂質土(灰白色砂がまだらに混ざる)
- 3 暗灰色砂質土
- 4 2層と同質土

【G25区-3 SD1010】(第20図)



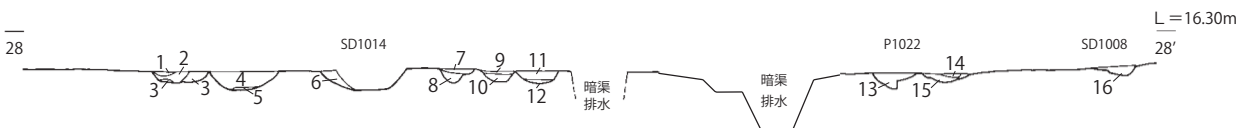
- 1 灰色砂質土(やや青味がかかる)

【F25区 SD1008・1010・1014】(第20図)

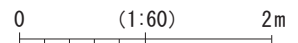


- |                  |                   |                 |
|------------------|-------------------|-----------------|
| 1 暗灰褐色砂質土(しまりなし) | 8 暗灰褐色砂質土(しまりなし)  | 15 暗灰色砂質土       |
| 2 灰白色砂           | 9 灰色砂             | 16 暗灰色砂質土       |
| 3 暗灰褐色砂質土(しまりなし) | 10 暗灰褐色砂質土(しまりない) | 17 暗灰色砂質土       |
| 4 暗灰褐色砂質土(固くしまる) | 11 灰色砂質土          | 18 緑灰色砂(川砂か)    |
| 5 暗灰褐色砂質土(しまりなし) | 12 暗灰色砂質土         | 19 暗灰色砂質土(やや暗い) |
| 6 灰白色砂           | 13 暗灰色砂質土         |                 |
| 7 灰色細砂           | 14 13と同質土(粒子粗い)   |                 |

【F-25区 SD1008・1014】(第20図)



- |                 |                       |                     |
|-----------------|-----------------------|---------------------|
| 1 暗灰褐色砂質土(耕作土か) | 7 暗灰褐色砂質土(耕作土か)       | 13 暗灰色砂質土(耕作土)      |
| 2 灰白色砂          | 8 緑灰色砂                | 14 暗灰色砂質土(やや暗い。耕作土) |
| 3 暗灰褐色砂質土(耕作土か) | 9 暗灰褐色砂質土(11層よりやや明るい) | 15 暗灰色砂質土(耕作土)      |
| 4 暗灰褐色砂質土(耕作土か) | 10 緑灰色砂               | 16 暗灰色砂質土           |
| 5 灰白色砂          | 11 暗灰褐色砂質土(耕作土か)      |                     |
| 6 濁暗灰色砂質土       | 12 灰白色砂               |                     |



第60図 G地区 第0-I面ピット・SD土層断面図(S=1/60)

器皿片1点や、肥前系磁器染付碗片1点が出土し、近世に属する遺構となる。

**P1034**(遺構：第21図、遺物：第61図)

E-26-3区で検出し、暗渠排水で東側が半壊する。覆土は10～20cm大の自然石が混ざるベース土と濁茶灰色砂質土の単層で、整地土101より古い。第61図71の木製品が出土した。高さ4.3cm、残存長28.7cmを測り、スギ材を用いる。折り曲げるための2～3ヶ所1単位のケビキや、底板と結合するための小穴(一部樺皮残存)から折敷側板の可能性が高い。土器類は出土していない。

**P1035**(遺構：第20・66図、遺物：第61図)

F-25-3区で検出し、平面略円形を呈する柱穴である。径44～50cm、深さ26cm、覆土は整地土101と同質の濁暗茶褐色砂質土である(第66図)。第61図72は、サイカチ材を用いた柱根である。径約18cmを測り、底面を3方向から尖らすように加工する。土器類は出土していない。

**P1049**(遺構：第18・59図、遺物：第61図)

F-24-4区で検出し、県教委の分布調査に伴う試掘坑により半壊する。深さ約70cmを測り、灰白～暗灰色粗砂で埋められる。第61図70の肥前系陶器、74の石臼が出土した。皿70は口径11.2cmを測り、内面は釉がかからず素地がみえる部分もある。16世紀末～17世紀初頭に位置付けられる。下臼74は軽石細粒が混ざる灰白色粗粒凝灰岩でつくられ、使用による片減りが著しいため7条1単位の乱れたおろし目はほとんどみえない。他に須恵器・土師器片、珠洲焼甕片、近世陶磁器細片が出土した。

**P1050**(遺構：第18・59図、遺物：第61図)

F-24-4区で検出し、平面長楕円形を呈する。長径74cm、短径25cm、深さ22cmを測り、覆土は漆喰状の緑灰色細砂が混ざる暗灰色砂質土である。切り合い関係はP1075より新しい。第61図67の漆器椀が中央底に倒位で埋納されていた。67は口径12.5cm、器高4.6cmを測り、ケヤキ材を横木取りする。内面は黒漆地に赤漆で草木様の文様を描く。土器類は出土していない。

**P1054**(遺構：第22・59図)

E-26-4区で検出し、平面略円形を呈する。径約150cm、深さ22cm(標高15.27m)を測り、淡灰色粗砂、自然石が混ざる濁灰褐色砂質土で埋められる。切り合い関係からSK1003(SE1013)、整地土101より古く、規模等から井戸の可能性をもつ。出土遺物はない。

**P1065**(遺構：第18図、遺物：第62図)

G-24-2・4区で検出し、柱穴の可能性をもつ。長軸76cm、短軸40cm、深さ35cmを測り、覆土は濁暗灰色砂質土である。第62図75の肥前系陶器甕片1点が出土した。薄手の75は、内面に同心円叩き痕が残り、胴部外面～底部外面外縁に鉄釉を施す。17世紀前半に位置付けられる。

**P1075**(遺構：第18・60図、遺物：第61図)

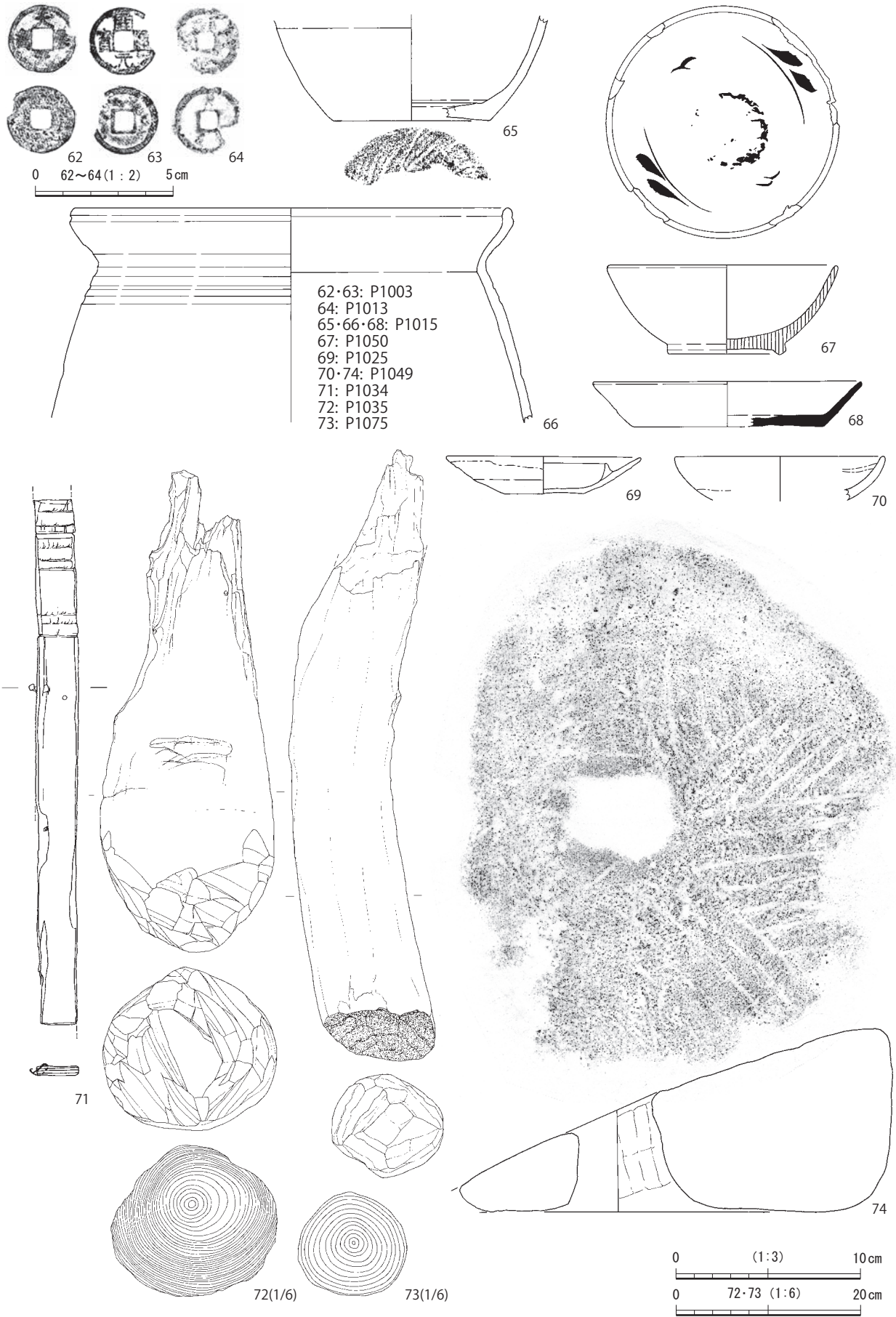
F-24-4区で検出した柱穴で、平面長楕円形を呈する。長軸約150cm、短軸46cm、深さ60cmを測り、切り合い関係はP1050より古い。第61図73はベース土に沈降して状態で検出した屈曲気味の柱根で、底面は被熱する。材はクリである。他に須恵器・土師器片、珠洲焼甕胴部片各1点が出土した。

**P1079**(遺構：第17・60図)

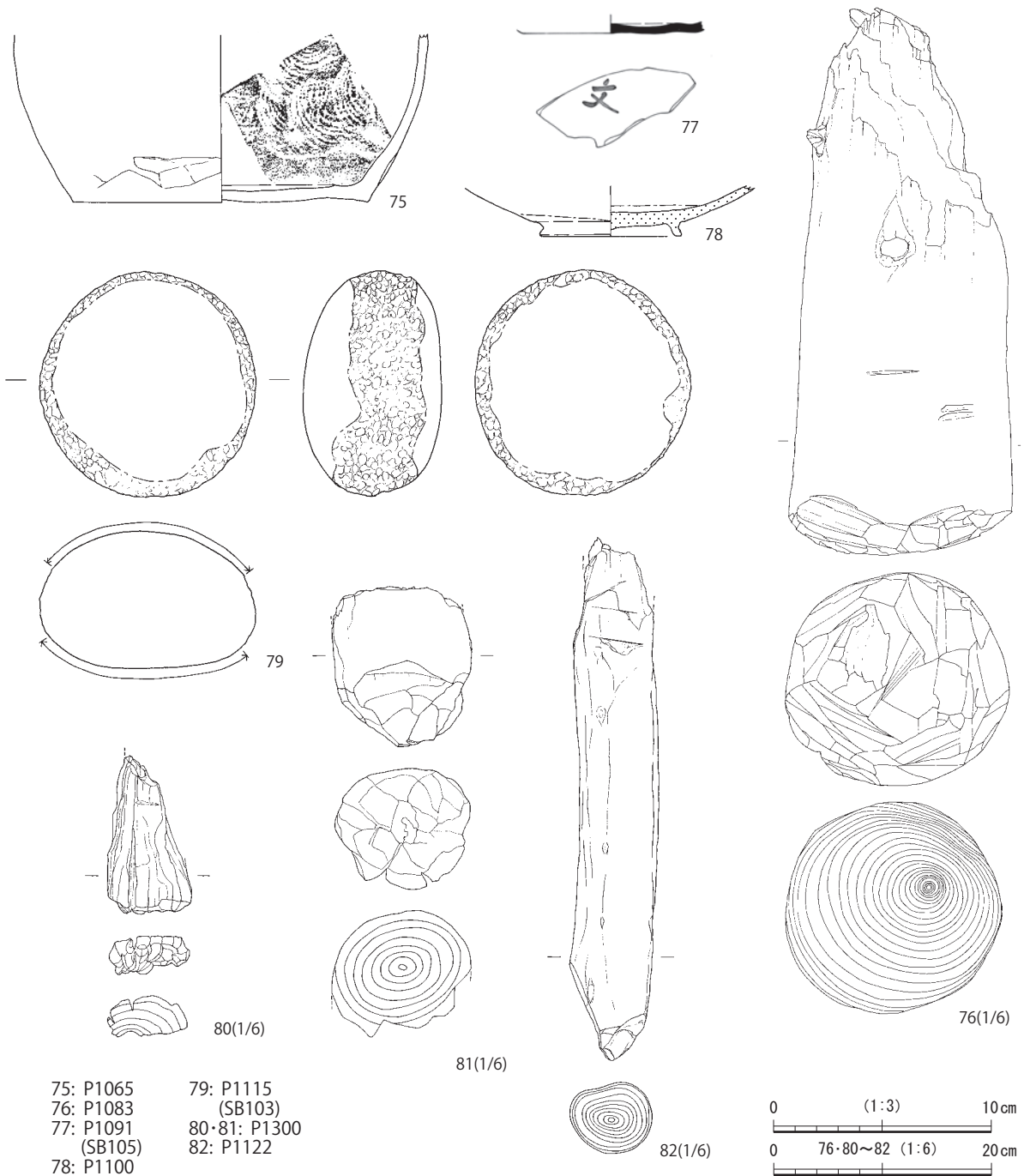
E-23-1区で検出し、平面不整楕円形を呈する。長軸約90cm、短軸約60cm、深さ28cmを測り、柱穴の可能性をもつ。出土遺物はない。

**P1083**(遺構：第18・60図、遺物：第62図)

F-24-2区で検出した柱穴で、平面不整円形を呈する。径54～78cm、深さ35cmを測り、第62図76の柱根が傾いて遺存した。76は径約20cmを測り、底面を他方向から丁寧に加工する。材は、マツ属複雑管束亜属(クロマツまたはアカマツ)である。他に須恵器、珠洲焼、越中瀬戸の細片や明治時代以降



第61図 G地区 第0・I面ピット出土遺物実測図1(S=1/2・1/3・1/6)



第62図 G地区 第0・I面ピット出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)

の磁器片が出土した。

**P1085**(遺構：第16・60図)

G-22-4区で検出した不整形な小穴で、整地土105造成過程の一痕跡である。

**P1100**(遺構：第14・60図、遺物：第62図)

F-22-4区で検出した浅い落ち込みである。平面不整楕円形を呈し、径104～110cm、深さ5cmを測る。底面は比較的平坦で、覆土は下層から厚さ1～2cmの黒色灰層、濁灰色粗砂となる。第62図78のK-90段階の猿投産灰釉陶器皿が出土、底部内面は使用に伴う磨耗が著しい。他に須恵器・土師器片各1点が出土した。なお、F地区第Ⅲ面では、比較的多くの緑・灰釉陶器が出土した。

**P1104**(遺構：第16・60図)

F-22-4区で検出した浅い落ち込みで、2つの遺構が重複する。平面不整楕円形を呈し、径140～160cm、深さ14cmを測る。出土遺物はない。

**P1112**(遺構：第16図、遺物：第72図)

F-22-3区で検出し、素掘り井戸の可能性をもつ。平面隅丸方形を呈し、一辺124～130cm、深さ68cm(標高14.82m)を測る。覆土は褐灰色弱粘質土で、切り合い関係ではSE1009より古い。第72図181の肥前系陶器鉄釉天目碗が出土、各部の面取りは鋭く、17世紀中葉に位置付けられる。他に須恵器・土師器片、珠洲焼壺片、越前焼すり鉢片が出土した。

**P1122**(遺構：第16図、遺物：第62図)

G-23-4区で検出し、平面不整円形を呈する。径約50cm、深さ13cmを測り、覆土は濁暗灰色砂質土である。遺構の切り合い関係はSK1008より古く、第62図81のクリ材を用いた杭が遺存した。81は径約7cmを測り、両端に加工痕が残る。他に須恵器甕片が出土した。

**P1300**(遺構：第22図、遺物：第62図)

F-26-1区で検出した。重複した2つの柱穴で、第62図80・81の柱根が遺存した。ともにクリ材を用いる。土器類の出土はない。

## 4 溝(遺構：第60・63図、遺物：第64図、第10・11・13表)

調査区のほぼ全域で、多数の溝を検出した。掘立柱建物に付属する区画溝は明確に抽出できず、SD1001～12・14～18・22～24・26が近代以降に位置付けられるとおり、ほとんどが近代以降の水田造成・耕作に伴う痕跡と考えられる。大きくは、用排水(SD1001・02・24等)、耕作に伴う小溝群(SD1008～12・14～17・19～21・27等)、暗渠排水に分けられる。

**SD1001**(遺構：第22・60図、遺物：第64図)

F-26・27区で検出した近代の溝で、調査区外北東側の現農道下に延びる。溝主軸方位はN-約35°Wを示す。幅1.70cm以上、深さ10～14cmを測り、溝側は起伏をもつ。覆土は砂質土、腐植物が多く混ざるシルト質土、自然石が水の流れて複雑に堆積する。遺構の切り合い関係から、SK1001・02より古く、SE1001より新しい溝となる。比較的多くの遺物が出土しており、うち第64図83～87を図化した。土師器壺類83は全体が磨耗し、外面は被熱による煤が付着する。時期不明。珠洲焼すり鉢片84は、内傾する口縁端部に乱れた波状文を施す。珠洲VI期に位置付けられる。土師器すり鉢85は、口径約31cmを測る。越前焼を模した在地産と考えられ、16世紀後半に位置付けられる。類似の個体として第69図139がある。肥前系陶器のすり鉢86は口径32.1cmを測る。内側に引き延ばした口縁端部に茶褐色の鉄釉を施す。17世紀前半に位置付けられる。越中瀬戸焼すり鉢87は口径26.5cm、器高12.4cmを測り、全面にサビ釉を施す。底部は内外面とも使用による摩滅が著しく、17世紀代に位置付けられる。同個体の破片はSD1006からも出土した。他に須恵器・土師器、珠洲焼、近世陶磁器や明治以降の染付瓶1点が出土した。

**SD1002・12**(遺構：第22・60・63図、遺物：第64図)

F・G-25・26区で検出した近代の溝で、SD1001にほぼ並行する。SD1003～07と同時に検出した溝状落ち込みをSD1002とし、SD1002～07除去後に検出した溝をSD1012の番号を付した。溝主軸方位は現水田主軸より若干西側寄りのN-約40°Wを示す。肩部はしっかりとせず、底面は水の流れて起伏に富む。幅80～115cm、深さ13～33cmを測り、覆土は、腐植物混ざりの暗灰色砂質土、灰白～灰色砂礫・粗砂・砂が流水により複雑に堆積する。遺構の切り合い関係は、SD1012がP1002(SB119柱穴)よ

【F26区-3 SD1012】(第22図)



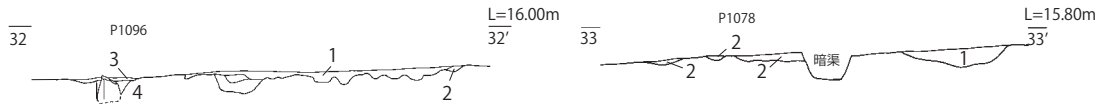
- 1 灰白色砂礫
- 2 灰白色砂礫 (腐植物が混ざる)
- 3 暗灰白色砂
- 4 暗灰色砂質土 (粒子細かく、腐植物が混ざる)
- 5 4層と同質土 (4層より粒子が粗く明るい。腐植物が混ざる)
- 6 灰色砂質土
- 7 暗灰白色粗砂 (3cm大の礫混ざる)
- 8 灰白色粗砂
- 9 灰色砂 (粒子細かい)
- 10 淡黒色砂質土 (第三面包含層と同質土)

【E・F23区 SD1022】(第16・17図)



- 1 灰褐色砂質土 (やや粘質)
- 2 1層と同質土 (砂利が混ざる)
- 3 1層と同質土 (ベース土 (明茶灰色砂質土)、砂利が混ざる)

【E・F23区 SD1023】(第16・17図)



- 1 暗灰色砂質土 (固くしまる)
- 2 1層と同質土 (ベース土 (茶灰色粗砂) がブロック状に混ざる)
- 3 灰褐色砂質土
- 4 淡灰色砂質土と3層の混合土

- 1 灰褐色砂質土 (砂利が混ざる)
- 2 暗灰褐色砂質土

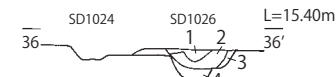
【F・G20～22区 SD1024】(第14・16図)



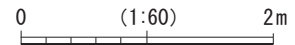
- 1 暗灰色砂質土 (灰白色砂が混ざる)
- 2 暗灰褐色砂
- 3 暗緑色灰砂

- 1 明灰褐色砂質土
- 2 オリーブ褐色砂 (暗灰色砂が混ざる)

【F20区 SD1026】(第13図)



- 1 濁灰色粗砂
- 2 濁褐色弱粘質土 (しまりなし)
- 3 茶灰色粗砂
- 4 1層と同質土

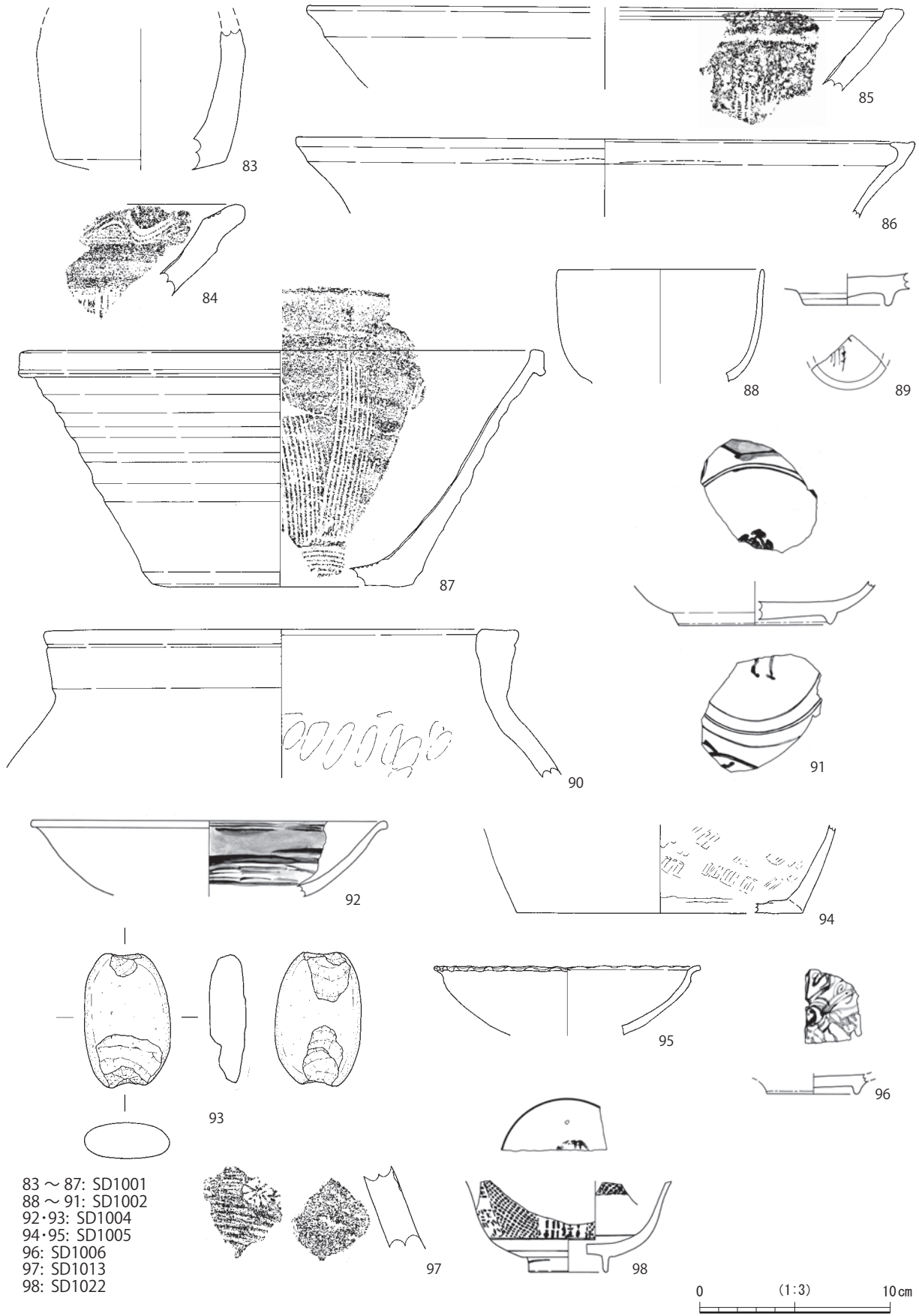


第63図 G地区 第0・I面SD土層断面図(S=1/60)

り新しい。遺物は、第64図88～91を図化した。肥前系陶器の碗88は口径10.7cmを測り、釉は明黄褐色を呈する。17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。89は初期伊万里の染付碗で、高台内に銘款「大明」を記す。越前焼甕90は口縁端部を外側に肥厚させながら平坦に仕上げる。釉は外面が赤褐色、内面が透明なオリーブ灰色を呈する。同個体の破片はSD1006、整地土101からも出土し、16世紀末頃に位置付けられる。91は、18世紀代の肥前系磁器の染付碗で、内面に五弁花を描く。他に古代の須恵器・土師器片10数点、珠洲焼片6点、明治時代の型紙摺りの白磁碗を含む陶磁器片10数点が出土した。

**SD1003～1007**(遺構：第20・22・60図、遺物：第64図)

F・G-26区で検出した。遺構検出時はSD1001・02と並行する溝群と認識し、SD1003～07の番号を付して調査を進めた(写真図版2)。結果からいえば、近代以降の耕地整理における暗灰色砂質土を基調とする盛土層の起伏であり、平面図は作成していない。参考として第60図に断面図を載せた。なお、F・G-26で検出した遺構は、この盛土を除去後に検出したものである。遺物は、SD1004出土の第64図92・93、SD1005出土の94・95、SD1006出土の96を図化した。刷毛目唐津の皿92は口径18.5cmを測り、内面に白化粧土を塗る。17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。石錘93は残存重量92.1gを測る。94は肥前系陶器壺類と考えられ、外面に不透明なオリーブ黄色を呈する灰釉を施す。胴部内面に格子



第64図 G地区 第0-I面SD出土遺物実測図(S=1/3)

状タタキ痕が残り、17世紀後半に位置付けられる。95は越中瀬戸焼の鉄釉ひだ皿で、口径14.0cmを測る。釉は褐～黒褐色を呈し、17世紀前半に位置付けられる。96は中国製染付碗底部で、焼成はあまりよくない。内面に繊細な花文が描かれ、15世紀後半～16世紀代に位置付けられる。他に古代の須恵器・土師器や、珠洲焼、越前焼、非ロクロ土師器小皿、近世・近代の陶磁器が出土した。

**SD1008～11**(遺構：第20・59・60図)

F・G-25・26区で検出した。周辺の南西－北東方向約18m、北西－南東方向約12mの範囲に分布するSD1014～16等の同規模の溝を含めて、近代の耕作に伴う小溝群となる。溝主軸方位は、現水田主軸より西側寄りのN-40～47°Wを示し、やや南側に湾曲しながら掘られる。溝幅は、SD1010が80～94cm、その他の溝は幅20～40cmを測る。深さは5～15cm程度で、覆土は小石が混ざる濁茶色や灰～暗灰色を呈する砂質土である。遺物は、SD1008から19世紀以降の肥前磁器白磁紅皿等陶磁器片5点、SD1011から須恵器甕片1点が出土した。

**SD1013**(遺構：第22図、遺物：第64図)

F-26区で検出した近世の浅い溝状の落ち込みで、検出長約4m、幅150～180cm、深さ6～34cmを測る。底面は平坦で、覆土は濁暗灰色砂質土の単層である。遺構の切り合い関係は、SB120柱穴のP1051より前出する。遺物のうち、第64図97の珠洲焼甕は印花文を刻印する。他に古代の須恵器・土師器片10数点、珠洲焼甕片4点、17世紀代の肥前や越中瀬戸等の陶磁器片7点が出土した。

**SD1014～17**(遺構：第18・20・60図)

F・G-25区で検出し、SD1008～12等と一体をなす近代以降の耕作に伴う小溝群である。小溝群は、南西-北東方向約18m、北西-南東方向約12mの範囲に周辺に分布する。溝主軸方位はN-40～46°W、それと直交するN-約40°Eを示し、後者はほぼ2m等間隔に配される。検出長8～11m、溝幅25～80cm、深さ5～15cmを測り、しっかりと断面逆台形に掘り込まれる。覆土は暗灰褐～灰色を基調とする砂質土で、灰白～灰色砂を層状に挟む溝も存在する。遺構の切り合い関係から、SB110・117・118、SA106より新しい小溝群となる。遺物は、SD1014から胎土目を残す肥前系陶器碗片1点、SD1015・16から須恵器・土師器片、SD1017から須恵器坏蓋片1点が出土した。

**SD1018**(遺構：第16・18・19図)

F・G-23区、E・F-24区で検出した。バイパス用地を横断する農業用排水管を埋設した溝である。

**SD1019～21**(遺構：第19・66図)

E-24区において整地土103除去後に検出した耕作に伴う小溝群である。北東－南西方向約9m、北西－南東方向約7m以上の範囲に分布し、他の直線的な小溝群と一体をなす。溝主軸方位はN-53～58°W、または直交する位置関係にあるN-約40°Eを示す。検出長1.4～7.6m以上、幅20～60cm、深さ5～10cmを測り、溝底は平坦である。覆土は、整地土103の基調をなす覆土とは異なり、濁茶褐～灰褐色砂質土または淡灰色粗砂を基本とする。整地土103造成前に存在した耕作地の耕作痕か、整地土103造成時における1工程かの判断できないものの、整地土101～103全面で小溝群が検出できないことから、前者の可能性が高いように思われる。遺構の切り合い関係では、SB108～110、SA103・105を構成する柱穴より新しい。遺物は、SD1019・21から古代の土師器片数点、SD1020から14世紀後半の珠洲焼すり鉢片1点が出土したにとどまる。なお、整地土101・102除去後に検出した、近似した主軸方位・規模をもつ小溝群も同様な位置付けができる。

**SD1022**(遺構：第16・17・63図、遺物：第64図)

E～G-23区で検出した不整形な溝状の落ち込みで、屈曲しながら北西方向にのびる。幅40～460cm、深さ9～21cmを測り、覆土は灰褐色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係から、



SB105・106を構成する柱穴より新しい。遺物のうち、第64図98は明治以降の型紙摺りの磁器碗で、体部は外反する。他に古代の須恵器・土師器片が出土した。

**SD1023**(遺構：第17・63図)

E-23区で検出した溝状の落ち込みで、整地土105造成に伴う作業の一部をなす。古代の須恵器・土師器片約70点、中世の白磁碗1点、近世の磁器碗片3点、近代の黒瓦片2点出土した。

**SD1024**(遺構：第13・14・16・63図)

F-20・21区、G-21・22区で検出した現況水田の排水溝である。溝主軸方位はN-約65° Eを示し、南西方向に流下する。遺物は、古代の須恵器・土師器片40数点、珠洲焼甕胴部片2点、18世紀代の肥前陶器鉄釉鉢(未図化)等が出土した。

**SD1025**(遺構：第13図)

G-21区で検出した不整形な溝状の落ち込みで、F地区第0・I面には続かない。深さ23cm、覆土は濁暗灰色砂質土となる。遺物は、古代の須恵器・土師器片約10点、近世以降の白磁小坏(未図化)等が出土した。

**SD1026**(遺構：第13・63図)

F-20区で検出した溝状の遺構で、現況水路SD2024より新しい。粗砂、弱粘質土が流水で堆積、古代の土師器細片が出土した。

**SD1027**(遺構：第17図)

E-22区で検出した耕作に伴う溝である。溝主軸方位N-約10° E、検出長約2.5m、幅22～72cm、深さ約10cmを測り、覆土は暗灰褐色弱粘質土の単層である。遺物は出土していない。E・F-22区、E-23区には、主軸方位・規模の類似した小溝が点在し、これらと同時期と考えられる。

**自然流路(NR)1001**(遺構：第18図)

G-24区で検出した溝状遺構で、調査区外南東側に延びる。幅100～120cm、深さ約10cmを測り、覆土は腐植物が多く混ざる灰褐色砂質土である。SD1003～07と同じ性格と考えられる。図化遺物はない。

**暗渠排水**(遺構：第65図)

第65図のとおり整地作業後に敷設した6条の暗渠排水を確認した。ほぼ等高線に沿って敷設されており、流水機能維持に竹・杉枝を用いる。図化した遺物は、包含層に含めて記述してある。

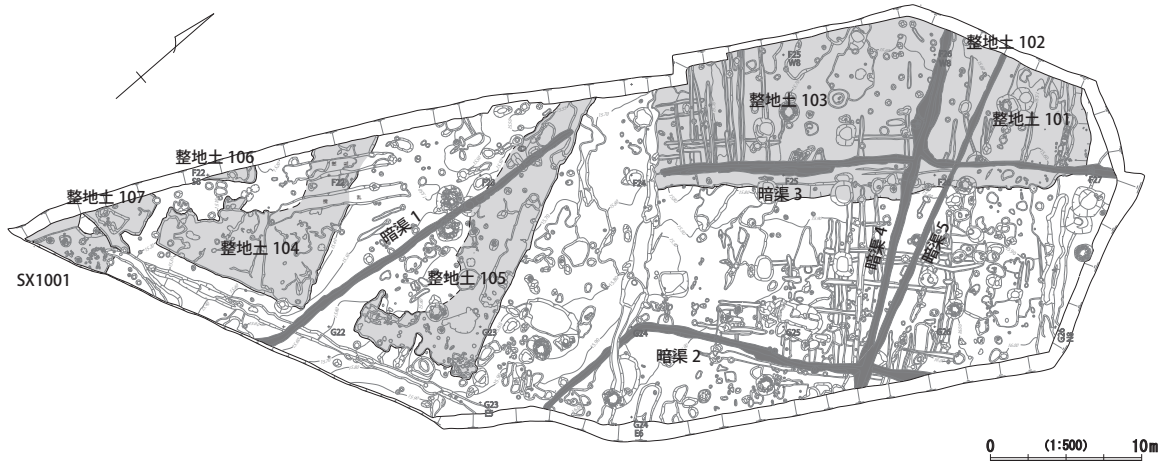
5 その他の遺構(遺構：第65～67図、遺物：第68図、第11・13・15・16表)

水田造成に伴う整地行為を大きく4ヶ所で確認した。これらは、昭和40年前後に行われたと考えられる耕地整理に伴う新しい造成であるが、比較的多くの遺物が出土したため、その概要を記したい。

**整地土101～103**(遺構：第65～67図、遺物：第68図)

E-24～26区で検出した整地作業痕跡である。同一施工の整地作業であり、現地調査時は便宜的に暗渠排水で分けけて遺構番号を付した。主軸方位はN-約40° E(N-約50° W)を示す。整地の規模は、南北方向約27m、東西方向10m以上、盛土厚25～40cmを測る。現水田区画とは主軸方位が異なり、旧水田区画を反映したものと考えられる。造成作業は、まず旧耕作土の除去・基盤の整地(主に削平)を行い、整地土101南西端で暗渠排水5に沿って上幅約90cmの土手(第67図第9層：灰褐色砂質土、写真図版15)を築いた後に盛土作業を行い、最後に暗渠排水を入れる。

整地土101出土遺物のうち第68図99～109を図化した。珠洲焼甕片99の口縁部は肥厚する。肥前系陶器の碗100は口径9.4cm、器高7.1cmを測り、高台接地面以外ににおい黄色の釉を施す。17世紀後



第65図 G地区 第0・I面整地土・暗渠排水位置図(S=1/500)

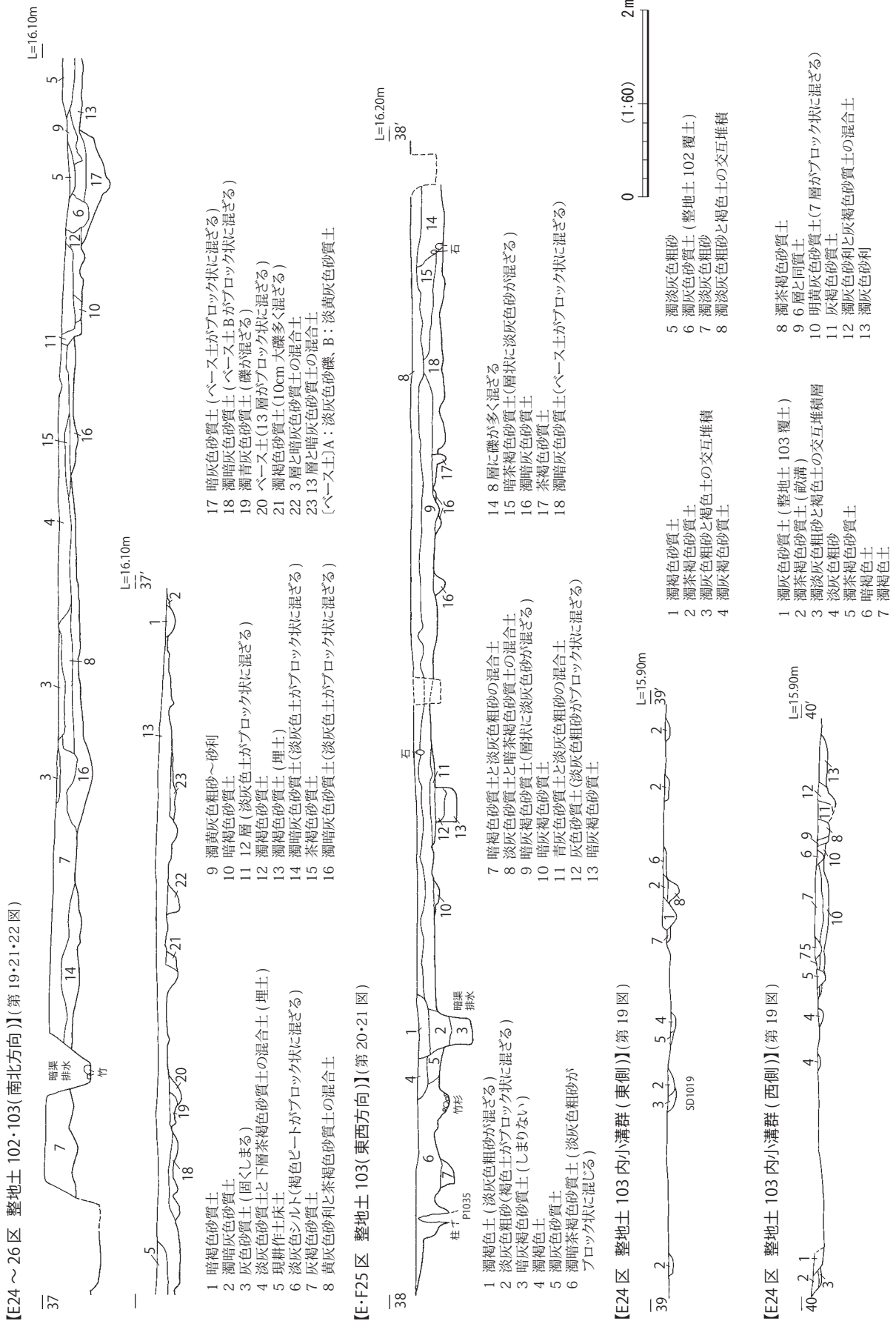
半～18世紀前半に位置付けられる。101は型紙摺りで文様を施した磁器碗で、明治以降のものである。産地は不明。肥前系陶器の皿102は蛇の目釉剥ぎで、内面に透明釉、外面に銅緑釉を施す。18世紀前半の嬉野窯産と考えられる。志野焼の皿片103は口径11.9cmを測り、口縁部は大きく外反する。16世紀末～17世紀初めに位置付けられる。104は越中瀬戸焼の鉄釉向付で、口径10.2cm、器高3.1cmを測る。釉を施さない底部内面に径4.3cmの重ね焼き痕が残る。17世紀前半に位置付けられる。19世紀代と考えられる陶製片口鉢105は、平坦に仕上げた口縁端部に銅緑釉を施す。古瀬戸の折縁皿106は口径19.5cmを測る。口縁端部を上方に小さくつまみ上げ、14世紀代に位置付けられる。107は須佐唐津のすり鉢である。口縁部外面は鋭利な面取りを行い、17世紀前半に位置付けられる。中砥108は、幅7.3cmの平坦な砥ぎ面をもつ置き砥石である。緑色細粒や気泡が混ざる流紋岩で、近世以降の天草砥と考えられる。円形板109は腐食が著しい。他に第Ⅲ面以下に属する須恵器・土師器片、中・近世の陶磁器片多数や、明治時代の型紙摺り磁器碗片が出土した。整地土103出土遺物は、第68図110～113を図化した。内面黒色処理を施したロクロ土師器有台碗110は、台部は目立たず、底部中央を焼成前に穿孔する。ロクロ土師器皿111は薄手で完形に近い。鉄釘112は重さ18.1gを測り、先端は使用のため湾曲する。肥前系磁器染付皿113は内面に五弁花と雲や花の文様を描き、18世紀前半に位置付けられる。他に第Ⅲ面以下に属する土師器、珠洲焼、近世陶磁器、明治時代の瓦の破片が出土した。

**整地土104～107**(遺構：第65・67図、遺物：第68図)

E～G-20～23区で検出した整地作業痕跡である。西側の農道を挟んだ現水田区画と主軸方位・施工プランが完全に一致する昭和40年前後の耕地整理痕跡である。また、SD1023と番号を付した溝状の落ち込みは、整地土105の整地作業の一部をなす。整地土101～103で検出した耕作に伴う直線的な小溝群(SD1019～21等)は検出できない。遺物は、第68図114～117を図化した。整地土104出土の114は、銅製飾り金具であり、一對の花文を打ち出し、3ヶ所に鋳留孔が残る。整地土105出土の115・116は須恵器である。瓶類底部115は小振りな台部がしっかりと外展する。甕116は口径20.0cmを測り、口縁端部を折り曲げて肥厚させる。整地土106出土の117は白磁碗V類<sup>(3)</sup>で口径約17cmを測り、口縁端部は外側にのびる。他に、整地土104から古代の須恵器・土師器片、珠洲焼片、近世陶磁器片が出土した。

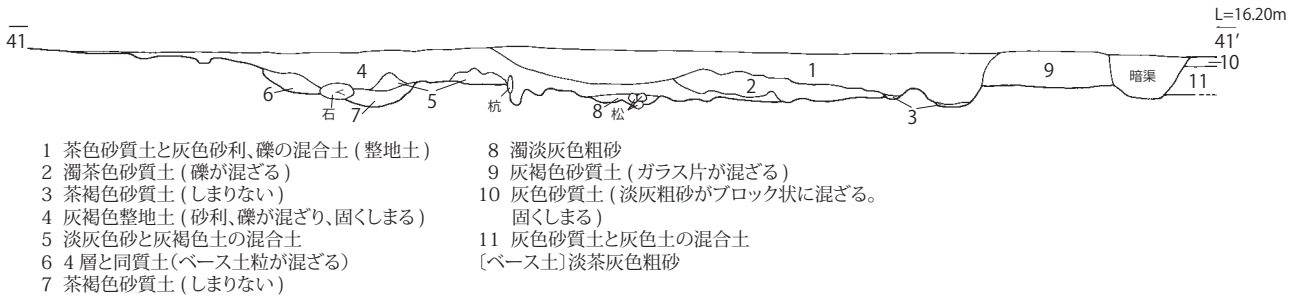
**SX1001**(遺構：第13・67図、遺物：第68図)

F-20区で検出した不整形な落ち込みで、調査区外西側に延びる。幅5m以上、深さ約20cmを測り、

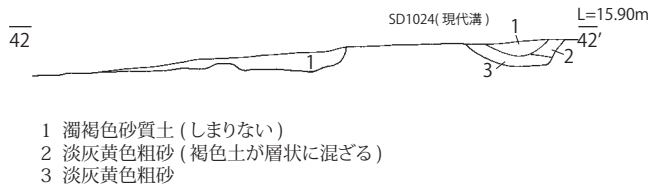


第66図 G地区 第O・I面整地土土層断面図1(S=1/60)

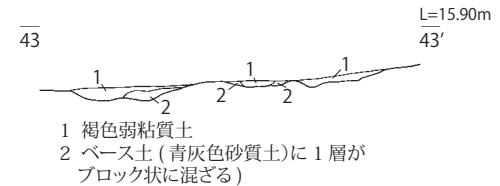
【E26区 整理土 101】(第21・22図)



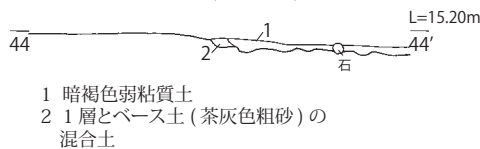
【F21区 整地土 104(東西方向)】(第13図)



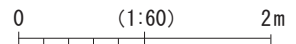
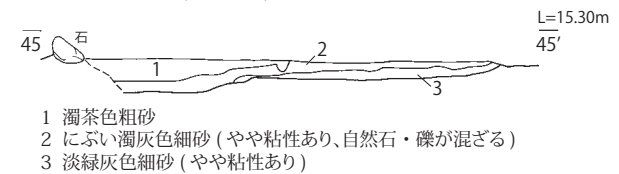
【F21区 整地土 104(南北方向)】(第14図)



【F21区 整地土 107】(第13図)



【F20区 SX1001】(第13図)



第67図 G地区 第0・I面整地土土層断面図2(S=1/60)

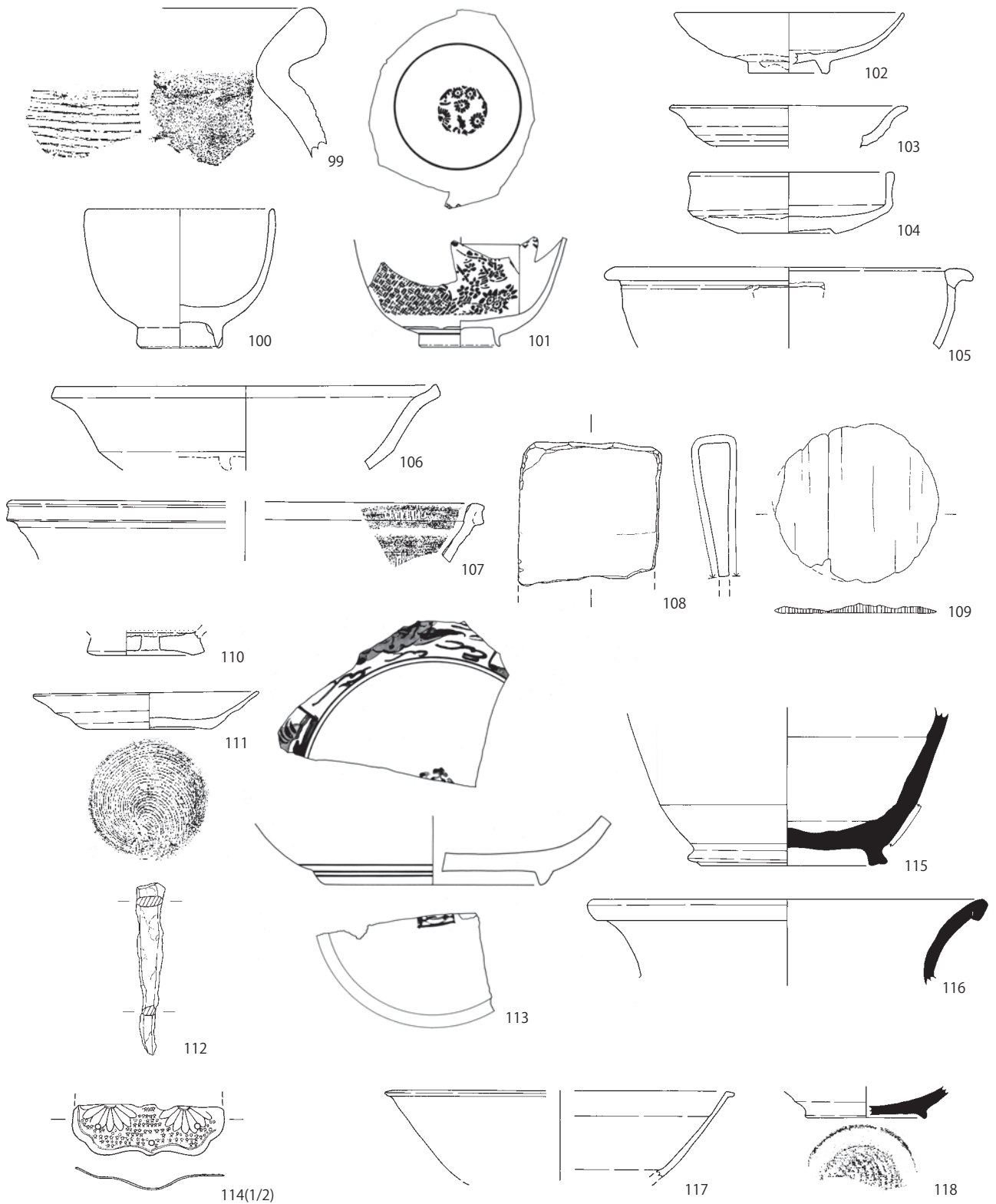
西側に向かうにつれ深くなる。覆土は、上層から濁茶色粗砂、礫・自然石混じりの濁灰色細砂、淡緑灰色細砂が斜方向に堆積しており、遺構の切り合い関係はF地区SB104より古い。出土遺物のうち第68図118の須恵器有台碗を図化した。118は台部断面三角形を呈し、底部内面にタール状の付着物が残る。他に同時期の須恵器・土師器片約30点に加え、平底タイプの製塩土器2個体分と考えられる細片約60点が出土した。

## 6 包含層等出土遺物(第69～72図、第11～13・15・16表)

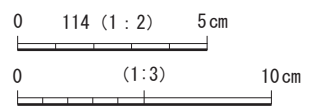
第69～72図は、包含層から出土した遺物の他、調査時に設置した排水溝、暗渠排水や、調査区周辺で表面採取した遺物である。遺物は、後述する第VI-2面(弥生時代中期後葉)、第Ⅲ・Ⅳ面(古代)や12～18世紀代、近代以降に大別でき、第Ⅲ・Ⅳ面に属する須恵器・土師器、16世紀後半～18世紀代の肥前系を主体とした陶磁器が多い。

第69図119～121は弥生時代中期後葉の土器であり、第VI-2面に属する集落域が調査区東側にも展開していたことを示唆する資料となる。甕119は、口径約15.5cmを測り、口縁部内面に円形浮文1ヶ所と斜行短線文が認められる。120は外面を櫛描文で加飾する。121は、甕胴部片を転用した紡錘車で、径4.8cm、厚さ0.6cm、重さ12.1gを測り、一部が摩滅する。

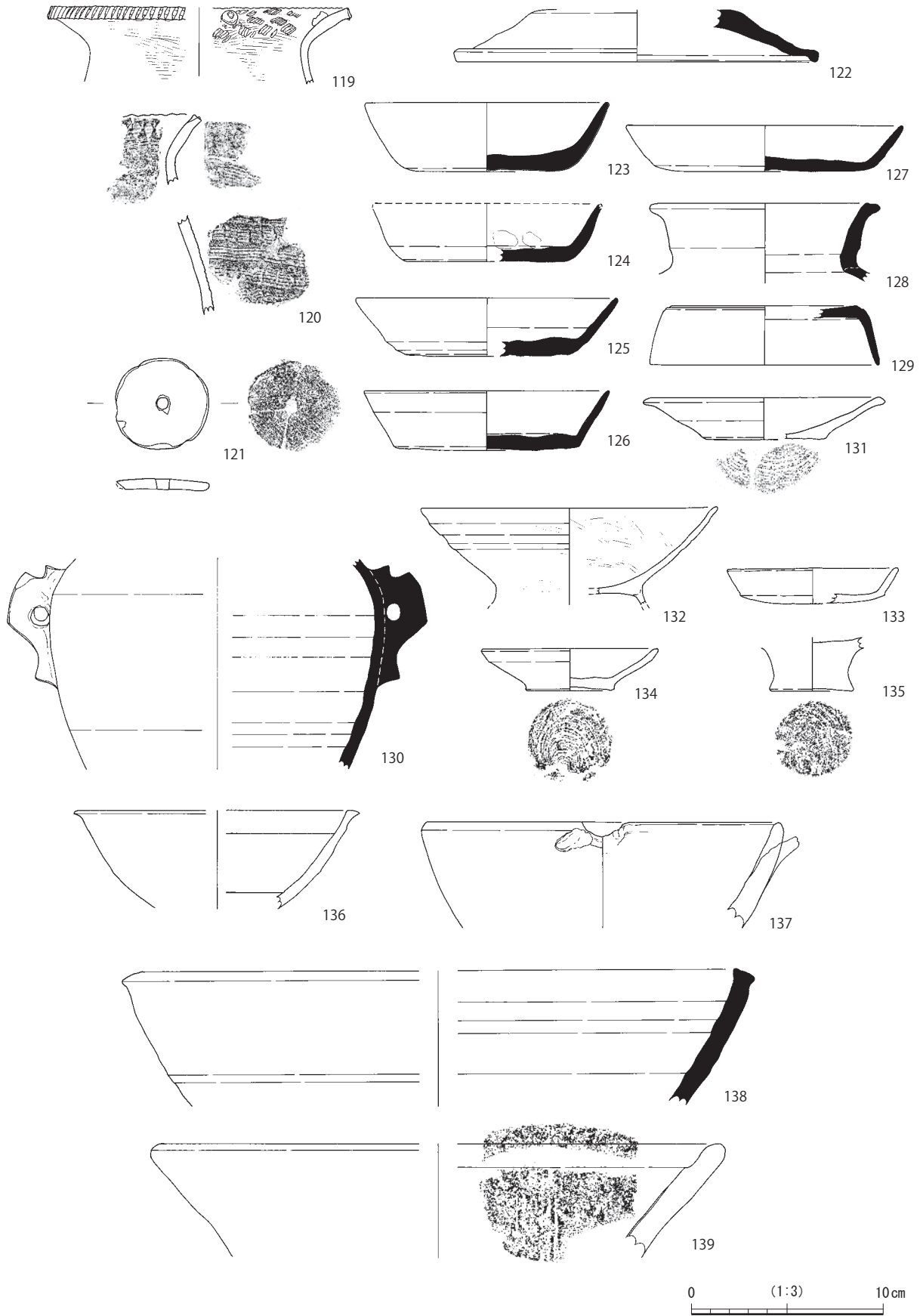
第69図122～130は、本来第Ⅲ・Ⅳ面に属する須恵器である。坏蓋122は口径18.5cmを測り、天井部は両面とも使用に伴い磨耗する。123～126は無台坏である。厚手の123は煮沸容器に転用される。124の体部は短くのびる。125・126は円盤状の底部から体部が外傾しながら直線的にのびる。125が口径13.5cm、器高3.0cm、126が口径12.7cm、器高3.1cmを測る。無台盤127は、使用に伴い底部内



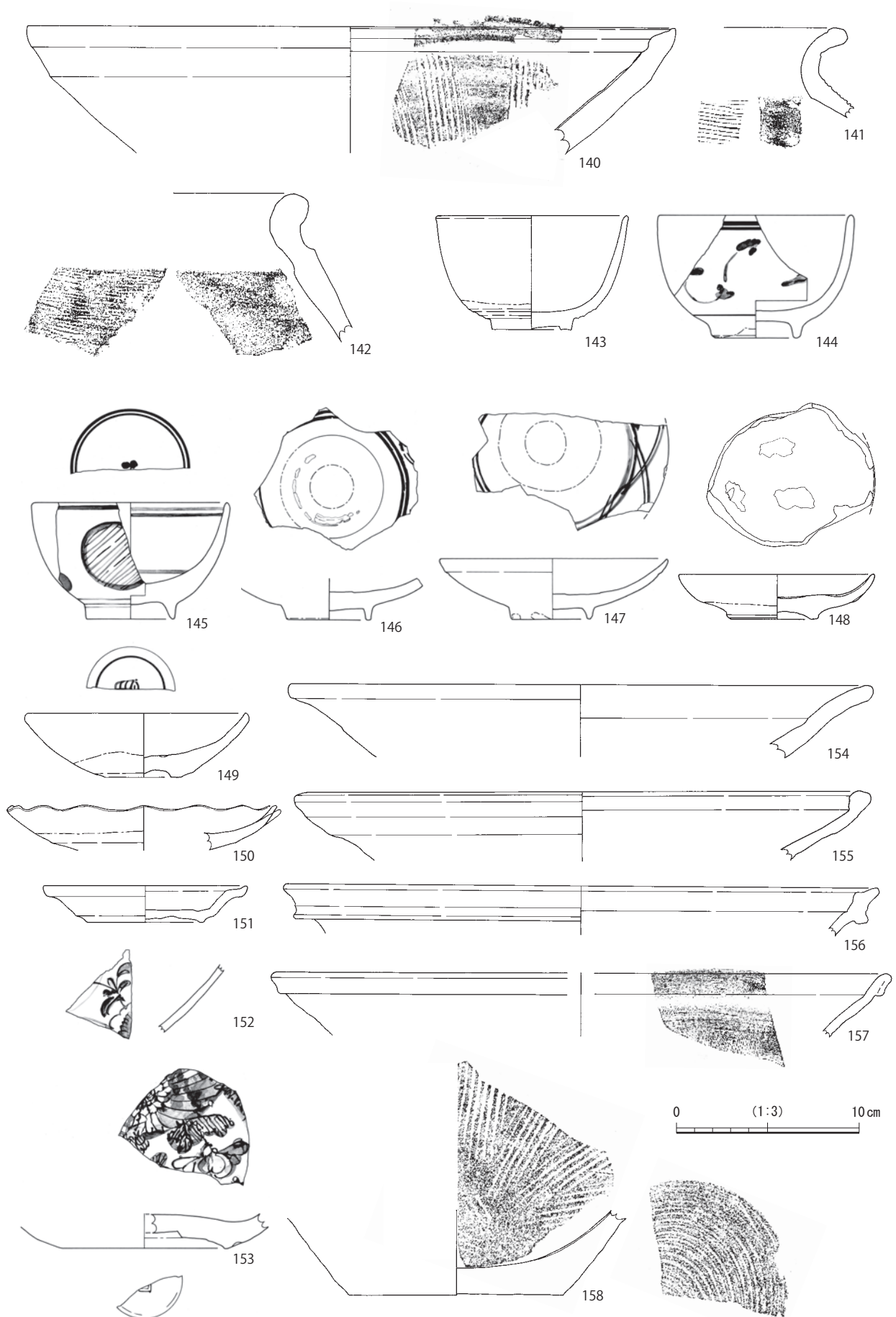
- 99 ~ 109: 整地土 101
- 110 ~ 113: 整地土 103
- 114: 整地土 104
- 115・116: 整地土 105
- 117: 整地土 106
- 118: SX1001



第68図 G地区 第O・I面整地土等出土遺物実測図(S=1/2・1/3)



第69図 G地区 第0・I面包含層等出土遺物実測図1 (S= 1/3)



第70図 G地区 第0・I面包含層等出土遺物実測図2(S=1/3)

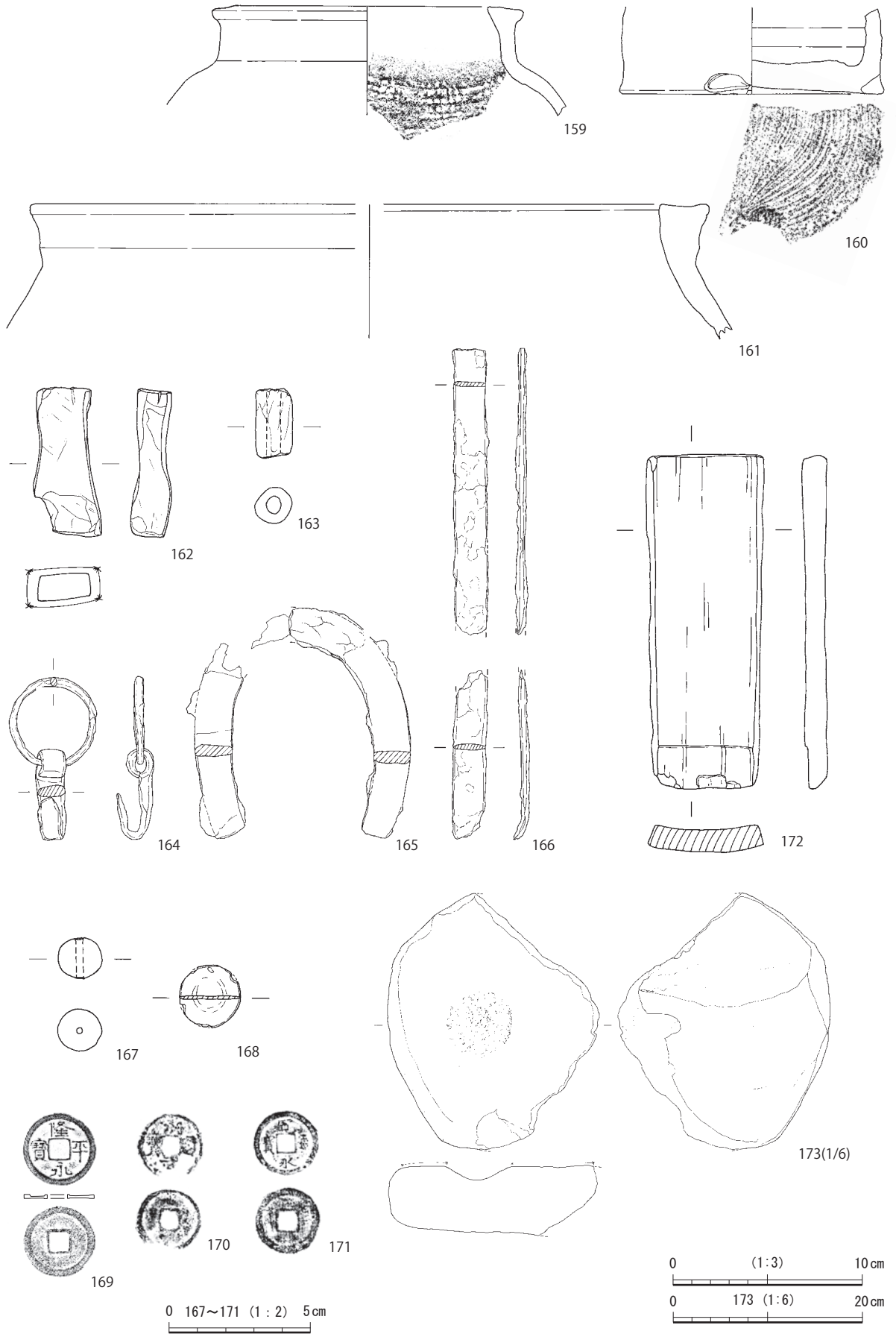
面が磨耗する。横瓶128は口径10.4cmを測り、口縁端部は外側に肥厚する。瓶類蓋129は口径11.9cmを測り、天井部中程には稜が巡ると考えられる。双耳瓶130は耳部をしっかりとつくる。第69図131・132・134・135は、底部外面に回転糸切り痕を残すロクロ土師器である。皿131は口径11.3cm、器高1.9cmを測り、口縁端部が小さく外反する。有台碗132は内面に粗いミガキ調整が認められる。ほぼ完形の皿134は口径9.0cm、器高2.2cmを測り、底部は台状を呈する。皿135の高台は柱状を呈する。

第69図133は非ロクロの土師器小皿であり、口径8.7cm、器高1.8cmを測る。13～14世紀代に位置付けられる。白磁碗136の特徴は、第68図117と近似する。12～13世紀代に位置付けられる。137は珠洲焼片口鉢で、小片のため口径に不安を残す。珠洲焼鉢138は口径約31cmを測り、口縁端部を肥厚させる。ともに13世紀代に位置付けられる。土師器すり鉢139は口径約29cmを測り、第64図85と同様に越前焼を模した16世紀後半の在産と考えられる。第70図140は越前焼すり鉢で、口縁端部は使用に伴い磨耗する。16世紀後半に位置付けられる。141・142は珠洲焼である。壺141は口縁端部を丸くおさめる。甕142は外面に降灰が認められる。

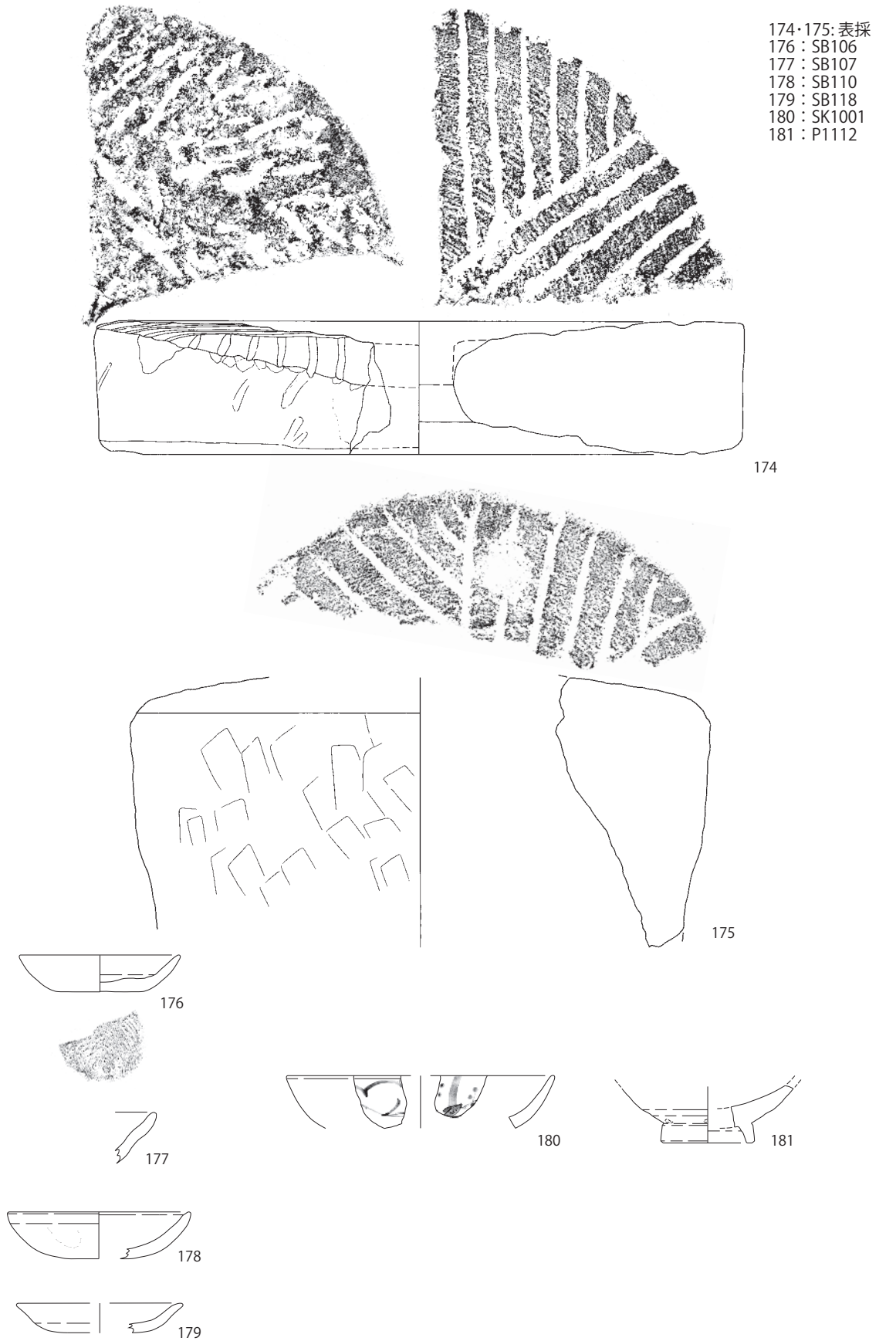
第70図143は、越中瀬戸焼の鉄釉碗で釉は褐色を呈する。肥前系の陶胎染付碗144は鉄絵の上に釉を施す。肥前系磁器の染付碗145は外面に丸文を描く。143は17世紀代、144は18世紀代、145は18世紀後半に位置付けられる。146・147は肥前系磁器の染付皿である。底部内面に蛇の目釉剥ぎを行い、17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。148・149は肥前系陶器の皿で、148が口径10.5cm、器高2.4cm、149が口径12.0cm、器高3.5cmを測る。底部内面に148は砂目痕、149は胎土目がそれぞれ3ヶ所残る。148が17世紀前半、149が17世紀初頭に位置付けられる。150は17世紀前半の肥前系陶器のひだ皿である。瀬戸・美濃の折縁皿151は底部内面を除いてハケ塗りを施し、16世紀末に位置付けられる。152は中国製の染付碗片である。青磁染付皿153は内面に菊花文を描く。蛇の目凹形高台であり、18世紀以降と考えられる。産地は不明。154・155は口径約30cmを測る灰釉大皿である。154は肥前系陶器で17世紀代に位置付けられる。肥前系陶器すり鉢156は、肥厚した口縁部に鉄釉を施す。須佐唐津すり鉢157とともに17世紀代に位置付けられる。肥前系陶器すり鉢158の内面は、使用に伴う磨耗が著しい。第71図159は肥前系陶器壺で、内面に粗い格子叩き痕が残る。160は鉄釉を施し、建水の可能性が高い。越前焼甕161は、ほぼ水平な口縁端部であり、16世紀後半～17世紀代に位置付けられる。

第71図162は、全面を砥ぎに用いた仕上砥である。土錘163は重さ12.8gを測る。164は鉄製轡、165は近代以降の蹄鉄(鋌孔は錆等で未確認)、166は長さ24cm以上の2つに折れた板状鉄製品である。半透明の水晶製の167は径1.5cmを測り、数珠または根付留玉と考えられる。168は鉄製金具と考えられる。169～171は銅銭である。延暦5年(796)初鑄の隆平永寶169は、径2.5cm、厚さ1.4mmを測る。鑄上がりはよく、摩滅・腐食がほとんどないものの、土圧で若干変形する。なお、隆平永寶はF地区第Ⅲ面SD201からも1点出土している<sup>(4)</sup>。170は摩滅・腐食のため文字は判読できず、170は寛永通宝である。桶側板172は高さ17.8cmを測り、スギ材を用いる。安山岩製の173は、上面1ヶ所に径6.5cm、深さ1.3cmの凹部が認められ、下面は起伏のある自然面をそのまま残す。凹石または礎石の可能性をもつ。第72図174は第61図74と同質の凝灰岩製、175は粗粒砂岩製の白で、いずれも白面を8分割する。





第71図 G地区 第O・I面包含層等出土遺物実測図3(S=1/2・1/3・1/6)



第72図 G地区 第0・I面包含層等出土遺物実測図4(S=1/2・1/3・1/6)

第10表 G地区 第O・I面出土土器類観察表1

※( )は残存量を示す。

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
47	4	F-22-3	SB105 (P1097)	須恵器	無台杯	-	-	(0.6)	灰白	灰白	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	外底中央に墨書、判読できず	H17墨12
48	11	F-24-4	SB110 (P1045)	須恵器	杯蓋	18.5	-	(2.7)	淡灰	淡灰	h	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナデ、ロクロナデ	口2/12	天井部内面摩耗。II b 類重ね焼き	H17D292
48	12	F-24-4	SB110 (P1045)、III-1面大溝縁岸線(褐色炭粒土)	須恵器	瓶	-	-	(11.6)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ	-	外面自然粘着。内面に黒色付着物あり	H17D141
55	28	E-25-2	SE1002覆土第1層(磯間)	須恵器	有台杯	-	7.4	(2.6)	青灰	灰	d	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナデ、ロクロナデ	底3/12		H17D237
55	29	E-25-2	SE1002覆土下層	備前・陶器	すり鉢	23.5	10.1	9.4	釉:赤褐色			良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	口2/12	外底離れ砂付着。内面に10条1単位のおろし目密。16c末~17c初め	H17D249
55	32	F-25-3	SE1006覆土(磯間)	瀬戸美濃・陶器	天目碗	-	3.9	(3.3)	釉:外面暗赤褐色、内面黒色			良	-	-	底12/12	鉄軸、底部削出し高台。16c後半	H17D248
55	33	G-24-3	SE1006覆土	中国・磁器	染付碗	11.1	-	(2.6)	釉:青味を帯びた透明釉			良	-	-	口1/12	景德鎮か。16c	H16D78
55	34	G-23-3	SE1007掘方	須恵器	杯蓋	13.7	-	(1.5)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナデ、ロクロナデ	口3/12	II b 類重ね焼き	H17D201
57	39	F-26-3・F-27-1	SK1001	須恵器	有台杯	-	7.9	(3.4)	灰	淡灰	l	良	ロクロナデ、ナデ	回転ヘラ切り後ナデ、ロクロナデ	底3/12	焼きぶくれあり。外面黒化	H17D252
57	41	F-26-3・F-27-1	SK1002	須恵器	有台杯	14.6	-	(4.9)	灰	灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口4/12		H17D204
57	42	F-26-3・F-27-1	SK1002	須恵器	無台杯	13.3	9.5	3.4	淡黄緑	淡黄緑	e	不良	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナデ、ロクロナデ	底3/12	底部外面にヘラ記号「F」、外底磨耗著	H17D209
57	43	F-26-3・F-27-1	SK1002	中国・磁器	染付皿	11.8	-	(1.3)	釉:青味を帯びた透明釉			良	-	-	口1/12	景德鎮か。口縁部内面に被熱痕。15c後半~16c	H16D77
57	44	F-26-3・F-27-1	SK1002	越前・陶器	すり鉢	-	12.0	(6.3)	黄緑	黄緑	粗砂少	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	底5/12	7条1単位のおろし目。内外面磨減著。煮沸器等に転用(スス付着)。16~17c	H16D84
58	57	F-26-2	SK1004	須恵器	無台杯	-	7.2	(3.9)	灰	暗灰	l	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナデ、ロクロナデ	底3/12	外面黒化	H17D210
58	58	E-25-1・3	SK1005	ロクロ土師器	皿	9.3	4.8	2.8	にぶい黄緑	にぶい黄緑	粗砂少、細砂少、霰母少	良	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転系切り	完形	底部中央に穿孔(径9mm)	H17D250
58	59	G-23-3・4	SK1008	須恵器	杯蓋	16.5	-	(2.4)	淡灰	淡灰	n	やや良	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナデ、ロクロナデ	口3/12	II b 類重ね焼き	H17D202
58	60	G-23-3・4	SK1008	須恵器	壺	16.0	-	(4.6)	灰	灰	e	良	ロクロナデ、同心内タキ後ナデ	ロクロナデ、平行タキ後ナデ	-	内面Dc類・外面Hb類。口縁部磨耗著	H17D596
58	61	G-23-3・4	SK1008	ロクロ土師器	皿	-	4.2	(2.4)	にぶい橙	にぶい橙	粗砂少、霰少	良	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転系切り	底部完形	柱状高台。2次被熱	H17D203
61	65	F-26-2	P1015	ロクロ土師器	小壺	-	8.5	(5.7)	にぶい橙	にぶい橙	オ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、底部静止系切り	底4/12	磨絶後、外面煤付着	H17D291
61	66	F-26-2	P1015、III-2面包含層	ロクロ土師器	壺	23.5	-	(11.6)	にぶい橙	にぶい橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	内面コガ、外面煤付着	H17D294
61	68	F-26-2	P1015、III-2面包含層	須恵器	無台壺	14.5	10.4	2.5	灰	灰	m	良	ロクロナデ、ナデ	回転ヘラ切り後ナデ、ロクロナデ	底7/12		H16D100
61	69	F-26-2	P1025	陶器	灯明受皿	10.4	4.2	2.0	釉:灰オリーブ色			良	-	-		灰釉。受口1ヶ所残存。外面回転ケズリ。19c	H17D271
61	70	F-24-2	P1049	肥前・陶器	皿	11.2	-	(2.4)	釉:灰オリーブ色			良	-	-	口1/12	灰釉、胎土目。貫入あり。16c末~17c初頭	H16D79
62	75	G-24-2~4	P1065、包含層	肥前・陶器	壺か	-	13.5	(7.7)	釉:褐色			良	ロクロナデ、同心内タキ	ロクロナデ	口2/12	外面・底部外面外縁に鉄軸。17c前半	H16D80
62	77	F-23-3	P1091	須恵器	無台杯	-	8.0	(0.5)	灰白	灰白	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、底部ヘラ切り	小片	外底に墨書口(文カ)。スス付着	H17墨11
62	78	F-22-4	P1100、包含層	灰釉陶器	皿	-	6.5	(2.3)	釉:淡灰オリーブ色			良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ	底4/12	k90段階	H16D83
64	83	F-26-4	SD1001	ロクロ土師器	壺か	-	9.1	(7.4)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	粗砂、細砂多	良	不明	ロクロナデ	-	外面煤付着。磨耗著	H16D74
64	84	F-27-1	SD1001	珠洲・陶器	すり鉢	-	-	(4.8)	灰	灰	粗砂少、海面骨針微着	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	波状文、おろし目	H17D244
64	85	F-26-4	SD1001	土師器	すり鉢	約31	-	(4.3)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	粗砂多、焼土塊微	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	内外面磨耗著。在地産か。16c後半	H16D75
64	86	F-27-1・F-24	SD1001、試掘坑	肥前・陶器	鉢	32.1	-	(4.1)	黄緑	黄緑	2~3mm大礫微、細砂小	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	口縁部に鉄軸(茶褐色)。17c前半	H16D86
64	87	G-26-3・F-27-1・F-26-4	SD1001・1006	越中瀬戸・陶器	すり鉢	26.5	13.6	12.4	茶褐	茶褐	粗砂・細砂小(にぶい黄緑色)	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	11条1単位のおろし目。内外面にサビ釉。使用で磨耗。17c	H16D85
64	88	F-26-3・4	SD1002、試掘坑	肥前・陶器	碗	10.7	-	(6.0)	釉:明黄褐色			良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	灰釉。細かい貫入あり。17c後半~18c前半	H17D211
64	89	F-26-3	SD1002	伊万里・磁器	皿	-	4.6	(1.7)	釉:透明釉(やや青味を帯びる)			良	-	-	底3/12	初期伊万里。呉須の発色は淡い。高台内に銘款「大明」。17c中葉頃か	H16D72
64	90	F-26-4・G-26-3・E-26・26	SD1002・1006、整地土101、包含層	越前・陶器	壺	20.8	-	(7.7)	釉:内面オリーブ色、外面赤褐色			良	ヨコナデ、指摺	ヨコナデ	口2/12	内面は自然釉か。16c末頃か	H16D107
64	91	F-26-3	SD1002	肥前・磁器	染付皿	-	8.0	(2.3)	釉:透明釉(やや青味帯びる)			良	-	-	-	呉須の発色は淡い。ピンホール発着所あり。内底に五弁花。高台内に銘款「大明」。18c	H16D73
64	92	F-26-3	SD1004	肥前・陶器	皿	18.5	-	(3.9)	釉:灰オリーブ色			良	-	-	口1/12	刷毛目唐津。内面白化粘土。細かい貫入あり。17c後半~18c前半	H16D76
64	94	F-26-1・2	SD1005	肥前・陶器	壺類	-	15.0	(4.6)	釉:外面に不透明なオリーブ黄色			良	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ	底2/12	外面全体に不透明な灰釉。胴部内面に格子状タタキ痕。17c後半	H16D71
64	95	F-26-2	SD1005・1006	越中瀬戸・陶器	ひだ皿	14.0	-	(3.6)	釉:褐~黒褐色			良	-	-	口1/12	鉄軸。17c前半	H17D205
64	96	F-26-2	SD1006	中国・磁器	染付皿	-	4.8	(1.1)	釉:透明釉(灰白色)			不良	-	-	底4/12	内面に淡い発色の塗付。ピンホールあり。15c後半~16c	H16D70
64	97	F-23-3	SD1013	珠洲・陶器	壺か	-	-	(4.4)	灰	灰	粗砂並、細砂並	良	当て具痕	平行タタキ	小片	印花文	H17D243

第2節 第0・I面の遺構と遺物

第11表 G地区 第0・I面出土土器類観察表2

※( )は残存法量を示す。

押図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
64	98	E-23	SD1022、包含層	磁器	碗	-	4.2	(4.8)	釉：透明釉	素地：白色、堅緻	良	-	-	-	-	真須は明青色。型紙摺り。明治以降	H170245
68	99	E-26	整地土101(砂利層)	珠洲・陶器	壺	-	-	(7.7)	灰	灰	粗砂多、細砂多	良	ロクロナデ、当て具痕	ロクロナデ、平行タタキ	小片	外面降灰。13c後半	H170287
68	100	E-26	整地土101	肥前・陶器	碗	9.4	4.2	7.1	釉：にぶい黄色	素地：淡黄色、精良	良	-	-	-	底部完形	灰釉。全面に細かい貫入あり。17c後半～18c前半	H170290
68	101	E-26	整地土101(砂利層)	磁器	碗	-	4.1	(5.6)	釉：透明	素地：白色、密	良	-	-	-	-	型紙摺り。明治以降	H170286
68	102	E-26	整地土101	肥前・陶器	皿	11.6	4.2	2.6	釉：内面灰オリーブ色、外面淡オリーブ色	素地：灰色、細砂少、緻密	良	-	-	-	底3/12	外面透明釉、内面銅線釉。内底に蛇の目輪刺ぎ。埴野窯か。18c前半	H16D102
68	103	E-26	整地土101	志野・陶器	皿	11.9	-	(2.5)	釉：内面白～淡橙色、外面白～淡藍色	素地：白色、粗砂少、精良	良	-	-	-	小片	18c末～17c初	H170301
68	104	E-26	整地土101	越中瀬戸・陶器	向付	10.2	4.9	3.1	釉：褐色	素地：灰白色、礫・粗砂多	良	-	-	-	口3/12	不透明な施釉。17c前半	H16D101
68	105	E-26	整地土101	陶器	片口鉢	17.5	-	(4.1)	釉：内外面灰オリーブ色、口縁部黄褐色	素地：灰色、密	良	-	-	-	口2/12	灰釉・銅線釉。在地窯系か。19c	H170303
68	106	E-26	整地土101	瀬戸・陶器	折縁皿	19.5	-	(4.3)	釉：オリーブ灰色	素地：灰白色、細砂少	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	灰釉。14c	H170302	
68	107	E-26	整地土101(砂利層)	須佐唐津・陶器	すり鉢	約23	-	(3.0)	釉：暗赤褐色	素地：にぶい橙色、粗砂少	良	-	-	-	小片	鉄釉。8条1単位のおろし目。17c前半	H170304
68	110	E-25	整地土103上層	ロクロナデ土師器	有台埴	-	6.0	(1.2)	黒	にぶい橙	粗砂・雲母多、礫少	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	-	内面黒色、底部穿孔(径9mm)	H16D103
68	111	E-25-2	整地土103下層(薄暗灰褐色土)	ロクロナデ土師器	皿	11.3	6.2	1.9	橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底部完形	外面摩耗	H17D133
68	113	E-25-1、F-26	整地土103下層(灰色土)、包含層	肥前・磁器	染付皿	-	11.0	(3.5)	釉：透明釉(緑を帯びた白色)	素地：白色、堅緻	良	-	-	-	-	18c前半	H170289
68	115	F-23-2・4	整地土105、SD1023、包含層	須恵器	瓶	-	10.3	(8.3)	淡灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロナズリ	底部完形	外面降灰・黒化、無蓋正位焼成	H170207
68	116	G-22	整地土105、SD1023両部	須恵器	壺	20.0	-	(4.4)	青灰	暗灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	外面黒化	H170206
68	117	F-22	整地土106	中国・白磁	碗	約17	-	(4.6)	釉：白灰色	素地：灰白色、細砂微、緻密	良	-	-	-	口1/12	ピンホール多。12～13c	H16D106
68	118	F-21	SX1001	須恵器	有台埴	-	6.3	(1.6)	灰	灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底4/12	内面にタール状付着物	H16D82
69	119	E-26	排水溝	弥生土器	壺	約15.6	-	-	暗褐	暗褐	2mm以下の粗砂並、石英、海綿骨針含	良	ハケ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	斜行短線文3列、内形浮文1ヶ所残存。口縁部に連続刺突文	H16A36
69	120	E-26	排水溝	弥生土器	壺	-	-	(5.3)	にぶい黄橙	灰黄、黒褐	2mm以下の粗砂多、石英・海綿骨針含	良	ハケ、キザミ	ハケ、ヨコナデ	小片	口縁内面を連続刺突文、胴部を直線文・雁状文、波状文で加飾。外面煤付着	H16D321
69	121	E-26	排水溝	弥生土器	土製円盤	径4.8	-	厚0.6	にぶい橙～黄橙	にぶい黄橙、黒	1.5mm以下の粗砂多、石英含	良	ナデ	ハケ	-	孔径0.6cm、壺胴部(外面煤付着)を乾用。重量12.1g。外縁摩滅顕著	H16D322
69	122	F-25	包含層(耕土直下)	須恵器	坏蓋	18.5	-	(2.7)	灰	灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/12	II b類重ね焼き。天井部内外面使用により磨耗	H17D272
69	123	F-23-2	包含層(耕土直下)	須恵器	無台坏	12.6	8.5	3.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/12	煮沸容器に転用。二次焼成で酸化した	H17D274
69	124	F-23-2	包含層(耕土直下)	須恵器	無台坏	11.8	8.6	3.0	灰	灰	f	良	ロクロナデ、指頭圧痕	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底2/12		H17D275
69	125	G-24-1・3	暗渠排水	須恵器	無台坏	13.5	8.5	3.0	灰	灰	n	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/12		H17D135
69	126	調査区外	表面採集	須恵器	無台坏	12.7	9.6	3.1	灰白	灰白、灰	e	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底14/36	内底使用により磨耗	H17D690
69	127	G-24-1・3	暗渠排水	須恵器	無台壁	14.3	11.5	2.4	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底4/12	内底使用により磨耗	H17D139
69	128	E-23-4	包含層(耕土直下)	須恵器	横瓶	10.4	-	(4.1)	淡灰	灰	l	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	口2/12	内面降灰	H17D268
69	129	調査区外	表面採集	須恵器	壺類蓋	11.9	-	(3.1)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ	口3/36		H17D679
69	130	F-22-2地	包含層(薄黒灰色土)	須恵器	双耳瓶	-	-	(11.0)	灰	青灰	n	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	小片		H16D113
69	131	調査区外	表面採集	ロクロナデ土師器	皿	11.9	5.8	2.2	にぶい橙	にぶい橙	キ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底14/36		H17D494
69	132	E-29	包含層(耕土直下)	ロクロナデ土師器	有台埴	15.3	-	(5.0)	橙	橙	ケ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	口3/12	外面摩耗。台部欠損	H17D270
69	133	G-22-1	包含層(耕土直下)	土師器	皿	8.7	7.6	1.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少、細砂少	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	口3/12	13～14c	H17D299
69	134	E-25-2	包含層(耕土直下)	ロクロナデ土師器	小皿	9.0	4.6	2.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少、細砂少、雲母少	良	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り	口8/12	ほぼ完形	H17D269
69	135	E-23-4	包含層(耕土直下)	ロクロナデ土師器	小皿	-	4.4	(2.8)	にぶい橙	にぶい橙	粗砂多、赤色粒少	良	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り	底部完形	柱状高台。磨耗顕著	H17D267
69	136	F-27-1	包含層(耕土直下)	中国・白磁	碗	約15	-	(5.2)	釉：白オリーブ色	素地：灰白色、細砂微、緻密	良	-	-	-	口1/12	ピンホール多。12～13c	H16D97
69	137	F-26-1	包含層(耕土直下)	珠洲・陶器	片口鉢	約18か	-	(5.5)	灰	灰	粗砂少、海面骨針含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口1/12	口径に不安残す。13c後半か	H17D282
69	138	E-23-4	包含層(耕土直下)	珠洲・陶器	鉢	約31	-	(7.1)	灰	灰	粗砂並、細砂並	良	ヨコナデ	ヨコナデ	小片	13c前半	H17D284
69	139	F-26	包含層(耕土直下)	土師器	すり鉢	約29	-	(6.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂少	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	磨耗顕著。16c後半か	H17D283
70	140	F-26-3	包含層(耕土直下)	越前・陶器	すり鉢	33.3	-	(6.1)	明褐	明褐～赤褐	粗砂、細砂多	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	9条1単位のおろし目。使用で磨耗。16c後半	H16D90
70	141	G-26-1	包含層(耕土直下)	珠洲・陶器	壺	-	-	(4.9)	灰	灰	粗砂少	良	ロクロナデ、ナデ、当て具痕	ロクロナデ、平行タタキ	小片	13c	H17D300
70	142	F-22-4	包含層(耕土直下)	珠洲・陶器	壺	-	-	(8.1)	灰	灰	粗砂少、細砂多	良	ヨコナデ、当て具痕	ヨコナデ、平行タタキ	小片	外面降灰。14c前半	H17D276

第12表 G地区 第0-I 面出土土器類観察表3

※( )は残存法量を示す。

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
70	143	F-26	包含層(耕土直下)	越中瀬戸陶器	碗	10.3	4.3	6.2	釉: 褐色	素地: 灰白色、細砂多、堅緻	良	-	-	-	6/12	鉄釉。17c	H16095
70	144	F-24-1	包含層(耕土直下)	肥前・陶器	染付碗	11.4	4.8	6.7	釉: オリーブ灰色	素地: 灰色、密	良	-	-	-	底6/12	陶胎染付、鉄釉の上に施釉。全体に貫入あり。18c	H170256
70	145	F-26	包含層(耕土直下)	肥前・磁器	染付碗	10.5	4.8	6.4	釉: やや青みを帯びた透明釉	素地: 灰白色、堅緻	良	-	-	-	底6/12	丸文。18c後半	H16096
70	146	F-26	包含層(耕土直下)	肥前・磁器	染付皿	-	4.6	(2.3)	釉: 緑を帯びた白色	素地: 白色、気泡多、密	良	-	-	-	-	蛇の目輪割ぎ。呉須は淡い色調。17c後半~18c前半	H170285
70	147	F-26	包含層(耕土直下)	肥前・磁器	染付皿	12.3	4.3	2.3	釉: 透明釉(緑を帯びた白色)	素地: 白色、緻密	良	-	-	-	底部完形	蛇の目輪割ぎ。呉須は淡い色調。18c前半	H170288
70	148	F-26	皿-1面ベース土(攪乱か)	肥前・陶器	皿	10.5	4.9	2.4	施: にぶい緑黄色	素地: 灰白色、粗砂多	良	-	-	-	底部完形	灰釉、砂目痕。17c前半	H170120
70	149	F-26-2	包含層(耕土直下)	肥前・陶器	皿	12.0	4.1	3.5	釉: やや緑がかかる不透明な灰色	素地: 赤褐色、細砂少	良	-	-	-	底部完形	不透明な灰釉。胎土目3ヶ所。17c初頭	H16093
70	150	E-26-4	包含層(耕土直下)	肥前・陶器	ひだ皿	14.6	-	(2.4)	釉: 不透明な灰緑色	素地: 赤褐色~褐灰色、粗砂多、雲母含	良	-	-	-	口1/12	灰釉。磨耗あり。17c前半	H16089
70	151	E-26	暗渠排水1	瀬戸美濃・陶器	折縁皿	11.0	6.3	2.0	釉: オリーブ灰色	素地: 黄味を帯びた灰白色、細砂少	良	-	-	-	口2/12	灰釉、ハケ塗り・底面内面は無釉。16c末	H160108
70	152	F-27-1	包含層(耕土直下)	中国・磁器	染付皿	-	-	(4.9)	釉: 青味を帯びる透明釉	素地: 白色、粒子・気泡少、堅緻	良	-	-	-	小片	呉須は淡い発色。外面にピンホールあり。16c	H16098
70	153	E-26-4	包含層(耕土直下)	磁器	青磁染付皿	-	9.0	(1.9)	釉: 内面青須染付、外面淡緑色	素地: 白色、粒子並、気泡少、堅緻	良	-	-	-	底2/12	内面に菊文。蛇の目凹形高台。18c	H16087
70	154	E-26-4	包含層(耕土直下)	肥前・陶器	大皿	31.4	-	(4.0)	釉: 灰白~灰色	素地: にぶい赤褐色、細砂・雲母多	良	-	-	-	口1/12	不透明な灰釉。ピンスポット多数。17c	H16088
70	155	E-25	包含層(耕土直下)	陶器	大皿か	30.0	-	(3.8)	釉: 褐~暗オリーブ色	素地: 灰色、細砂並、密	良	-	-	-	口1/12	灰釉	H16081
70	156	F-22-2	包含層(耕土直下)	肥前・陶器	鉢	32.3	-	(2.7)	釉: 暗赤褐色	素地: 灰色、粗砂並、雲母含、堅緻	良	-	-	-	口1/12	口縁部に鉄釉。17c前半	H16092
70	157	F-26	包含層(耕土直下)	須佐唐津・陶器	すり鉢	約33	-	(3.5)	釉: にぶい赤褐色	素地: にぶい赤褐色、砂粒少	良	-	-	-	小片	鉄釉、おろし目。17c後半	H16094
70	158	F-26-4	包含層(耕土直下)	肥前・陶器	すり鉢	-	11.6	(4.7)	赤褐色	素地: 灰褐色、粗砂多、雲母	良	-	-	底部回転糸切り	底4/12	8条1単位のおろし目。使用により磨耗。17c前半	H16091
71	159	F-26	近現代溝	肥前・陶器	変類	14.0	-	(5.8)	釉: 赤褐~黒褐色	素地: 茶赤色、砂粒含、堅緻	良	-	-	-	-	鉄釉。内面格子タタキ。17c後半	H170253
71	160	F-26	近現代溝	陶器	建水か	-	14.0	(4.5)	-	素地: 灰黄色、緻密	良	-	-	底部回転糸切り	-	鉄釉。底部静止糸切り。	H170251
71	161	E-25	包含層(耕土直下)	越前・陶器	壺	約35	-	(7.2)	釉: 暗赤~暗赤褐色	素地: にぶい赤褐色、細砂並	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口1/12	塗り鉄。16c後半~17c	H16099	
71	163	F-25-1	包含層(耕土直下)	土師器	土鉢	3.6	径2.0	-	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	ナデ	ナデ	完形	孔径0.8cm、重量12.8g。黒斑あり。	H170273	
72	176	F-23-2	SB106 (P1110)	ロクロ土師器	小皿	8.3	4.4	1.9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	口1/12	12c前か	H2806	
72	177	G-23-1	SB107 (P1086)	非ロクロ土師器	小皿	-	-	(2.6)	にぶい黄褐色	褐灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	口1/12	外面にヨゴレ付着	H2801	
72	178	F-25-1	SB110 (P1038)	非ロクロ土師器	小皿	9.4	約3.6	2.4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	ナデ	ナデ	口2/12	16c後半か	H2803	
72	179	F-25-3	SB118 (P1036)	非ロクロ土師器	小皿	8.6	4.6	1.5	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	ナデ	ナデ	口1/12	14c後半	H2802	
72	180	F-26-3・F-27-1	SK1001	肥前・磁器	染付碗	-	-	(2.7)	釉: 透明	素地: 白灰色、密	良	-	-	-	口1/12	淡い色調の呉須。18c	H2809
72	181	F-22-3	P1112	肥前・陶器	天目碗	-	4.8	(2.9)	釉: 黒~褐色	素地: 黄灰色、細砂並	良	-	-	-	口1/12	鉄釉。17c中葉	H2807

第13表 G地区 第0-I 面出土土器製品観察表

※( )は残存法量を示す。

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	石材	色調	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	実測番号
61	74	F-24-4	P1049	下臼	凝灰岩	灰白色	径約30	-	9.9	(5.95kg)	8分割・おろし目7条1単位。極端に片減り。芯棒孔4~5cm	H17石71
62	79	F-22-1	P1115	磨石	粗粒砂岩	灰黄白色	10.4	-	6.3	936.9	側面の敲打痕顕著	H17石66
64	93	F-26-3	SD1004	石鉢	細粒砂岩か	灰白色	7.1	4.4	1.9	(92.1)	一部欠損。全体磨耗	H17石67
68	108	E-26	整地土101砂利層	磁石	流紋岩	淡灰黄色	(7.4)	7.3	1.6	(108.7)	置皿・中磁。天草(備水)か	H16石3
71	162	E-23-4	包含層	磁石	凝灰岩	淡灰黄色	7.8	3.6	2.1	(66.0)	仕上磁。全面研ぎに使用	H16石2
71	167	F-22-1	包含層(耕土直下)	念珠玉または根付か	水晶	半透明・白色	1.5	-	1.5	4.8	孔径0.2cm	H17石68
71	173	F-27-1	包含層	凹石か	安山岩	灰色	(27.6)	(22.0)	7.4	(5.5kg)	凹部1ヶ所(径6.5cm、深1.3cm)。上面磨熟	H17石73
72	174	調査区外	表面採取	上臼	凝灰岩	灰白色	径約33	-	6.8	(1854)	8分割か。芯棒径3.5cm。被蝕	H16石3
72	175	調査区外	表面採取	下臼	粗粒砂岩	灰色	径約29	-	(13.8)	(2.45kg)	8分割・おろし目6条1単位	H17石72

第14表 G地区 第0・I面出土木製品観察表1

※ ( ) は残存量を示す。

挿図 番号	番号	グリッド名	出土遺構	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	備 考	実測番号
47	1	F-20-1	F-SB104(P1087)	柱根	(30.6)	19.9	16.9	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を3方向から加工。腐食顕著	H16特3-18
47	2	F-20-2	F-SB104(P1088)	柱根	(39.1)	19.6	17.4	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工	H16特3-17
47	3	F-20-1	F-SB104(P1089)	柱根	(38.0)	16.6	14.7	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木	H16特3-25
47	5	F-23-1	SB105(P1077)	柱根	(45.9)	19.2	(12.7)	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。腐食顕著	H16特3-21
47	6	F-22-3	SB105(P1095)	柱根	(37.2)	24.4	23.8	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を2方向から加工。上部に切断痕	H16特3-27
47	7	F-23-2	SB105(P1092)	柱根	(57.1)	25.0	21.7	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工	H16特3-19
48	8	F-22-2	SB105(P1097)	柱根	(40.6)	25.1	23.6	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工	H16特3-20
48	9	F-23-2	SB105(P1121)	柱根	(36.4)	24.4	23.6	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を2方向から加工・砂が圧着	H16特3-30
48	10	G-23-1	SB106(P1110)	柱根	(45.5)	21.5	18.9	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工	H16特3-23
48	13	F-23-2	SB106(P1113)	柱根	(30.0)	9.5	8.2	クリ	丸柱・芯持ち丸木(一部樹皮残存)。底面を2方向から加工	H15木-118
48	14	E-25-2	SB110(P1069)	柱根	(32.4)	15.5	13.6	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を3方向から加工	H16特3-24
49	15	G-25-1	SB117(P1046)	柱根	(46.0)	25.0	20.9	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工。底部に砂粒が圧着	H16特3-28
49	16	F-25-2	SB117(P1048)	柱根	(45.0)	13.7	12.5	コナラ節	丸柱・芯持ち丸木。底面を1方向から加工。側面未加工	H15木-107
49	17	F-26	SB120(P1028)	加工材	(18.4)	9.3	7.3	スギ	芯持ち材。3ヶ所に切断痕	H15木-103
49	18	F-26-1	SB120? (P1051)	杭	(29.9)	6.2	5.4	スギ	芯持ち丸木。先端は欠損	H15木-94
49	19	F-26-1	SB120? (P1051)	柱根	(51.7)	11.8	10.7	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工。側面未加工	H15木-106
49	20	F-27-1	SB120(P1301)	柱根	(25.5)	12.9	13.8	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底面を4方向から加工。側面未加工	H15木-126
49	21	F-22-3	SA101(P1094)	柱根	(32.9)	9.0	8.3	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底面に砂が圧着(厚さ3~5mm)	H15木-71
49	22	F-23-1	SA101(P1107)	柱根	(21.7)	13.9	12.2	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工。側面未加工	H15木-112
50	23	G-22-3	SA102(P1119)	柱根	(37.4)	21.7	22.8	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を4方向から加工。腐食顕著	H16特3-29
50	24	F-22-3	SA102(P1096)	柱根	(49.9)	20.9	18.8	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工	H16特3-16
50	25	F-23-1	SA104(P1076)	杭	(32.6)	4.3	3.2	クリ	芯持ち材。2方向を加工	H15木-102
50	26	E-25-2	SA105(P1040)	柱根	(23.7)	9.9	9.3	スギ	丸柱・芯持ち丸木(一部樹皮残存)。底面を2方向から加工	H15木-85
50	27	E-25-2	SA105(P1041)	柱根	(37.6)	9.5	7.9	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底面を2方向から加工。側面未加工	H15木-72
55	30	E-25-2	SE1002(石の間)	柱根か	(24.2)	9.9	(9.6)	ニレ属	丸柱・芯持ち丸木(一部樹皮残存)。底面を1方向から加工	H15木-116
55	31	E-25-2	SE1002最上面	柱根	(33.1)	18.9	16.5	-	丸柱・芯持ち丸木	H16特3-36
55	35	F-22-3	SE1009	曲物底板	径13.8	-	1.0	スギ	板目。木釘痕13ヶ所(うち6ヶ所木釘残る)	H15木-109
55	36	F-22-3	SE1009	曲物側板	(35.0)	6.7	0.4	スギ	板目。内面にケビキ痕。樹皮の縞じ合わせ残存	H15木-124
55	37	F-22-3	SE1011	杭	(80.7)	6.0	5.4	クリ	芯持ち材。井戸補強材。先端を1方向から加工	H16特3-37
55	38	G-23-1	SE1011	杭	(31.6)	4.3	1.8	コナラ節	分割材(芯去り)	H15木-122
57	45	E-26-1~4	SK1003(SE1013)第1層取上げ④	杭	(16.5)	5.0	(2.7)	コナラ節	分割材(芯持ち)か。腐朽顕著	H15木-104
57	46	E-26-1~4	SK1003(SE1013)第1層	部材	(23.5)	(9.9)	4.5	スギ	芯持ち丸木。端部に加工痕。一部樹皮残存	H15木-105
57	47	E-26-1~4	SK1003(SE1013)第1層取上げ②	柱根	(18.6)	11.6	8.9	ニレ属	半截材(芯持ち)か。底面を3方向から加工	H15木-115
57	48	E-26-1~4	SK1003(SE1013)第1層取上げ①	柱根か	(72.9)	8.5	6.7	マツ属複維管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工	H16特3-35

第15表 G地区 第0・I 面出土木製品観察表2

※ ( ) は残存法量を示す。

挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	備考	実測番号
57	49	E-26-1~4	SK1003 (SE1013) 第1層取上げ⑤	柱根	(49.1)	16.8	14.5	マツ属複雑管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工。上部被熱	H16特3-32
57	50	E-26-1~4	SK1003 (SE1013) 第1層取上げ②	柱根	(73.4)	20.1	18.8	マツ属複雑管束亜属	丸柱・芯持ち丸木(一部樹皮残存)。底面を3方向から加工	H16特3-31
57	51	E-26-1~4	SK1003 (SE1013) 第1層取上げ②	柱根	(73.1)	17.1	16.0	マツ属複雑管束亜属	丸柱・芯持ち丸木	H16特3-33
58	52	E-26-1~4	SK1003 (SE1013) 第1層取上げ⑥	柱根	(49.1)	15.2	14.9	マツ属複雑管束亜属	丸柱・芯持ち丸木(一部樹皮残存)。底面を多方向から加工	H16特3-34
58	53	E-26-1~4	SK1003 (SE1013) 第1層取上げ⑧	柱根	(25.0)	11.5	(8.2)	クリ	丸柱・芯持ち丸木(一部樹皮残存)。底面を2方向から加工	H15木-113
58	54	E-26-1~4	SK1003 (SE1013) 第1層取上げ⑥	部材	(27.4)	6.0	2.7	スギ	角材・分割材(芯去り)。1側面に樹皮残存	H15木-128
58	55	E-26-1~4	SK1003 (SE1013) 第1層	柱根か	(39.7)	7.6	7.4	スギ	丸柱・芯持ち丸木。底面を2方向から加工	H15木-119
58	56	E-26-1~4	SK1003 (SE1013) 第1層	柱根か	(37.5)	7.6	7.2	ケヤキ	丸柱・芯持ち丸木。底面を2方向から加工。側面未加工	H15木-73
61	67	F-24-4	P1050	漆器棺	径12.5	底径6.4	高4.6	ケヤキ	柱目・横木取り。両面黒漆。内面に赤漆で文様	H15木-125
61	71	E-26-3	P1034	加工板(折敷側板か)	(28.7)	4.3	0.6	スギ	板目か。縦皮残存。横方向のケビキ痕	H15木-129
61	72	F-25-3	P1035	柱根	(52.2)	18.8	17.8	サイカチ	丸柱・芯持ち丸木。底面を3方向から加工	H16特3-26
61	73	F-24-4	P1075	柱根	(66.1)	11.8	11.2	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工・被熱	H16特3-22
62	76	F-24-2	P1083	柱根	(50.3)	20.4	19.6	マツ属複雑管束亜属	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工	H16特3-15
62	80	F-26-1	P1300	柱根	(14.6)	7.7	3.7	クリ	角柱か。分割材(芯去り)	H15木-130
62	81	F-26-1	P1300	柱根	(14.6)	12.4	11.5	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底面を多方向から加工	H15木-127
62	82	G-23-2	P1122	杭	(47.0)	7.3	6.5	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底面を2方向から加工。上部に切断痕	H15木-117
68	109	E-26	整理土101(砂利層)	円形板	径8.6	-	0.5	-	柱目。腐食顕著	H16木-18
71	172	F-21-3	包含層(耕土直下)	桶	(6.1)	高17.8	1.2	スギ	柱目。口縁部を内外面より面取り	H15木-51

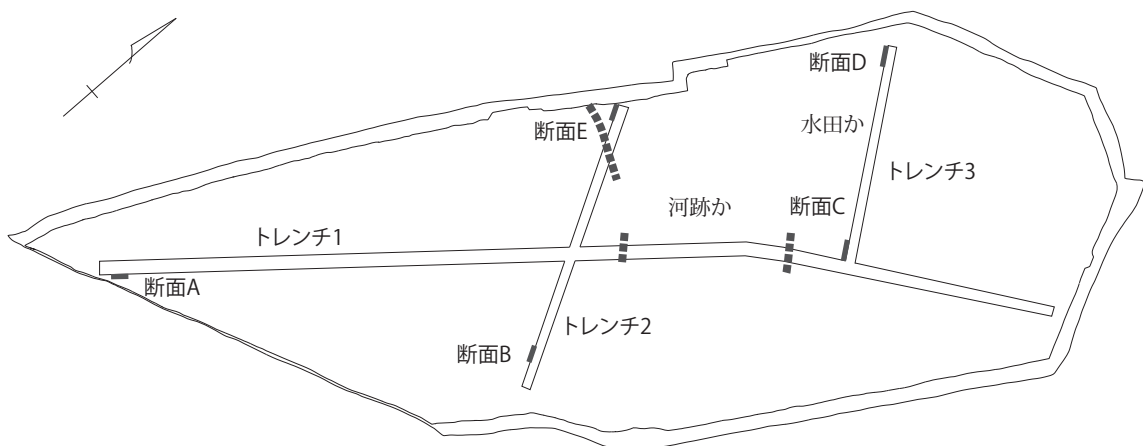
第16表 G地区 第0・I 面出土金属製品観察表

※ ( ) は残存法量を示す。

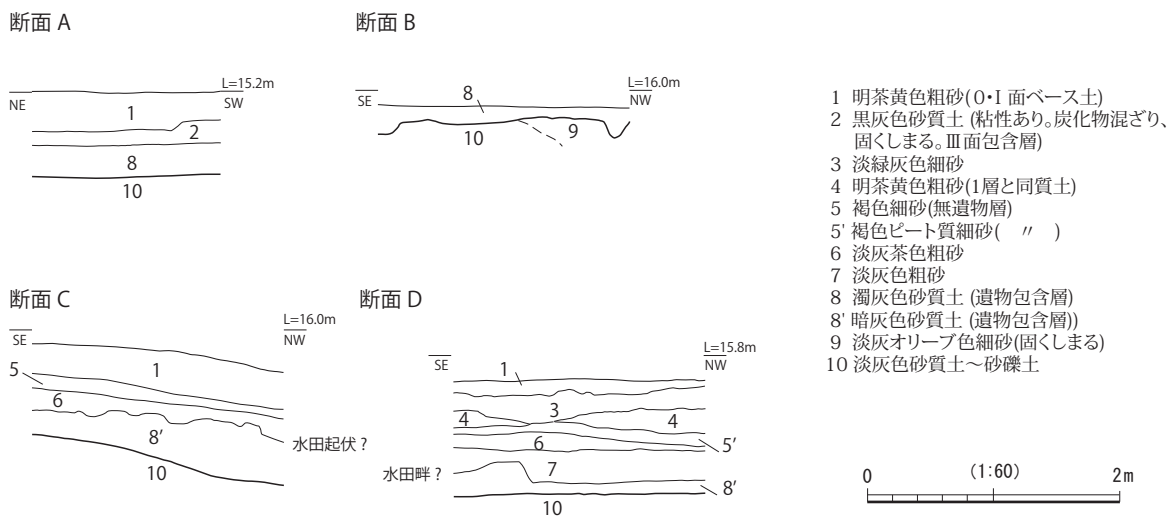
挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	実測番号
61	62	F-26-1	P1003	銅銭	-	径2.5	-	0.11	2.0	天聖元寶(真書)	H16銅銭3
61	63	F-26-1	P1003	銅銭	-	径2.5	-	0.14	2.5	開元通寶(背宣・上月)	H16銅銭4
61	64	G-25-1	P1013	銅銭	-	径2.4	-	0.14	2.2	摩滅・不明	金102788
68	112	E-25-2	整地土103上層(淡灰色砂+灰色土)	鉄製品	釘	8.9	1.5	0.6	18.1		H16金3
68	114	F-21-4	整地土104	銅製品か	飾り金具	(1.7)	5.2	0.1	1.7	鋸留め孔3ヶ所。タキ出し花文	H11金98
71	164	E-24	包含層(耕土直下)	鉄製品	槽	8.7	4.7	1.4	30		H16金4
71	165	F-22	包含層(耕土直下)	鉄製品	馬蹄	(12.2)	(11.5)	0.7	144	土塊付着	H16金5
71	166	F-26-2	包含層(耕土直下)	鉄製品	板状製品	24~	1.9	0.8	(51)	2つに分かれる	H16金1
71	168	調査区外	排土	鉄製品か	円形金具か	径2.2	-	0.2	1.8		H16金2
71	169	G-24-3	包含層	銅銭	-	径2.5	-	1.4mm	2.1	隆平永寶。若干変形	H28金1
71	170	F-26-1	包含層(耕土直下)	銅銭	-	径2.3	-	0.9mm	1.3	寛永通宝(新寛永)	H16銅銭1
71	171	調査区外	排土	銅銭	-	径2.3	-	1.5mm	2.1	摩滅・不明	H16銅銭2

7 第0・I面下確認調査(第73～76図、第17表)

第0・I面遺構掘削時に下面の包含層の現れ方が一様でなかったことから、第0・I面調査完了後、第0・I面ベース土除去作業に先立って、下面の状況確認調査を実施した。確認調査は、第73図のとおり調査区に3本のトレンチ(トレンチ1～3、幅約2m)を設定し、人力にて掘り下げ、断面観察および出土遺物の検討、代表的箇所土層断面図作成、写真撮影等の記録作業を行っている。確認調査の結果、トレンチ2以南の土層堆積は、おおむね第4次調査F地区と類似する状況であった。一方、調査区中央付近(トレンチ1中央・2)では、東西方向に第Ⅲ・Ⅳ面包含層が存在せず、かわりに明茶黄～淡灰色を呈する粗砂～砂礫が厚く堆積する河跡の存在を確認した。さらに河跡は、幅10m以上・深さ2m以上を測ること、北側肩部に護岸状の石積が存在すること、河跡は土石流を想像させる一時期に流入・堆積したものであること等が予想された。第73図断面Eは深さ約1.70m(標高14.00～15.70m)まで砂礫層の堆積することを確認したが、安全面の観点から土層断面図は未作成である。また、河跡以北(トレンチ1北側・3)では、灰～淡灰茶色粗砂の被覆土と包含層上面の起伏(断面Dは畔状の起伏)を検出した。この状況は、C・D・F地区水田と類似するものと判断した。以上の結果を踏まえて、重機を用いた第0・I面ベース土の除去作業を実施している。以下、トレンチ出土遺物について記す。

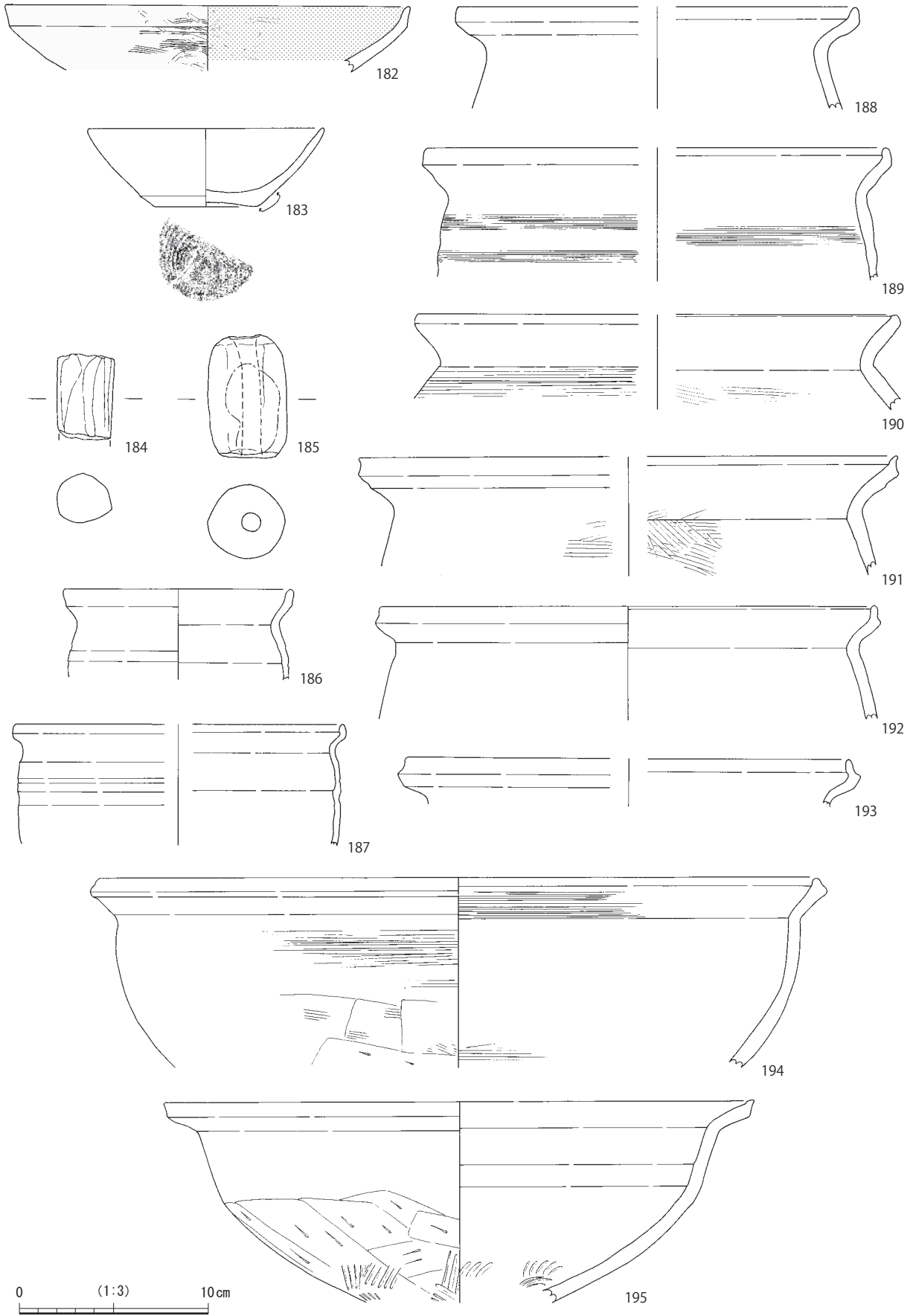


第73図 G地区 第0・I面下確認調査概略図(S=1/500)



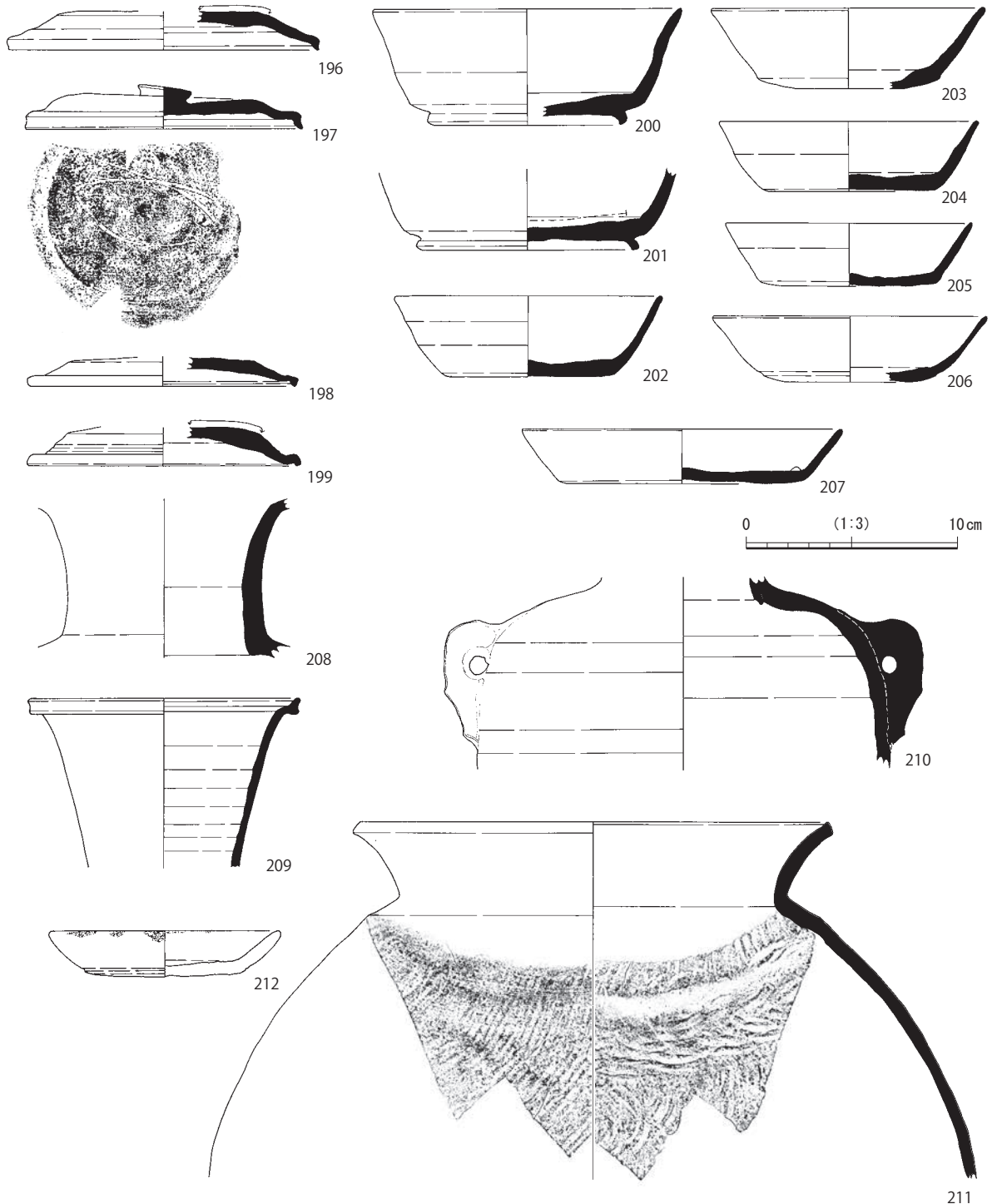
第74図 G地区 第0・I面下確認調査土層断面図(S=1/60)





第75図 G地区 第0・I面下確認調査出土遺物実測図1(S=1/3)

出土遺物は、大半が下面包含層から出土した奈良～平安時代前期に属する須恵器、土師器である。第75図182は、外面赤彩・内面黒色の非ロクロ土師器高坏で、口縁端部で屈曲する。ロクロ土師器無台埴183の体部は直線的にのびる。体部外面下端にケズリを加え、磨耗が著しい。土師質の184は断面多角形を呈し、三足羽釜等の脚部と考えられる。土錘185は重さ115gを測る。186～193はロクロ土師器甕類である。小甕186は口径12.0cmを測る。薄手の187は口縁部を内傾気味に屈曲させる。188・189の口縁端部は上方にのびる。191は各部の面取りはしっかりとしており、小さくつまみあげた口縁端部は外反する。192・193は稜状を呈する口縁部下端から端部を内傾気味に長く引きのばす。



第76図 G地区 第0・I面下確認調査出土遺物実測図2(S=1/3)

194・195は外面下半にケズリを加えたロクロ土師器塼である。194は口径38.0cmを測り、使用痕が明瞭に残る。195は口径31.1cmを測り、球胴化のための叩き成形痕が残る。

第76図196～211は須恵器である。196～199は坏蓋で、197の天井部内面に焼成前に記したヘラ記号が認められる。有台坏200は口径14.5cm、器高5.5cmを測り、体部中程から外反する。201の底部内面は使用に伴い磨耗する。202～206は無台坏である。202・203は深身で体部はゆるやかに外傾する。204・205は底部と体部の境で明瞭に屈曲する。薄手の206は碗形に近く、内外面に墨痕が残る。無台盤207は口径15.1cm、器高2.6cmを測る。208～210は瓶類である。甕211はナデ肩気味である。非ロクロ土師器皿212は口径10.8cm、器高2.1cmを測り、灯明皿に使用する。17世紀代に位置付けられ、混入品と考えられる。

第17表 G地区 第0・I 面下確認調査出土土器類観察表

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
75	182	G-23	ベース土 (砂礫層～Ⅲ・Ⅳ面色)	非ロクロ土師器	高坏	21.3	-	(3.4)	黒	黄橙	キ	良	ミガキ	ハケ、ミガキ	小片	内面黒色処理、外面赤彩。外面磨耗	H170254
75	183	F-26-2	ベース土 (第1層青灰色砂質土)	ロクロ土師器	無台塼	12.4	5.5	4.1	橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り、ケズリ	底7/12	内外面磨耗	H170266
75	184	G-26-1	ベース土 (第1層青灰色砂質土)	土師器	脚部	-	幅 2.9	(4.5)	-	黄橙	ケ	良	ナデ	ナデ、ケズリ	-	断面多角形、三足羽差か。外面一部煤付着	H16D112
75	185	E-24	ベース土 (茶灰色砂礫層 (河跡))	土師器	土鉢	-	径 4.2	6.6	黄橙	黄橙	粗砂多、礫多	良	ナデ	ナデ	-	孔径1.0cm、外面黒斑。残存重量115.1g。全体に磨耗	H16D105
75	186	E-25	ベース土 (第2層暗灰色砂質土 (Ⅳ面色))	ロクロ土師器	小壺	12.0	-	(4.9)	橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	口1/12	内面ヨゴレ付着	H170281
75	187	E-25	ベース土 (第2層暗灰色砂質土 (Ⅳ面色))	ロクロ土師器	壺	約17	-	(6.4)	黄橙	黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	破片化後に被熱、内外面煤付着	H16D111
75	188	F-26-2	ベース土 (第1層青灰色砂質土)	ロクロ土師器	壺	約21	-	(5.4)	黄橙	黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	口縁部煤・ヨゴレ付着	H170264
75	189	F-26-2	ベース土 (第1層青灰色砂質土)	ロクロ土師器	壺	約24	-	(7.0)	灰黄褐	灰黄褐	ケ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口1/12	内面ヨゴレ・外面煤付着	H170261
75	190	F-23	ベース土 (砂礫層～Ⅲ・Ⅳ面色)	ロクロ土師器	壺	約25	-	(5.0)	黄橙	黄橙	オ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	小片	外面煤付着	H170259
75	191	G-25-3	ベース土 (第1層青灰色砂質土)	ロクロ土師器	壺	約28	-	(6.3)	淡黄橙	淡黄橙	オ	良	ロクロナデ、ハケ	ロクロナデ、カキメ	小片		H170255
75	192	F-23	ベース土	ロクロ土師器	壺	26.0	-	(6.0)	橙	橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/12	内面ヨゴレ付着。頸部内面磨耗顕著	H16D110
75	193	E-25	ベース土 (第2層暗灰色砂質土 (Ⅳ面色))	ロクロ土師器	壺	約23	-	(2.5)	赤橙	赤橙	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	内面炭化物付着	H170280
75	194	E-24	ベース土 (茶灰色砂礫 (河跡))	ロクロ土師器	塼	38.0	-	(10.1)	黄橙	橙	ケ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ、ケズリ	口1/12	内面ヨゴレ・外面煤付着	H16D104
75	195	F-24	ベース土 (茶灰色砂礫・河跡層部)	ロクロ土師器	塼	31.1	-	(10.6)	黄橙	黄橙	オ	並	ロクロナデ、同心円タタキ	ロクロナデ、平行円タタキ、ケズリ	口1/12	同心円c類、平行a類。内・外面煤・炭化物付着	H16D109
76	196	F-25・26	ベース土 (第2層暗灰色砂質土 (Ⅳ面色))	須恵器	坏蓋	14.5	-	(1.8)	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ	口2/12	外面降灰。重ね焼きI類	H170260
76	197	F-26 他	ベース土 (緑灰色細砂 (Ⅳ面色))	須恵器	坏蓋	12.9	細径 2.5	2.1	淡灰	青灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口4/12	内面ヘラ記号、外面降灰顕著。重ね焼きI類	H170263
76	198	E-21	ベース土 (淡灰黄色粗砂～Ⅲ・Ⅳ面色)	須恵器	坏蓋	12.5	-	(1.3)	灰	橙灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/12	重ね焼きI類	H170298
76	199	F-25	ベース土 (第3層暗灰色砂質土)	須恵器	坏蓋	12.6	-	(1.8)	淡灰	淡灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	重ね焼きIIb類	H170278
76	200	F-26-3	ベース土 (第1層黄灰色砂質土)	須恵器	有台坏	14.5	9.4	5.5	暗灰	暗灰	f	堅緻	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	口4/12	外面黒化	H170306
76	201	F-25	ベース土 (第3層暗灰色土 (Ⅳ面色))	須恵器	有台坏	-	10.5	(4.0)	淡灰	淡灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底4/12	底部内面使用で平滑	H170265
76	202	F-26-3	ベース土 (第1層青灰色砂質土)	須恵器	無台坏	12.5	8.3	3.8	淡灰	淡灰	e	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部完形	内面に数条の工具痕	H17D136
76	203	G-26-1	ベース土 (第1層青灰色砂質土)	須恵器	無台坏	12.8	8.6	3.9	淡灰	淡灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12		H17D134
76	204	G-24-1	ベース土 (黄褐色粗砂)	須恵器	無台坏	12.1	8.2	3.3	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部完形	内外面磨耗	H17D246
76	205	E-21	ベース土 (淡灰黄色粗砂～Ⅲ・Ⅳ面色)	須恵器	無台坏	11.6	8.4	3.0	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底5/12	口縁部重ね焼き痕あり	H17D297
76	206	F-26-2	ベース土 (第1層青灰色砂質土)	須恵器	無台坏	12.9	8.2	3.0	灰	灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	口1/12	2次被熱。内面煤・外面黒色タール付着	H17D277
76	207	E-21	ベース土 (淡灰黄色粗砂～Ⅲ・Ⅳ面色)	須恵器	無台盤	15.1	11.7	2.6	灰黄褐	褐	m	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底6/12		H17D296
76	208	F-24	ベース土 (茶灰色砂礫河跡層部)	須恵器	瓶	-	-	(7.5)	灰	灰	c	良	ロクロナデ	ロクロナデ	-	内外面自然釉・黒化。正位焼成	H17D262
76	209	G・F-26	ベース土	須恵器	瓶	12.6	-	(8.0)	暗青灰	青灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口3/12	内外面降灰	H17D131
76	210	G-25	ベース土 (淡灰黄色粗砂～Ⅲ・Ⅳ面色)	須恵器	双耳瓶	-	-	(9.1)	灰	灰	n	良	ロクロナデ	ロクロナデ	-	外面降灰・自R粒顕著	H17D295
76	211	G・F-26	ベース土	須恵器	壺	22.0	-	(11.3)	灰	青灰	f	良	ヨコナデ、同心円タタキ	ヨコナデ、平行円タタキ、カキメ	口1/12	同心円c類、平行b・c類。外面自然釉	H16D115-2
76	212	F-26	ベース土	非ロクロ土師器	皿	10.8	6.6	2.1	橙	橙	細砂多、海面青針、焼土残存	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	口3/12	口縁部油痕、内外面煤付着。17cか	H17D140

## 8 小 結

以下では、第0・I面の検出遺構、出土遺物について整理した後、既往の調査成果と対比して、その変遷や性格について述べる。今回、不足・修正する部分については、隣接するI～K地区の報告を待つて補いたい。

**検出遺構** 検出した主な遺構は、掘立柱建物21棟、柵6条、小型の井戸13基、土坑6基、整地土4ヶ所、溝、ピット多数である。うち、整地土101～107と大部分の溝は近代以降の耕地整理等の所産であるため、掘立柱建物と井戸を中心に整理する。

復元した掘立柱建物21棟には検討を要する建物もあるが、その構造から総柱構造の建物5棟(F地区SB104、SB101・109・113・114)と、側柱構造の建物(1×1間を含む)16棟に分かれる。総柱構造の建物は、径50cm未満の略円形または不整形を呈する比較的小振りな柱穴を基本とする。規模の判明したF地区SB104が平面積54.3㎡(4×3間)、SB114が同22.3㎡(2×2間)を測り、F地区SB104が主屋、SB114が倉庫・雑舎的規模といえる。建物主軸方位・配置から、E-24・25区に位置するa-1群(N-約40° W: SB109・113)、E～G-20・21区に位置するa-2群(N-16～21° W: F地区SB104、SB101)、E-26区に位置するa-3群(N-56° W: SB114)に細分でき、E-24～26区に集中するa-1・3群は近代以降の整地土層(厚さ25～40cm)を除去した後に検出している。建物の存続時期を推定できる出土遺物は限られ、a-1群SB113柱穴P1043から12世紀代のロクロ土師器小皿小片2点が出土した他、SB113柱穴P1043に前出するSK1005から底部を穿孔した完形のロクロ土師器小皿(第58図58)が出土した。

側柱構造の建物は、a群と類似した小振りな柱穴掘方で柱間寸法2.20m以下を測るb群3棟(SB102・112・115)と、広い梁間柱間寸法と長軸50～170cmの比較的大型の柱穴掘方を特徴とするc群12棟(SB103～108・110・111・116～120)に大別できる。

b群の建物規模は、SB102が平面積12.3㎡(3×1間)、SB112が同13.2㎡、SB115が同17.2㎡以上(2～×2間)となり、平面積20㎡未満を測る小規模建物であることから倉庫・雑舎の要素が強いと考えられる。建物主軸方位は、SB102がa-2群と近いN-22° W、SB112がN-77° W、SB115がN-31° Wをそれぞれ示す。いずれの柱穴からも建物の存続時期を示す遺物は出土していない。

c群の建物規模は、平面積10㎡未満1棟(SB103)、同10～20㎡未満4棟(SB104・106・111・117)、同23.7㎡1棟(SB118)、同約31㎡2棟(SB105・119)、同約38㎡1棟(SB108)、同48.3㎡1棟(SB110)となり、大型の掘方に柱をしっかりと固定するSB110については特別な用途をもつ倉庫的な性格付けが可能であろう。また、平面プランでは、梁間2間建物(SB106・119)が梁間柱間寸法1.95～2.50mを測るのに対して、梁間1間建物の梁間柱間寸法は、小規模なSB103・117(柱間寸法2.15～2.60m)以外、柱間寸法3.05～5.05mと、かなり長い梁間を特徴とする。このうち、SB105(柱間寸法4.60m)、SB108(同5.00m)、SB110(同5.05m)、SB111(同4.70m)、SB118(同4.35m)については、床束が存在した加工性をもつ。c群建物は、主軸方位からみた場合、c-1群(N-41～50° W: SB106・108・110・111・116・118)と、c-2群(N-69～80° W: SB104・105・117・119)、c-3群(N-5～15° W: SB103・107)に分けられる。c群の存続時期を推定する事項として、c-1群SB106柱穴がc-2群SB105柱穴に切られること(c-1群→c-2群)、c-1群SB110柱穴P1038から16世紀後半と考えられる非ロクロ土師器小皿片(第72図178)の出土があげられる。なお、c-2・3群建物からは、存続時期を検討可能な遺物の出土はない。

次に、小扇状地上に立地する本遺跡の特質及び数回の耕地整理を経たG地区の特性から、ベース面と既往調査の状況を整理する。G地区第0・I面のベース土層は、C・D・F地区第I面から連続する洪水堆積層(第3章第2節の洪水堆積層(ア)土石流災害1:粗砂・砂質土・砂利の無遺物層)であり、C・D地区

の成果から洪水堆積層(ア)が14世紀中頃に形成されたことが明らかとなっている。C・D・F地区では、このベース土層上に14世紀後半以降に成立し、16世紀前半に衰退する集落域(14世紀後半～15世紀代主体)が確認できる。G地区第0・I面の建物のうち、a-2群2棟(F地区SB104、SB101)、b群SB102、c-1～3群12棟の15棟を、C・D・F地区と同じベース土層上で検出している。C・D地区で検出した24棟の掘立柱建物は、建物主軸方位が安定しないこと、柱穴が長径50～120cmを測る大型の掘方であること、梁間柱間寸法を長くすること等を特徴とし、G地区第0・I面のc群建物と共通する要素が多い。また、F地区北辺では、F地区SB104と建物主軸方位を同じくする建物3棟程度(柱穴径20～30cm)と石組井戸、土坑等で構成される建物群を検出、前述のC・D地区掘立柱建物群に先行すると考えられる。

調査区北西側に偏在するa-1群2棟(SB109・113)、a-3群1棟(SB114)、b群2棟(SB112・115)は、近世以降の整地土101～103(厚さ25～40cm)を除去した後に検出した建物であり、他の建物柱穴の深さとの対比から、c群建物等と同一の生活面から掘られた柱穴と判断するには難しい側面を残す。そのため、5棟の建物のベース土層については、第6項で延べた第0・I面下の確認調査では明確に生活面を把握できなかったものの、洪水堆積層(イ)(第8図16層)をベース土とする遺構群の可能性が高いと判断した。この洪水堆積層(イ)は、C地区第Ⅲ面で13世紀～14世紀前半に営まれた建物群(6×3間の総柱建物(109㎡)、2×1間建物(15㎡)各1棟)のベース土となる。また、G地区の北側約20mで行われた羽咋市教委第4次調査第Ⅱ地区において、現水田下40～80cmの深さで13世紀代の生活面を確認した結果も、判断を補強する材料となる。

建物に付随する井戸の存続年代については、SE1002から16世紀末～17世紀初めの備前焼すり鉢(第55図29)が、SE1005から16世紀後半の瀬戸・美濃天目碗(同図32)が、SE1006から16世紀代の中国製染付碗(同図33)がそれぞれ出土したことや、SE1009がP1112(17世紀中葉の肥前系天目碗(第72図181))より新しいことや、建物に付随する遺構の性格等から、おおむね16世紀後半～17世紀代を中心にすると考えられる。なお、C・D地区第I面、F地区第0・I面では、14世紀後半～16世紀前半の石組井戸を検出している。

**出土遺物** 第0・I面の出土遺物は、古代の須恵器・土師器が大部分を占め、耕地整理の削平等もあり、中世以降の遺物はそれほど多くない。

12世紀～14世紀前半の遺物は、在地のロクロ土師器小皿(第58図58・61、第69図134・135等)、非ロクロ土師器小皿(第69図133)、貿易陶磁(白磁碗：第68図117、第69図136)、古瀬戸の折縁皿(第68図106)、珠洲焼の甕・壺・鉢(第70図141・142等)があり、限られた点数の中ではあるが12～13世紀代が目立つ傾向を示す。

14世紀後半～16世紀前半の遺物は、非ロクロ土師器小皿(第72図179)、珠洲焼すり鉢(第64図84)、中国製の染付碗皿(第55図33、第57図43、第64図96等)と極めて限定的であり、未実測の摩滅した珠洲焼甕胴部片を含めても点数は少なく、組成も貧弱である。集落が営まれたC・D地区では、14世紀後半～15世紀代を主体とした青磁碗・白磁坏等の貿易陶磁、瀬戸・美濃や珠洲焼、越前焼、また非ロクロ土師器小皿、瓦質土器等が約800点出土する状況と好対照を呈する。

G地区で遺構出土品を含めて遺物量が相対的に急増するのは、16世紀後半以降であり、その状況は17世紀代を通して継続する。組成は、碗・皿類、鉢・すり鉢、壺・甕類と比較的多様である。限られた資料からの推測となるが、16世紀後半～末にみられる瀬戸・美濃産の碗・皿(第55図32、第70図151)、在地や越前焼のすり鉢(第64図85、第70図140)、越前焼の甕(第64図90等)という組成が、17世紀を相前後する時期以降、肥前系陶器碗・皿類(第61図70、第72図181等)と越中瀬戸碗・皿類(第64図95、第68図104、第70図143)、肥前系陶器鉢類(第64図86等)、越中瀬戸や須佐唐津のすり鉢(第64図87、

第18表 G地区 第0・I面建物等の変遷案

地区・建物等			12c	13c	14c	15c	16c	17c	18c～
G地区 第0・I面	総柱 建物	a-1群	SB109・113	■	■				
		a-2群	F地区SB104 SB101			■			
		a-3群	SB114	■	■				
	側柱 建物	b群	SB115 (SB112?)	■	■				
			SB102			■			
		c-1群	SB106・108・110・ 111・116・118				■	■	
		c-2群	SB104・105・117・ 119					■	■
	c-3群	SB103・107					■	■	
	井戸						■	■	
	C・D地区第0・I面					■	■	→ ?	

土石流災害  
1の発生

第70図157等)、肥前系陶器の壺・甕類(第64図94、第62図75等)の組成に転換するようだ。また、初期伊万里皿(第64図89)や志野焼皿(第68図103)も各1点出土している。なお、非ロクロ土師器小皿は、京都系の特徴を示す個体は確認できず、16世紀後半と考えられる在在系(第72図178)が少量出土したにとどまる。

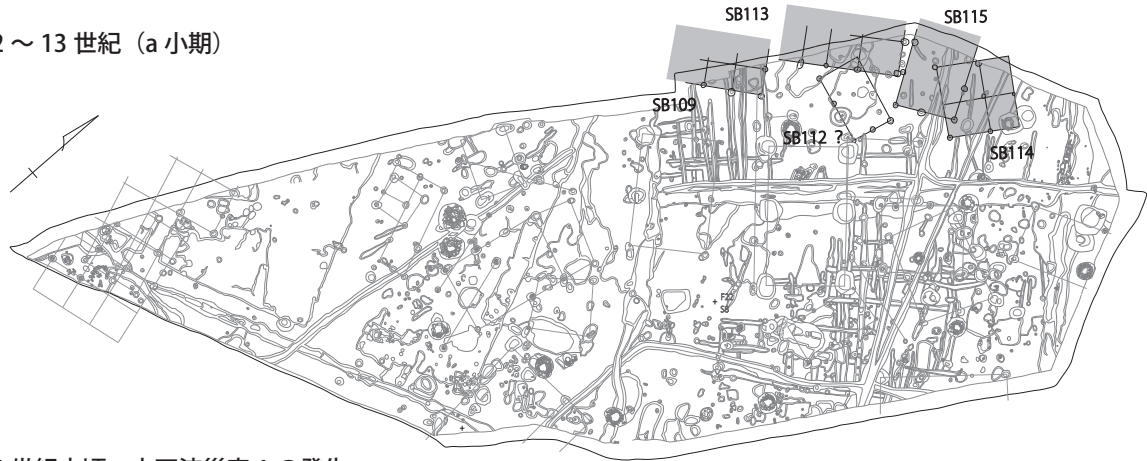
18世紀以降は、主に整地土や遺物包含層から肥前系陶磁器の染付碗・皿類が出土する一方、調理具・貯蔵具は確認できない。この単調な組成については、当地区が18世紀代に集落域から耕作域への転換を果たし、現代の耕地整理の際に19世紀以降の遺物とともに隣接地から二次的に移動してきた結果と考える。

**第0・I面の変遷案** G地区は、遺構出土遺物が少なく、耕地整理による遺構の削平・損壊もあるため、一部推測を含めて、第18表、第77図のa小期(C地区第Ⅲ面並行)、b小期(C地区第Ⅰ面並行)、c・d小期(C地区第0面)の4期の変遷案を考えた。ただし、総柱構造の建物で構成されるb小期については、C・D地区～F地区南半に分布する側柱建物群と並存し、建物構造の差は居住者の階層や建物用途等の差を反映した可能性を多分に残す。2つの建物平面積には大きな差は認められない。

a小期(12世紀～13世紀前半(主体は12世紀代か))は、調査区北西端～調査区外西側(羽咋市教委第4次調査第Ⅱ地区)に集落域が展開し、建物主軸方位N-約40°Wに中心をもつSB109、SB113～115、(SB112?)が営まれる。建物規模等不明な部分が多く、遺構の重複関係から数回の建て替えを行う。14世紀中頃にC・D地区第Ⅱ面水田を被覆する土石流災害1が発生する。G地区でも第0・I面ベース土として土石流堆積層を確認しており、扇状地全体の営みに多大な影響を与えた大規模災害であった。

b小期(14世紀後半～16世紀前半)は、G地区第Ⅰ面では、出土遺物が限られるものの、G地区南半(～F地区第0・I面北辺)で、建物主軸方位N-16～21°Wを示す建物群(F地区SB104、SB101・102、(SB120?))が営まれる。F地区SB104は、中世的な総柱構造の建物(約54㎡)で、径50cmに満たない小型の円形掘方の柱穴を特徴とする。これらの建物は、C・D地区第Ⅰ面で検出した、大形の柱穴掘方(長径50～120cm)をもち、梁間柱間寸法を長く取る側柱構造の建物とは大きく異なり、前出的な建物構造である。また、C・D地区第Ⅰ面の掘立柱建物が、主軸方位に強い規制をみいだせない点も異なる要素といえる。前述のとおり、ここでは保留部分を残すものの、G地区南半～F地区北辺のF地区SB104、G地区SB101を主屋とする建物群の廃絶後に、C・D地区第Ⅰ面の梁間寸法が長い側柱構造の建物群が成立したと整理しておきたい。なお、b小期の総柱構造の建物と、c・d小期の側柱構造の建物とも、側面を加工しな

12～13世紀 (a小期)



14世紀中頃 土石流災害1の発生  
14世紀後半～16世紀前半 (b小期)



16世紀後半～17世紀 (c小期)



16世紀後半～17世紀 (d小期)



第77図 G地区 第0・I面建物等変遷案(S=1/500)

い芯持ち材を主柱に用いる点や、小型の石組井戸を集落の構成要素とする点で共通する。

G地区で小型井戸を伴って建物群が再展開は、出土遺物の様相から16世紀後半以降となる(c・d小期)。C・D地区第I面の集落域が16世紀第1四半期頃を下限とする状況や、G地区でも梁間寸法の長い側柱構造の建物が主体であることから、16世紀中葉頃に自然災害あるいは政治的・経済的な要因により、C・D地区と一部重複しつつ、集落域が新たに成立したと考えられる。G地区で16世紀後半に成立した集落域(第0面)は17世紀代まで継続し、建物群の主軸方位等から、c小期(N-41 ~ 50° Wの建物群:SB106・108・110・111・116・118)、d小期(N-69 ~ 80° Wの建物群:SB104・105・117・119、N-5 ~ 15° Wの建物群:SB103、(SB・107?))の順に整理した<sup>(5)</sup>。c小期は、建物柱穴の重複からSB111→SB110の順と推移し、平面積46.5㎡を測るSB110は居住以外の特別な用途をもった建物と考えられる<sup>(6)</sup>。d小期には、SB105・109(約31㎡)を主屋とし、それぞれに雑舎と石組井戸が伴う2つの建物群が展開する。井戸については、SE1002・05・06が16世紀後半以降の廃絶・埋戻しを確認できる程度で、時期比定が難しい。これらの建物群は、出土遺物の様相から一般的な農村集落で、遅くとも19世紀代(おそらく18世紀代)には耕作地に転じたものと考えられる。第4図のとおり現四柳町集落が、西往来(旧国道159号)と、それから西側の邑知湯に向けて分岐する2条の小路(A・E地区間、G・H地区間の道路)に面した街村的景観を呈する。第0面で確認した集落域もほぼ同様な景観をもつと考えたい。

〔註〕

- (1) 古代～中世初めの土器については、田嶋明人氏が提示した土器編年軸で時期を示す(北陸古代土器研究会・石川考古学研究会1988『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』、田嶋明人2013「平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の編年」『加賀 横江荘遺跡』白山市・白山市教育委員会)。暦年代観は、概ねI期を6世紀末～中葉、II期を7世紀3/4四半期～8世紀初頭、III期を8世紀前葉、IV<sub>1</sub>期を8世紀中頃、IV<sub>2</sub>期を8世紀後葉～9世紀初頭、V<sub>1</sub>期を9世紀前葉、V<sub>2</sub>期を9世紀中頃、VI<sub>1</sub>期を9世紀後葉、VI<sub>2</sub>期を9世紀末～10世紀初頭、VI<sub>3</sub>期を10世紀前葉、VII期を10世紀中葉～11世紀前葉、中世1-I期を11世紀中葉～後半、中世1-II期を11世紀末～12世紀中頃となる。また、須恵器出現期以降の土器器については、成形時におけるロクロ台の使用の有無から「ロクロ土器器」と「非ロクロ土器器」に、両者を指す場合には「土器器」と記載している。
- (2) 国土地理院が所有する昭和29年(1954)米軍撮影の航空写真では、調査区周辺は自然地形に沿った弓状の棚田が複雑に連なる景観がみとれる。この景観は、国土地理院の昭和38年(1963)撮影の航空写真でも同様である。一方、昭和43年(1968)撮影の航空写真では長方形を基本とする整然とした棚田景観に変わっており、後述する整地土101～107を昭和40年前後に施工された耕地整理の痕跡と推定した。なお、現地調査時に、地元の現場作業員の方から明治時代に耕地整理が行われたとの話を聞いた他、羽咋市教育委員会刊行の『四柳白山下遺跡Ⅲ』に余喜地区周辺で昭和20年代に耕地整理が行われたとの記載があり、これらは水田区画を大きく変えるような規模の耕地整理ではなかったようだ。また、周辺地域は平成16～20年度に県営ほ場整備事業(経営体育成型)四柳地区が実施され、さらに水田の大区画化が進んでいる。
- (3) 山本信夫2000『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』大宰府市教育委員会
- (4) 加藤克郎2001「羽咋市四柳白山下遺跡出土の古代銭貨」『石川県埋蔵文化財情報第5号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- (5) c小期からd小期の変遷順は、SB106柱穴とSB105柱穴の切り合い関係を根拠とした。18世紀以降の土地利用の在り方(整地土101～103にみられる基軸方位)を加味すれば、逆の変遷順も十分想定可能である。
- (6) 大型で長方形を基調とする柱穴掘方、長い柱間寸法を特徴とする類似の側柱構造の建物は、宝達志水町末森城跡若宮丸調査区、中能登町谷内ブンガヤチ遺跡で確認できる(末森城跡調査団・押水町教育委員会1989『末森城跡』)。末森城跡の16世紀後半の建物は、桁柱間寸法4.5～6m、梁間柱間寸法3.35mを、14世紀後半の谷内ブンガヤチ遺跡SB2は、同約9m、同6m弱を測る。
- (7) 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所2002『鈴帯をめぐる諸問題』



### 第3節 第Ⅲ-1面の遺構と遺物 (第78～108図、第19～25表)

G地区第Ⅲ-1面は、第4次調査(1997)において厚さ10～90cmを測る第0・I面ベース土(第8図土層9・17・19等の流入・堆積土)を重機で除去した段階で検出した生活面である。ベース面(遺構検出面)の標高は、調査区南西端(SD3017脇)で14.54m(第0・I面ベース面より-49cm)、G-23区杭脇で15.65m(同-15cm)、南東端(G-26区杭南東3m)で15.75m(同-35cm)、北端(F-26区杭西8m)の水田畔上で14.95m(同-65cm)、北東端(F-27区杭脇)で15.20m(同-75cm)を測る。検出面の比高差は、Gライン(北東-南西方向)で約1.2mを、26ライン(南東-北西方向)で約0.8mを測り、南西側および北西側に向けて緩やかに傾斜する地形となる。

遺物包含層は、標高が下がるF～G-22区以南にのみ存在し、上下2層(上層包含層：濁黒灰色砂質土、下層包含層：濁灰緑色砂質土、現地調査時は下層落ち込みと呼称)に分かれる。ベース土は、河跡3001以南が明黄茶～明灰色粗砂・砂利(第8図土層23等)または固くしまった第Ⅳ面包含層(同図土層32～35：濁灰～暗灰色砂質土)であり、河跡3001以北がしまりのない耕作土(第100図)である。

調査の結果、調査区南半で掘立柱建物(SB)2棟、F地区第Ⅲ面から連続する耕作に伴う小溝(SD)約40条、ピット等を、中央部で河跡1ヶ所、北側で水田(SN)3枚を含む耕作域を確認した(第78図)。第Ⅲ-2面を含めた大まかな変遷は、①10世紀初頭(VI<sub>2</sub>期)に発生した第Ⅳ面を廃絶させた極めて短期間の土砂流入・堆積(河跡3001(古))、②10世紀前葉頃に再開した集落・耕作域(第Ⅲ-1面調査区南端下層小溝群・SB2棟+右岸に護岸を施した河跡3001(新)+第Ⅲ-2面小溝群)、③10世紀中葉頃の水田域への転換(第Ⅲ-1面調査区南側上層小溝群+右岸に護岸を施した河跡3001(新)+第Ⅲ-1面水田301～303と耕作放棄地)、④10世紀後葉以降11世紀前葉頃の極めて短期間に流入した大量の土砂の再堆積による耕作域の放棄の4小期に整理でき、第4節で整理する。

遺物は、多数の須恵器、土師器の他、帯金具(銅製巡方)、石鏃各1点が出土した。なお、第4次調査は、調査期間の関係で河跡3001(新)、水田301～303の流入・堆積土砂を除去した段階で現地調査を終了し、第5次調査(1998)で第Ⅲ-2面と一体的に補足調査を行った。

#### 1 掘立柱建物(遺構：第92図・第19表、遺物：第93図・第20表)

掘立柱建物(SB)は、上層包含層を掘り下げて検出、本来は第Ⅲ-2面に属する。小規模な総柱構造の建物、側柱構造の建物各1棟があり、柱穴から少量の須恵器、土師器が出土した。

##### SB301(遺構：第92図)

F・G-21・22区で検出した総柱構造の掘立柱建物である。平面プランはゆがみ、柱穴は総じて浅いため一部を欠落する。主軸方位はN-0～3°Wを示し、桁行3間(6.95m)×梁間2間(3.95m)、床面積27.4㎡を測る。桁行の柱間寸法は2.10～2.55m、梁間の柱間寸法は1.75～2.30mと、柱間寸法は不等で、柱筋の通りはよくない。柱穴の平面形態は不整円形または略円形を呈するものが主体で、P3001が径26～34cm、深さ10cmを、P3004が径50cm弱、深さ17cmを測る。柱穴覆土は、粒状の緑灰色砂質土や炭粒が混ざる濁黒灰色砂質土を基本とする。柱根、柱痕跡とも遺存せず、遺構の切り合い関係は柱穴P3004がSB302を構成する柱穴P3005より新しい。P3001から非ロクロ土師器甕、P3002から土師器甕、P3004からVI<sub>2</sub>期の須恵器無台坏、ロクロ土師器埴、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

##### SB302(遺構：第92図、遺物：第93図)

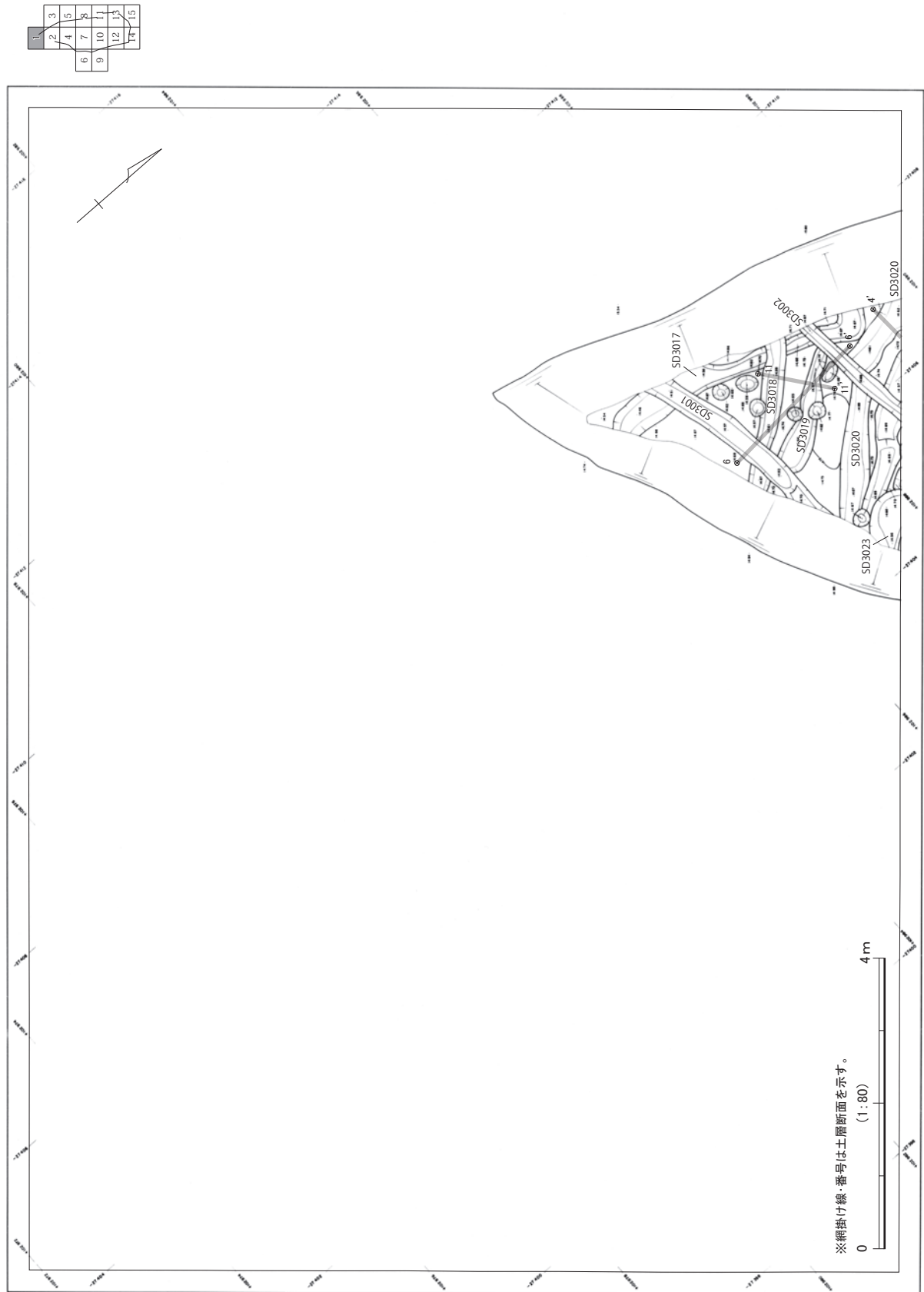
F-21区で検出した側柱構造の掘立柱建物であり、平面プランはややゆがむ。主軸方位はN-82°W

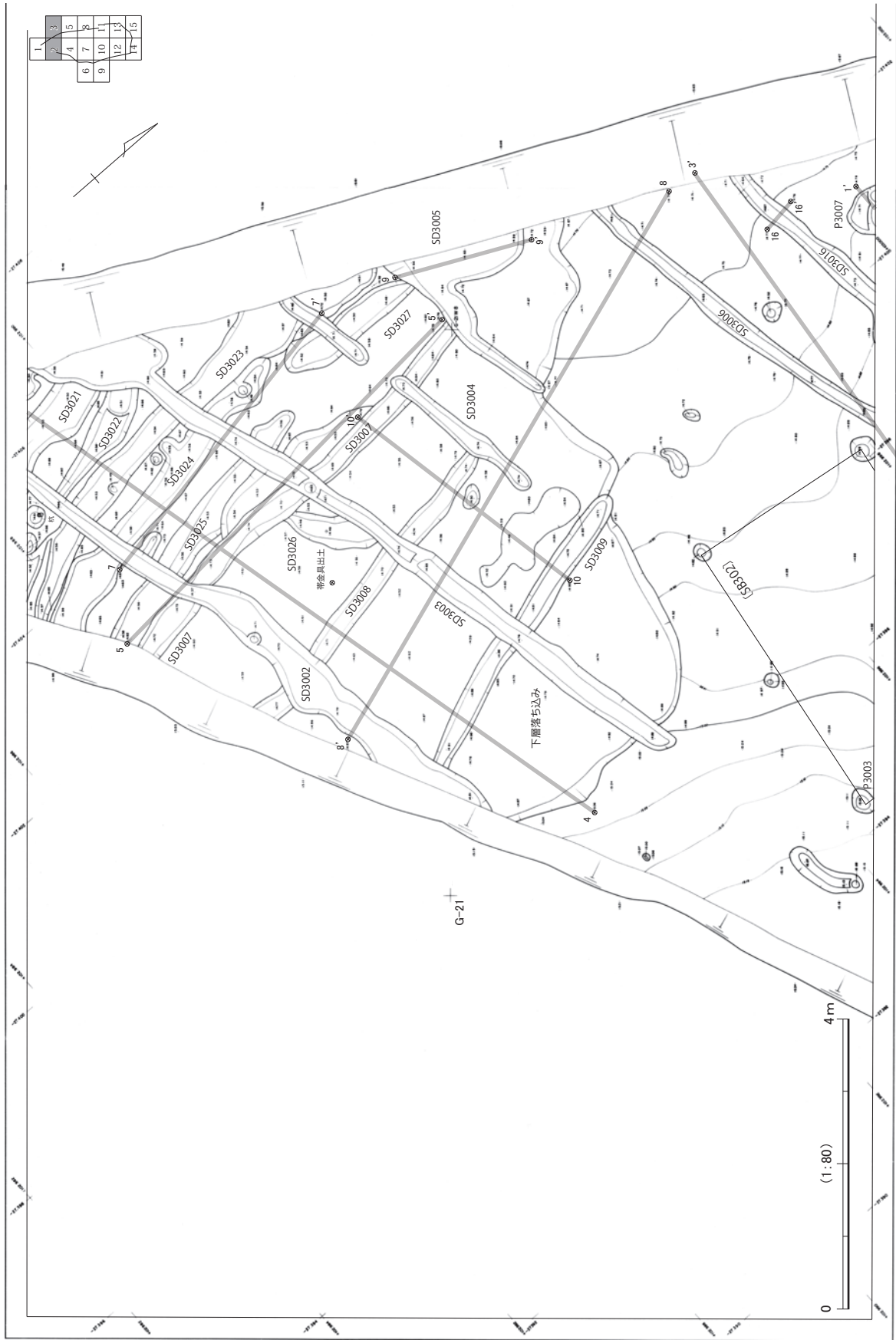


第78図 G地区 第Ⅲ-1面全体図 (S=1/300)



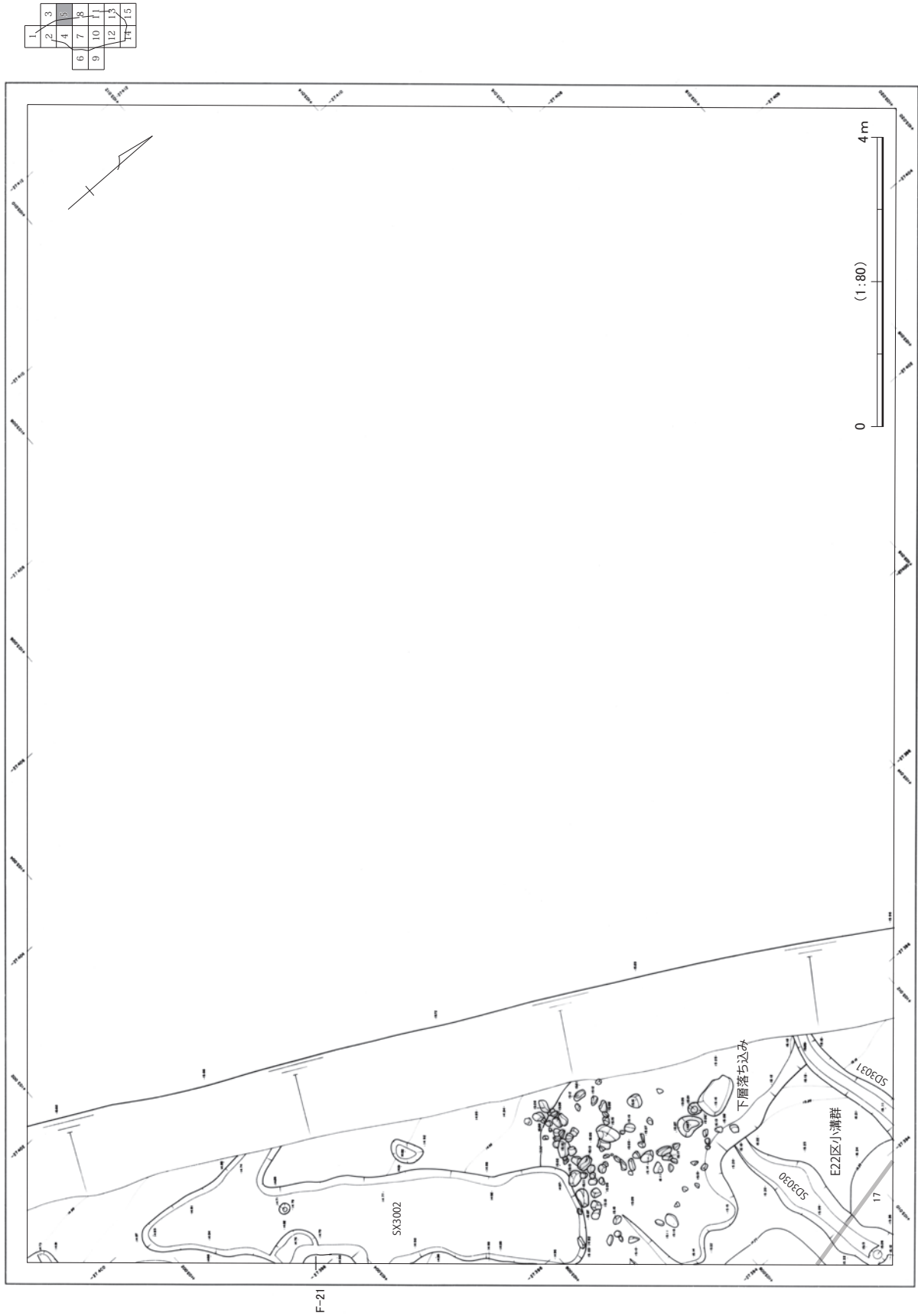
第79図 G地区 第Ⅲ-1面主要遺構配置図(S=1/300)



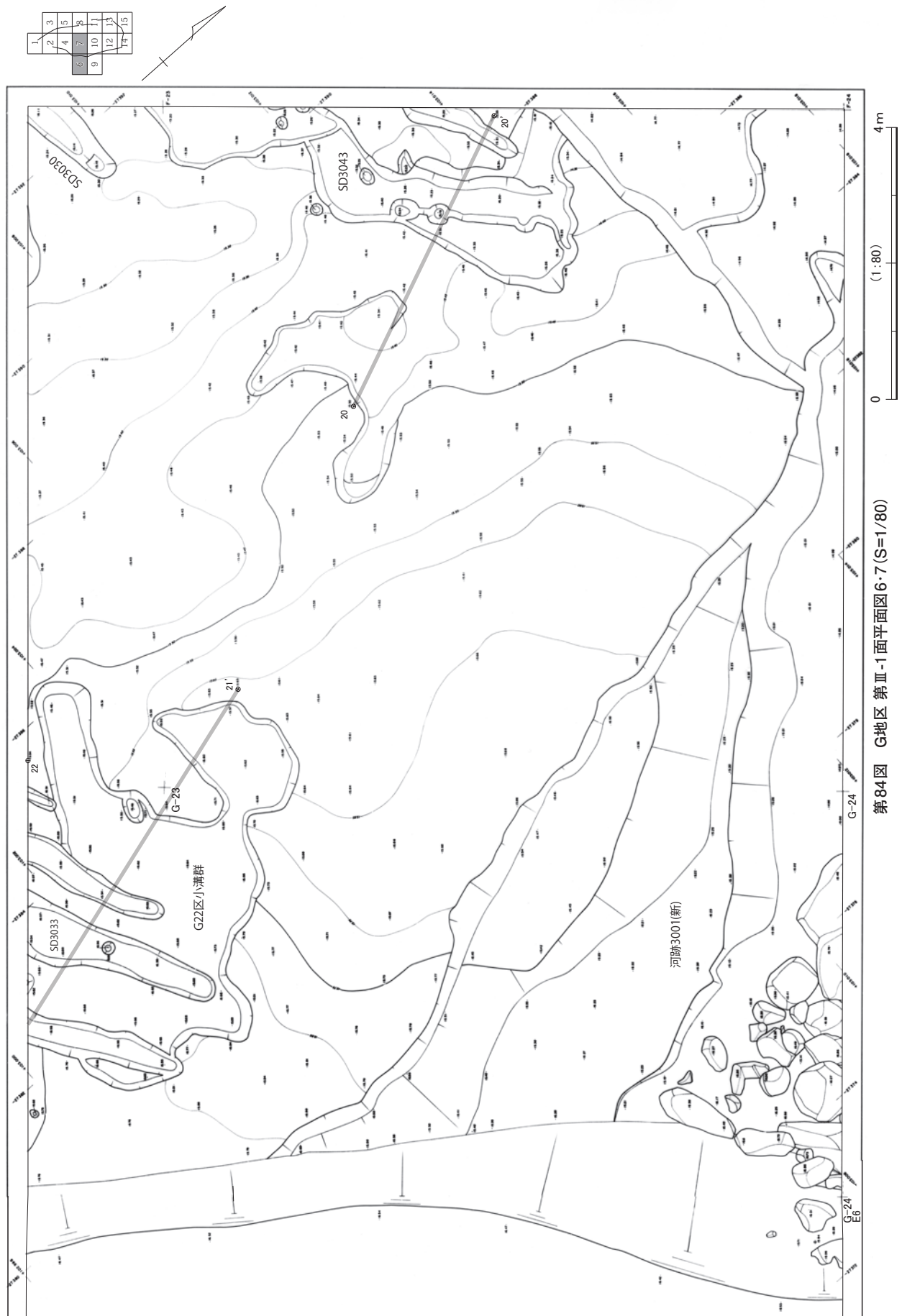


第81図 G地区 第三-1面平面図2・3 (S=1/80)



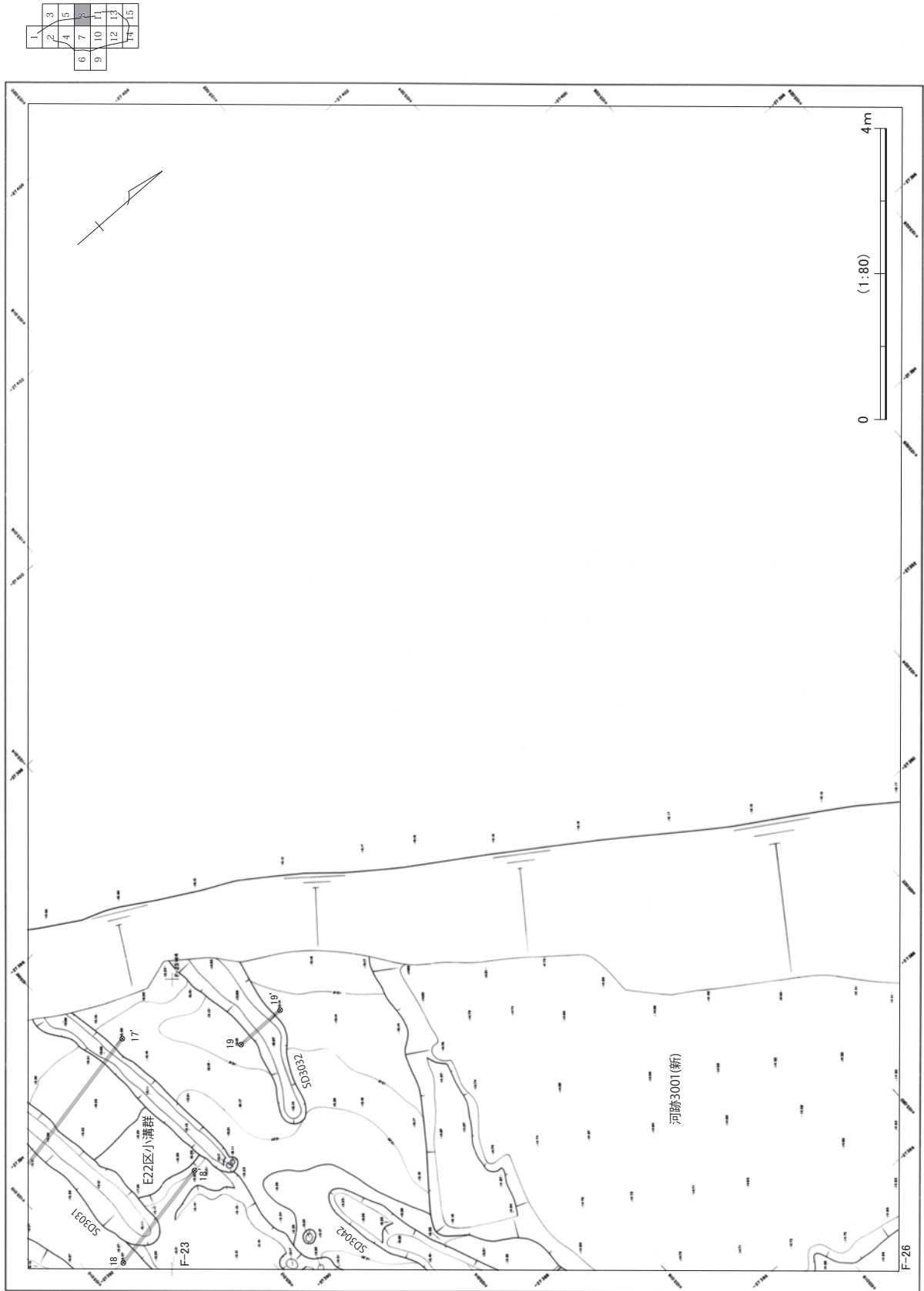


F-21

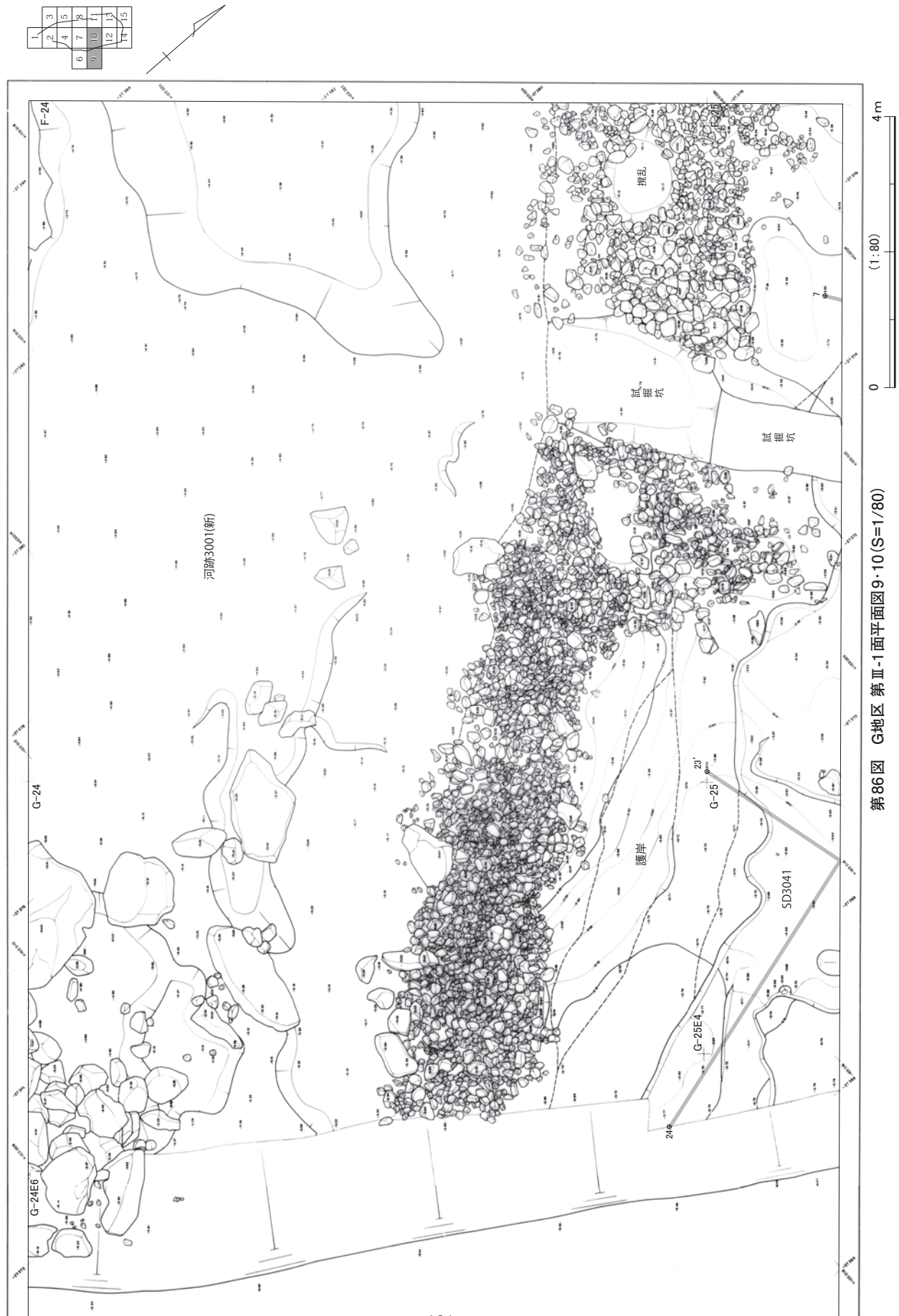


第84図 G地区 第Ⅲ-1面平面図6.7(S=1/80)





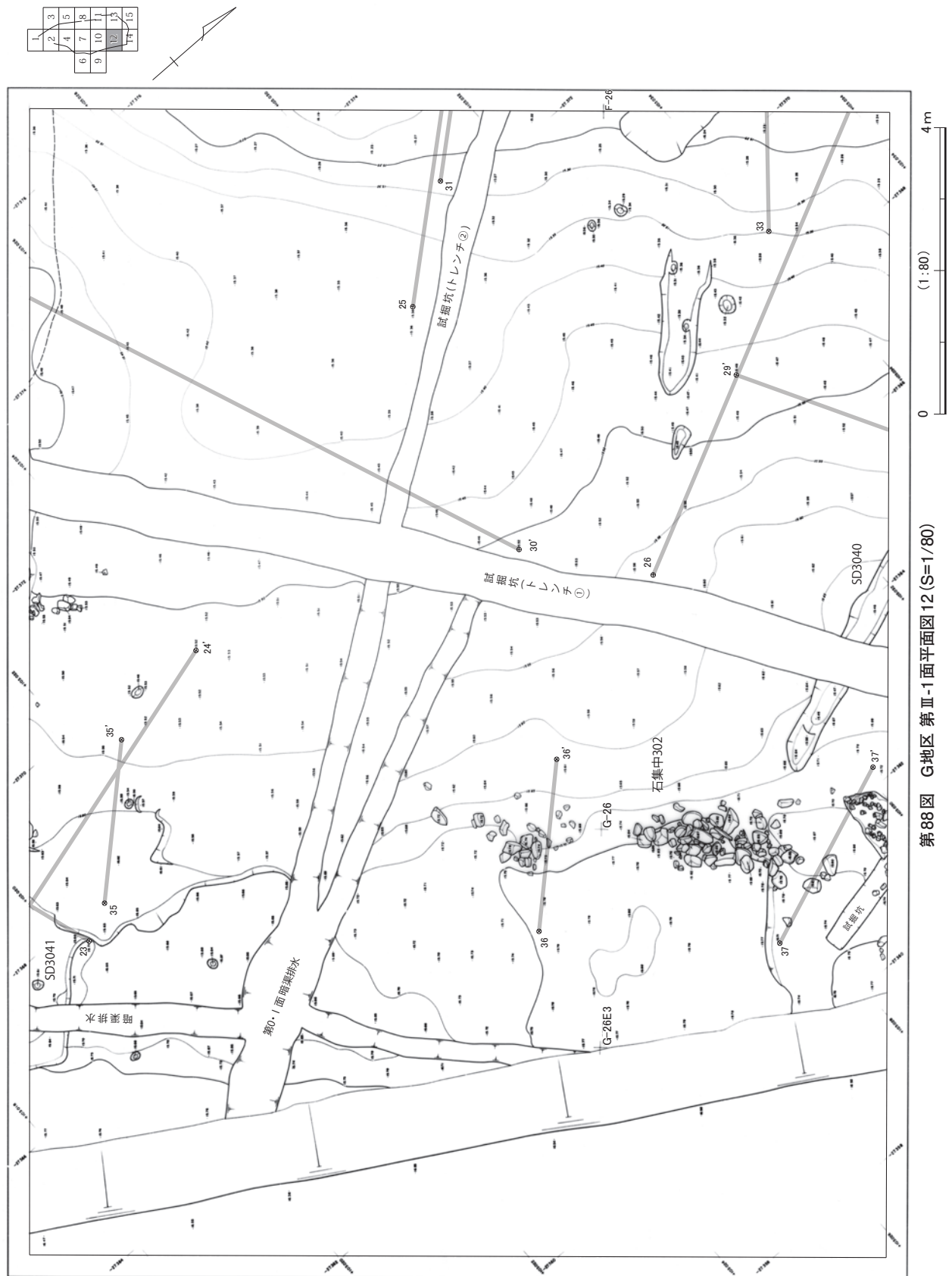
第85図 G地区 第三-1 面平面図8 (S=1/80)



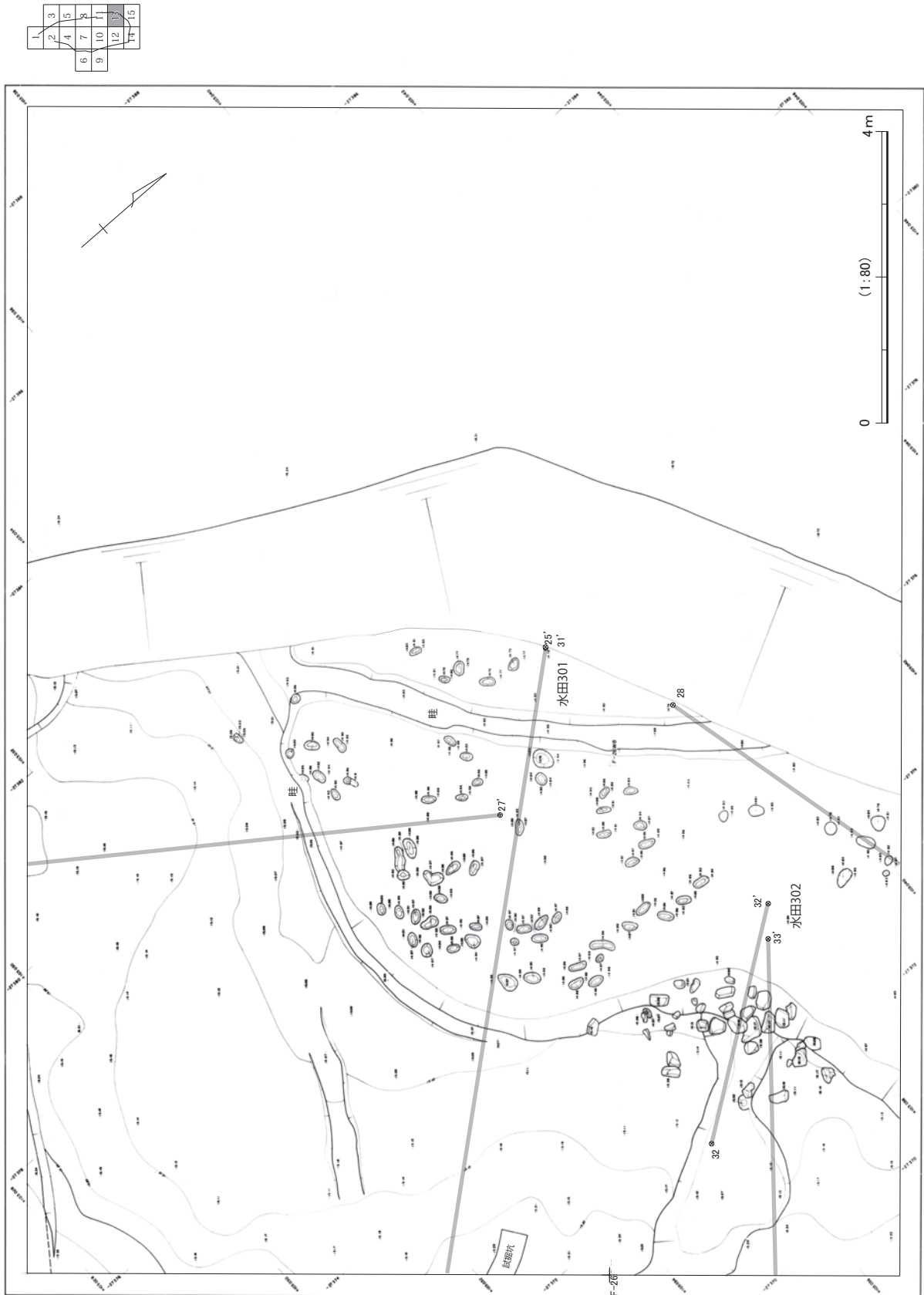
第86図 G地区 第Ⅲ-1面平面図9・10(S=1/80)



第87図 G地区 第三-1面平面図11 (S=1/80)



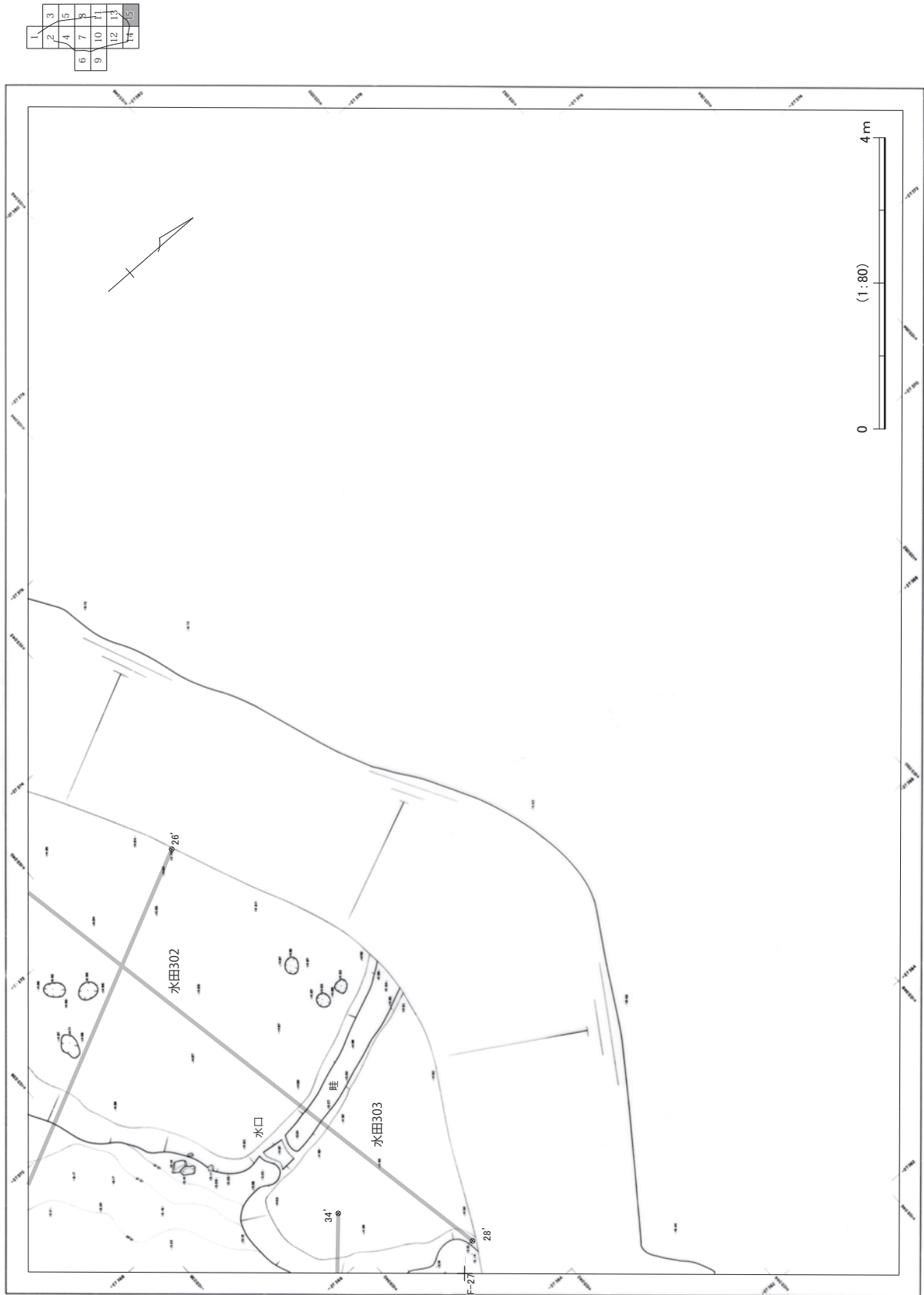
第88図 G地区 第Ⅲ-1面平面図12 (S=1/80)



第89図 G地区 第Ⅱ-1面平面図13 (S=1/80)



第90図 G地区 第Ⅲ-1面平面図14 (S=1/80)



第91図 G地区 第Ⅱ-1面平面図15 (S=1/80)

を示し、SB301とほぼ直交する位置関係にある。桁行中央柱穴は、柱筋より20～30cm外側に張り出し、2間(4.15m)×梁間1間(2.70m)、床面積11.2㎡となる。桁行の柱間寸法は1.75m・2.15mを測り、柱間寸法と柱筋の通りは乱れる。柱穴の平面形態は不整円形または略円形を基本とし、P3003が径34～40cm、深さ9cmを、北西隅の柱穴が径約35cm、深さ20cmを測る。柱穴覆土は緑灰色砂質土が粒状に混ざる濁黒灰色砂質土を基本とする。柱根、柱痕跡とも遺存せず、遺構の切り合い関係は、柱穴P3005がSB301を構成する柱穴P3004より古い。遺物のうち、P3003出土の第93図212を図化した。須恵器坏蓋212は口縁端部をしっかりと面取りしており、Ⅳ<sub>2</sub>期に位置付けられる。他にP3003から土師器甕片9点、P3005からロクロ土師器埴類片数点がそれぞれ出土した。

## 2 ピット(遺構：第92図、遺物：第93図・第20表)

調査区南半のE～G-21・22区を中心に小規模なピット約30基を検出した。ピットの覆土は、炭粒や緑灰色砂質土粒が混ざる濁黒灰～灰色砂質土を基本とする。以下では、断面図を作成または出土遺物を実測したピットについて記す。なお、P3014・15・17・19は欠番である。

### P3007(遺構：第81・82・92図)

F-21-3区で検出した平面不整形を呈する柱穴である。長軸約100cm、短軸約80cm、深さ28cmを測り、覆土は小石や炭粒が混ざる濁黒灰色砂質土である。遺構の切り合い関係および出土遺物はない。

### P3011(遺構：第82図、遺物：第93図)

F-21-4区で検出し、平面略円形を呈する。深さ15cmを測り、覆土は炭粒が混ざる濁黒灰色砂質土である。遺物のうち第93図213須恵器瓶を図化した。薄手の213は、球胴形の体部から緩やかに口縁部が開く。他にⅥ期に位置付けられる内黒ロクロ土師器無台埴片、甕片各1点が出土した。

### P3013(遺構：第82図、遺物：第93図)

F-21-3区で検出し、平面略楕円形を呈する。深さ19cmを測り、覆土は炭粒が混ざる濁黒灰色砂質土である。遺物のうち第93図214のロクロ土師器甕片を図化した。214は口径約24cmを測り、肥厚した口縁端部を平坦に仕上げる。他に須恵器無台坏、土師器甕の細片が出土した。

### P3016(遺構：第82図)

F-22-3区で検出した、平面不整形を呈する浅い窪みである。底面は起伏が認められ、覆土はオリブ黄褐色砂質土の単層である。遺物は須恵器無台坏、瓶、土師器甕の細片が出土した。

## 3 溝(遺構：第94～96図、遺物：第97図、第20表)

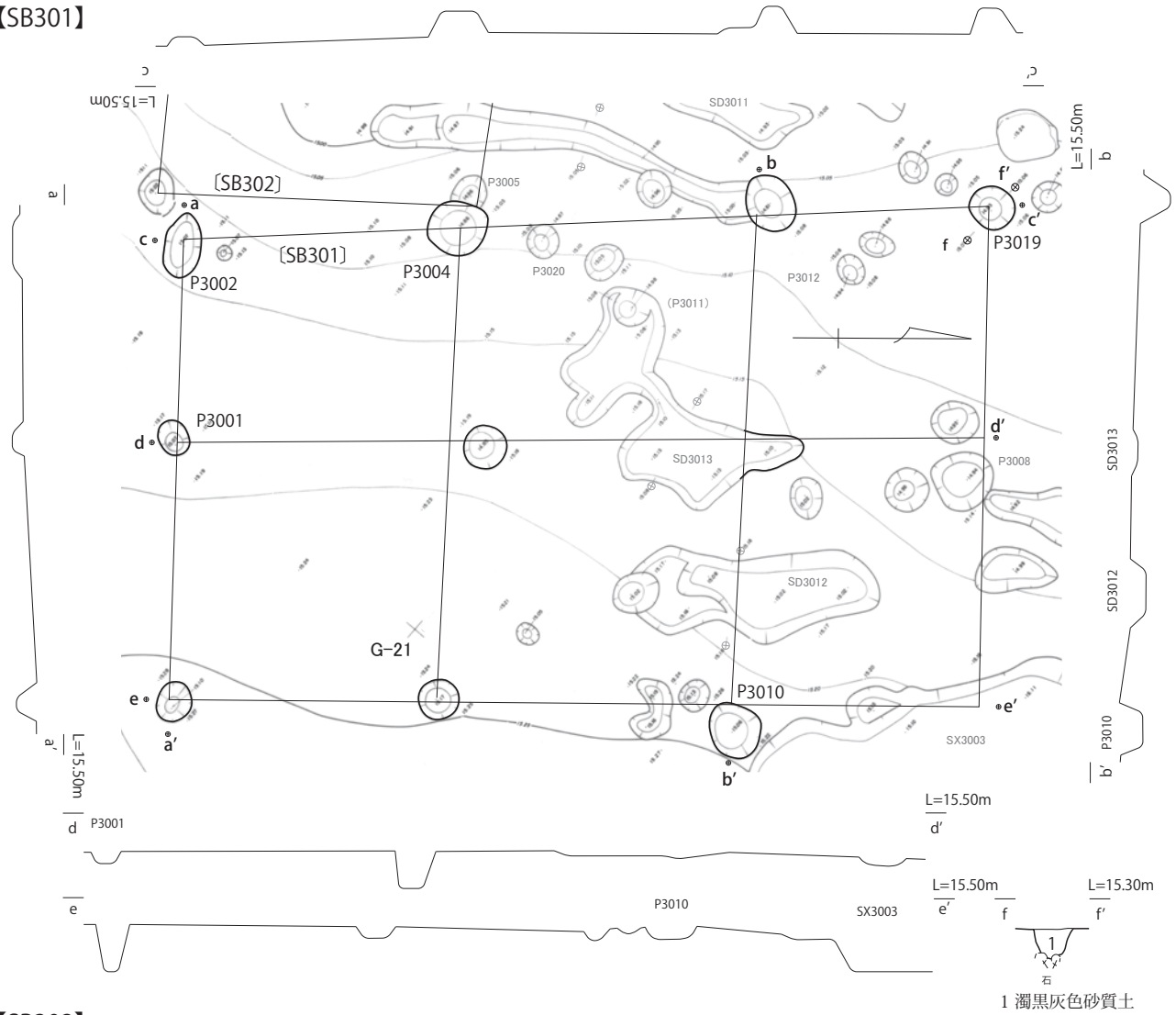
約40条の溝(SD)を検出しており、調査区南半に分布する溝の大部分は耕作に伴う小溝(畠地)と考えられる。また、調査区北半のSD3041が第Ⅲ-1面を被覆した土石流の流入痕跡、SD3040は第Ⅲ-1面が土砂で埋没した以降に単独に掘られた溝となる。調査区南半の溝は、切り合い関係・覆土の状況等から3小期に細別可能で、①F-20・21区SD3017～27等→②F-20・21区SD3007～09→③F-20・21区SD3001～06・16+E-22区小溝群+G-22区小溝群の順に変遷する。このうち、3ヶ所に分布する③は、第Ⅲ-1面最終段階(土砂埋没段階)での耕作単位を反映したものと考えられる。なお、現地調査でSDSD3001～33まで遺構番号を付与、報告書作成時に新たにSD3040～44を付した(SD3034～39は欠番)。

### SD3001～09・16(遺構：第80～82・94～96図、遺物：第97図・第20表)

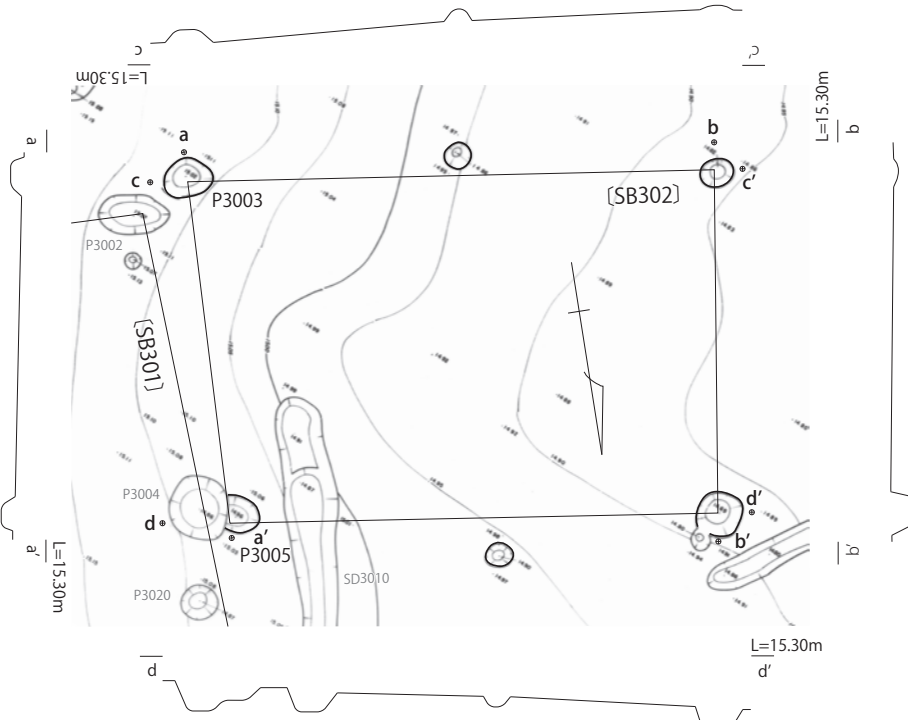
F-20区、E・F-21区で検出した耕作に伴う小溝群で、F地区第Ⅲ面北側で検出した小溝群と一体をなす。上層包含層(濁黒灰色砂質土)を掘り下げた段階で、下層包含層(濁灰緑～緑灰色砂質土)を遺構検出面とする小溝群である。



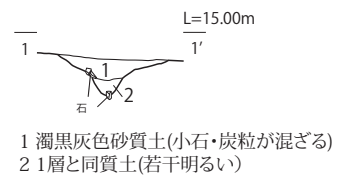
【SB301】



【SB302】



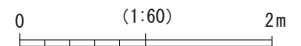
【F21区 P3007】(第81・82図)



【F22区 P3016・17】(第82図)



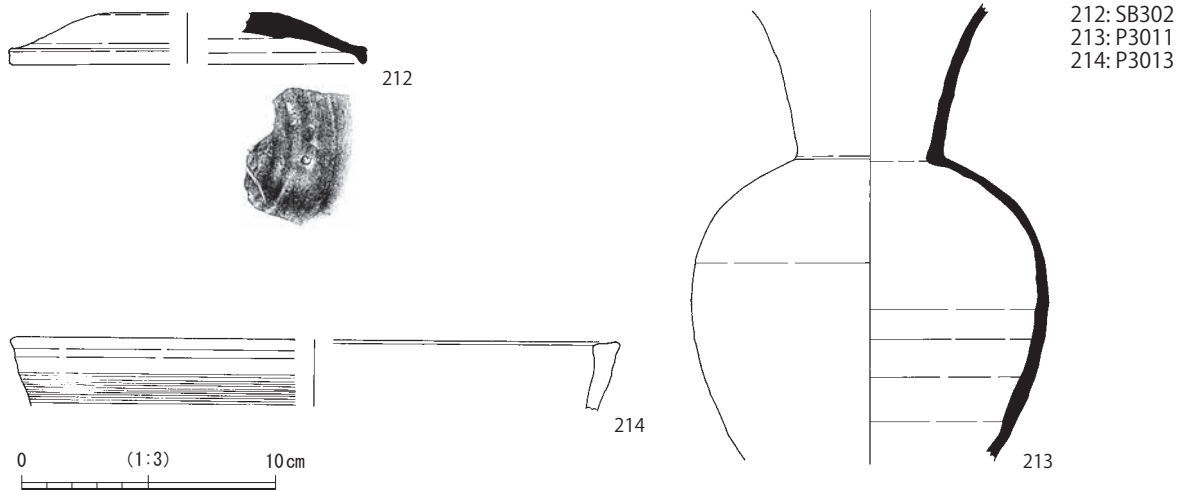
第92図 G地区 第三-1面SB・ピット平面図・土層断面図(S=1/60)



G地区 第19表 第Ⅲ-1面SB規模等一覧表

※ 柱間寸法は北端から南端柱穴、または東端から西端柱穴の順に計測。

遺構名	図No.	グリッド名	柱構造	柱配置	床面積 (㎡)	桁行長 (m)	桁行柱間寸法 (m)	梁行長 (m)	梁間柱間寸法 (m)	主軸方位	柱穴の 平面形態	柱根の 有無	備考
SB301	92	F・G・ 21・22	総柱	3×2間	27.4	6.95	[東桁] 2.10+2.55+2.30 [西桁] 2.00+2.55+2.40	3.95	[南梁] 2.20+1.75	[東桁] N-0° [西桁] N-3.0°西	略円形 不整形	なし	柱筋にゆがみあり
SB302	92	F-21	側柱	2×1間	11.2	4.15	[北桁] (2.10) + (1.75) [南桁] (2.15) + (2.00)	2.70	2.70	N-82.0°西	略円形 不整形	なし	〃



第93図 G地区 第Ⅲ-1面SB・ピット出土遺物実測図(S=1/3)

SD3001～06・16は、溝主軸方位N-75～80°Eを示し、ほぼ地勢に直交しながら直線的に延びる。溝の長さはSD3002・03で10m以上、溝間距離はSD3001－02間が約1.7m、SD3002－03間が約2.2m、SD3003－04間が約1.8m、SD3004－05間が約1.2m、SD3005－06間が約2.5m、SD3006－16間が約1.6mを測り、必ずしも等間隔ではない。各溝は幅20～40cm、深さ10cm前後を測り、しまりのない濁黒灰～黒灰色砂質土を覆土とする。また、SD3002・05では第Ⅲ-2面を被覆した流入土砂(第95図断面8土層1:明茶黄色粗砂)の堆積が確認できる(写真図版27)。SD3006以外から遺物が出土、SD3002・03出土のロクロ土師器赤彩無台埴(第97図215)、SD3003出土の須恵器(同図216・217)を図化した。215は、底部外面を含めて全面を赤彩する。回転糸切り痕を残す底部外面外縁に1条の沈線が施されており、台部接合を意図した可能性をもつ。坏蓋216は口径14.9cmを測り、天井部内面は使用に伴い平滑となる。無台盤217は口径約14cmを測り、V<sub>2</sub>～VI<sub>1</sub>期に位置付けられる。SD3001～06・16からは、他に須恵器無台坏・坏蓋・有台坏・瓶・甕、ロクロ土師器埴類・鉢・甕、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

SD3007～09は、溝主軸方位N-6～13°Wを示し、SD3001～06にはほぼ直交、北を指向しながら地勢に沿って掘られる。溝の長さはSD3007で6.2m以上、溝間距離はSD3007－08間が1.5～2.0m、SD3008－09間が2.0～2.2mを測る。各溝は幅25～45cm、深さ5～10cmを測り、濁黒灰色砂質土を覆土とする。SD3007から須恵器坏類、VI<sub>2</sub>期のロクロ土師器埴類、非ロクロ土師器甕の細片が、SD3008から須恵器坏類、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

遺構の切り合い関係からSD3007～09→SD3001～06・16と変遷し、後者の小溝群についてはSD3002・05覆土の様相から第Ⅲ-2面最終段階(土砂埋没段階)に位置付けられる。

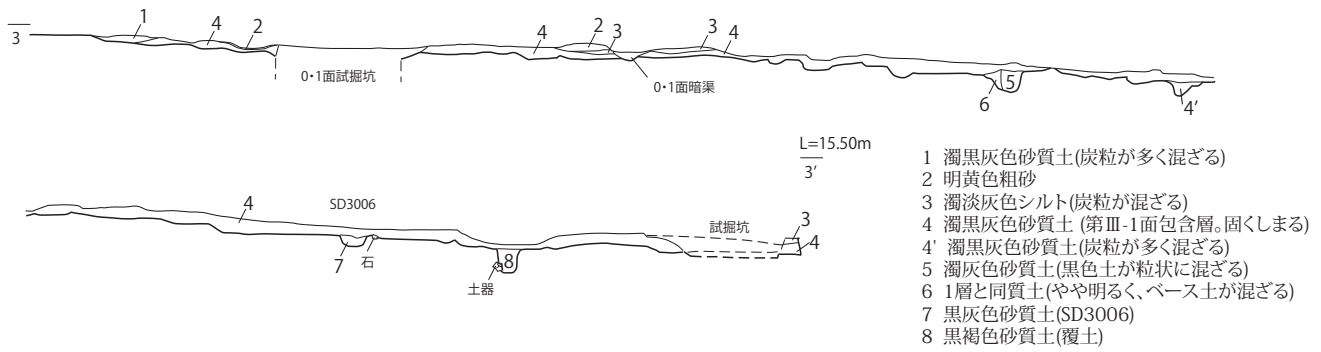
**SD3017～27**(遺構：第94～96図、遺物：第97図・第20表)

F-20区で検出した耕作に伴う小溝群である。下層包含層(濁灰緑～緑灰色砂質土)を掘り下げた段階で検出しており、明灰～茶色を基調とする粗砂をベース土とする。溝主軸方位はSD3007～09と近

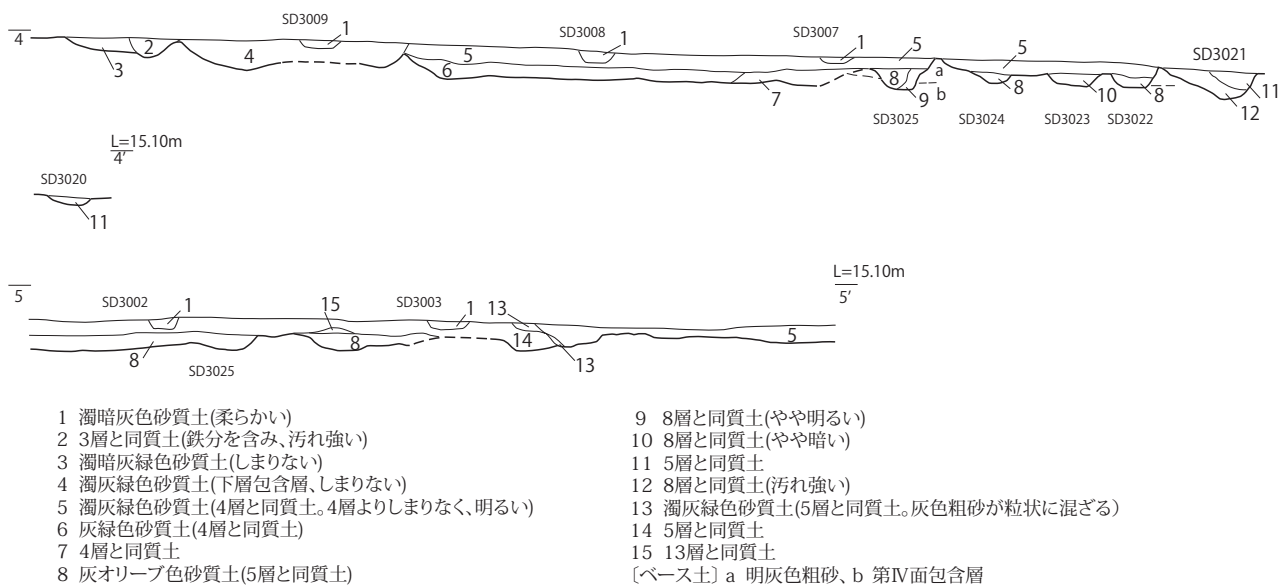


第3節 第Ⅲ-1面の遺構と遺物

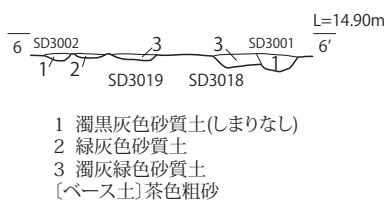
【F21～G22区包含層・SD3006】(第81・82図)



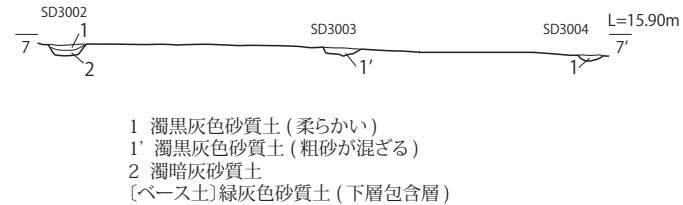
【F20・21区包含層・SD3002・03・07～09他】(第80・81図)



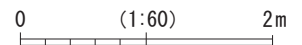
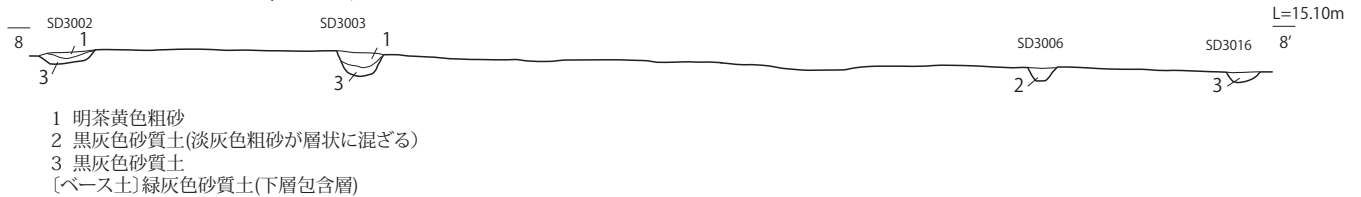
【F20区 SD3001・02・18】(第80図)



【F20区 SD3002～04】(第81図)



【F20区 SD3002・03・03・16】(第81図)



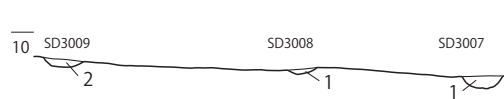
第95図 G地区 第Ⅲ-1面SD土層断面図1(S=1/60)

【F21区 SD3005】(第81図)



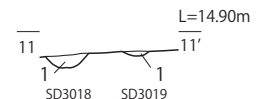
- 1 濁黒灰色砂質土(SD3005覆土)
- 2 濁緑灰色砂質土(汚れ強い)
- 3 濁緑灰色砂質土(炭粒が多く混ざる)
- 4 2層と同質土  
〔ベース土〕下層包含層(緑灰色砂質土)

【F20・21区 SD3007～09】(第81図)



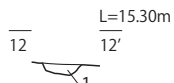
- 1 濁黒灰色砂質土
- 2 1層と同質土(色調やや淡い)  
〔ベース土〕下層包含層(緑灰色砂質土)

【F20区 SD3018・19】(第80図)



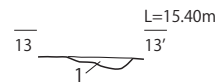
- 1 濁灰緑色砂質土  
〔ベース土〕茶色粗砂

【F21区 SD3010】(第82図)



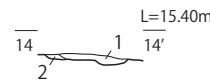
- 1 灰褐色砂質土

【F22区 SD3012】(第82図)



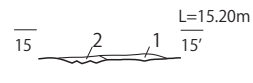
- 1 濁黒色砂質土

【F22区 SD3013】(第82図)



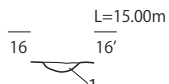
- 1 濁暗灰色砂質土
- 2 灰褐色砂質土

【F21区 SD3015】(第82図)



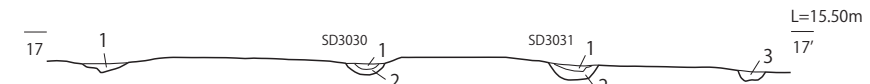
- 1 濁黒色砂質土
- 2 濁黒色砂質土(1層より淡い)

【F21区 SD3016】(第81図)



- 1 濁黒色砂質土

【E・F22区 SD3030・31】(第82・85図)



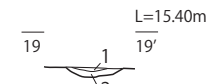
- 1 淡灰茶色砂
- 2 にぶい茶褐色細砂(淡灰オリーブ色土が粒状に混ざる)
- 4 淡灰オリーブ色細砂

【E22区 SD3031】(第85図)



- 1 淡灰茶色砂
- 2 濁灰オリーブ色細砂  
(褐色土が粒状に混ざる)
- 3 にぶい茶褐色細砂

【E-23-2区 SD3032】(第85図)



- 1 明茶色砂利
- 2 淡灰オリーブ色細砂  
〔ベース土〕濁灰色砂質土

【F23区 SD3042・43】(第84図)

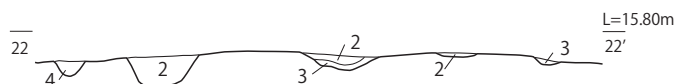


- 1 濁褐色砂質土(粗砂が多く混ざる)
- 2 淡灰オリーブ色砂質土(褐色砂質土粒が混ざる)  
〔ベース土〕濁灰色砂質土

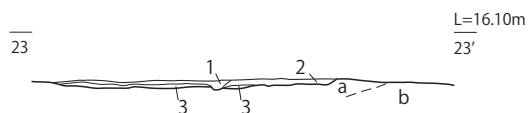
【G22・23区 SD3033】(第82・84図)



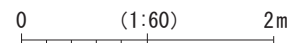
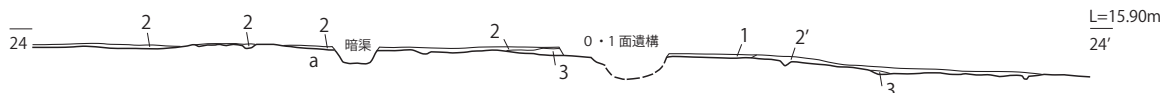
- 1 茶灰色砂
- 2 濁淡灰オリーブ色細砂(褐色土が混ざる)
- 3 濁褐色細砂(淡灰オリーブ色土が粒状に混ざる)
- 4 濁褐色細砂と淡灰粗砂の混合土  
〔ベース土〕:IV面包含層(濁灰色砂質土)



【F・G-25区 SD3041】(第86・88図)



- 1 淡茶灰色粗砂(2層と同時期に堆積)
- 2 淡緑灰色細砂(シルトに近い)
- 2' 暗褐色砂質土(2層が粒状に多く混ざる)
- 3 暗褐色弱粘質土(2層と同時期に堆積)
- 〔ベース土〕a IV面包含層(濁灰色砂質土)  
b 淡灰色砂質土(堤防盛土、粗砂・砂利が混ざる)



第96図 G地区 第Ⅲ-1面SD土層断面図2(S=1/60)

似しており、地勢に沿って屈曲しながら南北方向に延びる。重複が著しいものの、F地区第Ⅲ面小溝群の様相から約1.5～2mの間隔で掘られたと考えられる。各溝は幅40～75cm、深さ6～25cmを測り、覆土は炭粒が多く混ざる濁灰緑～灰オリーブ色砂質土である。出土遺物のうち第97図221～223を図化した。SD3017出土の須恵器無台坏221は口径12.3cm、器高3.3cmを測り、底部は台状を呈する。使用に伴う摩耗が目立ち、Ⅵ<sub>1</sub>期に位置付けられる。SD3024出土の非ロクロ土師器甑222は底径15.4cmを測り、内面は摩耗が著しい。非ロクロ土師器甕223は復元に不安を残す。他にSD3017・21～27からⅥ期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器埴類・甕、非ロクロ土師器埴類・甕の細片が出土した。

**SD3010～15・28・29・44**(遺構：第82・96図、遺物：第97図・第20表)

E・F-21・22区で上層包含層(濁黒灰色砂質土)を掘り下げた段階で検出した小溝群である。北を指向しながら直線に延びるSD3010・12・28・44は耕作に伴う小溝、その他は包含層の浅い落ち込みと考えられる。覆土は濁黒～暗灰色砂質土を基調とする。SD3044以外から遺物が出土しており、第97図218～220を図化した。SD3012出土のロクロ土師器有台埴218は細長い台部を外展気味に貼り付ける。SD3014出土の須恵器無台坏219は薄手で、体部下半に丸味をもつ。SD3015出土の須恵器有台坏220の体部は直立気味に立ち上がり、口縁部で小さく外反する。他にⅥ期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器埴類・甕、非ロクロ土師器埴類・甕の細片が出土した。

**SD3030～32・42**(遺構：第82～86・96図)

E・F-22・23区で検出した小溝群で、現地調査時はE-22区畝溝群と呼称した。東西・南北方向とも約10mの範囲に分布し、調査区外西側に延びる。溝主軸方位は西を指向しながら地勢に直交して掘られ、溝の長さはSD3042が約3.4m、その他が約5mを測る。溝間距離は1.4～2.6mを測り、等間隔でない。各溝は幅25～60cm、深さ10～25cmを測り、茶褐色～淡灰オリーブ色を基調とする細砂を覆土とする。また、第Ⅲ-2面を被覆した流入土砂(第96図断面17～19各土層1：淡灰茶色砂～明茶色砂利)の堆積が確認できる。遺構の切り合い関係から上層包含層より新しく、SD3001～06・16と同様に第Ⅲ-2面最終段階(土砂埋没段階)での耕作痕と考えられる。SD3042以外からⅥ期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器甕、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

**SD3033**(遺構：第82・84・96図)

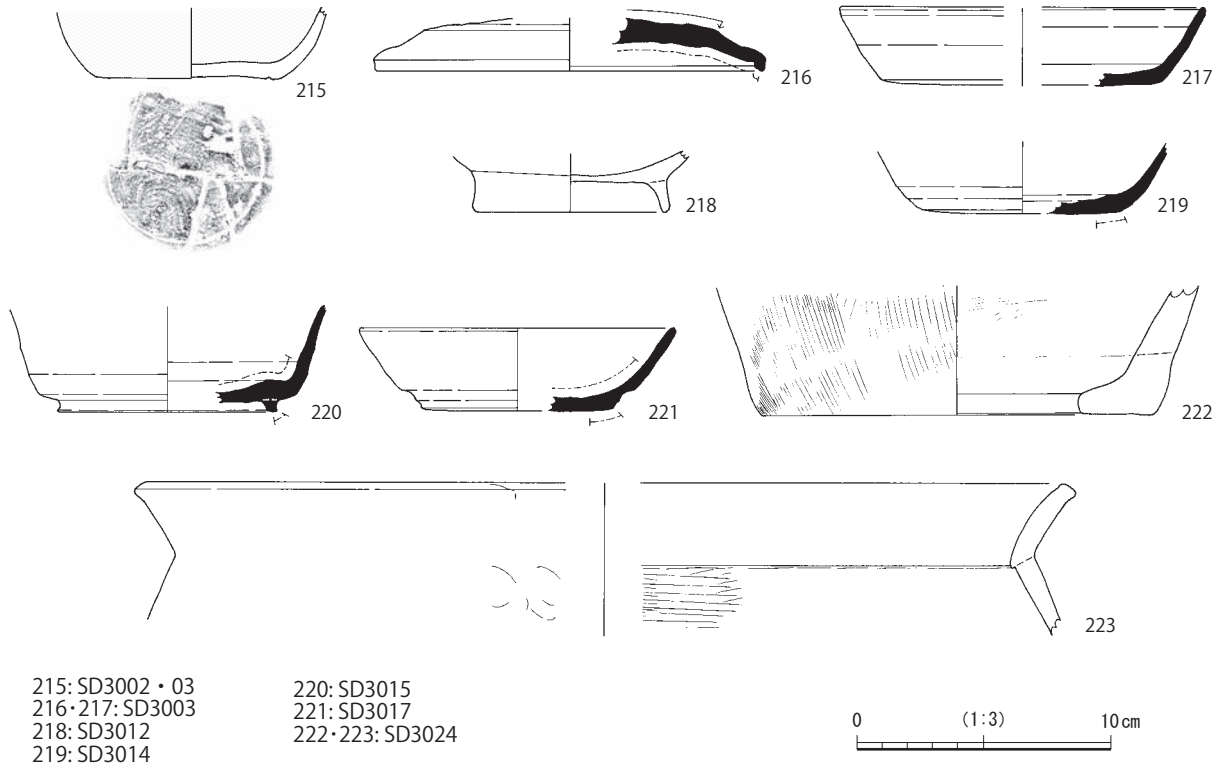
F・G-22・23区で検出した耕作に伴う小溝群で、現地調査時は東西方向約8m、南北方向約7mの範囲に分布する周辺の小溝5条を含めてG-22区畝溝群と呼称した。溝主軸方位はN-60～67°Eを示し、地勢にはほぼ直交気味に掘られる。溝の規模から長さ1.2～1.4m、幅15～25cm、深さ5～10cmの群と、長さ4～6m、幅30～75cm、深さ5～20cmの群に細分可能である。覆土は濁淡灰オリーブ色または濁褐色を呈する細砂を基本とし、第Ⅲ-2面を被覆した流入土砂(第96図断面21土層1：茶灰色粗砂)の堆積が確認できる。遺構の切り合い関係から上層包含層より新しく、SD3001～06・16と同様に第Ⅲ-2面最終段階(土砂埋没段階)での耕作痕と考えられる。Ⅵ期以前の須恵器坏類、ロクロ土師器甕、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

**SD3040**(遺構：第88・90・99図)

河跡3001(新)の北側に位置するF-26区で検出した単独に立地する小溝で、溝主軸方位N-約18°Wを示す。長さ約5.7m、幅40～55cm、深さ6～22cmを測り、上層から淡茶色粗砂、濁灰色砂質土が堆積する。遺構の切り合い関係から第Ⅲ-2面埋没後に掘られた溝で、出土遺物はない。

**SD3041**(遺構：第86・88・96図)

河跡3001(新)の北側に位置するF・G-25区で検出した溝状遺構で、第Ⅲ-2面を短期間のうちに被覆した土砂の流入痕跡である。覆土は淡茶灰色粗砂、淡緑灰色細砂を基調とする。出土遺物はない。



215: SD3002・03  
216・217: SD3003  
218: SD3012  
219: SD3014  
220: SD3015  
221: SD3017  
222・223: SD3024

第97図 G地区 第Ⅲ-1面SD出土遺物実測図(S=1/3)

**SD3043**(遺構：第84・85・96図)

E・F-23区で検出した溝状遺構で、下層包含層の落ち込みの一部と考えられる。出土遺物はない。

**4 水田区画**(遺構：第79・98～100図)

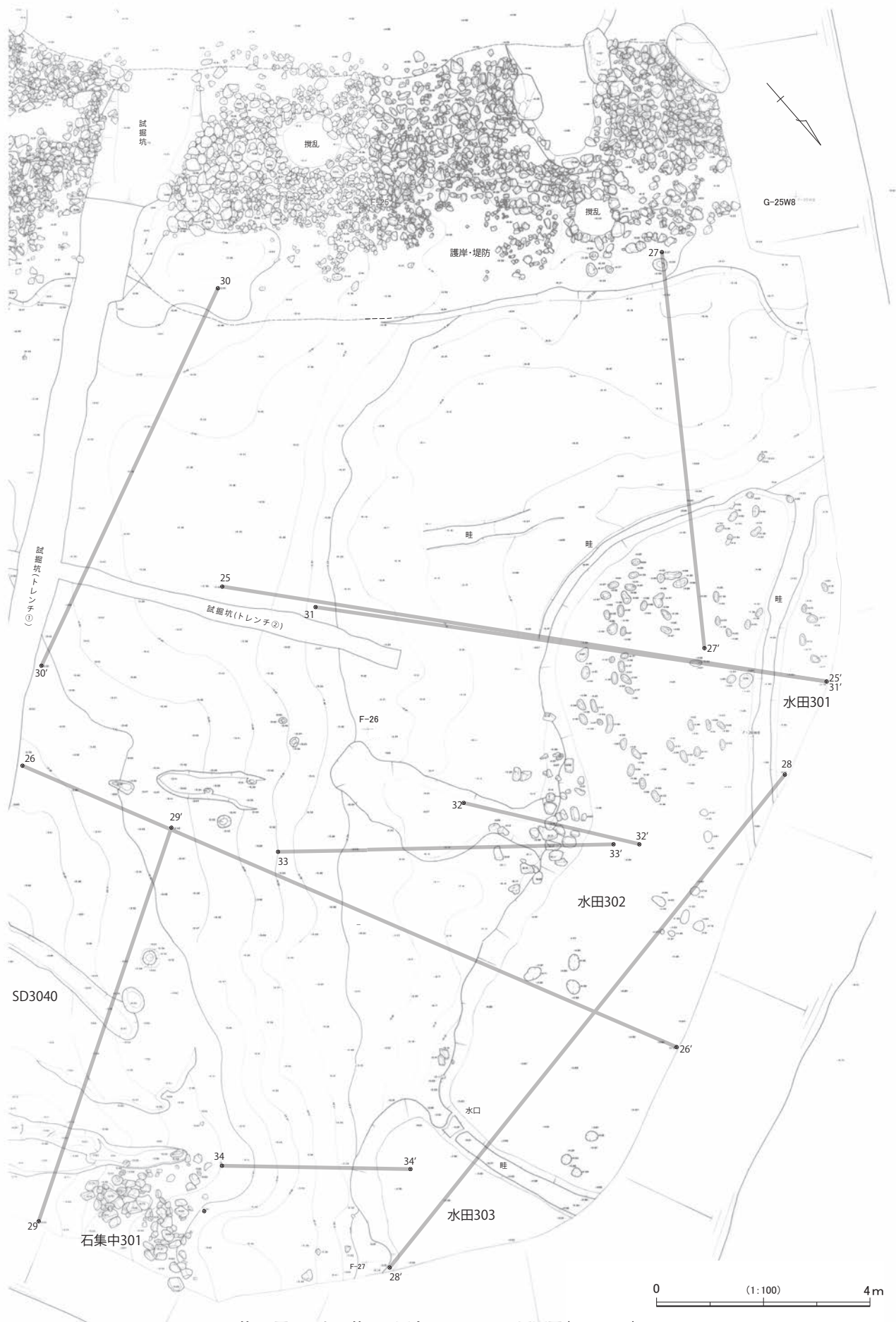
E～G-25・26区で検出した耕作域である。第4次調査で河跡3001(新)北側の護岸・堤防で護られた水田(SN)3枚と、放棄された水田区画を反映した自然石の集積地点2ヶ所(石集中301・302)を検出し、前述のとおり第Ⅲ-2面最終段階(土砂埋没段階)の土地利用を示す。以下では、補足調査を実施した第5次調査の結果を含めて記す。なお、石集中301・302は報告書作成段階で新たに付した遺構番号である。

**水田301～303**

E-25・26区で検出した小規模な水田で、調査区外北西側に延びる。地形の傾斜(標高約15m)に沿って畦畔を挟んで一体的に造成される。

平面形態は崩れた略短冊形を呈するものと考えられ、水田301が北西-南東方向で1.1m以上、北東-南西方向で5.8m以上を、水田302が北西-南東方向で4.1m以上、北東-南西方向で13.6mを、水田303が北西-南東方向で3.7m以上、北東-南西方向で2.8m以上の規模を測る。水田302南東辺で確認した自然石(長軸10～20cm主体)の集積は、水田肩部を保全する目的の土留め工痕跡と考えられる。耕作面の標高は、水田301が南西端で14.81m、北東端で14.80m、水田302が南西角で14.94m、北東端で14.90m、水田303が南角で14.93m、北西端で14.91mと、各水田とも数cmの比高差におさまる。

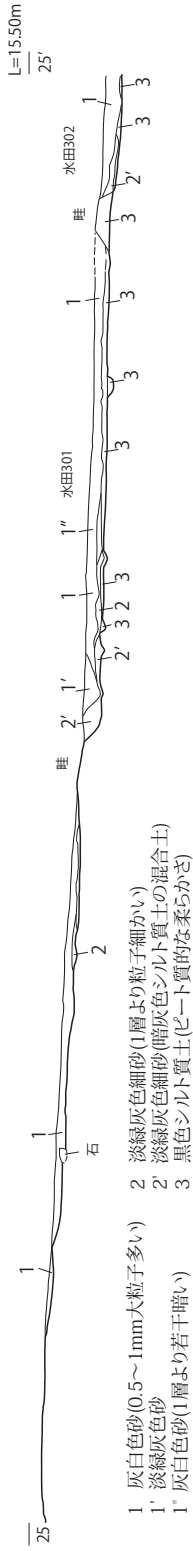
水田間の畦畔は、上幅24～40cm、下幅44～58cm、高さ10～12cmを測る小振りな造りで、肩部の傾斜は比較的緩やかである。耕作面造成後に黒～黒灰色を呈するシルト質～砂質土を用いて作られる(第99図断面25・28土層3、第100図断面31土層5等)。また、水田302南辺に沿った延長約4m、上幅14～24cm、高さ約2cmを測る畦畔や、水田302の南東側約1.2～2.5mにおいて、延長2.7m、上幅24～



第98図 G地区 第Ⅲ-1面水田301～303平面図(S=1/100)

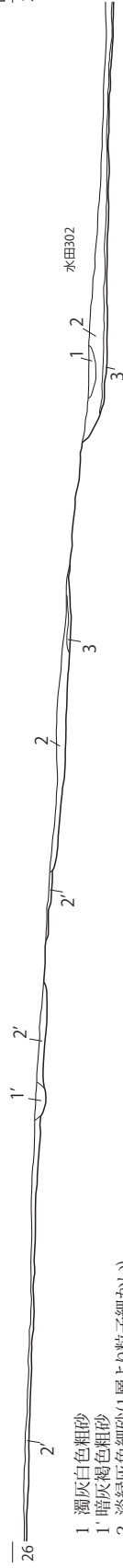


【水田301～303 被覆土層】



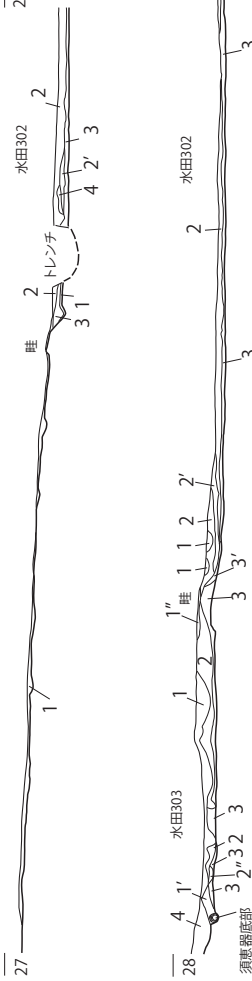
- 1 灰白色砂(0.5～1mm大粒子多い)
- 1' 淡緑灰色砂
- 1' 灰白色砂(1層より若干暗い)
- 2 淡緑灰色細砂(1層より粒子細かい)
- 2' 淡緑灰色細砂(暗灰色シルト質土の混合土)
- 3 黒色シルト質土(ピート質的な柔らかさ)

L=15.30m  
26'



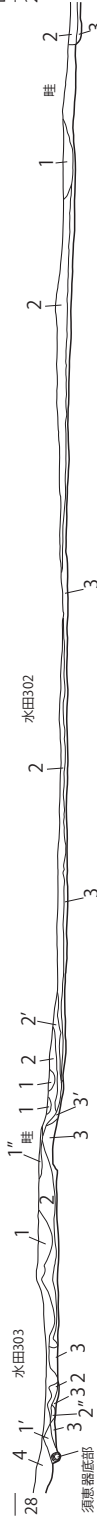
- 1 濁灰白色粗砂
- 1' 暗灰褐色粗砂
- 2 淡緑灰色細砂(1層より粒子細かい)
- 2' " (2層よりやや暗い)
- 3 黒色シルト質土(上層との境に0.5～1cm厚のピート層が部分的にあり)

L=15.40m  
27'

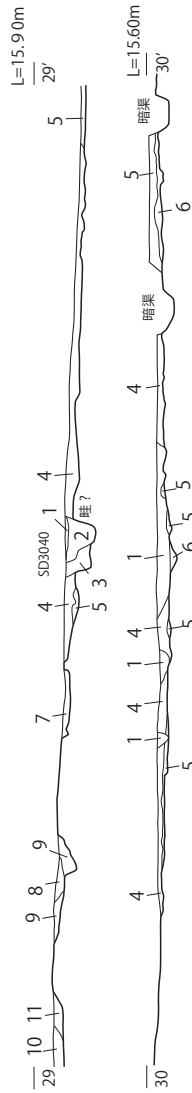


- 1 濁灰白色粗砂
- 1' 暗灰白色砂
- 1' 褐灰色砂質土
- 2 淡緑灰色細砂(1層より粒子細かい)
- 2' " (暗灰色シルトが混ざる)
- 2' 明緑灰色砂(粒子やや粗い)
- 3 黒色シルト質土(上層との境に0.5～1cm厚のピート層が部分的にあり)
- 3' 暗褐色ピート質土(腐植物が多く混ざる)
- 4 黒色シルト質土

L=15.30m  
28'



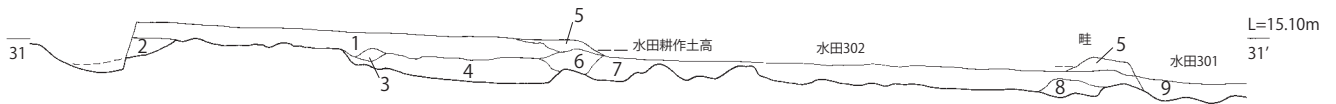
【F-25・26 区水田東側】



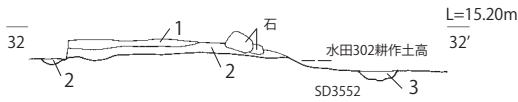
- 1 淡茶灰色粗砂
- 2 濁灰色砂質土
- 3 2層と同質土(4層が粒状に混ざる)
- 4 淡緑灰色細砂(シルトに近い)
- 5 暗褐色弱粘質土(4層と同時期に堆積)
- 6 暗灰褐色砂質土(4層が粒状に多く混ざる)
- 7 1層と5層の混合土
- 8 灰褐色砂質土
- 9 淡茶灰色粗砂～砂利
- 10 濁灰色粗砂質土
- 11 茶色粗砂

第99図 G地区 第Ⅲ-1面水田等土層断面図1 (S=1/60)

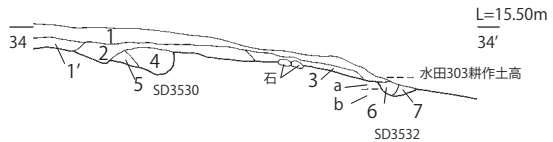
【水田 301 ~ 303 耕作土層】



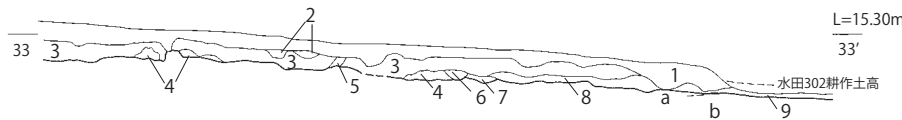
- 1 茶褐色砂質土(ピートが混ざり、しまりない)
- 2 濁灰褐色砂質土(炭粒、砂利が混ざる、耕作土)
- 3 濁灰色砂質土(Ⅲ-2面SD覆土)
- 4 淡灰色砂質土と6層の混合土
- 5 6層と淡灰緑色砂質土の混合土
- 6 黒灰色砂質土とベース土混合土(しまりない)
- 7 明茶色粗砂と淡灰緑色砂質土の混合土(茶褐色ピートが混ざる)
- 8 7層と同質土(ピート混ざらない)
- 9 暗灰色砂質土と明茶色粗砂の混合土〔ベース土〕淡灰~明茶色粗砂



- 1 濁灰褐色砂質土(耕作土、炭粒が混ざる)
- 2 濁灰褐色砂質土+ベース土の混合土
- 3 1層と2層の混合土(ピートが混ざる)〔ベース土〕Ⅳ面包含層(灰緑色砂質土)

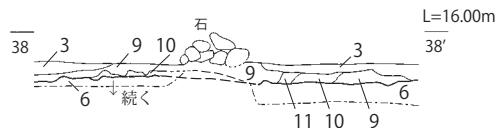
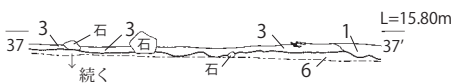


- 1 濁灰褐色砂質土(炭粒・砂利が混ざる。耕作土)
- 1' 1層と同質土(やや粘質。整地土または耕作土)
- 2 濁暗灰色砂質土(ピートが混ざり柔らかい。整地土か)
- 3 ベース土aと灰緑色砂質土の混合土
- 4 茶黄色粗砂と灰緑色砂質土の混合土(SD3530覆土)
- 5 2層と同質土(やや暗い。SD3530覆土)
- 6 ベース土bと灰緑色砂質土の混合土(SD3532覆土)
- 7 暗灰褐色弱粘質土(SD3532覆土)〔ベース土〕a:Ⅳ面包含層(灰緑色砂質土)、b:茶灰色粗砂

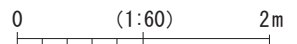


- 1 濁灰褐色砂質土(炭粒・砂利が混ざる。耕作土)
- 2 濁暗灰色砂質土(ピートが混ざり、柔らかい)
- 3 濁緑灰色砂質土と1層の混合土(炭粒混ざる。整地土または耕作土)
- 4 ベース土a(1層が粒状に混ざる)
- 5 濁淡灰緑色砂質土
- 6 濁黒灰色土(炭化物が多く混ざる)
- 7 3層と同質土
- 8 濁暗灰褐色砂質土(ピートが混ざる)
- 9 ベース土bと1層の混合土〔ベース土〕a:Ⅳ面包含層(灰緑色砂質土)、b:茶灰色粗砂

【石集中 302】(第 88・89 図)



- 1 暗灰色砂質土(黄茶色粗砂が粒状に混ざる)
- 2 灰色砂質土(1・6層が粒状に混ざる)
- 3 灰色砂質土(炭粒・鉄分が若干混ざる。耕作土)
- 3' 3層と同質土(鉄分が多く沈着)
- 4 灰色砂質土(6層が粒状に混ざる)
- 5 灰色砂質土(1~4cm大の礫が若干混ざる。3層より粘性弱い。耕作土か)
- 6 濁灰オリブ色粘質土(Ⅳ面遺物包含層。しまりあり)
- 7 灰色砂質土(炭粒が混ざる)
- 8 6層と7層の漸移層
- 9 にぶい濁オリブ灰色砂質土
- 10 濁明茶色粗砂(9層が粒状に混ざる)
- 11 6層と同質土



第100図 G地区 第Ⅲ-1面水田等土層断面図2(S=1/60)

32cm、高さ約4cmを測る畦畔残欠を確認している。水田301～303に付属する用排水施設は確認できず、水田302・303間の畦畔南側において半開放状態の水口を検出、上方の水田から順次水を流下させたと想定できる。水口の規模は、上幅32～40cm、深さ5cm前後、水田302との比高差約7cm、水田303との比高差約5cmを測る。水田301・302間の水口は調査区外北西側の畦畔に存在するようだ。

耕作面で確認できた長楕円形を主体とした窪みは、一定の方向性を示すものを含むことから足跡痕跡の可能性が高いと考えられる。窪みは、長軸約10～36cm、深さ3cm前後を測り、覆土は耕作土上層(しまりのない黒色シルト質土)を基本とする。また耕作土は、上層から厚さ2～4cmを測る黒～暗茶褐色シルト質土(第99図断面25～28土層3、湛水時堆積土)、厚さ10～15cmを測る茶褐色腐植土が混ざる柔い茶褐～灰褐色砂質土(第100図断面31土層4・7、同図断面35土層3・5等)を基本とし、部分的耕作面造成土と考えられる混合土(同図断面31土層4、同図断面33土層3～8等)が存在する。その後、水田301～303は、短期間で流入した灰白～淡灰緑色を呈する細砂・砂・粗砂で埋没しており、その流入・堆積土から出土した遺物はない。

#### 石集中301・302.(遺構：第79・88・90・100図)

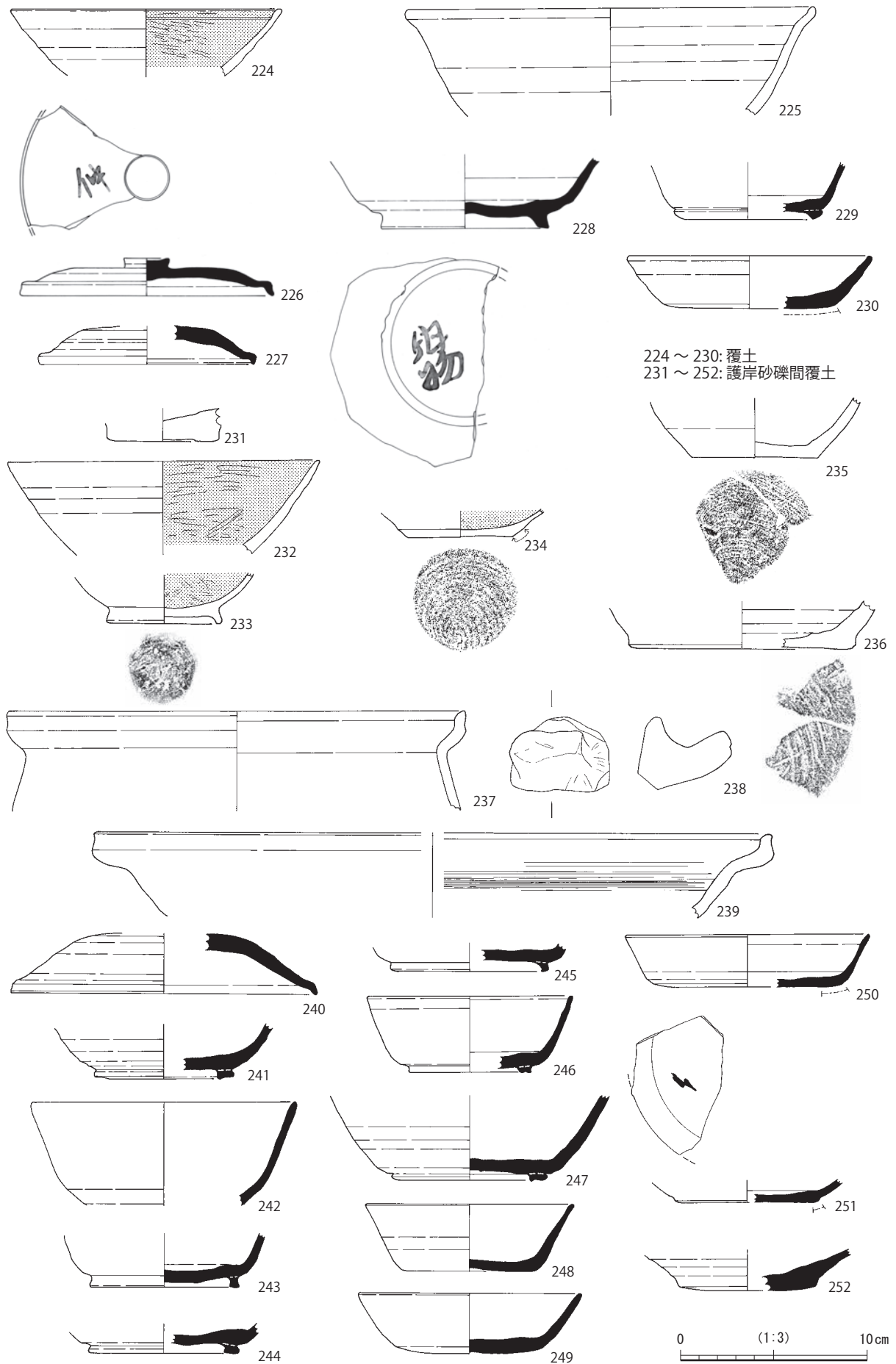
G-25区、F・G-26区で検出した石集積箇所(SS)で、いずれも下部構造を伴わない。第Ⅲ-2面の調査成果を加味すれば、水田区画を示す畦畔の一部と考えられ、出土遺物はない。

G-25区の石集中301は、南北方向約2.5m、東西方向約2mの範囲に長軸10～30cmを測る自然石が集積する。水田302南東辺で確認した自然石の集積と同様に水田肩部を保全した土留め跡と考えられる。石集中302は、列状に長軸10～30cmを測る自然石を据え置いたものであり、延長約8.7m、幅約50～90cmの規模をもつ。自然石は、水田耕作土(第100図断面35～38土層3)を造成した後に配されており、本来は水田畦畔を構成した石列で、第Ⅲ-2面検出時には耕作は放棄されたものと考えられる。

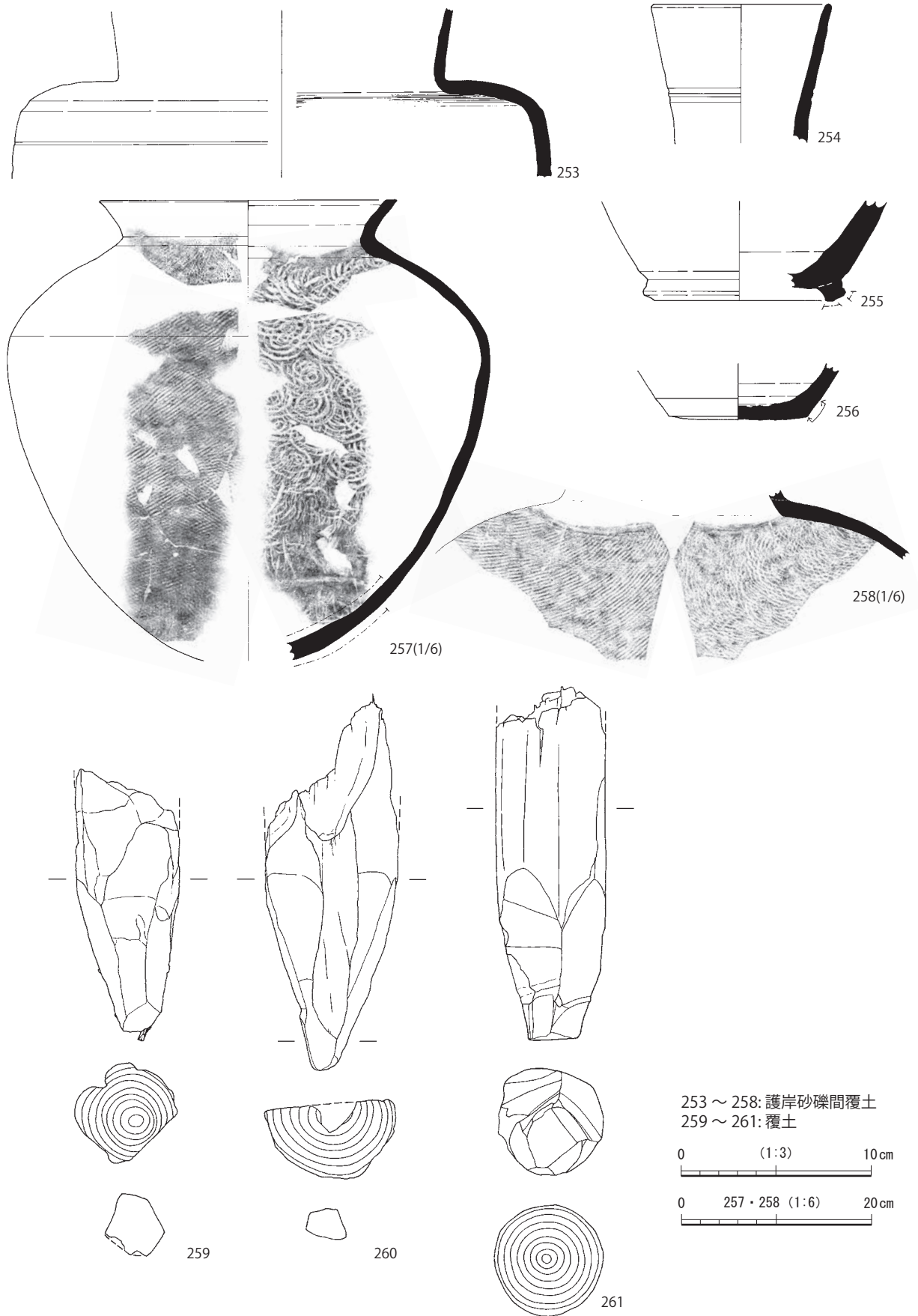
#### 5 河跡3001(新)(遺構：第84～87図、遺物：第101～102図、第20・24表)

E～G-23～25区で検出した灰～黄茶色細砂・砂利・石を基本覆土とする洪水痕跡で、南東方向から北西方向に流下する。第Ⅲ-1面調査では、右岸(北側肩部)に自然石を据え置いた護岸・堤防が伴う最終(土砂埋没)段階の様相を確認しており、以下では河跡3001(新)と呼称する。河跡3001(新)は10世紀後葉～11世紀前葉に発生した大規模な自然災害(土砂流入)により、他の第Ⅲ-1面遺構とともに短期間に埋没する。また、第5次第Ⅳ面調査で、河跡3001(新)と重複した位置で、10世紀初頭に発生したと考えられる集落域を寸断・廃絶させた大規模な土砂流入・堆積痕を確認しており、この自然災害発生～護岸・堤防機能時を河跡3001(古)と呼称する。その詳細は、第4節で述べることとし、以下では、第4次調査で取り上げた第Ⅲ-1面を廃絶させた河跡3001(新)の覆土(流入土砂)から出土した遺物について記す。

第101図224～230、第102図259～261は、灰～黄茶色細砂・砂利を基調とする覆土(流入・堆積土砂)から出土した。224・225はロクロ土師器、226～230は須恵器である。内黒有台碗224は口径14.1cmを測り、丁寧なミガキ調整を施す。薄手の鉢225は口径21.6cmを測り、口縁端部を小さく上方につまみだす。胎土中に多くの海綿骨針が混ざる。坏蓋226は口径13.6cm、器高2.0cmを測り、丁寧なつくりの鈕をつける。天井部外面に「仲」と墨書する他、内面中央付近に墨痕が残る。Ⅳ<sub>2</sub>期に位置付けられる。坏蓋227は口径11.3cmを測り、Ⅱa類重ね焼き痕を残す。有台坏228・229の台部は断面方形を呈し、しっかりと外展する。体部が内湾しながら立ち上がる228は、底部外面に「□物」と墨書され、1文字目のつくりは「貝」にみえる。肉厚な無台坏230は口径12.8cm、器高2.8cmを測り、体部は直線的に外傾する。第102図259～261は芯持ちの杭であり、先端を多方向から加工して尖らせる。樹種は、259がクリ、260がコナラ節、261がオニグルミである。



第101図 G地区 第Ⅲ-1面河跡3001(新)出土遺物実測図1(S=1/3)



第102図 G地区 第Ⅲ-1面河跡3001(新)出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)

第101図231～第102図258は、右岸(北肩部)の護岸石の状況を精査する作業で覆土から出土した遺物である。231・238は非ロクロ土師器、232～237・239はロクロ土師器、240～258は須恵器であり、最も新しい233・234はⅦ<sub>1</sub>期に位置付けられる。231は古墳時代以前の壺類底部と考えられ、磨滅が著しい。232・233は丁寧なミガキ調整を施した内黒有台碗である。232は口径16.6cmを測り、体部は直線的にのびる。233の体部は内湾気味に立ち上がり、肉厚の底部外面は回転糸切り後に不整方向のケズリを加える。内黒無台碗234は体部下端に横方向のケズリ整形を施す。235～237は甕である。235の内面上半に煮炊きに伴うヨゴレが付着する。236は底径12.1cmを測り、底部外面に静止糸切り痕を残す。237は口径24.4cmを測り、内外面とも煮炊き痕が明瞭に認められる。甌類把手238は磨滅が著しい。埴239は小片のため復元に不安を残す。破片化後に被熱する。

須恵器坏蓋240は口径16.1cmを測り、口縁端部をゆるやかに折り曲げる。241～247は有台坏である。241は狭い底部から内湾気味の体部が立ち上がる。深身の242は焼きゆがみのため復元に不安を残す。243は腰部でしっかりと屈曲する。244は低い台部を貼り付け、外面に二次被熱痕を残す。245は小振りの台部を底部外縁に貼り付ける。246は口径10.8cm、器高4.1cmを測り、薄手の体部が直線的に立ち上がる。247は狭い底部から外傾して体部が立ち上がる。体部外面はロクロひだが目立つ。248・249・251・252は無台坏である。248は口径11.0cm、器高3.6cmを測り、体部は直線的に外傾する。249は口径113.7cm、器高3.2cmを測る。薄手の251は底部台状を呈し、全体が磨滅する。252は底部肉厚で、皿形に近い。無台盤250は口径12.9cm、器高2.8cmを測り、底部外面にかすかに墨痕が残る。

第102図253～256は須恵器壺・瓶類である。肩衝壺253は肩部を2条の沈線で加飾し、正位無蓋で焼成される。瓶254は口径9.1cmを測る。255の台部接地面は、使用に伴う摩耗が著しい。256は回転ヘラ切りで底部を切り離した後、体部下端にケズリ調整を加える。257・258は大型の甕である。257で口径31.7cm、器高約50cmを測り、底部は使用に伴い摩耗する。258の焼成は堅緻である。河跡3001(新)からは、他にⅦ<sub>1</sub>期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器碗類・甕、非ロクロ土師器甕の細片約300点が出土した。

## 6 その他の遺構

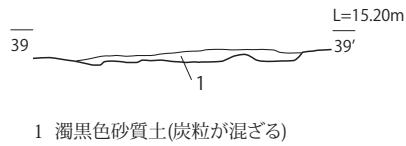
**SX3001～03**(遺構：第82・83・103図、遺物：第104図、第20表)

E・F-21・22区で検出した溝状の落ち込みで、SX3001・02は第0・I面攪乱の残欠と考えられる。SX3003は、長軸約6.6m、幅0.8～1.8m、深さ約5cmを測り、覆土は淡灰色シルト質土である。SX3001から第104図262～264が出土した。須恵器有台坏262は、台部幅が不均等であり、接地面が著しく摩耗する。須恵器無台坏263は還元が弱く、底部内面は使用に伴い摩耗する。土師質の土錘264は重さ38gを測る。SX3002から出土した土師質の土錘265は、ほぼ完形で残存重量59gを測る。SX3003出土の須恵器坏蓋266は小振りで丁寧なつくりの鈕を付す。SX3001～03からは、他にⅦ<sub>1</sub>期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器碗類・甕、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

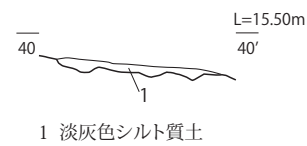
**焼土301**(遺構：第82・99・103図、遺物：第104図、第20表)

F-21区で検出した浅く落ち込む焼土痕跡(SL)である。焼土範囲は崩れた隅丸長方形を呈し、長辺157cm、短辺104cmを測り、底面は若干の起伏が認められる。中央部は黒色炭化物や焼土粒が多く混ざる濁黒色土であり、南東隅で焼けた自然石、ロクロ土師器片が出土した。焼けた自然石は約25cmの範囲に据え置かれており、煮炊き具を据え置く役割をもつと考えられる。出土遺物のうち、第104図267～269のロクロ土師器を図化した。有台碗の台部は、断面方形を呈する267がしっかりと外展するのに対して、足高の268は直立気味となる。無台碗269は底径6.0cmを測り、底部器肉は薄い。他に須恵

【F 22区 SX3001】(第82図)

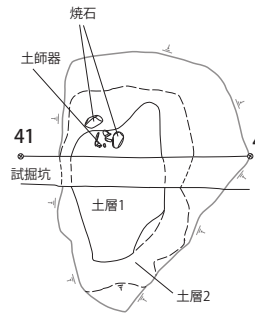


【F 22区 SX3003】(第82図)

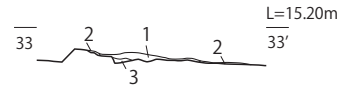
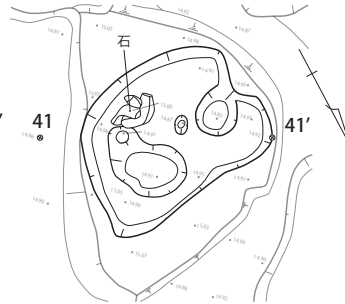


【F 21区 焼土 301】

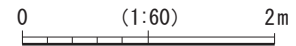
検出状況



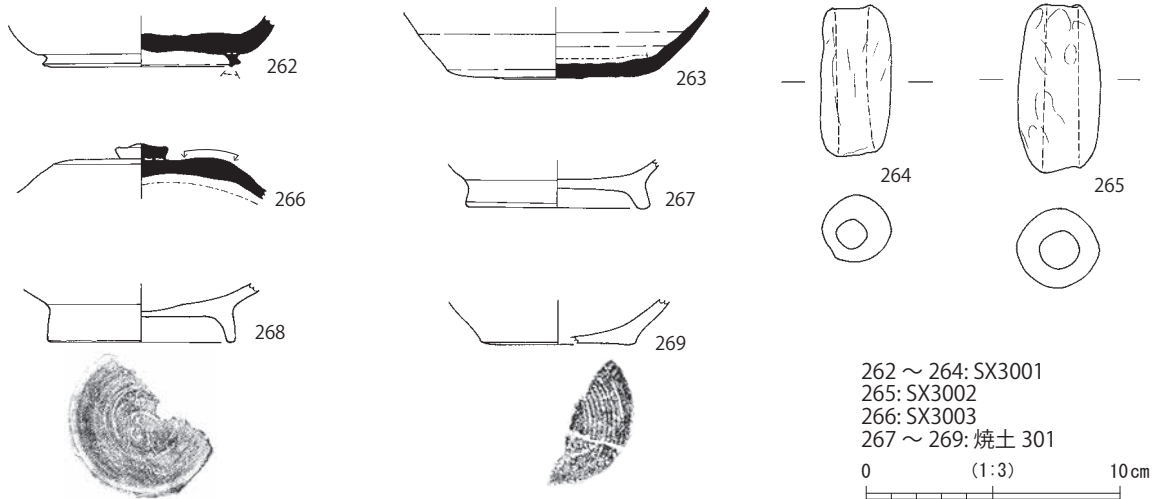
完掘状況



- 1 濁黒色砂質土(黒色炭化物質と赤色焼土粒が多く混ざる)
  - 2 濁暗灰色砂質土( " )
  - 3 赤色焼土粒(1層が混ざる)
- [ベース土]Ⅲ-1面包含層(灰緑色砂質土)



第103図 G地区 第Ⅲ-1面SX他平面図・土層断面図(S=1/60)



第104図 G地区 第Ⅲ-1面SX他出土遺物実測図(S=1/3)

器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器埴類・甕、非ロクロ土師器甕の細片約80点が出土した。

### 7 包含層等出土遺物(第105～108図、第21・22・24・25表)

包含層出土遺物は、大きく上層から包含層上面土(第Ⅲ-2面流入・堆積土砂)、上層包含層(濁黒灰色砂質土)、下層包含層(下層落ち込み、濁灰緑色砂質土)に分かれ、Ⅶ<sub>1</sub>期以前の土師器や須恵器が多く出土した。上層包含層分布の北限はE～G-22区に、下層包含層の分布の北限にE～G-21(一部E-22区・G-22区小溝群付近)に存在する。

第105図270～274は、包含層上面の流入・堆積土砂層から出土した。270・271はロクロ土師器である。内黒の無台埴270は体部下端にケズリ調整を施し、内面のミガキは比較的密である。皿271は口径約12.5cmを測る。ロクロ土師器甕272は口径約18cmを測り、口縁部は内湾気味に立ち上がる。273・274は須恵器である。大型の坏蓋273は口径19.9cmを測り、口縁端部をしっかりと面取りする。有台坏274は

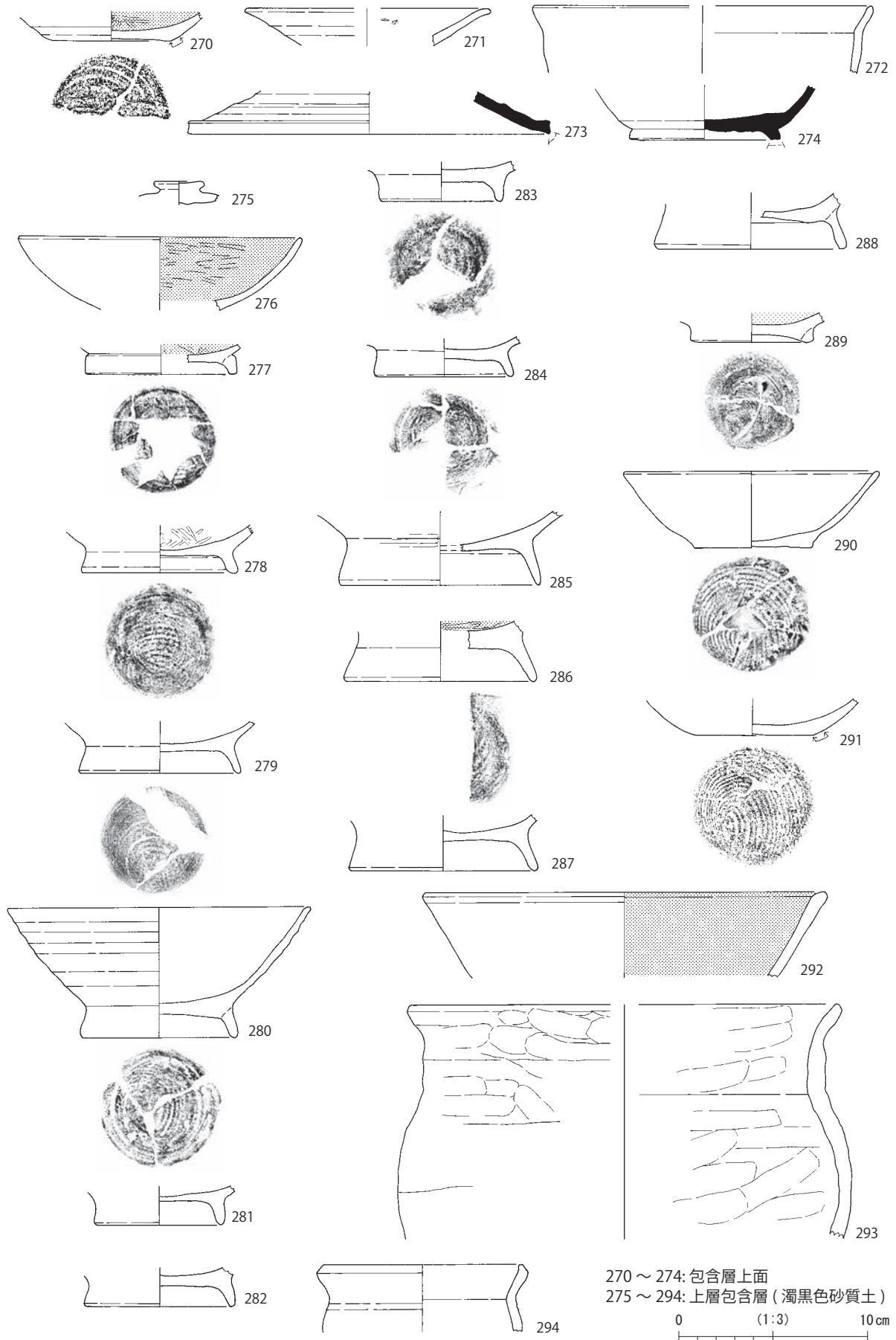
埴形を指向し、底部内面は使用に伴い平滑となる。

第105図275～第106図323は、上層包含層から出土し、坏・埴類は二次被熱痕を残す個体が多い。275～292、294～297はロクロ土師器である。坏類蓋の鈕275は扁平で、磨滅のため判然としないが外面は赤彩と考えられる。276～289はⅦ<sub>1</sub>期以降の有台埴で、277・278以外は端部面取りがあまい足高の台部を外展して貼り付ける。また、276・277・286・289の内面はミガキ調整と黒色処理を施す。身の浅い276は口径14.8cmを測り、体部は内湾しながら立ち上がる。277は断面方形の台部を付し、内面のミガキ調整は丁寧である。279は台部内側に煤が付着し、倒位で燈明容器に転用した可能性が高い。280は口径15.9cm、器高6.9cmを測り、体部は内湾気味に外傾する。図化できなかったが、内面はミガキ調整を施した可能性が高い。281は破片化後に被熱し、煤が付着する。282は回転糸切り後に丁寧な回転ナデを加える。283は、先細る台部を直立気味につける。284は磨滅が著しい。285～288は、台径10cm強を測る大型品である。285は台高1.7cmを測り、内面に煤が付着する。286は底部肉厚で、内面のミガキ調整は丁寧である。287は外面が二次被熱する。289は底部外縁に低い台部を外展して貼り付ける。内面のミガキ調整は比較的粗い。290・291は無台埴である。290は口径13.4cm、器高4.1cmを測り、二次被熱のため全面に煤が付着する。291は体部下端に不整方向のケズリ調整を施し、正位で燈明容器に転用される。内黒の鉢292は口径21.1cmを測り、肥厚する口縁端部は内傾した面をもつ。非ロクロ土師器甕293は口径約22cmを測り、横方向の指ナデ痕が目立つ。ロクロ土師器小甕294は口径10.5cmを測り、口縁端部を嘴状につまみだす。第106図295は甕小片で、口縁端部は長くのびる。297は有台の鉢と考えられ、外面にはケズリ整形後の台部貼り付け痕が認められる。薄手の甕296は口径21.0cmを測り、胴部の張りはほとんどない。

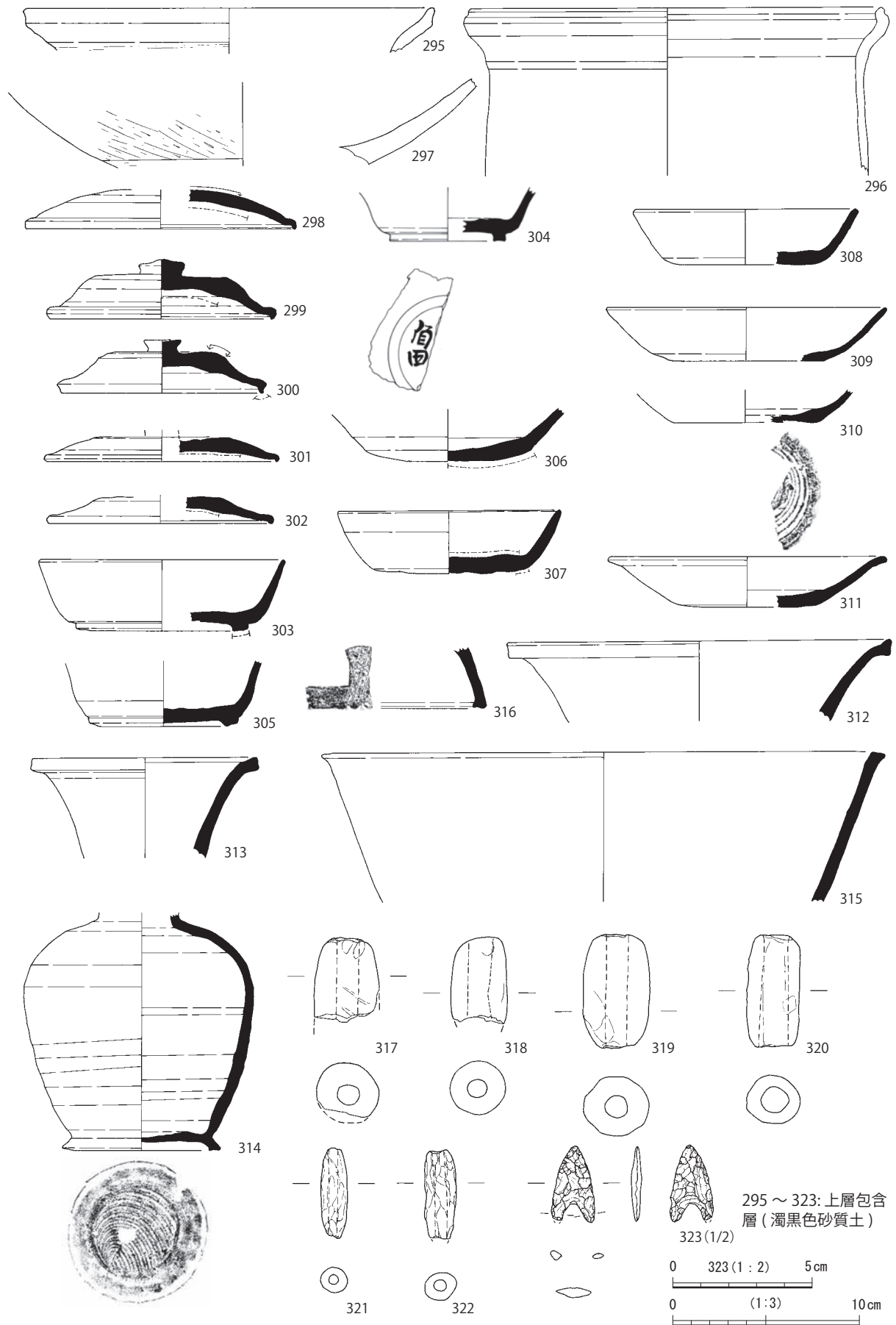
第106図298～316は須恵器で、298～302が坏蓋、303～305が有台坏、306～310が無台坏となる。298は口径14.3cmを測り、天井部内面は使用に伴い平滑である。299・300は山笠形を呈し、299が口径12.0cm、器高3.3cmを、300が口径10.7cm、器高2.8cmを測る。扁平な301・302は、口縁端部を丸くおさめる。いずれも天井部内面に使用に伴う摩耗が認められる。有台坏303は口径12.9cm、器高3.8cmを測り、扁平な台部を外展気味に貼り付ける。305の腰部はふくらみを有する。Ⅵ<sub>1</sub>期に位置付けられる304は、底部外面左寄りに「酒田」と墨書する。無台坏306の体部は大きく外傾し、底部外面は使用に伴い摩耗する。307は口径11.8cm、器高3.3cmを測り、底部内面は使用に伴い平滑となる。308は還元が弱く、浅黄橙色を呈する。薄手の309は皿形に近く、口径14.8cm、器高2.9cmを測る。310はゆっくりと回転ヘラ切りを行ったため、各切り幅の狭い回転ヘラ切り痕跡が明瞭に残る。無台皿311は口径14.4cm、器高2.7cmを測り、坏蓋の可能性をもつ。口縁端部は若干肥厚する。312～314は瓶類である。312は口径20.4cmを測り、口縁端部は嘴状にのびる。313は口径11.9cmを測り、口縁端部は断面方形に近い。薄手の314は台径8.5cmを測り、焼成は堅緻である。鉢類315は口径28.8cmを測り、口縁端部を横方向に肥厚させる。316は圈足円面硯脚部片で、外面に透かしと斜方向の格子状線刻を施す。第Ⅳ面出土の第215図1093と同形態であり、同一個体の可能性が高い。317～322は土師質の土錘で、重さから3つに分けられる。317～320は胎土中に多くの砂礫が混ざり、319が重さ66g、細身の320が44gを測る。321・322は重さ10g前後を測り、胎土にほとんど砂粒が混ざらず、硬質に焼成される。石鏃323はガラス質安山岩でつくられ、残存重量1.01gを測る。

下層包含層出土遺物は、第107図324～第108図349を図化した。324～330はロクロ土師器である。肉厚の無台埴324は口径約15.5cmを測り、内外面ともミガキ調整の後に赤彩を施す。325・326はⅦ期の有台埴である。325は破損後、底部片を倒位で燈明容器に転用するため底部内面に煤が付着する。326は底部を回転ヘラ切りで切り離す。小甕327は口径15.1cmを測り、頸部より上方に黒褐色の炭化物が

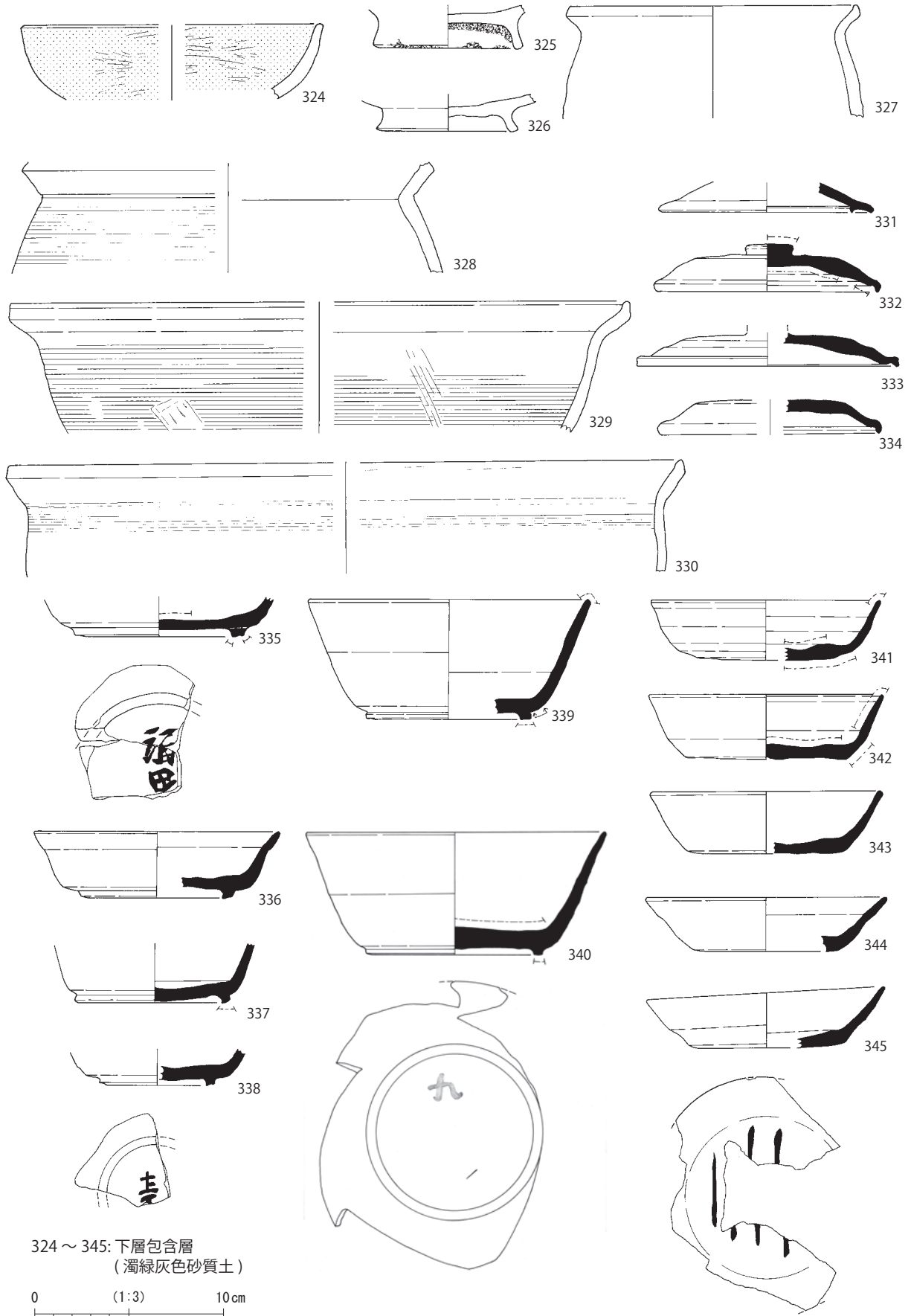




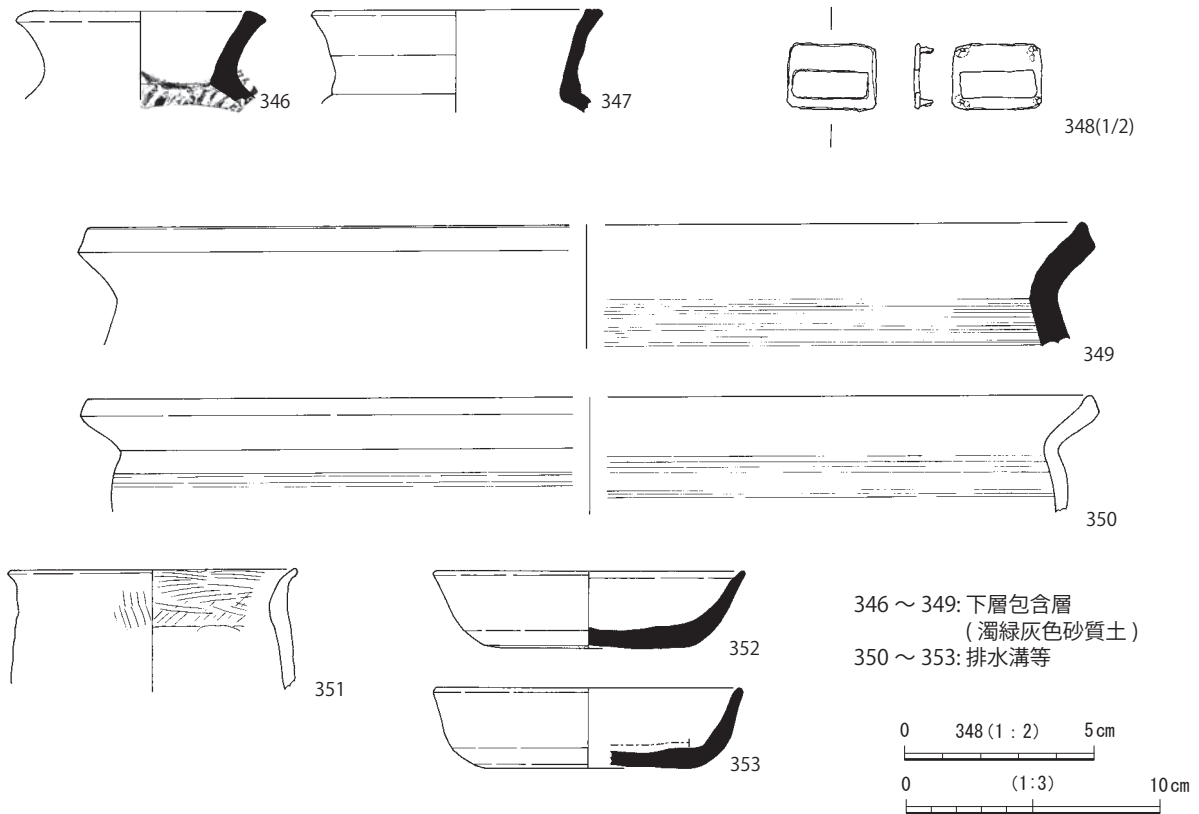
第105図 G地区 第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図1(S=1/3)



第106図 G地区 第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図2(S=1/2・1/3)



第107図 G地区 第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図3(S=1/3)



第108図 G地区 第Ⅲ-1面包含層出土遺物4(S=1/2・1/3)

付着する。甕328の胴部は張りをもつ。埴330は小片のため復元に不安を残す。

第107図331～第108図347は須恵器で、331～334が坏蓋、335～340が有台坏、341～345が無台坏となる。坏G蓋331は胎土中に小さい発泡が目立つ。332は口径11.7cm、器高2.5cmを測り、ボタン状の鈕をつける。天井部内面に残る摩耗と墨痕から、転用硯と考えられる。333は口径13.5cmを測り、口縁基礎部を平坦に仕上げる。334は口径約11.5cmを測り、口縁部が焼きゆがむ。335は底部外面中央に「酒田」と墨書し、IV<sub>2</sub>期に位置付けられる。336は口径12.8cm、器高3.5cmを測り、口縁部の一部は焼きゆがみのため外傾する。深身の337は腰部で明瞭に屈曲しており、外面に煤が付着する。338は底部外面に「土口(万カ)」と判読できる2文字の墨書が残り、本遺跡他事例から「土万呂」の可能性が高い。また、底部内面の薄い墨痕から墨溜め容器に転用したと考えられる。V<sub>2</sub>～VI<sub>1</sub>期に位置付けられる。339は口径14.7cm、器高6.4cmを、340は口径15.7cm、器高6.5cmを測り、焼成があまいため使用痕が明瞭に残る。V<sub>2</sub>期に位置付けられる340の底部外面に1文字の墨書が残るが判読できない。無台坏341～345は口径12cm強、器高3cm前後を測る。341・342は腰部が張りもち、底部内面は使用に伴い摩耗する。343～345の体部は大きく外傾する。344は煮炊容器に転用した可能性をもつ。345の底部は台状を呈し、外面に「///」と記号様の墨書を行う。VI<sub>1</sub>期に位置付けられる。第108図346・347は横瓶口縁部で、口縁端部を外側に肥厚させる。346で口径8.4cm、347で口径11.0cmを測る。須恵器鉢類349は口径約38cmを測り、胴部内面にカキメ調整を施す。348は銅製帯金具巡方表金具である<sup>(7)</sup>。長軸2.3cm、短軸1.8cm、厚さ1.5mm、垂孔(透かし穴)幅2.0cm、同高さ0.7cm、脚鉾長約3mm、重さ2.2gを測る。第107図350～353は、排水溝等から出土した。ロクロ土師器埴350は口径約39cmを測り、全面が磨滅する。非ロクロ土師器小甕351は口径11.5cmを測り、口縁端部を小さくつまみあげる。内面に煮炊きに伴う煤が付着する。須恵器無台坏352は口径11.9cm、器高3.1cm、353は口径11.9cm、器高3.2cmを測る。厚手の352内面には炭化物が付着する。

第20表 G地区 Ⅲ-1面出土土器類観察表1

※ ( ) は残存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
93	212	G-21-3	P3003 (SB302)	須恵器	坏蓋	約13.8	-	(2.1)	灰	灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	小片	内面へラ記号あり。外面降灰、重ね焼き1類	H170123
93	213	F-21-4、 F-22-2	P3011、上層包含層	須恵器	瓶	-	-	(17.9)	淡灰	青灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ	-	頸部内面〜外面降灰 (正位焼成)	H16020
93	214	F-21-3	P3013	ロクロナデ	瓶	約24	-	(2.7)	淡黄橙	にぶい黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	小片		H170149
97	215	F-20-21	SD3002・3003、包含層 (黒色土)	ロクロナデ	無台壇	-	7.2	(2.9)	橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底3/12	内外面赤彩。外底外縁に沈線1条。摩耗顕著	H16027
97	216	F-20-21	SD3003	須恵器	坏蓋	14.9	-	(2.0)	青灰	黄灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	口1/12	外面降灰、重ね焼き1類。焼きぶくれあり	H16019
97	217	F-20-21	SD3003	須恵器	無台壇	約14	約11	3.1	にぶい黄橙	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	小片		H1603
97	218	F-22-2	SD3012	ロクロナデ	有台壇	-	7.7	(2.3)	橙	橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	底10/12	摩耗顕著	H16017
97	219	F-22-1	SD3014	須恵器	無台壇	-	7.8	(2.8)	灰黄	灰黄	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底4/12	還元跡あり。外面摩耗	H16016
97	220	F-21-3	SD3015	須恵器	有台壇	-	8.6	(4.2)	灰	暗青灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底2/12	外面降灰	H1601
97	221	F-20-1	SD3017	須恵器	無台壇	12.3	7.5	3.3	青灰	淡青灰	n	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/12	内外面摩耗	H1602
97	222	F-20-3・4	SD3024	非ロクロナデ	瓶	-	15.4	(5.2)	淡黄	にぶい赤橙	粗砂・磯多、海綿骨針少	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	底3/12	内面磨減顕著	H1601
97	223	F-20-3・4	SD3024	非ロクロナデ	壺	約36	-	(6.0)	淡黄	淡黄	オ	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、指頭圧痕	小片	磨減顕著。底に不安残す	H16018
101	224	G・F-24	河跡3001 (新) 覆土 (赤褐色砂・ピート層)	ロクロナデ	壇	14.1	-	(3.6)	黒	にぶい黄橙	ケ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ	口1/12	内面黒色処理	H170152
101	225	G・F-24	河跡3001 (新) 覆土 (赤褐色砂・ピート層)	ロクロナデ	鉢	21.6	-	(5.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12		H170153
101	226	E-23-4	河跡3001 (新) 暗灰色砂	須恵器	坏蓋	13.6	約2.4	2.0	淡灰	淡灰	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/12	外面墨書「仲」、内面一部墨痕。重ね焼き不明	H17156
101	227	G-F-24	河跡3001 (新) 覆土 (赤褐色砂・ピート層)	須恵器	坏蓋	11.3	-	(2.1)	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ後ナデ	口3/12	重ね焼きIIa類	H1608
101	228	E-23	河跡3001 (新) 砂利〜底	須恵器	有台壇	-	9.0	(3.7)	灰	暗灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ後ナデ	底8/12	外面黒化。外底に墨書「口物」	H17157
101	229	G-F-24	河跡3001 (新) 覆土 (赤褐色砂・ピート層)	須恵器	有台壇	-	7.9	(3.0)	青灰	青灰	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底2/12		H1609
101	230	G-F-24	河跡3001 (新) 覆土 (赤褐色砂・ピート層)	須恵器	無台壇	12.8	9.2	2.8	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底4/12	外底摩耗	H1607
101	231	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	非ロクロナデ	壺	-	5.9	(1.8)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多	並	不明	不明	底5/12	摩耗顕著	H16022
101	232	F-24	河跡3001 (新) 堤岸礫 (褐色ピート)	ロクロナデ	有台壇	16.6	-	(5.0)	黒	にぶい黄橙	ケ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ	口1/12	内面黒色処理。外面磨減・二次被熱か	H170129
101	233	F-24	河跡3001 (新) 堤岸礫 (褐色ピート)	ロクロナデ	有台壇	-	6.1	(2.7)	黒	にぶい黄橙	ケ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り後ケズリ	底部完	内面黒色処理	H16028
101	234	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	ロクロナデ	無台壇	-	5.6	(1.5)	黒	淡黄橙	ケ	良	ミガキ	ロクロナデ、ケズリ、回転糸切り	底部完	内面黒色処理	H16023
101	235	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	ロクロナデ	壺	-	6.7	(3.2)	淡黄	淡黄	オ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底5/12	内面炭化物付着	H16036
101	236	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	ロクロナデ	壺	-	12.1	(2.6)	黄橙	にぶい橙	オ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、静止糸切りか	底3/12	外面薄い煤付着	H16026
101	237	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	ロクロナデ	壺	24.4	-	(5.3)	にぶい橙	にぶい橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	口2/12	内面炭化物・外面スチ付着	H170127
101	239	E-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	ロクロナデ	壺	約35	-	(4.5)	にぶい黄橙	にぶい橙	オ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ	小片	破片化後にスス・炭化物付着。傾きに不安残す	H16035
101	238	F-23-4	河跡3001 (新) 肩部土師器	土師器	把手	-	-	(3.8)	橙	淡黄橙	ケ	並	ナデ	ナデ、ハケ	小片	磨減顕著	H170151
101	240	E-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	坏蓋	16.1	-	(3.3)	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12	重ね焼きIIb類	H16034
101	241	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	有台壇	-	7.4	(2.9)	淡灰	淡青灰	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/12	外面黒化	H16010
101	242	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	有台壇	14.0	-	(5.5)	青灰	灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/12	焼きゆがみのため傾きに不安残す	H170128
101	243	F-23-4	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	有台壇	-	7.9	(2.9)	暗青灰	暗青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/12		H16012
101	244	E-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	有台壇	-	8.0	(1.6)	青灰	青灰	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底5/12		H16033
101	245	E-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	有台壇	-	8.4	(1.5)	青灰	青灰	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/12	台端部摩耗	H16031
101	246	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	有台壇	10.8	6.6	4.1	淡青灰	青灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底4/12	外面黒化	H16024
101	247	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	有台壇	-	8.3	(4.6)	淡灰	灰	e	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/12	外面黒化。台端部摩耗	H16025
101	248	E-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	無台壇	11.0	7.1	3.6	青灰	青灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/12		H16044
101	249	G-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	無台壇	11.7	7.9	3.2	暗青灰	青灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底7/12		H170227
101	250	E-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	無台壇	12.9	10.1	2.8	淡灰	青灰	n	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/12	外底に墨痕	H16030
101	251	E-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	無台壇	-	7.6	(1.2)	灰	灰	n	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底4/12	内外面摩耗顕著	H16029
101	252	E-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	無台壇か	-	7.2	(2.2)	淡灰	淡灰	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底4/12	底部台状	H16032
102	253	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	圓筒壺	-	-	(8.8)	青灰	灰白	c	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ	-	沈線2条。内面・外面降灰・自然釉 (正位無蓋焼成)	H170126
102	254	G-23-1	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	長頸瓶	9.1	-	(7.3)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	沈線2条。内外面降灰 (正位焼成)	H170154
102	255	F-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	瓶	-	10.0	(5.2)	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ	底2/12	台端部摩耗	H16011
102	256	E-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	瓶	-	7.3	(3.0)	灰	青灰	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ、回転ヘラ切り後ナデ	底7/12	内面降灰	H16045
102	257	F-24-4、 E-24、 F-26-3、 G-25-1他	河跡3001 (新) 護岸他	須恵器	壺	31.7	-	(49.5)	灰	灰	f	良	同心円タタキ、ヨコナデ	平行タタキ、カキメ、ヨコナデ	口1/12	同心円a類、平行b類。焼きぶくれあり。降灰・自然釉 (正位無蓋焼成)	H160306
102	258	G-24	河跡3001 (新) 肩部砂礫中 (護岸)	須恵器	壺	-	-	(7.8)	灰	灰	f	良	同心円タタキ、ヨコナデ	平行タタキ、カキメ、ヨコナデ		同心円a類、平行線o類。外面自然釉	H170293
104	262	F-22・23	SX3001	須恵器	有台壇	-	7.7	(1.9)	青灰	青灰	h	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底6/12	台端部摩耗	H1606
104	263	F-22・23	SX3001	須恵器	無台壇	-	8.3	(2.8)	橙	橙	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口7/12	内底摩耗	H170125
104	264	F-22・23	SX3001	土師器	土鍾	長さ5.9	径2.8	-	淡黄橙	淡黄橙	粗砂・磯少	並	ナデ	ナデ	完形	孔径1.2cm、重さ38g	H170124
104	265	E-21-4	SX3002	土師器	土鍾	長さ6.7	径3.2	-	淡黄橙	淡黄橙	粗砂少、海綿骨針少	良	ナデ	ナデ	ほぼ完	孔径1.4cm、残存重量59g	H1604
104	266	F-22-2	SX3003	須恵器	坏蓋	-	約2.1	(2.2)	青灰	灰	e	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	-	重ね焼きI類。天井部内面平滑	H1605
104	267	F-21-3	埴土301	ロクロナデ	有台壇	-	7.2	(1.9)	にぶい橙	黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り後回転ナデ	底8/12	磨減顕著	H16039
104	268	F-21-3	埴土301	ロクロナデ	有台壇	-	7.3	(2.3)	にぶい橙	にぶい橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り後回転ナデ	底3/12		H16038
104	269	F-21-3	埴土301	ロクロナデ	無台壇	-	6.0	(1.8)	橙	橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底4/12		H16037

第3節 第Ⅲ-1面の遺構と遺物

第21表 G地区 第Ⅲ-1面出土土器類観察表2

※ ( ) は残存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	発掘番号
105	270	F-22-1	包含層上面 (淡灰色細砂)	ロクロ土師器	無台壇	-	6.0	(1.5)	黒	淡黄	ケ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、底部回転糸切り、回転ケズリ	底6/12	内面黒色処理。外面煤付着	H1D021
105	271	F-21-1	包含層上面 (淡灰色細砂)	ロクロ土師器	皿	約12.5	-	(1.9)	にぶい橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	内面スス付着	H1D0200
105	272	F-22-4	包含層上面 (淡灰色細砂)	ロクロ土師器	壺	約18	-	(3.5)	淡黄橙	赤橙	オ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	外面スス付着	H1D0173
105	273	F-23-1	包含層上面 (淡灰色細砂)	須惠器	杯蓋	19.9	-	(2.2)	淡灰	淡灰	b	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12	重ね焼きⅠ類	H1D0174
105	274	F-23-1	包含層上面 (淡灰色細砂)	須惠器	有台環	-	7.9	(2.8)	青灰	青灰	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/12	外面黒化。内底摩耗	H1D0195
104	275	E-22-4	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	杯蓋	-	錯径2.7	(1.2)	橙	明赤褐	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	-	外面赤彩か。内面磨減顕著	H1D0179
104	276	F-22-1・2	包含層上面 (淡灰色細砂)。包含層 (黒色土落ち込み)	ロクロ土師器	有台壇か	14.8	-	(3.9)	黒	にぶい黄橙	ケ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ	口3/12	内面黒色処理	H1D0171
104	277	F-21-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	7.9	(1.6)	黒	橙	ケ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	底8/12	内面黒色処理	H1D0191
104	278	G-21-3	包含層 (黒色土落ち込み)	ロクロ土師器	有台壇	-	8.3	(2.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	オ	良	ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	底部完	外面煤付着	H1D050
104	279	F-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	8.6	(2.7)	橙	橙	ア	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	底6/12	台部内面に煤付着。灯明皿に転用	H1D0190
104	280	E-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	15.9	8.3	6.9	橙	橙	ケ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	口3/12		H1D0183
104	281	E-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	6.8	(2.1)	にぶい橙	にぶい橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り後回転ナデ	底部ほぼ完	内外面炭化・スス付着	H1D0184
104	282	E-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	8.0	(2.0)	にぶい橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り後回転ナデ	底部完	内面ミガキ	H1D0180
104	283	F-21-1	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	6.3	(2.0)	橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底7/12		H1D0159
104	284	F-21-1	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	7.3	(2.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底10/12	内面磨減顕著	H1D0158
104	285	G-21-1	包含層 (黒色土落ち込み)	ロクロ土師器	有台壇	-	10.7	(3.9)	灰黄褐	にぶい橙	ケ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り後回転ナデ	底6/12	内面被熱・スス付着。磨減顕著	H1D049
104	286	F-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	10.2	(3.2)	黒	橙	ケ	良	密なミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	口5/12	内面黒色処理	H1D0189
104	287	E-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	10.0	(2.9)	橙	橙	ケ	良	不明	ロクロナデ	底9/12	外面被熱。スス付着。内面磨減顕著	H1D0181
104	288	E-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	10.1	(2.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口10/12	内外面煤付着、被熱	H1D0194
104	289	F-21-3	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台壇	-	6.4	(1.5)	黒	にぶい黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底7/12	内面黒色	H1D0196
104	290	F-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	無台壇	13.4	6.3	4.1	にぶい橙	にぶい橙	ケ	並	ロクロナデ	ヨコナデ、ナデ、回転糸切り	底部完	全面被熱・スス付着	H1D051
104	291	F-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	無台壇	-	5.1	(1.9)	にぶい橙	にぶい黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り、ケズリ	底部完	内面炭化物・スス付着。灯明皿に転用	H1D0192
104	292	E-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	鉢	21.1	-	(4.5)	黒	にぶい黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/12	内面黒色処理・磨減	H1D0182
104	293	F-21-3	包含層 (黒色土)	非ロクロ土師器	壺	約22	-	(12.4)	にぶい橙	赤橙	オ	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	口1/12	外面スス付着	H1D043
104	294	F-21-2	包含層 (灰褐色土)	ロクロ土師器	小壺	10.5	-	(3.5)	にぶい黄橙	淡黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	口縁部内面にヨコレ付着	H1D0198
106	295	F-22-1	包含層 (黒色土落ち込み)	ロクロ土師器	壺	18.8	-	(2.4)	淡黄橙	淡黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	口2/12		H1D0186
106	296	E-22-2	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	壺	21.0	-	(9.0)	にぶい黄橙	灰黄褐	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	外面スス付着	H1D056
106	297	F-21-1	包含層 (黒色土)	ロクロ土師器	有台鉢	-	-	(4.5)	橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	-	内面一部スス付着	H1D0160
106	298	F-22-1	包含層 (黒色土)	須惠器	杯蓋	14.3	-	(2.1)	灰	灰	a	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	口1/12	天井部内面磨耗顕著。重ね焼きⅡb類	H1D0167
106	299	E-22-2	包含層 (黒色土)	須惠器	杯蓋	12.0	錯径2.4	3.3	灰	灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	小片	重ね焼きⅡb類。天井部内面磨耗顕著	H1D057
106	300	F-21-1	包含層 (黒色土)	須惠器	杯蓋	10.7	錯径2.0	2.8	黄灰	青灰	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	口1/12	天井部内面磨耗顕著	H1D0163
106	301	F-21-1	包含層 (黒色土)	須惠器	杯蓋	12.2	-	(1.3)	灰白	淡灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	小片	重ね焼きⅡb類。天井部内面磨耗顕著	H1D0156
106	302	F-21-1	包含層 (黒色土)	須惠器	杯蓋	11.9	-	(1.6)	灰	黒灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12	重ね焼きⅠ類。天井部内面磨耗顕著	H1D0157
106	303	F-21-2	包含層 (黒色土)	須惠器	無台環	12.9	9.1	3.8	淡灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底3/12	外面黒化。台部端磨耗	H1D0197
106	304	F-21-1	包含層 (黒色土)	須惠器	有台環	-	6.3	(2.3)	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底4/12	外底に墨書「酒田」	H1789
106	305	G-21-3	包含層 (黒色土落ち込み)	須惠器	有台環	-	7.9	(3.5)	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底6/12	台端部磨耗	H1D0187
106	306	F-21-2	包含層 (黒色土)	須惠器	無台環	-	8.9	(2.9)	灰	青灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底6/12	外面磨耗顕著。外面スス付着	H1D0235
106	307	F-21-1	包含層 (黒色土)	須惠器	無台環	11.8	8.2	3.3	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/12	底部磨耗	H1D0155
106	308	G-21-3	包含層 (黒色土落ち込み)	須惠器	無台環	11.7	8.8	2.9	淡黄橙	淡黄橙	e	不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	口1/12	還元弱く、磨減	H1D0188
106	309	F-22-1	包含層 (黒色土)	須惠器	無台環	14.8	8.5	2.9	淡灰	淡灰	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	口3/12		H1D0164
106	310	F-21-2	包含層 (黒色土)	須惠器	無台環	-	7.8	(1.7)	灰	灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	底4/12		H1D047
106	311	F-21・22	包含層 (黒色土)	須惠器	無台皿	14.4	7.3	2.7	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	口3/12	重ね焼きⅢ類。内底磨耗・スス付着	H1D0165
106	312	F-22	包含層 (黒色土)	須惠器	瓶	20.4	-	(4.3)	青灰	青灰	d	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	内外面降灰 (正位焼成)	H1D0193
106	313	F-22-2	包含層 (黒色土)	須惠器	瓶	11.9	-	(5.5)	淡灰	青灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ	口3/12	内面降灰 (正位焼成)	H1D0168
106	314	F-22-1・2	包含層 (黒色土)	須惠器	瓶	-	8.5	(12.2)	青灰	青灰	n	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、回転糸切り	底6/12		H1D055
106	315	F-22	包含層 (黒色土)	須惠器	鉢	28.8	-	(8.0)	灰	灰	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	口縁部降灰	H1D0185
106	316	F-22-1	包含層 (黒色土)	須惠器	円面碗	-	-	(3.3)	青灰	青灰	c	良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	透かし、格子状の線刻。1093と同一個体か	H1D058
106	317	F-21-2	包含層 (黒色土)	土師器	土鍾	(長さ4.1)	径2.9	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂・雑多	良	ナデ	ナデ	-	孔径1.2cm、残存重量39g	H1D041
106	318	F-22-2	包含層 (黒色土)	土師器	土鍾	(長さ4.6)	径2.9	-	にぶい橙	にぶい橙	粗砂・雑多	良	ナデ	ナデ	-	孔径1.0cm、残存重量38g	H1D0217
106	319	E-22-4	包含層 (黒色土)	土師器	土鍾	長さ6.2	径3.1	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂・雑多	並	ナデ	ナデ	完形	孔径1.2cm、重量66g。摩耗顕著	H1D052
106	320	F-22	包含層 (黒色土)	土師器	土鍾	長さ6.0	径2.9	-	黄灰	黄灰	粗砂・雑多	良	ナデ	ナデ	完形	孔径0.9cm、重量44g。摩耗顕著	H1D059
106	321	F-21-2	包含層 (黒色土)	土師器	土鍾	長さ4.9	径1.4	-	にぶい橙	にぶい橙	硬少	良	ナデ	ナデ	完形	孔径0.5cm、重量9.7g	H1D040
106	322	F-20-3・4	包含層 (黒色土)	土師器	土鍾	(長さ4.8)	径1.5	-	にぶい橙	にぶい橙	粗砂・硬少	良	ナデ	ナデ	完形	孔径0.6cm、残存重量11g、黒斑あり	H1D046
107	324	F-21-1	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	ロクロ土師器	無台壇	約15.5	-	(4.0)	赤橙	赤橙	キ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、ミガキ	口2/12	赤彩	H1D0215
107	325	F-21-1	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	ロクロ土師器	有台壇	-	7.5	(2.2)	灰黄褐	にぶい橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り後ナデ	底部完	破片化後に灯明皿に転用 (内外面煤付着)	H1D0242
107	326	G-21-1	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	ロクロ土師器	有台壇か	-	7.4	(1.9)	にぶい黄橙	淡黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底7/12	須惠器の可能性あり	H1D0178
107	327	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	ロクロ土師器	壺	15.1	-	(6.0)	淡黄橙	にぶい黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/12	口縁部内面炭化物付着	H1D0162

第22表 G地区 Ⅲ-1面出土土器類観察表3

※( )は残存量を示す。

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
107	328	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	ロクロ土師器	壺	-	-	(5.8)	淡黄橙	淡黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	-	口縁部内面にゴコレ付着	H17D199
107	329	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	ロクロ土師器	壺	約32	-	(7.0)	淡黄	にぶい黄橙	オ	並	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口1/12	内面ヨゴレ・外面スス付着	H16D54
107	330	F-21・22	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	ロクロ土師器	壺	約35	-	(5.9)	にぶい橙	にぶい橙	ア	並	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	小片	外面スス付着。小片のため傾きに不安残す	H17D218
107	331	F-20-3、G-21-1	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	坏蓋	11.0	返し径 9.0	(1.6)	青灰	灰白	l	並	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/12	外面降灰・自然釉。重ね焼きI類。小さい焼きぶくれ目立つ	H17D161
107	332	F-21	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	坏蓋	11.7	錐径 2.5	-	灰	灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口4/12	重ね焼きI類。転用硯	H16D48
107	333	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	坏蓋	13.5	-	(1.7)	灰	灰	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/12	重ね焼きII類。天井部内面摩耗	H17D219
107	334	F-20	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	坏蓋	約11.5	-	(2.0)	青灰	青灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	小片	重ね焼きI類。口縁部焼きゆがみ	H17D177
107	335	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	有台坏	-	9.0	(2.1)	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底2/12	外底に墨書「口(酒カ)田」。内底平滑	H16-4壺2
107	336	F-21	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	有台坏	12.8	7.9	3.5	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/12	焼きゆがみ顕著	H17D214
107	337	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	有台坏	-	8.2	(3.0)	灰白	灰白	c	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部完形	外面にスス付着	H17D234
107	338	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	有台坏	-	6.1	(2.0)	淡灰	灰	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底2/12	外底に墨書「口(土万カ)。内底に墨痕、転用硯か	H16-4壺1
107	339	F-21-1	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	有台坏	14.7	8.7	6.4	淡灰	灰	h	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ	底3/12	外面黒化。口縁部・台端部平滑	H17D213
107	340	F-21	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	有台坏	15.7	9.3	6.5	灰白	灰白	e	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部完形	外底に墨書「口(九カ)。内底面・台端部平滑	H17D212
107	341	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	無台坏	12.0	7.4	3.2	淡灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/12	外面黒化。内底面摩耗・平滑	H16D53
107	342	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	無台坏	12.3	8.6	3.4	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部完	内底面顕著・平滑	H16D60
107	343	G-21-1	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	無台坏	12.1	8.3	3.3	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/13		H17D169
107	344	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	無台坏	12.6	7.6	2.8	灰白	灰白	e	不良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	煮炊容器に転用か(内面炭化物・外面煤付着)	H17D176
107	345	F-21・22	下層包含層 (薄緑灰砂質土) 包含層 (薄黒灰色土)	須恵器	無台坏	12.5	8.3	3.3	淡灰	淡灰	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底3/12	外底に墨書「////」	H16-4壺3
108	346	F-21-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	横瓶	8.4	-	(3.5)	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ、同心円タタキ	ロクロナデ	口2/12	内外面降灰・自然釉	H17D241
107	347	G-21-1	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	横瓶	11.0	-	(4.0)	灰	灰	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/12	内外面降灰	H17D175
108	349	F-22-2	下層包含層 (薄緑灰砂質土)	須恵器	鉢類	約38	-	(4.8)	青灰	青灰	a	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、ナデ	小片	口径・傾きに不安残す	H17D216
108	350	-	排土	ロクロ土師器	壺	約39	-	(4.4)	淡黄橙	淡橙	オ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	小片	摩耗顕著	H17D230
108	351	G-22~23	排水溝	非ロクロ土師器	壺	11.5	-	(4.7)	黄橙	橙	オ	良	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	口2/12	内面スス・炭化物付着。外面胴部割離	H17D238
108	352	-	排土	須恵器	無台坏	11.9	8.2	3.1	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12	内面に煤状付着物	H17D229
108	353	G-22~23	排水溝	須恵器	無台坏	11.9	9.0	3.2	灰白	灰白	c	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口4/12	底部内面平滑	H17D224

第23表 G地区 Ⅲ-1面出土土器製品観察表

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	石材	色調	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	残存重量 (g)	備考	実測番号
106	323	F-21-2	包含層 (薄黒色土)	石鏡	ガラス質安山岩	黒	2.8	1.6	4.0	1.01		H16石1

第24表 G地区 Ⅲ-1面出土木製品観察表

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種同定	備考	実測番号
102	259	G-22	河跡3001(新)茶灰色砂礫	杭	(13.8)	5.5	5.2	クリ	芯持ち角材。側面先端部に加工痕	H15木-114-2
102	260	G-22	河跡3001(新)茶灰色砂礫	杭	(19.8)	7.0	4.0	コナラ節	芯持ち半截材 側面先端部に加工痕	H15木-114-1
102	261	G-22	河跡3001(新)茶灰色砂礫	杭	(18.6)	5.7	5.9	オニグルミ	芯持ち材。樹皮残る。底部四方より加工。先端つぶれる	H15木-120

第25表 G地区 Ⅲ-1面出土金属製品観察表

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	実測番号
108	348	F-22-2	下層包(薄緑灰色砂土中黒灰色小ピット)	鋼製帯金具	逡方・表金具	2.3	1.8	0.15	2.2	垂孔(透かし穴)2.0×0.7cm、脚板長約3mm	H16金6

第4節 第Ⅲ-2面の遺構と遺物 (第109～149図、第26～36表)

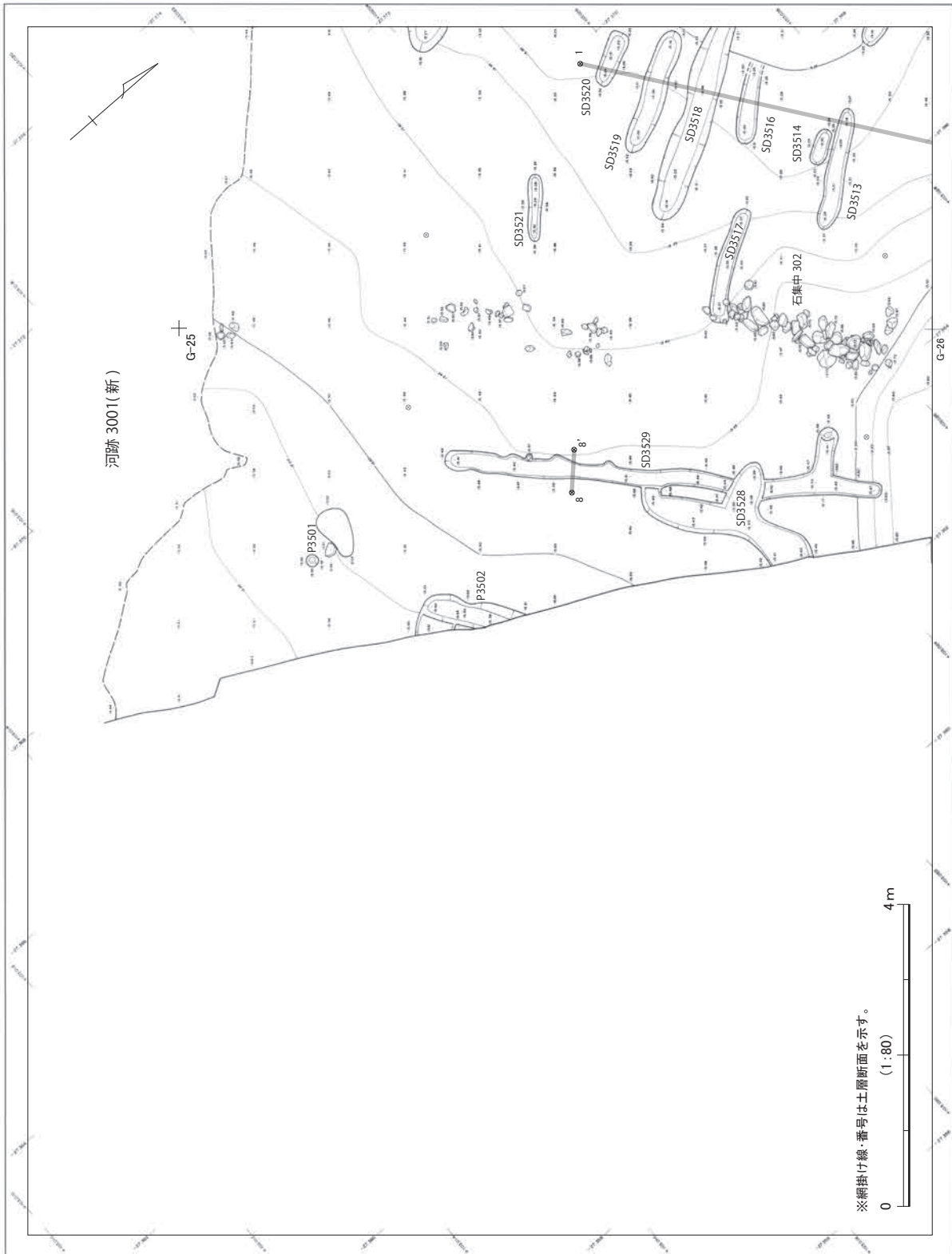
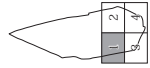
G地区第Ⅲ-2面以下の生活面の調査は、第5次調査(1998)で実施した。第Ⅲ-2面は、河跡3001(新)の護岸・堤防の北側(E～G-25・26区)において、第Ⅲ-1面耕作域の耕作土(厚さ5～15cm)を人力で掘り下げた段階で検出した生活面であり、土層観察からも第Ⅲ-1面に前出する。ベース面(遺構検出面)の標高は、調査区南東端(G-25区杭南西4m)で15.61m(第Ⅲ-1面ベース面より-13cm)、南西端(E-25区北東2m・南東2m)で15.09m(同-6cm)、北東端(G-27区杭南西3m)で15.64m(同-13cm)、北西端(F-27区南西1m・南西4m)で14.87m(同-13cm)を測る。ベース面の比高差は、Gライン(北東-南西方向)がほとんどなく、26ライン(南東-北西方向)が約0.9mを測り、北西側に向けて緩やかに傾斜する地形となる。遺物包含層は第Ⅲ-1面耕作土・耕作面造成土(第100図)、ベース面(検出面)は固くしまった第Ⅳ面包含層(第8図32～35:濁灰～暗灰色砂質土)で、識別は比較的容易であった。

調査の結果、耕作に伴う小溝(SD)約60条、ピット等を確認した。これらの遺構は、河跡3001(新)



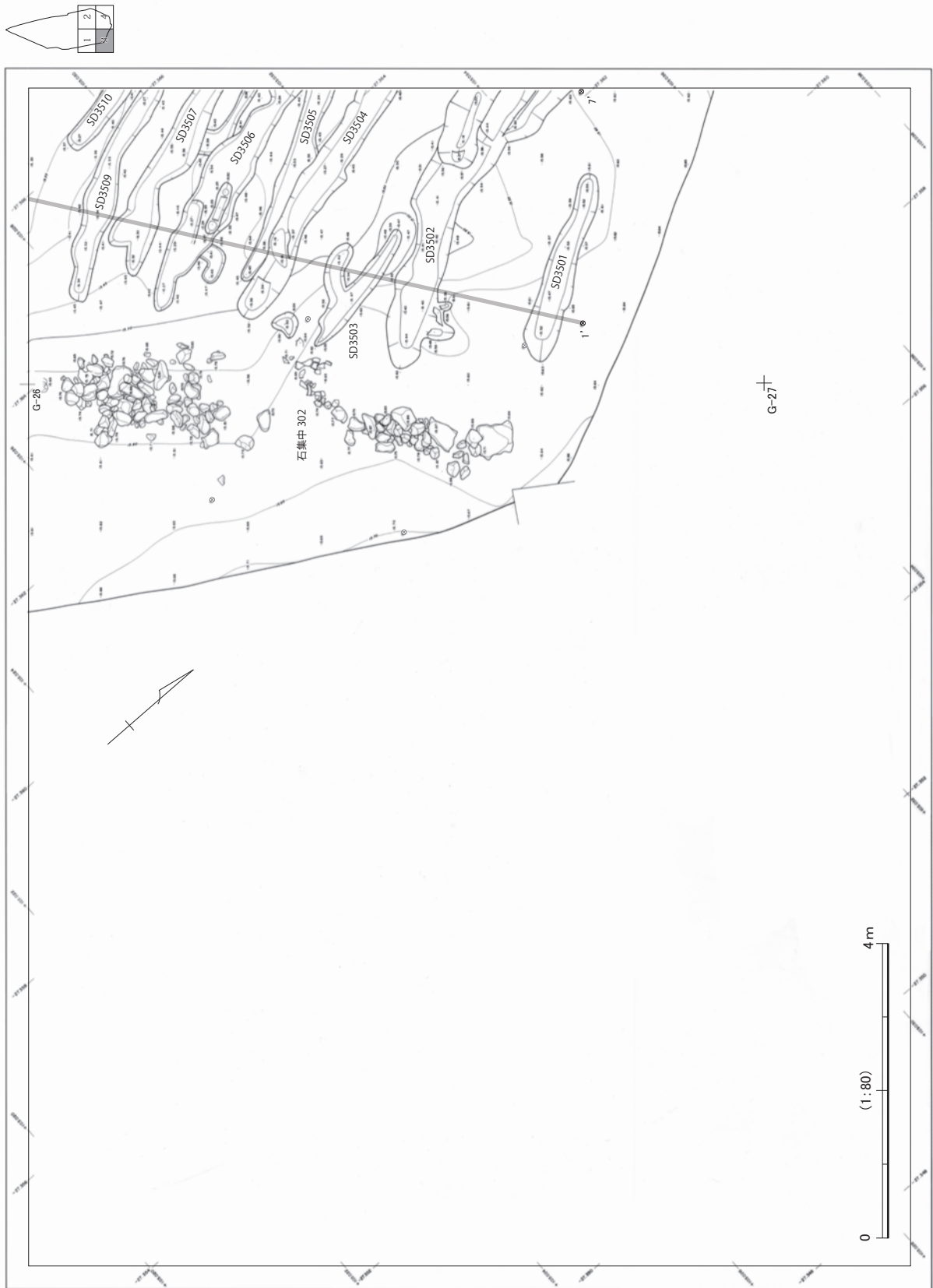
第109図 G地区 第Ⅲ-2面遺構配置図(S=1/150)





第110図 G地区 第Ⅲ-2面平面図1 (S=1/80)





第112図 G地区 第Ⅲ-2面平面図3(S=1/80)



第113図 G地区 第Ⅲ-2面平面図4 (S=1/80)

右岸(北肩部)の護岸・堤防と重複しない位置関係から、同時期に併存したと考えられる。また、第4次調査で検出した河跡3001(古)について、第IV面調査で多くの記録措置を実施しているが、第Ⅲ-1・2面と密接に関連するため、第Ⅲ-1面で検出した河跡3001(新)を含めて本節で述べることにしたい。遺物は、多数の須恵器、土師器の他、少量の木製品、石製品が出土した。

### 1 ピット (遺構：第109～113・115図、遺物：第117・121図、第27表)

小規模なピット約10基を検出し、うち須恵器、土師器小片が出土した6基に番号を付した。ピットの覆土は、炭粒が混ざる暗灰～灰褐色砂質土を基本とし、建物等を構成するような柱穴は存在しない。G-25区P3501は径16cm、深さ7cmを測る。G25区P3502は、北西約2mに位置するSD3529と並行した耕作に伴う小溝と考えられる。長さ120cm以上、幅50cm以上、深さ13cmを測る。F26区P3503は深さ約6cmを測る浅い窪みで、SD3536に前出する。第121図400の須恵器短頸壺片が出土している。F-26区P3504は長軸約320cm、短軸約120cm、深さ5cm以下の浅い窪みで、茶灰色粗砂が混ざる淡灰オリブ色砂質土を覆土とする。遺構の切り合い関係からSD3510～12に前出する。図化した第117図354の須恵器坏蓋は、成形時に口縁端部を大きく折り曲げ過ぎたため、折り曲げ部分内面が密着する。VI<sub>1</sub>期に位置付けられる。E-26区P3505は径30～35cm、深さ12cmを測り、SD3540より新しい。E25区P3506は、平面略楕円形を呈する。長軸78cm、短軸約80cm、深さ20cmを測る。

### 2 溝(SD) (遺構：第114～116図・第26表、遺物：第117～121図・第27表)

河跡3001(新)の護岸・堤防の北側で耕作に伴う小溝約60条を検出した。大部分の小溝群は、緩やかに湾曲しながら地形の勾配に対してほぼ垂直方向に掘られ、主軸方位はN-29～33°Wを示す。また、SD3529は地形の勾配に対して水平方向に、SD3552は第Ⅲ-1面水田302の東側肩部に沿うようにそれぞれ掘られる。耕作単位は、第Ⅲ-1面の水田301～303、石集中301・302の様相を加味すれば、第114図とおりに大きくa～dの4つの耕作単位を復元可能である。各小溝の規模・覆土等は第26表に示したとおりで、肩部は垂直に近い立ち上がりが多い。また、覆土は濁灰褐色または濁黒灰～暗灰～灰色を呈する砂質土を基調としており、底付近では不規則にベース土粒が混ざる。



第114図 G地区 第Ⅲ-2面耕作単位復元図(S=1/300)

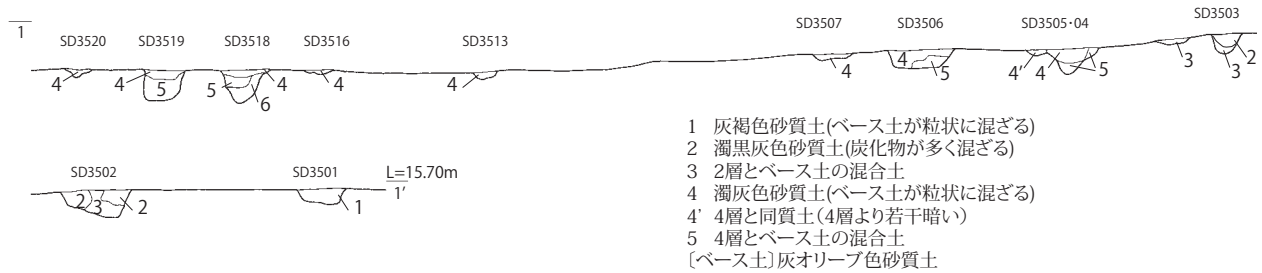
#### SD3501～26・30～50・60〔耕作地b〕

E・F-25・26区で検出した小溝群である。分布範囲は、南西側を河跡3001(新)、南東側を石集中302、北東側を未分布域及び石集中301で画され、北東-南西方向で約18m、北西-南東方向で約12～15m(最南側は19m以上)を測る。小溝の分布・規模等から、耕作地b-1～b-3(第114図)に細分可能であり、そ

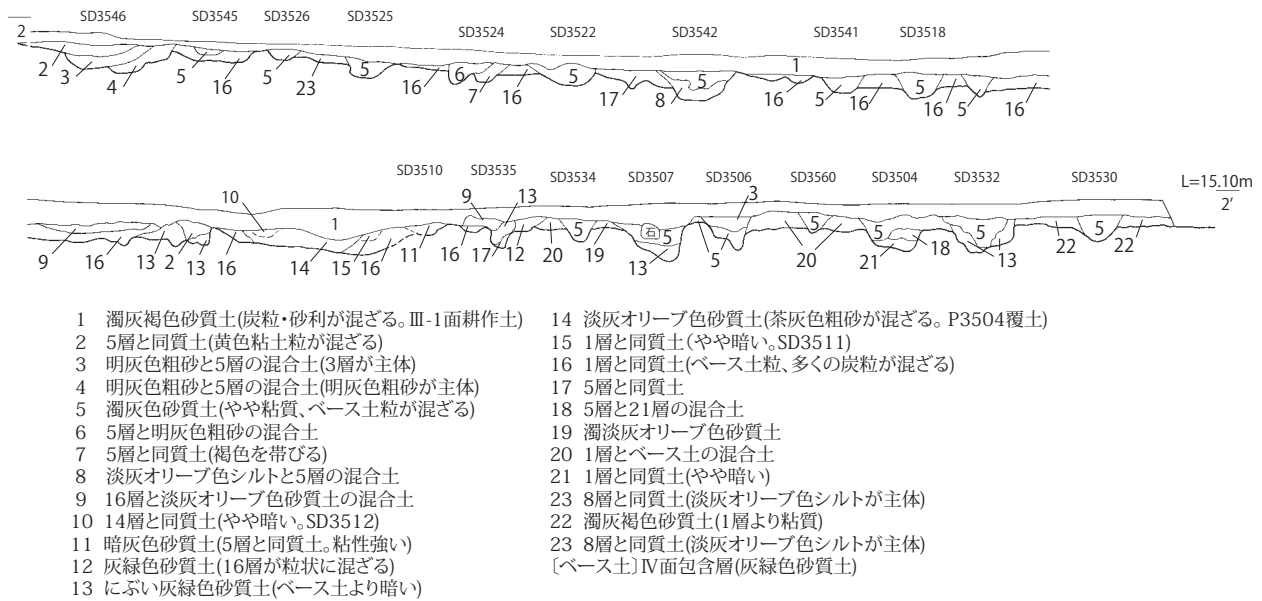
第26表 G地区 第Ⅲ-2面SD規模等一覧表

耕作単位	遺構番号	グリッド名	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	土 層	備 考
耕作地 a	SD3527	G-25-3	約 100	約 20	2 前後	濁灰褐色弱粘質土	未図化
	SD3528	G-25-3	240 ~	35 ~ 55	5 ~ 7	濁灰褐色弱粘質土	SD3529 より古
	SD3529	G-25-1・3	590	20 ~ 32	2 ~ 8	第 115 図断面 8	SD3528 より新
耕作地 b-1	SD3523	F-25-3	620	24 ~ 60	10 ~ 20	第 114 図断面 2	SD3523・24 より古
	SD3522	E-25-4	930	26 ~ 34	5 ~ 12	第 114 図断面 3・6	SD3522・24 より新、SD3535 より古
	SD3524	E25-4、 F-25-1・3	950	20 ~ 60	2 ~ 18	第 114 図断面 2・3	SD3523 より新
	SD3525	F-25-1、 E-25-4	1050	26 ~ 58	7 ~ 18	第 114 図断面 2・3・5・6	SD3523 より新、SD3526 より古
	SD3526	F-25-1、 E-25-3・4	1300	24 ~ 60	10 ~ 19	〃	SD3525 より新
	SD3545	F-25-1	180	36 ~ 52	約 12	第 114 図断面 2	SD3546 より古
	SD3546	F-25-1	155	36 ~ 70	13 ~ 23	〃	SD3545 より新
	SD3547	F-25-1	約 130	32 ~ 52	6 ~ 10	濁暗灰褐色砂質土	SD3526・49 より古
	SD3548	E-25-2、 F-25-1	510	38 ~ 76	6 ~ 15	第 114 図断面 3	切り合いなし
	SD3549	E-25-2、 F-25-1	655	30 ~ 82	10 ~ 24	〃	SD3547・50 より新
	SD3550	E-25-2、 F-25-1	490 ~	22 ~ 44	5 ~ 19	〃	SD3549 より古
	耕作地 b-2	SD3551	E-25-3	225	20 ~ 24	4 ~ 7	濁灰褐色砂質土
SD3501		F-26-4	265	28 ~ 44	4 ~ 11	第 114 図断面 1	切り合いなし
SD3502		F-26-2・4	540	48 ~ 68	6 ~ 18	第 114 図断面 1、第 115 図断面 7	SD3532 より古
SD3503		F-26-2	195	18 ~ 34	9 ~ 17	第 114 図断面 1	切り合いなし
SD3505		F-26-2	350	28 ~ 40	5 ~ 11	第 114 図断面 1	SD3504・06 より古
SD3508		F-26-2	245	14 ~ 32	4 ~ 13	濁灰色砂質土	SD3506・07 より古
SD3509		F-26-1・2	520	22 ~ 46	6 ~ 16	第 114 図断面 4	切り合いなし
SD3511		F-26-1・2	350 ~	18 ~ 38	10 前後	第 114 図断面 2・4	P3504 より新
SD3514		F-25-4	50	18 ~ 22	8	濁灰色砂質土	切り合いなし
SD3515		F-25-3	155	15 前後	10 ~ 13	淡灰オリープ色砂質土（茶灰色粗砂粒が混ざる）	切り合いなし
SD3516		F-25-4	約 110	20 ~ 28	5 ~ 7	第 114 図断面 1	切り合いなし
SD3517		F-25-4	160	22 ~ 24	3 ~ 6	濁灰色砂質土	石集中 302 より古
SD3519		F-25-4	170	20 ~ 32	6 ~ 25	第 114 図断面 1	切り合いなし
SD3520		F-25-4	75	22 ~ 26	2 ~ 8	〃	切り合いなし
SD3521		F-25-2	90	15 前後	7 ~ 9	濁灰褐色砂質土（しまりない）	切り合いなし
SD3542	F-25-3	230	24 ~ 30	8 ~ 15	濁暗灰褐色砂質土	SD3543 と一体か	
耕作地 b-2・3	SD3504	F-26-1 ~ 3	1055	26 ~ 52	6 ~ 30	第 114 図断面 1 ~ 3、第 115 図断面 7	SD3505 より新、SD3532 より古
	SD3506	F-26-1・2	960	20 ~ 66	10 ~ 20	第 114 図断面 1・2	SD3505・08 より新
	SD3510	F-26-1・2	710	20 ~ 32	10 ~ 18	第 114 図断面 2・4	P3504 より新
	SD3512	F-26-1	410	18 ~ 30	10 ~ 17	第 114 図断面 2	P3504 より新
	SD3513	F-25-4	165	20 ~ 26	8 ~ 11	第 114 図断面 1	切り合いなし
	SD3518	E-26-4、 F-25-3・4	1280	18 ~ 46	4 ~ 30	第 114 図断面 1 ~ 3	SD3541 より新
	SD3532	E-26-4、 F-26-3・4	1040 ~	18 ~ 52	8 ~ 30	第 114 図断面 2、第 115 図断面 7	SD3502・04 より新
	SD3537	E-26-2、 F-26-1	440	26 ~ 40	8 ~ 13	〃	SD3538 より新
	SD3541	E-25-4、 F-25-3、 E-26-2	730 ~	22 ~ 46	4 ~ 22	第 114 図断面 2・3	SD3518 より古
	耕作地 b-3	SD3507	E-26-2、 F-26-1	1070	24 ~ 52	7 ~ 22	第 114 図断面 2・3
SD3530		F-26-3	370	16 ~ 28	13 ~ 18	第 114 図断面 2	切り合いなし
SD3531		F-26-3	105	約 28	10 ~ 14	濁灰色砂質土（ベース土粒が混ざる）	切り合いなし
SD3533		F-26-3	230	28 ~ 46	9 ~ 12	第 114 図断面 3	切り合いなし
SD3534		E-26-2、 F-26-1	380 ~	20 ~ 30	9 ~ 16	第 114 図断面 2・3	SD3535 より古
SD3535		E-26-2、 F-26-1	570	20 ~ 34	6 ~ 18	〃	SD3523・34 より新
SD3536		E-26-2、 F-26-1	190	24 ~ 28	約 5	第 114 図断面 3	P3503 より新
SD3538		E-26-2、 F-26-1	500	34 ~ 64	14 ~ 22	〃	SD3540 より新、SD3537・39 より古
SD3539		F-26-1	80	約 35	7 ~ 10	濁暗灰褐色砂質土	SD3538 より新、P3504 より古
SD3540		E-26-2、 F-26-1	330	44 ~ 50	8 ~ 14	第 114 図断面 3	P3505・SD3538 より古
SD3543		E-25-4、 F-25-3	400	24 ~ 36	5 ~ 10	第 114 図断面 3	SD3542 と一体か
SD3544		E-25-4	100	18 ~ 30	約 6	濁暗灰褐色砂質土	切り合いなし
SD3560		F-26-1	85	20 前後	8 ~ 14	濁暗灰褐色砂質土	切り合いなし
耕作地 d		SD3552	E-25-4、 E-26-2	410	28 ~ 50	4 ~ 8	第 100 図断面 32
	SD3553	E-26-1・2	290 ~	36 ~ 56	3 ~ 11	第 115 図断面 9	切り合いなし
	SD3554	E-26-1・2	430 ~	28 ~ 44	9 ~ 14	〃	切り合いなし
	SD3555	E-26-4	220 ~	26 ~ 30	2 ~ 13	〃	切り合いなし
	SD3556	E-26-4	330 ~	24 ~ 42	2 ~ 12	〃	切り合いなし
	SD3557	E-26-4	350	20 ~ 42	6 ~ 10	〃	切り合いなし
	SD3558	E-26-4	260	28 ~ 40	6 ~ 8	〃	切り合いなし
	SD3559	E-26-2	260	24 ~ 36	8 ~ 12	〃	切り合いなし

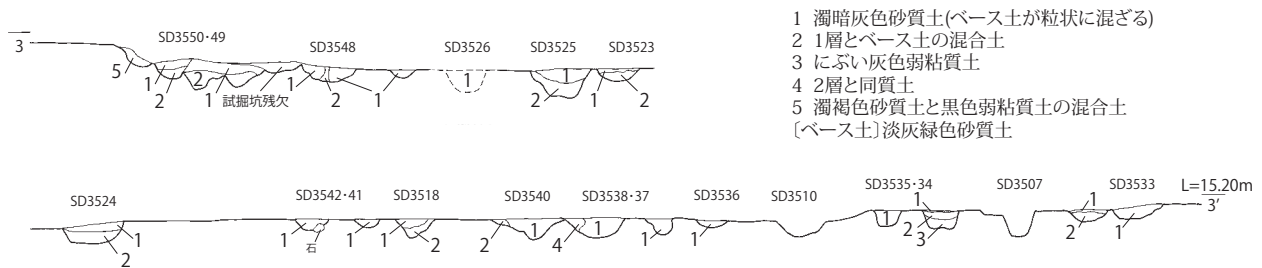
【F25・26区 SD3501～05・19・20等】(第110・112図)



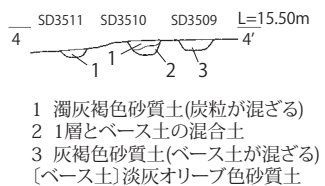
【F25・26区 SD3010～12・24～26・30～32等】(第111・113図)



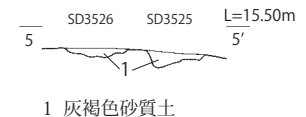
【E25・26区 SD3523～26・33～38等】(第111・113図)



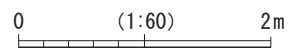
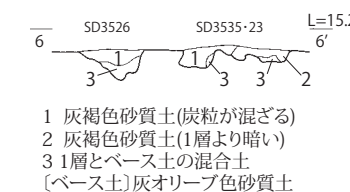
【F26区 SD3509～11】(第113図)



【F25区 SD3525・26】(第111図)



【E25区 SD3513・26・35】(第111図)



第115図 G地区 Ⅲ-2面SD土層断面図1(S=1/60)

れぞれ遺構の切り合い関係から3回程度の小溝の掘削が認められ、最も新しい段階には耕作地b-2・3は一体的に使用される。

耕作地b-1は、河跡3001(新)に沿って短冊状にのびる。北東-南西方向で約6m、北西-南東方向で19m以上を占め、SD3522～26・45～51が属する。小溝の長さは、2m未満、5～6m前後、9～13mに分布し、最も長いSD3526で約13mを測る。SD3522～24の切り合い関係から、3回の掘削が想定できる。耕作地b-2は、北東-南西方向で約12.5m、北西-南東方向で6～10m、面積約100㎡を占め、SD3501～03・05・08・09・11・14～17・19～21・42が属する。小溝の長さは、SD3502・09が5.2m・5.4m、それ以外は2.5m以下を測る。耕作地b-3は、北東-南西方向で約12.5m、北西-南東方向で約6m、面積約75㎡を占め、SD3507・30・31・33～36・38～40・43・44・60が属する。小溝の規模は、耕作地b-2と同様なあり方を示す。また、耕作地b-2・3を占める小溝として、SD3504・06・10・12・13・18・32・37・41があり、SD3532は耕作地dの範囲まで掘られる。小溝の長さは7m強、9.6～10.5m、12.8mに分布し、SD3518-SD3512・13・37間、SD3512・13・37-SD3510間、SD3510-3506間の距離は約2m、SD3506-SD3504間の距離は約1.2mを測る。遺構の切り合い関係から小溝群の中で最も新しい時期に位置付けられる。

各小溝覆土からは、主にⅥ<sub>2</sub>期を下限に第Ⅳ面に属する多くの須恵器、土師器片が出土し、うち第117図355～第120図390、同図393～第121図403を図化した。第117図355～第118図367は、SD3502出土遺物であり、355・356が土師器、357～367が須恵器となる。厚手のロクロ土師器埴355は、ケズリ調整を施した外面に煤が付着する。ロクロ成形と考えられる甑356は胴部片を欠落する。口径36.8cm、底径22.0cm、底部孔径12.8cm、推定高約35cmを測り、直立する口縁部は外面で肥厚する。胴部は平行叩き成形の後、カキメ、ハケを施す。坏蓋357は口径16.4cmを測り、肩部はロクロひだが目立つ。有台坏358は扁平で幅広の台部を貼り付ける。Ⅲ期の有台坏359は、底部外面に2文字の墨書が残るものの文字は判読できない。無台坏360は口径12.4cm、器高3.5cmを測り、体部は内湾気味に大きく外傾する。無台盤361～363は口径13cm前後を測り、体部は外傾する。361は使用に伴う摩耗が著しい。363は器肉が薄く、底部外面にヘラ記号が残る。第118図364は小型の短頸壺で口径8.0cmを測る。降灰の状況から正位有蓋焼成と考えられる。長頸瓶365は口径12.0cmを測り、口縁部下端に稜をつくる。短頸壺と考えられる366は、しっかりと踏ん張る台部が外展する。甕367は自然釉が厚く溶着する。354・357・360～362はⅤ<sub>2</sub>～Ⅵ<sub>1</sub>期に、363はⅥ<sub>2</sub>期に位置付けられる。

SD3503出土遺物のうち、第118図368～第119図372を図化した。有台坏368は口径15.6cm、器高5.7cmを測り、使用に伴い底部内面は平滑となる。無台盤369の底部は台状を呈し、Ⅵ<sub>1</sub>期に位置付けられる。壺類底部と考えられる370外面は、回転ヘラ切り後にナデ調整を施す。371・372は甕である。371は口径22.8cmを測り、口縁端部の面取りが鋭い。胴部を外面に平行叩き具、内面に無文当て具を用いて成形する。砲弾形の372は胴部径約40cmを測り、胴部内面上半に無文当て具痕、下半に平行当て具痕が残る。SD3504・06出土の須恵器坏蓋373は、口縁端部は下方に長くのびる。

SD3504出土遺物のうち、須恵器第119図374～377を図化した。有台坏374の底部外面には、「□(土カ)万呂」と判読できる墨書が残り、Ⅳ<sub>2(古)</sub>期と考えられる。無台坏375は厚手で、体下部は丸味をもつ。Ⅵ<sub>1</sub>期の無台盤376は、使用に伴い摩耗した底部外面に墨書が残り、右側の文字は「火」と判読できる。球胴を呈する甕377は口径21.2cm、器高約41cm、胴径約46cmを測る。胴部外面の成形には、木目がしっかりと浮き出るため、格子状に見える平行叩き具を用いる。他にⅥ<sub>2</sub>期に位置付けられる無台坏底部片等が出土した。

SD3506出土遺物は378、379を図化した。非ロクロ土師器甕378は器肉が厚く、内外面でハケ調整の原体が異なる。須恵器有台坏379は口径15.2cmを測り、焼きゆがみが目立つ。SD3507からは、380、

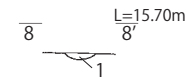


【F26区 SD3502・04】(第112・113図)



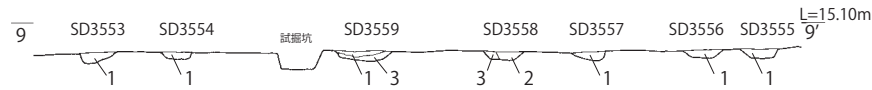
- 1 濁灰色砂質土(鉄分が沈着)
- 2 濁灰オリーブ色砂質土と1層の混合土
- 3 1層とベース土の混合土  
〔ベース土〕 灰オリーブ色砂質土 (IV面包含層)

【G25区 SD3529】(第110図)

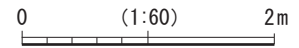


- 1 にぶい灰褐色弱粘質土(炭粒、ベース土粒が混ざる)  
〔ベース土〕 灰オリーブ色砂質土 (IV面包含層)

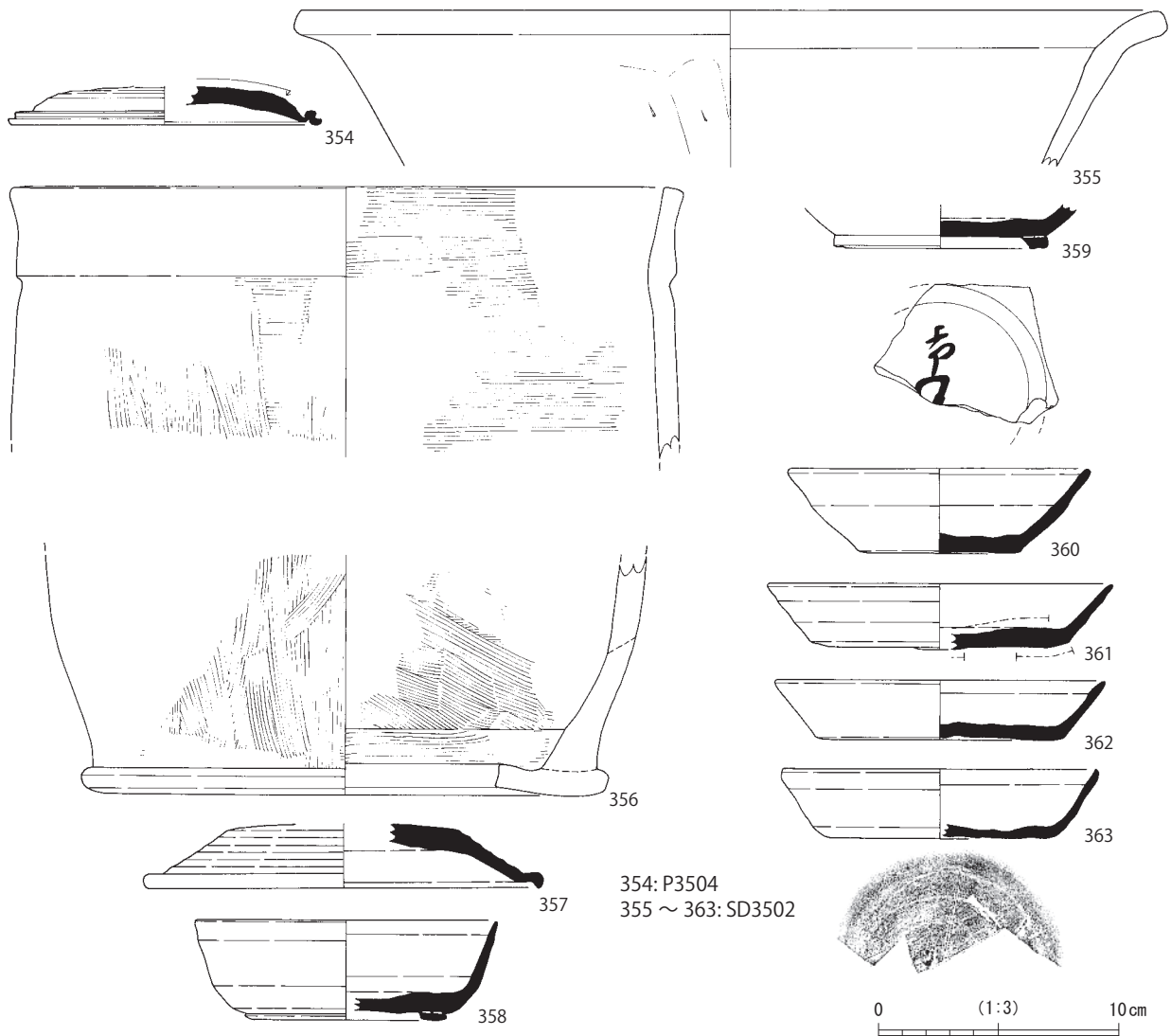
【E26区 SD3553～59】(第113図)



- 1 濁暗灰色砂質土(ベース土が少量粒状に混ざる)
- 2 1層と灰緑色砂質土の混合土
- 3 濁灰緑色砂質土(1層が粒状に混ざる)  
〔ベース土〕 明灰色粗砂

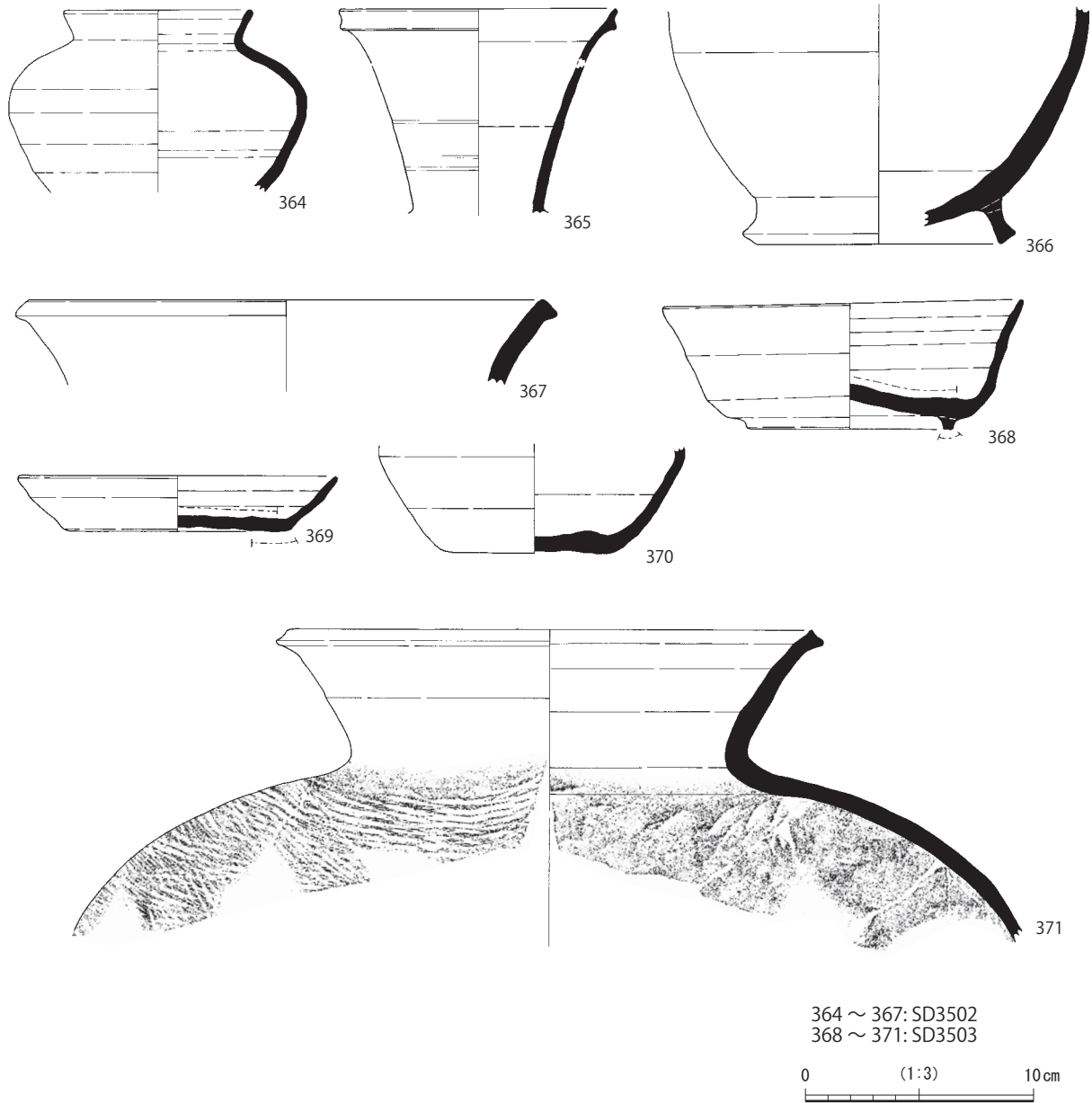


第116図 G地区 第Ⅲ-2面SD土層断面図2(S=1/60)



354: P3504  
355～363: SD3502

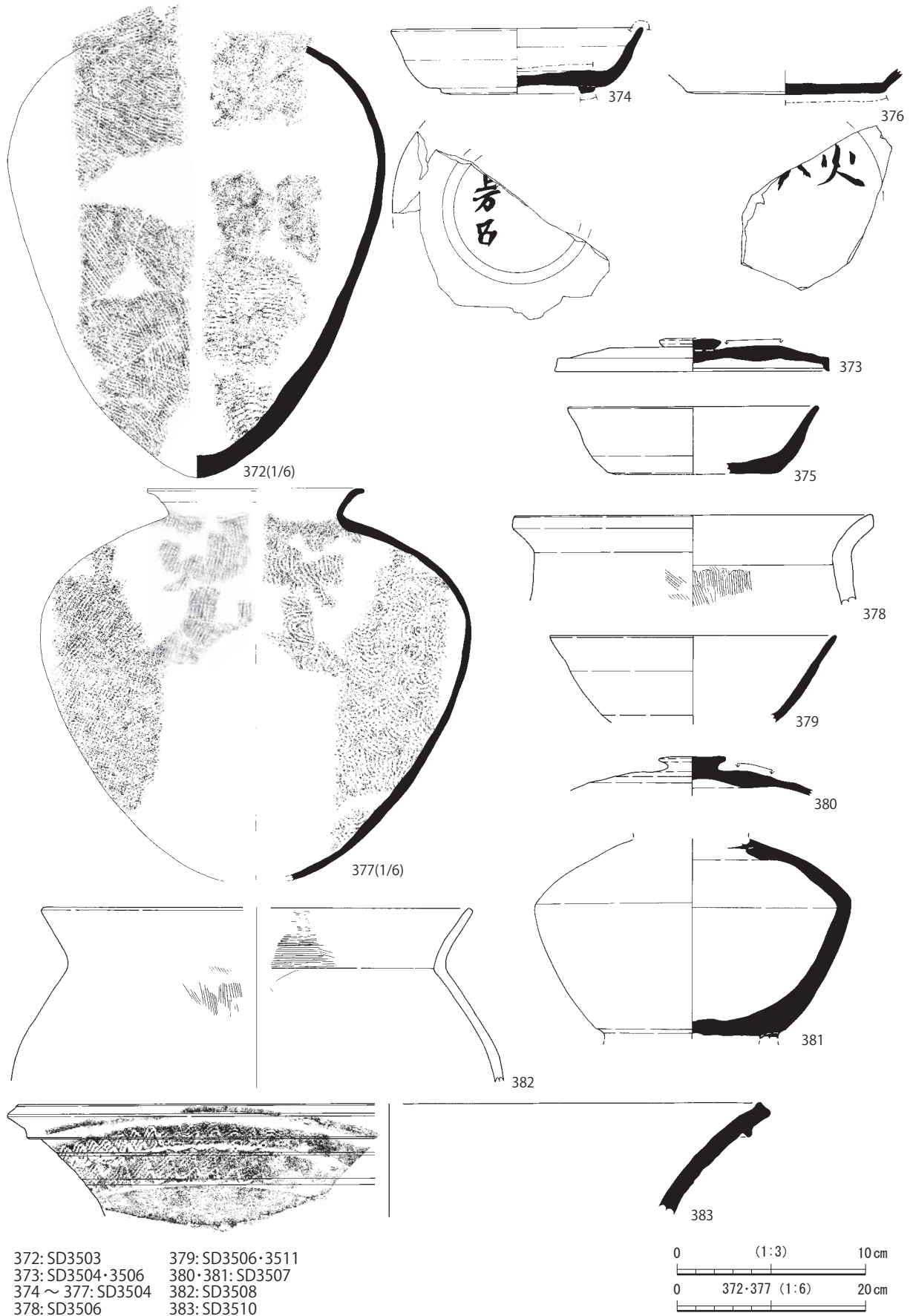
第117図 G地区 第Ⅲ-2面SD等出土遺物実測図(S=1/3)



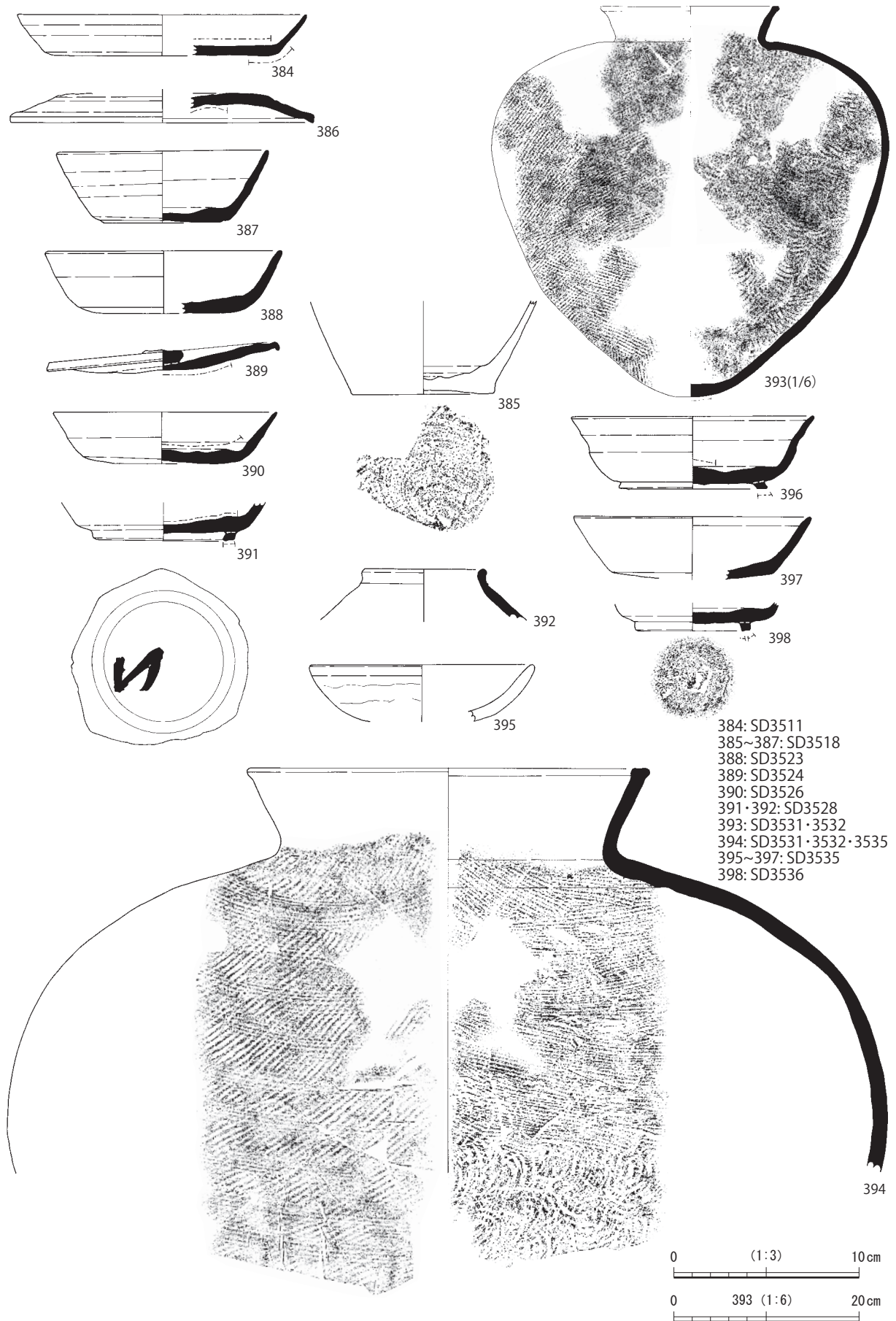
第118図 G地区 第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図1(S=1/3)

381の須恵器が出土した。坏蓋380は、径3.6cmを測る大型・扁平な鈕をつける。長頸瓶381は肩部でしっかりと屈曲し、正位で焼成される。SD3508出土の非ロクロ土師器甕382は器肉が薄く、硬質に焼きあがる。SD3510出土の須恵器甕383は口径約39cmに復元できる大型品で、外面を稜と沈線、波状文で丁寧に加飾する。

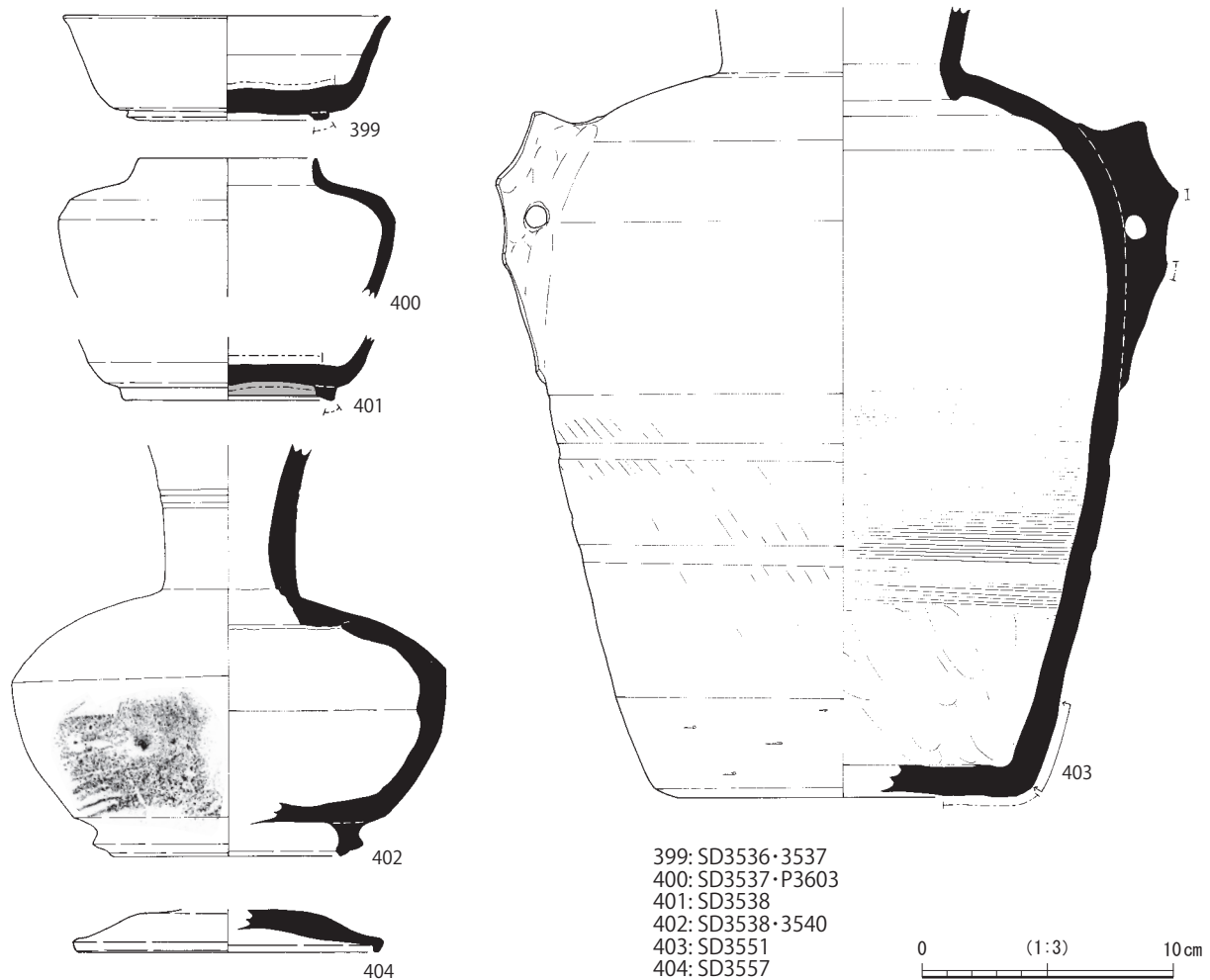
SD3511出土の第120図384は須恵器無台盤で、底部外面に回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整を加える。385～387は、SD3518出土遺物である。ロクロ土師器甕底部385は、煮炊きに伴い外面が一部剥離する。須恵器坏蓋386は口径16.2cmを測り、倒位での使用に伴い天井部内面が摩耗する。須恵器無台坏387は焼成時の小さな焼きぶくれが目立ち、外面に降灰・自然釉が溶着する。Ⅱ<sub>2</sub>期に位置付けられる。SD3523出土の須恵器無台坏388は口径12.6cm、器高3.3cmを測り、体部はゆるやかに外傾する。SD3524出土の須恵器坏蓋389は、上部に径約7cmの別個体を重ねて正位焼成され、焼きゆがむ。SD3526出土の須恵器無台坏390は焼成時の黒色の吹き出しが目立ち、体部は直線的に外傾する。



第119図 G地区 第三-2面SD出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)



第120図 G地区 第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図3(S=1/3・1/6)



第121図 G地区 第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図4(S=1/3)

SD3531・32出土の須恵器甕393は、口径19.4cm、器高42.1cm、胴径約43cmを測る。使用に伴い底部外面が摩耗する他、口縁端部に小さい欠けが連続する。須恵器甕394の破片は、SD3531・32・35から出土した。394は口径21.2cmを測り、胴部内面上半にハケ調整を加えて器形を整える。395～397はSD3535から出土した。非ロクロ土師器壺395は磨滅し、外面の粘土紐痕を残す。須恵器有台坏396は口径13.0cm、器高3.9cmを測り、体部中程から外傾する。須恵器無台坏397の体部は直線的に外傾する。破損した後に被熱し、断面に煤が付着する。SD3536出土の須恵器有台坏398は、底部外面中央に茶褐色の漆が付着する(写真図版48)。SD3536・37出土の須恵器有台坏399は、底部内面が使用に伴い平滑となる。SD3537出土の須恵器短頸壺400は口径7.0cmを測る小形品で、降灰状況から有蓋器種となる。401・402はSD3538出土の須恵器である。有台坏401は、底部外面の墨痕と摩耗から転用硯と考えられる。長頸瓶402は胴部下半を平行叩きの後に回転ナデ調整で加えて整形する。外面には厚く自然釉が溶着する。

#### SD3027～29〔耕作地a〕

G-25・26区で検出した小溝群で、SD3527～29が属する。分布範囲は、西側を石集中302で画され、北東-南西方向で14m以上、北西-南東方向で5m以上を測る。SD3527は、SD3529北端約1mの位置で直交する長さ約1m、深さ2cm前後の小溝である。屈曲するSD3528は、SD3529に前出する。SD3529は長さ約5.9mを測り、直線的に延びる。石集中302とほぼ平行し、主軸方位はN-45°Eを示す。覆土から須恵器、土師器片が出土しており、SD3528出土遺物の第120図391・392の須恵器を図化した。有台坏391の台部は内屈し、記号様の墨書を行う。V<sub>2</sub>期に位置付けられる。小型壺392は口径6.4cmを測り、

焼成は良好である。

**SD3552～59〔耕作地d〕**

F-25区で検出した小溝群で、SD3552～59が属する。分布範囲は、第Ⅲ-1面水田301～303とほぼ重複しており、耕作単位は第Ⅲ-2面最終(埋没)段階まで基本的に継続したと考えられる。耕作域は、北東-南西方向で12m以上、北西-南東方向で4m以上を測る。屈曲するSD3552は、第Ⅲ-1面水田302の東側肩部に沿うような位置関係にあり、覆土はピートが混ざる濁灰褐色砂質土と灰緑色砂質土の混合土である(第100図断面32)。ほぼ平行するSD3553～59は、長さ約2.6m、3m以上を測り、覆土はベース土粒が混ざる濁暗灰～灰緑色砂質土を基調とする。

覆土から須恵器、土師器が出土しており、第121図403・404の須恵器を図化した。SD3551出土の双耳瓶403の胴部下半は、外面を平行叩きとケズリ調整で、内面をカキメ調整と指ナデで成形する。底

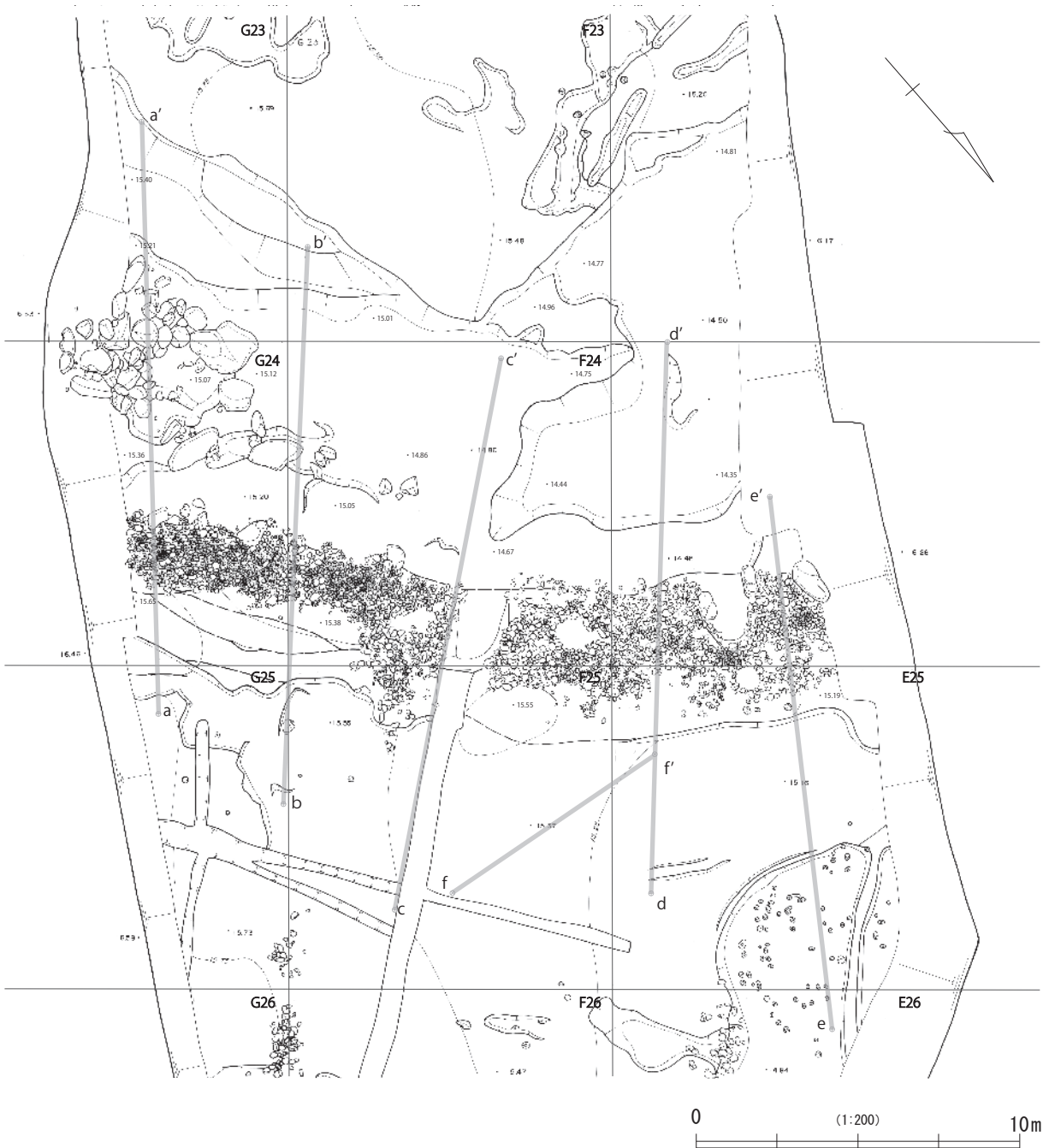


第122図 G地区 第Ⅲ-1・2面河跡3001(古)完掘状況平面図(S=1/200)

部外縁は使用に伴い平滑となる。SD3557出土の坏蓋404は口径12.0cmを測り、天井部外面に丁寧なナデ調整を加える。

3 河跡3001(遺構：第122～126図、遺物：第127～140図・第27～32・36表)

E～G-23～25区で検出した河跡で、地勢に沿って南東方向から北西方向に流下する。前述のとおり、第IV面集落・耕作域を寸断・埋没した大規模な土砂流入・堆積および堤防・護岸の構築、第Ⅲ-2面埋没直前までの状況(第IV面埋没直後～第Ⅲ-1面(堤防・護岸の構築、畝地)～第Ⅲ-1面埋没直前)を河跡3001(古)と、第4次第Ⅲ-1面を埋没した大規模な土砂流入・堆積を河跡3001(新)と、それぞれ呼称する。出土遺物および第IV面の状況から、おおむね第IV面集落を襲った土砂災害が10世紀初頭(VI<sub>2</sub>期)、ほどなく行われた第Ⅲ-2面の造成及び第Ⅲ-1面への転換が10世紀前葉～中葉頃(VI<sub>3</sub>期～VII<sub>1</sub>期)、第Ⅲ-1



第123図 G地区 第Ⅲ-1・2面河跡3001(新)完掘状況平面図(S=1/200)

面を再び襲った大規模な土砂流入・埋没を遺物から10世紀後葉～11世紀前葉(Ⅶ<sub>2</sub>期が上限)と想定している。

#### 河跡3001(古)

第Ⅳ面を廃絶させた河跡の規模は、調査区南東壁(第122～124図断面a-a')で上幅約20m、下幅約10.7m、深さ約2.2m(最深部の標高13.73m)を、調査区中央付近(第122・123・125図断面c-c')で上幅約20m、下幅約9m、深さ2.2m(同13.31m)を、調査区北西壁(第122・123・126図断面e-e')で上幅約25m、下幅約15m、深さ2m以上(同13.25m以下)を測り、右岸(北肩部)に比して左岸(南肩部)は比較的緩やかな勾配である。

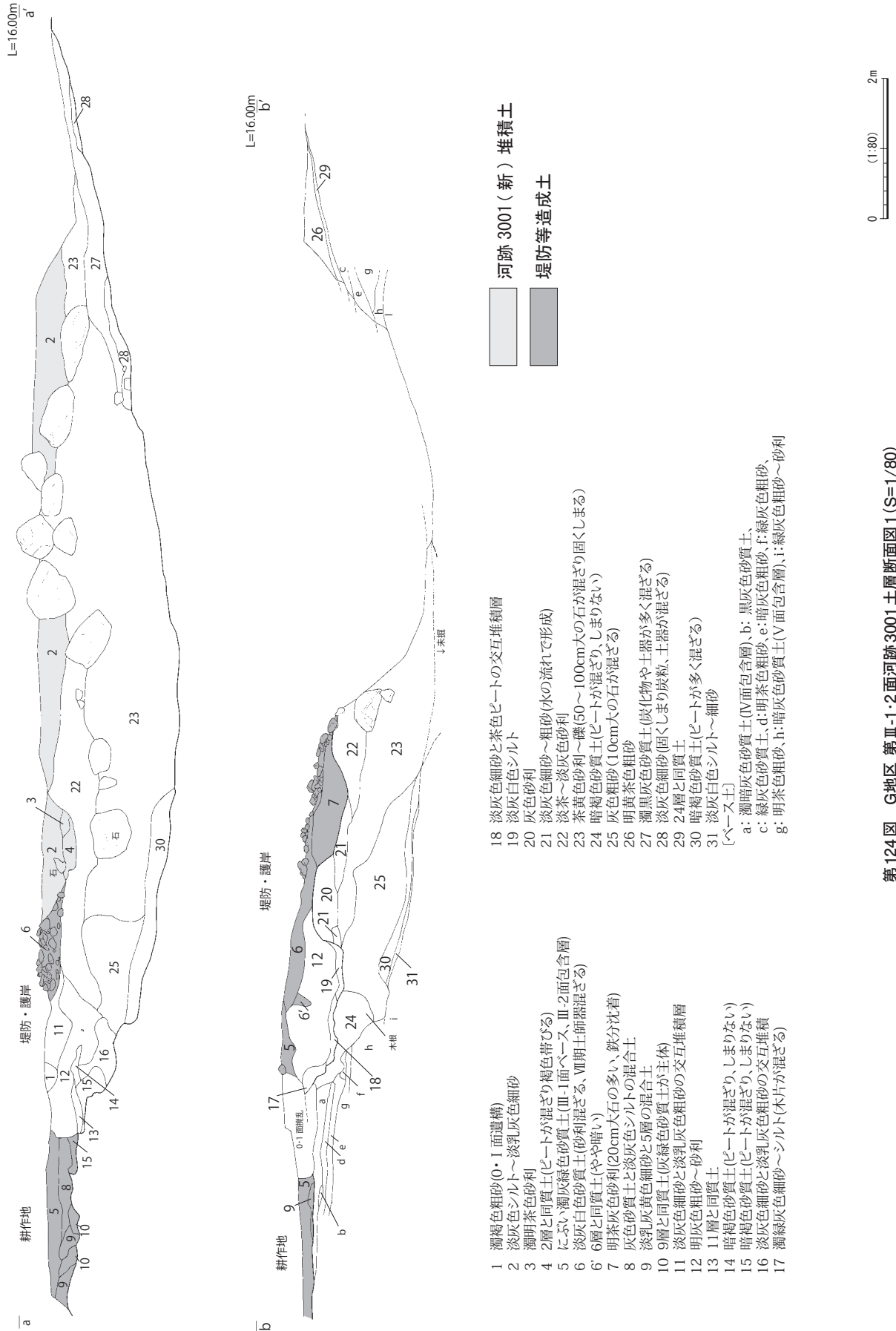
短期間に流入・堆積した土砂の基本的な層位は、下層から、第1層：右岸(北肩部)底付近のピートが多く混ざる暗褐色砂質土(第125図断面a-a'・b-b'土層30・31、第125図断面c-c'土層19・19'、同図断面d-d'土層14)、第2層：淡灰茶～灰色粗砂、第3層：左岸(南肩部)の固くしまった濁黒灰～灰色砂質土(厚さ20～40cm、第124図断面a-a'土層27、第125図断面c-c'土層15・16、同図断面d-d'土層18～20)、第4層：淡灰～灰・茶黄色を呈するシルト・粗砂・砂利・自然石(厚さ1.6～2m、自然石は最大1m以上)となる。左岸(南肩部)のみで確認できた第3層からは、時期的にまとまりをもつ多数の須恵器、土師器が出土しており、上流側に存在した集落域から土砂とともに運ばれた土器群と考えられる。また、第125図断面a-a'・b-b'からは、短期間に大量の土砂が流入・堆積した直後に、右岸(北肩部)に寄って上幅2.2～2.3m、深さ0.8～1mを測る河川が形成されたことが分かる(断面a-a'土層11～16、断面b-b'土層12・17～19)。

その後、標高が相対的に低く、急勾配の右岸(北肩部)に、堤防・護岸・耕作地(畠地)が一体的に造成される(第Ⅲ-1面、堤防・護岸の造成範囲は第124～126図濃い網掛け範囲)。南東～北西方向で検出した堤防の規模は延長約21mであり、第124図断面b-b'で上幅約2.8m、下幅約6m、高さ約0.4mを、第125図断面c-c'で上幅3.6m、下幅約5.2m、高さ約0.4mを、同図断面d-d'で上幅約2.4m、下幅約5.6m、高さ約0.4mをそれぞれ測る。堤防斜面内側(河側)に築かれた護岸は、周辺に存在する自然石を砂質土で押さえながら乱雑に積み上げたものであり、幅2～3.5m、厚さ30～50cmを測る。上流側約1/3が長軸10～20cm程度の小振りな自然石を緩やかな勾配で積上げるのに対して、下流側約2/3は長軸40cmを超える大振りな自然石を混ぜながら急勾配で堅固に積み上げる傾向を示す。一方、左岸側(南側)は標高が相対的に高く、浸食作用が弱かったと考えられ、堤防は認められず、肩部中程に不規則に径2～5cmの杭が不規則に散見できる程度である。

遺物は、①洪水の流入・堆積土砂層(第3・4層)、②右岸(北肩部)の堤防・護岸造成土層から出土し、層位では第3層→第4層→堤防・護岸造成土層の順に新しくなる。

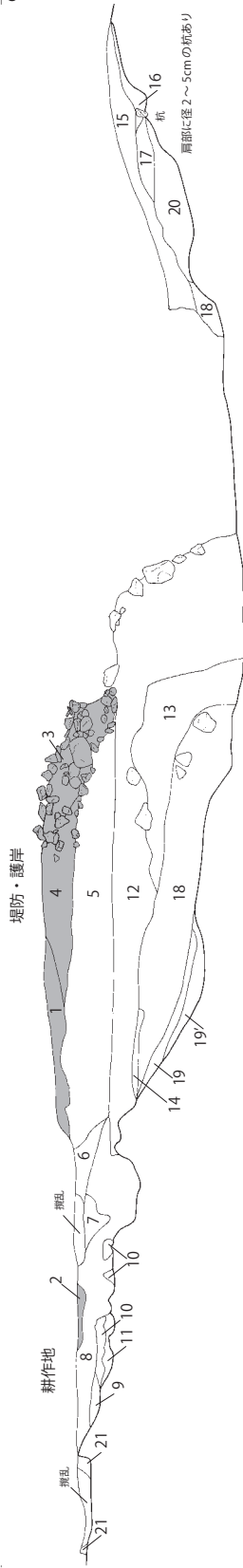
右岸(北肩部)の護岸・堤防造成土層から出土した遺物のうち、第127図405～第128図430を図化した。中では、Ⅵ<sub>1</sub>期に位置付けられる416・420・423等が最も新しく位置付けられる。弥生土器甕405は、本来第Ⅵ-2面に属する。口径16.4cmを測り、口縁部を不規則な刻みで加飾する。407・409・411・415は8世紀代の非ロクロ土師器、406・408・410・412～414は9世紀前半代のロクロ土師器で、うち406～410は甕となる。406は口径20.3cmを測り、口縁端部を小さくつまみあげる。407は口径32.7cmを測り、硬質な焼きあがり器面には煮沸痕が明瞭に残る。408の口縁端部は内傾する。小甕409は口径12.0cmを測り、外面が一部剥離する等、煮沸痕が明瞭に残る。小甕410は底部外面に回転糸切り痕をそのまま残す。黒色処理と赤彩を施す埴411は口径14.8cm、器高3.6cmを測り、外面は口縁部直下まで粗い不整方向のケズリ調整を施す。412～414は内面に丁寧なミガキ調整と黒色処理を施す。薄手の埴412は口径10.5cmを測る小型品である。無台埴413は口径15.7cm、器高5.6cmを測り、外面体部下端に横方向のケズリ





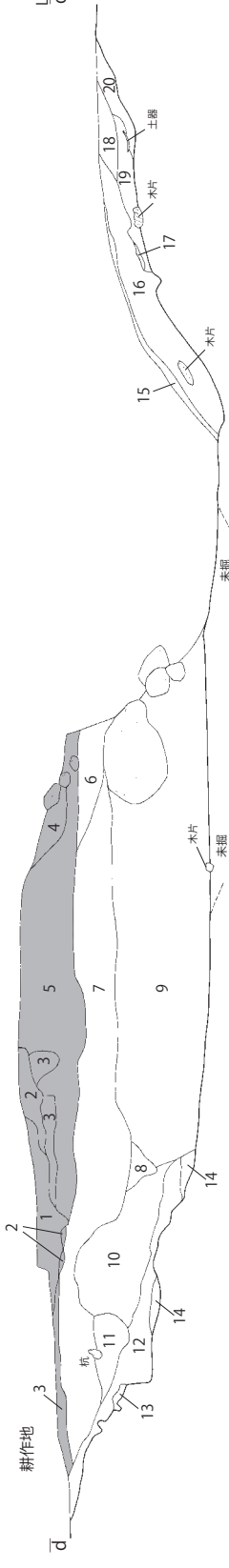
第124図 G地区 第Ⅲ-1・2面河跡3001土層断面図1(S=1/80)

L=16.00m  
c



- 1 にぶい、濁灰緑色砂質土(Ⅲ-2面包含層)
- 2 濁灰色砂質土(Ⅲ-2面包含層)
- 3 淡灰白色砂質土(やや汚れ、土器混ざる)
- 4 明灰黄色砂利(盛土)
- 5 明黄灰色砂利(水の流れて水平堆積)
- 6 緑灰色砂質土と茶灰色砂質土の混合土
- 7 濁灰白色砂利
- 8 濁暗灰褐色砂質土
- 9 8層と同質土(8層より明るい)
- 10 茶灰色粗砂(8層が混ざる)
- 11 9層と同質土
- 12 茶黄色砂利層(鉄分が層状に沈着、最大50cm大の礫・石が混ざる)
- 13 灰緑色砂利～礫層(洪水砂)
- 14 淡灰茶色粗砂(洪水砂)
- 15 濁黒灰色砂質土～砂(土器が多く混ざる)
- 16 にぶい、濁灰色砂質土(炭粒・土器が多く混ざる)
- 17 明灰色粗砂
- 18 14層と同質土(灰褐色粗砂、最大20cm大の礫・石混ざる、洪水砂)
- 19 暗褐色砂質土(ピートが混ざり、しまりない)
- 19' 暗褐色砂質土(16層よりピートが多く混ざる)
- 20 淡灰緑色細砂
- 21 暗灰色砂質土(Ⅳ面遺構)

L=15.00m  
d

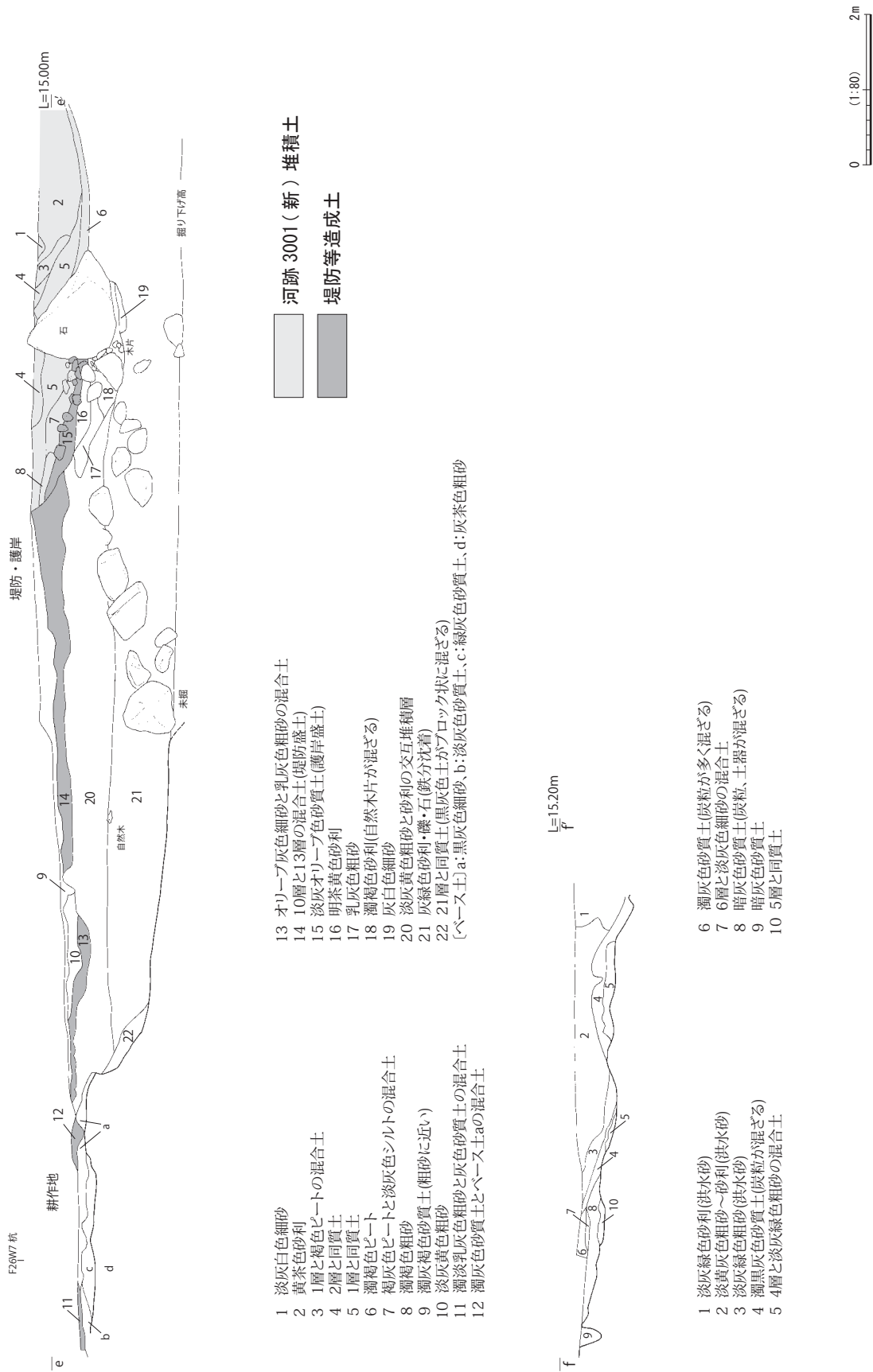


- 1 濁暗灰褐色砂質土(Ⅲ-1面水田耕作土)
- 2 1層と灰緑色砂質土の混合土
- 3 灰緑色砂質土
- 4 淡灰褐～淡乳灰色砂～シルト
- 5 灰緑色砂質土と明茶色粗砂・砂利の混合土(盛土)
- 6 明茶色砂利・礫・石
- 7 淡灰～淡黄灰色砂利(鉄分沈着。水の流れて形成)
- 8 黒灰色腐植土と10層の混合土
- 9 灰緑色砂利・礫・石(洪水堆積)
- 10 灰色粗砂(木片が混ざる)
- 11 10層と同質土(褐色が強く、ピートが混ざる)
- 12 濁黒灰色砂質土
- 13 12層と淡黄灰色砂の混合土
- 14 淡灰白色細砂と褐色ピートの交互堆積層
- 15 淡黄～黄灰色粗砂
- 16 濁暗灰褐色砂質土(砂利・ピートが混ざり、しまりない)
- 17 明黄色粗砂
- 18 濁暗灰色砂質土(炭粒が少量混ざる)
- 19 18層と同質土(18層より暗く、炭粒が多く混ざる)
- 20 18層と同質土(18層より明るく、緑灰色砂質土が混ざる)

堤防等造成土



第125図 G地区 第Ⅲ-1・2面河跡3001土層断面図2(S=1/80)



第126図 G地区 第Ⅱ-1・2面河跡3001土層断面図3(S=1/80)

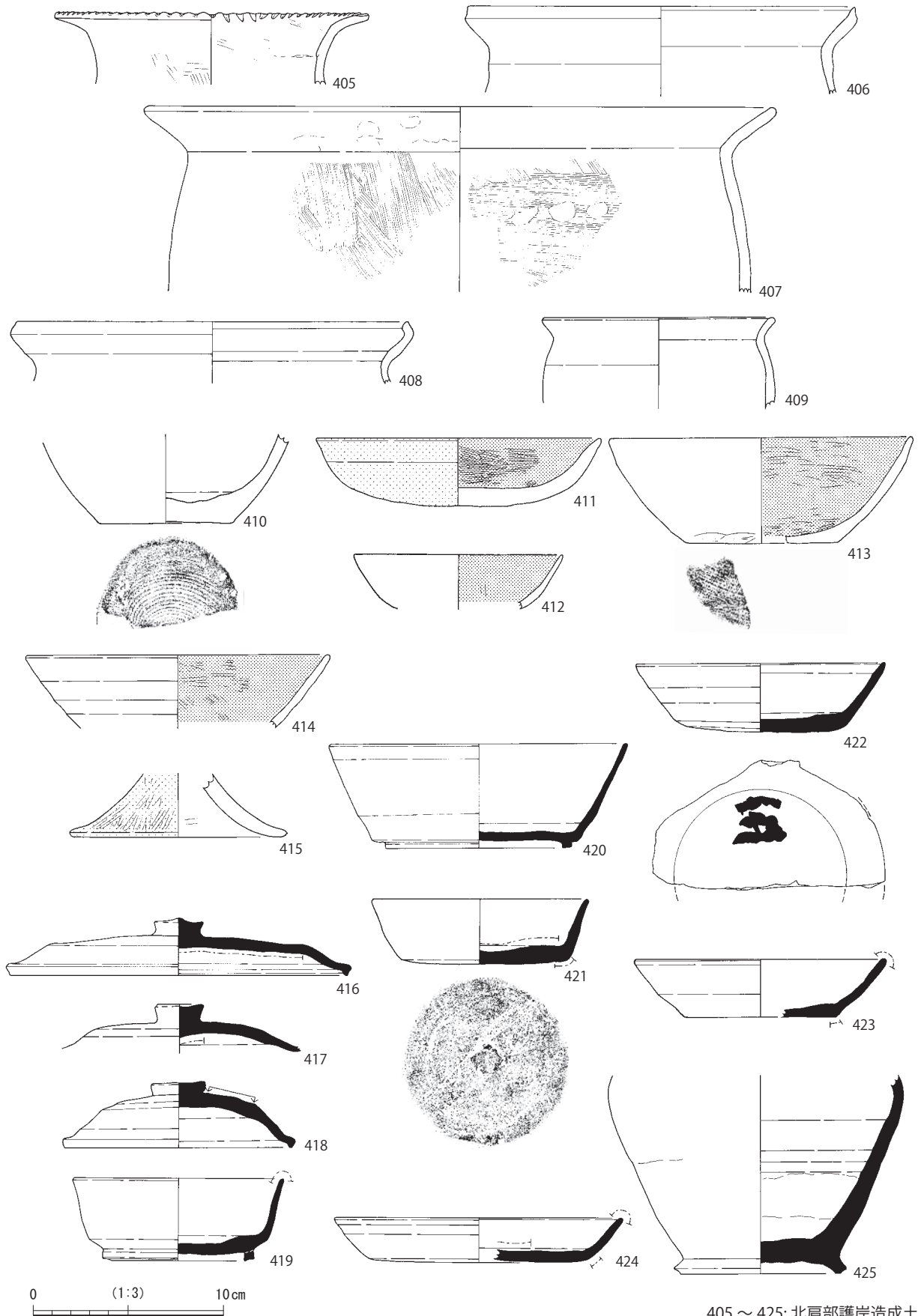
調整を加える。414は口径15.9cmを測る。高坏脚部415は縦方向のミガキ調整の後に赤彩を施す。

第127図416～第128図430は須恵器で、416～418が坏蓋、419・420が有台坏、421～423が無台坏、424が無台盤となる。天井部が広い416は、内面が摩耗し、墨痕が残ることから、転用硯と考えられる。417も天井部内面が使用に伴い平滑となる。418は口径12.0cm、器高3.4cmを測り、ロクロ成形時に粘土が切れた箇所を補修のため粘土塊を貼り付ける。体部が直立する419は、底部外面中央の墨痕から墨溜め容器に転用したと考えられる。Ⅳ<sub>2</sub>期に位置付けられる。薄手の有台坏420は口径15.5cm、器高5.5cmを測り、体部が直線的に外傾する。421は使用に伴う摩耗が著しく、破損後に二次被熱する。422は口径12.9cm、器高3.7cmを測る。底部外面の墨書は「五」に近い筆跡をもち、Ⅴ<sub>2</sub>期に位置付けられる。423の底部は台状を呈し、内外面とも被熱し、煤が付着する。無台盤424は回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加える。425～428は瓶類である。425の胴部外面下半には板状工具によるケズリ様の整形痕が残る。小型・有台の426は器肉が厚く、頸部をつくりだす際の粘土のシボリ痕が明瞭に残る。427は口径12.0cmを測り、口縁端部は使用に伴う細かい欠損が連続する。428は堅緻に焼成され、口縁部に焼きゆがみが認められる。429・430は甕であり、口径は429が20.1cm、430が28.0cmを測る。ともに胴部成形に内面は同心円当て具、外面に平行叩き具を用いる。

第4層(洪水流入・堆積土砂)出土遺物のうち、第128図431～第130図455を図化し、431・440・448・452・453は河底に近い層位からの出土遺物である。球胴の弥生土器壺と考えられる431は口径16.0cmを測り、口縁端部を刻みで加飾する。内面に煮炊きに伴う黒褐色のヨゴレが付着する。432・433・435・437は非ロクロ土師器甕、434・436・438はロクロ土師器甕である。432・433は硬質の焼き上がりで、口縁部はゆるやかに外反する。433は内外面でハケ調整の原体が異なる。434は面取りがしっかりと口縁端部を上方にひきのばし、胴部内面全体に黒褐色の炭化物が付着する。小甕435は口径13.0cmを測り、口縁部は短く外反する。436・438は煮炊きに伴う煤・ヨゴレが明瞭に残る。437は頸部で明瞭に屈曲し、胴部内面上半に煮炊きに伴う暗褐色のヨゴレが付着する。ロクロ土師器塙439は破損後に被熱し、光沢のあるタール状の煤が付着する。

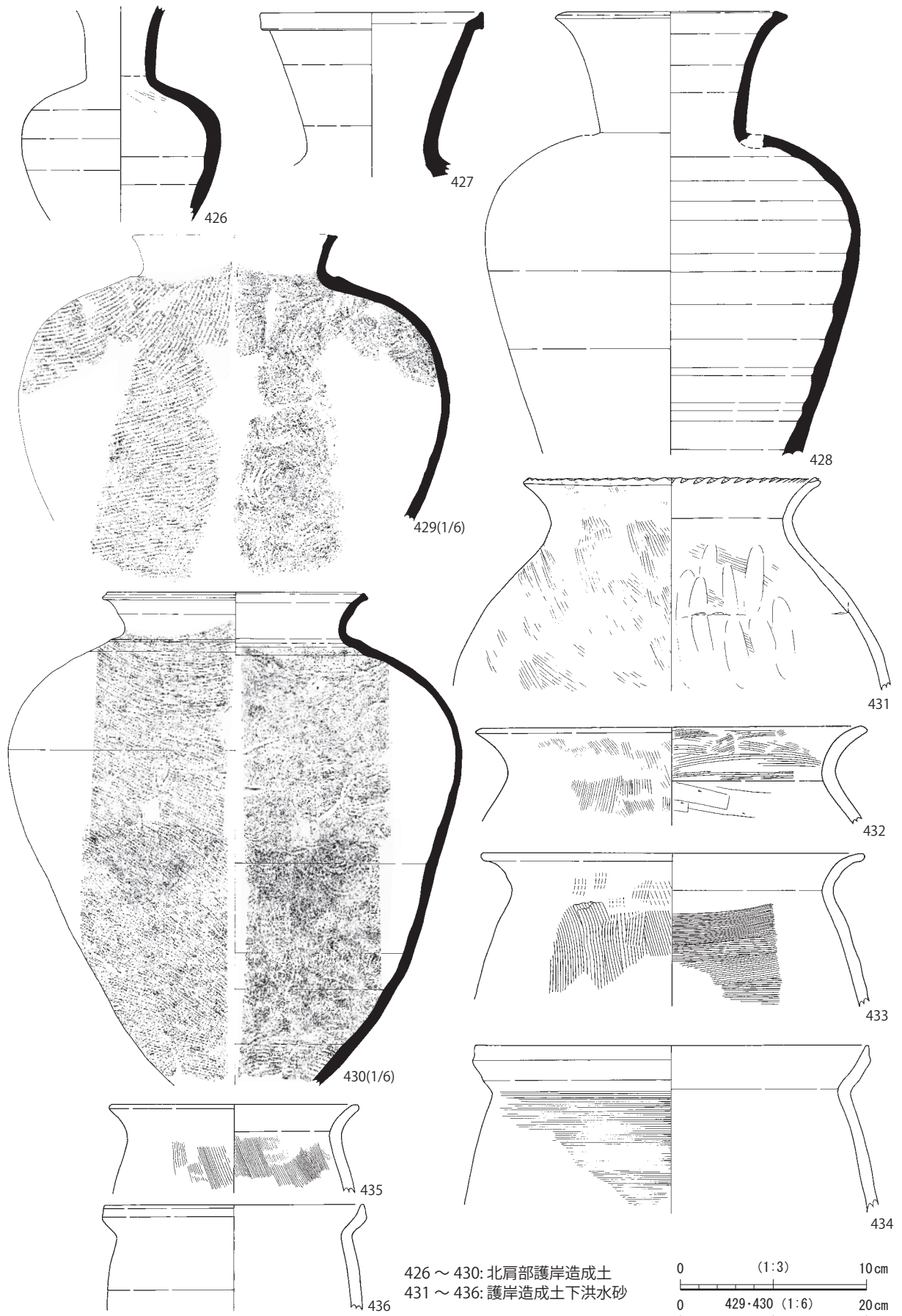
第129図440～第130図455は須恵器で、坏蓋443・無台坏454はⅤ期以降に位置付けられる。坏G蓋は口径9.5cm、器高2.3cmを測り、内面の返しを丁寧に仕上げる。441～443は坏蓋である。441は口径16.5cmを測り、口縁端部を直下に折り曲げる。442の口縁端部は比較的大振りである。扁平な443はボタン状の鈕を貼り付け、天井部内面は使用に伴い平滑となる。444～447は有台坏である。焼成堅緻な444は口径14.1cm、器高5.6cmを測り、体部はゆるやかに外反する。445は肉厚の底部が突出し、Ⅱ<sub>3</sub>期に位置付けられる。底部外面中央に墨痕が残るものの文字は判読できない。扁平な446は焼成堅緻で、小振りな台部を外展気味につける。深身・肉厚の447は口径14.3cm、器高6.2cmを測る。448～454は無台坏である。448は焼きゆがみのため、底部が突出する。449は底部外面に墨書が残り、つくりは「ム」にみえる。450の内面は底部から体部になだらかに移行し、底部外面に薄く墨書が残るが判読できない。やや厚手の451は、口径12.6cm、器高3.3cmを測る。452の底部外面に記された墨書は、墨が薄く判読できない。453の墨書は「乙□(上カ)」、454の墨書は「梗女」と判読できる。451はⅢ期、448はⅣ<sub>1</sub>期、449・452・453はⅣ<sub>2</sub>(新)期、450がⅤ<sub>1</sub>期、454がⅤ<sub>2</sub>期に位置付けられる。第130図455は胴径約47cmを測る甕で、外面は平行叩きで整形するが、木目が浮き出すため格子状の叩きにみえる。

第3層(左岸(南肩部)濁黒灰～灰色砂質土)からは、Ⅱ<sub>2</sub>～Ⅳ<sub>1</sub>期を主体とする遺物が比較的まとまって出土した。第130図456は縄文土器深鉢で、口径約25cmを測る。458は弥生時代末の赤彩台付鉢、457は古墳時代前期の器台と考えられる。459～484は多様な形態・技法をもつ土師器埴類で、467～473・475・477・478はロクロ土師器である。459は口径約16cm、器高5.5cmを測る。内外面に丁寧なミガ

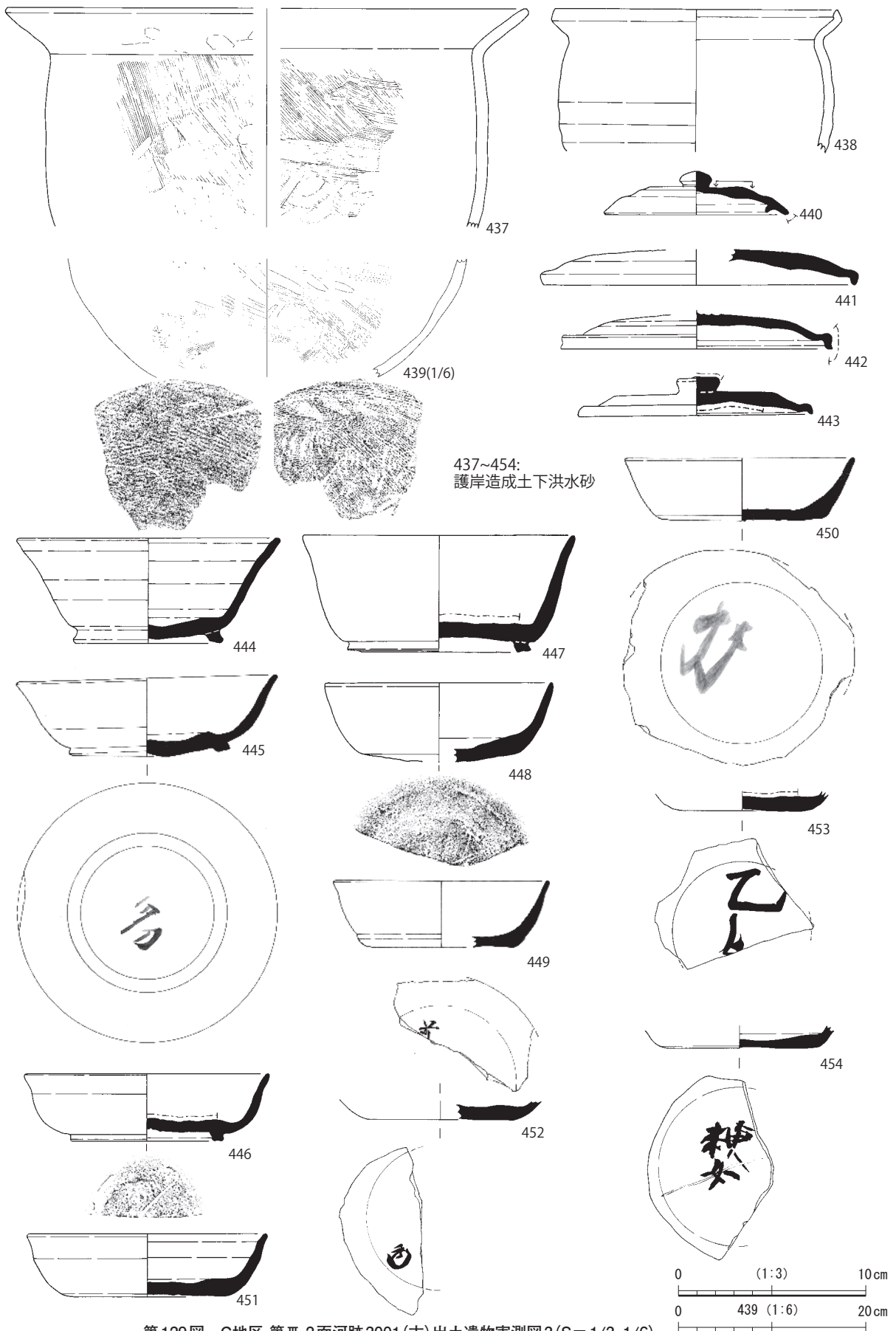


405 ~ 425: 北肩部護岸造成土

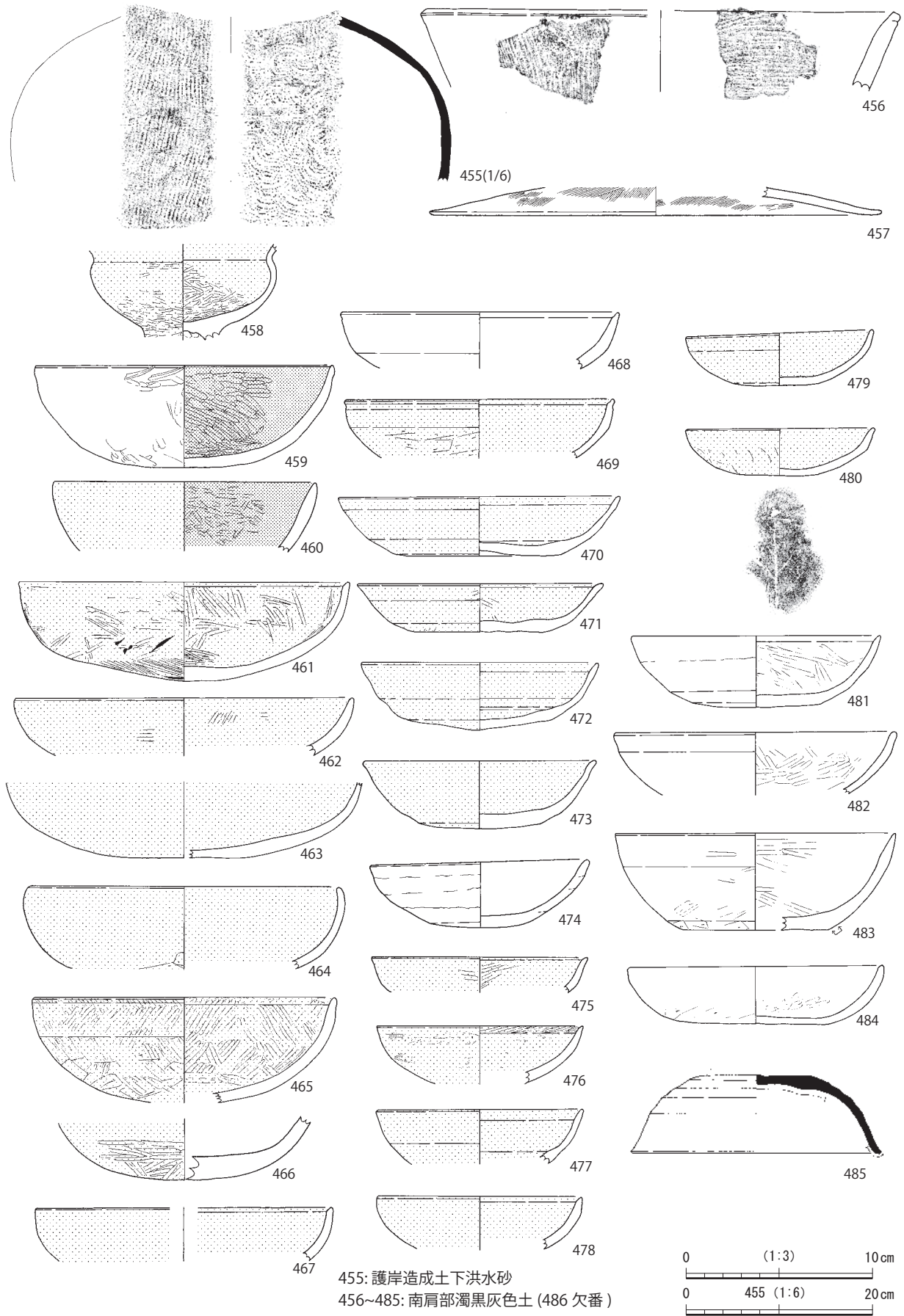
第127図 G地区 第三-2面河跡3001(古)出土遺物実測図1(S=1/3)



第128図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)

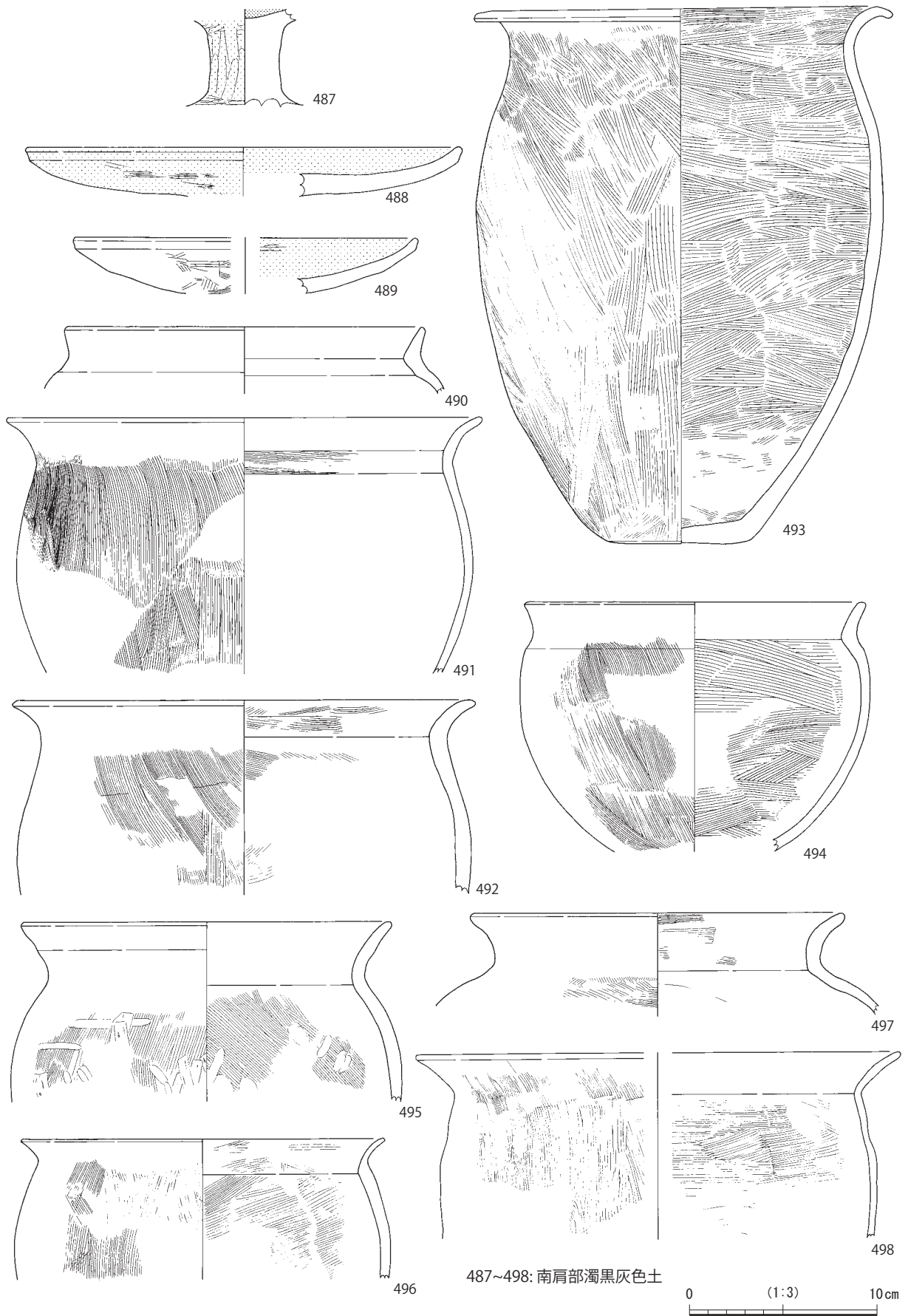


第129図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図3(S=1/3・1/6)

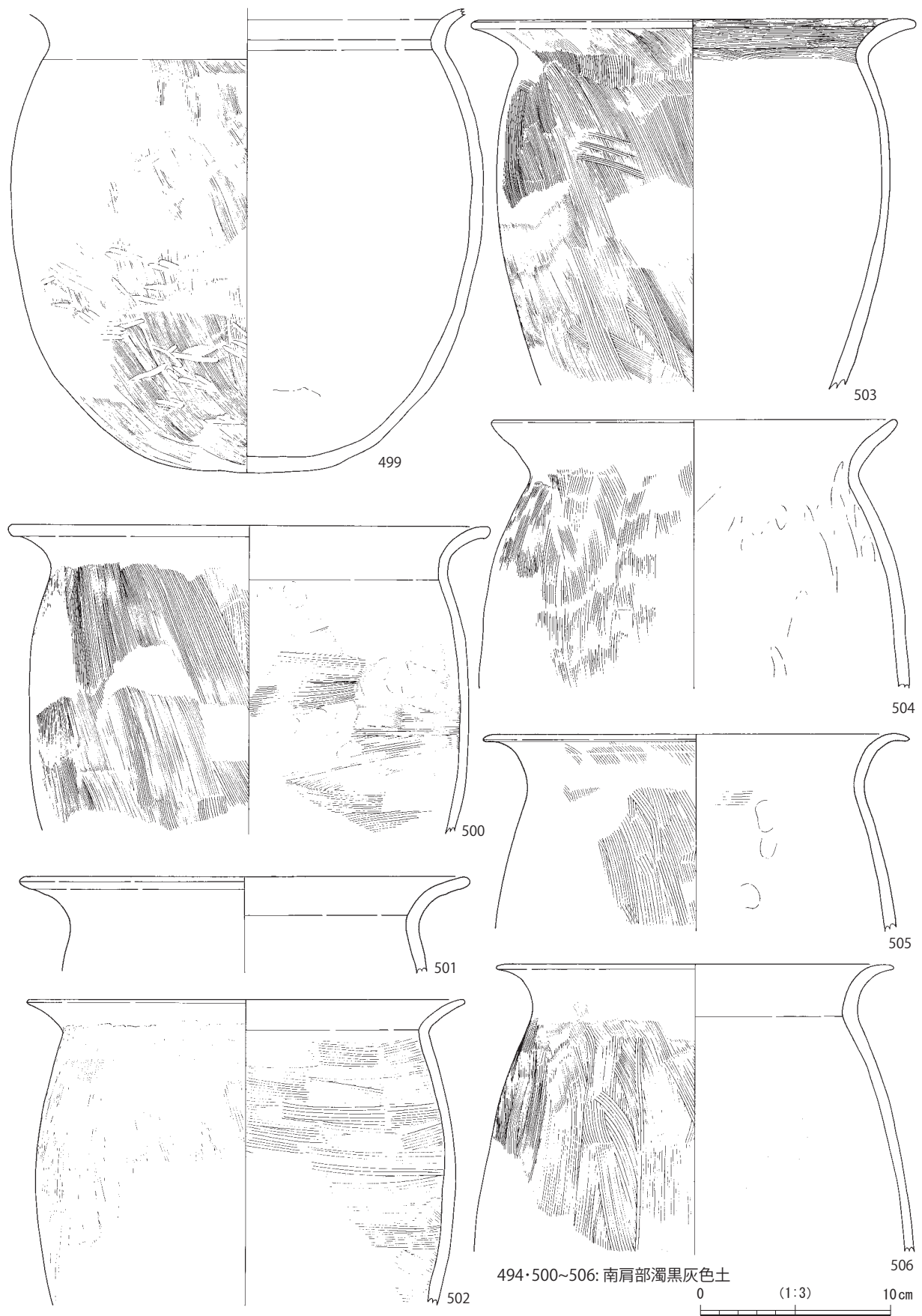


第128図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)





第131図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図5(S=1/3)

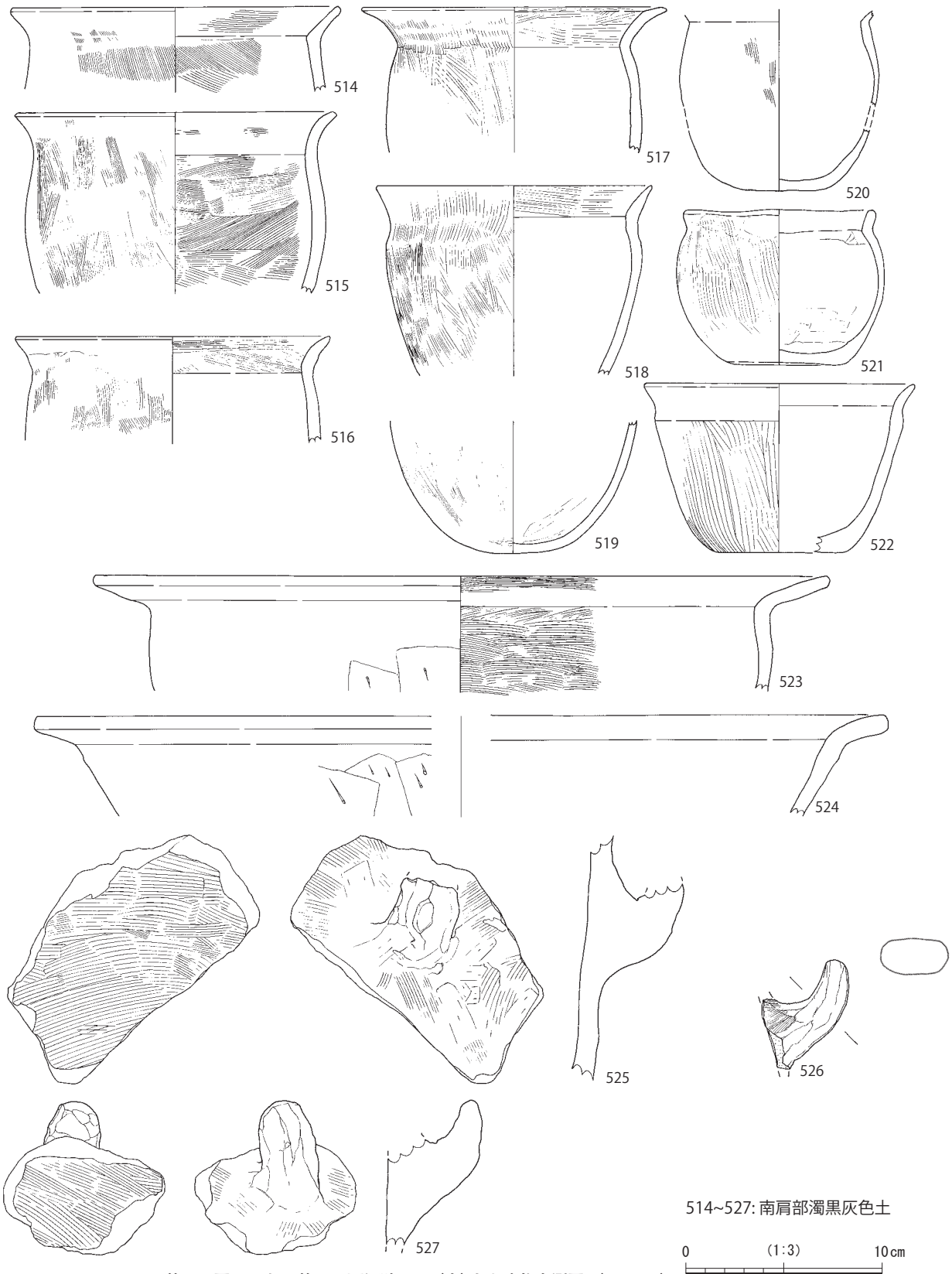


第132図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図6(S=1/3)



507~513: 南肩部濁黒灰色土

第133図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図7(S=1/3)

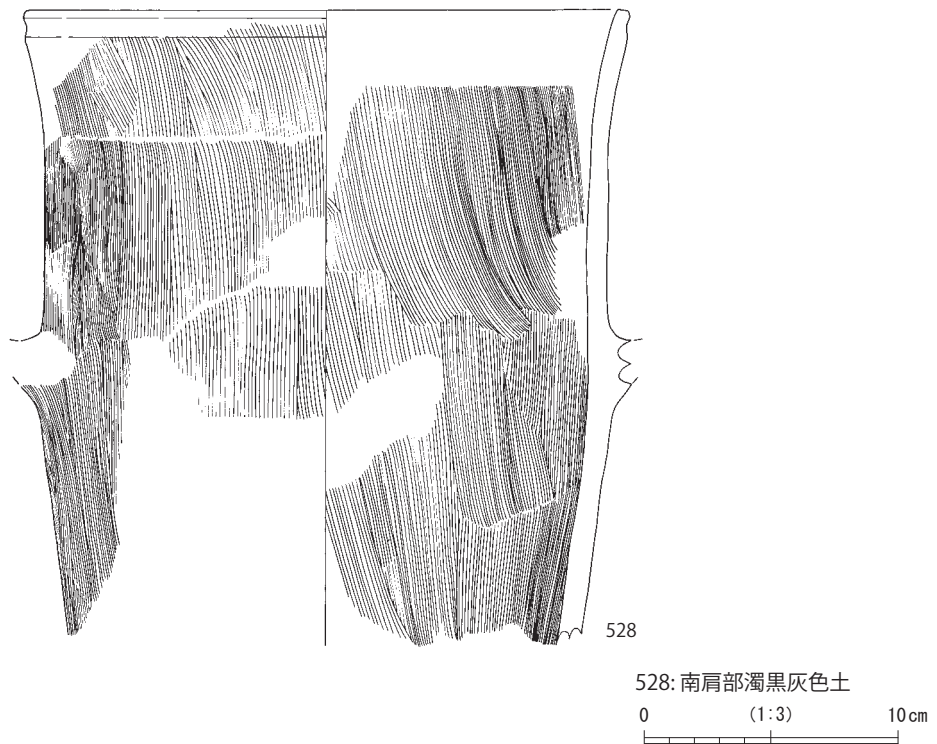


第134図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図8(S=1/3)

キ調整を施した後、内面に黒色処理を施す。厚手の460は内面に黒色処理、外面に赤彩を行う。461～465は、非ロクロ成形の両面赤彩埴類で、口径16～20cmを測る。461は口径17.6cm、器高5.3cmを測り、口縁端部は内傾した面をもつ。体部外面数ヶ所にかすかに墨痕が残る。463は口径20cm前後に復

元できる大型品である。464の口縁部は内湾する。465は口径16.1cm、器高5.7cmを測り、口縁端部で小さく外反する。厚手の466は、磨滅が著しいが内面も赤彩と考えられる。ロクロ土師器467～469は内外面とも赤彩し、口縁端部に内傾した面をもつ。468は内外面とも二次被熱し、煤が付着する。両面赤彩のロクロ土師器壺470～473は、体部は大きく外傾するため皿形に近い印象を受ける。底部外面を回転ヘラ切り痕が残り、470が口径15.0cm、器高3.1cmを、471が口径13.0cm、器高2.6cmを、473が口径12.3cm、器高3.6cmを測る。非ロクロ成形の474は粘土紐の積上げ痕をほぼ残し、内外面とも赤彩を施した可能性が高い。両面赤彩の475～478は口径11cm前後を測り、非ロクロ成形の476のみミガキ調整後、内傾する口縁端部にハケ調整を加える。非ロクロ成形の479・480は口径約10cmを測り、体部中程で屈曲する。両面ともヨコナデ後に赤彩を施す。また、480の底部外面には、成形時に敷いた葉の葉脈痕が明瞭に残る。非ロクロ成形・未赤彩の壺481～484は、ミガキ調整と手持ちケズリ調整を行う点で共通する。481が口径13.3cm、器高3.8cmを、深身・平底の483が口径14.8cm、器高5.2cmを、皿形に近い484が口径13.4cm、器高3.1cmを測る。485は須恵器坏H蓋と考えられる。第131図487～489は、非ロクロ成形の高坏である。487が内面に黒色処理、外面に赤彩を施すのに対して、赤彩を施す488・489は外面にハケ調整が残る。

第131図490～第134図522は、非ロクロ土師器甕類で、硬質の質感をもち、口縁部が外反しながら比較的長くのびる個体(491、492、502～507、515等)が目立ち、近江系甕の影響を受けた器形の可能性をもつ<sup>(8)</sup>。短頸で壺形に近い490は口径18.9cmを測り、煮炊きに伴い内面にヨゴレ、外面に煤が付着する。球胴形を呈する491は、頸部内面の整形にハケを用いる。492は口径24.0cmを測る。平底の493は口径22.3cm、器高28.6cmを測り、底部外面を指ナデで整形する。小型・球胴形の494は口径17.8cmを測り、内外面でハケ原体が異なる。496の口縁部は薄手で、短く外反する。497は球胴形を呈する。薄手の498は頸部で明瞭に屈曲し、内外面に同じ原体を用いてハケ調整を施す。第132図499は内面をナデで整形する。500は口径25.2cmを測り、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが明瞭に残る。502～507は硬質



第135図 G地区 第三-2面河跡3001(古)出土遺物実測図9(S=1/3)

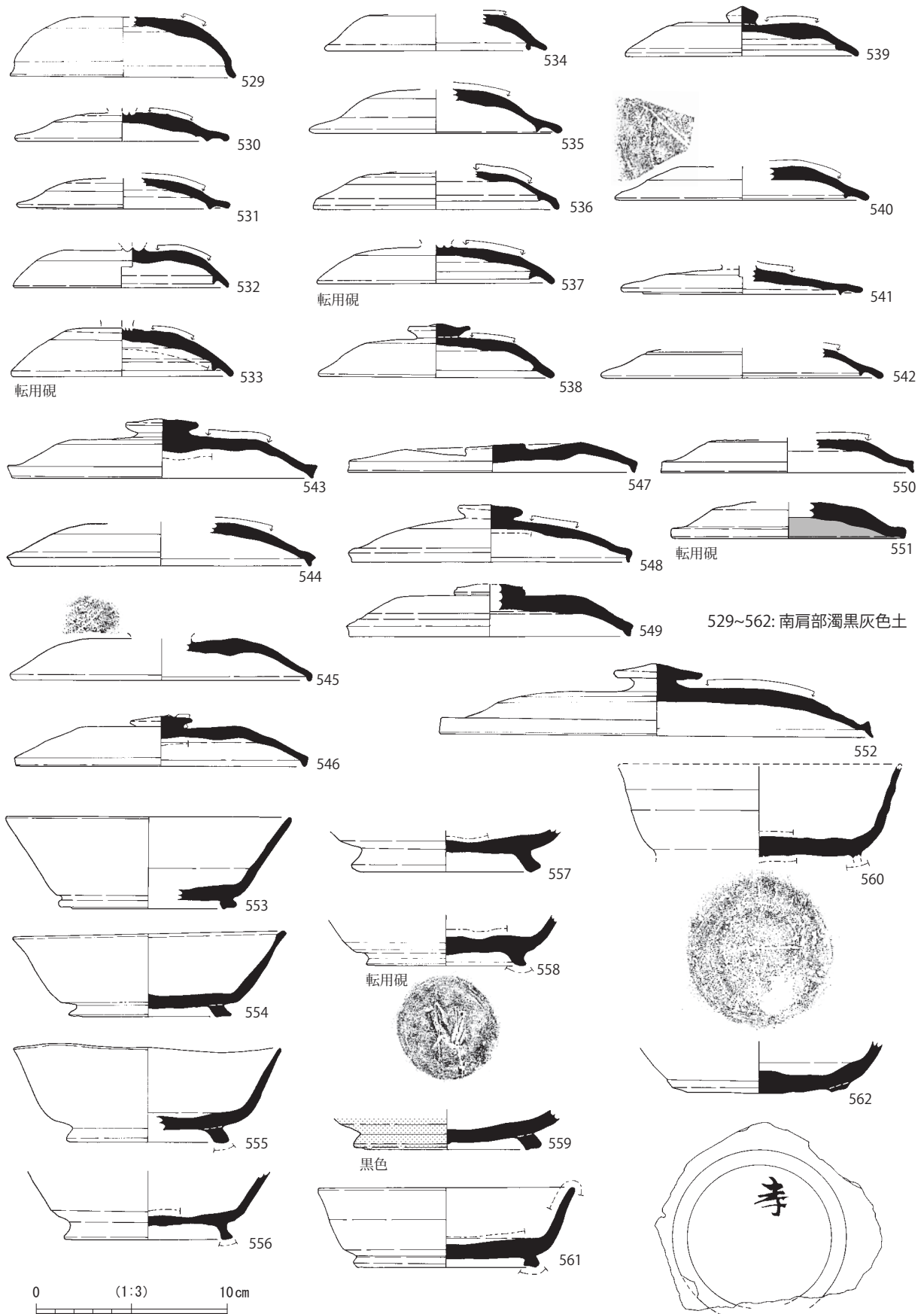
の質感をもつ。502・503が胴部上位に胴部最大径をもつものに対して、504～507はナデ肩気味で口縁部内面にハケ調整を施す。丸底の510は内外面でハケ調整の原体が異なる。厚手の511は口径18.2cmを測り、張りのない胴部外面に粗いハケ調整を施す。512は口径21.6cmを測り、口縁部は有段状に屈曲する。胴部上半には縦方向のハケ調整の後にカキメ状を呈する横方向のハケ調整を加える。

第133図513～第134図520は、口径約14～16cmを測る小甕である。球胴形を呈する513は口径15.0cmを測り、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが明瞭に付着する。第134図514は頸部で明瞭に屈曲し、細かい単位のハケ調整を施す。515は硬質の質感をもち、516とともに頸部の屈曲が弱い。517はハケを用いて、口縁部を大きく外反させる。518は口径13.8cmを測り、内面全体に黒褐色炭化物が付着する。519は破損後に二次被熱に伴う煤が付着する。521は口径9.5cm、器高7.9cmを測り、短い口縁部をつける。底部内面の整形に板状工具を用いる。平鉢形を呈する522は口径13.8cm、器高8.6cmを測る。外面に粗いハケ調整を施し、胎土にシャモットが多く混ざる。

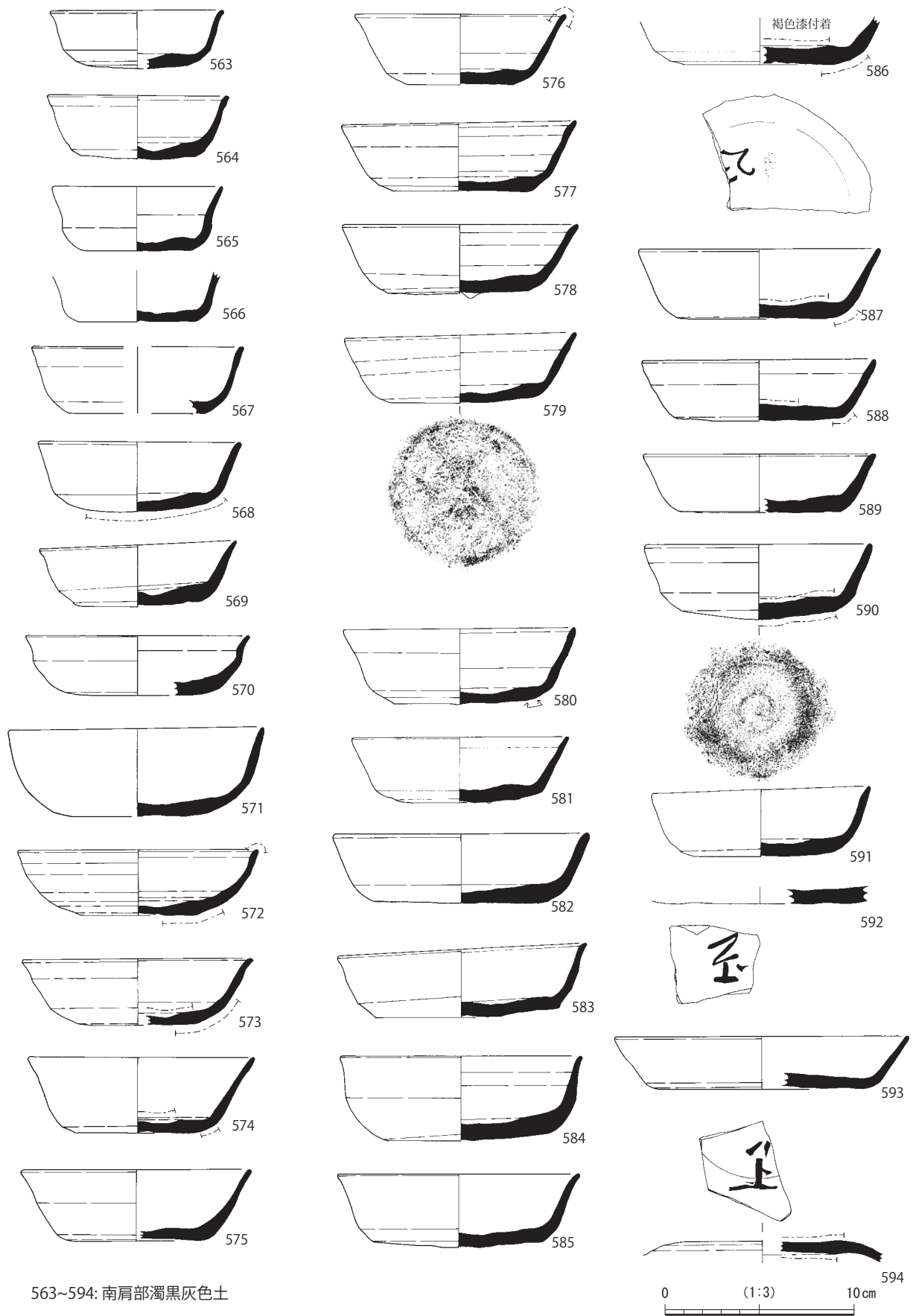
第134図523は非ロクロ成形の埜で、口縁部部を大きく折り曲げる。524はロクロ成形の埜で、口径約43cmに復元できる。525～527は甌類の把手片で、整形は丁寧である。第135図528は寸胴形を呈する甌で、口径23.4cmを測る。口縁端部を平坦に仕上げ、欠損する把手は幅約7cmを測る。

第136図529～第139図602は須恵器であり、Ⅱ<sub>2</sub>～Ⅳ<sub>1</sub>期の比較的時期にまとまりをもつ土器群の他、Ⅴ<sub>2</sub>～Ⅵ<sub>1</sub>期に位置付けられる坏蓋551、無台盤593が出土している。坏H蓋529は口径11.4cm、器高3.2cmを測り、焼成があまいため外面は黒化する。第130図485等とともに、調査区周辺地における集落域の展開を示唆するものといえる。530～542は坏G蓋で口径は10.8～11.4cm、12.0～13.0cm、14.4cmに分かれ、前2者が主体をなす。全形のわかる538が口径12.1cm、器高2.8cmを、539が口径12.0cm、器高2.6cmを測る。内面の返しは断面三角形状に退化した個体が多く、返し径は9～11cm代に中心をもつ。また、533・537が天井部内面を硯面に転用しており(写真図版52)、第145図689を含めて、県内でも古い段階の転用硯の事例となる。543～551は口縁端部を折り返す坏蓋である。543・544は口径15.5cmを測り、面取りの鋭い口縁端部に仕上げる。543は径3.9cmを測る大振り鈕を貼り付ける。545～547は口径約15cmを測り、口縁端部を下方に小さく折り曲げる。545の肩部外面に焼成前のヘラ記号が残る。薄手の548は口縁端部をしっかりと下方にのばし、天井部内面には摩耗が認められる。厚手の549は口径14.7cm、器高2.8cmを測り、天井部外面は回転ヘラ切り後に粗いナデ調整を施す。550は口径13.1cmを測り、口縁端部をしっかりと面取りする。厚手の551は口径11.9cmを測る。天井部内面の摩耗と墨痕から転用硯となる。有台盤の蓋552は口径22.8cm、器高3.7cm、鈕径4.6cmを測る精製品で、天井部内面にカキメ調整を加える。鈕の形状は543と類似する。553～562は有台坏である。553～558は口径13.8～14.8cm、器高4.5～5.0cmを測り、大きく外傾する体部と、背の高い台部が強く外展する点で共通する。554・555・558は同胎土で、焼成時に小さな焼きぶくれが多出する。また、558は底部両面に墨痕が残り、摩耗する内面は硯面に、摩耗のない外面を墨溜めに転用したと考えられる。559は第213図1026とともに還元焼成後に、外面全体を黒色処理する特殊品である。断面方形を呈する台部はしっかりと外側に踏ん張る。深身の560は、台部欠損後も使用した磨耗痕を残す。扁平な561は口径13.3cm、器高4.1cmを測り、使用に伴う摩耗が顕著である。562は低い台部を外寄りに貼り付け、還元は弱い。底部外面上方に「寺」と墨書しており、Ⅳ<sub>1</sub>期に位置付けられる。

第137図563～569は坏G身で、568を除き有蓋焼成である。563が口径9.0cm、器高3.1cm、568が口径10.6cm、器高3.7cm、570が口径11.7cm、器高3.2cmを測る。566は器面に黒色を呈する小さな吹き出しが目立つ。567は焼きゆがみ、569は554等と同様に小さな焼きぶくれが多出する。埜570は口径11.7cm、器高3.2cmを測り、体部中程で屈曲する。無蓋の埜571は口径13.3cm、器高4.7cmを測る。胎



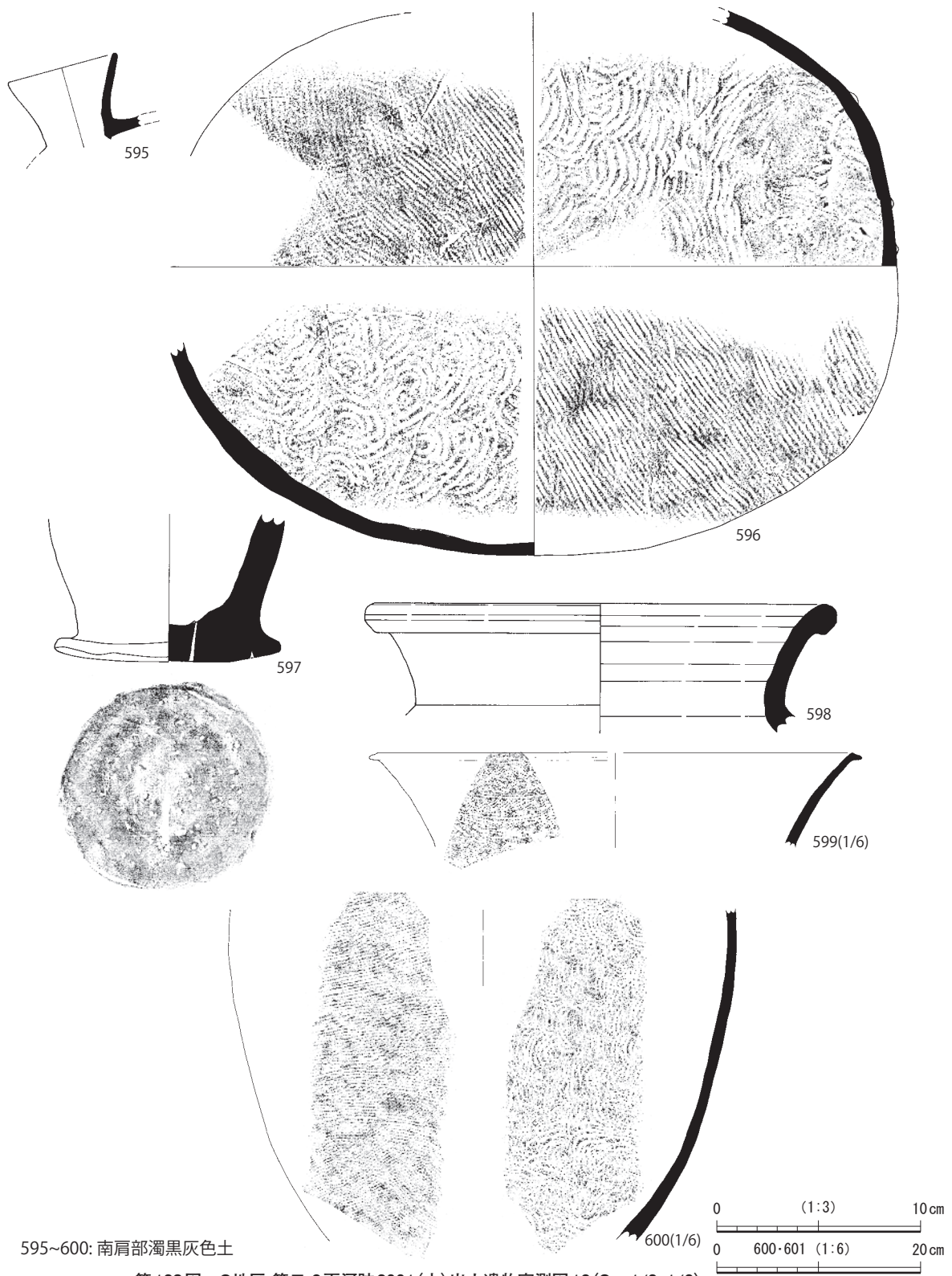
第136図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図10(S=1/3)



563~594: 南肩部濁黒灰色土

第137図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図11(S=1/3)

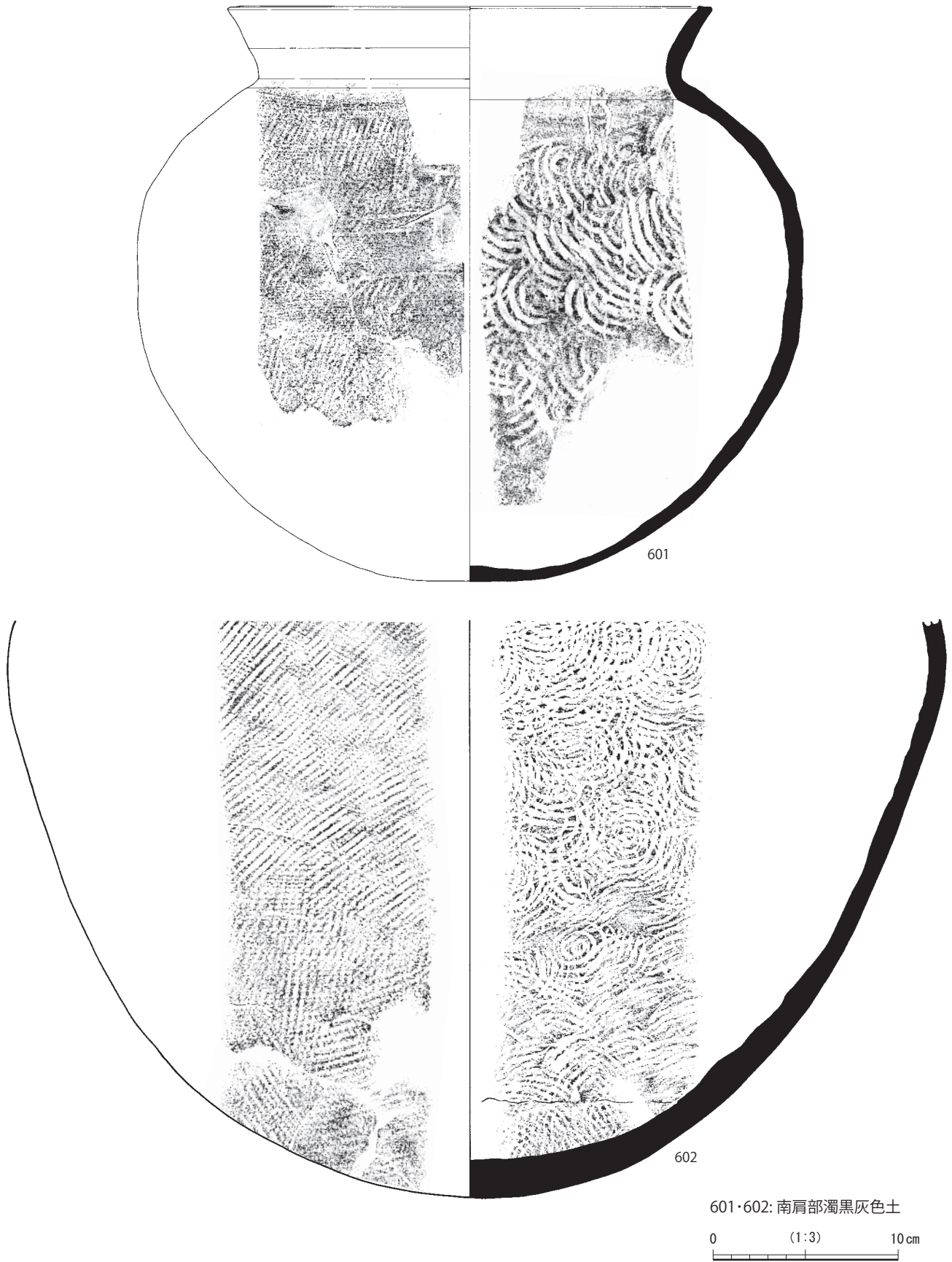




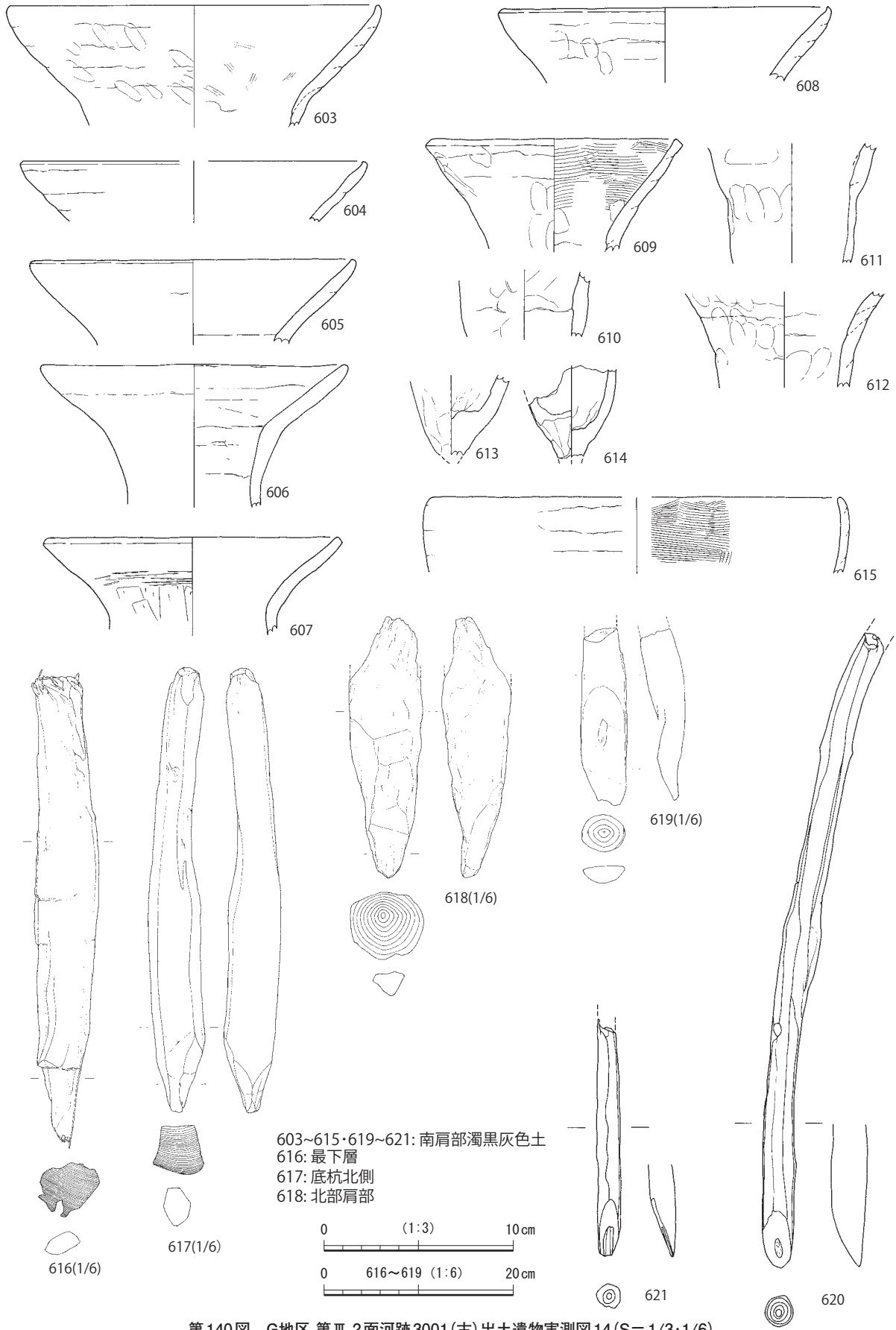
595~600: 南肩部濁黒灰色土

第138図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図12(S=1/3・1/6)

土は精良で底部外面に丁寧なナデ調整を加える。572は使用痕跡から身としたが、坏H蓋の可能性が高い。573～592は無台坏である。573は碗形に近く、体部はなだらかに外傾する。574～576は口径11～12cm台を測り、比較的小さい底部から外傾しながら体部がたちあがる。574・576は、554等と同様に焼成時の小さな焼きぶくれが多出する。577～579は口径12cm強、器高約3.6cmを測り、完形の578は底部内面に淡茶色を呈する漆が付着する(写真図版53)。やや身の深い580は、底部外面に火だすき



第139図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図13(S=1/3)



第140図 G地区 第三-2面河跡3001(古)出土遺物実測図14(S=1/3・1/6)

痕が明瞭に残る。581は底部内面外寄りに焼成前にヘラ記号「×」を刻む。582・583は口径13cm強を測る。582は被熱のため、外面が軟質となる。583は焼成時に小さな焼きぶくれが多出する。厚手の584は口径12.8cm、器高4.4cmを測り、体部は直立に近い。586は底部外面に墨書「乙□(上カ)」と褐色の漆が残る他、底部内面が使用に伴い平滑となる。Ⅳ<sub>1</sub>期と考えられる。587は内外面とも煤が付着し、煮沸容器への転用が想定できる。588・589は口径約12cm、器高3cm強を測る。やや深身の590は使用に伴い底部が平滑となる。591は底部内面に「×」と焼成前に刻む。592は底部外面に「乙上」と墨書し、Ⅳ<sub>1</sub>期と考えられる。無台盤593は口径15.4cm、器高2.7cmを測り、体部は直線的に外傾する。坏蓋594は肩部に「□上」と墨書し、1文字目は筆跡から「乙」以外の文字の可能性をもつ。

第138図595は平瓶口縁部で、胴部との接合部に閉塞円盤が残る。横瓶596は1ヶ所に残る閉塞円盤の段差を叩きによりなめらかきに仕上げる。厚底鉢597は、底部外面からの刺突が深く、2ヶ所の刺突は内面に達する。内面の焼きぶくれのためか、使用に伴う摩耗はほとんど確認でない。598～602は甕である。厚手の598は口径22.0cmを測り、口縁端部を丸く仕上げる。胎土に非常に多くの粗砂が混ざる。599は口径約47cmを測る大型品で、外面をカキメと波状文で加飾する。600は胴径約50cmを測る。第139図601は球胴を呈する軟質の甕で、口径26.0cm、器高31.0cmを測る。焼成は甘く、色調は内面が暗灰～黒色を、外面が黄灰～灰色を呈する。底部外面は使用に伴い平滑となる。

第140図603～614は尖底の製塩土器で、比較的硬質の質感をもつ。口径は、603～608が15～19cm台、609が12.8cmを測る。603は、上から1～4段目と5段目以下で胎土が異なり、後者には赤色粒が多く混ざる。607は胴部内面を縦方向にナデつけた際の板状工具痕のあたりが明瞭に残る。607・608は胎土に海綿骨針が混ざらない。609は口縁端部を平坦に仕上げ、内面にハケ調整を施す。613は軽い比重をもち、614とともに内面にシボリ痕が明瞭に認められる。615は口径約22cmの平底の製塩土器に復元したが、小片のため不安を残す。内面にハケ調整を施し、胎土に粗砂が多く混ざる。616～621は杭で、うち619～621は南肩部に打ち込まれた状況で出土した。樹種は、616・617がクリ、618がマツ属複雑管束亜属である。

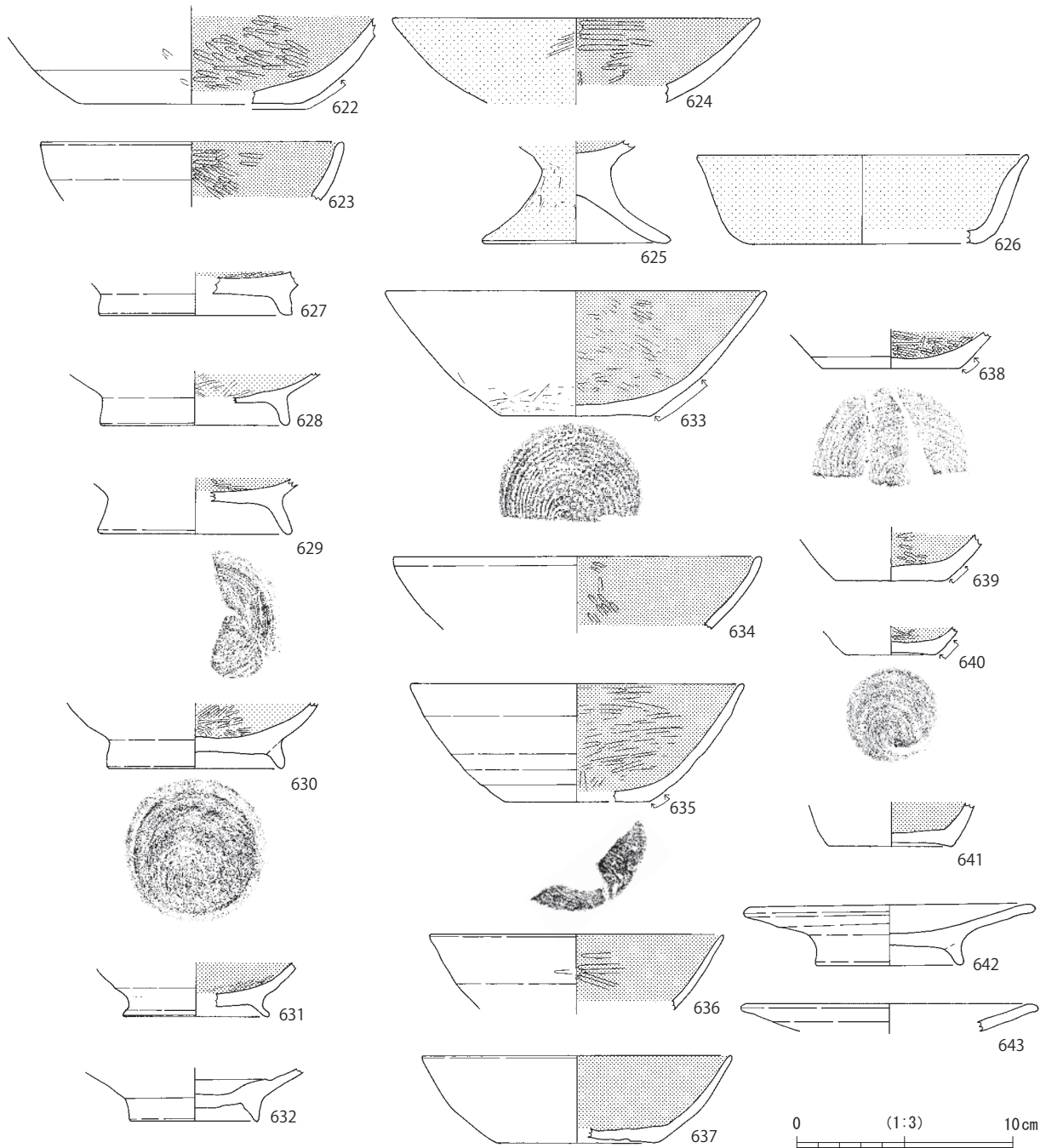
### 河跡3001(新)

第Ⅲ-2面で堤防・護岸・耕作地が造成された後、耕作地は一部(第114図耕作地a～c)が放棄、一部が水田(同図耕作地d：第Ⅲ-1面水田301～303)に転換する。護岸・堤防を維持した第Ⅲ-1面が土砂で埋没する段階での河跡の規模は、調査区南東壁(第124図断面a-a')で上幅約14m、下幅約9m、深さ約0.4m(最深部標高15.07m)、調査区中央付近(第125図断面c-c')で上幅約11m、下幅約6.6m、深さ0.7m(同14.80m)、調査区北西壁(第126図断面e-e')で上幅約18m、下幅約13.5m、深さ0.8m(同14.35m)を測り、下流側では左岸の浸食がより著しい。流入・堆積した土砂は、淡灰～灰白色または明茶色を呈するシルト・細砂・粗砂・砂利(第124図断面a-a'土層2～4、第125図断面e-e'土層1～8)を基本とし、河跡3001(古)のような大きな自然石は混ざらない。出土遺物は、第3節に記したとおりであり、土砂が流入・堆積した時期を直接的に示すものはない。

#### 4 包含層等出土遺物(第141～148図、第32～35表)

河跡3001以北で確認した第Ⅲ-2面包含層は、第Ⅲ-1面の水田耕作土でもあり、比較的多くの須恵器、土師器が出土している。第141図631・632の内面黒色有台碗が最も新しく位置付けられ、第Ⅲ-1面が土砂で埋没した時期の上限を示す。

第141図622～第144図688は土師器で、うち622～625は8世紀前半代に位置付けられる非ロクロ

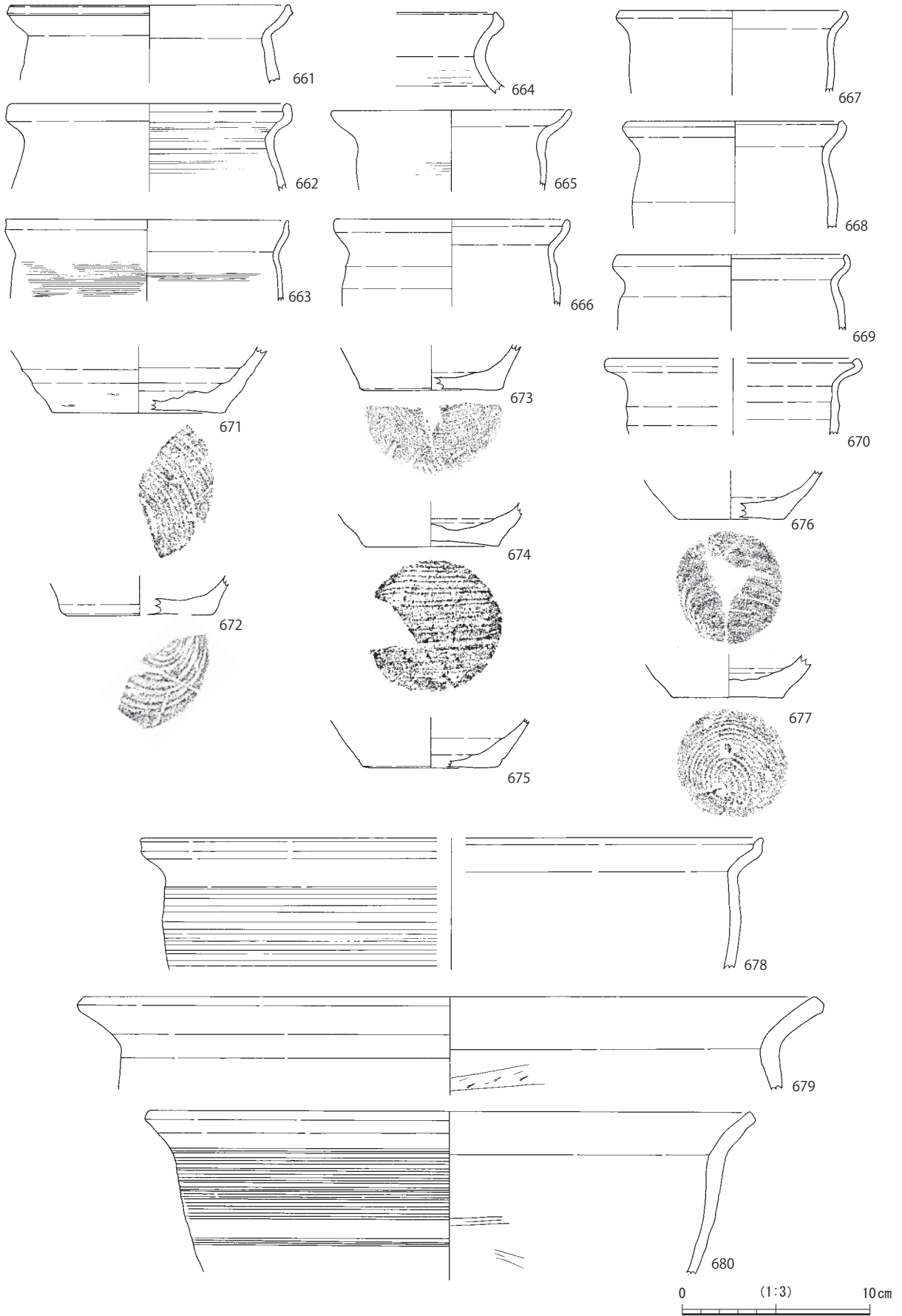


第141図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図1(S=1/3)

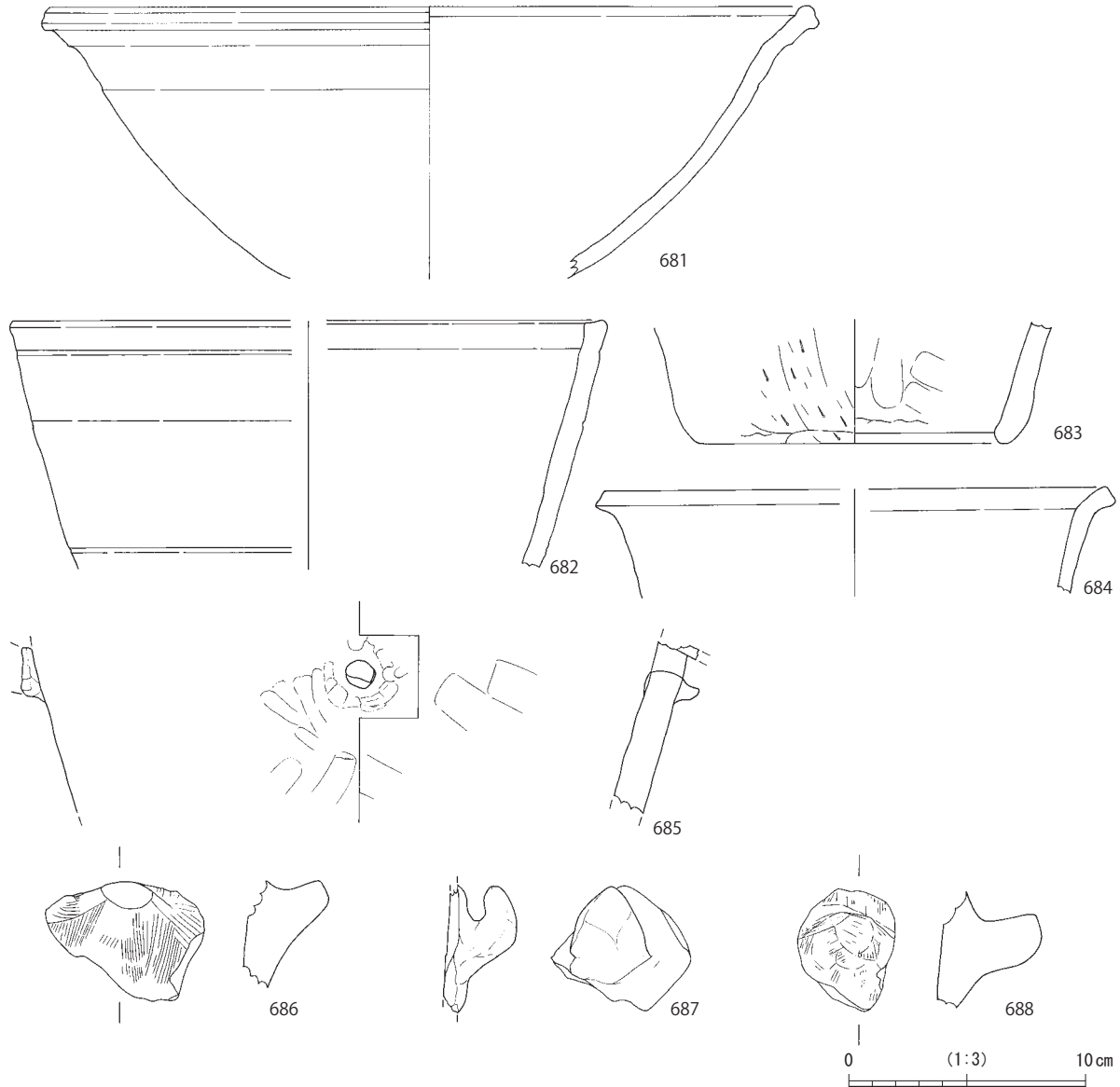
土師器である。622・623は内面黒色処理を施した埴で、内面に丁寧なミガキ調整を施す。622は底部周辺にケズリ調整を加える。高坏624・625は外面に赤彩、内面に内黒処理を施す。赤彩のロクロ土師器坏626は口径15.2cm、器高4.1cmを測り、先細る口縁端部は小さく外反する。ロクロ土師器627～643は、Ⅵ期以降に位置付けられる。627～632は有台埴で、632以外は内面に黒色処理を施す。627の台部は断面方形を呈するのに対し、628～630は端部を丸く仕上げた台部が比較的長く外展する。627はⅥ<sub>2</sub>期、628～630はⅥ<sub>3</sub>期に位置付けられる。631の台部は細長く外展する。632は底部に回転ヘラ切り痕をそのまま残す特殊品で台部は断面三角形を呈する。631・632はⅦ<sub>2</sub>期(10世紀後葉～11世紀前葉)に位置付けられる。633～640は内面黒色処理を施した無台埴である。633は口径17.4cm、器高5.8cm



第142図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図2(S=1/3)



第143図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図3(S=1/3)

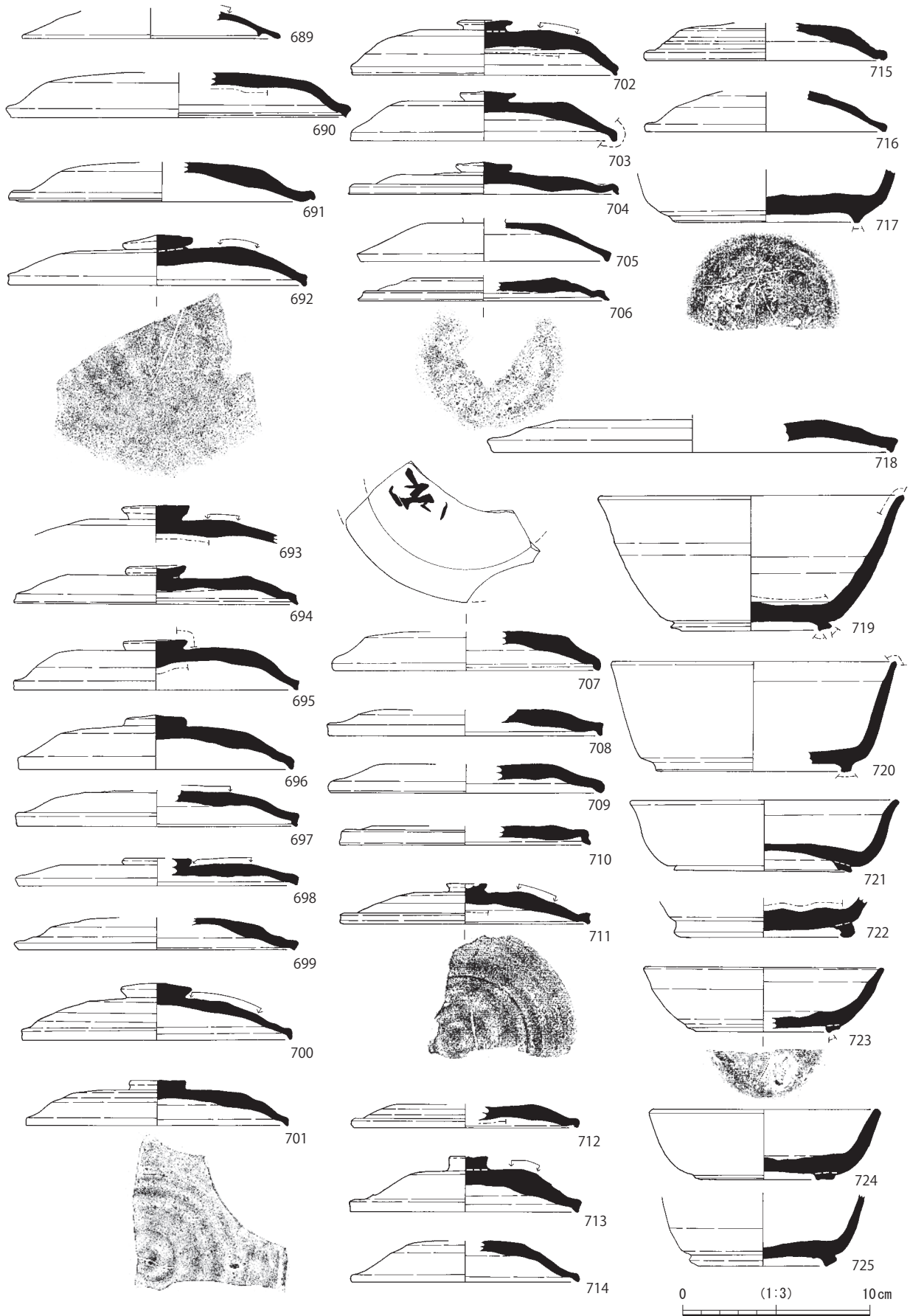


第144図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図4(S=1/3)

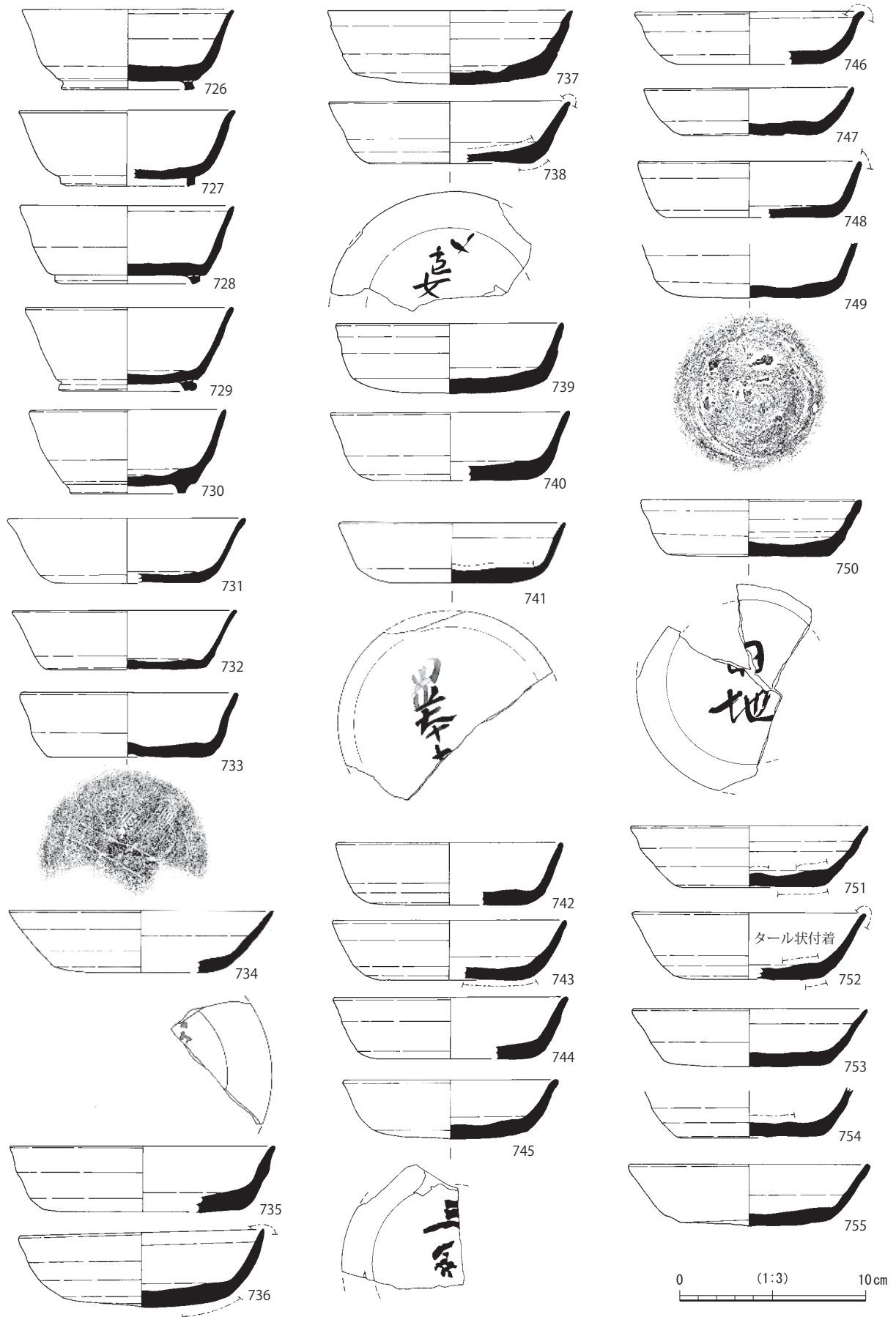
を測り、体部下半に横方向の丁寧なケズリ調整を加える。634の口縁部は内湾気味となる。635は口径15.1cm、器高5.4cmを測り、外面は橙色に発色する。薄手の636は口径13.5cmを測る。637は口径12.3cm、器高7.4cmを測り、黒色処理が不十分で口縁部付近は橙色を呈する。また、632と同様に底部外面に回転ヘラ切り痕をそのまま残す。638～640は内面に丁寧なミガキ調整、外面に横方向のケズリ調整を行う。641は体部の外傾具合が弱いことから小坏と考えられる。底部外面に丁寧なケズリ調整を施す。642・643は有台皿で、642が口径12.8cm、器高2.8cmを測る。642はVI<sub>3</sub>期に位置付けられる。

第142図644～677は土師器甕類で、煮炊き痕をそのまま残す個体が多い。644・645は非ロクロ成形である。小甕644は口径12.0cmを測り、胴部は球胴形を呈する。645は硬質な質感をもち、頸部で明瞭に屈曲する。646～659は口径19～22cm前後を測るロクロ成形の長甕で、646～651・655の口縁端部が断面三角形状を呈するのに対して、薄手の652～654の口縁端部は内屈、656～658の口縁部は屈曲しながら立ち上がる。また、653は内面に扇形当て具、外面に平行叩き具を用いて整形する。659は口縁端部を丸く仕上げる。660は口径17.0cm、器高約16cmに復元でき、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが明瞭に付着する。第143図661～663は口径15cm前後を測り、薄手の663は口縁部が直立する。664は小片の





第145図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図5(S=1/3)



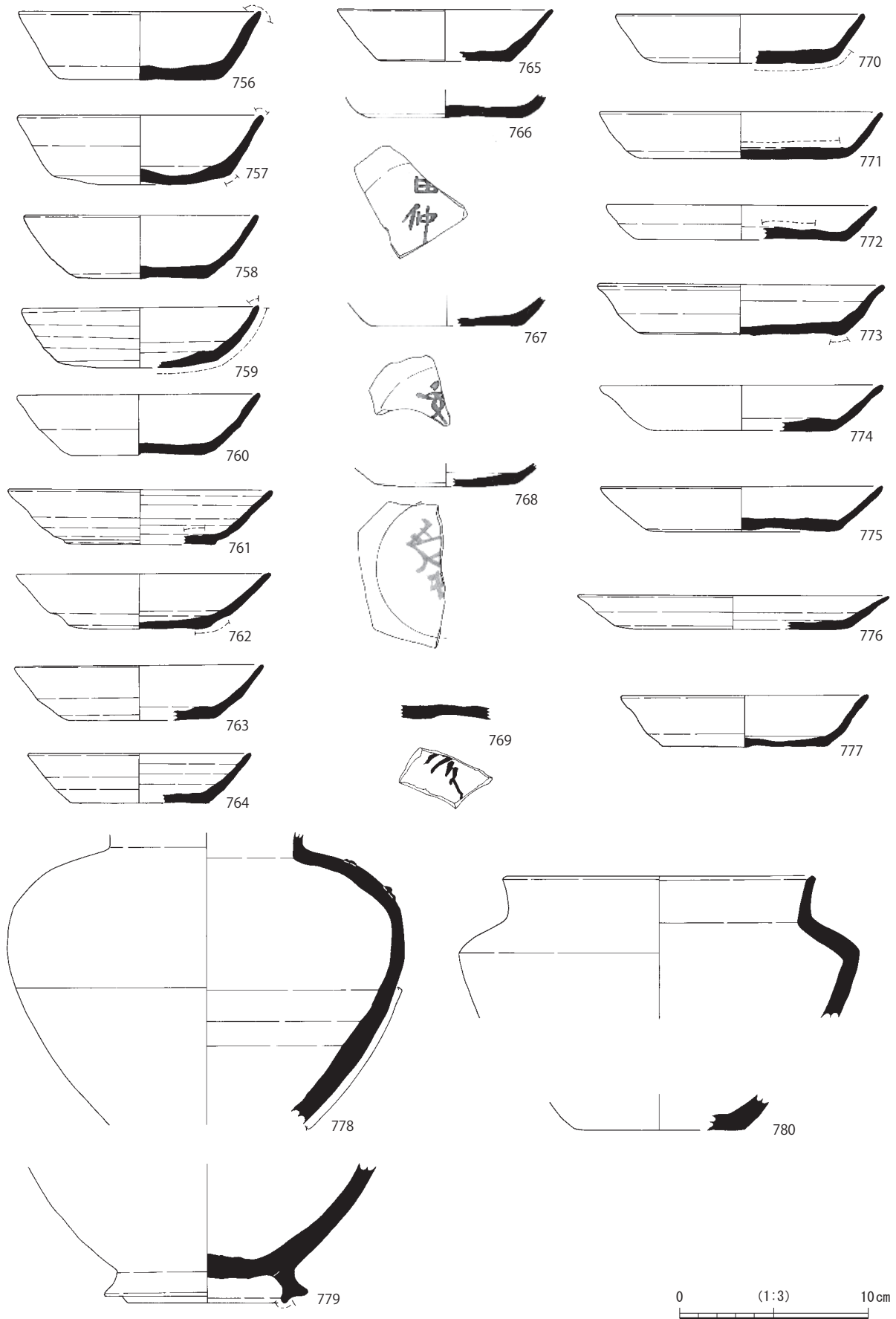
第146図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図6(S=1/3)

ため傾きに不安を残す。665～670は口径12cm前後を測り、口縁部は丸く仕上げるもの(665・666)、断面三角形を呈するもの(667)、内屈気味のもの(668～670)が認められる。671～677は底部片で、671は胴部外面下端に横方向のケズリ調整を加える。また、674・676は静止糸切り痕をそのまま残す。第143図678～第144図681はロクロ成形の埴である。678は口径約33cmに復元できる。679は口縁端部を平坦に面取りし、内面に炭化物が付着する。681は口縁端部を丸く仕上げる。甑682は口径約25cmを、683は底径12.4cmを測る。684は甑類口縁部と考えられる。非ロクロ土師器685は器肉が厚く、用途不明の孔径約1.2cmを測る注口を穿つ。686～688は甑類把手で、686・688は端部を平坦に面取りする。

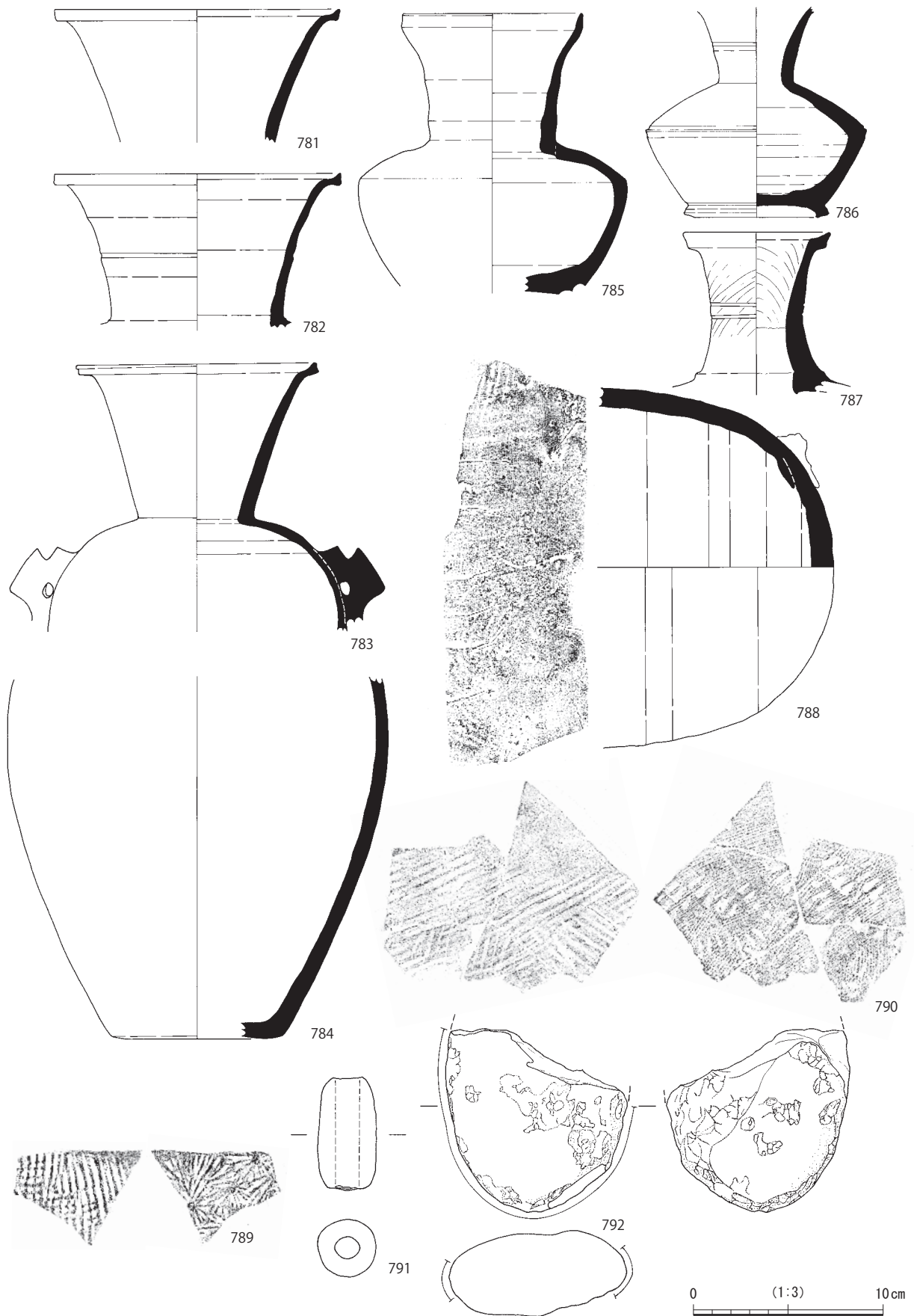
第145図689～第148図788は須恵器である。薄手の坏G蓋689は口径13.8cmを測り、天井部内面全体に墨様の黑色付着物が残る。690～716・718は坏蓋で、Ⅳ期に属する個体が主体を占める。690は口径17.8cmを測り、断面三角形を呈する口縁端部は面取りが鋭い。倒位で二次被熱し、外面には煤が付着する。691は口径16.2cmを測り、口縁端部を丸く仕上げる。692～695は口径15cm強を測り、径3cmを超える大型で扁平な鈕を付ける。696～699は口径15cm弱を測り、696・698は扁平でボタン状を呈する鈕を付ける。700～704は口径約14cmを測る。薄手の700は径3.8cmの大型鈕を付す。701の天井部は平坦面が広い。702の口縁端部はほとんど目立たず、天井部内面が使用に伴い摩耗する。703は堅緻に焼成される。704の胎土は粘質な質感をもち、焼成で扁平に変形する。薄手の705は口径13.2cmを測り、外面は降灰・自然釉の溶着が著しい。706は口径13.3cmを測り、焼成で扁平となる。厚手の707は広い天井部外面に判読不能の墨書が記され、Ⅵ<sub>2</sub>期に位置付けられる。708・709は口径14.4cmを測り、口縁端部は目立たない。710は大振り面で面取りのしっかりとした口縁端部をつける。711は口径12.9cm、器高2.1cmを測り、天井部内面は使用に伴い平滑となる。712は口縁端部を小さく折り曲げる。713はボタン状の鈕を付け、口縁端部は欠けが目立つ。714～716は口径12cm台を測り、Ⅵ期に位置付けられる。714の天井部は円盤状を呈する。715・716は口縁端部を丸く仕上げる。厚手の718は口径21.2cmを測り、口縁端部は断面三角形を呈する。

第145図717・719～第146図730は有台坏である。深身の719は口径15.9cm、器高7.2cmを測り、小さい台部が外展する。底部内面は使用に伴う摩耗が著しい。720の体部は直線的に立ち上がる。721は口径14.0cm、器高3.8cmを測り、体下部にふくらみを有する。722は使用に伴う摩耗痕と二次被熱痕が明瞭に残る。723は口径12.5cm、器高3.5cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がる。厚手の724は、扁平な台部を中心寄りに貼り付ける。725～729は口径11cm強、器高4cm強を測り、体部は直線的にのびる。うち、725は内面全体に煤が付着する。730は口径10.4cm、器高4.5cmを測り、台部を中心からずれて貼り付ける。

第146図731～第147図769は無台坏である。731・732の器肉は薄く、733は箱形を呈する。734は口径14.2cmを測り、体部は大きく外傾する。底部外面に判読できない墨書が記され、Ⅵ<sub>1</sub>期に位置付けられる。肉厚の735は口径14.2cm、器高3.5cmを測り、Ⅲ期に属すると考えられる。736の底部外面には摩耗と煤付着が認められる。737は煮沸容器に転用され、内外面に煤が付着する。738は底部外面に墨書が記され、一番下の文字は「女」と判読できる。Ⅳ<sub>1</sub>期と考えられる。深身の739・740は口径12cm台、器高3.5cm強を測る。741は底部内面が使用に伴い平滑となる他、底部外面に「罌本□(寺カ)」と墨書される。Ⅳ<sub>2</sub>(新)期に位置付けられ、「罌本」と記した墨書は宝達志水町杉野屋専光寺遺跡に類例をもつ<sup>(9)</sup>。742～744は口径12cm強、器高3.3cm前後を測り、743は使用に伴う摩耗が著しい。745は口径11.3cm、器高3.2cmを測り、口縁端部で小さく外反する。底部外面に崩れた字体で3文字の墨書が記され、「土万呂」の可能性をもつ。Ⅳ<sub>2</sub>(新)期に位置付けられる。746～748は扁平な印象を受け、749は外面に煤が付着する。750は煮沸容器に転用後、底部外面中央に「田地」と記す。Ⅳ<sub>2</sub>(新)期に位置付けられる。



第147図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図7(S=1/3)



第148図 G地区 第三-2面包含層出土遺物実測図8(S=1/3)

751～758の体部は、外傾しながら立ち上がり、V期の特徴を示す。752は口縁部内面にタール状付着物が残り、灯明容器に用いたと考えられる。755は焼成時の黒色吹き出しが目立つ。759～768はⅥ期に属する。759は生焼けで摩耗が著しく、760は焼成時の還元が弱い。薄手の761・762の底部は台状を呈する。762は煤の付着状況から灯明容器に転用された可能性が高い。764・765の体部は直線的に大きく開く。766～768は底部外面に墨書が残り、うち766は「□(田カ)仲」と判読できる。時期不明の769は底部外面に「□万呂」と墨書される。770～777は無台盤である。770は口径13.0cm、器高2.6cmを測り、底部外面が摩耗する。771・772の底部内面は、使用に伴い平滑となる。773～776の体部は大きく外傾し、776は口縁部に煤が付着する。薄手の777は口径12.9cm、器高2.7cmを測り、内面に火をくべた痕跡が残る。

第147図778～第148図788は壺・瓶類である。778は厚く溶着した自然釉の状況から正位無蓋での焼成が復元できる。779は内面にカキメ状の調整を施し、台端部は使用に伴い摩耗する。短頸壺780は口径16.2cmを測り、底部片も出土している。降灰の状況から無蓋器種となる。第148図781・782は口径約15cmを測り、782は沈線で加飾を行う。双耳瓶783は口径12.4cmを測り、幅約4mmの薄く丁寧に面取りした耳を付ける。784は正位で堅緻に焼成される。有台の785は口縁端部を直立気味に仕上げる。また、胴部を風船技法で成形しており、頸部に閉塞円盤の一部が残存する。小形瓶786は肩部と口縁部を沈線で加飾する。正位で焼成され、肩部に淡緑色の自然釉が溶着する。瓶787は成形時の回転で生じたシボリ痕が明瞭に残る。また、口縁端部には使用に伴う小さな欠けが連続する。横瓶788は横位で焼成しており、側面に焼き台片が溶着する。ロクロ土師器甕789の内面に放射状当て具痕が、埴790の内面に扇形当て具痕がそれぞれ確認できる。土師質の土鍾791は残存重量51.7gを測る。792は凝灰岩を用いた敲石と考えられ、側面に敲打痕が連続する。

#### 4 小 結

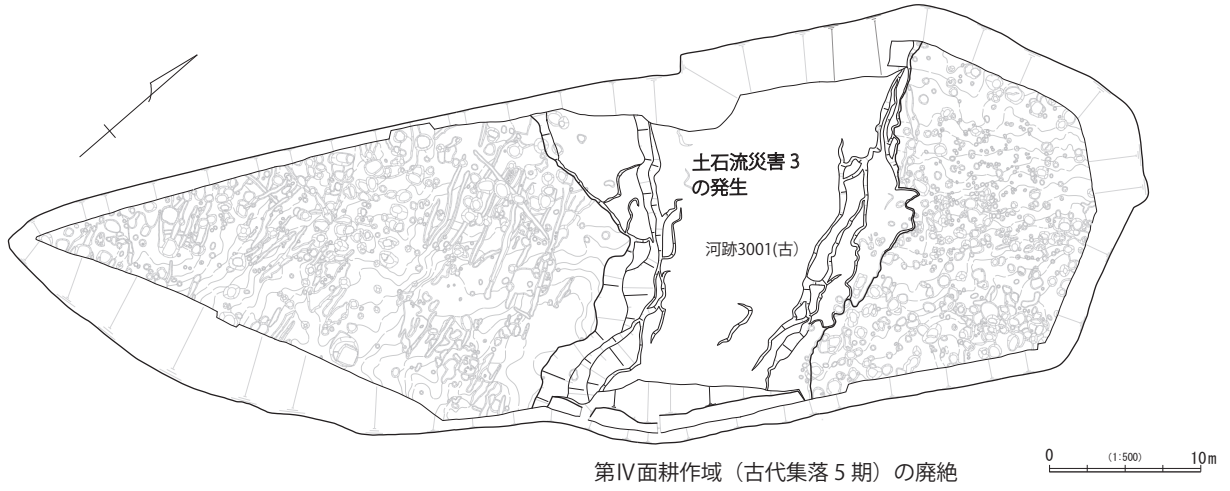
第Ⅲ-1・Ⅲ-2面で検出した遺構群の盛衰は、いずれも南東側丘陵斜面で発生したと考えられる大規模な土石流災害の影響を受けている。以下では、検出した大規模な土石流痕跡を、上層から土石流災害1(第0・Ⅰ面と第Ⅲ-1面の間に堆積、14世紀中頃に発生)、土石流災害2(第Ⅲ-1面上層に堆積、10世紀後葉～11世紀前葉(Ⅶ<sub>2</sub>期頃)に発生)、土石流災害3(第Ⅳ面を廃絶、10世紀初頭(Ⅵ<sub>2</sub>期)に発生)と、それぞれ呼称し、次の4小期に整理した(第149図)。

**土石流災害3** 第Ⅳ面最終小期(10世紀初頭(Ⅵ<sub>2</sub>期)に発生した土石流痕跡で、E～G-23～25区を南東方向から北西方向に一気に流れ下る。本流(河跡3001(古))の規模は、上幅約20～25m、下幅9～15m、深さ2.2m以上を測り、最も大きな自然石は1mを超える。流入した土石流は、右(北)岸側地表面を深く削り取る一方、左(南)岸側の開析作用は相対的に弱く、調査区に流入した土砂の一部が第Ⅳ面の緩斜面上に堆積する。なお、ほぼ同時期に発生したと考えられる土石流痕跡をA地区南端～E地区で確認している。

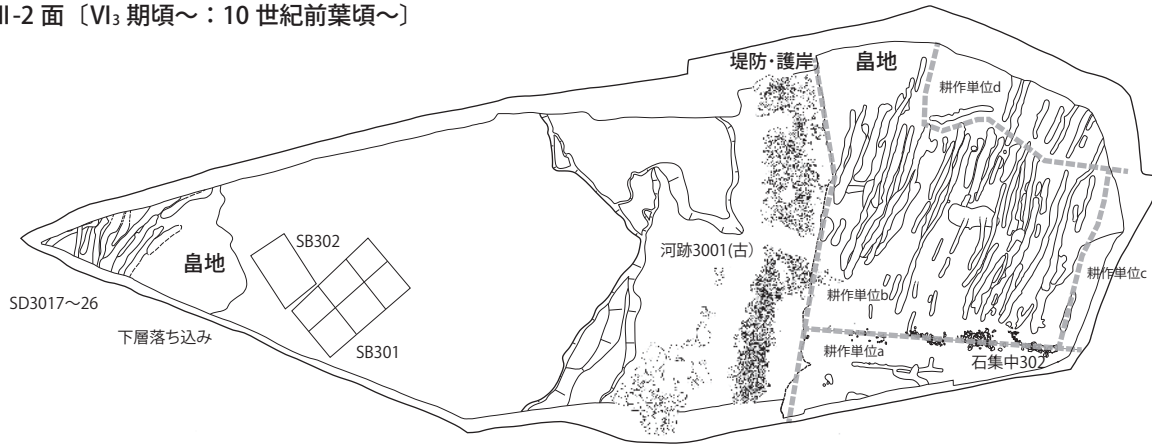
**第Ⅲ-2面** 災害に伴いG地区第Ⅳ面の集落域は放棄され、10世紀前葉(Ⅵ<sub>3</sub>期頃)に河川整備を伴った耕作地としての利用が始まる。河跡3001(古)右(北)岸では、護岸をもつ堤防と、堤防外(北)側に耕作地(畠地)が一体的に造成される。一方、河跡3001(古)左(南)岸は明確な河川整備痕跡は残存せず、細い杭が遺存する程度である。川岸より10m以上離れて小規模建物(SB301・302)が建ち、さらに南側緩斜面上にF地区に連続する耕作地(畠地：SD3017～26等)が展開する。

検出した堤防の規模は、延長約21m、上幅2.4～3.6m、下幅5.6～6m、高さ(北側の耕作地との標高差)約0.4mを測る。河跡肩部の護岸は、調査区周辺に存在する自然石を砂質土で押さえながら乱雑に積み上げたものであり、規模は幅2～3.5m、厚さ30～50cmを測る。石積みは、上流側約1/3が長軸10～

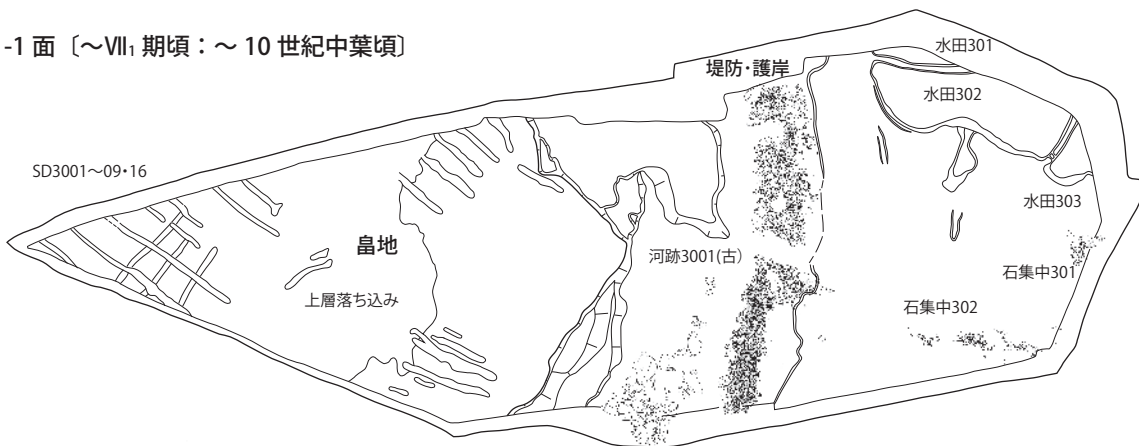
第IV面最終小期〔VI<sub>2</sub>期：10世紀初頭〕



第III-2面〔VI<sub>3</sub>期頃～：10世紀前葉頃～〕



第III-1面〔～VII<sub>1</sub>期頃：～10世紀中葉頃〕



土石流災害2の発生（第III-1面の埋没）〔VI<sub>2</sub>期頃：10世紀後葉～11世紀前葉〕

第149図 G地区 第Ⅲ面変遷案(S=1/500)

20cm程度の小振りな自然石を緩やかな勾配で積上げるのに対して、下流側約2/3は長軸40cmを超える大振りな自然石を混ぜながら急勾配で堅固に積み上げる傾向を示す。堤防北側の畠地は、一部に造成を伴いながら南南東方向から北北西方向に向かう緩斜面に展開する。耕作に伴う小溝群約60条は、地形の勾配に平行または直交して掘られ、小溝や石集中302等の配置から耕作単位は大きく4つに復元可能である(耕作単位a～d)。

河跡3001(古)左岸の建物は、総柱構造のSB301が3×2間(平面積27.7㎡)、側柱構造のSB302(同11.2㎡)と小規模であり、短期間のうちにSB302からSB301に建て替えられる。F地区第Ⅲ面で検出した施釉陶器を伴出する建物域の北端に位置するものの、やや離れることから短期的に単独して建てられた雑舎的用途をもった建物と考えるのが妥当であろう。F地区第Ⅲ面に連続する耕作に伴う小溝群(SD3017～26等)は、複数回の切り合い関係をもつ。

**第Ⅲ-1面** 第Ⅲ-2面で成立した耕作域は、10世紀中葉頃(Ⅶ<sub>1</sub>期頃が下限か)に河跡3001(古)北岸の畠地の一部が水田(水田301～303)に転化する一方、南岸の緩斜面は畠地としての利用を継続する。また、中央を流れる河跡3001(古)は、護岸を伴う堤防を維持する。水田は、第Ⅲ-2面の耕作単位dを継承する範囲に小規模区画3枚が占地する。水田301～303は、標高約15mの緩やかに屈曲する等高線に沿って配され、水田302で長さ約13.6m、幅4.1m以上(耕作面積約55㎡以上)を測る。用・排水施設は確認できず、主に地表に湧き出る水を低い畦畔を介して水田間を掛け流したと推測できる他、水田302の山側(南側)土手に土留めと考えられる自然石の集積を検出している。また、耕作土が10cm前後と比較的薄いこと等から、水田の造成～土石流災害2発生までの期間は比較的短い可能性が高い。水田301～303南側(第Ⅲ-2面耕作単位a～c)では、石集中302を含む畦畔の名残を部分的に確認しているが、耕作自体は放棄されたものと考えられる。

**土石流災害2** 10世紀後葉～11世紀前葉(Ⅶ<sub>2</sub>期頃)に発生した土石流災害2の発生に伴い、G地区の利用は一時的に放棄される。G地区で集落域が再展開するのは、第0・I面a小期として第2節で報告したとおり12世紀以降となる。土石流災害2の本流(河跡3001(新))の規模は検出面で上幅11～18m、下幅6.6～13.5m、深さ0.4～0.8mを測る他、G地区全体を15～75cmの厚さで被覆する大規模なものであったと考えられる。なお、12世紀以降に再展開した集落域は13世紀代に廃絶、調査区は14世紀中頃に発生した土石流災害1で埋没する。

【註】

- (8) 望月精司 2007「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落」『日本考古学 第23号』有限責任中間法人日本考古学協会
- (9) 上野 敬他 1998『杉野屋専光寺遺跡』志雄町教育委員会



第27表 G地区 第三-2面出土土器類観察表1

※ ( ) は残存量を示す。

検出 番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測 番号
117	354	F-25-3、 F-26-1・3	P3504、包含層	須恵器	坏蓋	12.7	-	(1.6)	淡灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後回転ケズリ	□3/36	整形口縁端部折り曲げ失敗。重ね焼き1類	H16D45
117	355	F-25-1、 F-26-3・4	SD3502・30、包含層	ロクロナ 土師器	壺	35.8	-	(6.4)	黄橙	黄橙	オ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	□12/36	外面煤付着	H16D15
117	356	F-25・26	SD3502・32・33、 包含層	ロクロナ 土師器	甔	36.8	22.0	(約35)	黄橙	黄橙	ア	良	ロクロナデ、 カキメ、ハケ	ロクロナデ、平行タ タキ、ハケ	□15/36	平行c類。孔径12.8cm	H16D17
117	357	F-26-2	SD3502、包含層	須恵器	坏蓋	16.4	-	(2.6)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後回転ケズリ	□6/36	重ね焼きIIb類	H16D19
117	358	F-26-2	SD3502、包含層	須恵器	有台坏	12.4	8.4	4.2	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、 回転ヘラ切り後ナデ	底24/36	外面黒化	H16D18
117	359	F-26-2	SD3502	須恵器	有台坏	-	8.8	(1.9)	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底9/36	外底墨書「□」	H16墨3
117	360	F-25-2・3、 F-26-2	SD3502・21、包含層	須恵器	無台坏	12.4	6.8	3.5	暗青灰	暗青灰	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	□12/36		H16D65
117	361	F-25-4、 F-26-3	SD3502、包含層	須恵器	無台壁	14.3	10.8	2.7	青灰	青灰	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底18/36	内底平滑	H16D78
117	362	F-26-2・3	SD3502、包含層	須恵器	無台壁	13.6	10.4	2.4	灰	灰	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底18/36		H16D76
117	363	F-26-3・4	SD3502、包含層	須恵器	無台壁	13.0	9.4	2.9	暗灰	暗灰	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	□16/36	外底ヘラ記号「J」	H17D409
118	364	F-25-4、 F-26-2、 F-26-1	SD3502、包含層	須恵器	短頸壺	8.0	-	(7.9)	淡灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	□12/36	外面降灰(正位有蓋焼成)	H16D3
118	365	F-26-2~4	SD3502、包含層	須恵器	長頸瓶	12.0	-	(9.0)	緑灰	緑灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□21/36	沈線2条。外面降灰	H17D407
118	366	F-26-3	SD3502	須恵器	短頸壺	-	10.7	(10.4)	暗灰	暗灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	底12/36	自然軸・降灰(正位無蓋焼成)	H17D406
118	367	F-26-3、 F-26-3	SD3502、包含層	須恵器	壺	約22.5	-	(3.7)	灰	オリーブ 灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□6/36	自然軸・降灰顕著(正位焼成)	H17D415
118	368	F-26-2・4	SD3503、包含層	須恵器	有台坏	15.6	9.1	5.7	淡灰	灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底30/36	外面黒化。天井部内面・高台端部平滑	H16D9
118	369	F-26-2・4	SD3503、包含層	須恵器	無台壁	13.8	10.0	2.4	淡灰黄褐	淡灰黄褐	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底15/36	内外底平滑	H16D10
118	370	F-26-2	SD3503	須恵器	差類	-	7.6	(4.7)	灰	暗灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底20/36	外面黒化	H17D410
118	371	F-24~26、 G-26	SD3503、河跡3001 (古)護岸、包含層	須恵器	壺	22.8	-	(13.7)	淡灰	淡灰	d	並	ロクロナデ、 無文タタキ	ロクロナデ、平行タ タキ、カキメ	□18/36	平行d類か	H16D304
119	372	F-26-2、 G-26-1	SD3503、包含層	須恵器	壺	-	-	(45.7)	灰	灰	n	良	ハケ、平行 タタキ、無 文タタキ	平行タタキ、カキメ	-	内面平行a類・外面平行d類か	H16D347
119	373	F-26-1~4	SD3504・06、包含層	須恵器	坏蓋	14.5	鉛径 3.3	1.7	灰褐	褐灰	l	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後回転ケズリ	□30/36	外面降灰、重ね焼き1類	H16D62
119	374	F-26-1・3	SD3504、包含層(中 央群下)	須恵器	有台坏	13.2	8.1	3.5	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、 回転ヘラ切り後回転 ケズリ	底18/36	外底に墨書「□(土カ)万呂」、内外面 の摩耗顕著	H16墨5
119	375	F-26-3	SD3504、包含層	須恵器	無台坏	13.2	9.1	3.6	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、 回転ヘラ切り後ナデ	□6/36		H17D405
119	376	F-25-3、 F-26-1~3	SD3504、包含層	須恵器	無台壁	-	10.4	(1.3)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底9/36	外底に墨書2文字、判読できず。外底 摩耗顕著	H16墨6
119	377	E・F-26	SD3504、包含層	須恵器	壺	21.2	-	(41.5)	灰	灰	f	良	ロクロナデ、 同心円タタ キ	ロクロナデ、平行タ タキ、カキメ	-	同心円a類、平行a類。正位焼成	H16D226
119	378	F-26-1	SD3506	非ロクロナ 土師器	壺	18.8	-	(4.8)	褐灰	灰黄	ウ	並	ヨコナデ、ハ ケ	ヨコナデ、ハケ	□3/36	内面ヨゴレ付着	H17D414
119	379	F-26-2・4	SD3506・11、包含層	須恵器	有台坏	15.2	-	(4.7)	赤灰	暗赤灰	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ	□5/36	焼きゆがみ、傾きに不安残す	H17D397
119	380	F-26-1	SD3507	須恵器	坏蓋	-	鉛径 3.6	(2.1)	淡灰	淡灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後回転ケズリ	-	重ね焼き1類か	H16D21
119	381	E・F-26	SD3507、包含層他	須恵器	長頸瓶	-	-	(10.5)	灰	灰	a	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、ナデ	-	内底降灰・溶着物。外面自然軸(正位 無蓋焼成)。焼きぶくれ	H16D312
119	382	F-26-2	SD3508	非ロクロナ 土師器	壺	約22.5	-	(9.2)	淡黄橙	淡黄橙	オ	並	ヨコナデ、ハ ケ	ナデ、ハケ	□2/36	小片、磨減顕著	H16D20
119	383	F-26-1、 G-25-1・3	SD3510、包含層	須恵器	壺	約39	-	(5.9)	暗灰	暗灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□4/36	外面を2単位の波状文・沈線で加飾。 降灰・自然軸付着	H17D416
120	384	F-26-1	SD3511	須恵器	無台壁	15.6	11.8	2.2	灰白	灰白	d	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後T字ナデ	底9/36	内外面摩耗顕著。一部煤付着(二次被 熱)	H16D12
120	385	E-26-4	SD3518	ロクロナ 土師器	壺	-	7.7	(5.0)	黒褐	灰黄褐	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り	底21/36	内面炭化物・外面煤付着。被熱で外面 剥離	H16D35
120	386	F-25-4	SD3518	須恵器	坏蓋	16.2	-	(1.6)	灰	灰	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	□2/36	重ね焼きIIb類。天井部内面摩耗	H17D411
120	387	F-25-3・4	SD3518、包含層	須恵器	無台坏	11.2	6.6	3.9	灰	暗灰~黒 灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	□21/36	外面降灰・自然軸。小さい焼きぶくれ 目立つ	H16D13
120	388	E-25	SD3523、包含層	須恵器	無台坏	12.6	7.7	3.3	黄橙	黄橙	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	□6/36	還元弱い	H17D404
120	389	F-25-3	SD3524	須恵器	坏蓋	約12.5	鉛径 2.2	-	灰	灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	□9/36	正位焼成(約7cmの重ね焼き痕)、焼き ゆがみ顕著。天井部内面平滑	H16D16
120	390	F-25-1・2	SD3526、包含層	須恵器	無台坏	12.0	8.5	2.8	灰	灰	b	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底30/36	内面摩耗顕著	H16D22
120	391	G-25-3	SD3528	須恵器	有台坏	-	7.6	(2.2)	灰白	灰	a	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後回転ケズリ	底部完	外面底部墨書「V」	H16墨1
120	392	G-25-3	SD3528	須恵器	短頸壺	6.4	-	(2.7)	灰	灰	c	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□5/36		H17D412
120	393	E-25・26、 F-26	SD3531・3532、包含層	須恵器	壺	19.4	-	42.1	灰	灰	f	良	ロクロナデ、 同心円タタ キ	ロクロナデ、平行タ タキ	□18/36	平行d類か。自然軸溶着(正位焼成)。 底部外面摩耗顕著	H16D307
120	394	E・F-26	SD3531・32・35、 包含層	須恵器	壺	21.2	-	(21.8)	暗灰	暗灰	f	良	ロクロナデ、 同心円タタ キ、ハケ	ロクロナデ、平行タ タキ、カキメ	□15/36	同心円a類、外面b~c類。降灰・自然軸(正 位無蓋焼成)	H16D305
120	395	F-26-1	SD3535	非ロクロナ 土師器	無台坏	12.0	-	(3.1)	灰黄褐	明褐灰	キ	良	ヨコナデ	ヨコナデ	□8/36	摩耗顕著	H17D408
120	396	F-26-1	SD3535	須恵器	有台坏	13.0	8.0	3.9	暗灰	暗灰	e	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後T字ナデ	底18/36	外面黒化。内底摩耗	H16D11
120	397	F-26-1、 G-25-4	SD3535、包含層	須恵器	無台坏	12.7	8.8	4.4	灰白	灰	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	□7/36	破片化後に外面煤付着	H17D419
120	398	E-26-2	SD3536	須恵器	有台坏	-	6.2	(1.5)	灰	灰	d	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底部完	外底ヘラ記号「J」。外底中央茶色漆 付着	H16D5
121	399	E-26-2、 F-26-1	SD3536・37、包含層	須恵器	有台坏	12.8	8.0	4.2	暗青灰	暗青灰	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底27/36	内底・外体下部・台端部摩耗顕著	H16D4
121	400	E-26-2、 F-26-1	SD3537、P3603、 包含層	須恵器	短頸壺	7.0	-	(5.5)	灰	黒灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□15/36	外面降灰・自然軸(正位有蓋焼成)	H16D6
121	401	E-26-2、 F-26-1	SD3538、包含層	須恵器	有台坏	-	8.3	(2.5)	暗灰	暗灰	e	並	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	底部完	焼きゆがみあり。底部内外面摩耗、外 底に墨痕(転用痕)	H16D7
121	402	E・F-25・ 26	SD3538・40、包含層	須恵器	長頸瓶	-	10.8	(16.4)	灰	灰	a	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、平行タ タキ、ナデ	-	平行b類。頸部沈線2条。外面降灰・ 自然軸顕著(正位無蓋焼成)	H16D302
121	403	E・F-25・ 26	SD3551、包含層	須恵器	双耳瓶	-	13.5	(31.5)	黄橙	淡灰	e	やや不良	ロクロナデ、 カキメ、ナデ	ロクロナデ、平行タ タキ、ケズリ	-	内面中位に煤付着。外底付近摩耗顕著	H16D106
121	404	E-26-4	SD3557	須恵器	坏蓋	12.0	-	(1.6)	淡灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘ ラ切り後ナデ	□9/36	重ね焼き1類	H16D8
127	405	F-25	河跡3001(古)北側 部(灰褐色土)	弥生土器	壺	16.4	-	(3.8)	暗褐	暗褐~ 黄橙	粗砂・硬多	並	ハケ、ヨコ ナデ	ハケ、ヨコナデ	□9/36	口縁内面に板状工具による連続刺突 文。口縁部~外面に煤付着	H16A37

第28表 G地区 第Ⅲ-2面出土土器類観察表2

※ ( ) は検存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
127	406	F-24-3	河跡3002埋岸 (灰色土・盛土砂)	ロクロ土師器	壺	20.3	-	(4.6)	黄橙	黄橙	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	□6/36	口縁部内面ヨゴレ・外面煤付着	H16090
127	407	F-25	河跡3001(古)北肩部 (埋岸下灰色盛土)	非ロクロ土師器	壺	32.7	-	(9.7)	黄橙	黄橙	ケ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□2/36	口縁部内面ヨゴレ・外面煤付着	H160286
127	408	F-24-3	河跡3001(古)埋岸 (灰色土・盛土砂)	ロクロ土師器	壺	20.6	-	(3.2)	黄橙	黄橙	オ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	□3/36	外面煤付着	H16077
127	409	F-24-4	河跡3001(古)埋岸 (敷石下部灰色土)	非ロクロ土師器	壺	12.0	-	(4.8)	黄橙	黄橙	ウ	並	ヨコナデ	ヨコナデ	□7/36	内面コゲ・ヨゴレ、外面煤付着	H170549
127	410	E-24-4、E-25-2	河跡3001(古)堤防・埋岸 (灰色土・盛土)	ロクロ土師器	壺	-	7.2	(4.7)	灰黄褐	褐灰	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	□19/36	外面煤付着	H170496
127	411	F-24-3	河跡3001(古)埋岸 (敷石下部灰色土・盛土砂)	非ロクロ土師器	壺	14.8	6.5	3.6	黒	橙	キ	良	ヨコナデ、ミガキ	ケズリ	□5/36	内面黒色処理、外面赤彩	H170531
127	412	F-25-1	河跡3001(古)断面c埋岸敷石間	ロクロ土師器	壺	10.5	-	(2.8)	黒	淡黄	キ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ	□5/36	内面黒色処理	H170554
127	413	E-24	河跡3001北肩部 (敷石間)	ロクロ土師器	無台壺	15.7	7.9	5.6	黒	橙	ケ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、ケズリ、回転糸切り	□2/12	外面に黒色処理はみだす	H170150
127	414	E-24-4	河跡3001(古)堤防・埋岸 (灰色土・盛土)	ロクロ土師器	壺	15.9	-	3.9	黒	黄橙	ク	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ	□4/36	内面黒色処理	H170497
127	415	E-25-2	河跡3001(古)北肩部 (断面d土層1)	非ロクロ土師器	高坏	-	11.2	(3.3)	淡黄橙	橙	キ	良	ヨコナデ	ミガキ	□12/36	外面赤彩	H170548
127	416	F-24-4	河跡3001(古)埋岸 (敷石下部灰色土・盛土砂)	須恵器	坏蓋	17.7	鍔径 2.6	3.0	淡灰	淡灰オリーブ	m	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□6/36	重ね焼きⅡb類。天井部内面磨耗・墨付着 (転用疑わ)	H160267
127	417	F-24-4	河跡3001(古)埋岸 (敷石下部灰色土・盛土砂)	須恵器	坏蓋	-	-	(2.6)	灰	青灰	f	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	体30/36	重ね焼きⅠ類か。天井部内面平滑	H170580
127	418	F-24-4	河跡3001(古)埋岸 (敷石下部灰色土・盛土砂)	須恵器	坏蓋	12.0	鍔径 2.8	3.4	灰	灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	□6/36	重ね焼きⅡb類。天井部内面一部煤付着	H160264
127	419	E-25-2	河跡3001(古)北肩部	須恵器	有台坏	11.0	8.0	4.3	灰	暗灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底24/36	外底中央に墨痕 (転用疑)。口縁部磨耗	H160284
127	420	F-24-4	河跡3001(古)埋岸 (敷石下部灰色土・盛土砂)	須恵器	有台坏	15.5	9.8	5.5	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底30/36	外面降灰	H160265
127	421	E-25-2	河跡3001(古)北肩部	須恵器	無台坏	11.2	8.7	3.4	灰	灰	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後T字ナデ	底36/36	外底へラ記号「/」。破片化後に煤付着	H160283
127	422	E-24-4	河跡3001(古)埋岸 (敷石下部灰色盛土)	須恵器	無台坏	12.9	9.0	3.7	淡灰	淡灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□小片	外底に墨書「□」	H16851
127	423	E・F-24・25	河跡3001(古)埋岸 (敷石間)、包含層	須恵器	無台坏	12.8	8.0	3.1	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□12/36	内外面に磨耗・煤付着	H1601
127	424	F-24-4	河跡3001(古)埋岸 (敷石下部灰色土・盛土砂)	須恵器	無台壺	15.1	11.5	2.3	灰	灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□15/36	内外面磨耗顕著	H160266
127	425	F-24-4	河跡3001(古)埋岸 (敷石下部灰色土・盛土砂)	須恵器	瓶	-	9.2	(10.5)	青灰	褐灰	h	並	ロクロナデ、ナデ、ケズリ	ロクロナデ、ナデ	底36/36	外面自然釉 (正位無蓋焼成)。底部外面煤付着	H170581
128	426	E-24、F-24、G-25	河跡3001(古)埋岸 (盛土砂・敷石)	須恵器	瓶	-	-	(11.5)	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ	体26/36	有台。しほり痕目立つ。内外面に降灰 (正位焼成)	H170608
128	427	G-25-1	河跡3001(古)埋岸 (敷石間)	須恵器	瓶	12.0	-	(8.7)	暗青灰	暗青灰	m	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	□7/36	口縁部欠け連続する	H170588
128	428	E~G-24	河跡3001(古)埋岸石間、包含層	須恵器	瓶	11.5	-	(23.9)	明灰	灰	c	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□6/12	内・外面に自然釉 (正位焼成)。	H170142
128	429	F-24、F-25-3・4	河跡3001(古)北肩部、包含層	須恵器	壺	20.1	-	(30.8)	灰	灰	e	良	ロクロナデ、同心円タタキ、カキメ	ロクロナデ、平行タタキ	□3/36	同心円a類、平行d類か。降灰・自然釉 (正位無蓋焼成)	H160310
128	430	F-24-4、F-25-1	河跡3001(古)肩部 (埋岸石間、整地土)	須恵器	壺	28.0	-	(53.7)	褐灰	褐灰	e	良	ロクロナデ、平行タタキ、同心円タタキ、ロクロナデ	ロクロナデ、平行タタキ	□12/36	内面同心円a類・平行d類、外面平行d類	H160349
128	431	F-25	河跡3001(古)底覆土	弥生土器	壺か	16.0	-	(11.4)	灰黄褐	灰黄褐	細砂・粗砂多、海綿骨砂多	並	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	□6/36	口縁内面に板状工具による連続刺突文。内面下半ヨゴレ・外面煤付着	H16613
128	432	F-25-2	河跡3001(古)北側 (洪水砂)	非ロクロ土師器	壺	20.2	-	(5.3)	黄橙	黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	外面一部黒彩	H170495
128	433	G-25-1	河跡3001(古)北肩部 (洪水砂)	非ロクロ土師器	壺	20.3	-	(8.2)	黄橙	灰黄褐	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	外面煤付着	H170493
128	434	E-25-1	河跡3001(古)洪水砂層、包含層	ロクロ土師器	壺	21.2	-	(9.0)	褐灰	黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	□9/36	内面に炭化物付着	H16092
128	435	F-25-3	河跡3001(古)洪水砂層、包含層	非ロクロ土師器	壺	13.0	-	(4.8)	褐灰	褐灰	ウ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□7/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H170605
128	436	F-25	河跡3001(古)断面c洪水砂	ロクロ土師器	壺	13.9	-	(5.4)	淡黄橙	灰黄	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□2/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H170546
128	437	F-25-1	河跡3001(古)断面b土層8)	非ロクロ土師器	壺	約28	-	(11.7)	黄褐	灰黄褐	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	□3/36	内面帯状に暗褐色ヨゴレ、外面煤付着	H160285
129	438	E-25-3	河跡3001(古)砂層、包含層	ロクロ土師器	壺	15.0	-	(7.6)	灰黄	灰黄	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□6/36	外面煤・口縁部内面炭化物付着	H160190
129	439	E-25-1、G-25-2・3	河跡3001(古)洪水砂層、包含層	ロクロ土師器	壺	-	-	(12.6)	黄橙	灰黄	オ	良	同心円タタキ、ハケ	平行タタキ、ハケ、ケズリ	-	内・外面煤付着 (破片化後)	H170450
129	440	E-25	河跡3001(古)北肩部 (底・灰色砂利)	須恵器	坏6蓋	9.5	返り径 7.4	2.3	淡灰	灰白	g	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□9/36	鍔径1.8cm。重ね焼きⅠ類	H160297
129	441	F-25-3	河跡3001(古)洪水砂層、包含層	須恵器	坏蓋	16.5	-	(1.9)	青灰	灰黄	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□13/36	外面降灰、重ね焼きⅠ類。焼きゆがみあり	H170634
129	442	F-25-3	河跡3001(古)洪水砂層、包含層	須恵器	坏蓋	14.4	-	(1.9)	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	□27/36	重ね焼きⅠ類	H170636
129	443	F-25-1	河跡3001(古)北肩部 (洪水砂)	須恵器	坏蓋	12.6	鍔径 2.3	2.1	灰	灰	h	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□12/36	重ね焼きⅡb類。鍔頂部・天井部内面平滑	H160290
129	444	F-25-2	河跡3001(古)北側 (洪水砂)	須恵器	有台坏	14.1	8.0	5.6	暗灰	黒灰	a	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底21/36	口縁焼きゆがみ。外面黒化	H160291
129	445	F-25-1	河跡3001(古)断面c土層8)	須恵器	有台坏	13.7	8.6	4.4	灰	暗灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後T字ナデ	□34/36	外面黒化。外底に墨書、判読できず	H17851
129	446	E・F-25	河跡3001(古)埋岸 (淡灰色粗砂)	須恵器	有台坏	12.9	8.3	3.6	褐灰	暗灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	□16/36	外底へラ記号「/」。内底平滑。外面黒化	H170626
129	447	F-25-1	河跡3001(古)北肩部 (洪水砂)	須恵器	有台坏	14.3	9.7	6.2	灰	オリーブ灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底18/36	外面降灰。内底磨耗顕著	H160289
129	448	F-23	河跡3001(古)底・最下層)	須恵器	無台坏	12.0	7.6	4.2	オリーブ灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後T字ナデ	底15/36	焼きゆがみあり	H170375
129	449	E-25-2	河跡3001(古)北肩部 (洪水砂層)	須恵器	無台坏	11.3	8.0	3.7	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底12/36	外底に墨書1文字、判読できず	H17853
129	450	E-25-1	河跡3001(古)洪水砂層)	須恵器	無台坏	12.0	8.4	3.5	灰	灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部完	焼きゆがみあり。外底に墨書「□」、判読できず	H170402
129	451	F-25	河跡3001(古)断面c、黄灰砂)	須恵器	無台坏	12.6	9.1	3.3	暗青灰	暗青灰	g	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底24/36		H160272
129	452	F-25	河跡3001(古)北肩部 (洪水砂・底付近)	須恵器	無台坏	-	7.6	(1.1)	黄灰	黄灰	d	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底15/36	外底に墨書1文字、判読できず	H16834
129	453	E-24	河跡3001(古)河底・灰色砂質土)	須恵器	無台坏	-	7.4	(1.1)	灰	淡灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底12/36	外底に墨書「乙口(上カ)」	H16837
129	454	G-25	河跡3001(古)北肩部 (洪水砂)	須恵器	無台坏	-	8.4	(1.2)	灰白	灰白	n	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底15/36	外面にへラ記号、墨書「様女」。内底磨耗顕著	H16812

第29表 G地区 Ⅲ-2面出土土器類観察表3

※ ( ) は残存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色调	外面色调	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
130	455	E-25	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	須恵器	甕	-	-	(17.8)	黄灰	黄灰	d	並	同心円タタキ、ヨコナデ	平行タタキ、カキメ	-	同心円タタキ、平行タタキ	H17D361
130	456	E-24-2	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	縄文土器	深鉢	約25	-	(4.2)	赤褐	橙	粗砂多、礫少	良	ハケ	ナデ、ハケ	口1/36		H17D471
130	457	F-24-1	河跡3001(古)南周部	土師器	器台か	24.3	-	(1.5)	黄橙	黄橙	粗砂多、赤色粒少、海綿骨針多	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	縦6/36	底部焼きゆがみ	H17D492
130	458	F-24-2	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	弥生土器	台付鉢	-	-	(5.15)	黄橙	赤褐	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ミガキ、ナデ	ミガキ	-	内外面赤彩	H17D488
130	459	E-24-2	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	約16	-	5.5	黒	黄褐	キ	良	ミガキ	ミガキ	口12/36	内面黒色処理	H17D467
130	460	F-24-1	河跡3001(古)南周部(淡黄土色砂)	非ロクロ土師器	無台埴	14.0	-	(3.7)	黒	黄褐~赤褐	キ	良	ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	口4/36	内面黒色処理、外面赤彩	H17D485
130	461	F-23-3、G-23-3	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	17.6	-	5.3	淡橙	淡橙	キ	良	ミガキ	ミガキ、ケズリ	口33/36	内外面赤彩、摩耗顕著。外面に黒斑	H16墨38
130	462	F-23-3、G-23-1	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	18.0	-	(3.1)	灰白	灰白	キ	良	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	口13/36	内外面赤彩。摩耗顕著	H17D464
130	463	G-23-3	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	約20	-	(4.1)	橙	橙	キ	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ケズリ	底27/36	内外面赤彩。外面底部に黒斑	H16D309
130	464	F-24-1	河跡3001(古)南周部	非ロクロ土師器	無台埴	16.5	-	(4.4)	橙	橙~黄橙	キ	良	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ケズリ	口4/36	内外面赤彩	H17D526
130	465	F-24-2	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	16.1	-	約5.7	赤橙	赤橙	キ	良	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ、ケズリ	口9/36	内外面赤彩。内外面磨減顕著。外面一部黒斑	H16D260
130	466	G-23-1	河跡3001(古)(試掘1黒灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	-	-	(3.3)	淡黄橙	淡橙	ケ	並	不明	ミガキ	底14/36	外面赤彩。内面磨減顕著。調整不明	H17D463
130	467	E-24-2	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	ロクロ土師器	無台埴	約16	-	(2.9)	赤橙	赤橙	キ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口4/36	内外面赤彩	H17D475
130	468	F-23-3	河跡3001(古)(試掘1灰色土)	ロクロ土師器	無台埴	14.8	-	(3.0)	赤褐	橙	オ	良	ロクロナデ	不明	口5/36	内外面赤彩か。二次被熱・煤付着	H17D466
130	469	F-24-1	河跡3001(古)南周部	ロクロ土師器	無台埴	14.5	-	(3.2)	明赤褐	明赤褐	キ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口3/36	内外面赤彩	H17D529
130	470	G-23-3、F-24-3	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	ロクロ土師器	無台埴	15.0	9.0	3.1	赤橙	赤橙	キ	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	内外面赤彩。摩耗顕著	H16D282
130	471	E・F-24	河跡3001(古)(黒灰~灰色土)	ロクロ土師器	無台埴	13.0	7.6	2.6	灰黄	灰黄	キ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底19/36	内外面赤彩。摩耗顕著	H17D479
130	472	G-23-3	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	ロクロ土師器	無台埴	12.6	7.8	3.6	赤橙	赤橙	キ	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底24/36	内外面赤彩。摩耗顕著	H16D295
130	473	F-24-1	河跡3001(古)南周部(灰~黒灰色土)	ロクロ土師器	無台埴	12.3	6.4	3.6	赤橙	赤橙	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部完	内外面赤彩。摩耗顕著	H16D235
130	474	E・F-24	河跡3001(古)南周部(黒土)	非ロクロ土師器	無台埴	11.4	5.5	3.7	黄橙	橙	ウ	良	ナデ	粗いナデ	底33/36	内外面赤彩か	H17D489
130	475	G-23-1	河跡3001(古)(試掘2灰色土)	ロクロ土師器	無台埴	11.4	-	(1.9)	橙	橙	キ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口7/36	内外面赤彩	H17D501
130	476	F-24-1	河跡3001(古)南周部(灰~黒灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	11.0	-	(3.0)	赤褐	赤褐	キ	並	ミガキ、ハケ	ミガキ、ハケ	口12/36	内外面赤彩。二次被熱・煤付着	H16D230
130	477	G-23-1	河跡3001(古)(試掘2黒灰色土)	ロクロ土師器	無台埴	11.0	-	(2.9)	淡黄橙	淡黄橙	キ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口5/36	内外面赤彩。摩耗顕著	H17D462
130	478	F-23-3	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	ロクロ土師器	無台埴	10.8	-	(2.8)	橙	淡黄橙	オ	良	ヨコナデ	不明	口12/36	内外面赤彩。摩耗顕著	H17D465
130	479	E-24-2、F-24-1	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	9.9	約4.6	3.0	橙	橙	キ	良	ヨコナデ	不明	口10/36	内外面赤彩。外面磨減顕著	H17D486
130	480	F-24-1	河跡3001(古)南周部(灰~黒灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	9.9	4.1	2.6	赤橙	赤橙	キ	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	口27/36	内外面赤彩。外底に葉脈痕	H16D121
130	481	F-23-3	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	13.3	6.9	3.8	淡黄橙	淡黄橙	オ	並	ミガキ	ナデ、ケズリ	口21/36	口縁部外面に黒斑	H16D254
130	482	G-23-3	河跡3001(古)南周部(試掘1)	非ロクロ土師器	無台埴	15.0	-	(3.4)	黄橙・黒	黄橙	イ	並	ミガキ	ケズリ	口11/36	内面黒色処理不十分。外面磨減顕著	H17D480
130	483	F-24-3	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)他	非ロクロ土師器	無台埴	14.8	7.6	5.2	橙	橙	ケ	良	ミガキ	ミガキ、ケズリ	口8/36	橙色に発色	H17D498
130	484	F-24-1	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	無台埴	13.4	7.8	3.1	橙	橙	オ	良	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	底18/36	口縁部に煤付着(煮沸容器転用)	H16D240
130	485	G-23-3、F-24-3	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	須恵器	坏H蓋	13.0	6.0	4.2	淡灰	淡灰	ε	やや良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36	外面黒化。倒位での使用に伴う磨耗顕著。焼きゆがみのため復元に不安残す	H16D279
130	486	E・F-24、E-25	河跡3001(古)南周部(黒土)	須恵器	有台坏	11.8	8.8	4.1	黄橙	淡黄橙	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口7/36	還元弱い。小割磨減顕著	H17D478
131	487	F-24-3	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	高坏	-	-	(5.1)	黒	赤褐	キ	良	不明	ミガキ	-	内面黒色処理、外面赤彩	H17D533
131	488	E-24-2	河跡3001(古)南周部(灰~黒灰色土)	非ロクロ土師器	高坏	22.9	-	(2.6)	橙	橙	キ	良	ミガキ	ハケ、口縁部ミガキ	口3/36	内外面赤彩	H16D120
131	489	E-24-2	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	高坏	約18	-	(3.0)	橙	橙	キ	良	ミガキ	ナデ、ハケ	口4/36	外面赤彩	H17D476
131	490	F-24-1	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	甕	18.9	-	(4.6)	褐灰	黄橙	ウ	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H17D545
131	491	E-24-2	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	甕	25.2	-	(13.7)	灰褐	褐	オ	良	ヨコナデ、ナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H16D232
131	492	E-24-2	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	甕	24.0	-	(10.4)	淡黄橙	黄橙	オ	良	ヨコナデ、ナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口6/36	内面に炭化物、外面煤付着	H17D477
131	493	F-24-2	河跡3001(古)南周部(黒土)	非ロクロ土師器	甕	22.3	7.6	28.6	淡黄橙	淡黄橙	ア	並	ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口33/36	外面に黒斑。口縁部ゆがみ目立つ	H16D288
131	494	G-23-3、F-24-3	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	甕	17.8	-	(13.3)	黄橙	橙	ウ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口12/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H16D280
131	495	G-23-1・3	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	甕	19.5	-	(9.6)	黄橙	黄橙	ア	良	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ、ナデ	口15/36		H17D499
131	496	G-23-1	河跡3001(古)(試掘2灰色土)	非ロクロ土師器	甕	19.2	-	7.5	黒褐	淡黄橙	オ	良	ハケ	ヨコナデ、ハケ	口6/36	口縁部薄い	H17D470
131	497	E-24-2、F-24-1~3	河跡3001(古)南周部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	甕	19.5	-	(5.4)	黄橙	黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口2/36		H17D484
131	498	E-24-2	河跡3001(古)南周部	土師器	甕	約26	-	(9.9)	灰黄褐	暗灰黄	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口18/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H16C4
132	499	F-24-1	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	甕	約25	-	(24.4)	黄橙	黄橙	オ	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	-	外面煤付着に黒斑	H16D268
132	500	E-24-2	河跡3001(古)南周部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	甕	25.2	-	(16.1)	灰黄褐	灰黄褐	オ	良	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口6/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H16D249
132	501	F-24-1	河跡3001(古)南周部	非ロクロ土師器	甕	23.0	-	(5.1)	灰黄	灰黄	ア	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	磨減顕著	H17D544

第30表 G地区 第Ⅲ-2面出土土器類観察表4

※ ( ) は残存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色调	外面色调	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
132	502	F-24-1~3	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	壺	22.8	-	(16.1)	黄橙	灰黄褐	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□27/36	外面煤付着	H160258
132	503	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	壺	22.6	-	(19.5)	黄橙	黄橙	オ	良	ナデ、ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□15/36	外面煤付着	H160263
132	504	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	壺	21.0	-	(14.1)	橙	黄橙	ウ	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	□9/36	外面煤付着	H160236
132	505	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)他	非ロクロ土師器	壺	20.8	-	(10.4)	灰黄褐	黄橙	オ	良	ヨコナデ、ナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□1/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H170527
132	506	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	壺	20.0	-	(15.1)	灰黄褐	灰黄褐	オ	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	□小片	内面ヨゴレ・外面煤付着	H160262
133	507	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	壺	22.0	-	(27.2)	褐灰	灰黄褐	オ	良	ヨコナデ、ナデ、ハケ	ヨコナデ、ナデ、ハケ	□15/36	内底付近ヨゴレ・外面煤付着	H160241
133	508	F-24・25	河跡3001(古)北側部(灰色土)、河跡3001(古)南側黒灰色土	非ロクロ土師器	壺	18.6	-	(20.7)	灰黄褐	淡黄	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□12/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H160233
133	509	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	壺	17.9	-	(8.4)	灰黄褐	黄橙	ア	並	ナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□6/36		H170502
133	510	F-24-1・3	河跡3001(古)南側部	非ロクロ土師器	壺	-	-	(24.4)	褐灰	淡黄橙	オ	並	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	-	内面ヨゴレ・外面煤付着	H170530
133	511	G-23-3、F-24-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	壺	18.2	-	(12.6)	灰	黄橙	ウ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□18/36	外面煤付着	H160287
133	512	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	壺	21.6	-	(16.4)	灰黄褐	暗灰黄	オ	良	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	□3/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H160244
133	513	F-24-2・3	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	壺	15.0	-	(6.7)	灰黄褐	褐	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□11/36	内面炭化物・外面煤付着	H170491
134	514	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	壺	16.5	-	(4.3)	褐	橙	ウ	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□5/36		H170500
134	515	G-23-1	河跡3001(古)(試掘1灰~黒灰色土)	非ロクロ土師器	壺	16.0	-	(9.2)	黄橙	黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□5/36	外面煤付着	H170468
134	516	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	壺	15.9	-	(5.4)	灰黄	橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□15/36	外面煤付着	H170469
134	517	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	壺	15.4	-	(7.4)	褐灰	褐灰	オ	良	ナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□30/36	内面炭化物・外面煤付着	H160300
134	518	E-24	河跡3001(古)南側部(断面e)	非ロクロ土師器	壺	13.8	-	(9.6)	淡黄橙	淡黄橙	ケ	良	ナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□9/36	内面炭化物・外面煤付着	H160248
134	519	G-23-1	河跡3001(古)(灰色土)	非ロクロ土師器	壺	-	-	(6.7)	橙	黄灰	ケ	良	ナデ、ケズリ	ハケ、ナデ	-	下底摩耗顕著。外面煤付着。破片化後被熱	H160292
134	520	E-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	壺	約12	約4.0	(9.2)	黄橙	褐灰	オ	良	ナデ	ナデ、ハケ	底部完	外面煤付着	H170473
134	521	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	壺	9.5	6.0	7.9	黄橙	黄橙	オ	良	ナデ	ナデ、ハケ	□15/36	外面に黒斑、一部煤付着	H160243
134	522	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	鉢	13.8	6.6	8.6	黄橙	黄橙	オ	並	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	□12/36		H160299
134	523	E-24	河跡3001(古)南側部(暗灰色土)	非ロクロ土師器	壺	37.2	-	(5.9)	黄褐	黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ケズリ	□4/36	外面煤付着	H170561
134	524	F-24-1	河跡3001(古)南側部(砂層、黒色土)	ロクロ土師器	壺	約43	-	(5.2)	黄橙	橙	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	□2/36	外面煤付着。径に不安残す	H170551
134	525	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	瓶類把手	-	-	(12.5)	黄橙	黄橙	ア	良	ハケ	ハケ、ナデ	小片		H170487
134	526	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	瓶類把手	-	-	(3.5)	黄橙	褐	ケ	良	ナデ	ナデ、ハケ	小片	外面煤付着	H170550
134	527	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	非ロクロ土師器	瓶類把手	-	-	(7.4)	灰黄	灰黄	ウ	並	ハケ	ナデ、ハケ	小片		H170505
135	528	E-24・2、F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	非ロクロ土師器	瓶	23.4	-	(25.1)	淡黄	淡黄	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□6/36	幅約7cmの把手	H160259
136	529	F-24-1	河跡3001(古)南側部(灰~黒灰色土)	須恵器	坏壺	11.4	-	3.2	灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ、ナデ	□24/36	外面黒化	H160231
136	530	F-23-3	河跡3001(古)(試掘1灰色土)	須恵器	坏壺	10.8	返し径 8.8	(1.5)	灰	青灰	k	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□5/36	外面降灰。重ね焼き1類	H170513
136	531	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	11.0	返し径 9.0	(1.6)	灰	褐灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□9/36	口縁部整形時ゆがみ。外面降灰。重ね焼き1類	H170599
136	532	G-23-1	河跡3001(古)(試掘2黒灰色土)	須恵器	坏壺	11.0	返し径 9.6	(2.0)	淡灰	灰	g	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□9/36	外面降灰。重ね焼き1類。天井部内面煤付着	H170592
136	533	F-24-2・3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	11.4	返し径 9.6	(3.0)	灰	灰	h	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□15/36	重ね焼き1類。内面摩耗顕著・墨痕(転用疑)	H160294
136	534	F-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	11.4	返し径 9.8	(1.8)	灰白	灰	k	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□12/36	重ね焼き1類。焼きぶくれ目立つ	H160276
136	535	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	12.7	返し径 10.6	(2.3)	灰	灰	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□2/36	外面降灰。重ね焼き1類	H170597
136	536	E-24-2、F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	12.6	返し径 10.6	(2.0)	灰	灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□11/36	外面降灰。重ね焼き1類	H170575
136	537	F-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	12.3	返し径 9.8	(2.0)	淡灰	灰	b	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□18/36	天井部内面平滑・薄く墨痕(転用疑か)	H160281
136	538	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	須恵器	坏壺	12.1	返し径 10.0	2.8	淡黄灰	淡黄橙	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□15/36	径径3.4cm。還元弱い。重ね焼き1類	H160239
136	539	E-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	12.0	返し径 9.8	2.6	青灰	暗青灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□6/36	焼きゆがみあり	H160247
136	540	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	13.0	返し径 11.0	(1.8)	灰褐	暗灰	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□8/36	天井部外面にへら痕。焼きゆがみあり	H170602
136	541	F-24-2・3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	12.7	返し径 10.2	(1.5)	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□11/36	焼きぶくれ多。重ね焼き1類	H170578
136	542	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	14.4	返し径 12.6	(1.5)	灰	茶灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□5/36	重ね焼き1類	H170601
136	543	E-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	15.5	縁径 3.9	3.2	灰	灰白	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□6/36	外面降灰。重ね焼き1類。天井部内面平滑	H170574
136	544	F-23-3、G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	15.5	-	(2.2)	灰	灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□14/36	焼きゆがみ顕著。重ね焼き1類	H170598
136	545	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	15.5	-	(2.2)	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□3/36	外面肩部にへら記号「×」。重ね焼き1類	H170610
136	546	F-25-2・4	河跡3001(古)南側部(覆土)、色身層	須恵器	坏壺	15.0	縁径 3.3	2.6	淡灰	灰	l	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□9/36	外面溶着物目立つ。重ね焼き1類。天井部内面磨耗	H160270
136	547	E-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	14.9	縁径 3.1	1.6	淡灰	暗オリーブ灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□17/36	焼きゆがみ。重ね焼き1類。降灰顕著。他部煤着痕あり	H170573
136	548	F-23-3、F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏壺	14.5	縁径 3.6	3.0	褐灰	青内	e	良	ロクロナデ後ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□11/36	外面肩部にへら記号「/」。外面降灰。重ね焼き1類	H170576
136	549	F-24-1	河跡3001(古)南側部(砂層、黒色土)	須恵器	坏壺	14.7	縁径 3.7	2.8	青灰	暗灰	a	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□9/36	重ね焼き1類	H170562

第31表 G地区 Ⅲ-2面出土土器類観察表5

※ ( ) は残存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
136	550	E-24	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	坏蓋	13.1	-	(1.7)	ナリープ	灰	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	口3/36	重ね焼きⅠ類	H170612
136	551	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏蓋	11.9	-	(1.9)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口10/36	重ね焼きⅡb類。天井部内面に磨耗・変傷(転用疑)	H170609
136	552	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	盤蓋	22.8	縁径4.6	3.7	灰	灰	h	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナズリ	口18/36	重ね焼きⅡb類	H160245
136	553	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	有台坏	14.8	7.9	4.9	灰	暗灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底8/36	外面黒化	H170381
136	554	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	有台坏	14.0	8.4	4.5	灰	暗灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	口23/36	焼きゆがみ、外面黒化	H160228
136	555	F-24-1	河跡3001(古)南側部(灰~黒灰色)	須恵器	有台坏	13.8	8.5	5.0	灰	暗灰	b	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底18/36	焼きゆがみ・焼きぶくれ顕著。台端部平滑	H160229
136	556	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	有台坏	-	7.9	(3.6)	褐灰	灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切りまま	台21/36	台端部平滑	H170572
136	557	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	有台坏	-	8.9	(2.2)	暗灰	暗灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	台部完	内底平滑	H170600
136	558	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	有台坏	-	8.4	(2.6)	灰	灰	l	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底21/36	外底へら記号「=」、焼きぶくれ多。内外面に変傷(転用疑)	H160271
136	559	E-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	有台坏	-	9.8	(2.0)	黄橙	黒	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底6/36	外面黒色処理。第四面1026と同一個体か	H160115
136	560	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	有台坏	約14.5	約11	(4.7)	黄橙	灰黄褐	e	不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナズリ	底27/36	外底へら記号「x」。還元弱い	H170561
136	561	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	有台坏	13.3	9.7	4.1	淡灰	灰	h	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底33/36	内底・台端部磨耗顕著	H160296
136	562	E-24-2	河跡3001(古)南側部(灰~黒灰色)	須恵器	有台坏	-	9.1	(2.7)	黄橙	黄橙	a	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底27/36	還元弱い。外底に墨書「寺」	H161813
137	563	E・F-24	河跡3001(古)南側部(灰~黒灰色)	須恵器	坏6身	9.0	6.5	3.1	青灰	暗灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ、ケズリ	口4/36	外面黒化(有蓋)	H170593
137	564	F-24-1	河跡3001(古)南側部(灰~黒灰色)	須恵器	坏6身	9.2	6.2	3.4	灰白	黒灰	k	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧回転ナデ	口15/36	外面降灰・黒化(有蓋)	H160233
137	565	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏6身	8.9	5.8	3.4	淡灰	灰	b	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底27/36	外面黒化(有蓋)	H160277
137	566	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏6身	-	6.3	(2.6)	淡灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底24/36	外面黒化(有蓋)	H160278
137	567	E-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏6身	約11	約8.5	3.5	灰	灰	b	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口9/36	口縁部焼きゆがみ大(有蓋)	H170604
137	568	E-25、G-23-1	河跡3001(古)南側部(覆土)、IV面包含層	須恵器	坏6身か	10.6	7.4	3.7	灰	淡灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧回転ナデ	口6/36	焼きゆがみあり。無蓋か	H160225
137	569	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	坏6身	10.2	6.2	3.2	灰	暗赤褐	b	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	ほぼ完形	有蓋。焼きぶくれ目立つ	H160238
137	570	G-23	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏6身	11.7	7.6	3.2	淡灰	灰	g	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口4/36	外面黒化・有蓋	H170611
137	571	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	無台坏	13.3	7.3	4.7	淡灰	淡灰	b	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧ナデ	底36/36	内外面平滑	H160273
137	572	F-24-1・3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	坏1蓋	12.6	6.8	3.4	淡灰	灰	b	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底27/36	外面黒化	H160255
137	573	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	無台坏	12.0	6.2	3.5	灰	灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底18/36	口縁部、底部外面平滑	H160261
137	574	G-23-3、F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	無台坏	12.0	8.6	4.0	灰	灰~暗灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口15/36	焼きゆがみ、焼きぶくれ目立つ。外面黒化。内底磨耗	H160275
137	575	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	無台坏	11.9	7.4	3.8	灰白	灰白	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	底15/36	口縁部外面に一部煤付着	H170382
137	576	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	無台坏	11.0	5.6	3.7	灰	灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧ナデ	口18/36	焼きぶくれ目立つ。外面黒化。口縁部磨耗	H160256
137	577	F-24-1	河跡3001(古)南側部(灰~黒灰色)	須恵器	無台坏	12.3	7.3	3.6	暗青灰	青灰	h	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧ナデ	口30/36		H160122
137	578	F-23	河跡3001(古)南側部(灰色土)	須恵器	無台坏	12.3	7.4	3.7	青灰	暗青灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧ナデ	完形	焼成堅硬・外面黒化・自然熱。内面に淡茶色漆状付着物	H160118
137	579	F-24	河跡3001(古)南側部(灰色土)	須恵器	無台坏	12.2	8.4	3.7	青灰	青灰	a	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナデ	口27/36	外底へら記号「J」、口縁部焼きゆがみ	H160269
137	580	F-24-1	河跡3001(古)南側部(灰~黒灰色)	須恵器	無台坏	12.1	7.0	4.1	暗青灰	青灰	h	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧ナデ	口24/36	外面黒化	H160227
137	581	F-24-1	河跡3001(古)南側部(灰~黒灰色)	須恵器	無台坏	11.3	8.7	3.6	暗赤灰	赤褐	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口18/36	内底へら記号「x」。焼きゆがみあり	H160234
137	582	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	無台坏	13.3	9.4	3.7	灰白	灰白~灰	e	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部完	外面煤付着(煮炊器器転用)	H170577
137	583	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	無台坏	13.0	9.6	3.9	灰	灰	b	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧回転ナデ	口30/36	黒色吹き出し目立つ	H160242
137	584	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	無台坏	12.8	9.2	4.4	浅黄	灰	a	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口18/36		H160257
137	585	F-24-1	河跡3001(古)南側部(灰色土)	須恵器	無台坏	12.6	9.0	3.9	青灰	青灰	j	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底30/36	外面火だすきあり	H170571
137	586	F-24-1	河跡3001(古)南側部(灰色土)	須恵器	無台坏	-	9.4	(2.5)	灰	灰	c	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底12/36	外底に墨書「乙口(上カ)、漆付着。内底平滑	H161814
137	587	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	無台坏	12.6	8.4	3.7	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口5/36	外面煤付着(煮炊器器転用)	H170570
137	588	F-24-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	無台坏	12.2	8.9	3.2	灰	灰	a	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧ナデ	底10/36	内底磨耗	H170579
137	589	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	無台坏	12.0	8.4	3.1	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口12/36		H160237
137	590	G-23	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	無台坏	11.8	8.1	4.0	灰白	灰白	c	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後丁寧ナデ	底9/36	内・外底平滑	H170372
137	591	F-23-3、G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	無台坏	11.4	8.6	3.7	赤褐	暗赤褐	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底36/36	内底へら記号「x」。外底に火だすき	H160274
137	592	G-23-3	河跡3001(古)南側部(覆土)	須恵器	無台坏	-	-	(0.9)	淡灰	灰黄	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	-	外底に墨書「乙上」	H161816
137	593	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	無台盤	15.4	11.6	2.7	淡灰	淡灰	m	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底9/36	還元弱い	H170587
137	594	G-23-3	河跡3001(古)南側部(覆土)	須恵器	坏蓋	-	-	(1.1)	淡灰	灰黄	d	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナズリ	-	外面に墨書「口上」	H161815
138	595	F-23	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	平瓶	5.5	-	(4.1)	灰	灰	l	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	口完形	内面閉塞円蓋。内外面降灰(正位無蓋焼成)	H160119
138	596	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色)	須恵器	横瓶	-	-	(26.5)	灰	灰	e	良	同心円タタキ	平行タタキ	-	同心円a部、平行・o部。横位焼成	H160311

第32表 G地区 第Ⅲ-2面出土土器類観察表6

※ ( ) は残存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
138	597	F-23	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	厚底鉢	-	11.0	(7.2)	青灰	青灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	底部完	底部剥突。内外面降灰・自然釉(正位無蓋焼成)。焼きぶくれあり	H16D246
138	598	E-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	壺	22.0	-	(6.3)	淡灰	淡灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	口2/36	口縁部に降灰	H17D594
138	599	F-24-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	須恵器	壺	約47	-	(9.3)	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/36	外面をカキメ・波状文で加飾。内外面自然釉付着	H17D603
138	600	F-24-1、F-25	河跡3001(古)南側部(黒灰色土、断面d)	須恵器	壺	-	胴径約50	(32.4)	灰	灰	e	良	同心円タタキ	平行タタキ、カキメ	-	同心円c類、平行b・c類	H17D370
139	601	E-24-2、F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	須恵器	壺	26.0	-	31.0	暗灰~黒	黄灰~灰	e	不良	ロクロナデ、同心円タタキ	ロクロナデ、平行タタキ、カキメ	口3/36	同心円a類、平行a類。二次被熱で軟質化	H16D316
139	602	F-24-1	河跡3001(古)南側部(覆土)	須恵器	壺	-	-	(31.6)	淡灰	灰	e	不良	同心円タタキ	格子状タタキ	-	同心円a類。軟質。外底・内底磨耗顯著	H16D150
140	603	F-21・24	河跡300南側部(黒灰色土)、包含層	製塩土器	尖底	19.3	-	(6.5)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多、赤色粒少、海綿骨針少	並	ナデ	ナデ、指頭圧痕	口12/36	下半は胎土異なる(赤色粒混ざる)	H17D490
140	604	E-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	製塩土器	尖底	約18	-	(3.2)	褐灰	灰黄褐	粗砂多、海綿骨針多	並	ナデ	ナデ	口2/36	内面剥離	H17D472
140	605	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	製塩土器	尖底	16.8	-	(4.5)	黄橙	黄橙	粗砂多、赤色粒少、海綿骨針少	並	ナデ	ナデ	口3/36		H17D547
140	606	F-24-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	製塩土器	尖底	15.6	-	(7.5)	橙	橙	粗砂多、海綿骨針少	良	ナデ	ナデ	口3/36		H16D117
140	607	F-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	製塩土器	尖底	15.3	-	(5.2)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多、赤色粒少	良	ナデ	ナデ	口4/36	外面に工具のアタリ痕	H17D543
140	608	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	製塩土器	尖底	約17	-	(3.9)	黄橙	黄橙	粗砂多	良	ナデ	ナデ、指頭圧痕	口5/36		H17D481
140	609	F-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	製塩土器	尖底	12.8	-	(6.0)	橙	橙	粗砂多、海綿骨針極多	並	ハケ、ナデ	ナデ、指頭圧痕	口8/36		H17D483
140	610	E-24-2	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	製塩土器	尖底	-	-	(3.4)	黄橙	灰黄褐	粗砂多、海綿骨針多	並	ナデ	ナデ、指頭圧痕	口7/36	外面煤付着	H17D474
140	611	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	製塩土器	尖底	-	-	(6.4)	赤褐	明赤褐	粗砂多、赤色粒少、海綿骨針極多	並	ナデ	ナデ、指頭圧痕	-	内面剥離	H17D504
140	612	G-23-1・3	河跡3001(古)(試掘2灰色土、黒灰色土)	製塩土器	尖底	-	-	(5.1)	黄橙	灰黄	粗砂多、赤色粒少、海綿骨針少	並	ナデ	ナデ、指頭圧痕	-		H17D503
140	613	F-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	製塩土器	尖底	-	-	(4.1)	橙	橙	粗砂少、海綿骨針多	良	ナデ	ナデ	-	外面黒斑	H16D116
140	614	G-23-3	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	製塩土器	尖底	-	-	(4.6)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多、赤色粒少、海綿骨針多	並	ナデ	ナデ	-	外面煤付着	H17D482
140	615	F-24-1	河跡3001(古)南側部(黒灰~灰色土)	製塩土器	平底か	約22	-	(3.6)	黄橙	黄橙	粗砂多、海綿骨針多	良	ナデ、ハケ	ナデ	小片		H17D528
141	622	F-25-4	包含層	非ロクロ土器	無台壇	-	10.2	(4.1)	黒	黄橙	ア	並	ミガキ	ロクロナデ、ケズリ	底12/36	内面黒色処理	H17D437
141	623	F-26-2	包含層	非ロクロ土器	壇	14.0	-	(2.7)	黒	淡黄橙	キ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、ナデ	口5/36	内面黒色処理	H17D442
141	624	F-25-4	包含層	非ロクロ土器	高坏	17.0	-	(3.9)	黒	橙	キ	並	ミガキ、ナデ	ナデ、ハケ	口3/36	内面黒色処理、外面赤彩	H17D441
141	625	F-26-1	包含層(東西セク)	非ロクロ土器	高坏	-	8.7	(4.7)	黒	赤橙	オ	良	ミガキ、ナデ	ナデ、ケズリ	底小片	内面黒色処理、外面赤彩	H16D49
141	626	F-26-1	包含層(中央セク)	ロクロ土器	坏	15.2	-	4.1	橙	橙	キ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口3/36	有台坏か。内外面赤彩。磨耗顯著	H16D48
141	627	F-25-2	包含層	ロクロ土器	有台壇	-	9.0	(2.0)	黒	淡黄橙	ケ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	底15/36	内面黒色処理	H17D461
141	628	E-25-2	包含層	ロクロ土器	有台壇	-	8.6	(2.4)	黒	淡黄橙	ケ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	口8/36	内面黒色処理	H17D445
141	629	F-25-1	包含層	ロクロ土器	有台壇	-	9.0	(2.5)	黒	橙	ケ	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	底6/36	内面黒色処理	H16D025
141	630	G-25-3	包含層	ロクロ土器	有台壇	-	7.8	(3.0)	黒	橙	オ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	底36/36	内面黒色処理	H17D424
141	631	F-26	Ⅲ-1面ベース土(Ⅲ-2面包含層)	ロクロ土器	有台壇	-	6.7	(2.5)	黒	黄橙	ケ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切りか	口3/12	内面黒色処理	H17D121
141	632	F-26-4	Ⅲ-1面ベース土	ロクロ土器	有台壇	-	5.8	(2.4)	淡黄橙	淡黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り未調整	口9/12		H17D117
141	633	F-25-4	包含層	ロクロ土器	無台壇	17.4	6.8	5.8	黒	黄橙	ク	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、ケズリ、糸切り	底21/36	内面黒色処理	H16D37
141	634	F-25-4	包含層	ロクロ土器	無台壇か	約17	-	(3.4)	黒	橙	ア	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ	口3/36	内面黒色処理	H17D457
141	635	E-26	排水溝(Ⅲ-2面包含層)	ロクロ土器	無台壇	15.1	6.6	5.4	黒	橙	ケ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、ケズリ、底部回転糸切り	底4/12	内面黒色処理。外面橙色に美色	H17D221
141	636	F-26-1	包含層(東西セク)	ロクロ土器	無台壇	13.5	-	(4.5)	黒	黄橙	ク	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、ミガキか	口2/36	内面黒色処理	H17D456
141	637	F-22	包含層(Ⅲ-1面ベース土)	ロクロ土器	無台壇	12.3	7.4	4.0	橙~黒褐	橙	オ	やや不良		ロクロナデ、底部回転糸切り未調整	底5/12	内面黒色処理不十分。内面磨減顯著	H16D062
141	638	F-26-1・3	包含層	ロクロ土器	無台壇	-	6.2	(1.7)	黒	淡黄橙	ク	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り、ケズリ	-	内面黒色処理	H17D459
141	639	F-25-4	包含層	ロクロ土器	無台壇	-	5.0	(2.2)	黒	灰黄褐	キ	並	ロクロナデ、ミガキ	ケズリ	底30/36	内面黒色処理。外底剥離調整不明	H17D446
141	640	F-26-2	包含層	ロクロ土器	無台壇	-	4.2	(1.3)	黒	黄橙	ク	並	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、ケズリ、回転糸切り	底部完	内面黒色処理	H17D458
141	641	F-25-2	包含層	ロクロ土器	小坏	-	5.6	(2.1)	黒	黄橙	キ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、底部ケズリ	底部ほぼ完	内面黒色処理。磨耗顯著	H16D51
141	642	E-24	包含層(Ⅲ-1面ベース土)	ロクロ土器	有台皿	12.8	6.9	2.8	黄橙	黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	口8/12	内底磨耗顯著	H16D68
141	643	E-25-2	包含層	ロクロ土器	有台皿	-	13.0	(1.3)	黄橙	黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口10/36		H17D444
142	644	F-25-3	包含層	非ロクロ土器	壺	12.0	-	(4.3)	灰黄褐	灰黄褐	オ	並	ナデ	ナデ、ハケ	口3/36	口縁部~外面煤付着	H17D455
142	645	G-25	包含層(排水溝)	非ロクロ土器	壺	21.2	-	(6.2)	淡黄橙	黄橙	ウ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口3/36		H16D34
142	646	E-25-2	包含層	ロクロ土器	壺	約22	-	(8.3)	黄橙	黄橙	ケ	並	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口3/36	内面炭化物・外面煤付着	H17D443
142	647	G-25-3	包含層	ロクロ土器	壺	21.8	-	(7.1)	淡黄橙	淡黄橙	ケ	並	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口3/36	破片化後に二次被熱、煤付着	H17D426
142	648	G-25-2	包含層	ロクロ土器	壺	21.0	-	(5.8)	淡黄橙	橙	オ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口4/36		H17D430
142	649	F-26-4	Ⅲ-1面ベース土	ロクロ土器	壺	18.8	-	(4.4)	黄褐	黄橙	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	口1/12	内面ヨゴレ・外面煤付着	H17D0118
142	650	F-25-4	包含層	ロクロ土器	壺	21.0	-	(5.0)	黄橙褐	黄橙褐	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口3/36		H17D447
142	651	F-26-4	包含層(Ⅲ-1面ベース土)	ロクロ土器	壺	約21.6	-	(5.6)	灰黄褐	灰黄褐	オ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	内面ヨゴレ・外面煤付着	H16D067
142	652	F-25-3	包含層	ロクロ土器	壺	約22	-	(9.3)	淡黄	淡黄	オ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	小片	内外面煤付着	H16D42

第33表 G地区 Ⅲ-2面出土土器類観察表7

※ ( ) は残存量を示す。

検出 番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測 番号
142	653	F-25-3・4	包含層	ロクロ土 師器	壺	21.0	-	(15.4)	黄橙	黄橙	オ	良	ロクロナデ、カキメ、 平行タタキ	ロクロナデ、カキメ、 平行タタキ	□6/36	平行b類。外面煤付着	H16091
142	654	G-25-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	20.4	-	(6.3)	黄橙	黄橙	オ	良	ロクロナデ、 カキメ	ロクロナデ、カキメ	□3/36	内面ヨゴレ付着。小片のため傾きに不安を残す	H16082
142	655	F-25-4	包含層	ロクロ土 師器	壺	18.6	-	(6.6)	淡黄	黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	□3/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H16043
142	656	E-25-2	包含層	ロクロ土 師器	壺	22.0	-	(2.8)	黄橙	黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	□4/36	口縁端部煤付着	H170434
142	657	E-26	包含層(Ⅲ-1面 ベース土)	ロクロ土 師器	壺	20.3	-	(4.8)	黄橙	黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	□1/12	内面炭化物・外面煤付着	H170145
142	658	F-26-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	約23	-	(4.0)	灰黄褐	灰黄褐	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□3/36	内外面煤付着	H16074
142	659	F-26	包含層(Ⅲ-1面 ベース土)	ロクロ土 師器	壺	約19	-	(4.3)	灰黄	褐灰	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	□1/12	外面煤付着	H16066
142	660	F-25-1~4	包含層	ロクロ土 師器	壺	17.0	-	約16	黄橙	灰黄褐	オ	並	ロクロナデ、 カキメ、ナデ	ロクロナデ、カキメ、 ケズリ	□8/36	口縁部内面~胴部上端ヨゴレ・外面煤付着	H170453
143	661	E-25-2	包含層	ロクロ土 師器	壺	14.8	-	(4.2)	黄橙	灰黄褐	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	□5/36	内外面ヨゴレ・煤付着	H170433
143	662	F-26-4	包含層	ロクロ土 師器	壺	14.8	-	(4.7)	黄橙	黄橙	ケ	良	ロクロナデ、 カキメ	ロクロナデ	□9/36	口縁部内面褐色ヨゴレ付着	H16066
143	663	F-26-2	包含層	ロクロ土 師器	壺	15.0	-	(4.3)	黄橙	橙	ケ	並	ロクロナデ、 カキメ	ロクロナデ、カキメ	□6/36	内面炭化物付着	H16068
143	664	F-22-4、 G-22-3	包含層(Ⅲ-1面 ベース土)	ロクロ土 師器	壺か	-	-	(4.3)	黄橙	黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	摩滅顕著	H16064
143	665	F-26-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	12.6	-	(4.3)	淡黄橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	□6/36	口縁~外面に煤付着。摩滅顕著	H16073
143	666	G-25-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	12.4	-	(4.6)	黄橙	黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	□6/36	口縁部内面炭化物・外面煤付着	H16085
143	667	G-25-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	12.0	-	(4.3)	橙	橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□6/36	内面薄ヨゴレ付着。外面剥離・摩滅	H16084
143	668	F-25-4	包含層	ロクロ土 師器	壺	11.4	-	(5.7)	黄橙	灰褐 橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□7/36		H170438
143	669	G-25-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	12.2	-	(4.0)	黄橙	灰褐	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ	□6/36	内面炭化物・外面煤付着	H16083
143	670	F-25	包含層(Ⅲ-1面 ベース土)	ロクロ土 師器	壺	約13	-	(6.0)	黄橙	橙	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	小片		H16085
143	671	F-26-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	-	9.2	(3.5)	橙	黄橙	オ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ、 回転系切り	底9/36		H16070
143	672	F-26-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	-	8.0	(2.1)	灰黄褐	橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系 切り	底9/36	破片化後、二次被熱・煤付着	H16072
143	673	G-25-1	包含層	ロクロ土 師器	壺	-	7.6	(2.4)	黄橙	黄橙	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系 切り	底18/36	内面薄炭化物・外面煤付着	H16087
143	674	F-26-4	包含層(Ⅲ-1面 ベース土)	ロクロ土 師器	壺	-	7.1	(2.3)	黄褐	灰黄褐	ケ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、静止系 切り	底11/12	外面煤付着	H16-0661
143	675	F-26-2	包含層	ロクロ土 師器	壺	-	7.4	(2.7)	淡黄橙	灰黄褐	オ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後ナデ	底18/36	内面炭化物・外面煤付着	H16067
143	676	F-26-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	-	5.8	(2.5)	灰黄褐	褐灰	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、静止系 切り	底部ほぼ 完	外面薄く煤付着	H16071
143	677	G-25-3	包含層	ロクロ土 師器	壺	-	6.0	(2.3)	灰黄褐	灰黄褐	オ	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系 切り	底36/36	内面炭化物・外面煤付着	H16086
143	678	F-26-4	包含層(Ⅲ-1面 ベース土)	ロクロ土 師器	壺	約33	-	(7.0)	黄橙	黄橙	オ	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	□1/12	内外面摩滅	H16083
143	679	F-26-1・3	包含層(東西セク b下)	ロクロ土 師器	壺	39.0	-	(5.0)	淡黄橙	淡黄橙	ア	並	ロクロナデ、 ケズリ	ロクロナデ	小片	内面炭化物付着	H170460
143	680	F-25-1	包含層	ロクロ土 師器	壺	32.0	-	(8.6)	黄橙	黄橙	ア	並	ロクロナデ、 ハケ	ロクロナデ、カキメ	□2/36	外面煤付着	H170435
144	681	E・F-25・ 26	包含層	ロクロ土 師器	壺	32.0	-	(11.4)	黄橙	黄橙	ケ	良	ロクロナデ、 カキメ	ロクロナデ、平行タ タキ、カキメ	□12/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	H16023
144	682	E-25-2・4	包含層	ロクロ土 師器	瓶	約25	-	(10.4)	淡黄橙	淡黄橙	ア	並	ロクロナデ	ロクロナデ	小片		H170439
144	683	F-26-4	包含層	非ロクロ 土師器	瓶	-	12.4	(5.1)	淡黄橙	橙	ウ	並	ナデ	ナデ、ケズリ	底4/36		H170449
144	684	F-25	包含層(Ⅲ-1面 ベース土)	ロクロ土 師器	瓶類か	約21	-	(4.5)	淡黄橙	淡黄橙	ケ	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ	小片	内面炭化物・外面煤付着。傾きに不安 を残す	H170148
144	685	F-25-3、 F-26-3	包含層	非ロクロ 土師器	瓶類か	-	-	(7.5)	黄橙	黄橙	オ	並	ナデ	ナデ	小片	注口状突起1ヶ所(径1.2cm)。上下不明	H170436
144	686	F-26-3	包含層(中央セク 下)	非ロクロ 土師器	瓶類把手	-	-	(5.0)	灰黄褐	黄橙	オ	並	ハケ	ハケ	小片	外面煤付着	H170448
144	687	G-25-3	包含層	非ロクロ 土師器	瓶類把手	-	-	(5.3)	黄橙	黄橙	ケ	良	ナデ	ナデ	小片		H16080
144	688	F-25	Ⅲ-1面排水溝(Ⅲ -2面包含層)	非ロクロ 土師器	瓶類把手	-	-	(4.9)	淡黄橙	淡黄橙	ア	良	ハケ	ナデ、ハケ	小片		H170239
145	689	F-25-3・4	包含層	須恵器	坏蓋	13.8	返し径 11.6	(1.4)	灰	褐灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ケズリ	□5/36	重ね焼きI類。返しより内側に墨様付 着あり	H170413
145	690	G-25-1	包含層	須恵器	坏蓋	17.8	-	(2.4)	灰	灰黄	n	並	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ナデ	□8/36	重ね焼きIIb類。天井部外面~口縁部 煤付着(倒位二次被熱)	H170421
145	691	G-25-1・3	包含層	須恵器	坏蓋	16.2	-	(2.1)	青灰	暗灰	e	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後ナデ	□2/36	重ね焼きIIb類	H170451
145	692	F-26-1・3	包含層(中央セク)	須恵器	坏蓋	15.6	鉛径 3.7	2.7	淡緑灰	淡灰	h	並	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ケズリ	□6/36	内面へラ記号「J」。重ね焼きI類	H16061
145	693	G-25-3	包含層	須恵器	坏蓋	-	鉛径 3.6	(2.0)	灰	黄灰	a	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ケズリ	□15/36	重ね焼きI類、外面降灰顕著。天井部 内面摩耗	H170452
145	694	F-25-2	包含層	須恵器	坏蓋	15.1	鉛径 3.2	2.0	灰	灰	f	並	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ナデ	□6/36	紐は変形。重ね焼きI類	H16033
145	695	F-26-1・3	包含層(東西セク b下)	須恵器	坏蓋	15.2	鉛径 3.4	2.7	淡灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後ナデ	□5/36	重ね焼きI類	H170396
145	696	F-25-2・4	包含層	須恵器	坏蓋	14.6	鉛径 3.2	2.9	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ナデ	□5/36	重ね焼きI類	H170357
145	697	E-26	排水溝(Ⅲ-2面包 含層)	須恵器	坏蓋	14.8	-	(1.9)	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ケズリ	小片		H170240
145	698	F-26-2・4、 G-25-3	包含層	須恵器	坏蓋	14.8	-	1.5	青灰	灰白	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ケズリ	□4/36	重ね焼きI類、外面降灰顕著	H170420
145	699	F-25-1	包含層	須恵器	坏蓋	14.8	-	(1.7)	淡灰	灰	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ナデ	□6/36	重ね焼きI類	H16028
145	700	F-24、G-26	排水溝(Ⅲ-2面包 含層)	須恵器	坏蓋	14.2	鉛径 3.1	3.1	青灰	灰	l	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ケズリ	□5/12	内面へラ記号「x」。重ね焼きI類、 外面降灰顕著	H170225
145	701	F-26-1	包含層	須恵器	坏蓋	14.0	鉛径 2.9	3.0	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ナデ	□2/36	内面へラ記号「J」。重ね焼きI類	H170394
145	702	F-25・26	包含層	須恵器	坏蓋	14.0	鉛径 3.0	2.9	淡灰	灰	f	並	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ケズリ	□15/36	重ね焼きI類。焼きゆがみあり	H16047
145	703	F-25-1・3	包含層(セクション 3)	須恵器	坏蓋	14.2	鉛径 3.0	2.6	暗灰	暗灰	f	良	ロクロナデ、 ナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ナデ	□13/36	重ね焼きI類	H170635
145	704	E-26-2、 F-25-3	包含層	須恵器	坏蓋	14.4	鉛径 3.0	1.7	灰	暗灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後ナデ	□24/36	天井部内面へラ記号「J」。重ね焼き I類	H170398
145	705	E-26-2、 F-25・26	包含層	須恵器	坏蓋	13.2	-	(2.0)	灰	灰白~オ リーブ灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後回転ケズリ か	□9/36	重ね焼きI類、外面降灰・自然輪顕著	H170399
145	706	F-26-2・3	包含層(中央セク)	須恵器	坏蓋	13.3	-	(1.2)	淡灰	淡灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へ ら切り後ナデ	□15/36	内面へラ記号「J」。重ね焼きI類、外 面降灰・自然輪顕著	H16053

第4節 第Ⅲ-2面の遺構と遺物

第34表 G地区 第Ⅲ-2面出土土器類観察表8

※ ( ) は残存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色调	外面色调	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
145	707	F-26-3	包含層(中央セク)	須恵器	坏蓋	14.0	-	(2.1)	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	天井部外面に墨書、1文字は「乙」か。	H16087
145	708	G-22	包含層(Ⅲ-1面ベース土)	須恵器	坏蓋	14.4	-	(1.4)	淡黄	青灰	f	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12	重ね焼きI類	H17D143
145	709	G-26-1	包含層	須恵器	坏蓋	14.4	-	1.5	灰	灰	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後粗いナデ	口2/36	重ね焼きIIb類	H17D418
145	710	F-25-26、G-25-2	包含層	須恵器	坏蓋	13.3	-	(1.0)	淡灰	灰	l	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口8/36	重ね焼きI類	H17D428
145	711	F-21-1・2	Ⅲ-1面ベース(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	坏蓋	12.9	銅径2.2	2.1	淡灰	淡灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナズリ	口2/12	内面ヘラ記号「J」、重ね焼きIIb類。天井部内面底残	H17D232
145	712	F-25-3、G-25-2	包含層(石列302群)	須恵器	坏蓋	11.9	-	(1.2)	青灰	青灰	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口7/36	重ね焼きIIb類	H17D427
145	713	F-25-4	包含層	須恵器	坏蓋	12.1	銅径2.1	3.0	灰	青灰	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ナズリ	口3/36	重ね焼きIIb類	H16D36
145	714	G-25-3	包含層	須恵器	坏蓋	12.1	-	(2.2)	淡灰	淡灰	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	重ね焼きIIb類	H17D425
145	715	F-25-2、G-25-2	包含層	須恵器	坏蓋	12.6	-	(2.0)	淡灰	淡灰	d	並	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口12/36	重ね焼きIIb類	H17D429
145	716	E-21・22	包含層(Ⅲ-1面ベース土)	須恵器	坏蓋	12.7	-	(2.1)	灰	灰	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12	内面煤付着	H17D146
145	717	F-26	Ⅲ-1面ベース土(第2層灰色砂質土+淡灰粗砂の混合土)	須恵器	有台坏	-	9.9	(2.8)	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底6/12	外底ヘラ記号「大」。内底磨耗	H17D0119
145	718	F-25	Ⅲ-1面ベース(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	坏蓋	21.2	-	(1.7)	青灰	青灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/12	重ね焼きIIb類	H17D0122
145	719	F-25・26	包含層(東西セク)	須恵器	有台坏	15.9	8.6	7.2	淡灰	淡灰	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底15/36	外面降灰。内底等磨耗	H16D41
145	720	G-26	排水溝(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	有台坏	15.0	10.4	5.8	灰白	灰	l	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	口縁部・台部磨耗	H17D226
145	721	F-26-3	包含層	須恵器	有台坏	14.0	9.5	3.8	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底27/36	外面黒化。焼きゆがみあり	H16D58
145	722	F-25-3	包含層	須恵器	有台坏	-	9.7	(2.1)	淡黄橙	淡黄橙	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底30/36	二次焼熱・外面煤付着。磨耗顕著	H16D46
145	723	F-26-3	包含層	須恵器	有台坏	12.5	8.1	3.5	暗青灰	暗青灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口12/36	外底ヘラ記号	H16D59
145	724	F-25-3	包含層	須恵器	有台坏	11.8	7.4	3.8	淡灰	暗灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口9/36	外面降灰・黒化	H16D38
145	725	E-25-2	包含層	須恵器	有台坏	-	7.9	(3.8)	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口14/36	内面煤付着、墨入れ容器に転用か	H17D403
146	726	G-25-1・3	包含層	須恵器	有台坏	11.2	7.2	4.2	灰	灰	l	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底24/36		H16D89
146	727	F-21	Ⅲ-1面ベース(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	有台坏	11.4	7.3	4.1	暗青灰	暗青灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ		小片	H17D236
146	728	F-25-2、G-25-1	包含層	須恵器	有台坏	11.4	7.8	4.2	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底30/36	外面降灰	H16D88
146	729	F-25・26	包含層	須恵器	有台坏	11.0	7.4	4.5	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36		H16D52
146	730	G-25-4	包含層	須恵器	有台坏	10.4	6.2	4.5	灰	暗灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	台部中心よりずれる。外面降灰	H17D432
146	731	G-26-1	排水溝(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	無台坏	12.5	7.7	3.5	淡灰	黄灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/12		H17D0132
146	732	F-26-2、G-24・25	包含層	須恵器	無台坏	11.9	8.6	3.2	灰	灰~橙	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後T字ナデ	底30/36		H16D69
146	733	E・F-25	包含層	須恵器	無台坏	11.5	9.1	3.6	暗灰	灰	a	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口21/36	外底ヘラ記号「//」	H17D355
146	734	E-22-2	Ⅲ-1面ベース(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	無台坏	14.2	6.0	3.3	淡灰	灰	n	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底3/12	外底に墨書判読できず	H17星10
146	735	F-26-1	包含層(中央セク)	須恵器	無台坏	14.2	10.7	3.5	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口4/36	外面黒化	H17D352
146	736	F-26-3・4	包含層(中央セク下)	須恵器	無台坏	13.2	9.2	4.2	黄橙	淡灰~黄橙	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口16/36	外底磨耗顕著、一部煤付着	H17D360
146	737	F-25-1・3	包含層	須恵器	無台坏	13.2	10.4	3.9	淡黄灰	淡黄灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後T字ナデ	口6/36	内外面煤付着(煮炊容器転用)	H16D26
146	738	F-25-3	包含層	須恵器	無台坏	12.8	9.0	3.3	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口9/36	外底に墨書3文字、判読できず。口縁部被熱	H16星2
146	739	F-26-3	包含層(中央セク)	須恵器	無台坏	12.1	10.4	3.8	淡黄灰	暗灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底21/36		H16D60
146	740	F-25-1・2	包含層	須恵器	無台坏	12.8	8.2	3.6	淡黄灰	淡灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口7/36	外面黒化	H17D351
146	741	F-26-4	Ⅲ-1面ベース土	須恵器	無台坏	12.0	8.7	3.3	灰	灰	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底7/12	外底に墨書「壘平口(寺)」。内底平滑	H17星8
146	742	F-26-4	包含層(Ⅲ-1面ベース土)	須恵器	無台坏	12.0	8.6	3.4	明青灰	明青灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口7/12	外底に敷物圧痕残る	H17D147
146	743	F-26-4	Ⅲ-1面ベース土	須恵器	無台坏	12.4	8.9	3.2	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12	内外底磨耗	H17D0116
146	744	F・G-24	排水溝(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	無台坏	12.4	9.2	3.3	淡黄	淡黄	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12	体部内外面煤付着	H17D223
146	745	G-25-2	包含層(右列2ベルト)	須恵器	無台坏	11.3	8.3	3.2	淡灰	淡灰	d	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36	外底に墨書3文字、土万呂か	H16星9
146	746	F-26-3	包含層	須恵器	無台坏	12.0	7.7	2.8	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底14/36		H17D395
146	747	G-26	排水溝(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	無台坏	11.0	7.7	2.5	青灰	青灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	口2/12		H17D228
146	748	F-26-4	包含層	須恵器	無台坏	11.8	7.8	3.0	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底9/36	外側面煤付着	H17D358
146	749	F-21-1・2	Ⅲ-1面ベース(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	無台坏	-	9.9	(2.8)	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底部完	外底ヘラ記号「J」。外面煤付着、墨書は判読できず	H17D233
146	750	F-26-4	包含層	須恵器	無台坏	11.7	8.8	3.1	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後T字ナデ	口6/36	口縁部内外面に帯状煤付着(煮炊容器転用)、外底に墨書「田地」	H16星4
146	751	G-25-4	包含層	須恵器	無台坏	12.6	8.2	3.3	青灰	青灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口15/36	内底磨耗顕著	H16D79
146	752	F-25-1	包含層	須恵器	無台坏	12.4	8.0	3.6	灰~灰褐	灰~灰褐	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口18/36	内底平滑。内外面に煤付着(灯明容器転用か)	H16D24
146	753	F-25-3、G-25-3	包含層	須恵器	無台坏	12.5	8.6	3.1	灰白	灰白	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底21/36	器面平滑	H16D81
146	754	G-25-3	包含層	須恵器	無台坏	-	7.8	(2.5)	灰	灰	d	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底25/36	内底磨耗顕著	H17D423
146	755	F-25・26	包含層	須恵器	無台坏	12.7	8.2	3.4	灰	灰	k	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後T字ナデ	口6/36	焼成時の黒色噴出し目立つ	H16D44
147	756	F-25-1~4	包含層	須恵器	無台坏	12.8	8.6	3.6	黄灰~黄橙	黄灰~黄橙	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口8/36	底部還元弱い	H17D400
147	757	F-25-2、G-25-1	包含層(石列302群)	須恵器	無台坏	12.8	9.4	3.7	淡灰	淡灰	d	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口21/36	外底に墨痕。内外面煤付着	H17D431
147	758	F-26-1・3	包含層	須恵器	無台坏	12.1	7.0	3.4	淡青灰	淡青灰	d	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36		H16D56
147	759	F-25-2	包含層	須恵器	無台坏	12.4	8.5	3.2	灰白	灰白	e	不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口12/36	外面磨耗顕著	H16D31
147	760	F-26-4	包含層	須恵器	無台坏	12.8	7.0	3.2	橙	橙	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36	還元弱い	H16D64



第35表 G地区 第Ⅲ-2面出土土器類観察表9

※ ( ) は残存量を示す。

挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
147	761	E-26	包含層(Ⅲ-1面ベース土)	須恵器	無台環	13.9	7.9	2.8	灰	灰	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底4/12	内面磨耗、外面煤付着	H16069
147	762	F-26-2	包含層	須恵器	無台環	13.3	7.5	2.9	灰	灰	n	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底36/36	内外面煤付着、灯明等容器転用か。底部外縁磨耗顕著	H16063
147	763	G-25-1	包含層	須恵器	無台環	13.2	7.6	2.9	灰	灰	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	黒色吹き出し目立つ	H170422
147	764	E-26	包含層(Ⅲ-1面ベース土)	須恵器	無台環	11.6	7.4	2.6	青灰	青灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/12		H170144
147	765	E-26-3	包含層	須恵器	無台環	11.2	7.0	2.8	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口9/36		H170359
147	766	F-26-4	包含層	須恵器	無台環	-	8.0	(1.3)	灰白	淡灰	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底4/36	外底に墨書「口(田カ)仲」	H17墨60
147	767	F-26-3	包含層	須恵器	無台環	-	8.8	(1.5)	淡灰	淡灰	n	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底8/36	外底に墨書、判読できず	H17墨59
147	768	G-25-3	包含層	須恵器	無台環	-	7.6	(1.2)	灰白	灰白	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底18/36	外底に墨書、被熱のため判読できず	H17墨58
147	769	F-26-1	包含層	須恵器	無台環	-	-	(1.2)	黄灰	灰黄	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	小片	外底に墨書「口ワユ」。内底平滑	H16墨8
147	770	F-21-1	Ⅲ-1面ベース(Ⅲ-2面包含層)	須恵器	無台壁	13.0	10.1	2.6	青灰	青灰	n	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/12	内外底磨耗	H170231
147	771	F-25-2	包含層	須恵器	無台壁	14.8	10.4	2.5	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底21/36	内底磨耗顕著	H16032
147	772	F-25・26	包含層	須恵器	無台壁	14.2	11.2	1.8	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底15/36	内底磨耗顕著	H16057
147	773	F-25-3	包含層	須恵器	無台壁	14.9	10.9	2.6	青灰	青灰	j	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底21/36		H16040
147	774	F-26-4	包含層	須恵器	無台壁	14.8	9.9	2.4	灰	灰	n	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底6/36	外面に煤付着(二次被熱)	H16075
147	775	G-25-3	包含層	須恵器	無台壁	14.9	10.3	2.4	淡灰	淡灰	n	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36	内底磨耗	H170417
147	776	F-25-1	包含層	須恵器	無台壁	16.5	12.6	1.8	灰	灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底6/36	口縁部に煤付着	H16027
147	777	F-25-3・4	包含層	須恵器	無台壁	12.9	8.7	2.7	緑灰	青灰	d	並	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口9/36	内外面煤付着(煮沸容器に転用)	H16039
147	778	E-26、F-25	包含層	須恵器	瓶	-	-	(15.4)	淡灰	灰	c	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ	-	焼土・自然輪着(正位無蓋焼成)	H170366
147	779	F-25-2	包含層	須恵器	瓶	-	10.8	(7.3)	灰	灰~褐灰	g	良	ロクロナデ、カキメ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	底36/36	台設置部磨耗顕著	H16030
147	780	F-26-2・3、G-25-3	包含層(中央セク下)	須恵器	短頸壺	16.2	9.0	約19g	灰	淡灰~暗灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	底7/36	内外面自然釉、降灰(正位無蓋焼成)。底部は同一個体の可能性あり	H170363
148	781	G-26-1、F-26-1	包含層、試掘坑	須恵器	瓶	15.0	-	(7.0)	灰	灰オリーブ	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口4/36	外面自然釉	H170392
148	782	F-26-2	包含層	須恵器	双耳瓶	15.0	-	(8.1)	暗灰	暗青灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口6/36	沈線1条で加飾。内外面降灰(正位焼成)	H170393
148	783	F-26-3	包含層	須恵器	双耳瓶	12.4	-	(14.1)	青灰	青灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	口30/36	内外面降灰(正位無蓋焼成)	H16054
148	784	F-25・26	包含層、O・I面ベース土	須恵器	瓶	-	9.0	(21.1)	灰	灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	底8/36	外面自然釉着(正位焼成)	H170367
148	785	E-25-3、F-26-1	包含層	須恵器	瓶	9.3	-	(14.7)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	口15/36	有台。閉塞円盤痕残る。内外面自然釉着(正位無蓋焼成)	H160301
148	786	F-26	包含層	須恵器	瓶	-	7.6	(11.1)	灰	灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	底9/36	内外面自然釉・降灰(正位無蓋焼成)	H16055
148	787	F-23・G-26	試掘坑、包含層	須恵器	瓶	7.6	-	(8.5)	青灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	口6/12	沈線2条で加飾。外面しぼり痕顕著に残る。正位無蓋焼成。口縁部欠け目立つ	H170D130
148	788	E-25-2	包含層	須恵器	横瓶	-	-	(19.0)	灰	暗オリーブ	f	並	ロクロナデ	平行タタキ、ロクロナデ、カキメ	口18/36	平行b・c類。外面降灰・自然輪着(横位焼成)	H170401
148	789	G-25-3	包含層	ロクロ土師器	壺	-	-	(5.5)	黄橙	黄橙	オ	良	放射状タタキ	格子タタキ	-	破片化後に二次被熱、煤付着	H16091-2
144	790	E・F-25・26	包含層	ロクロ土師器	壺	32.0	-	(11.4)	黄橙	黄橙	ケ	良	ロクロナデ、扇形文タタキ、ハケ	ロクロナデ、平行タタキ	口12/36	内面ヨゴレ・外面煤付着宇	H16023-2
148	791	F-25-4	包含層	土師器	土鍾	長5.9	径3.1	-	淡黄	粗砂・礫多	並	ナデ	ナデ	ほぼ完	孔径1.1~1.3cm、残存重量51.7g	H16050	
148	792	F-25-1	包含層	磁石	-	(長9.7)	(幅9.6)	厚4.6	淡灰緑	-	-	-	-	-	凝灰岩。残存重量381g	H17石9	

第36表 G地区 第Ⅲ-2面出土木製品観察表

※ ( ) は残存量を示す。

挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種同定	備考	実測番号
140	616	F・E-24	河跡3001(古)最下層	杭	(50.5)	6.7	-	クリ	角材(芯持ち)。断面略方形。先端加工。腐食顕著	H16木-26
140	617	F-25	河跡3001(古)底杭北側	杭	(47.0)	5.5	-	クリ	角材(ミカン割り)。断面略方形。先端加工	H16木-28
140	618	-	河跡3001(古)北肩部	杭	(27.5)	7.8	-	マツ属複雑管束型属	芯持ち丸木。多方向から先端加工	H16木-25
140	619	F-24-1	河跡3001(古)南側部黒灰色土	杭	(18.8)	5.9	-	-	芯持ち丸木。樹皮残存。2方向から先端加工	H16木-27
140	620	F-25	河跡3001(古)南側部(黒灰色土)	杭	(33.8)	2.0	-	-	芯持ち。先端1方向から加工	H17木-50
140	621	F-25	河跡3002(古)南側部(黒灰色土)	杭	(12.6)	1.3	-	-	芯持ち。先端1方向から加工	H17木-51

## 第5節 第IV面の遺構と遺物 (第150～218図、第37～50表)

### 1 概要(第150・151図)

G地区第IV面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。河跡3001(古)北側(E～G-25～27区)では第IV面遺物包含層を第Ⅲ-2面直下で確認したのに対して、河跡3001(古)南側(E～G-20～23区)については第IV面包含層の上層に土砂堆積層(土石流災害3)が存在した。ベース面(遺構検出面)の標高は、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で14.26m(第Ⅲ-1面ベース面より-28cm)、G-23区杭脇で15.35m(同-30cm)、南東端(G-26区杭南東3m)で15.30m(同-45cm、第Ⅲ-2面ベース面より-20cm)、北端(F-26区杭西8m)で14.50m(同-45cm・-25cm)、北東端(F-27区杭脇)で14.90m(同-30cm・-20cm)を測る。調査区のベース面の標高差は、Gライン(北東-南西方向)が約0.4m、26ライン(南東-北西方向)が約0.8mを測り、第Ⅲ-1面と同様に南西及び北西側に向けて緩やかに傾斜する地形となる。

調査の結果、7世紀末～平安時代前期に属する掘立柱建物(SB)26棟、柵列(SA)7基、井戸(SE)1基、耕作に伴う小溝(SD)約60条、多数のピットの他、貼床をもつ遺構1基(SX4001)、整地作業の痕跡3ヶ所(SX4002～04)等を確認しており、相欠式横板組(横板蒸籠組)の井戸は本遺跡の一連の調査で初めての事例となる。本地区の遺構密度は、A～D・F地区から連続して高い状況を維持しており、本遺跡の最盛期の集落規模は北東-南西方向で約300mに及び、さらに、周辺地では四柳ミッコ遺跡、大町ゴンジョガリ遺跡等で集落が営まれる。なお、本地区の集落・耕作域は、第4節で述べたとおり、10世紀初頭(VI<sub>2</sub>期)に発生した河跡3001(古)を本流とする土石流災害で大部分が被覆される。遺物は、墨書土器や円面硯・転用硯を含む多数の須恵器・土師器の他、製塩土器、土錘、砥石、鉄滓、フイゴの羽口、鉄刀、柱根や、井戸からの杵材に加えて祭祀的要素をみいだせる斎串、錐柄、横櫛等が出土した。

### 2 掘立柱建物(SB)・柵列(SA)(遺構:第163～190図、第37表、遺物:第191～193・196図)

復元した掘立柱建物は26棟であり(第151図・第37表)、SB401～412が河跡3001(古)南側に、SB413～426が河跡3001(古)北側に分布する。調査区中央が河跡3001(古)で分断されることに加えて、調査区外に延びる建物が多いことから、規模を把握できた棟数は限られる。

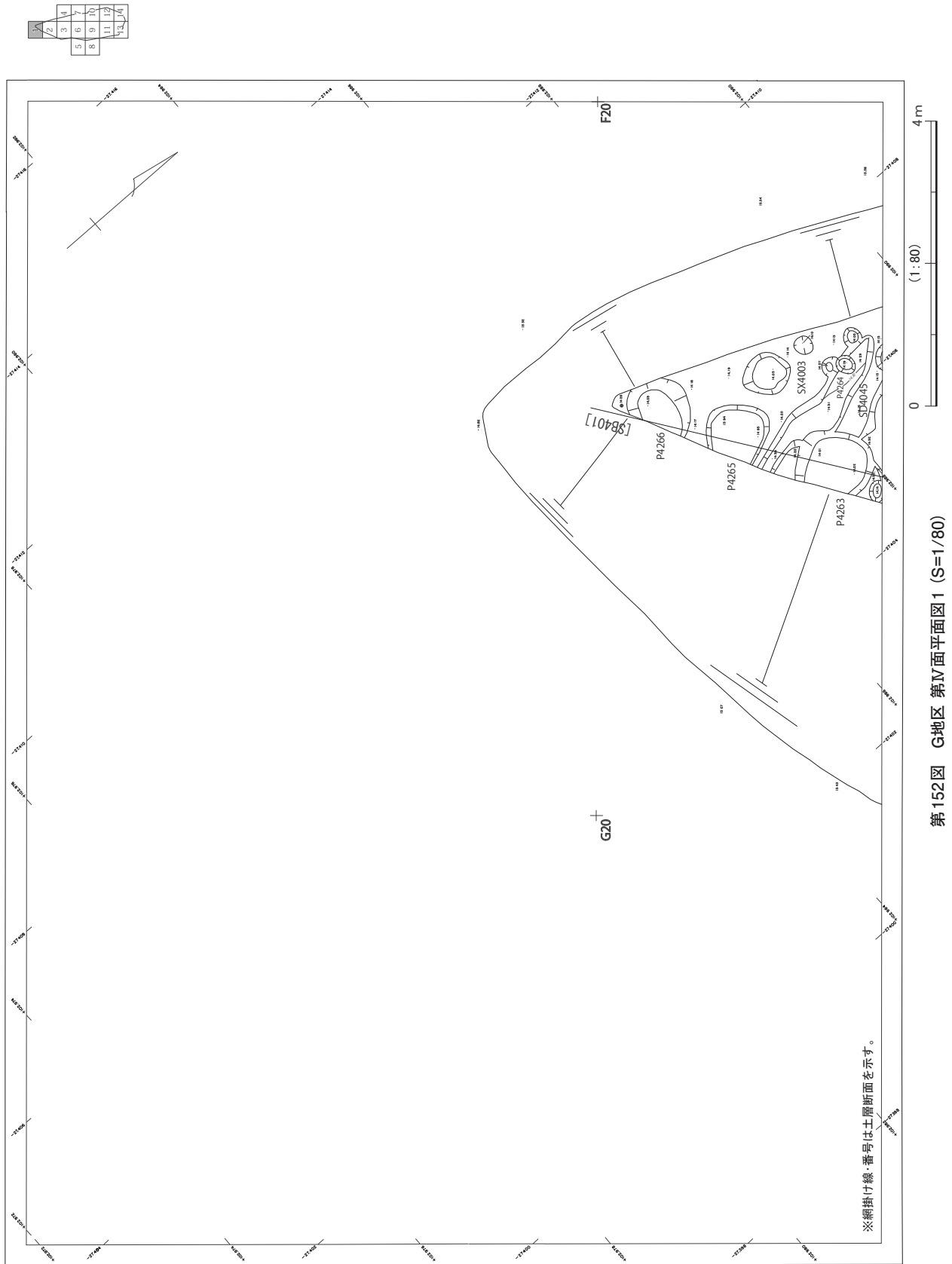
分布状況からみれば、F地区北端～G地区南半に建物が展開しない空閑地が存在する可能性が高いことが指摘できる。グリッド番号でいえばG-20～23区を中心とし、A～D・F地区で連続的に建物が展開する状況とは異なる。その空閑地にSE4001が掘られる点で示唆的である。

建物構造が把握できる21棟は全て側柱構造であり、明確な総柱構造をもつ建物は存在しない。この様相は、A～F地区第IV面の様相と共通しており、A～F地区の調査で確認した総柱構造をもつ建物は、倉庫と考えられるC地区第IV面SB3(2×2間、8.4㎡)に限られる。G地区の建物規模は、身舎の床面積で30㎡前後が3棟(SB407・408・420)、15～18㎡が3棟(SB409・417・419)、15㎡未満が3棟(SB406・412・418)となる他、大型の掘方をもつSB403が40㎡を超える建物となる可能性をもつ。各建物の柱穴掘方の平面形態は、不整円形を基調としており、方形を指向する掘方は比較的少ない。また、他地区と同様に柱根はほとんど遺存せず、ベース土が掘りやすい土質であること等から、大部分の柱は抜き取られたと考えられる。柱根が出土したピットは、SA405柱穴P4067、掘立柱建物に復元できなかったP4205、P4225に限られる。柱穴からは、比較的多くの須恵器、土師器片が出土しており、SB408柱穴出土の須恵器壺(第192図813)は埋納された可能性をもつ。



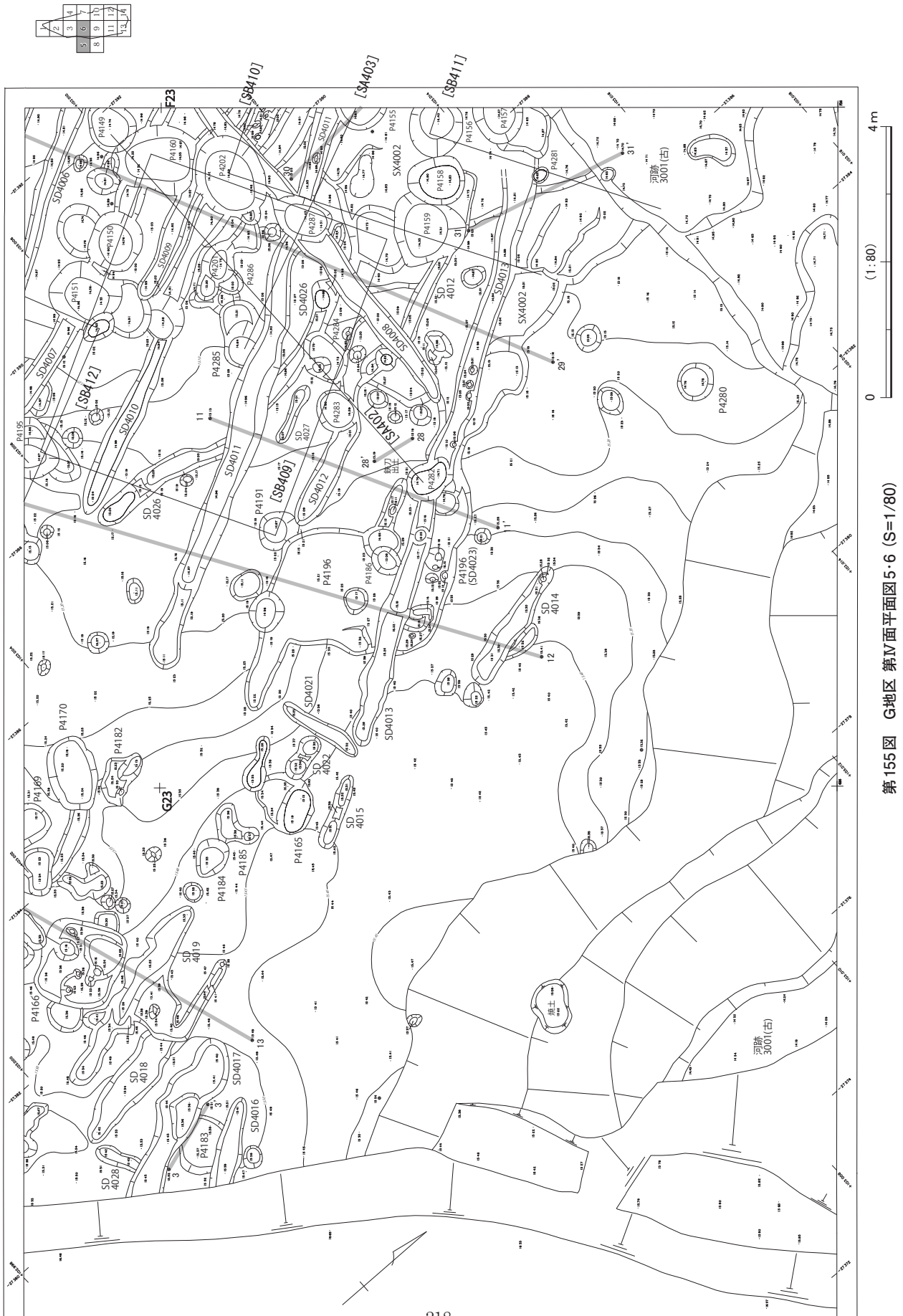


第151図 G地区 第IV面主要遺構配置図(S=1/300)





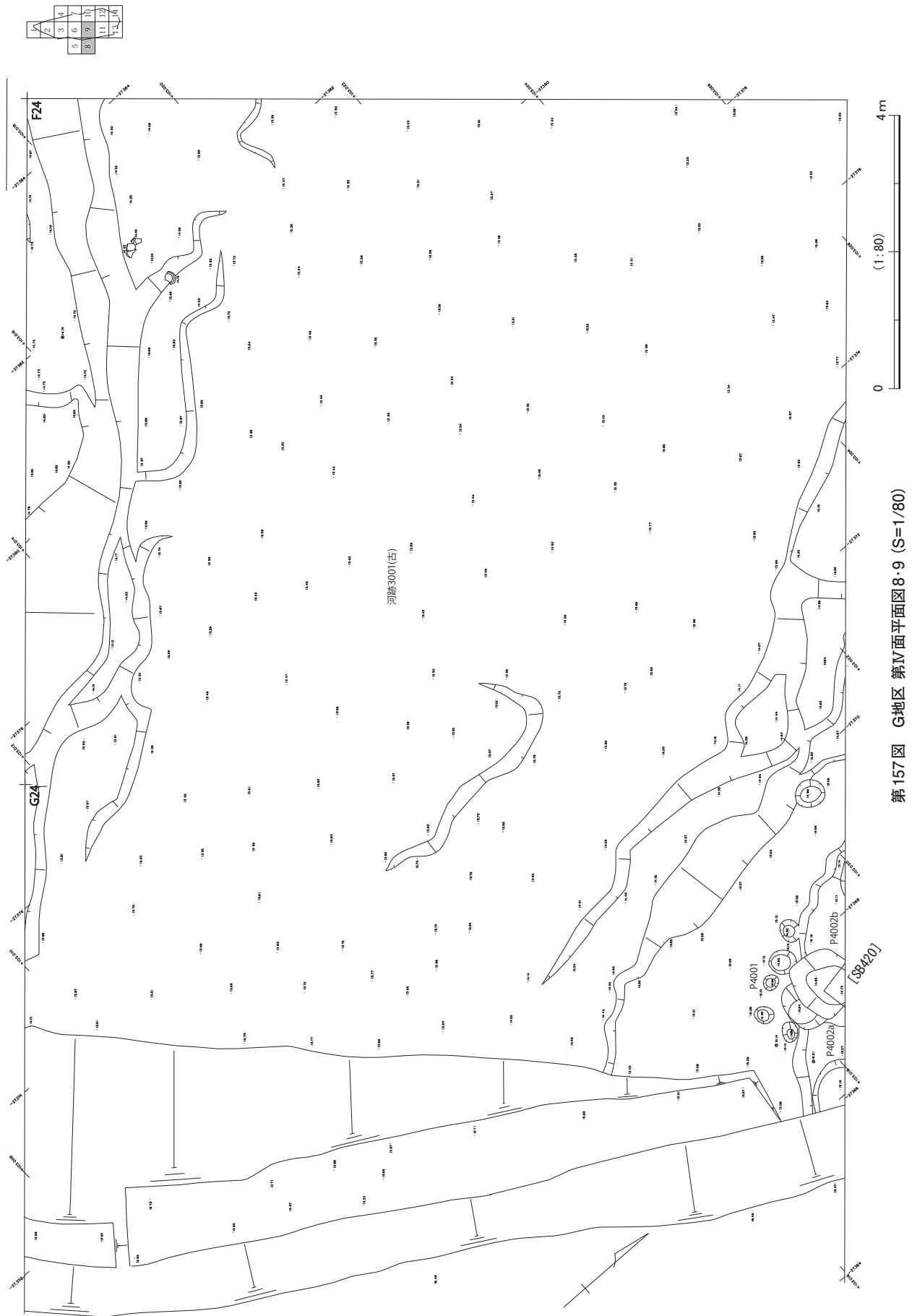




第155図 G地区 第IV面平面区5・6 (S=1/80)

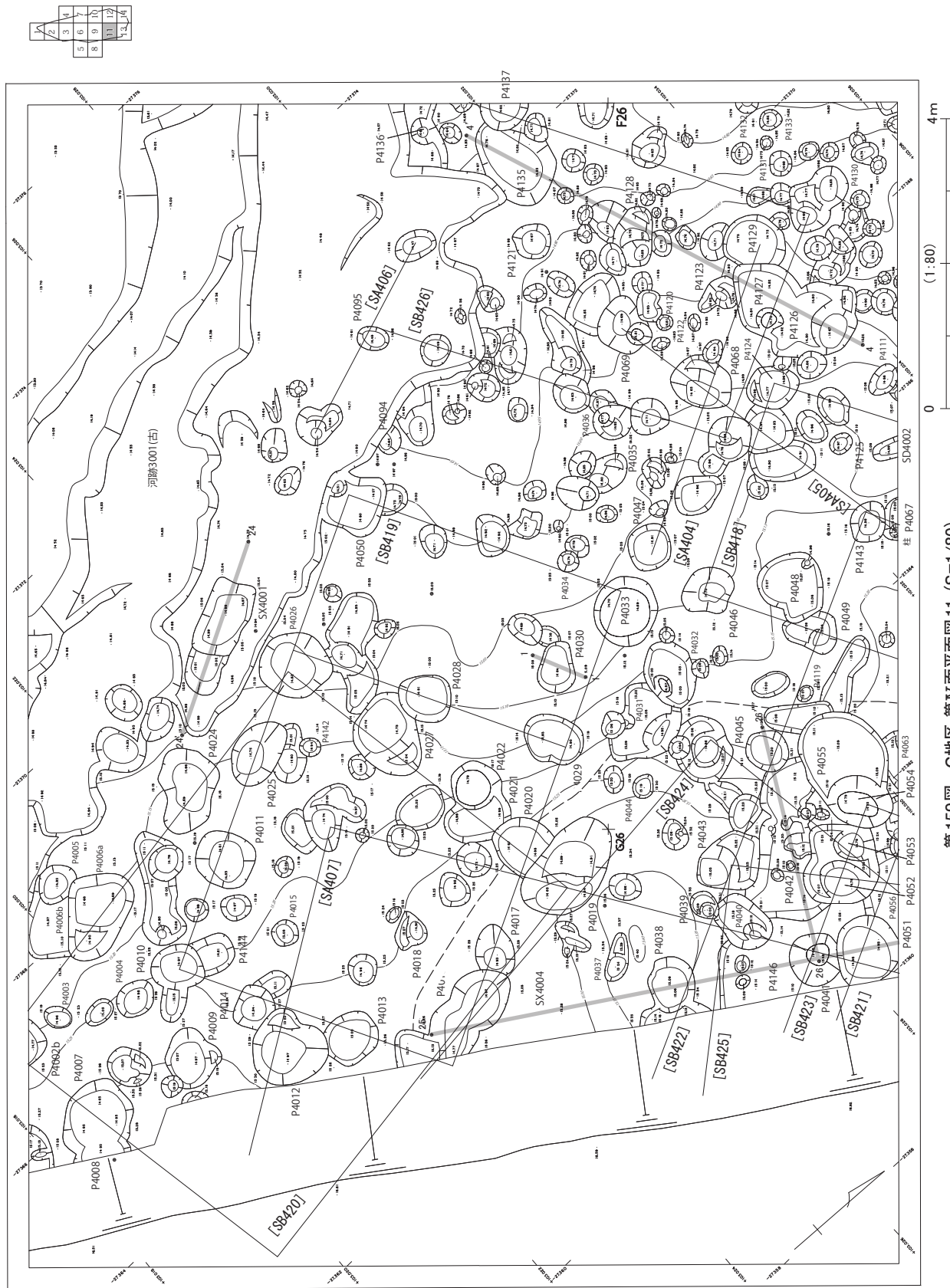




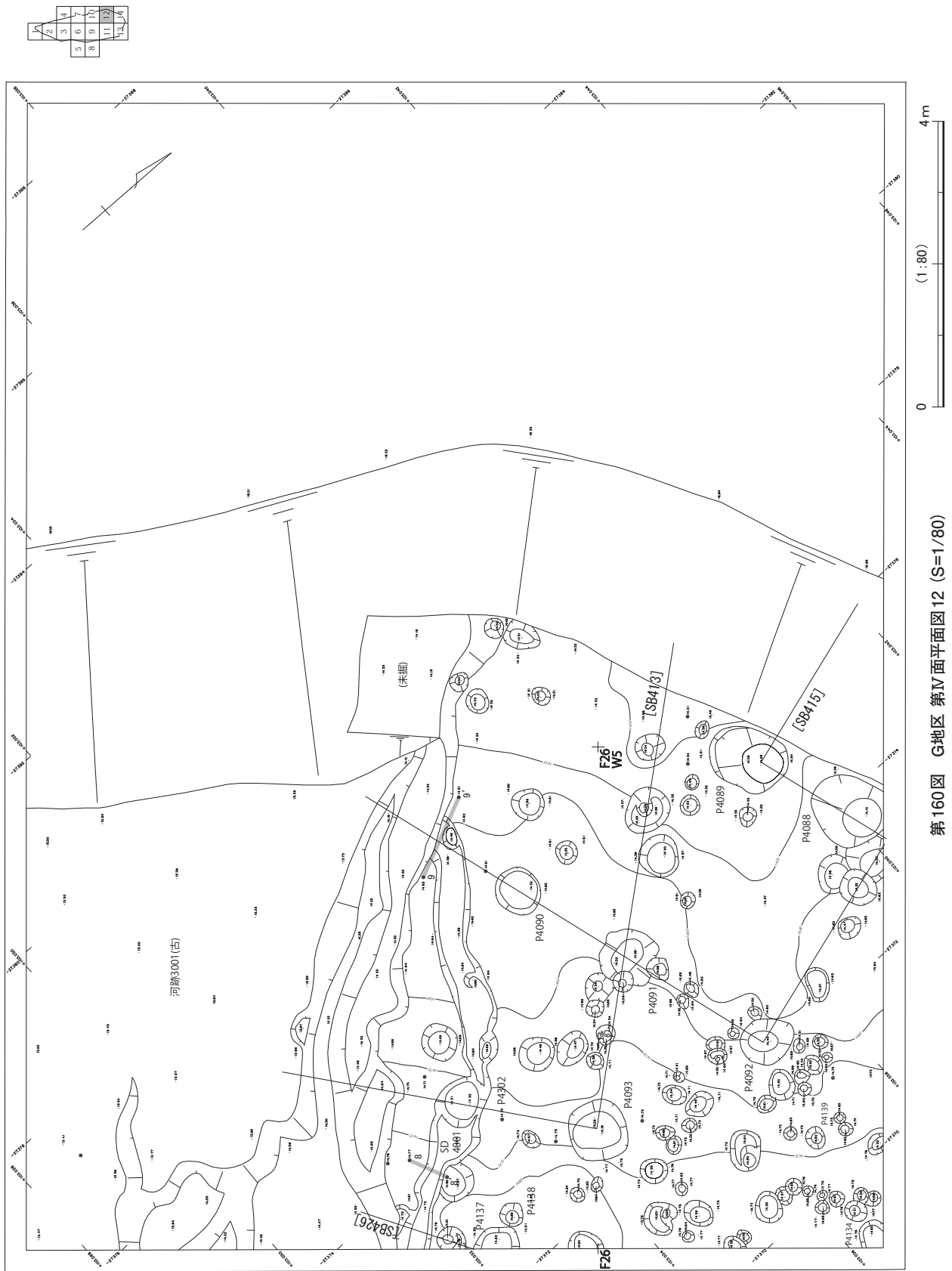


第157図 G地区 第IV面平面区8・9 (S=1/80)



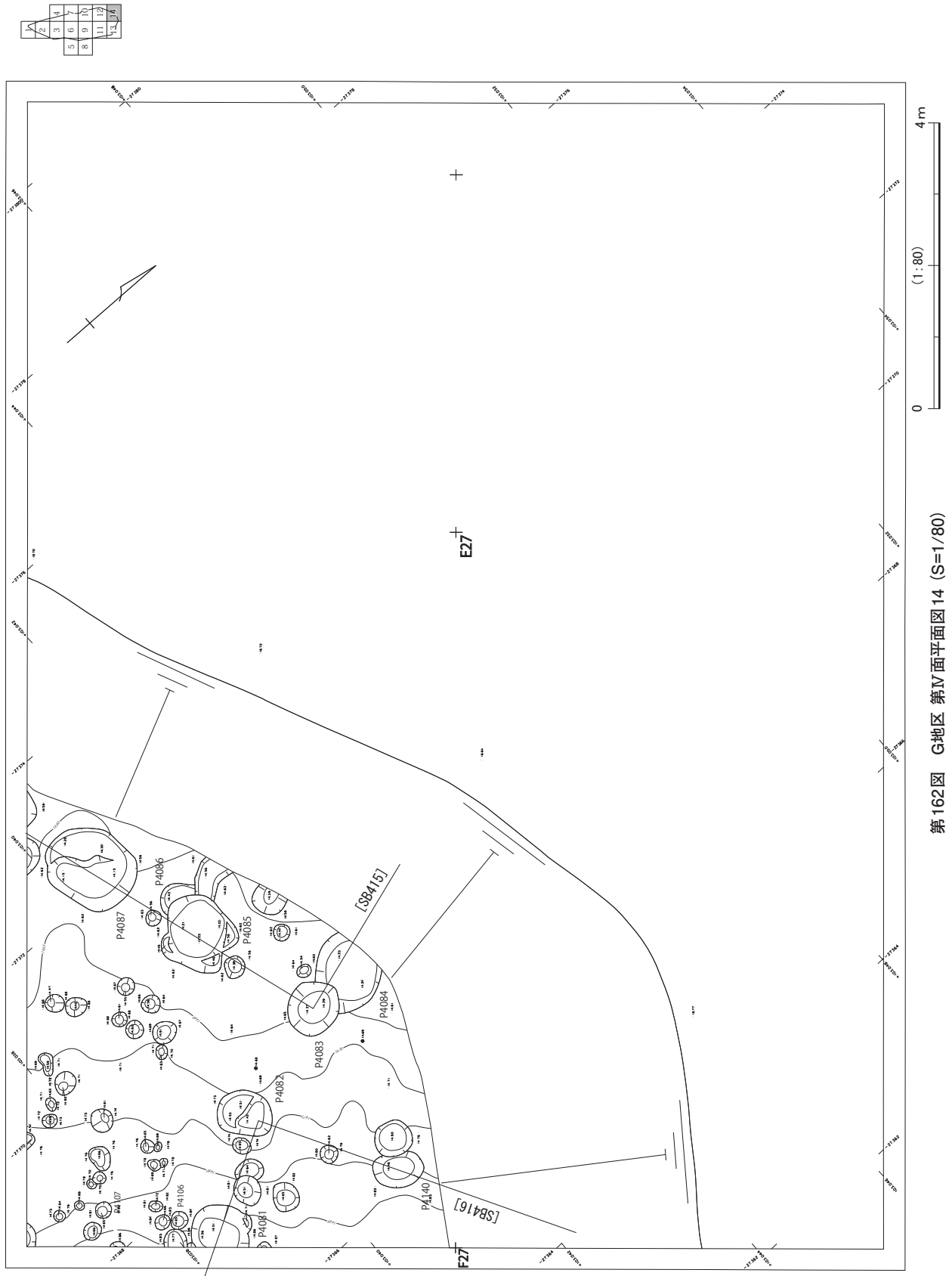


第159図 G地区 第IV面平面図 11 (S=1/80)



第160図 G地区 第IV面平面図12 (S=1/80)





第162図 G地区 第IV面平面図14 (S=1/80)

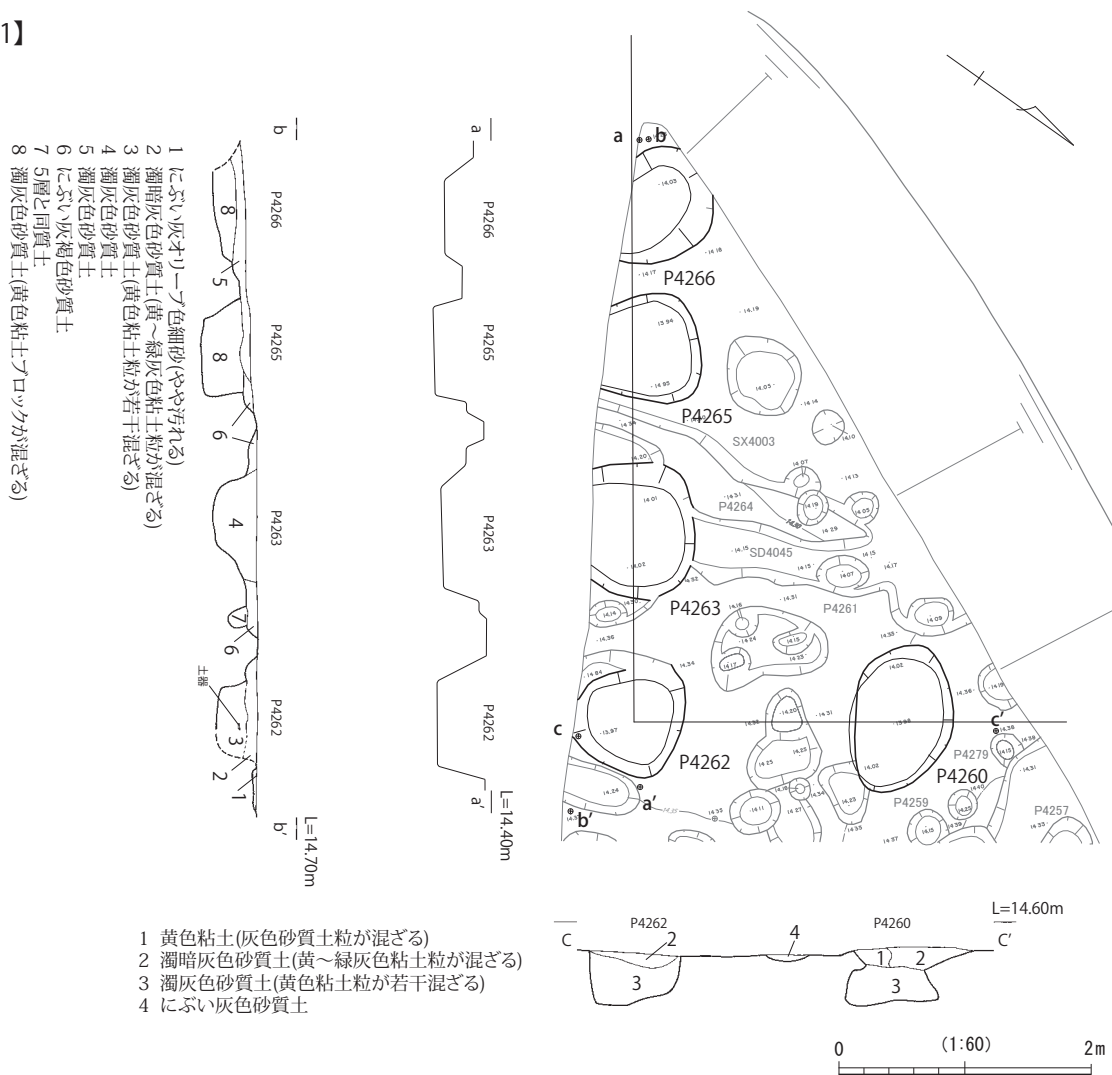
なお、現地調査で明確な平面プランを認識できた建物に加え、調査区壁際の側柱建物については整理段階で復元をおこなった。そのため、建物となりうるか不安を残すものについては、各遺構の説明に付記した他、掘立柱建物として復元した柱穴以外にも、柱穴と考えられるピットが一定数存在することから、存在した掘立柱建物数はさらに多くなるものと推定している。

**SB401**(遺構：第163図、遺物：第191図)

F-20区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外西側に延びる。主軸方位はN-35° Wを示し、桁行1間以上(2.10m～)×梁間3間以上(4.15m～)を測る。桁行の柱間寸法2.10mに対して、梁間の柱間寸法は1.25m・1.45mとかなり短く、柱筋の通りは比較的よい。柱穴の平面形態は、不整円形または不整楕円形を主体とし、P4260が長径120cm、短径75cm、深さ42cmを測るように、径80～110cmの大型の掘方をもつ。柱穴覆土は柱採取埋土であり、下層から黄色粘土粒が混ざる濁灰色砂質土、黄～緑灰色粘土粒が混ざる暗灰色砂質土を基本に、P4260では埋土に黄色粘土粒を混ぜる。柱根、柱根痕跡とも確認できず、遺構の切り合い関係から柱穴P4265・66が整地土SX4003より、柱穴P4263がSD4045より、それぞれ古く位置付けられる。

柱穴出土遺物のうち、P4262・63出土の第191図793～797の非ロクロ土師器を図化、うち793～796は甕である。古墳時代後期の甕793は球胴形を呈し、細かい単位の手刻み原形を用いる。794は口径約

**【SB401】**



第163図 G地区 第IV面SB401平面図・土層断面図 (S=1/60)



第37表 G地区 第IV面SB・SA規模等一覧表

※ 柱間寸法は北端から南端柱穴、または東端から西端柱穴の順に計測。( )は推定。

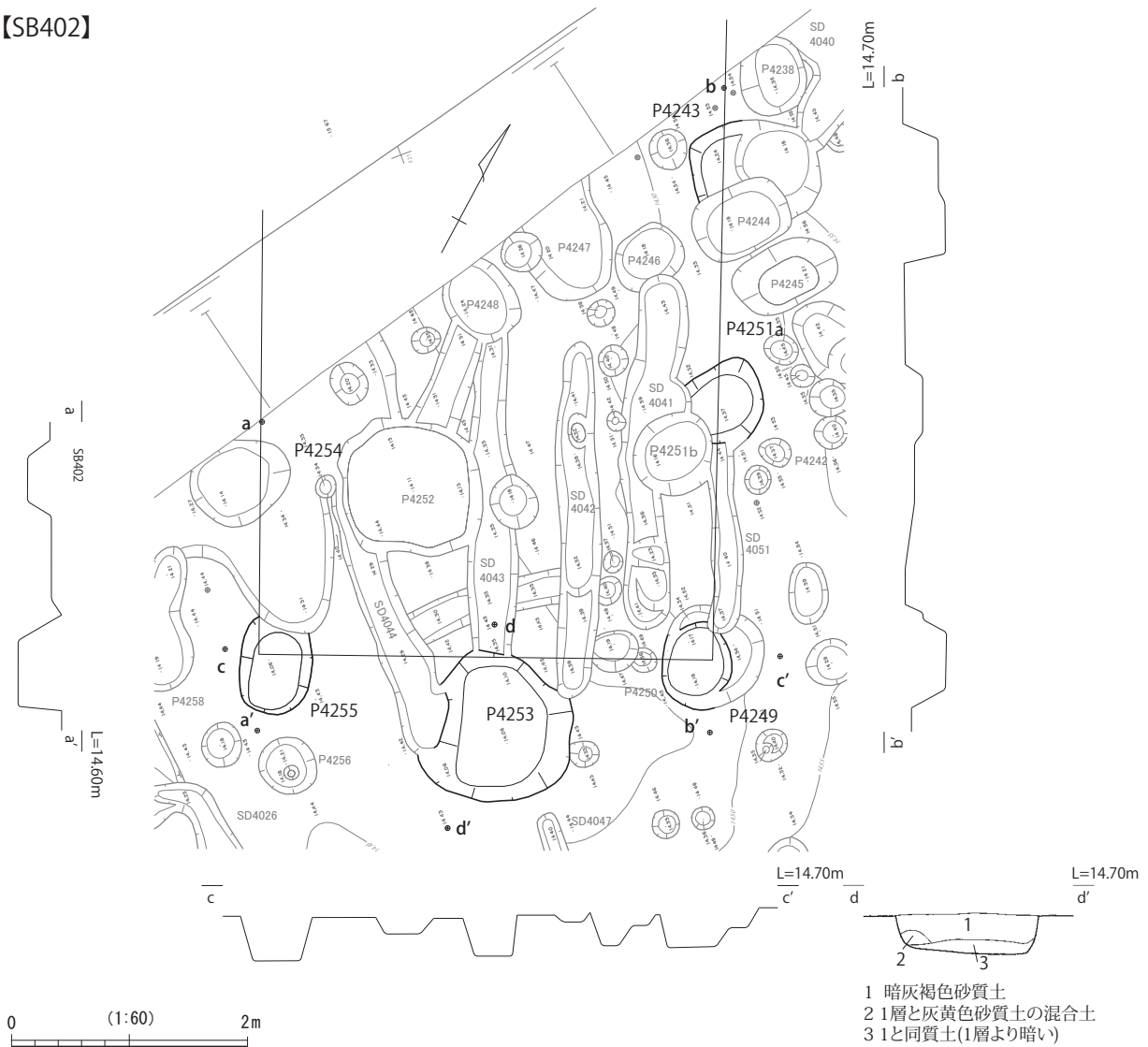
遺構名	図No	グリッド名	柱構造	柱配置	床面積 (㎡)	桁行長 (m)	桁行柱間寸法 (m)	梁行長 (m)	梁間柱間寸法 (m)	主軸方位	柱穴の 平面形態	柱根の 有無	備考
SB401	163	F-20	側柱	1~×3~間	8.7~	2.10~	[北東桁] 2.10+	4.15~	[南東梁] 1.45+1.45+1.25+	N-35.0°西	不整形円形	なし	P4265・66はSX4003より古。 P4263はSD4045より古。
SB402	164	E・F-20・21	側柱	2~×2間	15.6~	4.10~	[東桁] +2.05+2.05	3.80	[南梁] 1.95+1.95	N-27.0°西	不整形円形 隅丸長方形	なし	梁間は柱筋通らない。P4251a がSB403(P4251b)より古。 P4249・4251aよりSD4051が新。
SB403	165	F-20・21	側柱	3~×2間 (北梁・廂)	29.5~ (40.1~)	6.15~ (8.35~)	[東桁] (2.20)+2.05+2.05+2.05+	4.80	[北梁] 2.40+2.40	N-38.0°西	不整形円形 略方形	なし	P4239がSD4038より古。P4253 がSD4043より古。P4253断面か らSB402より新の可能性高い。
SB404	166	E・F-20・21	側柱か	1~×1~間	4.5~	2.60~	[南東桁] 2.60+	1.75~	[北東梁] +1.75	N-58.0°東 (N-32.0°西)	不整形円形 不整形楕円形	なし	P4239がSD4043・44より古。 P4238がSD4040より古。
SB405	166	E-21、 F-21・22	側柱	2~×1間	18.0~	4.80~	[南桁] 2.40+2.40+	3.75	[東梁] 3.75	N-70.0°東	不整形円形	なし	P4240がSD4038より古。
SB406	167	E・F-21・22	側柱	1×2間	13.0	3.70	3.70	3.50	[南西梁]1.75+1.75 [北東梁]1.90+1.60	N-31.5°西	不整形円形	なし	P4220がSB407(P4222)より新。 SD4032より古。
SB407	168	E-22、 F-21・22	側柱	3×3間	31.7	7.05	[東桁] 2.50+2.05+2.50	4.50	[南梁] 1.50+1.50+1.50	N-31.5°西	不整形円形 不整形円形	なし	SB406より古。P4162がSD4031 より古
SB408	169	E-22、 F-21・22	側柱	3×3間	27.6	6.15	2.05+2.05+2.05	4.50	1.50+1.50+1.50	N-31.5°西	不整形円形	なし	P4228がSD4032より古。
SB409	170	F-22・23	側柱	2×1間	16.9	4.65	2.50+2.15	3.65	3.65	N-28.0°西	不整形円形 不整形方形	なし	P4160・4283がSX4002より古。 北端隅柱穴はSB410(P4159)よ り古。SD4007・12より古。
SB410	171	E・F-23	側柱	1~×1~間	7.8~	3.00~	[東桁] +3.00	2.60~	[西梁] +2.60	N-30.0°西	略円形 不整形楕円形	なし	桁梁は判然としない。河跡3001 (古)で損壊。SB409より新。 SX4002、SD4009-12より古。
SB411	175	E・F-23	側柱	2~×1間	6.8~	3.90~	[東桁] +1.95+1.95	1.75~	[南梁] +1.75	N-29.0°西	不整形円形	なし	河跡3001(古)で損壊。SA403よ り新。SX4002より古。
SB412	173	F-22	側柱	1×1間	10.7	3.30	[南東桁] 3.30	3.25	[南西梁] 3.25	N-28.0°西	不整形円形	なし	ほぼ正方形。北隅柱がSB409 (P4151)より新、P4171が SD4020より古。
SB413	174	E-25・26	側柱	2~×1~間	8.5~	4.50~	[北東桁] +2.25+2.25	1.90~	[南東梁] 1.90+	N-39.0°西	不整形円形 不整形方形	なし	河跡3001(古)で損壊。P4091は SB414と重複。P4302がSD4001 より古。
SB414	175	E-25・26	側柱	1~×2~間	11.4~	2.85~ (2.45~)	[東桁] +2.85 (+2.45)	4.00	[南梁] +1.85+2.15	N-17.0°西	略円形 不整形円形	なし	河跡3001(古)で損壊。P4091は SB413と重複。
SB415	176	E-26	側柱	4×?間	-	6.60	[南桁] 1.65+1.65+1.65+1.65	-	-	N-72.0°東	不整形円形	なし	
SB416	177	E・F-26・27	側柱	1~×3間	11.0~	2.30~	[南東桁] +2.30	4.80	[南西梁] 1.60+1.60+1.60	N-57.5°東	不整形円形	なし	
SB417	178	F-26	側柱	3×2間	15.1	4.20	[南西桁] 1.40+1.40+1.40	3.60	[北西梁] 1.80+1.80	N-42.5°西	不整形円形 略円形	なし	SX4004、SB418より古。 SD4002より新。
SB418	179	F-26	側柱	1×1間	11.4	3.70	3.70	3.10	3.10	N-58.5°東	不整形円形	なし	SB417、SA405より新。
SB419	180	E-25、 F-25・26	側柱	3×3・2間 (北梁・廂)	18.6 (27.6)	5.10 (6.90)	[西桁] (2.25)+1.55+1.55+1.55	4.00	[南梁] 1.50+1.30+1.20 [北梁] 2.00+2.00	N-29.0°西	不整形円形 不整形方形	なし	SX4004より古。P4020がSB420 (P4019)より古。
SB420	181	F・G-25	側柱	3×3間	30.9	6.45	[西桁] 2.15+2.15+2.15	4.80	[北梁] 1.60+1.60+1.60	N-10.0°西	不整形円形 不整形方形	なし	SX4004より古。P4019がSB419 (P4020)より新。
SB421	182	F・G-26	側柱	1~×1~間	5.6~	2.40~	[南西桁] 2.40+	2.35~	[北西梁] +2.35	N-28.0°西	不整形円形	なし	桁梁は不明。SB423より新。 SX4004より古。
SB422	183	F・G-26	側柱	4~×2~間	28.8~	7.20~	[南西桁] 1.80+1.80+1.80+1.80+	4.00~	[北西梁] +2.00+2.00	N-27.5°西	不整形円形 略円形	なし	SA407より新。SX4004より古。
SB423	184	F・G-26	側柱	1~×1~間	5.1~	2.35~	[北西桁] +2.35	2.20~	[南西梁] 2.20+	N-28.0°西	不整形円形 不整形楕円形	なし	桁梁は不明。SX4004、SB421よ り古。
SB424	185	F-26、 G-25・26	側柱	2×2~間	23.3~	5.50~	[西桁] 2.75+2.75+	4.25	[北梁] 1.80+2.45	N-8.5°西	不整形円形 不整形楕円形	なし	梁間3間の可能性あり。SX4004、 SB420より古。
SB425	186	G-26	側柱	?×3間	-	-	-	5.45	[北西梁] 1.90+1.65+1.90	N-43.0°西	不整形円形	なし	主軸方位が他建物と相違し、建 物でない可能性。
SB426	187	E-25、 F-25・26	側柱	2~×2間	15.1~	4.60~	[北西桁] 2.40+2.00+ [南東桁] 2.20+2.00+	3.30	[北東梁] 1.65+1.65	N-60.0°東	不整形円形	なし	平面プラン若干乱れる。SA405 より新。
SA401	169	F-21・22	-	2間	-	4.50	2.25+2.25	-	-	N-58.5°東	不整形円形	なし	SB408と主軸が同じ
SA402	188	F-22・23	-	3間	-	6.90	2.30+2.10+2.50	-	-	N-90.0°西	不整形円形 不整形楕円形	なし	P4149はSB409(P4160)より新。 SX4002、SD4026等の小溝より 古。
SA403	188	E・F-23	-	4間	-	8.00~	+2.00+2.00+2.00+2.00	-	-	N-24.0°西	不整形円形 略円形	なし	SX4002、SD4008・11より古
SA404	189	F-26	-	2間	-	4.60	2.30+2.30	-	-	N-30.5°西	不整形円形 略方形	なし	
SA405	189	F-25・26	-	2間	-	4.80	2.40+2.40	-	-	N-77.5°東	不整形円形	あり (1本)	P4067(1)に柱根残存。 SB418・425・426より古
SA406	189	F-25	-	2間	-	3.00	1.50+1.50	-	-	N-20.0°西	不整形円形	なし	河跡3001(古)で削平。
SA407	190	F-25、 G-25・26	-	1~×2~間	-	3.05~	3.05+	6.10~	+3.05+3.05	N-35.0°西 (N-55.0°東)	不整形円形	なし	P4019がSB4020(P4020)より古。

23cmを測り、口縁部は短く外反する。795は肉厚である。鉢形に近い796は口径16.8cmを測り、口縁部は先細りながら大きく外反する。甗類797は、肉厚な胴部に直線的にのびる幅広の把手を貼り付ける。他にP4260・62・63から非ロクロ土師器甕を主体に、非ロクロ土師器赤彩埴、須恵器坏類等の小片が出土した。

**SB402**(遺構：第164図、遺物：第191図)

E・F-20・21区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外北西側に延びる。主軸方位はN-27° Wを示し、桁行2間以上(4.10m～)×梁間2間(3.90m)、床面積15.6㎡以上を測る。桁行の柱間寸法2.05m等間に対して、梁間の柱間寸法は1.95m等間と若干短く、SB403柱穴P4253に切られるため判然としないが梁間の中間柱は柱筋が通らない可能性が高い。柱穴の平面形態は、不整形円または隅丸長方形を呈し、P4249が径85～90cm、深さ28cm、P4255が長辺80cm、短辺60cm、深さ37cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、ベース土が粒状に混ざる暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB403～405と重複し、遺構の切り合い関係からSB402がSB403柱穴P4251bおよびSD4041・51より古く位置付けられる。

**【SB402】**



第164図 G地区 第IV面SB402平面図・土層断面図 (S=1/60)

柱穴出土遺物のうち、P4254出土のロクロ土師器赤彩埴798、P4249出土の非ロクロ土師器甕799を図化した。798は口径16.6cmを測り、ミガキ調整を施さない。器面には焼成に伴う小剥離が目立ち、Ⅲ期前後に位置付けられる。球胴形を呈する甕799は口径19.8cmを測り、胎土に多量の粗砂が混ざる。他に各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4243・49・54からロクロ土師器甕、P4253・54からロクロ土師器赤彩埴、P4243・54から製塩土器の小片が、それぞれ出土した。

**SB403**(遺構：第165図、遺物：第191図)

E-20・21区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、本地区で検出した中で最大の建物となる可能性が高い。主軸方位はN-38° Wを示し、桁行3間以上(6.15m～)×梁間2間(4.80m)、床面積29.5㎡以上を測る。桁行の柱間寸法は2.05m・2.30m、梁間の柱間寸法は2.40m等間であり、桁行より梁間の柱間寸法を長くとる。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、桁行の柱穴が比較的大きい掘方を呈するのに対して、梁間の中間柱穴は一回り小振りの掘方となる。桁行の柱穴P4241が径80～90cm、深さ48cmを、P4253が径130～135cm、深さ37cmを、梁間の柱穴P4251bは径65～70cm、深さ35cmをそれぞれ測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB402・404・405と重複、遺構の切り合い関係からSD4038が柱穴P4239より、SD4043・44が柱穴P4253より、それぞれ新しい他、柱穴P4253土層断面の観察等からSB402よりSB403が新しく位置付けられる。また、北側梁間から2.20m北西側に廂(柱間寸法1.60m等間)を復元したが、SB403と柱筋を揃えた別の建物の一部となる可能性を残す。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、P4239が径75cm、深さ33cmを測るとおり、SB403身舎部分より一回り小振りの掘方をもつ。柱穴覆土は、暗灰色土が混ざる灰色砂質土を基本とする。

柱穴出土遺物のうち、P4253出土の800・801、P4241出土の802～804を図化した。非ロクロ土師器甕800は口径15.0cmを測り、煮沸に伴う痕跡が明瞭に残る。須恵器坏蓋801は口径15.7cmを測り、回転ヘラ切り後にナデ調整を加えた天井部外面に、小さく「土万呂」と墨書する。また、未図化だが天井部内面にも薄い墨痕が残る。赤彩の非ロクロ土師器埴802・803は口径約13cmを測り、底部外面にケズリ調整を施す。802が内外面ともナデ調整で仕上げるのに対して、803は摩滅のため調整は判然としない。須恵器蓋類804は口径約20cmを測る大型品であり、口縁端部に内傾した面をもつ。801～803はⅢ～Ⅳ<sub>1</sub>期に位置付けられる。他にP4239・43・51b・53以外の柱穴から非ロクロ土師器甕、P4194・4241・52・71・72から須恵器坏類等の小片が出土した。

**SB404**(遺構：第166図、遺物：第191図)

E・F-20・21区で検出した側柱構造と考えられる掘立柱建物で、大部分は調査区外北西側に延びる。主軸方位はN-58° Eを示し、桁行1間以上(2.60m～)×梁間1間以上(1.75m～)を測る。柱穴の平面形態は、不整円形または不整楕円形を呈し、P4245が長径85cm、短径50cm、深さ32cmを測る。柱穴覆土は、暗黄～黄色粘土粒が多く混ざる濁灰～暗灰色砂質土を基本とした特徴的な柱抜取埋土となる。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB402・403・405と重複、遺構の切り合い関係からSD4040・43・44より古く位置付けられる。

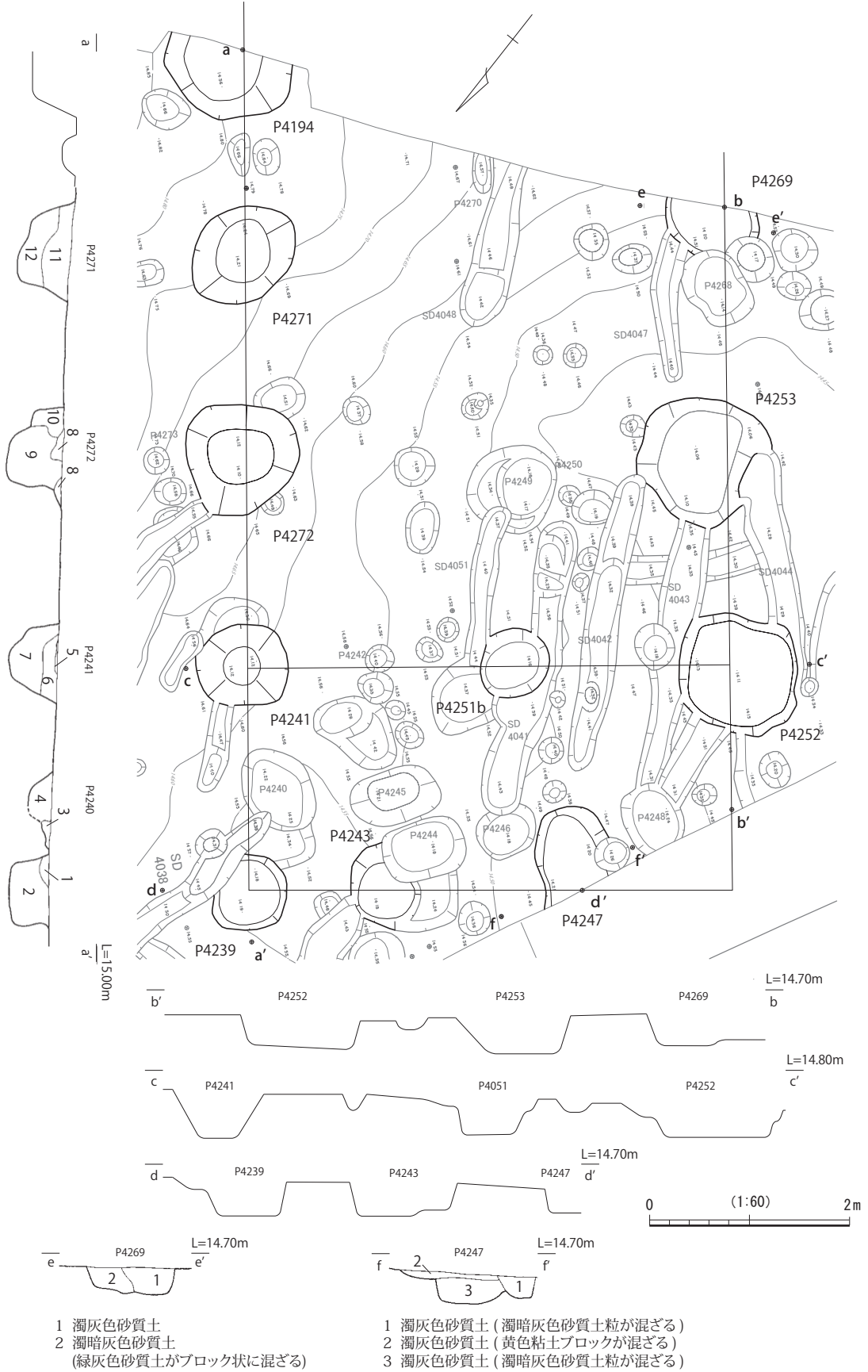
柱穴P4238から出土した須恵器有台坏805は、低い台部を貼り付け、Ⅴ<sub>2</sub>期～Ⅵ期に位置付けられる。他にP4245・48から非ロクロ土師器甕、P4245からロクロ土師器甕、須恵器甕の小片が出土した。

**SB405**(遺構：第166図、遺物：第196図)

E-21区、F-21・22区で検出し、調査区外西側に延びる。柱筋の通りがよくないこと等から、掘立柱建物とはならない可能性を残す。側柱構造の掘立柱建物とした場合、主軸方位はN-70° Eを示し、桁行2間以上(4.80m～)×梁間1間(3.75m)、床面積18㎡以上を測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、

【SB403】

- 1 濁暗灰色砂質土
- 2 灰色砂質土(暗灰色砂質土粒が混ざる)
- 3 灰色砂質土と緑灰色砂質土の混合土
- 4 淡灰色砂質土と灰色砂質土の混合土
- 5 濁暗褐色砂質土
- 6 2層と同質土
- 7 灰色砂質土と淡灰色粗砂の混合土
- 8 濁淡オリーブ灰色砂質土
- 9 暗灰色砂質土
- 10 9層に緑灰色砂質土が混ざる
- 11 にぶい、灰色砂質土(12層がブロック状に混ざる)
- 12 9層と同質土

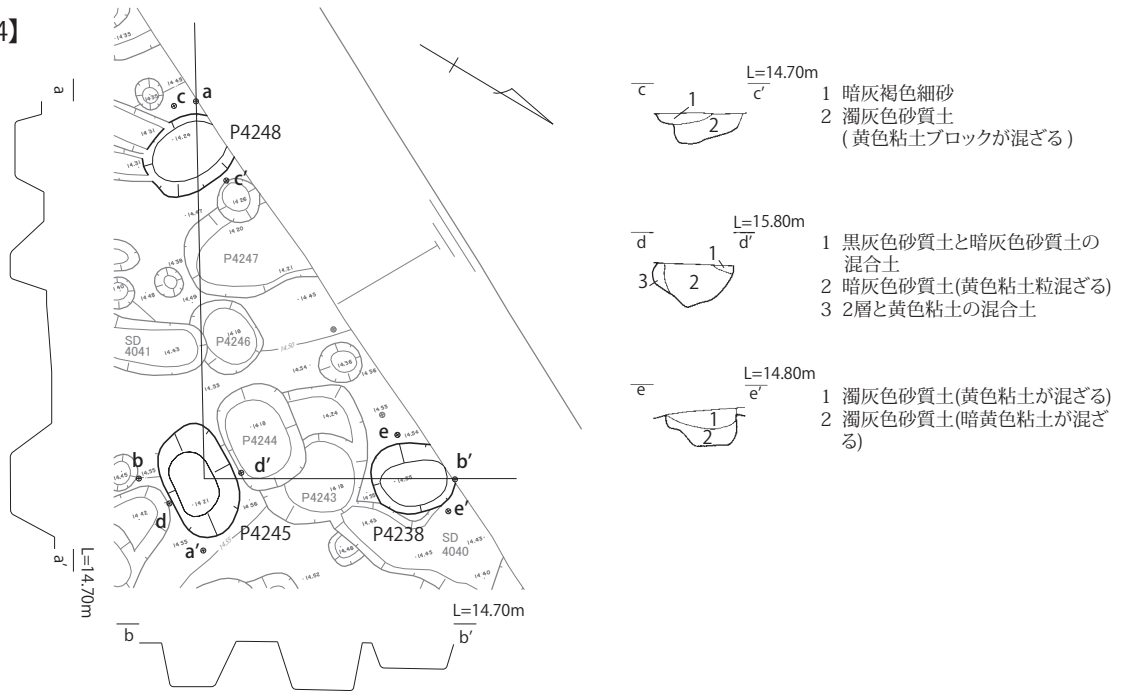


- 1 濁灰色砂質土
- 2 濁暗灰色砂質土  
(緑灰色砂質土がブロック状に混ざる)

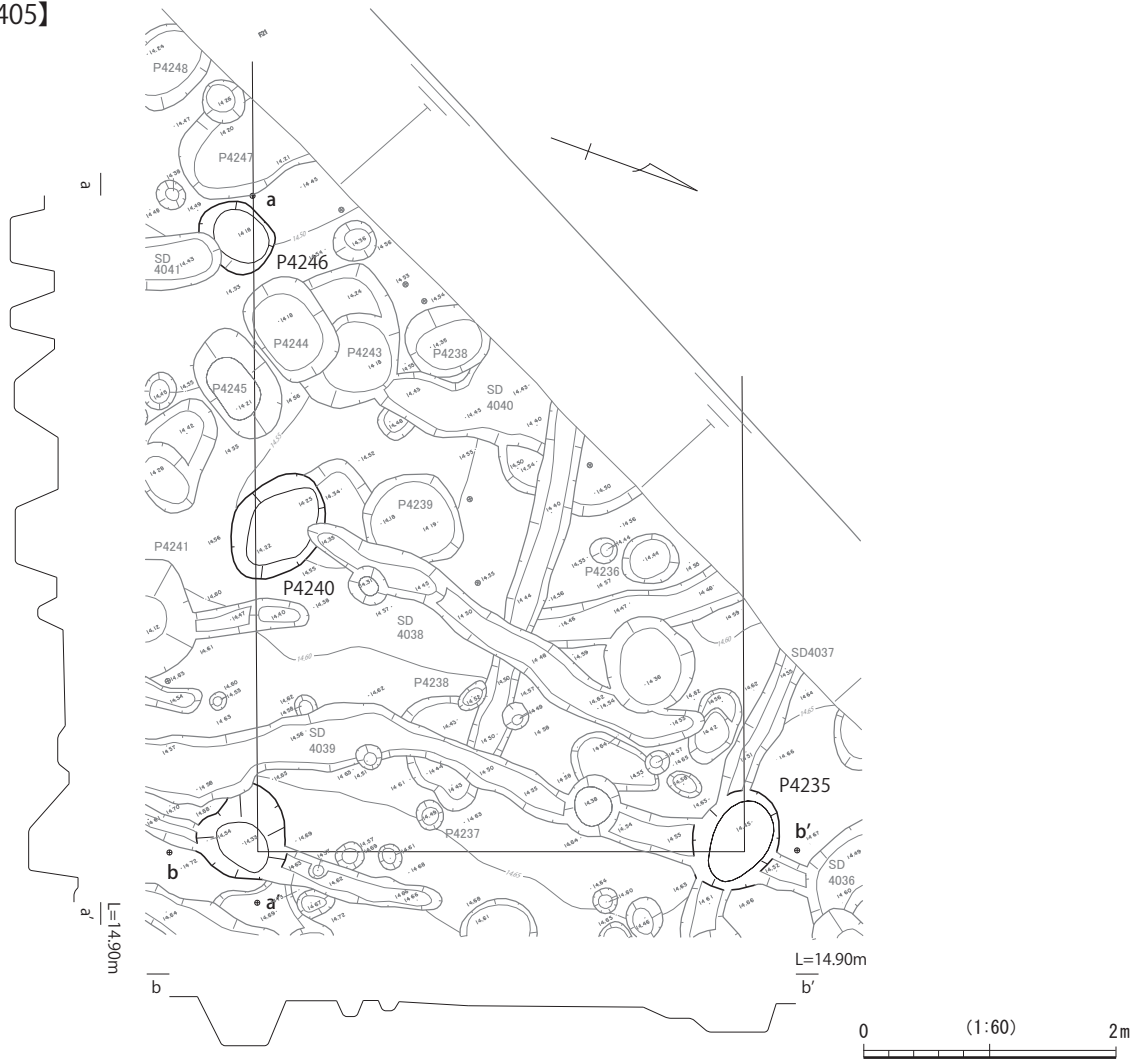
- 1 濁灰色砂質土 (濁暗灰色砂質土粒が混ざる)
- 2 濁灰色砂質土 (黄色粘土ブロックが混ざる)
- 3 濁灰色砂質土 (濁暗灰色砂質土粒が混ざる)

第165図 G地区 第IV面SB403平面図・土層断面図 (S=1/60)

【SB404】



【SB405】



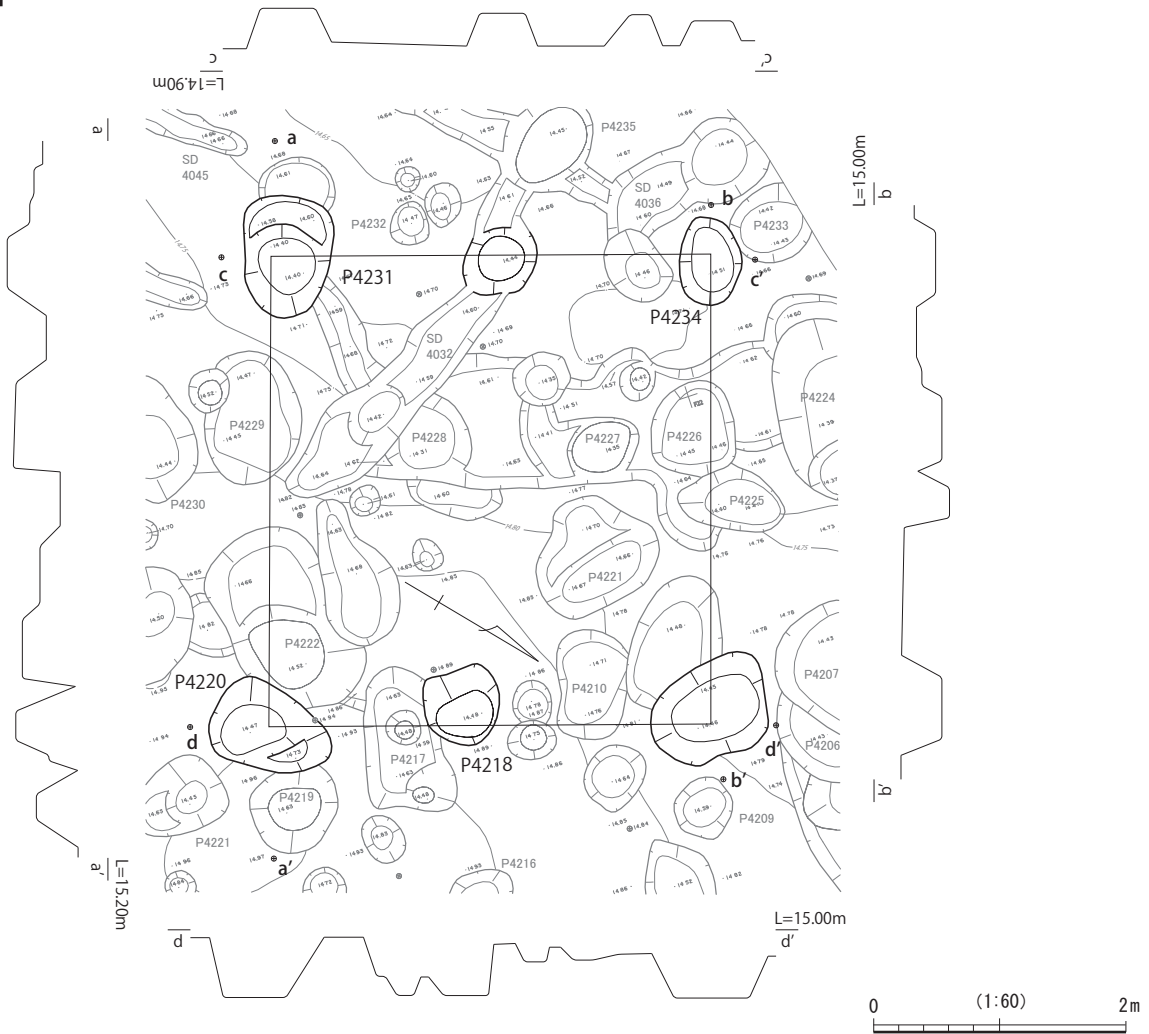
第166図 G地区 第IV面SB404・405平面図・土層断面図 (S=1/60)

P4240が径70～90cm、深さ34cm、P4246が径50～60cm、深さ32cmを測る。柱穴覆土は、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基調とした柱抜取埋土である。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB402～404と重複、遺構の切り合い関係は柱穴P4240がSD4038より、南東隅柱穴がSD4035より、それぞれ古く位置付けられる。第196図859は、P4235出土のロクロ土師器甕で、8世紀後半代と考えられる。口径19.1cmを測り、胴部内面の調整はハケ状を呈する。他にP4235から非ロクロ土師器甕、P4240から非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器甕、製塩土器等、P4246から須恵器瓶の小片が出土した。

**SB406**(遺構：第167図、遺物：第191図)

E・F-21・22区で検出した。正方形を指向する側柱構造の小型掘立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はSB407・408と同じくN-31.5° Wを示し、桁行1間(3.70m)×梁間2間(3.50m)、床面積13.0㎡を測る。桁行の柱間寸法は長く、梁間の柱間寸法は南西辺が1.75m等間であるのに対して、北東辺は1.60m・1.90mとなる。柱穴の平面形態は、比較的大振りな不整楕円形を呈し、P4220が長径95cm、短径60cm、深さ47cmを、P4231が長径95cm、短径65cm、深さ31cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、濁黒灰～暗灰色砂質土を基調とし、ベース土や黄色粘土粒が混ざる柱穴も存在する。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB407・408と重複する。遺構の切り合い関係から柱穴P4220がSB407柱穴P4220より新しく、南西側梁間の中間柱穴がSD4032より古く位置付けられる。

**【SB406】**



第167図 G地区 第IV面SB406平面図・断面図 (S=1/60)

出土遺物のうち、柱穴P4220出土の須恵器無台坏806を図化した。806は口径11.9cm、器高3.0cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がる。完形に近いことから、柱抜き時に埋納された可能性をもち、V<sub>2</sub>期に位置付けられる。他にP4220・31・34から非ロクロ土師器甕、P4220・31からロクロ土師器甕、須恵器坏類の小片が、それぞれ出土した。

#### SB407(遺構：第168図、遺物：第191・192図)

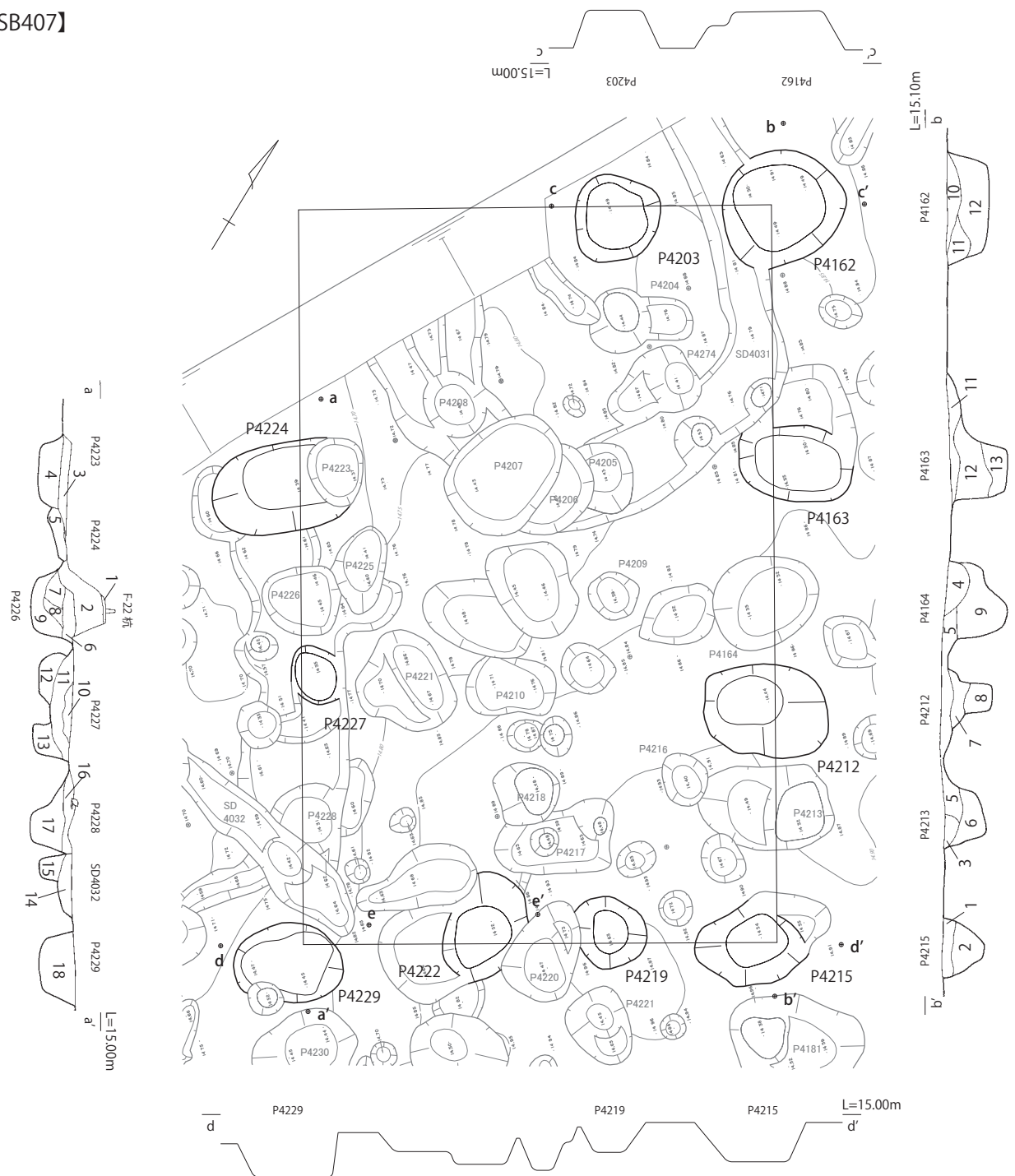
E-22区、F-21・22区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、一部が調査区外北西側に延びる。主軸方位はSB406・408と同じくN-31.5° Wを示し、桁行3間(7.05m)×梁間3間(4.50m)、床面積31.7㎡を測る。桁行の柱間寸法は、2.50m+2.05m+2.50mと、中間の柱間寸法が短い点に特徴をもつ。また、梁間の柱間寸法は1.50m等間と、桁行の柱間寸法に比して短い。柱穴の平面形態は、桁行が建物主軸方向とほぼ直交する大振りな不整楕円形を呈するのに対して、梁間は小振りな不整円形を呈する。桁行の柱穴の形状・規模から、柱抜きに係わる掘方の可能性が高い。桁行の柱穴P4212が長径115cm、短径90cm、深さ42cmを、P4229が長径105cm、短径75cm、深さ30cmを、梁間の柱穴P4203が径80cm、深さ35cmを、それぞれ測る。柱穴覆土は柱抜き埋土と考えられ、濁暗灰～灰色砂質土を基調とし、ベース土や黄色粘土粒が混ざる柱穴も存在する。柱根は遺存せず、建物敷地はSB406・408と重複、遺構の切り合い関係からSB407がSB406、SD4031より古く位置付けられる。

出土遺物は比較的多く、柱穴P4224出土の第191図807・808、柱穴P4203出土の第192図810、SB408柱穴と重複する柱穴P4163出土の第191図809および第192図811・812、またSB407柱穴P4224とSB408柱穴P4226からの破片が接合した813を図化した。ロクロ土師器807は口径14.7cmを測り、鉢類と考えられる。外面にわずかに平行叩き痕が残り、平坦に仕上げた口縁端部内端を嘴状に小さくのばす。須恵器坏蓋808は天井部内面が平滑で墨痕が残ることから、硯に転用したと考えられる。ロクロ土師器甕片809は、内面に放射状文当て具痕、外面に彫り幅が広い平行叩き痕が残り、胎土中に粗砂・礫がほとんど混ざらない。須恵器甕810は口径17.1cmを測り、口縁端部は大きく外反する。胎土から羽咋窯跡群産と考えられる。須恵器坏蓋811は口径13.1cmを測り、口縁端部はほとんど目立たない。808と同様にIV<sub>2</sub>期に位置付けられる。赤彩を施したロクロ土師器坏類蓋812は、口径18.2cm、器高3.9cmを測り、胎土に用いた複数種の土の練り込みが不十分であるため、渦巻き状に粘土粒子の流れが視認できる。大型の須恵器短頸壺813は口径17.8cmを測り、内面上半に液状物が垂れた暗灰色の痕跡が付着する。他に、P4212・19以外の柱穴から非ロクロ土師器甕を主体に、比較的多くの土師器、須恵器の小片が出土した。

#### SB408・SA401(遺構：第169図、遺物：第191・192図)

SB408は、E-22区、F-21・22区で検出した側柱構造の掘立柱建物である。柱筋の通りはあまりよくなく、主軸方位はSB406・407と同じくN-31.5° Wを示す。桁行3間(6.15m)×梁間3間(4.50m)、床面積27.6㎡を測る。柱間寸法は、桁行が2.05m等間、梁間が1.50m等間と、重複するSB407より桁行長は短い。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、桁行の柱穴に比して梁間の柱穴が若干小振りとなる。桁行の柱穴P4164が長径100cm、短径90cm、深さ50cmを、梁間の柱穴P4208が径55～65cm、深さ26cmを、それぞれ測る。柱穴覆土は柱抜き埋土と考えられ、ベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基調とし、P4208・4226等東側の柱穴覆土には黄色粘土粒が混ざる。柱根は出土せず、明瞭な柱根痕跡も確認できなかった。建物敷地はSB406・407と重複、遺構の切り合い関係から柱穴P4208がSD4031より古く位置付けられる。出土遺物のうち、第191図809、第192図811～813は前述のとおりである。柱穴P4228出土のロクロ土師器無台坏814は口径14.1cm、器高4.9cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕をそのまま残す。内面にわずかにミガキ調整が残る他、外面下半の広い範囲に回転ケズリ調整を加える。Ⅲ

【SB407】



〈a-a'土層〉

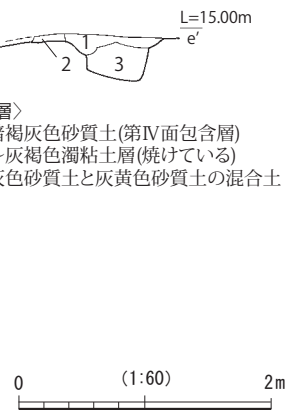
- 1 明茶色砂
- 2 濁暗褐色灰砂質土(第三面包含層)
- 3 濁暗灰色砂質土
- 4 濁暗灰色砂質土(黄色粘土ブロック多く混ざる)
- 5 灰色砂質土(炭化物が混ざる)
- 6 濁暗灰色砂質土(第四面包含層)
- 7 灰色砂質土(8層がブロック状に混ざる)
- 8 暗灰色砂質土
- 9 4層と同質土
- 10 濁暗灰色砂質土(黄色粘土ブロックが混ざる)
- 11 濁暗緑色砂質土(炭粒が多く混ざる)
- 12 淡灰色砂質土
- 13 灰色砂質土(炭粒が若干混ざる)
- 14 灰褐色砂質土
- 15 明灰色砂質土(炭粒が混ざる)
- 16 濁黄灰色土(黄色粘土が主体)
- 17 灰色砂質土(20cm大の石が混ざる)
- 18 暗灰色砂質土

〈b-b'土層〉

- 1 濁茶灰色粗砂と砂利の混合土
  - 2 濁灰色砂質土
  - 3 にぶい黄色粘土
  - 4 灰色砂質土(20cm大の石が混ざる)
  - 5 濁暗灰色砂質土
  - 6 濁暗灰色砂質土(ベース土が粒状に混ざる)
  - 7 濁黄灰色砂質土
  - 8 濁暗灰色砂質土
  - 9 灰色砂質土とベース土の混合土
  - 10 濁暗灰色砂質土(炭粒、2層がブロック状に混ざる)
  - 11 濁暗灰色砂質土(1層、黄色粘土ブロックが少量混ざる)
  - 12 灰色砂質土(黄色粘土がブロック状に混ざる)
  - 13 6層と同質土(6層より暗く、しまりない)
- [ベース土] 灰緑色砂質土

〈e-e'土層〉

- 1 濁暗褐色灰砂質土(第四面包含層)
- 2 黄~灰褐色濁粘土層(焼けている)
- 3 濁暗灰色砂質土と灰黄色砂質土の混合土



第168図 G地区 第IV面SB407平面図・土層断面図 (S=1/60)



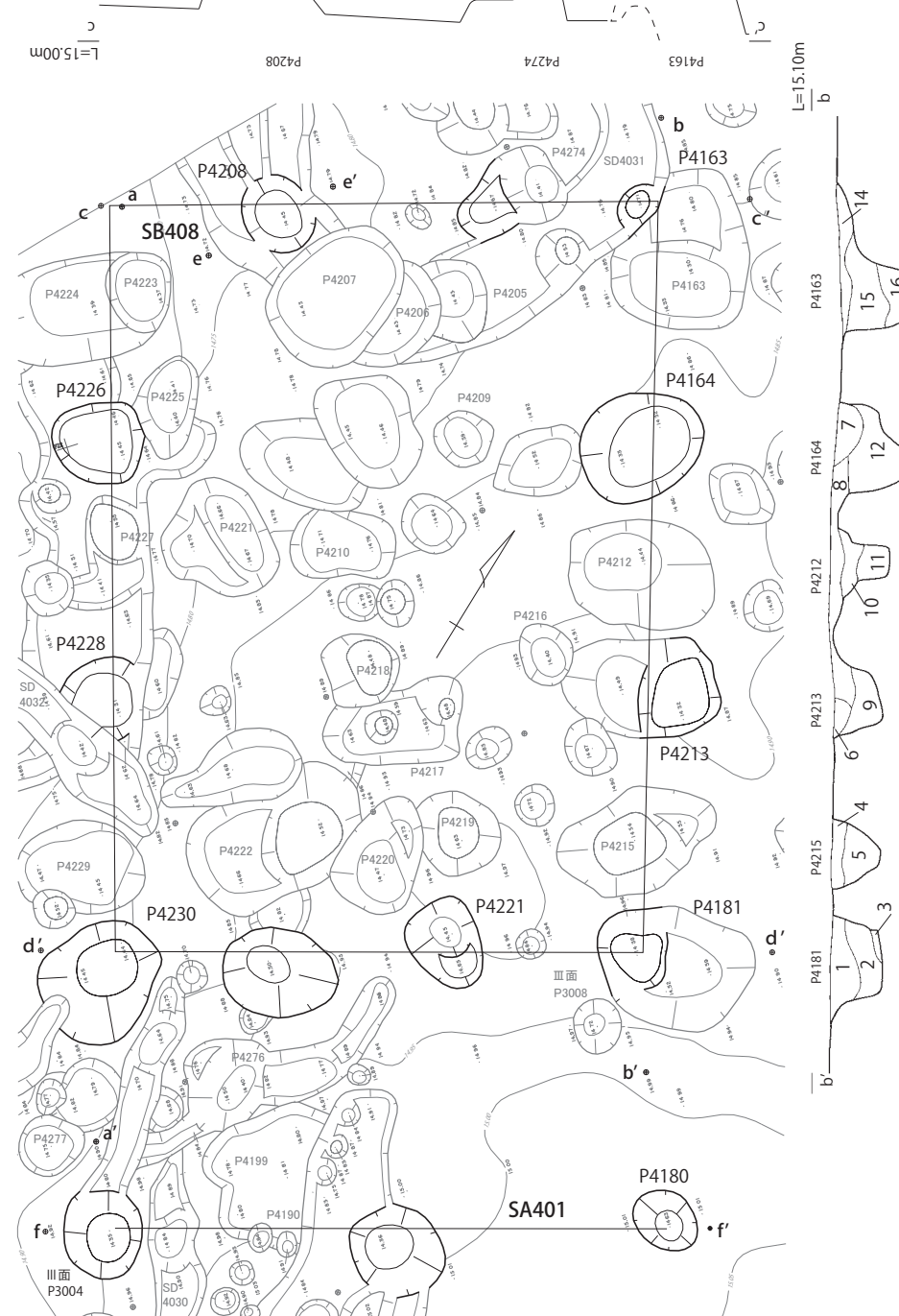
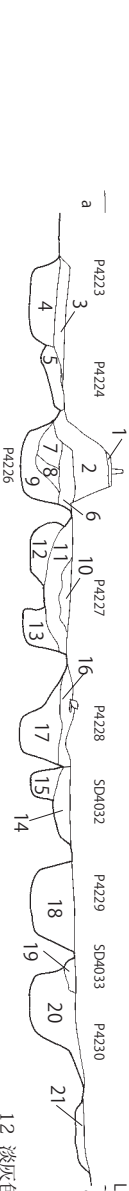
【SB408・SA401】

- 1 明茶色砂
- 2 濁暗灰色砂質土(第三面包含層)
- 3 濁暗灰色砂質土
- 4 濁暗灰色砂質土(黄色粘土ブロックが混ざる)

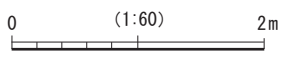
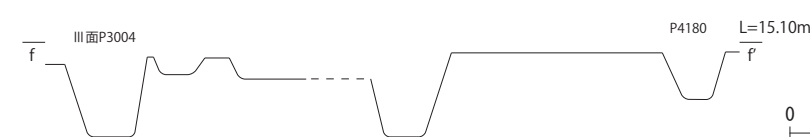
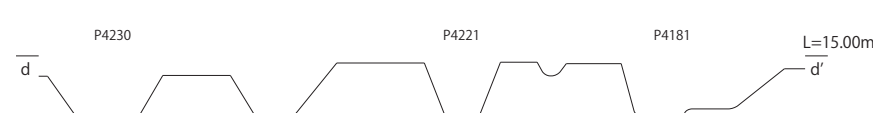
- 5 灰色砂質土(炭化物が混ざる)
- 6 濁灰色砂質土(第四面包含層)
- 7 灰色砂質土(8層がブロック状に混ざる)
- 8 暗灰色砂質土
- 9 4層と同質土
- 10 濁暗灰色砂質土(炭粒が混ざる)
- 11 濁暗灰色砂質土(炭粒が多量混ざる)

- 12 淡灰色砂質土
- 13 灰色砂質土(炭粒若干混ざる)
- 14 灰褐色砂質土
- 15 明灰色砂質土(炭粒が混ざる)
- 16 濁黄灰色土(粘土が主体)

- 17 灰色砂質土(20cm大の石混ざる)
- 18 暗灰色砂質土
- 19 濁暗灰色砂質土とベース土(淡灰色シルト)の混合土
- 20 灰色砂質土(緑灰色砂質土ブロックが混ざる)
- 21 濁暗灰色砂質土



- 1 濁暗灰色砂質土(黄色粘土ブロックが混ざる)SD4031
- 2 濁暗灰色砂質土
- 3 2層と同質土(若干淡い)

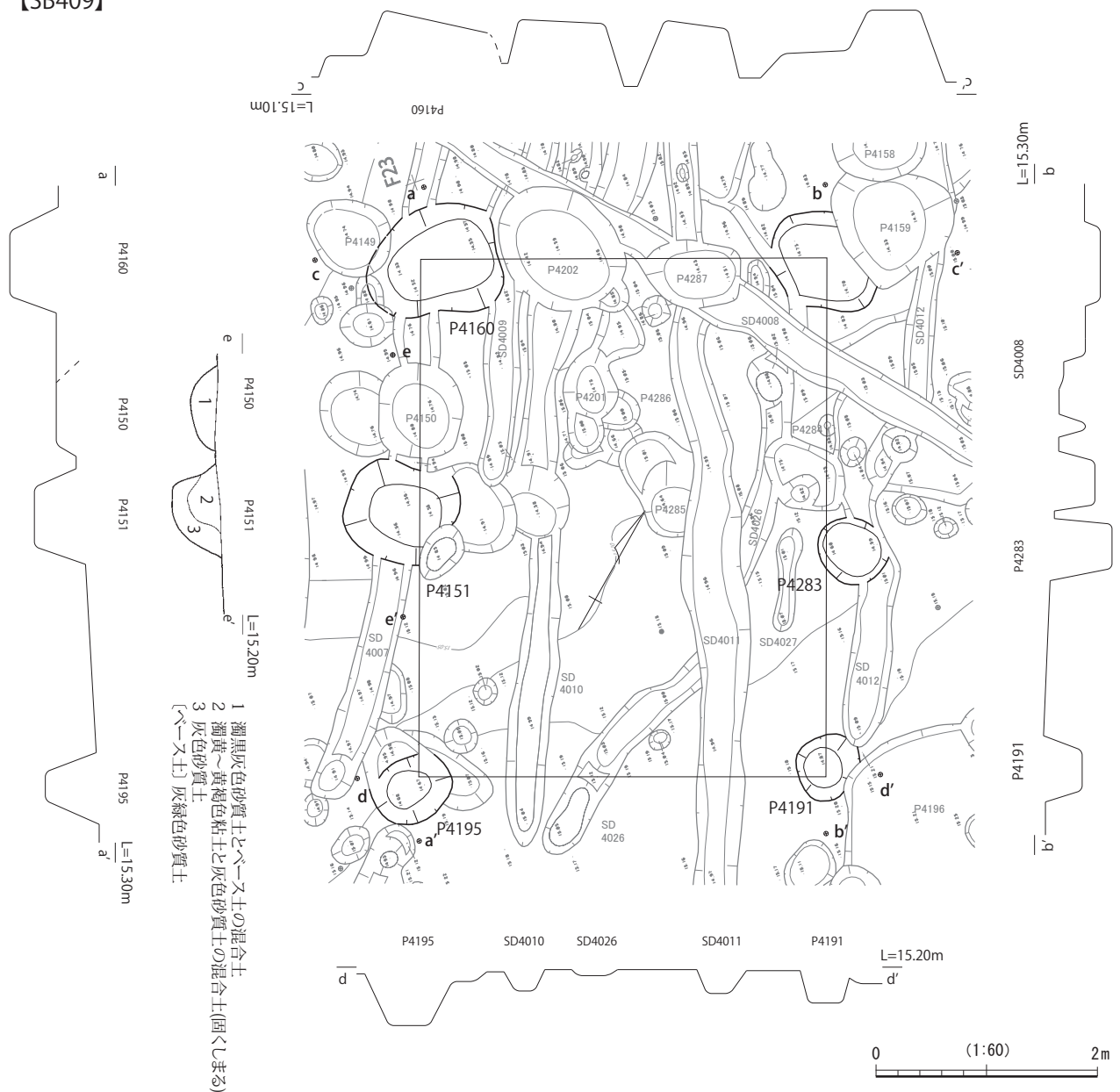


第169図 G地区 第四面SB408・SA401平面図・土層断面図 (S=1/60)

期前後に位置付けられ、完形に近いことから柱抜き時に埋納された可能性が高い。柱穴P4213出土の須恵器坏身818は口径11.9cm、器高4.0cmを測り、底部外面に粗い回転ケズリ調整を加える。胎土から鳥屋窯跡群産と考えられ、I<sub>1</sub>期に位置付けられる。他にP4163・4208・21・30以外の各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4164・4213・28から須恵器甕、P4213・4228からロクロ土師器甕の小片が、それぞれ出土した。

SA401は、SB408南側梁間より2.25m南東側に並行する2間の柱列(柱間寸法2.25m等間)であり、東端柱穴P4180がSB408の桁行柱筋と若干ずれるが、SB408と関連する柵列と考えた。柱穴の平面形態は不整形円形を呈し、P4180で径45～55cm、深さ38cmを測る。覆土は濁灰～暗灰色砂質土であり、SD4029・49より古く位置付けられる。未図化だが、P4180から非ロクロ土師器甕、須恵器短頸壺の小片が出土した。

【SB409】



第170図 G地区 第IV面SB409平面図・土層断面図 (S=1/60)

**SB409**(遺構：第170図、遺物：第192図)

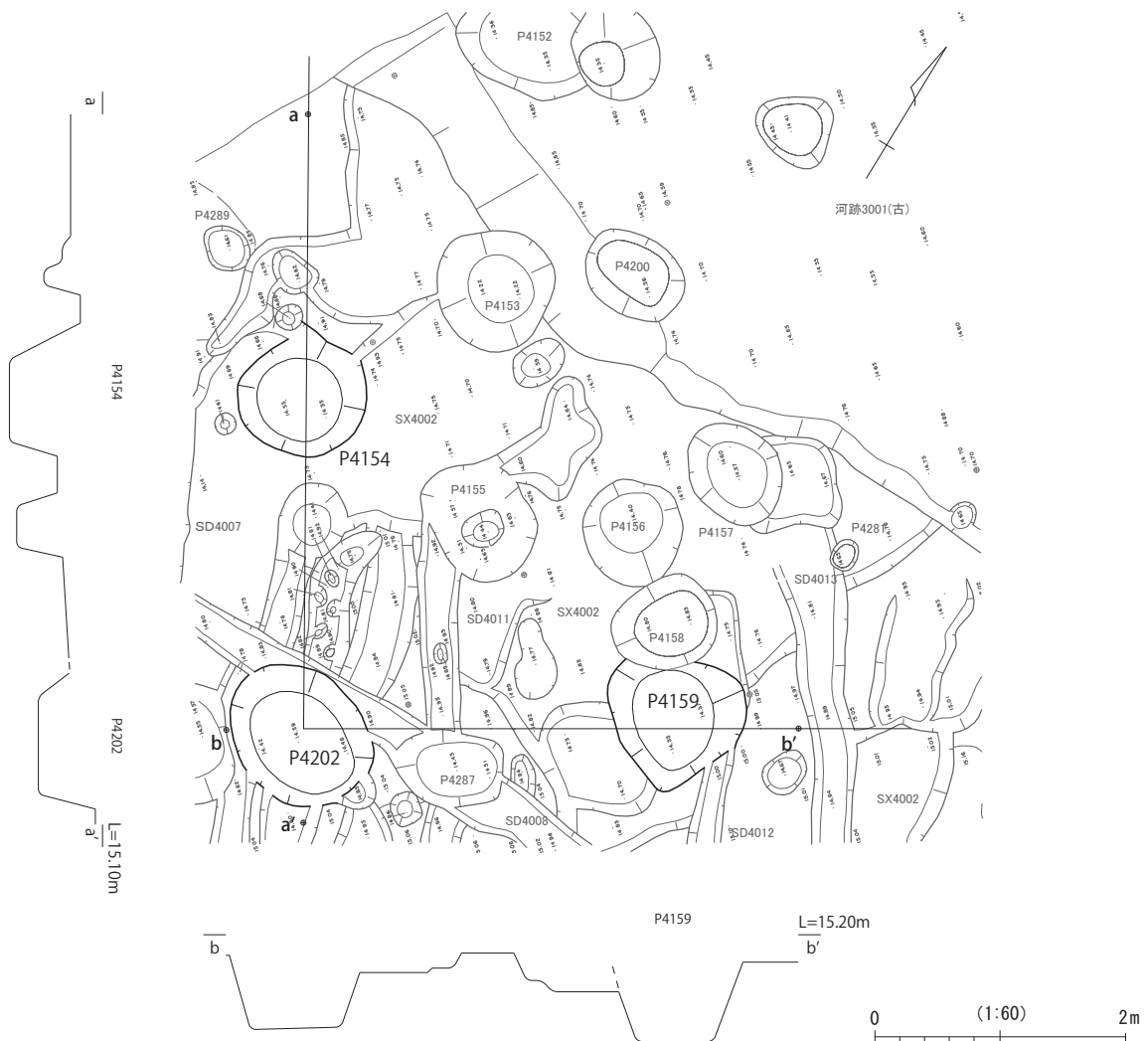
F-22・23区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、柱間寸法、柱筋の通りとも若干乱れる。主軸方位はN-28° Wを示し、桁行2間(4.65m)×梁間1間(3.65m)、床面積16.9㎡を測る。桁行の柱間寸法は2.50m、2.15mと、梁間の柱間寸法を含めてSB405と近似した数値を示す。柱穴の平面形態は不整形円形または不整形方形を呈し、西側桁行の掘方が大きい傾向をもつ。P4151が径85～95cm、深さ37cmを、P4191が径55～60cm、深さ31cmをそれぞれ測る。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる灰色砂質土を基調に、P4151では上層に濁黄～黄褐色粘土を混ぜた土を充填して固く埋め戻す。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB410・412、SA402・403と重複する。また、遺構の切り合い関係から柱穴P4160・4283が整地土SX4002より、北端隅柱穴がSB410柱穴P4159より、柱穴P4151・60がSD4007より、柱穴P4283・91がSD4012より、それぞれ古く位置付けられる。

柱穴P4151から出土した非ロクロ土師器甕815は口径21.6cmを測り、胴部内外面でハケの原体が異なる。他に各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4151からV期以降のロクロ土師器甕の小片が出土した。

**SB410**(遺構：第171図、遺物：第192・193図)

E・F-23区で検出した側柱構造と考えられる掘立柱建物で、建物北側は河跡3001(古)で損壊する。主

**【SB410】**

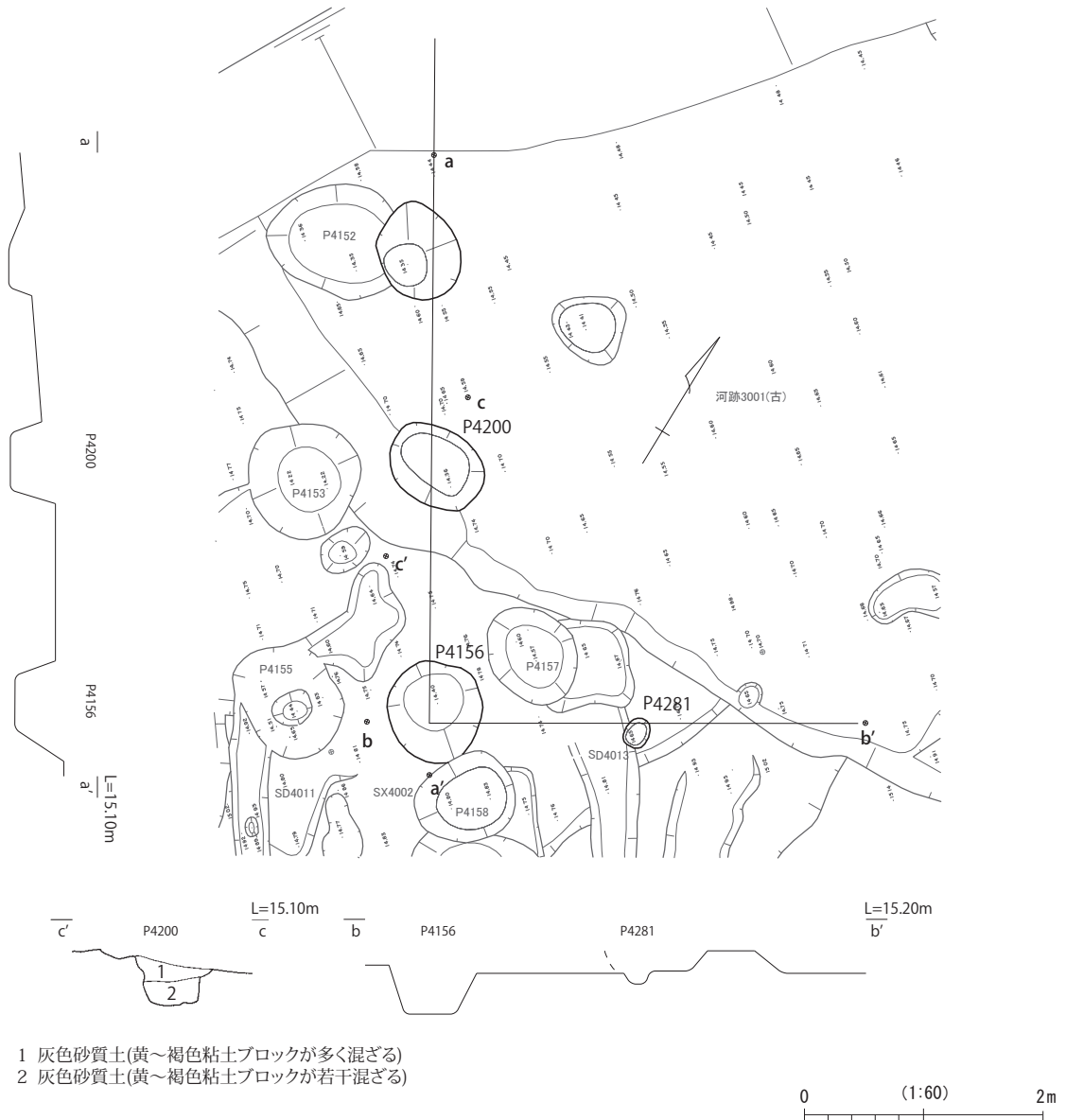


第171図 G地区 第IV面SB410平面図・断面図 (S=1/60)

軸方位はN-30° Wを示し、柱間寸法は西辺が2.60m、南辺が3.00mを測る。柱穴の平面形態は略円形または不整楕円形を呈し、P4154が径90～105cm、深さ40cm、P4202が長径120cm、短径100cm、深さ45cmと、比較的大振りである。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB409・411、SA402・403と重複する。また、遺構の切り合い関係から整地土SX4002、SD4009～12、河跡3001(古)より古く、SB409より新しく位置付けられる。

出土遺物のうち、柱穴P4159出土の非ロクロ土師器皿816、柱穴P4202出土の須恵器横瓶817・821を図化した。内黒外赤の皿816は口径14.5cm、器高1.9cmを測り、外面がハケ調整を基本とするのに対して、内面に丁寧なミガキ調整を加える。Ⅲ期前後に位置付けられる。817の破片は、P4073、SD4010からも出土する。内面および閉塞円盤を同心円叩きで整形し、外面側位に径約9.5cmの焼き台上で堅緻に横位で焼成された痕跡が残る。第193図821の破片はSD3548からも出土し、817と同じく横位に据え置いて焼成が行われる。他に、各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4202からV期以降の須恵器坏蓋、無

【SB411】



第172図 G地区 第IV面SB411平面図・土層断面図 (S=1/60)

台盤の小片が、それぞれ出土した。

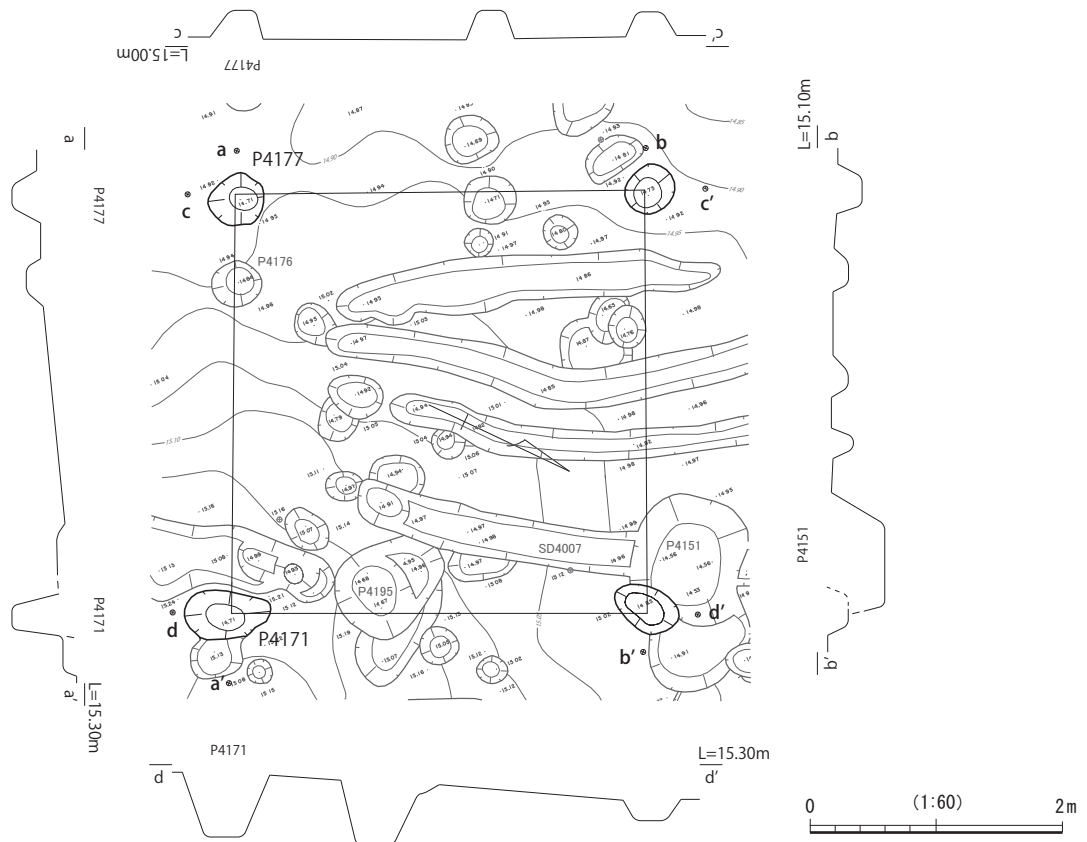
**SB411**(遺構：第172図)

E・F-23区で検出した側柱構造と考えられる掘立柱建物で、北・東側は河跡3001(古)で損壊する。主軸方位はN-29° Wを示し、桁行2間以上(3.90m～)×梁間1間以上(1.75m～)を測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、梁行のP4200が径65～85cm、深さ55cm、P4156が径80～85cm、深さ40cmを測るのに対して、梁間のP4281は径約20cmと小さく、柱根痕跡のみが残存している可能性をもつ。柱穴覆土は、P4281を除いて柱抜取埋土と考えられ、黄～褐色粘土が混ざる灰色砂質土を基本とする。柱根は確認できず、建物敷地はSB410、SA403と重複する。また、遺構の切り合い関係からSA403より新しく、整地土SX4002、河跡3001(古)より古く位置付けられる。未図化だが、各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4156からロクロ土師器甕、P4200からⅢ期頃のロクロ土師器赤彩壺等が、それぞれ出土した。

**SB412**(遺構：第173図)

F-22区で検出した1×1間の小規模な掘立柱建物である。主軸方位はN-28° Wを示し、柱間寸法は、南北辺が3.30m・3.35m、東西辺が3.25mを測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、P4177が径40～45cm、深さ24cm、北隅柱穴が径35～50cm、深さ18cmと、比較的小振りな掘方となる。柱穴覆土は、北側2穴が灰色砂質土、南側2穴が濁灰色砂質土を基本とする。柱根は確認できず、建物敷地はSB409と重複する。また、遺構の切り合い関係は、北東隅柱穴がSB409柱穴P4151より新しく、柱穴P4171がSD4020より古く位置付けられる。遺物は、P4171から非ロクロ土師器甕小片が出土したにとどまる。

**【SB412】**

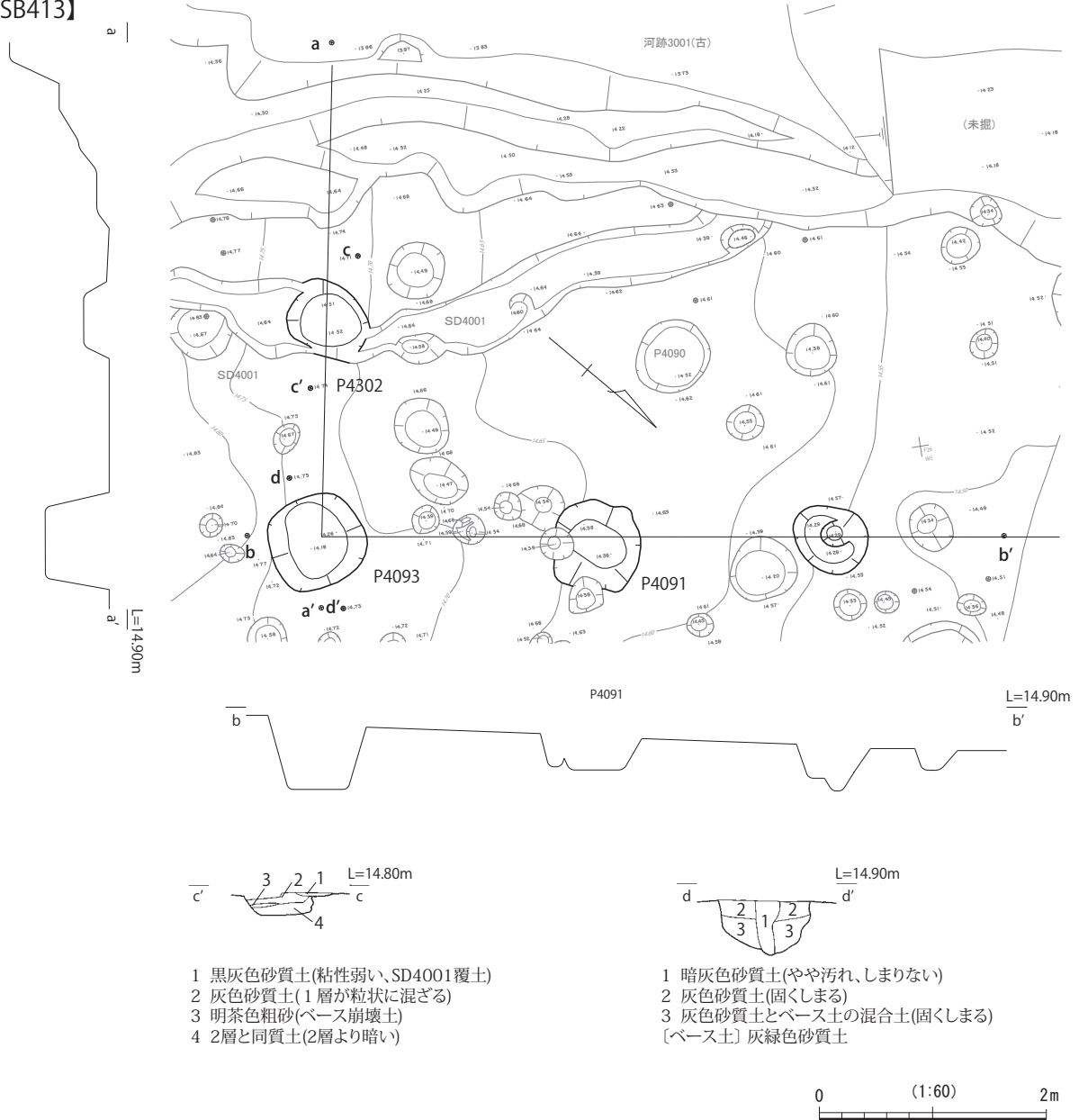


第173図 G地区 第Ⅳ面SB412平面図・断面図 (S=1/60)

SB413(遺構：第174図)

SB413～426は、河跡3001(古)の北側に位置する。SB413は、E-25・26区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外北西側に延びる他、西側は河跡3001(古)で損壊する。主軸方位はN-39° Wを示し、桁行2間以上(4.50m～)×梁間1間以上(1.90m～)を測る。柱間寸法は、桁行が2.25m等間、梁間が1.90mと、桁行と梁間との柱間寸法の差は比較的小さい。柱穴の平面形態は不整円形または不整形を呈し、SB414柱穴と重複するP4091が径80cm、深さ27cm、P4093が一辺80～85cm、深さ48cmとなる。柱穴覆土は、黒灰色砂質土やベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基調とする。柱根は確認できず、P4093で確認できた柱根痕跡は径約12cmを測る。遺構の切り合い関係は柱穴P4302がSD4001より古く、建物敷地が重複するSB414との前後関係は不明である。各柱穴からの出土遺物はない。

【SB413】



第174図 G地区 第IV面SB413平面図・土層断面図 (S=1/60)

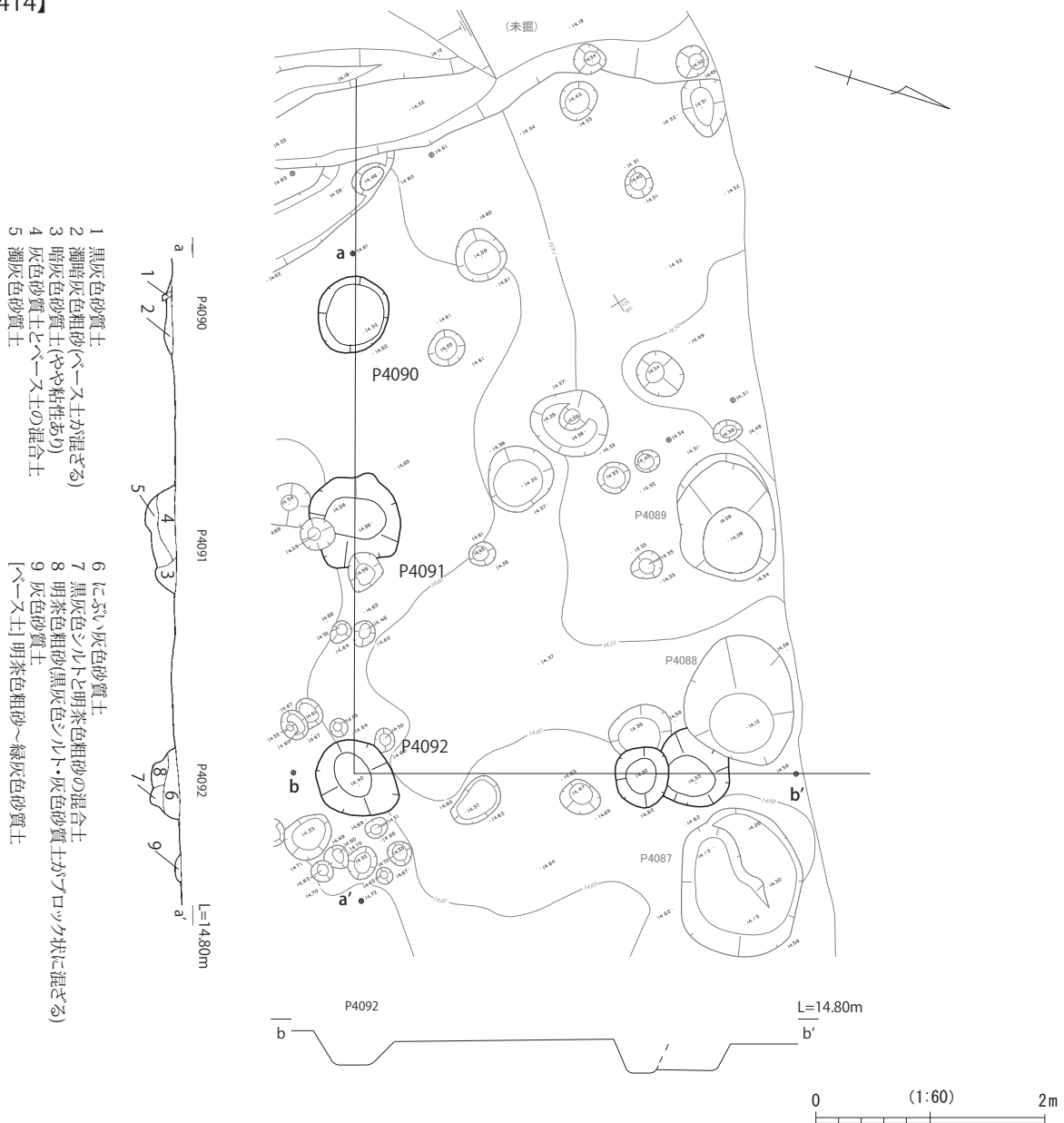
**SB414**(遺構：第175図)

E-25・26区で検出した桁行1間以上×梁間2間以上の側柱構造をもつ掘立柱建物で、調査区外北側に延びる他、西側は河跡3001(古)で損壊する。主軸方位はN-17° Wであり、SB415と近似した方位を示す。桁行の柱穴は、P4088東側に位置する2つのピットのいずれかを想定したが特定できず、柱間寸法は桁行が2.45mまたは2.85m、梁間が1.85m・2.15mとなる。柱穴の平面形態は略円形または不整形円形を呈し、P4090が径60～70cm、深さ10cm、P4092が径65～70cm、深さ20cmと、検出面からの掘方は比較的浅い。柱穴覆土は、ベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基調とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB413・415と重複する。P4092から非ロクロ土師器甕小片が出土した。

**SB415**(遺構：第176図、遺物：第192図)

E-26区で検出した側柱構造と考えられる掘立柱建物で、調査区外北側に延びる。主軸方位はN-72°

**【SB414】**



第175図 G地区 第IV面SB414平面図・土層断面図 (S=1/60)

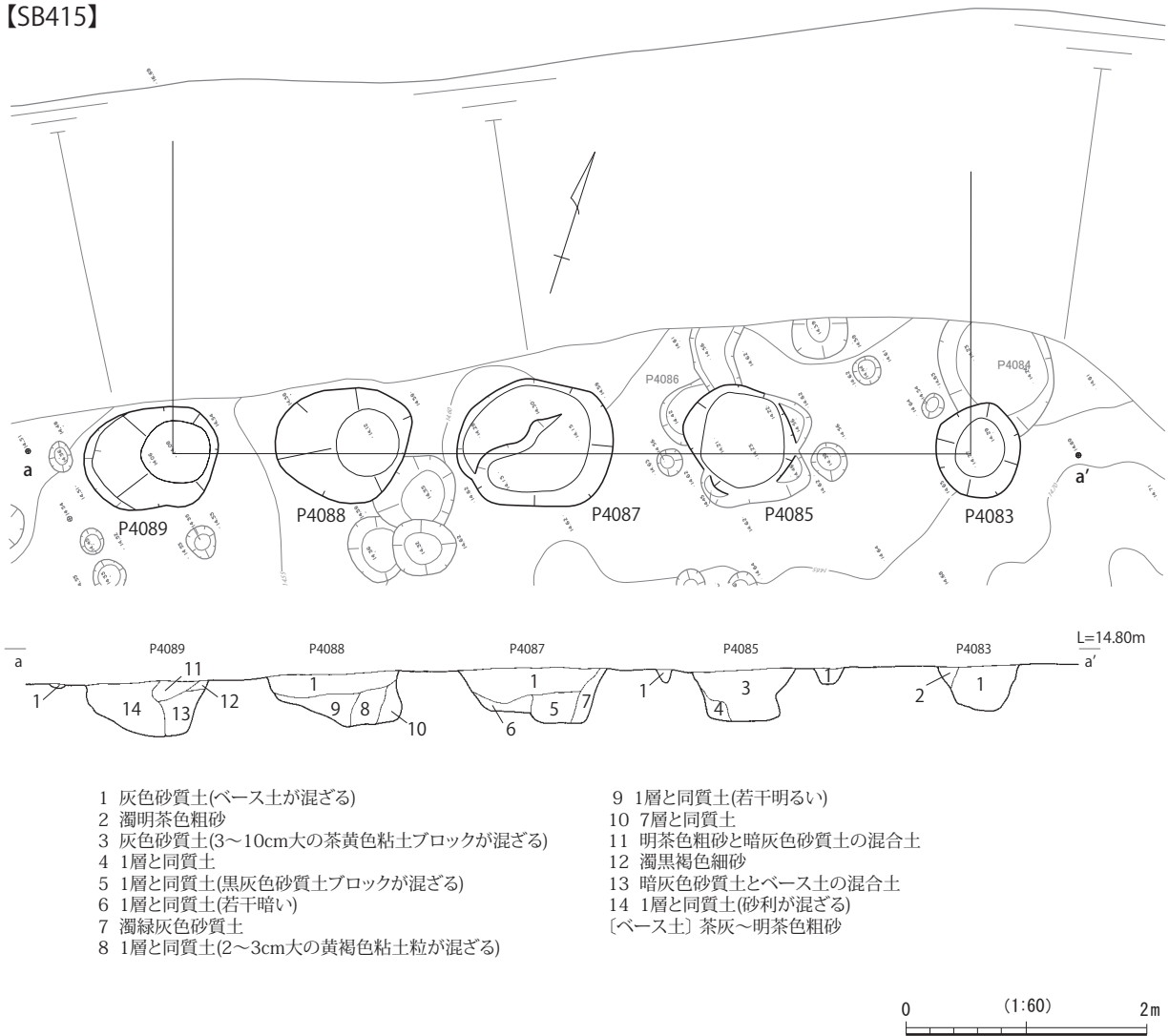
E(N-18° W)を示し、建物敷地が重複するSB414と近似した方位を示す。桁行4間(6.60m、柱間寸法1.65m等間)の建物を復元したが、西隅のP4083の掘方が一回り小さいことから、P4083を別の建物柱穴として梁間3間(4.95m)の建物となる可能性を残す。柱穴の平面形態は不整形円形を呈し、P4085・87～89が径80～130cm、深さ42～48cmを、P4083が径70～80cm、深さ38cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基調に、P4085・88では埋土に粘土を混ぜた土を用いる。柱根は遺存せず、P4088の柱根抜取り痕は径22cmを測る。また、他の建物との重複や柱穴の切り合い関係は確認できない。

出土遺物のうち、P4085出土の819・820を図化した。平底の製塩土器片819は、内面にハケ調整を密に施す。土師器土錘820は、4mmを超える礫を含めて混和材が多く混ざる。残存重量は、62.4gを量る。他に、P4085・88・89から非ロクロ土師器甕が、P4085からロクロ土師器甕やⅡ<sub>3</sub>期の須恵器碗が、P4087から製塩土器が、P4089からⅣ<sub>1</sub>期と考えられる須恵器坏蓋の小片が、それぞれ出土した。

**SB416(遺構：第177図)**

E・F・26・27区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外北東側に延びる。主軸方位はN-57.5° Eを示し、桁行1間以上(2.30m～)×梁間3間(4.80m)を測る。梁間の柱間寸法は1.60m等間で、桁行

**【SB415】**

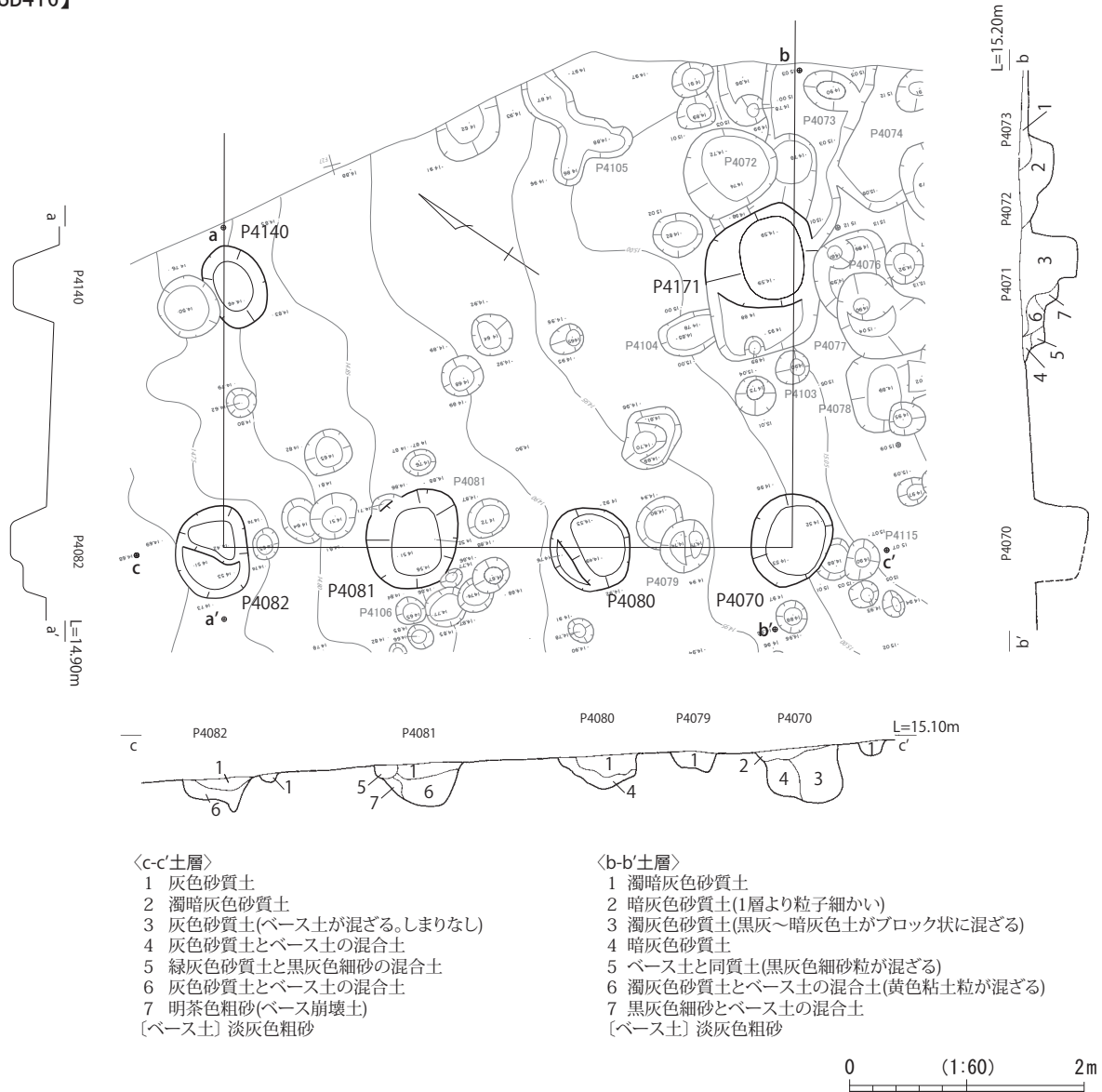


- |                                |                     |
|--------------------------------|---------------------|
| 1 灰色砂質土(ベース土が混ざる)              | 9 1層と同質土(若干明るい)     |
| 2 濁明茶色粗砂                       | 10 7層と同質土           |
| 3 灰色砂質土(3～10cm大の茶黄色粘土ブロックが混ざる) | 11 明茶色粗砂と暗灰色砂質土の混合土 |
| 4 1層と同質土                       | 12 濁黒褐色細砂           |
| 5 1層と同質土(黒灰色砂質土ブロックが混ざる)       | 13 暗灰色砂質土とベース土の混合土  |
| 6 1層と同質土(若干暗い)                 | 14 1層と同質土(砂利が混ざる)   |
| 7 濁緑灰色砂質土                      | [ベース土] 茶灰～明茶色粗砂     |
| 8 1層と同質土(2～3cm大の黄褐色粘土粒が混ざる)    |                     |

176図 G地区 第IV面SB415平面図・土層断面図 (S=1/60)



【SB416】



- 〈c-c'土層〉
- 1 灰色砂質土
  - 2 濁暗灰色砂質土
  - 3 灰色砂質土(ベース土が混ざる。しまりなし)
  - 4 灰色砂質土とベース土の混合土
  - 5 緑灰色砂質土と黒灰色細砂の混合土
  - 6 灰色砂質土とベース土の混合土
  - 7 明茶色粗砂(ベース崩壊土)
- [ベース土] 淡灰色粗砂

- 〈b-b'土層〉
- 1 濁暗灰色砂質土
  - 2 暗灰色砂質土(1層より粒子細かい)
  - 3 濁灰色砂質土(黒灰～暗灰色土がブロック状に混ざる)
  - 4 暗灰色砂質土
  - 5 ベース土と同質土(黒灰色細砂粒が混ざる)
  - 6 濁灰色砂質土とベース土の混合土(黄色粘土粒が混ざる)
  - 7 黒灰色細砂とベース土の混合土
- [ベース土] 淡灰色粗砂

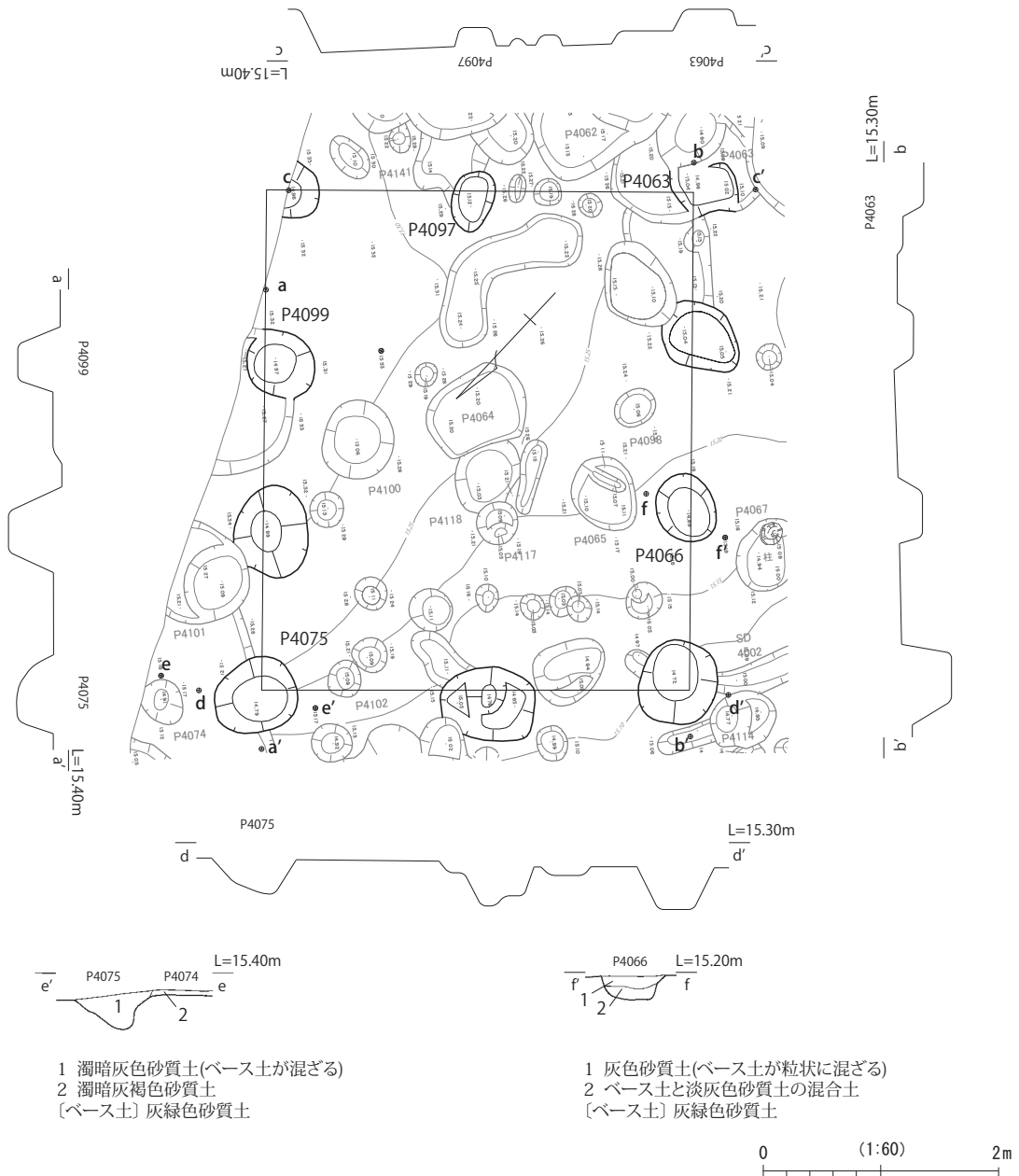
第177図 G地区 第IV面SB416平面図・土層断面図 (S=1/60)

の柱間寸法に比してかなり短い。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、P4140が径50～70cm、深さ37cm、P4080が径約70cm、深さ28cmとなる。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、P4082で柱根痕跡と考えられる径約10cmのくぼみが認められる。他の建物とは、敷地の重複や柱穴の切り合い関係はない。未図化だが、P4070・71・80・4140から非ロクロ土師器甕片が出土した他、P4070からⅢ期頃のロクロ土師器赤彩碗小片が出土した。

SB417(遺構：第178図)

F-26区で検出した側柱構造をもつ小型の掘立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はN-42.5° Wを示し、桁行3間(4.20m)×梁間2間(3.60m)、床面積15.1㎡を測る。柱間寸法は、桁行が1.40m等間、梁間が1.80m等間で、桁行の柱間寸法が短い点に特徴をもつ。柱穴の平面形態は略円形または不整円形を呈し、P4066が径50～60cm、深さ29cm、P4075が径60～70cm、深さ30cm、P4099が径約55cm、深さ34cmと、南西側に向うにつれ浅くなる傾向を示す。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる灰色砂質土を基本に、P4099では多くの炭粒と黄色粘土粒が混ざる。柱根は遺存せず、

【SB417】



- 1 濁暗灰色砂質土(ベース土が混ざる)
- 2 濁暗灰褐色砂質土  
〔ベース土〕 灰緑色砂質土

- 1 灰色砂質土(ベース土が粒状に混ざる)
- 2 ベース土と淡灰色砂質土の混合土  
〔ベース土〕 灰緑色砂質土

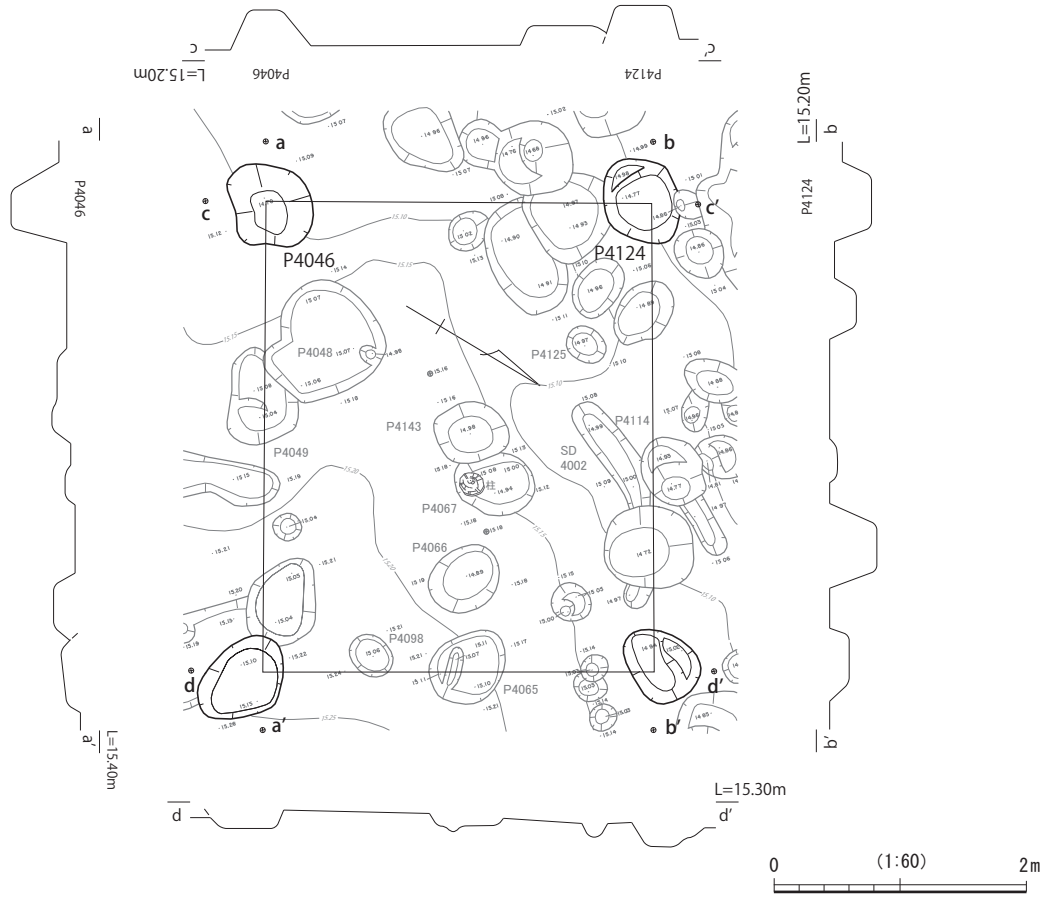
第178図 G地区 第IV面SB417平面図・土層断面図 (S=1/60)

北西側梁間中間柱穴で柱根痕跡と考えられるくぼみが認められる。建物敷地はSB418・222と重複する他、他遺構との切り合い関係はSD4002より新しく、整地土SX4004およびSB418より古く位置付けられる。遺物は、P4063・97・99から非ロクロ土器甕が、P4063から製塩土器やⅡ<sub>2</sub>期の内面返しをもつ須恵器坏蓋の小片が、それぞれ出土した。

SB418(遺構：第179図)

F-26区で検出した小型の掘立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はN-58.5° Eを示し、柱間寸法は長く、桁行1間(3.70m)×梁間1間(3.10m)、床面積11.4㎡を測る。柱穴の平面形態は不整形を呈し、P4046が径60～65cm、深さ42cm、その他の柱穴が径50～65cm、深さ15～23cmとなる。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB417・222、SA405と重複する。他遺構との切り合い関係は、遺構検出時の

【SB418】



第179図 G地区 第IV面SB418平面図・断面図 (S=1/60)

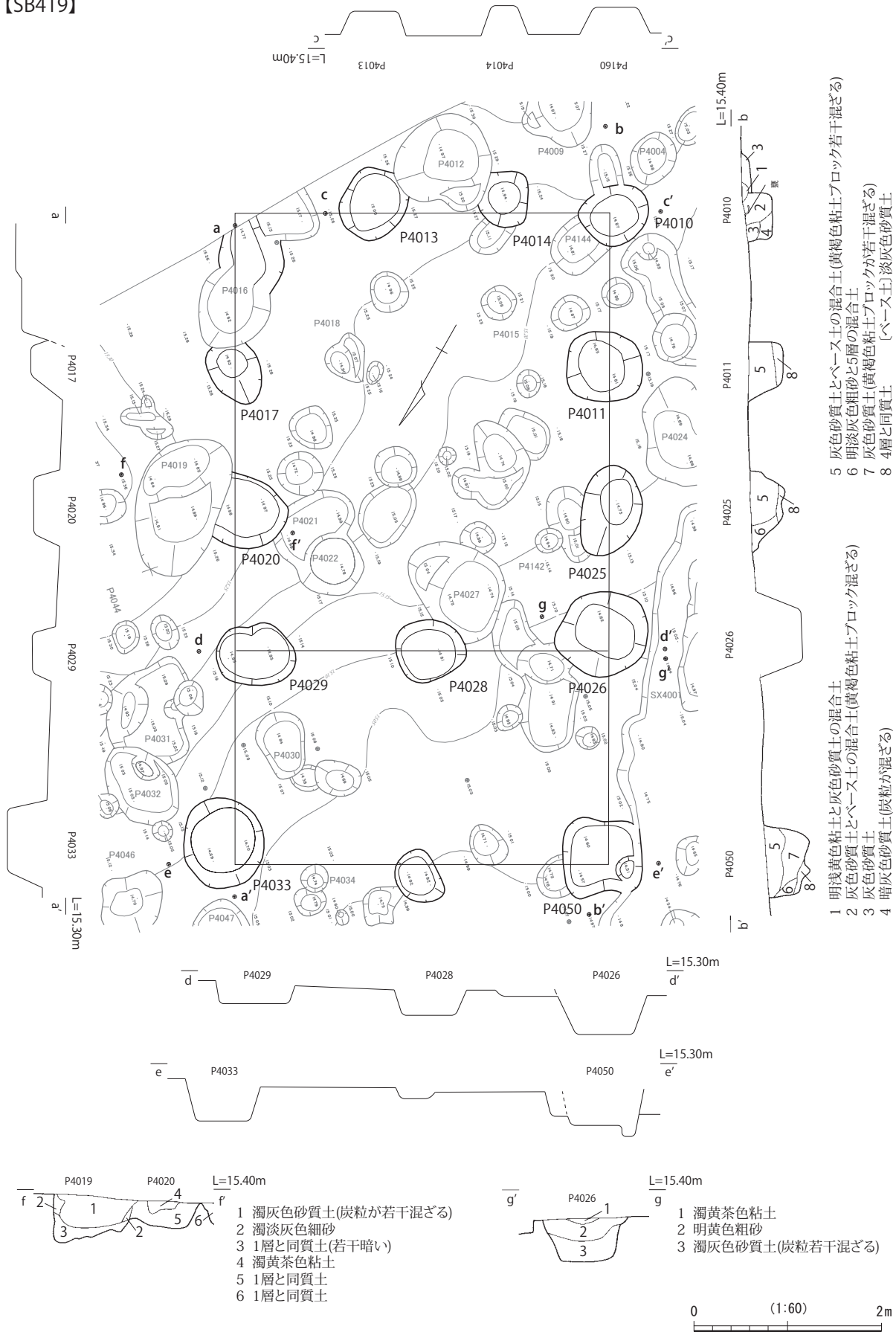
切り合い関係からSB417やSA405より新しく位置付けられる。遺物は、P4046・4124から非ロクロ土師器甕片が出土したにとどまる。

**SB419**(遺構：第180図、遺物：第193・195図)

E・F-25区で、灰色砂質土と黄色粘土の混合土を用いた整地土SX4004(南西-北東方向10m以上、南東-北西方向4m以上)を掘り下げた後に検出した側柱構造をもつ掘立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はN-29° Wを示し、身舎の桁行3間(5.10m)×梁間3・2間(4.00m)、床面積18.6㎡を測る。また、北側梁間に廂が付すと考えられ、廂部分を含めた床面積は27.6㎡を測る。柱間寸法は、桁行が1.55m等間(廂部分2.25m)、梁間は南側(3間)が1.20～1.50m、北側(2間)が1.80m等間となり、梁間の柱間寸法が比較的小さい点に特徴をもつ。柱穴の平面形態は不整形円形または不整形方形を呈し、径(一辺)55～95cm、深さ30～46cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基本に、P4017・28・33・50で黄色粘土粒が混ざる。柱根は遺存せず、建物敷地はSB420、SA407と重複、他遺構との切り合い関係はSB419柱穴P4020がSB420柱穴P4019より古く位置付けられる。

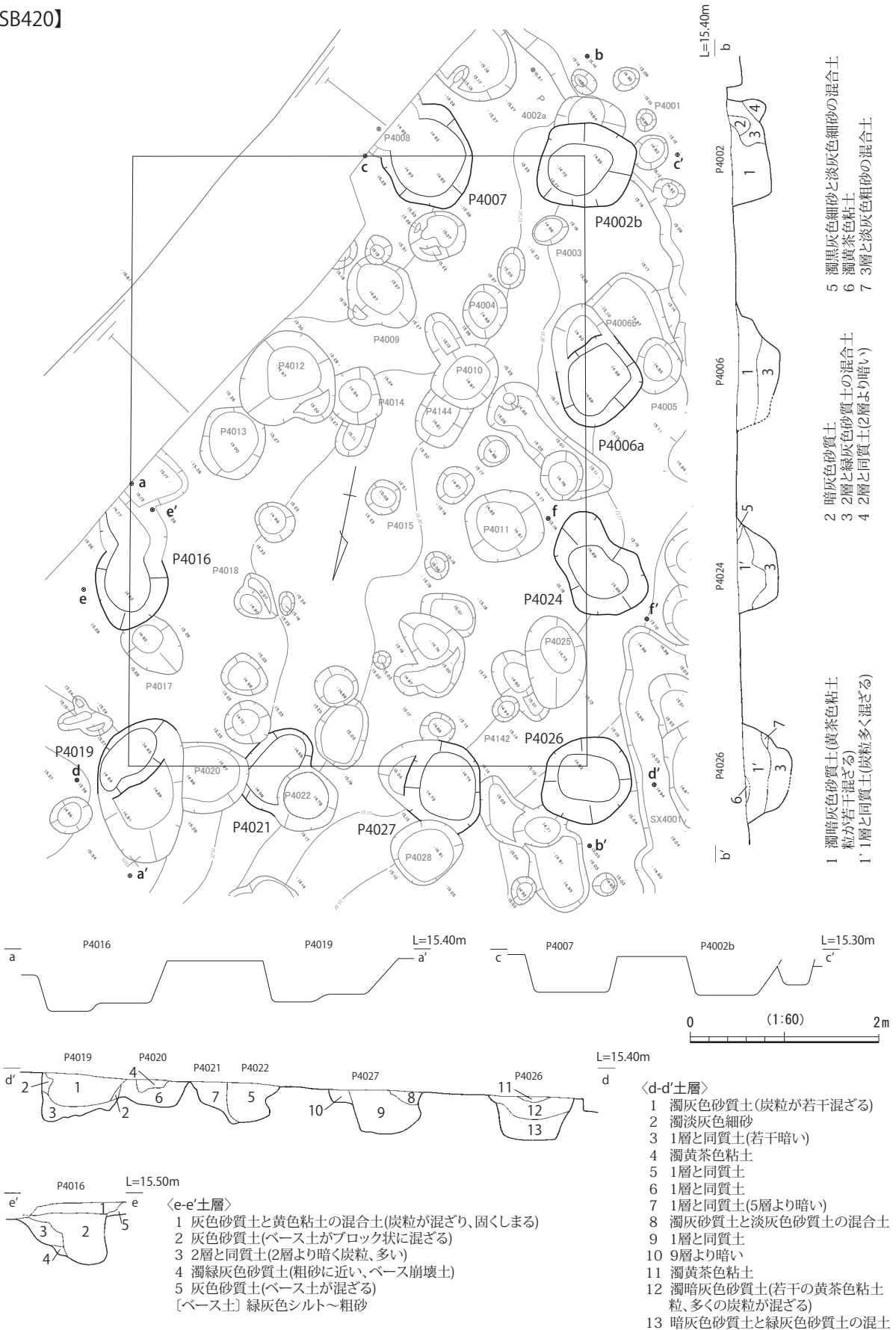
出土遺物は比較的多く、柱穴P4050出土の第193図822・823・825・826、柱穴P4010出土の824、柱穴P4033出土の827を図化した。また、第195図832の須恵器横瓶は、柱穴P4033・50の他、P4031等から出土した破片が接合する。薄手のロクロ土師器甕822は口径20.5cmを測り、頸部で明瞭に屈曲し、口縁部は外傾しながら直線的にのびる。非ロクロ土師器壺823は口径30.5cmを測る。ハケとケズリで整形し、824とともに煮炊きに伴う痕跡が明瞭に残る。非ロクロ土師器甕824は口径16.2cm、器高

【SB419】



第180図 G地区 第IV面SB419平面図・土層断面図 (S=1/60)

【SB420】



第181図 G地区 第IV面SB420平面図・土層断面図 (S=1/60)

14.7cmを測り、口縁部を薄く仕上げる。825・826は須恵器坏蓋で、口縁端部をしっかりと面取りする。825はIV<sub>1</sub>期と考えられる。須恵器長頸瓶827は、自然釉や焼土の熔着状況から正位で焼成したと考えられる。832は口径14.0cmを測る両面閉塞の横瓶である。横位で焼成され、内外面とも淡黄～濃オリーブ色の自然釉が顕著に溶着する他、外面に焼台に転用した瓶類片・窯土が溶着する。他に、各柱穴から非ロクロ土師器甕を主体とした土師器、須恵器の小片が出土した。

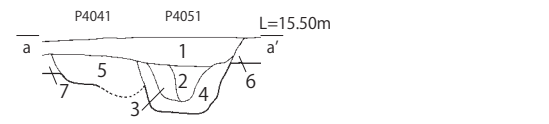
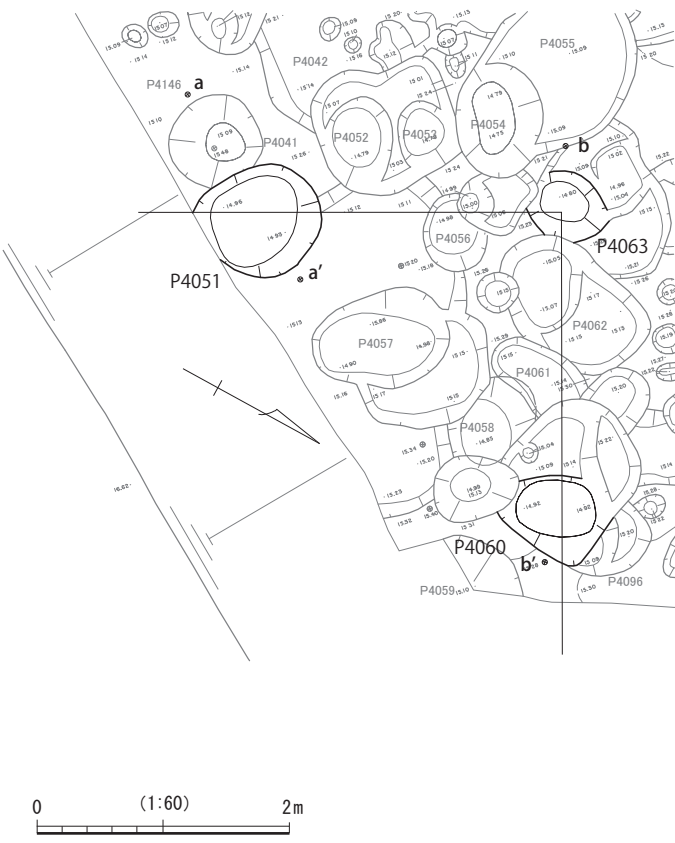
**SB420**(遺構：第181図、遺物：第193図)

F・G-25区で整地土SX4004掘り下げ後に検出した側柱構造をもつ掘立柱建物で、柱筋の通りは良好である。主軸方位はN-10° Wを示し、桁行3間(6.45m)×梁間3間(4.80m)、床面積30.9㎡と、梁間が比較的広い建物となる。柱間寸法は、西側桁行が2.15m等間、梁間が1.60m等間を測る。柱穴の平面形態は不整円形または不整形を呈し、径(一辺)80～110cm、深さ42～50cmと、掘方は比較的大型である。柱穴覆土は柱拔取埋土で、ベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基本に、P4002b・06a・07・16・24・26では黄～黄茶色粘土粒が混ざる。柱根は遺存せず、SB419・424、SA407と建物敷地が重複し、他遺構との切り合い関係についてはSB419より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、P4019出土の非ロクロ土師器甕片828を図化した。828は肉厚で、小片のため傾きに不安を残す。他にP4002b、P4007・16・19・21・24・27から非ロクロ土師器甕が、P4002b・P4007・16・19から須恵器坏類等の小片がそれぞれ出土、P4007出土の須恵器坏蓋片はV期以降に位置付けられる。

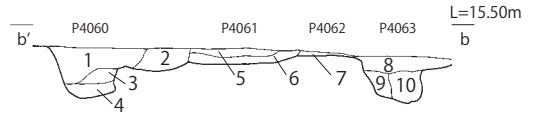
**SB421**(遺構：第182図、遺物：第193図)

F・G-25・26区では、整地土SX4004を取り除いた段階で、重複する数多くの柱穴を検出した。整理時

**【SB421】**



- 1 灰色砂質土と黄色粘土の混合土(汚れて、固くしまる、SX4004)
- 2 灰色砂質土と黄色粘土の混合土(固くしまる)
- 3 灰色砂質土と黄色粘土の混合土(汚れて、固くしまる)
- 4 濁灰色砂質土(ベース土、黄色粘土が若干粒状に混ざる)
- 5 灰色砂質土(黄褐色粘土ブロックが多く混ざり、固くしまる)
- 6 淡緑灰色砂質土(灰色砂質土が混ざる、SX4004)
- 7 灰色砂質土と淡緑灰色砂質土の混合土
- [ベース土] 緑灰色砂質土



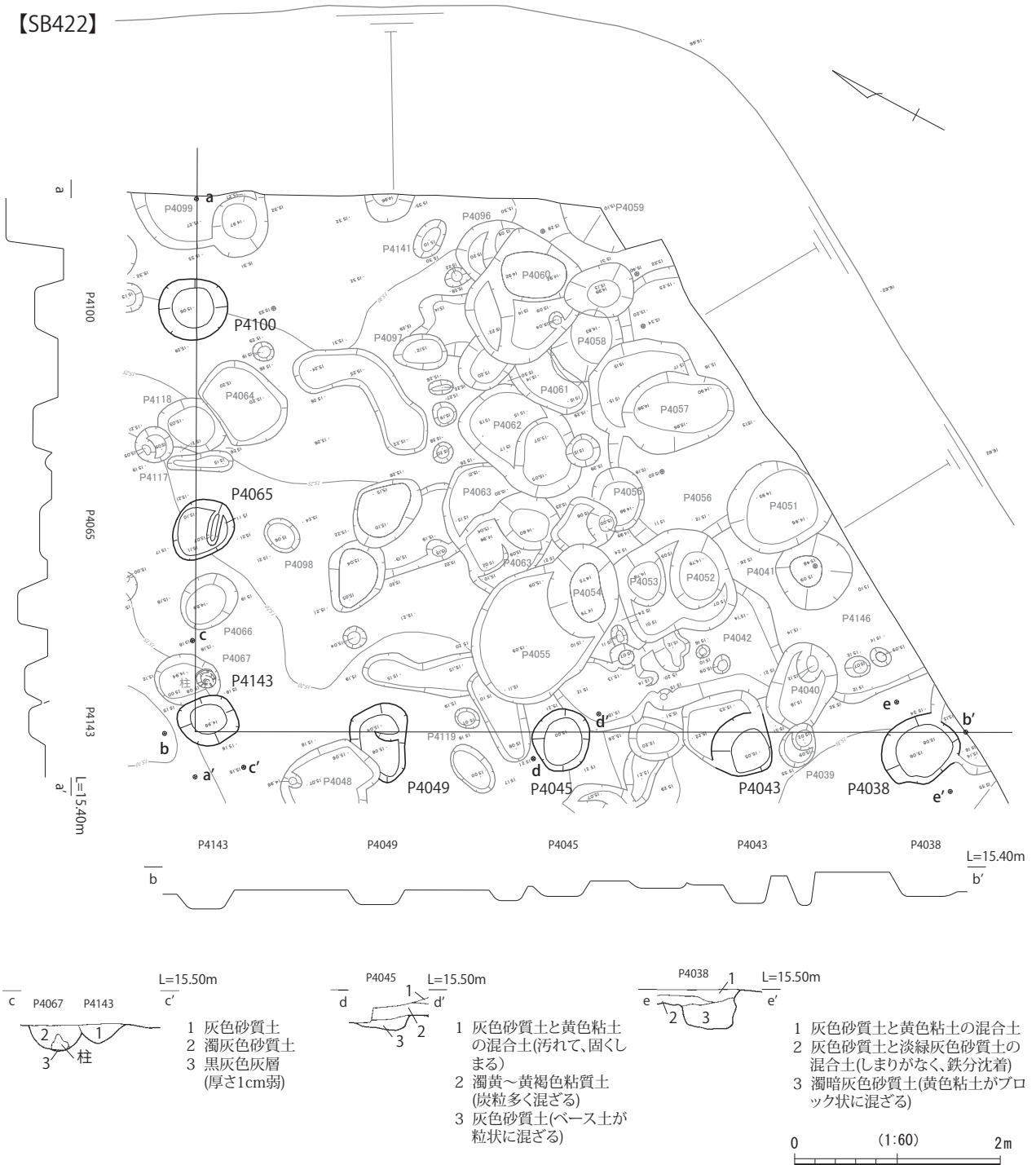
- 1 灰色砂質土(ベース土が混ざる)
- 2 濁灰色砂質土
- 3 灰緑色砂質土と4層の混合土
- 4 灰褐色砂質土(やや粘性あり)
- 5 灰緑色砂質土(黒灰色土が粒状に混ざる)
- 6 灰色砂質土(炭粒が混ざり、しまりない)
- 7 5層と同質土
- 8 濁灰色砂質土(明橙色粘土粒が混ざる)
- 9 10層とベース土の混合土
- 10 濁灰色砂質土
- [ベース土] 灰緑色砂質土～明茶色粗砂

第182図 G地区 第IV面SB421平面図・土層断面図 (S=1/60)

を含めてSB421～424、SA407・408を復元したが、SX404と同様に調査区外東側及び北側に延びるため全体の規模は不明であり、周辺に存在した棟数はさらに増えるものとする。

SB421は1×1間以上の側柱構造を想定した掘立柱建物で、主軸方位はSB419と類似したN-28° Wを示す。北西側の柱間寸法が2.40m、南西側の柱間寸法が2.35mを測る。柱穴の平面形態は不整形円形を呈し、P4051が径90～100cm、深さ43cm、P4060が径75～90cm、深さ38cmを測る。柱穴覆土は柱拔取埋土であり、明橙～黄色粘土を混ぜた灰色砂質土を用いて埋め戻すことを基本とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB417・423～425、SA407と重複、他遺構との切り合い関係はSB423より新しく位置付け

【SB422】



第183図 G地区 第IV面SB422平面図・土層断面図 (S=1/60)

られる。出土遺物のうち、柱穴P4051出土の製塩土器片829を図化した。平底の829は口径約20cmを測り、外面に粘土紐の積み上げ痕を残す。他にP4051から非ロクロ土師器甕、Ⅱ<sub>3</sub>期の須恵器坏蓋が、P4060から非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器甕の小片が、それぞれ出土した。

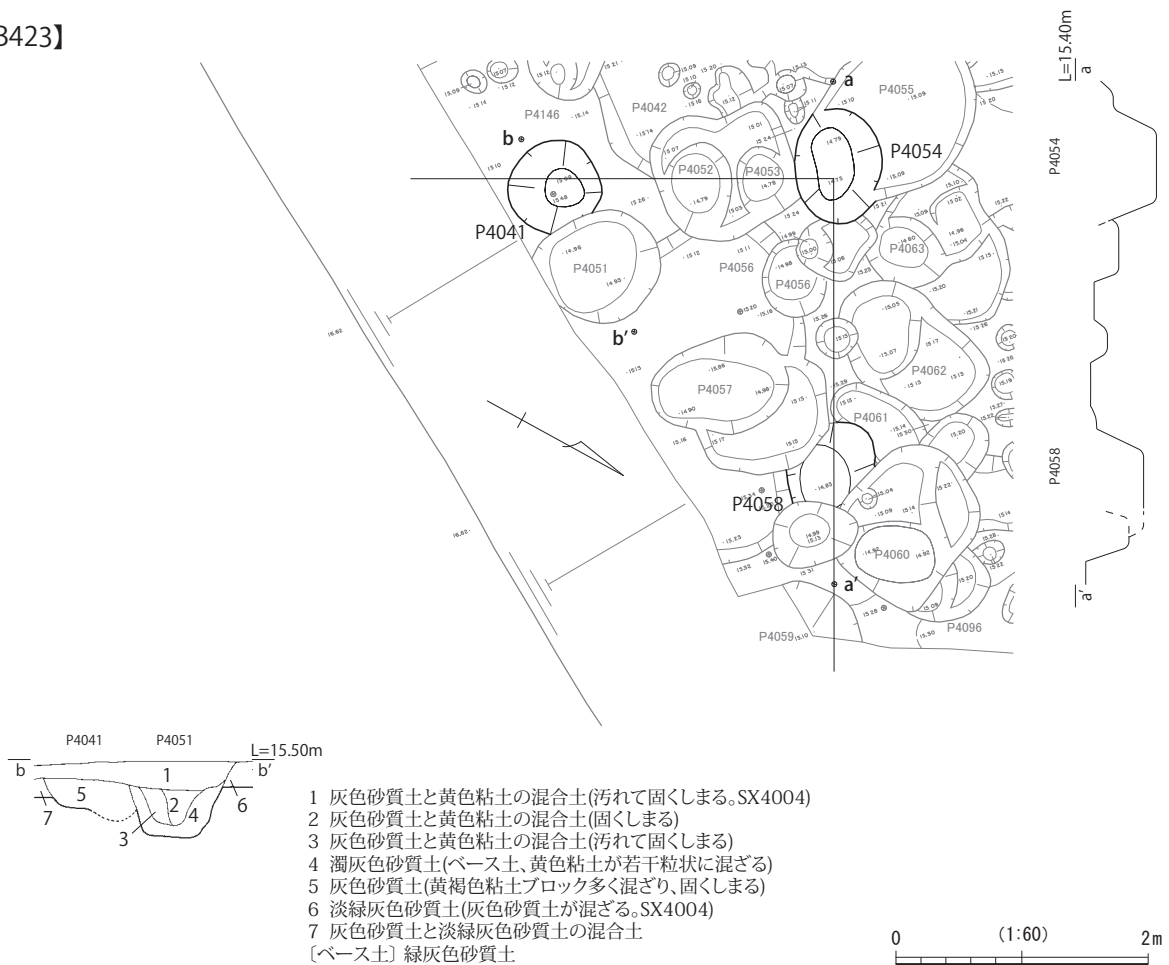
**SB422**(遺構：第183図、遺物：第193図)

F・G-26区で整地土SX4004掘り下げ後に検出した側柱構造をもつ掘立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はN-27.5° Wを示し、桁行4間以上(7.20m～)×梁間2間以上(4.00m～)、床面積28.8㎡以上と、比較的大型の建物となる可能性が高い。柱間寸法は、南西側桁行が1.80m等間、北西側梁間が2.00m等間と、桁行と梁間の柱間寸法に大きな差異は認められない。柱穴の平面形態は、小振りな不整円形または略円形を呈し、径50～75cm、深さ12～32cmを測る。柱穴は、南側に向かうにつれ深くなるものの、全体に浅い。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土や黄色粘土粒が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基調とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB417・418・421・423～425、SA405・407と重複し、他遺構との切り合い関係はSA405より新しく、SX4004より古く位置付けられる。出土遺物のうち、柱穴P4100出土の須恵器坏蓋830を図化した。Ⅳ<sub>2</sub>期と考えられる830は、天井部両面に墨書が残り、外面の文字のつくりは第213図1021と同様に「言」と似る。他に各柱穴から非ロクロ土師器甕の小片が出土した。

**SB423**(遺構：第184図、遺物：第193図)

F・G-26区で整地土SX4004掘り下げ後に1×1間以上の側柱構造を考えた掘立柱建物で、主軸方位は

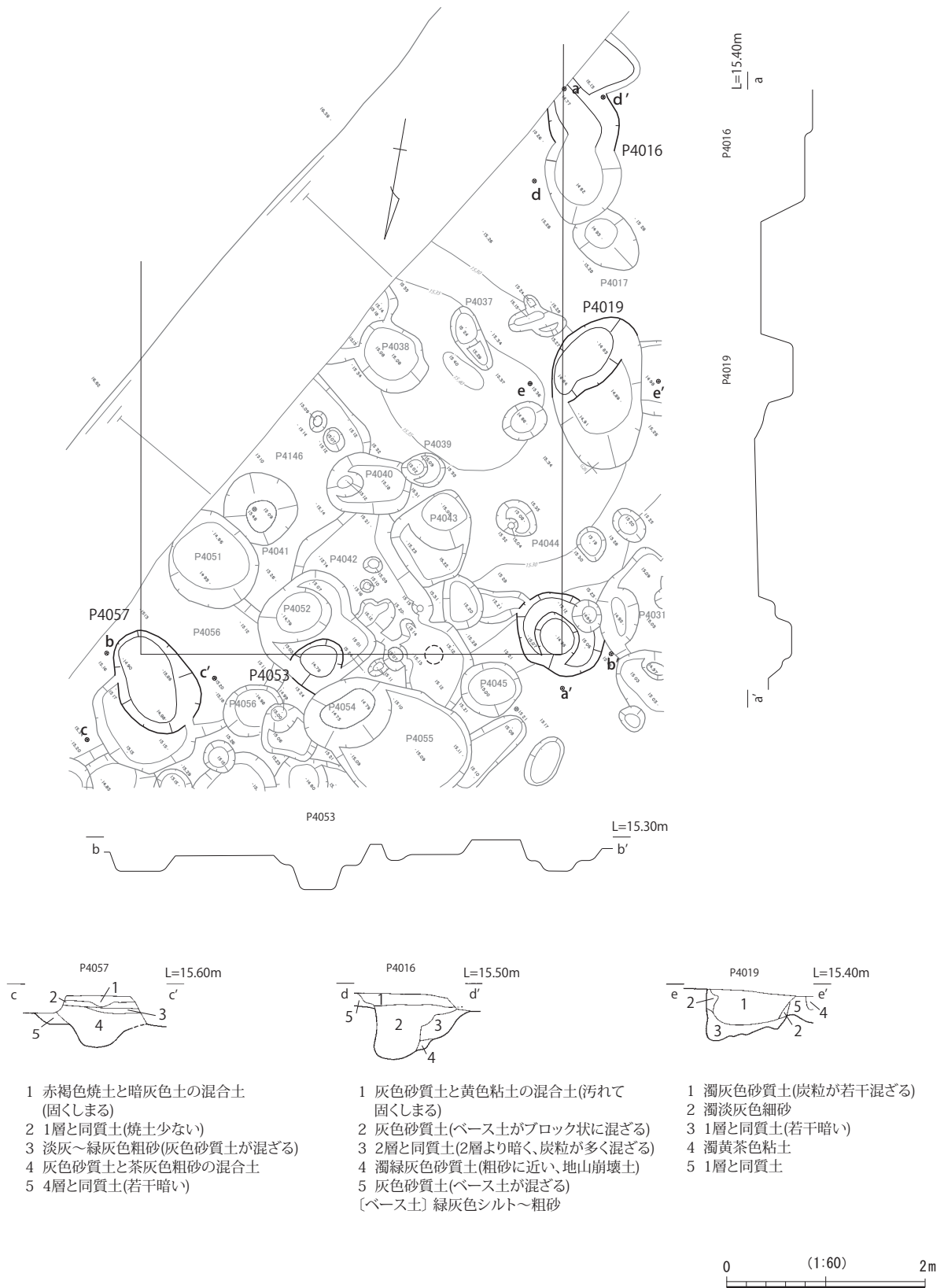
**【SB423】**



第184図 G地区 第IV面SB423平面図・土層断面図 (S=1/60)



【SB424】



- 1 赤褐色焼土と暗灰色土の混合土 (固くしまる)
- 2 1層と同質土(焼土少ない)
- 3 淡灰～緑灰色粗砂(灰色砂質土が混ざる)
- 4 灰色砂質土と茶灰色粗砂の混合土
- 5 4層と同質土(若干暗い)

- 1 灰色砂質土と黄色粘土の混合土(汚れて固くしまる)
- 2 灰色砂質土(ベース土がブロック状に混ざる)
- 3 2層と同質土(2層より暗く、炭粒が多く混ざる)
- 4 濁緑灰色砂質土(粗砂に近い、地山崩壊土)
- 5 灰色砂質土(ベース土が混ざる)  
〔ベース土〕 緑灰色シルト～粗砂

- 1 濁灰色砂質土(炭粒が若干混ざる)
- 2 濁淡灰色細砂
- 3 1層と同質土(若干暗い)
- 4 濁黄茶色粘土
- 5 1層と同質土

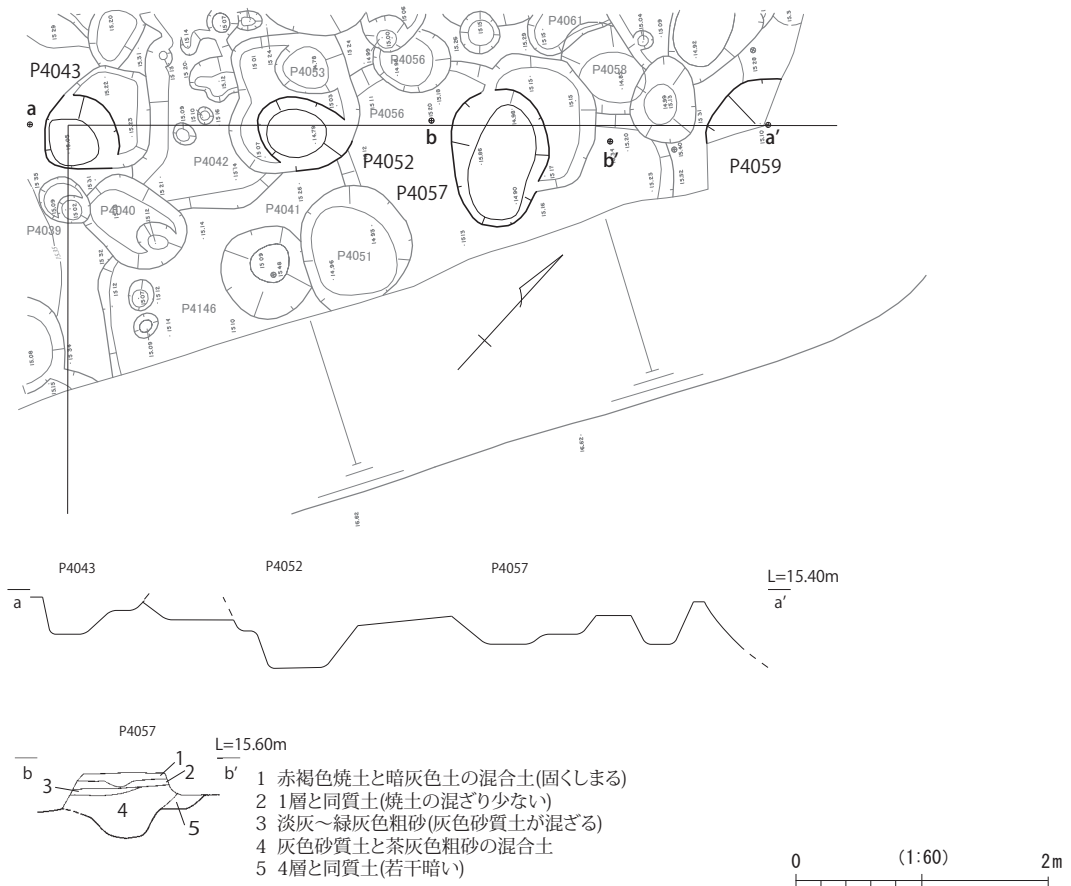
第185図 G地区 第IV面SB424平面図・土層断面図 (S=1/60)

SB421・422と近似したN-28° Wを示す。柱間寸法は、北西辺が2.35m、南西辺が2.20mを測る。柱穴の平面形態は不整円形または不整楕円形を呈し、P4041が径70cm、深さ26cmを、P4054が径70～90cm、深さ54cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、P4041が黄色粘土を混ぜた灰色砂質土、P4054・58が濁暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB421・424・425、SA407と重複、他遺構との切り合い関係はSX4004、SB421より古く位置付けられる。柱穴P4054出土の第193図831は、古墳時代のてづくね土器であり、先細る口縁部を非水平に仕上げる。他にP4041・58から非ロクロ土師器甕の小片が出土した。

**SB424**(遺構：第185図、遺物：第195図)

G-25区、F・G-26区で整地土SX4004掘り下げ後に側柱構造を考えた掘立柱建物で、柱筋の通りはあまりよくない。主軸方位はN-8.5° Wを示し、桁行2間以上(5.50m～)×梁間2間または3間(4.25m)、床面積23.3㎡以上を測る。柱間寸法は、西側桁行が2.75m等間、梁間が2間とした場合1.80m、2.45mとなる。柱穴の平面形態は不整円形または不整楕円形を呈し、径55～110cm、深さ21～49cmと、桁行の掘方は比較的大振りである。柱穴覆土は柱抜取埋土で、炭粒とベース土が混ざる濁灰～灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、SB419～423・425、SA407と建物敷地が重複し、他遺構との切り合い関係はSX4004より古く位置付けられる。出土遺物のうち、SB425柱穴と重複する柱穴P4057出土の置きカマド片833を図化した。833は上端に粗いケズリ調整を施し、下端は接合面で剥離する。他にP4053・57から非ロクロ土師器甕等の小片が出土した。

**【SB425】**



第186図 G地区 第IV面SB425平面図・土層断面図 (S=1/60)

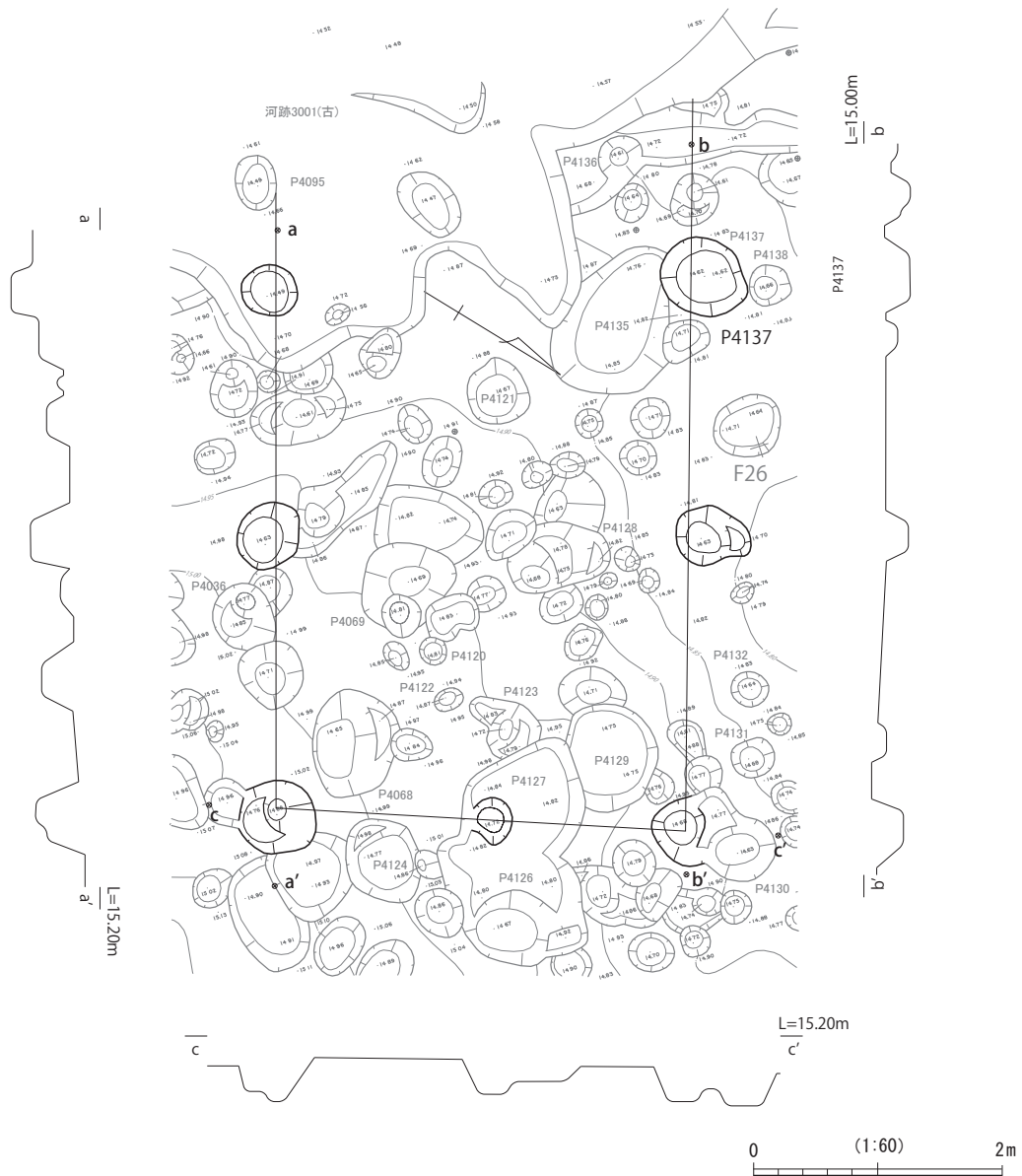
**SB425**(遺構：第186図、遺物：第195図)

G-26区で整地土SX4004掘り下げ後に検出し、主軸方位N-43° Wを示す梁間3間(5.45m、柱間寸法1.90m・1.65m)の側柱構造の掘立柱建物を想定したが、建物とならない可能性を多分に残す。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、径60～110cm、深さ17～56cmを測る。柱穴覆土はベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基調に、P4043は黄色粘土を混ぜた土を埋土に用いる。柱根は遺存せず、建物敷地はSB421～424、SA407と重複する。遺物は、SB424柱穴と重複するP4057から第195図833の置きカマド片が出土した他、P4059からIV期を下限とする須恵器有台坏小片が出土したにとどまる。

**SB426**(遺構：第187図)

E-25区、F-25・26区で検出した小型の掘立柱建物で、西側は河跡3001(古)で損壊する。主軸方位はN-60° Eを示し、柱筋の通り、柱間寸法とも乱れ気味である。桁行2間以上(4.60m～)×梁間2間(3.30m)の建物で、桁行の柱間寸法は2.00～2.40m、梁間の柱間寸法は1.65m等間を測る。柱穴は平面不整円形を呈し、径45～70cm、深さ18～35cmを測る。柱抜取埋土と考えられる柱穴覆土は、ベース土が混

**【SB426】**



第187図 G地区 第IV面SB426平面図・断面図 (S=1/60)

ざる暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB418、SA404～406と重複、他遺構との切り合い関係はSA405より新しく位置付けられる。遺物は、P4137から非ロクロ土師器甕片が出土したにとどまる。

**SA402**(遺構：第188図)

F-22・23区でSX4002掘り下げ後に検出した柱間3間の柵列である。主軸方位はN-90° Wを示し、延長6.90m、柱間寸法は東側から2.30m、2.10m、2.50mと不均等である。柱穴の平面形態は不整円形または不整楕円形を呈し、径30～55cm、深さ30～50cmを測る。覆土はベース土が混ざる灰色砂質土である。柱穴P4149がSB409柱穴P4160より新しく、また、SA402各柱穴はSX4002及び重複する耕作に伴う小溝群より古い。未図化だが、P4284以外の柱穴から非ロクロ土師器甕等の小片が出土した。

**SA403**(遺構：第188図)

E・F-23区でSX4002掘り下げ後に検出した柱間4間の柵列である。主軸方位はN-24° Wを示し、延長は8.00m(柱間寸法2.00m等間)となる。柱穴の平面形態は不整円形または略円形を呈し、径65～110cm、深さ46～68cmを測る。覆土はベース土や黄～褐色粘土が混ざる灰色砂質土であり、柱根痕跡がP4155に残る。位置関係はSB409・410、SA402と重複し、他遺構との切り合い関係はSX4002及び重複するSD4008・11より古く位置付けられる。未図化だが、P4155以外の柱穴から非ロクロ土師器甕片が出土した他、P4152からMT15並行期の須恵器坏蓋小片が出土した。

**SA404**(遺構：第189図)

F-26区で検出した柱間2間の柵列で、柱筋はSB419東側桁行とほぼ一致する。主軸方位はN-30.5° Wを示し、延長は4.60m(柱間寸法2.30m等間)を測る。柱穴の平面形態は不整円形または略方形を呈し、径50～90cm、深さ15cm前後と、かなり浅い掘方である。覆土はベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土で、位置関係からSB426、SA405と前後関係をもつ。未図化だが、P4068以外の柱穴から非ロクロ土師器甕片等が出土した。

**SA405**(遺構：第189図、遺物：第196図)

F-25・26区で検出した柱間2間の柵列である。主軸方位はSB414と近似するN-77.5° Eを示し、延長は4.80m(柱間寸法2.40m等間)を測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、径50～90cm、深さ13～26cm、覆土はベース土や黄色粘土粒が混ざる灰色砂質土を基本とする。柱穴の切り合い関係からSB418・425・426より古く位置付けられる他、SA404と前後関係をもつ。第196図844は、P4067に残存したクリ材の柱根で、径14～18cmを測り、平坦に加工した底面に砂が圧着する。P4067からは、土師器甕、須恵器無台坏の小片も出土した。

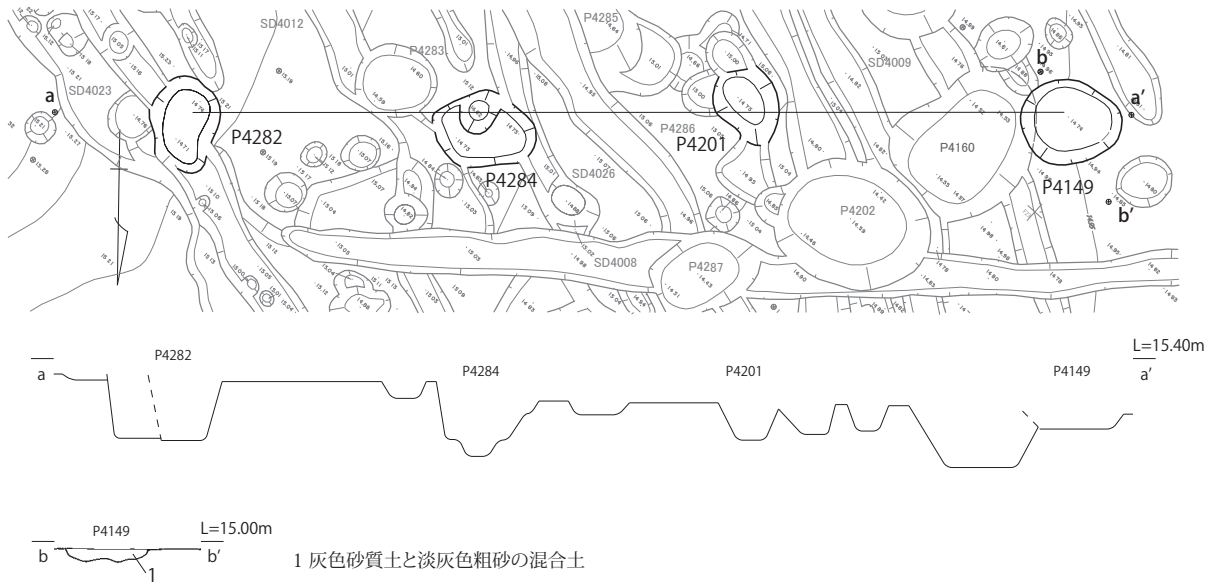
**SA406**(遺構：第189図、遺物：第195図)

F-25区で検出した柱間2間の柵列である。主軸方位はN-20° Wを示し、延長は3.00m(柱間寸法1.50m等間)を測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、径30～55cm、深さ15～37cm、覆土はベース土が混ざる暗灰色砂質土である。河跡3001(古)に削られ、SB426と重複する位置関係にある。出土遺物のうち、柱穴P4095出土の非ロクロ土師器甕第195図834を図化した。834は口径14.4cmを測り、内面の黒色処理が赤彩を施した外面にも及ぶ。他に非ロクロ土師器甕小片が出土した。

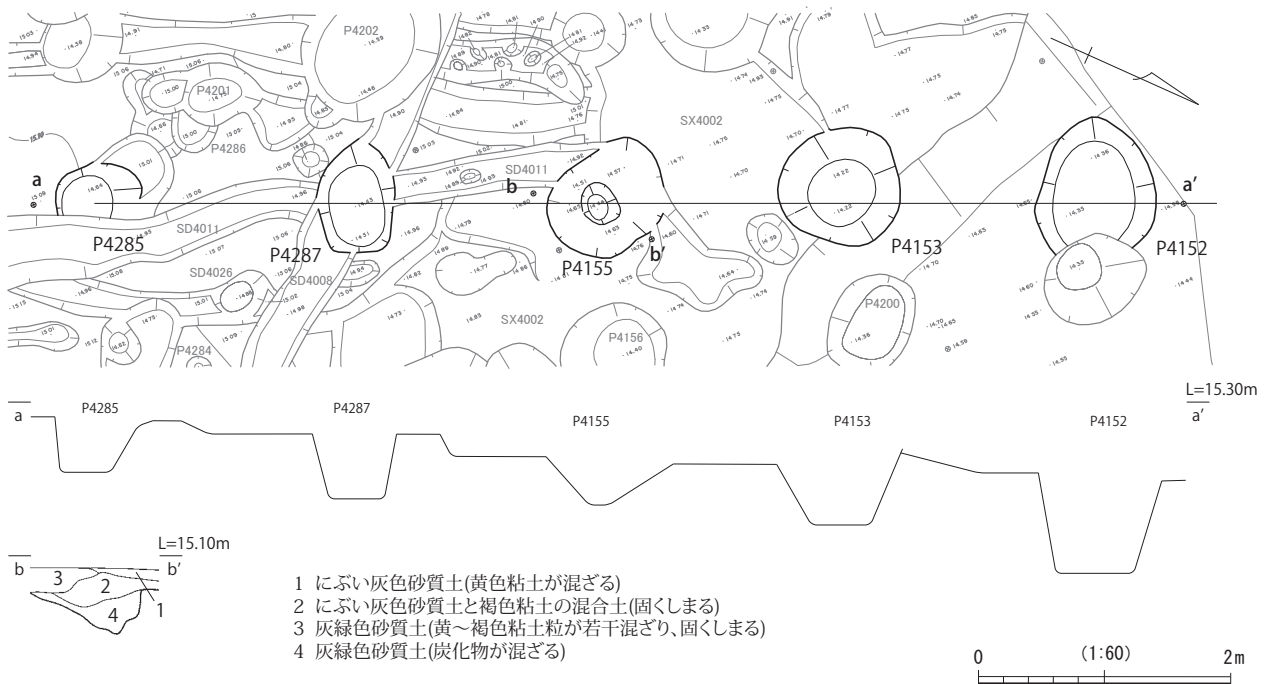
**SA407**(遺構：第190図)

F-25区、G-25・26区で復元したL字状に曲がる柵列で、柱間寸法は3.05m等間を測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、径50～105cm、深さ20～52cm、覆土はベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基本とする。SB419～425と重複する位置関係にあり、柱穴P4019がSB4020柱穴P4020より古く位置付けられる。遺物は、P4012・20から非ロクロ土師器甕片が出土したにとどまる。

【SA402】

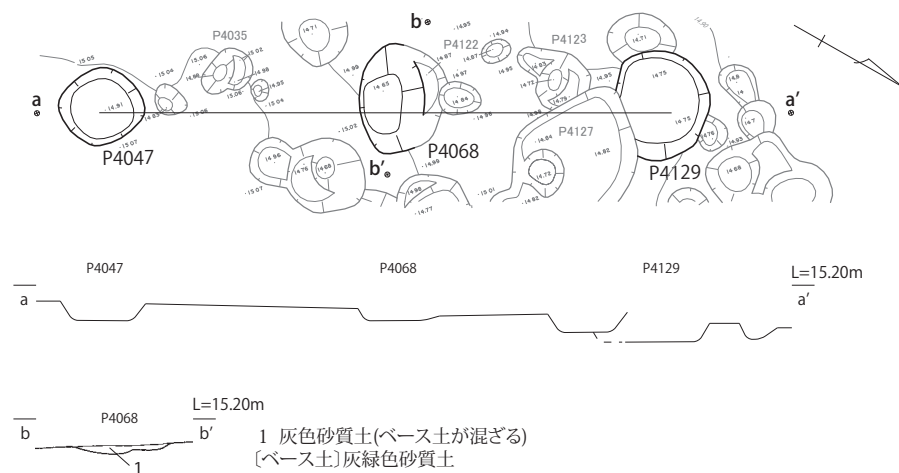


【SA403】

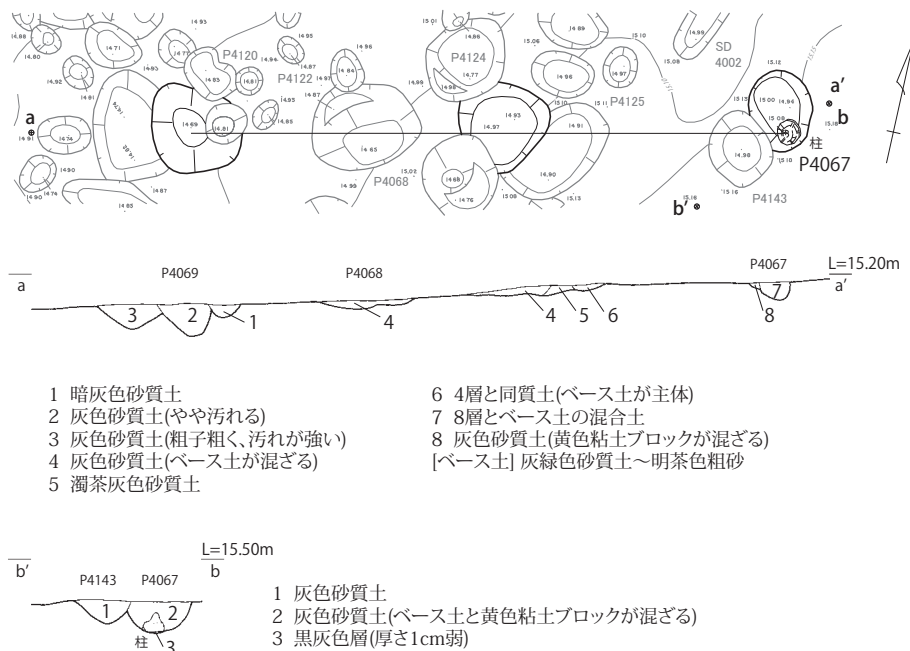


第188図 G地区 第IV面SA402・403平面図・土層断面図 (S=1/60)

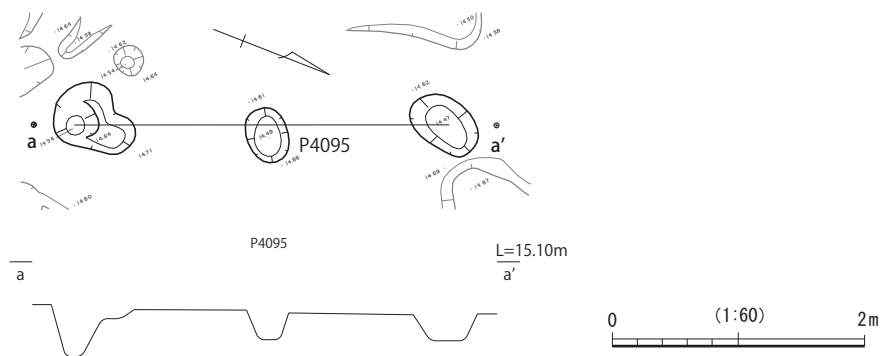
【SA404】



【SA405】

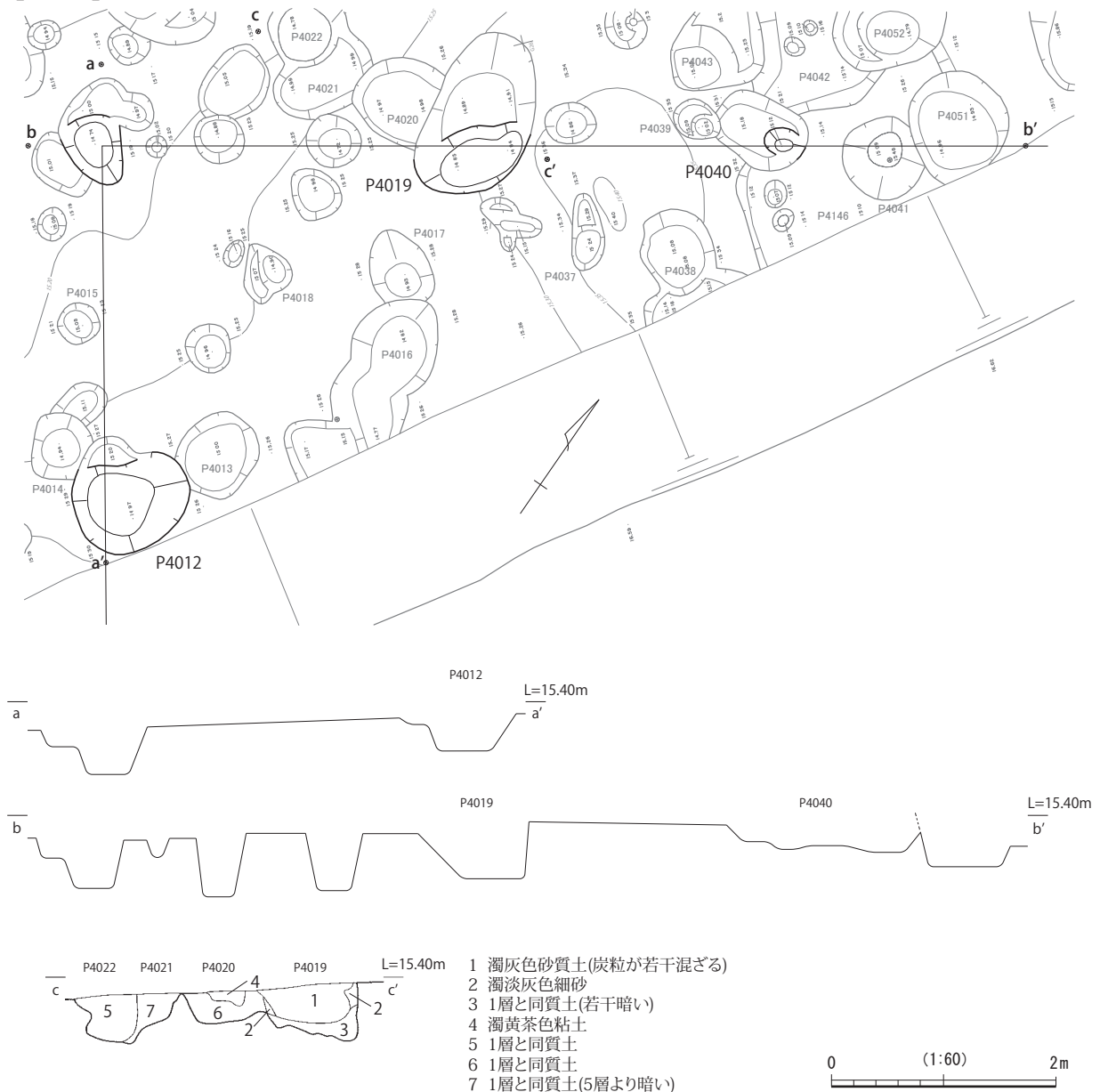


【SA406】



第189図 G地区 第IV面SA404～406平面図・土層断面図 (S=1/60)

【SA407】

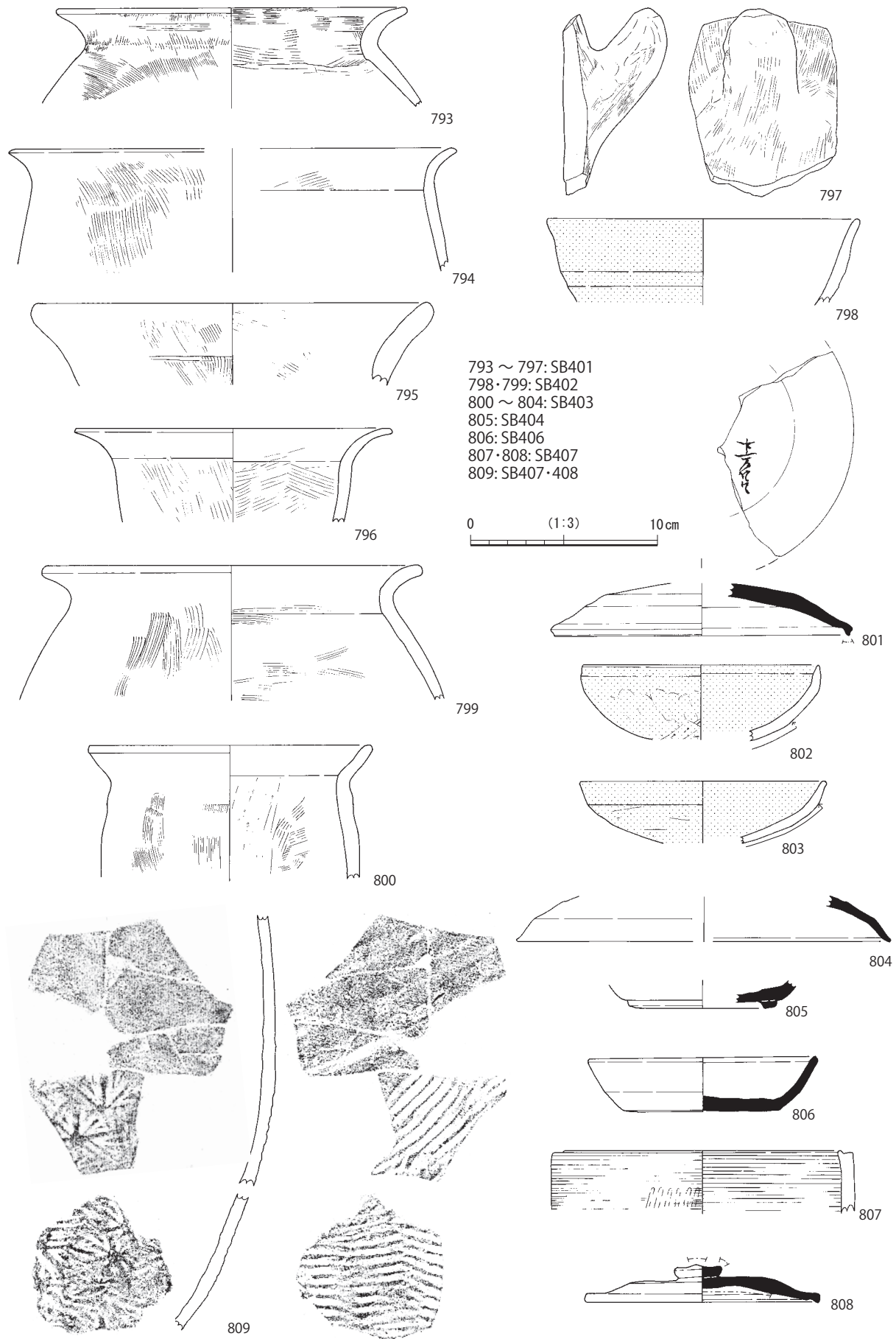


第190図 G地区 第IV面SA407平面図・土層断面図 (S=1/60)

### 3 ピット(P) (遺構：第194図、遺物：第195・196図)

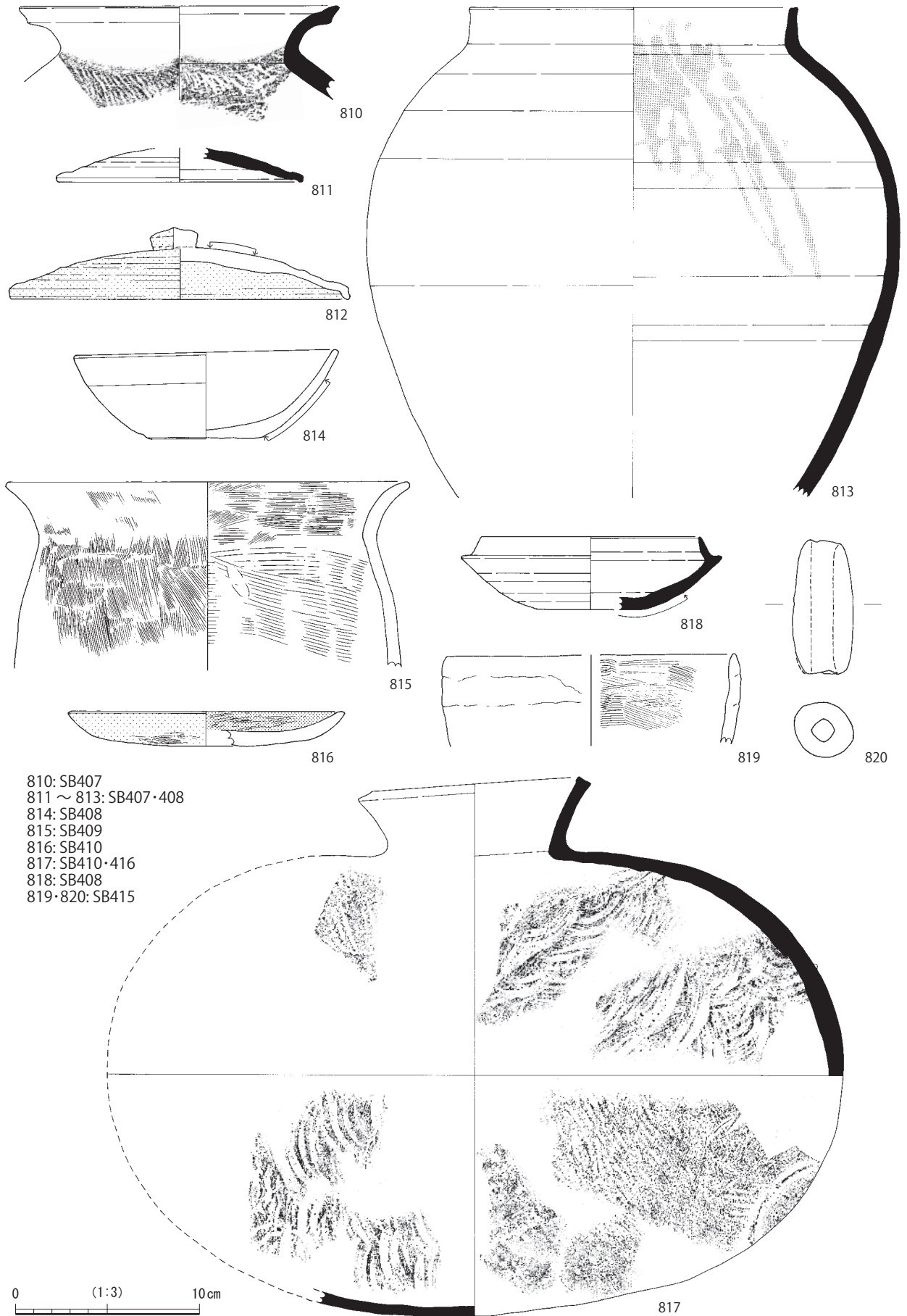
調査区全体で多数のピットを検出しており、復元できなかった建物等構造物の柱穴を含むものと考えられる。現地調査では、遺物が出土したピットについて遺構番号を付しており、掘立柱建物を構成する柱穴以外の土層断面図は第194図に載せてある。以下では、主に出土遺物について記す。

第195図835はP4010出土の尖底タイプの製塩土器で、口径約15cmを測る。胎土中に2～3mm大の角張った長石が多く混ざり、硬質な焼き上がりである。836・837はP4016から出土した。内面黒色の非ロクロ土師器壺836は深身で、外面に縦方向のハケ調整を施す。837は口径約25cmを測るロクロ土師器甗である。須恵器壺838はP4017・19出土の破片が接合した。838の外面は、肩部より下方に丁寧な回転ケズリ調整を施した後にカキメ調整を加える。また、肩部を1条の沈線で加飾する。P4019出土の須恵器有台坏839は、薄手の体部に、しっかりと外展する台部を貼り付ける。第195図840、第196



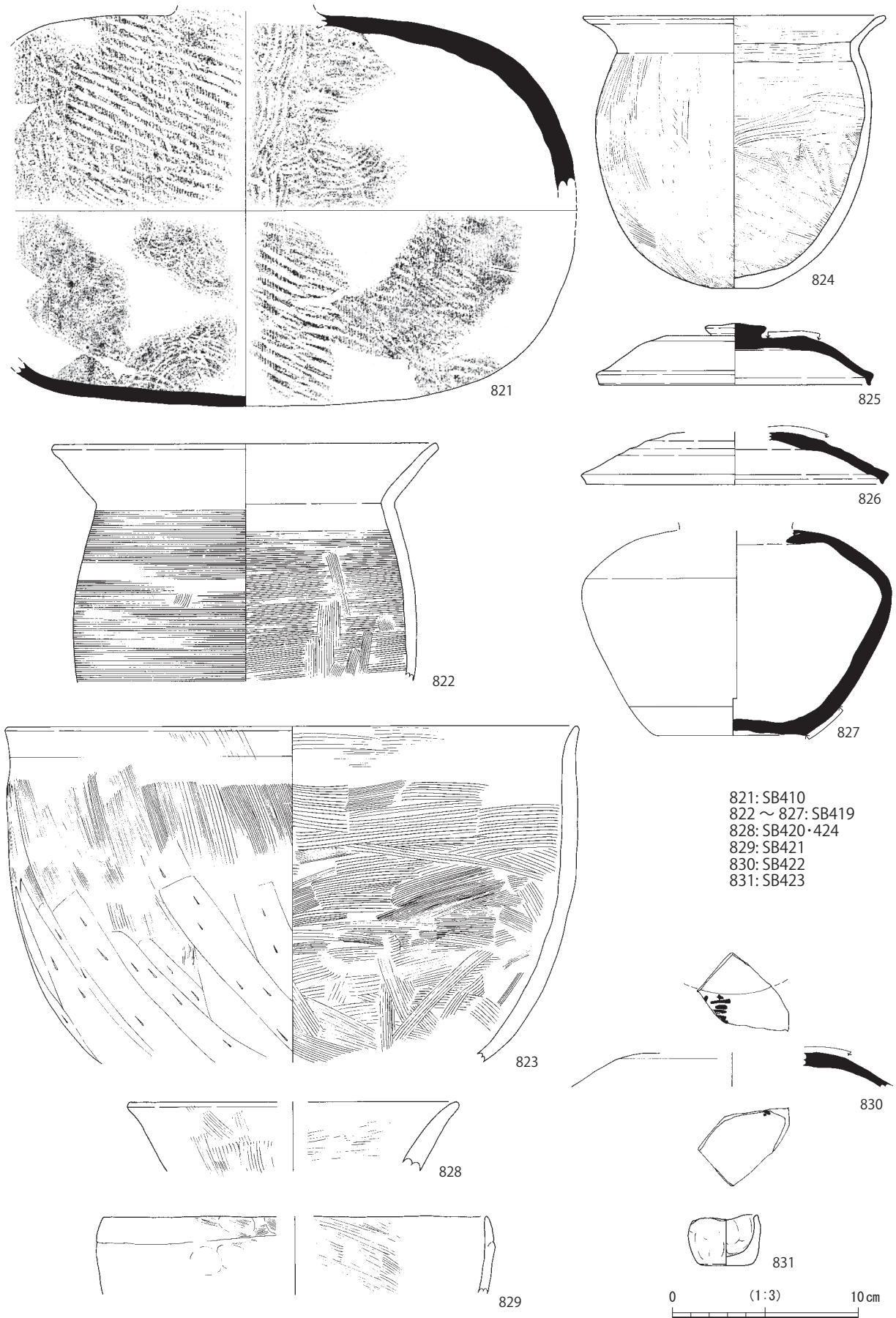
第191図 G地区 第IV面SB出土遺物実測図1(S=1/3)





- 810: SB407
- 811 ~ 813: SB407・408
- 814: SB408
- 815: SB409
- 816: SB410
- 817: SB410・416
- 818: SB408
- 819・820: SB415

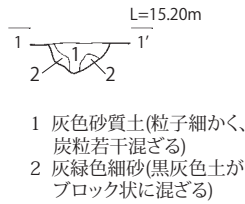
第192図 G地区 第IV面SB出土遺物実測図2(S=1/3)



821: SB410  
 822 ~ 827: SB419  
 828: SB420・424  
 829: SB421  
 830: SB422  
 831: SB423

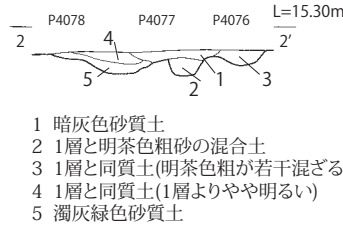
第193図 G地区 第IV面SB出土遺物実測図3(S=1/3)

【F25-1区 P4030】(第159図)



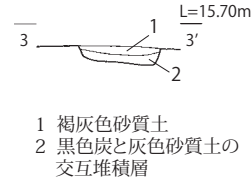
- 1 灰色砂質土(粒子細かく、炭粒若干混ざる)
- 2 灰緑色細砂(黒灰色土がブロック状に混ざる)

【F26-3区 P4076～78】(第161図)



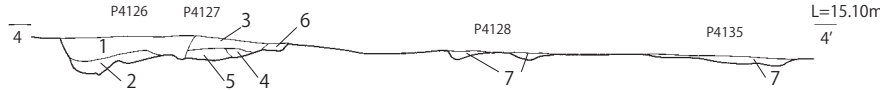
- 1 暗灰色砂質土
- 2 1層と明茶色粗砂の混合土
- 3 1層と同質土(明茶色粗が若干混ざる)
- 4 1層と同質土(1層よりやや明るい)
- 5 濁灰緑色砂質土

【G23-1区 P4183】(第155図)



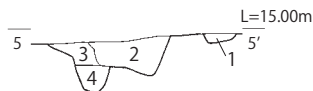
- 1 褐灰色砂質土
- 2 黒色炭と灰色砂質土の交互堆積層

【F26-1区 P4126～28等】(第159図)



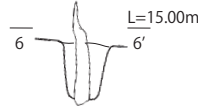
- 1 濁暗灰色砂質土(粘土粒が混ざる)
- 2 濁暗灰色砂質土(緑灰色砂質土が混ざる)
- 3 濁灰色砂質土
- 4 濁暗灰褐色砂質土
- 5 濁暗灰褐色砂質土(4層より若干暗い)
- 6 濁暗灰色砂質土
- 7 濁暗灰色砂質土

【F22-1区 P4217】(第154図)

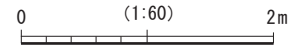


- 1 濁灰色砂質土
- 2 濁灰褐色砂質土(黄～褐色粘土ブロックが多く混ざる)
- 3 濁灰褐色砂質土( " 、2層より若干淡い)
- 4 灰色砂質土とベース土の混合土  
〔ベース土〕茶灰色粗砂

【F21-4区 P4301】(第154図)



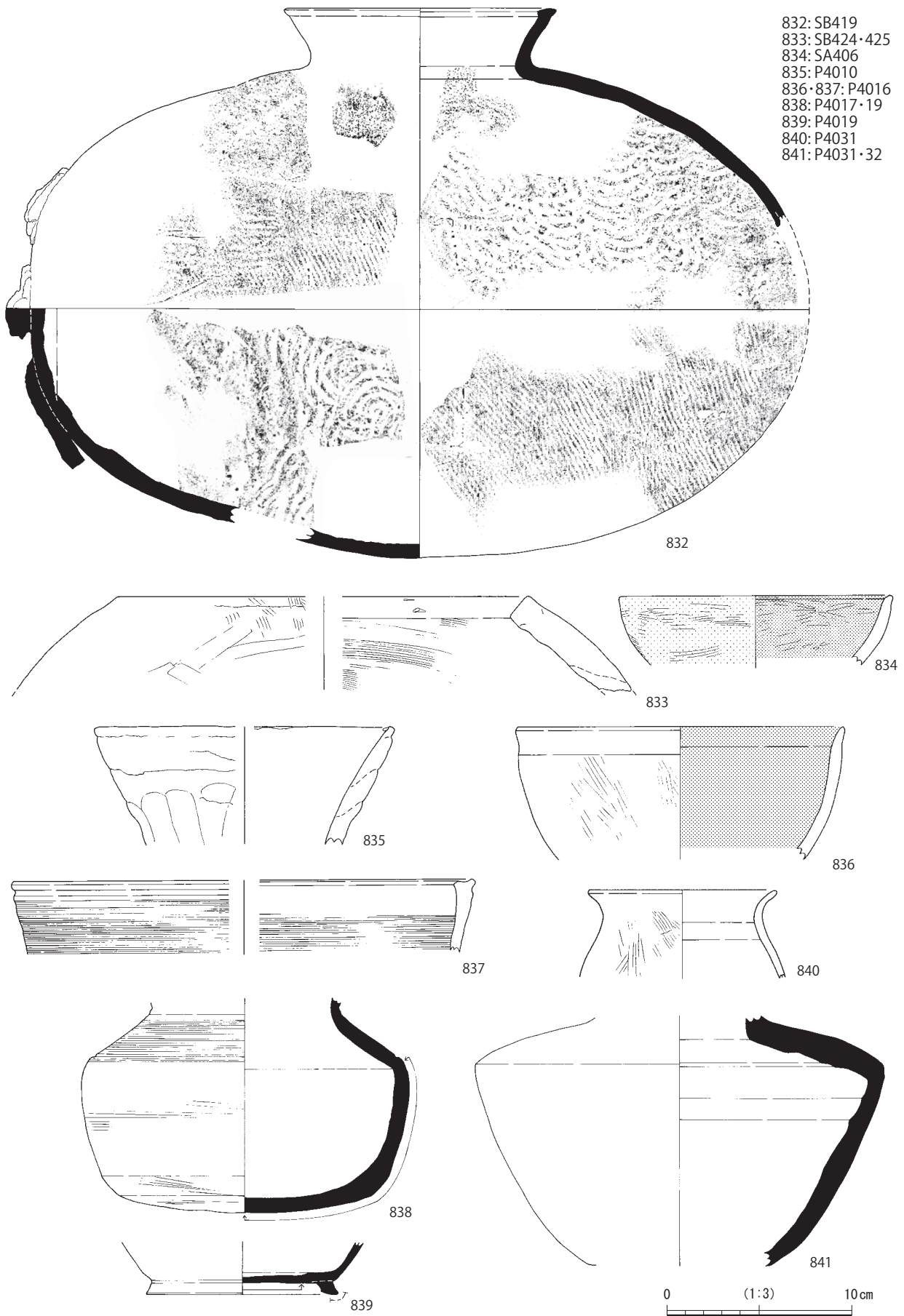
- 1 暗褐灰色砂質土



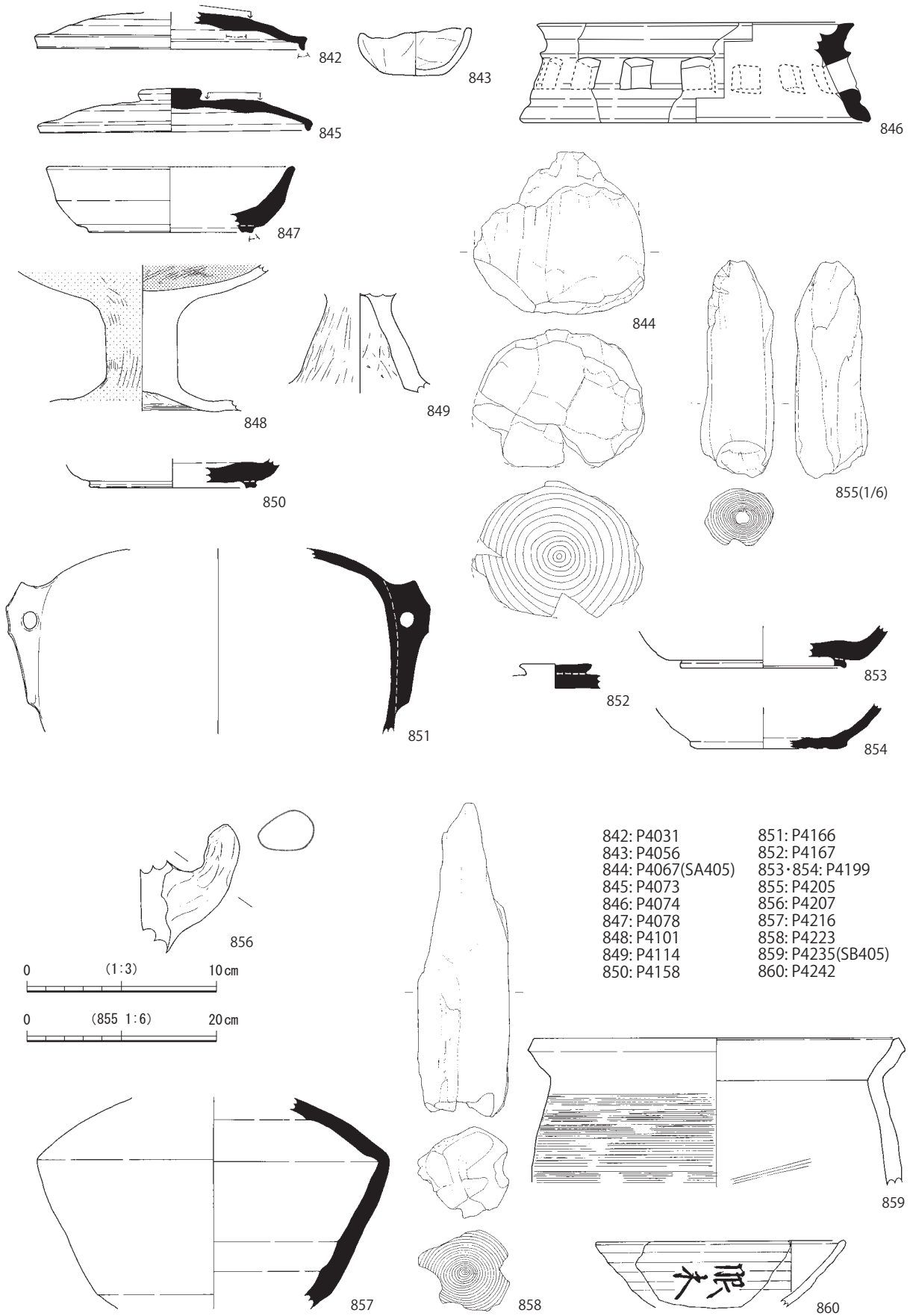
第194図 G地区 第IV面ピット土層断面図 (S=1/60)

図842はP4031から出土した。非ロクロ土師器小甕840は口径10.0cmを測り、口縁部が短く外反する。須恵器坏蓋842は口縁端部を嘴状にひきのばす。粘性に富んだ精良な胎土を用い、焼成は堅緻である。P4031・32出土の須恵器長頸瓶841は降灰と自然釉から正位で焼成され、焼きぶくれが目立つ。

第196図843は、P4056出土のてづくね土器である。口縁部は波打ち、外面に製作者の指紋が残る。P4073出土の須恵器坏蓋845は偏平で、径3.5cmを測る大振りな鈕を付ける。P4074出土の須恵器圈足円面硯846は、上端径16.7cm、器高5.3cmを測り、1/6程度が残存した。足部外面を1条の面取りの鋭い稜と2条の沈線で加飾した後に、外側から方形孔を穿つ。また、降灰の付着状況から硯面を特に保護せず、正位で焼成したと考えられる。P4078出土の須恵器有台坏847は、肉厚の体部に偏平で小振りな台部を付ける。P4101出土の非ロクロ土師器高坏848は、坏部内面を黒色、外面を橙色とする。P4114出土の849は、古墳時代の非ロクロ土師器高坏であり、脚部外面に密なミガキ調整を施す。P4158出土の須恵器有台坏底部850は、焼成堅緻である。P4166出土の須恵器双耳瓶851は、丁寧に面取りを行った耳部1ヶ所が残る。P4167出土の須恵器坏蓋鈕852は、偏平で径3.7cmを測る。須恵器853・854はP4199から出土した。有台坏853は、小振りな台部を内寄りに付ける。無台坏854は底部台状を呈する。外面に煤が付着し、VI<sub>1</sub>期に位置付けられる。P4205出土の柱根855はクリ材を用いる。径6～8cmを測り、腐食が目立つ。P4207出土の非ロクロ土師器甌類把手856は、外面に黒斑が残る。P4216出土の須恵器長頸瓶857は、堅緻に正位焼成され、降灰と厚い自然釉が溶着する。P4223出土の柱根858はクリ材を用いる。径9.6cmを測り、腐植が目立つ。P4242出土のロクロ土師器碗860は口径



第195図 G地区 第IV面SB・ピット出土遺物実測図(S=1/3)



第196図 G地区 第IV面ピット出土遺物実測図(S=1/3・1/6)

13.0cmを測り、体部外面に2文字の墨書を記す。2文字目は「木」と判読でき、VI期に位置付けられる。なお、未図化だが、P4113から硯に転用した須恵器有台坏が出土した。

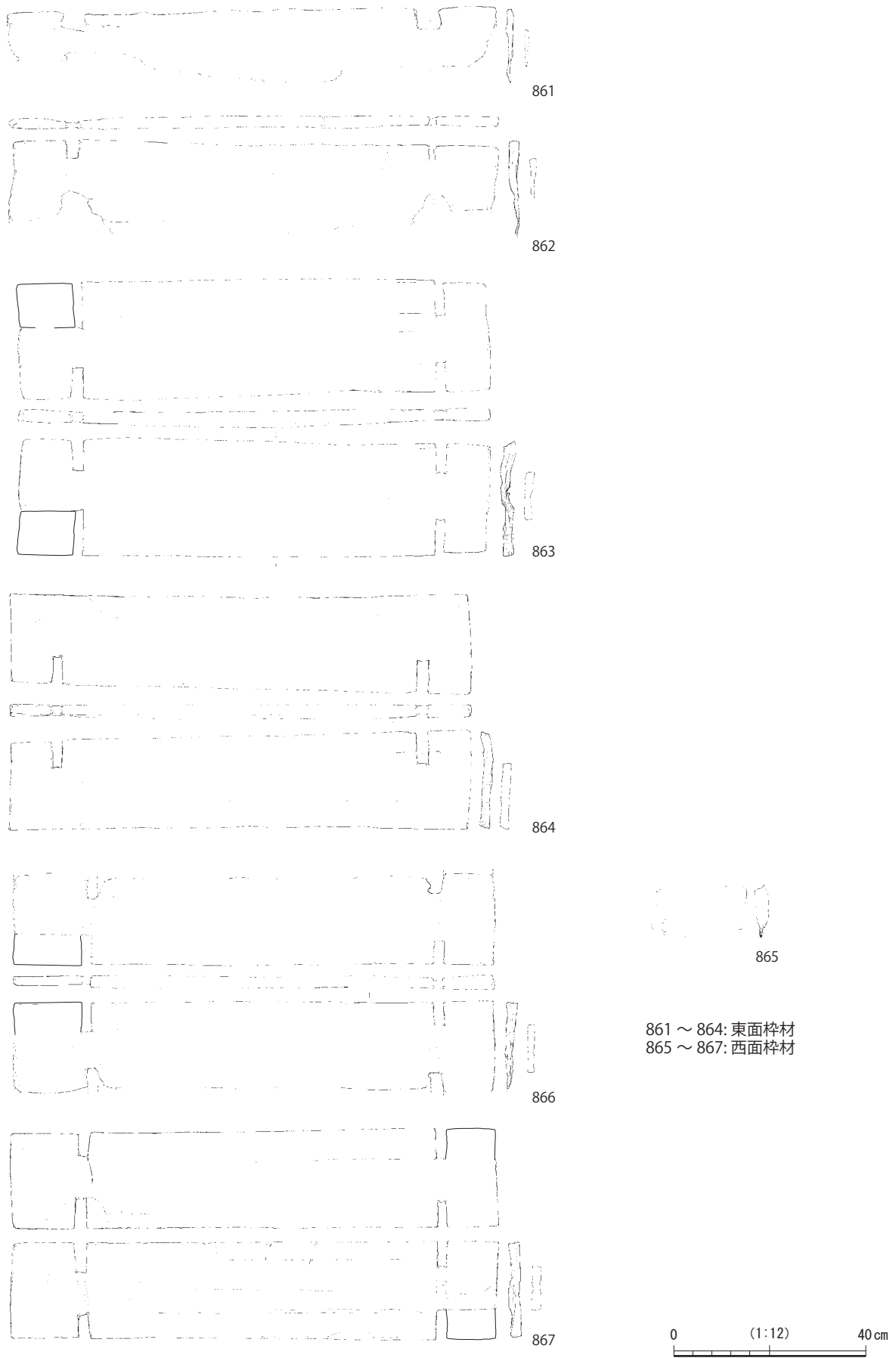
#### 4 井戸 (SE4001) (遺構：第197図、遺物：第198～201図)

G-22区で検出した相欠式横板組(横板蒸籠組)の井戸で、上半の井戸枠は抜き取られる。掘方の平面形は、上半の掘方が崩れた略楕円形を、下半の掘方が隅丸方形をそれぞれ呈する。また、上半の掘方は西側に張り出し、作業用と考えられる2段の弧状の平坦面が確認できる。掘方の規模は、上半の掘方が検出面で東西方向2.47m、南北方向1.88m、検出面からの深さ約0.95mを、下半の掘方が北西-南東方向約1.3m、北東-南西方向約1.25m、深さ約0.75m、全体の掘方の深さ1.6～1.7mを、それぞれ測る。井戸枠の裏込め土は淡灰色砂質土と暗灰色弱粘質土の混合土(第197図土層8)を基本とし、非ロクロ土師器甕小片が出土したにとどまる。井戸枠は、底面から東西面で4段、南北面で3段が残存、土圧のため北西側及び南西側に傾斜する。各井戸枠材の高さ(15～25cm)を勘案すれば、遺構検出面までで5～6段の井戸枠が抜き取られたものと考えられる。残存した井戸枠の規模は、内法が北西-南東方向、北東-南西方向とも約72cm、高さ65～70cmを測る。井戸枠の組み上げは、まず検出面から深さ160～170cm(底面の標高約13.5m、掘方底面は暗灰色粘質土層で湧水顕著)の坑を掘り、浄水装置として淡灰色細砂(厚さ20cm前後、第197図土層7)でしっかりと埋める。井戸枠の第1段目(最下段864・868→872・875)を組みあげ、井戸枠の固定のため四隅に角杭を打つとともに、北西・南東面と北東・南西面との間で最大約8cmの段差が生じたことから、井戸枠外側からの土砂流入を防止するために北西面の枠側材内側に横板(872・876)を追加する。その後は、仕口部外側を部分的に自然石で固定して裏込め土を充填しながら井戸枠材を組み上げ、最後に井戸底面に10～20cmの浄化装置として改めて自然石を敷き詰める(写真図版69)。また、枠材の切り欠きの深さが一様でないこと、井戸枠の組み上げが円滑にいくよう切り欠き周辺の側面を薄く加工してあること等から、現地で加工・調整しながら組み上げた様子もうかがえる。覆土は、第197図土層1～4が枠材抜き取り後の埋土、同図土層5・6が井戸機能時～埋没直前までの堆積土と考えられるが、第4～6層は顕著な湧水のため崩落し、正確な土層断面図を作成できなかった。また、他遺構と重複関係がなく、空闲地に立地することは前述のとおりである。

遺物は、第198図861～第201図900を図化、うち861～880は井戸枠材である。861～864は東面、865～868は西面の井戸枠材で、上方のみに切り欠きをもつ864・868がそれぞれの辺の最下段となる。幅98～103cm、高さ15～25cm、厚さ2.5～3.7cm、切り欠きの幅2～2.5cm、深さ3.8～7cmを測り、上方の861・862は木やせが目立つ。865はスギ材を用いる。869～872は南面、873～876は北面の井戸側材で、切り欠きをもたない872・876は底面の土砂流入防止の役割をもつ。切り欠きをもつ枠材は、幅98.5～118cm、高さ19～24cm、厚さ2.8～3.8cm、切り欠きの幅2～4.5cm、深さ3～8.5cmを測る。最下段の枠材を固定するため四隅に打ち込まれた角材は、長さ50.8～52.5cmを測る。先端は、878が4側面を削って尖らすのに対して、他の3本は斜め方向に切断して尖らす。880の材はスギである。

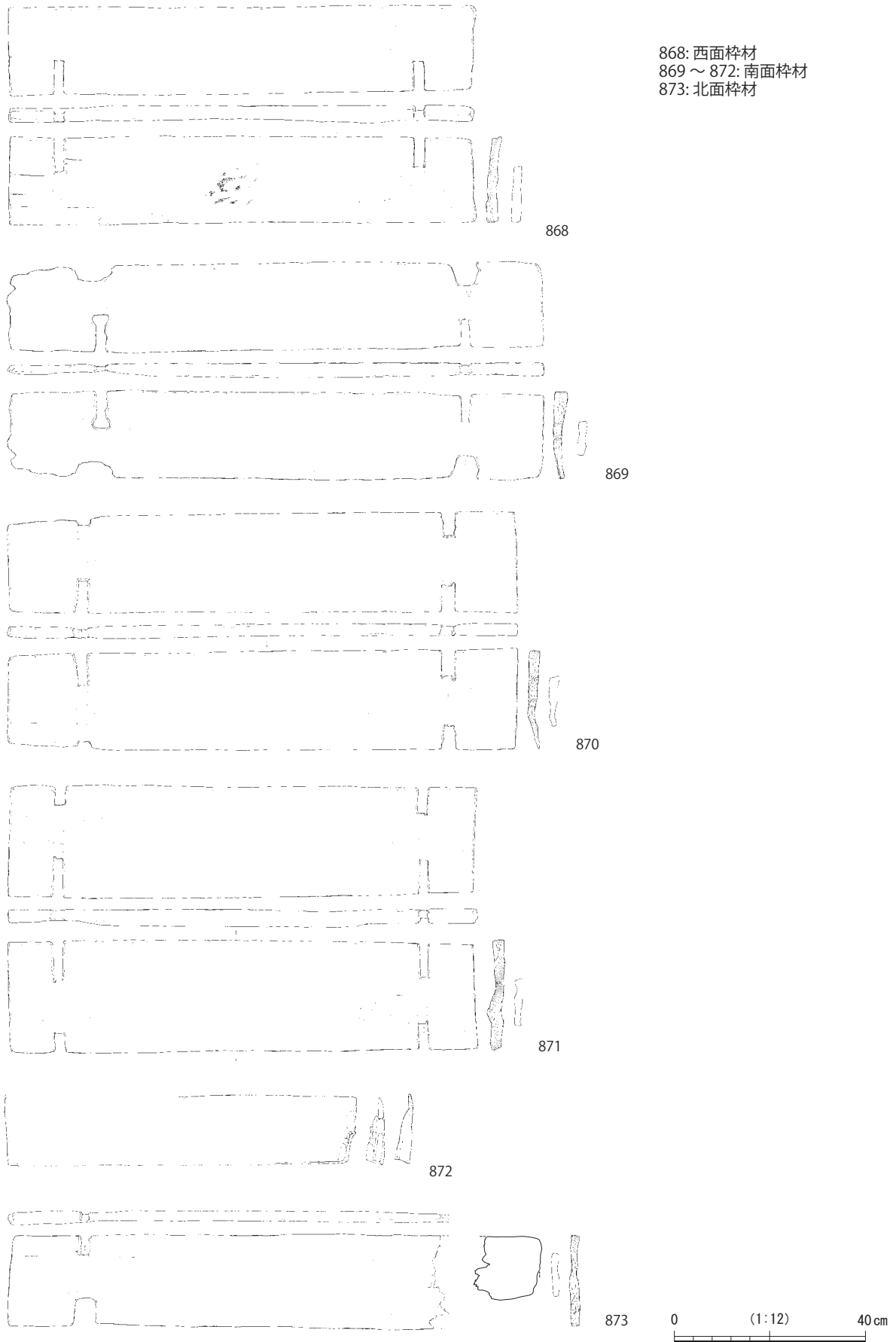
第201図881～900は井戸枠内の遺物で、882～885が覆土第1・2層、881、886～888が覆土第5層から、それぞれ出土した。井戸枠内からは、他に非ロクロ土師器甕片を主体にロクロ土師器甕、須恵器坏蓋、有台坏、無台坏等の小片が出土、中には底面に近い覆土第5・6層の無台坏底部片1点(V<sub>2</sub>期)を含む。非ロクロ土師器甕881は球胴形を呈する。胴部外面のハケ調整はケズリに近い粗い仕上がりで、頸部に工具のあたり痕が顕著に残る。ロクロ土師器甕882は口径21.6cmを測り、口縁端部を嘴状に上方にのぼす。883～886は須恵器である。無台坏883は底部円盤状を呈し、VI<sub>1</sub>期に位置付けられる。



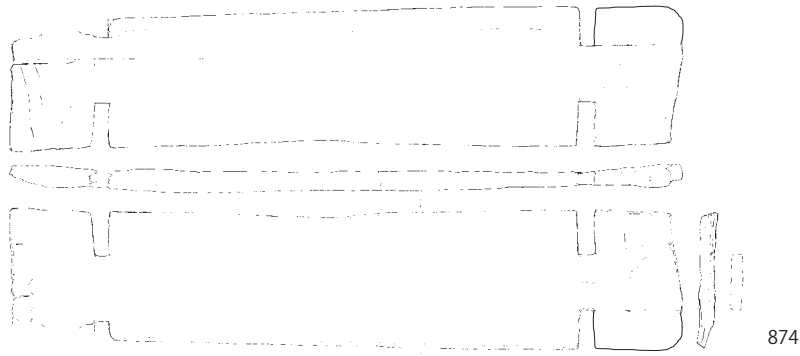


第198図 G地区 第IV面SE4001出土井戸枿材実測図1(S=1/12)

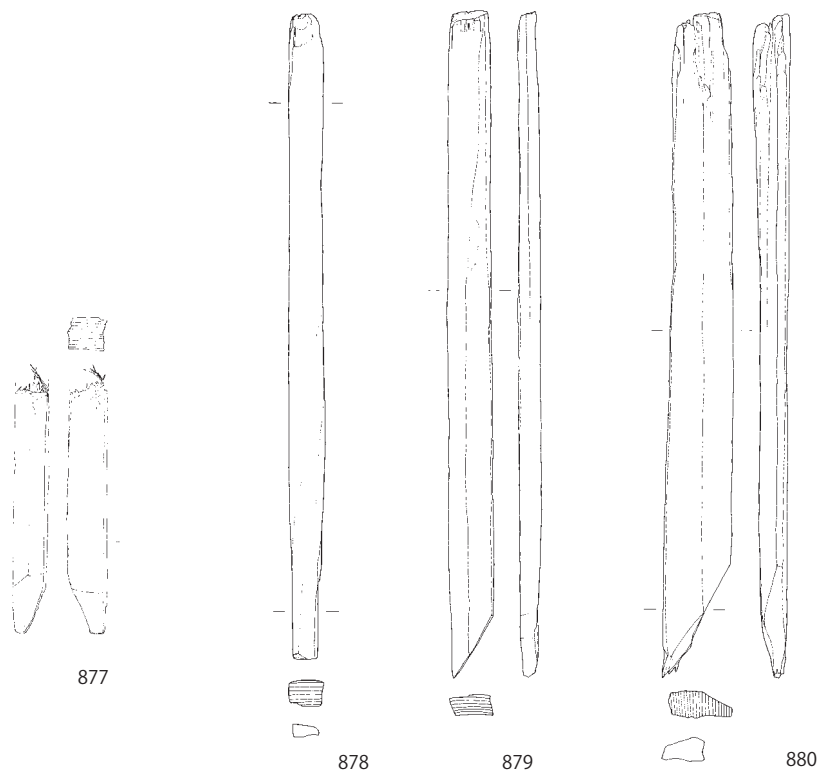
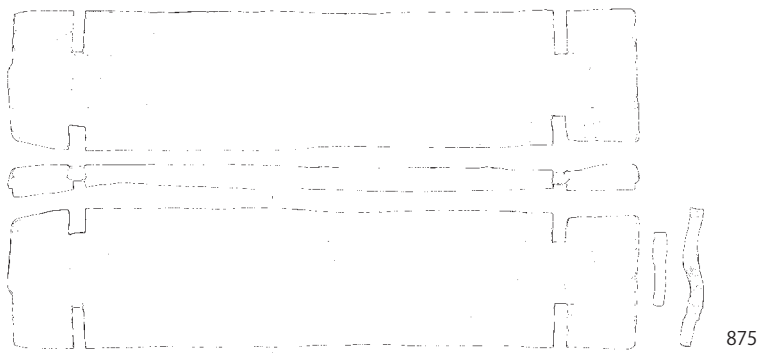




第199図 G地区 第IV面SE4001出土井戸枿材実測図2(S= 1/12)



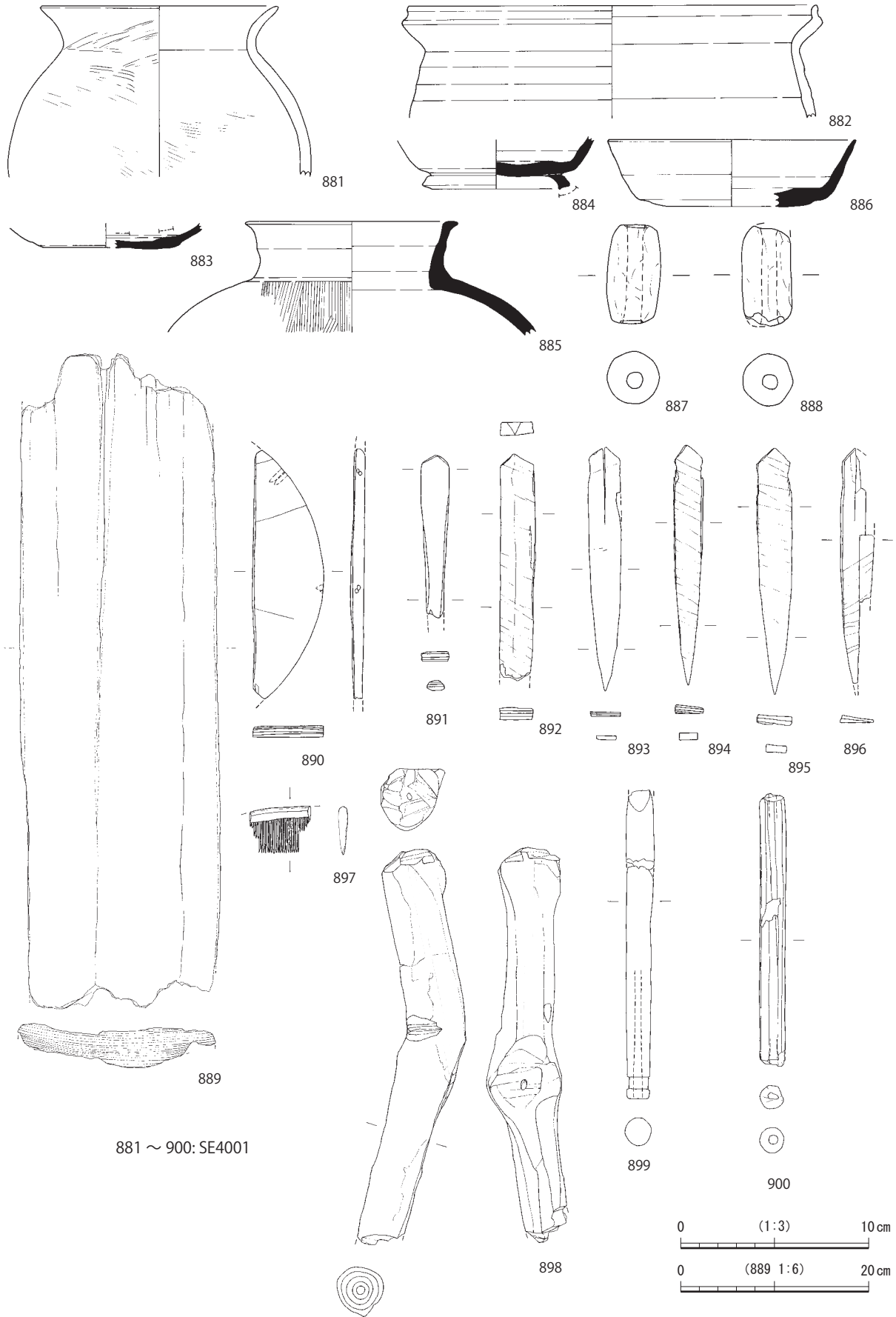
874～876:北面粹材  
 877: 杭 1  
 878: 杭 2  
 879: 杭 3  
 880: 杭 4



0 874～876 (1:12) 40cm

0 877～880 (1:6) 20cm

第200図 G地区 第IV面SE4001出土井戸粹材実測図3(S=1/6・1/12)



881 ~ 900: SE4001

第201図 G地区 第IV面SE4001 出土遺物実測図(S=1/3・1/6)

有台坏884は精良な胎土で、台部は強く外展する。横瓶885は口径12.3cmを測り、胴部外面に粗いカキメ調整を施す。無台坏886は肉厚の底部から直線的に体部がのび、Ⅳ<sub>1</sub>期と考えられる。土師器土鍾887・888は、ほぼ同法量であるが、礫の混ざり具合が大きく異なる。887で重さ44.5gを量る。

889～900は、井戸枠内から出土した木製品で、889～891は覆土第4層、892～896・898～900が同第5層、897が第6層から、それぞれ出土した。板材889は、取り外された井戸枠材の一部の可能性をもつ。円形曲物底板890は、2孔1対の目釘痕から補修を行ったものと考えられる。891・892は、一端を圭頭状に加工しており、後者は齋申的使用も考えられる。892の樹種はスギである。893～896の4点はスギ材を用いた齋申で、長さ12.8～13.2cm、幅1.6～1.8cm、厚さ0.3～0.5cmを測る。いずれも頭部を圭頭状に、下端を剣先状に仕上げる。頭部近くの両側面2ヶ所に切込みを残し、893が上方の切込みを斜め上方向、下方の切込みを斜め下方向から入れるのに対して、894・895は2ヶ所の切込みとも斜め上方向から入れる。また、表面に刀子等の加工痕を残す個体も存在する。横櫛片897は残存幅3.3cm、高さ2.5cm、厚さ0.5cm、残存歯数30本を測り、深さ約1.9cmの歯を挽きだす。材はツゲである。898はムラサキシキブ属を用いた加工材で、上端と枝部を粗く切断する。899は茎孔の形状から錐柄と考えられる。残存長16.6cm、径1.5cm、茎孔径0.3cmを測る。側面を丁寧に加工し、柄元に幅0.6cm、深さ0.1cmの責金具を装着した刳込みが認められる。900は、両端・側面を粗く加工した材で、長さ14.6cm、径1.4cmを測る。材質は899がクリ、900がムラサキシキブ属である。

## 5 溝(SD)

溝は、SD4001・02が河跡3001(古)北側に、他の溝は河跡3001(古)南側に分布する。河跡3001(古)南側に分布する溝は、平面形が胴張方形を呈するSD4031以外は、耕作に伴う小溝と考えられ、建物の雨落ち溝や敷地を区画するような溝は確認できない。耕作に伴う小溝は約60条を検出しており、緩やかに湾曲しながら、地形の傾斜に対して水平または垂直方向に掘られる。各小溝の規模・覆土等は第38表に示したとおりであり、肩部はゆるやかに立ち上がる。これらは、主軸方位や他遺構との切り合い関係から第38表で示したA～Cの順に大きく3小期に分類でき、B小期に約40条、最も新しいC小期に約10条の溝が属する。さらに分布状況から西に振れるB小期はB-1～B-3の3つの耕作単位を、南北を指向するC小期はC-2・C-2の2つの耕作単位を、それぞれ復元できる。最も古いA小期にはSD4026が属し、整地土であるSX4002上で、C小期のSD4008等とともに検出している。以下、主な溝について説明をおこなう。

### SD4001・02(遺構：第159～160・202図)

SD4001はE・F-25区で検出した浅い溝で、屈曲しながら南東－北西方向に流れる。覆土は黒褐色砂質土で、遺構の切り合い関係からSB413より新しく、河跡3001(古)より古く位置付けられる。SD4002はF-26区で検出した浅く短い溝で、覆土は褐色砂質土である。遺構の切り合い関係からSB417柱穴より新しく位置付けられる。いずれの溝からも非ロクロ土師器甕小片が出土したにとどまる。

### SD4026〔耕作地A〕(遺構：第155図)

F-23区で単独で検出した溝で、屈曲しながら南東－北西方向に延びる。覆土は濁褐色灰色砂質土で、他遺構との切り合い関係は、耕作地B-3に属するSD4011、耕作地C-2に属するSD4088より古く位置付けられる。遺物は、非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器甕の小片が出土した。

### SD4041～48・51〔耕作地B-1〕(遺構：第153・203図、遺物：第204図)

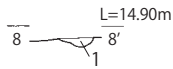
F-21-1・3区以南に分布する小溝群で、調査区外南東側及び北西側に延びる。主軸方位は重複するSB401～404に近いN-20～26°W、長さ4m未満、幅18～56cm、深さ4～19cmを測り、覆土はベース

第38表 G地区 第IV面SD規模等一覧表

遺構名	グリッド名	区分	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	土 層	備 考
SD4001	E-25-3・4	その他	680～	20～50	4～11	第202図断面8・9	SB413より新。河跡3001(古)で損壊
SD4002	F-26-1	その他	170	18～26	9～13	褐色砂質土	
SD4003	E-22-4	C-2	120～	32～38	3～5	第202図断面10	SX4002より新
SD4004	E-22-4	C-2	150	24～52	3～11	第202図断面10	SX4002より新
SD4005	F-22-3	B-3	660	22～38	3～13	第206図断面29-29'	SX4002より新
SD4006	F-22-3	B-3	520	24～36	11～16	第206図断面29-29'	SX4002より新
SD4007	F-22-3・E-23-2	B-3	790	22～44	10～23	第206図断面29-29'	SX4002より新
SD4008	E-23-2・F-23-1	C-2	780	24～46	6～18	第206図断面29-29'	SX4002より新
SD4009	F-23-1	B-3	430	24～30	11～26	第206図断面29-29'	SX4002より新。SD4008より古
SD4010	F-23-1、F-22-3	B-3	700	24～46	9～15	第206図断面29-29'	SX4002より新。SD4008より古
SD4011	F-23-1・2	B-3	900～	28～56	12～18	第202図断面11・12、 第206図断面30-30'	SD4026、SX4002より新
SD4012	F-23-1・2	B-3	470～	22～38	5～12	第202図断面11、 第206図断面29-29'	SX4002より新
SD4013	F-23-1・2	B-3	900～	26～48	9～18	第202図断面11・12、 第206図断面31-31'	SX4002より新
SD4014	F-23-2・4	B-3	200	24～38	7～11	第202図断面12	
SD4015	G-23-1	B-3	110	18～26	3～14	濁褐色砂質土	
SD4016	G-23-1	B-2	130～	26～40	10～13	濁灰色砂質土	
SD4017	G-23-1	B-2	250～	36～68	6～8	濁褐色砂質土	
SD4018	G-22-3	B-2	180～	30～56	7～20	濁褐色砂質土	
SD4019	G-22-3	B-2	310	28～52	7～20	第202図断面13	
SD4020	F-22-4	B-3	240	34～64	8～11	第202図断面12	
SD4021	F-23-2	B-3	130	20～26	5～8	濁褐色砂質土	
SD4022	F-23-2	B-3	70	26～34	5～7	淡褐色砂質土	小ピット
SD4023	E-23-1・2	その他	450～	38～	5～8	第202図断面11	P4196と同じ
SD4024	G-21-3	B-2	160～	22～32	16	第202図断面15	
SD4025	G-21-3	B-2	230～	32～40	16	第202図断面15	
SD4026	F-23-1	A	600	22～34	6～17	濁褐色砂質土	SX4002より新。SD4008・11より古
SD4027	F-23-1	B-3	90	16～34	8～11	濁褐色砂質土	SX4002より新
SD4028	G-22-4	B-2	70	22～28	9～10	濁褐色砂質土	
SD4029	F-21-4	B-2	410	64～90	4～17	第202図断面14	P4301より新
SD4030	F-21-4	その他	160	28～44	7～14	第202図断面14	
SD4031	E-22-1・3	その他	700～	46～84	5～26	第202図断面16・17	P4162・4274より新。胴張方形に巡る
SD4032	F-21-3	C-1	490～	22～56	5～18	第202図断面18	SD4037と連続。P4228より新
SD4033	F21-4	B-2/C-1	480	24～68	7～22	第203図断面19・20	P4230より新
SD4034	F21-2・3	C-1	350	22～50	8～16	第203図断面19	
SD4035	F21-2・3	C-1	410～	16～32	2～21	第203図断面20	
SD4036	E-21-4	その他	140～	30～54	8～18	第203図断面21	
SD4037	E-21-4	C-1	490～	22～56	5～18	褐色砂質土	SD4032と連続
SD4038	F-21-3	C-1	350	26～38	5～20	第203図断面20	P4239・40より新
SD4039	F-21-3	C-1	630～	14～56	4～12	第203図断面19・20	
SD4040	F-21-1	C-1	150～	36～44	10	濁褐色砂質土(ベース 土混ざる)	
SD4041	F-21-1	B-1	300	32～56	8～19	第203図断面22	
SD4042	F-21-1	B-1	300	26～34	4～14	第203図断面22	
SD4043	F-20-3	B-1	260～	26～44	7～16	第203図断面22	
SD4044	F-20-3	B-1	340～	36～44	10～13	第203図断面22	
SD4045	F-20-1	B-1	270～	40～54	14～16	第203図断面19	
SD4046	F-20-1・2	B-1	230～	26～44	7～18	第203図断面23	
SD4047	F-20-4	B-1	140～	18～28	4～11	第203図断面23	
SD4048	F-21-2	B-1	170～	30～44	12～15	第203図断面23	
SD4049	F-21-4	B-2	230	36～54	10	第202図断面14	
SD4050	F-21-4	B-2	140	26～38	10	第202図断面15	
SD4051	F-21-1	B-1	160～	18～28	7～14	第203図断面22	

第5節 第IV面の遺構と遺物

【E25-4区 SD4001】(第160図)



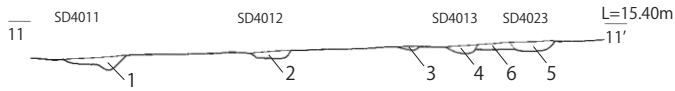
- 1 黒灰色砂質土

【E22-4区 SD4003・04】(第154図)



- 1 濁褐灰色砂質土  
2 濁灰緑色砂質土(炭粒が混ざり、固くしまる。SX4002)

【F23-3区 SD4011～13】(第155図)



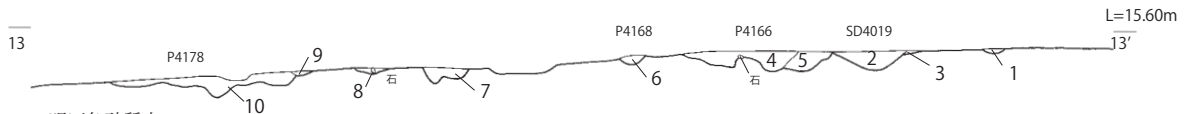
- 1 暗灰色砂質土(粗砂が混ざる)  
2 濁暗灰色砂質土  
3 濁黒灰色砂質土  
4 黒灰色砂質土  
5 濁黒灰色砂質土(攪乱)  
6 濁暗褐色砂質土

【F22・23区 SD4011・13・14・20】(第154・155図)



- 1 濁褐灰色砂質土  
2 濁灰色砂質土  
3 明灰色砂質土  
4 濁褐灰色砂質土  
5 濁暗灰色砂質土  
6 暗灰色砂質土  
7 褐灰色砂質土(白色砂粒が混ざる)  
8 濁褐灰色砂質土(暗灰色砂質土が混ざる)  
9 褐灰色砂質土(茶色粗砂が混ざる)  
10 濁灰色砂質土  
11 濁褐灰色砂質土

【G22区 SD4019等】(第154・155図)



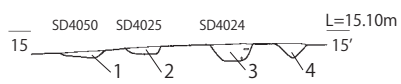
- 1 明灰色砂質土  
2 濁灰褐色砂質土(白色砂粒が混ざる)  
3 褐灰色砂質土  
4 濁灰褐色砂質土  
5 濁灰褐色砂質土(赤茶色砂質土が混ざる)  
6 濁暗灰色砂質土  
7 濁暗灰色砂質土(黄土色粗砂が混ざる)  
8 濁灰色砂質土  
9 濁暗灰色砂質土  
10 濁褐灰色砂質土

【F21-4区 SD4029・30・49】(第154図)



- 1 暗灰色砂質土と黄土色粗砂の混合土  
2 濁暗灰色砂質土  
3 濁灰褐色砂質土  
4 濁褐灰色砂質土と黄土色粗砂の混合土  
5 濁暗褐色砂質土  
6 濁暗灰色砂質土と褐色砂質土(攪乱)の混合土

【F21-4区 SD4024・25・50】(第153・154図)

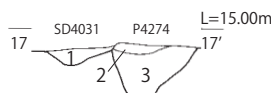


- 1 濁暗灰色砂質土  
2 濁灰褐色砂質土(赤茶色砂質土が混ざる)  
3 濁灰褐色砂質土  
4 濁緑灰色砂質土(赤茶色粗砂が混ざる)

【E22-4区 SD4031】(第154図)

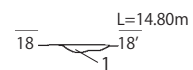


- 1 濁灰褐色砂質土(黄～褐色粘土ブロック、炭化物が混ざる)

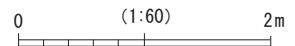


- 1 濁灰褐色砂質土(黄～褐色粘土ブロック、炭化物が混ざる)  
2 赤褐色焼土  
3 灰色砂質土(20cm大の石が多く混ざる)

【F21-3区 SD4032】(第154図)

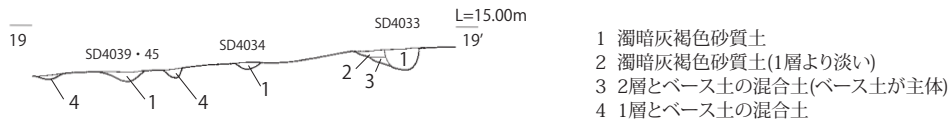


- 1 灰褐色砂質土

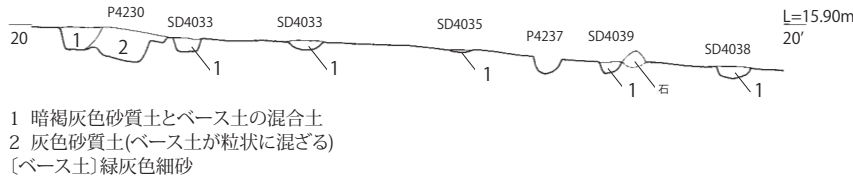


第202図 G地区 第IV面SD土層断面図1 (S=1/60)

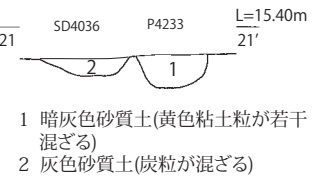
【F21-3区 SD4033～35・39】(第153・154図)



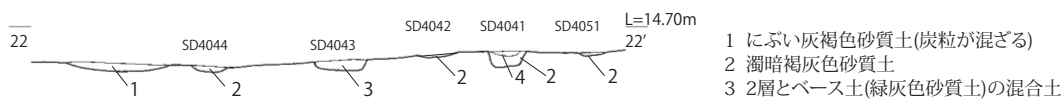
【F21-3区 SD4033・35・37～39】(第153・154図)



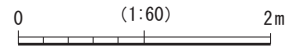
【E21-4区 SD4036・P4233】(第154図)



【F20・21区 SD4041～44・51】(第153図)



【F20区 SD4046～48】(第153図)



第203図 G地区 第四面SD土層断面図2 (S=1/60)

土が混ざる濁暗灰褐～褐灰色砂質土を基本とする。また、耕作地B-1は、南東－北西方向で9m以上、南西－北東方向で約8mの土地を占める。他遺構との切り合い関係は、SB401～403より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、SD4051出土の須恵器有台坏第204図911を図化した。911は底部外面に墨書を記す他、内面が使用に伴い平滑となる。文字は判読できず、IV<sub>2</sub>期に位置付けられる。他に、SD4045～48以外の溝から土師器甕等の小片が出土した。

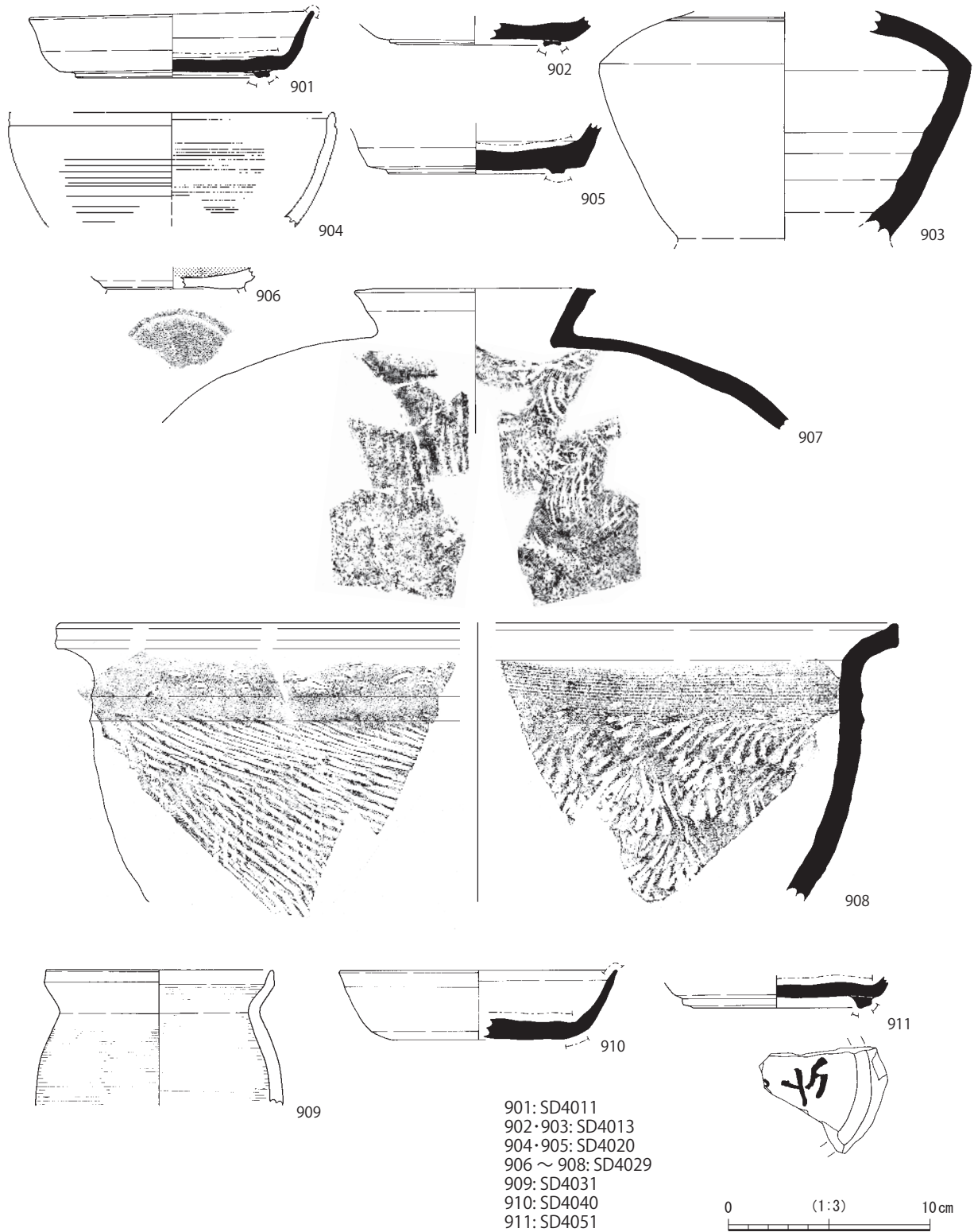
**SD4016～19・24・25等〔耕作地B-2〕**(遺構：第153～155・202・203図、遺物：第204図)

F-21-4区、F-22-2区、G-21～23区に分布する14条よりなる小溝群で、一部は調査区外南側に延びる。各溝は1m前後離れて掘られ、主軸方位はN-14～30°W、長さ5m未満、幅22～90cm、深さ4～22cmを測る。覆土は部分的にベース土が混ざる濁暗灰～褐灰色砂質土を基本とする。また、耕作地B-2は、南東－北西方向で8m以上、南西－北東方向で約19mの土地を占める。掘立柱建物の空白域に分布する点に特徴をもち、他遺構との切り合い関係はSD4029・49等がSA401柱穴より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、SD4029出土の906～908を図化した。内黒のロクロ土師器有台碗906は台部が欠損する。外面に煤が付着し、VI期に位置付けられる。須恵器横瓶907はSD4029出土の破片と接合し、横位で堅緻に焼成される。須恵器鉢908は口径約41cmを測り、胴部内面に彫りの粗い扇形文の当て具を用いる。また、各溝から非ロクロ土師器甕等の小片、SD4016・17・29・50から製塩土器、SD4029からV期以降の須恵器坏類、内黒のロクロ土師器碗の小片が、それぞれ出土した。

**SD4005～07・09～15等〔耕作地B-3〕**(遺構：第154・155・202・206図、遺物：第204図)

耕作地B-2北側のE-22・23区、F-22-3区～F-23区に分布する16条程度よりなる小溝群で、一部は調査区外北西側に延びる。主軸方位は重複するSB409・410・412に近いN-30°前後Wを示し、長さは直線的なSD4011・13が約9mを測るとおり、他の小溝群より長い溝を多く含む。溝の規模は幅16～64cm、深

さ3～26cmを測り、覆土は濁黒灰～褐灰色砂質土を基調とする。各溝の位置関係から2回以上の掘り直しが想定でき、耕作地B-3は南東-北西方向で12m以上、南西-北東方向で約10mの土地を占める。他遺構との切り合い関係はSB409・410、SX4002より新しく、SD4008より古く位置付けられる。出土遺物のうち、SD4011出土の901、SD4013出土の902・903、SD4020出土の904・905を図化した。須恵器



第204図 G地区 第IV面SD出土遺物実測図 (S=1/3)



有台坏901は、口径13.9cm、器高3.3cmを測り、使用に伴う摩耗が著しい。須恵器有台坏902は、肉厚な底部に扁平な台部を付ける。須恵器瓶903は肩部上方を2条の沈線で加飾する。焼成時の焼きぶくれが目立つ他、外面に自然釉と焼土片が溶着する。ロクロ土師器鉢類904は口径15.9cmを測り、口縁部下端に沈線を施す。二次被熱のため判然としないが内外面とも赤彩の可能性が高い。須恵器有台坏905は内寄りに扁平な台部を付ける。未図化だが、各溝から非ロクロ土師器甕等の小片、SD4010から縄文土器浅鉢片1点、SD4006・13からV期以降の須恵器無台坏片が、それぞれ出土した。

**SD4032・34・35・37～40〔耕作地C-1〕**（遺構：第153・154・202・203図、遺物：第204図）

E・F-21区に分布する小溝群で、調査区外西側に延びる。屈曲が目立つものの、主軸方位は耕作地Bと異なり、南北方向または東西方向を指向する。長さ6m前後、幅14～56cm、深さ2～20cmを測り、覆土はベース土が混ざる濁暗灰褐～暗褐灰色砂質土を基本とする。また、耕作地C-1は南北方向で約7m、東西方向で7m以上の土地を占める。他遺構との切り合い関係は、SB403・405・406より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、SD4040出土の須恵器無台坏910を図化した。910は口径13.7cm、器高3.4cmを測り、体部はゆるやかに外傾する。また、SD4032・37以外の溝から非ロクロ土師器甕、SD4034から弥生土器甕、SD4035・39から製塩土器、SD4038からVI期の須恵器無台坏の小片が、それぞれ出土した。

**SD4003・04・08〔耕作地C-2〕**（遺構：第154・155・202・206図）

E-22・23区、F-23区に分布する3条の小溝群で、調査区外西側に延びる。主軸方位は、耕作地C-1と同様に南北方向または東西方向を指向する。直線的なSD4008が長さ約7.8m、幅24～46cm、深さ6～18cmを測り、SD4003・04と直交する位置関係にある。覆土は濁褐灰～灰褐色砂質土で、耕作地C-2は東西方向で10m前後を測る。他遺構との切り合い関係は、SB409・410、SX4002、耕作地B-2に属する溝群より新しく位置付けられる。また、各溝から土師器甕小片が出土した他、SD4003からロクロ土師器碗類・須恵器坏蓋片、SD4008から須恵器無台坏片が、それぞれ出土した。

**SD4031**（遺構：第154・202図、遺物：第204図）

F-22区で検出した溝で、調査区外北西側に延びる。平面プランは胴張方形を呈し、南西－北東方向で約3.5mの範囲を囲むものと考えられる。溝の幅は46～84cm、深さ5～26cmを測り、覆土は黄～褐色粘土、炭化物が混ざる濁灰褐色砂質土である。遺構の切り合い関係から、SD4031がSB407柱穴P4162、SB408柱穴P4274より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、ロクロ土師器小甕909を図化した。909は口径11.1cmを測り、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが付着する。他に、非ロクロ土師器甕を主体にロクロ土師器甕、須恵器無台坏や、VI<sub>2</sub>期のロクロ土師器無台坏等の小片が数点出土した。

## 6 その他の遺構(SX、河跡)

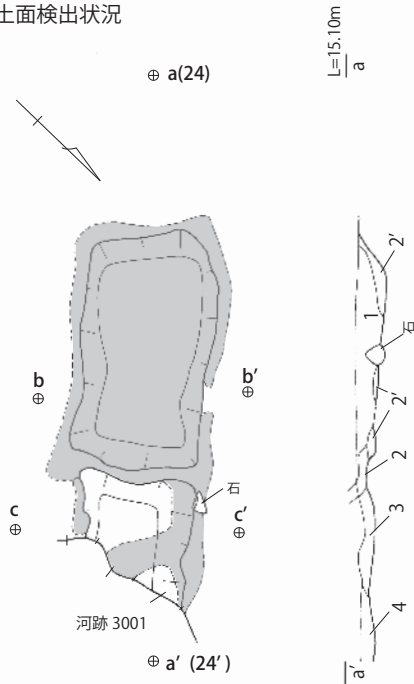
貼床をもつSX4001と、整地土(SX4002～04)を3ヶ所で確認しており、SX4004については整理段階で新たに番号を付与したものである。これまでの調査では、SX4002～04と同様の整地(地業)作業の痕跡は、A地区L・K-5・6区、B地区J・K-9・10区等で検出している。また、調査区中央を流下する河跡3001(古)については、第4節で述べたとおりである。

**SX4001**（遺構：第159・205図、遺物：第207図）

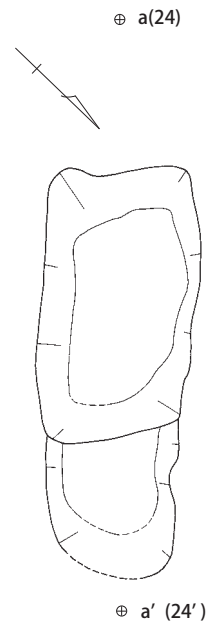
F-25区で検出し、主軸方位はN-22°Wを示す。平面略方形を呈する2基の浅い土坑が重複しており、いずれも平坦な底面から緩やかな壁面に、粘土を主体とした土を貼り付ける。南側の古い土坑は、長軸43cm以上、短軸52cmを測り、底面に厚さ3～6cmを測る黄褐色粘土粒が多く混ざる灰色弱粘質土を貼り付ける。北側の新しい土坑は、長軸106cm、短軸62cmを測る。底面に厚さ2～7cmの濁浅黄～黄色粘土を貼り付け、上層の炭粒混ざりの灰色砂質土が固くしめることから貼床の一部を構成する可能

【F25-2区 SX4001】

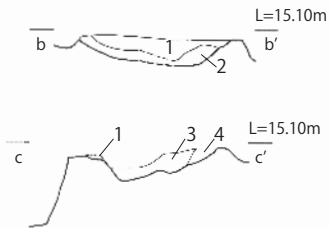
粘土面検出状況



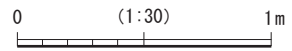
粘土面除去後状況



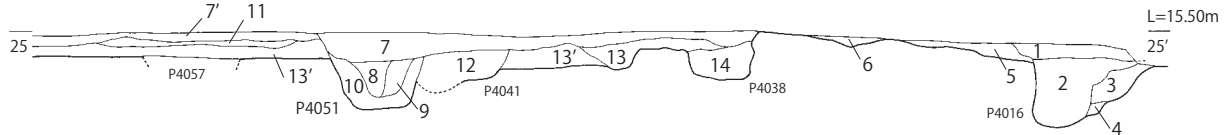
※ 網掛けは粘土を貼った範囲を示す。



- 1 灰色砂質土(炭粒が混ざり、固くしまる)
- 2 濁浅黄～黄色粘土(灰色砂質土粒が混ざる)
- 2' 濁浅黄～黄色粘土(1cm弱の小砂利が混ざる)
- 3 灰色弱粘質土(黄褐色粘土土粒が多く混ざる)
- 4 1層と同質土
- 5 にぶい褐色細砂(河跡3001(古)覆土)

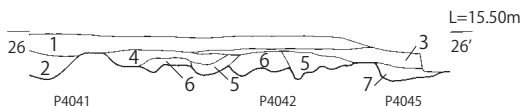


【E・F23区 SX4004】(第159・161図)

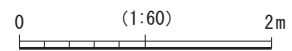


- 1 灰色砂質土と黄色粘土の混合土(汚れて、固くしまる)
  - 2 灰色砂質土(ベース土がブロック状に混ざる)
  - 3 2層と同質土(2層より暗く、炭粒が多く混ざる)
  - 4 濁緑灰色砂質土(粗砂に近い、ベース土の崩落土)
  - 5 灰色砂質土(ベース土が粒状に混ざる)
  - 6 濁暗灰色砂質土(炭粒が混ざり、固くしまる)
  - 7 1層と同質土
  - 7' 赤褐色焼土層
  - 8 7層と同質土(しまりない)
  - 9 7層と同質土(8層より暗い)
  - 10 濁灰色砂質土(ベース土、黄色粘土が粒状に若干混ざる)
  - 11 緑灰～灰色粗砂(13'層が混ざる)
  - 12 灰色砂質土(黄褐色粘土土粒が多く混ざり、固くしまる)
  - 13 灰色砂質土と淡緑灰色砂質土の混合土(しまりがなく、鉄分が沈着)
  - 13' 13層と同質土(淡緑灰色砂質土が主体)
  - 14 濁暗灰色砂質土(黄色粘土が粒状に混ざる)
- [ベース土] 緑灰色粗砂～シルト

【G26区 SX4004】(第159図)



- 1 灰色砂質土と黄色粘土の混合土(汚れて、固くしまる)
  - 2 灰色砂質土(黄褐色粘土ブロックが混ざり、固くしまる)
  - 3 濁黄～黄褐色粘質土(炭粒が多く混ざる)
  - 4 2層と同質土
  - 5 2層と同質土(黒灰色土がブロック状に混ざる)
  - 6 2層と同質土(2層より暗く、炭化物が多く混ざる)
  - 7 5層と同質土(ベース土が粒状に混ざる)
- [ベース土] 緑灰～明茶色粗砂



第205図 G地区 第IV面SX平面図・土層断面図 (S=1/30・1/60)

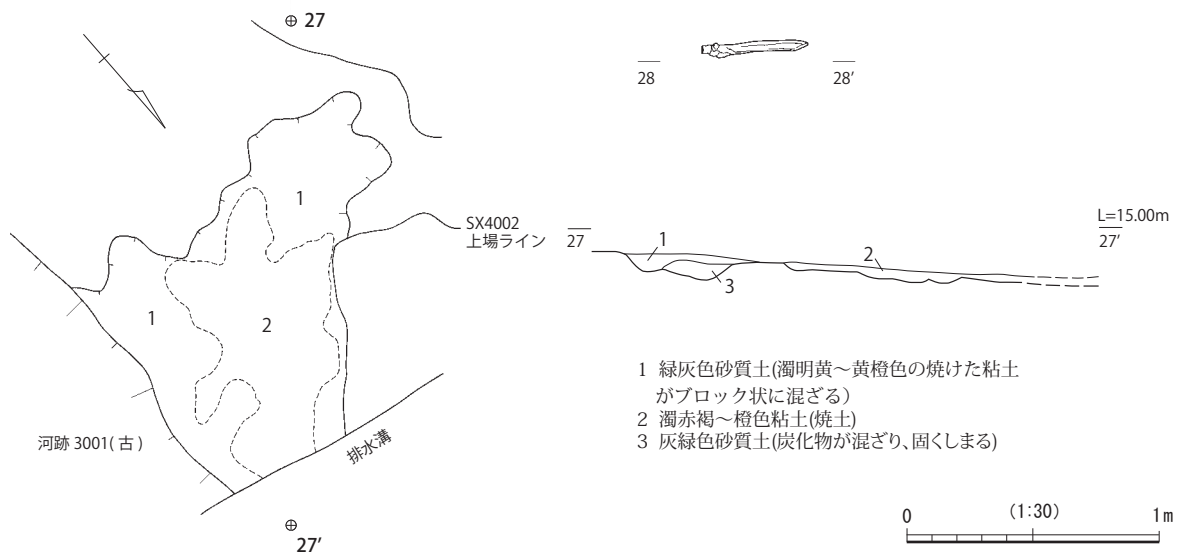
性が高い。また、同時に数個の径7cm前後の自然石が埋め込まれる。ともに、遺構の切り合い関係から河跡3001(古)より古く位置付けられる。顕著な被熱痕はないものの、現時点では、屋外の煮炊き施設の可能性を考えたい。出土遺物のうち、第207図912の非ロクロ土師器甑片を図化した。912は口径25.5cmを測り、口縁端部に強いヨコナデ調整を施す。他に非ロクロ土師器甑片を主体に、ロクロ土師器甑、Ⅱ<sub>2</sub>期の坏蓋を含む須恵器の小片が数点出土した。

**SX4002**(遺構：第155・156・206図、遺物：第207・217図)

E-23-2区、F-23-1・3区で検出し、北側は河跡3001(古)で削平される。南北方向6m以上、東西方向9～11mの略方形の範囲を整地した痕跡である。最大厚約20cmを測る造成土は固くしまり、炭粒混じりの緑灰色砂質土を基本に、一部上層で緑灰色砂質土に黄～褐色粘土粒が混ざる。また、整地土上面で

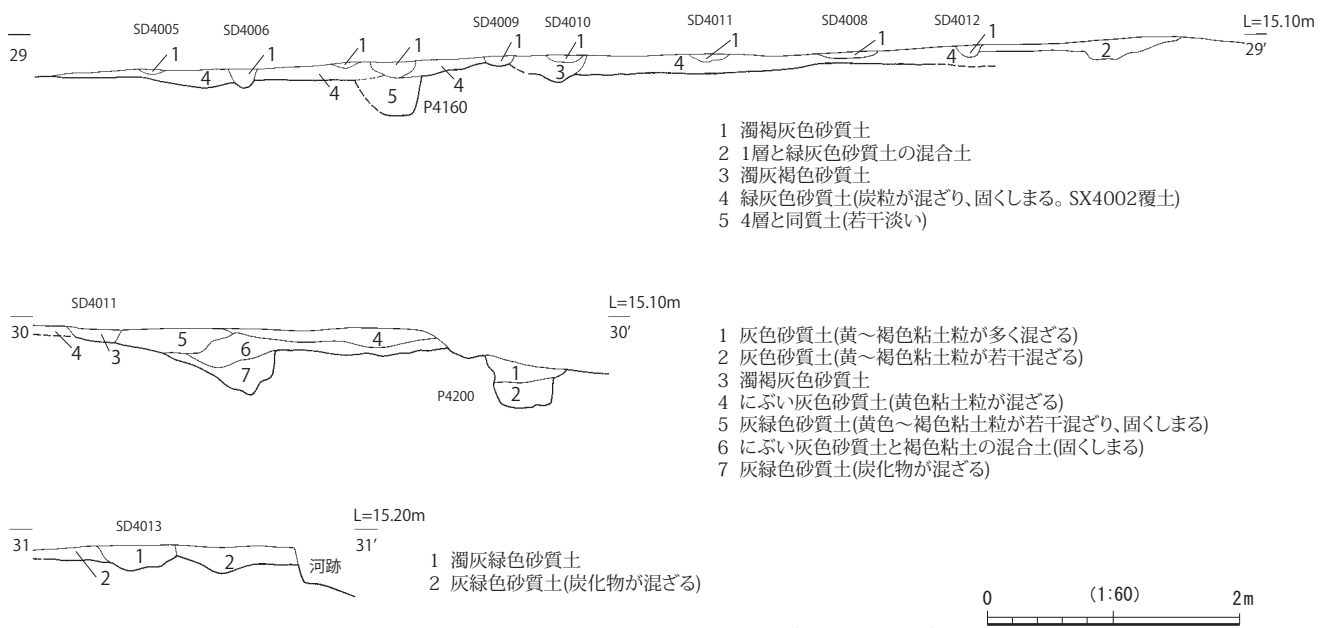
【E23-2区 SX4002 焼土面】(第156図)

【F23-2区 SX4002 鉄刀出土状況】(第155図)



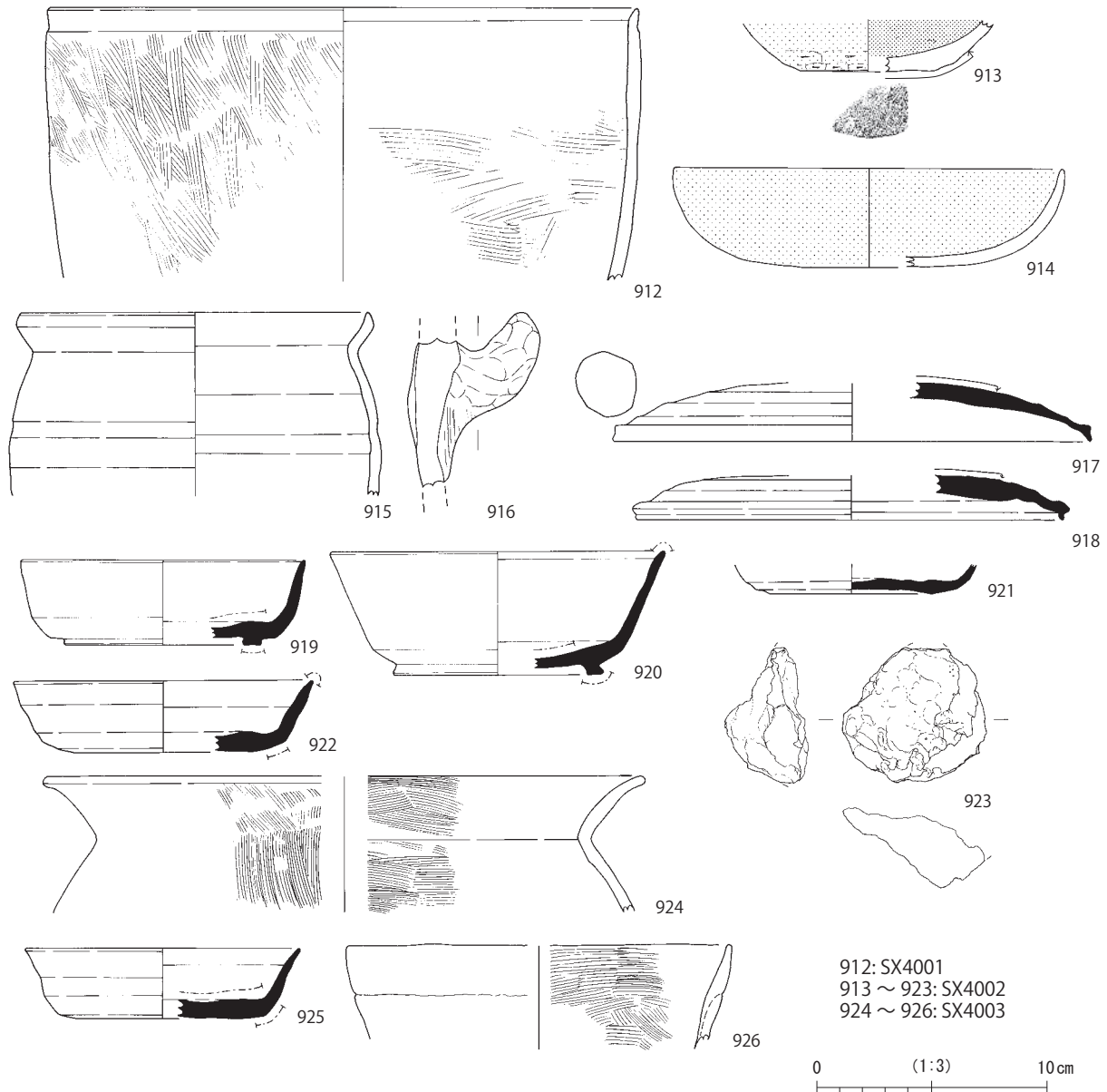
- 1 緑灰色砂質土(濁明黄～黄橙色の焼けた粘土がブロック状に混ざる)
- 2 濁赤褐～橙色粘土(焼土)
- 3 灰緑色砂質土(炭化物が混ざり、固くしまる)

【F22・23区 SX4002】(第159図)



- 1 濁褐灰色砂質土
- 2 1層と緑灰色砂質土の混合土
- 3 濁灰褐色砂質土
- 4 緑灰色砂質土(炭粒が混ざり、固くしまる。SX4002覆土)
- 5 4層と同質土(若干淡い)
- 1 灰色砂質土(黄～褐色粘土粒が多く混ざる)
- 2 灰色砂質土(黄～褐色粘土粒が若干混ざる)
- 3 濁褐灰色砂質土
- 4 にぶい灰色砂質土(黄色粘土粒が混ざる)
- 5 灰緑色砂質土(黄色～褐色粘土粒が若干混ざり、固くしまる)
- 6 にぶい灰色砂質土と褐色粘土の混合土(固くしまる)
- 7 灰緑色砂質土(炭化物が混ざる)

第206図 G地区 第Ⅳ面SX平面図・土層断面図2 (S=1/30・1/60)



第207図 G地区 第IV面SX出土遺物実測図 (S=1/3)

粘土を貼った焼土面を確認した(第206図)。平面不整形を呈する焼土面は、南北方向100cm以上、東西方向130cm以上、厚さ2~5cmを測り、SX4001と同様の性格をもつ焼土面と考えたい。整地層掘り下げ作業後に検出した遺構には、SB410柱穴(P4154・4159・4202)、SB411柱穴(P4156・4200等)、SB409柱穴(P4160)、SA402柱穴(4149・4201・4282・4284)、SA403柱穴(P4153・4155・4287)があり、整地作業より古く位置付けられる。また、耕作に伴う小溝であるSD4005・06・08~13は、整地作業より新しく位置付けられる。

出土遺物のうち、第207図913~923、第217図1113を図化、913・914・916は非ロクロ土師器、917~922は須恵器となる。内黒外赤の埴913は、底部を含めて外面下半にケズリ調整を施す。扁平な赤彩埴914は口径18.7cm、器高4.3cmを測る。磨滅が著しいものの、底部外面にわずかにケズリ調整が残る。薄手のロクロ土師器甕915はロクロひだが目立ち、焼成は堅緻である。916は甌類把手片である。坏・盤類蓋917は口径20.7cmを測り、内面は不整方向ナデ調整の後、外寄りにカキメ調整を加える。坏蓋918は口径18.5cmを測り、口縁端部を小さく下方にひきのばす。919・920は有台坏で、919の体部は

直立気味である。920は口径14.4cm、器高5.3cmを測り、体部は直線的に外傾する。底部外面に回転ケズリ調整を施した後、外展する台部を付ける。無台坏921は器肉が薄く、922は底部外面に丁寧なナデ調整を加える。915を除き、Ⅲ～Ⅳ<sub>2</sub>期に位置付けられる。塊形滓923は半分程度が残存する。鉄刀1113は、刃先をほぼ南方向に向けて水平の状態出土した(第206図)。茎部に近い部分であり、残存長24.7cm、最大幅3.2cm、最大厚0.8cmを測る。他に非ロクロ土師器甕を主体に、弥生土器甕、ロクロ土師器甕、Ⅴ期を下限とする須恵器坏類、尖底の製塩土器の小片が出土した。

#### SX4003(遺構：第152・163図、遺物：第207図)

調査区南西端F-20-1・2区のSD4045南側で検出した整地痕跡で、調査区外に延びる。厚さ約10cmを測り、整地土は濁灰色砂質土(第163図土層5)を基本とする。遺構の切り合い関係から、SB401柱穴P4265・66より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、第207図924～926を図化した。非ロクロ土師器甕924は硬質で、口縁部は大きく外反する。須恵器無台坏925の底部内面は使用に伴い摩耗する。926は平底と考えられる製塩土器口縁部片で、口径約16cmを測る。他に非ロクロ土師器甕を主体に、内黒の非ロクロ土師器塊、ロクロ土師器甕、須恵器坏類、尖底の製塩土器の小片が出土した。

#### SX4004(遺構：第159・161・205図)

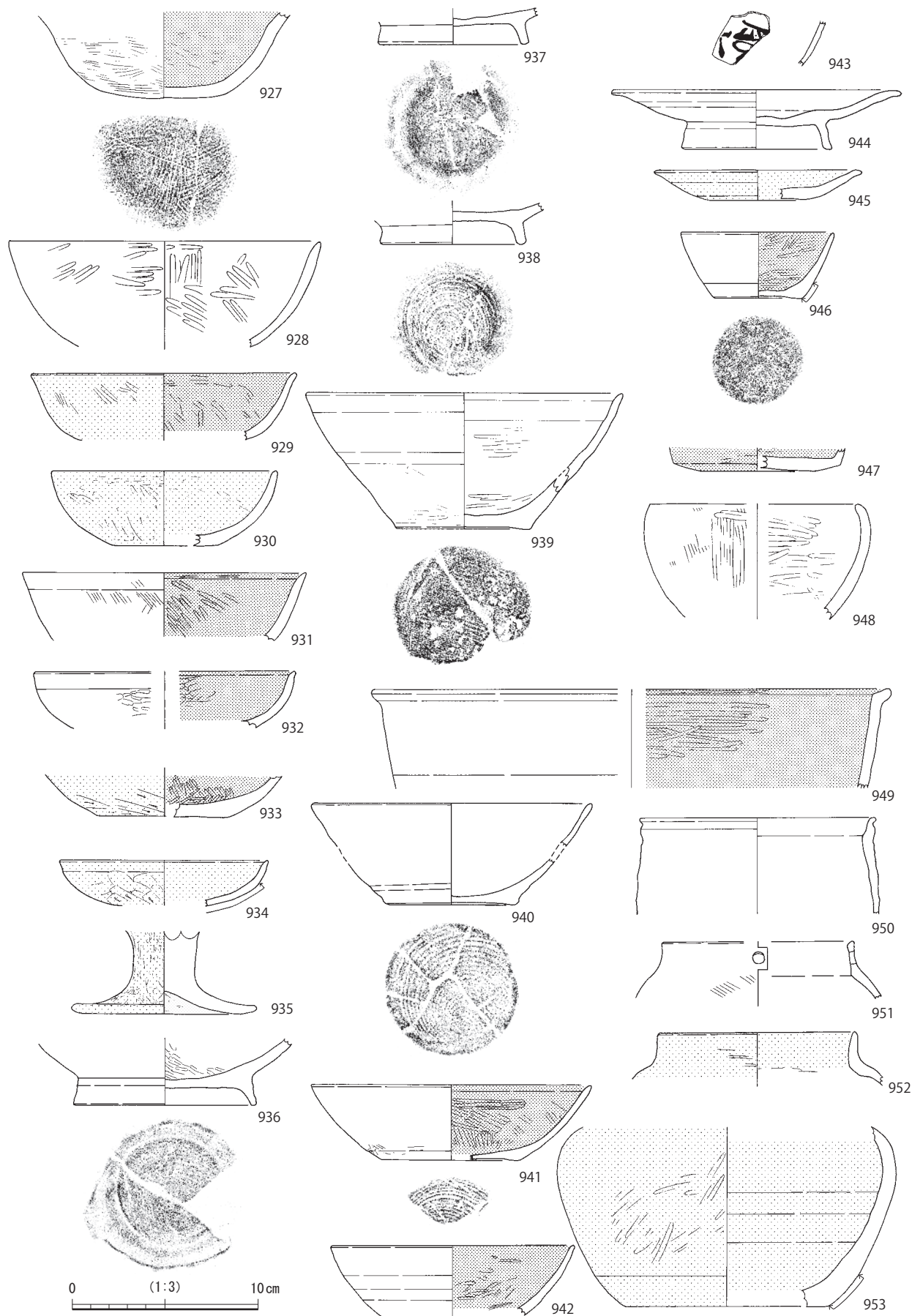
G-25-3区、F-26-2・4区、G-26区で検出した整地痕跡で、調査区外東側に延びる。南西－北東方向10m以上、南東－北西方向4m以上の範囲を、炭粒混ざりの灰色砂質土と黄色粘土の混合土で整地する。最大厚22cmを測る造成土上面には、部分的に赤褐色を呈した焼土層が確認でき、SX4002の焼土面と類似した性格をもつと考えられる。また、整地土上面で明確な遺構プランを把握できず、SB421・423等の柱穴は整地層掘り下げ作業後に検出したことから、SX4004に前出する建物の可能性が高い。

### 7 包含層等出土遺物(第208～216図)

第Ⅳ面の遺物包含層は、第8図32～35層の炭化物や黄色粘土粒が混ざる濁灰～暗灰色砂質土を基本とする。比較的多く出土した遺物のうち、第208図927～第216図1112を図化した。

第208図927～934・948は非ロクロ土師器塊類、935は高坏、951は小型壺で、Ⅱ<sub>2</sub>期～Ⅳ<sub>1</sub>期頃に位置付けられる。厚手の内面黒色塊927は口縁部で大きく外側に開く。外面はハケ調整の後、体部に粗いミガキ調整を加える。身の深い928は口径16.8cmを測り、外面下半にケズリ調整を施す。内黒外赤の929は口径14.1cmを測り、口縁端部で小さく外反する。両面赤彩の930は口径11.9cm、器高4.0cmを測り、外面に黒斑が残る。931・932は内面に黒色処理を施す。931は口径15.2cmを測り、胎土中に海綿骨針が多く混ざる。932は口径約14cmを測り、丁寧なミガキを施す薄手の精良品である。内黒外赤の933は、底部外面に静止糸切り痕をそのまま残す。両面赤彩の934は口径11.1cmを測る小形品である。赤彩の高坏935は、脚部を断面多角形状に仕上げる。肉厚の948は口径約11cmを測り、口縁部が内湾するため鉢形を呈する。内面にミガキ調整、外面にハケ調整が残る。非ロクロ成形と考えられる小型壺片951は口径約10cmを測る。短く内傾気味の口縁部に、焼成前に円孔(径0.6cm)を穿つ。

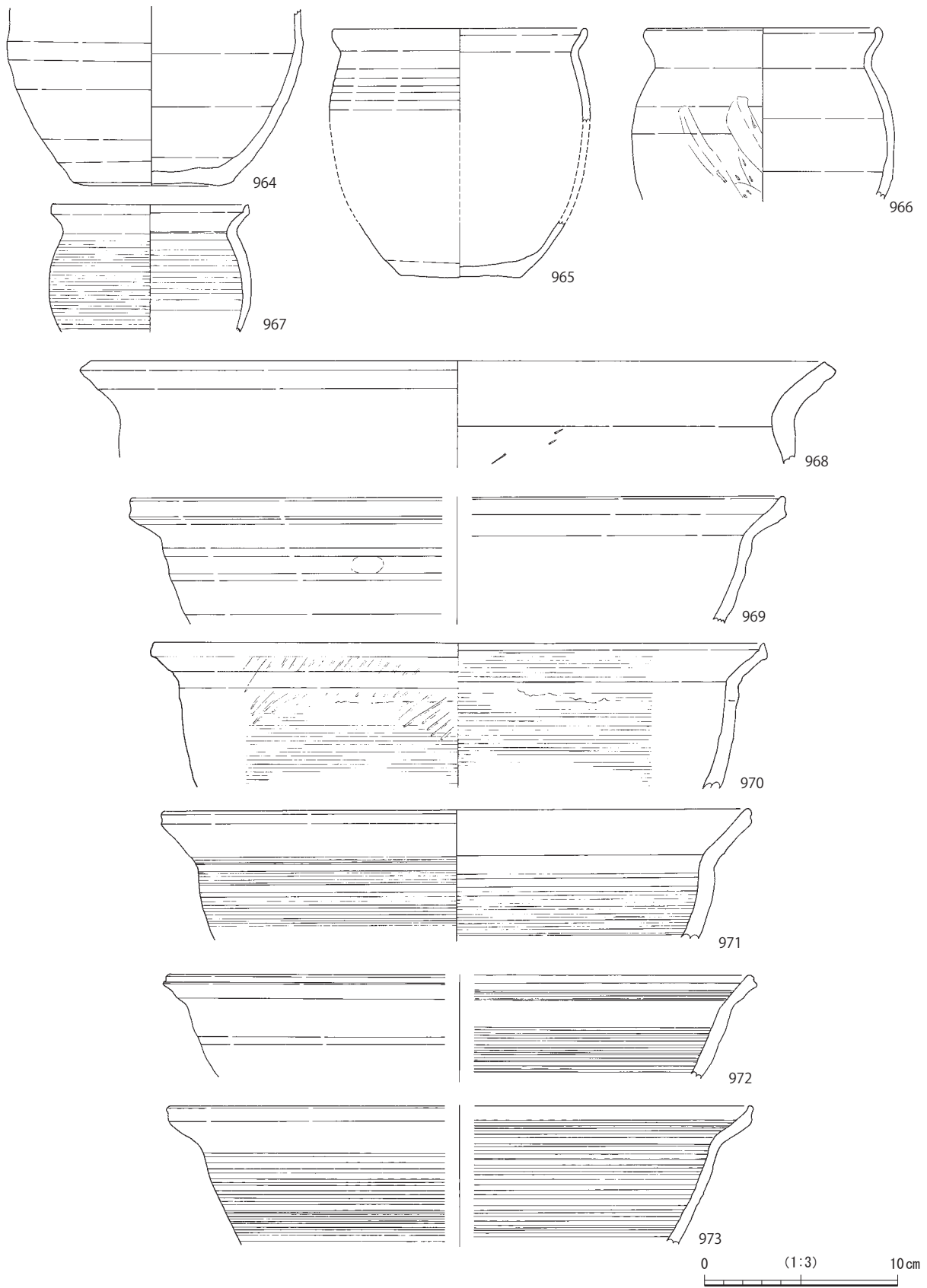
936～947・949・950・952・953はロクロ土師器で、煤の付着等の二次被熱痕を残す個体が多い。936～938は外展する台部をつける有台塊である。いずれも二次被熱痕を残し、938は内面に炭化物が付着することから灯明容器に転用した可能性が高い。939～942は無台塊である。939は口径16.7cm、器高約7.3cmを測る大型品で、底部外面に静止糸切り痕を残す。外面下半と内面にミガキ調整を施す。940は口径約15cmを測り、体部外面下端が沈線状にくぼむ。内黒の941は口径14.8cm、器高4.0cmを測る。内面のミガキは丁寧であり、体部外面下端にケズリ調整を施す。内黒の942は口径13.0cmを測る。塊類体部片943は、外面に第196図860と近似した判読不明の2文字の墨書が残る。有台皿944は口径15.4cm、



第208図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図1 (S=1/3)

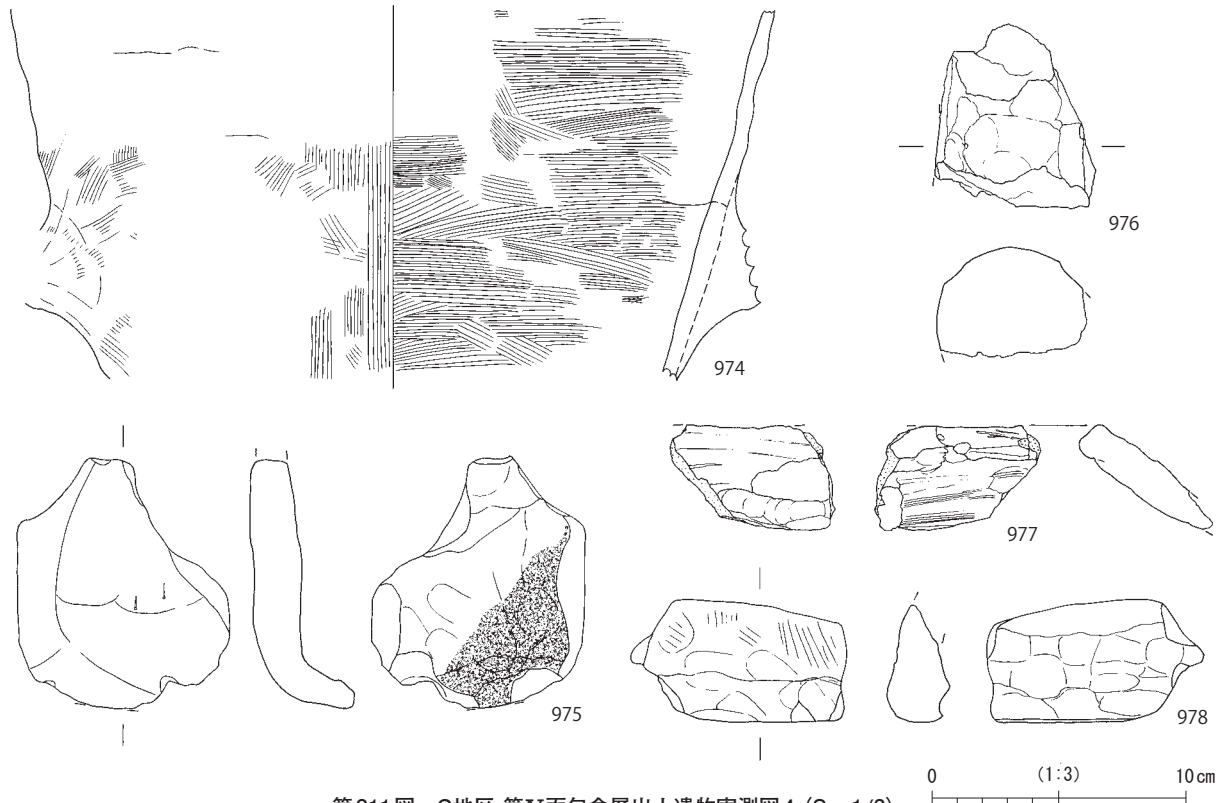


第209図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図2 (S=1/3)



第210図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図3 (S= 1/3)





第211図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図4 (S=1/3)

器高3.2cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕をそのまま残す。両面赤彩の皿945は口径10.4cm、器高1.6cmを測り、蓋の可能性を残す。小坏946は口径8.1cm、器高3.6cmを測り、内面は丁寧なミガキ調整の後に黒色処理を施す。正位で二次被熱し、口縁部外面に煤が付着する。坏類947は、両面とも丁寧なミガキ調整の後に黒色処理を施し、断面も黒灰色を呈する。内黒の鉢片949は口径約28cmを測り、口縁端部を横方向にひきのばす。小片のため傾きに不安を残す。小型の鉢類950は口径12.4cmを測る。直立する口縁端部外面に沈線状の加飾をおこなう。952・953は赤彩の壺類である。952は口径10.5cmを測り、口縁部は短く直立する。胴部片953は、胎土中に混和材がほとんど混ざらない。945・948・952・953はⅢ期前後、それ以外はV<sub>2</sub>期～VI<sub>2</sub>期を中心とした時期に位置付けられる。

第209図954は非ロクロ土師器甕で、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが付着する。955～961は、ロクロ成形の土師器長甕である。955は口径23.1cmを測り、口縁端部は外反しながら先細る。胴部下半を叩き痕がかすかに残る。956の口縁端部は断面三角形を呈し、粘土が柔いうちに叩き成形を施したため、外面の平行叩き痕の彫りが深い。957は煮炊きに伴う煤が付着し、磨滅が著しい。958は口径21.0cmを測り、口縁部を上方に屈曲しながら薄くひきのばす。薄手の959は口径21.1cmを測り、口縁端部を内傾気味に短くつまみあげる。960は口径20.0cmを測り、口縁端部は内傾気味である。961は口径約20cmを測り、上半をロクロナデ、下半は叩きで整形する。内面の当て具は扇形文と考えられる。962は非ロクロ土師器甕で、頸部で明瞭に屈曲する。

第209図963～第210図967はロクロ土師器小甕である。963は底部外面に静止糸切り痕を残す。964は底径8.4cmを、965は口径13.0cmを測る。ともにロクロひだが目立ち、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが付着する。薄手の966は口径11.8cmを測り、口縁端部が内屈する。967は口径10.1cmを測り、胴部両面にカキメ調整を施す。第210図968～973はロクロ土師器塼で、煮炊きに伴う煤・ヨゴレやコゲが比較的明瞭に残る。口径は、968が38.0cm、969が約33cm、970～973が30cm強を測り、口縁端部の形状は、平

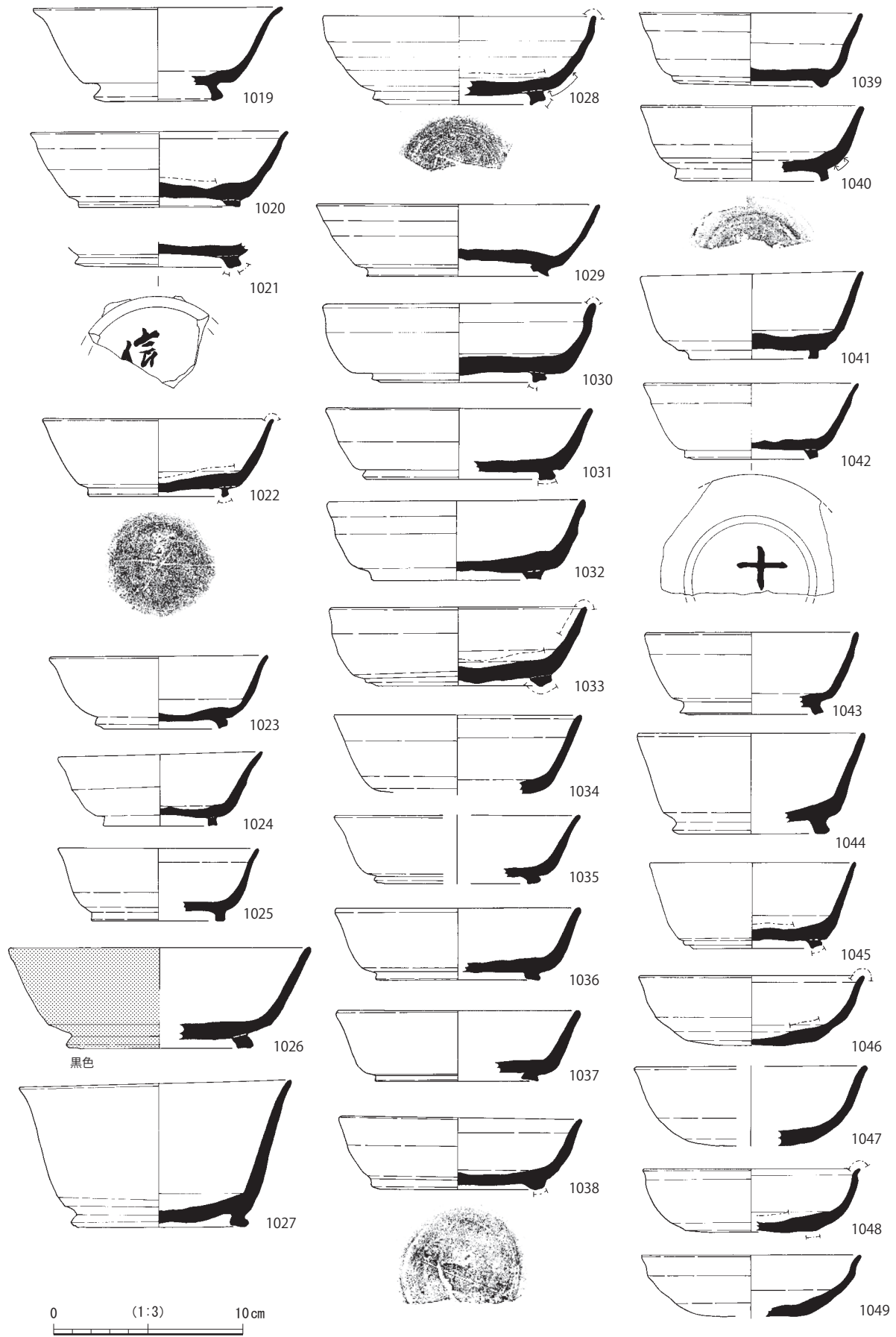
坦に仕上げる968、断面三角形を呈する969・971、小さくつまみ出す970・973、丸く仕上げる972と多様である。また、970の外面には平行叩き痕がかすかに残る。第211図974は非ロクロ成形の甑と考えられる。非ロクロ成形の975は、箱形を呈する大型品のコーナー部と考えられ、類似の破片がP4011から出土している。内面に煤が付着する他、器面に一部は被熱に伴い橙色に変色する。976は支脚片と考えられ、外面が被熱する。977・978は粘土の積み上げ痕を残す置きカマド片である。977の外縁下に剥離痕が、978の外縁下部に切断痕が認められる。

第212図979～第216図1103は、須恵器である。坏H蓋979は口径15.0cmを測り、還元が弱いいため赤橙色を呈する。肩部の稜は形骸化し、胎土の特徴から羽咋窯跡群産と考えられる。坏H身980は口径14.8cmを測り、口縁部は反りながら長くのびる。MT15並行期の能登産と考えられる。ともに、調査区周辺に集落域が存在したことを示す資料といえる。981～983は坏G蓋である。981は口径12.8cm、器高2.8cmを測り、降灰が著しい。982は口径12.6cm、器高3.3cmを測り、鈕頂部は成形時に歪む。内外面とも褐色を呈した漆状の付着物が残る他、内面に黒色の煤が付着する。

坏蓋984～1017のうち、扁平な大型鈕を付ける個体はⅡ<sub>3</sub>期～Ⅳ<sub>2(古)</sub>期を中心に位置付けられる他、1010～1017はⅣ<sub>2(新)</sub>期以降と考えられる。984は口径16.7cm、器高2.6cmを測り、天井部外面は回転ヘラ切り後に回転ナデ調整を施す。985～987は口径約15.5cmを測り、径3.5cmを超える大型鈕を付ける。988・989は口径約15.2cm、器高約2.5cm、鈕径3.0cmを測り、口縁端部は目立たない。989は天井部外面をナデ調整にとどめる。990は口径14.8cm、器高2.4cmを、991は口径14.8cmを測り、天井部外面に回転ナデを施す。扁平な992は、しっかりとしたボタン状の鈕を貼り、口縁端部はほとんど目立たない。天井部内面に焼成前に刻んだヘラ記号「×」が残る。993～995は口径14.6cmを測る。993・995が口縁端部をしっかりと面取りするのに対して、994は折り返しが弱い。996～998は口径14cm強を測る。997は、回転ヘラ切り後に粗いナデ調整を施す他、大型の鈕を付ける。口縁端部の面取りが鋭い998は、天井部内面に薄く墨痕が残り、摩耗具合からも転用硯と考えられる。平笠形を呈する999は、口径13.7cm、器高2.8cmを測り、硯に転用される。背が高い1000は口径14.0cm、器高4.3cmを測る。天井部外面2ヶ所に小さく墨書を記し、うち1ヶ所は「丈通」と判読可能である。1001・02は口径約13.6cm、1003は口径14.4cmを測る。1004は胎土に混和材がほとんど混ざらず、焼き膨れが著しい。1005～1007は口径14cm以下で、回転ヘラ切り後にナデ調整を施す。1008は口径13.4cmを測り、天井部内面は強く擦ったため、混和剤が剥離し、非常に平滑となる。1009は口径17.0cmを測り、天井部の器肉は厚い。1010は口径15.6cm、器高4.1cmを測り、還元が弱いいため橙色を呈する。1011～15は硯に転用される。1011は口径12.8cmを測り、天井部内面に墨痕が残る。1012は口径12.0cm、器高3.4cmを測り、ボタン状の鈕を付ける。鈕上面と天井部内面は使用に伴い平滑となる。ナデ肩の1013は、天井部内面中央付近に墨痕が認められる。1014は口径11.6cm、器高2.6を測り、ボタン状の鈕を付ける。1015～17は肩部で明瞭に屈曲し、口縁端部を小さく折り曲げる。盤類蓋と考えられる1018は口径21.2cmを測り、回転ヘラ切り後にナデ調整を加える。

第213図1019～1045は有台坏で、1019がⅡ<sub>3</sub>期、1020～30がⅢ期前後、1041以降がⅤ期に位置付けられる。1019は口径13.0cm、器高5.0cmを測り、やや内寄りに付けた台部は外側にしっかりとふんばる。焼成堅緻で、外面は黒灰色を呈する。1020は焼成堅緻で、扁平な台部を付ける。1021の底部外面に墨書が記され、文字のつくりは「言」と考えられる。1022の底部外面には焼成前に刻まれたヘラ記号「×」が残る他、使用に伴う磨耗が著しい。1023～1025は口径11cm前後、器高約4cmを測り、腰部に張りをもつ。また、1025は正位無蓋で焼成され、内面を含めて降灰が著しい。1026は外面に黒色処理を行った特殊な有台坏で、口径15.7cm、器高3.8cmを測る。体部は直線的に外傾し、第Ⅲ-2面出土品(第





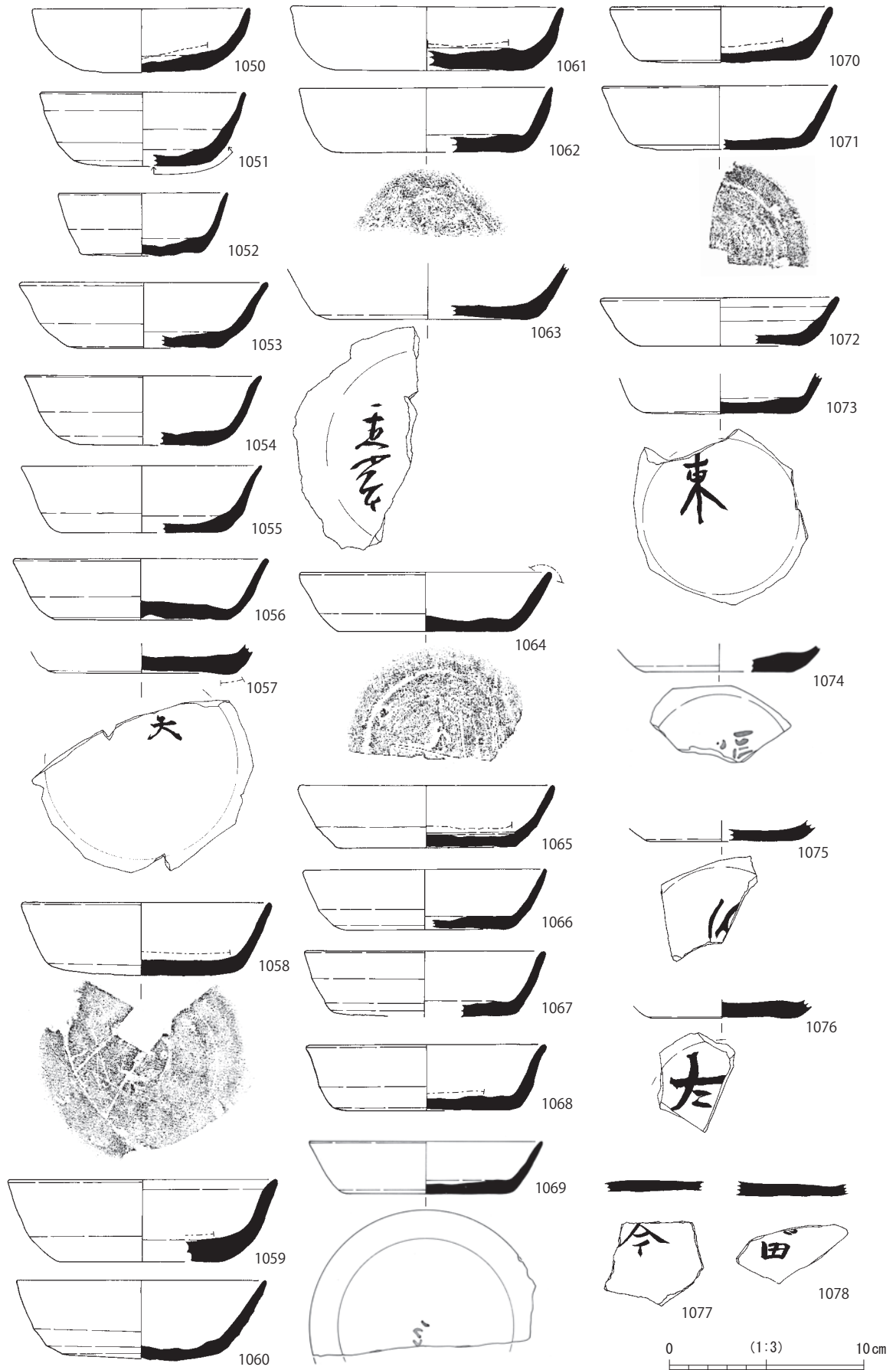
第213図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図6 (S=1/3)

136図559)と同一個体の可能性をもつ。1027は口径14cm、器高7.8cmを測り、身はかなり深い。1028は、体部が内湾気味に立ち上がり、胎土が精良である他、焼成は堅緻である。1029とともに外面下半に丁寧な回転ケズリ調整を施した後に台部を付ける。1029は口径14.8cm、器高3.8cmを測り、台部の一部は整形時につぶれる。1030～38は偏平な印象を受ける一群である。肉厚な1030は還元が弱く、小振りな台部を中央寄りに貼り付ける。1031に比して、1032の台部は目立たない。1033は還元が弱く、使用に伴う磨耗が著しい。1036～38は口径12.8cm前後、器高4cm弱を測る。箱形を呈する1039は口径11.7cm、器高3.9cmを測り、焼き歪みが目立つ。1040は底部外面にヘラ記号が刻まれる。1041は口径11.6cm、器高4.6cmを測り、台部は内屈気味である。1042は底部外面に記号様の墨書「+」が記される。1043は、体部が長くのびる。1044は口径11.8cm、器高5.4cmを測り、焼成が甘いため磨滅が著しい。1045は底部外面に丁寧なナデ調整を加え、体部は直線的にのびる。

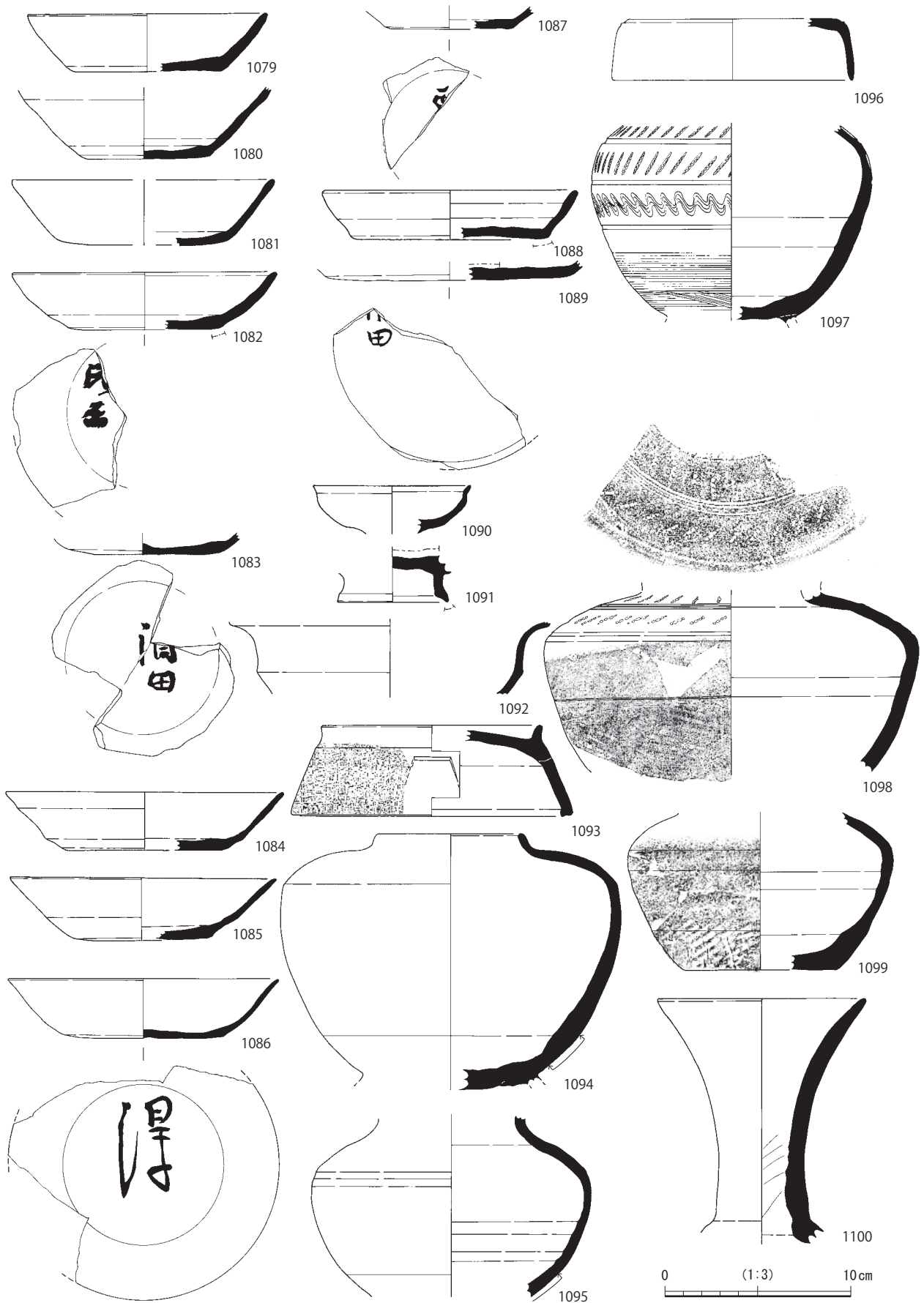
第213図1046～第214図1051は、Ⅱ<sub>3</sub>期に主体を持つ無台塚である。1046は口径10.8cm、器高4.1cmを測り、腰部で屈曲する。1047は身が深く、底部は内外面とも丁寧なナデ調整を施す。1048は内湾気味に体部が立ち上がり、口縁端部で小さく外反する。1049～51は、胎土の特徴から羽咋窯跡産と考えられる。1049は底部が狭く、口縁部はゆるやかに外反する。1050の体部は内湾気味である。1051は底部外面に粗いケズリ調整を加え、体部は直線的に立ち上がる。1052は口径8.6cm、器高3.2cmを測り、Ⅴ期に位置付けられる。

第214図1053～第215図1087は無台塚で、1053・60・65・71・75・77がⅤ期、1079～87はⅥ期に位置付けられる。1053の底部は台状を呈する。1054は底部外面に丁寧な回転ナデ調整を加える。1055・56の体部は緩やかに外傾する。1057は肉厚の底部外面に「大」と墨書し、Ⅳ<sub>1</sub>期に位置付けられる。1058は底部外面に三角形様のヘラ記号が残る他、底部内面を除いて被熱に伴い煤が付着する。1059は深身・肉厚の個体で、口径13.6cm、器高4.2cmを測る。1060は口径12.7cm、器高4.3cmを測り、黄橙色を呈する。1061～1072は偏平な一群である。1061は口径13.8cm、器高3.2cmを測る。底部の内外面ともかすかに墨痕が残り、転用硯の可能性をもつ。1063は、底部外面に「□(土カ)万呂」と墨書し、Ⅳ<sub>1</sub>期と考えられる。1064は体部が直線的に外傾し、底部外面に敷物圧痕とヘラ記号「/」が認められる。1065は薄手で、体部は内湾気味に立ち上がる。1066・67は口径約12.3cm、器高3cm強を測る。1068は底部外面にかすかに墨痕が残る他、底部内面は使用に伴い平滑となる。1069は、底部外面中央に墨書が残るものの、文字は判読できない。1070は口径11.2cm、器高3.0cmを測り、体部は短い印象を受ける。1071の体部は直線的に外傾する。1072は偏平で、盤形態に近い。1073～1078は底部外面に墨書が残る。1073が「東」、1074は「□(福カ)、1077は「令」または「今」、1078の2文字目は「田」と判読できる。1079は還元が弱く、体部が大きく外傾する。1080の底部は円盤状を呈し、焼成不良のため磨滅が著しい。1081は薄手で、体部は直線的に外傾する。煮沸容器に転用され、器肉は脆くなるとともに外面に煤が付着する。1082は、底部外面に2文字の墨書が記され、2文字目は「主」の可能性が高い。1083の底部外面に記された墨書は「酒田」と考えられる。1080・85～88は、第Ⅲ-2面石集中に伴う可能性が高い。1084～86は口径14cm台を測り、器肉が薄く、また焼成があまい。1086は底部外面に大きく「得」と墨書する。1087の底部外面に記された墨書の文字は判読できない。1088・89は、無台盤である。1088は口径13.5cm、器高2.6cmを測り、底部やや台状を呈する。1089は還元が弱く、底部外面に記された墨書の2文字目は「田」と判読できる。

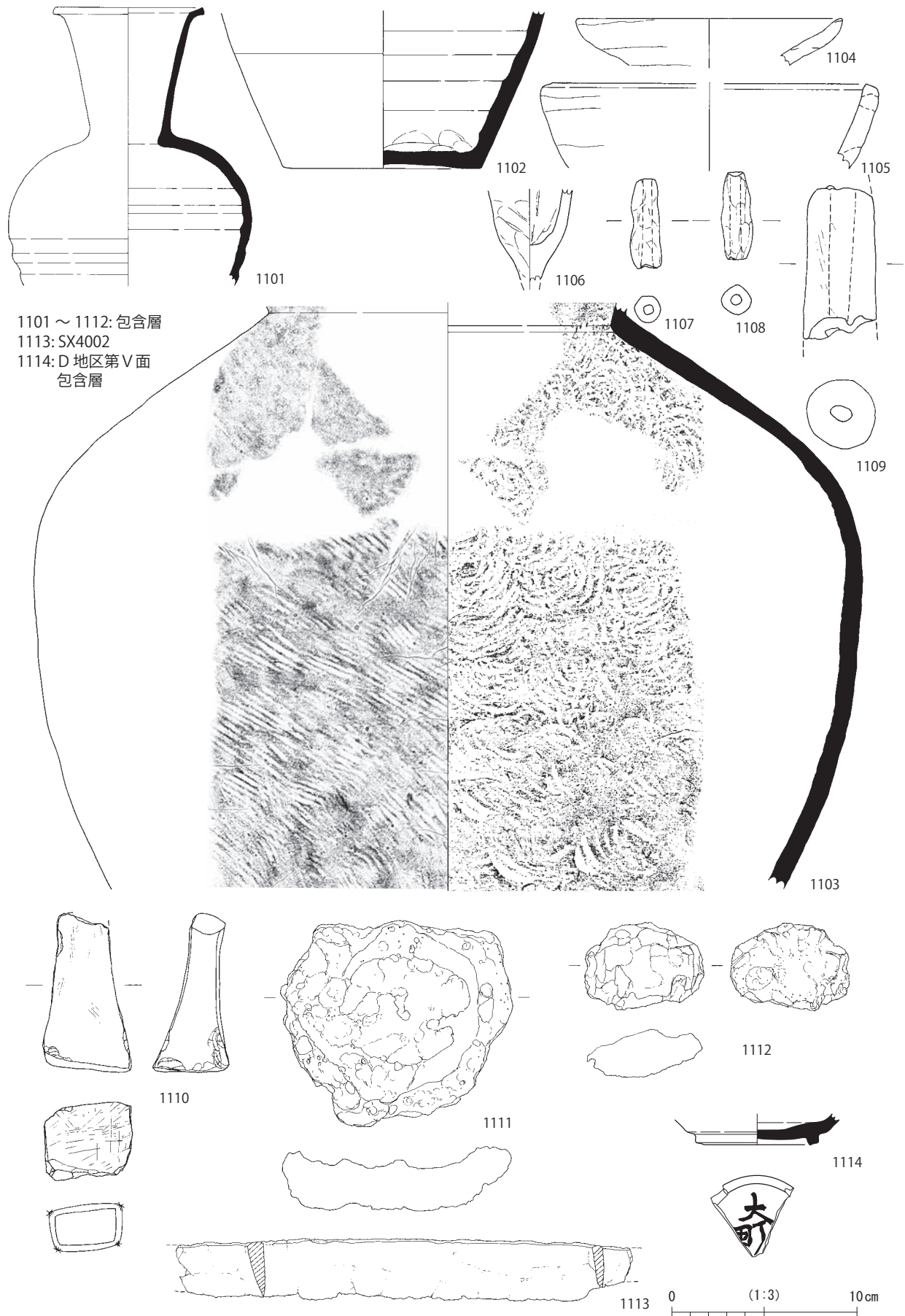
第215図1090は小型の塚類と考えられ、口縁端部を外側に短く折り曲げる。口径8.4cmを測り、脚が付す可能性をもつ。1091は台径5.9cmを測る仏器的器種と考えられ、底部内面は使用に伴い平滑となる他、煤が付着する。稜塚1092は体部中程で明瞭に屈曲する。圈足円面硯1093は口径11.6cm、器



第214図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図7 (S=1/3)



第215図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図8 (S= 1/3)



第216図 G地区 第IV面包含層等出土遺物実測図9 (S=1/3)



高4.9cmを測り、陸部は使用に伴い平滑となる。海部から陸部に向けて円滑に移行、足端部を内側に肥厚させる。また、足部外面を乱れ気味の斜格子で加飾する他、1ヶ所で残存する透かしは平面長台形を呈するものと考えられる。

第215図1094～第216図1102は壺・瓶類である。台付短頸壺1094は口径7.6cmを測り、降灰の状況から無蓋と考えられる。1095も同様に無蓋となる。壺類蓋1096は口径12.8cmを測り、肩部に小さな稜をつくる。台付長頸壺1097は、外面を沈線と刺突文、乱れた波状文、カキメで丁寧に加飾する。瓶類1098は外面を叩き具で整形し、肩部を4条の沈線、2列の刺突文で加飾する。小型の壺1099は外面を叩きとケズリ調整で整形する。長頸瓶1100は口径11.1cmを測り、内面はしぼり痕が目立つ。VI期に位置付けられる長頸瓶1101は口径7.9cmを測り、ロクロひだが目立つ。瓶類1102は底部内面の整形が粗く、正位無蓋で焼成される。甕1103は胴径約45cmを測り、外面に自然釉が熔着する。

第216図1104～06は尖底タイプの製塩土器である。1104は、口径14.1cmを測る。器肉が厚い1105は、口径約16cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。1106は硬質の質感をもつ。1107～09は土師質土錘である。胎土が近似する1107・08は、ともに煤が付着し、重さ約11gを量る。大型の1109は径3.7cmを測り、胎土中に粗砂が多く混ざる。砥石1110は浅黄橙色を呈し、4側面を鎌等の中砥として使用する。また、両端は切れ目を入れた後に折られたものと考えられる。1111・12は塊形滓で、ほぼ完形の1111が594.8gを量る。なお、G地区では、未図化だが塊形滓片7点、フイゴの羽口片1点が出土した。D地区出土の須恵器有台坏1114は、底部外面に「大町」と墨書し、VI<sub>1</sub>期と考えられる。

## 8 小 結

**時間的位置付け** 本遺跡の古代に営まれた集落域・耕作域の消長については、第1・2次調査報告書<sup>(10)</sup>でA～E期および集落1～6期に区分され、その時間軸が示されている(第39表)。G地区についても、この時間軸に基づき、掘立柱建物、出土遺物等の若干の整理をおこなった上で、7世紀末～9世紀末までの変遷案を示す。

**掘立柱建物** 検出・復元した掘立柱建物は26棟を数え、SB401～412の12棟が河跡

3001(古)の西側に、SB413～426の14棟が河跡3001(古)東側に、それぞれ分布する。以下では、前者の建物群を「西群」、後者の建物群を「東群」と呼称して、整理をおこなう。

調査区の土地利用については、集落域・耕作域がVI<sub>2</sub>期に発生した調査区中央を縦断する土石流災害3(河跡3001(古))により、不明な点が多いものの、次の2点について指摘可能である。まず、地勢が西側に向けて傾斜する西群の建物主軸方位がN-20～38°W(N-27～32°Wに中心)に分布するのに対して、地勢が北西側に傾斜する東群の建物主軸方位がN-8.5～42.5°W(N-約10°W、N-約18°W、N-28～32°W、N-40°前後W)と、東群の建物主軸方位が偏在しながらも振れ幅がより大きく、明らかに異なる分布帯をもつ。これから、各期ともG地区全体を網羅するような画一的な建物主軸方位の規制をみいだすことが難しく、西群・東群それぞれで土地規制をもつものと考えられる。このあり方は、本遺跡A～C・E地区の調査でも確認されており、立地する勾配の強い扇状地形の制約から、基本的に北西～北を指向しながらも、建築群単位(土地占有単位を反映か)が一定の独立性を保持し、土地傾斜に応じた

第39表 古代集落の時間的位置付け

区 分	古代集落変遷期	田嶋氏編年
1次A期	集落1a・b期	II <sub>1</sub> 期～III期
1次B期	集落2期	IV <sub>1</sub> 期
1次C期	集落3期	IV <sub>2</sub> 期
1次D期	集落4期	V期
	集落5期	VI <sub>1</sub> 期
1次D期以降(E期)	集落6期	VI <sub>2</sub> 期～VI <sub>3</sub> 期

建物群配置をおこなったものといえる。さらにいえば、両群の間(E～F-24区付近)に、土石流の誘因となった小河川等の何らかの区画が存在した可能性をもつ。2つ目に指摘できる点は、F地区北側～G地区南東側(G-20～23区付近)に建物が展開しない空白地が継続することがあげられる。後述するとおり、この空白域には、集落4期に相欠式横板組(横板蒸籠組)の井戸(SE4001)が掘られ、斎串等を用いた小規模な祭祀行為がおこなわれる。集落域全体の中で、他とは異なる土地利用が継続したエリアであった可能性を示唆するものといえる。

建物構造が把握できる21棟は全て側柱構造であり、明確な総柱構造をもつ建物は存在しない。身舎の柱間数・床面積がわかる9棟は、3間×3間3棟(SB407・408・420)が30㎡前後を、3間×3または2間1棟(SB419)と3間×2間1棟(SB417)が18㎡前後を、2間×1間1棟(SB409)が約17㎡を、平面正方形を指向する1間×2間1棟(SB406)と1間×1間2棟(SB412・418)が10㎡強となる。床面積でいえば、30㎡前後、20㎡程度、15㎡未満の3つの規模があり、A～C地区で確認した柱間数・平面積の分布とはほぼ同様な値を示す。また、不確定部分を残すものの、建物プラン・規模のありかたは、西群・東群で特に大きな差異が認めにくい。なお、大型の円形掘方をもつ西群のSB403が、B地区SB22と類似した床面積40㎡を超える大型建物となる可能性が高い。各建物の柱穴掘方の平面形態は、大部分の柱が抜き取られ、崩れやすい土質もあり、不整円形を基調とする点も、他地区の様相と共通する。

**耕作に伴う小溝群** SD4001・02・31以外の耕作に伴う小溝群約60条は、河跡3001(古)南側に分布する。小溝は、掘立柱建物廃絶以降に施された整地作業(SX4002・03)の後に、基本的に地形の傾斜に対して水平または垂直方向に掘られる。切り合い関係や主軸方位から、A小期(SD4026)→掘立柱建物主軸方位と類似する方位を示すB小期(約40条、B-1～3群、N-14～30°W)→C小期(約10条、C-1・2群、N-0～10°W)と変遷する。なお、河跡3001(古)北側は、掘立柱建物廃絶後に整地作業(SX4004)を行うものの、土地利用がなされなかった可能性が高い。また、遺構検出時に、各小溝に畝状の起伏がなく、覆土に土石流災害3の痕跡(淡灰色細砂等)が混ざらないことから、耕作域の廃絶と、土石流災害3の発生との間に一定の期間を想定するのが妥当と考える。

**出土遺物** 土壤堆積作用を基本とする扇状地形の特質もあり、田嶋氏編年Ⅱ<sub>2</sub>期～Ⅵ<sub>2</sub>期に属する遺物が多数出土した。土器類の出土状況では、河跡3001(古)の両岸で顕著な時期差は認められず、両群の建物は密接に関連しながら存続したと考えられる。出土遺物は、墨書土器、円面硯、転用硯を含む多数の須恵器、土師器を中心に、尖底を主体とした製塩土器小片が目立つ他、金属製品(銅製巡方、鉄刀)、生産活動を示す埴型滓、フイゴ羽口、土錘を確認している。また、斎串を主体としたSE4001での祭祀行為も、本地区を考えるうえで重要である。木製品の出土は、大型の区画溝・自然流路等が存在しないため、出土点数はそれ程多くない。

以下では、第0・I面～第IV面の節ごとに分散して記述した墨書土器、特徴的な遺物について取りまとめを行う。G地区出土の墨書土器は、未実測の小片を含めて88点を数え(第40表)、便宜的に河跡3001を軸に3区分した場合、出土地点別で特に強い偏在性をみいだせない。また、時期別にみた場合、各時期の中で集落5期(V<sub>2</sub>～Ⅵ<sub>1</sub>期)に属する墨書土器が28点を数え、出土点数全体の約1/3を占めることが分かる。次に、墨書を行った土器の種類・器種別で区分した場合、県内他遺跡とほぼ同様の傾向を示し、食膳具である須恵器坏類、特に無台坏を主体としており、本地区では集落5期に新しく須恵器無台盤(376・1089)、ロクロ土師器埴(860・943)が加わる。部位で見れば、須恵器坏蓋が天井部外面に、有台坏・無台坏・無台盤が底部外面である他、ロクロ土師器埴が体部外面に横方向に2文字を記す。

文字が判読または推定できた個体は34点を数え、点数で見れば「酒田」6点、「乙上」4点、「土万呂」4点と比較的目立つ存在である。「酒田」(集落3・4期)、「土万呂」(集落2・3期)、「梗女」(集落4期)、「仲」・「□

第40表 G地区出土墨書土器等一覧表

## 出土地点別（未実測遺物 28 点を含む）

区分	点数	Ⅱ <sub>3</sub> ・Ⅲ	Ⅳ <sub>1</sub>	Ⅳ <sub>2</sub> (古)	Ⅳ <sub>2</sub> (新)	V <sub>1</sub>	V <sub>2</sub> ～Ⅵ <sub>1</sub>	Ⅵ <sub>2</sub>	時期不明
		集落1期	集落2期	集落3期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	
河跡 3001 以南	41	0	3	2	3	2	14	2	15
河跡 3001	17	2	3	1	3	1	3	0	4
河跡 3001 以北	30	1	2	5	5	0	11	2	4
計	88	3	8	8	11	3	28	4	23

## 器種別（未実測遺物 28 点を含む）

区分	点数	Ⅱ <sub>3</sub> ・Ⅲ	Ⅳ <sub>1</sub>	Ⅳ <sub>2</sub> (古)	Ⅳ <sub>2</sub> (新)	V <sub>1</sub>	V <sub>2</sub> ～Ⅵ <sub>1</sub>	Ⅵ <sub>2</sub>	時期不明
		集落1期	集落2期	集落3期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	
須恵器・坏蓋	7	0	2	1	1	1	1	0	1
須恵器・有台坏	17	3	2	2	2	1	4	0	3
須恵器・無台坏	60	0	4	5	8	1	19	4	19
須恵器・無台盤	2	0	0	0	0	0	2	0	0
ロクロ土師器・埴	2	0	0	0	0	0	2	0	0
計	88	3	8	8	11	3	28	4	23

## 文字内容別（実測遺物 60 点のうち 34 点）

文字内容	Ⅱ <sub>3</sub> ・Ⅲ	Ⅳ <sub>1</sub>	Ⅳ <sub>2</sub> (古)	Ⅳ <sub>2</sub> (新)	V <sub>1</sub>	V <sub>2</sub> ～Ⅵ <sub>1</sub>	Ⅵ <sub>2</sub>	時期不明
	集落1期	集落2期	集落3期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	
「乙上」								137図592
「乙□(上カ)」		137図586	129図453					
「□上」								137図594
「田地」				146図750				
「酒田」				106図304		215図1083		
「□(酒カ)田」						107図335、 215図1089		214図1078
「□(福または酒カ)」				214図1074				
「東」			214図1073					
「寺」		136図562						
「置本□」			146図741					
「土万呂」		191図801						
「□□(土万カ)」			107図338					
「□(土カ)万呂」			119図374	214図1063				
「□万□」								147図769
「稷女」						129図454		
「仲」				101図226				
「□(田カ)仲」						147図766		
「得」							215図1086	
「文」						62図77		
「□物」	101図228							
「□(信カ)」		213図1021	193図830					
「□(大カ)」				214図1057				
「□□(丈通カ)」		212図1000						
「□□(木カ)」						196図860・ 208図943		
「□(今または令カ)」								214図1077
「+」					213図1042			
「Ⅲ」						107図345		
転用硯		212図998・ 999-1011		191図808、 212図1012-14-15				

「(田カ)仲」(集落3・4期)は、本遺跡南半のA～C・E地区には存在せず、隣接するF地区や羽咋市教委調査区(第1図)で確認できることから、本遺跡北半側に偏在する文字といえる。「酒田」は特定の水田名称、

第41表 G地区出土特徴的な遺物一覧表

種別	器種	挿図番号	番号	面	グリッド名	遺構名	備考
灰釉陶器	皿	62	78	第0・I面	F-22-4	P1100、包含層	K-90段階
銅製帯金具	巡方・表金具	108	349	第Ⅲ-1面	F-22-2	下層包含層	他にJ地区で2点出土
須恵器	円面硯	196	846	第IV面	F-26-4	P4074	第106図316と同一個体か
須恵器	円面硯	215	1093	第IV面	F-21-1	包含層	
須恵器	有台坏	213	1026	第IV面	F-26-4	包含層	外面黒色処理
須恵器	坏	215	1090	第IV面	F-23-2	包含層	燈坏か
木製品	斎串	201	893 ～ 896	第IV面	G-22-1	SE4001	
木製品	横櫛	201	897	第IV面	G-22-1	SE4001	
木製品	錐柄	201	899	第IV面	G-22-1	SE4001	
鉄製品	直刀	216	1113	第IV面	F-23-2	包含層(下層)、 SX4002	
埴形滓	-	207	923	第IV面	E-23-2	SX4002	他に1111・12、未実測7点。未実測フイゴ羽口1点

「土万呂」、「梗女」は特定の人名を指すものと考えられ、「酒田」墨書は四柳ミッコ遺跡E地区第I面河道1からも出土をみる。一方、「乙上」(集落2期)、「田地」(集落3期)は、A～C・E・F地区(集落2～4期)や羽咋市市教委第1次調査区で出土例があり、意味不明ながら、本遺跡で比較的広範に分布する文字である。

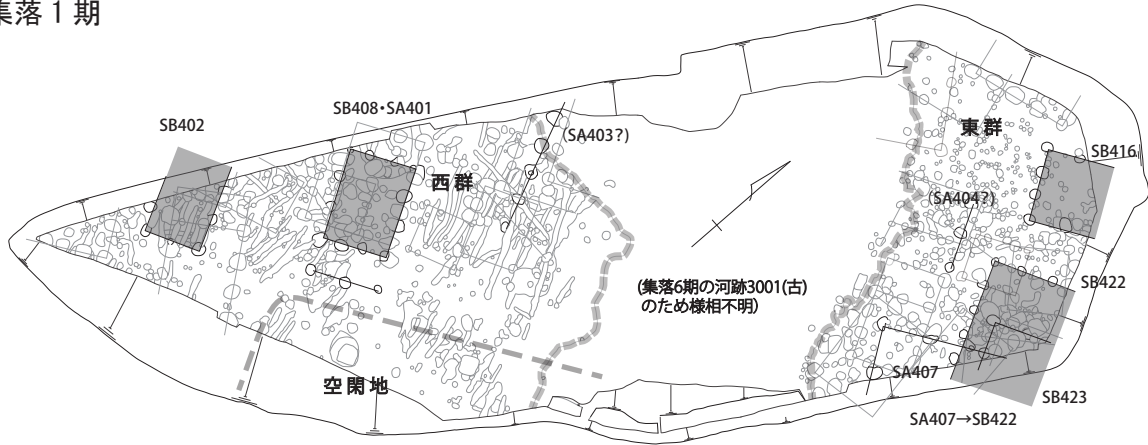
施設名または地名と考えられる文字では、集落2期に「東」、「寺」、「罌本□」が各1点出土している。「東」は、F地区で出土例がある他、A・B地区出土の「屋東」(集落3期)と関連する可能性をもつ。「寺」は、100m以上離れたA・B地区の集落5期に出土例があり、いわゆる村落内寺院が集落2期～5期まで長期にわたり存続した可能性を示すものといえる。さらに「罌本□」の3文字目が「寺」と推定可能であれば、本集落内に所在した寺院名称となりうる<sup>(11)</sup>。「得」(集落6期)は吉祥句、「+」「𠄎」(集落4・5期)は数量管理を目的とした文字と考えられ、A～C地区に出土例をもつ。新出の文字「住」「文」については、類例の増加を待ちたい。なお、第216図114のD地区第IV面出土の墨書の文字「大町」は、本遺跡F地区や、約800m離れた大町C遺跡<sup>(12)</sup>から出土例があり、古代の本集落を中心とした周辺地域の「賑わい」を端的に示す地名または集落名と考えたい。

次に特徴的な遺物としては、灰釉陶器皿(78)、銅製巡方(349)、円面硯(846・1093)等がある(第41表)。灰釉陶器皿はK-90段階に位置付けられ、本遺跡の出土はF地区第Ⅲ面に中心域をもつ<sup>(13)</sup>。腰帯は、A地区出土の銅製丸柄、F地区出土の石製巡方、同地区第IV面出土の銅製鉈尾等を含め、本遺跡で6点出土している。須恵器製円面硯片2点は、第1次調査以降、各地区で広範に多出する転用硯とともに、本遺跡全体における活発な文書作成行為を裏付けるものであり、本遺跡のもつ性格の一端を示すものといえる。また、埴形滓の出土から、各地区で小鍛冶作業を行ったことが分かる。

**G地区第IV面の変遷案** G地区第IV面については、前述のとおり田嶋氏編年Ⅱ<sub>2</sub>期～Ⅱ<sub>2</sub>期の遺物が継続的に出土するが、掘立柱建物柱穴等の遺構に伴う遺物は限られる。以下では、出土土器の比定時期を考慮しつつ、遺構間の切り合い関係や位置関係、また主軸方位等を併せて検討し、最も矛盾の少ないと考えられる現時点での変遷案を示す(第217・218図)。

G地区第IV面の変遷は、大きくは7世紀末～8世紀初頭(田嶋氏Ⅱ<sub>2</sub>期～Ⅱ<sub>3</sub>期)に成立した集落域(集落1～4期)、9世紀後葉(同Ⅱ<sub>1</sub>期)の小規模な整地作業を伴う耕作地(畠地)への転換(集落5期)、そして耕作地廃絶後の土石流災害3の発生(集落6期、10世紀初頭(同Ⅱ<sub>2</sub>期))、第Ⅲ-2面の形成(10世紀前葉、Ⅱ<sub>3</sub>期)という過程を経る。なお、復元できなかった建物が存在する可能性が高いことや、集落域が広

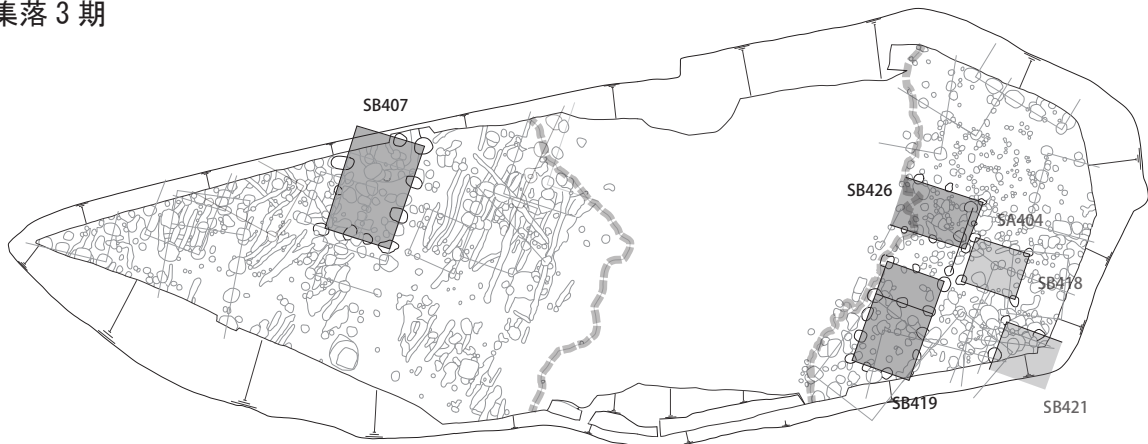
集落1期



集落2期



集落3期



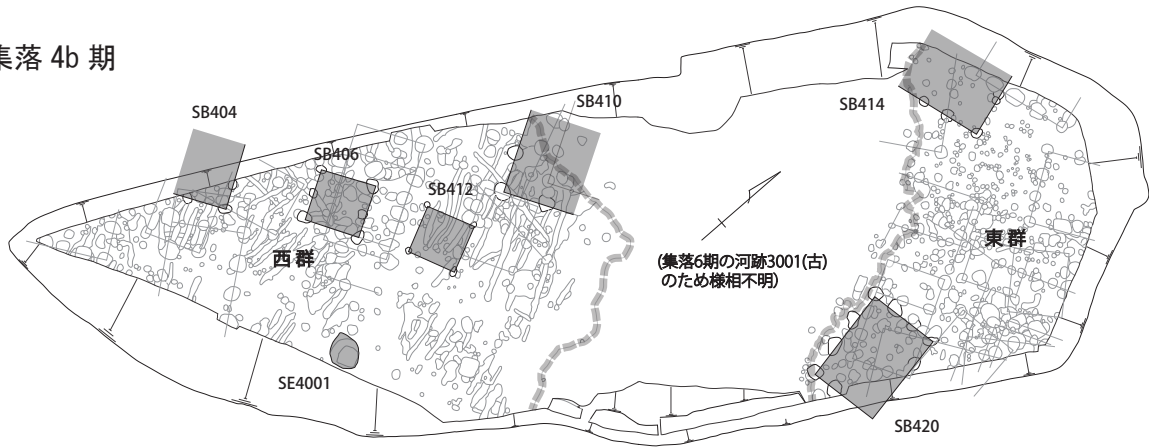
集落4a期



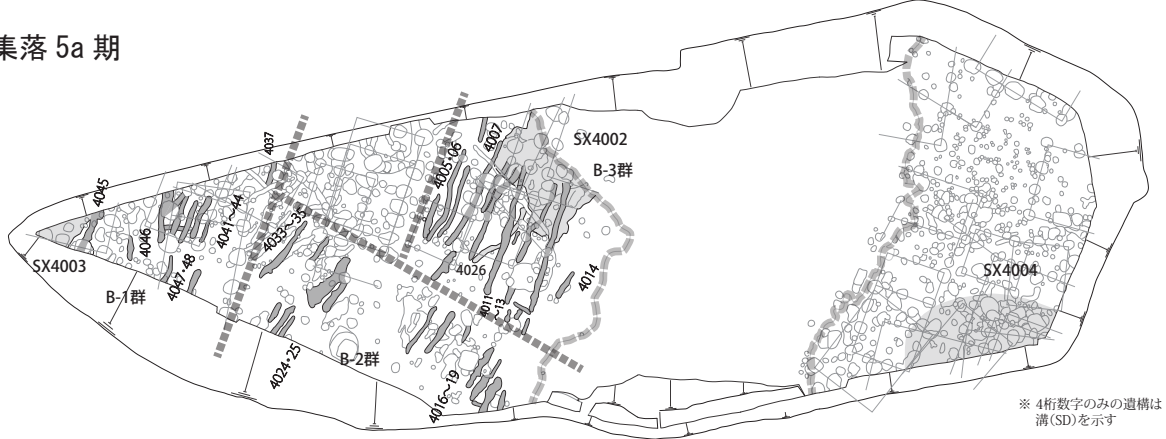
第217図 G地区 第IV面主要遺構変遷図1(S=1/500)

0 (1:500) 10m

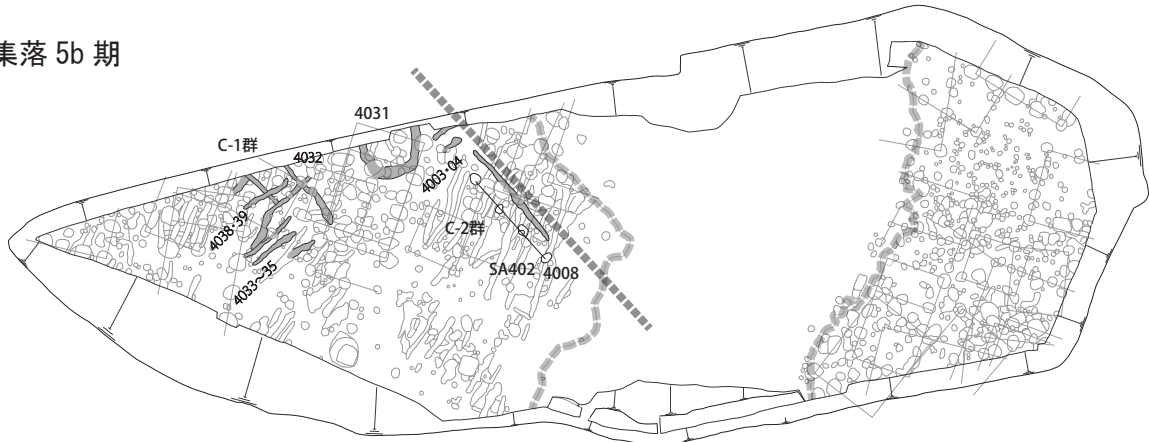
集落 4b 期



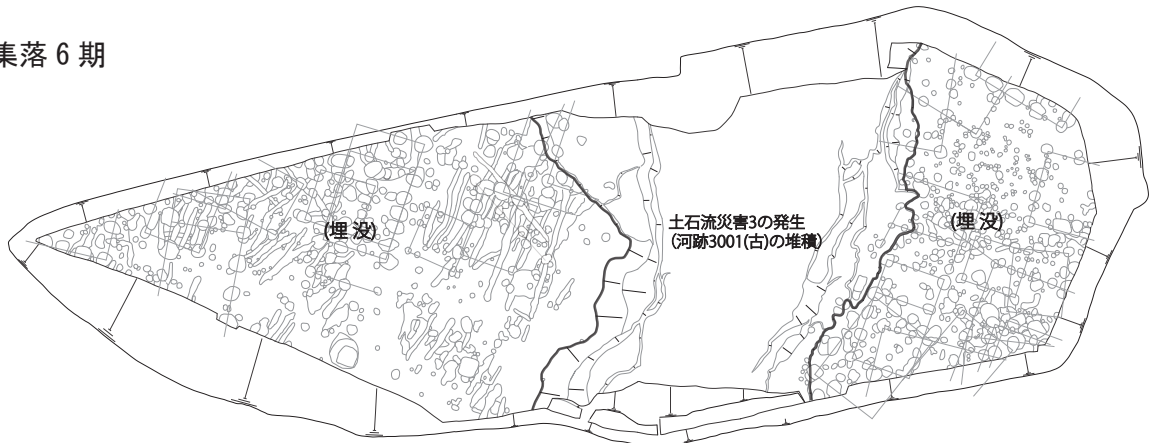
集落 5a 期



集落 5b 期



集落 6 期



第218図 G地区 第IV面主要遺構変遷図2(S=1/500)

0 (1:500) 10m

大で、かつ調査区の外側に延びること(東側の緩斜面に集落中心域を想定)に留意されたい。

**集落1期** 他地区と同様に古代の集落域が成立する大きな画期となる。西群でSB402、SB408・SA401(およびSA403)、東群でSB416、SB422、SB423(およびSA404・407)を想定し、柵(塀)を多用する点に特徴をもつ。建物主軸方位(西群N-27・31° W、東群N-27 ~ 32.5° W)が近似する2つの建物群単位よりなり、両群の間には河跡3001(古)で流出した何らかの区画施設の存在を考えたい。西群はSB408(3間×3・2間、床面積27.6㎡)の南東側に柵SA401を配し、調査区外東側に展開する空地と隔てる。東群は、大型建物SB422を含む建物を2回建て替えとしたが、SB422については主屋SB423を取り囲む柵(塀)とも考えられ、その場合は柵(塀)で囲まれた同規模の建物が建て替えられた(SB422 + SB223、SA407 + 調査区外主屋)とも考えられる。墨書土器は「□物」(228)が確認できる。

**集落2期** 西群でSB401、SB403、東群でSB413、SB417を想定した。建物主軸方位は、西群がN-35 ~ 38° W、東群がN-39 ~ 42.5° Wを示す。西群は径1m前後を測る大型の柱穴掘方をもつ建物2棟で構成され、うちSB403は床面積40㎡を超える大型建物となる可能性が高い。西群のSB413、SB417(床面積15.1㎡)は、本遺跡で多くみられる居住用途をもつ建物と考えられる。墨書土器は増加し、「乙上」「土万呂」に加えて、施設名・地名と考えられる「東」「寺」「罌本□」が出土する。「寺」墨書がいわゆる村落内寺院を示す他、「罌本□」の位置付けについては前述のとおりである。

**集落3期** 西群でSB407(3間×3間、床面積31.7㎡)、東群でSB418・419・421・426、SA404を想定した。建物主軸方位は、西群SB407がN-31.5° W、東群がN-28 ~ 31.5° Wと近似した値を示す。東群は、廂をもつSB419(3間×3間、床面積18.6㎡)とSB426、またSB421とSB418(1間×1間、床面積11.4㎡)が、それぞれ主屋(居住)、副屋(雑舎)の関係をもつと考えられるが、前後関係は不明である。墨書土器は、「土万呂」に加え、新たに「田地」「酒田」「仲」の文字が確認できる。

**集落4a期** 9世紀前葉~中頃の集落4期を、a・b2小期に分けた。集落4a期は、西群でSB409・411(・405?)、東群でSB415・424を想定した。建物主軸方位は、西群が集落3期と大差ないN-約28° Wを示すのに対して、東群はN-8・18° Wと北指向を強める。さらに2棟の主軸方位が異なることから、別の建物群単位とすることも可能性である。西群SB409の床面積は16.9㎡を測る他、集落1期以降、継続的に空地であったエリアにSE4001が掘られ、同地区における画期となる可能性をもつ。

**集落4b期** 西群でSB404・406・410・412、SE4001を、東群でSB414・420を想定した。西群の建物主軸方位はN-28 ~ 32° Wと、集落3期以降の方位を維持しており、SB404・410が主屋(居住)、床面積10㎡強を測るSB406・412が副屋(雑舎)と考えられる。相欠式横板組(横板蒸籠組)のSE4001では、斎串等を用いた小規模な祭祀行為が行われる。東群の建物主軸方位は、集落4a期と近似するN-10・17° Wを示し、それぞれの建物群単位で建て替えを行う。墨書土器は出土点数が増加する。文字内容は、「酒田」「稗女」「□(田カ)仲」「文」等が確認できる一方、集落3期までの「乙上」「田地」の文字は出土しない。

**集落5a期** 7世紀末に成立した集落域が廃絶し、西群が耕作域(畠地)に転換する大きな画期で、a・b2小期に分けた。集落5a期は、西群、東群とも黄色粘土粒を混ぜた土で整地作業痕跡(SX4002 ~ 04)を行い、西群で畠地が展開する。西群の小溝は、その分布からB-1 ~ 3群の3つの耕作単位が復元可能であり、集落4b期の土地区割りを踏襲している可能性をもつ。各群の小溝の主軸方位は、B-1群がN-20 ~ 26° Wを、B-2群がN-14 ~ 30° Wを、B-3群がN-30° Wを示し、地形の傾斜に強い影響を受けている。一方、東群は整地作業を行うものの、明確な耕作痕跡は認められない。いずれにしても、この集落5a期は、G地区のみならず、A・B地区での大規模な整地作業痕跡やF地区での耕作域への転換、また羽咋市教委第4次調査区で確認できる集落の活発化等、本遺跡全体の大きな再編期であった可能性が高い。

**集落5b期** 集落5a期の様相が基本的に継続する。西群の耕作地は、溝主軸方位がN-0 ~ 10° Wと、北

を強く指向する。SA402やSD4031は、本小期に属すると考えられる。東群は、前小期の様相を維持する。また、墨書土器は、吉祥句と考えられる「得」が1点出土している。

**集落6期** 集落5b期の耕作地(畠地)が廃絶し、一定の期間を経て、河跡3001(古)を本流とする土石流災害3が発生、第Ⅳ面を厚い土砂で被覆する。その後、河跡両岸で第Ⅲ-2面(第149図)が展開する。

〔註〕

(10) 布尾和史・澤辺利明他2005『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

川畑 誠他2017『羽咋市四柳白山下遺跡Ⅲ』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

(11) 3文字目は欠損部分が多いことから、あくまで可能性の域を出ない。また、「罌本」墨書は、「東院寺」墨書や鉄鉢等の仏器器種の出土から寺院及び関連施設と考えられる宝達志水町杉野屋専光寺遺跡から3点が出土している(註9文献、上野 敬他1998『杉野屋専光寺遺跡』志雄町教育委員会)。報告書の中で、「罌本」墨書は9世紀前半～半ばのものであり、比定地が定かでない古代羽咋郡の郷の一つである岡本郷との関連を指摘している。また、浅香年木氏(1980「第2章 古代」『志賀町史』第5巻沿革編 志賀町役場)によれば、『和名類聚抄』記載の羽咋郡岡本郷については、子浦川周辺(後の志雄庄・菅原庄周辺、杉野屋専光寺遺跡が立地)、志賀地域於古川・安津見川周辺(後の加茂庄周辺)、羽咋市柴垣周辺が考えられており、2遺跡で共有する「罌本」の文字の歴史的な位置付けについては、今後の類例の増加を待ちたい。四柳白山下遺跡と杉野屋専光寺遺跡は、直線距離で約6km離れる。

(12) 中島俊一・川畑誠1995『大町遺跡 小金森ヘイナイメ遺跡－県営ほ場整備事業余喜地区埋蔵文化財発掘調査報告－』石川県立埋蔵文化センター

(13) F地区第Ⅲ面では、白磁碗1点、緑釉陶器2点、灰釉陶器13点が出土した。



第42表 G地区 第IV面出土土器類観察表1

※ ( ) は残存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
191	793	F-20-2	SB401 (P4263)	非ロクロ土師器	壺	18.4	-	(5.3)	黄橙	黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□3/36		H16D163
191	794	F-20-4	SB401 (P4262)	非ロクロ土師器	壺	約23	-	(6.6)	淡黄橙	淡黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□2/36	口縁部内面ヨゴレ付着	H16D165
191	795	F-20-2	SB401 (P4263)	非ロクロ土師器	壺	20.8	-	(4.4)	黄橙	黄橙	オ	良	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	□3/36	外面煤付着	H17D515
191	796	F-20-2・4	SB401 (P4262・4263)	非ロクロ土師器	壺	16.8	-	(5.0)	黄橙	黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□3/36	外面煤付着	H16D164
191	797	F-20-2	SB401 (P4263)	非ロクロ土師器	瓶頸把手	(10.0)	(7.9)	-	黄橙	淡黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	-	外面一部黒斑	H16D162
191	798	F-20-3	SB402 (P4254)	ロクロ土師器	壺	16.6	-	(4.6)	黄橙	明赤褐	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□4/36	外面赤彩。外面小割離着	H17D522
191	799	F-21-1	SB402 (P4249)	非ロクロ土師器	壺	19.8	-	(7.2)	黄橙	黄橙	ケ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	摩滅顯著、一部黒斑あり	H17D506
191	800	F-21-1	SB403 (P4253)	非ロクロ土師器	壺	15.0	-	(7.1)	淡黄橙	淡黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	□6/36	口縁部ヨゴレ、外面煤付着	H16D161
191	801	F-21-1	SB403 (P4253)	須恵器	坏蓋	15.7	-	(2.8)	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□9/36	II b 類重ね焼き。外面墨書「土万呂」、内面墨痕	H16墨11
191	802	F-21-1	SB403 (P4241)	非ロクロ土師器	無台埴	12.5	-	(4.0)	明橙	明橙	キ	良	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ケズリ	□12/36	内外赤彩	H16D159
191	803	F-21-1	SB403 (P4241)	非ロクロ土師器	無台埴	13.0	-	(3.3)	淡黄橙	淡黄橙	キ	良	ナデか	ヨコナデ、ケズリ	□6/36	内外赤彩。摩滅顯著	H16D160
191	804	F-21-1	SB403 (P4241)	須恵器	蓋類	約20	-	(2.4)	灰	黒灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ	□3/36	外面黒化	H17D389
191	805	F-21-1	SB404 (P4238)	須恵器	有台坏	-	7.8	(1.5)	暗青灰	暗青灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底6/36		H16D158
191	806	F-22-1	SB406 (P4220)	須恵器	無台坏	11.9	8.4	3.0	灰黄	灰黄	f	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□24/36	内底摩耗。埋納か	H16D171
191	807	E-22-2	SB407 (P4224)	ロクロ土師器	鉢か	14.7	-	(3.4)	橙	橙	ケ	良	カキメ	ロクロナデ、平行タタキ	□5/36	外面煤付着	H17D523
191	808	E-22-2	SB407 (P4224)	須恵器	坏蓋	12.3	細径 2.6	2.0	淡灰	灰	b	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□6/36	I 類重ね焼き。内面・粗平滑、内面墨痕、転用痕	H16D172
192	809	E・F-22-23	SB407・408 (P4163)、包含層	ロクロ土師器	壺	-	-	(22.0)	淡黄橙	淡黄橙	ケ	良	ロクロナデ、放射状文タタキ	ロクロナデ、平行タタキ	-	外面Da類。外面煤付着。破片多数	H17D521
192	810	E-22-2、E-23-2	SB407 (P4203)、SX4002	須恵器	壺	17.1	-	(5.1)	灰	灰	g	良	ロクロナデ、同心円タタキ	ロクロナデ、平行タタキ、カキメ	□8/36	内面Da類、外面Da類	H17D507
192	811	E-23-4	SB407・408 (P4163)	須恵器	坏蓋	13.1	-	(1.8)	灰	灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	□6/36	重ね焼き不明	H16D152
192	812	E・F-21~23	SB407・408 (P4163)、P4104、包含層	ロクロ土師器	坏類蓋	18.2	細径 2.6	3.9	橙	橙	キ	不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□15/36	内外赤彩がわずかに残る	H16D145
192	813	E・F-21・22、F-26	SB407 (P4224)、SB408 (P4226)、SX4002、包含層	須恵器	短頸壺	17.8	-	(26.6)	灰	灰~灰褐	n	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	□5/36	内面暗灰色ヨゴレ付着	H16D308
192	814	F-21-3	SB408 (P4228)	ロクロ土師器	無台埴	14.1	6.3	4.9	淡黄橙	淡黄橙	ケ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、回転ケズリ、回転ヘラ切り	□27/36	埋納か	H16D156
192	815	F-22-3	SB409 (P4151)	非ロクロ土師器	壺	21.6	-	(10.1)	黄褐	淡黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	内面炭化物・外面煤付着	H16D147
192	816	F-23-1	SB410 (P4159)	非ロクロ土師器	無台皿	14.5	-	1.9	黒	赤橙	キ	良	ミガキ	ハケ、ミガキ	□3/36	内面黒色処理、外面赤彩。外面煤付着	H16D151
192	817	F-23-1、F-26-3	SB410 (P4202)、SB416 (P4073)、SD4010	須恵器	横瓶	11.3	-	(29.2)	青灰	青灰	f	良	ロクロナデ、同心円タタキ、ハケ	ロクロナデ、平行タタキ、カキメ	□小片	内面Da類、外面Da・c類。降灰・自然釉顯著 (横位無蓋焼成)	H16D141
192	818	F-22-1	SB408 (P4213)	須恵器	坏H身	11.9	5.9	4.0	灰	青灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□4/36		H16D173
192	819	E-26-4	SB415 (P4085)	製塩土器	平底	約15.5	-	(4.9)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多	良	ハケ	ナデ	□3/36		H17D514
192	820	E-26-4	SB415 (P4085)	土師器	土鍾	長7.3	径3.2	-	灰黄橙	灰黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ナデ	ナデ	-	孔径1.2cm、残存重量62.4g	H16D142
193	821	E-25、E-26-2、F-23-1	SB410 (P4202)、SD3548	須恵器	横瓶	-	-	(21.2)	青灰	暗灰	e	良	ロクロナデ、同心円タタキ	ロクロナデ、平行タタキ、カキメ	-	内面Da類、外面Da類。横位焼成・降灰・自然釉顯著	H16D346
193	822	F25-2~4、F26-2	SB419 (P4050)、包含層	ロクロ土師器	壺	20.5	-	(12.8)	黄橙	黄橙	ケ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	□1/36	外面煤付着	H17D584
193	823	F-25-4、F-26-2	SB419 (P4050)、包含層	非ロクロ土師器	埴	30.5	-	(18.1)	灰黄褐	灰黄褐	オ	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	□24/36	外面煤付着	H16D209
193	824	G-25-1・2	SB419 (P4010)、包含層	非ロクロ土師器	壺	16.2	-	14.7	淡黄橙	淡黄橙	オ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□9/36	口縁部内面ヨゴレ・外面煤付着	H16D133
193	825	F-25-4、F-26-2	SB419 (P4050)、包含層	須恵器	坏蓋	14.4	細径 3.3	3.3	灰	灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□3/36	外面一部降灰、I 類重ね焼き	H16D139
193	826	F-25-3・4、F-26-2	SB419 (P4050)、III-2面SD3512、包含層	須恵器	坏蓋	16.0	-	(2.8)	灰	灰	h	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□15/36	I 類重ね焼きか	H16D14
193	827	F-26-2	SB419 (P4033)	須恵器	長頸瓶	-	7.9	(11.0)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、ケズリ	底30/36	頸部風船状法痕。正位無蓋焼成。外底煤土付着	H16D313
193	828	G-25-3	SB420・424 (P4019)	非ロクロ土師器	壺	約17	-	(3.7)	褐灰	灰褐	ケ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	外面一部黒斑。小片のため焼きに不安残す	H17D513
193	829	G-26-1	SB421 (P4051)	製塩土器	平底	約20	-	(4.2)	淡黄橙	黄橙	粗砂多、赤色粒少	良	ハケ	ナデ、ハケ	□4/36	外面一部煤付着	H17D511
193	830	F-26-4	SB422 (P4100)	須恵器	坏蓋	-	-	(1.8)	暗灰	青灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	小片	内外面に墨書。外面は「口」、内面判読できず	H16墨22
193	831	F-26-2	SB423 (P4054)	非ロクロ土師器	手づくね土器	3.4	2.9	2.7	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ナデ	ナデ	□4/36	外面一部黒斑	H16D112
195	832	F-25・26	SB419 (P4050・4033)、P4031、河跡3001 (古) 南肩部黒灰色土、包含層	須恵器	横瓶	14.0	-	(30.0)	灰	灰	f	良	ロクロナデ、同心円タタキ	ロクロナデ、平行タタキ、カキメ	-	同心円a類、平行b・c類。横位無蓋焼成・降灰・自然釉・転用焼き台着着。両面閉塞	H17D509
195	833	G-26-1、F-26-2・4	SB424・425 (P4057)、包含層	非ロクロ土師器	置きカマド	約22	-	(5.2)	橙	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	□4/36	外面煤付着。小片のため焼きに不安残す	H17D68
195	834	F-25-2	SA406 (P4095)	非ロクロ土師器	無台埴	14.4	-	(3.7)	黒	赤橙	キ	良	ミガキ	ハケ、ミガキ	□12/36	内面の黒色処理は口縁部外面に及ぶ。外面赤彩	H16D143
195	835	G-25-2	P4010	製塩土器	尖底か	約15	-	(6.2)	黄橙	灰褐	粗砂多、海綿骨針少	良	ナデ	ナデ	□小片	硬質な質感。外面煤付着	H17D510
195	836	G-25-3	P4016	非ロクロ土師器	無台埴	17.6	-	(7.2)	黒	黄橙	ア	良	不明 (ミガキか)	ヨコナデ、ハケ	□6/36	内面黒色。摩滅顯著	H16D134
195	837	G-25-3	P4016	ロクロ土師器	瓶	約25	-	(3.9)	黄橙	黄橙	オ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	□2/36		H17D512
195	838	E・F-25-2、E-26-2、G-25-3	P4017・P4019・P4134、包含層	須恵器	壺	-	約13	(11.6)	青灰	青灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、カキメ、回転ケズリ	-		H16D303
195	839	G-25-3	P4019	須恵器	有台坏	-	10.4	(2.8)	灰	灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	底18/36	台端部磨耗	H16D135
195	840	F-26-2	P4031	非ロクロ土師器	壺	10.0	-	(4.8)	黄橙	黄橙	オ	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	□6/36	外面ヨゴレ付着	H16D138
195	841	F-25・26	P4031・4032、包含層	須恵器	長頸瓶	-	-	(13.5)	淡灰	淡灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	-	内外面降灰・自然釉 (正位無蓋焼成)。焼きぶくれ顯著	H16D350
196	842	F-25-4、F-26-2	P4031、包含層	須恵器	坏蓋	14.0	-	(1.9)	淡灰	淡灰	l	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	□18/36	焼成堅緻。I 類重ね焼き。天井部内底磨耗	H16D137
196	843	G-26-1	P4056	土師器	手づくね土器	5.6	2.4	2.5	淡橙	淡橙	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ナデ	ナデ	□24/36		H16D111



第44表 G地区 第IV面出土土器類観察表3

※ ( ) は残存量を示す。

探図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
208	933	F-26-1	包含層	非クロロ土師器か	無台境	-	7.0	(2.3)	黒	褐～橙	キ	並	ミガキ	ナデ、ケズリ	底15/36	内面黒色処理、外面赤彩、外底静止糸切り	H17D388
208	934	G-21-3	包含層	非クロロ土師器	無台境	11.1	-	(2.4)	明橙	明橙	キ	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ケズリ	口6/36	内外面赤彩	H16D194
208	935	F-20-4	包含層	非クロロ土師器	高坏	-	10.0	(4.4)	橙	黄橙	キ	良	ミガキ	ハケ、ミガキ	底6/36	内外面赤彩。内面黒斑	H16D185
208	936	E-22-2	包含層	クロロ土師器	有台境	-	9.5	(3.6)	橙	橙	ケ	並	クロロナデ、ミガキ	クロロナデ、回転糸切り	底28/36	破片化後二次被熱(内・外面煤付着)	H17D534
208	937	E-22-2	包含層	クロロ土師器	有台境	-	7.8	(1.9)	黒	洗褐灰	ケ	並	クロロナデ	クロロナデ、回転糸切り	底33/36	内・外面煤付着(二次被熱)	H17D553
208	938	E-25-3、 E-26-2	包含層	クロロ土師器	有台境	-	7.8	(2.2)	暗灰	灰黄褐	ケ	良	クロロナデ	クロロナデ、回転糸切り	底28/36	内面炭化物・外面煤付着(灯明容器に転用か)	H17D541
208	939	E-22-4	包含層	クロロ土師器	無台境	16.7	7.3	約7.3	洗橙	洗橙	オ	良	クロロナデ、ミガキ	クロロナデ、ミガキ	口3/36	静止糸切り	H16D169
208	940	E-22-2	包含層	クロロ土師器	無台境	約15	7.2	6.5	洗黄橙	洗黄橙	ケ	並	クロロナデ	クロロナデ、回転糸切り	口2/36		H17D535
208	941	G-22	包含層(排水溝)	クロロ土師器	無台境	14.8	7.4	4.0	黒	黄橙	ク	良	クロロナデ、ミガキ	クロロナデ、ケズリ、回転糸切り	口6/36	内面黒色処理。外面煤斑著	H17D532
208	942	F-22-1	包含層	クロロ土師器	塊	13.0	-	(4.8)	黒	黄橙	ク	良	ミガキ	クロロナデ	口3/36	内面黒色処理	H17D558
208	943	F-21-1	包含層	クロロ土師器	塊	-	-	(2.3)	橙	橙	ク	良	クロロナデ	クロロナデ	小片	外側に墨書2文字、判読できず。860と同じ文字か	H16墨27
208	944	E-22-2	包含層(石集中地点)	クロロ土師器	有台皿	15.4	8.1	3.2	黄橙	黄橙	ク	良	クロロナデ	クロロナデ、回転へら切り	口2/36	磨減目立つ	H16D167
208	945	F-26-4	包含層	クロロ土師器	無台皿	10.4	5.0	1.6	橙	橙	キ	良	クロロナデ、ナデ	クロロナデ、ナデ	口3/36	内外面赤彩。蓋の可能性あり	H17D606
208	946	F-20-1	包含層	クロロ土師器	小塊	8.1	4.8	3.6	黒	洗黄橙	ケ	良	クロロナデ、ミガキ	クロロナデ、ケズリ	口18/36	回転糸切り。体部上半に煤付着	H16D123
208	947	F-25-2、 F-26-3	包含層	クロロ土師器	坏類	-	9.0	(1.2)	黒	黒	細砂少、海綿骨針少、粘性弱	良	クロロナデ、ミガキ	クロロナデ、ミガキ	底6/36	両面黒色処理	H16D208
208	948	F-26-3	包含層	非クロロ土師器	無台境	約11	-	(6.2)	黄橙	橙	ク	良	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ハケ、ミガキ	口3/36	外面黒斑あり。摩滅著	H16D203
208	949	F-23-3	包含層	クロロ土師器	鉢	約28	-	(5.3)	黒	黄橙	ク	良	クロロナデ、ミガキ	クロロナデ	口3/36	内面黒色処理。傾きに不安残す	H16D219
208	950	F-26-4	包含層	クロロ土師器	鉢類	12.4	-	(5.2)	黄橙	淡橙	ケ	並	クロロナデ	クロロナデ	口3/36	内面ヨゴレ付着	H16D199
208	951	F-26-2	包含層	非クロロ土師器	短頸壺か	約10	-	(3.1)	橙	橙	細砂・雲母多	並	ナデ	ナデ、ハケ	口小片	円孔1ヶ所(径0.6cm)	H17D52
208	952	F-22、 F-22-2	包含層	クロロ土師器	短頸壺	10.5	-	(2.9)	橙	赤褐	ウ	良	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	口3/36	外面へ口縁部内面赤彩	H17D539
208	953	F-26、 F-25・26	包含層	クロロ土師器	蓋類	-	10.8	(9.6)	橙	橙	キ(砂粒少)	良	クロロナデ、ナデ	クロロナデ、ミガキ、回転ケズリ	口2/12	内外面赤彩	H17D2220
209	954	F-25-2	包含層	非クロロ土師器	壺	21.2	-	(8.9)	灰黄褐	灰黄褐	オ	良	ハケ	ヨコナデ、ハケ	口9/36	内面ヨゴレ・コグ、外面煤付着	H16D222
209	955	F-26-2	包含層	クロロ土師器	壺	23.1	-	(13.6)	洗黄橙	洗黄橙	オ	良	クロロナデ、カキメ、同心円タタキ	クロロナデ、カキメ、平行タタキ	口3/36	外面H類。摩滅目立つ	H16D298
209	956	E-26-3・4、 F-26-3	包含層、排水溝	クロロ土師器	壺	23.1	-	(16.9)	橙	橙	オ	良	クロロナデ、同心円タタキ	クロロナデ、平行タタキ	口2/12	同心円b類	H17D2222
209	957	E-22-2	包含層(石集中地点)	クロロ土師器	壺	約22	-	(26.2)	黄橙	黄橙	ケ	良	クロロナデ	クロロナデ、平行タタキ	口3/36	内外面煤付着。摩滅著	H16D174
209	958	G-22-3	包含層	クロロ土師器	壺	21.0	-	(7.2)	洗黄	黄橙	オ	並	クロロナデ、カキメ	クロロナデ	口5/36	外面煤・炭化物付着	H17D54
209	959	E-22-2	包含層	クロロ土師器	壺	21.1	-	(9.4)	洗黄橙	黄橙	ケ	良	クロロナデ	クロロナデ	口9/36		H17D536
209	960	E-22-2、 F-22	包含層	クロロ土師器	壺	20.0	-	(5.5)	橙	橙	ケ	並	クロロナデ	クロロナデ	口6/36	外面煤付着	H17D556
209	961	E-22-2	包含層(石集中地点)	クロロ土師器	壺	約20	-	(27.0)	黄橙	黄橙	ケ	良	クロロナデ、扇形文タタキ	クロロナデ、平行タタキ	口6/36	内外面ヨゴレ付着	H16D2224
209	962	F-26-3	包含層	非クロロ土師器	壺	15.0	-	(5.7)	洗黄	洗黄	ア	並	ナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36		H17D55
209	963	G-21-1	包含層	クロロ土師器	壺	-	10.4	(1.5)	洗黄	灰黄褐	オ	良	クロロナデ、ナデ	手持ちケズリ	底3/36	外底静止糸切り	H16D195
210	964	E-23-2	包含層	クロロ土師器	壺	-	8.4	(9.2)	褐	褐灰	ウ	良	クロロナデ	クロロナデ	-	外面煤付着。底部摩滅著	H17D560
210	965	G-23-1、 G-26-1	包含層(皿面石集中付近)	クロロ土師器	壺	13.0	6.2	13.0	橙	暗褐	ケ	並	クロロナデ	クロロナデ	口6/36	口縁～外面煤付着	H17D585
210	966	F-22-1	包含層	クロロ土師器	壺	11.8	-	(8.9)	褐灰	褐灰	オ	良	クロロナデ	クロロナデ、ケズリ	口3/36	内面ヨゴレ・コグ、外面煤付着	H17D537
210	967	F-20-1	包含層	クロロ土師器	壺	10.1	-	(6.6)	黄橙	黄橙	ケ	良	クロロナデ、カキメ	クロロナデ、カキメ	口3/36		H16D187
210	968	F-26-3	包含層	クロロ土師器	壺	38.0	-	(5.3)	黄橙	黄橙	ケ	並	クロロナデ、ケズリ	クロロナデ	口3/36	内面煤付着	H17D586
210	969	F-22・23	包含層	クロロ土師器	壺	約33	-	(6.6)	黄橙	黄橙	ケ	良	クロロナデ	クロロナデ	口15/36	外面煤付着	H16D223
210	970	F-20-1	包含層	クロロ土師器	壺	31.5	-	(7.5)	黄橙	黄橙	ケ	良	クロロナデ、カキメ	平行タタキ、クロロナデ、カキメ	口3/36	外面煤、口縁部内面ヨゴレ付着	H16D186
210	971	E-22-2・4、 F-22-3 F-23-1	包含層	クロロ土師器	壺	30.1	-	(6.7)	橙	橙	ウ	良	クロロナデ、カキメ	クロロナデ、カキメ	口5/36	外面煤付着	H17D540
210	972	E-26-2	包含層	クロロ土師器	壺	約30	-	(5.4)	灰黄褐	灰黄褐	オ	良	クロロナデ、カキメ	クロロナデ、カキメ	口1/36	外面煤付着	H17D542
210	973	F-22-3	包含層	クロロ土師器	壺	約30	-	(7.2)	灰黄褐	灰黄褐	オ	良	クロロナデ、カキメ	クロロナデ、カキメ	口2/36	内面コグ・外面煤付着	H17D557
211	974	F-26-3	包含層	非クロロ土師器	甌	-	-	(14.5)	灰黄褐	灰黄褐	ウ	並	ハケ	ナデ、ハケ	-	内面ヨゴレ・外面煤付着	H17D582
211	975	F-26-2・3	包含層	非クロロ土師器	不明土製品	(9.9)	(8.4)	-	橙～洗黄橙	洗黄橙	キ	良	ナデ	ナデ	-	箱形か。底部は孔となる。内面被熱炭色・煤付着	H17D387
211	976	F-25-4	包含層	非クロロ土師器	支脚か	長(7.3)	幅(6.3)	-	-	橙	硬・粗砂多、海綿骨針多	良	-	ナデ	-	外面被熱	H17D689
211	977	F-26-2	包含層	非クロロ土師器	置きカマド	-	厚1.5	(4.1)	橙	褐灰	硬・粗砂多、海綿骨針多	良	ナデ、ハケ	ナデ	小片	外面薄く煤付着	H17D67
211	978	F-21-2、 F-25-4	包含層	非クロロ土師器	置きカマド	-	厚2.5	(4.6)	黄橙～橙	黄橙～橙	硬・粗砂多、海綿骨針少	良	ナデ	ナデ、ハケ	-		H17D440
212	979	F-22	包含層	須恵器	坏H蓋	15.0	-	(3.1)	赤橙	赤橙	j	並	クロロナデ	クロロナデ	小片	重ね焼き不明	H17D390
212	980	F-22-4	包含層	須恵器	坏H身	14.8	-	(4.4)	淡灰	淡灰	g	良	クロロナデ	クロロナデ、回転ケズリ	2/36		H16D124
212	981	E-26-1・2	包含層	須恵器	坏蓋	12.8	返し径10.8	2.8	灰	黄灰	a	良	クロロナデ	クロロナデ、回転へら切り後回転ケズリ	4/36	鉛径3.0cm。外面降灰。重ね焼きI類	H17D563
212	982	F-20-1、 F-21	包含層	須恵器	坏蓋	12.6	返し径10.2	3.3	灰	灰	h	良	クロロナデ、ナデ	クロロナデ、回転へら切り後回転ケズリ	口15/36	鉛径2.0cm。重ね焼きI類。内外面褐色付着物、内面煤付着	H16D2
212	983	F-26-2	包含層	須恵器	坏蓋	12.0	返し径9.8	(2.1)	灰	灰	e	良	クロロナデ	クロロナデ、回転へら切り後回転ケズリ	口9/36	重ね焼きI類	H16D202
212	984	E-22-2・3	包含層(石集中地点)	須恵器	坏蓋	16.7	返し径3.1	2.6	青灰	青灰	f	良	クロロナデ	クロロナデ、回転へら切り後回転ケズリ	口9/36	内面にへら記号「//」。外面に敷物圧痕あり。重ね焼きIIb類	H16D189
212	985	F-26-4	包含層	須恵器	坏蓋	15.6	返し径3.6	2.4	青灰	青灰	e	良	クロロナデ、ナデ	クロロナデ、回転へら切り後回転ケズリ	口1/36	重ね焼きI類	H17D377
212	986	G-25-1	包含層	須恵器	坏蓋	15.6	返し径3.8	2.9	灰	暗灰	h	良	クロロナデ、ナデ	クロロナデ、回転へら切り後回転ケズリ	口2/36	重ね焼きI類。内面へら記号「×」	H16D192
212	987	G-26-1	包含層	須恵器	坏蓋	15.4	返し径3.8	2.5	灰	暗灰	f	良	クロロナデ、ナデ	クロロナデ、回転へら切り後回転ケズリ	-	重ね焼きI類。天井部内面摩耗	H16D253



第46表 G地区 第IV面出土土器類観察表5

※ ( ) は残存量を示す。

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
213	1041	F-25-3・4	包含層	須恵器	有台杯	11.6	6.8	4.6	灰	灰	h	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ1/36	外面に自然釉	H16D210
213	1042	F-21-2	包含層	須恵器	有台杯	11.3	7.0	4.1	暗灰	暗灰	f	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後回転ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後回転ナデ	ロ6/36	外面降灰。外底に墨書「十」	H16墨15
213	1043	F-22	包含層	須恵器	有台杯	11.1	7.6	4.3	灰	灰	n	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ6/36	外面黒化	H17D641
213	1044	G-26-1	包含層	須恵器	有台杯	11.8	8.2	5.4	淡黄灰	淡黄灰	f	不良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ2/36	磨減顕著	H17D591
213	1045	F-21-4	包含層	須恵器	有台杯	10.8	7.4	4.6	灰黄	黄褐	e	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ9/36	外面降灰	H16D177
213	1046	F-26-1	包含層	須恵器	無台埴	11.8	6.8	4.1	灰	灰	e	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ15/36	口縁部ゆがみあり。内面・口縁部磨耗	H16D212
213	1047	F-20-3	包含層	須恵器	無台埴	約12	約7	4.2	淡灰	淡灰	c	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ1/366		H17D384
213	1048	F-26-1・3	包含層	須恵器	無台埴	11.4	6.9	3.3	淡灰	淡灰	e	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ9/36	外面黒化。内底等に磨耗	H16D213
213	1049	F-26-1・2	包含層	須恵器	無台埴	11.5	5.0	3.2	灰白	灰白	g	やや不良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ5/36	外面黒化	H17D632
214	1050	F-26-2	包含層	須恵器	無台埴	11.1	7.3	3.3	灰～黄褐	灰～黄褐	d	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ3/36	口縁部重ね焼き痕。内底磨耗	H16D201
214	1051	G-25-3	包含層	須恵器	無台埴	10.4	7.0	3.8	灰～黄褐	灰～黄橙	l	並	ロクロナデ、ナデ ラ切り後回転ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後回転ナデ	ロ3/36	還元弱い	H16D191
214	1052	F-21-1	包含層	須恵器	無台杯	8.6	6.2	3.2	淡灰	灰	e	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ30/36	外面黒化	H17D650
214	1053	F-25-2・4	包含層	須恵器	無台杯	12.5	7.8	3.4	灰白	灰白	e	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ10/36	還元弱い	H17D645
214	1054	F-21-1	包含層	須恵器	無台杯	12.0	7.3	3.6	灰	灰	e	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後回転ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後回転ナデ	ロ4/36		H17D619
214	1055	F-26-3	包含層	須恵器	無台杯	12.3	8.4	3.4	暗灰	暗灰	e	並	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ3/36		H17D373
214	1056	E-23-2	包含層	須恵器	無台杯	12.9	8.8	3.2	淡灰	淡灰	a	並	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ3/36	内底磨耗	H17D565
214	1057	F-26-1	包含層	須恵器	無台杯	-	9.5	(1.5)	淡灰	淡灰	f	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	底18/36	外底に敷物圧痕、墨書「口(大カ)」	H16墨29
214	1058	F-22-1	包含層	須恵器	無台杯	12.6	10.4	3.7	淡黄灰	淡黄灰	b	良	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ3/36	外底に雑なへう記号4本。正位で二次被熱、煤付着	H17D621
214	1059	F-25-1	包含層	須恵器	無台杯	13.6	9.0	4.2	淡黄灰	淡黄灰	e	並	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ8/36	還元弱い	H17D638
214	1060	G-26-1	包含層	須恵器	無台杯	12.7	8.1	4.3	黄橙	淡黄	e	不良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ24/36	還元弱い。磨減顕著	H16D252
214	1061	F-23-1	包含層	須恵器	無台杯	13.8	10.7	3.2	淡灰	灰	f	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ3/36	外底にへう記号「//」。内外面に墨痕あり。内底磨耗	H16D216
214	1062	F-21-2	包含層	須恵器	無台杯	12.8	10.2	3.3	暗灰	暗灰	f	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ6/36	外底にへう記号。外面黒化	H16D180
214	1063	G-26-1	包含層	須恵器	無台杯	-	10.0	(2.8)	淡黄灰	淡黄灰	f	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	底15/36	外底に墨書「口(土カ)万呂」	H16墨33
214	1064	F-26-4	包含層	須恵器	無台杯	12.8	9.0	3.0	灰	灰	f	並	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ7/36	外底に敷物圧痕、へう記号「J」	H17D628
214	1065	F-22-3	包含層	須恵器	無台杯	13.0	9.4	3.1	オリーブ灰	オリーブ灰	f	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ3/36	口縁部重ね焼き痕・黒化。内底磨耗	H16D188
214	1066	F-21-2	包含層	須恵器	無台杯	12.3	9.3	3.1	灰	灰	e	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ9/36	外面重ね焼き痕・黒化	H16D179
214	1067	F-22-1	包含層	須恵器	無台杯	12.2	9.2	3.4	淡灰	淡灰	f	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ10/36		H17D380
214	1068	F-26-3	包含層	須恵器	無台杯	12.1	9.7	3.3	淡灰	淡灰	h	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ9/36	外底にかすかに墨痕	H16D207
214	1069	F-21-4	包含層	須恵器	無台杯	12.0	9.2	2.7	オリーブ灰	オリーブ灰	f	並	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ16/36	外底に墨書、判読できず	H17墨47
214	1070	F-21-4	包含層	須恵器	無台杯	11.2	9.0	3.0	黄褐	黄褐	d	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	底18/36	口縁部黒化。内底磨耗	H16D176
214	1071	F-25-4	包含層	須恵器	無台杯	11.8	9.0	3.8	灰	灰	f	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ8/36	外底にへう記号「J」。口縁部黒化	H17D648
214	1072	G-26-3	包含層	須恵器	無台杯	12.0	8.4	2.5	灰	灰	f	並	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ4/36		H17D689
214	1073	F-22-1	包含層	須恵器	無台杯	-	8.0	(2.1)	淡灰	淡灰	e	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	底33/36	外底に墨書「東」	H16墨18
214	1074	F-22-1	包含層	須恵器	無台杯	-	7.4	(1.4)	淡黄灰	淡灰黄	m	やや不良	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	底11/36	外底に墨書「口(福カ)」	H17墨54
214	1075	G-22-1	包含層	須恵器	無台杯	-	8.0	(1.1)	淡灰	淡灰	m	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	底9/36	外底に墨書、判読できず	H17墨52
214	1076	F-21-1	包含層	須恵器	無台杯	-	7.8	(0.9)	灰	灰	e	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	-	外底に墨書、判読できず	H16墨17
214	1077	F-26-3	包含層	須恵器	無台杯	-	-	(0.6)	灰	灰	n	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	-	外底に墨書、「今」または「令」	H16墨24
214	1078	F-21-1	包含層	須恵器	無台杯	-	-	(0.7)	淡橙	淡橙	m	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	-	還元弱い。外底に墨書「口田」	H16墨28
215	1079	F-22	包含層	須恵器	無台杯	12.8	7.9	3.1	淡黄灰	淡灰黄	e	やや不良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ3/36	外底磨耗	H17D627
215	1080	E-22-2	包含層(石集中地点)	須恵器	無台杯	-	7.1	(3.8)	淡黄灰	淡灰黄	n	不良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	-	生焼け	H16D166
215	1081	F-25-2、G-28-1	包含層	須恵器	無台杯	約14	9.2	3.4	淡黄灰	黄橙	m	並	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ5/36	外面煤付着(煮沸容器に転用)	H17D454
215	1082	G-26-1	包含層	須恵器	無台杯	13.6	8.0	3.0	淡黄灰	淡黄灰	m	やや良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ12/36	外底に墨書「口口(主カ)」	H16墨32
215	1083	F-22-4	包含層	須恵器	無台杯	-	7.8	(1.1)	淡黄灰	淡黄灰	m	やや良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	底21/36	外底に墨書「酒田」。磨減顕著	H16墨30
215	1084	G-26-1	包含層	須恵器	無台杯	14.8	8.3	3.1	灰白	灰白	e	不良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ3/12	磨減顕著	H17D138
215	1085	E-22-2	包含層(石集中地点)	須恵器	無台杯	14.2	7.2	3.7	橙	褐灰	n	不良	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ11/36	外底煤付着	H17D385
215	1086	E-22-2	包含層	須恵器	無台杯	14.4	8.6	3.2	灰	灰	m	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ18/36	外底に墨書「得」	H16墨10
215	1087	E-22-2	包含層	須恵器	無台杯	-	7.0	(1.2)	灰	灰	h	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	底9/36	外底に墨書、判読できず	H16墨21
215	1088	G-26-1	包含層(III面列石付近)	須恵器	無台埴	13.5	10.6	2.6	淡灰	淡灰	e	並	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ19/36	内底・外底縁部磨耗	H17D566
215	1089	F-22	包含層	須恵器	無台埴	-	13.4	(1.0)	灰褐	灰褐	m	良	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	底6/36	外底に墨書「口田」	H16墨19
215	1090	F-23-2	包含層	須恵器	埴類	8.4	-	(2.6)	灰	灰	e	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	ロ3/36		H16D218
215	1091	E-22-2	包含層	須恵器	埴・鉢類	-	5.9	(2.5)	灰	淡灰	m	並	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後ナデ	台20/36	内底平滑・煤付着	H17D378
215	1092	F-25-3	包含層	須恵器	鉢類	-	-	(3.8)	淡灰	暗灰	c	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ ラ切り後ナデ	-	口縁部焼き歪みか。外面黒化	H17D644
215	1093	F-21-1	包含層(黒黒色土)	須恵器	円面碗	11.6	15.2	4.9	灰	青灰	f	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、回転へ ラ切り後回転ナデ	ロ10/36	外面に格子目状の線刻あり、透かし一ヶ所残。外面降灰。陸部平滑	H17D356
215	1094	F-22-1・3	包含層	須恵器	短頸壺	7.6	-	(13.8)	灰	灰	f	良	ロクロナデ ラ切り後ナデ	ロクロナデ、ナデ ラ切り後ナデ	ロ3/36	無蓋正位焼成。降灰顕著	H16D348

第5節 第IV面の遺構と遺物

第47表 G地区 第IV面出土器類観察表6

※ ( ) は残存法量を示す。

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
215	1095	F-26-4、 F-26-3・4	包含層	須恵器	壺	-	-	(9.6)	淡灰	暗灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ	-	無蓋正位焼成。内外面一部に自然釉着	H17D362
215	1096	F-21-2、 F-22-4	包含層	須恵器	壺類蓋	12.8	-	(3.3)	淡灰	灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口3/36	外面黒化	H16墨16
215	1097	F-26、 F-26-3	包含層	須恵器	台付長頸壺	-	-	(10.6)	灰	灰	a	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、カキメ	-	沈線3条・波状文・刺突文で加飾	H17D369
215	1098	F-25-1・2	包含層	須恵器	瓶	-	-	(9.6)	灰	暗灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、平行タタキ	-	外面地類。沈線4条・刺突文で加飾	H17D649
215	1099	F-20-1	包含層	須恵器	壺	-	8.2	(8.5)	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、平行タタキ後一部ケズリ	底10/36	外底ケズリ。外面地類	H17D616
215	1100	F-22・23-3、 G-25-1	包含層	須恵器	長頸瓶	11.1	-	(13.2)	淡灰	淡灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	口9/36	しぼり痕目立つ。外面降灰・自然釉着 (正位焼成)	H17D353
216	1101	F-21、 E-22-2	包含層	須恵器	長頸瓶	7.9	-	(15.0)	灰褐	灰褐	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/36	肩部以降灰	H16D251
216	1102	F-22・26、 G-22・23	包含層	須恵器	瓶	-	10.6	(8.5)	灰	灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ケズリ	底24/36	内外面降灰・自然釉 (正位焼成)	H17D386
216	1103	F-20-1・3、 F-22-3・4、 F-23-1・2	包含層	須恵器	壺	-	-	(31.8)	灰白	灰白	c	良	ヨコナデ、同心円タタキ	ヨコナデ、平行タタキ、カキメ	-	外面に自然釉。同心円8条、平行タタキ	H17D364
216	1104	F-21	包含層	製塩土器	尖底	14.1	-	(2.5)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多、赤色粒多	良	ナデ	ナデ	口6/36		H17D538
216	1105	F-21	包含層	製塩土器	-	約16	-	(4.6)	橙	淡橙	粗砂多、海綿骨針多	良	ナデ	ナデ	口3/36		H17D559
216	1106	G-25-1	包含層	製塩土器	尖底	-	-	(5.0)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針少	良	ナデ	ナデ	-	外面に黒斑	H16D193
216	1107	E-22-4	包含層	土師器	土埴	長4.8	径1.4	-	橙	橙	細砂少	良	ナデ	ナデ	完形	孔径0.5cm、重量10.6g。二次被熱・煤付着	H16D170
216	1108	F-21-1	包含層	土師器	土埴	長4.7	径1.6	-	橙	橙	細砂少	良	ナデ	ナデ	完形	孔径0.5~0.6cm、重量11.5g。二次被熱・煤付着	H16D183
216	1109	F-26-3	包含層	土師器	土埴	(8.1)	径3.7	-	淡黄	淡黄	粗砂多、礫非常に多	良	ナデ	ナデ	-	孔径1.0~1.2cm、残存重量126.2g	H16D205
216	1110	D地区IV面 1-16-1	包含層	須恵器	有台杯	-	5.7	(1.7)	灰白	灰白	c	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	-	外底に墨書「大町」	H29D001

第48表 G地区 第IV面出土石製品観察表

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	残存重量 (g)	備考	実測番号
216	1110	F-26-1	包含層	砥石	凝灰岩	(8.5)	4.8	4.2	151.2	淡黄橙色。四側面を鎌等の中砥に使用。両端に切れ目を入れ折る	H16石-1

第49表 G地区 第IV面出土金属製品観察表

※ ( ) は残存法量を示す。

挿入番号	番号	実測番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	残存重量 (g)	備考
207	923	H16金5-1	E-23-2	SX4002	桃形滓	-	(6.2)	(5.8)	(3.0)	(94.8)	
216	1111	H16金5-2	F-20-3	包含層	桃形滓	-	12.4	10.5	2.7	(594.8)	
216	1112	H16金5-3	F-21-2	包含層	桃形滓	-	(6.3)	(4.5)	2.4	(85.3)	
216	1113	H16金5-4	F-23-2	包含層 (下層)	鉄製品	直刀	(24.7)	3.2	0.8	(112.9)	

第50表 G地区 第IV面出土木製品観察表

※ ( ) は残存量を示す。

挿図 番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種同定 (H28古環境)	備考	実測番号
196	844	G-22-3	SA405 (P4067)	柱根	(17.1)	18.1	14.4	クリ	丸柱・芯持ち丸木。底部に粗い加工痕。底面に砂圧茶 区	H16木-15
196	855	E-22-2	P4205	柱根	(22.9)	7.7	6.0	クリ	丸柱・芯持ち丸木。腐蝕顕著	H16木-16
196	858	E-22-2	P4223	柱根	(33.1)	9.6	9.6	クリ	芯持ち材	H16木-17
198	861	G-22-1	SE4001東-1	側板	102.1	(15.3)	1.7	-	板目。腐食あり	H16特2-3
198	862	G-22-1	SE4001東-2	側板	102.7	20.0	2.1	-	板目	H16特2-5
198	863	G-22-1	SE4001東-3	側板	99.0	25.2	3.3	-	板目	H16特3-4
198	864	G-22-1	SE4001東-4	側板	96.6	21.0	3.0	-	板目	H16特3-5
198	865	G-22-1	SE4001西-1	側板	(19.9)	11.0	3.1	スギ	板目	H16木-34
198	866	G-22-1	SE4001西-2	側板	101.0	19.4	2.5	-	板目	H16特3-3
198	867	G-22-1	SE4001西-3	側板	102.0	20.6	3.2	-	板目	H16特3-8
199	868	G-22-1	SE4001西-4	側板	98.3	18.6	3.7	-	板目。一部コゲ痕	H16特3-2
199	870	G-22-1	SE4001南-1	側板	118.0	19.0	3.1	-	板目。腐食あり	H16特3-1
199	871	G-22-1	SE4001南-2	側板	107.4	21.1	2.8	-	板目	H16特3-6
199	872	G-22-1	SE4001南-3	側板	98.5	23.8	3.8	-	板目	H16特3-9
199	869	G-22-1	SE4001南-4	側板	74.0	14.8	3.8	-	板目。一端の切断粗い	H16特2-1
199	873	G-22-1	SE4001北-1	側板	(92.9)	20.1	3.1	-	板目	H16特2-4
200	874	G-22-1	SE4001北-2	側板	106.1	22.1	4.4	-	板目	H16特3-7
200	875	G-22-1	SE4001北-3	側板	100.0	22.4	2.6	-	板目	H16特3-10
200	876	G-22-1	SE4001北-4	側板	73.0	9.7	3.0	-	板目	H16特2-6
200	877	G-22-1	SE4001杭1(北東隅側杭)	杭	37.0	8.7	1.4	-	角材(芯去り)。断面方形	H16木-33
200	878	G-22-1	SE4001杭2(北西隅側杭)	杭	50.8	2.8	2.1	-	角材(芯去り)。断面方形	H16木-38
200	879	G-22-1	SE4001杭3(南西隅側杭)	杭	52.5	3.4	1.7	-	角材(芯去り)。断面方形	H16木-37
200	880	G-22-1	SE4001杭4(南東隅側杭)	杭	52.4	5.3	2.8	スギ	角材(芯去り)。断面略方形。先端加工	H16木-39
201	889	G-22-1	SE4001井戸内 木材②	板材	69.8	21.3	4.3	-	板目。井戸側上部材か	H16特2-2
201	890	G-22-1	SE4001井戸内 木材③	円形曲物底板	(13.3)	(3.8)	0.6	-	板目。2孔1対の木釘穴2ヶ所(径約2mm)残存。刀子痕あり	H16木-6
201	891	G-22-1	SE4001井戸内 木材③	加工材	(8.7)	1.5	0.5	-	板目。圭頭状	H16木-21
201	892	G-22-1	SE4001第5層	加工材	(12.1)	1.8	0.7	スギ	板目	H16木-41
201	893	G-22-1	SE4001第5層	斎串	13.0	1.7	0.3	スギ	板目	H16木-42
201	894	G-22-1	SE4001第5層	斎串	12.8	1.6	0.5	スギ	板目	H16木-43
201	895	G-22-1	SE4001第5層	斎串	13.2	1.9	0.5	スギ	板目	H16木-45
201	896	G-22-1	SE4001第5層	斎串	(12.6)	1.8	0.4	スギ	板目	H16木-44
201	897	G-22-1	SE4001第6層	横櫓	(3.3)	2.5	0.5	ツゲ	板目。歯30残存	H16木-46
201	898	G-22-1	SE4001第5層	加工材	(21.3)	4.2	-	ムラサキシキブ属	芯持ち。上端等を加工	H16木-47
201	899	G-22-1	SE4001第5層	鍬柄	(16.6)	1.5	-	クリ	芯持ち。茎孔径0.3cm。側面丁寧な加工。真金具痕あり	H16木-48
201	900	G-22-1	SE4001第5層	加工材	14.6	1.4	-	ムラサキシキブ属	芯持ち。上端・側面やや粗い加工	H16木-49

## 第6節 第V面の遺構と遺物 (第219～241図、第51～54表)

## 1 概要(第219～233図)

G地区第V面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。第IV面ベース土(第8図土層37～48層(洪水堆積土エ・以下、土石流災害4)を重機で除去した段階で検出した生活面である。遺構検出面(土石流災害4除去面)の標高は、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で13.73m(第IV面ベース面14.26mより-53cm)、G-23区杭脇で14.23m(同15.35mより-112cm)、南東端(G-26区杭南東3m)で14.14(同15.30mより-116cm)、北端(F-26区杭西8m)で13.46m(同14.50mより-104cm)、北東端(F-27区杭脇)で13.69m(同14.90mより-121cm)を測り、第IV面ベース土(土石流災害4)の厚さは調査区北側で1mを大きく超える。また、遺構検出面の標高は13.3～14.3mを示し、標高差はGライン(北東-南西方向)が約0.04m、26ライン(南東-北西方向)が約0.6mを測る。基本的に北西側に向けて傾斜する地形といえ、北東-南西方向の傾斜は第IV面に比して緩やかである。第Ⅲ・Ⅳ面にみられた急な傾斜地形は、第IV面ベース土(土石流災害4)の流入・堆積に起因するものといえる。

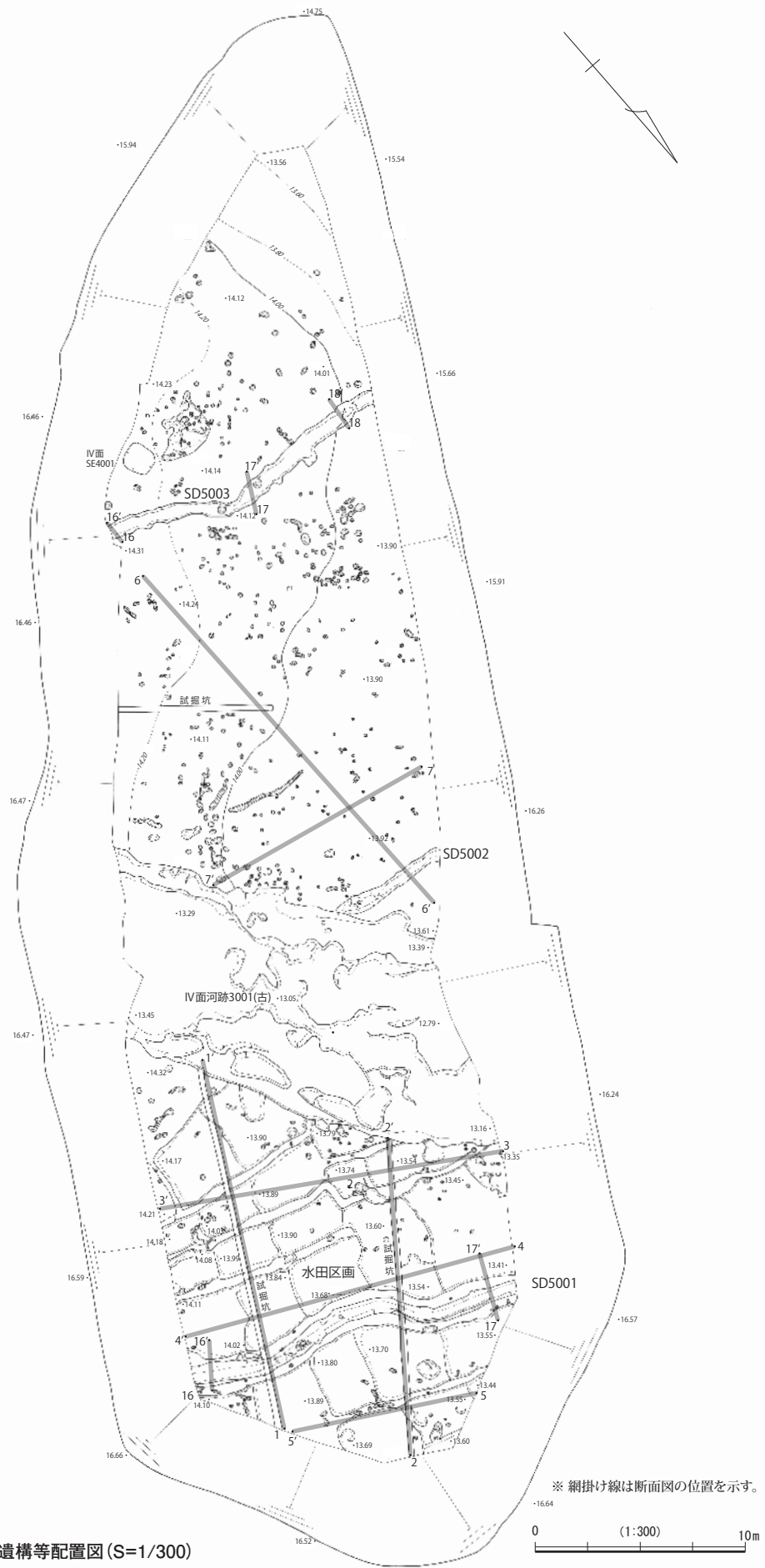
第V・Ⅵ面の基本的な土層層序(第231～233図)は、上層より順に第V面覆土(土石流災害4、淡乳灰色細砂～淡青灰色シルトまたは黄灰色砂利～砂)、第V面耕作土(土層a:暗褐色腐植土)、土層b(淡灰色粗砂、暗褐色腐植土等の交互堆積層)、古墳時代中期初め頃を下限とする第Ⅵ-1面遺物包含層(土層c:暗灰褐色砂質土)、第Ⅵ-1面ベース土(土層d等)、弥生時代中期後葉の第Ⅵ-2面遺物包含層(土層e:濁暗灰色細砂)、第Ⅵ-2面ベース土(灰オリーブ色細砂・砂質土)となる。各層の厚さは、土層断面3-3'を例にとれば、土層aが2～8cm、土層bが2～10cm、土層cが12～24cm、土層eが15～24cmを測る。

これらの堆積を子細にみれば、第IV面河跡3001(古)北側のE～G-25区付近、E～G-26区付近、第IV面河跡3001(古)南側の3つの様相に分かれる。まず、第IV面河跡3001(古)北側E～G-25区付近(第231図1-1'～第233図5-5')では、土層e(第Ⅵ-2面遺物包含層)から土層a(水田耕作土)まで間層をほぼ挟まず、安定的・連続的に順次堆積した状況を示す。次にE～G-26区付近では、土層cと土層bの間層に乳灰～青灰色細砂を主体とした土砂層(土層断面1-1'第9～12層、同2-2'第5～7層、同5-5'第4～9層)が認められる。これは、土層断面1-1'第11・12層、同2-2'第6・7層を本流とする南東方向から北西方向に向けた比較的小規模な土砂の流入・堆積痕跡(現地調査時はSD5004と呼称、写真図版99・100参照)であり、土層bも同期の堆積層と考えられる。3つ目の第IV面河跡3001(古)南側(第233図土層断面6-6'、7-7')では、土層c(第Ⅵ-1面遺物包含層)の直上に、第V面覆土(土石流災害4)が流入・堆積し、耕作土(土層a)が未形成である点や、E～G-26区付近に存在した土層bを含む小規模な土砂の流入・堆積痕跡が認められない点に特徴をもつ。以上のことから、第Ⅵ-1面・V面の展開は、第Ⅵ-1面集落域の廃絶→調査区北側斜面(E～G-25区付近中心)での小規模な土砂の流入・堆積→第V面(耕作域)の造成・放棄→土石流災害4の発生が想定でき、さらに間層のあり方から、第Ⅵ-1面集落域～第V面の耕作放棄までは比較的短期間のうちに推移したものと考えられる。

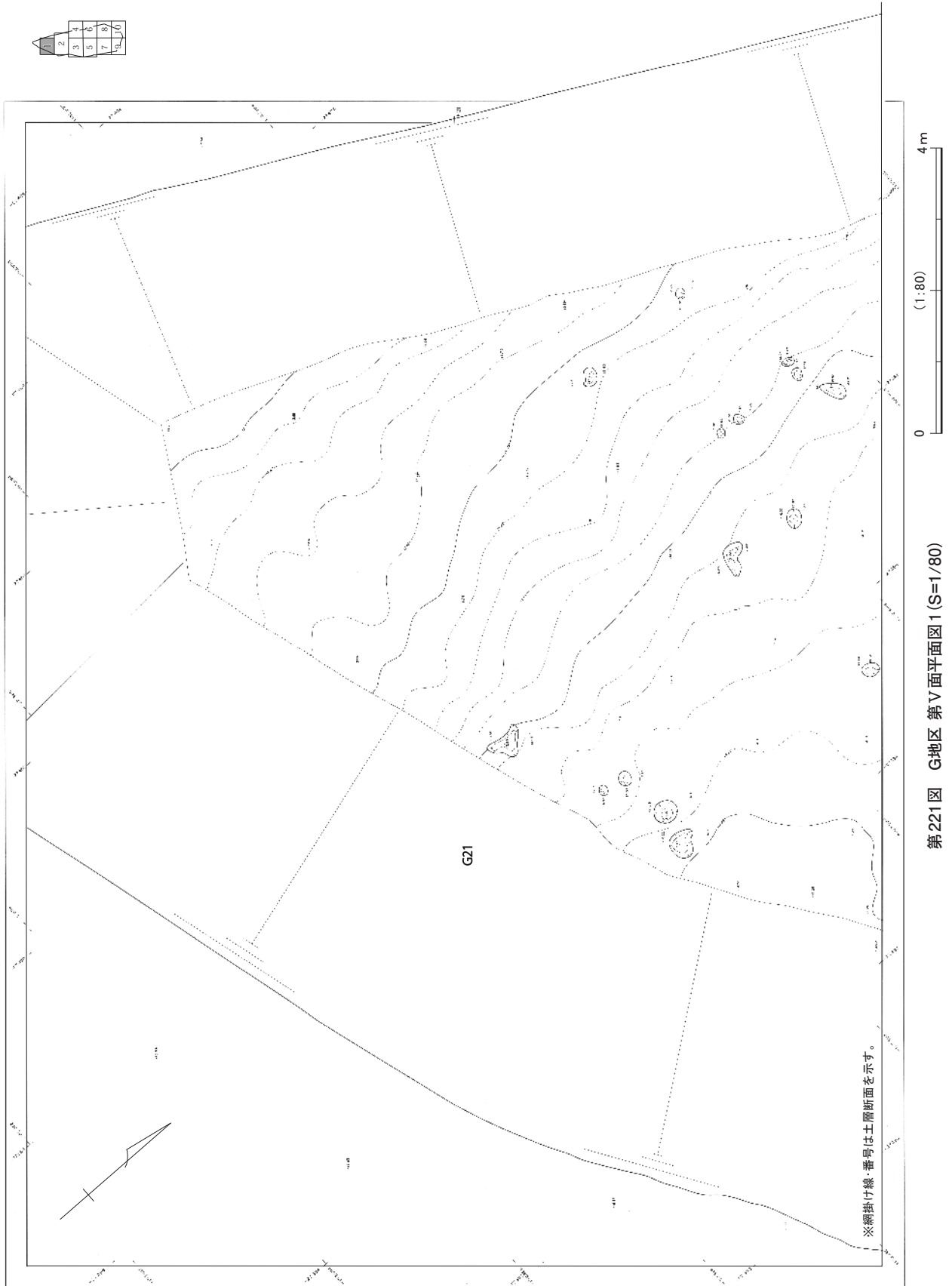
調査の結果、第IV面河跡3001(古)北側で、第7次調査を踏まえると、古墳時代中期末頃と推定できる水田区画1ヶ所(小区画水田27枚、その間を流れる溝1条)を、第IV面河跡3001(古)南側で溝2条を検出し、調査区全面で水田耕作を意図したものと考えられる。遺物は、遺構の性格もあり、少量の弥生土器、土師器、木製品、石器が出土したにとどまる。なお、本遺跡の一連の調査の中では、同規模の小区画水田を、第4次調査D・F地区第V面、第7次調査K地区第V面で検出している。

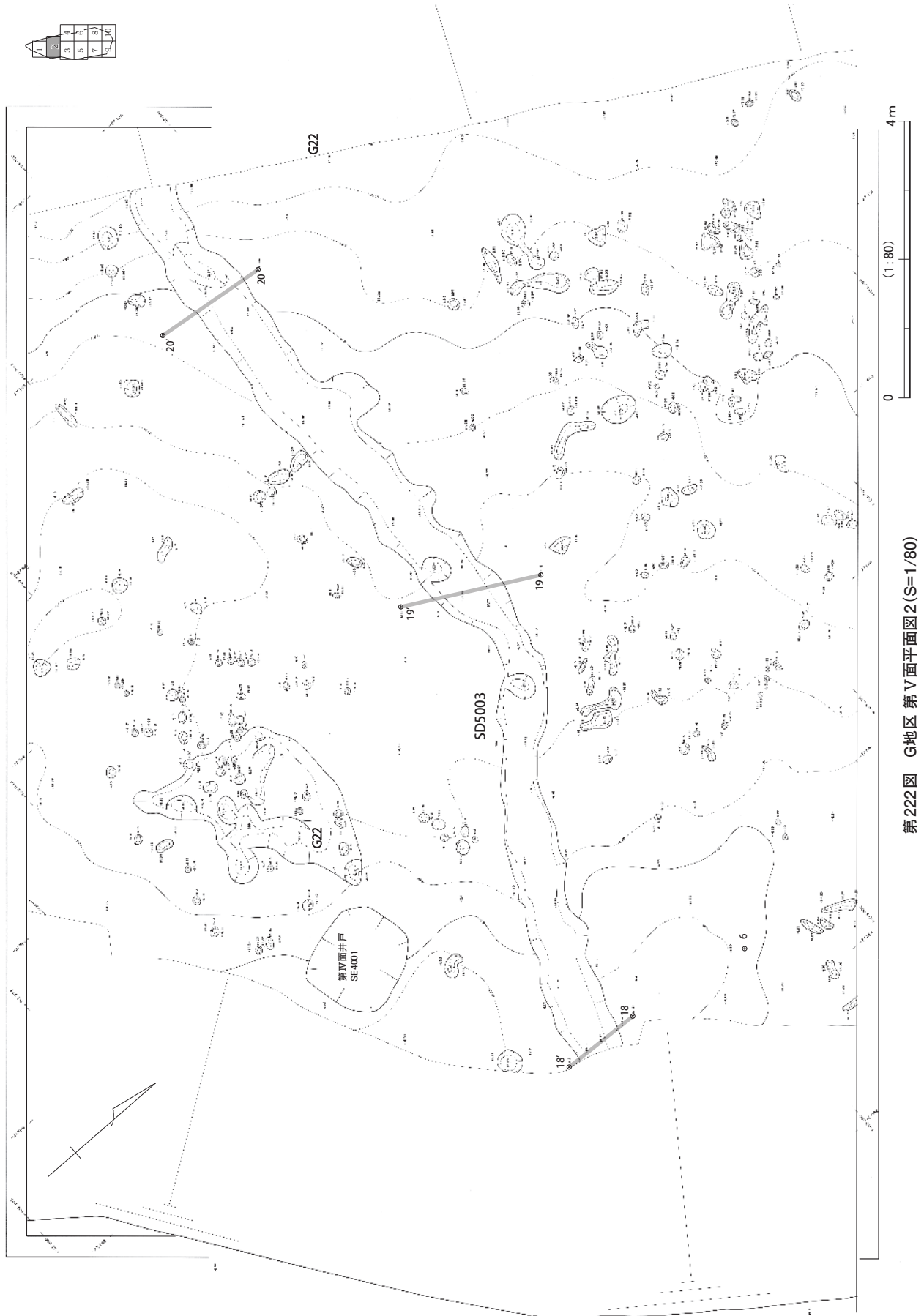




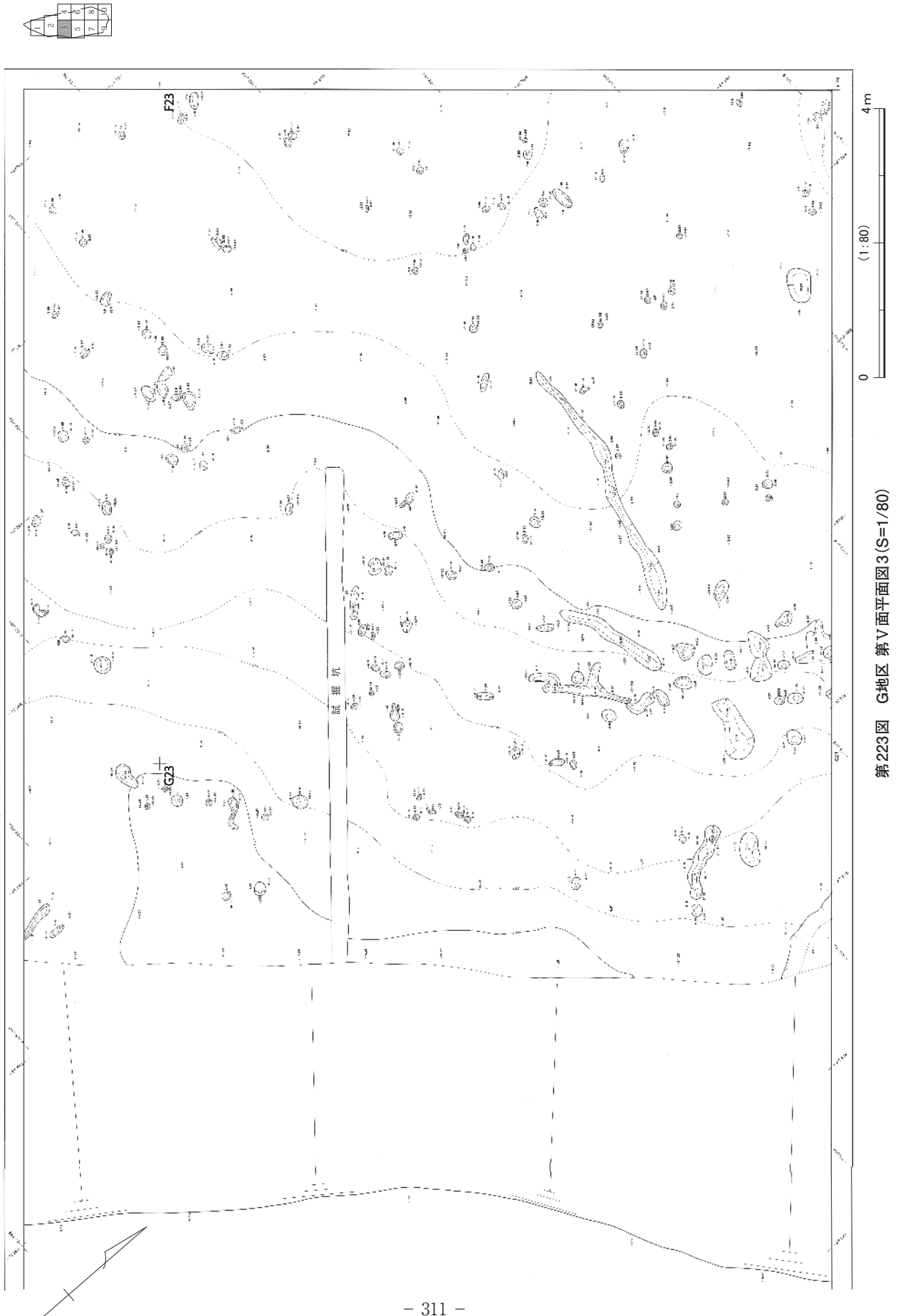


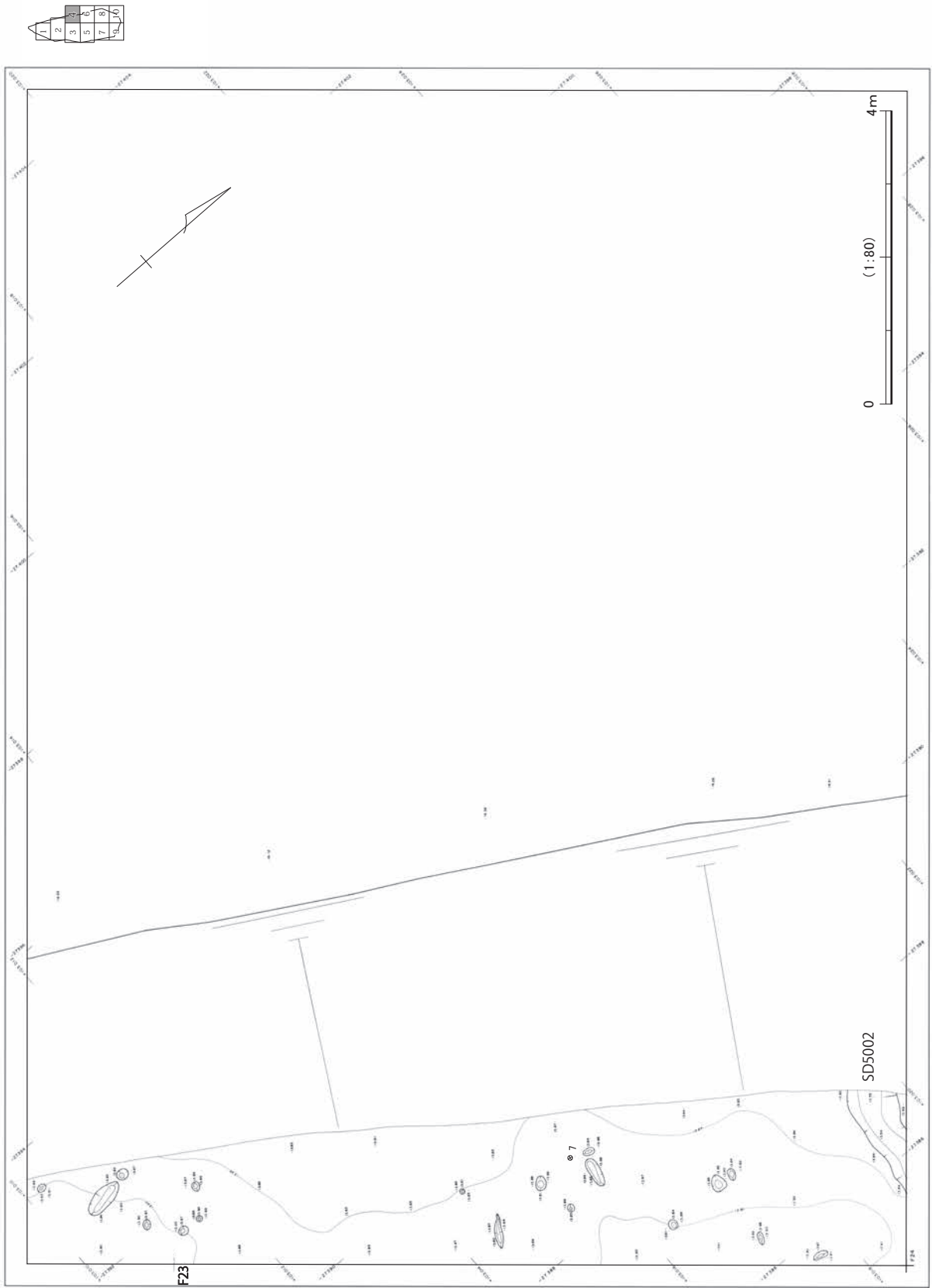
第220図 G地区 第V面遺構等配置図(S=1/300)



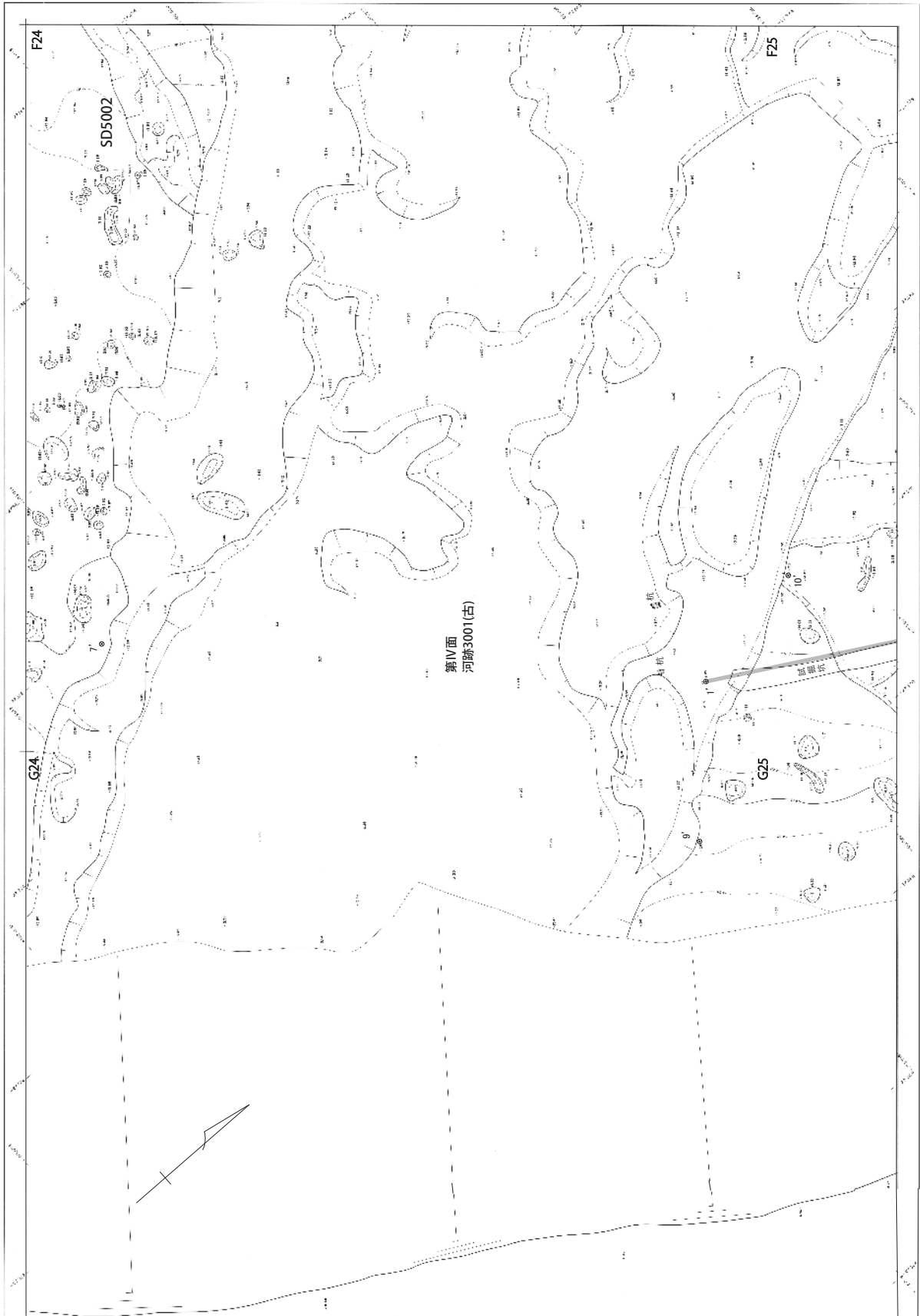


第222図 G地区 第V面平面図2(S=1/80)





第224図 G地区 第V面平面図4 (S=1/80)



第225図 G地区 第V面平面図5 (S=1/80)



第226図 G地区 第V面平面図6 (S=1/80)





第227図 G地区 第V面平面図7 (S=1/80)



第228図 G地区 第V面平面図8 (S=1/80)

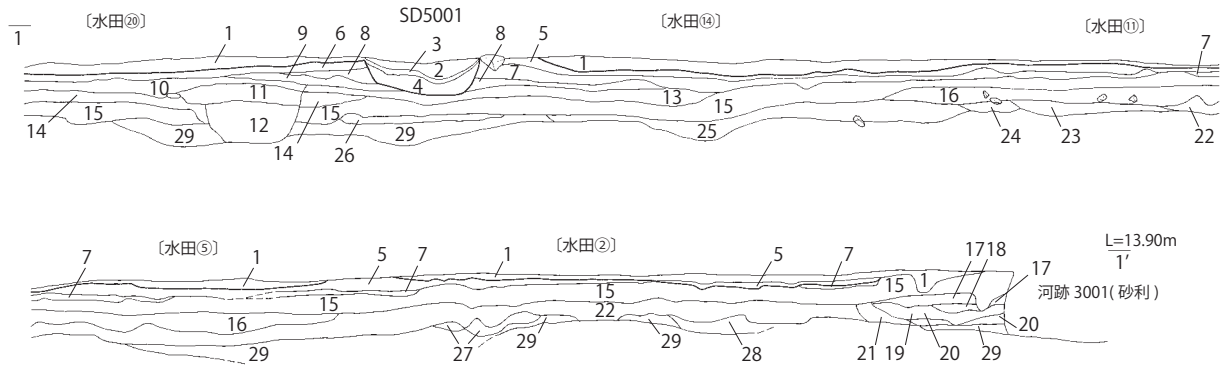


第229図 G地区 第V面平面図9(S=1/80)



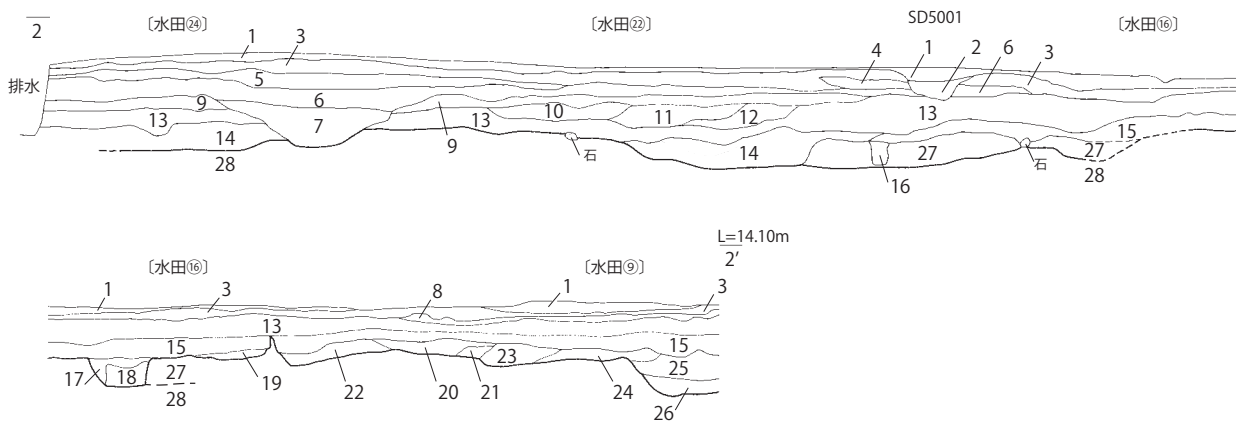
第230図 G地区 第V面平面図10 (S=1/80)

【第V・VI-1面南北土層断面1-1'】(第221図)

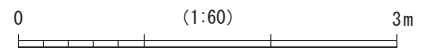


- |   |                             |
|---|-----------------------------|
| 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)                       | 16 暗灰色砂質土                   |
| 2 濁灰黄色粗砂(礫が混ざる。SD5001覆土)                            | 17 灰黄色粗砂(第VI-1面ベース土、土層 d)   |
| 3 暗褐色砂質土(しまりあり。SD5001覆土)                            | 18 暗灰色砂質土                   |
| 4 淡乳灰色粗砂(暗褐色砂質土が混ざる。SD5001覆土)                       | 19 6層と同質土                   |
| 5 暗褐色腐植土(第V面耕作土(土層 a)、柔らかくしまりなし)                    | 20 暗灰色砂質土                   |
| 6 暗灰色砂質土(18層と類似。暗灰褐色砂質土が粒状に混ざる)                     | 21 明褐色粗砂(小石が混ざる)            |
| 7 淡灰色粗砂、淡青灰色粗砂、暗褐色腐植土の交互堆積層<br>(水流で堆積、土層 b)         | 22 濁暗灰色細砂(第VI-2面遺物包含層、土層 e) |
| 8 7層と同質土(淡灰色粗砂が多く混ざる。土層 b)                          | 23 16層と同質土(礫が混ざる)           |
| 9 13層と同質土(淡乳灰色細砂が粒状に混ざる)                            | 24 22層と同質土                  |
| 10 濁淡乳灰色細砂と暗灰色細砂の混合土(木片等植物遺体が混ざる)                   | 25 23層と同質土                  |
| 11 濁乳灰色細砂(明黄灰色粗砂が混ざる)                               | 26 15層と29層の混合土              |
| 12 明乳灰色細砂と同粗砂の交互堆積層(間層に淡青灰色シルト)                     | 27 淡灰褐色細砂(暗灰色細砂が混ざる)        |
| 13 暗灰褐色腐植土(しまりない、植物遺体が多く混ざる)                        | 28 暗褐色砂質土                   |
| 14 15層と同質土(15層よりしまりない)                              | 29 灰オリーブ色細砂(第VI-2面ベース土)     |
| 15 暗灰褐色砂質土(しまりない。第VI-1面(弥生後期～古墳前期)の<br>遺物包含層)、土層 c) | ※24・25 SD5004 自然流路          |

【第V・VI-1面南北土層断面2-2'】(第221図)

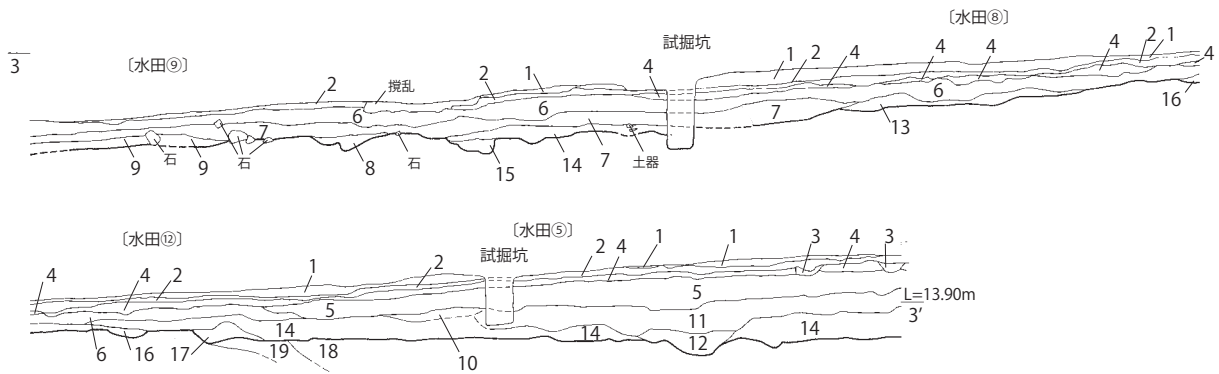


- |   |                             |
|---|-----------------------------|
| 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)                       | 15 濁暗灰色細砂(第VI-2面遺物包含層、土層 e) |
| 2 濁淡乳灰色粗砂(暗灰色砂質土が混ざる。SD5001覆土)                      | 16 27層と同質土(やや暗い)            |
| 3 暗褐色腐植土(第V面耕作土(土層 a)、柔らかくしまりなし)                    | 17 27層と同質土(暗灰色砂質土が混ざる)      |
| 4 濁灰黄色粗砂  | 18 17層と同質土(やや明るい)           |
| 5 濁淡乳灰色粗砂(暗褐色砂質土が混ざる)                               | 19 27層と同質土(暗灰褐色砂質土粒・礫が混ざる)  |
| 6 濁灰褐色細砂(明灰色細砂・黄土色砂質土粒、植物遺体が混ざる)                    | 20 22層と同質土(礫が少ない)           |
| 7 明乳灰色粗砂～細砂の交互堆積層(自然流路 SD5004 覆土)                   | 21 灰黄色粗砂                    |
| 8 淡灰色粗砂、淡青灰色粗砂、暗褐色腐植土の交互堆積層(土層 b)                   | 22 15層と同質土(礫が混ざる)           |
| 9 暗灰褐色砂質土(13層と同質土。より粒子が細かい)                         | 23 暗灰色砂質土(15層と同質土)          |
| 10 暗灰褐色砂質土(13層と同質土。粒子が粗く、白色粗砂が混ざる)                  | 24 明濁褐色細砂                   |
| 11 1層と同質土(若干粒子粗く、褐色帯びる)                             | 25 明濁褐色細砂                   |
| 12 暗灰褐色砂質土(13層と同質土。淡灰色細砂が粒状に混ざる)                    | 26 暗褐色細砂(25層より暗い)           |
| 13 暗灰褐色砂質土(しまりない。第VI-1面(弥生後期～古墳前期)の<br>遺物包含層)、土層 c) | 27 灰オリーブ色砂質土(第VI-2面ベース土)    |
| 14 灰オリーブ色砂質土(礫混ざる)                                  | 28 灰黄色砂利                    |



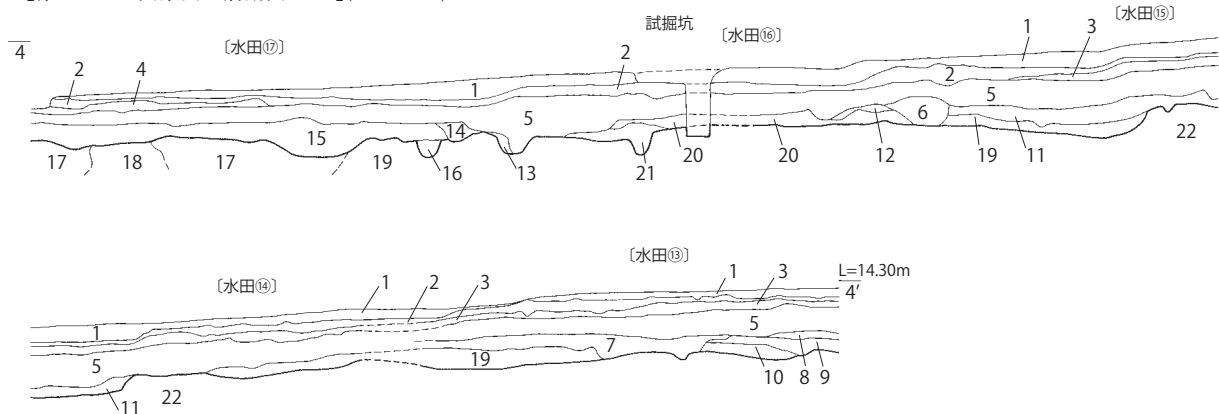
第231図 G地区 第V・VI面土層断面図1(S=1/60)

【第V・VI-1面東西土層断面 3-3'】(第221図)

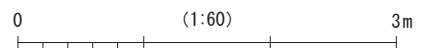


- |  |                                |
|--|--------------------------------|
| 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト (第V面覆土・洪水堆積土)                     | 10 暗灰褐色砂質土                     |
| 2 暗褐色腐植土 (第V面耕作土(土層 a)、柔らかくしまりなし)                  | 11 濁暗灰色粗砂(第VI-2面遺物包含層、土層 e)    |
| 3 4層に5層が混ざる(耕作土)                                   | 12 暗灰色細砂                       |
| 4 淡灰色粗砂、淡青灰色粗砂、暗褐色腐植土の交互堆積層<br>(水流で堆積、土層 b)        | 13 濁明灰褐色砂質土(粒子粗く、礫が混ざる)        |
| 5 暗灰褐色砂質土(しまりない。第VI-1面(弥生後期～古墳前期)<br>の遺物包含層)、土層 c) | 14 灰オリーブ色細砂(遺物が混ざる。第VI-2面ベース土) |
| 6 5層と同質土(植物遺体が混ざる。第VI-1面遺物包含層)                     | 15 14層と同質土(暗灰色細砂が混ざる)          |
| 7 5層と同質土(小石が混ざる。第VI-1面遺物包含層)                       | 16 17層と同質土(小石が混ざる)             |
| 8 濁灰オリーブ色細砂(小石が混ざる)                                | 17 濁灰褐色細砂                      |
| 9 暗灰褐色細砂(小石が混ざる)                                   | 18 淡灰色細砂                       |
|  | 19 17層と同質土(若干暗い)               |

【第V・VI-1面東西土層断面 4-4'】(第221図)

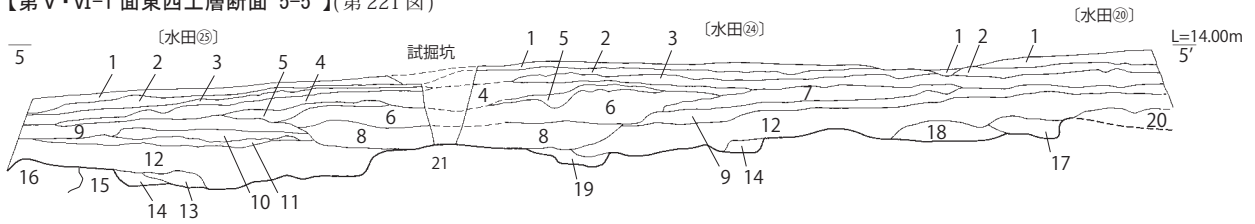


- |  |                                      |
|--|--------------------------------------|
| 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト (第V面覆土・洪水堆積土)                     | 12 5層と同質土(粒子が細かい。第VI-1面遺物包含層)        |
| 2 暗褐色腐植土 (第V面耕作土(土層 a)、柔らかくしまりなし)                  | 13 濁褐色細砂                             |
| 3 淡灰色粗砂、淡青灰色粗砂、暗褐色腐植土の交互堆積層<br>(水流で堆積、土層 b)        | 14 13層と同質土(石が混ざる)                    |
| 4 2層と5層の混合土(暗褐色腐植土に淡乳灰色細砂粒が混ざる)                    | 15 暗灰褐色砂質土(5層と同質土。粒子細かい。第VI-1面遺物包含層) |
| 5 暗灰褐色砂質土(しまりない。第VI-1面(弥生後期～古墳前期)の<br>遺物包含層)、土層 c) | 16 15層と19層の混合土                       |
| 6 濁褐色粗砂(南北方向の流路か)                                  | 17 濁褐色細砂(土器が混ざる。遺構)                  |
| 7 濁暗灰色細砂(第VI-2面遺物包含層、土層 e)                         | 18 濁灰オリーブ色細砂(炭粒が混ざる。第VI-2面ベース土か)     |
| 8 5層と9層の斬移層  | 19 淡灰オリーブ色細砂(しまりない。第VI-2面ベース土)       |
| 9 7層と同質土(7層より淡い)                                   | 20 19層と同質土(若干暗い。第VI-2面ベース土)          |
| 10 7層と同質土(灰緑色土が粒状に混ざる)                             | 21 濁暗灰オリーブ色細砂                        |
| 11 暗灰色細砂(小石が混ざる)                                   | 22 淡灰～灰黄色細砂～砂利                       |



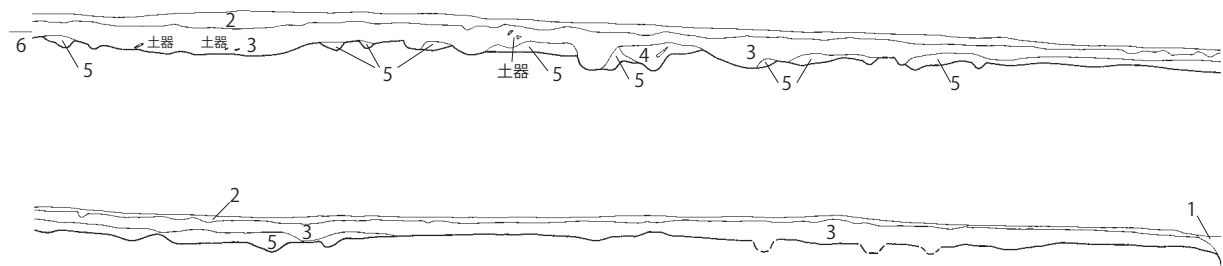
第232図 G地区 第V・VI面土層断面図2(S=1/60)

【第V・VI-1面東西土層断面 5-5'】(第221図)



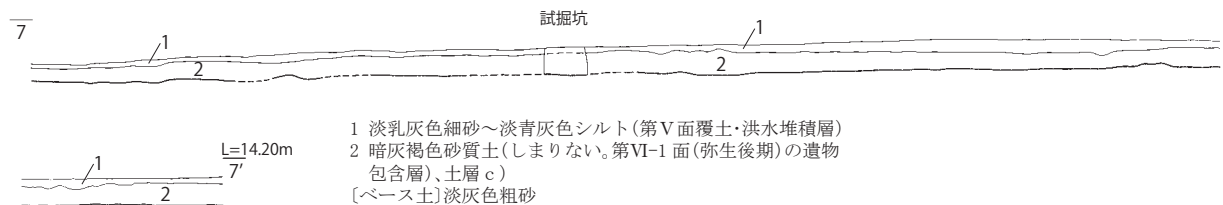
- |  |                                |
|--|--------------------------------|
| 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)                      | 11 灰黄色粗砂(第VI-1面ベース土、土層d)       |
| 2 暗褐色腐植土(第V面耕作土(土層a)、柔らかくしまりなし)                    | 12 濁暗灰色細砂(第VI-2面遺物包含層、土層e)     |
| 3 淡灰色粗砂、淡青灰色粗砂、暗褐色腐植土の交互堆積層<br>(水流で堆積、土層b)         | 13 灰オリーブ色砂質土(暗灰色砂質土がブロック状に混ざる) |
| 4 濁乳灰色細砂(暗灰褐色腐植土が粒状に混ざる)                           | 14 灰オリーブ色砂質土                   |
| 5 淡青灰色シルト(淡乳灰色細砂が混ざる)                              | 15 淡灰色砂質土(粗砂に近い。第VI-2面ベース土)    |
| 6 明乳灰色細砂(暗灰褐色シルト層が入る)                              | 16 にぶい浅褐色砂質土(第VI-2面遺物包含層)      |
| 7 濁青灰色細砂(暗褐色腐植土、植物遺体が混ざる)                          | 17 灰オリーブ色砂質土(小石が混ざる)           |
| 8 暗青灰色細砂と濁乳灰色粗砂の交互堆積層(植物遺体が混ざる)                    | 18 12層と同質土(若干明るい。小石、植物遺体混ざる)   |
| 9 暗灰褐色砂質土(木片等の植物遺体が多く混ざる)                          | 19 暗灰褐色砂質土                     |
| 10 暗灰褐色砂質土(しまりない。第VI-1面(弥生後期～古墳前期)<br>の遺物包含層)、土層c) | 20 明黄色砂利(第VI-2面ベース土)           |
|  | 21 淡灰色砂利(第VI-2面ベース土)           |

【第V・VI-1面土層断面 6-6'】(第221図)

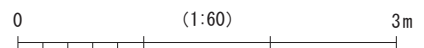


- |   |
|---|
| 1 明茶黄色粗砂  |
| 2 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)                     |
| 3 暗灰褐色砂質土(しまりない。第VI-1面(弥生後期～古墳前期)の<br>遺物包含層)、土層c) |
| 4 3層と同質土(褐色が強い)                                   |
| 5 3層とベース土の混合土                                     |

【第V・VI-1面土層断面 7-7'】(第221図)



- |   |
|---|
| 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積層)                               |
| 2 暗灰褐色砂質土(しまりない。第VI-1面(弥生後期)の遺物<br>包含層)、土層c)<br>[ベース土]淡灰色粗砂 |



第233図 G地区 第V・VI面土層断面図3(S=1/60)

## 2 水田区画(遺構：第225～237図、第51表、遺物：第238図)

E～G-25・26区で検出した耕作域で、小規模水田27枚(水田①～⑳)と、その間を貫流する溝(SD5001)で構成される(第234図)。水田区画は、東西方向約17m、南北方向約20mの規模でひろがり、さらに東・西・北側の水田は調査区外に延びる。水田耕作面の様相や土層断面の観察等から、造成後、比較的短期間で耕作が放棄され、耕作土や畦畔が雨水等でかなりの程度流出した後に、土石流災害4で被覆されたものと考えられる。なお、第234図で示した水田・畦畔の番号は、報告時に新たに付与している。

**水田①～㉑** 南東方向から北西方向及び南西方向から北東方向に下がる地形の傾斜を利用し、南北方向で6列以上、東西方向で5列以上の棚田景観をもつ小区画水田を一体的に造成する。水田の平面形は、縦長の略長方形を基本とし、水田②・③・㉑等は略台形を呈する。水田の規模は、第51表のとおり、最大の水田⑰が東西3.8m以上×南北約5.3m、面積20.3㎡以上を、最小の水田⑧が東西約1.8m×南北約1.7m、面積約3.1㎡を、規模が判明した11枚の平均で東西約3.05m×南北約2.64m、面積約8.1㎡をそれぞれ測り、下流側の水田規模がより大きい傾向を示す。また、各列で隣接する水田耕作面は10～25cmの高低差をもち、計画的に棚田を造成したと考えられる。水田耕作面の標高は、最も高い水田①が14.18m、最も低い水田⑱が13.23mと、標高差は1m弱となる。

また、各水田は、耕作土が未成熟であること、明確な耕作痕跡が欠落すること、耕作面が急勾配であることで共通する。耕作土(土層a)は、前述のとおり約10cm以下の厚さをもつ腐植土であり、雨水等による表土流出を考慮しても、同期に埋没したC・D地区第V面の耕作土・床土(厚さ20～40cmのシルト質土)に比して、耕作土として、かなり未成熟な土質といえる。さらに、通常、耕作面の起伏や土層断面の土層攪乱等で確認できる耕作痕跡が欠落する状況からも、短い耕作期間が想定できる。各水田耕作面の勾配については、第51表に各水田の耕作面の標高および高低差を示した。例えば水田②が高低差17cm(東西長337cm)、水田㉑が高低差20cm(同343cm)を測るとおり、第3節で記した第Ⅲ-1面の水田と比しても急勾配であり、恒常的に湛水状態を保持できない様相を呈する。耕作土がかなりの程度、雨水等で流出したと考えざるを得ない。

水田間に設けられた畦畔は、第234図で示した東西方向8列(畦A～H)の基底部が残存する一方、斜面と直交する南北方向の畦畔は完全に流出する。東西方向の畦畔は、上幅で14～74cm、耕作面からの高さは1～13cmを測り、比較的幅広の印象を受ける。水田間をつなぐ水口は確認できないものの、灌漑水是水田列ごとに上方の水田から下方の水田の流れ(例えば、水田⑩→⑪→⑫→⑯→⑰→⑱の順)や、SD5001に向けた横並びの水田に流れ(例えば、水田③→⑥→⑫→⑮→SD5001の順)を基本として、順次掛け落としと想定できる。1枚の水田内での灌漑水は、検出した耕作面の標高に依拠すれば、東方向から西方向、南方向から北方向の流れを基本とする。

遺物は、水田を被覆した土石流災害4から第238図1115～17が、水田耕作土(土層a)から同図1118～20が出土した。肉厚の土師器甕1115は口径22.5cmを測り、口縁部は短く外傾する。土師器高坏1116は口径14.1cmを測る。外面は摩滅のため判然としないが、内面に暗赤褐色を呈した赤彩が残る。高坏脚片1117は1116と同一個体と考えられ、外面に同色の赤彩を施す。ミカン割りの加工材1118～1120は、耕作土を保持する目的で据え置いたものと考えられる。いずれもマツ属複雑管束亜属の材を用いる。1115～17は、古墳時代前期後半～中期初めに位置付けられる。

**SD5001** E～G-26区で検出した溝で、水田間を屈曲しながら南東方向から北西方向に流下する。溝の規模は、上幅57～114cm、深さ17～24cm(溝底の標高14.01m→13.25m)を測り、流入・堆積した灰黄～灰茶色または淡灰灰色を呈する粗砂～シルトを覆土とする。堰施設や水田とつながる水口は確認





第234図 G地区 第V面水田区画平面図(S=1/100)

第51表 G地区 第V面水田区画規模等一覧表

水田

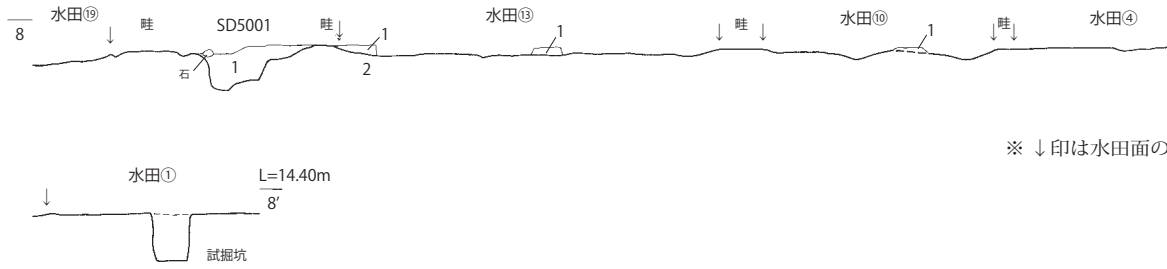
水田 番号	平面形	規模 (cm)		概算面積 (㎡)	水田面の標高 (m)					高低差	備 考
		東西	南北		南東隅	北東隅	南西隅	北西隅	中央		
①	(略台形分)	(58 ~)	(281)	(1.6 ~)	-	-	14.17	14.21	(14.18)	(0.04 ~)	調査区外に延びる
②	略台形	337	308	10.4	14.10	14.10	14.10	14.00	14.10	0.17	水田①との高低差 - 11cm以上
③	略方形	(292 ~)	391	(11.4 ~)	13.95	(14.00)	13.82	13.90	13.90	(0.19 ~)	河跡3001(古)で一部損壊。水田②との高低差 - 20cm
④	略長方形	(182 ~)	133	(2.4 ~)	(14.18)	(14.12)	14.12	14.09	14.14	(0.09 ~)	調査区外に延びる
⑤	略長方形	289	166	4.8	14.03	13.94	13.94	13.94	13.99	0.06	水田④との高低差 - 15cm
⑥	略台形	390	228	8.9	13.87	13.82	13.79	13.79	13.85	0.10	水田⑤との高低差 - 14cm
⑦	(略方形分)	(226 ~)	(140 ~)	(3.2 ~)	13.76	(13.68)	(13.66)	13.73	13.73	(0.10 ~)	河跡3001(古)で一部損壊。水田⑥との高低差 - 12cm
⑧	略台形	182	168	3.1	13.74	13.69	13.70	13.63	13.66	0.11	水田⑥との高低差 19cm
⑨	略長方形	(365 ~)	159	(5.8 ~)	13.58	(13.42)	(13.39)	13.49	13.49	(0.19 ~)	河跡3001(古)で一部損壊。東西方向は最長510cm。 水田⑧との高低差 - 17cm
⑩	略長方形	(222 ~)	169	(3.7 ~)	(14.11)	(14.12)	14.05	14.07	14.10	(0.07 ~)	調査区外に延びる
⑪	〃	284	198	5.6	13.99	13.93	13.92	13.92	13.97	0.07	水田⑩との高低差 - 13cm
⑫	〃	358	177	6.3	13.90	13.83	13.80	13.70	13.80	0.20	水田⑩との高低差 - 17cm
⑬	(略台形分)	(326 ~)	308	(10.0 ~)	(14.11)	(14.08)	14.04	14.02	14.08	(0.09 ~)	調査区外に延びる
⑭	略台形	243	309	7.5	13.93	13.89	13.84	13.79	13.83	0.14	水田⑬との標高差 - 25cm
⑮	略方形	328	253	8.3	13.76	13.71	13.65	13.65	13.69	0.11	水田⑬との標高差 - 14cm
⑯	不整長方形	325	445	14.5	13.63	13.53	13.53	13.50	13.58	0.13	水田⑮との標高差 - 11cm
⑰	不整長方形	(381)	534	(20.3 ~)	13.50	13.46	13.45	(13.41)	13.41	(0.09 ~)	調査区外に延びる。水田⑯との標高差 - 17cm
⑱	不明	(141 ~)	(229 ~)	(3.2 ~)	13.38	13.23	(13.23)	-	13.24	(0.15 ~)	〃。水田⑱との標高差 - 17cm
⑲	不明	(120 ~)	(92 ~)	(1.1 ~)	(14.10)	-	14.06	(14.00)	14.05	(0.10 ~)	調査区外に延びる。東西方向は最長257cm
⑳	(略台形分)	343	(312 ~)	(10.7 ~)	14.00	(13.90)	13.83	(13.70)	13.89	(0.30 ~)	〃。南北方向は最長464cm。 水田⑲との標高差 - 16cm
㉑	略台形	250	351	8.8	13.75	13.75	13.72	13.76	13.78	0.06	水田⑲との標高差 - 11cm
㉒	略台形	365	302	11.0	13.70	13.70	13.56	13.58	13.64	0.12	水田⑲との標高差 - 14cm
㉓	(略長方形分)	(260 ~)	233	(6.1 ~)	13.51	13.48	(13.45)	(13.49)	13.50	(0.06 ~)	調査区外に延びる。東西方向は最長370cm。 水田㉓との標高差 - 14cm
㉔	(不整長方形分)	356	(250 ~)	(8.9 ~)	13.72	(13.69)	13.75	(13.71)	13.73	(0.06 ~)	〃
㉕	略菱形	(322 ~)	202	(6.5 ~)	13.66	13.70	13.55	(13.60)	13.64	(0.15 ~)	〃。水田㉔との標高差 - 9cm
㉖	不明	(47 ~)	(52 ~)	-	13.44	-	-	-	(13.44)	-	〃。水田㉖との標高差 - 20cm以上
㉗	不明	(170 ~)	(68 ~)	(1.1 ~)	13.65	-	(13.59)	-	(13.60)	(0.06 ~)	〃。水田㉗との標高差 - 13cm以上

※規模は、各水田中央上場での計測値。( )は残存数値を示す。また、「水田面の標高」の項目における高低差は各水田内の標高差(各水田の傾斜具合)を、備考欄の高低差は上部の水田と中央での標高の差を、それぞれ示す。

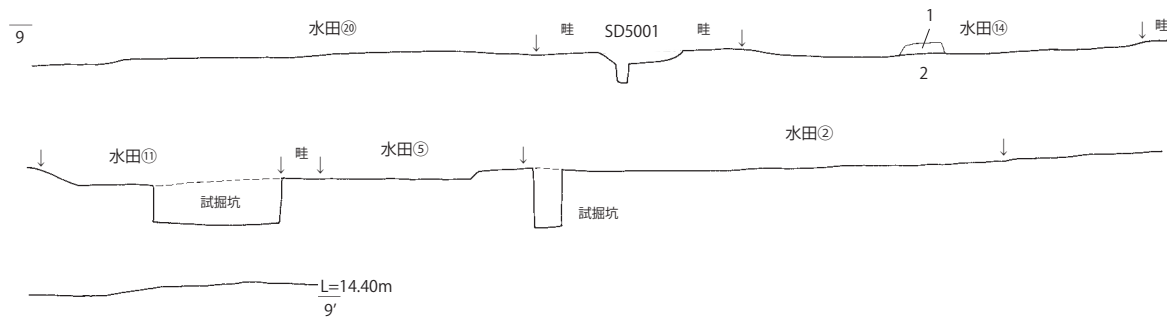
畦畔

番号	上幅 (cm)	高さ (cm)	番号	上幅 (cm)	高さ (cm)
A	31 ~ 53	1 ~ 5	E	26 ~ 65	2 ~ 6
B	25 ~ 43	5 ~ 9	F	16 ~ 70	4 ~ 13
C	14 ~ 51	1 ~ 7	G	25 ~ 57	2 ~ 7
D	24 ~ 74	1 ~ 3	H	24 ~ 42	1 ~ 5

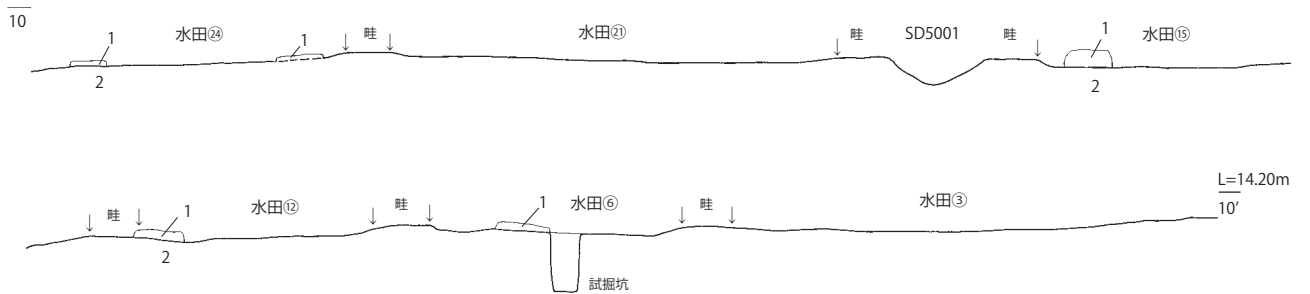
【水田区画 8-8'】



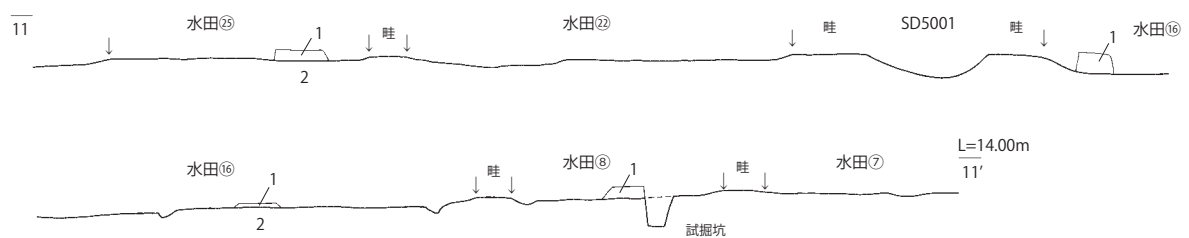
【水田区画 9-9'】



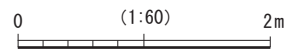
【水田区画 10-10'】



【水田区画 11-11'】

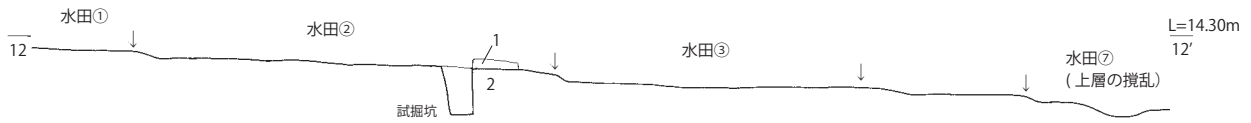


- 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)
- 2 暗褐色腐植土(第V面耕作土(土層 a)、柔らかくしまりなし)



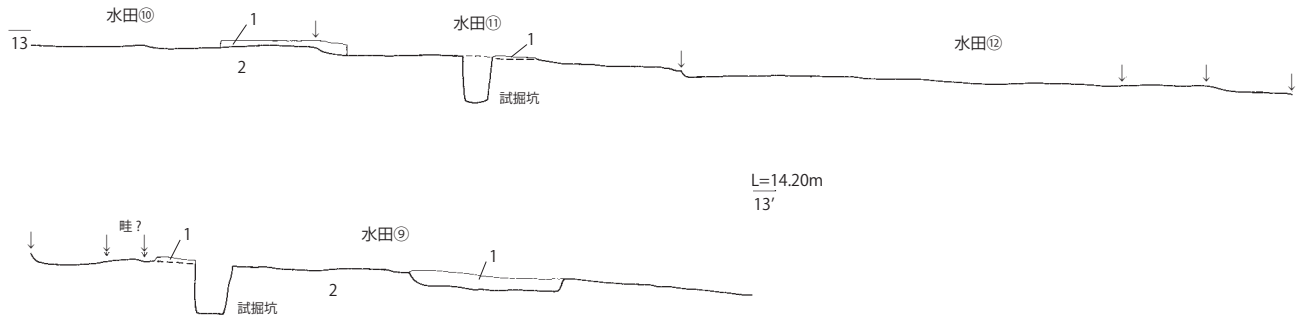
第235図 G地区 第V面水田区画断面図1(S=1/60)

【水田区画 12-12'】



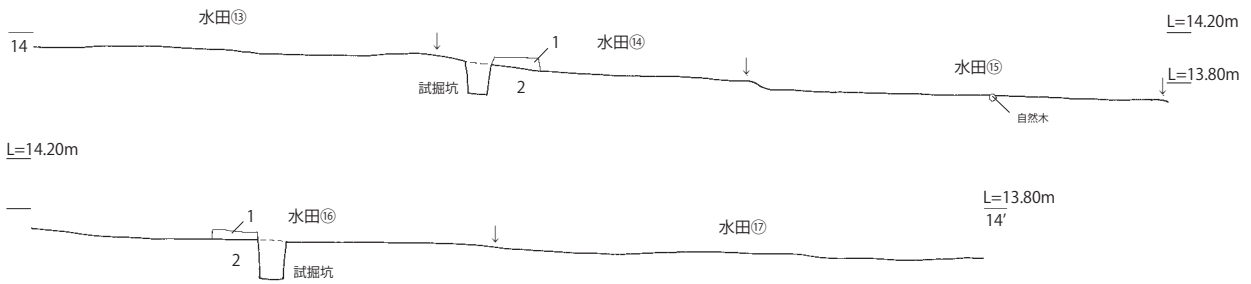
※ ↓印は水田面の段差を示す

【水田区画 13-13'】

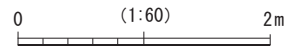
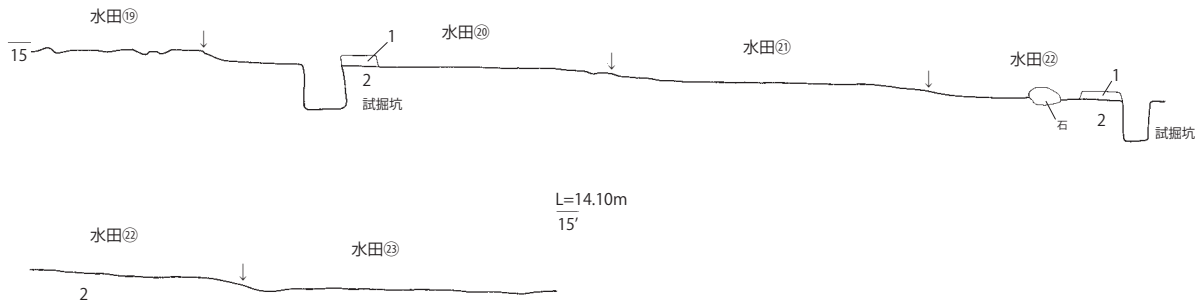


- 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)
- 2 暗褐色腐植土(第V面耕作土(土層 a)、柔らかくしまりなし)

【水田区画 14-14'】

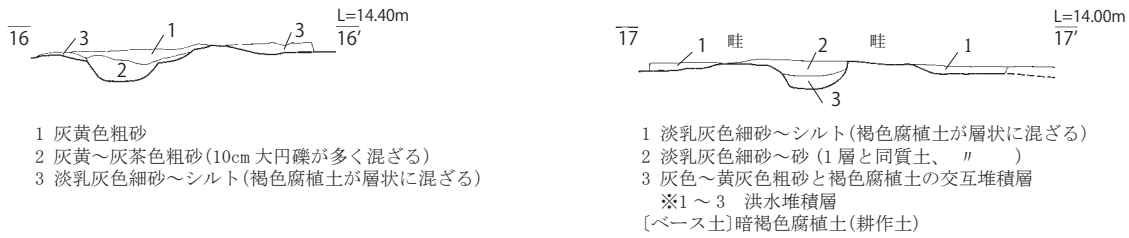


【水田区画 15-15'】

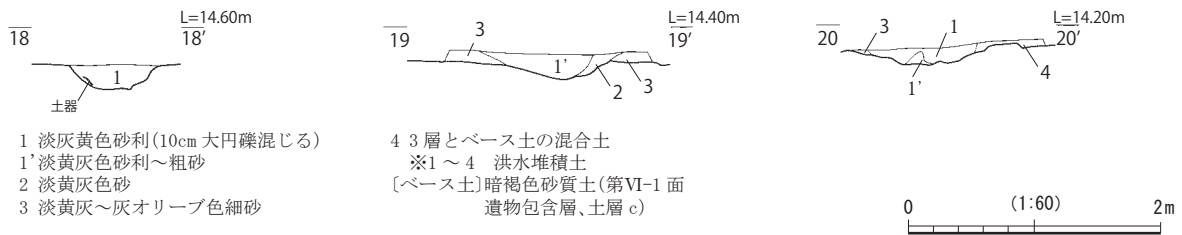


第236図 G地区 第V面水田区画断面図2(S=1/60)

【SD5001】(第227～229図)



【SD5003】(第222図)



第237図 G地区 第V面SD土層断面図(S=1/60)

できず、溝底と水田⑬～⑰耕作面の標高差が8～28cm、水田⑲～⑳耕作面との標高差が9～22cmを測ること等から、主に排水機能を担ったと考えられる。遺物は、第238図1121の弥生時代後期後半の甕が出土した。1121は口径15.8cmを測り、外面に煤が付着する。

3 溝(SD) (遺構：第222・224～227図)

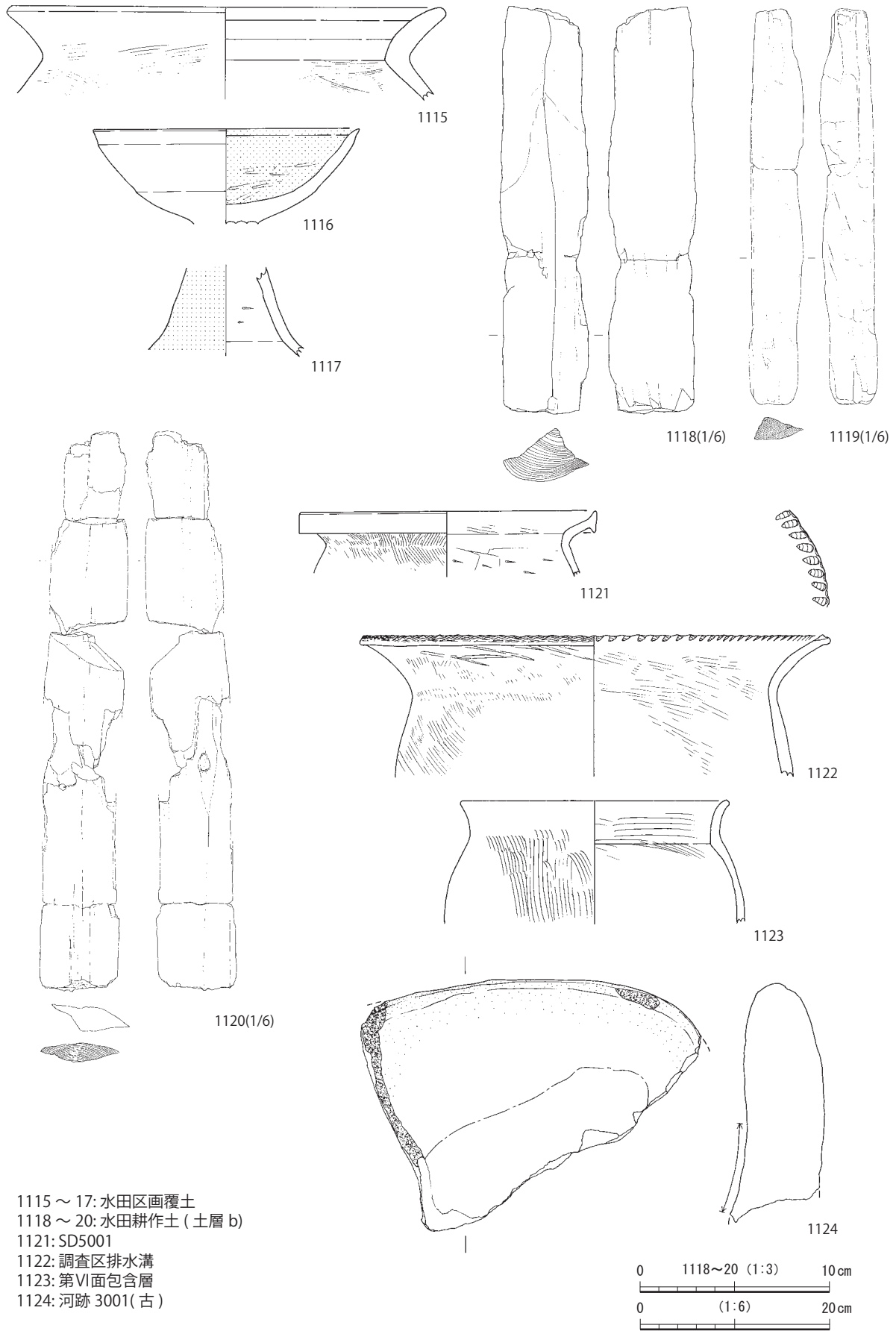
溝は、前述のSD5001に加え、第IV面河跡3001(古)南側で水田区画と同時に土石流災害4で埋まったSD5002・03を検出した。3条の溝は、いずれも同程度の規模であり、堰施設をもたずに屈曲しながら南東方向から北西方向に流下する点で共通する他、溝間距離が19～20m離れる規則性をもつ。これらから、SD5002・03は水田区画を造成する目的で掘られた水路と位置付けられる。ただしSD5003周辺では、畦畔や明確な耕作痕跡がないこと、前述のとおり耕作土の形成が認められないこと(第233図土層断面6-6'・7-7')から、水路を掘ったものの水田区画は整備しなかったと推定できる。

**SD5002** E・F-24区で検出した溝で、東側は第IV面河跡3001(古)で損壊する。溝の規模は、上幅54～90cm、深さ7～30cm(残存する溝底の標高13.55～13.81m)を測り、一度に流入・堆積した明茶黄色粗砂を覆土とする(第233図土層断面6-6')。堰等の付属施設や出土遺物はない。

**SD5003** F・G-22区で検出した溝で、屈曲しながら南東方向から北西方向に流れる。溝の規模は、上幅56～86cm、深さ5～19cm(溝底の標高14.15～13.77m)を測り、一度に流入・堆積した淡灰黄色砂利・砂や淡黄灰～灰オリーブ色細砂を覆土とする。堰等の付属施設や出土遺物はない。

4 その他の出土遺物(第238図)

第238図1122～1124を図化した。調査区排水溝出土の弥生土器甕1122は、後述する第VI-2面に属する遺物である。口径25.0cmを測り、口縁部外面に胴部整形に用いた板状工具の接触痕が明瞭に残る。試掘坑から出土した土師器甕1122は、第VI-1面に属する遺物である。口径14.0cmを測り、内外面とも粗いハケ調整を施す。第IV面河跡3001(古)出土の磨石1123は、淡灰色の砂岩を用いる。外面全体に赤色付着物(ベンガラか)が残り、付着物の磨りおろし行為に伴い上面中央付近の器面は平滑となる。



- 1115 ~ 17: 水田区画覆土
- 1118 ~ 20: 水田耕作土 (土層 b)
- 1121: SD5001
- 1122: 調査区排水溝
- 1123: 第VI面包含層
- 1124: 河跡 3001(古)

第238図 G地区 第V面出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)

第52表 G地区 第V面出土土器観察表

※( )は残存法量を示す。

挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
238	1115	E-25-3	IV面ベース土 (明茶色砂利)	土師器	甕	22.5	-	(4.9)	にぶい橙	淡黄橙	粗砂・礫多、海绵骨針少	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□7/36	外面煤付着	H17D52
238	1116	F-23	V面覆土 (淡灰黄色細砂)	土師器	高坏	14.1	-	(5.0)	にぶい橙、暗赤橙	にぶい橙	粗砂多、礫少、海绵骨針多	良	ミガキカ	不明	□18/36	内面赤彩、外面厚減顯著。1117と同一面体か	H16C5-1
238	1117	F-23	V面覆土 (淡灰黄色細砂)	土師器	高坏	-	-	(9.7)	にぶい橙、暗赤橙	にぶい橙	粗砂多、礫少、海绵骨針多	良	不明	ナデ	-	外面赤彩。1116と同一面体か	H16C5-2
238	1121	E-26-2	SD5001 (淡灰黄色細砂)	弥生土器	甕	15.8	-	(3.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、礫少、赤色粒多	良	ハケ、ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	□9/36	外面煤付着	H16G6
238	1122	E-26	排水溝	弥生土器	甕	25.0	-	(7.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂・礫多、海绵骨針多	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□9/36	口縁部に内面に連続刻突文。口縁部外面にハケ原体のアタリ痕。外面煤付着	H16A35
238	1123	F-G-22	VI面包含層 (暗灰色砂質土)	土師器	甕	14.0	-	(6.5)	にぶい橙	にぶい橙	粗砂多、礫多、海绵骨針多	良	ハケ、ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	□4/36		H17D652

第53表 G地区 第V面出土石製品観察表

※( )は残存法量を示す。

挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	残存重量 (g)	備考	実測番号
238	1124	F-25	河跡3001(古)北岸部覆土	磨石	砂岩	(17.9)	(13.2)	4.1	(1201.9)	上面磨耗、両面に赤色付着物(ベンガラか)。破片化後、正位で被熱、変色・煤付着	H16石-2

第54表 G地区 第V面出土木製品観察表

挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種同定	備考	実測番号
238	1118	E-25	耕作土(褐色腐植土)	加工材	43.0	9.3	6.2	マツ属複維管束亜属	割り材(ミカン割り)	H17木-4
238	1119	E-25	耕作土(褐色腐植土)	加工材	42.1	7.2	4.6	マツ属複維管束亜属	割り材(ミカン割り)	H17木-5
238	1120	E-25	耕作土(褐色腐植土)	加工材	60.4	10.1	4.1	マツ属複維管束亜属	割り材(ミカン割り)	H17木-3

また、破片化後に被熱し、煤が付着する。

## 8 小 結

第V面の水田区画の存続時期は、次節で述べるG地区第VI-1面が弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の生活面であること、土層観察で第VI-1面の廃絶～第V面の造成までが比較的短期間であると推定できること、また後述する第4次調査D・F地区第V面の小区画水田が、直下のD地区第VI面SD301の位置関係・出土遺物から古墳時代前期に位置付けられること、第7次K地区第V面出土遺物等から、おおむね古墳時代中期末頃と考える。

その変遷は、(a)第VI-1面廃絶後に、調査区北側斜面(E～G-25区付近中心)で小規模な土砂の流入・堆積が発生、(b)その直後から、G地区を含む斜面(南北方向45m以上)で複数の小水路を取り込む小区画水田の造成を計画、(c)水路SD5001～03を約20m間隔で開削、(d)SD5001・02を基幹水路とした小区画水田の造成と耕作開始(SD5003周辺の水田は未整備)、(e)短期間での耕作放棄(SD5003周辺の水田は未整備)、(f)水田表土(耕作土・畦畔)が一定程度流出した時点での土石流災害4が発生(第V面の埋没)、という6つの過程(第239図)に整理でき、(a)～(f)までは比較的短期間のうちに推移したものと考えられる。以下では、G地区第V面の小区画水田を、第4次調査D・F地区第V面の小区画水田、また弥生時代後期～古墳時代前期の県内事例と、若干の比較を行うことで小結としたい。なお、第7次調査K地区第V面でも、同時期と考えられる小規模水田区画を確認している。

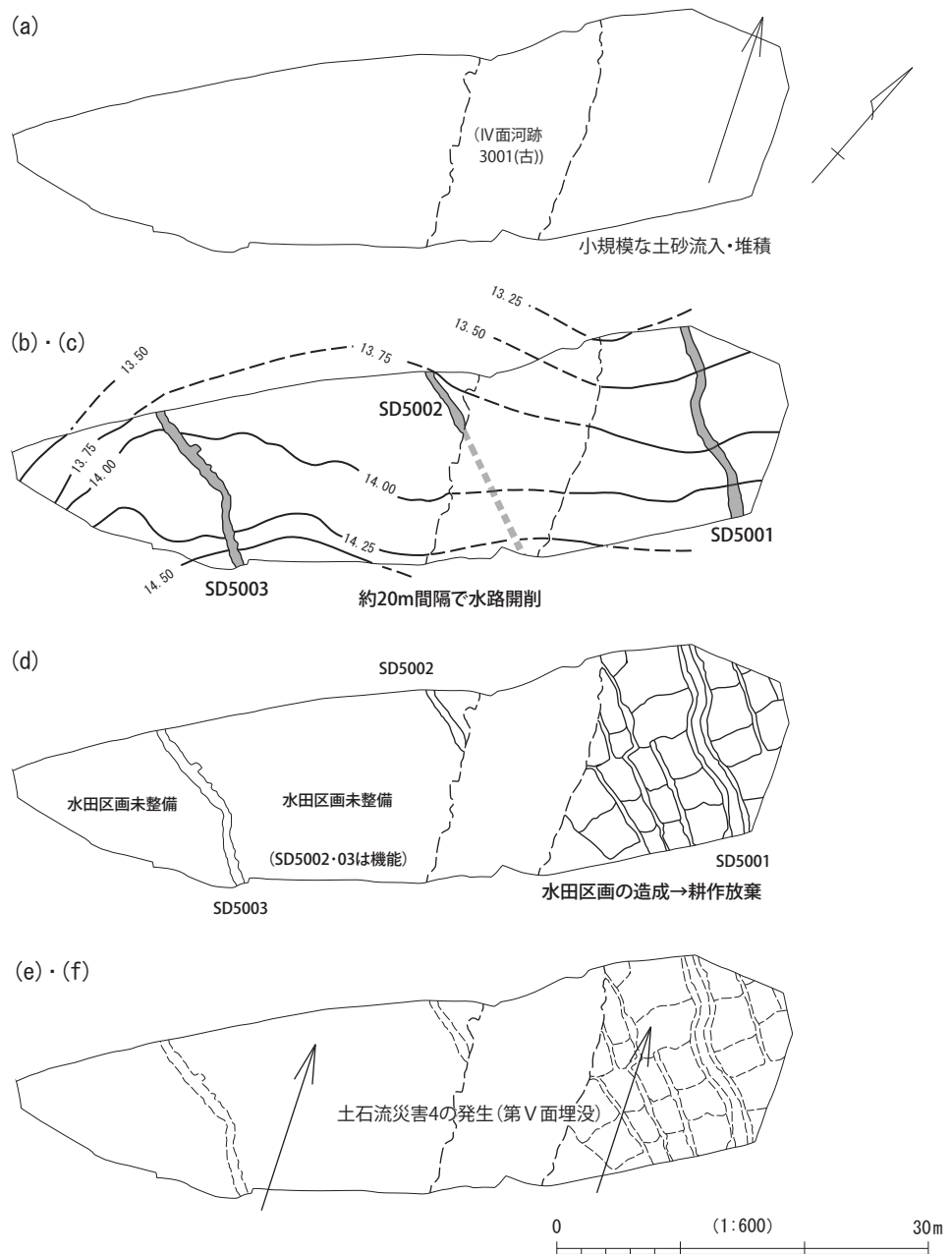
まず、本遺跡第4次調査D・F地区第V面の小区画水田は、G地区と同様に第IV面ベース土(土石流災害4の続き)を重機で除去した段階で検出している。この小区画水田は、黄褐色砂質土層で一度に被

覆され、標高13～14m台の緩斜面(平均勾配約5度)に、東西方向で最長約28m、南北方向で最長28m以上を測る略台形の土地を一体的に造成する(第240図)。残存した水田は、D地区で19枚、F地区で29枚を数える。略方形の平面形を基本とする水田は、1枚の平均面積約5㎡、耕作土・床土(シルト質土)の厚さは20～40cmを測る。また、四方に残る畦畔は高さ10～15cm、幅20～30cmを測り、水田に伴う小水路は水田区画の南西隅に1条が付随する。

G地区第V面との比較でいえば、第240図で示すとおり、等高線におおよそ水平から45°傾いて水田区画を造成する点

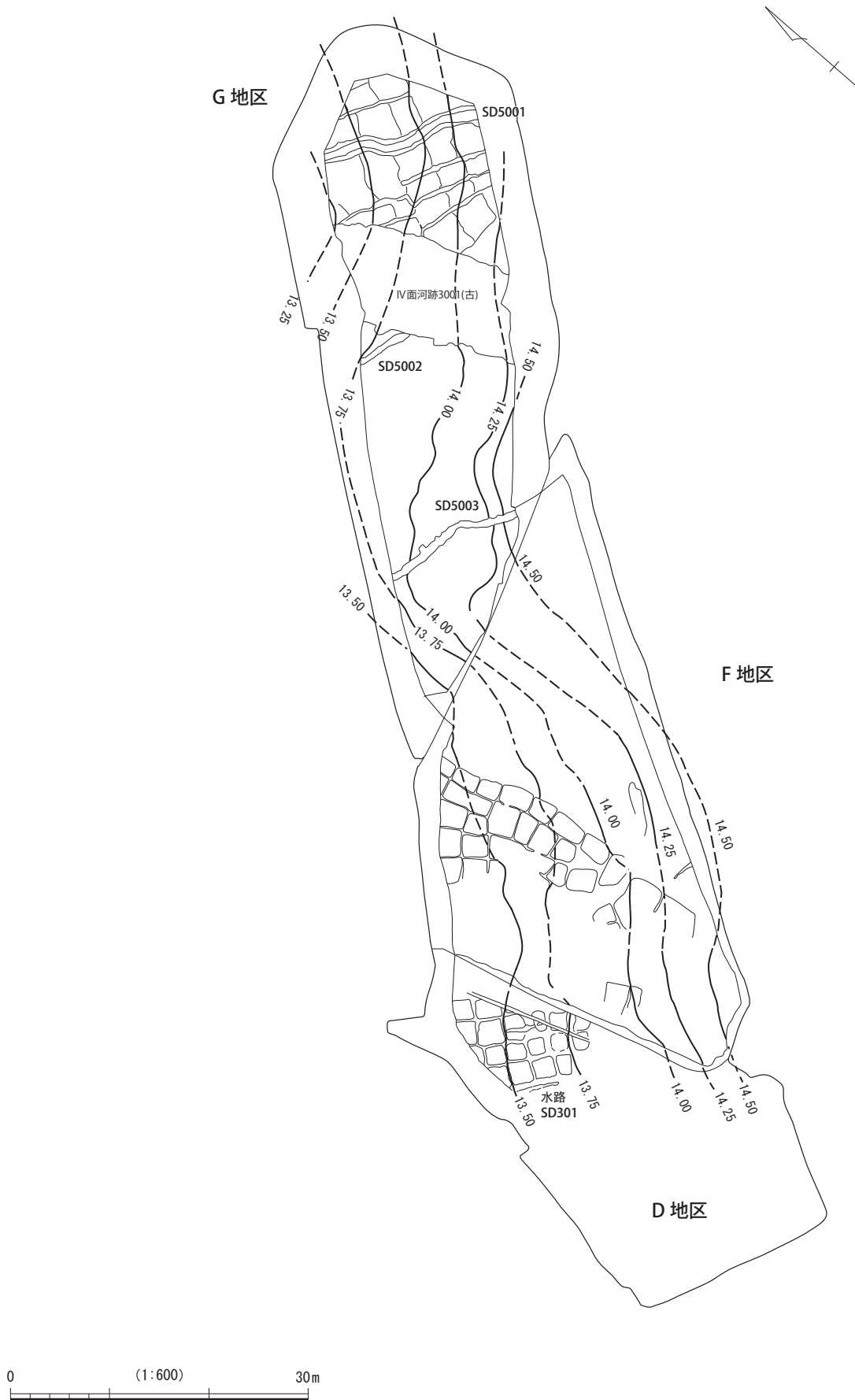
で共通する。いずれの耕作単位とも緩斜面における灌漑水の有効な循環を目的とした農耕技術と考えられる。一方、異なる要素として、水田間の小水路の有無や、水田の平面形や規模(D・F地区約5㎡、G地区約8㎡)が指摘できる。さらに、SD5003までを一体の耕作単位とすれば複数の水路を用いるG地区の耕作規模は、K地区第V面水田区画と同様に、D・F地区より広大な土地の経営を意図したものといえる。また、畦畔の残存状況は、土石流災害4発生時の耕作状況を反映したものであり、G地区水田区画が耕作を放棄した状態であるに比して、D・F地区水田区画が耕作を維持した可能性が高いと考えられる。

次に、県内の弥生時代後期～古墳時代前期の水田区画と比較したい。同時期の水田区画は、低地に立地する金沢市梅田B遺跡、小松市白江梯川遺跡、津幡町加茂遺跡において、いずれも洪水砂で覆われた状態で検出されている<sup>(14)</sup>。梅田B遺跡第4次調査1・2区中層の水田区画は、標高約6～7mの谷平



第239図 G地区 第V面変遷図(S=1/600)





第240図 G地区 D・F・G地区水田区画配置図(S=1/600)

畝田B遺跡第4次1・2区中層



第241図 金沢市梅田B遺跡水田区画図(S=1/800)

野中央部に位置し、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に作られる(第240図)。水田区画は、南北約60m、東西約50mの規模をもち、さらに隣接地・周辺地に水田区画が展開した可能性が高いようだ。検出した水田区画は、谷から流下する基幹用水路(SD104)、南側に分岐する用水路SD132および大畦畔1本を軸に造成されており、小区画水田は約96枚以上を数える。水田の面積は、最大約20㎡、最小約4㎡、平均約10㎡を測り、小畦畔の水口を介して標高の高い東側から西側に向けて順次水をかけ落とす(懸流灌漑)。また、梯川中流左岸の低湿地(標高2m弱)に立地する白江梯川遺跡では、平成16・17年度調査で弥生時代後期～古墳時代前期頃の小区画水田14枚程度を確認している。水田は一辺約2×2～4m(面積4～8㎡)を測るようだ。また、河北潟に面した加茂遺跡L区第2面でも小規模な小区画水田を検出している。これらの低地に立地する水田区画は、本遺跡に比して用水系統をしっかりと掘り、水田面積を大きくつくる傾向が指摘できる。また、低地の水田区画においては灌漑水の有効な循環が比較的容易と考えられる。本遺跡で検出した、緩斜面におおよそ水平から45°傾いて造成する棚田状の小水田区画の技術が、低地に展開した水田区画と比して、構造的・質的にどのような差異をもつか、現時点では類例が少なく判然とせず、今後の類例の増加を待ちたい。

〔註〕

- (14) (財)石川県埋蔵文化財センター 2005『石川県埋蔵文化財情報第5号』
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2005『石川県埋蔵文化財情報第14号』
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2006『石川県埋蔵文化財情報第16号』
- 柿田祐司2006『金沢市梅田B遺跡Ⅲ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

## 第7節 第VI-1面の遺構と遺物（第242～259図、第55～58表）

### 1 概要(第242図)

G地区第VI-1面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。灰黄色や茶灰色を呈する粗砂～砂利をベース土(遺構検出面)とする、弥生時代後期後半～古墳時代前期の生活面であり、仿製乳文鏡が出土した古墳時代前期のF地区第VI面につながる。第6節第1項で述べた(第231～233図)、第IV面河跡3001(古)北側では第V面耕作土(土層a:暗褐色腐植土)、土層b(淡灰色粗砂、暗褐色腐植土等の交互堆積層)及び第VI-1面遺物包含層(土層c:暗灰褐色砂質土)を、第IV面河跡3001(古)南側では土層cを、それぞれ人力で掘り下げた。遺構検出面の標高は、第V面より10～20cm程度下がり、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で13.55m(第V面ベース面13.73mより-18cm)、G-23区杭脇で14.02m(同14.23mより-21cm)、南東端(G-26区杭南東3m)で約14.00m(同14.14mより-約14cm)、北端(F-26区杭西8m)で約13.35m(同13.46mより-約10cm)を測る。また、遺構検出面の標高は13.1～14.1mを示し、SK6001付近が最も高くなる。標高差は、Gライン(北東-南西方向)が約0.20m、23ライン(南東-北西方向)が約0.1m、26ライン(同)が約0.8mを測る。基本的に北西側に向けて傾斜する地形であり、河跡3001(古)北側における北東-南西方向の傾斜がより強くなる。

調査の結果、第IV面河跡3001(古)南側で、土坑(SK)5基、溝(SD)約25条、落ち込み(SX)1ヶ所、ピット多数を検出したにとどまり、調査区外東側での展開が推定できる集落域の縁辺に近い様相を呈する。遺物は、定量の弥生土器、土師器の他、石鏃1点が出土した。なお、河跡3001(古)北側については、明確な遺構が検出できないため、航空測量図化の対象から除外しており、第259図で概略の平面図を示している。以下では、主に第IV面河跡3001(古)南側の様相について述べる。

### 2 土坑(SK)、ピット(遺構：第248図、遺物：第252図)

土坑は、現地調査段階で遺物が出土した3基(SK6001～03)と、整理段階で新たに追加した2基(SK6031・32)の5基を数える。

**SK6001** G-22-4区で検出した平面不整形を呈する縦穴状の土坑で、長軸316cm、短軸220cm以上、深さ6～20cmを測る。底面は比較的平坦で、深さ4～9cmを測る不定形な小ピットを検出したものの、土坑周辺を含めて明確な柱穴は確認できなかった。覆土は暗灰褐色砂質土を基調とし、他遺構との切り合い関係はない。遺構検出面に近い覆土西隅から土師器甕細胴部片約120点、高坏細片、小型鉢細片が出土した。

**SK6002** G-23-1区で検出した不定形な落ち込みで、調査区外東側にのびる。長軸200cm以上、短軸135～190cm、深さ5～16cmを測り、底面は起伏に富む。覆土は、ベース土が粒状に混ざる濁暗灰褐色砂質土で、切り合い関係からP6001より新しく位置付けられる。土師器小型鉢小片1点が出土した。

**SK6003** F-23-3区で検出した平面不整形を呈する土坑で、一辺120cm弱、深さ14cmを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を基本とし、切り合い関係からSD6034より新しく位置付けられる。遺構検出面近くの覆土から10cm大の自然石や土師器甕小片が出土した。

**SK6031** E-22区で検出した不定形な落ち込みで、調査区外西側にのびる。深さ3～10cmを測り、底面は起伏をもつ。覆土は礫が多く混ざる暗灰褐色砂質土で、切り合い関係からSD6003・05より古く位置付けられる。出土遺物はない。

**SK6032** F-21-3区で検出し、調査区外西側にのびる2つの浅い落ち込みが重複する。深さ2～10cmを測り、底面は起伏に富む。覆土は、南側の落ち込みが礫の多く混ざる暗灰褐色砂質土、北側の落ち込みが濁褐灰色砂質土を基本とする。他遺構との切り合い関係、出土遺物はない。

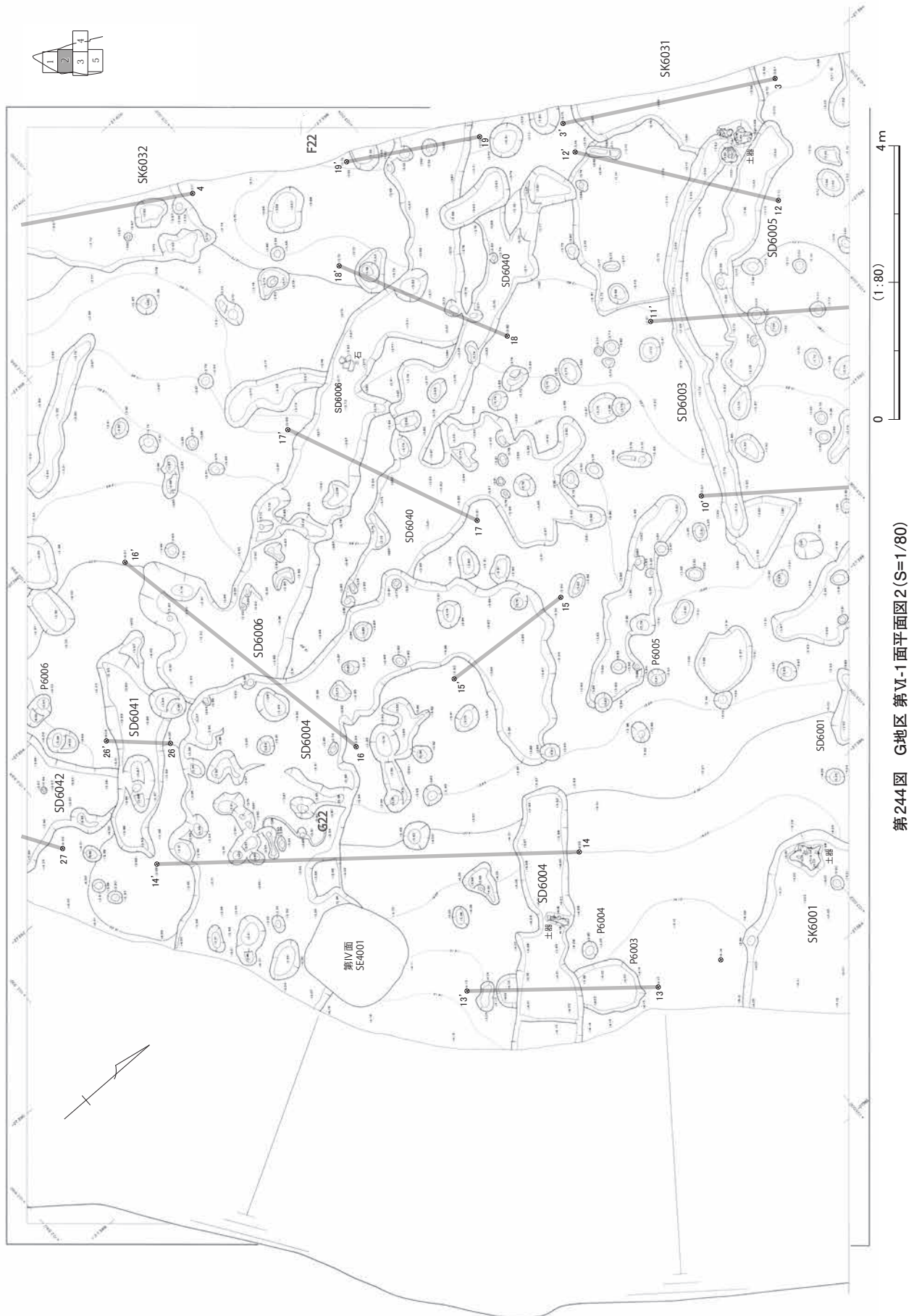
**ピット** 現地調査段階で大小含めて約200基のピットを検出し、うち土師器小片が出土した6基に遺構番号(P6001～06)を付した。また、整理段階で新たに3基に遺構番号(P6031～33)を追加している。



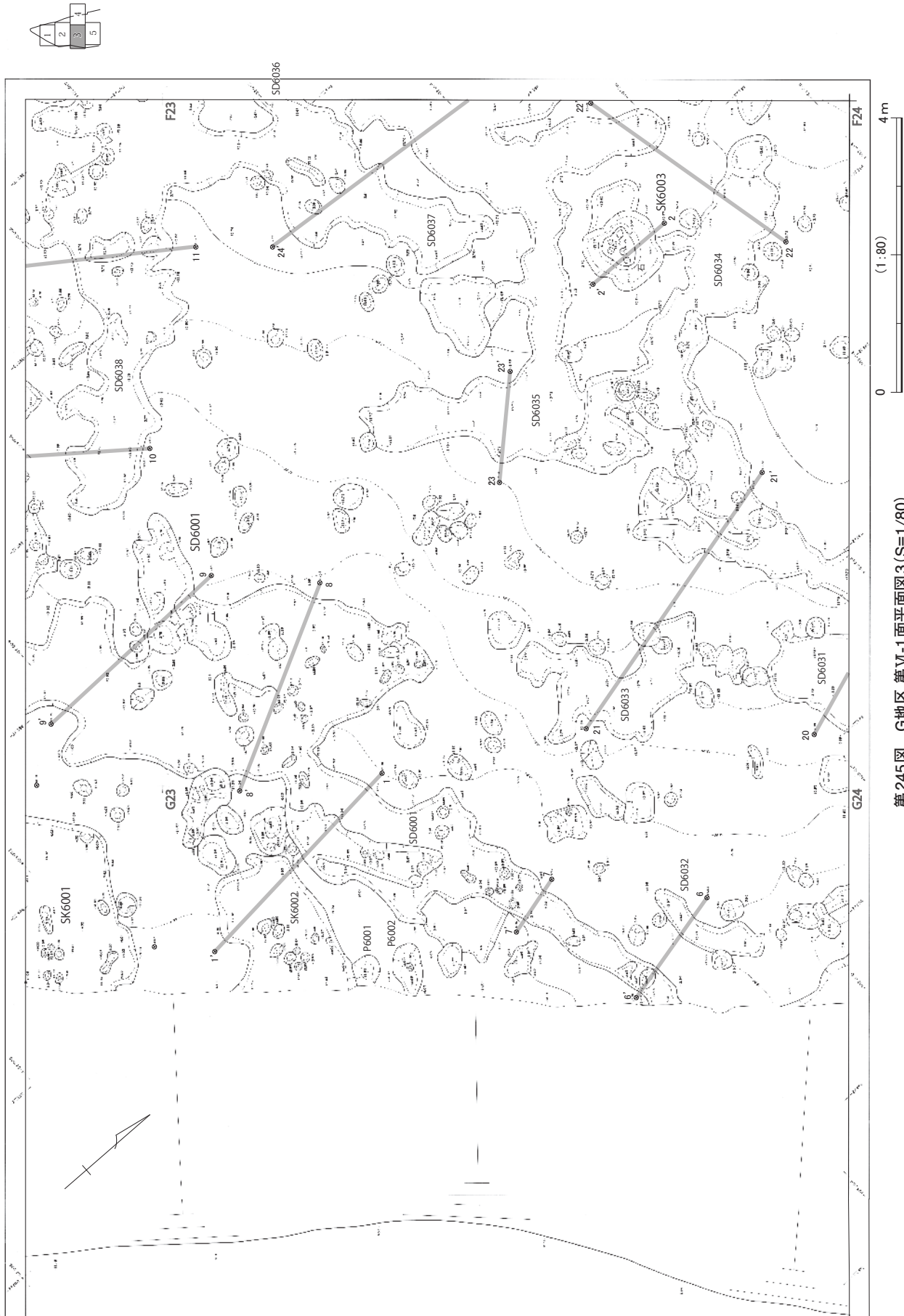
第242図 G地区 第VI-1面全体図(S=1/250)



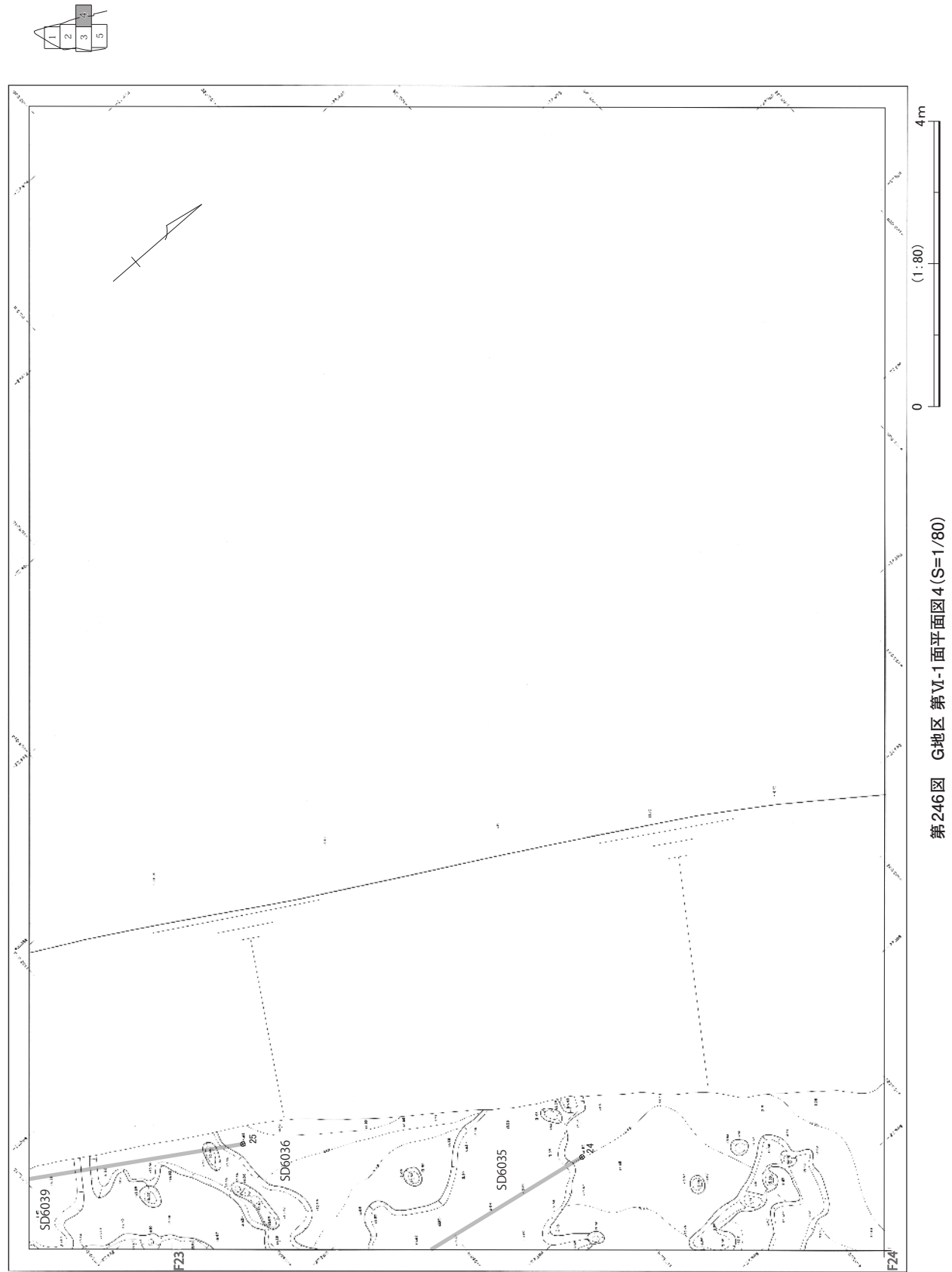
第243図 G地区 第VI-1面平面図1 (S=1/80)



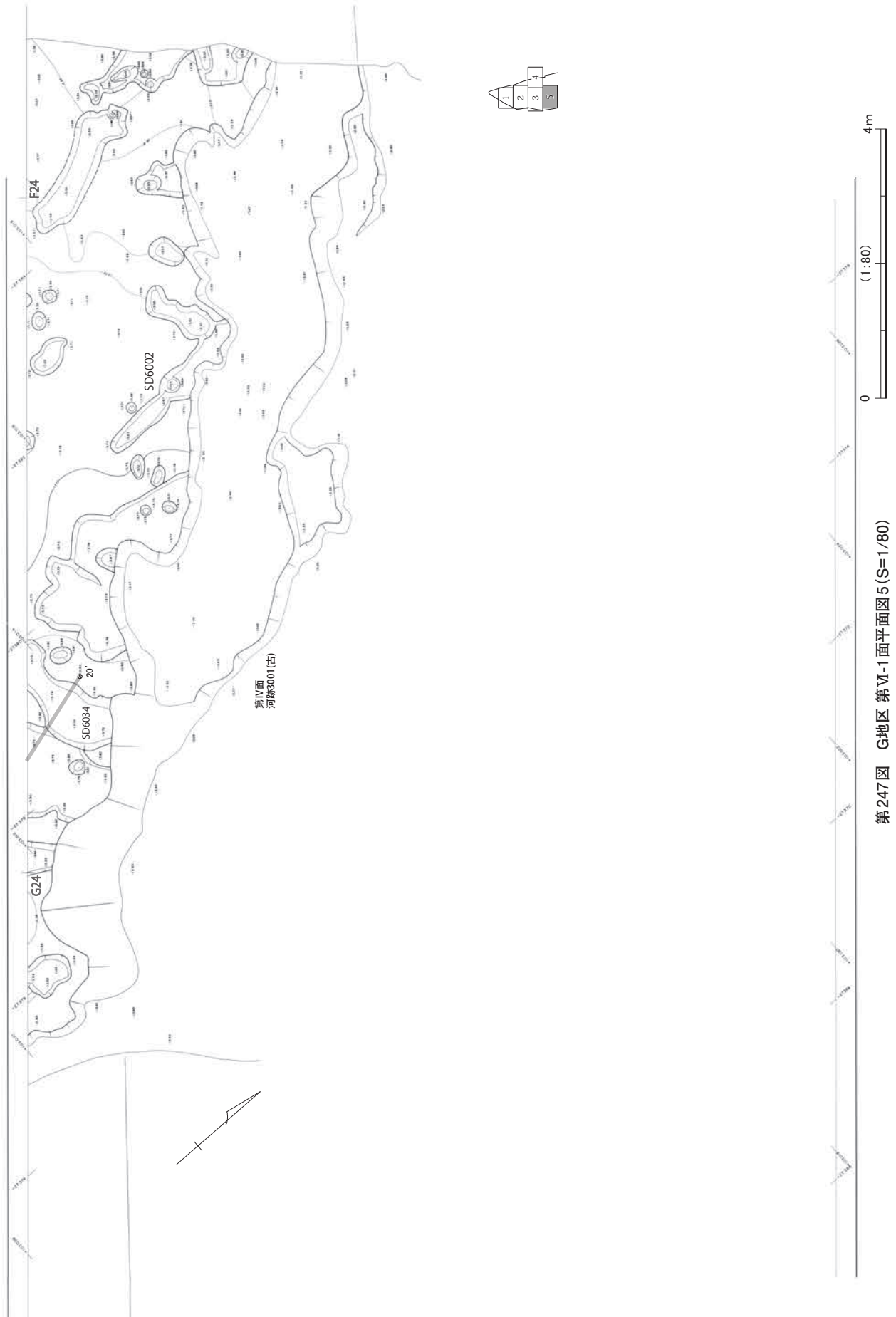
第244図 G地区 第VI-1面平面図2(S=1/80)



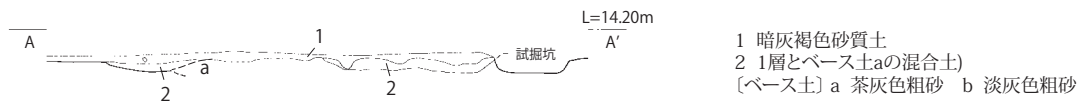
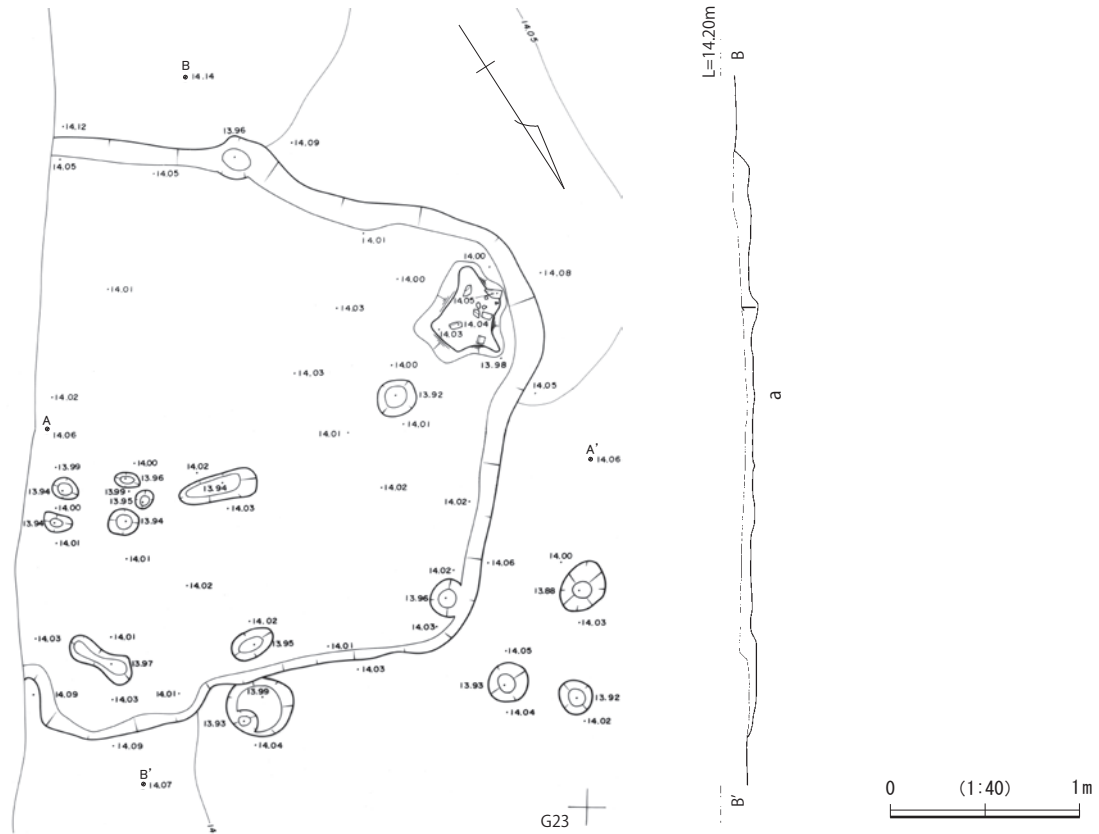
第245図 G地区 第VI-1面平面図3(S=1/80)



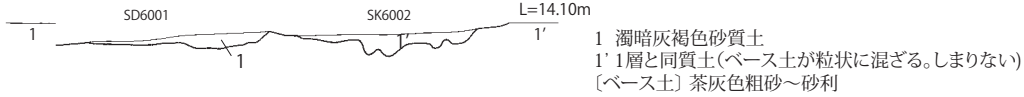




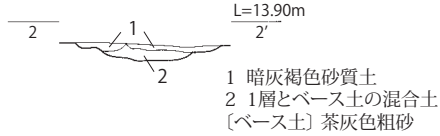
【G22-3区 SK6001】



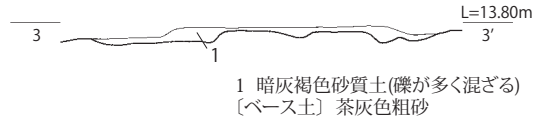
【G23-1区 SK6002・SD6001】 (第245・246図)



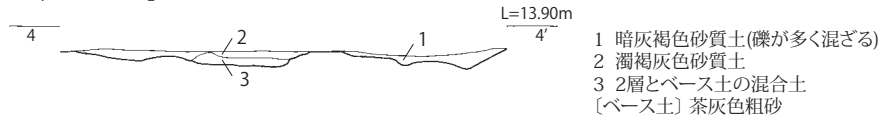
【F23-3区 SK6003】 (第245・246図)



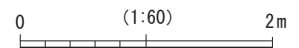
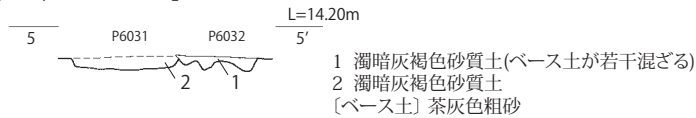
【E22区 SK6031】 (第244図)



【F21区 SK6032】 (第243図)



【F21区 P6031・32】 (第243図)



第248図 G地区 第VI-1面 SK、ピット平面図、土層断面図(S=1/40・1/60)

いずれのピットでも柱根出土または明確な柱根痕跡は確認できず、大部分のピットは深さ20cm以下(10cm以下が主体)を測る浅いものとなる。覆土は、遺物包含層と同質の暗灰褐色砂質土、または灰色砂質土とベース土の混合土を基調とする。出土遺物のうち、P6005出土の第252図1125を図化した。1125は、弥生時代後期の高坏坏部で、口径31.7cmを測る。未図化ではあるが、外面2ヶ所に環状把手が剥離した痕跡を残す。また、内外面とも丁寧なミガキ調整を施し、わずかに赤彩が残る。

### 3 溝(SD) (遺構：第242・248～251図、遺物：第252・253図)

溝は、溝状を呈する遺物包含層(土層c)の浅い落ち込みを含めて、約25条を検出した。現地調査段階で6条に遺構番号(SD6001～06)を付し、整理段階で第56表のとおり新たに13条(SD6031～43)を追加している。

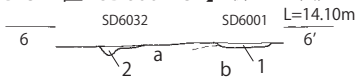
**SD6001** F-22・23区、G-23区で検出した古墳時代前期の溝で、調査区外東側にのびる。屈曲しながら直線的に掘られ、南西側で浅い落ち込みと重複する(第249図土層断面8・8)。溝の規模は、長さ10m以上、幅40～200cm、深さ4～12cmを測り、覆土は濁暗灰褐色砂質土である。

遺構検出面に近い南西側覆土から比較的多くの古墳時代前期の土師器が出土しており(第249図)、うち第252図1126～第253図1136を図化した。1126～28は甕、1129～34は壺、1135・36は小型の鉢である。有段口縁の1126は口径17.8cmを測り、口縁部内面は屈曲に乏しい。1127は口径13.5cmを測り、口縁部は比較的長く外側にのびる。胴部外面は、ハケ調整の後に全面にケズリ調整を加える。小型甕1128の口縁端部は大きく外傾し、水平に近い部分もある。1129は口径12.0cmを測り、口縁部は内湾気味に長く立ち上がる。摩滅が著しく、調整は判然とししない。1130の胴部は球胴形を呈し、頸部との境に断面方形の突帯を貼り付ける。外面にミガキ調整を施す底部片1131は平底風、1132は丸底風に仕上げる。1133・34の胴部は球胴形を呈し、外面に粗いミガキ調整を施す。底部台状を呈する小型鉢1135

第55表 G地区 第VI-1面SD規模等一覧表

遺構番号	グリッド名	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	土 層	出土遺物	備 考
SD6001	F-22-4、F-23-2、 G-23-1・3	1000～	40～200	4～12	第248図土層1、第249図土層6～9	あり	南西側は他遺構と重複
SD6002	F-24-1	250～	20～30	3～5	濁暗褐色粘質土と淡灰色粗砂の 混合土	あり	第IV面河跡3001(古)で損壊
SD6003	F-22-3・4	590	25～40	8～15	第249図10～12	あり	SK6031より新
SD6004	G-22-1	380～	40～260	4～12	第249図断面13、第250図14～16	あり	SD6006・40より新
SD6005	F-22-3	400	25～60	5～10	第249図断面11・12	なし	SK6031より新
SD6006	E22-4、G-22-3、 F-22-1・3	920～	60～120	3～12	第250図断面16～19	なし	SD6040より新、SD6004より古
SD6031	F-23-4、F-24-2	220～	90～130	5～10	第250図断面20	なし	第IV面河跡3001(古)で損壊
SD6032	G-23-2	180	30～50	4～7	第249図断面6	なし	
SD6033	F-23-4	260	30～90	6～12	第250図断面21	なし	
SD6034	F-23-3	970～	40～105	3～8	第250図断面20～22	なし	弧状。第IV面河跡3001(古)で 損壊
SD6035	E-22-2・4、F-23-1・3	720～	40～250	3～5	第250図断面22・24	なし	
SD6036	E-22-4、E-23-2	260～	40～70	4～8	第251図断面25	なし	SD6037と分岐
SD6037	F-23-1	580	50～160	9～17	第250図断面24	なし	SD6036・38に連続
SD6038	F-22-3、F-23-1	630	60～170	2～12	第249図断面10・11	なし	SD6037に連続
SD6039	E-22-4	130～	75～85	4～14	第251図断面25	なし	
SD6040	F-22-1・2	740～	35～140	2～12	第249図断面17・18	なし	SD6004・06より古
SD6041	F-21-4	330	55～100	4～11	第251図断面26	なし	
SD6042	F-21-2・4、G-21-1・3	360～	120～400	8～14	第251図断面27・28	なし	SD6041より古
SD6043	F-21-1・2	790～	130～250	2～20	第251図断面29・30	なし	南側でSX6001と接続

【G23-2区 SD6001・32】(第245図)



- 1 濁暗灰褐色砂質土(土器が上方に混ざる)
- 2 暗灰褐色砂質土とベース土aの混合土  
〔ベース土〕 a 茶灰色粗砂～砂利  
b 暗灰色細砂

【G23-2区 SD6001】(第245図)



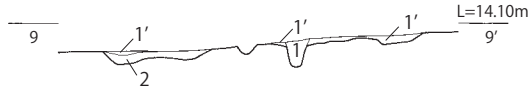
- 1 濁暗灰褐色砂質土

【F23-2区 SD6001】(第245図)



- 1 濁暗灰褐色砂質土
- 1' 1層と同質土(ベース土が粒状に混ざる。しまりない)
- 2 暗灰褐色砂質土とベース土の混合土  
〔ベース土〕 茶灰色粗砂

【F22・23区 SD6001】(第244・245図)



- 1 濁暗灰褐色砂質土
- 1' 1層と同質土(ベース土が粒状に混ざる。しまりない)
- 2 暗灰褐色砂質土とベース土の混合土  
〔ベース土〕 茶灰色粗砂

【F22-4区 SD6003・38】(第244図)



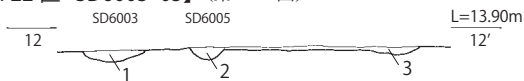
- 1 濁暗灰褐色砂質土(粒子粗い)
- 2 濁暗灰褐色砂質土
- 3 2層と同質土(1層が粒状に混ざる)
- 4 ベース土と同質土(1層が粒状に混ざる)  
〔ベース土〕 茶灰色粗砂

【F22-3区 SD6003・05・38】(第244・245図)



- 1 濁暗灰褐色砂質土(粗砂に近い)
- 2 濁暗灰褐色砂質土(粉っぽく、5cm大の砂利混ざる)
- 3 濁暗灰褐色砂質土とベース土の混合土
- 4 ベース土と同質土(灰褐色砂質土が粒状に混ざる)
- 5 2層と同質土  
〔ベース土〕 茶灰色粗砂

【F22区 SD6003・05】(第244図)



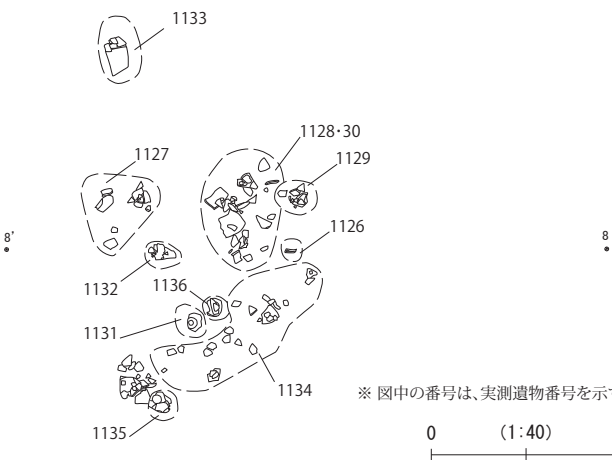
- 1 濁暗灰褐色砂質土(粒子粗く、5cm大の砂利が混ざる)
- 2 濁暗灰褐色砂質土(粗砂に近い)
- 3 1層とベース土(茶灰色粗砂)の混合土

【G22-1区 P6003・SD6004】(第244図)

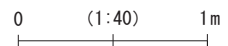
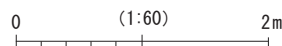


- 1 暗灰褐色砂質土(5cm大の砂利が混ざる)
- 1' 1層と同質土(若干暗い)
- 2 灰褐色砂質土

【F22・23区 SD6001 遺物出土状況】

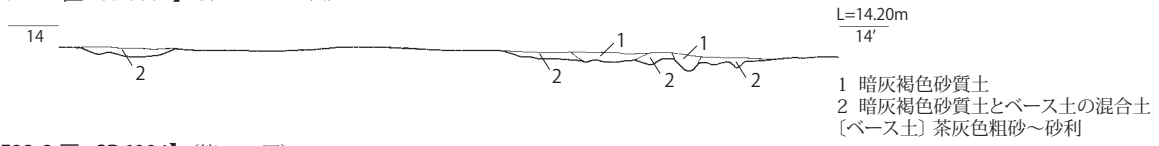


※ 図中の番号は、実測遺物番号を示す。

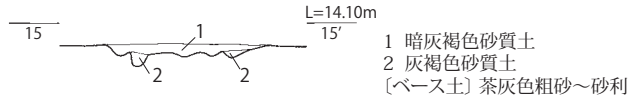


第249図 G地区 第VI-1面SD実測図(S=1/40・1/60)

【G22-1区 SD6004】(第243・244図)



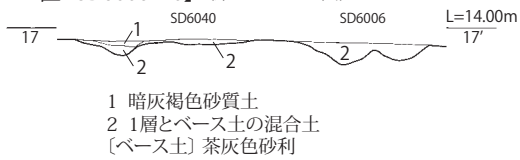
【F22-2区 SD6004】(第244図)



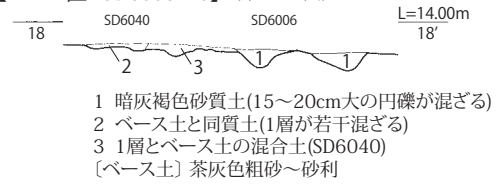
【E21-4区 SD6004・06】(第243・244図)



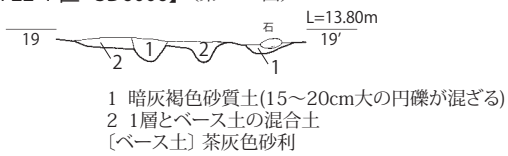
【F22区 SD6006・40】(第243・244図)



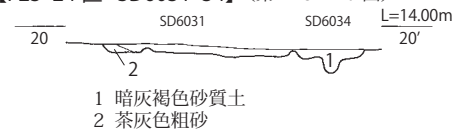
【F22-1区 SD6006・40】(第244図)



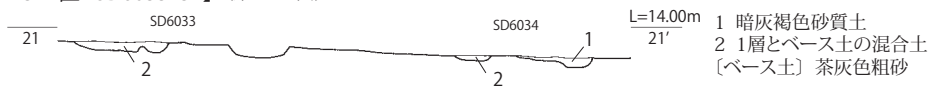
【F22-1区 SD6006】(第244図)



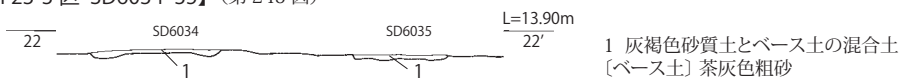
【F23・24区 SD6031・34】(第245・247図)



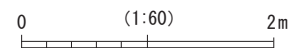
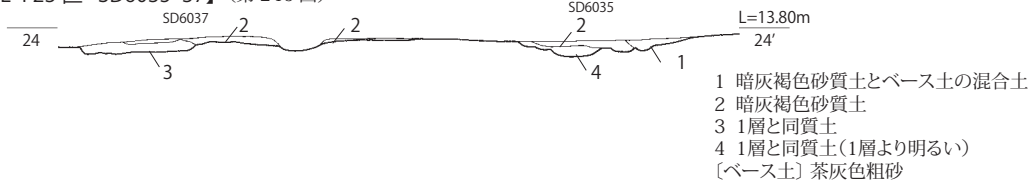
【F23-4区 SD6033・34】(第245図)



【F23-3区 SD6034・35】(第245図)



【E・F23区 SD6035・37】(第246図)



第250図 G地区 第VI-1面SD土層断面図(S=1/60)

は口径12.8cm、器高5.9cmを、1136は口径9.5cm、器高5.5cmをそれぞれ測り、内外面ともミガキ調整を施す。1136の器面は橙色に発色し、赤彩に近い効果をもつ。

**SD6002** F-24-1区で検出した浅い溝で、北側は第IV面河跡3001(古)で損壊する。長さ2.5m以上、幅20～30cm、深さ3～5cmを測り、覆土は濁暗褐色粘質土とベース土(淡灰色粗砂)の混合土である。未図化だが土師器甕小片が出土した。

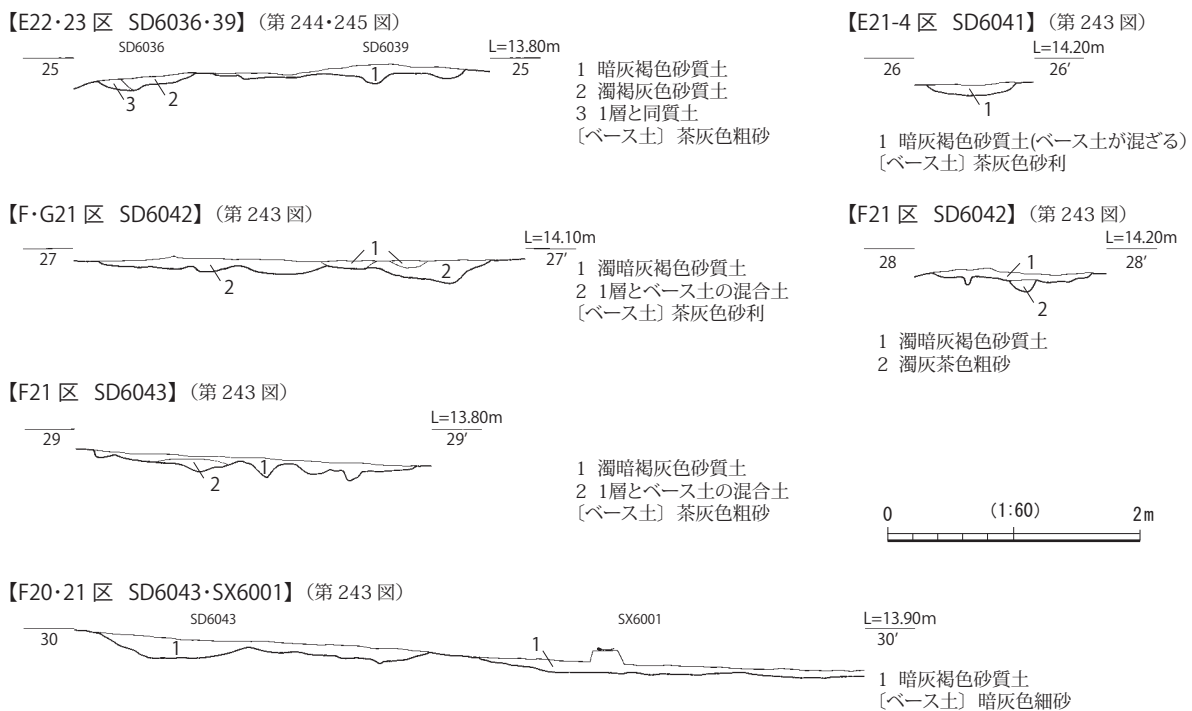
**SD6003** F-22-3・4区で検出したゆるやかに屈曲する溝で、規模等を含めてF地区第VI面SD2001<sup>(14)</sup>に近い印象を受ける。長さ590cm、幅25～40cm、深さ8～15cmを測り、覆土は濁暗灰褐～灰褐色砂質土である。遺構の切り合い関係からSK6031より新しく、弥生土器甕と考えられる小片2点が出土した。

**SD6004** G-22-1区で検出した平面不定形な溝で、調査区外東側にのびる。北東-南西方向約2.5m、北西-南東方向5.5m以上の土地を取り囲むように掘られ、何らかの区画の外周溝となる可能性をもつ。深さ4～12cmを測り、覆土は暗灰褐色砂質土を基本に、底面近くではベース土が混ざる。遺構の切り合い関係から、SD6006より新しく位置付けられる。土師器甕小片が出土した。

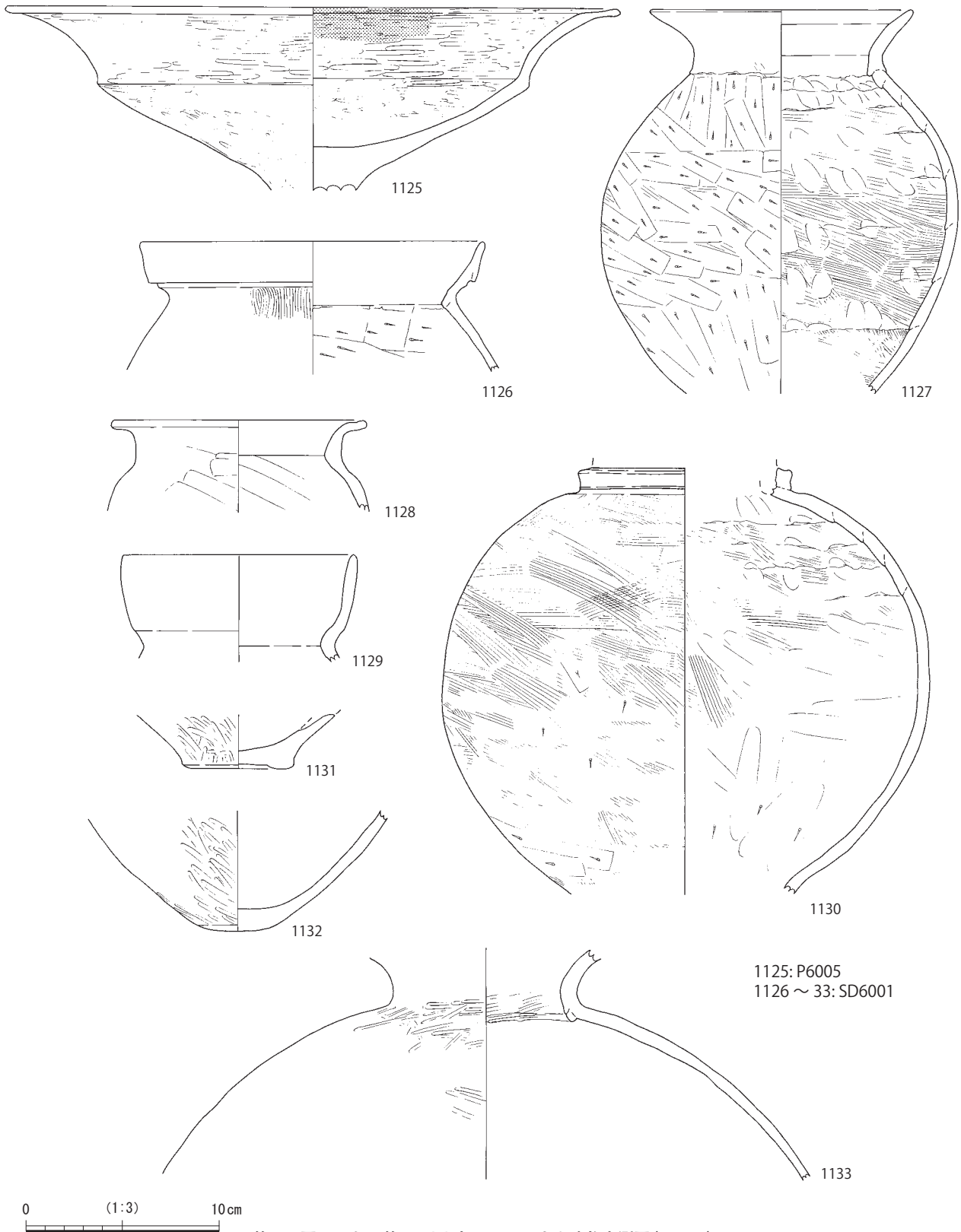
**SD6005** F-22-3区で検出した溝で、SD6003と平行する位置関係にある。長さ400cm、幅25～60cm、深さ5～10cmを測り、覆土は濁暗灰褐～灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

**SD6006** E～G-22区で検出した浅い溝状の落ち込みで、等高線にはほぼ直交してのびる。長さ9.2m以上、幅60～120cm、深さ3～12cmを測り、覆土は円礫が混ざる暗灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

**SD6031～43** 整理段階で新たに遺構番号を付した溝であり、乱れた平面プランをもつ溝状を呈した遺物包含層(土層c)の浅い落ち込みを含む。規模、覆土等は第56表に示すとおりで、いずれからも遺物な出土していない。



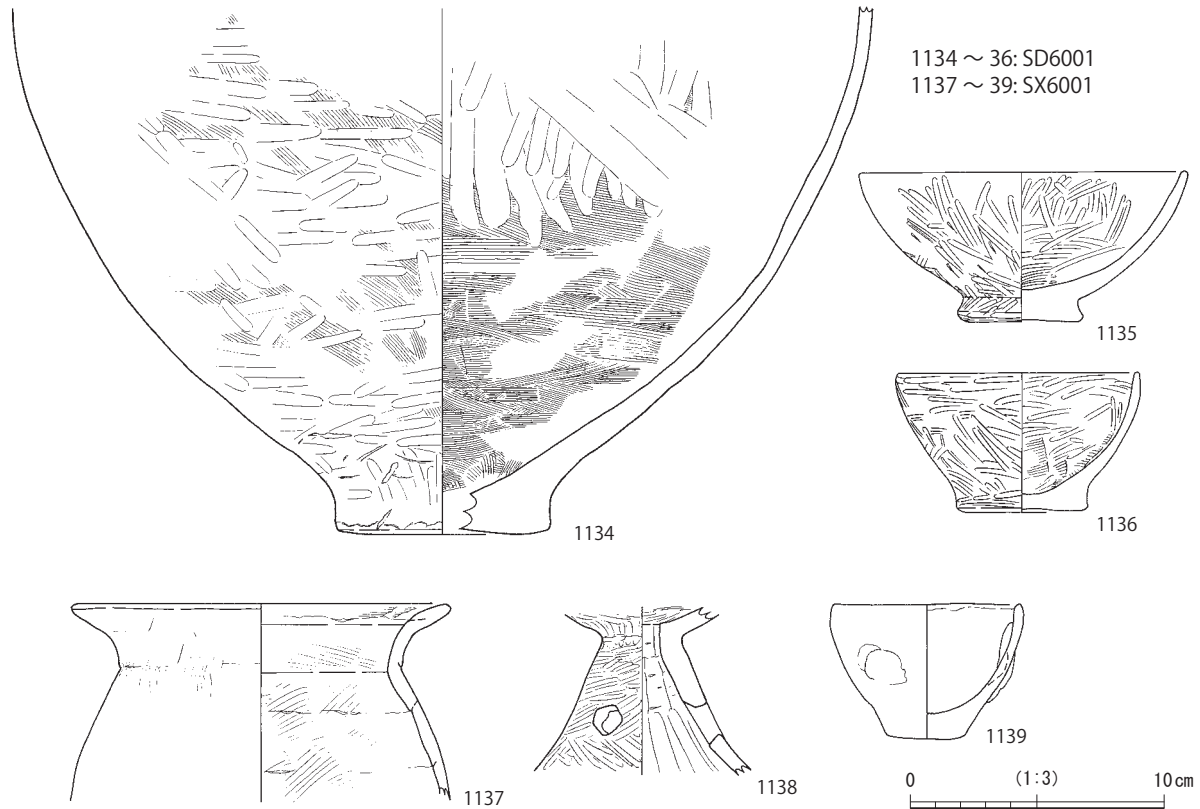
第251図 G地区 第VI-1面SD等土層断面図(S=1/60)



第252図 G地区 第VI-1面ピット、SD出土遺物実測図(S=1/3)

4 不明遺構(SX)(遺構：第242・251図、遺物：第253図)

調査区南端のF-20区で検出した落ち込みである。北側でSD6043と接続、調査区外南側に向けて次第に深くなる。深さ8cmを測り、覆土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物のうち、第253図1137～39



第253図 G地区 第VI-1面SD、SX出土遺物実測図(S=1/3)

の古墳時代前期の土師器を図化した。甕1137は口径14.5cmを測り、ナデ肩の胴部はハケ調整が粗いため粘土紐の積み上げ痕がみえる。器台1138は、乾燥の進んだ段階で平面五角形を呈する孔を外側から3ヶ所に穿つ。小型の鉢1139は口径7.2cm、器高5.4cmを測り、口縁端部の仕上げが粗い。また、整形時に粘土紐の長さが不足し、約2.5cm大の粘土塊を外側から継ぎ足し、内側から強く押したため、その部分の体部は外側にふくらむ。

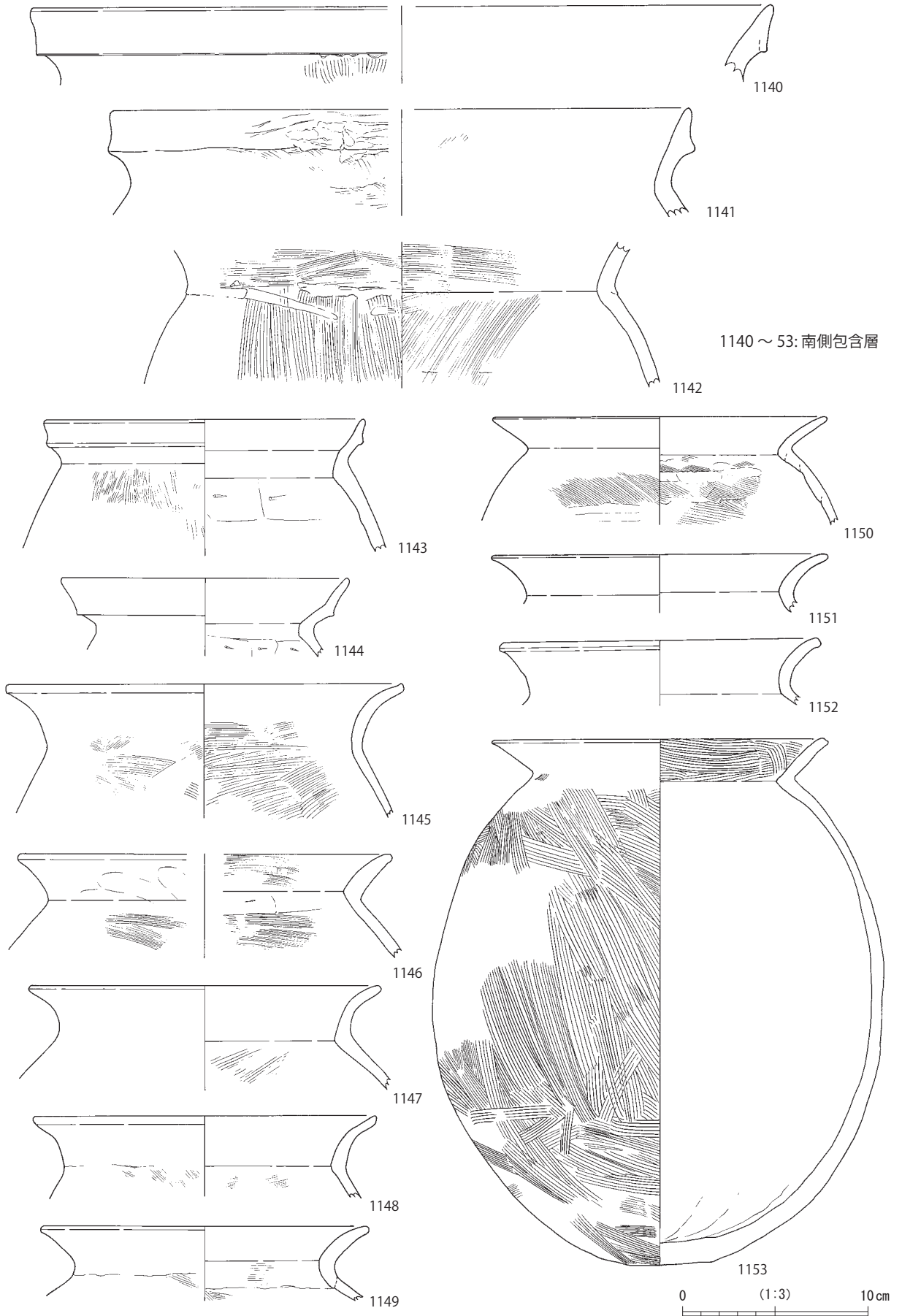
#### 5 包含層出土遺物(第254～258図)

第254図1140～第257図1204は河跡3001(古)の南側包含層から、第257図1205～第258図1217は河跡3001(古)の北側包含層からそれぞれ出土した遺物であり、後者は多くが弥生土器となる。

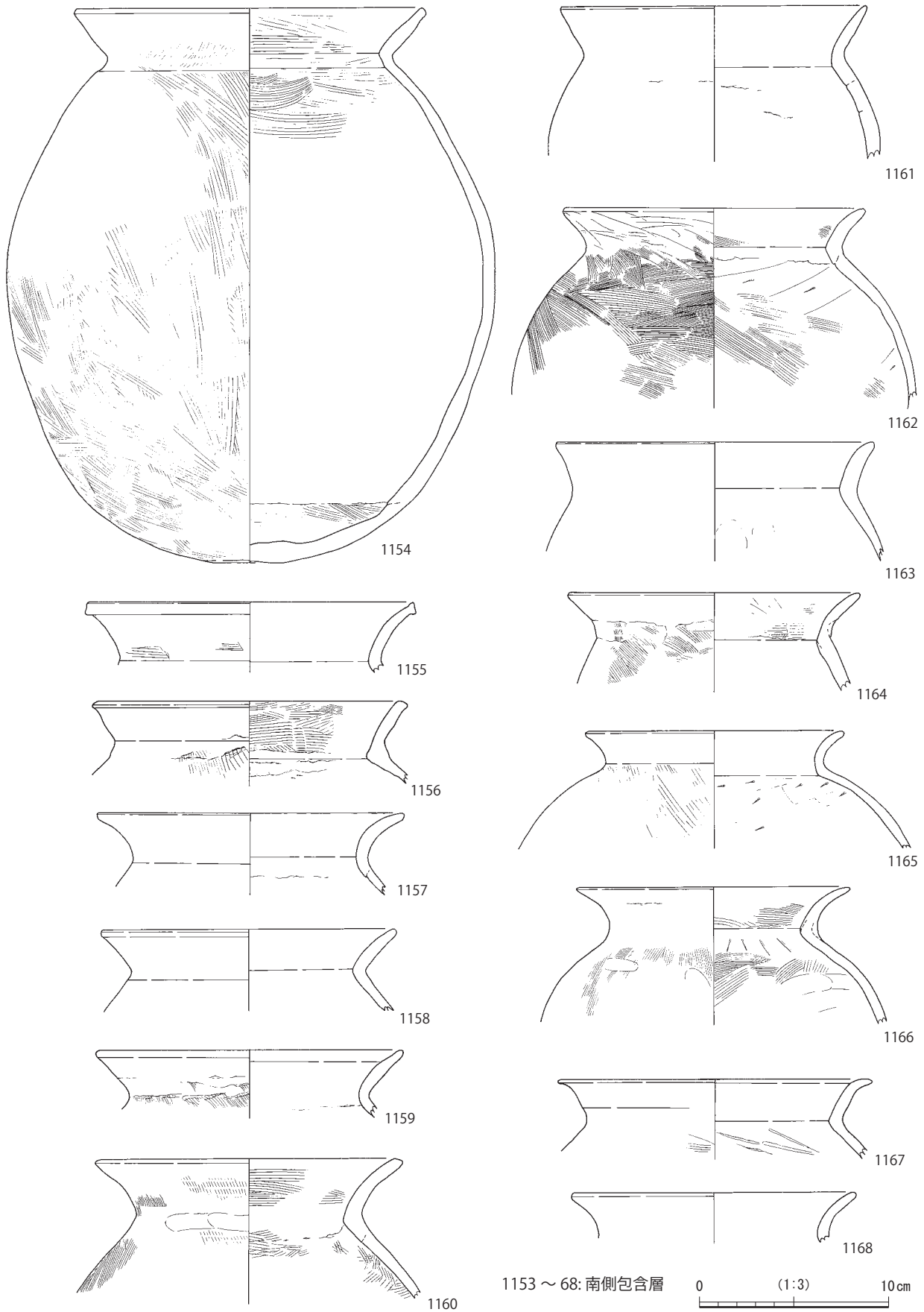
1140・41は、弥生時代後期の大型有段口縁の甕片であり、口径は1140が約40cm、1141が約31cmを測る。1141は、口縁部外面の整形が非常に粗いため、器面は乱れる。土師器の大型甕1142は頸部の接合が粗い他、内外面で異なるハケ原体を用いる。弥生時代終末期の甕1143は口径17.0cmを測り、口縁部内面の屈曲が弱い。土師器甕1144は口径15.6cmを測り、口縁部が大きく外傾する。

古墳時代前期の土師器甕1145～1169は、胴部内外面はハケ調整を基本に、ナデ調整が定量存在する他、ケズリ調整で仕上げた個体も認められる。薄手の1145は口径21.1cmを測る。口縁部はゆるやかに外反しながら長くのび、端部を小さくつまみあげる。1146は頸部で明瞭に屈曲し、頸部内面にケズリ調整を施す。1147は口径18.6cmを測り、胴部外面をナデ調整で仕上げる。1148は口径18.2cmを測り、口縁端部を上方に小さくつまみあげる。1149は口径17.7cmを測り、煮炊き痕が明瞭に残る。1150は頸部で明瞭に屈曲し、胴部内面のハケ調整が粗いため、粘土紐の積み上げ痕がみえる。1151





第254図 G地区 第VI-1面包含層出土遺物実測図1 (S=1/3)



第255図 G地区 第VI-1面包含層出土遺物実測図2 (S=1/3)

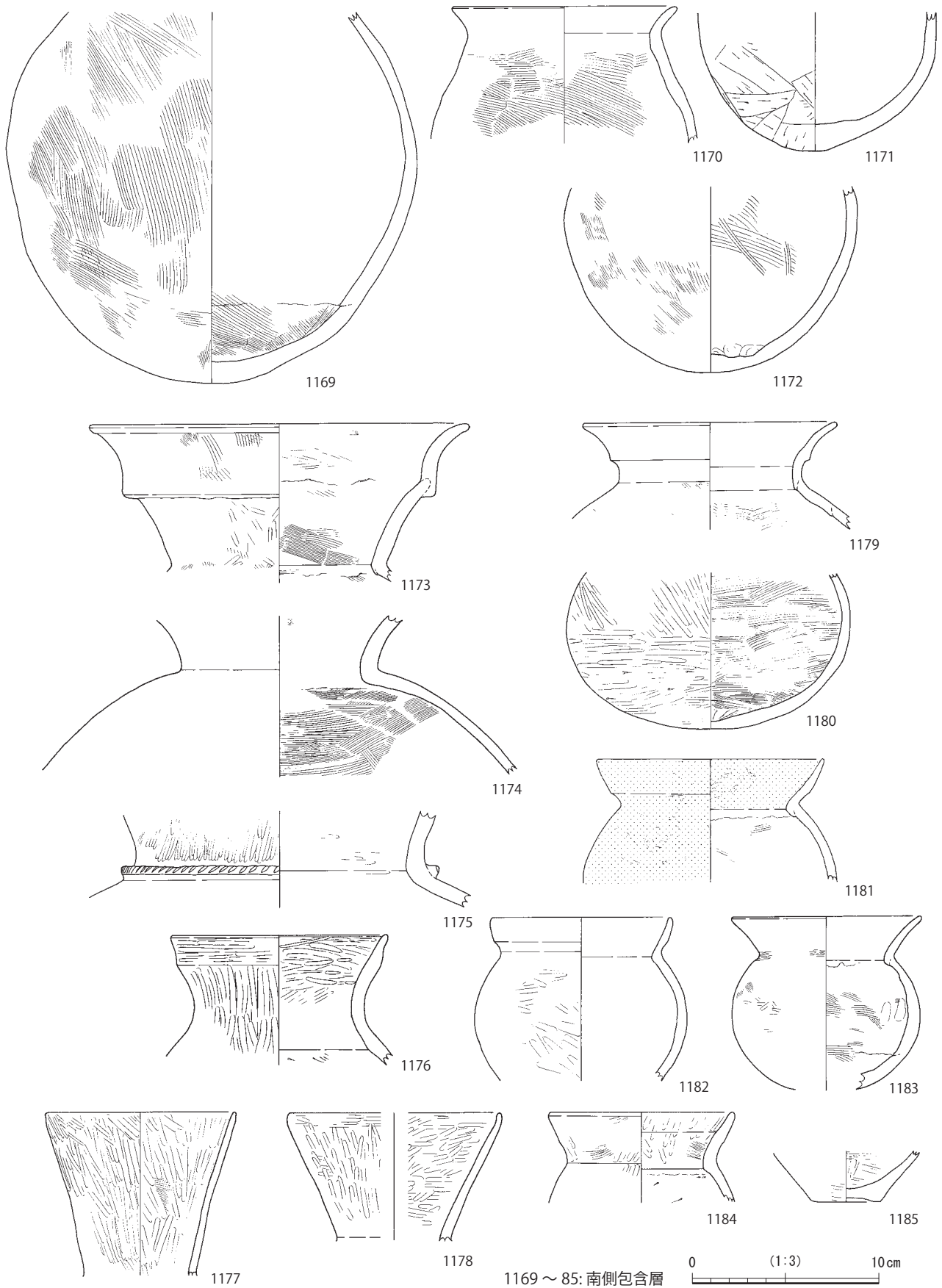
は口径17.7cmを、1152は口径16.8cmを測る。第254図1153は口径17.4cm、器高28.5cmを、第255図1154は口径18.4cm、器高29.4cmをそれぞれ測る。いずれも底部を丸底風につくり、球胴形の胴部内面をナデ調整で仕上げる。また、口縁端部を平坦に面取りし、煮炊きに伴う煤、コゲの付着が認められる。1155は口縁端部を小さくつまみ上げ、平坦とする。1156は煮炊きに伴う煤、ヨゴレが明瞭に残る。1157は口径16.0cmを測り、口縁部はゆるやかに外反する。1158は口径15.4cmを測り、胴部内外面ともナデ調整で仕上げる。1159は口径16.0cmを測る。1160の口縁部は長くのび、端部を平坦とする。1161は口径16.0cmを測り、胴部内外面ともナデ調整で仕上げる。1162は、口縁部外面にハケ調整原体の接触痕、胴部内面上半にケズリ調整痕がそれぞれ認められる。1163は口径16.6cmを測り、頸部の屈曲が弱い。1164の頸部外面は粘土紐の積み上げ痕を残す。球胴形の1165は口径13.9cmを測り、胴部内面にケズリ調整を施す。1166は口径14.1cmを測り、胴部内面は胎土がかなり柔らかい状態でナデ調整を施すことから一部がハケ様にみえる。1167の口縁端部は水平に近く、胴部内面にナデ調整を施す。1168は精良な胎土を用い、煮炊きに伴い煤が付着する。第256図1169は球胴形を呈し、ハケ調整により丸底に仕上げる。1170～72は小型の土師器甕である。1170は口径11.7cmを測り、胴部はナデ肩気味である。1171は、内面にナデ調整、外面にケズリ調整を施し、丸底とする。1172は、煮炊きに用いた痕跡が明瞭に残る。

第256図1173～1185は壺類で、1175・76が弥生土器、それ以外が古墳時代前期の土師器となる。大型・有段口縁の1173は口径20.0cmを測り、口縁端部は大きく外反する。内外面ともハケ調整後に粗いミガキ調整を加える。球胴形の1174は、外面の摩滅が著しい。弥生時代後期の壺1175は、肩部に断面三角形を呈する突帯を貼り付け、刺突文で加飾する。1176は口径11.4cmを測り、先細る口縁部は有段口縁状を呈する。また、ミガキ調整は、内面に比して外面が丁寧である。1177・78は器肉が薄く、内外面とも丁寧なミガキ調整を加える。二重口縁様の1179は口径17.6cmを測り、精良な胎土を用いる。1180は、横に張った球胴形を呈する。赤彩を施す1181は口径12.0cmを測り、古墳時代前期後半に位置付けられる。1182・83は口径10cm前後を測り、胴部外面にミガキ調整を加える。口縁部の形状は、1182は内湾気味であるのに対して、1183は直線的に外傾する。1184は口径9.7cmを測り、口縁部は内湾気味に立ち上がる。胎土は精良である。1185は、内面にミガキ調整を施すことから鉢の可能性をもつ。

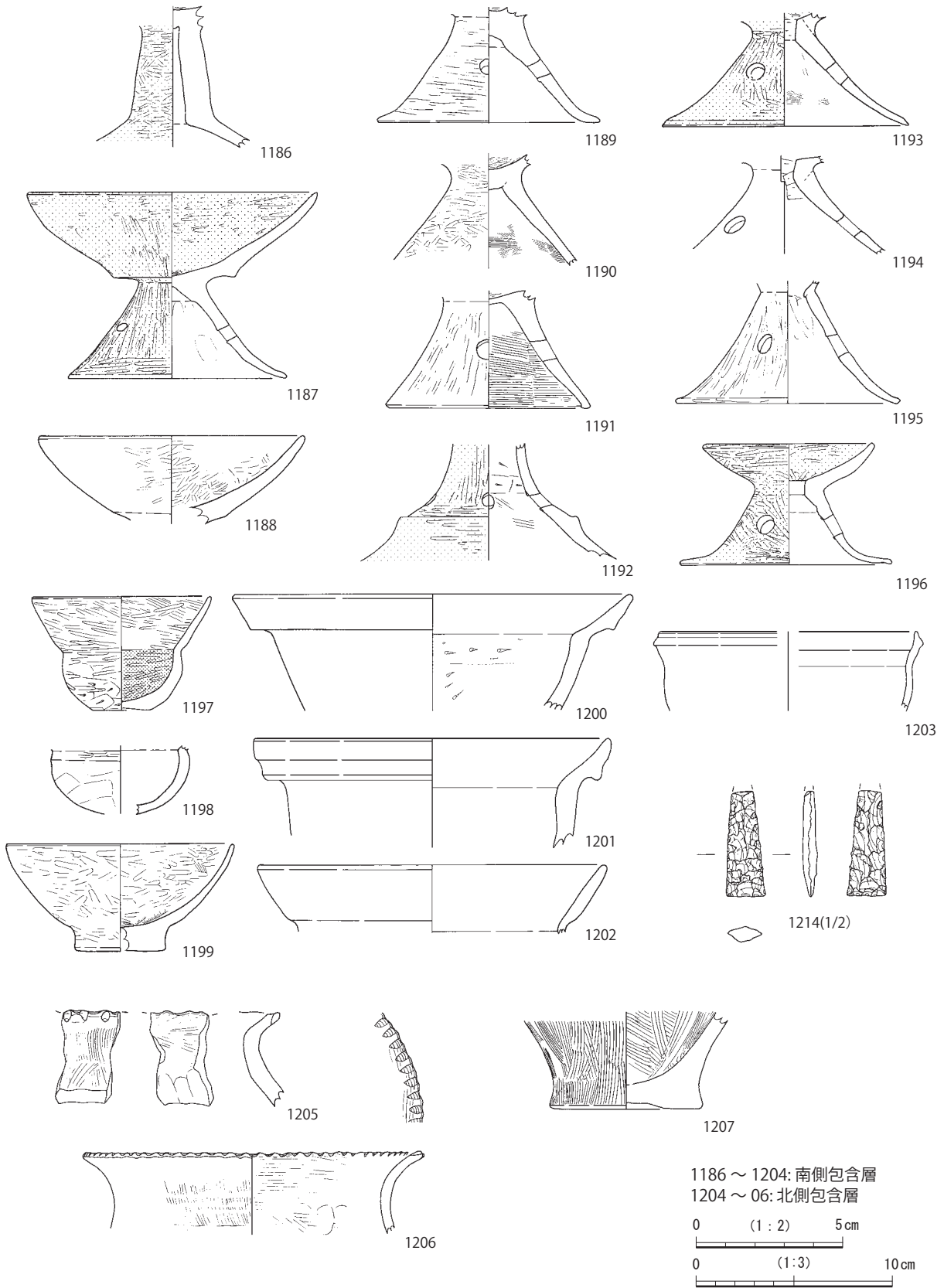
第257図1186～1191は、土師器高坏である。1186は、外面にわずかに赤彩が残る。1187は口径14.7cm、器高9.5cmを測り、濃赤色の赤彩を施す。坏体部は内湾気味で、大きくひろがる脚裾部3ヶ所に円孔を穿つ。1188は口径13.5cmを測り、外面は2次被熱により煤が付着する。1189の外面は、ハケ調整の後にミガキ調整を加える。1190・91の脚部に穿たれた円孔の数は不明である。1191は脚端部を平坦にする点、内面にハケ調整を施す点で、他の高坏と異なる。弥生時代後期～終末期の器台1192は、摩滅が著しい。土師器器台1193～96は、脚部3ヶ所に円孔を穿つ。1193は赤彩を施し、1194は赤彩を意識した橙色の色調を呈する。1196は口径8.5cm、器高6.2cmを測り、脚裾部は先細りながら外展する。

1197～99は、土師器小型鉢である。平底の1197は口径9.1cm、器高5.8cmを測り、体部内面は黒色処理様の器面を呈する。1198は底部外面を手持ちケズリで整形する。塊状の1199は口径11.5cm、器高5.5cmを測り、胎土中に混和材が多く混ざる。土師器鉢1200は口径20.0cmを測り、有段の口縁部は大きく外傾する。弥生時代後期の有段口縁の壺1201は、器肉が厚い。土師器1202は口径17.6cmを測り、甕と考えられる。薄手の1203は弥生時代後期の甕と考えられ、口縁端部を上方に小さくつまみあげる。長身・平基形の石鏃1214は、黒色のガラス質安山岩製であり、先端部が欠損する。

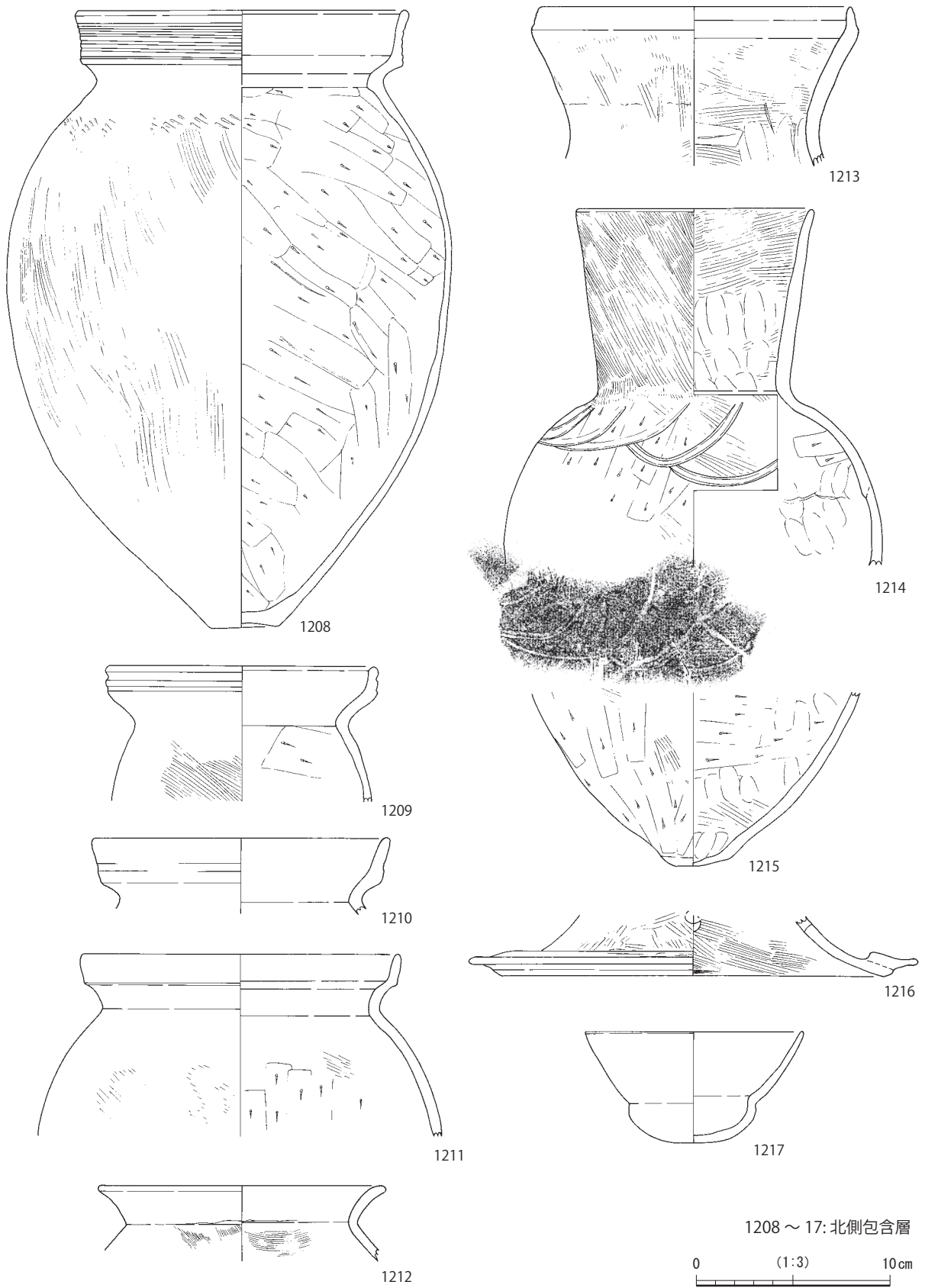
第257図1205～第258図1217は、河跡3001(古)以北から出土し、古墳時代前期に属する1211・12・16以外は弥生土器である。弥生土器甕1205～1207は、本来、第VI-2面に属する。1205は口縁部を短く



第256図 G地区 第VI-1面包含層出土遺物実測図3 (S=1/3)



第257図 G地区 第VI-1面包含層出土遺物実測図4 (S=1/2・1/3)



第258図 G地区 第Ⅵ-1面包含層出土遺物実測図5 (S=1/3)

折り曲げ、端部を連続した刻みで加飾する。1206は口径17.0cmを測り、口縁部はゆるやかに外反する。1207は、底部外面にケズリ調整を施す。第258図1208・09は弥生時代後期後半に属する有段口縁の甕である。1208は口径16.9cm、器高32.0cmを測り、口縁部外面を擬凹線、肩部外面を斜行刺突文で加飾する。1209は口径13.7cmを測り、口縁部外面に2条の凹線文を施す。磨滅した甕1210は口径15.2cmを測り、弥生時代終末期に属するものと考えられる。土師器甕1211は口径16.2cmを測り、有段の口縁部は短く直立する。土師器甕1212は口径14.8cmを測り、煮炊きに伴う煤、ヨゴレが付着する。1213～15は壺で、1214と1215は胎土の特徴から同一個体の可能性が高い。1213は口径16.0cmを測り、有段状の口縁部が内傾気味である。直口の1214は口径12.2cmを測り、肩部外面を乱れた弧状文で加飾する。1215は、底部が突出する。器台1216は、脚端部に突帯を貼り付けた後に、ミガキ調整を施す。古墳時代前期後半の土師器小型鉢1217は口径11.5cm、器高5.7cmを測り、口縁部は内湾しながら長くのびる。磨滅が著しいため、調整は判然としない。

## 6 小 結

第VI-1面では、第IV面河跡3001(古)南側において土坑(SK)5基、溝(SD)約25条、落ち込み(SX)1ヶ所、ピット多数を検出した。出土遺物から弥生時代後期後半～古墳時代前期と、比較的存続期間の長い生活面であり、その中で弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物は目立たない存在となる。

主な遺構の所属時期は、弥生時代後期後半がP6005、古墳時代前期がSK6001、SK6002、SD6001、SD6004、SX6001となる。また、第IV面河跡3001(古)を挟んで、北側の調査区で明確な遺構が検出できず、弥生時代後期後半の遺物が多い一方、南側の調査区で古墳時代前期を主体とした遺構・遺物を確認できたことは、おそらく調査区東側に展開した集落の中心域の差を反映したものと考えられる。さらに、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての集落活動は低調であった可能性が高いことも指摘できよう。

第IV面河跡3001(古)南側で検出した古墳時代前期の様相は、遺物量が当該期の他遺跡に比して少ないことを加味すれば、連続する第4次調査F地区第VI面と同様に、集落域の縁辺部に近い印象が強い。現段階で復元しうる集落の構成要素として、平面不整形を呈する竪穴状遺構SK6001(長軸3.16m)、略長楕円形の範囲を取り囲む外周溝SD6004、何らかの区画を示す屈曲した溝SD6001、SD6004があげられる。さらに、これまでの当該期の事例・研究<sup>(15)</sup>と対比すれば、溝掘り方の不安定さ(掘り方プランの不安定さ)、建物柱穴の欠落、外周溝とした場合の出土遺物の欠落等から、その復元にかなりの躊躇を覚えるが、第259図で示した復元建物4棟について、あくまで可能性として提示しておきたい。具体的には、SD6035を南西側の外周溝とする平地建物(1×1間、出土遺物なし、支柱穴欠落)、SD6034等を外周溝とする平地建物(1×1間、出土遺物なし)、SD6042・43、SK6032を外周溝とする平地建物(出土遺物なし、支柱穴特定できず)、SK6001を中心とするような柱穴群(径約6.2m、6本支柱)である。今後、調査事例の増加を待って、その位置付けを行いたい。

### 【註】

(15) 田嶋明人1991「北陸の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物—本編—』埋蔵文化財研究会

岡本淳一郎2003「『周溝をもつ建物』の基礎的研究」『富山大学考古学研究室論集 蜃気楼—秋山進午先生古希記念—』秋山進午先生古希記念論集刊行会、六一書房

久田正弘2004「第2節 多角形建物の覚書」『志賀町穴口遺跡・穴口貝塚』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター (財)石川県埋蔵文化財センター 2008『弥生時代の家と村』平成20年度環日本海文化交流史調査研究会発表要旨・資料集



第259図 G地区 第VI-1面主要遺構復元案(S=1/300)



第56表 G地区 第VI-1面出土土器類観察表1

※( )は残存法量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
252	1125	F-22-4、G-22-3地	P6005、包含層(土層c)	弥生土器	高坏	31.7	-	(9.5)	黄橙、黒褐	黄橙	粗砂並、赤色粒・海綿骨針少	良	ミガキ	ミガキ	口12/36	内外面赤彩痕あり。2ヶ所に把手の剥離痕	H16C12
252	1126	F-23-2	SD6001⑦	土師器	壺	17.8	-	(6.8)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口9/36	外面薄く煤付着	H16C31
252	1127	F-23-2	SD6001②③、包含層(土層c)	土師器	壺	13.5	-	(20.0)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫・赤色粒・海綿骨針少	良	ハケ、ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	口34/36	外面煤付着	H16C14
252	1128	F-23-2	SD6001⑤、包含層	土師器	壺	13.0	-	(4.7)	淡灰黄	淡灰黄	粗砂多、礫多、海綿骨針少	並	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	口3/36	外面一部煤付着	H16C32
252	1129	F-23-2、G-23-1	SD6001⑥、包含層	土師器	壺	12.0	-	(5.5)	淡橙	淡橙	粗砂・礫少、海綿骨針多	良	不明	不明	口15/36	内外面磨減顕著	H16C29
252	1130	F-23-2、G-23-1	SD6001⑤他	土師器	壺	-	-	(22.1)	黄橙	黄橙	粗砂・赤色粒多、海綿骨針少	良	ハケ、ナデ	ハケ、ケズリ	-	貼付異常、外面黒斑あり	H16C18
252	1131	F-23-2	SD6001⑩	土師器	壺	-	5.7	(2.7)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ナデ	ナデ、ミガキ	底27/36	外底に黒斑	H16C28
252	1132	F-23-2	SD6001④	土師器	壺	-	4.1	(6.2)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ナデ	ナデ、ミガキ	底36/36	外面に黒斑	H16C27
252	1133	F-23-2	SD6001①、包含層	土師器	壺	-	-	(11.0)	黄橙	橙	粗砂多、礫並、海綿骨針少	並	ナデ、ハケ	ヨコナデ、ミガキ	-	二次煤熱で煤付着。内外面磨減顕著	H16C30
253	1134	F-23-2、G-23-1地	G D 6001⑧⑪⑫、VI面包含層(土層c)他	土師器	壺	-	8.3	(20.7)	灰黄	黄橙	粗砂多、赤色粒・海綿骨針少	良	ハケ、ナデ	ハケ、ミガキ	底15/36		H16K94
253	1135	F-23-2	SD6001⑬	土師器	小型鉢	12.8	4.9	5.9	黄橙	黄橙	粗砂非常に多、礫・海綿骨針少	良	ミガキ	ケズリ、ミガキ、ナデ	口21/36	外面に黒斑あり	H16C16
253	1136	F-23-2	SD6001⑨	土師器	小型鉢	9.5	5.2	5.5	橙	橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ	口21/36		H16C17
253	1137	F-20	SX6001(鞍部)	土師器	壺	14.5	-	(7.8)	橙	橙	粗砂多、3mm大礫非常に多	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口9/36	外面煤付着	H16K69
253	1138	F-20	SX6001(鞍部)	土師器	器台	-	-	(6.6)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針少	良	ナデ、ミガキ	ハケ、ミガキ	-	略五角形の孔3ヶ所	H16K70
253	1139	F-20	鞍部	土師器	鉢	7.2	3.1	5.4	黄橙	黄橙	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ナデ	ナデ	口16/36	粘土塊補修痕、外面に黒斑	H16C33
254	1140	F-22-3	包含層(土層c)	弥生土器	壺	約40か	-	(4.1)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫多、焼土・海綿骨針少	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	小片	内面に黒斑あり	H16K75
254	1141	F-22-3	包含層(土層c)	弥生土器	壺	約31	-	(5.8)	黄橙	黄橙	粗砂・礫・焼土・海綿骨針多	並	不明	ハケ、ナデ	小片	磨減顕著	H16K76
254	1142	F・G-22、F-21-4	包含層(土層c)	土師器	壺	-	-	(7.9)	黄橙	黄橙	粗砂・礫非常に多、海綿骨針多	良	ハケ	ハケ、ヨコナデ	-	外面一部煤付着	H17O55
254	1143	G-22-1	包含層(土層c)	弥生土器	壺	17.0	-	(7.2)	黄橙	黄橙	粗砂・礫非常に多、赤色粒少	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口6/36	外面煤付着	H17O50
254	1144	F-23-2	包含層(土層c)	土師器	壺	15.6	-	(4.2)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	口6/36		H16C19
254	1145	F-20	包含層(土層c)	土師器	壺	21.1	-	(7.2)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口2/36	内外面摩耗	H17C43
254	1146	E-21	包含層(土層c)	土師器	壺	約20	-	(5.6)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ハケ、ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	口2/36	外面一部煤付着	H17C58
254	1147	G-21-3	包含層(土層c)	土師器	壺	18.6	-	(5.6)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	口3/36	外面煤付着	H16K80
254	1148	G-21-3	包含層(土層c)	土師器	壺	18.2	-	(4.4)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫多、赤色粒少	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口6/36		H16K87
254	1149	F-22-1	包含層(土層c)	土師器	壺	17.7	-	(4.0)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口9/36	外面煤付着	H16K90
254	1150	F-22-3	包含層(土層c)	土師器	壺	17.7	-	(5.8)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫・赤色粒・海綿骨針少	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口6/36	外面に薄く煤付着	H16K72
254	1151	F-22-3	包含層(土層c)	土師器	壺	17.7	-	(3.1)	黄橙	灰黄褐	粗砂多、礫・赤色粒・海綿骨針少	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口9/36	外面煤付着	H16K73
254	1152	F-22-1・4、G-22-1・3	包含層(土層c)	土師器	壺	16.8	-	(3.6)	黄橙	褐灰	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口25/36	外面薄く煤付着	H17O65
254	1153	G-21-3	包含層(土層c)・集中地点	土師器	壺	17.4	4.3	28.5	黄褐	黄褐	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口35/36	内面下半コゲ・外面煤付着。外底使用に伴い磨耗	H16C21
255	1154	F-22-1・2・4	包含層(土層c)	土師器	壺	18.4	-	29.4	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ナデ	口27/36	外面煤付着	H16C3
255	1155	G-22	包含層	土師器	壺	17.1	-	(3.7)	灰黄褐	灰褐	粗砂並、礫・海綿骨針少	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口9/36	外面一部に工具のあたり痕。煤付着	H16K55
255	1156	F-21-2	包含層(土層c)	土師器	壺	15.8	-	(5.3)	黄橙	黄灰	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口6/36	煤・ヨゴレ付着	H16K84
255	1157	G-22-1	包含層(土層c)	土師器	壺	16.0	-	(4.3)	橙	橙	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口15/36	外面一部煤付着。磨減顕著	H16K79
255	1158	F-23-2	包含層(土層c)	土師器	壺	15.4	-	(4.3)	淡橙	淡橙	粗砂・礫・赤色粒多、海綿骨針少	並	ヨコナデ	ヨコナデ	口9/36	外面煤付着。磨減顕著	H16K93
255	1159	F-22-1	包含層(土層c)	土師器	壺	16.0	-	(3.6)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口9/36	外面煤付着	H16K78
255	1160	F-20-4	包含層(土層c)	土師器	壺	15.1	-	(7.4)	淡橙	淡橙	粗砂・礫非常に多、海綿骨針少	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口5/36	摩滅目立つ	H17C48
255	1161	F-22	包含層(土層c)・SD6003-05間	土師器	壺	16.0	-	(8.1)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	口5/36		H17C41
255	1162	F-22-1	包含層(SD6003-05の間)	土師器	壺	15.7	-	(10.6)	黄橙	褐	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ナデ、ハケ	口18/36	外面煤付着	H16C15
255	1163	F-22-2	包含層(土層c)	土師器	壺	16.6	-	(6.3)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫・赤色粒少	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	口6/36	磨減顕著	H16K81
255	1164	G-22-1	包含層(土層c)	土師器	壺	15.2	-	(5.2)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口7/36	口縁部外面煤付着	H17C49
255	1165	G-21-3	包含層	土師器	壺	13.9	-	(6.2)	灰黄褐	灰褐	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	外面煤付着	H16C22
255	1166	F-21-4	包含層(土層c)	土師器	壺	14.1	-	(7.1)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	口2/36	外面煤付着	H17C46
255	1167	G-23-1	包含層(土層c)	土師器	壺	16.4	-	(4.2)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂・礫・焼土・海綿骨針多	良	ナデ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口15/36	外面煤付着。磨減顕著	H16K77
255	1168	F-20	排水溝(暗灰色土)	土師器	壺	14.8	-	(2.7)	黄橙	黄橙	粗砂少	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口6/36	内外面煤付着	H16K66
256	1169	F-22-1・2・4	包含層(土層c)	土師器	壺	-	-	(20.0)	黒褐	黄橙	粗砂・礫多	良	ナデ、ハケ	ハケ、ナデ	-	外面煤付着	H16K26
256	1170	F-22	包含層(土層c)・SD6003-05間	土師器	壺	11.7	-	(7.3)	黄橙~灰	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針多	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口7/36		H17C40
256	1171	G-23-3	包含層(土層c)	土師器	壺	-	-	(7.4)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ナデ	ケズリ、ナデ	-	外面に煤付着	H16K33
256	1172	F-21-4	包含層(土層c)	土師器	壺	-	-	(9.9)	褐灰	褐灰	粗砂多、礫並、海綿骨針少	良	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	-	内底に指頭圧痕目立つ。外面煤付着	H16K47
256	1173	F-22・23	包含層(土層c)	土師器	壺	20.0	-	(8.5)	黄橙	黄橙	粗砂・赤色粒・海綿骨針少	良	ハケ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ、ミガキ	口18/36	内面に煤付着	H17O60
256	1174	F-20	排水溝	土師器	壺	-	-	(8.5)	灰黄褐	橙	粗砂多、礫・赤色粒少、海綿骨針多	良	ハケ、ヨコナデ	不明	-	外面磨減顕著	H16K62

第7節 第VI-1面の遺構と遺物

第57表 G地区 第VI-1面出土土器類観察表2

※ ( ) は残存法量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
256	1175	G-23-1	包含層(土層c)	弥生土器	壺	-	-	(5.1)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多、礫並、海綿骨針少	良	ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	-	貼付突帯・刺突文	H16C7
256	1176	F-22-3	包含層(土層c)	弥生土器	壺	11.4	-	(6.9)	淡黄	灰黄	粗砂多、礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	6/36		H16K74
256	1177	F-21-4	包含層(土層c)	土師器	壺	10.0	-	(8.7)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ミガキ	ミガキ	12/36		H16K88
256	1178	F-21-2	包含層(土層c)	土師器	壺	約11	-	(6.8)	黄橙	黄橙	粗砂並、赤色粒多	良	ミガキ	ミガキ	10/36		H16K86
256	1179	F-21-2	包含層(土層c)	土師器	壺	17.6	-	(5.7)	黒褐	淡黄橙	粗砂並、赤色粒・海綿骨針少	良	ハケ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	10/36	摩滅顕著	H16C11
256	1180	G・F-21	包含層(土層c)	土師器	壺	-	-	(8.4)	黄橙	橙～黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ハケ、ナデ	ケズリ、ミガキ	-		H16C36
256	1181	F-22	包含層(土層c)	土師器	壺	12.0	-	(6.6)	黄橙	赤橙	粗砂・礫・赤色粒少	良	ミガキ、ナデ、ハケ	ミガキ	10/36	内面口縁部・外面赤彩	H17C42
256	1182	F・G-22	包含層(暗灰色砂質土)	土師器	小型壺	9.5	-	(8.8)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ、ミガキ	10/36	摩滅目立つ	H17C57
256	1183	G-23-1、F-23-2	包含層(土層c)	土師器	小型壺	10.0	-	(9.3)	黄橙	黄橙	粗砂少、赤色粒多、海綿骨針少	良	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ミガキ	10/36	外底に黒斑あり。摩滅顕著	H17C47
256	1184	G-21-3	包含層(土層c)	土師器	鉢か	9.7	-	(4.8)	灰黄	灰黄	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ハケ、ミガキ、ケズリ	ハケ、ヨコナデ、ミガキ	10/36	蓋の可能性あり	H16K102
256	1185	F-22-3	包含層(土層c)	土師器	小型壺・鉢か	-	3.7	(2.7)	淡黄橙	淡黄橙	赤色粒・海綿骨針少	良	ハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ、ケズリ	10/36		H16K58
257	1186	F-21-2	包含層(土層c)	土師器	高坏	-	-	(7.2)	灰黄	黄橙	粗砂並、礫・海綿骨針少	良	ナデ	ミガキ	-	外面わずかに赤彩残る	H17C44
257	1187	E・F-22	包含層(土層c)	土師器	高坏	14.7	脚径11.1	9.0	濃赤・黄橙	濃赤	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ミガキ、ナデ	ミガキ	10/36	赤彩。透かし孔3ヶ所(孔径0.7cm)。坏内底は磨耗目立つ	H16C8
257	1188	F-23-2	包含層(土層c)	土師器	高坏	13.5	-	(4.5)	黄橙	黄橙	粗砂少、赤色粒多、海綿骨針多	良	ミガキ	ミガキ	10/36	外面2次被熱、煤付着	H17C39
257	1189	F-22-1	包含層(土層c)	土師器	高坏	-	脚径11.3	(5.9)	灰黄	灰黄	粗砂・礫少	良	ナデ	ミガキ	10/36	透かし孔3ヶ所(孔径0.8cm)	H16K92
257	1190	F-21-2	包含層(土層c)	土師器	高坏	-	-	(5.7)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針多	良	ナデ、ハケ、ミガキ	ミガキ	-	外面一部に黒斑。透かし孔不明	H17C66
257	1191	F-20-4	包含層(土層c)	土師器	高坏	-	脚径10.0	(6.0)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多	良	ハケ、ナデ	ミガキ	10/36	透かし孔1ヶ所(孔径1.0cm)。外面に煤付着	H16K83
257	1192	G-21-3	包含層(土層c)	弥生土器	器台か	-	-	(5.9)	黒・黄橙	黄橙・明赤褐	粗砂多、礫並、海綿骨針少	良	ハケ、ナデ	ミガキ	-	外面赤彩。透かし孔4ヶ所(孔径0.6cm)。摩滅顕著	H16C38
257	1193	F-22-1	包含層(土層c)	土師器	器台	-	脚径12.4	(5.7)	濃赤	濃赤	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ナデ	ミガキ	-	外面赤彩。透かし孔3ヶ所(孔径1.2cm)	H16K91
257	1194	G-21-3	包含層(土層c)	土師器	器台	-	-	(5.0)	黄橙	橙～黄橙	粗砂少、赤色粒多、海綿骨針少	良	ナデ	不明	-	透かし孔3ヶ所(孔径1.1cm)。摩滅顕著	H17C45
257	1195	F-21	包含層	土師器	器台	-	脚径11.4	(6.3)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂・赤色粒多、海綿骨針多	良	ナデ	ミガキ	-	透かし孔3ヶ所(孔径1.0cm)。摩滅顕著	H16C9
257	1196	F-22-1	包含層(土層c)	土師器	器台	8.5	脚径10.8	6.2	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ミガキ、ナデ	ミガキ	10/36	赤彩。透かし孔3ヶ所(孔径1.1cm)	H16C20
257	1197	G-21-3	包含層(土層c)	土師器	小型鉢	9.1	2.8	5.8	黒・黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ、ケズリ	10/36	体部内面黒色処理	H16C37
257	1198	E-20	排水溝(暗灰色土)	土師器	小型壺	-	-	(3.9)	灰黄	灰黄	粗砂並、礫少	良	ナデ	ケズリ、ナデ	-	外面に薄く煤付着	H16K71
257	1199	F-21-3・4	包含層(土層c)	土師器	鉢	11.5	4.4	5.5	黄橙	黄橙	粗砂多、赤色粒・海綿骨針少	良	ハケ、ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	10/36	口縁部入りあり	H17C59
257	1200	F-23-2・4	包含層(土層c)	土師器	鉢	20.0	-	(5.9)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂・礫・赤色粒多、海綿骨針少	良	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ	10/36	摩滅顕著	H16K57
257	1201	F-23-2	包含層(土層c)	弥生土器	壺	約18	-	(5.1)	橙	橙	粗砂多、礫多、赤色粒少	良	不明	ヨコナデ	10/36	摩滅顕著	H16K82
257	1202	G-22-23、F-23-2	包含層(土層c)	土師器	壺か	17.6	-	(3.5)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫・赤色粒・海綿骨針少	良	ヨコナデ	ヨコナデ	10/36	外面一部煤付着	H16K96
257	1203	F-22-4、F-23-2	包含層(土層c)	土師器	壺	約15	-	(4.0)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針少	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	10/36		H16K89
257	1205	G-25	包含層(暗灰色弱粘質土～灰色土)	弥生土器	壺	-	-	(4.7)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫非常に多	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ	小片	板状工具による連続刺突文	H16A13
257	1206	E-26-2	包含層(土器集中地点2)	弥生土器	壺	17.0	-	(4.2)	灰褐	灰褐	粗砂・礫多、海綿骨針多	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	10/36	口縁内面に板状工具による連続刺突文。外面煤付着	H16A39
257	1207	E-26	排水溝	弥生土器	壺	-	7.8	(5.0)	黒褐	灰褐	粗砂多、礫非常に多、海綿骨針少	良	ハケ	ハケ、ナデ、ケズリ	10/36	外底ケズリ。外面煤付着	H17C51
258	1208	E-26-2	包含層(土器集中地点2)	弥生土器	壺	16.9	3.6	32.0	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多、礫非常に多、海綿骨針少	良	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	10/36	瓶口縁6条1単位、肩部刻み。煤・ヨゴレ付着	H16C23
258	1209	F-25	V面試掘坑	弥生土器	壺	13.7	-	(7.0)	黄褐	黄褐	粗砂・礫多、海綿骨針多	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	10/36	沈線文2条	H16C34
258	1210	F-25-1・2	包含層(暗灰色砂質土)	弥生土器か	壺	15.2	-	(3.9)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	10/36		H17C56
258	1211	F-25-4	包含層(土器集中地点1)	土師器	壺	16.2	-	(9.4)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫・赤色粒・海綿骨針少	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	10/36	外面に黒斑、煤付着	H16C25
258	1212	F-25	V面試掘坑	土師器	壺	14.8	-	(3.9)	橙	褐	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	10/36	煤・ヨゴレ付着	H16K65
258	1213	F-25-1	V面ベース土(土層c)	弥生土器	壺	16.0	-	(8.2)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫非常に多、赤色粒・海綿骨針少	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	10/36	口縁部外面に瓶口縁。内外面磨滅	H16K61
258	1214	F-26	包含層(W-5坑東1m土器集中地点1)	弥生土器	壺	12.2	-	約27	黄橙	黄橙	粗砂非常に多、礫少、焼土粒多	良	ハケ、ケズリ	ハケ、ケズリ	10/36	胴部外面に文様	H16C24-1
258	1215	F-26	包含層(W-5坑東1m土器集中地点1)	弥生土器	壺	-	3.6	約27	黒	黄橙	粗砂非常に多、礫少、焼土粒多	良	ハケ、ケズリ	ハケ、ケズリ	10/36	外底に黒斑	H16C24-2
258	1216	F-25-3	包含層	弥生土器	高坏	-	脚径23.5	(3.2)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多、礫並、海綿骨針少	良	ハケ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	10/36	孔数不明(孔径0.8cm)。摩滅顕著	H16C35
258	1217	E-26-2	包含層・土器集中区2(西南)	土師器	小型鉢	11.5	-	5.7	赤褐	黄橙	粗砂並、赤色粒・海綿骨針少	良	不明	不明	10/36	摩滅顕著	H16C26

第58表 G地区 第IV面出土石器観察表

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	残存重量 (g)	備考	実測番号
257	1204	E-25-1	V面ベース第5層淡灰オリープ細砂	石鏃	ガラス質安山岩	(3.6)	1.4	0.5	2.3	黒色	H16石-4

## 第8節 第VI-2面の遺構と遺物 (第260～285図、第59～63表)

### 1 概要(第260～270図)

G地区第VI-2面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。第VI-1面ベース土(第8図土層53～55層(洪水堆積土層オ))を人力で掘り下げて検出した弥生時代中期後葉の集落域であり、本遺跡の一連の調査の中で、初めて確認した生活面となる。遺構検出面は、第VI-1面検出面より30～60cm下がり、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で13.26m(第VI-1面ベース面13.55mより-29cm)、G-23区杭脇で13.44m(同14.02mより-58cm)、北東端(G-26区杭南東3m)で13.61m(同約14.00mより-約40cm)、北端(F-26区杭西8m)で13.00m(同約13.35mより-約35cm)をそれぞれ測る。また、遺構検出面の標高は12.85～13.60mを示し、G-25区付近が最も高くなる。また、調査区内の標高差は、Gライン(北東-南西方向)が約0.3m、23ライン(南東-北西方向)が0.3m弱、26ライン(同)が約0.6mを測る。第VI-1面と同様に、北西～西側に向けて傾斜する地形であり、第IV面河跡3001(古)北側における南北方向の傾斜がより強い。

第VI-1面～第VII-2面の基本的な土層層序は、第IV面河跡3001(古)北側と南側で若干様相が異なる。第5節で記したとおり、第IV面河跡3001(古)北側の土層層序(第231～233図)は、下層から順に第VI-2面遺物包含層(土層e(濁暗灰色細砂、厚さ15～24cm)、同図土層断面1-1'第22層、同2-2'第15層等)と、第VI-1面遺物包含層(土層c(暗灰褐色砂質土)、第231図土層断面図1-1'第15層、同2-2'第13層等)が堆積する。間層(第231図土層断面1-1'第16・17層、同2-2'第14層等)の形成は、かなり貧弱でありつつも、調査区北側および西側で第VI-2面遺物包含層を浸食する。なお、次節で記すように、第VI-3面の形成(大規模な土砂流入・堆積)により、第VII-1・2面は損壊し、確認できない。

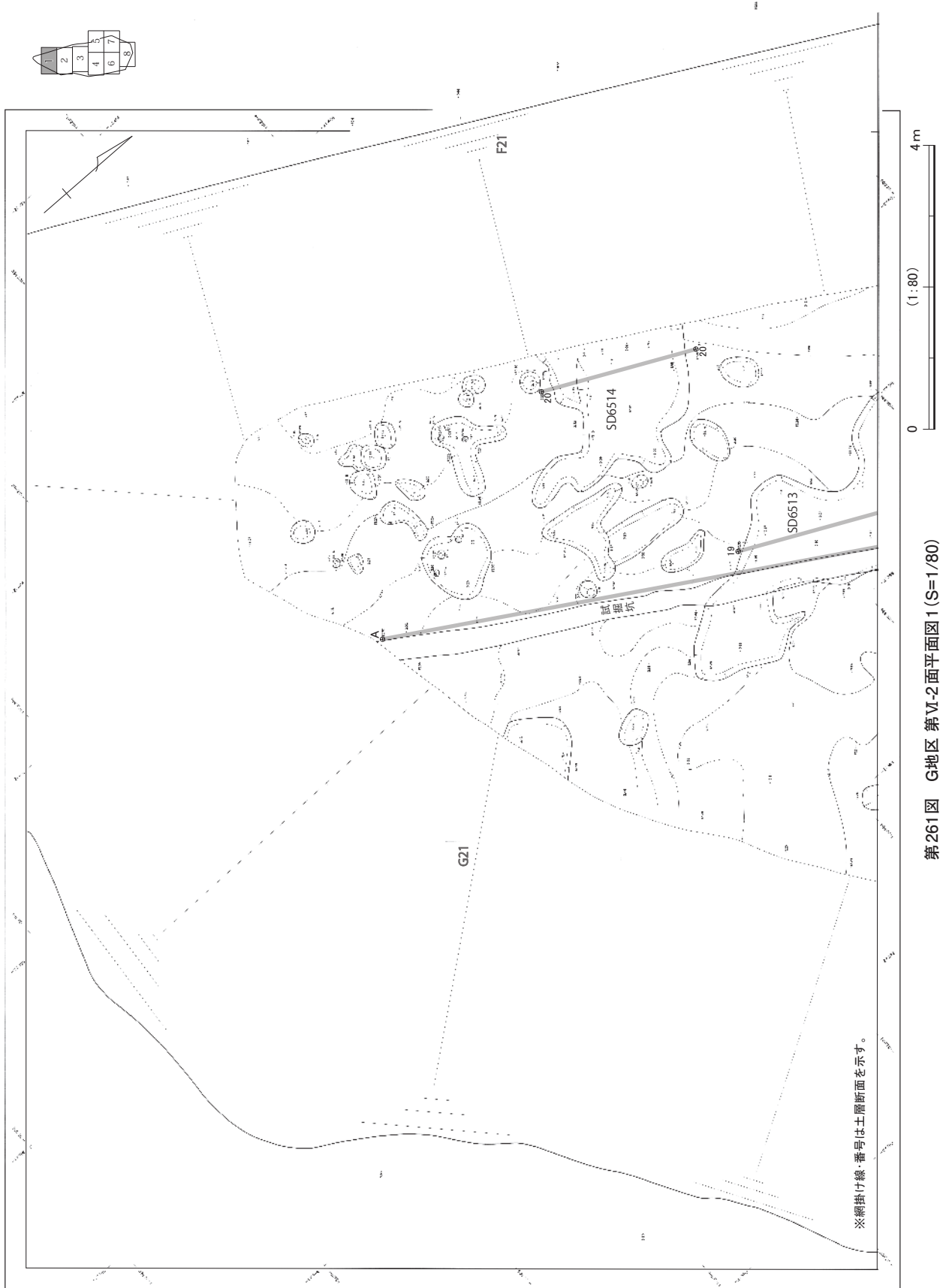
一方、第IV面河跡3001(古)南側の土層層序(第269・270図)は、下層から順に第VII-2面遺物包含層(淡灰オリブ色弱粘質土(第269図第36・37層、第270図第17・18層)、第VII-1面遺物包含層(濁灰色細砂(同図第29層、第7層)、第VI-2面遺物包含層(土層e(暗灰色細砂等)、同図第3・4層)、第VI-1面ベース土層(茶灰色粗砂、同図第1層)が、若干の傾斜を示しつつ水平的に堆積する。また、土砂流入・堆積を示す無遺物の間層は、第VI-2面遺物包含層と第VII-1面遺物包含層との間で、第VI-3面に相当すると考えられる淡灰色粗砂(第269図第13層)、濁暗灰褐色細砂(第270図第4・5層)が、部分的に厚さ10cm前後堆積する程度である。これらから、第IV面河跡3001(古)南側については、第VII-2面(縄文時代中期)～第VI-2面(弥生時代中期後葉)にかけて、大規模な土石流災害の発生痕跡は認められず、比較的安定的な状況が続いたものと想定できる。続く、第VI-2面遺物包含層と第VI-1面遺物包含層の間は、第VI-1面ベース土層(茶灰色粗砂、厚さ20～40cm)の存在から、かなりの規模の土砂流入・堆積が想定できる。

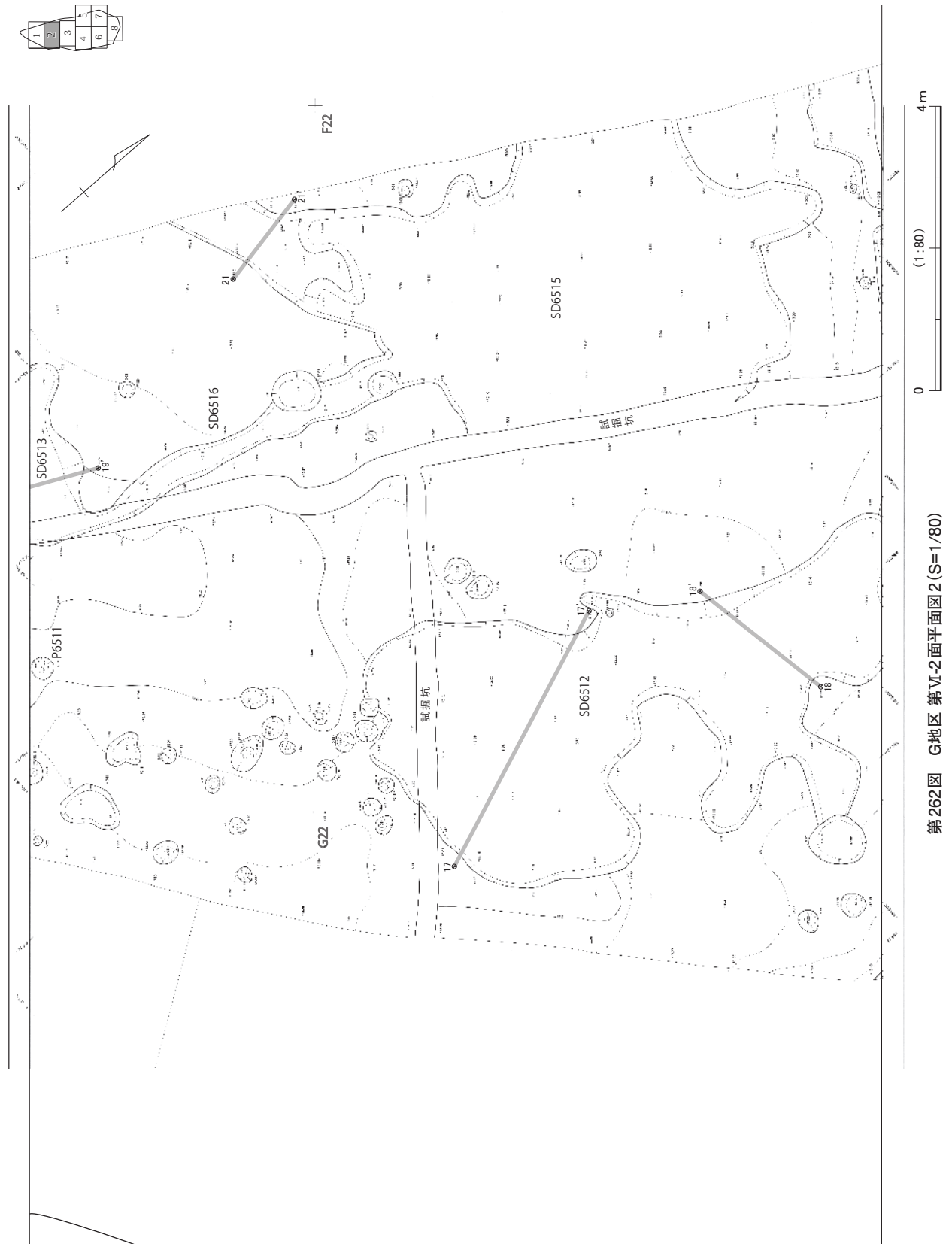
以上、整理すれば、第VII-1面と第VI-2面の間に発生した土石流災害(第VI-3面:土石流災害6)は、傾斜の強い調査区北側で限定的に大きな影響を及ぼすのに対して、第VI-2面と第VI-1面の間に発生した土石流災害(第VI-1面ベース土層:土石流災害5)は、より厚い堆積を示す第IV面河跡3001(古)南側を中心に、第IV面河跡3001(古)北側で一部の第VI-2面遺物包含層を押し流すような、広範に影響を及ぼす規模であったものと想定できる。

調査の結果、第IV面河跡3001(古)北側を中心に周溝をもつ建物1棟(SI651)や、土坑(SK)4基、遺物包含層の浅い落ち込みを含む溝(SD)14条、不明遺構(SX)2基、ピット200基以上を検出し、調査区外東側に中心域をもつ弥生時代中期後葉の小規模な集落の一部を調査したものと推定できる。遺物は、SI651の外周溝を主体に弥生土器の他、集落内での石器製作を示す黒色を呈するガラス質安山岩の剥

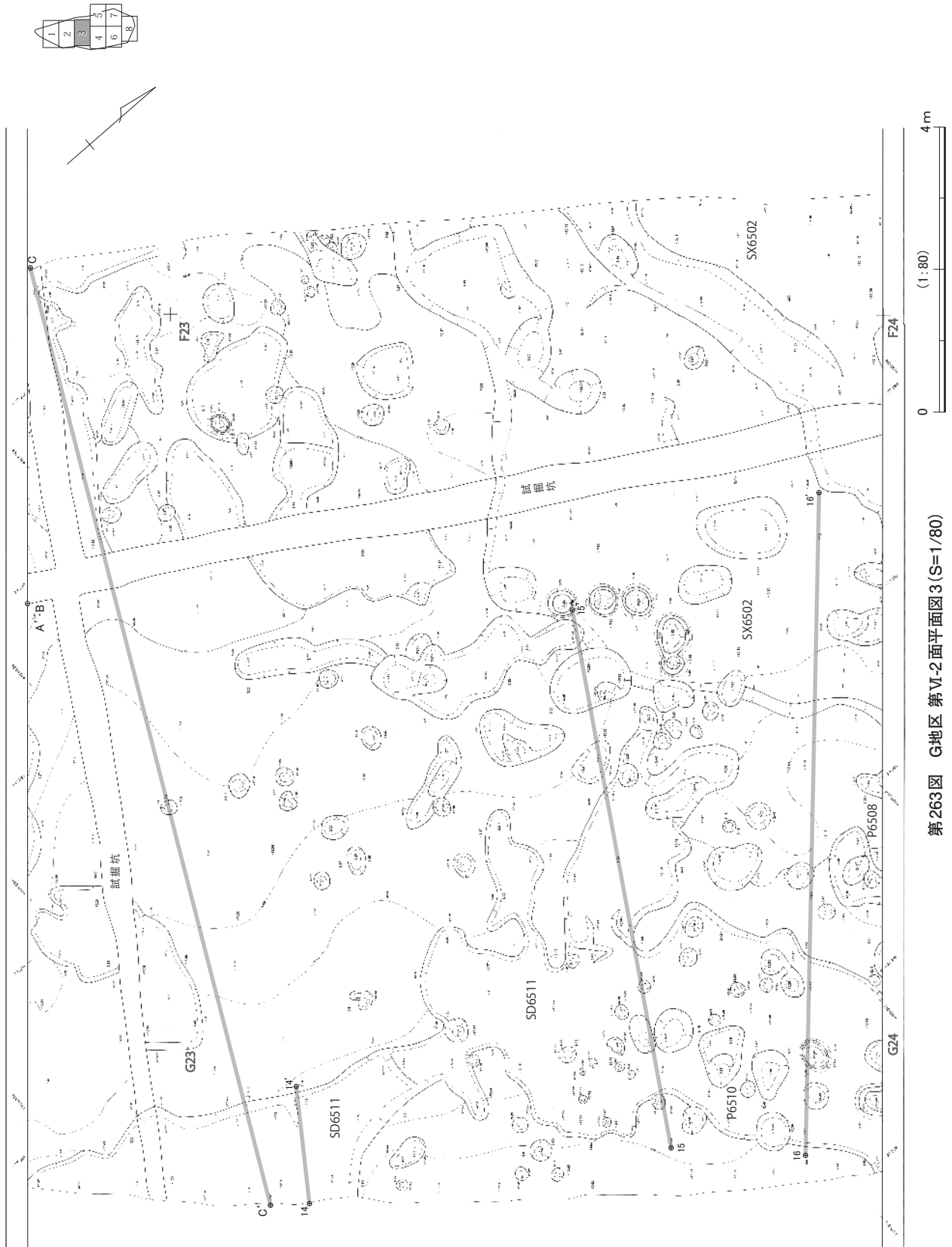


第260図 G地区 第VI-2面平面図(S=1/300)

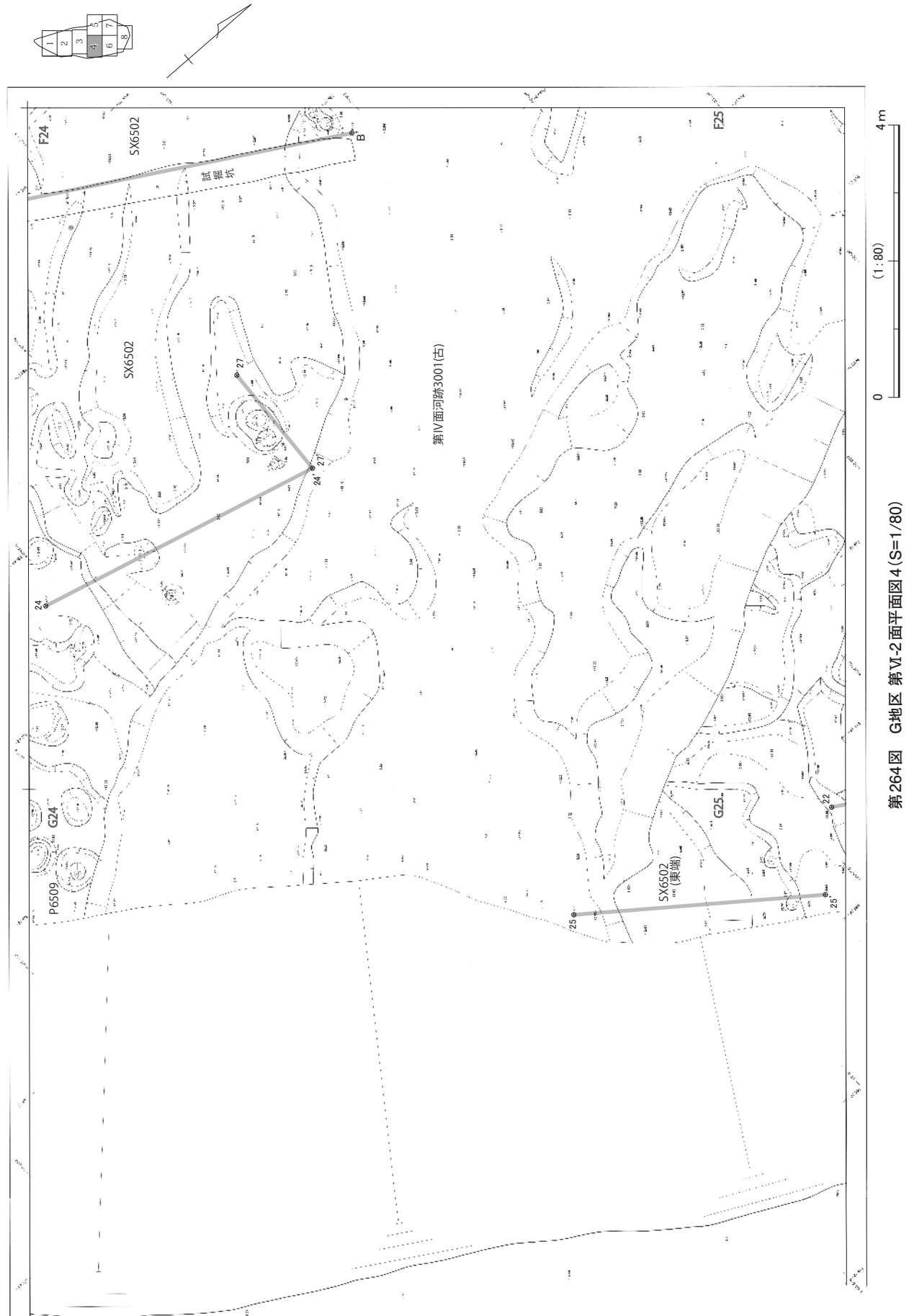




第262図 G地区 第VI-2面平面図2 (S=1/80)

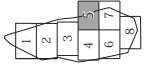


第263図 G地区 第VI-2面平面図3(S=1/80)

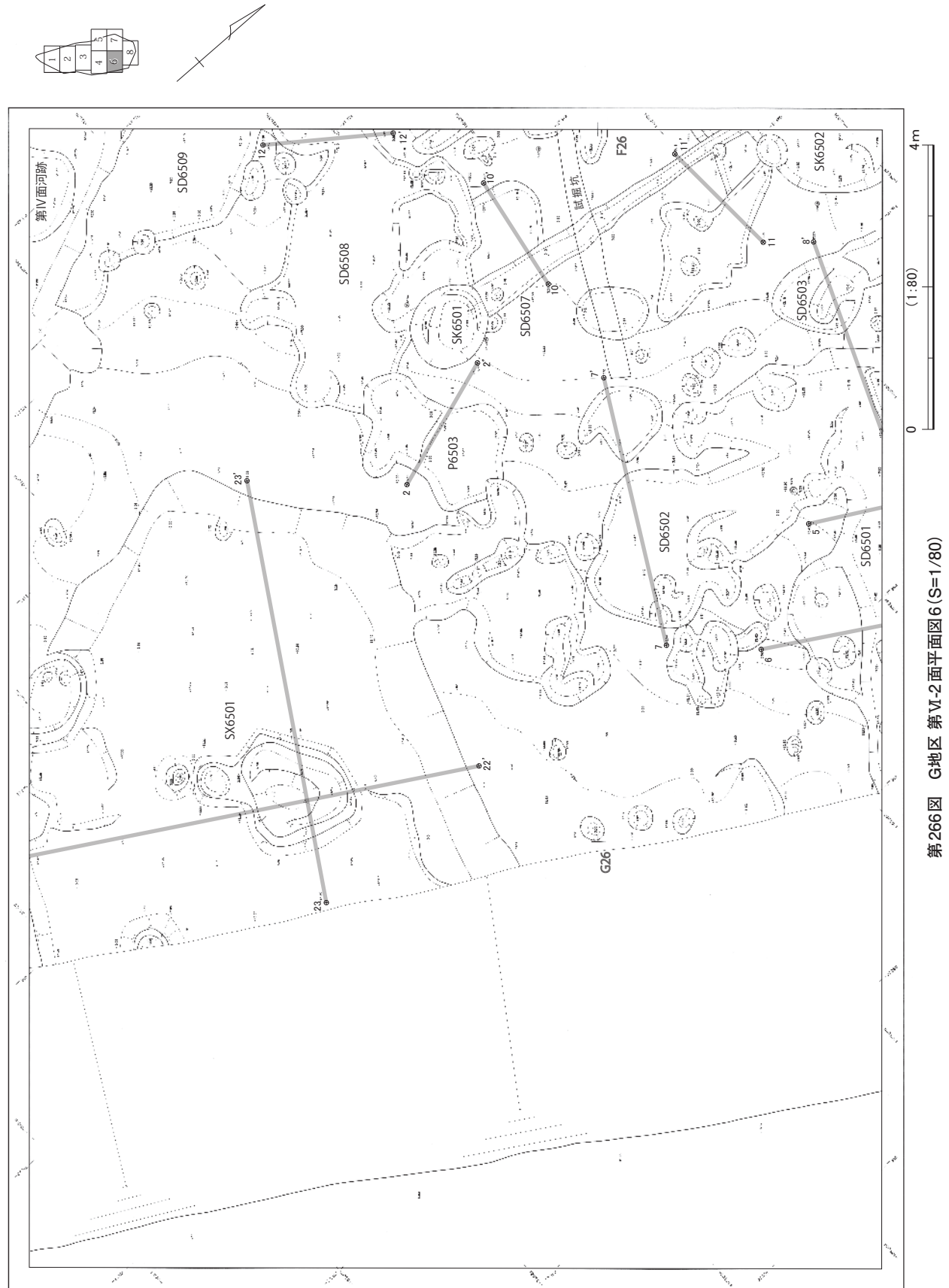


第264図 G地区 第VI-2面平面図4 (S=1/80)

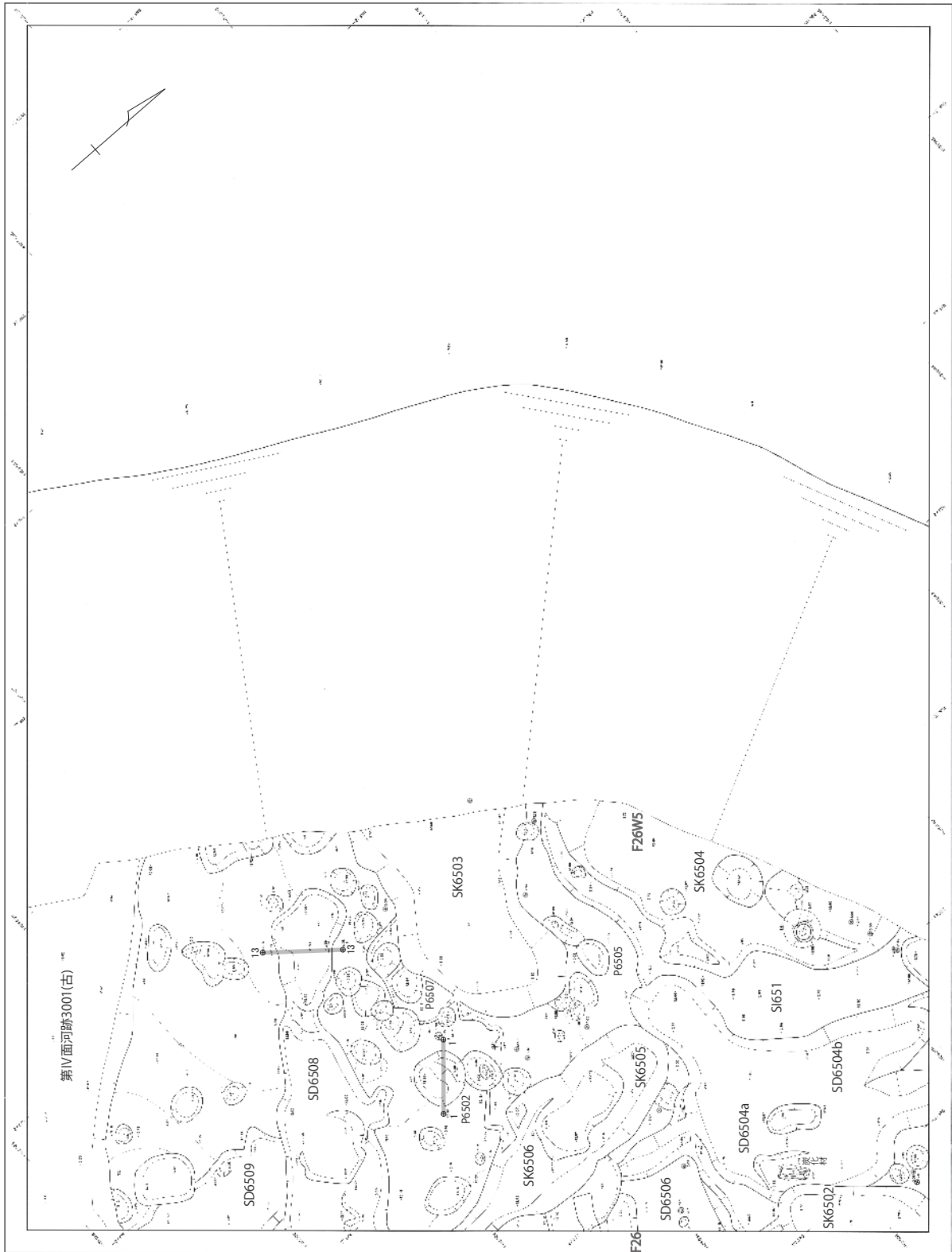
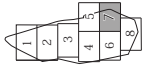




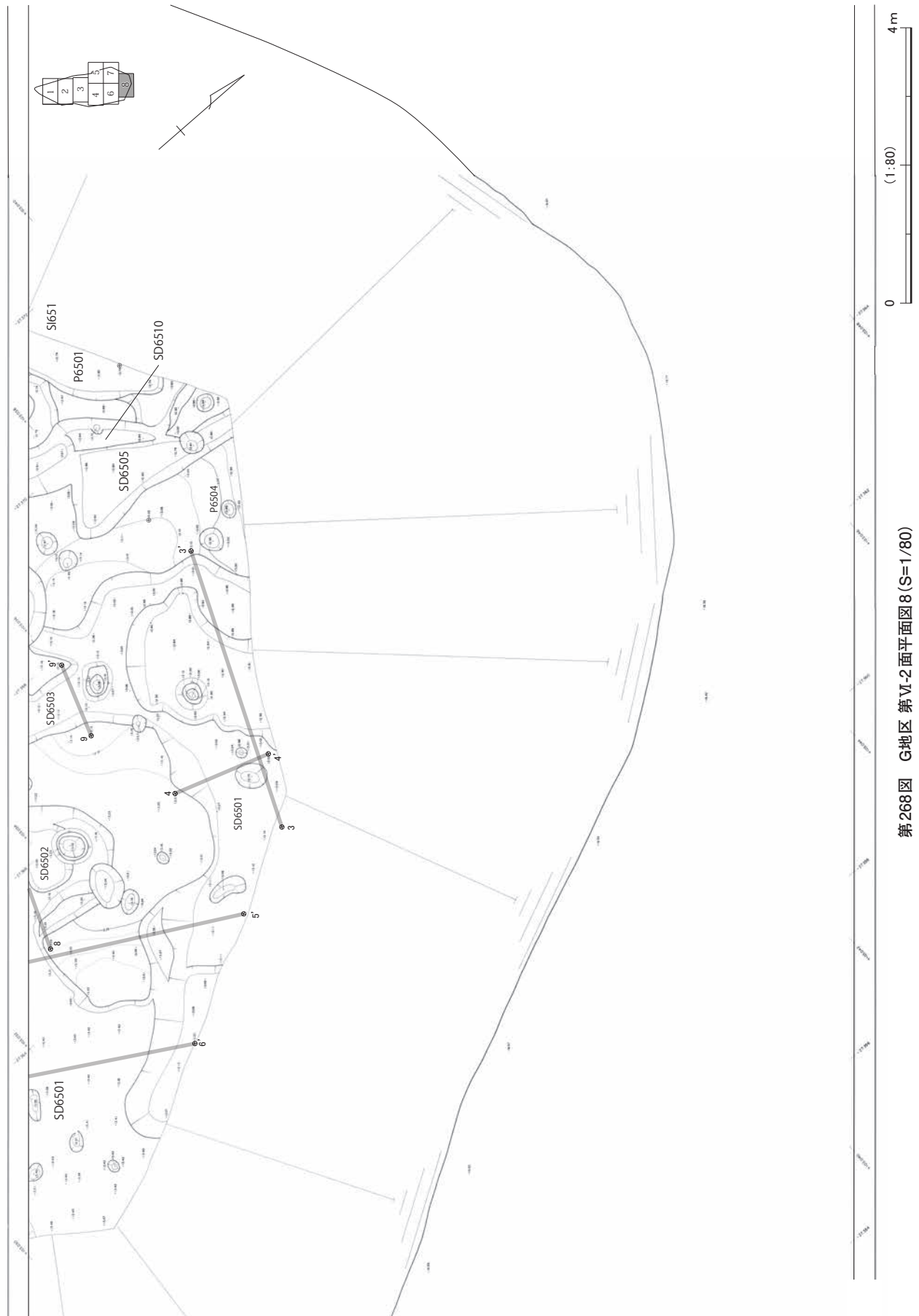
第265図 G地区 第VI-2面平面図5 (S=1/80)



第266図 G地区 第VI-2面平面図6 (S=1/80)

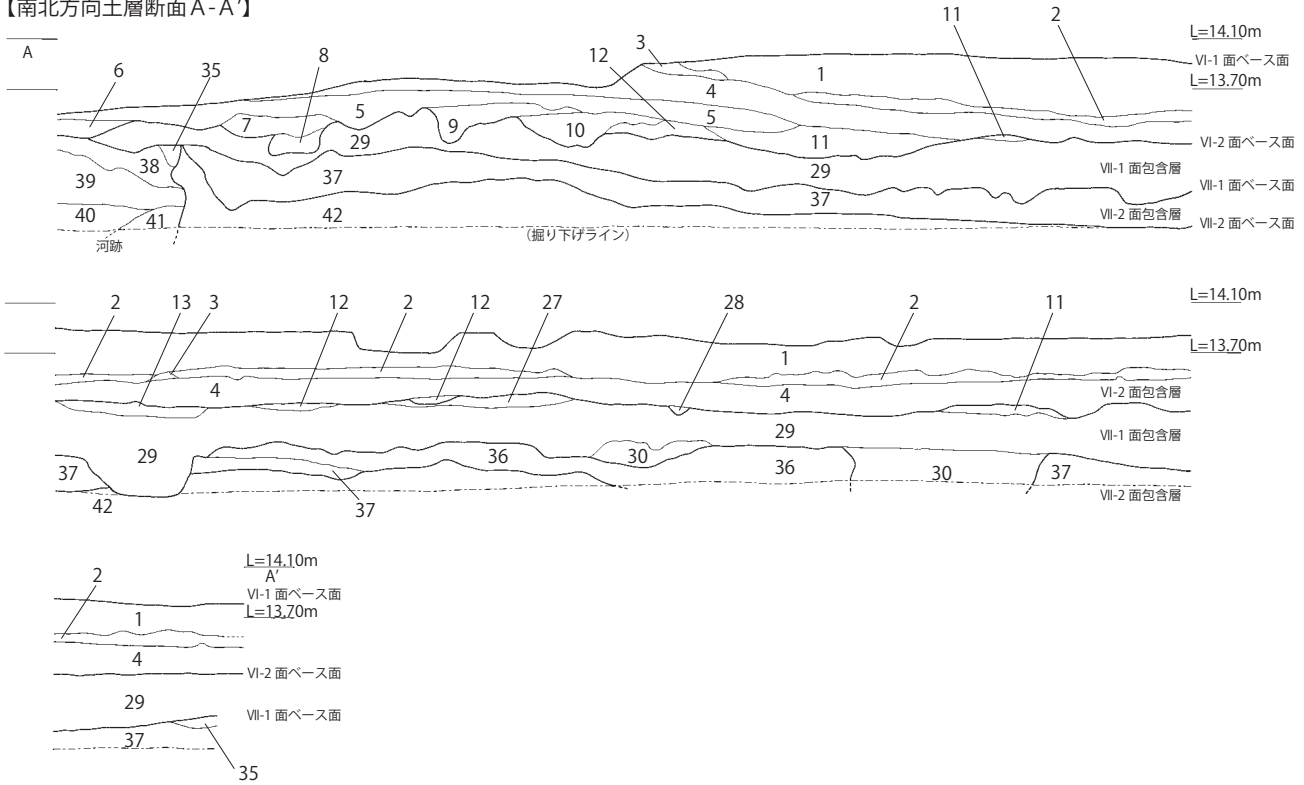


第267図 G地区 第VI-2面平面図7 (S=1/80)

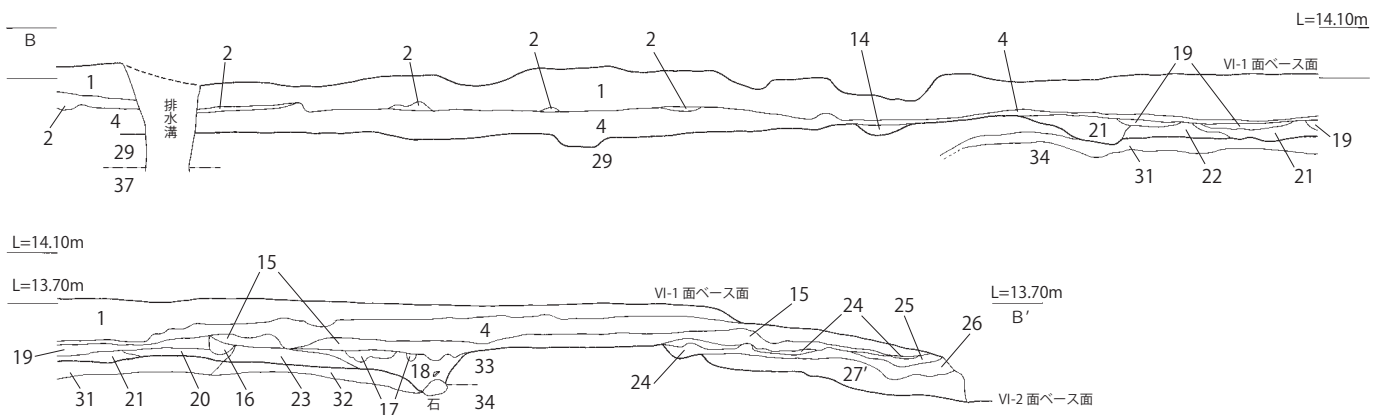


第268図 G地区 第VI-2面平面図8 (S=1/80)

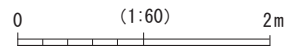
【南北方向土層断面A-A'】



【南北方向土層断面B-B'】

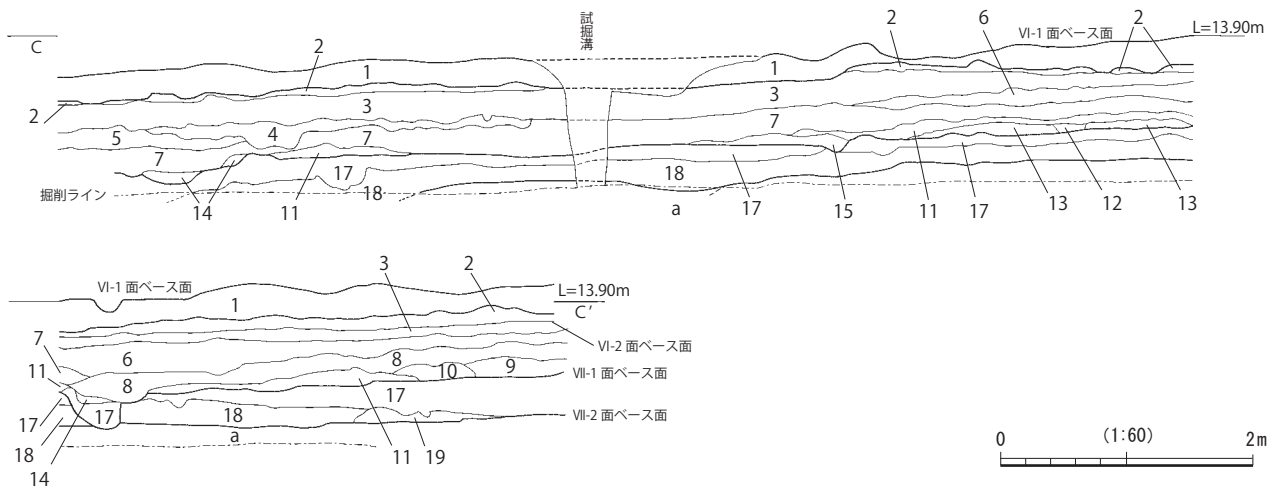


- |                           |                                       |                                     |
|---------------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 茶灰色粗砂(第VI-1面ベース土)       | 19 14層と濁暗灰褐色細砂の混合土                    | 35 37層と同質土(植物遺体が混ざる)                |
| 2 淡灰緑色砂～細砂                | 20 14層と同質土(茶褐色粗砂が混ざる)                 | 36 明オリブ灰色砂質土(粒子が粗い)                 |
| 3 2層と暗灰褐色砂質土の混合土          | 21 14層と同質土(茶褐色細砂が混ざる)                 | 37 にぶい淡灰オリブ色弱粘質土(第VII-2面包含層、炭粒が混ざる) |
| 4 暗灰色細砂(第VI-2面包含層、土層e)    | 22 19層と同質土                            | 38 濁暗灰褐色細砂(河跡覆土)                    |
| 5 暗灰色砂質土                  | 23 濁茶灰色粗砂                             | 39 38層と同質土(38層より明るい)                |
| 6 濁暗灰褐色粗砂(炭粒が混ざる)         | 24 23層と同質土(26層が混ざる)                   | 40 明黄色粗砂(河跡覆土)                      |
| 7 濁灰色粗砂(オリブ色弱粘質土粒、炭粒が混ざる) | 25 4層と同質土(やや明るい)                      | 41 褐色粗砂( " )                        |
| 8 7層と同質土(褐色が強くなる)         | 26 濁淡灰色細砂(褐色砂質土粒、炭粒が混ざる)              | 42 褐色弱粘質土(第VII-2面包含層)               |
| 9 7層と同質土(7層より暗い)          | 27 29層と淡灰色粗砂の混合土                      |                                     |
| 10 5層と同質土                 | 27' 26層と同質土(やや明るい)                    |                                     |
| 11 4層と29層の混合土             | 28 29層と同質土(茶灰色粗砂が混ざる)                 |                                     |
| 12 4層と同質土(淡灰色粗砂が混ざる)      | 29 濁灰色細砂(第VII-1面包含層、オリブ色弱粘質土粒、炭粒が混ざる) |                                     |
| 13 淡灰色粗砂と暗灰褐色砂質土の混合土      | 30 29層と同質土(褐色が強くなる)                   |                                     |
| 14 灰オリブ色細砂                | 31 濁暗灰褐色細砂                            |                                     |
| 15 4層と同質土(褐色が強くなる)        | 32 暗灰色砂質土                             |                                     |
| 16 濁灰褐色砂質土                | 33 濁淡灰褐色粗砂(礫が混ざる)                     |                                     |
| 17 15層と18層の混合土            | 34 濁淡灰色粗砂                             |                                     |
| 18 淡灰色細砂                  |                                       |                                     |



第269図 G地区 第VI-2面～VII-2面土層断面図1(S=1/60)

【東西方向土層断面 C-C'】



- |  |   |
|--|---|
| 1 茶灰色粗砂(第VI-1面ベース土)                                  | 12 10層と同質土(10層より暗い)                                       |
| 2 淡灰緑色砂～細砂   | 13 10層と同質土  |
| 3 暗灰色細砂(第VI-2面包含層、土層e。南北土層断面の土層4に対応)                 | 14 淡灰色細砂  |
| 4 濁暗灰褐色細砂  | 15 11層と同質土(7層主体)  |
| 5 4層と同質土(鉄分沈着が多い)                                    | 16 濁暗灰色弱粘質土   |
| 6 濁暗灰色細砂(第VII-1面包含層、オリーブ色弱粘質土粒、炭粒が混ざる)               | 17 にぶい淡灰オリーブ色弱粘質土(第VII-2面包含層、炭粒が混ざり、しまりない。南北土層断面の土層37に対応) |
| 7 濁灰色細砂(第VII-1面包含層、オリーブ色弱粘質土粒、炭粒が混ざる。南北土層断面の土層29に対応) | 18 にぶい淡灰オリーブ色弱粘質土(第VII-2面包含層、炭粒が混ざり、固くしまる。南北土層断面の土層37に対応) |
| 8 濁暗褐色砂質土  | 19 18層と同質土  |
| 9 8層と同質土(8層より褐色が強い)                                  | [第VII-2面ベース土]a 褐色弱粘質土(固くしまる)                              |
| 10 濁淡褐色砂質土(淡灰色粗砂が混ざり、鉄分沈着)                           |   |
| 11 淡灰色粗砂と7層の混合土                                      |   |

第270図 G地区 第VI-2面～VII-2面土層断面図2(S=1/60)

片や磨滅した小骨片が出土した。

## 2 周溝をもつ建物(SI) (遺構：第271・272図、遺物：第273～275図)

SI651 E-25・26区で検出した弧状の土坑・溝群の連なりを外周溝と考えて復元した建物で、調査区外北西側にのびる。建物は、SK6503、SK6504、SD6504a・b、SD6505、SD6510で構成され、SK6504以外は外周溝とする。南東辺の外周溝は、遺構の切り合い関係から4回の掘り直しが認められ、古い順からSD6504a(幅約150cm、深さ34cm)→SD6504b(同75～100cm、35～45cm)→SD6510(同70cm前後、25～40cm)→SD6505(同40～100cm、25～40cm)となる。一方、南西辺の外周溝となる幅広のSK6503(幅260cm、深さ44cm)は掘り返しの痕跡が認められない。やや崩れた略円形を呈するSK6504は、外周溝とする場合、囲まれる内部空間が径3m以下と極めて狭くなり、掘り返しのない水平な土層堆積(第271図)の状況からも、竪穴部の掘削と考えた<sup>(16)</sup>。壁周溝は認められず、主柱穴は判然としない。SI651を竪穴系の建物とした場合、外周溝は外径約12m、内径約8.6m、幅0.4～2.6m、深さ24～52cm、竪穴部は径6.7m前後、深さ34～46cm、外周溝内径と竪穴部の間幅1～1.6mとなる。連結土坑群で構成される外周溝をもつ竪穴系建物は、平地系建物の影響を受けたあり方を示す可能性をもつ。

なお、SI651の南東側に接して、幅広で浅い掘方をもつSD6508の一部、P6503、SD6502の一部が、弧状に近い配置を呈しており、平地建物を構成する外周溝の可能性を多分に残す(第279図)。主柱穴が特定できないこと等から、あくまで可能性を図示するにとどめたい。仮に平地建物とした場合、外周溝は外径9.6～9.9m、内径6.2～6.4m、幅1.1～1.6m、深さ5～14cmを測る。

遺物は、比較的多く出土し、うち第273図1218～第275図1253を図化した他、SK6504出土のガラ

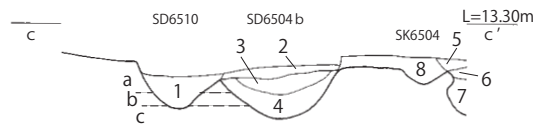


- |                             |                                       |
|-----------------------------|---------------------------------------|
| 1 濁暗灰褐色粗砂                   | 8 暗灰褐色砂質土                             |
| 2 にぶい灰オリーブ色細砂(炭粒が混ざり、固くしまる) | 9 灰緑色砂質土(暗灰褐色土が粒状に混ざる)                |
| 3 濁灰緑色砂質土(暗灰褐色土が粒状に混ざる)     | 10 灰緑色砂質土(淡灰色土が粒状に混ざる)                |
| 4 暗灰色砂質土(炭粒が混ざる)            | 11 10層と同質土(淡灰色土粒が多く混ざる)               |
| 5 濁褐色細砂(炭粒多く混ざり、しまりない)      | 12 10層と同質土(10層より暗い)                   |
| 6 褐色砂質土                     | 2~5:SK6504、6~9:SD6504 b、10~12:SD6504a |
| 7 淡灰緑色細砂(褐灰色砂質土が粒状に混ざる)     |                                       |

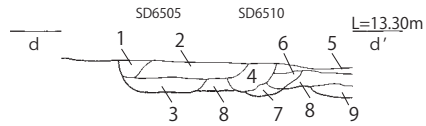
0 (1:60) 2m

第271図 G地区 第VI-2面SI651平面図・土層断面図(S=1/60)

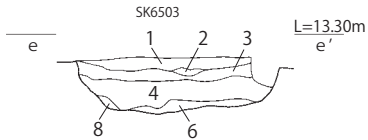
【E26区 SI651】



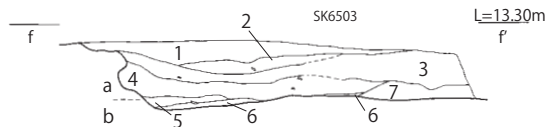
- 1 濁暗灰褐色砂質土
  - 2 褐灰色砂質土(淡灰色細砂が粒状に混ざる)
  - 3 淡灰色細砂(2層が粒状に混ざる)
  - 4 濁褐灰色砂質土
  - 5 にぶい灰オリーブ色細砂(固くしまる)
  - 6 暗灰色砂質土
  - 7 褐灰色細砂(炭粒混ざり、しまりない)
  - 8 2層と同質土
- 1層;SD6510、2~4層;SD6504b、5~7層;SK6504  
〔ベース土〕 a 緑灰色砂質土、b 黒灰色細砂、c 淡灰色砂利



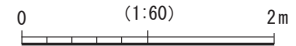
- 1 暗灰褐色砂質土
  - 2 濁褐灰色砂質土(しまりない)
  - 3 暗褐灰色砂質土
  - 4 濁暗灰褐色砂質土(7層が粒状に混ざる)
  - 5 濁暗灰褐色土
  - 6 2層と同質土(暗灰褐色土が混ざる)
  - 7 4層と同質土(4層より暗い)
  - 8 濁灰色砂質土(粒子細かい)
  - 9 灰褐色砂質土
- 1~3層;SD6505、4~9層;SD6510、10層;P6501



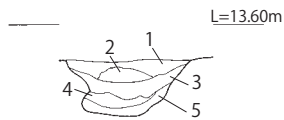
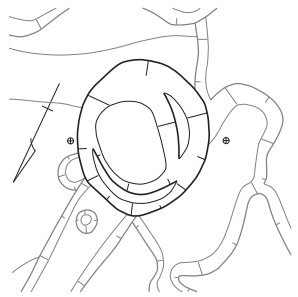
- 1 濁暗灰褐色砂質土(緑灰色砂質土粒、炭粒が少し混ざる)
- 2 濁灰緑色砂質土(3層が粒状に混ざり、固くしまる)
- 3 濁灰色砂質土(炭粒が混ざる、2層と同質土)
- 4 濁黒灰色砂質土(炭粒・炭化物が多く混ざり、しまりない)



- 5 4層と灰緑色砂質土の混合土
  - 6 黒色灰層(しまりない)
  - 7 ベース土aと同質土(3層が粒状に混ざる)
- 〔ベース土〕 a 淡灰緑色細砂、b 灰色細砂

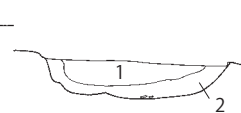
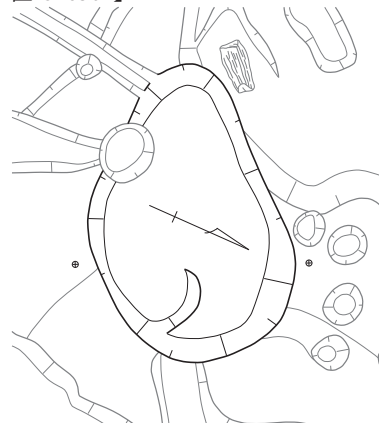


【F25-3区 SK6501】



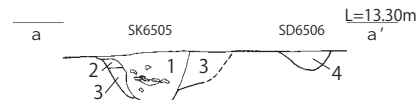
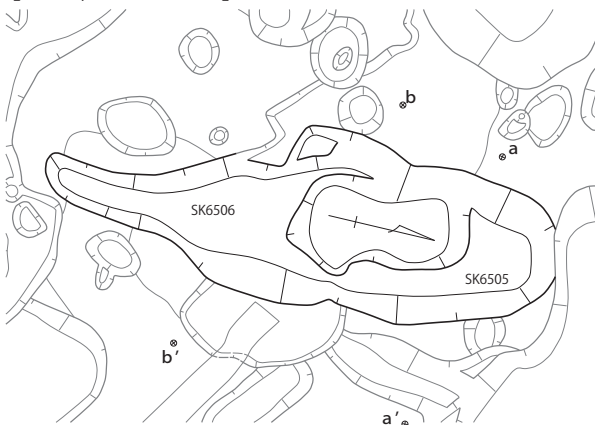
- 1 にぶい黄色粗砂
- 2 にぶい灰緑色粗砂
- 3 黒色細砂と淡灰色細砂の交互堆積層(レンズ状堆積)
- 4 淡灰色粗砂~細砂
- 5 黒灰色細砂(しまりない)

【F26-1区 SK6502】

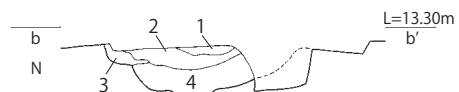


- 1 淡灰緑色粗砂
- 2 暗灰色砂質土(炭粒、土器が混ざる)

【E26-1区 SK6505・06】



- 1 濁暗灰褐色砂質土
- 2 緑灰色砂質土と淡灰色細砂の混合土
- 3 緑灰色細砂(暗灰褐色細砂が粒状に混ざる)
- 4 暗褐灰色細砂と緑灰色砂質土の混合土



- 1 濁灰緑色粗砂
- 2 淡灰緑色細砂(4層が粒状に混ざる)
- 3 暗灰褐色砂質土(淡灰緑色細砂粒が多く混ざる)
- 4 3層と同質土(炭粒が多く混ざる)

第272図 G地区 第VI-2面SI651、SK平面図・土層断面図(S=1/60)



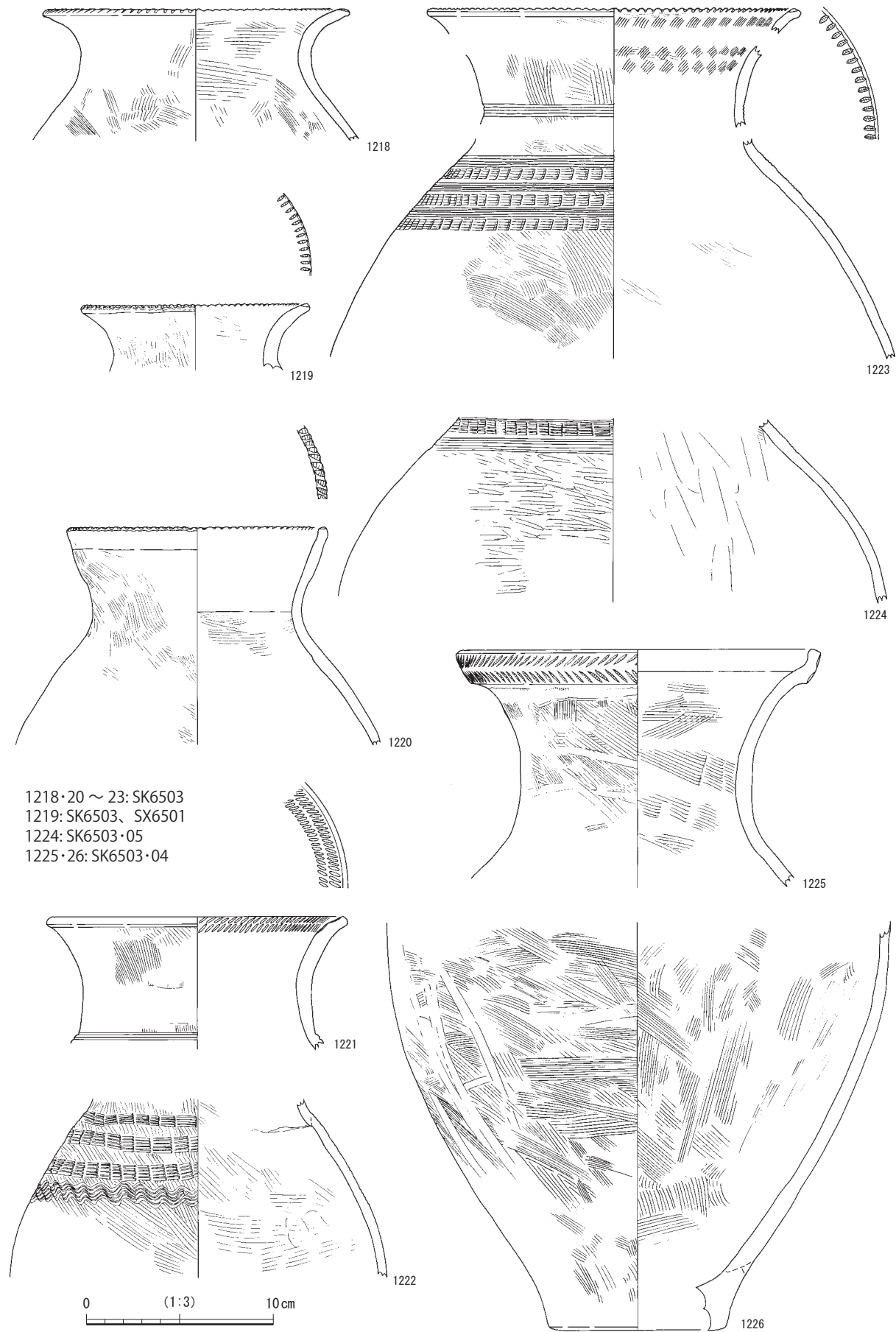
ス質安山岩剥片を写真図版114に掲載した。

SK6503出土の1218～1237のうち、1219の破片の一部がSX6501、1224・30の破片の一部がSK6505、1225・26の破片の一部がSK6504、1232の破片の一部がSD6505・10から、それぞれ出土しており、遺構間の接合が比較的目立つ。1218～29・35は壺である。1218は口径15.7cmを測り、ゆるやかに外反する口縁部に刻みを施す。破片化後に被熱する。1219は口径12.0cmを測り、口縁内面に丁寧な板状工具を用いた連続刺突文(以下、刻み)を施す。1220は口径13.7cmを測る。口縁部は内湾気味に長くのび、端部をヨコナデ調整で平坦とした後に浅い刻みで加飾する。1221は口径15.6cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。口縁内面に2列の刻み、頸部外面にクシ状工具を用いた直線文を施す。胴部片1222はハケ調整の後に5条1単位のクシ状工具を用いて、乱れた簾状文3列と波状文1列を施す。1223は同一個体と考えられる接点のない破片群を図上復元したものであり、全体に磨滅が目立つ。口縁内面にクシ状工具を用いた斜行短線文、刻みを、胴部外面にはハケ調整の後にクシ状工具を用いた時計廻りの簾状文・直線文をそれぞれ施す。1224は胴部外面をミガキ調整の後に、時計廻りで工具を押し当てたままに施す簾状文と乱れた直線文で加飾する。受口状の壺口縁部1225は口径18.7cmを測り、磨滅が著しい。口縁部外面に粘土紐を貼り付け突帯をつくった後、綾杉状に羽状文を施す。底部1226は、1225と同一個体の可能性が高い。受口状の壺片1227は、口縁部が内傾し、下端に小振りな刺突文を施す。1228は、壺頸部の貼付突帯が剥離したもので、板状工具を用いた連続刺突文の後に3条の沈線文を加える。胴部片1229は、外面にヘラ状工具を用いた直線文がかすかに残る。胎土は、0.5mm以下の砂粒が非常に多く混ざる特徴をもち、他の土器とは異なる場所で焼かれ、持ち込まれた可能性が高い。第274図1235は受口状の壺口縁部片と考えられ、屈曲部に丸棒状の工具で刻みを入れる。

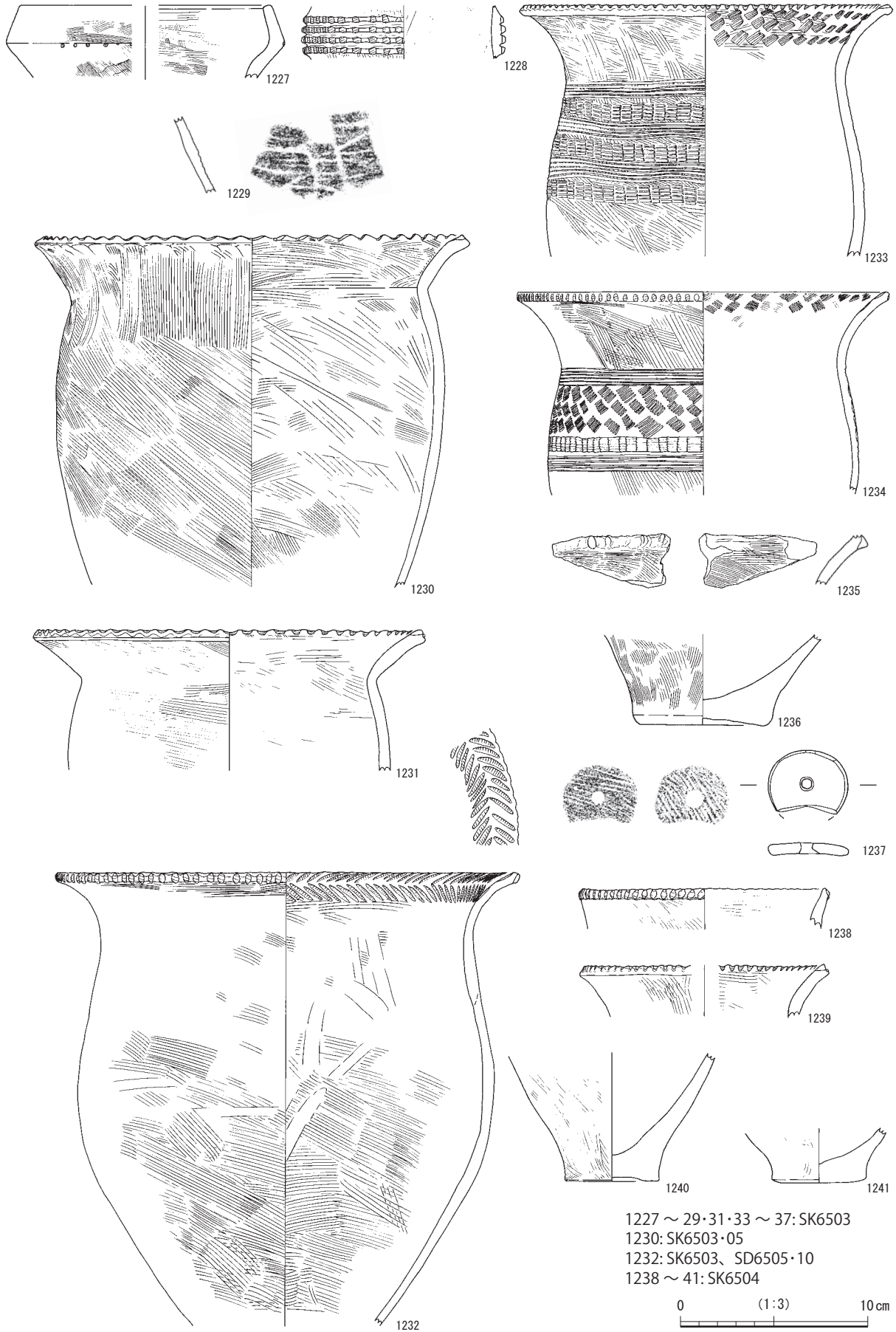
1230～1234・36は甕で、煮炊きに伴う煤・ヨゴレ・コゲが比較的良好に残る。1230・31は、頸部で明瞭に屈曲する。1230は口径22.6cm、胴部最大径20.6cmを測り、頸部～口縁部外面に縦方向のハケ調整を施す。口縁端部はヨコ方向のナデで平坦面をつくった後に、内面上部から指で押さえて小波状口縁に仕上げる。1231は口径20.4cmを測り、胴部外面に横方向のハケ調整が残る。平坦な口縁端部中央に1条の凹線を施した後に、上方から深い刻みを加える。1232～34の口縁部は、ゆるやかに外反する。薄手の1232は口径24.5cm、胴部最大径22.4cmを測り、口縁内面を板状工具で綾杉状の羽状文、また口縁外端を下方からの刻みで、それぞれ加飾する。1233・34は口径19cm強を測る。口縁内面の斜行短線文の施文は、1233がクシ状工具、1234が板状工具を用いる。また胴部外面を、1233は垂下線、クシ状工具を用いた乱れた直線文、簾状文で、1234はクシ状工具で直線文を施した後に時計廻りの簾状文(板状工具)、斜行短線文(クシ状工具)で、それぞれ加飾する。底部片1236は、外面に短い単位のハケ調整を施す。土製円盤1237は、径3.4cm、厚さ0.7cmを測る。両面から穿孔し、側面を研磨する。SK6503からは、他に甕を主体に多くの弥生土器や炭小片が出土した。

SK6504出土遺物として第274図1238～第275図1242を図化した。甕1238は口径13.0cmを測り、外傾する口縁部外縁に刻みを施す。1239は、平坦な口縁端部中央に1条の凹線を施した後に上方から刻みを加える。甕1240は、底部をつくる円盤状粘土が明瞭にわかる他、底部外面にケズリを施す。1241は壺と考えられる。1242は、富来・志賀周辺を産地とする黒色のガラス質安山岩剥片である。他に比較的多くの甕片が出土した。

SD6504出土遺物のうち、第275図1243～51を図化した。厚手の鉢1243は口径13.8cmを測り、水平な口縁端部にX字状の刺突文を施す。1244～46・48～50は甕である。1244は口径24.2cmを測り、平坦な口縁端部中央に1条の凹線を施した後に、上方から刻みを加える。1245は口径16.8cmを測り、口縁部が長くのびる。口縁内面に施したクシ状工具を用いた2列の斜行短線文は、粗い印象を受ける。

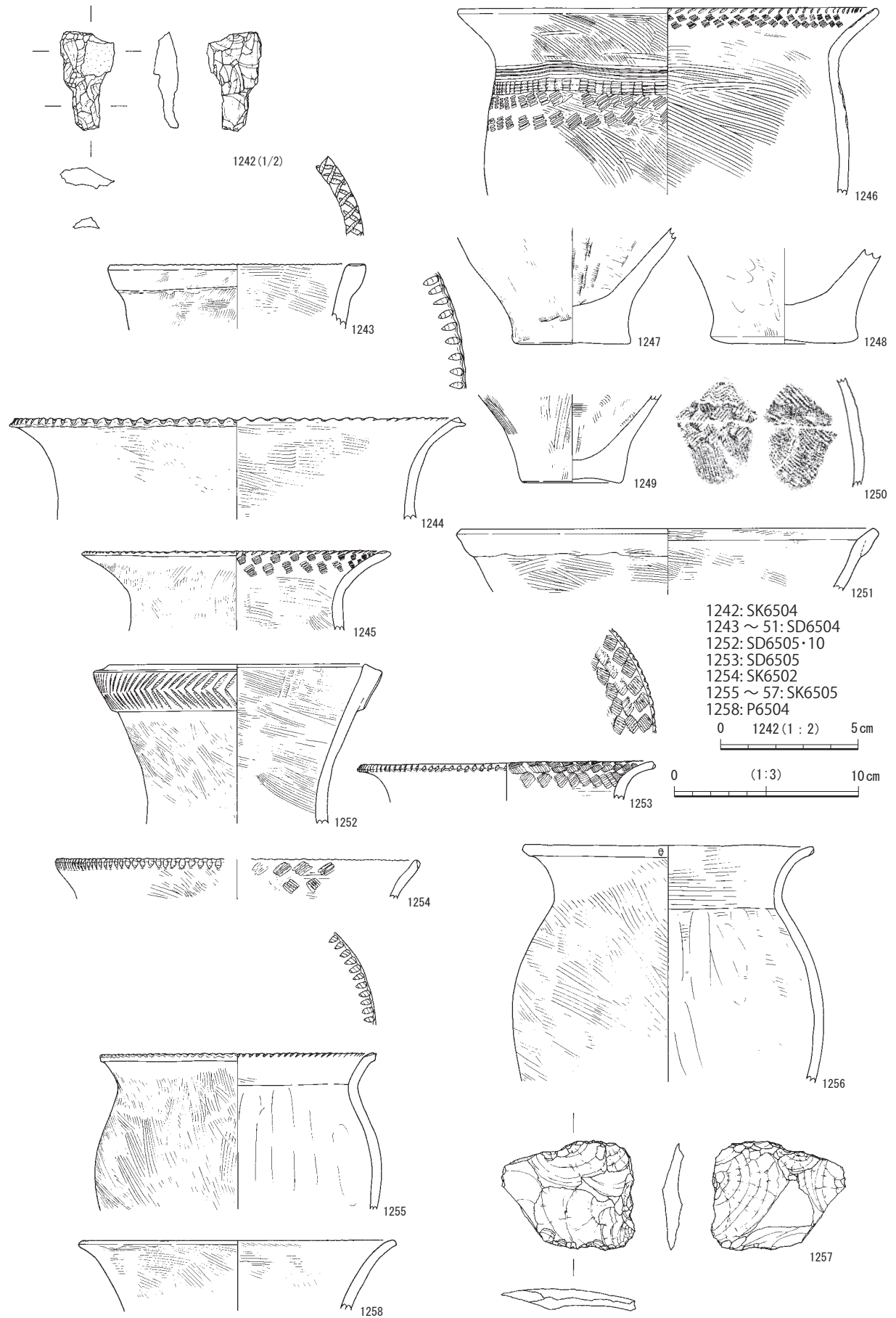


第273図 G地区 第VI-2面SI651出土遺物実測図1(S=1/3)



1227 ~ 29・31・33 ~ 37: SK6503  
 1230: SK6503・05  
 1232: SK6503、SD6505・10  
 1238 ~ 41: SK6504

第274図 G地区 第VI-2面SI651出土遺物実測図2(S=1/3)



第275図 G地区 第VI-2面SI651・SK出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

第275図1246は口径22.6cm、胴部最大径19.8cmを測る。口縁端部は、ヨコナデ調整で平坦に面取りした後、刻みとクシ状工具を用いた簾状文を施す。また、胴部外面にクシ状工具を用いて乱れた施文を行なう。壺底部1247のハケ調整は粗い印象を受ける。平底の甕1248は磨滅が目立つ。甕1249の底部外面はナデにより凸状を呈する。甕胴部片1250は、外面を波状文、斜行短線文で加飾する。鉢1251は口径22.3cmを測り、口縁部外面に貼りつけた粘土紐の接合痕が残る。SD6504からは、他に弥生土器甕を中心とした小片が比較的多く出土した。SD6505・10出土の壺1252は口径15.6cmを測る。口縁部外面に幅の広い突帯を貼り付け、綾杉状に羽状文を施す。SD6505出土の甕1253は口径16.0cmを測り、口縁内面を綾杉状の斜行短線文、口縁端部を下方からの刻みを施す。SD6505・10からは、他に弥生土器片や炭片(写真図版114)が出土した。

### 3 土 坑(SK) (遺構：第272図、遺物：第275図)

第Ⅳ面河跡3001以北で6基の土坑を検出し、うちSK6503・04はSI651を構成する。

**SK6501** F-25-3区で検出した平面略円形の土坑である。長径114cm、短径108cm、深さ44cmを測り、掘削直後に覆土第4・5層が堆積、しばらく開放状態であったと考えられる。他遺構との切り合い関係からSD6507より新しく位置付けられ、出土遺物はない。

**SK6502** E-26-2区、F-26-1区で検出した大型の土坑である。長軸244cm、短軸150cm、深さ35cmを測り、底面は比較的平坦である。下層から順に炭粒や土器が混ざる暗灰色砂質土、淡灰緑色粗砂が堆積し、他遺構との切り合い関係からSD6507より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、第275図1254の甕を図化した。1254は口径約20cmを測り、口縁内面を綾杉状の斜行短線文(クシ状工具)、口縁端部を下方からの刻みで加飾する。他に覆土第2層から比較的多くの甕片が出土した。

**SK6505** E-25-4区で検出した平面略楕円形を呈する土坑で、切り合い関係は不明ながら南側でSK6506と重複する。長径約180cm、短径126cm、深さ42cmを測り、覆土第1層の濁暗灰褐色砂質土から比較的多くの弥生土器が出土しており、第275図1255～57を図化した。甕1255は口径14.8cm、胴部最大径15.6cmを測り、胴部内面を縦方向のナデ調整で仕上げる。口縁端部中央に1条の凹線を施した後、上方から刻みを加える。搔器の可能性をもつ1257は、富来・志賀周辺を産地とする黒色のガラス質安山岩製である。他に弥生土器甕、壺片が比較的多く出土した。

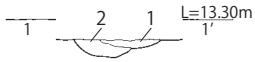
**SK6506** E-25-4区で検出した大型の土坑で、平面形は南側が溝状に長くのびる。長軸約300cm、短軸106cm、深さ40cmを測り、覆土は下層から暗灰褐色砂質土、濁暗灰褐色粗砂となり、第4層に炭粒が多く混ざる。北側でSK6506と重複するが、新旧関係は不明である。弥生土器甕片が少量出土した。

### 4 ピ ッ ト (遺構：第276図、遺物：第275図)

現地調査段階で大小含めて200基以上のピットを検出し、うち弥生土器片が出土した10基に遺構番号(P6506は欠番)を付した。いずれのピットからも柱根出土または明確な柱根痕跡は確認できず、多くのピットは深さ20cm以下(10cm以下が主体)を測る浅いものである。特にF・G-21・22区に分布するピットはその傾向が著しい。覆土は、炭粒が混ざる濁暗灰褐色～暗灰褐色を呈する細砂～砂質土を主体とし、ベース土が粒状に混ざるものも多い。出土遺物のうち、P6504出土の第275図1258を図化した。弥生土器甕1258は口径16.8cmを測り、磨滅が著しい。

なお、P6503が平地建物の外周溝の可能性を残す他、柱根痕跡はないもののF-23区に分布するピットが平面プランから1×1間の掘立柱建物2棟に復元できる可能性を残す(第279図)。仮に掘立柱建物であった場合、SB651が桁行長4.8m、梁行長3.8・4.1m、床面積約19㎡、SB652が桁行長4.8m、梁行長

【E25-4区 P6502】(第267図)



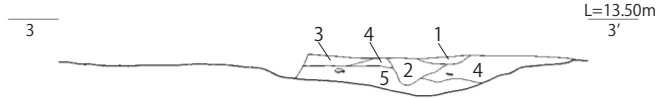
- 1 暗褐色細砂(ベース土が粒状に少し混ざる)
- 2 暗褐色細砂(ベース土が粒状に多く混ざる)
- [ベース土] 緑灰色砂質土

【E25-3区 P6503】(第266図)

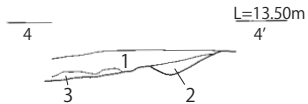


- 1 暗褐色砂質土(砂利が混ざる)
- [ベース土] 茶黄色砂利

【F26区 SD6501】(第266・268図)



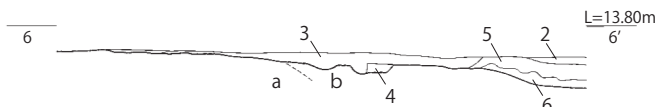
- 1 黒灰色粗砂
- 2 灰緑色粗砂
- 3 にぶい濁灰色砂質土
- 4 3層と5層の混合土
- 5 濁灰褐色砂質土(ややしまりない)



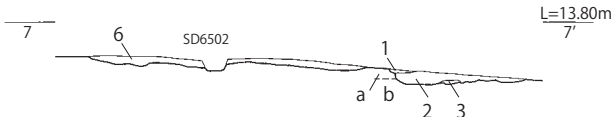
- 1 濁灰褐色砂質土(ベース土が混ざる)
- 2 1層とベース土の混合土
- 3 淡灰緑色粗砂(1層が粒状に少し混ざる)
- [ベース土] 灰緑色砂質土(固くしまる)



- 1 黄茶色粗砂
- 2 にぶい褐色細砂(固くしまる)
- 3 にぶい灰褐色砂質土
- 4 ベース土bと3層の混合土
- 5 暗灰褐色砂質土(ベース土aが混ざる)
- 6 灰緑色粗砂(5層が粒状に混ざる)
- [ベース土] a 茶灰色砂利, b 灰緑色砂質土

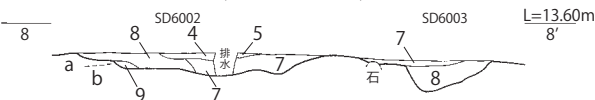


【F26-1区 SD6502】(第266図)

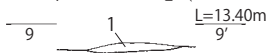


- 1 濁灰緑色砂質土
- 2 濁暗灰褐色砂質土
- 3 2層とベース土bの混合土
- 4 濁茶灰色粗砂
- 5 にぶい灰色砂質土
- 6 濁暗灰褐色砂質土
- 7 6層と同質土(炭粒が多く混ざる)
- 8 6層と同質土(ベース土bが粒状に混ざる)
- 9 ベース土bと同質土(8層が粒状に混ざる)
- 10 7層と同質土(ベース土bが混ざる)
- [ベース土] a 灰茶色砂利, b 灰緑色砂質土

【F26-1区 SD6002・03】(第266・268図)

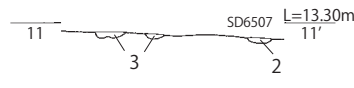
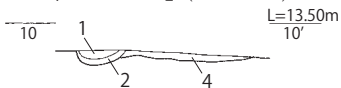


【F26-3区 SD6003】(第268図)



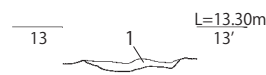
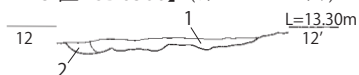
- 1 濁暗灰褐色砂質土(ベース土が混ざる)
- [ベース土] 灰緑色砂質土

【F25-3区 SD6507】(第266図)



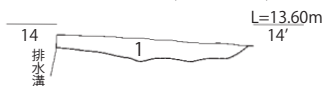
- 1 濁茶灰色粗砂
- 2 暗灰色細砂(淡灰色細砂が混ざる)
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 濁緑灰色砂質土(ベース土に類似)

【E・F25区 SD6508】(第266・267図)

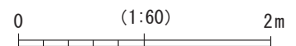


- 1 暗褐色砂質土(砂利が多く混ざる)
- 2 緑灰色砂質土(1層が混ざる)

【G23区 SD6511】(第263図)

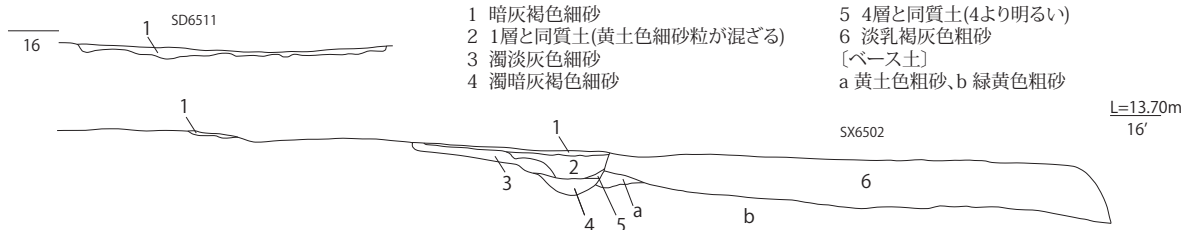
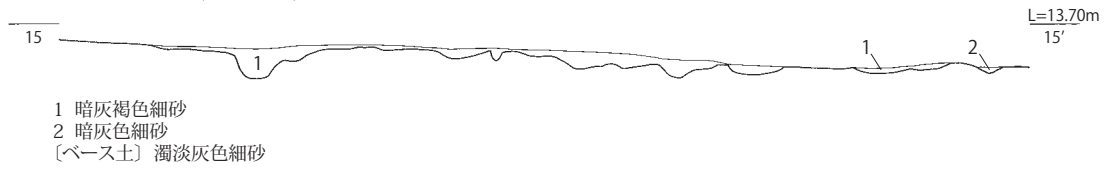


- 1 濁暗灰褐色砂質土(白色砂粒が混ざる)
- [ベース土] 濁灰褐色砂質土

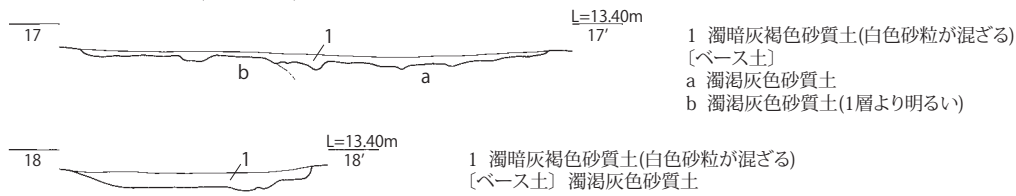


第276図 G地区 第VI-2面ピット、SD土層断面図(S=1/60)

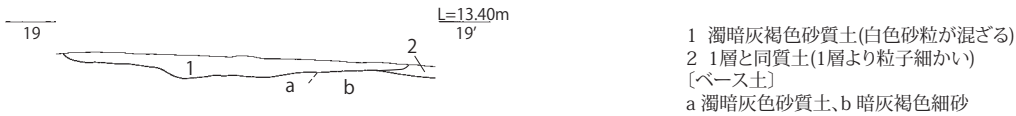
【F・G23区 SD6511】(第263図)



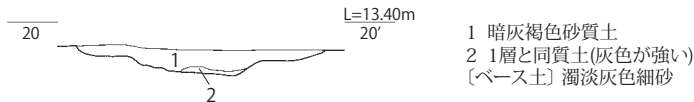
【F・G22区 SD6512】(第262図)



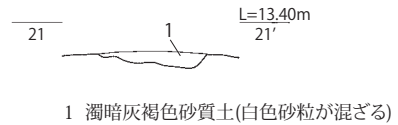
【F21区 SD6513】(第261・262図)



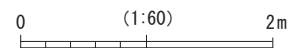
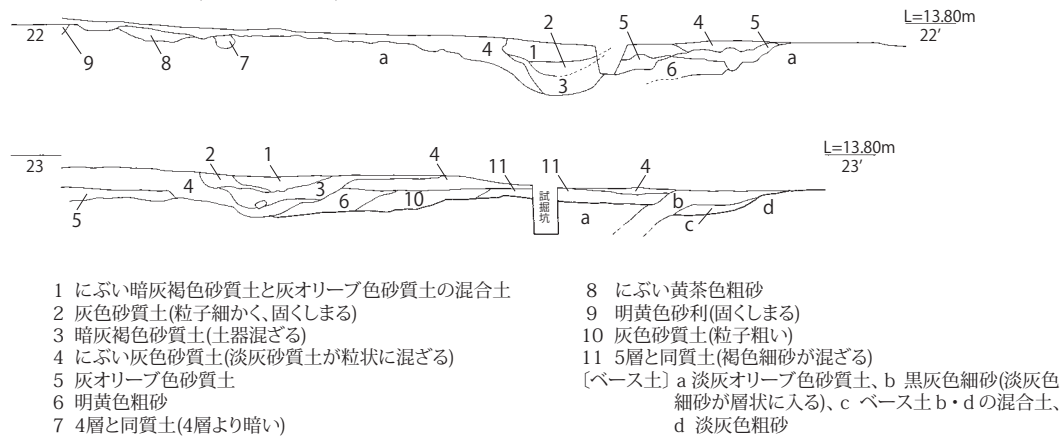
【F21-1区 SD6514】(第261図)



【F21-3区 SD6515】(第262図)



【F・G25区 SX6501】(第264・266図)



第277図 G地区 第VI-2面SD、SX土層断面図(S=1/60)

3.8・4.0m、床面積約18.7㎡と、ほぼ同規模となる。いずれのピットからも出土遺物はない。

#### 5 溝(SD) (遺構：第276・277図、遺物：第280図)

溝は、16条に遺構番号(SD6501～15、整理段階でSD6516を追加)を付し、第Ⅳ面河跡3001(古)以北にSD6501～10が、第Ⅳ面河跡3001(古)以南にSD6511～16がそれぞれ分布する。形状や推定される性格から、落ち込み様のSD6501、直線的なSD6503・06・07・16、SI651の外周溝となるSD6504・05・10、遺物包含層の浅いくぼみと考えられるSD6502・08・09・11～15に類別できる他、前述のとおりSD6502・08の一部が平地建物の外周溝となる可能性を残す。

**SD6501** F-26区で検出した不整形な浅い落ち込みで、調査区外北東側に向けて少しずつ深くなる。延長10m以上、深さ22～30cmを測り、粗砂、砂質土が自然堆積する。出土遺物のうち、第280図1259を図化した。受口状口縁の壺1259は口径約24cmを測り、口縁部は内傾する。他に比較的多くの弥生土器甕片が出土した。

**SD6502** F-26-1・2区で検出した不整形な浅い溝状の落ち込みである。長軸約6.1m、短軸1.2～2.3m、深さ2～18cmを測り、覆土は濁暗灰褐色砂質土を基調とする。少量の弥生土器甕片が出土した。

**SD6503** F-26-1区で検出した直線的な溝で、不整形を呈する南側が一段深くなる。深さは北側が約10cm、南側が30cm弱を測り、ベース土が混ざる濁暗灰褐色砂質土を覆土とする。弥生土器甕片が出土した。

**SD6506** E-26-2区で検出した溝で、切り合いからSD6504より古く位置付けられる。幅26～44cm、深さ14cmを測り、覆土は暗褐灰色細砂と緑灰色砂質土の混合土である。弥生土器甕片が数点出土した。

**SD6507** F-25・26区で検出した直線的な溝である。長さ約450cm、幅22～50cm、深さ4～12cmを測り、淡灰色細砂が混ざる暗灰色細砂を覆土とする。遺構の切り合い関係からSK6501・02より古く位置付けられる。摩滅した弥生土器甕片が出土したにとどまる。

**SD6508** E・F-25区で検出した。3つの不整形な浅い落ち込みが連なったものと考えられ、南東端の落ち込みは平地建物の外周溝の一部となる可能性を残す。幅0.4～1.4m、深さ7～10cmを測り、覆土は砂利が多く混ざる暗褐灰色砂質土を基調とする。切り合い関係からSK6501より古く位置付けられ、弥生土器甕片が出土した。

**SD6509** F-25区で検出した浅い落ち込みである。深さ6～22cmを測り、暗灰褐色砂質土を覆土とする。切り合い関係からSD6508より古く位置付けられ、出土遺物のうち第280図1260を図化した。鉢1260は赤橙色を呈し、体部外面にミガキ調整を施す。また外傾する口縁端部を1条の太い沈線と刻みで加飾する。他に弥生土器甕片が出土した。

**SD6511～15** 第Ⅳ面河跡3001(古)以南のE～G-21～24区で検出し、遺物包含層の浅い落ち込みと考えられる。平面形は不整形であり、深さ2～24cmを測る。覆土は白色石英粒が目立つ濁暗灰褐色砂質土を基本とする。出土遺物のうち、SD6511出土の第280図1261の甕底部を図化した。他にSD6511・12から弥生土器甕小片が出土した。

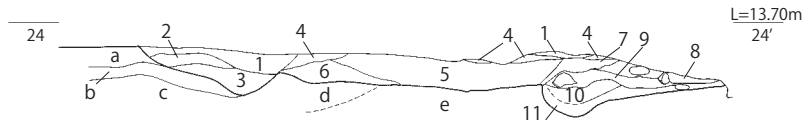
**SD6516** F-21-2区に位置する直線的な溝で、整理段階に新たに遺構番号を付している。SD6513とSD6515をつなぐような位置関係にあり、長さ約5.0m、幅30～60cm、深さ7～14を測る。覆土は白色石英粒が目立つ濁暗灰褐色砂質土である。

#### 6 その他の遺構(SX) (遺構：第277・278図、遺物：第273・280図)

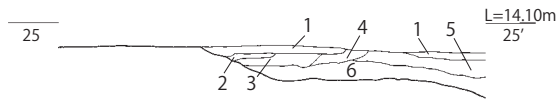
**SX6501** F-25区で検出した大型の落ち込みである。南北方向約6.6m、東西方向6.5m以上、深さ24～



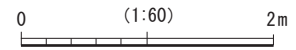
【E・F23・24区、G25区 SX6502】(第264図)



- |                  |                         |
|------------------|-------------------------|
| 1 暗灰褐色細砂         | 9 暗灰色細砂                 |
| 2 濁淡灰色細砂         | 10 2層と同質土               |
| 3 2層と同質土(2層より暗い) | 11 淡灰色細砂と暗灰褐色細砂の混合土     |
| 4 淡灰色細砂          | [ベース土] a 暗灰色細砂(白色砂粒混ざる) |
| 5 淡乳褐色粗砂         | b 暗灰色細砂、c 濁褐色粗砂         |
| 6 淡灰色細砂          | d 緑黄色細砂、e 黄土色粗砂         |
| 7 灰褐色細砂          |                         |
| 8 暗灰色細砂          |                         |

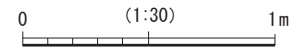
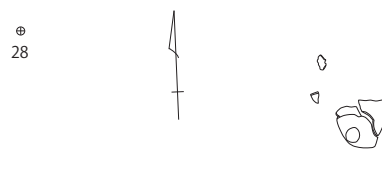
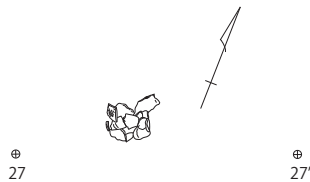


- |                       |
|-----------------------|
| 1 濁暗灰褐色砂質土            |
| 2 にぶい茶灰色細砂            |
| 3 濁灰褐色砂質土(淡灰緑色砂質土混ざる) |
| 4 濁暗灰褐色砂質土            |
| 5 淡茶色粗砂(1層が粒状に少し混ざる)  |
| 6 淡灰緑色砂質土(粒子細かい)      |

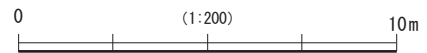
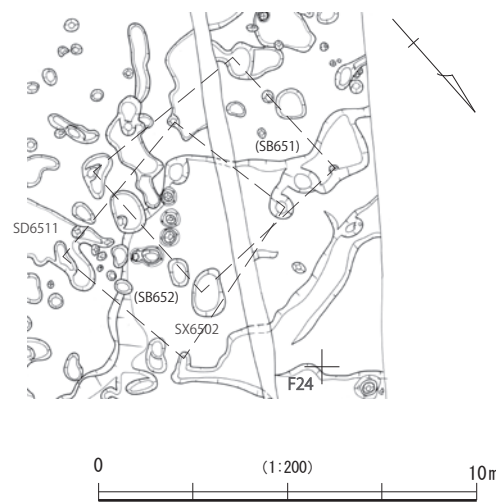


【E24-2区 遺物出土状況(S=1/30)】

【F24-1区 遺物出土状況(S=1/30)】



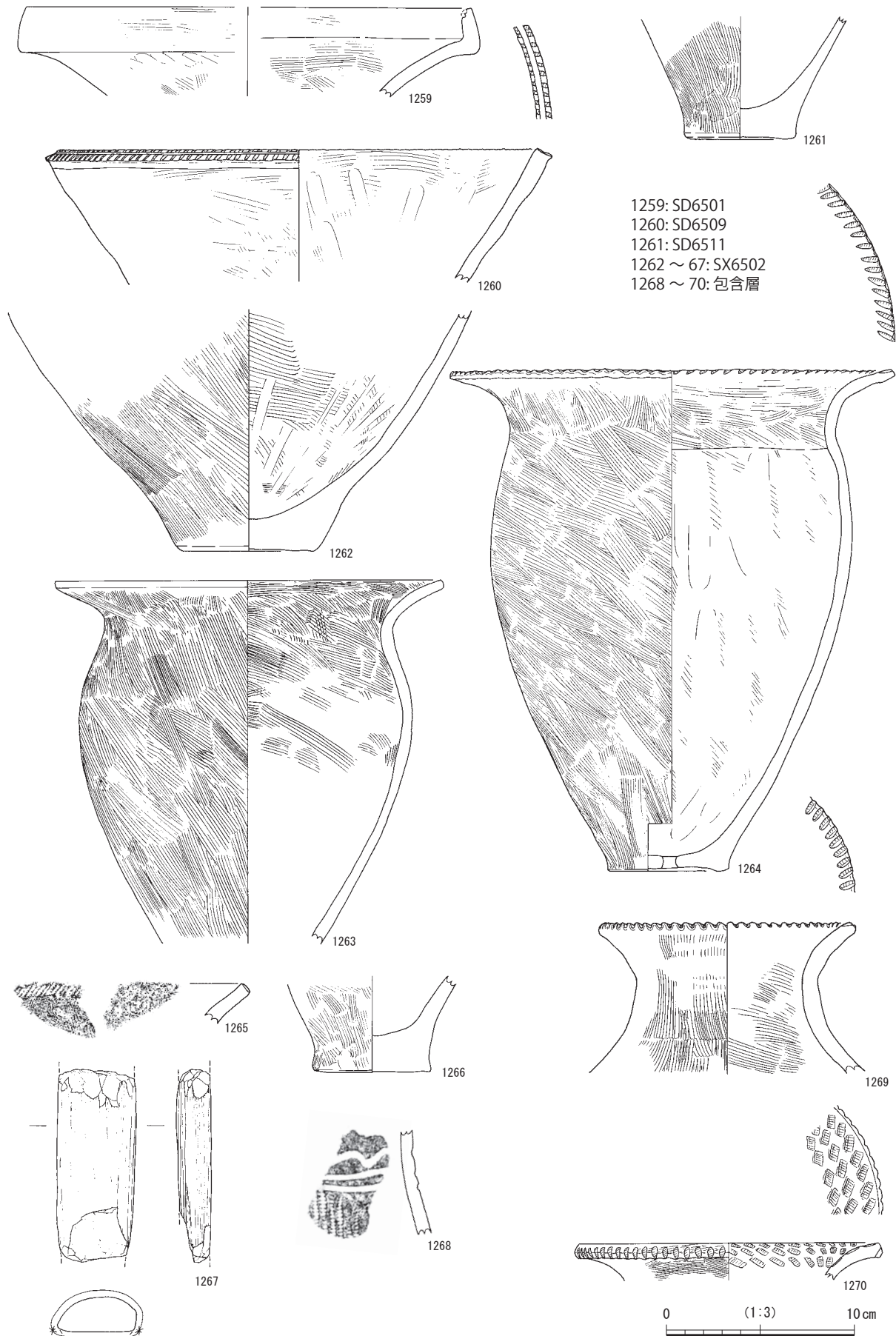
第278図 G地区 第VI-2面SX6502実測図(S=1/30・1/60)



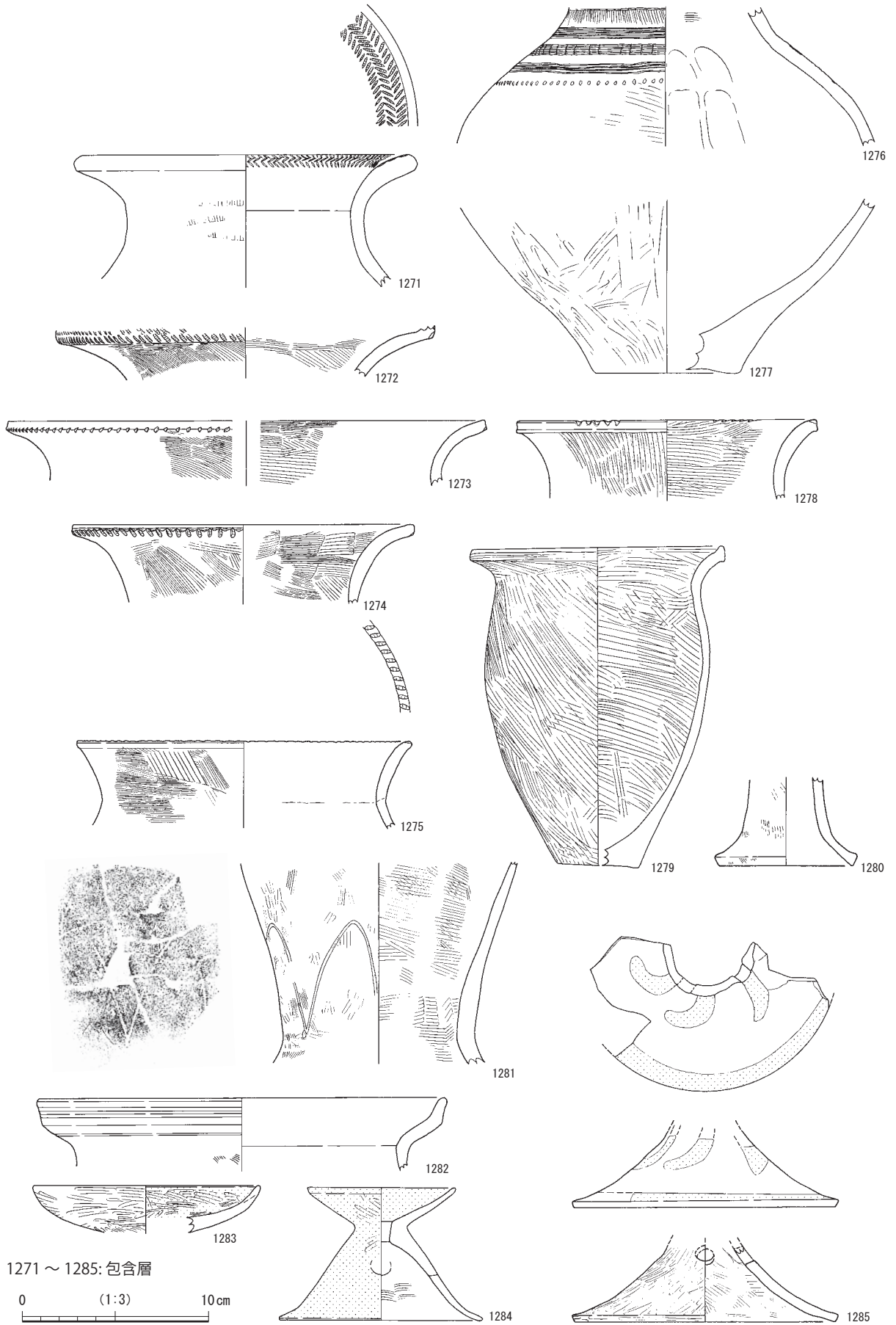
第279図 G地区 第VI-2面建物の可能性をもつ遺構復元案(S=1/200)

55cmを測り、底面は起伏に富む。覆土は灰～暗灰褐色を基調とする砂質土と明黄～黄茶色を呈する粗砂が自然堆積する。弥生土器片が少量出土したにとどまる。

**SX6502** E・F・23・24区、G・24・25区で検出し、現地調査段階で6501落ち込みとしたものである。第IV



第280図 G地区 第VI-2面出土遺物実測図1 (S=1/3)



第281図 G地区 第VI-2面出土遺物実測図2(S=1/3)

面河跡3001(古)で大きく損壊するが、東方向から西方向に流下する幅10m前後の浅い溝を想定している。深さ24～60cmを測り、粗砂、細砂、砂質土が複雑に堆積する。比較的多くの遺物が出土し、うち第273図1219、第280図1262～67を図化した。大型の壺1262は、内面に放射状のナデ調整が残る他、底部外面にケズリを加える。1263～66は甕である。無文の1263は口径20.6cm、胴部最大径17.8cmを測る。口縁端部を平坦に仕上げ、煮炊痕が明瞭に残る。1264は口径23.5cm、器高26.7cm、胴部最大径19.4cmを測り、胴部内面はナデの後にハケ調整を施す。底部外面に焼成前に円孔を穿ち、煮炊痕が良好に残る。口縁部片1265は、内面に扇形文を、平坦な端部に密に刻みを施す。平底の1266内面は、焼成時に亀裂が生じる。縄文時代の石棒または石剣と考えられる1267は、両端が欠損、側面中央の稜付近で剥離が認められる。黒色を呈した粘板岩系石材を用いる。他に弥生土器甕片、壺片が出土した。

### 5 包含層出土遺物(第280・281図)

第280図1268～第281図1285を図化した。縄文時代後期前葉の深鉢片1268は、太くしっかりとした沈線を施す。1269～80は、弥生時代中期後葉の土器である。1269・71・72・76・77は壺である。1269は口径13.0cmを測り、口縁内面に刻みを施す。1271は口径17.4cmを測り、肥厚気味の口縁内面に丁寧な羽状文を3列施す。受口状の1272は、接合面で剥離し、外面を2列以上の刺突文で加飾する。1276は、胴部外面を刺突列点文と、同一のクシ状工具を用いた直線文・簾状文で加飾する。胎土の特徴から1277と同一個体の可能性をもつ。底部片1277は、内面をナデ調整、外面を板状工具で仕上げる。1270・73～75・78・79は甕である。1270は口径16.0cmを測り、口縁内面にクシ状工具を用いた斜行短線文、外縁を刻みで加飾する。1273は口径約25cmを測り、平坦に仕上げた口縁端部に下方から刻みを加える。1274は口径18.2cmを測り、口縁端部中央に1条の凹線を施した後に、上方から刻みを加える。1275は口径17.8cmを測り、口縁部外面に異なるハケ原体で垂下線様の調整を施す。1278は、平坦に仕上げた口縁端部に、上方から5ヶ所に刻みを施す。1279は口径13.5cm、器高17.5cm、胴部最大径12.0cmを測り、内外面とも同一原体で粗いハケ調整を施す。また、口縁部外面をハケ調整で平坦に仕上げるため、端部は上方に短くのびる印象を受ける。1280は高坏脚部と考えられ、裾端部に平坦面をもつ。

第281図1280～1286は、第VI-1面に属する遺物で、遺物取り上げ時にラベルの面番号記載を誤ったものである。弥生時代後期の壺1281は、外面にミガキ調整の後にヘラ状工具で文様を刻む。有段口縁の甕1282は、擬凹線文がわずかに残る。土師器高坏1283は口径12.1cmを測り、内外面ともミガキ調整の後に赤彩を施す。赤彩の土師器器台1284は口径7.8cm、器高7.1cmを測り、1285とともに円孔数は不明である。器台と考えられる土師器1285は、外面を赤彩で加飾する。

## 6 小 結

第VI-2面で確認した遺構、遺物が限られることから言及できる部分はそれほど多くない。以下では、出土土器の器種や特徴等を概観するとともに、周辺地域の集落遺跡の分布・消長との比較の中で、第VI-2面集落の位置付けを行ないたい。

### 出土土器(第282図)

出土した土器は、コンテナバットで約7箱、第0・I～第VI-1面出土土器を加えても実測土器は67点にとどまる。これらは、弥生時代中期後葉に位置付けられ、加賀地域でいえば小松市八日市地方遺跡の時期区分<sup>(17)</sup>8・9期の様相を示し、金沢市磯部運動公園遺跡出土土器群<sup>(18)</sup>、周辺地域でいえば羽咋市長者川遺跡平成15年度調査SD03出土土器群<sup>(19)</sup>と並行する部分が多いと考えられる。器種別では、甕が最も多く、次いで壺となり、鉢、高坏は少数である。

第59表 G地区 第Ⅵ-2面出土土器類観察表1

※ ( ) は残存量を示す。

採掘 番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備 考	実測 番号
273	1218	E-25-3-4	S1651 (SK6503西側上層)	弥生土器	壺か	15.7	-	(6.9)	黄橙	灰黄褐	粗砂・礫多、 海綿骨針多	良	ハケ	ハケ、ナデ	口1/36	口縁内面に板状工具による連続刺突文。外面煤付着。破片化後に二次被熱、煤付着	H16K99
273	1219	E-25-3、 F-G-25	S1651 (SK6503上層)、SK6501第3層	弥生土器	壺	12.0	-	(3.5)	橙	橙	粗砂並	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口9/36	口縁内面に板状工具による連続刺突文	H16A26
273	1220	E-25-3	S1651 (SK6503上・下層)	弥生土器	壺	13.7	-	(11.7)	褐灰	黄橙	粗砂多、礫少、 海綿骨針多	並	ハケ、ナデか	ヨコナデ、ハケ	口12/36	口縁部に浅い連続刺突文。内面ヨゴレ付着。磨滅目立つ	H16A27
273	1221	E-25-3	S1651 (SK6503下層)	弥生土器	壺	15.6	-	(7.1)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂・礫多、 海綿骨針多	並	不明	ハケ	口12/36	口縁内面に板状工具による連続刺突文2列。外面頸部に直線文3条以上。内外面磨滅顕著	H16K104
273	1222	F-21、 E-25-3	S1651 (SK6503下層)、包含層(土層e)	弥生土器	壺	-	-	(9.6)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、 海綿骨針多	並	ハケ	ハケ	-	外面にクシ状工具(5条1単位)で直線文3列、波状文1列	H16A24
273	1223	E-25-3	S1651 (SK6503上・下層)、包含層(土層e)	弥生土器	壺	19.2	-	(18.8)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多、2mm大 礫非常に多	並	ハケ	ハケ	口3/36	図上復元。口縁内面に板状工具による斜行短線文(5条1単位)、口縁部に板状工具による連続刺突文。外面に直線文・直線文(5条1単位)。外面一部に煤付着	H16K95
273	1224	E-25-3、 E-26-2	S1651 (SK6503西側上層)、SK6505下層	弥生土器	壺	-	-	(9.9)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂・礫多、 海綿骨針多	並	ナデ	ハケ、ミガキ	-	クシ状工具(5条1単位)により直線文2列、直線文2列か。破片化後2次被熱、煤付着	H16A25
273	1225	E-25-2~4、 E-26-2	S1651 (SK6503上・下層、S K 6504第3-4層)、包含層(土層e)	弥生土器	壺	18.7	-	(12.8)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、 海綿骨針多	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口34/36	口縁外面に羽状文2列。内外面とも磨滅目立つ。1226と同一個体か	H16A38-1
273	1226	E-25-2~4、 E-26-2	S1651 (SK6503上・下層、S K 6504第3-4層)、包含層(土層e)	弥生土器	壺	-	9.6	(21.8)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、 海綿骨針多	並	ハケ	ハケ、ナデ	-	内外面とも磨滅目立つ。1225と同一個体か	H16A38-2
274	1227	E-25-3	S1651 (SK6503下層)	弥生土器	壺	約13	-	(3.9)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多、礫少、 海綿骨針多	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口3/36	外面に刺突文	H16K103
274	1228	E-25-3	S1651 (SK6503下層)	弥生土器	壺	-	-	(2.8)	灰黄褐	黄橙、黒	粗砂・礫多、 海綿骨針多	良	ハケ	ハケ	-	貼付突帯刺突。板状工具により連続刺突後、3条の直線。外面に黒斑あり	H16A28
274	1229	E-25-3	S1651 (SK6503)	弥生土器	壺	-	-	(4.0)	黄橙	黄橙	粗砂非常に多	良	不明	不明	小片	ヘラ状工具で直線文か。胎土は他個体と異なる。内外面磨滅顕著	H16D149
274	1230	E-25-3-4	S1651 (SK6503)、SK6505セク土器①②	弥生土器	壺	22.6	-	(18.8)	橙	橙	粗砂多、2mm大 礫非常に多	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ	口30/36	胴部最大径20.6cm。口縁部内端を波状に仕上げる。内面下部にヨゴレ、外面全体に煤付着	H16A14
274	1231	E-25-3-4	S1651 (SK6503下層)	弥生土器	壺	20.4	-	(7.5)	黄橙	灰褐	粗砂・礫多、 海綿骨針多	並	ハケ、ナデ	ハケ	口15/36	口縁内面に連続刺突文。外面煤付着	H16A29
274	1232	E-25-3-4、 E-26-1	S1651 (SK6503、SD6505・10)、包含層	弥生土器	壺	24.5	-	(24.3)	灰黄褐	褐	粗砂多、礫少	良	ハケ、ナデ	ハケ、ヨコナデ	口6/36	胴部最大径22.4cm。口縁内面に板状工具による羽状文2列、口縁外縁板状工具による連続刺突文。内面全面にヨゴレ・コゲ、外面上半に煤付着	H16A19
274	1233	E-25-3	S1651 (SK6503東側下層)	弥生土器	壺	19.5	-	(13.5)	黄橙	黄橙	粗砂多、2mm大 礫非常に多	並	ハケ、ヨコナデ	ハケ(垂下線あり)、 ヨコナデ	口9/36	胴部最大径17.0cm。口縁内面に板状工具による連続刺突文、クシ状工具による斜行短線文(5条1単位)3列、胴部外面にクシ状工具(5条1単位)による直線文・直線文各3列。煤付着	H16A23
274	1234	E-25-3-4、 G-25-1	S1651 (SK6503上層)、SK6502北端	弥生土器	壺	19.8	-	(10.8)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂・礫多、 海綿骨針多	良	不明	ハケ	口6/36	胴部最大径15.6cm。口縁内面に2列の斜行短線文、外面頸部に6条1単位の直線文、直線文(時計回り)、斜行短線文、直線文、口縁部に板状工具による斜行短線文。外面全体に煤付着。内面磨滅顕著	H16A31
274	1235	E-25-3	S1651 (SK6503東側上層)	弥生土器	壺	-	-	(3.2)	灰黄	黄橙	粗砂多、2mm大 礫非常に多、 海綿骨針少	並	ハケ	ハケ	小片	丸棒状の工具で刻みをつくる。小片のため焼きに不安を残す	H16K100
274	1236	E-25-3	S1651 (SK6503下層)	弥生土器	壺	-	6.6	(4.8)	褐灰	淡黄橙	粗砂・礫多、 海綿骨針多	並	ナデ	ハケ、ナデ	底24/36	外底ナデ。外面に黒斑	H17064
274	1237	E-25-3	S1651 (SK6503西側上・下層)	弥生土器	土製円盤	径3.4	-	厚0.7	灰黄褐	灰黄褐、黒	粗砂並	良	ハケ	ハケ	-	両面穿孔(孔径0.5cm)、底面研磨。残存重量10.1g。外面に黒斑	H16D319
274	1238	E-26-2	S1651 (SK6504)	弥生土器	壺	13.0	-	(2.1)	黄橙	褐灰	粗砂並	良	ハケ	ハケ、ヨコナデ	口6/36	口縁外縁に板状工具による連続刺突文	H16A16
274	1239	E-26-2、 F-26-1	S1651 (SK6504)、包含層(土層e)	弥生土器	壺	約13	-	(2.7)	黄橙	褐灰	粗砂多、礫少、 海綿骨針多	良	ハケ	ハケ、ヨコナデ	小片	口縁内面に板状工具による連続刺突文	H16A21
274	1240	E-25-4、 E-26-1	S1651 (SK6504セク)	弥生土器	壺	-	5.0	(6.9)	褐灰	黄橙	粗砂・礫多、 海綿骨針多	良	ナデ	ハケ、ナデ、ケズリ	底15/36	外底にケズリ	H16A18
274	1241	E-26-2	S1651 (SK6504セク下層3-4)	弥生土器	壺	-	5.0	(2.9)	黄橙	黄橙、黒	粗砂多、礫少、 海綿骨針非常に多	並	ナデ	ナデ、ハケ	底36/36	外底ナデ。外面に黒斑	H16A17
275	1243	E-26-2	S1651 (SD6504)	弥生土器	鉢	13.8	-	(3.5)	黄橙	黄橙	粗砂並	並	ハケ	ハケ、ヨコナデ	口9/36	口縁端部に板状工具によるX字状の連続刺突文	H16K98
275	1244	E-26-2	S1651 (SD6504)	弥生土器	壺	24.2	-	(5.5)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多、 海綿骨針多	並	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口6/36	口縁内面に板状工具による連続刺突文。外面煤付着	H16A10
275	1245	E-26-2	S1651 (SD6504)	弥生土器	壺	16.8	-	(4.3)	黄橙	淡黄橙	粗砂多、礫少、 海綿骨針多	並	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口6/36	口縁内面に板状工具による連続刺突文1列、クシ状工具(6条1単位)による斜行短線文2列。外面煤付着	H16A7

第60表 G地区 第VI-2面出土土器類観察表2

※ ( ) は残存量を示す。

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	口径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号	
	275	1246	E-26-2	S1651 (SD6504)	弥生土器	壺	22.6	-	(10.2)	淡灰	橙~黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針多	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口9/36	胴部最大径19.8cm、口縁部に歪み。口縁内面に板状工具による連続刻突文1列、板状工具による斜行短線文2列。胴部外面に板状工具による直線文(6条1単位)1列、扇状文(時計廻り4条1単位)1列、斜行短線文(4条1単位)2列、外面煤付着。1249と同一個体か	H16A33-1
	275	1247	E-26-2	S1651 (SD6504底)	弥生土器	壺	-	6.3	(6.3)	黄橙	黄橙	粗砂多、2mm大礫非常に多	並	ハケ	ハケ、ナデ	底36/36	外面一部黒斑	H16A8
	275	1248	E-26-2	S1651 (SD6504セク)	弥生土器	壺	-	8.0	(5.1)	黒褐	淡黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針多	良	ナデ	ハケ、ナデ	底12/36	外底は使用に伴い摩耗	H16A9
	275	1249	E-26-2	S1651 (SD6504)	弥生土器	壺	-	5.5	(4.8)	淡灰	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針多	良	ハケ	ハケ、ナデ	底36/36	外底ナデ。外面煤付着。1246と同一個体か	H16A33-2
	275	1250	E-26-2	S1651 (SD6504)	弥生土器	壺	-	-	(5.7)	黄褐	黄褐	粗砂並	並	ハケ	ハケ	-	クシ状工具(6条1単位)により波状文(7条1単位)3列、口縁外縁に板状工具で連続刻突文。外面煤付着	H16D320
	275	1251	E-26-2	S1651 (SD6504)	弥生土器	鉢	22.3	-	(3.4)	黄橙	黄橙	粗砂多、2mm大礫非常に多	並	ハケ	ヨコナデ、ハケ	口13/36	外面に粘土紐の接合痕を残す	H17061
	275	1252	E-26-2-4	S1651 (SD6505第2層・6510)	弥生土器	壺	15.6	-	(8.7)	黄褐	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針多	良	ハケ	ヨコナデ、ハケ	口15/36	羽状文2列	H16A11
	275	1253	E-26-4	S1651 (SD6505セク)	弥生土器	壺	16.0	-	(2.1)	黄褐	黄褐	粗砂多、礫少、海綿骨針多	並	ハケ、ヨコナデ	ヨコナデ	口6/36	口縁内面にクシ状工具で斜行短線文(7条1単位)3列、口縁外縁に板状工具で連続刻突文。外面煤付着	H16A12
	275	1254	F-26-1	SK6502第2層	弥生土器	壺	約20	-	(2.2)	灰黄褐	黄橙	粗砂並	良	ハケ、ヨコナデ	ハケ	口3/36	口縁内面にクシ状工具(5条1単位)で斜行短線文2列、口縁外縁に板状工具で連続刻突文。内面ヨゴレ、外面煤付着	H16A20
	275	1255	E-25-4	SK6505	弥生土器	壺	14.8	-	(8.5)	褐灰	褐灰	粗砂多、礫少	並	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口16/36	胴部最大径15.6cm、口縁内面に板状工具による連続刻突文。内面ヨゴレ・コゲ、外面煤付着	H16A15
	275	1256	E-25-4	SK6505	弥生土器	壺	15.7	-	(13.0)	黄橙、黒褐	橙、赤褐	粗砂多、2mm大礫非常に多	良	ハケ、ナデ	ハケ	口小片	胴部最大径17.0cm、口縁部に連続刻突文か(1ヶ所残存)。外面一部煤付着	H16A22
	280	1258	E-26-4	P6504	弥生土器	壺	16.8	-	(3.8)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針多	並	ハケ	ハケ	口5/36	内面~口縁部摩滅顕著	H16K101
	280	1259	F-26-2-4	SD6501中央	弥生土器	壺	約24	-	(4.7)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針少	並	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口1/36		H16A5
	280	1260	E-25-2、F-25-3	SD6509、包含層(土層e)	弥生土器	鉢	25.0	-	(7.1)	赤橙	赤橙	粗砂多、2mm大礫非常に多	良	ハケ、ミガキ	ハケ、ナデ、一部ミガキか	口9/36	口縁部に沈線(1条)後、板状工具による連続刻突文	H16K60
	280	1261	F-23	SD6511、包含層(暗灰色細砂)	弥生土器	壺	-	5.8	(6.5)	黒褐	黄橙	粗砂多、2mm大礫非常に多	良	不明	ハケ、ナデ	底36/36	外底ナデ。内面摩滅顕著	H16K50
	280	1262	F-24-1	SK6502土器集中①	弥生土器	壺	-	7.7	(12.8)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫非常に多、海綿骨針少	並	ハケ、ナデ	ハケ、ケズリか	底36/36	外底ケズリか。内面に黒斑。接合に伴い外底外縁が磨耗	H16A1
	280	1263	E-24-2、F-24-1	SK6502土器集中①②	弥生土器	壺	20.6	-	(19.3)	灰褐	灰褐	粗砂・礫多、海綿骨針多	良	ハケ、ナデ	ハケ、ヨコナデ	口18/36	胴部最大径17.8cm。内面全体に黒褐色にコゲ・ヨゴレ。外面全体に煤付着、下半に小剥離目立つ	H16A4
	280	1264	E-F-24	SK6502底	弥生土器	壺	23.5	6.6	26.7	黄橙	黄橙	粗砂多、2mm大礫非常に多	良	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ、ヨコナデ	口21/36	胴部最大径19.4cm、底部内側から穿孔(孔径0.9cm)。口縁内面に板状工具による連続刻突文、外底ナデ。内面底部に黒褐~黒色のコゲ・ヨゴレ、外面前面に煤付着	H16A3
	280	1265	G-24-3	SK6502東端底	弥生土器	壺	-	-	(2.1)	橙	橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	並	ナデか	ハケ	口小片	口縁部連続刻突文、内面連続文(4条1単位)か	H16D318
	280	1266	G-24-3	SK6502底	弥生土器	壺	-	6.4	(5.1)	褐灰	褐灰	粗砂・礫多、海綿骨針多	良	ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	内底に焼き割れ。破片化後に二次被熱、煤付着	H16A30
	280	1268	G-26	包含層(土層e)、排水溝	縄文土器	深鉢	-	-	(5.6)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多、海綿骨針少	良	ナデ	沈線文、縄文	小片	後期前葉	H16D314
	280	1269	F-23-4	包含層(土層e)	弥生土器	壺	13.0	-	(7.9)	淡黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	やや不良	ヨコナデ、ハケ	ハケ	口3/36	口縁内面に板状工具による連続刻突文	H16K49
	280	1270	E-26-4	ベース土(灰オリーブ色細砂)	弥生土器	壺	16.0	-	(2.0)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	並	ヨコナデ	ハケ	口3/36	板状工具による斜行短線文(6条1単位)3列、口縁部下部に板状工具による連続刻突文。外面に煤付着	H16K64
	281	1271	E-25-3-4	包含層(土層e)	弥生土器	壺	17.4	-	(7.1)	灰黄褐	黄橙	粗砂非常に多、礫少、海綿骨針少	並	不明	ハケ、ヨコナデ	口12/36	口縁内面に板状工具による羽状文3列。内面摩滅顕著、ヨゴレ付着	H16K56
	281	1272	E-24-2	上層包含層(暗灰色細砂)	弥生土器	壺	-	-	(2.7)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針多	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	-	上部と剥離。板状工具による連続刻突文2列残る	H16K63
	281	1273	F-25-4	包含層(土層e)	弥生土器	壺	約25	-	(3.5)	黄橙	灰黄褐	粗砂並	良	ハケ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	口縁部下部に板状工具で連続刻突文。内面黒褐色コゲ・ヨゴレ、外面煤付着	H16K67
	281	1274	F-23-1	上層包含層(暗灰色細砂)	弥生土器	壺	18.2	-	(4.2)	黄橙	黄橙	粗砂・礫多、海綿骨針多	並	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	口6/36	口縁部下部に板状工具により連続刻突文。外面一部に煤付着	H16K53

第61表 G地区 第Ⅵ-2面出土土器類観察表3

※ ( ) は残存量を示す。

挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
281	1275	F-21	試掘坑①包含層 (暗灰褐色土)	弥生土器	壺	17.8	-	(4.7)	黄橙	黄橙	粗砂多、2mm大礫非常に多、海綿骨針多	並	不明	ハケ、ヨコナデ	□3/36	口縁内面に板状工具により連続刺突文、外面垂下線か。外面煤付着、内面磨減顯著	H16K52
281	1276	E-26-2、F-26-3	包含層 (土層e)	弥生土器	壺	-	-	(7.4)	褐灰	灰黄褐	粗砂・礫多	良	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	-	外面に板状工具による6条1單位の直線文1列、横状文(時計回り)1列、直線文1列、斜列点文1列。破片化後、煤付着。1277と同一個体か	H16A34-1
281	1277	E-26-2、F-26-3	包含層 (土層e)	弥生土器	壺	-	7.8	(9.0)	褐灰	灰黄褐	粗砂・礫多	良	ナデ	ナデ、ミガキ	底6/36	底部円盤成形。内外面の一部に煤付着	H16A34-2
281	1278	F-26	包含層 (土層e)	弥生土器	壺	16.0	-	(4.3)	黄橙	灰黄褐	粗砂・礫多、海綿骨針多	並	ハケ	ハケ、ヨコナデ	□5/36	口縁部に板状工具による刺突文(5ヶ所1單位か)。外面煤付着	H17063
281	1279	E-23-4、F-23、E-24-2	包含層 (土層e)	弥生土器	壺	13.5	4.4	17.5	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多、礫少、海綿骨針多	並	ハケ	ハケ、ナデ	□24/36	胴部最大径12.0cm。外底ナデ。内面中程・口縁部にヨコシ、外面全体に煤付着	H16A32
281	1280	F-25-3	包含層 (土層e)	弥生土器	高坏脚部	-	7.1	(4.7)	橙	灰黄褐	粗砂多、2mm大礫非常に多	並	ナデ	ハケ、ヨコナデ	脚6/36		H16K68
281	1281	E-25-4・26-2	包含層 (土層e)	弥生土器	壺	-	-	(10.8)	淡黄橙	淡黄橙	粗砂多、礫少	良	ハケ	ハケ、ミガキ	-	外面ヘラ描	H17062
281	1282	F-24-1	包含層 (暗灰色土)	弥生土器	壺	21.7	-	(3.9)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多、2mm大礫非常に多、海綿骨針少	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	□6/36	擬凹線文	H16K51
281	1283	E-24-2	包含層 (暗灰色土)	土師器か	高坏	12.1	-	(2.5)	褐	褐	粗砂・礫少、海綿骨針少	良	ミガキ	ミガキ	□24/36	内面赤彩、外面摩耗のため不明	H16C10
281	1284	F-23-3・4	包含層 (暗灰色土)	土師器	器台	7.8	11.0	7.1	明橙	明橙	粗砂・赤色粒少、海綿骨針少	並	ミガキ、ハケ	ミガキ	□15/36	赤彩。脚部に穿孔(孔径約1cm、孔数不明)	H16C2
281	1285	F-23-3・24-4	包含層 (暗灰色土)	土師器	器台	-	14.0	(4.1)	黄橙	黄橙	粗砂多、礫少、海綿骨針多	良	ハケ、ナデ	ミガキ	脚9/36	赤彩文。透し孔数不明(孔径約1cm)	H16K59

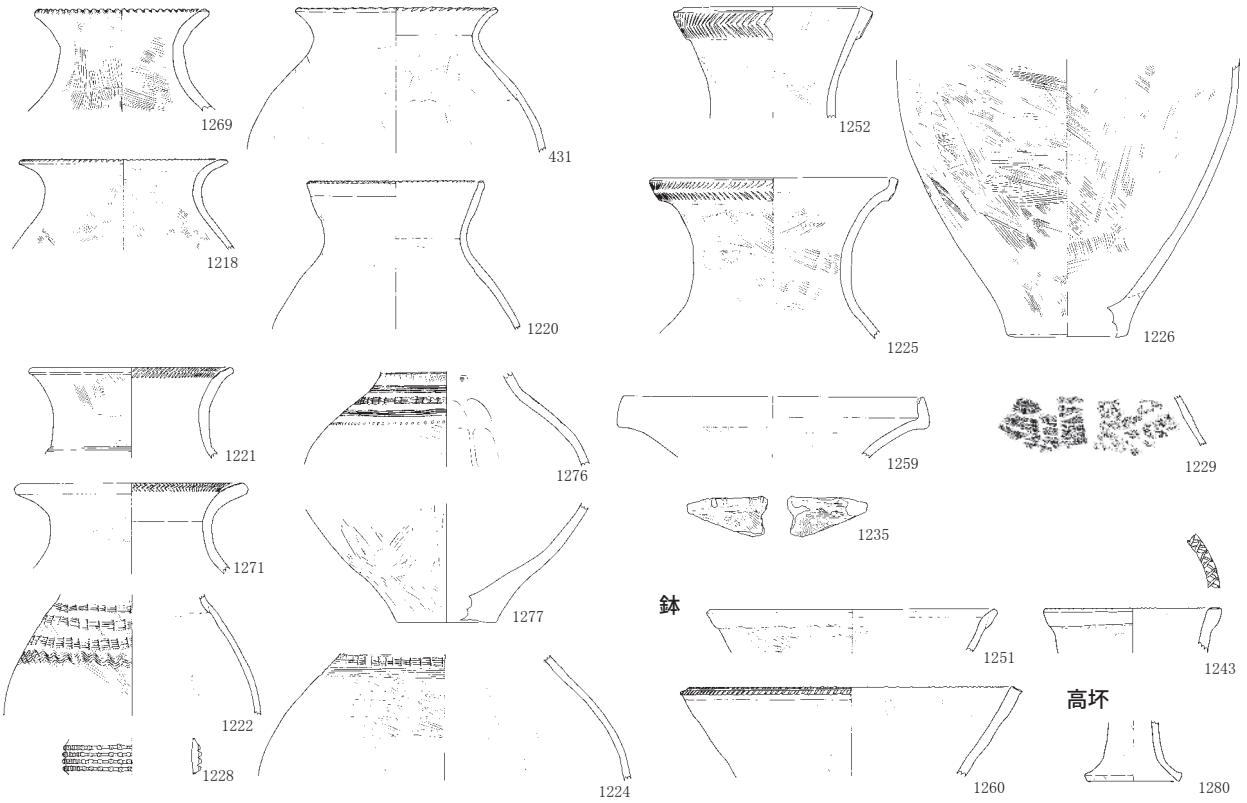
第62表 G地区 第Ⅳ面出土石器観察表

挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	残存重量 (g)	備考	実測番号
275	1242	E-26-2	S1651 (SK6504セク下層3・4)	剥片	ガラス質安山岩	(3.6)	1.9	1.1	(5.7)	黒色。先端が石核表面のため錐ではない	H16石-7
275	1257	E-25-4	SK6505	掻器か	ガラス質安山岩	5.9	7.4	1.1	41.6	黒色	H16石-6
280	1267	G-25-1	SK6502東端	石棒または石刀	粘板岩系	(10.3)	4.2	(1.8)	(139.2)	両端欠損、断面中央付近で割断。黒色	H16石-5

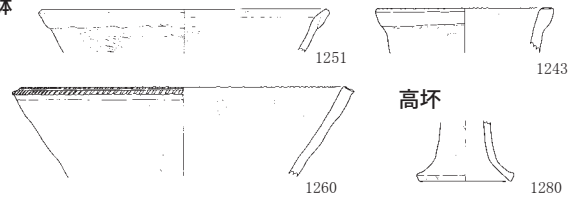
壺は、24点を実測し、口径は13～19cm、約24cmに、あまり偏在性を示さずに分布する。調整は、ハケ調整を基本とし、1224の胴部外面にはミガキ調整が認められる。器形や加飾方法は多様であり、口縁内端に刻みを加える個体(431・1218～20・69)、櫛描文で口縁部や胴部上半を加飾する個体(1221・22・24・28・71・76・77)、直立・肥厚する口縁部を綾杉様の羽状文で加飾する個体(1252)、受口状の口縁部を綾杉様の羽状文で加飾する個体(1225・26)、口縁部下端で屈曲し端部が内傾する個体(1235・59)、胴部上半に直線文が残る個体片(1229)が確認できる。口縁内端に刻みを加える個体は、口縁部が大きく外反する1219・69、内湾気味の口縁部をもつ1220、口縁部が短く球胴形を呈する431・1218に細分可能である。櫛描文で口縁部と胴部上半を加飾する個体は、口縁内縁を2列以上の連続刺突文(1221・71)、斜行短線文(1223)、胴部上半を数列の乱れ気味の直線文、簾状文、波状文、刺突列点文を組み合わせ、それぞれ加飾する。また、1228は頸部に貼り付けた突帯と考えられる。1225・35・52・59とも細部の形状は異なるが、櫛描文系の特徴を示す他、胎土が大きく異なる1229は、他の土器とは異なる場所で焼かれ、持ち込まれた可能性が高い。

甕は、38点を実測し、口径は13cm台、15～18cm台、20cm前後、22～25cm台に分布する。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至る個体が主体となる中、頸部でくの字状に屈曲する個体(119、1230・46等)も確認できる。調整は、胴部内外面とも左斜め上がりのハケ調整で仕上げることを基本とし、内面をハケ調整後にタテ方向の指ナデを加える個体(1255・56・64等)も客体的に存在する。

壺

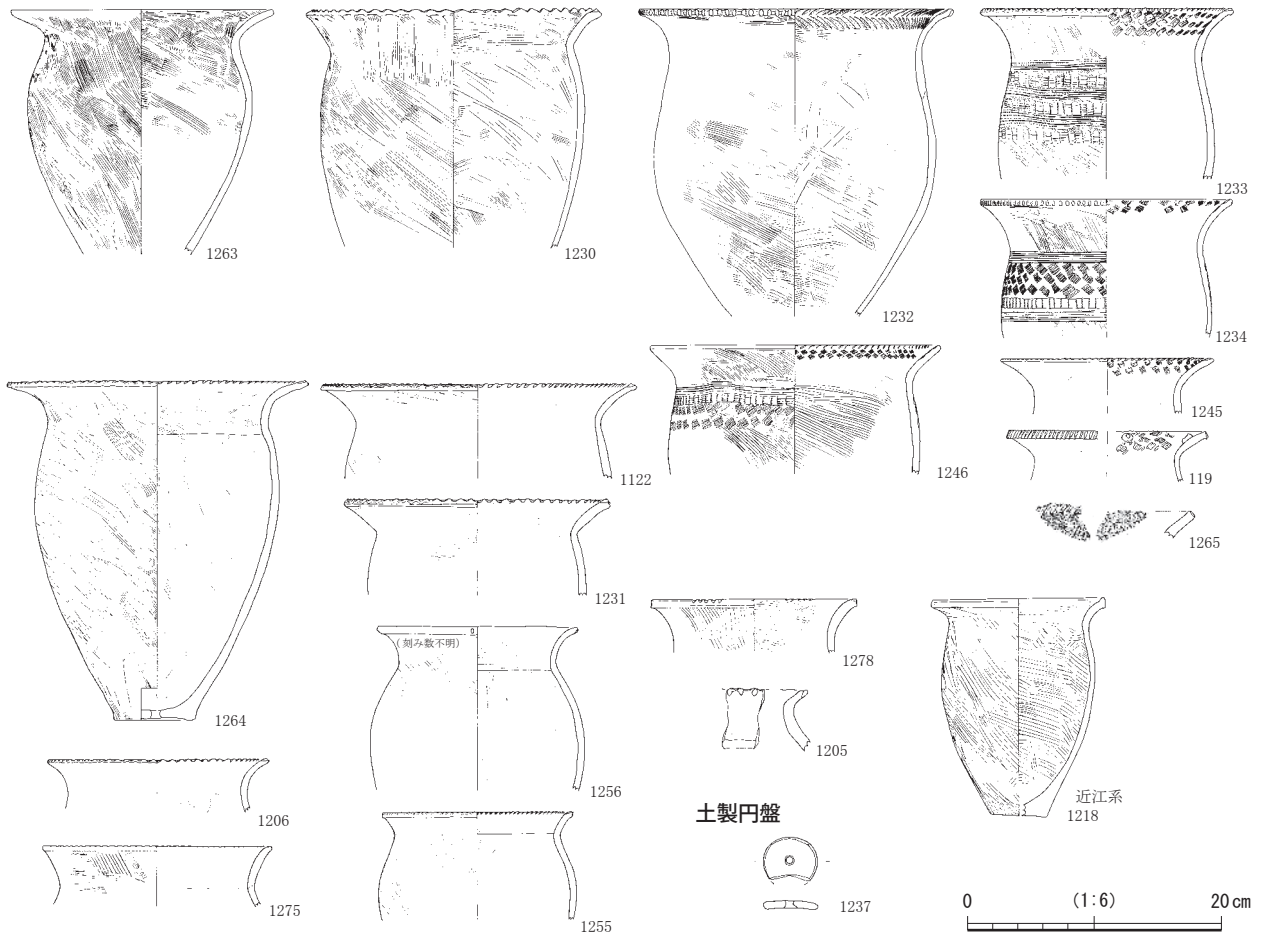


鉢



高坏

甕



第282図 G地区 第VI-2面出土土器分類図(S=1/6)



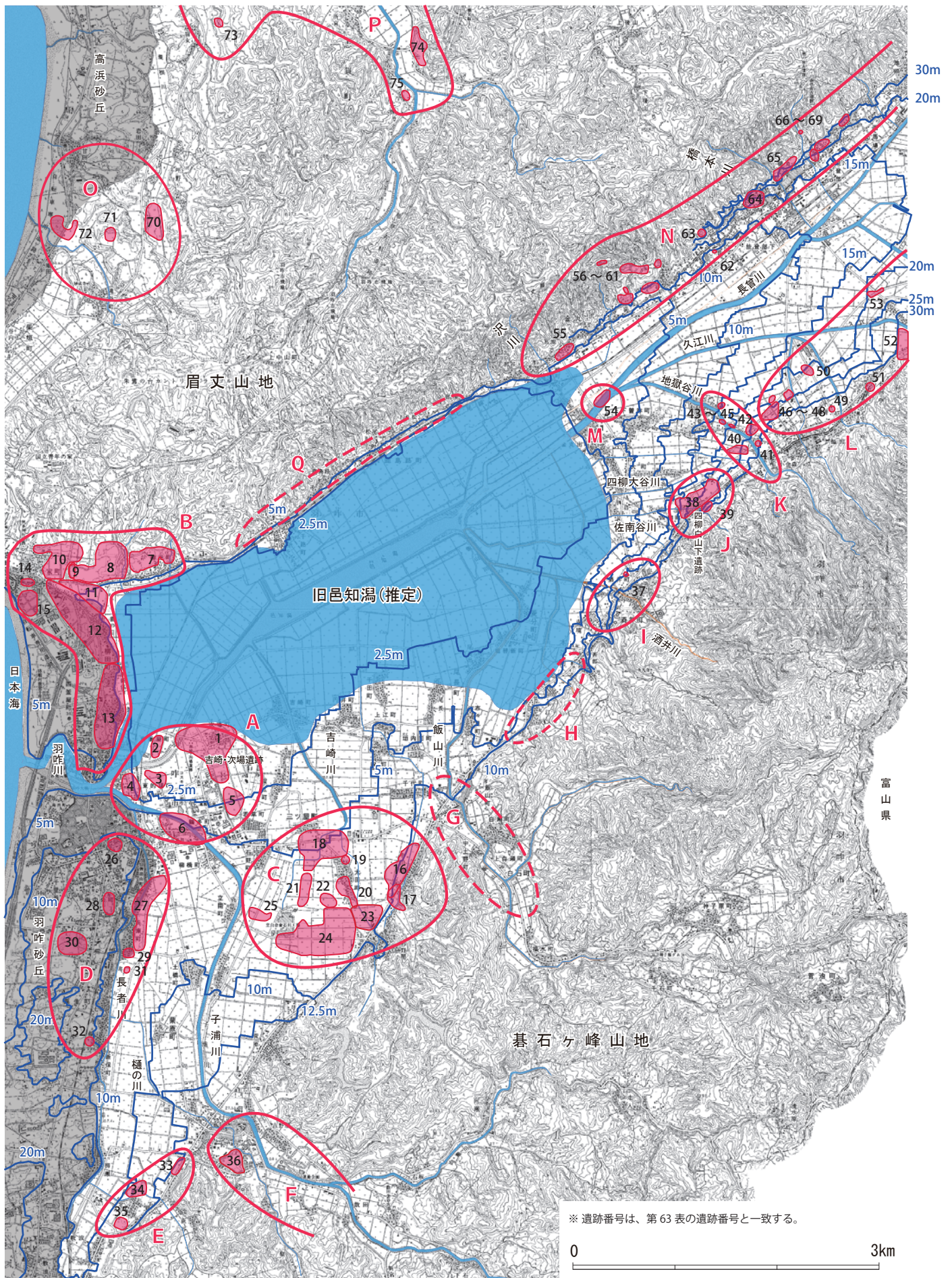
また、近江系と考えられる1218以外は、口縁端部に弱いヨコ方向のナデで、面取りを行なう点で共通する。器形と加飾方法は多様であり、個体数が少ないこともあり、明瞭な規則性を把握できない。口縁部、胴部上半の加飾等からみれば、無文の甕(1258・63)、小波状口縁をもつ甕(1230)、口縁端部のみを刻みで加飾する甕(1264等)、刻みと櫛描文で加飾する甕(119・120、1232～34・45・46・50・53・54・65・70)、口縁端部にハケ調整を施す甕(1218)に大別でき、口縁端部のみを刻みで加飾する甕が15点と量的に多く、櫛描文を施す個体は12点と若干少ない。無文の甕1263は、胴部上半に最大径をもつ。小波状口縁をもつ甕1230は、頸部で屈曲し、胴部の張りが弱い。口縁端部のみを刻みで加飾する甕は、頸部から口縁部に緩やかに外反する個体(1122・64、1206等)、頸部で屈曲する個体(1122・1231)、口縁部の外反度合いが弱く、球胴形を呈する個体(1255・56)、口縁部が短く外傾する個体(1205)が存在する。口縁端部の刻みの様相で見れば、上から刻みを施す個体10点に対して、下から刻みを施す個体5点を数え、前者には刻みが全周しない個体1278を含む。また、平坦に仕上げた口縁端部中央に1条の凹線を施した後に刻みを入れる技法は、上から刻みを入れる1122・31・39・44・55と、下から刻みを入れる1274で確認できる。刻みと櫛描文で加飾する甕は、口縁部が緩やかに外反する個体が主体を占め、口縁端部に刻みを施す点で共通する(上から施文4点、下から施文7点)。口縁内端を2列または3列の同方向の斜行短線文を施す個体(119に円形浮文)が主体であり、1232が綾杉様の羽状文、1265は扇形文でそれぞれ加飾する。また、胴部上半の加飾は、乱れた直線文、簾状文、斜行短線文を組み合わせる他、1233には垂下線が確認できる。近江系と考えられる1279は、粗いハケ原体を用いて口縁部外面にヨコ方向のナデを施し、端部を上方にのぼす。なお、凹線文系甕の特徴である口縁端部に凹線文を施した個体や、胴部外面上半にヨコ方向のハケ調整を加える個体は確認できない。

鉢には、完形品はない。粘土紐を貼り付け口縁部を肥厚させる1251、平坦に仕上げた口縁端部を沈線と連続刺突文で加飾する1260、粘土紐を貼り付けて肥厚させた口縁端部にX字状の連続刺突文を施す1243が確認できる。点数は限られるものの、口縁部のあり方は多彩な様相を呈する。高坏は、完形品はなく、端部に平坦面をつくる脚部片1280の1点にとどまる。

#### 旧邑知潟周辺遺跡の消長(第283～285図、第63表)

本遺跡周辺の地形、遺跡については、第2章で通史的に概要を示したが、改めて弥生時代の集落分布と盛衰の観点から整理し、第VI-2面で確認された集落の位置付けを行なう。

まず、本遺跡周辺の地形を概観すれば、第2章第3図、本章第283図のとおり、東側から碁石ヶ峰山地、邑知地溝帯・邑知潟、眉丈山地が北東―南西方向に連なり、羽咋・高浜砂丘を経て、西側で日本海に接する。邑知地溝帯は、並走する2条の断層帯により切断された土地が沈降してできた低地帯であり、南西端に位置する旧邑知潟は縄文時代前期のいわゆる縄文海進で入り江状に入り込んだ海が、海岸砂丘(羽咋砂丘のうち東側の内列砂丘)の形成により外海から隔絶してできた海跡湖である。本遺跡が属する地溝帯南東部は、碁石ヶ峰山地を開析して流下する中小河川(長曾川、久江川、地獄谷川、四柳大谷川等)が運んだ土砂が堆積した中・小規模な合成扇状地が碁石ヶ峰山地の山裾に連なる。同様に、地溝帯北東部の眉丈山地山裾にも小河川(沢川、橋本川等)による急傾斜な小扇状地形をみてとることができる。一方、地溝帯南西部には、吉崎川、子浦川等の複合扇状地と三角州性低地が発達する。これらの地形は、弥生時代に焦点をあてた場合、現在と若干異なる景観を示す。藤 則雄氏の一連の研究<sup>(20)</sup>によれば、「縄文時代後・晩期～弥生時代終末には海水面は、現海水準下1～2mに迄降下し、当時の海岸線は現海岸線から約1kmも沖に退き、そこに今は失き幻の砂丘が分布」する様相であった。旧邑知潟も湖面が縮小し<sup>(21)</sup>、一部は陸化していたと考えられている。また、海岸砂丘については、内陸側(東



第283図 周辺の弥生時代の集落遺跡分布図(S=1/60,000)

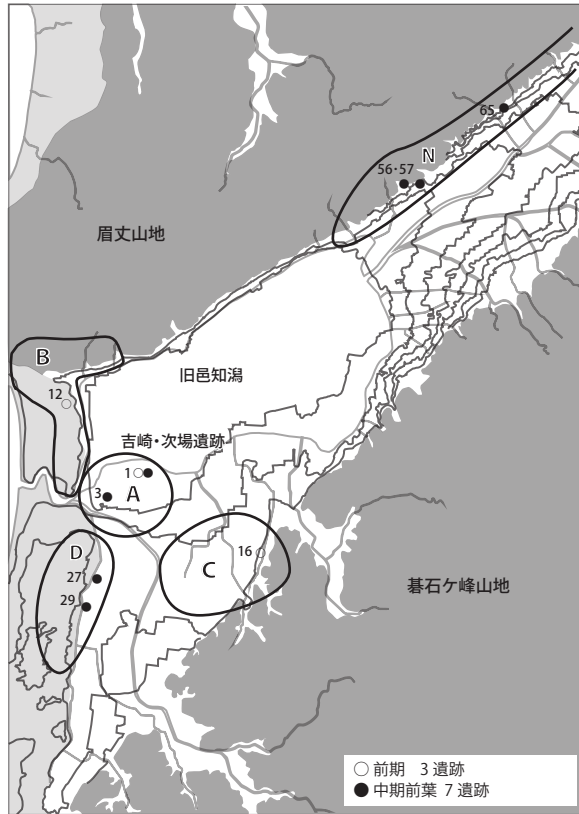
第63表 周辺の弥生時代の集落遺跡消長一覽表

No	分布域の区分	遺跡名	前期	中期				後期		末
				前半		後半		前半	後半	
				I	II	III	IV			
1	A: 邑知潟西縁	吉崎・次場遺跡								
2		東釜屋遺跡								
3		東的場タケノハナ遺跡								
4		的場農業倉庫前遺跡								
5		次場コウレン遺跡								
6		子浦川遺跡	(詳細不明)							
7	B: 柴垣台地南縁・ 羽咋砂丘東縁	柳田ウワノ遺跡								
8		柳田台地遺跡								
9		柳田シャコヅ遺跡								
10		気多社僧坊群遺跡								
11		柳田猫ノ目遺跡								
12		寺家遺跡								
13		釜屋遺跡								
14		一ノ宮郵便局遺跡								
15		寺家海岸遺跡								
16	C: 吉崎川水系	中川A遺跡								
17		杉野屋専光寺遺跡								
18		太田ニシカワダ遺跡								
19		太田C遺跡	(詳細不明)							
20		太田B遺跡								
21		太田ツツミダ遺跡								
22		太田A遺跡								
23		杉野屋遺跡								
24		杉野屋ロクパワリ遺跡								
25		二口かみあれた遺跡								
26	D: 羽咋砂丘東縁 (長者川水系)	羽咋高校前遺跡								
27		長者川遺跡								
28		兵庫オクヤマテ遺跡								
29		兵庫遺跡								
30		千里浜遺跡	(詳細不明)							
31		粟生B遺跡								
32	粟生シモデ遺跡									
33	E: 長者川水系上流	荻市遺跡								
34		荻島遺跡								
35		荻島B遺跡								
36	F: 子浦川上流(子浦谷)	子浦蓮華山遺跡	(詳細不明)							
-	(G: 飯山川水系上流)									
-	(H: 酒井川水系上流A)									
37	I: 酒井川水系上流B	酒井トダ遺跡	(詳細不明)							
38	J: 四柳大谷川水系	四柳白山下遺跡								
39		四柳貝塚								
40	K: 地獄谷川水系	小金森ヘイナイメB遺跡								
41		高畠弥生遺跡	(詳細不明)							
42		曾祢C遺跡								
43		曾祢堂田遺跡	(詳細不明)							
44		曾祢大坪遺跡	(詳細不明)							
45	曾祢D遺跡									
46	L: 久江川水系	高畠カタタ・スギモト遺跡								
47		高畠C遺跡								
48		高畠カンジダ遺跡								
49		藤井B遺跡	(詳細不明)							
50		藤井サンジョガリ遺跡								
51		小田中国道B遺跡	(詳細不明)							
52		小田中おばたけ遺跡								
53		久江サザミヤキ遺跡								
54	M: 旧邑知潟東縁	下曾祢ウチマチ遺跡	(詳細不明)							
55	N: 眉丈山南縁 (長者川水系右岸)	金丸宮地遺跡								
56		谷内ブンガヤチ遺跡								
57		金丸テラダヤチ遺跡								
58		金丸ゴロジヤマ遺跡								
59		杉谷チャノバタケ遺跡								
60		金丸杉谷遺跡								
61		金丸杉谷川遺跡	(詳細不明)							
62		能登部下仲町遺跡								
63		能登部下遺跡	(詳細不明)							
64		能登部小学校遺跡								
65		徳丸遺跡								
66		能登部神社前遺跡	(詳細不明)							
67		能登部上遺跡	(詳細不明)							
68		堂ノ上北遺跡								
69		中大門遺跡								
70	O: 柴垣周辺台地・砂丘	甘田タイ遺跡								
71		滝谷八幡社遺跡								
72		柴垣須田遺跡								
73	P: 旧福野潟水系	宿女南山遺跡								
74		上棚中村畑遺跡	(詳細不明)							
75		上棚遺跡	(詳細不明)							

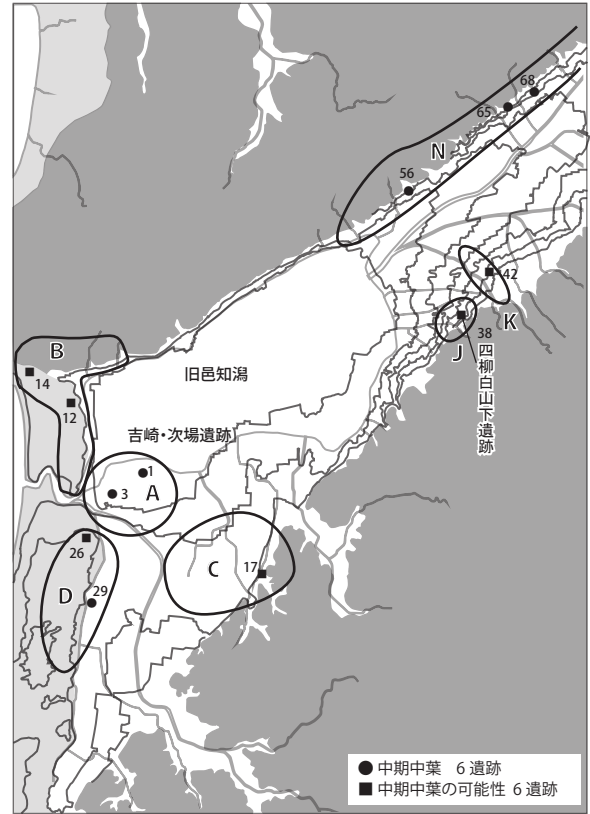
側)の内列砂丘、中列砂丘(縄文時代前期末~中期)がのびる中、外列砂丘(縄文時代後・晩期~弥生時代終末)が形成中途の段階にあり、飛砂により砂丘列近辺の集落遺跡は時として大きな影響を受けている。なお、現在の砂丘景観も10世紀前半代、14世紀末の大規模な砂丘の移動・堆積を経た姿である。さらに、本遺跡や中能登町徳丸遺跡<sup>(22)</sup>の発掘調査事例で確認できるとおり、急峻な碁石ヶ峰・眉丈両山地の前縁に張り出した狭い微高地・合成扇状地(集落適地)では、各中小河川の氾濫と土砂堆積が断続的に発生していたものと考えられる。このように、弥生時代の本遺跡周辺は、汀線が後退し、旧邑知潟湖面はかなり縮小した景観であり、さらに外列砂丘の形成に伴う飛砂や、碁石ヶ峰・眉丈両山地前縁にでの中小河川の断続的な氾濫が発生する状況が想定できる。

さて、弥生時代の旧邑知潟周辺の集落遺跡については、県教育委員会が製作する「いしかわ文化財ナビ」<sup>(23)</sup>を元に、土器のみの出土を含めて、弥生時代の何らかの生活痕跡<sup>(24)</sup>が確認できる遺跡を抽出したところ、地域的な粗密を内在するが、2000年代に進んだ県営ほ場整備事業や道路拡幅事業に伴う発掘調査の蓄積もあり、第283図・第63表で示した75遺跡を数える。

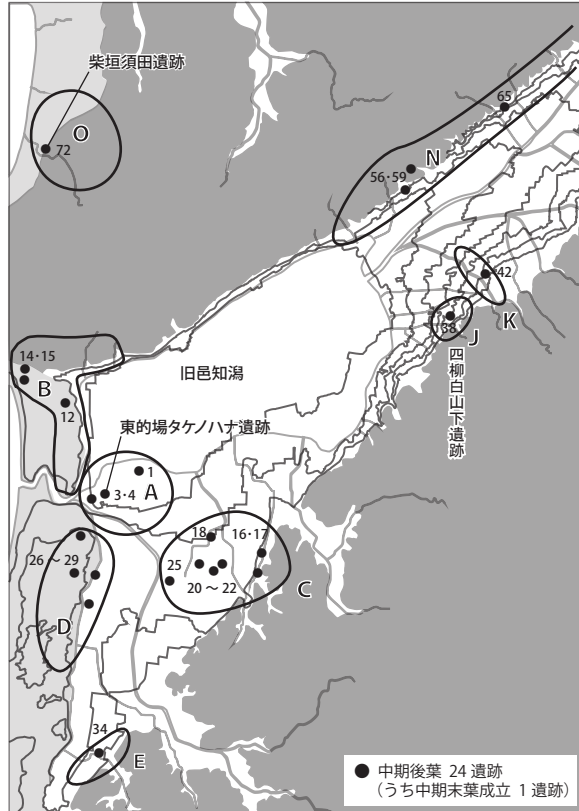
I・II期



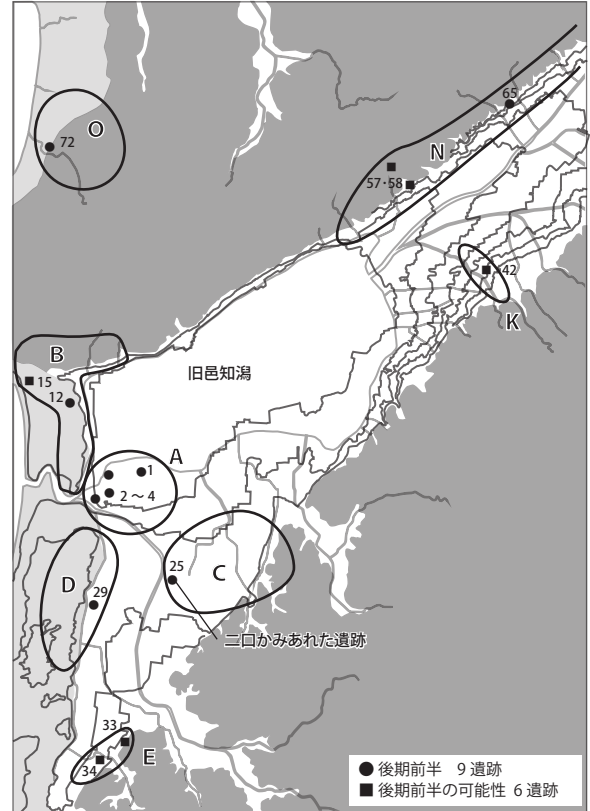
III期



IV期



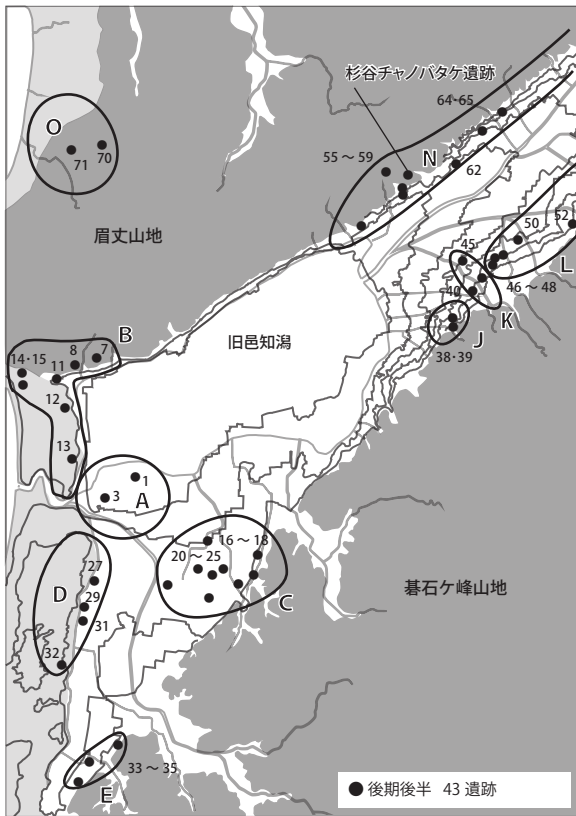
V期前半



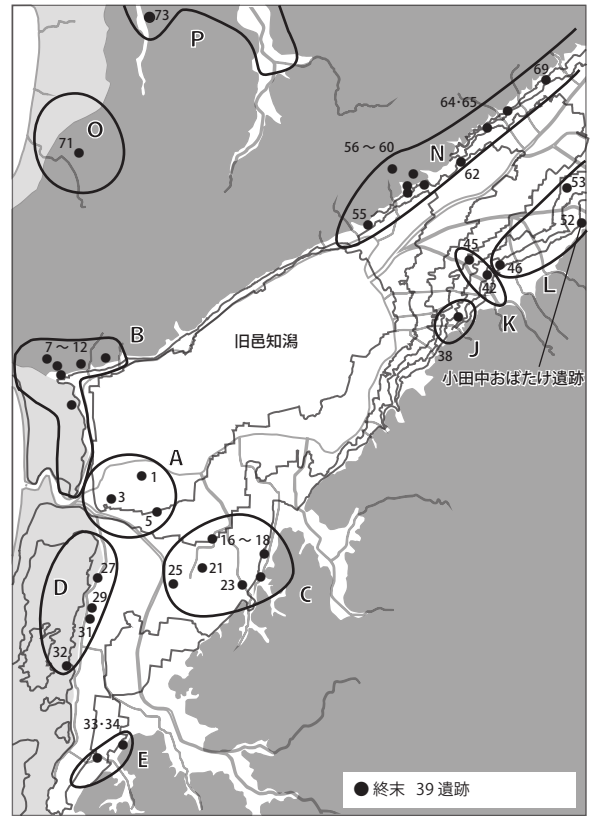
0 3km

第284図 周辺の弥生時代の集落遺跡の消長模式図1(S=1/140,000)

V期後半



VI期



0 3km

第285図 周辺の弥生時代の集落遺跡の消長模式図2(S=1/140,000)

これら集落遺跡の稠密な分布は、第2章で述べたとおり、集落を支える基盤として、生産面で日本海・邑知潟が漁業の場を、邑知潟より続く三角州性低地や扇状地が肥沃な耕作地を、さらに集落域背後の山地が林業資源を提供したことや、陸上交通路や、邑知潟と中小河川を利用した水上交通路が結節し、容易に物資・情報の集積・移動ができたこと等が理由としてあげられる。

現在把握されている集落遺跡は、地形や水系、分布状況等から、第283図・第63表のA～Qの17グループ<sup>(25)</sup>に区分が可能である。そのうち、Bグループ(柴垣台地内縁と内列砂丘東縁)、Dグループ(長者川水系に属する内列砂丘東縁)、Nグループ(長曾川水系に属する碁石ヶ峰山南縁)は、将来的により小エリアの小扇状地・微高地や水系を一つの単位集団とするような集落群に細分できる可能性が高い。また、現在、集落遺跡の分布をみないG・H・Qのグループが想定できる他、特異な立地を示すMグループ(54:下曾祢ウチマチ遺跡)は祭祀・交易等の要素または干拓等に伴う二次的移動を考慮すべきであろう。集落規模でみれば、地溝帯南西部のA～Cのグループは、比較的広範な集落適地(自然堤防、微高地、台地等)に立地するため、複数の時代の集落が少しずつ中心域を移動しながら営まれる傾向を示す。

集落遺跡の消長については、詳細不明の17遺跡を除く11グループ58遺跡を対象として、I～VI期(おおむね畿内の弥生時代土器様式に対応)の7つの時期に区分、各集落遺跡の相対的な盛衰を3段階(薄網掛け破線→薄網掛け→濃網掛けの順に盛期)を示した。以下では、同地域の弥生時代の集落遺跡の消長に関する安英樹、下濱貴子氏の論考<sup>(26)</sup>を参考としつつ、時期ごとに整理を行いたい。

〔I期〕 弥生時代前期で、柴山出村式並行期の土器出土を指標とした。現在、3グループ3遺跡(1:吉崎・次場遺跡、12:寺家遺跡、16:中川A遺跡)が点在する状況にあり、いずれも集落の様相は判然としな

い。このうち、旧邑知湯南縁の自然堤防上に成立した吉崎・次場遺跡は、I期後半の土器の出土点数が比較的多く、西日本の弥生文化が確実に波及していたと考えられている。

〔II期〕 弥生時代中期前半のうち、中期前葉にあたる矢木ジワリ式並行期の土器出土を指標とした。現在、VI期まで集落群(単位集団)を継続するA・D・Nの3グループ7遺跡が確認でき、B・C等のグループで追加が予想される。このうち、集落規模・内容が卓越する吉崎・次場遺跡では、弥生文化が確実に定着しており、III期まで他地域との活発な交流を前提とした生産や情報伝達等の諸機能をもつ「拠点集落」として第一の盛期を迎える。吉崎・次場遺跡の一連の調査では、建物や集落域を画する大溝を検出、搬入品を含めた多種多様な豊富な遺物に加えて大型蛤刃石斧やヒスイ・緑色凝灰岩の玉、木器の生産が確認されている。また、Aグループの東的場タケノハナ遺跡(3)、Nグループの谷内ブンガヤチ遺跡(56)等が成立をみるが、吉崎・次場遺跡に比して小規模であった可能性が高い。

〔III期〕 弥生時代中期前半のうち、おおむね中期中葉の時期にあたり、小松式並行期の土器出土を指標とした。現在、可能性を含めて7グループ12遺跡が確認でき、VI期まで継続する集落群(単位集団)・生業空間が、ほぼ同時に成立する意味で大きな画期と推察する。四柳白山下遺跡(38)G地区では、小規模な土砂流入・堆積(第VI-3面、第9節)を経つつも、第VI-2面集落が継続し、搬入したガラス質安山岩を用いて石器を製作しながら、IV期まで集落を営む。中核的な位置を占めるAグループでは、吉崎・次場遺跡が盛期を保持しつつ、西側約400m西に位置する東的場タケノハナ遺跡で環濠(溝間距離約80m)の掘削が確認でき、吉崎・次場遺跡との補完関係が想定されている。Aグループ総体としての「拠点集落」機能は拡充される方向にあり、他グループを卓越した集落規模・生産活動を示す。

〔IV期〕 弥生時代中期後半のうち、中期後葉の磯部運動公園式、中期末葉の戸水B式並行期の土器出土を指標とした。磯部運動公園式並行期は、新たにEグループ(34荻島遺跡)が加わって8グループとなり、集落遺跡数は23遺跡に倍増する。集落遺跡の数は、地溝帯南西部のA～Dグループで増加が顕著であり、特に吉崎川水系に属するCグループがIII期の1遺跡(17:杉野屋専光寺遺跡)から7遺跡と急増する。Aグループは、吉崎・次場遺跡が確実に縮小・衰退傾向を示す一方、東的場タケノハナ遺跡で環濠(溝間距離約90m)の掘り直しを伴う集落規模の拡張が認められることから、吉崎・次場遺跡の担った中核的機能の移動が指摘されている。ただし、グループ間の関係でみれば、Aグループ総体として卓越した内容を持ち、優位性を保持し続けるのに対して、現時点でCグループの調査内容は低調であることから、本質的にII・III期のあり方に変化していない可能性が高い。その意味で、集落遺跡数の急増は、III期で成立した各グループの個々の理由に基づく新規開発を伴った集落形成の活発化を示すものと考えられる。

中期末葉に位置付けられる戸水B式並行期は、4グループ8遺跡と、集落遺跡数は確実に急減する。確認された8遺跡のうち7遺跡は、IV期から継続する集落であり、Nグループ(眉丈山地南縁)に属する谷内ブンガヤチ遺跡(56)、金丸テラダヤチ遺跡(57)以外での集落活動はかなり低調に転ずるようだ。一方、これまで集落遺跡が確認できなかったOグループの砂丘上で柴垣須田遺跡(72)が成立、V期前半まで営まれ、新たな要素を伴った注目すべき動きといえる。なお、IV期末～V期前半という数世代にわたる集落数の減少は、全県的な動向とされる。現時点では判然としないが、広範な地域を包括するような同一要因の結果と思われる。

〔V期前半〕 弥生時代後期前半にあたり、猫橋I式並行期の土器出土を指標とした。現在、可能性を含めて8グループ15遺跡が確認でき、IV期末でみられた集落遺跡数の減少・集約傾向は、V期前半のうちに回復基調に転じる。Aグループに属する東的場タケノハナ遺跡では、建物を未確認だが、環濠の掘り直しや木器・(玉?)生産が確認でき、吉崎・次場遺跡では第二の盛期が始まる。また、定量の遺

物出土をみるCグループの二口かみあれた遺跡(25)、Oグループの柴垣須田遺跡では、活発な集落活動が想定できる。確認できるグループ数や、Aグループに属する2遺跡の様相が、中期後葉(磯部運動公園式並行期)とほとんど変わらない点からみれば、中期末～後期前半という比較的長期の集落遺跡数急減という状況を経つつも、Ⅲ期までに成立したグループ間の関係や、各グループ内の生業空間の構成は、基本的に保持され続けた可能性が高い。なお、四柳白山下遺跡G地区は、この頃に第VI-1面ベース土をなす茶灰色粗砂(厚さ20～40cm)が一時期に流入・堆積し、調査区内で集落活動は確認できない。**〔V期後半〕** 弥生時代後期後半にあたり、法仏式並行期の土器出土を指標とした。現在、10グループ43遺跡が確認でき、各グループとも集落遺跡数が急増、弥生時代を通じて最多となる。

また、様々な新たな動きも各グループで確認できる。中核的な位置を占めるAグループでは、吉崎・次場遺跡が集落の中心域を南東側に移動し、集落規模を縮小しつつも第二の盛期を迎え、以降古墳時代前期まで存続する。一方、東的場タケノハナ遺跡が環濠を掘り直し、北西側に集落域を拡大または移動し、盛期を迎えるようだ。Bグループでは、柳田台地上への集落進出が始まる(7:柳田ウワノ遺跡、8:柳田台地遺跡)。Cグループでは、Ⅳ期と同程度まで集落遺跡数が急増し、おそらく耕作地も大規模に再開されたと考えられる。D・Eグループでは粟生シモデ遺跡(32)等で活発な製玉活動が認められ、Jグループでは集落活動が再開される。さらに、同時期を特徴付ける動きとして、久江川水系上流に位置するLグループで新たに5遺跡が成立し、久江川左岸の扇状地(標高20～30m)の開発が本格的に始まることや、Nグループの杉谷チャノバタケ遺跡(59)で環濠を伴う高地性集落の出現することがあげられる。これらの様々な新たな動きは、V期前半のうちに各グループが次第に活発化する中で、Ⅲ期に成立したグループ間の関係がV期後半をピークとして再編された可能性を示唆するものといえる。

**〔Ⅵ期〕** 弥生時代末にあたり、月影式並行期の土器出土を指標とした。現在、11グループ39遺跡が確認できる。V期後半のグループ数・集落数とも、ほぼ同水準を維持しており、この状況は基本的に古墳時代初頭まで継続するようだ。各グループの存続を前提として、Lグループのように衰退・廃絶する集落遺跡が目立つ一方、Oグループの滝谷八幡社遺跡(71)等のように新たな集落が成立する等、集落群のあり方は複雑な様相を呈する。また、Bグループに属する集落遺跡が柳田台地上に偏在する傾向を示しており、前述の飛砂による砂丘の成長の影響とも考えられる。

以上、旧邑知瀧周辺の集落遺跡の消長を概観した。生業空間を反映したグループについては、Ⅱ期にAグループを中核として新規開発や技術移殖を伴って準備が進み、Ⅲ期のうちに主要グループの基盤が同時期的に広い範囲で成立したと考えられる。この生業空間の基盤は、その後の集落遺跡数の増減や、グループ間の関係の変化とはあまり相関関係を示さず、古墳時代以降も基本的に存続したと推察する。その意味では、旧邑知瀧周辺の集落消長については、弥生文化が面的な定着をみるⅢ期に大きな画期が存在するものとする。

また、グループ間の関係は、Ⅱ期以降、邑知瀧南縁の微高地に営まれたAグループ(吉崎・次場遺跡、東的場タケノハナ遺跡を核とする単位集団)が集落規模、内容とも一貫して卓越する「拠点集落」であり、そのあり方が大きく再編する時期はV期後半前後に求められよう。これまで、同地域におけるⅣ期後半の集落遺跡数の急増については、吉崎川上流域(Cグループ)の活発化や、吉崎・次場遺跡の一時的衰退に呼応する東的場タケノハナ遺跡の活発化と関連付けて、吉崎・次場遺跡の中核機能の喪失と周辺地域への移動・分散という社会構造の変質を伴う大きな転換期として理解されることが多い。しかしながら、AグループがV期後半まで卓越性を保持し続ける状況と矛盾する部分も存在する。Ⅲ期までに成立した生業空間を共有する集落群(単位集団)の継続性を重視した場合、Ⅳ期の集落遺跡の状況はグループ内における新規開発を含んだ集落形成の活発化を反映したレベルにとどまるとの解釈も

可能である。さらに、同質のレベルによる解釈は、集落遺跡数が急減するⅣ期末、集落遺跡数が増加傾向に転じるⅤ期前半にも可能といえる。

最後に、邑知潟周辺の集落遺跡の動向については、小規模調査や遺物の表面採取による周知化が多いことに加え、限られた集落適地で盛衰を繰り返した集落遺跡自体が、現在の集落域とほぼ重複し、さらに前述の外列砂丘の成長や、中小河川の度重なる氾濫で地中深く埋まっていることも多いと想定できる。このような不確定要素が多く残る中、今回は検討しえなかった集落構造や墓制、流通関係を含めて、集落遺跡数の消長が、どのレベルの社会変化を示すのか、今後とも慎重に検討を続ける必要がある。

〔註〕

- (16) 県内の弥生時代中期の連結した土坑群を外周溝とする平地式建物、金沢寺中遺跡(外周溝内径約9m、多支柱)、西念南新保遺跡]区SB01(外周溝内径約8m、6本柱)、羽咋市吉崎・次場遺跡第16次連結土坑群(外周溝内径約10m、6本以上の支柱)等があり、いずれも堅穴部(居住エリア)に地山面掘り込みが確認できない。本遺跡SI651(外周溝内径約8.6m)は、SK6504の位置・規模及び出土遺物の接合状況を根拠として、SK6504を堅穴部と理解したが、例えば吉崎・次場遺跡第16次調査の平地式建物外周溝(連結土坑群)のSK26・30と、その内側の掘り返しSK24・29の位置関係と同質のものともみることが可能である。建物の一部調査という制約もあり、今後の類例の増加をまって再考すべきと考える。(久保有希子1995「第4章 まとめ」『石川県金沢市上荒屋遺跡Ⅰ』金沢市教育委員会、宮下栄仁1998「羽咋市内遺跡発掘調査報告-住宅建設にともなう吉崎・次場遺跡第16次発掘調査報告書-」羽咋市教育委員会、岡本淳一郎2003「周溝をもつ建物」の基礎的研究』富山大学考古学研究室論集 蜃気楼-秋山進午先生古希記念-』六一書房)
- (17) 下濱貴子2016「第Ⅰ章 土器」『八日市地方遺跡Ⅱ -小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』第5部 土器・土製品編 小松市教育委員会
- (18) 増山仁1988「金沢市磯部運動公園遺跡」金沢市教育委員会  
増山仁1992「金沢市専光寺養魚場遺跡」金沢市教育委員会・(株)本兼建設
- (19) 小林直樹他2005「長者川遺跡-一般国道415号道路改良事業(改良工事)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」羽咋市教育委員会
- (20) 藤 則雄2006「第6章 寺家遺跡の砂丘環境についての研究」『寺家遺跡-第14次~第18次発掘調査報告書-』羽咋市教育委員会
- (21) 邑知潟は、注ぎ込む中小河川からの土砂堆積や近世以降の新田開発等で水面面積・深さを時代を経るにつれて減じている。「弥生の小海退」に伴う湖面の縮小化もあり、弥生時代の湖面復元は困難であるため、第283図の湖面範囲は、あくまで地形・標高等からみた個人的な推定である。
- (22) 徳丸遺跡では、平成11・12年度発掘調査で縄文時代中期中葉~後葉に営まれた1期以降、近世の7期に至る、橋本川の度重なる氾濫・埋没と集落の廃絶・形成を繰り返した過程が如実にみとれる。
- (23) 対象とした集落遺跡の引用文献は非常に多い。県教育委員会が製作し、HPで公開している石川県遺跡地図「いしかわ文化財ナビ」では、確認した遺跡について文献を含めた詳細情報を提供している。本節でとりあげた各遺跡の引用文献は、第7章末に記している。
- (24) 一般に、集落規模に比して発掘調査面積は極めて小さい場合が多い。ここでは、少量の弥生土器の出土を、単なる二次的移動というより、調査区外の近接した場所に集落が存在するものと積極的に評価した。
- (25) 集落遺跡の周辺には、用排水路網を伴う耕作地に代表される生業空間がひろがる。土地・資源等の利用を伴う生業空間のあり方は、一度成立すれば、集落遺跡の動向に比して、自然的・社会的・政治的な一時的休止をはさんでも、基本的に大きな変動を伴わない可能性が高いことを前提としている。その意味で、グループは、生業空間を共有する集落群(単位集団)と略同義の語句として使用している。
- (26) 安 英樹2001「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報 第6号』財団法人 石川県埋蔵文化財センター  
下濱貴子2009「報告3 石川における弥生時代の拠点集落について」『まいぶんフォーラム報告2 弥生時代の北陸を探る-考証 八日市地方遺跡とは-』小松市教育委員会



## 第9節 第VI-3面・第VII-1面の遺構と遺物 (第286～297図、第64・65表)

## 1 概要(第286図)

G地区第VI-3面・第VII-1面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。第VI-2面ベース土を人力で掘り下げて検出した生活面であり、24杭ラインを境として、北側に第VI-3面(弥生時代中期中葉)、南側に第VII-1面(縄文時代晩期後半～末)が展開する。遺構検出面は、第VI-2面検出面より15～40cm程度下がり、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で13.07m(第VI-2面ベース面13.26mより-19cm)、G-23区杭脇で13.18m(同13.44mより-16cm)、北東端(G-26区杭南東3m)で13.20m前後(同13.61mより-約40cm)、北端(F-26区杭西8m)で12.65m(同約13.00mより-約35cm)をそれぞれ測る。また、遺構検出面は、標高12.52～13.24mを示す緩斜面であり、G-24区付近が最も高くなる。調査区内の標高差は、Gライン(北東-南西方向)が約0.2m、23ライン(南東-北西方向)が約0.3mと、これまでと同様の北西～西側に向けて傾斜する地形であるが、傾斜は次第に緩くなりつつある。

土層層序については、第8節第1項を参照されたいが、24杭ライン以南の第VII-1面は、上層から、部分的に厚さ10～20cm前後堆積した第VI-2面ベース土(淡灰色粗砂、濁暗灰褐色細砂)、第VII-1面遺物包含層(濁灰～淡灰色細砂～砂質土)、第VII-1面ベース土(第VII-2面遺物包含層：淡灰オリーブ色弱粘質土)となる。

調査の結果、第VI-3面でピットや河道3条を、第VII-1面で竪穴状遺構1棟、土坑、ピットをそれぞれ検出した。出土遺物は比較的少ない。

## 2 第VI-3面の遺構・遺物(遺構：第286～292図、遺物：第293・305図)

F・G-24区以北で、ピット8基、河道3条を検出し、河道SD6802-bを中心に縄文～弥生の土器片約110点が出土した。ピットは暗灰褐色砂質土を基調とした覆土で、弥生時代中期中葉に調査区外を含めた扇状地北側を中心に営まれた集落の一部と考えられ、河道で大きく損壊する。河道3条は、弥生時代中期後葉に営まれた第VI-1面のベース土ともなる小規模な土石流痕跡(土石流災害6)であり、土層の切り合い関係からSD6802-a→SD6802-b→SD6801の順に発生する。

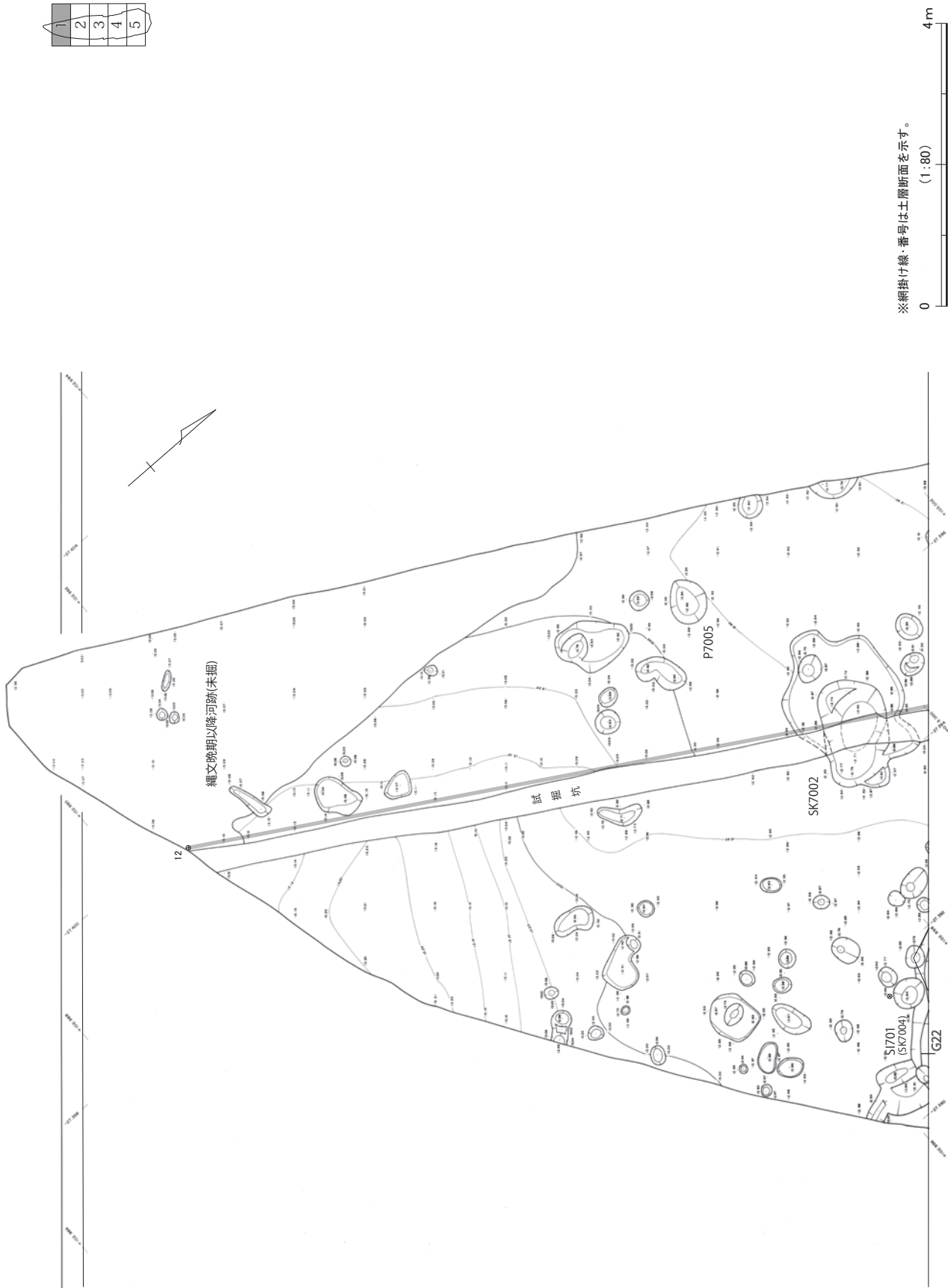
**P6801** E-26区のSD6801・02の流路から外れた位置で検出した不整形を呈する小穴である。径約45cm、深さ45cmを測り、覆土は下層から暗灰色砂質土、にぶい灰白色砂が堆積する。同一個体と考えられる第293図1286・87の壺が出土した。1286は口径18.1cmを測り、ゆるやかに外傾する口縁部外面に幅広の突帯を貼り付ける。突帯は、クシ状工具を用いて、やや斜め方向の連続刺突文で加飾し、器形を含めて第282図1258と類似する。底部台状の1287は、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが付着する。

**P6802** E・F-26区SD6801脇で検出した不整形な落ち込みで、切り合い関係からSD6801より古く位置付けられる。暗灰褐色砂質土を覆土とし、深さ15cmを測る。摩滅した縄文土器細片が出土した。

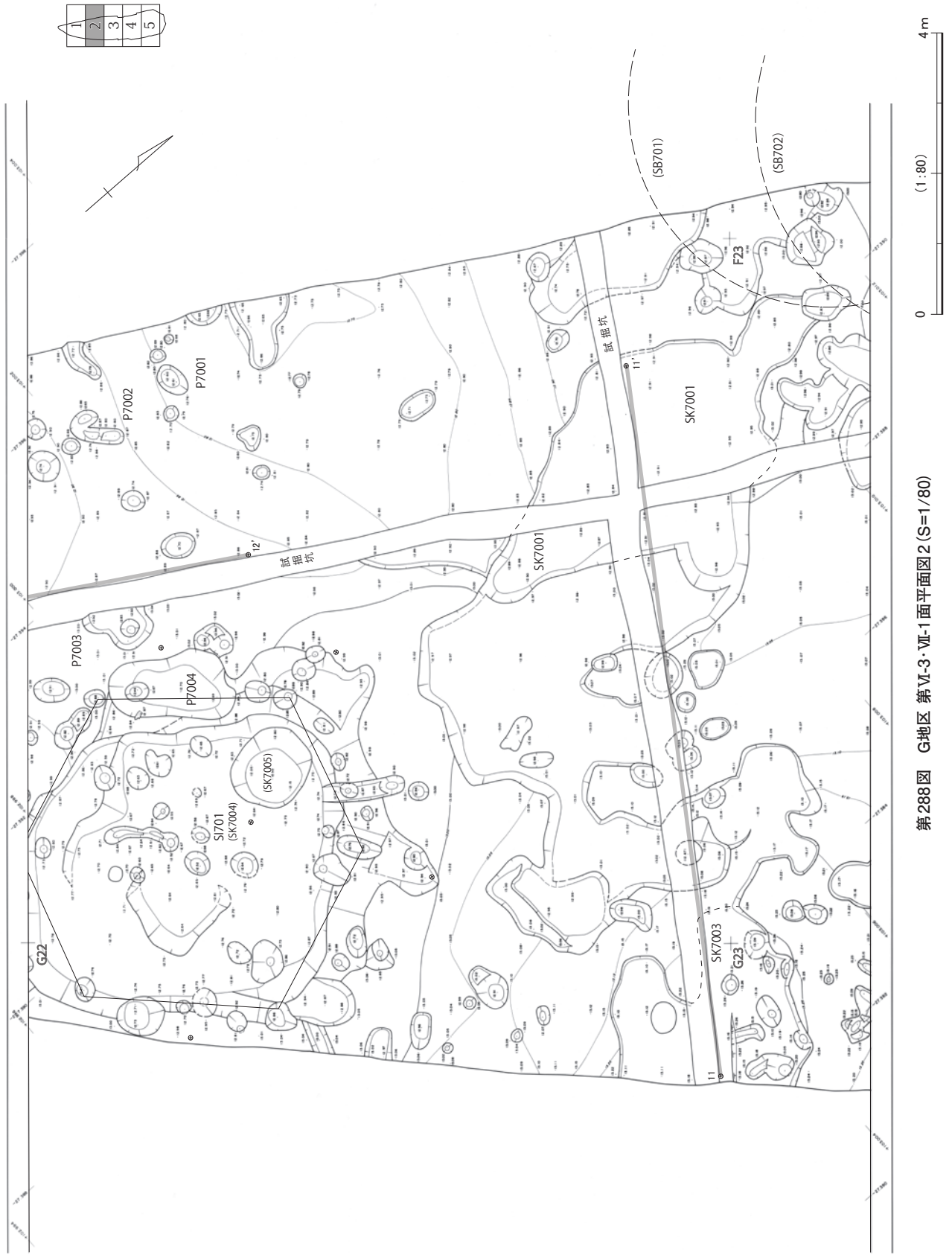
**SD6801** E・F-26区で検出した小規模な土石流痕跡で、地形と垂直方向(北西方向)に流下する。幅3～4m、深さ95～135cmを測り、覆土は淡灰～明黄色の砂利・礫(10～30cm大)を基本とする。特に第292図土層断面図の第7・9・10層は同質土で、一挙に流入・堆積したと考えられる。遺物は、第VII-1期に属する条痕文を施した土器小片を含む、縄文土器片数点が出土したにとどまる。

**SD6802-a・b** E～G-24・25区で検出した2条の土石流痕跡であり、南東方向から北西方向に流下する。前述のとおり、遺構の切り合い関係からSD6802-bが新しい。SD6802-aは、調査区南東壁で幅約12m、

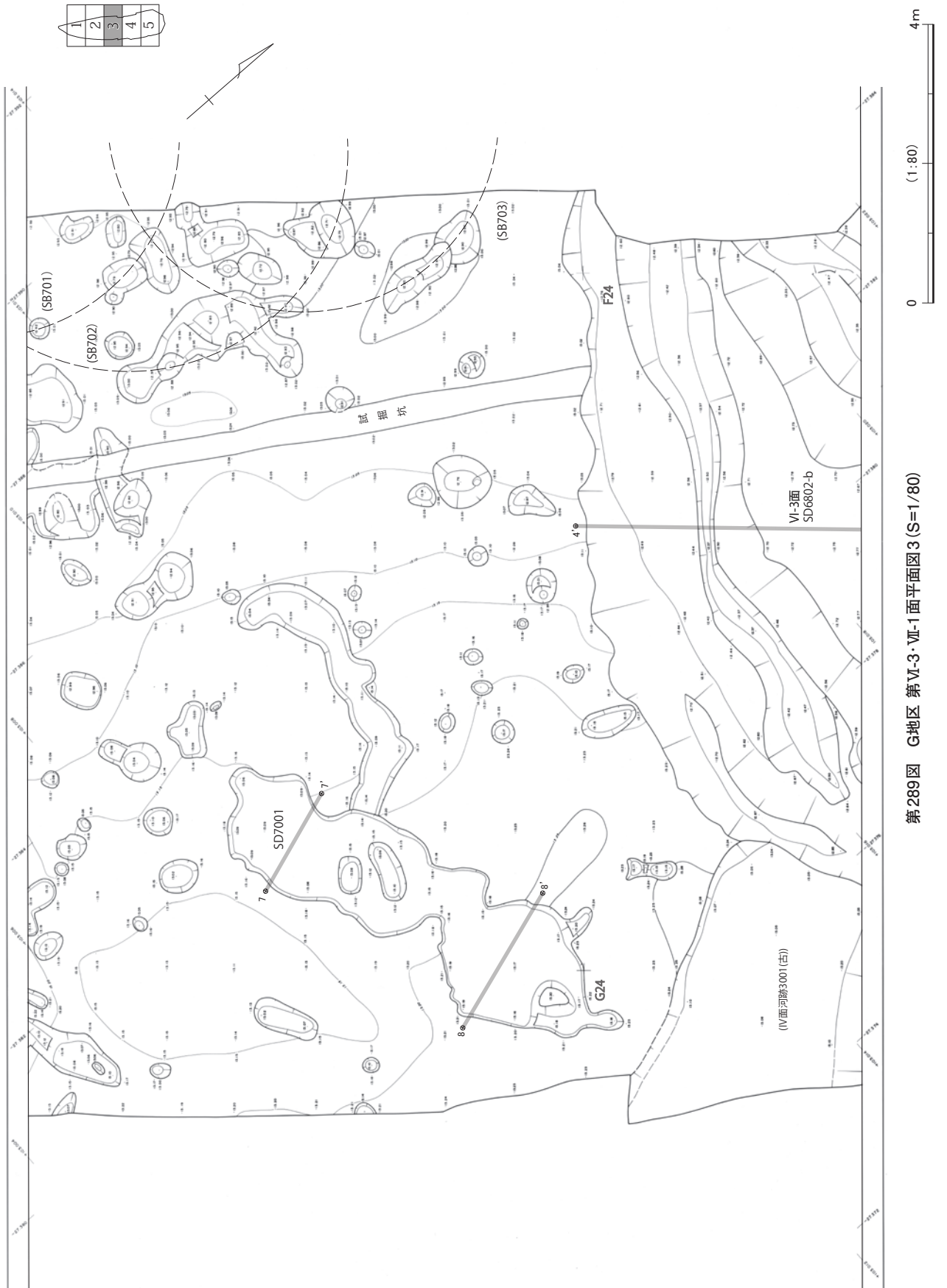


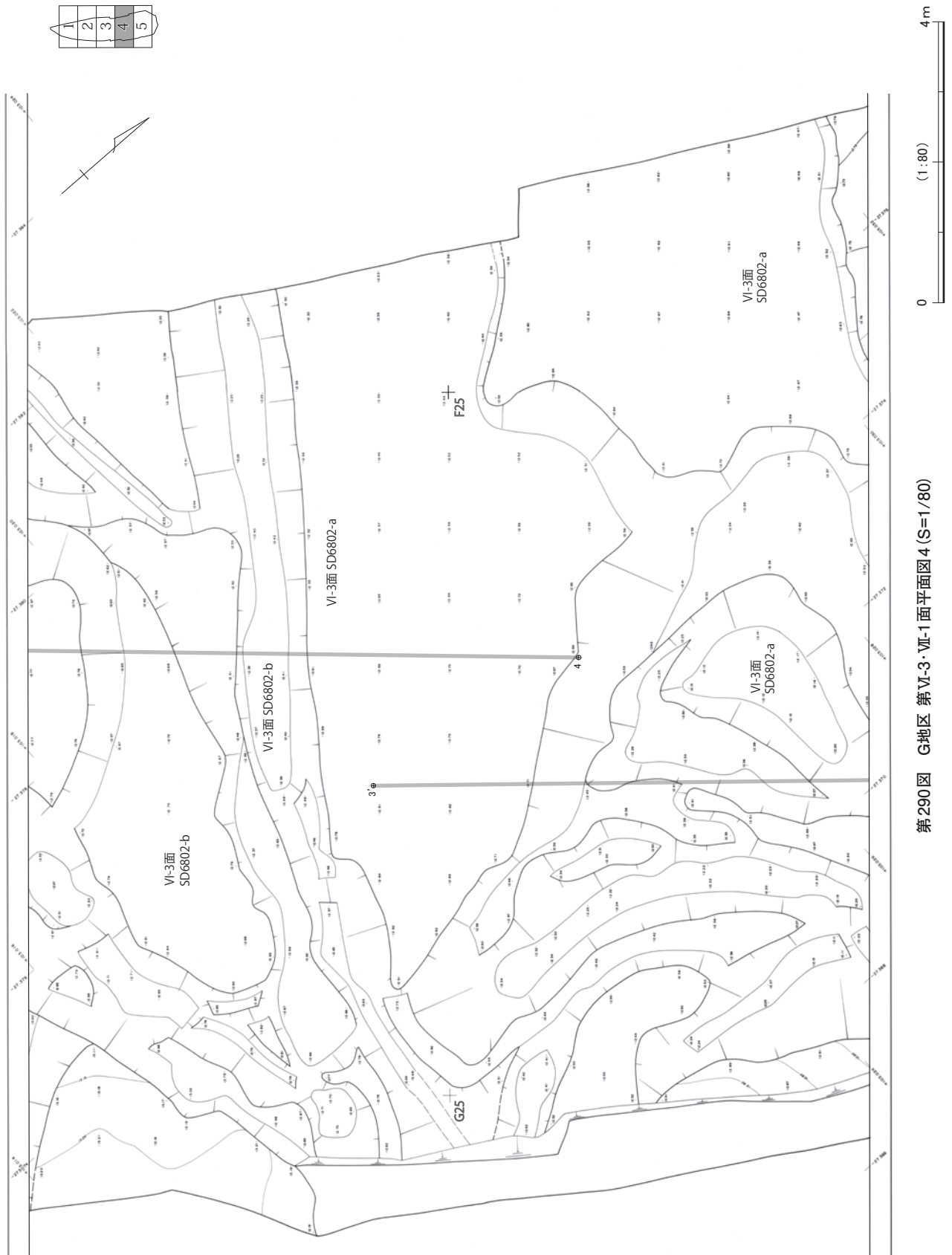


第287図 G地区 第VI-3・VI-1面平面図1 (S=1/80)

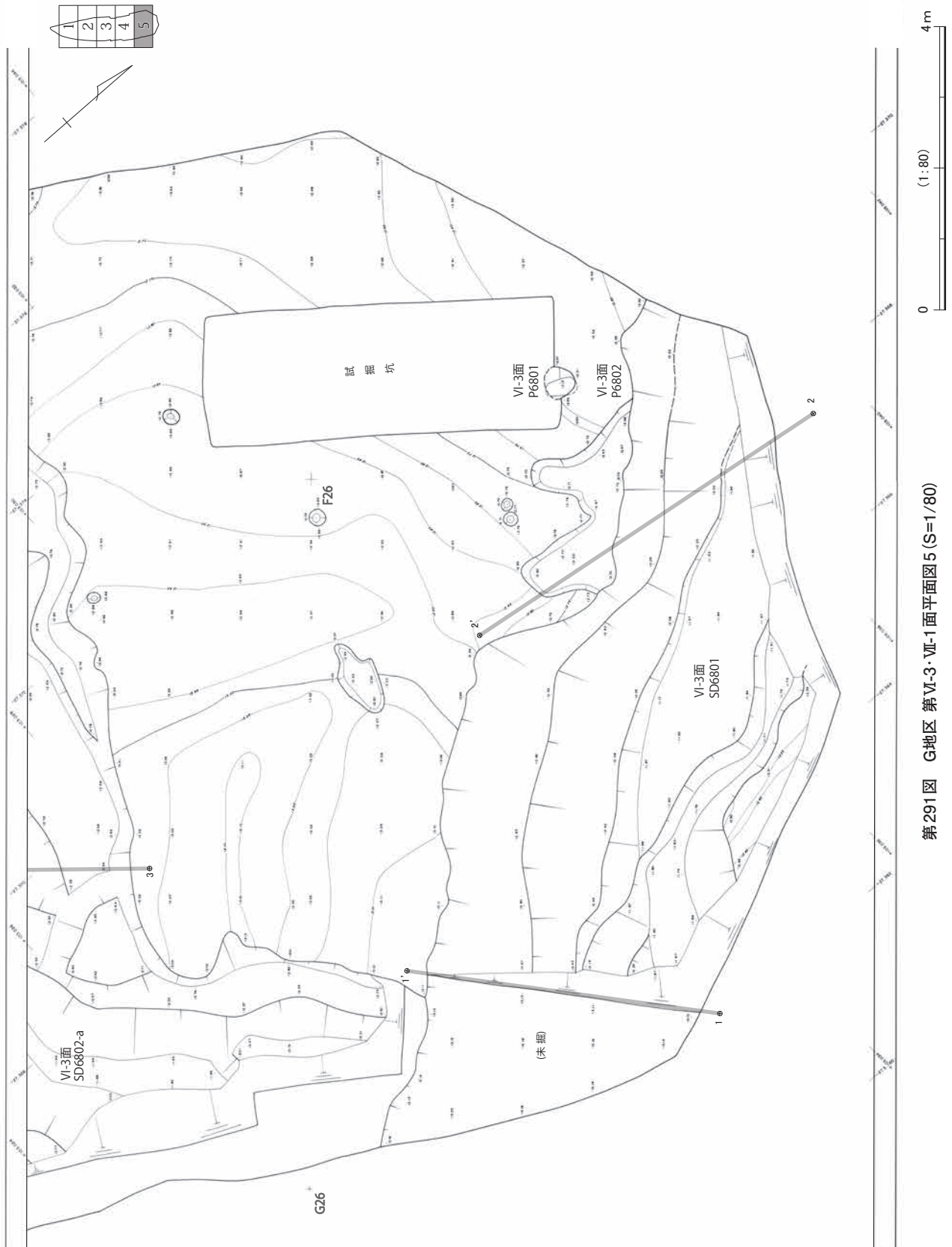


第288図 G地区 第VI-3・VII-1面平面図2 (S=1/80)



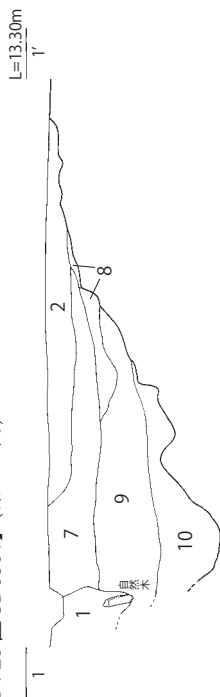


第290図 G地区 第VI-3・VII-1面平面図4 (S=1/80)

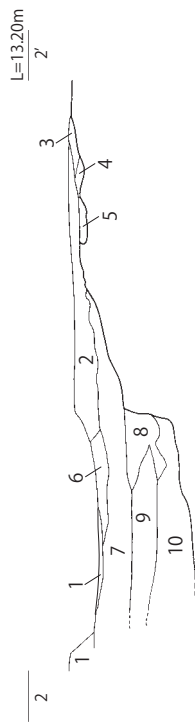


第291図 G地区 第VI-3・VII-1面平面図5 (S=1/80)

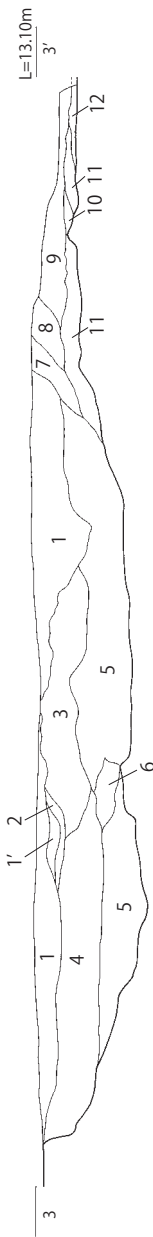
【E・F26区 SD6801】(第291図)



- 1 にぶい、褐灰色細砂(植物遺体混ざる、土器出土)
- 2 明黄色砂利(固くしまる)
- 3 ベース土と暗灰褐色土の混合土
- 4 2層と同質土(やや薄く、砂利の混ざりが少ない)
- 5 4層とベース土bの混合土
- 6 淡灰色細砂
- 7 淡黄灰色砂利(10~30cm大の礫多く混ざり、固くしまる)
- 8 淡灰色細砂と褐色植物層の交互堆積層(自然木の枝が混ざる)
- 9 淡灰色砂利(10~30cm大混ざる)
- 10 淡灰緑色砂利(10~30cm大の礫が混ざる)  
〔ベース土〕a暗褐色細砂、b淡灰色細砂



【F24・25区 SD6802-a】(第290・291図)



- 1 にぶい、明黄色砂利~礫層(10cm大)
- 1' 1層と同質土(1層より淡い)
- 2 淡灰色細砂と暗褐色シルトの交互堆積層
- 3 淡灰色細砂と褐色粗砂が水流で複雑に堆積
- 4 淡灰色砂利~礫(30cm大礫が混ざる)
- 5 淡黄灰色砂利~礫(20cm大礫が混ざる)
- 6 3層と同質土(淡灰色細砂が多く混ざる)
- 7 にぶい、灰褐色細砂(1層が混ざる)
- 8 暗褐色粗砂(淡灰色細砂が混ざる)
- 9 淡乳灰色細砂
- 10 淡緑色粗砂
- 11 ベース土と灰色砂質土の混合土
- 12 褐灰色粗砂  
〔ベース土〕暗褐灰色腐植土

【F24・25区 SD6802-b】(第289・290図)

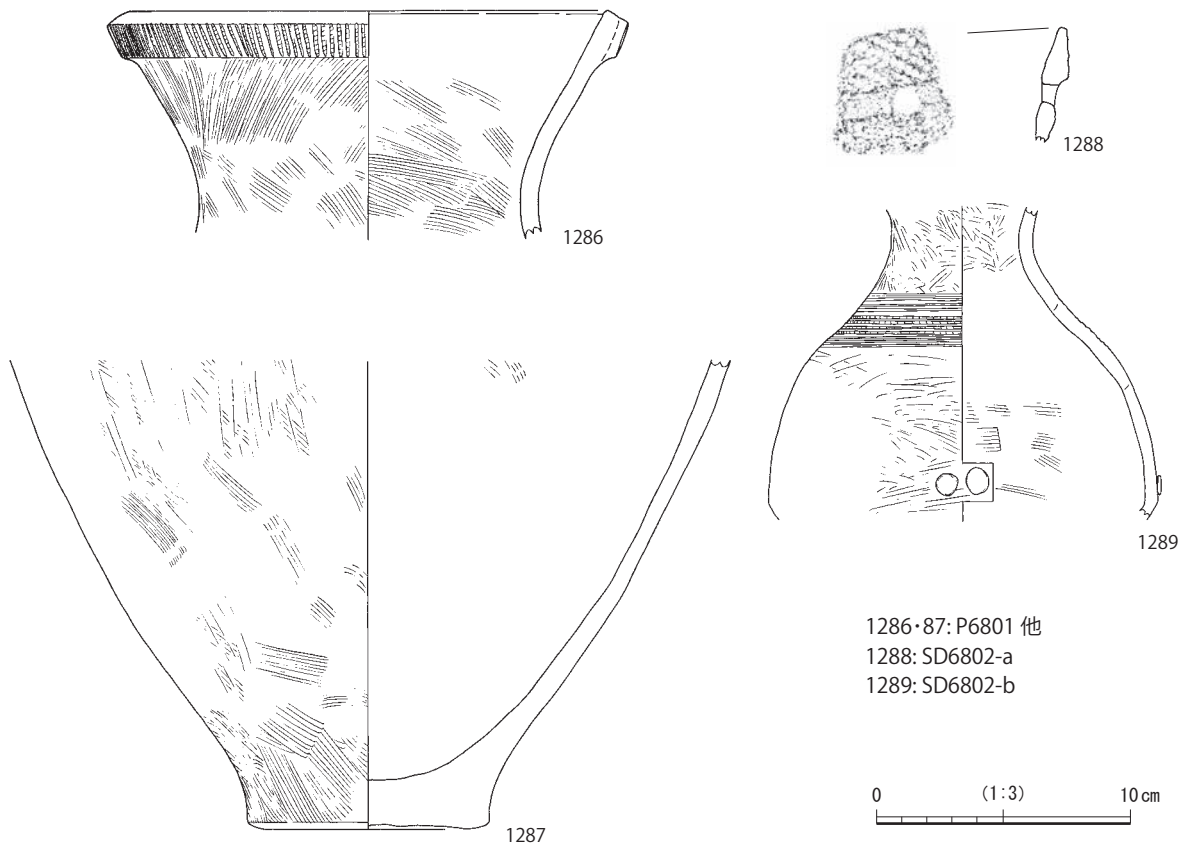


- 1 明茶色砂利(20~30cm大礫が混ざる)
- 2 にぶい、明黄色砂利(10cm大礫が混ざる)
- 3 2層と同質土(やや淡い、土器が混ざる)
- 4 淡灰色細砂(土器が混ざる)
- 5 褐色細砂
- 6 淡黄灰色粗砂と5層の混合土
- 7 淡黄灰色細砂と褐色土の混合土
- 8 灰色砂利~礫(固くしまり、土器が混ざる)
- 9 暗灰色砂質土
- 10 淡灰色粗砂とベース土aの混合土  
〔ベース土〕a暗灰オリブ色弱粘質土、b灰オリブ色弱粘質土



第292図 G地区 第VI-3面土層断面図(S=1/60)





1286・87: P6801 他  
1288: SD6802-a  
1289: SD6802-b

第293図 G地区 第VI-3面出土遺物実測図(S=1/3)

第64表 G地区 第VI-3面出土土器観察表

※( )は残存法量を示す。

挿図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
293	1286	E-26、G-25	P6801、SK6504、包含層他	弥生土器	壺	18.1	-	(8.7)	橙	橙	粗砂多、2mm大礫非常に多	良	ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口12/36	貼付察書にクシ状工具による連続刺突文。1287と同一個体か	H16A6-1
293	1287	E-26、G-25	P6801、SK6504、包含層他	弥生土器	壺	-	9.6	(18.5)	橙	橙	粗砂多、2mm大礫非常に多	良	ハケ、ナデ	ハケ、ケズリ	底27/36	外面下部に黒斑、煤、底部内面にヨコシ付着。1286と同一個体か	H16A6-2
293	1288	F-25	SD6802-a砂利層	縄文土器	深鉢	-	-	(4.5)	暗灰黄	黒褐	粗砂非常に多、海綿骨針多	良	ナデか	縄文	小片	後期前葉(気屋Ⅱ式)。径約0.6cmの穿孔。波状口縁の摩滅顯著。外面煤付着	H16K54
293	1289	F-23-3、F-24-2	SD6802-b、SX6501オチコミ、VI-2面包含層(土層e)	弥生土器	細頸壺	-	-	(12.3)	灰黄褐	褐灰	粗砂多・礫少、海綿骨針少	良	ナデ、ハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ	-	東海系。外面にクシ状工具で直線文・簾状文(4条1単位)、内面浮文(2個一対、2組残存)。外面煤付着	H16A2

北西壁で幅約8.2mを、また東側で底面の起伏が目立ち、深さ74～97cmを測る。覆土は、淡灰～淡灰黄色を呈した砂利・礫(10～30cm大)を基調に、南側肩部に細砂、粗砂が堆積する。出土遺物のうち、第293図1288の縄文土器深鉢片を図化した。波状口縁の1288は、幅広の沈線上に外側から円孔を穿つ。後期前葉(気屋Ⅱ式)に位置付けられ、同時期の遺物はF地区で出土する。他に弥生土器片や爪形文をもつ縄文時代前期の土器片や第Ⅶ-1面に属する条痕文をもつ土器片が約30点出土した。

SD6502-bは、調査区南東壁で幅約3m、北西壁で幅約8mを、また両肩部添いが一段深くなり、深さ46～82cmを測る。覆土は、灰・淡灰～明黄色を呈した砂利・礫(10～30cm大)を基調に、北側で細砂、粗砂が堆積する。F-24-2区の第3・4・8層を中心に出土した遺物のうち、弥生土器1289を図化しており、土石流災害の発生時期を示すものと考えられる。東海系の細頸壺1289は、胴部下端で最大径15.4cmを測る。胴部外面を4条1単位のクシ状工具を用いて直線文、簾条文を施し、2個一対の円形浮文を2ヶ

所以上に貼り付ける。在地の胎土でつくられ、弥生時代中期中葉(八日市地方遺跡8期)を中心とした時期に位置付けられる。他に弥生土器や条痕文をもつ土器の破片約60点が出土した。

## 2 第Ⅶ-1面の遺構・遺物(遺構:第286・294～296図、遺物:第297図)

第Ⅵ-3面(弥生時代中期後葉)に発生した土石流の影響をほとんど受けないE～G-23区以南で検出した生活面で、縄文時代晩期後半～末の竪穴状遺構1棟(SI701)、土坑4基、溝1条、ピット約160基を検出、ピットの中には円形建物の可能性をもつものが存在する(SB701～703)。遺物量はかなり少なく、第Ⅶ-2面に属する遺物を含めても約130点の出土にとどまる。

**SI701(SK7004・05、P7004)** F・G-22区で検出した竪穴状遺構で、現地調査では竪穴部をSK7004、床面北縁の大型坑をSK7005、北西辺の土坑をP7004の遺構番号を付した。平面プランは崩れた隅丸方形を呈し、北西辺は規模を縮小した後に、P7004が掘られる。竪穴部の規模は、北東-南西方向が約510cm、南東-北西方向が約390～400cm(当初約510cm)、深さ30cm前後、平面積約20㎡(当初約26㎡)を測り、竪穴部壁はゆるやかにたちあがる。覆土は、暗灰褐色砂質土を基調とした自然堆積土(第294図土層1～8層)、竪穴部西辺を縮小した埋土(同図11～13層)、P7004埋土(同9・10)となり、若干の起伏をもつ床面では硬化面や炉跡・焼土面を確認できなかった。柱穴の可能性をもつピット(第294図網掛け表示、覆土は暗灰褐色砂質土)を約20基検出し、北東辺中央の1基(長軸65cm)を除いて径25～44cm、深さ11～37cmを測る。6本主柱を復元しており、柱間距離は北東-南西方向約480cm、南東-北西方向約420～450cm、各柱穴間が230～280cmを測る。また、南東辺の2つのピット(第294図矢印表示)は竪穴部中心に向けて斜方向に掘られており、支柱の可能性が高い。床面検出時に確認したSK7005は、略方形を呈し、長軸118cm、短軸98cm、深さ72cmを測る。炭粒が多く混ざる暗灰褐色砂質土の単層で、貯蔵穴の用途が想定できる。出土遺物のうち、SK7004出土の第297図1290、P7004出土の1091の深鉢を図化した。1290は、外面に条痕文を施し、晩期末～弥生時代前期に位置付けられる。1291は外面に撚糸文が残り、後期中葉と考えられる。また、SK7004・05、P7004から晩期末の条痕文を残す土器片が少量出土した。床面の状況や出土遺物の少なさから、かなり短期のうちに廃絶したと考えられる。

**SK7001** F-22-3・F-23-1区で検出した不整形な浅い落ち込みで、遺物包含層のくぼみ部分である。深さ5～12cmを測り、炭粒が混ざる濁灰褐色砂質土を覆土とする。縄文土器深鉢底部片1点が出土した。

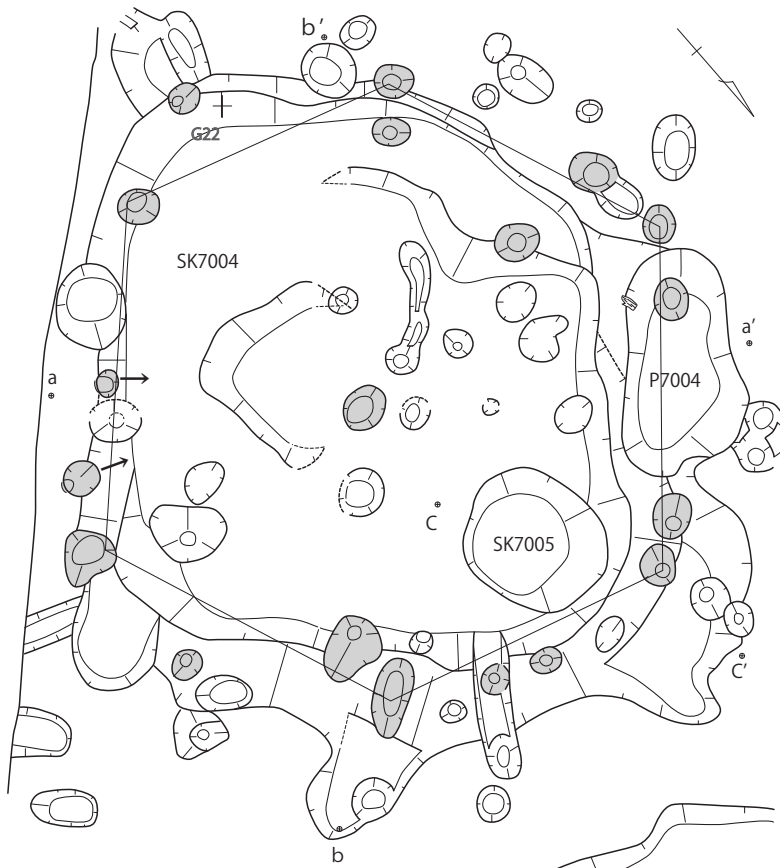
**SK7002** F-21-3・4区で検出した土坑である。長軸213cm、短軸170cm、深さ48cmを測り、平面不整楕円形を呈する中央部が一段深くなる。覆土は炭粒が混ざる濁暗灰色砂質土で、条痕文を含む縄文土器片数点が出土した。

**SK7003** F・G-22・23区で検出した不整形な浅い落ち込みで、遺物包含層のくぼみ部分である。深さ3～15cmを測り、炭粒が混ざる濁灰褐色砂質土を覆土とする。条痕文を含む縄文土器片数点が出土した。

**ピット** 現地調査段階で大小含めて約160基のピットを検出し、大半のピットは深さ10cm以下の遺物包含層の浅い起伏と考えられる。覆土は、炭粒が混ざる暗灰褐～濁灰色を呈した細砂～砂質土を基調とし、炭粒が多く混ざるものも存在した。遺物が出土した5基に番号を付しており、P7001～03・05から、縄文土器小片が各1点出土した。

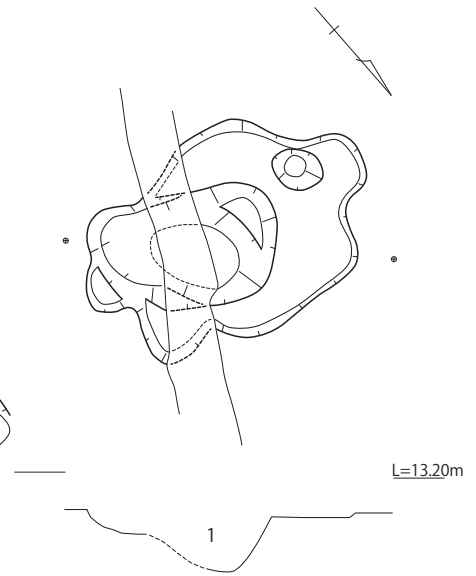
**SB701～703** E・F-22・23区で検出したピットのうち、全主柱配置が未確認で、かつ柱痕跡や出土遺物をみないものの、円形建物の可能性をもつピット群についてSB701～703として復元案を図示した(第295図)。SB701は8本主柱を想定、平面不整楕円形を呈する3基の柱穴は長径60～70cm、短径50cm弱、深さ12～20cmを測る。柱で囲まれた空間は直径5.76m、床面積約26㎡、柱穴間の距離約210cmとなる。SB702は10本主柱を想定、平面不整形を呈する4基の柱穴は長軸60～85cm、短軸53～66cm、深さ8

【F22 区 SI701 (SK7004・05)】

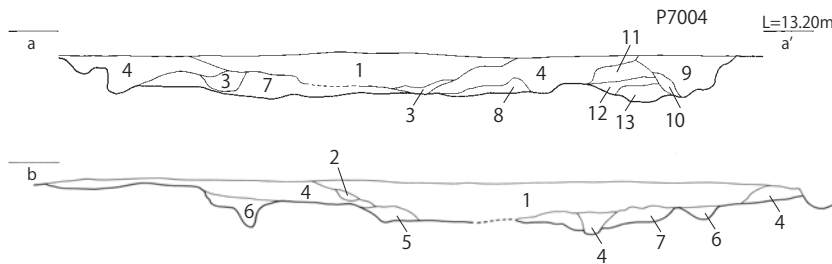
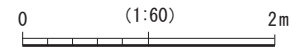


※ 網掛けは、柱穴の可能性をもつピットを示す。

【F21 区 SK7002】

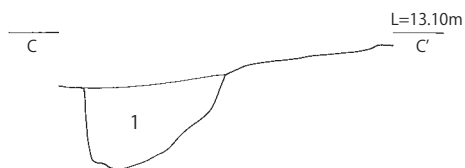


1 濁暗灰色砂質土(炭粒が混ざる)



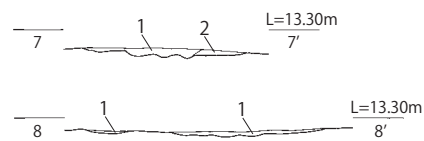
- 1 暗灰褐色砂質土(粗砂に近く炭粒が混ざり、しまりない)
- 2 淡灰色粗砂
- 3 1層とベース土の混合土
- 4 1層と同質土(褐色強くなり、粒子細かい)
- 5 1層とベース土の混合土
- 6 4層と同質土(4層より暗い)
- 7 にぶい濁灰褐色砂質土(1層が粒状に混ざる、炭粒が若干多く混ざる)

- 8 4層とベース土の混合土
- 9 暗褐色砂質土(炭粒が混ざり、しまりない)
- 10 暗褐色砂質土(炭粒が多く混ざる)
- 11 濁灰緑色砂質土(4層が粒状に少し混ざる)
- 12 濁灰褐色砂質土(炭粒が混ざる)
- 13 濁暗灰色砂質土(多くの炭粒と土器が混ざる)
- [ベース土] 灰緑色粗砂



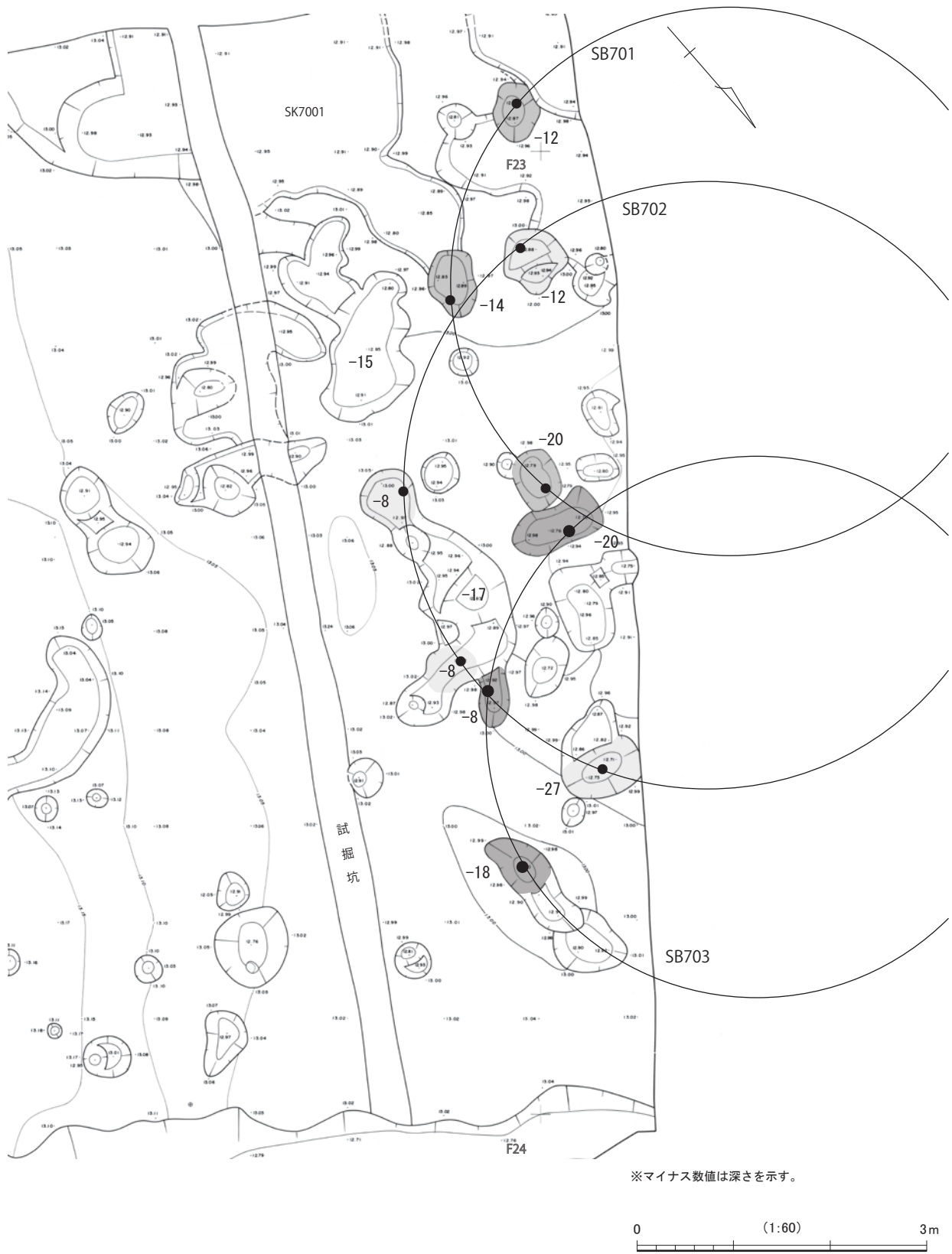
1 にぶい暗灰褐色砂質土(粒子細かく、炭粒が多く混ざる)

【F・G23 区 SD7001】 (第289図)



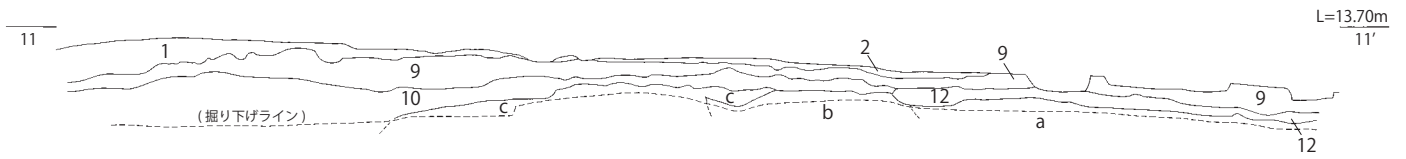
- 1 暗灰褐色砂質土(粗砂に近く、炭粒が混ざる)
- 2 1層とベース土(灰オリーブ色砂質土)の混合土

第294図 G地区 第Ⅶ-1面SK・SD平面図・土層断面図(S=1/60)

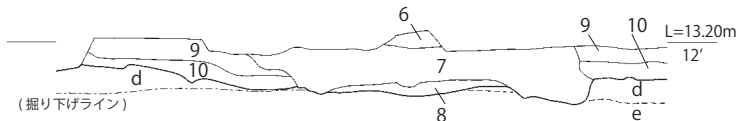
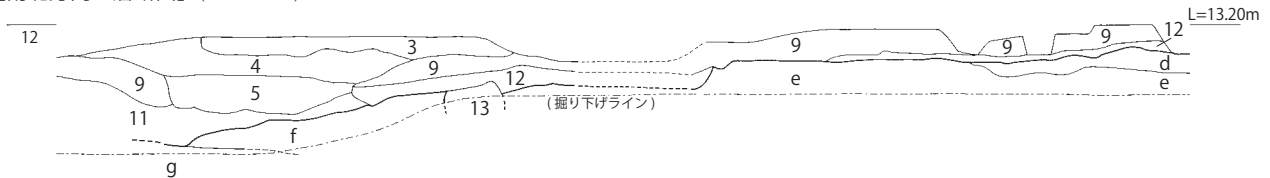


第295図 G地区 第Ⅶ-1面円形建物復元案(S=1/60)

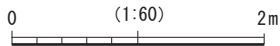
【東西方向土層断面】(第287・288図)



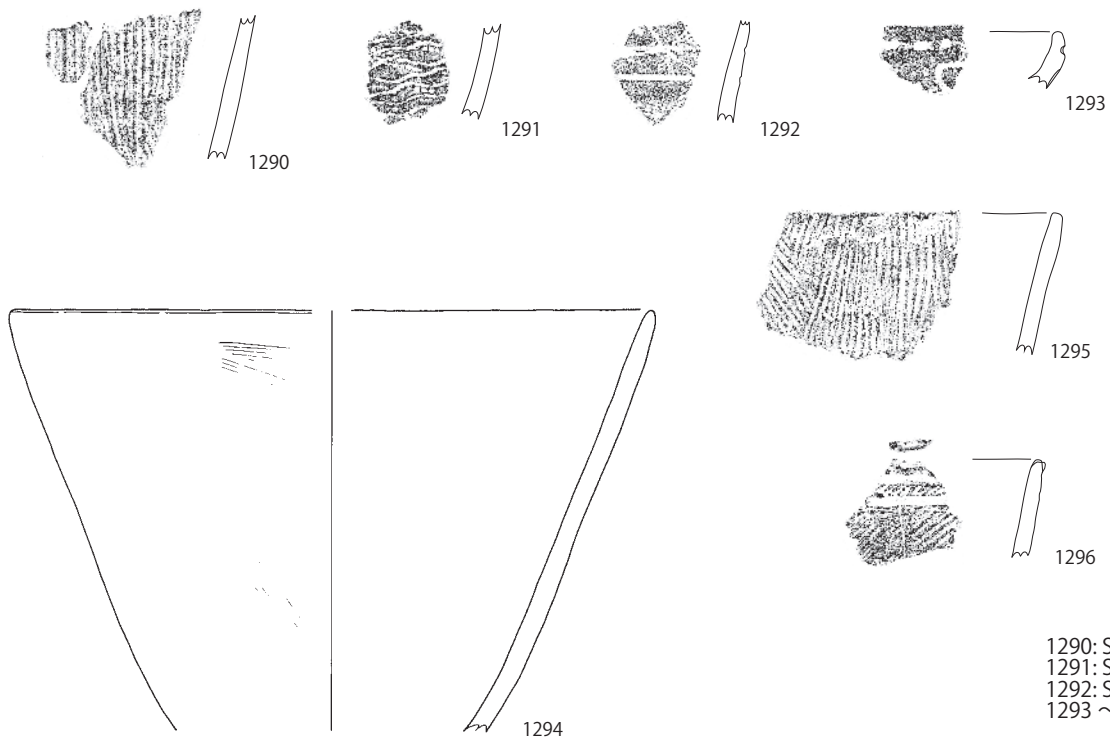
【南北方向土層断面】(第288図)



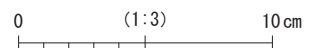
- 1 乳褐色粗砂(礫が混ざる)
  - 2 灰色細砂(9層と同質土、礫が混ざる)
  - 3 明褐色粗砂
  - 4 濁褐色灰色粗砂
  - 5 4層と同質土(礫が多く混ざる)
  - 6 暗灰色砂質土(礫が混ざる)
  - 7 灰褐色粗砂(大きな礫が混ざる)
  - 8 濁灰色砂質土
  - 9 濁灰～淡灰色細砂～砂質土
  - 10 暗灰褐色細砂
  - 11 濁灰褐色粗砂
  - 12 濁暗灰色砂質土
  - 13 濁黄褐色粗砂
- [ベース土] a 淡灰乳色粗砂, b 暗褐色砂質土, c 黄オリーブ色粗砂,  
 d 褐色粗砂(礫が混ざる), e 濁淡灰色砂質土, f 暗褐色灰色細砂,  
 g 暗灰色細砂, h 濁灰褐色砂質土



第296図 G地区 第Ⅶ-1面土層断面図(S=1/60)



1290: SI701(SK7004)  
 1291: SI701(P7004)  
 1292: SD7001  
 1293～96: 包含層



第297図 G地区 第Ⅶ-1面出土遺物実測図(S=1/3)

第65表 G地区 第VII-1面出土土器観察表

※( )は検出量を示す。

検出 番号	番号	実測 番号	グリッド名	出土遺構	種 類	器 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎 土	焼成	内 面 調 整	外 面 調 整	遺存率	備 考
297	1290	H290VI-1-3	F-22	S1701 (SK7004群 (暗灰褐色土))	縄文土器	深鉢	-	-	(5.4)	黄橙	黄橙	粗砂多、2mm大礫非常に多、赤色粒・海綿骨針多	良	ナデ	条痕	-	外面煤付着。縄文晩期末(長竹式)~弥生前期(柴山出村式)
297	1291	H290VI-1-2	F22-3	S1701 (F7004)	縄文土器	深鉢	-	-	(3.3)	黄橙	黄橙	粗砂多、2mm大礫非常に多、海綿骨針多	良	ナデ	縄文	-	擦り糸縄文。後期中葉(酒見式)
297	1292	H290VI-1-1	F-23-4	SD7001	縄文土器	深鉢	-	-	(4.0)	黄橙	黄橙	粗砂多、2mm大礫非常に多	良	ナデ	縄文	-	外面に沈線文2条。後期中葉(酒見式)
297	1293	H290VI-1-6	F-22	包含層	縄文土器	深鉢	-	-	(2.5)	にぶい橙	にぶい橙	粗砂多、礫少、海綿骨針含	良	ナデ	ミガキ	小片	外面に沈線文、後期前葉(前田式後半(高壁フルヤ段階))
297	1294	H16K97	F-21	第VI-2面ベース (炭灰オリーブ色砂質土)、土層e	縄文土器	深鉢	約25	-	(16.6)	にぶい黄橙	褐灰	粗砂多、2mm大礫非常に多、海綿骨針多	良	ナデ	条痕、ナデ	口3/36	外面一部に煤付着。晩期後半
297	1295	H290VI-1-4	F-21	包含層(排水溝)	縄文土器	深鉢	約〇	-	(6.0)	褐灰	にぶい橙	粗砂多、2mm大礫非常に多、海綿骨針含	良	ナデ	条痕	2/36	外面煤・内面コゲ付着。縄文晩期末(長竹式)~弥生前期(柴山出村式)
297	1296	H290VI-1-5	F-22	包含層(灰褐色砂質土)	縄文土器	深鉢	-	-	(3.7)	褐灰	暗灰	粗砂・礫非常に多	良	ケズリ状ナデ	縄文	小片	口縁部に沈線文。外面煤・内面コゲ付着。縄文晩期末(長竹式)

～27cmを測る。柱で囲まれた空間は直径6.30m、床面積約31㎡となる。柱穴間の距離は南側が広く3.20m、他が1.85mを測り、明瞭な門扉状柱穴はないものの南側に開口する可能性をもつ。SB703は8本主柱を想定、平面不整形楕円形を呈する3基の柱穴は長径60～100cm弱、短径30～50cm弱、深さ8～20cmを測る。柱で囲まれた空間は直径5.60m、床面積約26㎡、柱穴間の距離約190cmと、SB701と近似する。

**SD7001** F・G-23区で検出した不整形な浅い溝状落ち込みで、遺物包含層のくぼみ部分と考えられる。深さ2～10cmを測り、炭粒が混ざる濁灰褐色砂質土を覆土とする。出土した第297図1292の縄文土器深鉢片は、外面に浅い沈線文2条が残り、後期中葉に位置付けられる。

**南端河跡** 調査区南端のF-21区で検出した河跡である。F地区北端で検出した河跡と一体をなすと考えられる。灰色を基調とする砂利・粗砂を覆土とし、肩部から縄文時代晩期後葉(下野式並行)の土器が出土した。深鉢第305図1299は、口縁端部内面に指頭圧痕が残り、外面に斜方向の条痕文を施す。

**包含層出土遺物** 縄文時代後期前葉～中葉、晩期後半～末の土器細片約90点が出土、うち第297図1293～1296を図化した。後期前葉の1293は、内湾する口縁部に深い沈線文を施す。晩期後半の深鉢1294は口径約25cmを測り、先細る口縁端部は直線的にのびる。晩期末頃の深鉢1295は、器面に煮炊き痕が明瞭に残る。晩期末の深鉢1296は、条痕文の後、口縁部に沈線文を施す。

#### 4 小 結

調査区南半で検出した第VII-1面は、縄文時代晩期後半～末(下野式～長竹式並行期)に営まれた集落域である。G地区竪穴状遺構SB701、出土遺物の量や、F地区第VII面北側の河跡出土遺物の様相から、当該期の集落域の中心はG・F地区の調査区外東側斜面に展開したと考えられる。当該期の周辺集落は、四柳ミッコ遺跡、小金森ヘイナイメB遺跡で土器棺墓、曾祢C遺跡で円形建物やガラス質安山岩の加工場<sup>(27)</sup>が確認されている。特に谷地形を挟んだ四柳ミッコ遺跡では、B区Ⅲ面・D区Ⅱ面下層で晩期末(長竹式後半)の円形建物10棟以上、方形建物2棟以上を検出しており、その関係が注目される。四柳ミッコ遺跡の円形建物が、布尾和史氏による縄文時代晩期建物類型<sup>(28)</sup>C2類6棟(8本主柱、直径5.7～8m、床面積25.8～50.6㎡)、C3類4棟(10本主柱、直径7.6～8.4m、床面積45～55.9㎡)と比して、G地区で復元したSB701～703(8本主柱、直径5.6～6.3m、床面積26～31㎡)は、C2類の中でも小規模な建物といえる。なお、調査区南半では第VI-3面に属する遺構・遺物は確認できない。

調査区北半で検出した第VI-3面は、集落存続期と土石流災害の発生に伴う集落廃絶期に細分でき、いずれの遺構からも弥生時代中期中葉(八日市地方遺跡8期)を中心とした遺物が出土する。集落域の様相は不明であるが、調査区外北東側及び南東側に展開し、南東側に中心域をもつものと推定される。

また、第Ⅵ-2面との関係から、中葉でも後葉に近い時期に営まれた集落と考えられる。

〔註〕

- (27) 岡本恭一・久田正弘1995『曾祢C遺跡』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会  
 中島俊一1995『大町遺跡 小金森ヘイナイメ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター  
 林 大智他2015『羽咋市 四柳ミッコ遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター  
 (28) 布尾和史2012「北陸縄文時代晩期の建物跡について—建物類型と集落跡における建物類型の構成—」『石川考古学研究会々誌』第55号 石川考古学研究会

## 第10節 第Ⅶ-2面の遺構と遺物 (第298～306図、第66・67表)

### 1 概 要(第298～303図)

G地区第Ⅵ-2面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。F地区第Ⅶ面より延びる縄文時代中期～後期前葉の生活面であり、第Ⅶ-1面ベース土の一部をなす淡灰オリーブ色弱粘質土(第270図第17・18層)を遺物包含層、褐色弱粘質土(同図土層a)をベース土(遺構検出面)とする。遺構検出面は、調査区南東端付近(F-21区杭南東5m)で12.51m(第Ⅵ-2面ベース面13.07mより-56cm)、G-23区杭脇で12.68m(同13.18mより-50cm)、北東端(G-26区杭北西4m)で12.15m(同約13.10mより-95cm)、北西端(F-26区杭西2m)で11.79m(同約12.65mより-86cm)をそれぞれ測る。第Ⅵ-2面検出面より20～95cm下がった高さとなり、調査区北側に向けて、長い期間をかけて厚い遺物包含層が形成されたことがわかる。また、遺構検出面の標高は11.79m～12.68mを示し、南東方向から北西方向に向けて緩やかに傾斜する地形である。調査区内の標高差は、G・Fの中間ライン(北東-南西方向)が0.35m、23ライン(南東-北西方向)が0.4m弱、26ライン(同)が約0.3mを測り、上面に比して傾斜がかなり緩やかになる。なお、第Ⅶ-1面調査後に人力にて第Ⅶ-2面の試掘調査を実施し、厚い遺物包含層中に遺物が少ないことを確認、遺物包含層については重機を用いて取り外している。

調査の結果、G・F-22～24区で土坑(SK)2基、ピット12基、浅い落ち込み2ヶ所(SX7501・02)を検出し、集落域の縁辺部の様相を呈する。遺物は、遺物包含層を中心として縄文時代前期中葉、中期～後期前葉、晩期の土器片約170点が出土したにとどまる。調査区北側での遺物包含層の厚さを加味すれば、これらの遺物の大半は、比較的安定した緩斜面に、調査区外東側の集落中心域から土砂とともに流入・堆積したものと考えられる。また、第Ⅶ-2面調査終了後、人力にて第Ⅶ-2面ベース土以下の土層堆積状況を把握し、第Ⅶ-2面より下層に生活面が存在しないことを確認した。重機を用いた調査区埋戻し作業と並行して、調査区東壁5ヶ所で第0・I面～第Ⅶ-2面の土層柱状図を作成し、詳細は第3章第2節に記している。

### 2 土 坑(SK) (遺構：第304図)

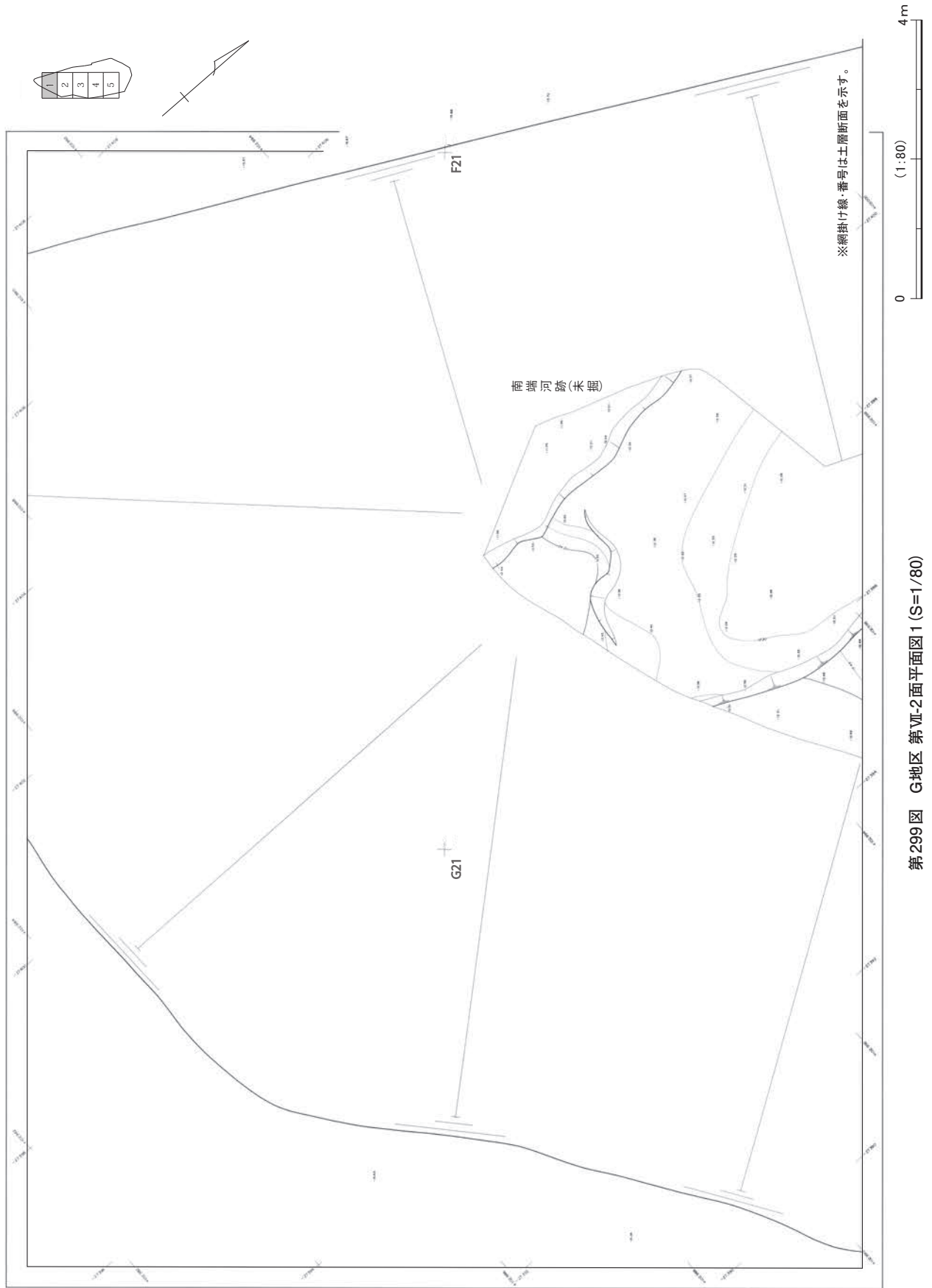
**SK7501** F-23区で検出した平面楕円形を呈する大型土坑で、長径175cm、短径122cm、深さ30cmを測る。底面は平坦で、肩部はしっかりとたちあがる。第304図土層断面図第1層(褐灰色砂質土)が、他面で検出した土石流堆積土と同質土であることから、第Ⅶ-2面の中でも新しい段階に位置付けられる。出土遺物はない。

**SK7502** F・G-22区で検出した平面楕円形を呈する大型土坑である。長径172cm、短径118cm、深さ54cmを測り、底面は平坦である。下層から順に炭粒が多く混ざる暗灰褐オリーブ色砂質土、濁暗灰色砂質土が自然堆積する。上層から縄文土器小片が出土した。

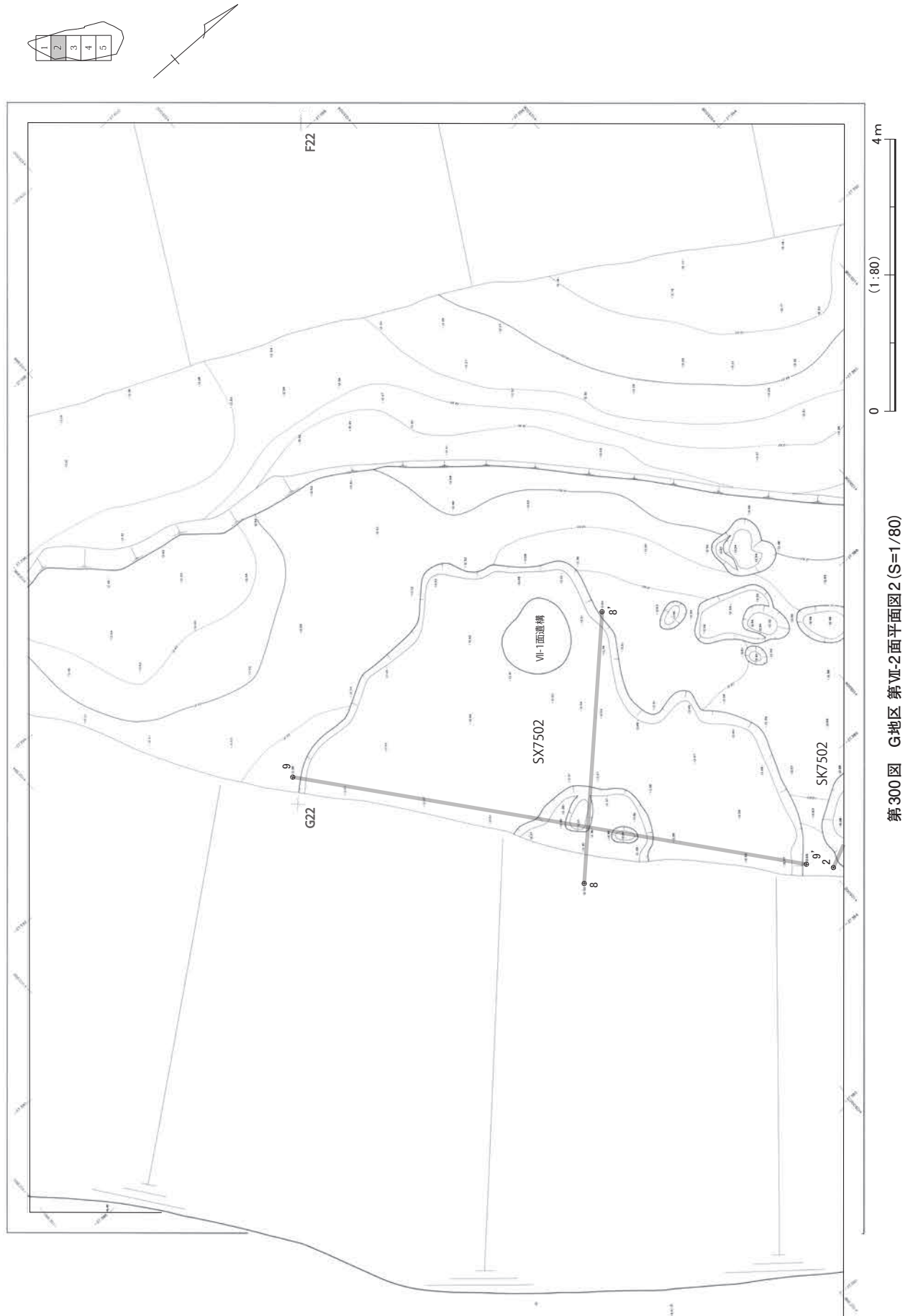


第298図 G地区 第Ⅶ-2面全体図(S=1/300)

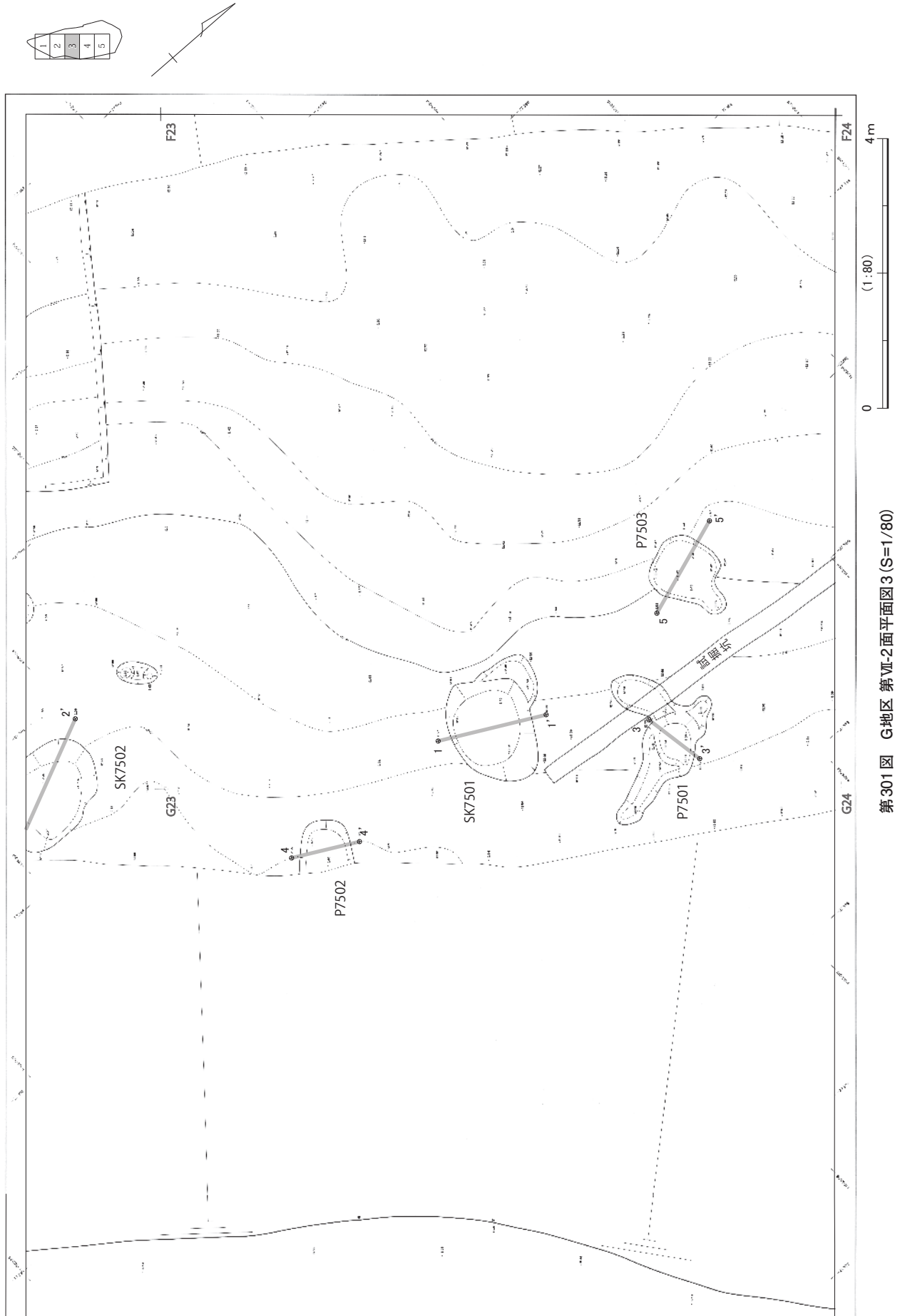




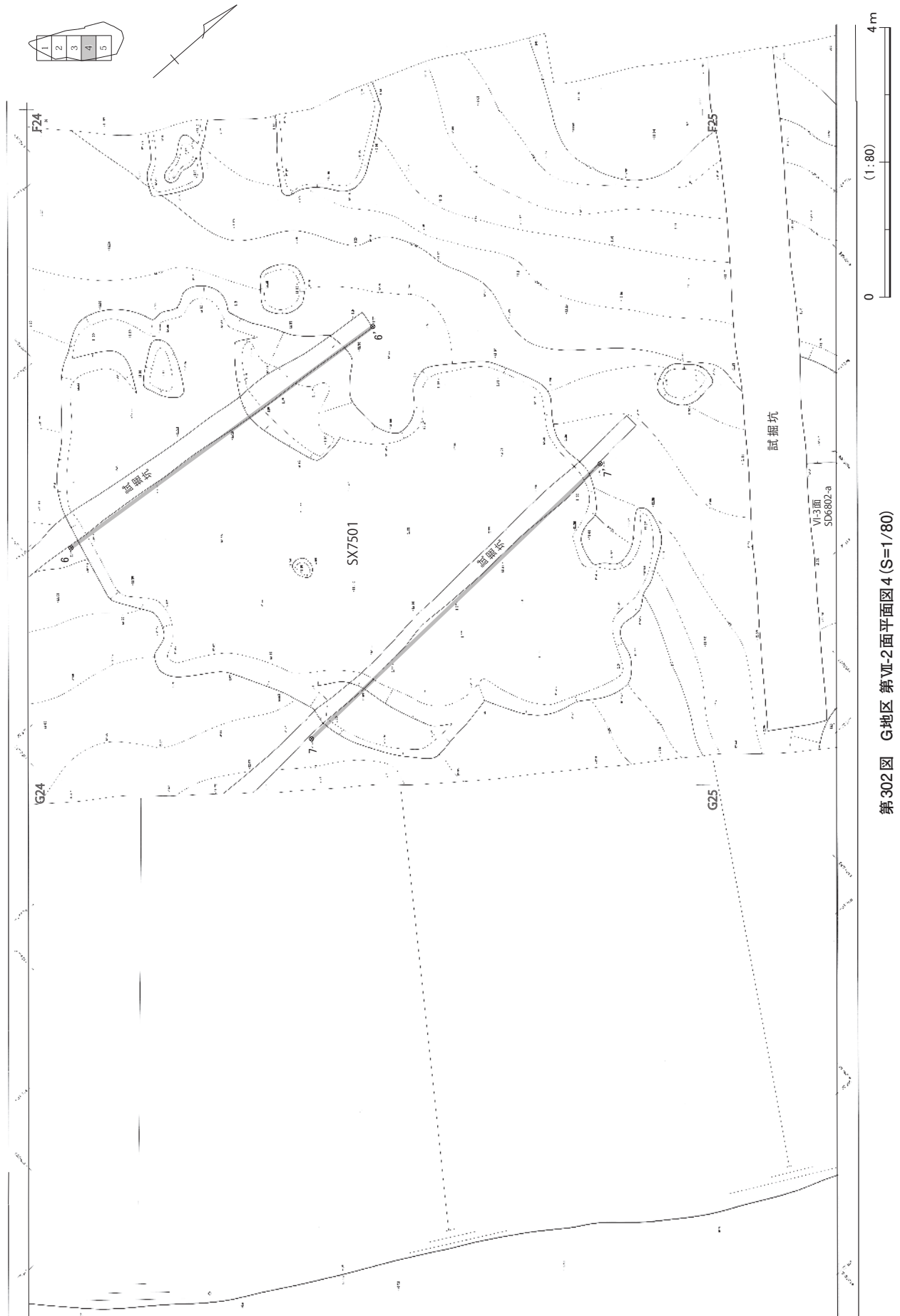
第299図 G地区 第Ⅵ-2面平面図1 (S=1/80)



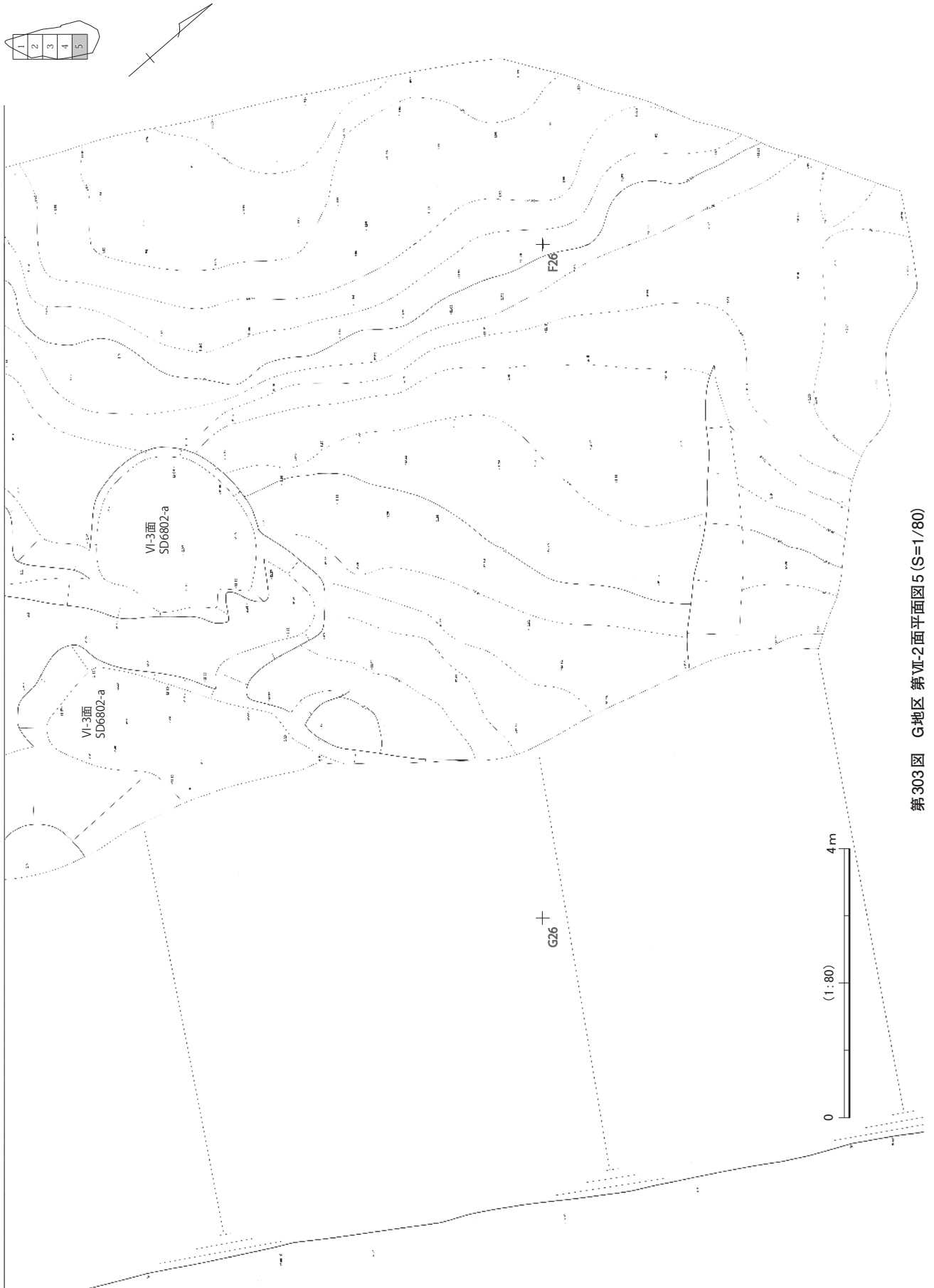
第300図 G地区 第Ⅵ-2面平面図2 (S=1/80)



第301図 G地区 第VI-2面平面図3 (S=1/80)

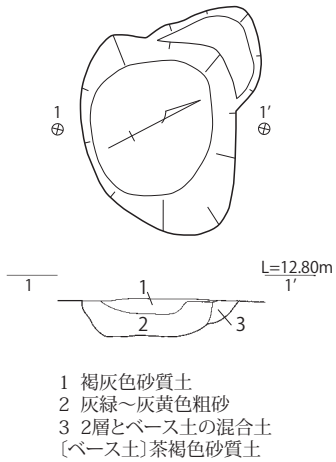


第302図 G地区 第Ⅵ-2面平面図4 (S=1/80)

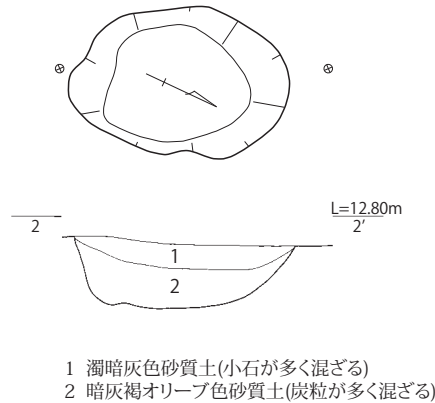


第303図 G地区 第VI-2面平面図5 (S=1/80)

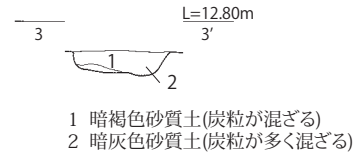
【F-24-4区 SK7501】



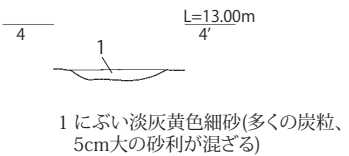
【F-22-4区 SK7502】



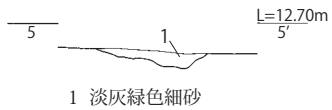
【F-23-4区 P7501】 (第301図)



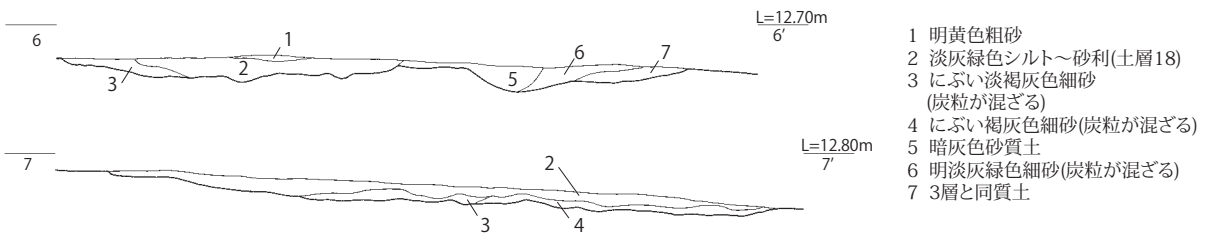
【G-23-1区 P7502】



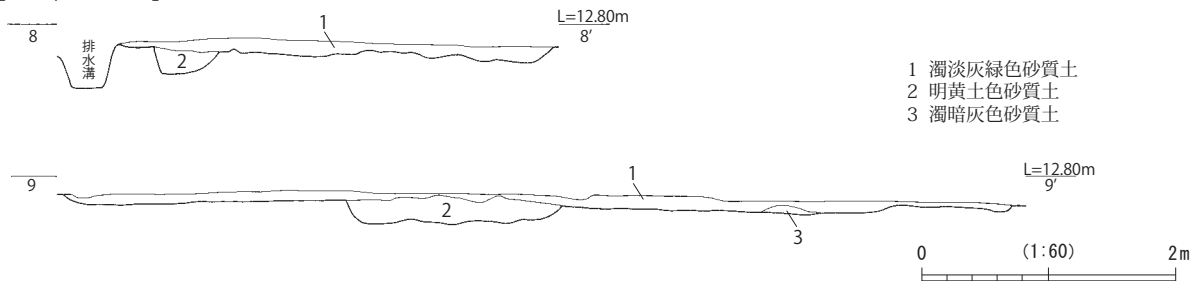
【F-23-4区 P7503】



【F-24区 SX7501】



【F-22区 SX7502】



第304図 G地区 第Ⅶ-2面平面図・土層断面図 (S=1/60)

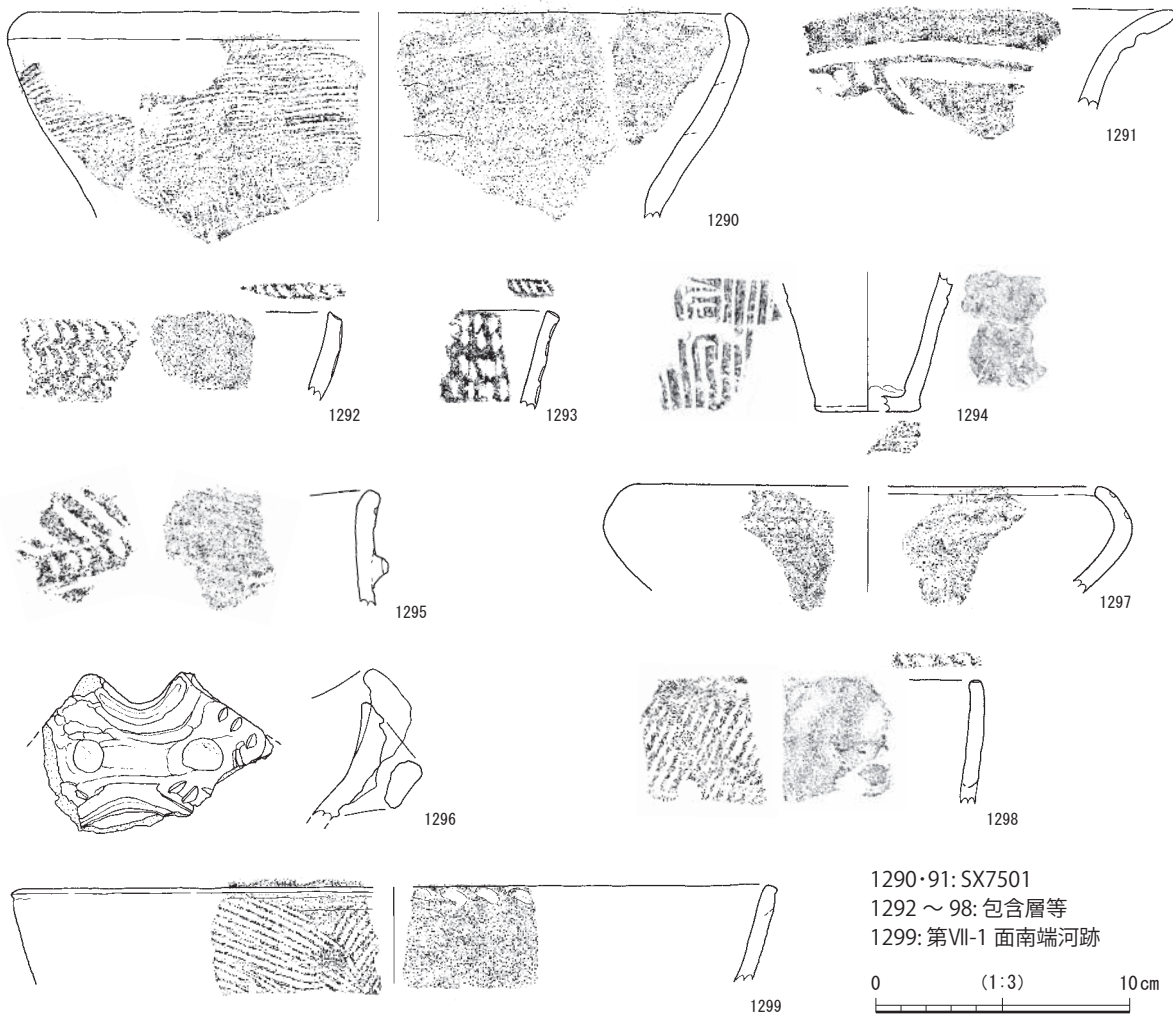
### 3 ピット (遺構：第301・304)

大小含めて12基のピットを検出した。P7501・502およびSK7502北側約2mに位置するピット(覆土は炭粒が多く混ざる淡灰黄色シルト)以外は、遺物包含層の浅い窪み部分と考えられる。

**P7501** F-23-4区で検出した。深さ18cmを測り、覆土は炭粒が多く混ざる。出土遺物はない。

**P7502** G-23-1区で検出し、調査区外東側に延びる。平面不整形を呈し、長軸80cm、短軸75cm以上、深さ8cmを測る。覆土は砂利や炭粒が混ざる淡灰黄色細砂で、出土遺物はない。

**P7503** F-23-4区で検出した。平面不整形を呈し、長軸125cm、短軸95cm、深さ12cmを測る。覆土は遺物包含層と同質の淡灰緑色細砂で、出土遺物はない。



1290・91: SX7501  
 1292～98: 包含層等  
 1299: 第VII-1 面南端河跡

0 (1:3) 10 cm

第305図 G地区 第VII-2面出土遺物実測図(S=1/3)

第66表 G地区 第VII-2面出土土器観察表

※ ( ) は残存量を示す。

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
305	1290	F-24	SX7501	縄文土器	深鉢	約27	-	(8.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、礫少	良	ナデ	ナデ、擦糸縄文	口6/36	中期前葉後半(新崎式)か	H170653
305	1291	F-24	SX7501	縄文土器	深鉢	-	-	(3.7)	にぶい褐	にぶい褐	粗砂・礫多、赤色粒、海綿骨針含	良	ナデ	ナデ	小片	外面に沈線文、刻突文。外面薄い煤付着。後期初頭(串田式)	H160317
305	1292	F-24	包含層	縄文土器	深鉢	-	-	(3.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂粒並、海綿骨針含	良	ナデ	縄文、爪形文	小片	爪形文2列、口縁端部に刻み。前期中葉(朝日C式)	H170657
305	1293	E-23	排水溝	縄文土器	深鉢	-	-	(3.8)	灰黄褐	にぶい黄橙	砂粒並、海綿骨針含	良	ナデ	ナデ、爪形文	小片	爪形文4列、口縁端部に刻み。内面被蝕、煤付着。前期中葉(朝日C式)	H160315
305	1294	F-22-4	試掘坑(土層21)	縄文土器	深鉢	-	4.1	(5.6)	灰黄褐	灰黄褐	砂粒細かい、海綿骨針あり	良	ミガキ	ナデ、半隆起線文	底7/36	半隆起線文。中期前葉(新保式)	H170656
305	1295	F-23-2 G-21-1	試掘坑(土層21)	縄文土器	深鉢	-	-	(4.6)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂・礫多、海綿骨針含	良	ナデ	ナデ、隆帯後刻み、沈線文	小片	1296と同一個体。中期後葉(串田新式)	H170658
305	1296	F-23-2 G-23-1	試掘坑(土層21)	縄文土器	深鉢	-	-	(5.7)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂・礫多、海綿骨針含	良	ナデ	ナデ、指頭圧痕、刻み、沈線文	小片	双頭状波状口縁、把手。1295と同一個体。中期後葉(串田新式)	H1681
305	1297	F-22-4	試掘坑(土層21)	縄文土器	浅鉢	約18	-	(4.1)	灰黄褐	にぶい橙	粗砂多、礫並、赤色粒含	良	ナデ	ミガキ、ナデ	口2/36	刻突文2列。後期前葉か	H170655
305	1298	E-26	試掘坑(土層21)	縄文土器	深鉢	-	-	(4.9)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多、礫少	良	ナデ、指押え	ナデ、擦糸縄文	小片	口縁端部に刻み。焼成後穿孔か。外面煤、内面ヨゴレ付着。後期中葉(清見式)	H170659
305	1299	F-20	VII-1面河跡砂利上面	縄文土器	深鉢	約29	-	(3.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、礫少	良	ナデ、指押え	ナデ、条痕	口1/36	口縁部内面に指頭圧痕、内面煤付着。晩期後葉(下野式)	H170654

#### 4 その他の遺構(SX) (遺構：第300・302・304図、遺物：第305図)

**SX7501** F-24区で検出した遺物包含層の浅い落ち込み部分である。南西－北東方向で約9.5m、南東－北西方向で約6m、深さ12～20cmを測り、淡灰緑色・褐灰色を基調とするシルト・粗砂・砂利が水平に堆積する。約30点出土した縄文土器小片のうち、第305図1290・91の深鉢を図化した。平縁の1290は口径約27cmを測り、口縁端部は内傾する。外面は下方から縦方向の撚糸縄文、横方向の撚糸縄文を施した後、口縁部にヨコナデを行う。1291は平縁で、口縁部は大きく外反する。口縁部外面は幅広の1条の沈線を施した後、同じ施文具を用いて沈線文、刺突文を描く。1290は中期前葉後半の新崎式、1291は後期初頭の前田式に位置付けられる。

**SX7502** F・G-22区で検出した遺物包含層の浅い落ち込み部分で、調査区外東側に延びる。南西－北東方向で約8m、南東－北西方向で4.1m以上、深さ7～24cmを測り、中央付近が一段深くなる。覆土は濁淡灰緑色砂質土を基本に、一段深い部分には明黄土色砂質土が堆積する。縄文土器小片が出土した。

#### 5 包含層出土遺物(第305図)

縄文土器小片約120点が出土、うち第305図1292～1298を図化した。口縁部に刻みをもつ1292は、外面に縄文を施した後、大型の連続爪形文2列を配する。1293も同様な文様構成であり、4列以上の爪形文は粗い印象を受ける。1292・93は、前期中葉の前田式に位置付けられる。中期前葉の新保式と考えられる小形の深鉢1294は円筒形を呈し、外面を半裁竹管を用いて複雑な文様構成に仕上げる。1295と1296は同一個体と考えられ、中期後葉の串田新式に位置付けられる。1295は隆帯上に刻みを施す。双頭状の波状口縁部片1296は、横方向に把手を貼り付けた後、刻み、幅広の沈線、指頭で文様を施す。浅鉢1297は、口縁部が強く内湾し、端部を丸く仕上げる。外面に小振りな刺突文2列を施し、後期前葉と考えられる。1298は平坦な口縁端部に粗い刻み、外面に粗い撚糸縄文を施し、焼成後に外側から穿孔を行う。後期中葉に位置付けられる。

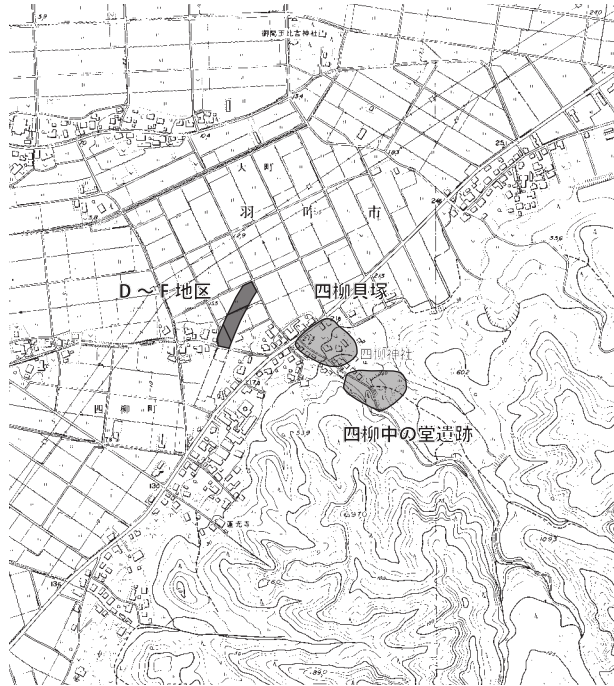
#### 6 小 結

第Ⅶ-2面で検出した遺構、遺物は限られ、集落域の縁辺部の様相を呈する。以下では、D・F・G地区と、本遺跡の東側に立地する四柳貝塚、四柳中の堂遺跡<sup>(29)</sup>から出土した縄文土器の時期の整理を通じて、本遺跡の立地する扇状地～東側の台地で営まれた集落域の消長を考える一助としたい。

四柳貝塚と四柳中の堂遺跡は、南北を小河川で区切られた舌状台地(幅約100m)を中心に営まれた縄文時代の集落として知られる。四柳貝塚は、本遺跡の北東約100mの四柳神社境内(標高25～30m)付近から旧国道159号線に広がる(第306図)。昭和44年(1969)に発見、昭和46・47年度(1971・72)に県立羽咋高等学校地歴部が実施した試掘調査により、中期に属する最大厚約20cmを測るシジミの淡水貝塚の形成が確認されている。貝塚を中心に、中期前葉の新崎式、中葉の古府式、後葉の串田新式の土器片が出土、新崎式に盛期をもつとされる。神社境内・参道からは後期前葉の気屋式に属する土器が採取されている。また、四柳中の堂遺跡は、四柳貝塚東側の同一台地(標高40～50m台)に立地し、昭和33年(1958)に縄文土器、磨製石斧、石鏃等の採取から、新たに確認された遺跡である。昭和44年(1969)の県立羽咋高等学校地歴部の調査で、中期前葉の新崎式に属する遺跡であることが判明している。

本遺跡D・F・G地区の一連の調査では、F地区第Ⅶ面で中期中葉後半～後葉(古府式～串田新式)の竪穴建物2棟や、F・G地区の境(E～G-19～21区)で晩期末を中心とした土器が混ざる土石流痕跡を確認





第306図 調査区と周辺の遺跡 (S=1/15,000)

第67表 四柳貝塚等の盛衰対比略表

時 期	四柳白山下遺跡		四柳貝塚・ 四柳中の堂 遺跡
	D・F地区	G地区	
前期	前葉		
	中葉		
	後葉		
中期	前葉		
	中葉	2101-02竪穴	
	後葉		
後期	前葉		
	中葉		
	後葉		
晩期	前葉		
	中葉		
	後葉	河 跡	
	末		南端河跡

※ 四柳白山下遺跡は、薄い網掛けが遺物出土、濃い網掛けが遺構検出を示す。

した。第9節・本節で報告したG地区第Ⅶ-1・2面の調査では、前期中葉(朝日C式)、中期前葉(新保式～新崎式)、後期前葉(前田式～気屋式)、後期中葉(酒見式)に加え、晩期後葉～末(下野式～長竹式)の土器片が出土している。

以上、本遺跡の立地する扇状地～東側の台地出土の土器を整理すれば、第67表のとおり、本遺跡D・F・G地区と四柳貝塚、四柳中の堂遺跡は、かなり密接な関係をもちながら盛衰していることがわかる。細かい土器片が多いため、比定時期に若干の差異を示すが、中期前葉～後葉、後期前葉～中葉に加え、G地区の調査成果から前期中葉や晩期後葉～末にも、東側の扇状地～台地に集落域が形成された可能性が高い。また、中期前葉の新崎式並行期や中葉の古府式並行期は、集落域が大きく広がるようだ。このように、縄文時代前期中葉以降、継起的に短・中期の集落域が営まれ、その範囲は現在把握されている埋蔵文化財包蔵地よりも外側に大きく拡がることが予想される。なお、四柳貝塚の調査では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器や、奈良～平安時代前期の須恵器が出土しており、やはり同様なことを想定すべきと考えられる。

〔註〕

(29)四柳貝塚、四柳中の堂遺跡の範囲については、次の2報告と県教育委員会が1991年に刊行した『石川県遺跡地図』を元に作成した。

- 嵯峨井亮 1973「石川県羽咋市四柳遺跡略報(遺稿)」『石川考古学研究会々誌』第16号 石川考古学研究会
- 高堀勝喜 1973「羽咋の縄文遺跡－四柳貝塚」『羽咋市史 原始・古代編』羽咋市役所

## 第5章 H地区の遺構と遺物

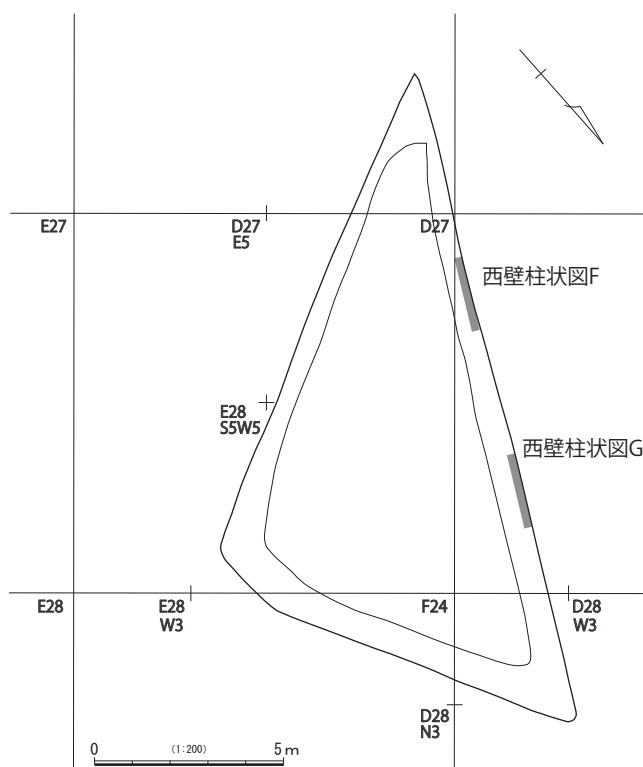
### 第1節 調査の概要

H地区は、第5次調査(1998)において、G地区北側の農道(幅約10m)を挟んで設定した小規模な調査区である。調査杭グリッドでいえば、D26-3区、C・D-27・28区にあたり、実調査面積は約70㎡(南北方向約8m、東西方向約約16m)を測る(第307図)。

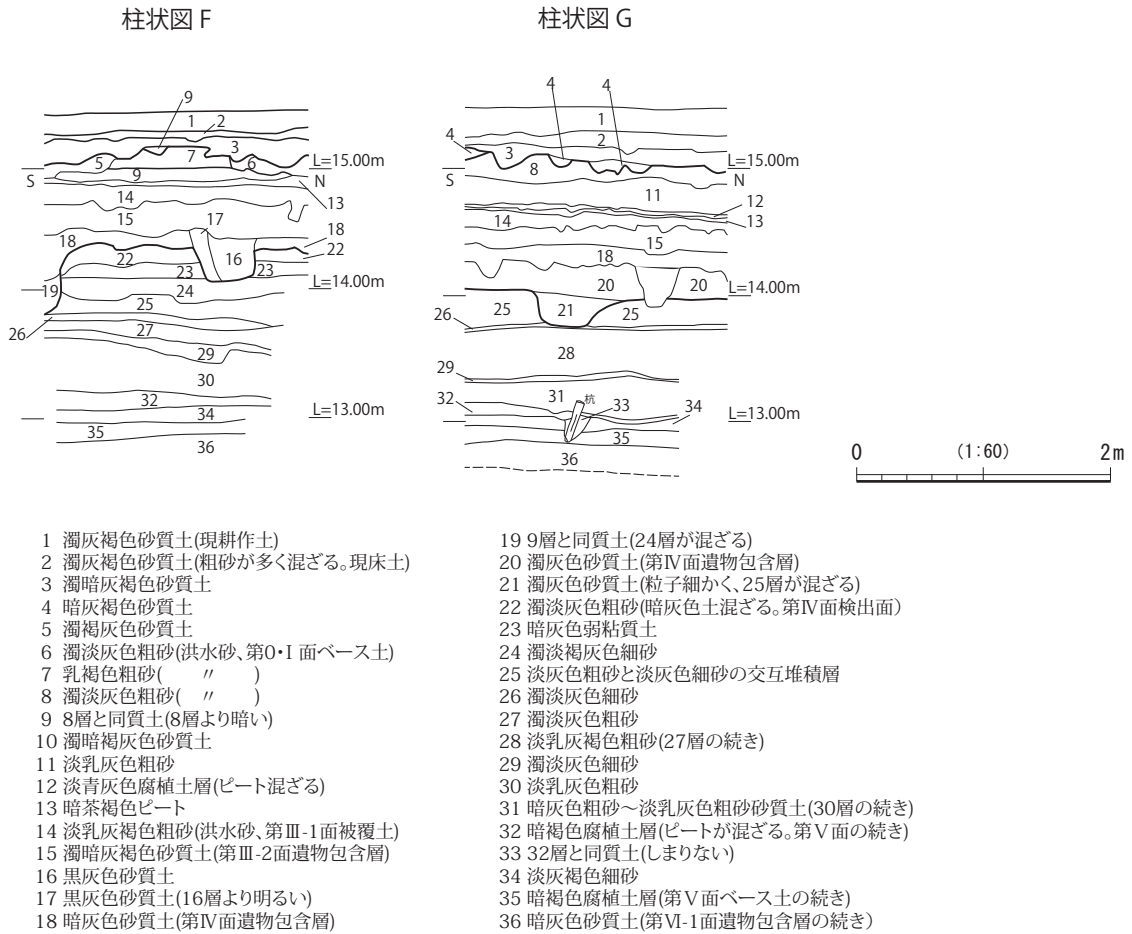
調査の結果、C・D・F・G地区より連続する第0・I面、第Ⅲ-1面、第Ⅳ面の各生活面を検出、G地区第Ⅲ-2面から続く遺物包含層を確認した。また、第Ⅴ面以下の調査については、予想される調査区が極めて狭小となることから県教委と協議を行い、層位を確認するトレンチ調査を実施した。

第0・I面は、G地区と同様に現耕作面直下で検出した最上層の生活面である。柵1条、掘立柱建物の柱穴を含むピット、土坑等を検出したが、耕作や過去の耕地整理等により遺存状態はあまりよくない。遺物は、珠洲焼、越中瀬戸等の陶磁器片、漆器椀、柱根等の木製品が出土した。第Ⅲ-1面は、G地区第Ⅲ-1面北側の水田域と一体をなす水田域と考えられ、G地区と同様に一度に流入した土砂で埋没する。畔畦を挟んで2枚の水田及び足跡または耕作痕多数を検出、畦畔の方向はG地区第Ⅲ-1面とほぼ平行する。第Ⅲ-2面は、G地区と同様の遺物包含層(第Ⅲ-1面耕作土)が存在するものの、耕作に伴う小溝群は明確にできなかった。比較的多くの須恵器、土師器が出土した。第Ⅳ面は、F・G地区と同様に遺構密度が高く、掘立柱建物7棟、掘立柱柱穴を含む多くのピット、土坑を検出し、墨書土器や転用硯を含む須恵器、土師器、柱根等の木製品が出土した。

層位確認調査は、調査区西壁2ヶ所で、現水田より約3mの深さまで人力で掘り下げて土層観察を行う方法で実施した(第307・308図)。主な土層層序は、上層から第0・I面遺物包含層(第3・4層)、第0・I面と第Ⅲ-1面間の流入・堆積層(第5～14層、うち第14層は第Ⅲ-1面を被覆した流入・堆積層)、第Ⅲ-1面耕作土(第Ⅲ-2面遺物包含層、第15層)、第Ⅳ面遺物包含層・遺構(第18～21層)、第Ⅳ面検出面(第22・25層)、第Ⅴ面を被覆した流入・堆積層(第30・31層)、第Ⅴ面耕作土(第32・35層)、第Ⅵ-1面遺物包含層(第36層)となる。G地区の所見と異なる点としては、柱状図Gで、第Ⅳ面が第20層をベース面とする小期と、第25層をベース面とする小期が確認できること、第Ⅴ面の生活面が第34層(淡灰褐色細砂)を挟んで2小期存在することが指摘できる。前者の特徴は、I地区(第Ⅲ-2面相当)でも確認され、北側に向けた傾斜に起因すると考えられる。また、各面の検出面の標高は、第0・I面が14.9m前後、第Ⅲ-1面が14.5～14.7m、第Ⅳ面が14.0～



第307図 H地区 グリッド配置図(S=1/200)



第308図 H地区西壁土層柱状図 (S=1/60)

14.2m、第Ⅴ面が13m前後を測り、第Ⅳ面と第Ⅴ面間の土砂堆積層はG地区と同様に1～1.2mとかなり厚い。なお、第Ⅴ面・Ⅵ-1面に属する土層から出土した遺物はない。

## 第2節 第0・I面の遺構と遺物 (第309～311図、第68・70・73表)

第0・I面は、C地区以北に展開する最上層の生活面で、H地区は16世紀後半から17世紀代を中心に営まれた集落域と考えられる。調査区北側を中心として柵1条、掘立柱建物の柱穴を含む大小様々なピット約70基、土坑4基、溝1条等を検出し、耕作や過去の耕地整理等で削平を受けたため、遺構の遺存状態は比較的よくない。遺物は、須恵器、土師器や珠洲焼、越中瀬戸等の近世以降の陶磁器片、土師器皿片、漆器椀、柱根等の木製品が少量出土した。

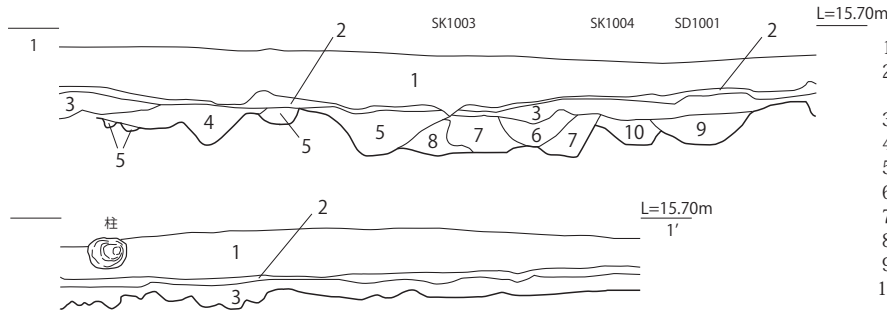
**SA101** C・D-27区で検出した柵で、調査区外に延びる可能性が高い。P1001・02・04を柱穴とし、主軸方位N-79° W、柱間寸法2.70～2.80mを測る。柱穴の平面形態は略円形を呈し、柱穴覆土は濁淡灰色砂質土～粗砂を基本とする。柱穴の規模は、P1002が径約42cm、深さ17cmを測る。また、いずれの柱穴も柱根の樹皮のみが遺存し、現地調査時に確認した柱径はP1001が約12cm、P1004が約18cmである。他遺構との切り合い関係はSK1004より新しく、土器は出土していない。

**ピット** 耕作や耕地整理等に起因する浅い起伏が目立つ中、調査区北側のP1003・05・06から掘立柱建物や柵の柱と考えられる柱根樹皮片が出土した。また、P1007から土師器片が出土した。



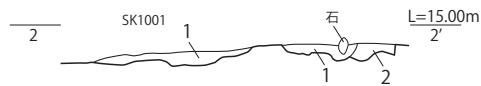
第309図 H地区 第0・I面平面図(S=1/80)

【調査区東壁】



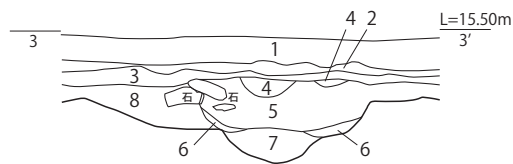
- 1 濁灰褐色砂質土(現耕作土)
- 2 濁灰褐色砂質土(粗砂が多く混ざる。現床土)
- 3 濁暗灰褐色砂質土
- 4 濁暗灰色砂質土(3層より暗い)
- 5 濁暗灰色砂質土(7層と似る)
- 6 濁暗灰色粗砂と3層の混合土
- 7 濁暗灰色砂質土
- 8 濁淡灰色細砂
- 9 6層と同質土
- 10 6層と同質土(濁暗灰色粗砂が多い)

【D-26・27区 SK1001】



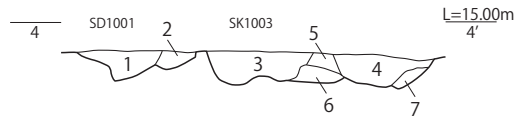
- 1 濁暗灰褐色砂質土
- 2 1層と同質土(やや暗い)

【C-28区 SK1002】



- 1 濁灰褐色砂質土(現耕作土)
- 2 濁灰褐色砂質土(粗砂が多く混ざる。現床土)
- 3 濁暗灰褐色砂質土
- 4 暗灰褐色砂質土
- 5 濁暗灰色砂質土(黄白色粘土粒が混ざる)
- 6 暗灰褐色砂質土
- 7 6層と同質土(粒子細かい)
- 8 茶灰色粗砂(礫が多く混ざる)

【C・D-28区 SK1003・SD1001】



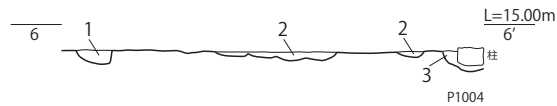
- 1 濁灰褐色砂質土(淡灰色砂質土が混ざる)
- 2 濁灰褐色砂質土(1層より淡灰色砂質土混ざり少ない)
- 3 暗灰色砂質土と淡灰色粗砂の混合土
- 4 1層と同質土(黄白色粘土粒が混ざる)
- 5 2層と同質土
- 6 濁淡灰色細砂(暗灰褐色砂質土が混ざる)
- 7 淡灰色細砂

【D-27・28区 SK1004】



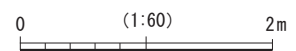
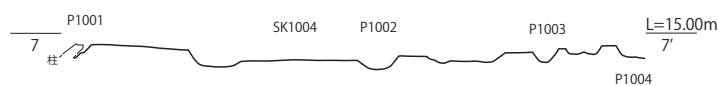
- 1 暗灰褐色砂質土
- 2 1層と淡灰色細砂の混合土
- 3 1層と同質土(粘土粒が混ざる)
- 4 濁淡灰色細砂
- 5 濁暗灰褐色砂質土と淡灰色細砂の混合土

【C・D-27区 P1004】

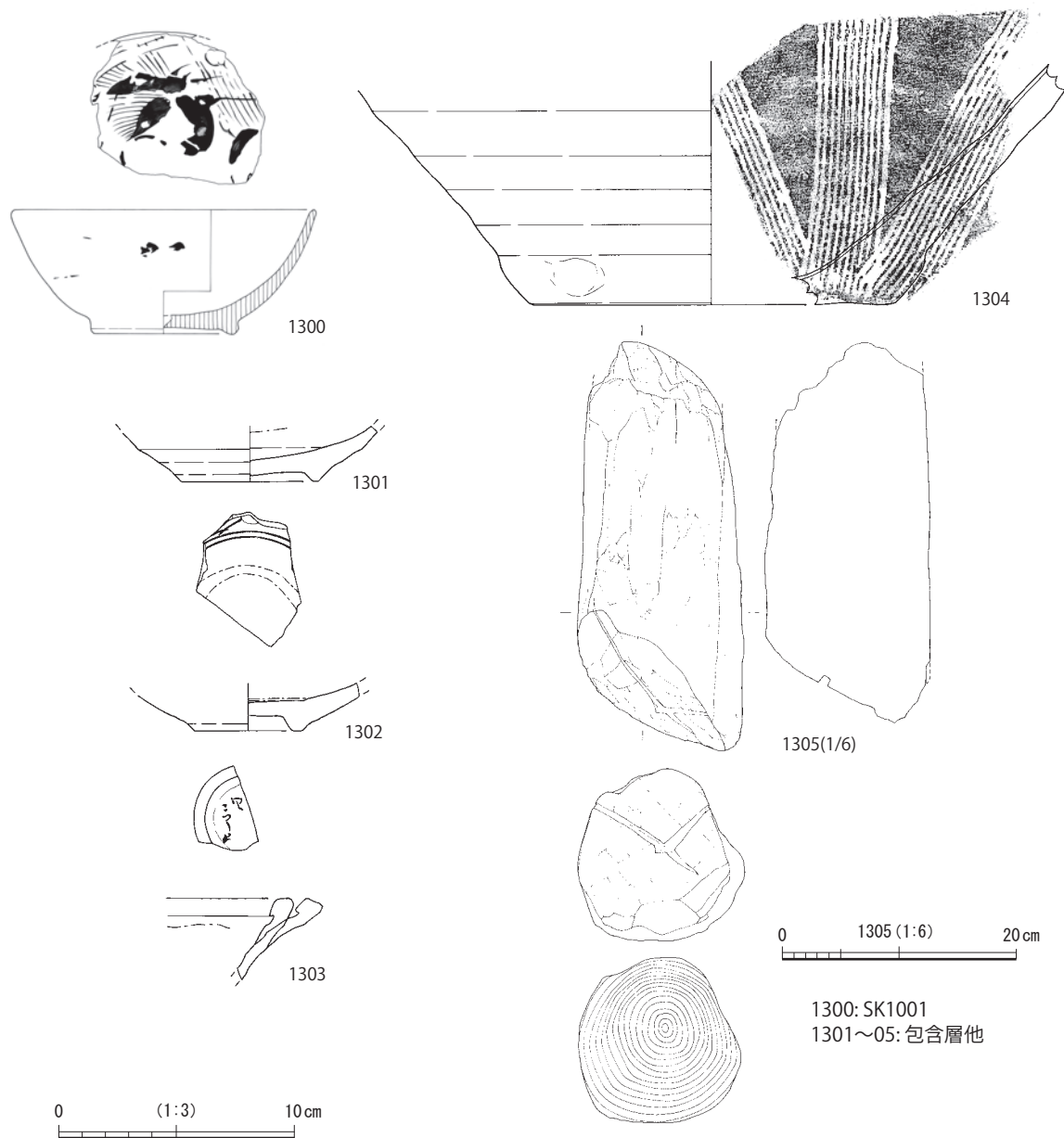


- 1 濁暗褐色砂質土(淡灰色砂質土が混ざる)
- 2 暗灰色砂質土
- 3 濁淡灰色砂質土(粒子粗い)

【C・D-27区 SA101】



第310図 H地区 第O・I面土層断面図 (S=1/60)



第311図 H区第0・I面出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)

**SK1001** D-27区で検出した不整形な落ち込みで、調査区外西側に延びる。長軸195cm以上、短軸約160cm、深さ3～28cmを測り、底面は凹凸が目立つ。覆土は濁暗灰褐色砂質土で、第309図1300の漆器碗が出土した。1300は口径12.8cm、器高5.3cmを測り、黒漆地に朱漆で文様を描く。材はブナ属を用いる。他に珠洲焼甕片、17世紀代の肥前すり鉢片が出土した。

**SK1002** C-28区で検出した平面略円形を呈する土坑で、調査区外西側に延びる。径120cm前後、深さ67cmを測り、暗灰褐～暗灰色砂質土を覆土とする。肩部の一部に自然石が残ることから、小型の石組井戸の可能性をもつ。須恵器坏片が出土したにとどまる。

**SK1003** C・D-28区で検出した不整形な土坑で、調査区外東側に延びる。長軸2m以上、深さ44～48cmを測り、細砂、粗砂、砂質土(第310図土層断面1-1'、4-4')を床面埋土とした竪穴状遺構の可能性を残す。他遺構との切り合いはSK1004より新しく、17世紀前半の越中瀬戸灰釉皿片が出土した。

**SK1004** D-27・28区で検出した平面不整形な浅い落ち込みで、調査区外東側に延びる。長軸3.9m以上、

深さ12cmを測り、覆土は暗灰褐色砂質土である。他遺構との切り合い関係はSK1003、SD1001より古く位置付けられ、出土遺物はない。

**SD1001** D-28区で検出した溝状遺構で、幅66cm、深さ24cmを測る。濁灰褐色砂質土と淡灰色砂質土の混合土で埋められ、内黒土師器埴片が出土した。

**包含層出土遺物** 第311図1301～1305が出土した。鉄釉の越中瀬戸皿1301は、内面および高台端部が使用に伴い平滑となる。肥前磁器碗1302は、破断面に焼き継ぎ痕、外底に朱文字で記された文字(屋号か)が残る。肥前陶器すり鉢片1303は、断面方形の口縁部に鉄釉を施す。越前焼すり鉢1304は、破断面に黒漆状の補修痕を残す。1301・03が17世紀前半代、1302が18世紀末～19世紀代、1304が16世紀代に位置付けられる。他に須恵器、土師器、珠洲焼、土師器皿、陶磁器片が出土した。

### 第3節 第Ⅲ-1・2面の遺構と遺物 (第312～316図、第68～70・73表)

第Ⅲ-1面は、G地区第Ⅲ-1面北側より続く10世紀中葉頃の水田域である。検出面の標高は14.50m～14.70mを測り、南東から北西方向、南西から北東方向に向けて緩やかに標高を減ずる。G地区第Ⅲ-1面水田の標高14.80～14.90mに比して、若干標高が下がる程度であり、比較的平坦な緩斜面に棚田様水田が連続する景観が復元可能であろう。調査の結果、洪水層である淡乳灰褐～淡青色を呈した粗砂～細砂で覆われた状態で、一体的に造成された2枚の水田及び畦畔3ヶ所を検出した。また、SD3101は、洪水層の流路の一部と考えられる。遺物は、洪水層、耕作土から須恵器、土師器が出土した。

第Ⅲ-2面は、G地区では第Ⅲ-1面耕作土を取り除いて検出した畠地であり、H地区では遺物包含層を確認したにとどまり、平面図は作成しなかった。耕作土を中心に比較的多くの須恵器、土師器に加え木製品が出土した。

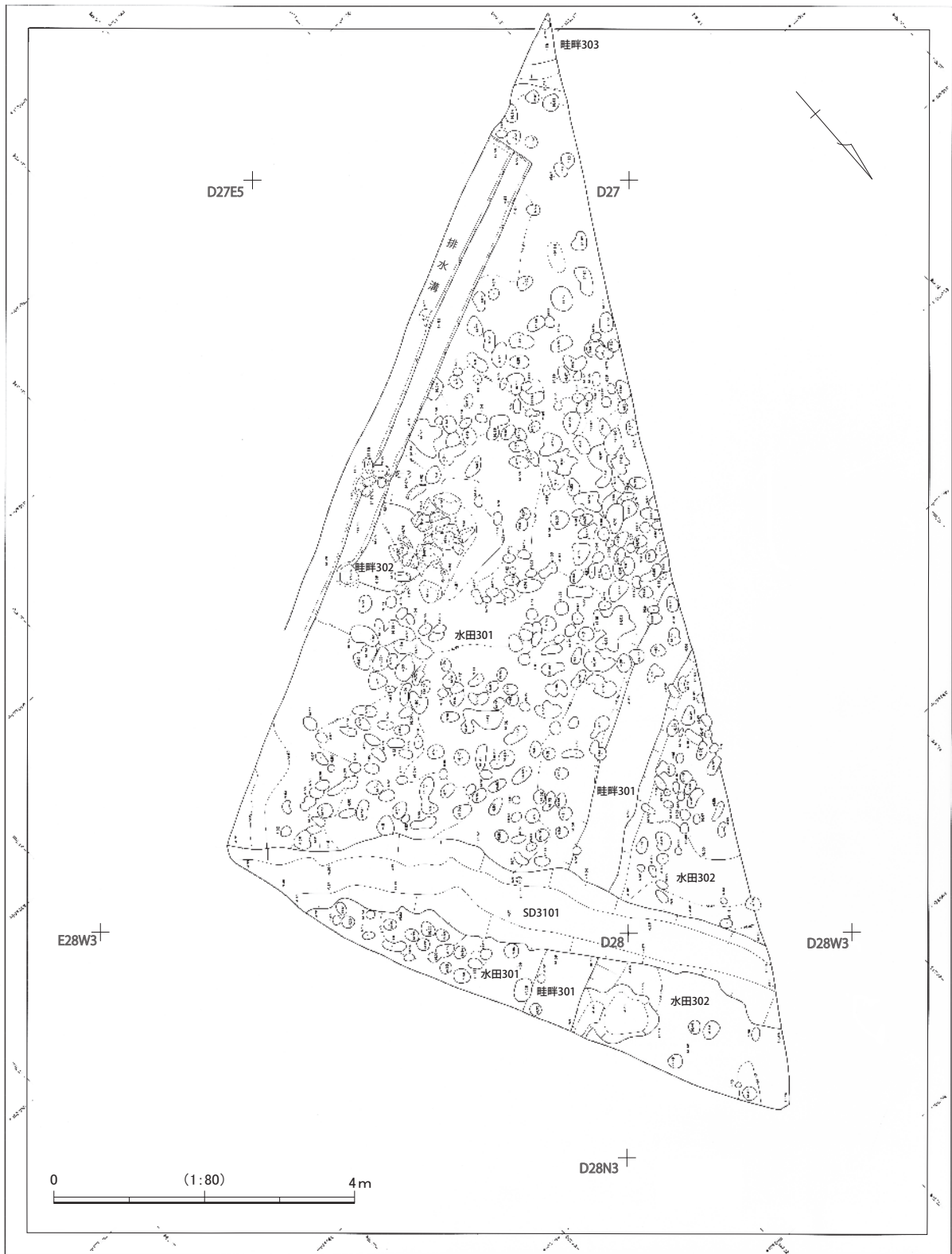
**水田301** D-27・28区で検出した水田で、南西端を畦畔303、北西端を畦畔301で画される。平面長方形を呈すると考えられ、調査区内で北西－南東方向4m以上、南西－北東方向11m以上を測る。水田面の標高は、調査区南西隅が14.75m、東隅が14.70m、北東隅が14.58mを、標高差が北西－南東方向で17cm、南西－北東方向で10cmをそれぞれ測る。耕作面で多数検出した平面不定形な浅い窪みは、深さ5～15cmを測り、足跡とする規則性をみいだすことはできなかった。

**水田302** C-27・28区で検出した水田で、南東端を畦畔301で画される。平面長方形を呈すると考えられ、調査区内で北西－南東方向3m以上、南西－北東方向5m以上を測る。水田面の標高は、調査区南西隅が14.54m、東隅が14.50m、北東隅が14.49mを、標高差が北西－南東方向で4cm、南西－北東方向で5cmをそれぞれ測る。耕作面で、水田301と同様な平面不定形な浅い窪み多数を検出した。

**畦畔301** 水田301・302間で延長5.5mを検出した幅広で低い畦畔である。主軸方位N-60°E、標高14.60m前後を示す。上幅55～65cm、下幅70～80cm、水田302耕作面との標高差5～10cmを測る。

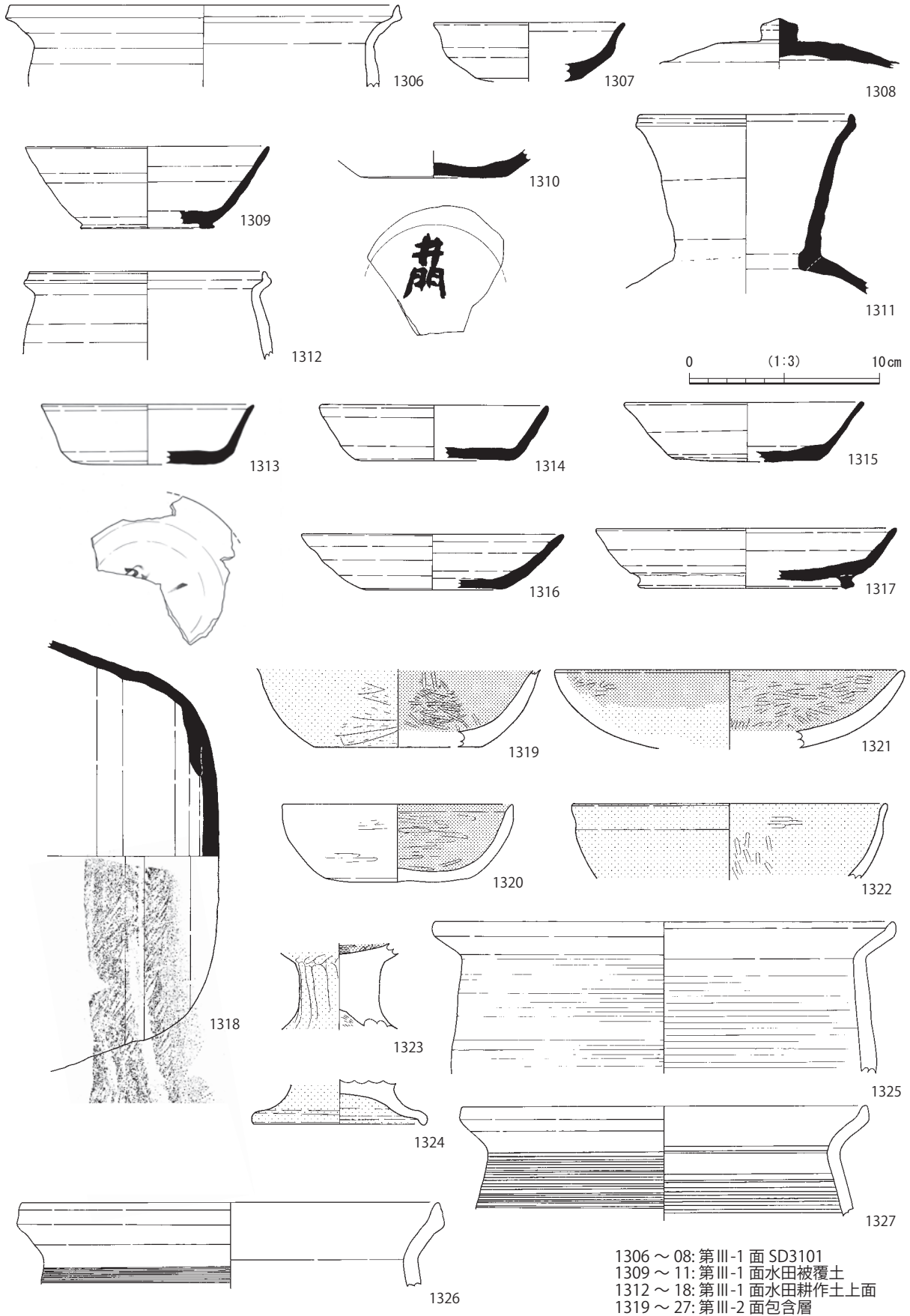
**畦畔302・303** 畦畔302は、D-27区で検出した南西方向に延びる土手状の高まりで、肩部に15～45cm大の自然石約30個を乱雑に据え置く。幅約220cm、水田301耕作面との標高差10～15cmを測り、G地区第Ⅲ-1面で検出した石集中301と同様に、水田肩部を保全した土留め跡と考えられ、J地区第Ⅲ-0面で類似した形状の石積みを確認している。畦畔303は、調査区南西隅のC-27区で一部を検出した。畦畔301と直交する位置関係にあり、上幅60cm以上、水田301耕作面との標高差9cmを測る。

**SD3101** 調査区北東側で検出した洪水流路で、蛇行気味に水田区画を浸食しながら南東方向から北西方向に流れ下る。幅63～110cm、深さ30～35cmを測り、覆土は淡乳灰褐色粗砂～砂利である。遺物は、第313図1306～1308を図化した。ロクロ土師器甕1306は口径20.3cmを測り、ロクロひだが目立つ。



第312図 H地区 第Ⅲ-1面平面図(S=1/80)





1306 ~ 08: 第Ⅲ-1 面 SD3101  
 1309 ~ 11: 第Ⅲ-1 面水田被覆土  
 1312 ~ 18: 第Ⅲ-1 面水田耕作土上面  
 1319 ~ 27: 第Ⅲ-2 面包含層

第313図 H地区 第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図1 (S=1/3)

須恵器壺1307は腰部で明瞭に屈曲、口縁部で小さく外反する。須恵器坏蓋1308はボタン状の鈕を貼り付け、Ⅵ期に位置付けられる。

**水田面被覆土出土遺物** 第308図第14層(淡乳灰・淡青色粗砂～細砂淡乳灰褐色粗砂)から出土した第313図1309～1311の須恵器を図化した。薄手の有台坏1309は口径12.8cm、器高4.3cmを測り、体部は大きく外傾する。無台坏底部片1310は、外面に「井門」と墨書した後、被熱のため煤が付着する。正位で焼成された瓶1311は口径11.1cmを測り、口縁端部を上方につまみ出す。1309がⅡ<sub>3</sub>期、1310がⅤ<sub>2</sub>期、1311がⅥ期に位置付けられる。

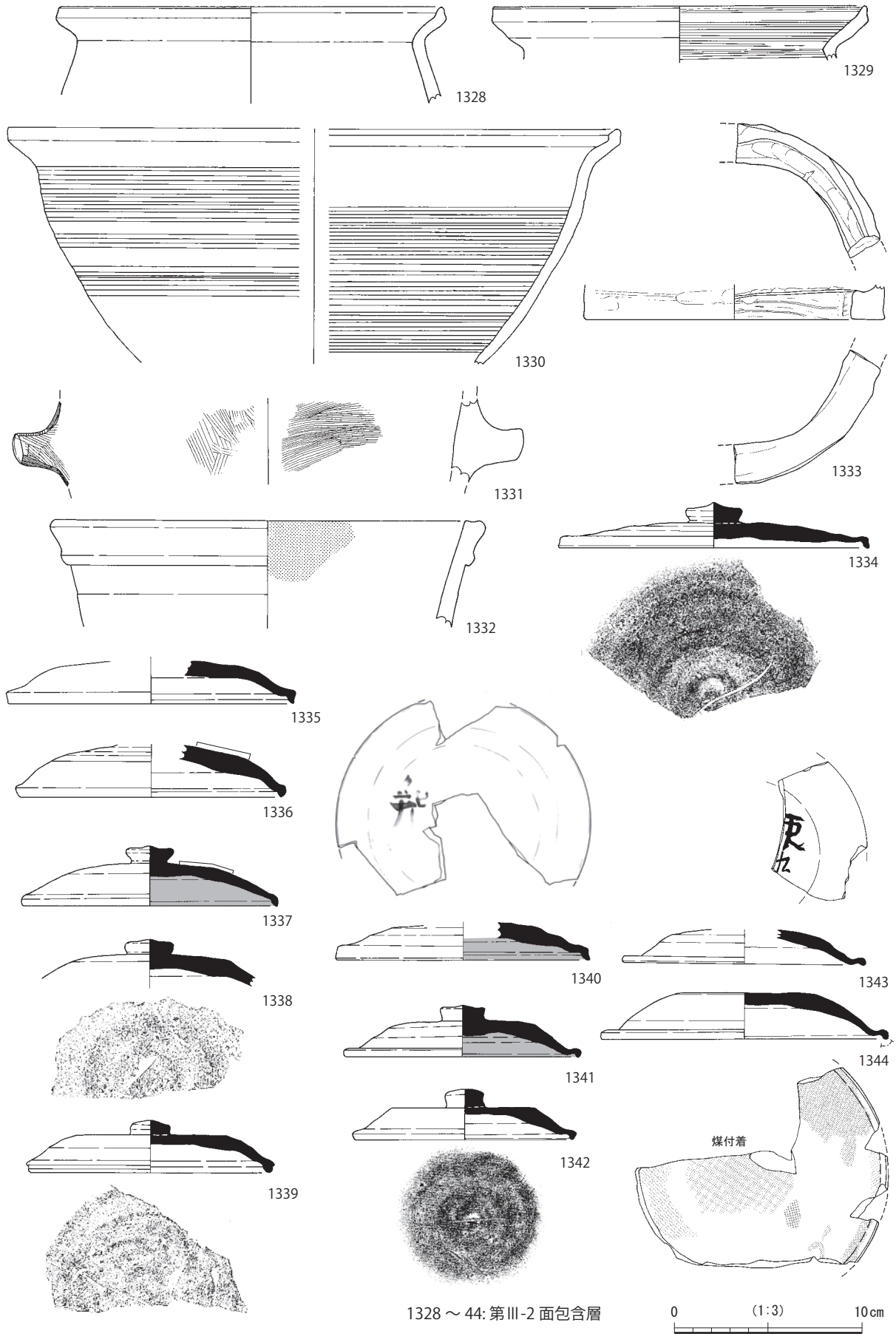
**水田耕作土出土遺物** 第308図第15層(濁暗灰褐色砂質土)から比較的多くの須恵器、土師器が出土し、うち第313図1312～第316図1379を図化した。なお、同土層は、第Ⅲ-2面遺物包含層でもある。

1312～18は洪水被覆土との境から出土した。ロクロ土師器小甕1312は口径12.3cmを測り、口縁端部を小さくつまみあげる。1313～16は須恵器無台坏である。1313の底部外面に記された墨書は判読できない。1314は口径11.9cm、器高2.9cmを測り、小盤に近い形態を呈する。外面に煤が付着する。1315・16は、底部台状を呈し、体部は大きく外傾する。須恵器有台盤1317は口径15.7cm、器高3.2cmを測り、底部内面は使用に伴い平滑となる。須恵器横瓶1318は、内面に液だれ状の付着物が認められる。1312・13以外はⅤ<sub>2</sub>期以降に位置付けられる。

第313図1319～21は非ロクロ成形の土師器壺で、1319・21は内面に黒色処理、外面に赤彩を施す。平底の1319は外底まで丁寧に赤彩を施す。1320は口径12.0cm、器高4.1cmを測る。1321の黒色処理は、外面に大きくはみだす。ロクロ成形の土師器赤彩壺1322は口径16.4cmを測る大型品である。1323は非ロクロ成形の低脚高坏、1324はロクロ成形の壺台部である。1325～30はロクロ成形の土師器で、甕1325～29の口径は20cm前後～24cmに分布する。埴1330は、外面に厚い煤が付着する。甌1331の把手は断面長方形を呈し、短く横方向にのびる。ロクロ成形の甌1332は、破損後に2次被熱する。1333は甌底部片と考えられる。

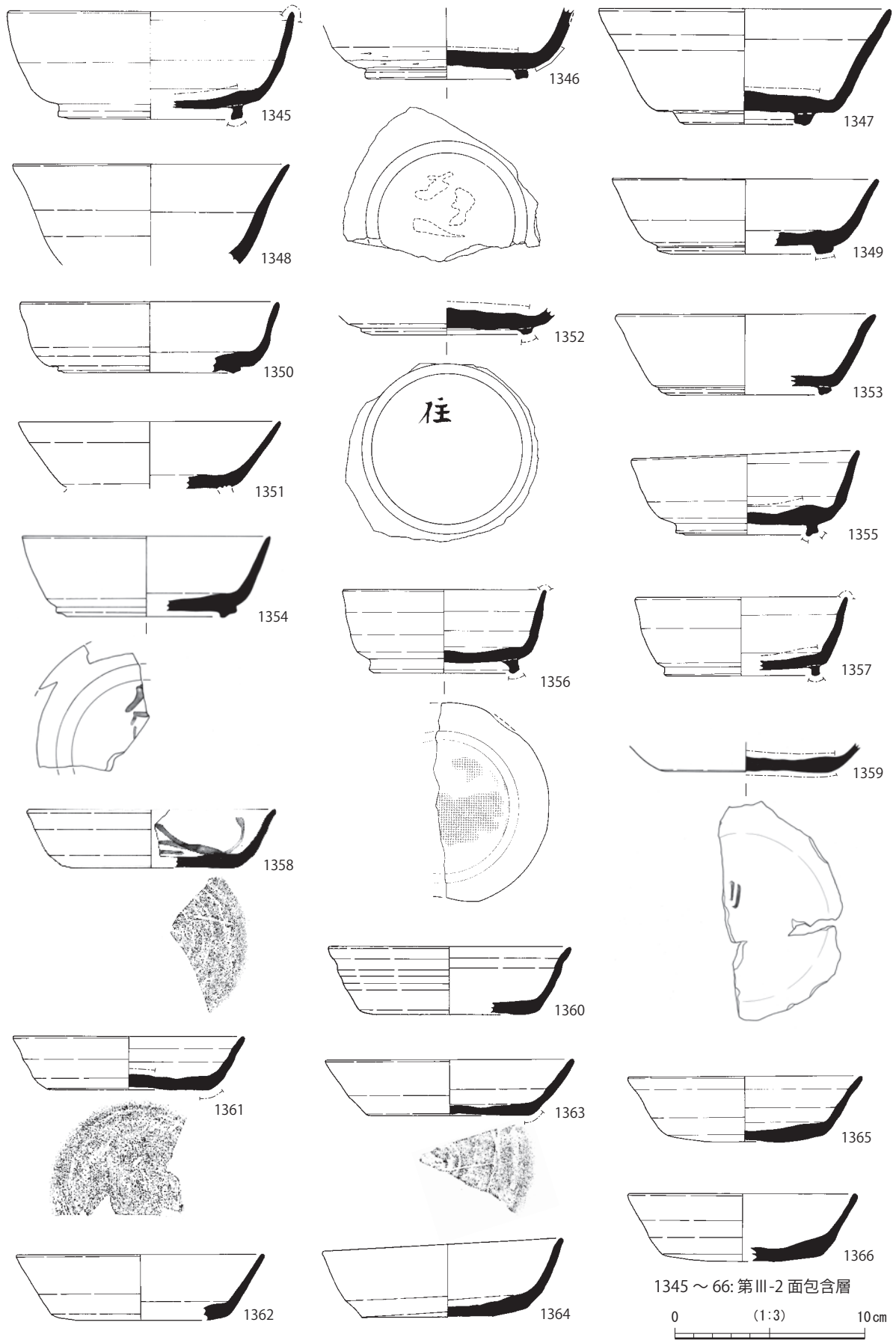
第314図1334～第316図1374は須恵器で、うち1334～44は坏蓋である。扁平な1334は口径16.4cm、器高2.4cmを測り、大振りな鈕を付ける。1335は全面に煤が付着する。山笠形の1337は硯に転用され、内面全体に墨痕を残す。1338の天井部内面は、使用に伴い摩耗する。1339は口径12.6cm、器高2.8cmを測り、ボタン状の鈕を付ける。1340は外面を墨書する他、1341と同様に硯に転用される。1342は外面全体に降灰が認められる。口縁端部を丸く仕上げる1343は、天井部内面が摩耗する。天井部外面に記された墨書の1文字目は「東」と考えられる。無鈕の1344は口径15.1cm、器高2.5cmを測り、内面に煤が付着する。1334～40がⅣ期、1341・43がⅤ<sub>2</sub>期～Ⅵ<sub>1</sub>期、1344がⅥ<sub>2</sub>期に位置付けられる。第315図1345～57は有台坏で、1345～48は深身の器形を呈する。1345は体部が内湾気味に立ち上がり、台部が内屈する。1346は底部外面中央にかすかに墨痕が残る。1347は口径15.3cm、器高6.1cmを測り、狭い底部から体部が大きく外傾する。底部内面が使用に伴い平滑となる他、2次被熱する。1349～51は口径約14cm、器高4cm弱を測る。1349は低い台部がしっかりと外展するのに対して、1350は内寄りに小振りの台部を付ける。1352は底部外面に小さな文字で「住」と墨書する他、内面は使用に伴い平滑となる。1353の体部は直線的に外傾する。1354の底部外面に記された2文字の墨書は判読できない。1355・57は使用に伴う摩耗が目立つ。1356は体部が直立し、台部より内側全体に黒色の煤・タールが付着する。Ⅵ期の1347以外は、おおむねⅣ期以前に位置付けられる。

第315図1358～第316図1370は無台坏である。扁平な1358は内面を硯面に利用するため、筆跡と顕著な摩耗が認められる。1359の底部外面に記された墨書は、使用に伴う摩耗と被熱のため判然としない。1360は、重ね焼きにより口縁部下端から屈曲する。1361は底部外面に簾状圧痕が残る。1362は体

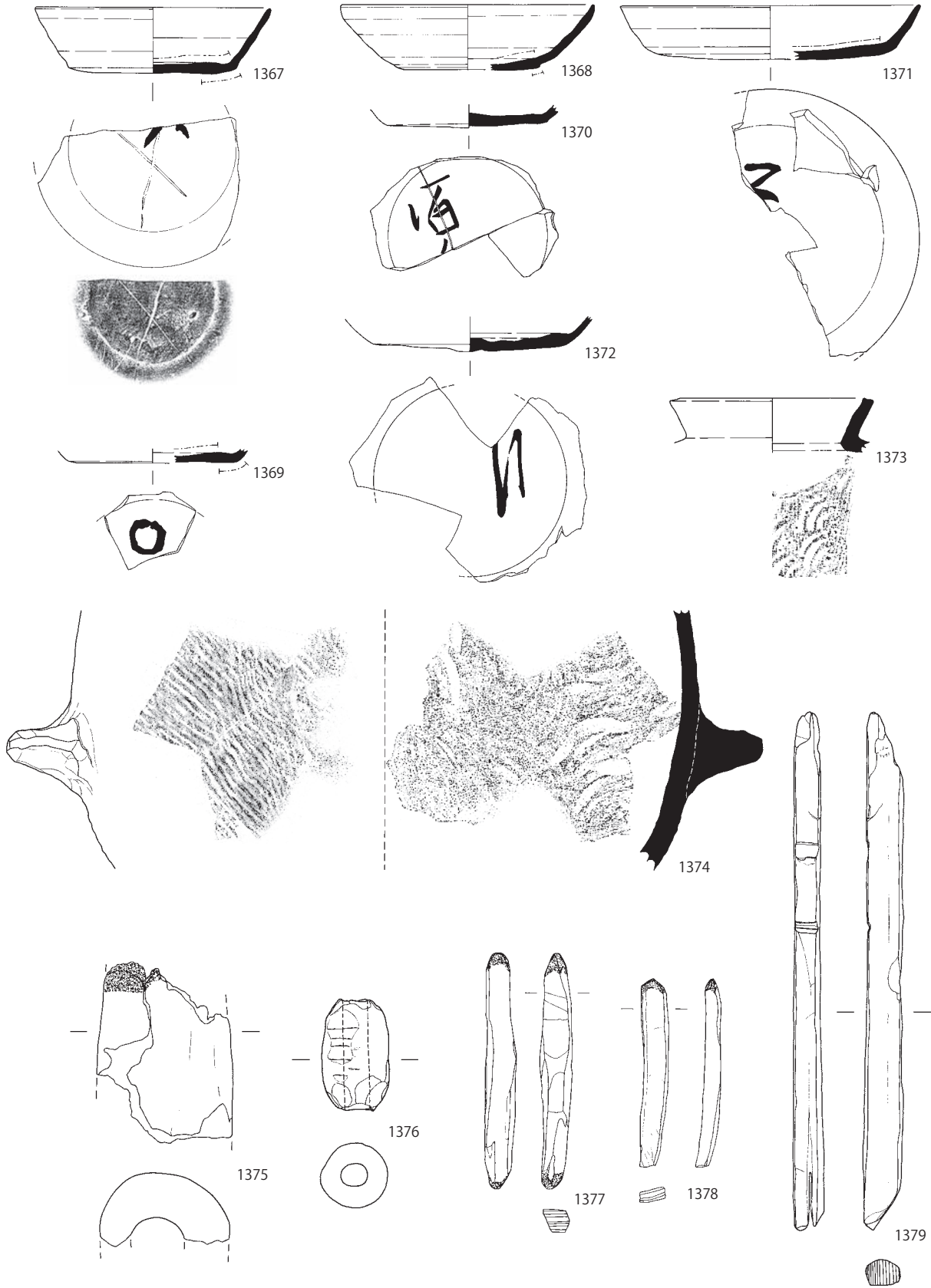


1328～44: 第Ⅲ-2 面包含層

第314図 H地区 第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図2 (S=1/3)



第315図 H地区 第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図3 (S=1/3)



1367 ~ 79: 第III-2 面包含層

0 (1:3) 10cm

第316図 H地区 第III-1・2面出土遺物実測図4 (S=1/3)

第3節 第Ⅲ-1・2面の遺構と遺物

部が直線的に立ち上がり、器面は摩耗が目立つ。1363は口径13.0cm、器高2.9cmを測り、底部が若干円盤状を呈する。1364は全面に煤が付着し、煮炊き容器に転用した可能性をもつ。1365・66は口径12cm前後、器高約3.5cmを測り、体部が外傾する。第316図1367の底部外面には墨書が残る。1368の器肉は薄く、回転ヘラ切り痕をそのまま残す。1369は「○」、1370は「□(酒または泊カ)□」の墨書を行なう。また、無台盤1372には「N」、1373には「乙」の文字がそれぞれ残る。1358・61がⅣ<sub>2</sub>期、1362・64～66

第68表 H地区 第0・I面、第Ⅲ-1・2面出土土器観察表

※( )は残存量を示す。

押図番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	構成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
311	1301	C-D-27-28	第0・I面包含層・耕作土	越中瀬戸	皿	-	5.8	(2.3)	橙	橙	-	良	-	ケズリ	底18/36	鉄粒、赤地緻密細砂多。高台端部摩減。17c前半	H16K36
311	1302	C-D-27-28	第0・I面包含層・耕作土	肥前・磁器	染付皿	-	4.6	(2.1)	軸・透明	素地：灰白	-	良	-	-	底12/36	波佐見、蛇の目輪刺ぎ。破断面を焼き継ぎ。外底の朱文字は墨書か。18c末～19c	H16K38
311	1303	C-D-27-28	第0・I面包含層・耕作土	肥前・陶器	すり鉢	-	-	(3.4)	灰黄褐	灰黄褐	細砂少量含、緻密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口3/36	鉄粒。17c前半	H16K37
311	1304	C-D-27-28	第0・I面包含層・耕作土	越前	すり鉢	-	15.6	(10.2)	赤灰	赤褐	粗砂少含	良	-	-	底9/36	11条1單位のおろし目。断面漆継ぎ。16c	H16D329
313	1306	D-28-1	第Ⅲ-1面SD3101(疎層～下層)	ロクロナデ	壺	20.3	-	(4.3)	にぶい橙～黄橙	褐灰	ウ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口6/36	外面煤付着	H16D336
313	1307	D-28-1	第Ⅲ-1面SD3101(疎層他)	須恵器	-	9.8	5.6	(3.1)	灰	灰	b	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口9/36	外面黒化	H16K28
313	1308	D-28-1	第Ⅲ-1面SD3101(疎層他)、包含層	須恵器	坏蓋	-	-	(2.6)	淡灰	灰	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ロクロナデ	-	外面黒化。内面磨耗	H16K27
313	1309	D-27-1	第Ⅲ-1面被覆土(灰白粗砂(洪水砂))	須恵器	有台坏	12.8	7.0	4.3	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ロクロナデ	口4/36	外面黒化	H17D661
313	1310	D-27-1	第Ⅲ-1面被覆土(灰白粗砂(洪水砂))	須恵器	無台坏	-	7.5	(1.4)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底12/36	外底墨書「井門」、内面一部煤付着、外面煤付着(油痕か)	H16墨29
313	1311	D-27-1	第Ⅲ-1面被覆土(灰白粗砂(洪水砂))	須恵器	瓶	11.1	-	(9.5)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	口34/36	外面降灰・自然熱(正位焼成)	H16K40
313	1312	D-27-3	第Ⅲ-1面包含層	ロクロナデ	小壺	12.3	-	(4.6)	淡赤橙黒褐	にぶい橙灰黄褐	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口6/36	外面煤付着	H16D335
313	1313	D-27-1	第Ⅲ-1面包含層	須恵器	無台坏	11.1	7.9	3.2	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36	外底に墨書、判読できず	H17墨55
313	1314	D-28-1	第Ⅲ-1面包含層他	須恵器	無台坏	11.9	8.4	2.9	灰白	灰白	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口9/36	外面煤付着	H16K3
313	1315	D-28-1	第Ⅲ-1面包含層、排水溝	須恵器	無台坏	12.3	7.8	3.2	灰	灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	内面～口縁部外面降灰	H16K5
313	1316	D-27-3	第Ⅲ-1面包含層	須恵器	無台坏	13.6	7.6	2.9	灰	灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口15/36	外面重ね焼き痕	H16K34
313	1317	D-27-3、D-28-1	第Ⅲ-1面排水溝	須恵器	有台壁	15.7	11.4	3.2	灰	灰	d	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ロクロナデ	口3/36	外面黒化、有蓋	H16K11
313	1318	D-27-1、D-28-1・2	第Ⅲ-1面包含層、排水溝他	須恵器	横瓶	-	-	(22.6)	灰	灰	h	良	ロクロナデ、指頭圧痕	ロクロナデ、平行叩き、ナデ	-	内面黒色付着物。外面自然熱・降灰(横位焼成)、閉塞内壁	H16K45
313	1319	D-27-1・3	第Ⅲ-2面包含層	非ロクロナデ	-	-	8.7	(4.1)	黒	褐灰	キ	良	ミガキ	ヨコナデ、ケズリ	底9/36	内黒外赤(外底含む)	H16K30
313	1320	C-27-2、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	非ロクロナデ	-	12.0	7.5	4.1	黒	灰黄褐	キ	良	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	口3/36	内面黒色処理	H16D324
313	1321	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	非ロクロナデ	-	18.2	-	(4.1)	黒	にぶい黄橙	ア	良	ミガキ	ミガキか	口3/36	内黒外赤。黒色処理外面にはみだす。磨減顕著	H16K4
313	1322	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	ロクロナデ	-	16.4	-	(3.9)	橙	明赤褐	ケ	良	ロクロナデ、ミガキ	ロクロナデ、ミガキ	口3/36	両面赤影。磨減顕著	H16K1
313	1323	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	非ロクロナデ	高坏	-	-	(4.4)	黒、灰黄褐	にぶい橙	キ	良	ミガキ、ハケ	ミガキ	-	内黒外赤	H16K31
313	1324	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	ロクロナデ	壺	-	8.9	(2.3)	明赤褐	明赤褐	粗砂粒、粗砂少	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	底27/36	内外面赤影	H16D334
313	1325	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	ロクロナデ	壺	24.0	-	(8.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ケ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口3/36	外面煤付着	H16K23
313	1326	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	ロクロナデ	壺	22.0	-	(4.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ケ	並	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口3/36	外面煤付着	H17D675
313	1327	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	ロクロナデ	壺	21.3	-	(5.8)	橙～灰黄褐	灰黄褐	ケ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口9/36		H17D669
314	1328	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	ロクロナデ	壺	20.3	-	(5.1)	灰黄褐	灰黄褐	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口3/36	内面ヨゴレ、外面煤付着	H16K2
314	1329	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	ロクロナデ	壺	19.8	-	(2.9)	黒	黒、灰褐	ケ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ	口3/36	破片化後に2次被熱、全面煤付着	H16K29
314	1330	D-27-3	第Ⅲ-2面包含層	ロクロナデ	塀	約32	-	(12.5)	にぶい橙	にぶい橙～褐灰	ケ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ、ケズリ	口1/36	外面煤付着	H17D674
314	1331	D-27-3	第Ⅲ-2面包含層	非ロクロナデ	瓶	-	-	(4.4)	淡黄橙	淡黄	ウ	良	ハケ	ハケ	-	把手。断面長方形	H16K35
314	1332	D-27-1・3	第Ⅲ-2面包含層	ロクロナデ	瓶	22.6	-	(5.7)	黄橙	黄橙	ケ	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口6/36	破片化後に内外面煤付着	H16K42
314	1333	D-27-28	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	ロクロナデ	瓶	-	16.0	(1.8)	淡黄橙	褐灰	ウ	良	ケズリ、ナデ	ケズリ	6/36	胴部割離か	H16K32
314	1334	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	坏蓋	16.4	縦径3.0	2.4	灰	灰	a	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	内面へら記号「-」。重ね焼き1類	H16D333
314	1335	D-27-1、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層他	須恵器	坏蓋	15.2	-	(2.2)	灰	灰	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ロクロナデ	口8/36	倒位で2次被熱(内面に煤付着)	H17D663
314	1336	D-27-3、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	坏蓋	14.4	-	(2.7)	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ロクロナデ	口3/36	焼き歪みあり	H16K7
314	1337	D-27-3、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	須恵器	坏蓋	13.6	縦径2.6	3.1	灰	灰黄	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ロクロナデ	口3/36	内面塗付着、転用硯。外面全面降灰	H16K8
314	1338	D-27-3、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	須恵器	坏蓋	-	縦径2.6	(2.3)	暗灰	灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	-	内面へら記号「J」、外面全面降灰。内面磨耗	H16K9
314	1339	D-27-3、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	坏蓋	12.6	縦径2.0	2.8	灰	灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36	内面へら記号「J」。外面全体に降灰	H16K22

第69表 H地区 第Ⅲ-2面出土土器観察表

※ ( ) は残存量を示す。

挿入番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
314	1340	D-27-1・3	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	坏蓋	13.3	-	(1.9)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口17/36	外面墨書、判読できず。内面墨痕・磨耗顕著(転用痕)	H17墨50
314	1341	C-27-2	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	坏蓋	12.7	鉛径2.4	2.7	灰	灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ロクロナデ	口2/36	内面墨付着、平滑、転用痕	H16K41
314	1342	D-27-3	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	坏蓋	11.5	鉛径2.1	2.7	灰	灰	k	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	完形	内面へら記号「/」。外面全降灰	H16D326
314	1343	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	坏蓋	12.8	-	(1.8)	灰	灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口6/36	重ね焼きⅡb類。外面墨書「口(東カ)」。破片化後に被熱	H16墨41
314	1344	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	坏蓋	15.1	7.6	2.5	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口8/36	無紐。重ね焼きⅡb類。内面煤付着、外面墨書か	H16D332
315	1345	D-27-3、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	須恵器	有台坏	14.9	9.6	5.6	灰	灰	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口18/36	外面降灰。磨耗目立つ	H16D325
315	1346	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	-	8.4	(3.7)	灰	灰	k	良	ロクロナデ、ナデ	ナデ、回転へら切り後ロクロナズリ、ナデ	底21/36	外底中央に墨書、判読できず	H16K25
315	1347	D-27-1、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	15.3	6.3	6.1	灰	青灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、回転へら切り後ナデ	口9/36	外面降灰。2次被熱、煤付着	H16K10
315	1348	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層他	須恵器	有台坏	14.5	-	(5.2)	灰	青灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口8/36	外面黒化	H17D667
315	1349	D-27-1、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	14.0	7.6	3.9	灰白	淡灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口3/36	口縁部黒化	H17D662
315	1350	D-27-1、D-27-2	第Ⅲ-2面包含層他	須恵器	有台坏	13.6	9.0	3.7	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、回転へら切り後ナデ	口2/36	焼き歪みあり、外面自然融着(正位焼成)	H17D665
315	1351	D-27-3・4	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	13.8	-	(3.5)	暗灰	暗灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、回転へら切り後ナデ	口3/36	台部剥離	H17D678
315	1352	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	-	9.0	(1.5)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、回転へら切り後ロクロナデ	底36/36	外底墨書「住」。内底平滑	H16墨44
315	1353	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	13.5	8.2	4.2	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口6/36	外面黒化	H16K21
315	1354	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	13.1	8.3	4.2	灰	灰	e	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口3/36	外底に墨書口	H17D664
315	1355	D-27-1、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	11.8	7.4	4.5	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、回転へら切り後ナデ	口12/36	焼き膨れ・歪みあり。外面黒化	H16D327
315	1356	D-27-3、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	10.5	7.9	4.4	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口15/36	台部内面に黒色タール状付着物	H16D328
315	1357	D-27-1、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	有台坏	11.0	8.4	4.1	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口15/36	使用による磨耗顕著	H16D342
315	1358	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	13.0	9.3	3.1	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口6/36	外底にへら記号「/」、内面墨痕・内底平滑(転用痕)、口縁部黒化	H16K24
315	1359	C-27-2、D-27-3	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	-	8.9	(1.5)	淡灰	淡灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	底18/36	外底墨書、判読できず。内外面磨耗・煤付着	H17墨49
315	1360	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	12.6	10.0	3.6	灰白	灰白	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口3/36	口縁部黒化	H16K6
315	1361	C-27-2	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	12.0	8.6	2.8	灰	灰	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口3/36	内底磨耗、口縁部黒化	H16K43
315	1362	C-27-2、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	須恵器	無台坏	13.0	7.0	3.4	灰白	黄灰	c	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口5/36	口縁部黒化	H17D670
315	1363	D-27-1・3、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	13.0	8.4	2.9	淡灰黄	淡灰黄	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口10/36	外底へら記号「/」	H17D666
315	1364	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	須恵器	無台坏	12.5	8.8	4.1	淡灰黄	淡灰黄	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口15/36	内外面煤付着。外底に塵状圧痕	H16D323
315	1365	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	12.2	8.2	3.4	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口3/36	口縁部黒化	H16D337
315	1366	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	11.8	8.4	3.5	褐灰	褐灰	e	不良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口6/36	全面2次被熱、煤付着	H16K19
316	1367	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	12.0	8.6	3.4	灰、赤褐	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口9/36	へら記号「×」。外底墨書1文字、判読できず	H16墨43
316	1368	D-27-3他	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	須恵器	無台坏	12.9	7.4	3.3	黄灰	褐灰	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口18/36	器内薄い。底部台状	H16D330
316	1369	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	-	8.6	(1.8)	灰白	灰白	m	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	底3/36	内外面磨耗。外底墨書「O」	H16墨42
316	1370	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	無台坏	-	8.1	(1.2)	灰白	灰白	m	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	-	外底墨書「口(酒または泊カ)口」	H16墨40
316	1371	C-27-4、D-28-1	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	須恵器	無台壁	15.3	11.6	2.8	灰	灰~灰褐	h	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	口10/36	口縁部黒化。外底墨書「乙、内底平滑。破片化後に被熱か」	H16墨46
316	1372	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層、排水溝	須恵器	無台壁	-	10.0	(1.8)	灰白	灰白	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転へら切り後ナデ	底21/36	外底墨書「//」	H16墨45
316	1373	D-27-1・3	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	横瓶	10.4	-	(3.9)	灰	灰	a	良	ロクロナデ、同心円叩きb類、ハケ	ロクロナデ、並行叩き	口9/36	内外面とも緑~灰オリーブ色の自然釉着	H16K39
316	1374	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	須恵器	壺	-	-	(13.4)	灰	灰	f	良	同心円叩きb類、ナデ	平行叩きb類、ナデ	-	外面黒化	H16K46
316	1375	D-27-1	第Ⅲ-2面包含層	土師器	フイゴ羽口	長さ(9.3)	径(7.0以上)	-	灰赤	灰黄	粗砂多、2~5mm礫並	良	ナデ	ナデ	-	孔径2.6cm	H16D331
316	1376	D-28-1	第Ⅲ-2面包含層	土師器	土罐	長さ5.7	径3.5	-	暗灰	灰黄	粗砂多、礫少	良	-	ナデ	完形	孔径1.3cm、重量60.0g。黒斑、敷物圧痕あり	H16K44

第70表 H地区 第0・I面、第Ⅲ-2面出土木製品観察表

※ ( ) は残存量を示す。

挿入番号	番号	面	出土遺構	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種同定	備考	実測番号	実測番号
311	1300	O・I	D26-3	SK1001	漆器碗	口径12.8	器高5.3	底径6.3	ブナ属	横木取り(板目)。黒漆、朱漆で文様	H16木-40
311	1305	O・I	D28-1	攪乱表土層	柱楔	(34.7)	14.6	14.1	クリ	芯持ち丸木。側面加工、底面を2方向から加工	H16木-10
316	1377	Ⅲ-2	C-28-2	包含層	加工材	12.2	1.6	1.6	-	分割材、断面略方形。両端の加工部焦げる	H16木-12
316	1378	Ⅲ-2	D-27-1	包含層	加工材	9.2	1.4	8.5	-	分割材、断面長方形。一端が焦げる	H16木-14
316	1379	Ⅲ-2	D-27-1	包含層	加工材	26.6	2.1	1.6	-	分割材。両端斜方向に加工、一端に深さ2.8cmの切れ込み	H17木-54

がV期、1359・60・63・67～71がVI期に位置付けられる。横瓶1373は横位で焼成され、厚い自然釉が溶着する。1374は球胴形の甕で、横方向にのびる把手を付ける。1375はフイゴの羽口、1376は側面に敷物圧痕を残す土師器土錘である。木製品1377～79は加工材で、1377・78は焦げ跡を残す。

#### 第4節 第Ⅳ面の遺構と遺物 (第317～323図、第71～73表)

第Ⅳ面は、G地区第Ⅳ面から続く7世紀末頃～9世紀末に営まれた集落域である。検出面の標高は14m弱～14.1mを測り、第Ⅲ-1面と同様に南東から北西方向、南西から北東方向に向けて緩やかに標高を減ずる。第Ⅲ-2面と第Ⅳ面の間に、土石流に起因する流入・堆積土を確認できないことから、10世紀初頭(VI<sub>2</sub>期)に発生したG地区河跡3001(古)を本流とする土石流災害の影響は少ないものと推察される。調査の結果、土坑(SK)2基や約110基のピットを検出、掘立柱建物(SB)7棟を復元した。遺物は、墨書土器や転用硯を含む多数の須恵器、土師器の他、製塩土器、フイゴ羽口、土錘、柱根等の木製品が出土した。なお、調査区の制約から、掘立柱建物として復元した柱穴以外にも、P4008・18・20・35・54等の柱穴となるピットが一定数存在することから、存在した掘立柱建物数はさらに多いと推定している。

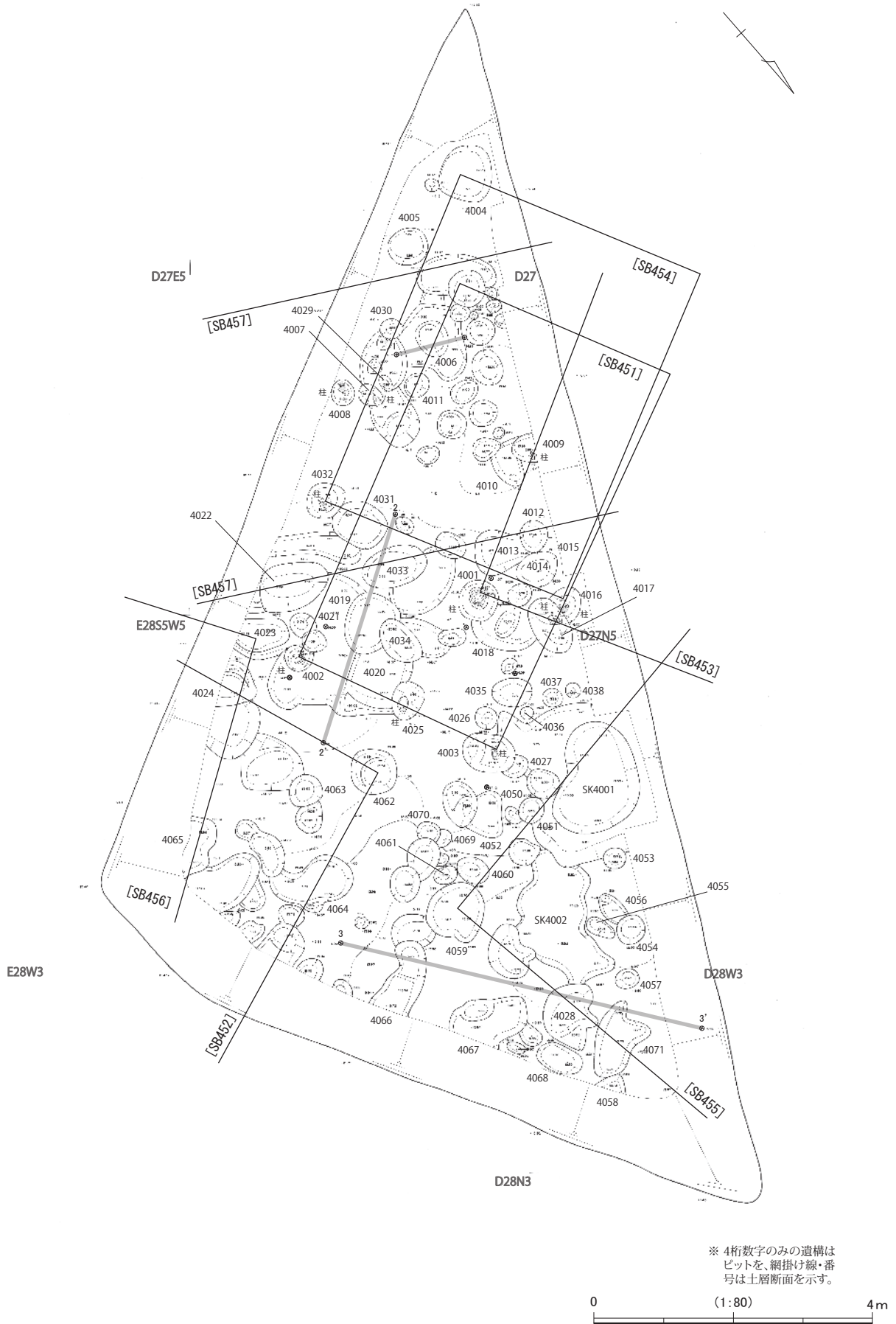
**SB451** C・D-27区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外南西側にのびる(第318図)。建物主軸方位はN-68°Eを示し、桁行3間(5.90m)×梁行2間(3.06m)、床面積は約18㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.70m・2.10m、梁間の柱間寸法は1.53m等間で、柱筋の通りは比較的よい。柱穴の平面形態は不整形円形を呈するものが主体で、P4003が長径76cm、短径56cm、深さ38cmを、P4031が長径80cm、短径64cm、深さ24cmをそれぞれ測る。柱根は径10～18cmを測る4本が残存し、柱穴覆土は濁暗灰～暗灰褐色砂質土を基本とする。建物の主軸方向や柱配置はSB454と類似する。建物敷地はSB453・454・457と重複し、遺構の切り合い関係はP4017がSB454柱穴P4016より、南東隅柱がSB457柱穴より、それぞれ新しい。遺物は、P4031出土の第321図1380、P4025出土の1381を図化した。古墳時代前期の土師器球胴壺1380は、口縁部が長くのびる。須恵器坏蓋1381は口縁端部を鋭い嘴状に仕上げ、Ⅱ<sub>3</sub>期に位置付けられる。他にP4002・03・07から土師器、須恵器片が、P4025・31から土師器甕片が出土した。また、柱根は、柱穴P4002から第322図1394、P4003から1395、P4017から1396、P4025から1397の柱根がそれぞれ出土した他、P4031に残欠を確認している。図化した柱根は、径10～18cmを測り、いずれも先端を2方向から尖らしたマツ属複雑維管束亜属の丸木材を用いる。

**SB452** D-27区で復元した側柱構造と考えられる掘立柱建物(第318図)で、調査区外東側にのびる。建物主軸方位はN-17°Wを示し、桁行柱間寸法2.70m、梁行柱間寸法2.50mを測る。柱穴の平面形態は隅丸方形または不整形円形を呈し、P4062が長辺68cm、短辺54cm、深さ37cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土は暗灰色砂質土を基本とする。建物敷地はSB456・457と重複し、遺構の切り合い関係はP4024がSB456柱穴よりより新しく位置付けられる。遺物は、P4024から土師器甕小片が出土した。

**SB453** C・D-27区で復元した掘立柱建物で、調査区外西側にのびる(第319図)。建物主軸方位はN-26°Wを示し、1間のみ確認できた梁行の柱間寸法は2.10mを測る。柱穴P4001の平面形態は略円形を呈し、長径58cm、短径54cm、深さ22cmを測る。柱根は2柱穴が残存し、柱穴覆土は濁淡灰褐～暗灰褐色砂質土を基本とする。建物の主軸方向はSB451・454と類似する。建物敷地はSB451・454・457と重複し、遺構の切り合い関係はP4001がP4018より新しい。遺物は、P4001からⅣ<sub>1</sub>期と考えられる須恵器有台坏片の他、土師器甕、尖底形の製塩土器の小片が出土した。また、柱根は、P4001に第322図1398、P4009に1399が残存、1398が径17.4cmを測るサイカチ材、1399が径9.7cmを測るクリ材である。

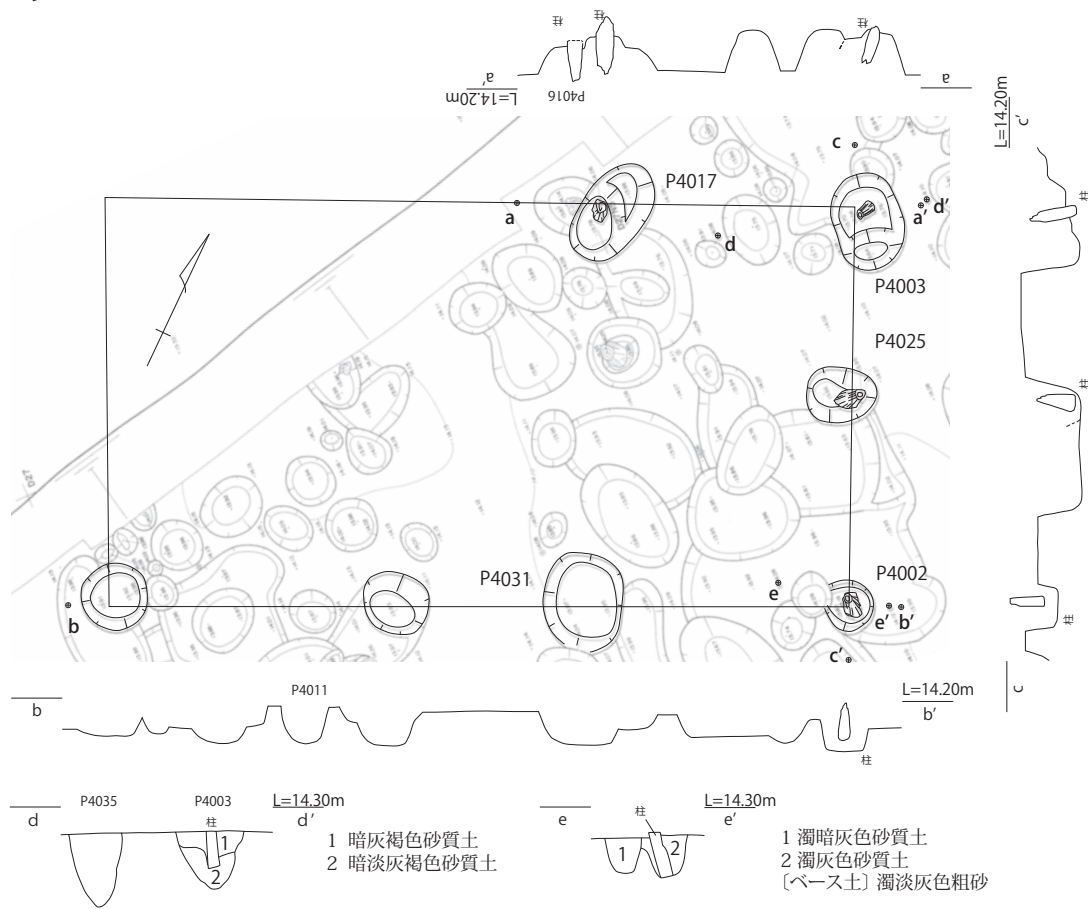
**SB454** C・D-26・27区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外西側にのびる(第319図)。建物



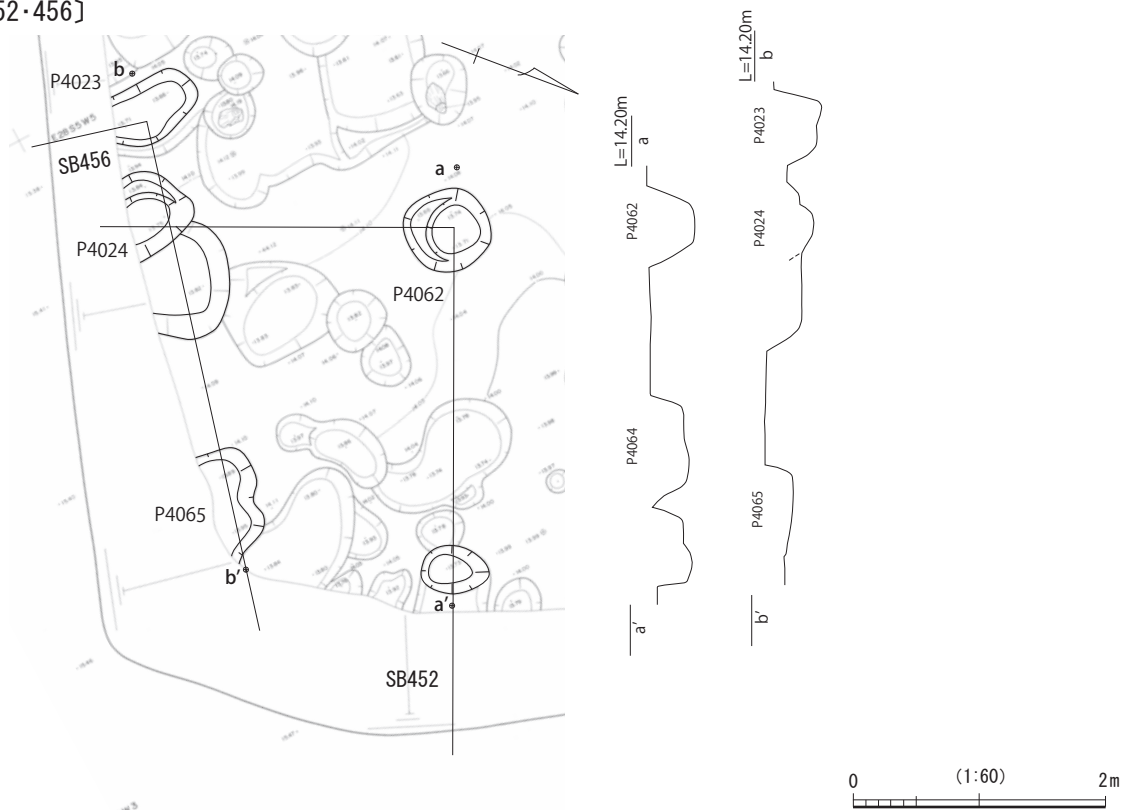


第317図 H地区 第IV面平面図(S=1/80)

[SB451]

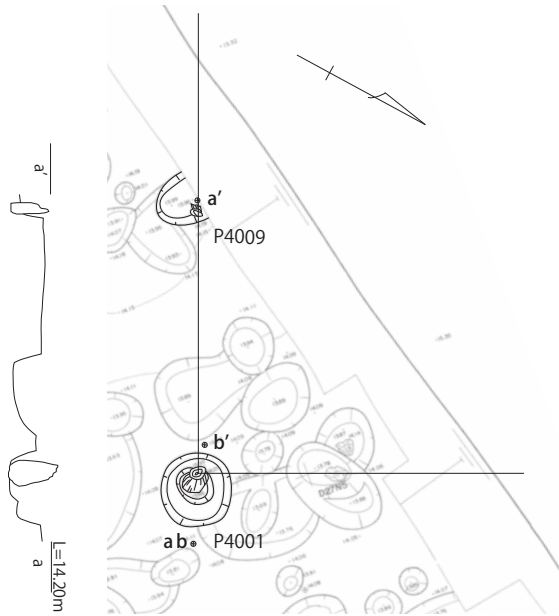


[SB452・456]

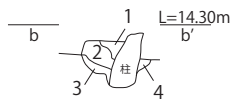
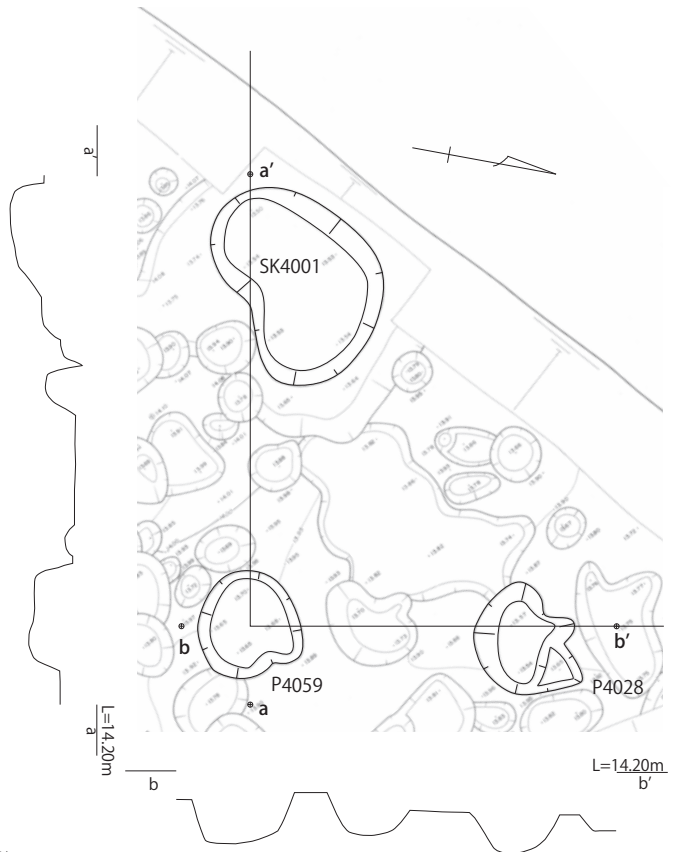


第318図 H地区 第IV面SB平面図・土層断面図1(S=1/60)

[SB453]

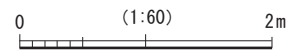
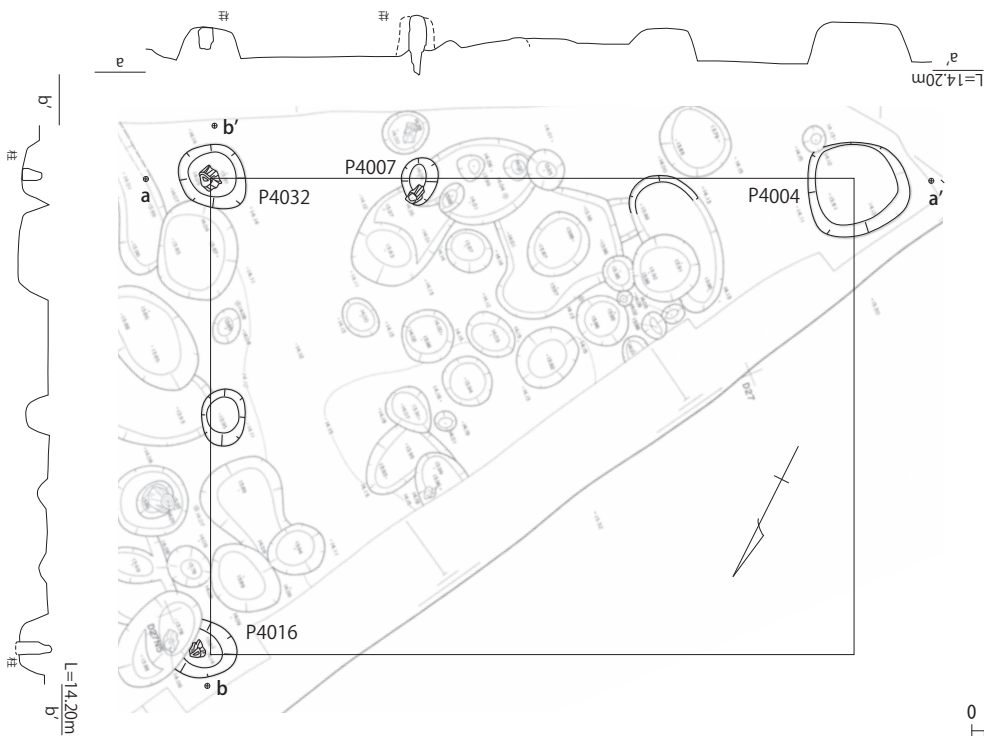


[SB455]



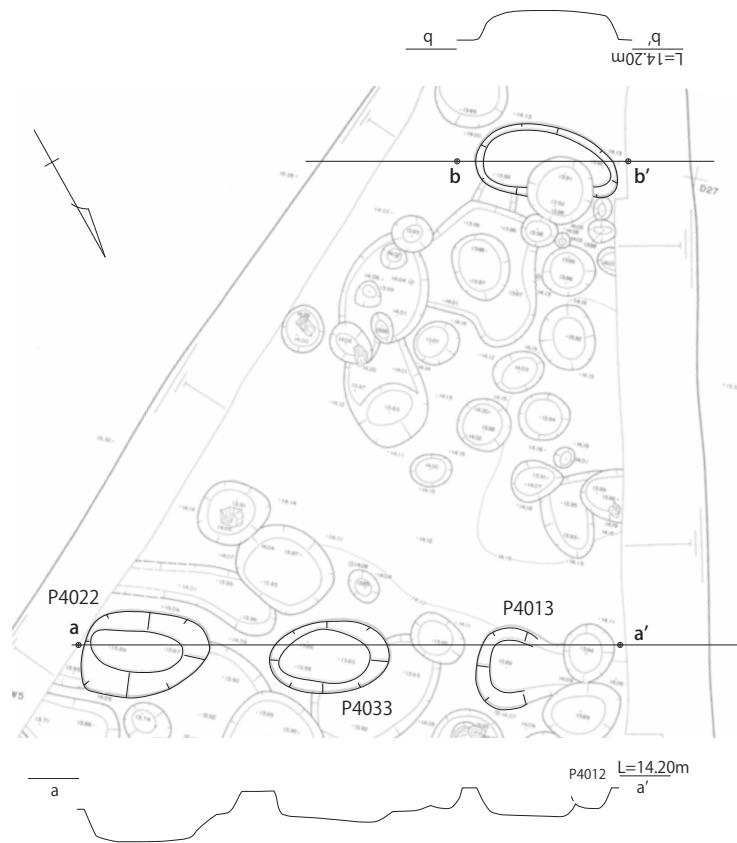
- 1 濁暗褐色砂質土(粘土ブロック混ざる)
- 2 黄土色粘土
- 3 濁暗灰色細砂(淡灰色細砂混ざる)
- 4 暗灰色細砂

[SB454]

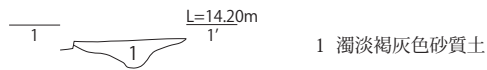


第319図 H地区 第IV面SB平面図・土層断面図2(S=1/60)

[SB457]

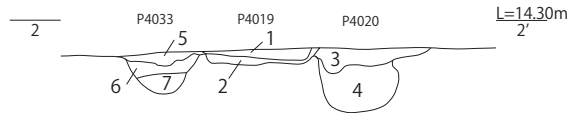


【D27区 P4006】(第317図)



1 濁淡褐色砂質土

【D27区 P4020等】(第317図)

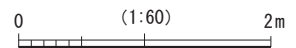


- 1 暗灰色砂質土
- 2 淡乳灰色細砂
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 濁暗褐色砂質土
- 5 暗灰褐色砂質土(3層と同質土)
- 6 濁暗灰褐色砂質土(淡灰色細砂がブロック状に混ざる)
- 7 淡乳灰色粗砂

【C・D28区 P4028等】(第317図)



- 1 濁暗灰色砂質土
- 2 濁淡灰褐色砂質土
- 3 濁暗灰茶褐色砂質土(粗砂が混ざる)
- 4 濁暗灰色砂質土(3層が混ざる)
- 5 濁淡褐色砂質土
- 6 淡灰色細砂
- 7 暗灰色砂質土
- 8 濁淡灰色粗砂

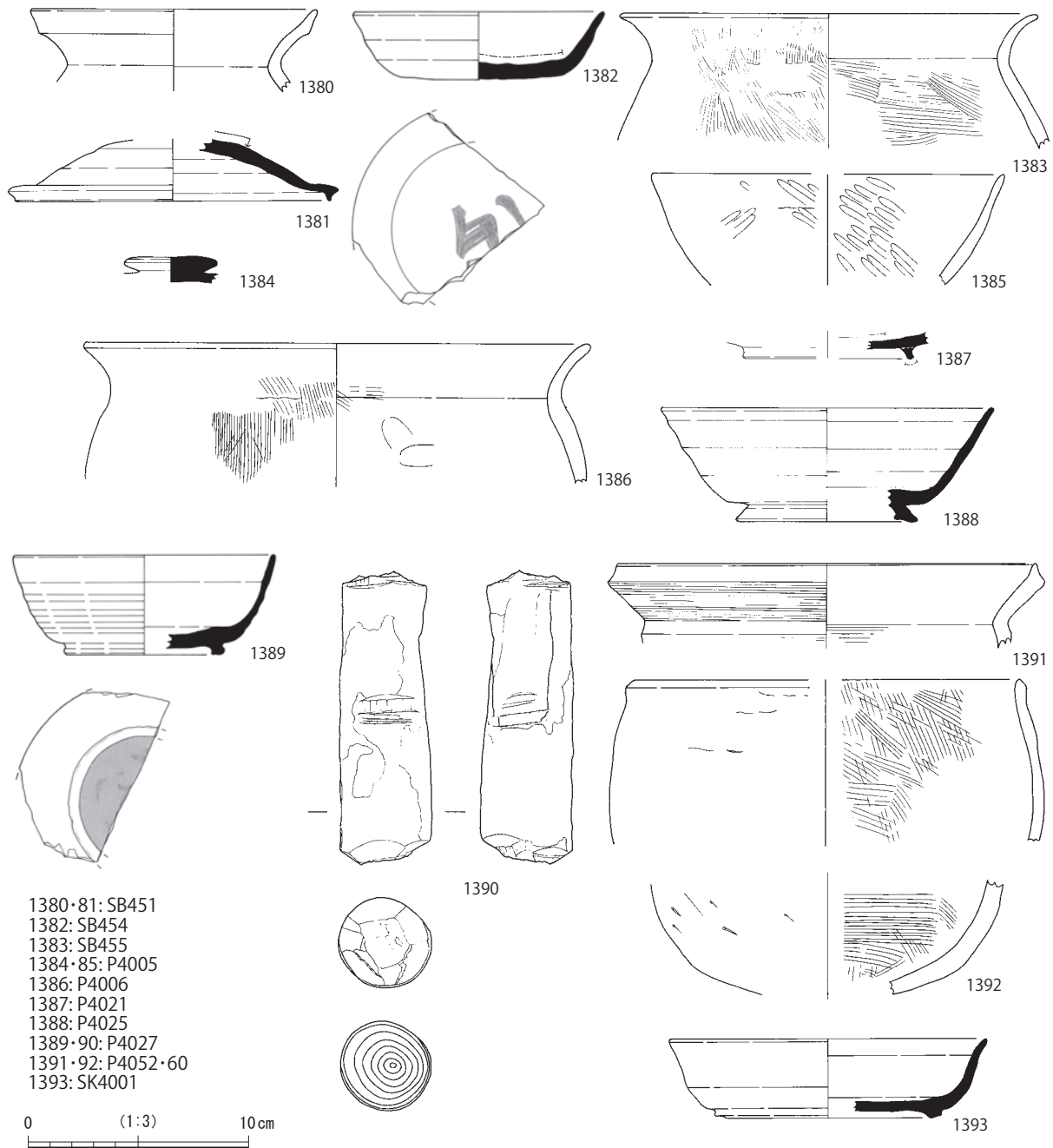


第320図 H地区 第IV面SB、ピット平面図・土層断面図(S=1/60)

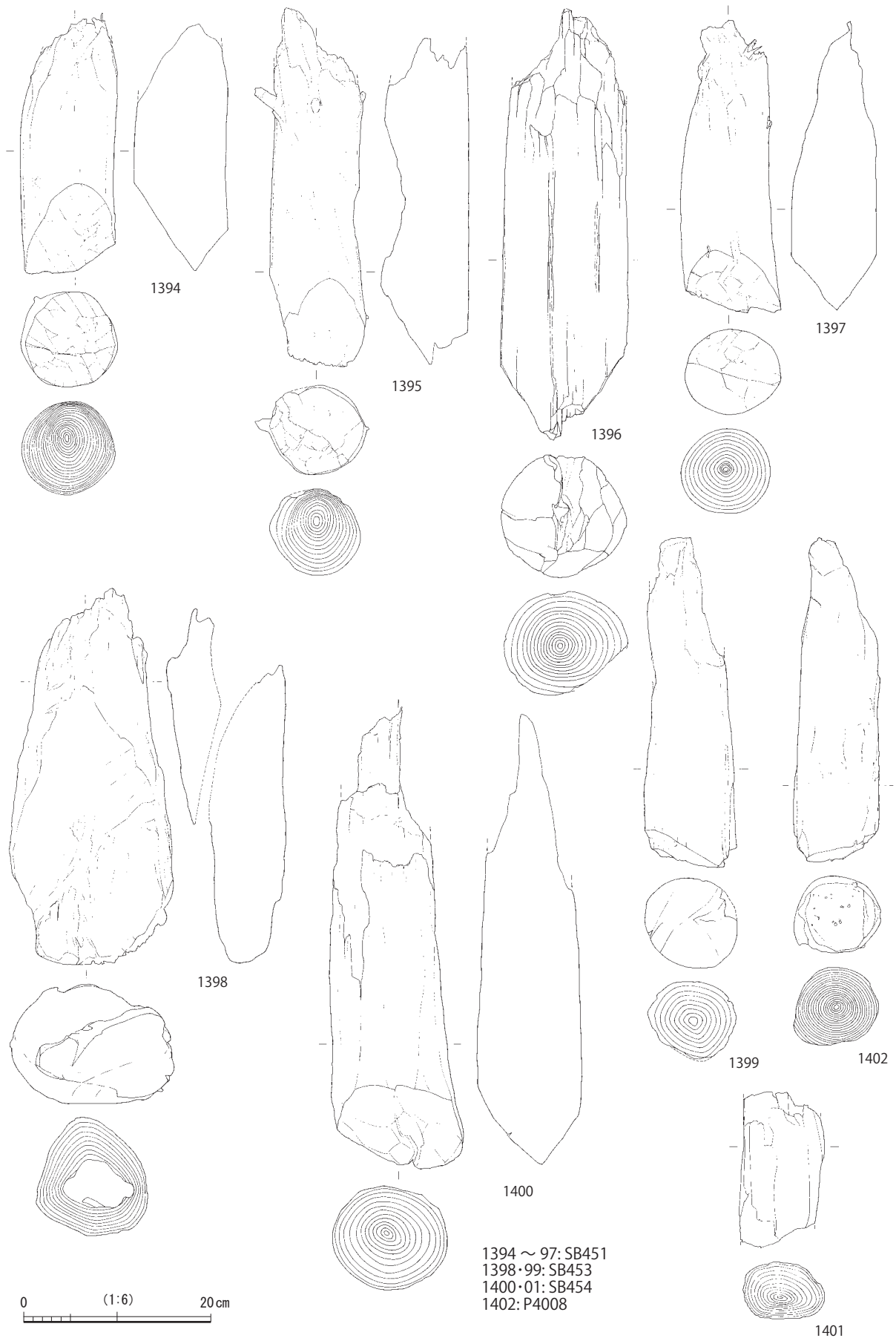
第71表 H地区 第IV面SB規模等一覧表

※ 柱間寸法は北端から南端柱穴、または東端から西端柱穴の順に計測。( ) は推定。

遺構名	図No.	グリッド名	柱構造	柱配置	床面積 (㎡)	桁行長 (m)	桁行柱間寸法 (m)	梁行長 (m)	梁間柱間寸法 (m)	主軸方位	柱穴の平面形態	柱根の有無	備考
SB451	318	C・D-27	側柱	3×2間	18.0	5.90	[南東桁] 2.10+1.70+2.10	3.06	[北東梁] 1.53+1.53	N-68.0° 東	不整形円形	あり 4本	P4017がSB454柱穴P4016より新。南東隅の柱穴がSB457柱穴より新
SB452	318	D-27	側柱か	1~×1~間	-	2.70~	[北桁] +2.70	2.50~	[西梁] 2.50+	N-17.0° 西	隅丸方形 不整形円形	なし	P4024がSB456柱穴より新
SB453	319	C・D-27	側柱か	1~×1~間	-	-	-	2.10~	[南梁] 2.10+	N-26.0° 西	略円形	あり 2本	P4001がP4018より新。P4009がP4010より新
SB454	319	C・D-26・27	側柱	3×2間	18.9	5.10	[南東桁] 1.70+1.70+1.70	3.70	[北東梁] 1.85+1.85	N-66.0° 東	不整形円形	あり 3本	P4016がSB451柱穴P4017より古
SB455	319	C・D-27・28	側柱か	1~×1~間	-	3.00	[南桁] 3.00+	2.20~	[東梁] +2.20	N-10.0° 西	不整形円形	なし	
SB456	318	D-27	側柱か	1~×2~間	-	-	-	3.00~	[北梁]+1.50+1.50	N-30.0° 西	不整形円形	なし	SB452柱穴4024より古
SB457	320	D-27	側柱	2~×1~間	-	-	[北東桁] +1.60+1.60+	4.00	-	N-60.0° 西	不整形円形	なし	P4013がP4012より古。南西柱穴がSB451柱穴より古



第321図 H地区 第IV面出土遺物実測図1 (S=1/3)



1394 ~ 97: SB451  
 1398・99: SB453  
 1400・01: SB454  
 1402: P4008

第322図 H地区 第IV面出土遺物実測図2 (S=1/6)

主軸方位はN-66°Eを示し、桁行3間(5.10m)×梁行2間(3.70m)、床面積は約19㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.70m等間、梁間の柱間寸法は1.85m等間で、柱筋の通りはよくない。柱穴の平面形態は不整円形を呈するものが主体で、P4004が長辺80cm、短辺76cm、深さ30cmを、P4032が径約52cm、深さ23cmを測る。柱根はP4016等の3本が残存し、柱穴覆土は濁淡灰～暗灰色砂質土を基本とする。建物の主軸方向や柱配置はSB451と類似する。建物敷地はSB451・453・457と重複し、遺構の切り合い関係はP4016がSB451柱穴P4017より古く位置付けられる。遺物は、P4016出土の第321図1382、P4007出土の第322図1400、P4032出土の1401を図化した。須恵器無台坏1382は底部外面中央に太い筆使いで墨書するが、薄いため判読できない。IV<sub>2(新)</sub>期～V<sub>1</sub>期に位置付けられる。クリ材を用いた柱根1400は径13.4cmを測り、先端を2方向から加工する。柱根1401は欠損・腐朽が目立つ。他に、P4004・07から土師器、須恵器片が、P4016から土師器甕片、柱根残欠が出土した。

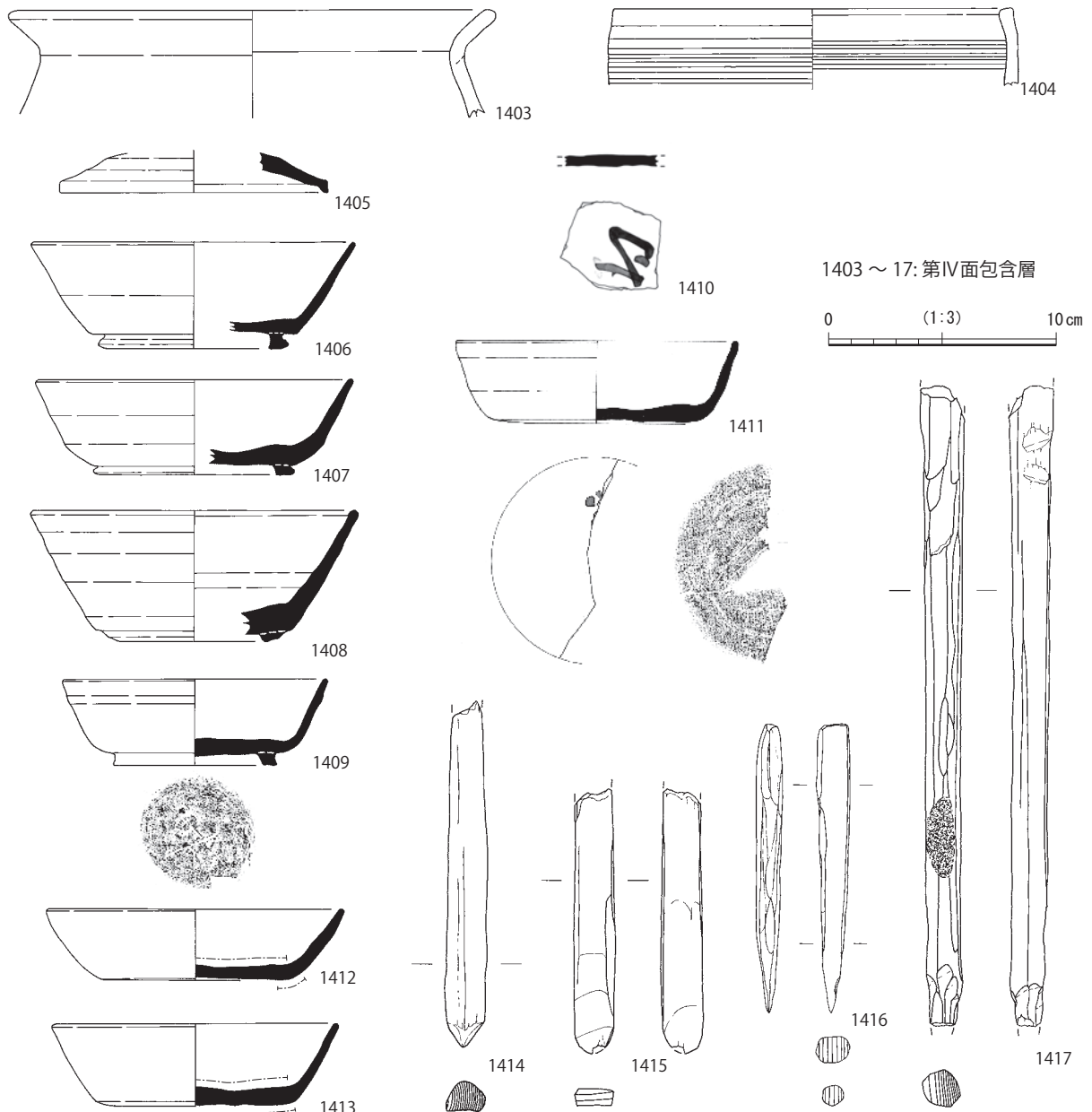
**SB455** C・D-27・28区で復元した側柱構造と考えられる掘立柱建物で、調査区外西側にのびる(第319図)。建物主軸方位はN-10°Wを示し、桁行の柱間寸法3.00m、梁行柱間寸法2.20mを測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、P4028が長径86cm、短径58cm、深さ33cmを、P4059が長径86cm、短径82cm、深さ27cmをそれぞれ測る。柱根は残存せず、柱穴覆土は暗褐色砂質土を基本とする。遺物は、P4028出土の土師器甕1383を図化した。1383は口径12.7cmを測り、細かい単位の手原形を用いる。他にP4028から須恵器甕、土師器甕の小片が出土した。

**SB456** D-27区で復元した掘立柱建物で、調査区外南東側にのびる(第318図)。建物主軸方位はN-30°Wを示し、2間の梁行柱間寸法は1.50m等間を測る。柱穴の平面形態は不整楕円形を呈すると考えられ、長径90cm前後、短径50cm前後、深さ22～39cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土は暗灰色砂質土を基本とする。建物敷地はSB452・457と重複し、SB452柱穴P40241との切り合い関係から、SB452より古い建物となる。遺物は、P4023からⅡ<sub>3</sub>期と考えられる須恵器有台坏片や土師器甕片が出土した。

**SB457** D-27区で桁行を検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外にのびる(第320図)。建物主軸方位はN-60°Wを示し、北東側桁行の柱間寸法は1.60m等間である。柱穴の平面形態は不整楕円形を呈し、長径70～98cm、短径58～68cm、深さ22～42cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土は濁暗灰褐色砂質土、淡乳灰色粗砂を基本とする柱採取埋土である。建物敷地はSB451・453・454・456と重複し、遺構の切り合い関係は南西側柱穴がSB451柱穴より古く位置付けられる。遺物は、P4013から土師器甕、P4022からⅡ<sub>3</sub>期と考えられる須恵器有台坏、土師器甕、P4033から須恵器、土師器、製塩土器の小片がそれぞれ出土した。

**ピット** 約90基のピットを検出しており、P4008・18・20・35・54等のように復元できなかった建物等構造物の柱穴を含むものとする。以下では、出土遺物について記す。

出土遺物は、第321図1384～1394、第322図1402を図化した。1384・85は、P4005から出土した。須恵器坏類蓋1384は径4.2cmを測る大型品である。非ロクロ成形の塊1385は、外面に粘土紐の積上げ痕を残す。P4006出土の土師器甕1386は口径23.0cmを測る。P4021出土の須恵器1387は有台盤脚部と考えられ、使用に伴う摩耗が目立つ。P4025出土の須恵器有台坏1388は、直線的に外傾する体部であり、Ⅱ<sub>3</sub>期に位置付けられる。P4027出土の須恵器有台坏1389は、ロクロひだが目立つ。底部外面を硯面に転用し、V<sub>2</sub>期に位置付けられる。また、1390は中央付近の樹皮に擦痕を残すことから、木槌と考えられる。長さ13.1cm、径4.1cmを測る。P4052・60から1391・92が出土した。1391はロクロ土師器甕である。土師器甕1392は口径約17cmを測り、口縁部が直立する。胎土・調整の類似性から図化した丸底の底部が接合する可能性をもつ。P4008出土の掘立柱建物柱根1402は樹皮を残したクリ材で、底面を平坦に仕上げる。他にP4035・52・54から柱根の樹皮のみが出土した。



第323図 H地区 第IV面出土遺物実測図3 (S=1/3)

**SK4001** C-27区で検出し、2基の大型柱穴が重複している可能性が高い。長軸152cm、短軸134cm、深さ41～57cmを測り、覆土は暗褐灰色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係から、SK4002より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、第321図1390の須恵器有台坏を図化した。扁平な1390は口径14.6cm、器高3.5cmを測り、底部外面に墨痕が残る。他にⅡ<sub>3</sub>～Ⅲ期を中心とする須恵器有台坏、土師器甕、製塩土器等の小片が出土した。

**SK4002** C-27区で検出した平面不整形を呈する浅い落ち込みである。長軸約2m、短軸約1m、深さ13cmを測り、覆土は濁暗灰褐色砂質土である。少量の土師器甕片が出土した。

**包含層出土遺物** 第323図1403～17を図化した。非ロクロの土師器甕1403は口径21.2cmを測り、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが付着する。ロクロ成形の土師器甕1404は口径17.5cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。1405～13は須恵器で、1405が坏蓋、1406～1409が有台坏、1410～13が無台坏となる。



1405は口縁端部を小さく折り曲げる。薄手の1406は底部内面にかすかに墨痕が残る。1407は台部の摩耗が目立つ。1408は狭い底部から体部が直線的に外傾する。1409は口径11.4cm、器高3.8cmを測り、焼成前にヘラ記号「×」を刻む。1410に大きく記された墨書土器は判読できない。1411は底部外面に墨痕が残る。1412は使用に伴う摩耗が目立ち、破片化後に被熱する。1413も摩耗が目立ち、口縁部外面に暗褐色を呈した灯明様の煤が付着する。1414～1417は加工材であり、1416の同形状の個体がE地区第Ⅲ-2面(127)で出土している。

**小結** 第Ⅳ面の調査成果から集落域が、G地区と同様に調査区外西側に延びることは確実である。検出・復元した掘立柱建物の変遷は、建物規模・主軸方位や、少ない出土遺物から保留部分を多く残すものの、第4章で記したG地区東群との連続性を重視して、ここでは集落1期がSB457からSB454に、集落2期がSB452、SB453、集落3期がSB451、SB456、集落4期がSB455と、それぞれ位置付けておく。

第72表 H地区 第Ⅳ面出土土器観察表

※( )は残存量を示す。

検出番号	番号	グリッド名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
321	1380	D-27-1	SB451 (P4031)	非ロクロ土器	壺か	12.8	-	(3.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、磁鉄骨針多	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	口3/36		H160339
321	1381	D-27-3	SB451 (P4025)	須恵器	坏蓋	15.0	-	(2.7)	灰	灰	f	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ロクロケズリ	口6/36	重ね焼きI類、外面降灰	H160341
321	1382	C-27-2	SB454 (P4016)	須恵器	無台坏	11.2	8.0	3.1	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口8/36	内底磨耗。外底墨書判読できず。口縁部外面一部黒化	H17墨48
321	1383	C-28-4	SB455 (P4028)	非ロクロ土器	壺	18.7	-	(6.1)	にぶい黄橙、褐灰	にぶい橙	ウ	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	外面煤付着	H160338
321	1384	D-26-3	P4005	須恵器	坏類蓋	-	錯径4.2	(1.1)	灰黄	灰	l	良	ナデ	ロクロナデ	-		H160343
321	1385	D-26-3	P4005	非ロクロ土器	-	約16	-	(5.0)	灰黄褐～褐灰	にぶい黄橙～灰黄褐	粗砂少、海綿骨針多	並	ミガキ	ミガキ、ケズリ	口3/36	外面一部黒斑あり	H170671
321	1386	D-27-1	P4006	非ロクロ土器	壺	23.0	-	(6.3)	灰黄褐	灰黄褐	ケ	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口1/36	外面煤付着	H170672
321	1387	D-27-3	P4021	須恵器	有台壺か	-	約11	(1.7)	灰白	灰黄褐	d	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	小片	磨耗顕著	H160344
321	1388	D-27-3	P4025	須恵器	有台坏	14.9	8.2	5.1	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	外面降灰	H160340
321	1389	C-27-4	P4027	須恵器	有台坏	11.7	7.0	4.5	オリーブ褐	灰	c	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口4/36	外面降灰。高台内側全体に墨痕(転用破)	H17墨56
321	1391	D27-3	P4052・4060、排水溝	ロクロ土器	壺	18.9	-	(3.9)	淡黄橙	淡黄橙	ケ	良	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口2/36		H160345
321	1392	C-27-4、D-28-1	P4052・4060・Ⅲ面包含層	非ロクロ土器	壺か	-	約17	-	にぶい黄橙	にぶい褐	細砂・粗砂多(オ)	並	ハケ	ヨコナデ、ナデ	底6/36	内外面一部煤付着	H170673
321	1393	C-27-4	SK4001、包含層	須恵器	有台坏	14.6	9.3	3.5	灰	灰	f	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/36	内底・台端部磨耗。外底中央に墨痕	H170668
323	1403	C-27-4	排水溝	非ロクロ土器	壺	21.2	-	(4.7)	にぶい黄橙	淡黄橙	ケ	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口3/36	内面ヨゴレ、外面煤付着	H16K18
323	1404	D-28-1	包含層・排水溝	ロクロ土器	鉢	17.5	-	(3.5)	灰黄褐	灰黄褐	ウ	並	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	口4/36		H170676
323	1405	D-27-1	排水溝	須恵器	坏蓋	11.8	-	(1.7)	暗灰	暗灰	h	並	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口12/36		H170677
323	1406	-	排水溝	須恵器	有台坏	14.0	7.8	4.7	灰白	灰白	e	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	内面に墨痕あり	H16K15
323	1407	D-27-1	包含層	須恵器	有台坏	13.7	8.8	4.2	灰	青灰	a	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ロクロナデ	口9/36	外面黒化	H16K17
323	1408	-	排水溝	須恵器	有台坏	14.2	6.7	5.7	灰	灰	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口6/36	外面黒化	H16K14
323	1409	C-27-4、D-28-1他	包含層・排水溝	須恵器	有台坏	11.4	7.2	3.8	灰	灰	f	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底30/36	外底ヘラ記号「×」。外面黒化顕著	H16K13
323	1410	D-28-1	包含層	須恵器	無台坏	-	-	(0.5)	灰	灰	e	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	小片	外面中央墨書、判読できず	H17墨57
323	1411	D-27-1	包含層・排水溝	須恵器	無台坏	12.2	-	3.7	灰～灰褐	灰～灰褐	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/36	外底ヘラ記号「//」。口縁部黒化。外底墨書、判読できず	H16K20
323	1412	D-27-1、D-27-3	包含層・排水溝	須恵器	無台坏	12.9	8.4	3.1	暗灰褐	灰黄	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36	内外面磨耗顕著。破片化後、内面全体に煤付着	H16K12
323	1413	D-28-1	包含層・排水溝	須恵器	無台坏	12.4	8.8	3.6	灰白	灰白	e	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36	口縁部黒化。内外底平滑。外面に灯明痕か	H16K16

第4節 第IV面の遺構と遺物

第73表 H地区 第IV面出土木製品観察表

※ ( ) は残存量を示す。

押戻 番号	番号	グリッド名	出土遺構	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種 同定	備 考	実測番号	実測番号
321	1390	IV	C27-4	P4027	木鏝	13.1	径4.1	-	-	芯持ち材。一部に樹皮残存	H17木-57
322	1394	IV	D27-3	SB451 (P4002)	柱根	(27.6)	10.3	10.1	マツ属複雑管束亜属	芯持ち丸木。底面を2方向から加工	H16木-20
322	1395	IV	D27-3	SB451 (P4003)	柱根	(38.1)	12.1	9.5	マツ属複雑管束亜属	芯持ち丸木。底面を2方向から加工	H16木-23
322	1396	IV	C27-2	SB451 (P4017)	柱根	(45.9)	18.2	13.0	マツ属複雑管束亜属	芯持ち丸木。底面を2方向から加工	H16木-7
322	1397	IV	D27-3	SB451 (P4025)	柱根	(31.0)	10.6	9.1	マツ属複雑管束亜属	芯持ち丸木。底面を2方向から加工	H16木-22
322	1398	IV	D27-1	SB453 (P4001)	柱根	(40.0)	17.4	12.6	サイカチ	芯持ち丸木。腐食顕著	H16木-11
322	1399	IV	D27-1	SB453 (P4009)	柱根	(34.9)	9.7	9.5	クリ	芯持ち丸木。底面を加工	H16木-19
322	1400	IV	D27-1	SB454 (P4007)	柱根	(49.0)	13.4	11.0	クリ	芯持ち丸木。底面を2方向から加工	H16木-8
322	1401	IV	D27-3	SB454 (P4032)	柱根	(16.5)	9.1	6.0	-	芯持ち材。欠損、腐朽目立つ	H17木-58
322	1402	IV	D27-1	P4008	柱根	(34.3)	9.0	8.2	クリ	芯持ち丸木。一部に樹皮残存。底部に小石付着	H16木-9
323	1414	IV	D-27-1	包含層	杭か	(14.8)	1.8	1.4	-	分割材。一端を加工	H17木-52
323	1415	IV	D-27-1	包含層	加工材	(11.4)	1.8	0.7	-	分割材、断面方形。一端を加工	H17木-55
323	1416	IV	D-27-1	包含層	加工材	12.8	1.5	1.1	-	分割材、断面円形。一端を鋭利に加工	H16木-13
323	1417	IV	D-27-1	包含層	加工材	(28.1)	1.9	1.6	-	分割材、断面略円形。一端を尖らす	H17木-56

## 第6章 自然科学的分析

### 1 分析の目的と試料

G・H地区は、他地区と同様に地下水位が高いことから、柱根を主体に多くの木製品が出土している。一般に木材は、花粉等の微化石と比較して移動性が低く、本遺跡近隣の森林植生の推定が可能であることに加え、出土木製品の樹種の分析からみた当時の木材の利用状況や流通の検討が可能となることから、平成17年度は(株)パレオ・ラボに、平成28年度は(株)古環境研究所に、それぞれ樹種同定分析の業務委託を行った。平成17年度に分析した135点の内訳はD地区25点、F地区79点、G地区31点、また平成28年度に分析した60点の内訳はG地区46点、H地区10点、J・I地区4点を数え、G地区で77点、H地区で10点の樹種同定を実施したこととなる。本章では、第2～4項で平成28年度に委託実施した第VI-1面(弥生時代後期後半以降)から第0・I面(16世紀後半～17世紀)の柱根、杭、斎串、加工材、漆皿等の分析結果を、出土地点や遺物番号等を一部補足したうえで掲載する。また、平成17年度実施の分析結果は調査報告書Ⅳに掲載済みであるが、G・H地区出土木製品について第75表に再掲載するとともに、第76表で時代・器種別の数量を示した。結果として、第4節の(株)古環境研究所による所見とほぼ同じ様相となる。なお、材組織標本は、石川県埋蔵文化財センターにて保管している。

### 2 分析方法

樹種同定の方法は、次のとおりである。各木製品の木取りを観察した後、剃刀を用いて試料から新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柁目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。また、同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

### 3 分析結果

第74表に結果を示し、各分類群の基本三断面の写真を第324～327図に示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

#### (1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 第324図上段写真No.1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管、垂直・水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急である。放射柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、いずれも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材はいずれも水湿によく耐え、広く用いられる。

#### (2) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 第324図中・下段写真No.2、3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

### 3 分析結果

#### (3) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第325図上・中段写真No.4、5

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少し、晩材部では小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道西南部、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ20m、径0.4mぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性・保存性が高く、水湿によく耐える材で、現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、ほだ木など広く用いられる。

#### (4) ブナ属 *Fagus* ブナ科 第325図下段写真No.6

小型でやや角張った道管が単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。放射組織はほぼ同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。以上の特徴からブナ属に同定される。ブナ属にはブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する落葉高木である。通常高さ20～25m、径0.6～0.7mぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬かつ肌目が緻密であるが保存性は低い。容器などに用いられる。

#### (5) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第326図上段写真No.7

中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬かつ強靱で耐湿性も高く、特に農耕具に用いられる。

#### (6) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 第326図中段写真No.8

年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁には、らせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の方形細胞の中には大きく膨らんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ20～25m、径0.6～0.7mぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

#### (7) サイカチ *Gleditsia japonica* Miq. マメ科 第326図下段写真No.9

年輪のはじめに大型の道管が単独あるいは2～3個不規則に複合して並ぶ環孔材である。道管の径は早材から晩材にかけて緩やかに減少し、孔圏部外では2～多数、団塊状に複合して散在する。孔圏の幅は広く、軸方向柔細胞は晩材部で帯状に配列する傾向を示す。道管の穿孔は単穿孔である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性放射組織型で1～10細胞幅であるが、不完全な鞘細胞を持つものが存在する。以上の特徴からサイカチに同定される。サイカチは本州、四国、九州に分布する落葉高木で、高さ15m、径1mに達する。材はやや重硬で、建築、器具などに用いられる。

#### (8) ツゲ *Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* Rehd. et Wils. ツゲ科 第327図上段写真No.10

小型でやや角張った道管がほぼ単独に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少ない。放射組織は異性放射組織型でほとんどが1～2細胞幅である。以上の特徴からツゲに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州に分布する常緑高木で、

第74表 出土木製品樹種同定結果一覧表1(平成28年度実施分)

分析番号	種類	挿固番号	番号	実測番号	調査次	地区	面	区	出土遺構	木取り	所属時期	結果(学名/和名)	
1	柱根	62	76	H16特3-15	4次	G	0・I	F-24-2	P1083	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
2	柱根	50	24	H16特3-16	4次	G	0・I	F-22-3	SA102(P1096)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
3	柱根	47	2	H16特3-17	4次	G	0・I	F-20-2	F-SB104(P1088)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
4	柱根	47	1	H16特3-18	4次	G	0・I	F-20-1	F-SB104(P1087)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
5	柱根	47	7	H16特3-19	4次	G	0・I	F-23-2	SB105(P1092)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
6	柱根	48	8	H16特3-20	4次	G	0・I	F-22-2	SB105(P1097)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
7	柱根	47	5	H16特3-21	4次	G	0・I	F-23-1	SB105(P1077)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
8	柱根	61	73	H16特3-22	4次	G	0・I	F-24-4	P1075	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
9	柱根	48	10	H16特3-23	4次	G	0・I	G-23-1	SB106(P1110)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
10	柱根	48	14	H16特3-24	4次	G	0・I	E-25-2	SB110(P1069)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
11	柱根	47	3	H16特3-25	4次	G	0・I	F-20-1	F-SB104(P1089)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
12	柱根	61	72	H16特3-26	4次	G	0・I	F-25-3	P1035	芯持ち	16c後半~17c	<i>Gleditsia japonica</i> Miq.	サイカチ
13	柱根	47	6	H16特3-27	4次	G	0・I	F-22-3	SB105(P1095)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
14	柱根	49	15	H16特3-28	4次	G	0・I	G-25-1	SB117(P1046)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
15	柱根	50	23	H16特3-29	4次	G	0・I	G-22-3	SA102(P1119)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
16	柱根	48	9	H16特3-30	4次	G	0・I	F-23-2	SB105(P1121)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
17	柱根	57	50	H16特3-31	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)取上げ②	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
18	柱根	57	49	H16特3-32	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)取上げ⑤	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
19	柱根	57	51	H16特3-33	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)取上げ②	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
20	柱根	58	52	H16特3-34	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)取上げ⑥	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
21	柱根	57	48	H16特3-35	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)取上げ①	芯持ち	16c後半~17c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
22	杭	55	37	H16特3-37	4次	G	0・I	F-22-3	SE1011 補強坑	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
23	杭	102	259	H15木-114-1	4次	G	Ⅲ-1	G-22	河跡3001(新)茶灰色砂礫	芯持ち	10c後葉以降	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
24	柱根	196	844	H16木-15	5次	G	Ⅳ	G-22-3	SA405(P4067)	芯持ち	8c~9c末	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
25	柱根	196	855	H16木-16	5次	G	Ⅳ	E-22-2	P4205	芯持ち	8c~9c末	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
26	柱根	196	858	H16木-17	5次	G	Ⅳ	E-22-2	P4223	芯持ち	8c~9c末	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
27	杭か	-	-	H16木-24	5次	G	Ⅲ-2	G-25	河跡3001(古)北肩部覆土(灰褐色砂質土)	ミカン割り	10c初頭	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
28	杭	140	618	H16木-25	5次	G	Ⅲ-2	G-25	河跡3001(古)北肩部	芯持ち	10c初頭	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
29	杭	140	616	H16木-26	5次	G	Ⅲ-2	F-E-24	河跡3001(古)最下層	芯持ち	10c初頭	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
30	杭	140	617	H16木-28	5次	G	Ⅲ-2	F-25	河跡3001(古)底杭北側	ミカン割り	10c初頭	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
31	井戸側板	198	865	H16木-34	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001西-1 内側	板目取り	8c~9c末	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
32	杭	200	880	H16木-39	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001杭4(南東隅側杭)	板目取り	8c~9c末	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
33	齋申	201	892	H16木-41	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001第5層	板目取り	8c~9c末	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
34	齋申	201	893	H16木-42	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001第5層	板目取り	8c~9c末	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
35	齋申	201	894	H16木-43	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001第5層	板目取り	8c~9c末	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
36	齋申	201	896	H16木-44	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001第5層	板目取り	8c~9c末	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
37	齋申	201	895	H16木-45	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001第5層	板目取り	8c~9c末	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
38	横櫛	201	897	H16木-46	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001第6層	板目取り	8c~9c末	<i>Buxus microphylla</i> S. et Z. var. <i>japonica</i> R. et W.	ツゲ
39	加工材	201	898	H16木-47	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001第5層	芯持ち	8c~9c末	<i>Callicarpa</i>	ムラサキシキブ属
40	錐柄	201	899	H16木-48	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001	芯持ち	8c~9c末	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
41	加工材	201	900	H16木-49	5次	G	Ⅳ	G-22-1	SE4001	芯持ち	8c~9c末	<i>Callicarpa</i>	ムラサキシキブ属
42	加工材	-	-	H17木-18	5次	G	V	E-25	耕作土(褐色腐植土)	芯持ち	古墳時代中期	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
43	加工材	238	1120	H17木-3	5次	G	V	E-25	耕作土(褐色腐植土)	ミカン割り	古墳時代中期	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
44	加工材	238	1118	H17木-4	5次	G	V	E-25	耕作土(褐色腐植土)	ミカン割り	古墳時代中期	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
45	加工材	238	1119	H17木-5	5次	G	V	E-25	耕作土(褐色腐植土)	ミカン割り	古墳時代中期	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
46	加工材	-	-	H17木-2	5次	G	Ⅵ	F-26-2	ベース・暗灰細砂	ミカン割り	弥生時代末~古墳時代前期	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
47	漆器碗	311	1300	H16木-40	5次	H	0・I	D-26-3	SK1001	横木取り	16c後半~17c	<i>Fagus</i>	ブナ属
48	柱根	311	1305	H16木-10	5次	H	0・I	D-28-1	攪乱表土層	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
49	柱根	322	1398	H16木-11	5次	H	Ⅳ	D-27-1	SB453(P4001)	芯持ち	8c~9c末	<i>Gleditsia japonica</i> Miq.	サイカチ
50	柱根	322	1396	H16木-7	5次	H	Ⅳ	C-27-2	SB451(P4017)	芯持ち	8c~9c末	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
51	柱根	322	1400	H16木-8	5次	H	Ⅳ	D-27-1	SB454(P4007)	芯持ち	8c~9c末	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
52	柱根	322	1402	H16木-9	5次	H	Ⅳ	D-27-1	P4008	芯持ち	8c~9c末	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
53	柱根	322	1399	H16木-19	5次	H	Ⅳ	D-27-1	SB453(P4009)	芯持ち	8c~9c末	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
54	柱根	322	1394	H16木-20	5次	H	Ⅳ	D-27-3	SB451(P4002)	芯持ち	8c~9c末	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
55	柱根	322	1397	H16木-22	5次	H	Ⅳ	D-27-3	SB451(P4025)	芯持ち	8c~9c末	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
56	柱根	322	1395	H16木-23	5次	H	Ⅳ	D-27-3	SB451(P4003)	芯持ち	8c~9c末	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属復雑管束亜属
57	漆皿	-	-	H16木6-2	6次	J	I	D-30	SK1003	横木取り	16c後半~17c	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
58	漆皿	-	-	H16木6-4	6次	J	I	D-30	SK1003	横木取り	16c後半~17c	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
59	箸	-	-	H16木6-6	6次	J	I	D-30	SK1003	削り出し	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
60	漆碗	-	-	H16木6-5	6次	I	I	D-32	SK1004	横木取り	16c後半~17c	<i>Acer</i>	カエデ属

### 3 分析結果

高さ10m、径0.4m程度に達する。粘りが強く耐朽性・保存性の高い材で、器具、楽器、彫刻、櫛などに用いられる。

#### (9) カエデ属 *Acer* カエデ科 第327図中段写真No.11

小型で丸い道管が主に放射方向に2～3個複合して散在する散孔材である。木繊維の壁厚の違いにより、木口面において不規則な模様が見られる。道管の穿孔は単穿孔であり、内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で1～6細胞幅である。以上の特徴からカエデ属に同定される。カエデ属にはイタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の特徴からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。カエデ属は北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性・保存性が中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

#### (10) ムラサキシキブ属 *Callicarapa* クマツヅラ科 第327図下段写真No.12

小型で丸い厚壁の道管が単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互壁孔は極めて小型で密である。放射組織は単列部が長い異性放射組織型で、1～3細胞幅である。以上の特徴からムラサキシキブ属に同定される。ムラサキシキブ属には、ヤブムラサキ、ムラサキシキブなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉ないし常緑の低木から小高木である。材は硬く、器具材、箸、木釘などに用いられる。

## 4 所 見

平成28年度に実施した同定の結果、マツ属複維管束亜属27点、クリ15点、スギ8点、ケヤキ2点、サイカチ2点、ムラサキシキブ属2点、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属、ツゲ、カエデ属が各1点であった。

器種別に見ると、柱根33点ではマツ属複維管束亜属22点で最も多く、次いでクリ9点、サイカチ2点であり、杭(杭かを含む)7点ではクリ5点、マツ属複維管束亜属1点、スギ1点であった。また、斎串5点、井戸側板1点、箸1点はいずれもスギであった。加工材7点ではマツ属複維管束亜属4点、コナラ属アカガシ亜属1点、ムラサキシキブ属2点であった。錐柄ではクリ1点であった。漆皿2点はいずれもケヤキで、漆器椀1点はブナ属、漆器椀1点はカエデ属であった。横櫛1点はツゲであった。

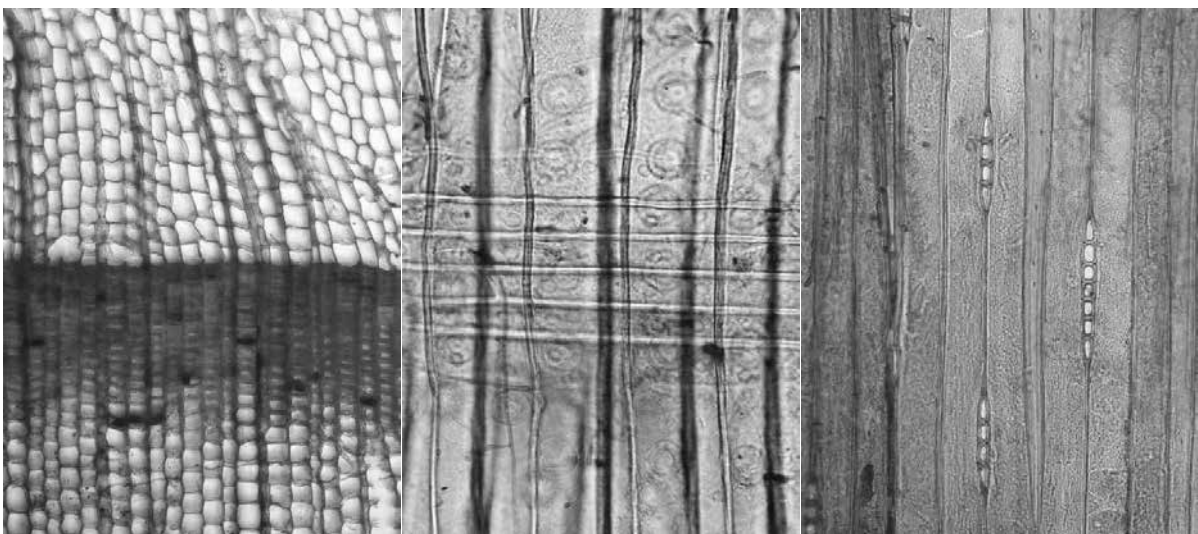
最も多いマツ属複維管束亜属は柱根、杭、加工材に使われている。マツ属複維管束亜属は針葉樹の中では重硬な材で、水湿にもよく耐え腐りにくく、土木材や建築材などに適している。次いで多いクリは柱根、杭(杭の可能性をもつ個体を含む)、錐柄に使われている。クリは重硬で耐朽性・保存性が極めて高く、水湿によく耐える材であり、建築材や土木材に適している。スギは斎串、井戸側板、杭、箸に使われている。スギは木理通直で加工工作が容易なうえ、大きな材がとれる良材であり、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。コナラ属アカガシ亜属は加工材に使われている。コナラ属アカガシ亜属は重硬かつ強靱な材で、弥生時代以降、西南日本では主に農耕土木具に多用されている。ケヤキ、ブナ属、カエデ属は椀や皿の漆器に使われている。ケヤキ、ブナ属、カエデ属はいずれも概して重硬な材である。古墳時代末以降、北陸地方ではケヤキやブナ属は椀や皿などの挽物容器によく用いられるが、カエデ属の利用は少ない。なお、ケヤキ、ブナ属、カエデ属の漆器椀は石川県鳳珠郡穴水町白山橋遺跡(鎌倉時代～江戸時代初期)からも出土している。サイカチは柱根に使われている。サイカチはやや重硬で切削加工はやや困難であるが、耐朽性が高く割裂しにくい材であり、建築材や土木材に用いられる。なお、石川県では本遺跡(古墳時代末～平安時代初頭)や、羽咋郡志賀町館開野開遺跡(室町時代前半)からサイカチの柱材が出土している。ツゲは櫛に使われて



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No. 1. マツ属複維管束亜属 番号20 柱根 4次 番号52 (H16特3-34) G地区0・I面 E-26区SK1003 (SE1013) 取上げ◎



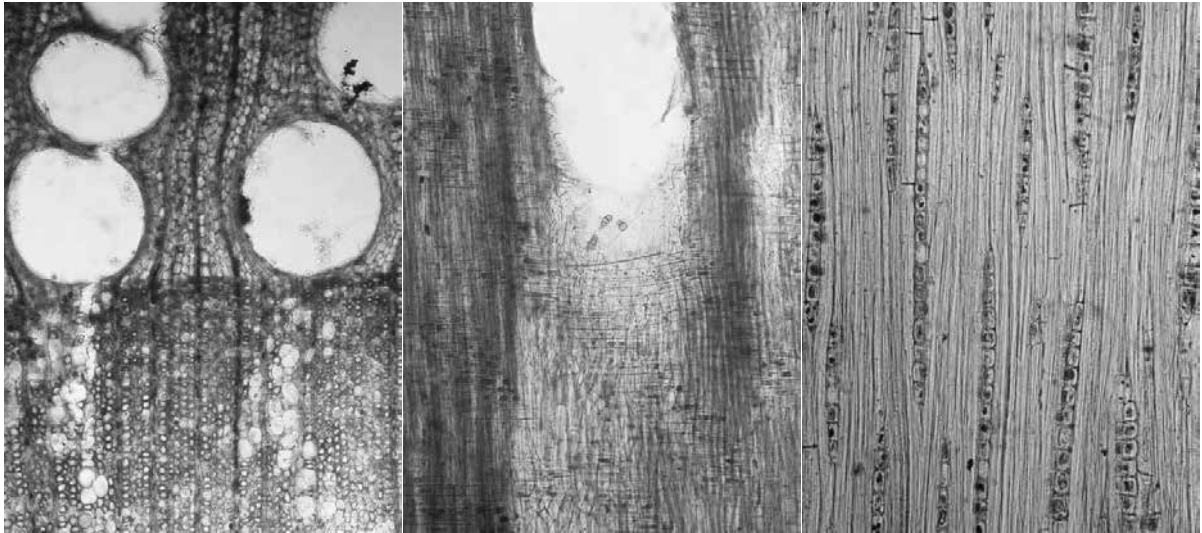
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No. 2. スギ 番号31 井戸側板 番号865 (H16木-34) G地区IV面G-22-1区 SE4001西-1



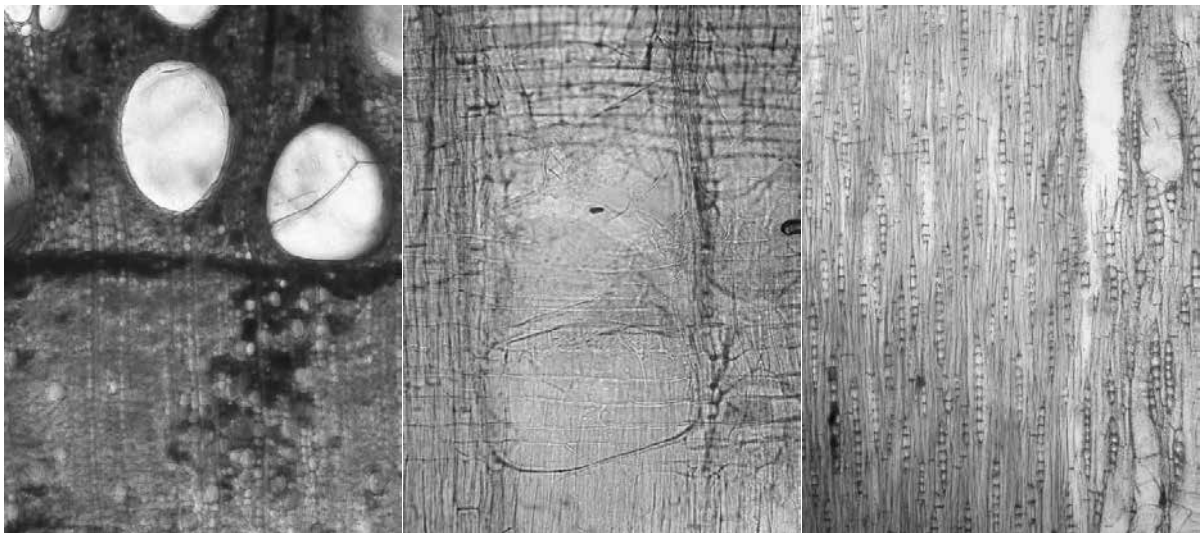
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No. 3. スギ 番号32 杭 番号880 (H16木-39) G地区IV面G-22-1区 SE4001杭4

第324図 出土木製品樹種同定分析木材写真1

4 所見



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No. 4. クリ 番号22 杭 番号37(H16特3-37) G地区0・I面G-23区 SE1011 補強杭



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No. 5. クリ 番号26 柱根 番号858(H16木-17) G地区IV面E-22-4区 P4223



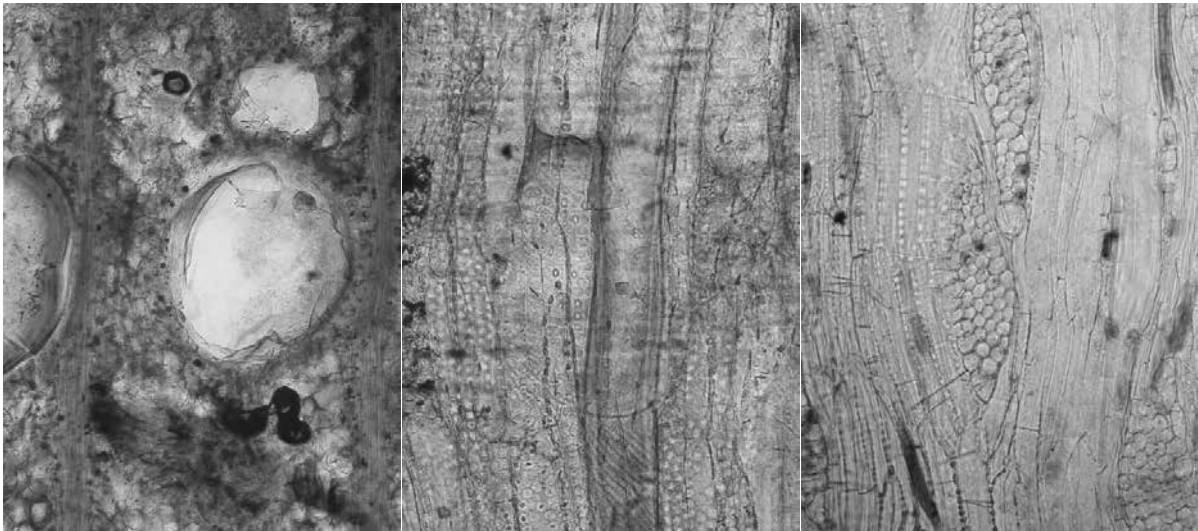
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No. 6. ブナ属 番号47 漆器椀 番号1300(H16木-40) H地区0・I面 SK1001

第325図 出土木製品樹種同定分析木材写真2





横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No.7. コナラ属アカガシ亜属 番号46 加工材 実測番号H17木-2 G地区IV面F-26-2区 ベース(暗灰細砂)



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No.8. ケヤキ 番号57 漆皿 実測番号H16-木6-2 6次J地区I面D-30区 SK1003



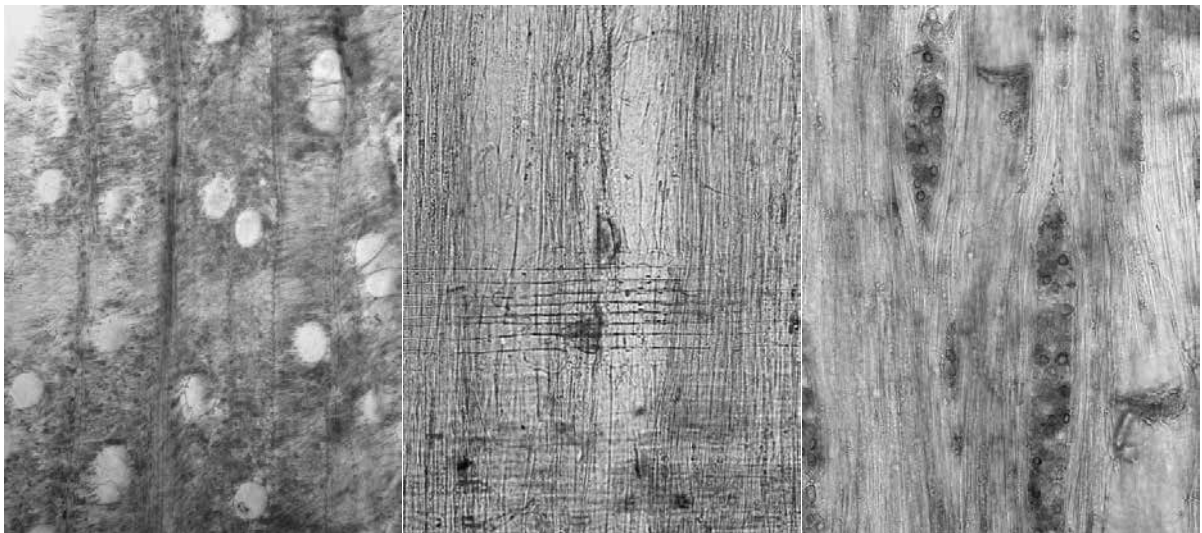
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No.9. サイカチ 番号12 柱根 番号61(H16特3-26) G地区0・I面F-25-3区 P1035

第326図 出土木製品樹種同定分析木材写真3

4 所見



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No.10. ツゲ 番号38 横櫛 番号897 (H16木-46) G地区IV面G-22-1区 SE4001第6層



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No.11. カエデ属 番号60 漆椀 実測番号H16木6-5 6次I地区 I面D-32-3区 SK1004



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 写真No.12. ムラサキシキブ属 番号39 加工材 番号898 (H16木-47) G地区IV面G-22-1区 SE4001第5層

第327図 出土木製品樹種同定分析木材写真4

第75表 出土木製品樹種同定結果一覧表2(平成17年度実施分)

分析番号	種類	挿図番号	番号	実測番号	調査次	地区	面	区	出土遺構	木取り	所属時期	結果(学名/和名)
51	桶	71	172	H15木51	4次	G	0・I	F-21-3	包含層(耕作土直下)	柃目	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
71	柱根	49	21	H15木71	4次	G	0・I	F-22-3	SA101(P1094)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
72	柱根	50	27	H15木72	4次	G	0・I	E-25-2	SA105(P1041)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
73	柱根	58	56	H15木73	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Zelkova serrata</i> Makino ケヤキ
85	柱根	50	26	H15木85	4次	G	0・I	E-25-2	SA105(P1040)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
94	杭	49	18	H15木94	4次	G	0・I	F-26-1	SB120(P1051)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
102	杭か	50	25	H15木102	4次	G	0・I	F-23-1	SA104(P1076)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
103	加工材	49	17	H15木103	4次	G	0・I	F-26	SB120(P1028)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
104	杭	57	45	H15木104	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)取上げ④	分割材	16c後半~17c	<i>Quercus</i> subgen. <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ節
105	杭	57	46	H15木105	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
106	柱根	49	19	H15木106	4次	G	0・I	F-26-1	SB120(P1051)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
107	柱根	49	16	H15木107	4次	G	0・I	F-25-2	SB117(P1048)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Quercus</i> subgen. <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ節
109	曲物底板	55	35	H15木109	4次	G	0・I	F-22-3	SE1009	柃目	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
112	柱根	49	22	H15木112	4次	G	0・I	F-23-1	SA101(P1107)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
113	柱根	58	53	H15木113	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)取上げ	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
114	杭	102	260	H15木114	4次	G	Ⅲ-1	G-22	河跡3001(新)茶灰色砂礫	半裁	10c後葉以降	<i>Quercus</i> subgen. <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ節
115	柱根	57	47	H15木115	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)取上げ②	分割材(半裁)	16c後半~17c	<i>Ulmus</i> ニレ属
116	柱根	55	30	H15木116	4次	G	0・I	E-25-2	SE1002(埋土礫の間)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Ulmus</i> ニレ属
117	杭	62	82	H15木117	4次	G	0・I	G-23-2	P1122	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
118	柱根	48	13	H15木118	4次	G	0・I	F-23-2	SB106(P1113)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
119	柱根か	58	55	H15木119	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
120	杭	102	261	H15木120	4次	G	Ⅲ-1	G-22	河跡3001(新)茶灰色砂礫	芯持ち	10c初頭頃か	<i>Juglans mandshurica</i> Maxim. subsp. <i>Sieboldiana</i> (Maxim.) Kitamura オニグルミ
122	杭	55	38	H15木122	4次	G	0・I	G-23-1	SE1011	分割材	16c後半~17c	<i>Quercus</i> subgen. <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ節
124	曲物側板	55	36	H15木124	4次	G	0・I	F-22-3	SE1009	板目	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
125	漆器椀	61	67	H15木125	4次	G	0・I	F-24-4	P1050	横木取り	16c後半~17c	<i>Zelkova serrata</i> Makino ケヤキ
126	柱根	49	20	H15木126	4次	G	0・I	F-27-1	SB120(P1301)	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
127	柱根	62	81	H15木127	4次	G	0・I	F-26-1	P1300	芯持ち	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
128	部材	58	54	H15木128	4次	G	0・I	E-26	SK1003(SE1013)取上げ⑥	分割材	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
129	加工材	61	71	H15木129	4次	G	0・I	E-26-3	P1034	板目か	16c後半~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
130	柱根	62	80	H15木130	4次	G	0・I	F-26-1	P1300	分割材	16c後半~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ

第76表 G・H地区出土木製品樹種同定結果一覧表

種別	樹種	第VI-1面	第V面	第IV面	第Ⅲ-1面	第0・I面
		弥生後期~古墳前期	古墳中期	8~9c末	10c中葉頃	16c後半~17c
柱根	針葉樹	スギ				3
		マツ属複雑管束亜属			4	18
	広葉樹	クリ			6	14
		ケヤキ				1
		コナラ節				1
		サイカチ			1	1
ニレ属					2	
加工材	針葉樹	スギ		井戸側材	1	3
	マツ属複雑管束亜属		4			
	広葉樹	コナラ属アカガシ亜属	1			
		ムラサキシキブ属		2		
杭	針葉樹	スギ			1	1
		マツ属複雑管束亜属			1	
		オニグルミ				1
		クリ			3	1
		コナラ節				1
曲物	針葉樹	スギ				2
桶	針葉樹	スギ				1
漆器椀	広葉樹	ケヤキ				1
	広葉樹	ブナ属				1
横櫛	広葉樹	ツゲ		1		
錐柄	広葉樹	クリ		1		
斎串	針葉樹	スギ				5
計			1	4	25	3
						50

#### 4 所見

いる。ツゲは重硬かつ緻密なうえ、狂いが少ない材であり、現在でも櫛に用いられる。ムラサキシキブ属は加工材に使われている。ムラサキシキブ属は重硬かつ緻密な材である。

以上から、同定した柱根、杭、加工材などには、概して重硬で耐朽性・保存性が高いマツ属複雑管束亜属やクリが多用されているほか、数は少ないが柱根にはやや重硬で耐朽性が高いサイカチが使われている。また、斎串、側板、杭、箸には木理通直で加工工作が容易なスギが使われ、椀や皿の漆器、横櫛、錐柄にはいずれも概して重硬な広葉樹が使われている。本遺跡で同定された樹種はいずれも温帯に分布するものばかりであり、当時の遺跡周辺か周辺地域から流通によってもたらされたと考えられる。

#### 〈参考文献〉

- 伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社,449p.
- 佐伯浩・原田浩 1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版,p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩 1985「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版,p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣,296p.
- パリノ・サーヴェイ 2005「館開野開遺跡の自然科学分析」『志賀町館開野開遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター ,p.103-114.
- 松田隆嗣 1987「西川島遺跡群より出土した木製遺物の樹種について」『西川島 能登における中世村落の発掘調査』穴水町教育委員会,p.662-670.
- 光谷拓実 1989「木製品」『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第46冊,奈良国立文化財研究所,p.111-119.
- 三村昌史 2006「1・2次調査出土木製品の樹種同定」『羽咋市四柳白山下遺跡Ⅱ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター ,p.182-198.
- 山田昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史－」『植生史研究特別第1号』植生史研究会,242p.

# 第7章 総括

## 第1節 G地区第Ⅲ面の存続年代について

G地区第Ⅲ-1・2面は、ベース土を土石流災害3(河跡3001(古))で堆積した土砂層、また直上の被覆土が土石流災害2(河跡3001(新))で堆積した土砂層となる生活面であり、主に耕作地(第Ⅲ-1面:畠地、第Ⅲ-2面:水田・畠地)に利用されるため、第Ⅳ面に伴う須恵器、土師器を除けば、出土遺物は限られる。そのため、南接するF地区第Ⅲ面出土遺物を含めて、その存続年代を整理したい。

G地区の出土遺物(第328図)については、第Ⅳ面がⅥ<sub>2</sub>期を下限とし、第1次以降の第Ⅳ面調査でも施釉陶器は共伴しない。G地区第Ⅲ-2面は、内黒調整のロクロ土師器埴類と須恵器坏類の様相が、中能登町武部ショウブダ遺跡5号土坑出土遺物<sup>(30)</sup>と並行する部分が多いことからⅥ<sub>3</sub>期に位置付けられる。また、第Ⅲ-1面は、須恵器坏類の欠落や内黒調整のロクロ土師器埴類比率の減少、ロクロ土師器有台埴に足高高台が定量認められる様相から、Ⅶ<sub>1</sub>期に下る要素をもつ。

南接するF地区第Ⅲ面は、G地区と同様の土層堆積を示し、G地区第Ⅲ-2面に対応する下層が側柱構造の掘立柱建物を主屋とする建物域に、G地区第Ⅲ-1面と連続する上層は条里地割りを想起させる畠地に利用される。F地区第Ⅲ面出土の須恵器、土師器は、SD294出土の内黒のロクロ土師器(報告書Ⅳ第266図480、Ⅶ<sub>2(古)</sub>期)以外は、前述のG地区と同じ様相を示し、搬入品として白磁碗Ⅰ類1点、緑釉陶器埴2点、灰釉陶器埴6点、皿6点、瓶1点が出土する。緑釉陶器205は淡灰色を呈する須恵質の胎土に淡オリーブ灰色の釉を薄くロクロ掛けする特徴をもち、摩滅した軟陶の平高台の埴25とともに京都産と考えられ、灰釉陶器より古く位置付けられる。灰釉陶器は、淡灰色を呈する胎土から東濃産と考えられ、体部外面下半に丁寧な回転ケズリ調整を施す点、内外面とも釉をツケ掛けする点、焼成時の直接重ね焼き痕を残す点で共通し、小埴723、皿726は台部の貼り付けが若干雑である。灰釉陶器は、おおむね斎藤孝正氏のK-90並行期後葉～0-53並行期前半(光ヶ丘1号窯式後半期～大原2号窯式前半期)の様相を示し、畿内の編年観では10世紀前後～中葉の暦年代が与えられる<sup>(31)</sup>。

磁器、施釉陶器の搬入・所有に関しては、能登国衙を介した在地有力者層の二次的入手・再分配や、荘園・市を介した中央からの直接入手等、様々な状況が想定可能である。また、廃棄の様相に関しても、施釉陶器・在地土器とも複数の型式が混在しながら出土する様相が指摘されている<sup>(32)</sup>。在地の土器とは異なる、磁器・施釉陶器の入手・使用～廃棄のサイクル期間という、大きな課題を残すものの、F地区第Ⅲ-2面の建物域に伴う可能性が高い搬入品を根拠として、Ⅵ<sub>3</sub>期～Ⅶ<sub>1</sub>期初め頃に位置付けた第Ⅲ-2面に10世紀前葉を中心とし、10世紀中頃を下限とする暦年代観を設定したいと考える(第77表)。

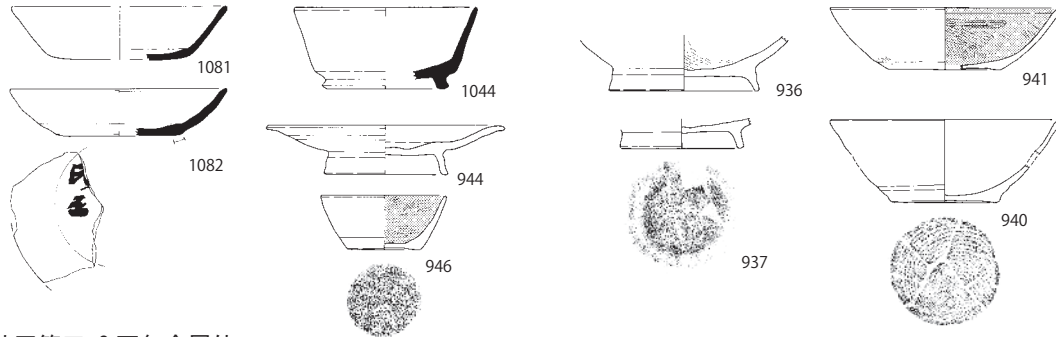
第77表 加賀・能登の在地形式の編年と暦年代対比表

暦年代	田嶋 明人 (2012)	出越 茂和 (1997a・b)	望月 精司 (2008・10)
750	Ⅲ期 (新)		4A期 (Ⅲ期新～Ⅳ <sub>1</sub> 期(古))
	Ⅳ <sub>1</sub> 期	上荒屋1期 (Ⅳ <sub>1</sub> 古期)	4B期 (Ⅳ <sub>2</sub> 期(古))
800	Ⅳ <sub>2</sub> 期(古)	上荒屋2期 (Ⅳ <sub>2</sub> 期(古))	5A期 (Ⅳ <sub>2</sub> 期(新))
	Ⅳ <sub>2</sub> 期(新)	上荒屋3期 (Ⅳ <sub>2</sub> 期(新))	5B期 (Ⅴ <sub>1</sub> 期)
850	Ⅴ <sub>1</sub> 期	I-1期 (Ⅴ <sub>1</sub> 期)	5C期 (Ⅴ <sub>2</sub> 期)
	Ⅴ <sub>2</sub> 期	I-2・3期 (Ⅴ <sub>2</sub> 期)	6A期 (Ⅵ <sub>1</sub> 期)
900	Ⅵ <sub>1</sub> 期	I-3・4期 (Ⅵ <sub>1</sub> 期)	6B期 (Ⅵ <sub>2</sub> 期)
	Ⅵ <sub>2</sub> 期	Ⅱ-1期 (Ⅵ <sub>2</sub> 期)	
950	Ⅵ <sub>3</sub> 期	Ⅱ-2古期 (Ⅶ <sub>1</sub> 期)	6C期 (Ⅵ <sub>3</sub> 期)
	Ⅶ <sub>1</sub> 期	Ⅱ-2新・3期 (Ⅶ <sub>2</sub> 期(古))	7A期 (Ⅶ <sub>1</sub> 期)
1000	Ⅶ <sub>2</sub> 期(古)		7B期 (Ⅶ <sub>2</sub> 期(古))
	Ⅶ <sub>2</sub> 期(新)	Ⅲ-1・2期 (Ⅶ <sub>2</sub> 期(新))	7C期 (Ⅶ <sub>2</sub> 期(新))
1050	中世Ⅰ-1期	Ⅳ-1期 (中世Ⅰ-1期)	8A期 (中世Ⅰ-1期)
			8B

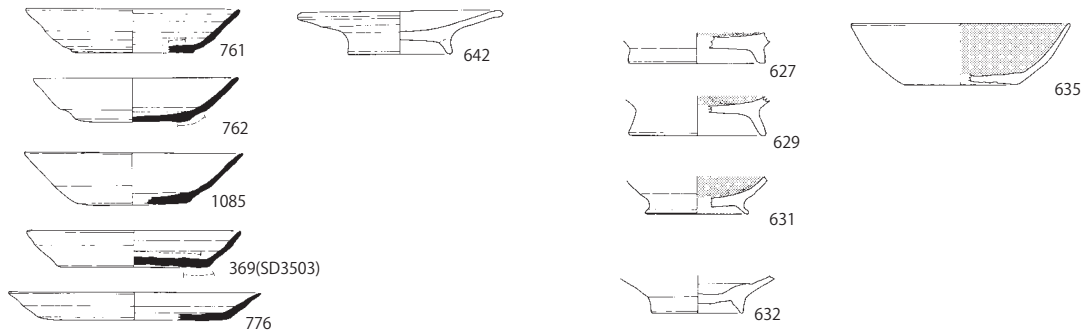
(白山市教委 2013より作成)

なお、第2節で詳述するが、旧邑知湯周辺では、おおむねVI<sub>3</sub>期以降、数点～20点程度の施釉陶器が出土する新たな集落遺跡が増加する。これらの集落遺跡の多くの部分は、名田経営をおこなう「富豪」、「田堵」、「負名」といわれた新たな富裕百姓層の屋敷地と考え、F地区第Ⅲ面下層も類するものであろう。

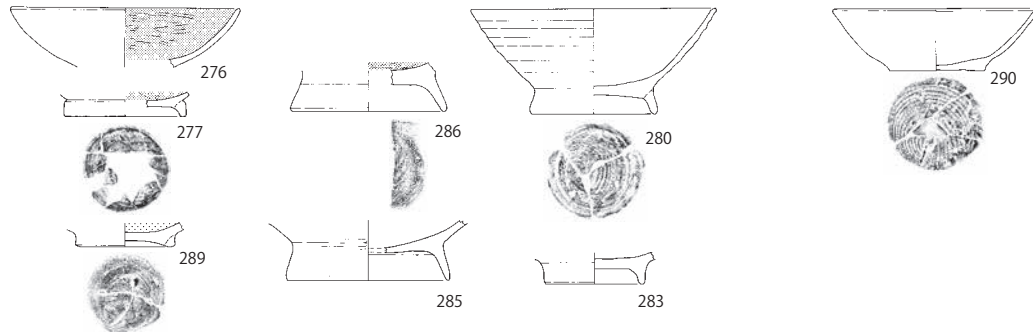
G地区第Ⅳ面



G地区第Ⅲ-2面包含層他

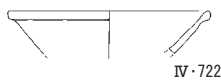


G地区第Ⅲ-1面上層包含層

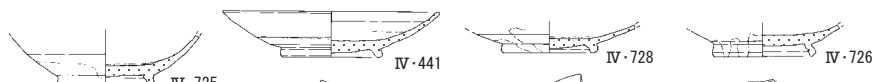


F地区第Ⅲ面

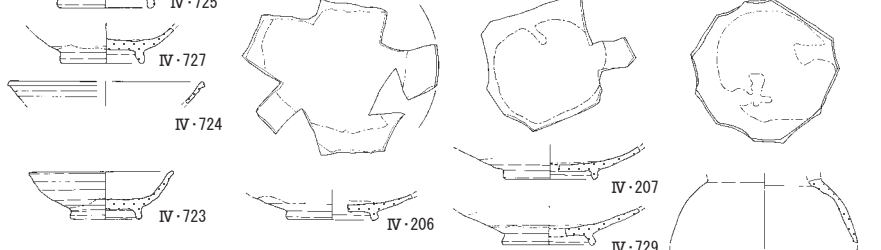
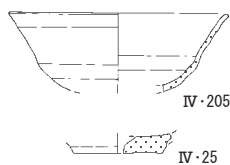
白磁碗(Ⅰ類)



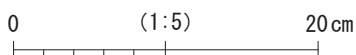
灰釉陶器



緑釉陶器



G地区第0・Ⅰ面



第328図 F・G地区 第Ⅲ・Ⅳ面出土土器実測図(S=1/5)

## 第2節 G・H地区の変遷

G・H地区は、本遺跡の立地する小規模な合成扇状地形の中心線付近にあたる。G地区中央付近を土石流災害の本流の一つ(通常は水無川か)が横断することや、扇状地形が北側の傾斜に転ずることに起因して、土砂の堆積作用が顕著であり、第1～7次調査の中で最も多い調査面(生活面)を確認した調査区となる。G地区でみれば、土層断面模式図(第329図)を示したとおり、最下層の第Ⅶ-2面(縄文時代中期～後期前葉)から最上層の第0・Ⅰ面(16世紀後半～17世紀代)まで合計10面の調査面(生活面)と、その間に発生し、集落、耕作地の盛衰に多大な影響を及ぼした、8回の土石流災害痕跡を確認したこととなる。最下層の調査面(生活面)から調査着手前の水田面までの堆積層の厚さは約4mに達する。さらにG地区第Ⅵ-3面、第Ⅴ面、第Ⅳ面～第Ⅲ-Ⅰ面や第0・Ⅰ面では、各調査面(生活面)における遺構の変遷(小期)を、第5章各節で復元している。なお、G地区第Ⅲ-2面、第Ⅵ-2面、第Ⅶ-1面の3つの生活面と、第Ⅶ-1面、第Ⅵ-2面の間で発生した小規模な土石流災害痕(第Ⅵ-3面：土石流災害7)は新たに確認したものとなる。他、H地区は調査区面積の制約から、最上層の第0・Ⅰ面～第Ⅳ面までの調査にとどめている。

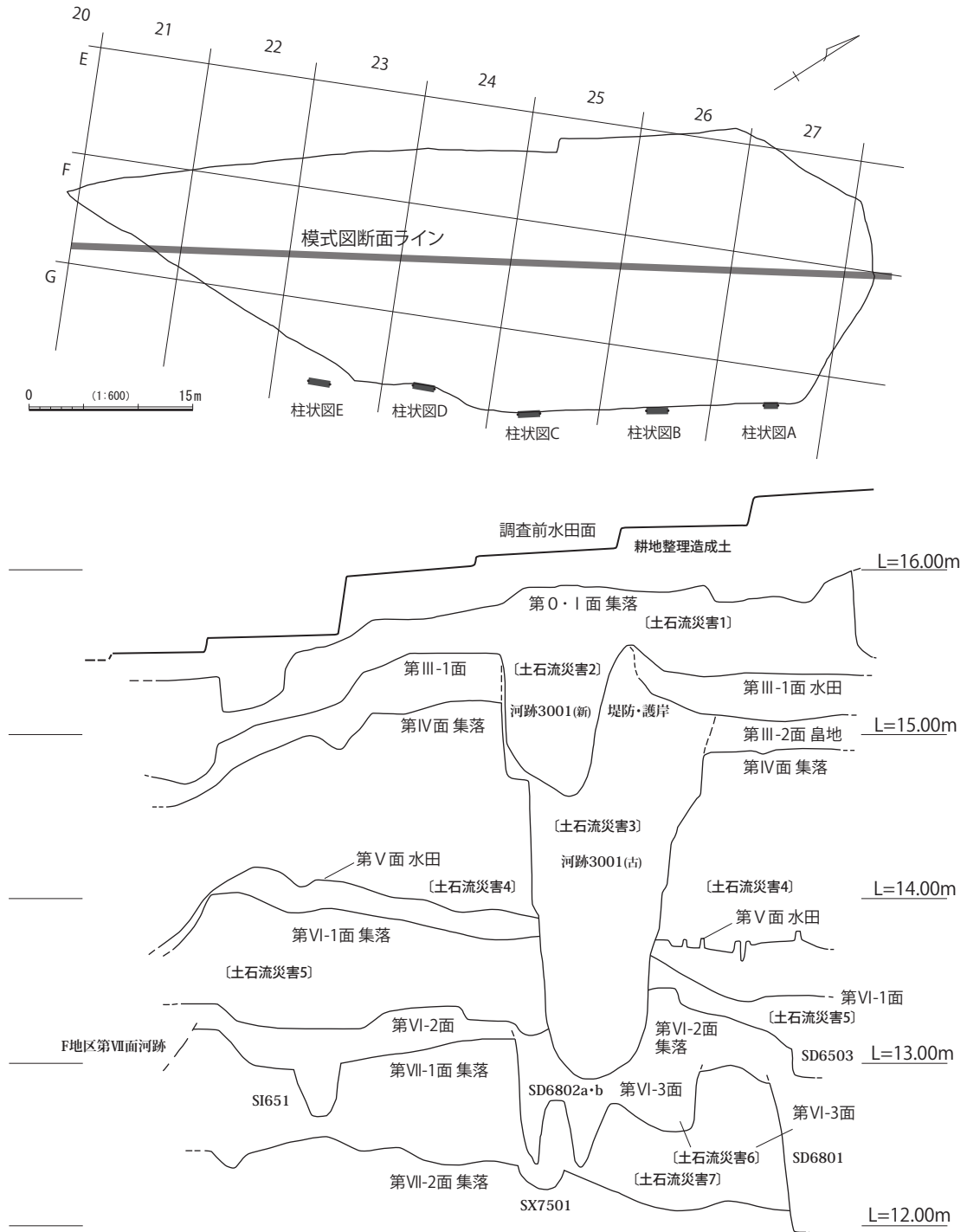
以下では、第3～5章と重複する部分もあるが、南側のC・D・F地区の調査成果を交えて、最下層の第Ⅶ-2面から順に、G・H地区の調査面(生活面)、遺構の変遷を整理する。

**第Ⅶ-2面** G地区で検出した縄文時代中期～後期前葉を中心とする生活面であり、主な遺構は土坑2基、ピット等に限られ、集落域でも縁辺の様相を呈する(第330図)。また、遺物包含層から前期中葉(朝日C式)、中期前葉(新保式～新崎式)、後期前葉(前田式～気屋式)、後期中葉(酒見式)の土器片が出土している。これらの遺物は、遺物包含層の厚さを加味すれば、比較的安定的な緩斜面に、長い期間をかけて調査区外東側の集落中心域から、土砂とともに流入・堆積したものと考えられる。この中には、小規模な土石流災害が含まれ、G地区SK7501(時期不明)や、南接するD・F地区第Ⅶ面調査でその一端をみる事ができる。D・F地区第Ⅶ面では、中期中葉～後葉(古府式後半～串田新式)に営まれた石組炉をもつ竪穴建物2棟(2101・02号竪穴建物)、ピット、溝状遺構の他、後期前葉～中葉(気屋式～酒見式)の鞍部(西端落込み)等を確認している。うち2102号竪穴建物は、廃絶後に土砂で自然に埋没した後、一度に流入した土砂層がレンズ状に堆積し、中期後葉頃に小規模な土石流災害の発生が想定できる。

また、第5章第10節で述べたとおり(第306図、第67表)、扇状地上のD・F・G地区で検出した縄文時代中期前葉～後葉および後期前葉の集落域は、本遺跡東側の舌状台地に立地する四柳貝塚(シジミの淡水貝塚を確認)や四柳中の堂遺跡と密接な関係をもちながら盛衰しており、全体の活動範囲はかなり広範に及ぶ。さらに、第67表でみる限り、後期中葉以降は扇状地上に集落域の中心域が移動した可能性を指摘可能であろう。また、G地区では少量だが、前期中葉の土器片が出土しており、当該期にも調査区外東側で集落が営まれた可能性が高い。このように縄文時代前期中葉から後期末葉まで、調査区外東側の舌状台地～扇状地上で継的に集落が営まれ、その活動範囲は現在把握される埋蔵文化財包蔵地よりも大きく拡がる事が予想できる。

**第Ⅶ-1面** G地区南半で検出した縄文時代晩期後半～末(下野式～長竹式)の集落域で、調査区北半は弥生時代中期中葉に相次いだ3条の土石流災害6(第Ⅵ-3面、SD6801・02)により損壊する(第330図)。調査の結果、竪穴状遺構1基(SI701)、溝、ピット多数を検出し、ピットの一部は円形建物柱穴の可能性を指摘できる(SB701～703)。6本主柱を復元したSI701(第294図)は、崩れた隅丸方形の平面プランをもち、北西辺には竪穴部の規模を縮小した痕跡が残る。竪穴部の規模は、北東－南西方向約510cm、南東－北西方向が約390～400cm(当初約510cm)、平面積約20㎡(当初約26㎡)を測る。床面には

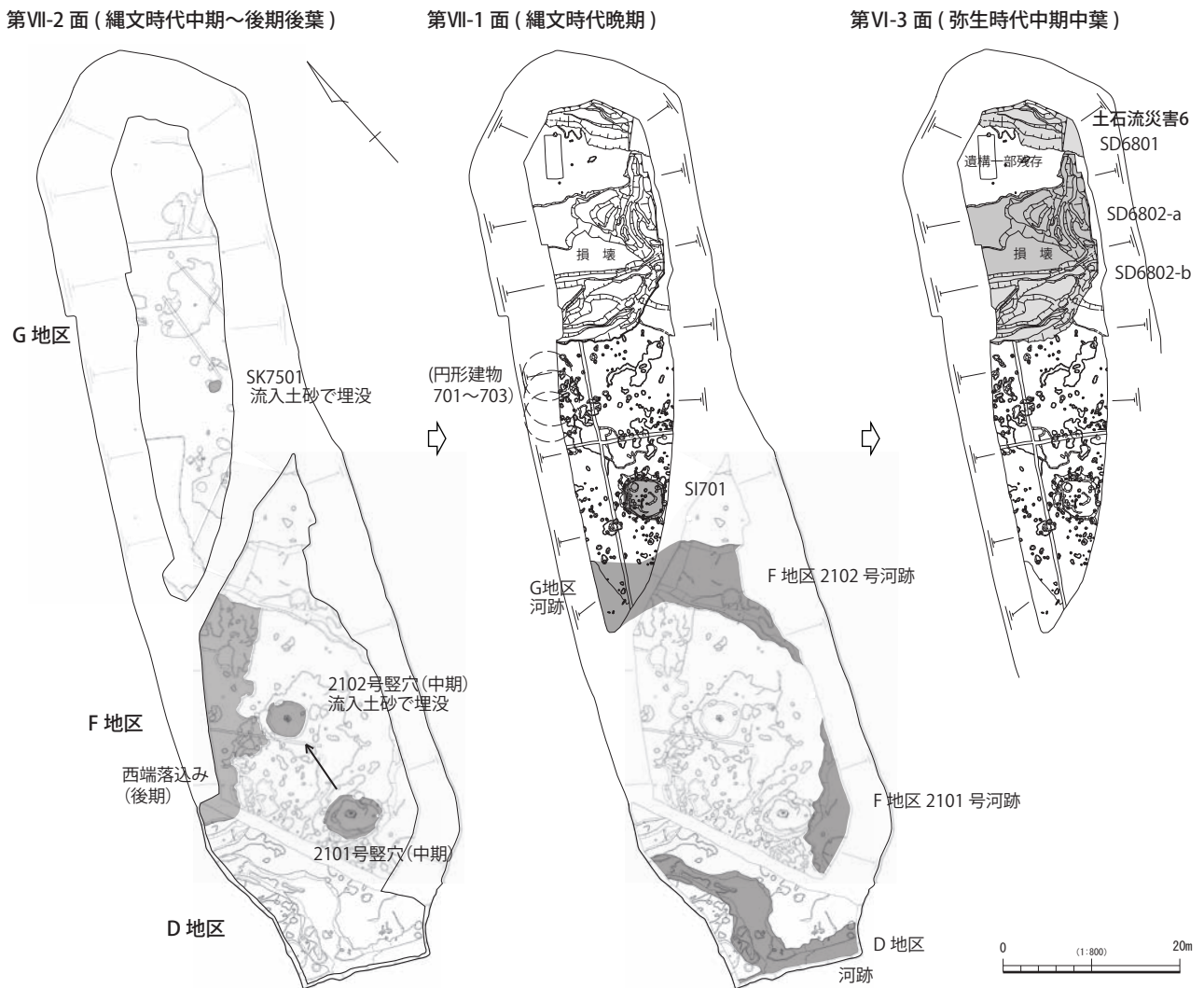
第2節 G・H地区の変遷



第329図 G地区調査面模式図 (S=1/600)

顕著な硬化面や炉跡・焼土面を確認できないものの、平面略方形を呈する大形土坑(SK7005)の存在から、縄文時代晩期末の短期間で廃絶した建物と考えたい。また、E・F-22・23区のピットの一部分について、全主柱穴配置が未確認で、かつ柱の沈降痕跡や出土遺物をみないものの、円形建物701～703として復元案を図示した(第295図)。SB701(8本主柱)が柱で囲まれた空間の直径5.76m(床面積約26㎡)を、SB702(10本主柱)が柱で囲まれた空間の直径6.30m(床面積約31㎡)を、SB703(8本主柱)が柱で囲まれた空間の直径5.60m(床面積約26㎡)をそれぞれ測り、県内の円形建物でも小型の部類に属する。G地区第VII-1面で営まれた集落域は、南接するF地区第VII面では不鮮明であり、後述する数条の土石流痕跡からも、弥生時代前期(柴山出村式併行)を含めた集落域の中心は調査区外東側にあると考えられる。また、並行期の集落として、北側の四柳ミッコ遺跡B区Ⅲ面・D区Ⅱ面下層で晩期末(長竹式後半)





第330図 C・D・F～H地区変遷図1(S=1/800)

の円形建物10棟以上(6棟が8本主柱・直径5.7～8m、4棟が10本主柱・直径7.6～8.4m)、方形建物2棟以上を、小金森ヘイナイメB遺跡で土器棺墓を、曾祢C遺跡で円形建物をそれぞれ確認しており、県内他地域と同様に低地に向けた集落形成の活発化がうかがえる。なお、G地区F-21区南端河跡から縄文時代晩期後葉(下野式)の土器片が、D地区河跡(幅1.8～5m、深さ約0.7m)とF地区第VII面2101号河跡・2102河跡(幅7.5～8.3m、深さ約1.5m)から晩期後半～弥生時代前期(中屋式～柴山出村式)の土器片が、それぞれ出土する(第330図)。いずれの流路も石・砂利等が一度に堆積した砂礫層を覆土としており、調査区外東側に中心域をもつ第VII-1面の集落域は、数次の自然災害を被ったと推定できる。

**第VI-3面(土石流災害6)** G地区北半で初めて検出した第VI-3面の変遷(第330図)は、集落存続期(a小期)と3条の土石流災害(土石流災害6)に伴う集落廃絶期(b小期)に大別でき、いずれからも弥生時代中期中葉(八日市地方遺跡8期)を下限とした土器が出土する。集落存続期の様相は、b小期の大きな損壊もあり、数基のピットを確認した程度で、詳細は不明である。おそらく調査区外北東側及び南東側にも集落域が展開、中でも南東側に中心域をもつものと推定できる。また、第VI-2面との関係から、中期中葉でも後葉に近い時期に営まれた集落と考えられる。

b小期とした土石流災害6は、砂利・礫・石(10～30cm大)層を基本覆土とする。土石流災害は、幅約25mにわたりa小期の集落域を浸食、土層の切り合い関係からSD6802-a(幅8.2～12m、深さ0.7～1m弱)→SD6802-b(幅3～8m、深さ0.5m弱～0.8m)→SD6801(幅3～4m、深さ1m弱～1.3m強)の順に発生する。

SD6802-bからは、東海系の細頸壺(第293図1289)等の土器片が出土した。

**第VI-2面** 一連の調査で初めて検出した弥生時代中期後葉の生活面である(第331図)。土石流災害6の流入・堆積土をベース面としており、土石流災害6の被害を免れた第VI-1面a小期集落を母体に再興した遺構群と考えられる。遺構群は、調査区北側に偏在しており、周溝をもつ建物1棟(SI651)、土坑、溝、ピット多数等を検出した他、数棟の建物が存在した可能性をもつ(第279図)。SI651外周溝を主体に出土した弥生土器は、加賀地域でいえば小松市八日市地方遺跡8・9期、金沢市磯部運動公園遺跡出土土器群と、周辺地域でいえば羽咋市長者川遺跡平成15年度調査SD03出土土器群や中能登町曾祢C遺跡A区自然河道出土土器群と、並行する部分が多いと考えられる。また、SI651を中心に志賀町富来周辺を産地とする黒色ガラス質安山岩の剥片が多く出土し、活発な石器製作を行う。

周溝をもつ建物SI651は、調査区北隅の弧状の土坑・溝群の連なりを外周溝として復元した建物で、調査区外北西側にのびる。外周溝南東辺は4回の掘り直しが認められ、壁周溝のない竪穴部(SK6504)は支柱穴が特定できなかった。復元した建物規模は、外周溝外径約12m、内径約8.6m、竪穴部径6.7m前後、外周溝内径と竪穴部との間の幅1～1.6mとなる。連結土坑群で構成される外周溝をもつ竪穴系建物は、平地系建物の影響を受けたあり方を示すものといえよう。

また、G地区第VI-3面a小期～第VI-2面に営まれた集落を、旧邑知湯周辺の集落遺跡の分布・消長との対比で位置付けた場合、第4章第8節のとおり、弥生時代中期前半(おおむね中期中葉)に生業空間の基盤が成立した主要グループの一つとなる。その中で、弥生時代後期前半までは、旧邑知湯南縁の吉崎・次場遺跡、東的場タケノハナ遺跡を核とする単位集団が集落規模、内容とも一貫して卓越した存在であり続けており、本遺跡は「衛星的」集落の一つと位置付け可能となろう。なお、弥生時代中期前半に広い範囲で同時期的に成立をみた主要グループの生業空間の基盤は、その後の集落遺跡数の増減や、弥生時代後期後半に顕在化するグループ間の政治的・経済的関係の変化とは、あまり相関関係を示しておらず、古墳時代以降も基本的に踏襲されたものと考えられる。

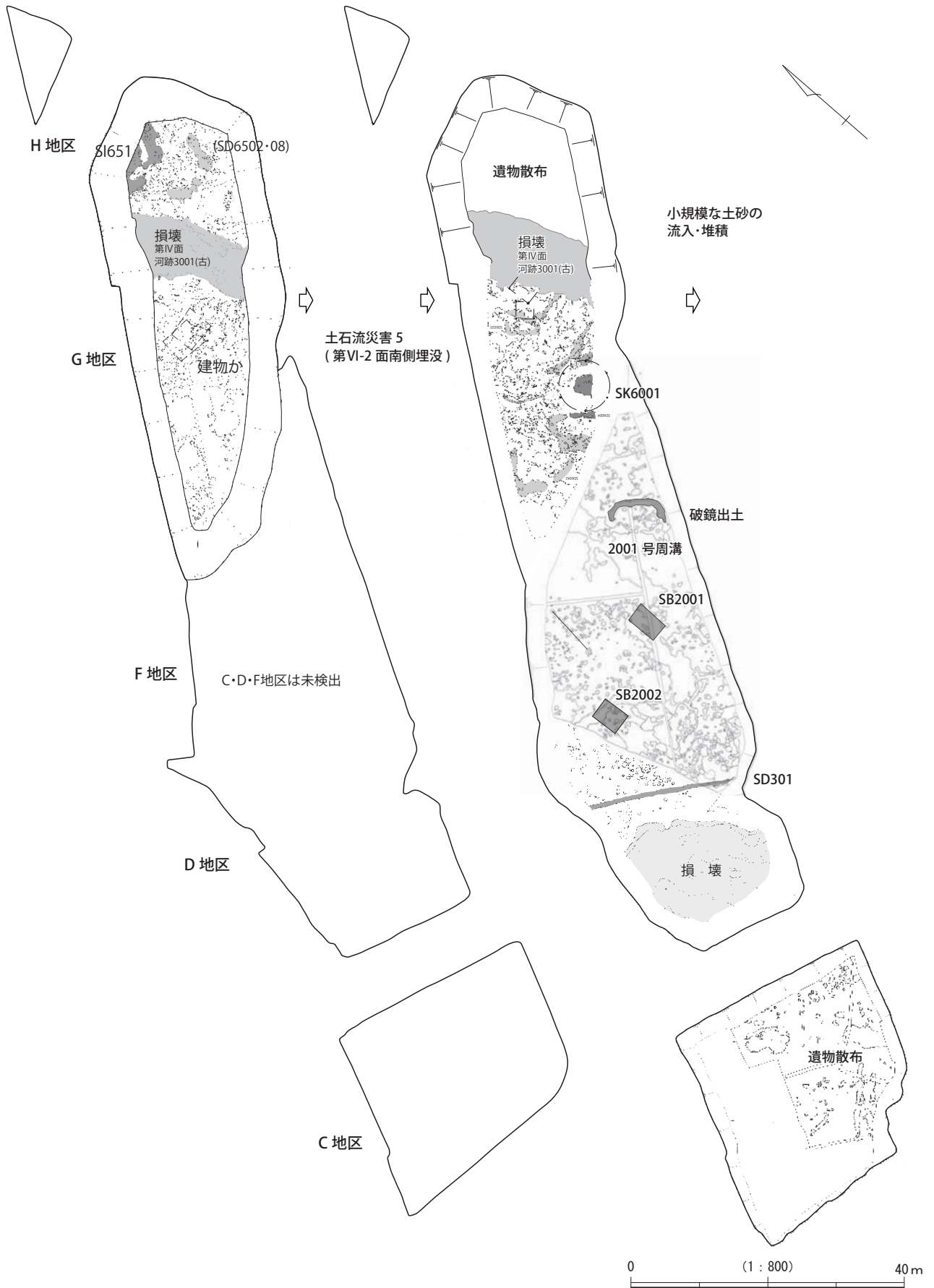
**土石流災害5** 第VI-2面と第VI-1面との間に発生した土石流災害で、流入・堆積土は第VI-1面ベース土となる。より厚い堆積を示す調査区南側を中心として、調査区北側では第VI-2面遺物包含層の一部を浸食することから、かなり規模の大きい災害と想定できる。堆積した土砂は、灰黄色や茶灰色の粗砂～砂利を基調とする。

**第VI-1面** 仿製乳文鏡の破鏡が出土したF地区第VI面に連続する弥生時代後期後半および古墳時代前期を中心とする生活面(第331図)で、a～cの3小期に細分可能である。弥生時代後期後半(a小期)は、調査区南側でP6005を、また調査区北側で遺物包含層から定量の土器が出土したにとどまり、C地区第V面と同様に、集落域の中でも縁辺の様相を呈する。弥生時代終末期～古墳時代初頭(b小期)は、遺構・遺物ともほとんど確認できないことから、扇状地全体として集落活動は低調であった可能性が高い。古墳時代前期(c小期)は、調査区北側はほとんど利用されない。調査区南側では、平面不整形を呈する竪穴状遺構1基(SK6001、長軸3.16m)、土坑、溝約25条、ピット多数等を検出した他、屈曲する溝の一部は支柱穴の欠落等もあり躊躇するものの、平地建物の外周溝の可能性を多分に残す(第259図)。これまでの調査区では、C地区第V面で溝状遺構を、D地区第VI面でSD301を、F地区第VI面で2001号周溝や小型の掘立柱建物SB2001・02(2×1間、平面積12～13㎡)をそれぞれ検出しており、J地区第VI-1～4面を含めた集落域は、同時期の土器が出土する四柳貝塚を含めた東側舌状台地を中心に展開したと判断できる。なお、G地区北側(E～G-25区付近)の土層には、第V面との間に小規模な土砂の流入・堆積が認められる。J地区でも、4回にわたる生活面を検出できたとおりに、活発な土砂の流入・堆積がうかがえる。

**第V面** 扇状地の緩斜面を利用した棚田景観を呈する水田域で、古墳時代中期末頃に土石流災害4で

第VI-2面 (弥生時代中期後葉)

第VI-1面 (弥生時代後期後半～古墳時代前期)

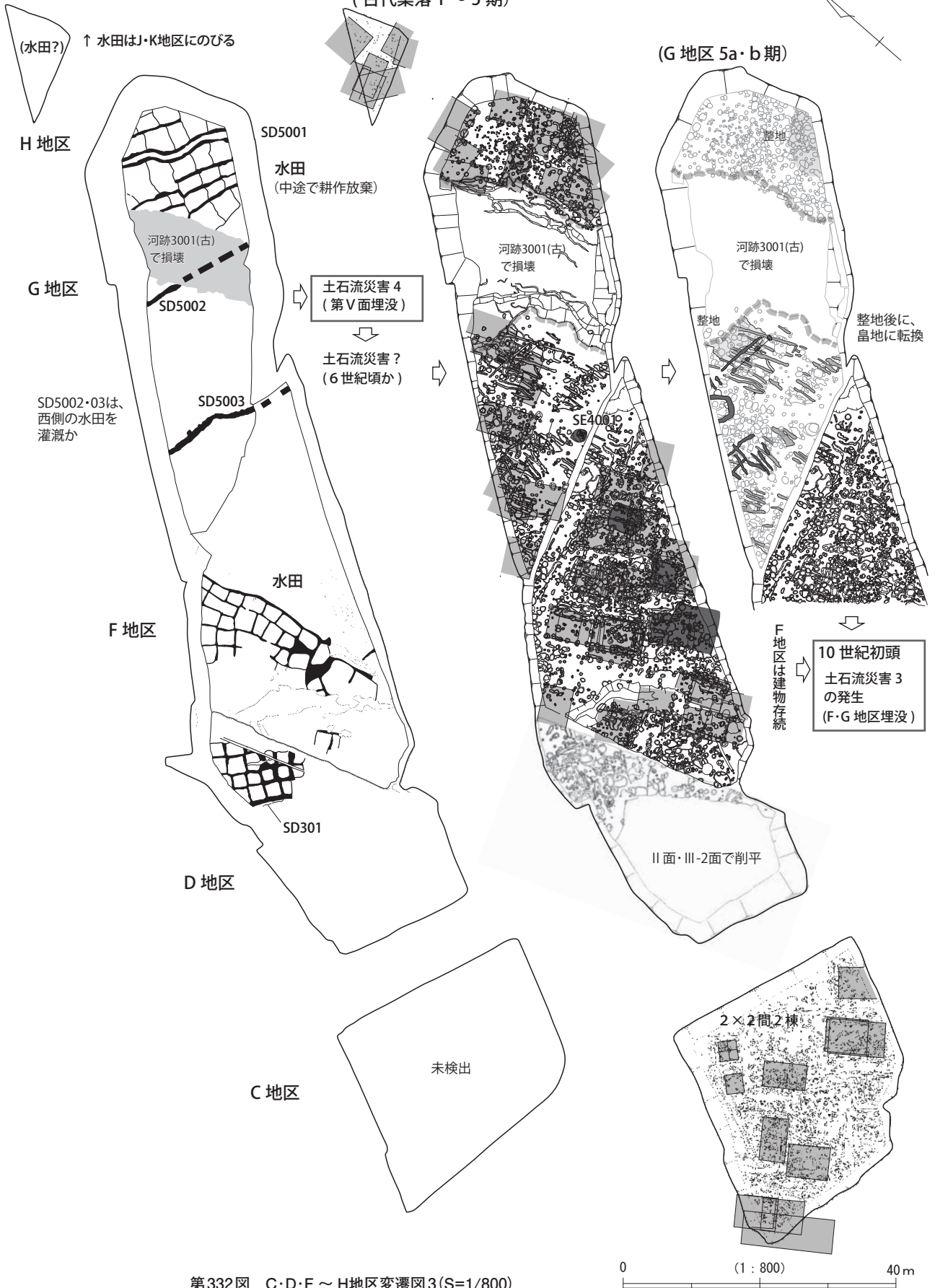


第331図 C・D・F～H地区変遷図2(S=1/800)

第V面 (古墳時代中期末頃)

第IV面 (古墳時代末～古代VI<sub>1</sub>期 (7世紀後葉～9世紀末頃)  
(古代集落1～5期)

(G地区 5a・b期)



第332図 C・D・F～H地区変遷図3(S=1/800)

一度に被覆される(第332図)。河跡3001(古)北側の東西方向約17m以上、南北方向20m以上の範囲に、小区画水田27枚(平均面積約8.1㎡、最大20.3㎡以上、最小約3.1㎡)が残存し、水田間を水路(SD5001)が流下する。これらの小区画水田は、造成後、比較的短期間で耕作が放棄され、耕作土や畦畔が雨水等でかなりの程度流出した後に、土石流災害4で埋没したと考えられる。また、河跡3001(古)南側では、水田区画は未確認であるが、SD5001と約20m間隔で並行する溝2条(SD5002・03)を検出し、埋没直前まで機能しながら、調査区外北西側斜面の水田に水を供給したと考えられる。

本遺跡の一連の調査では、G地区第V面と同時期に土石流で一度に被覆・廃絶した小区画水田を、D・F・H地区およびJ・K地区第V面で確認しており、南西-北東方向で約200mを測る広大な扇状地緩斜面全体を対象として、一体的・計画的に水田経営を意図した可能性が高い。その変遷の一端については、D・F・G地区で復元した(第239・240図、a～fの6小期)。具体的には、(a)第VI-1面北側を被覆する程度の土石流災害の発生、(b)D・F・G地区を含む緩斜面全体に複数の小排水路を配した小区画水田の造成を計画(用水路を設けず、灌漑水は水田間を掛け落とし)、(c)基軸となる水路SD5001～03を約20m間隔で開削(D地区排水路SD301も掘削か)、(d)D・F地区およびG地区水路SD5001・02を基幹とした小区画水田の造成と耕作の開始(標高の高いSD5003周辺の水田区画は灌漑水等の理由から未整備)、(e)G地区北側小区画水田の耕作を放棄(D・F地区は耕作を継続)、(f)G地区北側小区画水田の表土(耕作土・畦畔)が一定程度流出した時点で土石流災害4が発生・埋没という過程に整理でき、これらは比較的短期間のうちに推移したものと考えられる。

**土石流災害4** 古墳時代中期末以降に発生し、黄褐色砂質土層を基調とする。また、水田が未造成のC地区第V面は、同じ頃に土石流災害(現在の四柳大谷川付近が本流か)が発生し、その後、もう1回の土石流を含めて厚さ60cm前後の土砂で被覆される。

古墳時代中期末以降、一連の調査では、7世紀末葉に始まる第IV面まで明確な集落域・耕作域は検出できない。ただし、報告書IV第14図土層9・16層(暗灰色砂質土)のような安定した生活面が存在する。また、7世紀を相前後する須恵器が少量出土している。一方、本遺跡北側では、古墳時代中期に初期須恵器、鍛冶関連資料、滑石製模造品が出土した四柳ミッコ遺跡が、さらに地獄谷川右岸では、曾祢古墳群、高島経塚古墳群が築かれ、7世紀前半に掘立柱建物群を計画的に配する曾祢C遺跡が、それぞれ活発な活動を行ない、相対的な優位性がみとれる。

**第IV面** 7世紀末葉に始まる第IV面は、本遺跡の集落規模が最も拡大する時期であり、8世紀代を通じた最盛期の集落規模は南西-北東方向で約200m、南東-北西方向で約300m<sup>(33)</sup>という扇状地の大部分と東側の舌状台地にひろがる。F地区第IV面をピークとする遺構密度や出土遺物の量・内容からも周辺地域の中で屈指の集落といえる。さらに本遺跡北側には、谷部を隔てて四柳ミッコ遺跡や大町ゴンジョガリ遺跡、小金森ヘイナイメA遺跡が、旧邑知瀨に面して大町C遺跡等が関連しながら展開する。

G・H地区で検出した主な遺構は、掘立柱建物33棟、柵7条、相欠式横板組(横板蒸籠組)井戸1基、畠地と考えられる小溝群約60条、整地痕跡3ヶ所等であり、多数のピットの存在から建物棟数はさらに多いものと考えられる(第332図)。G地区の遺構群は、第4章第5節で述べたとおり、7世紀末葉～10世紀初頭(田嶋氏編年Ⅱ<sub>3</sub>期～Ⅵ<sub>2</sub>期)の約200年間で大きく6期の変遷を復元できる。7世紀末葉～9世紀中頃に存続した集落域(古代集落1～4期)は、9世紀後葉の整地作業を経て、耕作域(畠地)に転換(古代集落5期)、10世紀初頭に発生した大規模な土石流災害3(河跡3001(古))により大部分が埋没する(第217・218図)。古代集落5期の耕作地への転換は、G地区のみならずE・F地区でも認められることから、A・B地区での大規模な整地作業痕跡や、羽咋市教委第4次調査区での集落活動の活発化を加味すれば、本集落全体の大きな再編期であった可能性が高い。

G・H地区の掘立柱建物については、建物構造が把握できる23棟全てが側柱構造であり、明確な総柱構造をもつ建物は認めがたい。建物規模は、身舎の平面積が30㎡前後の建物が3棟(SB407・408・420)、同15～19㎡の建物が5棟(SB409・417・419・451・454)、同15㎡未満の建物が3棟(SB406・412・418)を数える他、大型の掘方をもつSB403が平面積40㎡を超える建物となる可能性をもつ。倉庫様の総柱建物や40㎡を超える大型建物が少ないことは、これまでの調査区と同じ様相である。同様に、建物の主軸方位についても、調査区全体を規するようあり方ではなく、基本的に北西～北を指向して変遷するものの、河跡3001(古)(土石流災害3の誘因となる小河川等が存在か)を挟む東西2つのグループが、勾配の強い扇状地形の土地傾斜に応じて、それぞれのグループで建物群を順次建て替えたと考えられる。さらに、土地利用でいえば、F地区北側～G地区南東側(G-20～23区付近)に建物が展開しない空間地が存在する可能性が高い。この空間地には、古代集落4期に本遺跡で唯一の相欠式横板組(横板蒸籠組)の井戸(SE4001)が掘られ、斎串等を用いた小規模な祭祀行為を行なうことから、他とは異なる土地利用が継続したエリアであった可能性を示唆する。

G・H地区の遺物は、扇状地の堆積作用もあり、多数の須恵器、土師器が出土、中には「乙上」「田地」「酒田」「東」「寺」「罌木口」「梗女」「住」「井門」等の多様な墨書土器約110点や、本遺跡における活発な文書作成行為を裏付ける多くの円面硯、転用硯を含む。また、尖底を主体とした製塩土器小片が目立つ他、鉄刀や本遺跡4例目となる銅製巡方、生産活動を示す塊型滓、フイゴ羽口、土錘を確認している。さらに斎串を主体としたSE4001での祭祀行為も、本地区を考えるうえで重要である。G地区の各期における墨書土器の出土傾向は第4章第5節で示したとおりで、周辺地域を含めた墨書土器の整理は第3節3項で述べる。

なお、南側に接するF地区第IV面については、調査区の中で最も遺構密度が高く、竪穴状遺構3棟、掘立柱建物34棟(側柱・3×2間主体)を復元している。出土遺物は、「田地」「酒田」「大家」「上家」「東」「大町」「土万呂」「梗女」「菅女」「酒女」「万」「仲」等の施設名や人名的を想起させる多様な墨書土器に加え、多くの転用硯や、鉄地金貼の耳環、石製巡方、銅製蛇尾が各1点出土している。

**土石流災害3** 古代集落5期とした耕作地(畠地)の廃絶後、一定期間を経た、10世紀初頭(VI<sub>2</sub>期末)に発生する。G地区を寸断する河跡3001(古)を本流とし、南東方向から北西方向に一気に流れ下る。本流の規模は調査区南東壁で上幅約20m、下幅約10.7m、深さ約2.2m、調査区北西壁で上幅約25m、下幅約15m、深さ2m以上を測り、写真図版40～43のとおり、1mを大きく超える自然石が多く混ざる。流入した土石流は、右岸(北側)側地表面を深く削り取る一方、左岸(南岸)側の開析作用は相対的に弱いものの、流入した土砂の一部がF地区第IV面の緩斜面上に堆積する状況であった(報告書IV第13図土層125等)。ほぼ同時期に発生したと考えられる土石流痕跡をA地区南端～E地区で確認している。

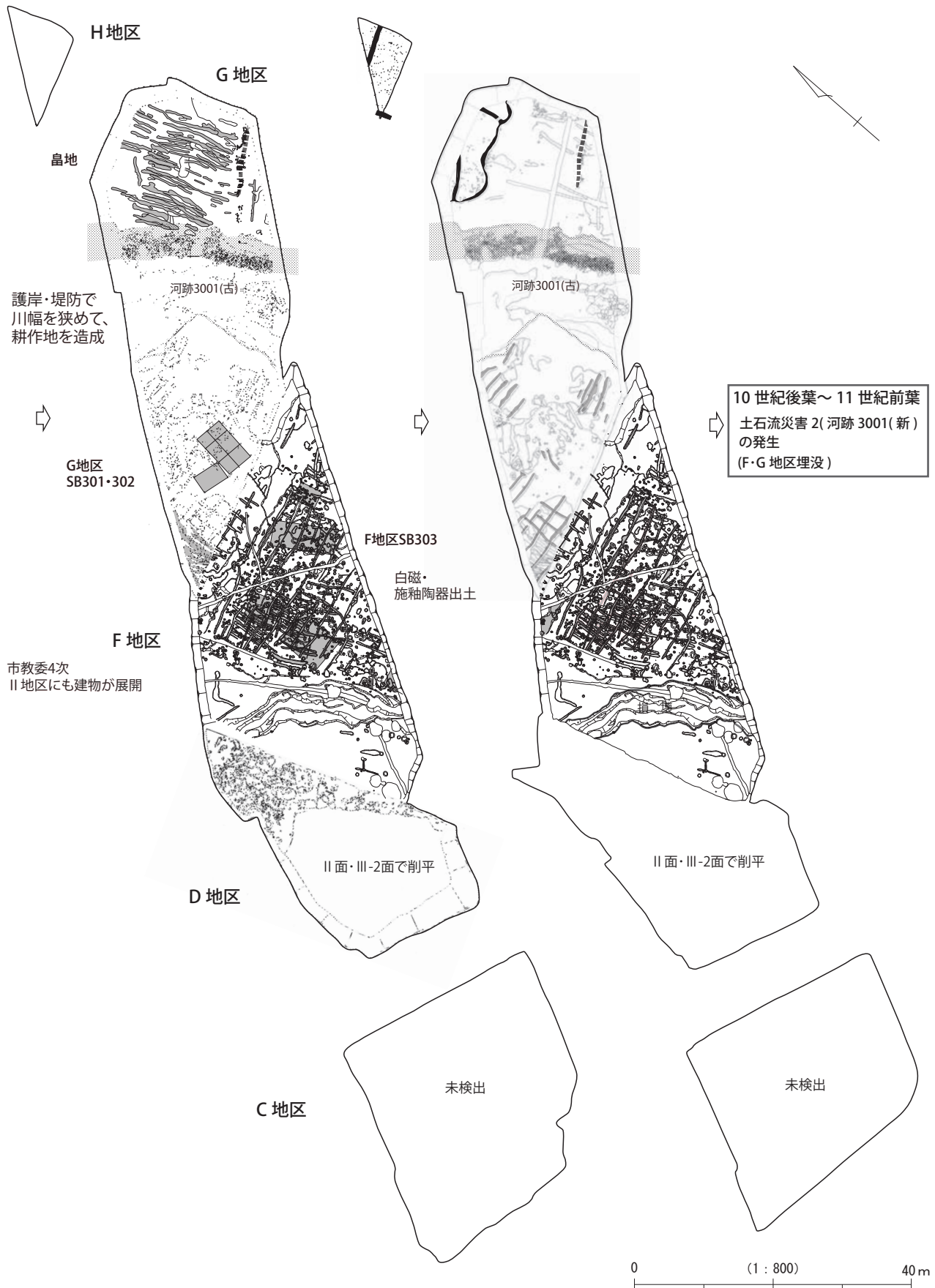
なお、10世紀初頭の土石流災害3の発生(第IV面古代集落6期)から、護岸・堤防を伴う耕作地の造成・経営(第Ⅲ-2面、第Ⅲ-1面)を経て、10世紀後葉～11世紀前葉(VII<sub>2</sub>期)の土石流災害2(河跡3001(新))の発生・埋没までの変遷については、第149図で示している。

**第Ⅲ-2面** G・H地区で確認した生活面(第333図)で、H地区は未利用の土地であった可能性が高い。第IV面を被覆した土石流災害3をベース土とする第Ⅲ-2面の存続時期は、10世紀前葉頃の比較的短い期間を想定している。G地区では、右岸(北岸)に石を積み上げながら護岸・堤防の整備を行なう河跡3001(古)を挟んで、調査区南隅でF地区第Ⅲ面と一体性が高い小溝群(畠地、SD3017～26等)と小規模な掘立柱建物2棟(SB301・302)を、また調査区北側で川幅を狭める護岸・堤防の造築と一体的に開かれた小溝約60条(畠地)を、それぞれ検出している。

河跡3001(古)右岸で検出した堤防の規模は、南東～北西方向の延長約21m、上幅2.4～3.6m、下幅5.2～6m、高さ約0.4mを測る。また、堤防内側斜面の石積み(護岸)は、自然石を砂質土で押さえなが

第III-2面(古代VI<sub>3</sub>期(10世紀前葉頃))

第III-1面(古代VI<sub>3</sub>~VII<sub>1</sub>期初め(10世紀中葉頃))



第333図 C・D・F～H地区変遷図4(S=1/800)

ら乱雑に厚さ30～50cm程度積み上げたものである。一方、標高が相対的に高い左岸(南側)は、肩部中程に径2～5cmの杭が不規則に散見できる程度である。同様の護岸を目的とした片岸のみの積石の事例は、本遺跡の北東側約1.2kmに位置する中能登町小田中おばたけ遺跡や志賀町田中遺跡で確認できる<sup>(34)</sup>。小田中おばたけ遺跡平成7年度調査1・2区の上・下層間面2号溝は、上幅約7.9m、深さ約1mを測り、相対的に標高が低い西側斜面に平均20cm大の自然石を積み上げる。溝の時期は、下層面(古墳時代前期後半)以降、上層面(8世紀中葉)より前とされ、本遺跡の護岸よりも古く位置付けられる。両遺跡で確認できる片岸のみの護岸を施工することは、より重要な土地を水害から護るため、護岸の反対側の土地に流水を誘導するための土木技法の一つの可能性をもつ。

G地区堤防北側の緩斜面を利用した畠地は、地形の傾斜に平行ないし直交する小溝を掘り、耕作単位は大きく4区画に分かれる(第149図、耕作単位a～d)。また、河跡3001(古)南岸で検出した小規模な雑舎の建物は、側柱構造のSB302(平面積11.2㎡)から総柱構造のSB301(3×2間、同27.7㎡)に建て替えられ、F地区第Ⅲ面から連続する小溝群は複数回の切り合い関係をもつ。なお、F地区第Ⅲ面では、前述のとおり、在地の富裕百姓層の屋敷地と考えられる建物群が展開、白磁碗Ⅰ類、緑・灰釉陶器を含む遺物が出土する。

**第Ⅲ-1面** G地区第Ⅲ-2面で成立した耕作域は、10世紀中頃(Ⅶ<sub>1</sub>期頃が下限か)に護岸を伴う堤防を維持しつつ、再整備される(第333図)。河跡3001(古)北岸の耕作地は、一部で造成を行い、水田(水田301～303)に転換、南岸の畠地(小溝群約40条)は耕作規模を拡大する。

G地区の水田301～303は、第Ⅲ-2面の耕作単位d(第149図)を継承する範囲に占地し、緩やかに屈曲する等高線に沿って小規模な土留め工(石積)を伴いながら配される。用・排水施設は未確認であり、主に地表に湧き出る水や雨水を、低い畦畔を介して水田間を順次掛け落とししたものと推測できる。第Ⅲ-2面で確認した耕作単位a～c(第149図)については、耕作を放棄したと考えられる。H地区第Ⅲ-1面、I・J地区第Ⅲ-1面、K地区第Ⅲ面で、G地区水田に連続する水田遺構を検出しており、その耕作範囲はG地区水田を南端とし、南西～北東方向で120m以上を測る。

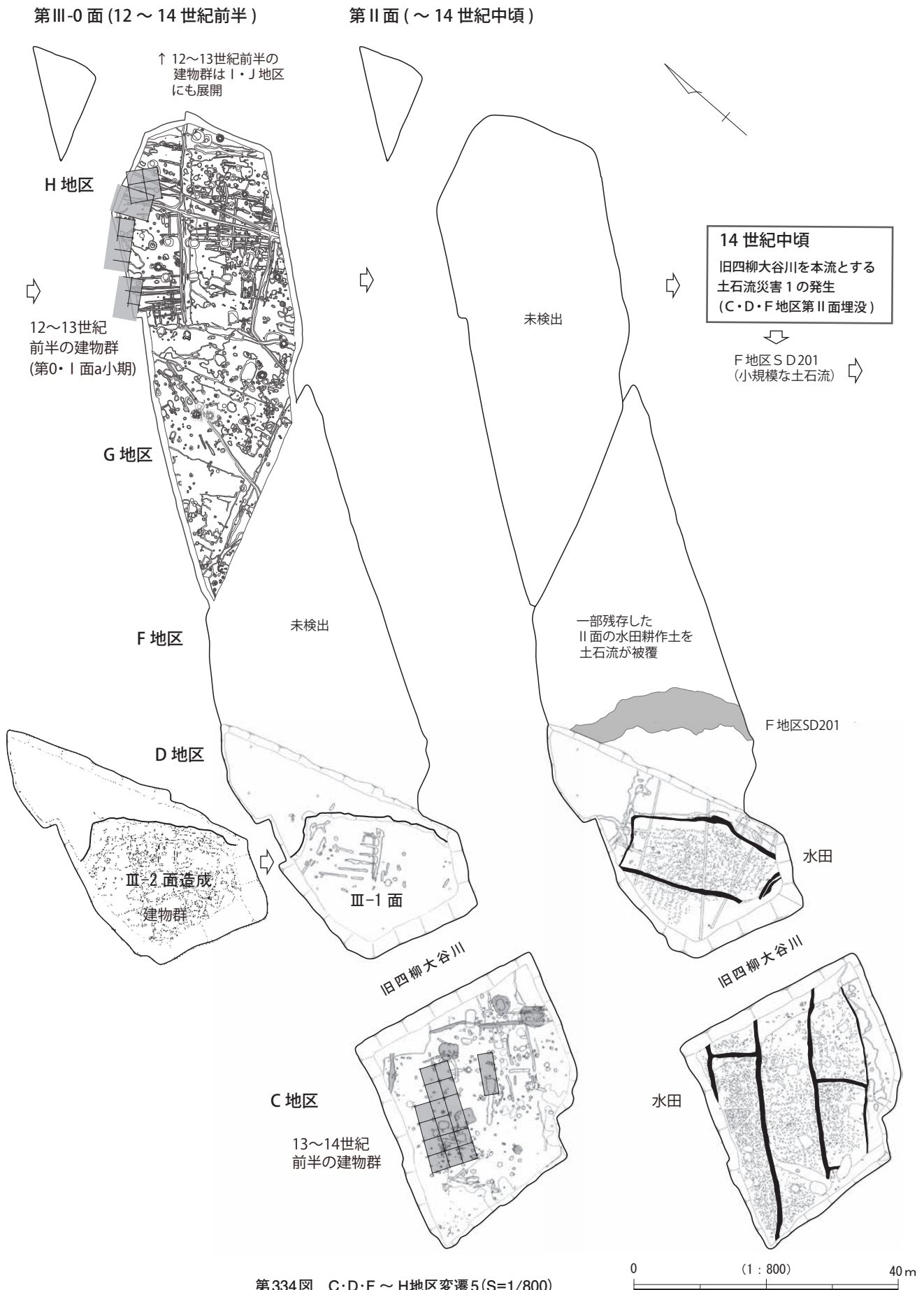
河跡3001(古)南岸で検出した畠地は、切り合い関係等から3段階の変遷があり(第149図)、第Ⅲ-1面最終段階(土石流災害2埋没段階)で3つの耕作単位をもつようだ。これらの畠地は、前述の建物群廃絶後に畠地に転換した、F地区と一体のものであり、条里地割りの施行を思わせる主軸方位を示す。

**土石流災害2(河跡3001(新))** 第Ⅲ-1面耕作地を襲った大規模な災害で、10世紀後葉～11世紀前葉(Ⅶ<sub>2</sub>期)の発生を想定する。第Ⅲ-1面を埋没させた土石流災害2の本流(河跡3001(新))の規模は、上幅約11～18m、下幅6.6～13.5m、深さ約0.4～0.8mを測り、下流側では護岸・堤防を設けなかった左岸(南岸)の浸食が顕著である。流入・堆積した土砂は、シルト～砂利を基本とし、河跡3001(古)のような大きな自然石は混ざらない。土石流災害2の発生に伴い、G地区の利用は一時的に放棄される。なお、報告書Ⅳ掲載のロクロ土師器塚(第266図480)を第Ⅲ-1面の下限を示すとすれば、土石流災害2は10世紀後葉に発生したと考えられる。

**第Ⅲ-0面(G・H地区第0・I面の一部)** 第4章第2節で述べた第0・I面遺構の一部(a小期、第77図)を抽出、第Ⅲ-0面と呼称する。G地区北西側で検出した総柱構造を主体とする建物群(SB109・112～115)が該当し、出土遺物から12世紀～13世紀前半に営まれたと考えられる(第77図、第334図)。J地区やG地区西側に位置する羽咋市教育委員会第4次調査第Ⅱ地区での並行期遺物の出土から、J地区～市教委調査区付近に中心域をもつ散村的な集落・耕作地が展開したと推測できる。また、C地区第Ⅲ面では、13世紀～14世紀前半代に主体をもつ建物2棟、平面長方形の竪穴状遺構3基、井戸1基を検出している。

**(第Ⅱ面)** C・D地区で検出した階段状に造成された長方形の大規模水田区画を指標としており、C・D





第334図 C・D・F～H地区変遷5(S=1/800)

地区間を流れる四柳大谷川を本流の一つとする土石流災害1で一度に埋没する(第334図)。

**土石流災害1** 各地区で確認できる大規模な土石流痕跡で、東側から短期間に流入・堆積した粗砂・細砂層(無遺物層)をなす。G・H地区では、第Ⅲ-0面と第0・I面の間に存在し、堆積層の厚さはG地区で0.1～1m弱、H地区で0.2～0.4mを、それぞれ測る。C地区では、第I面集落と第Ⅱ面水田の間層(厚さ0.5～1.5m、1mを超える自然石が混ざる)として確認でき、上下の生活面の存続期から、14世紀中頃に発生したと推定している。また、C・D地区間を流れる四柳大谷川が本流の一つであり、C地区北隅とD地区南側を大きく削平する。なお、F地区では、土石流災害1に後出する流路(SD201)を確認している。

**第0・I面** G・H地区第0・I面は、F地区第0・I面と同様に現耕作面直下で検出した最上層の生活面で、耕地整理等のため遺存状態はあまりよくない。G地区で検出した集落は、出土遺物は限られるものの、前述した第Ⅲ-0面(a小期)、土石流災害1に後出、14世紀後半～16世紀前半の第I面(b小期)、16世紀後半～17世紀代の第0面(c・d小期)が、中心域を若干変えながら営まれる(第77・335図)。また、遺物からは、少量の陶磁器が出土するものの、土師器皿の量比がかなり低いことが指摘できる。

第I面(b小期)は、出土遺物が限られるため、南側のC・D地区第I面、F地区第0・I面北側の遺構群を含めて様相を整理する。G地区南半の掘立柱建物3棟(F地区SB104、SB101・102、建物主軸方位N-16～21°W)は、F地区SB104(平面積約54㎡)のように中世的な総柱構造をもち、柱穴は径50cmに満たない小振りな円形を呈する点を特徴とする。これらは、南接するF地区北側の掘立柱建物4棟(総柱構造3×3間1棟(平面積約46㎡)、3×2間2棟(同約25㎡)、側柱構造2×1間1棟(同約27㎡)と小型の石組井戸4基等で構成される建物群と一体のものとして理解できる。一方、C・D地区第I面やF地区第0・I面南側では、土地規制がかなり弱く、側柱構造を主屋とする建物25棟以上、浅い竪穴状遺構20基以上、小型の石組井戸10基以上で構成される建物域を確認、一部建物が16世紀後半以降の可能性を残すものの、おおむね出土遺物から14世紀後半～16世紀前半(15世紀代主体)に位置付けられる。側柱構造の建物は、梁間柱間寸法を長く取り、大形の柱穴掘方(長径50～120cm)で、側面未加工の太い支柱を用いることを特徴とする。第5章第2節では、中能登町谷内ブンガヤチ遺跡で総柱構造の建物SB15(6間×5間以上、14世紀代)が14世紀後半～17世紀代に主屋が側柱構造の建物に転換することや、七尾城下町遺跡シッケ地区、野々市市長池キタノハシ遺跡等で検出できる側柱構造の建物の様相<sup>(35)</sup>から、F地区第0・I面北側～G地区第I面南端の中世的な総柱構造を主屋とする建物域が廃絶した後に、C・D地区第I面～F地区第0・I面北側で梁間柱間寸法を長くとる側柱構造の建物を主屋とする建物域が成立する流れに整理している。

ただし、中世的な総柱構造の建物+石組井戸で構成される建物域と、側柱構造の建物+竪穴状遺構+石組井戸で構成される建物域が、①主屋級の建物規模に大きな差がないこと、②いずれの柱根も側面未加工の芯持ち材であること等から、2つの建物群が時期的に並存し、建物域の構成や建物構造に現れる差異は、居住者の職種・階層や建物用途等の差を反映したものとの評価も可能である。能州府中(七尾市中心部付近)に向かう街道に面して、潟漁を一部で行う農村集落と考えられる第I面集落の位置付けや、中世的な総柱構造の建物から側柱構造の建物への転換の実像については、出土遺物の制約もあり今回の調査では十分整理できておらず、今後の類例の増加を待ちたい。

第0面(c・d小期)は、16世紀後半～17世紀代に営まれる。前述したC・D地区第I面の側柱構造の建物を主屋とする建物域がおおむね16世紀第1四半期頃を下限に廃絶する状況から、16世紀中葉頃に自然災害あるいは政治的・経済的な要因により、建物域がG～J地区周辺にも新たに成立したと想定している。c・d小期とも、梁間寸法の長い側柱建物を主屋とし、小規模な雑舎・作業小屋、小型の石組井戸を基本に建物単位が構成されるようだ。第I面と比較すれば、竪穴状遺構は確認できず、敷地割り

第I面 (第0・I面b小期)  
(14世紀後半～16世紀前半)

第0面 (第0・I面c小期)  
(16世紀後半～)

第0面 (第0・I面d小期)  
(～17世紀)



第335図 C・D・F～H地区変遷6(S=1/800)

を反映するように建物主軸方位は一定の振れ幅内におさまる。建物群の主軸方位は、c小期がN-41～50° W、d小期がN-69～80° Wをそれぞれ示す。また、3つの敷地を復元できるc小期は、SB111からSB110の順と推移し、平面積約48㎡を測るSB110は居住以外の特別な用途をもつ建物と考えられる。d小期は、SB105・109(約31㎡)を主屋とした2つの建物群が展開する。これらの建物群は、第0面と同様に四柳集落を構成し、遅くとも19世紀代(おそらく18世紀代)には耕作地に転じたと考えられる。

### 第3節 周辺の古代集落遺跡との比較検討

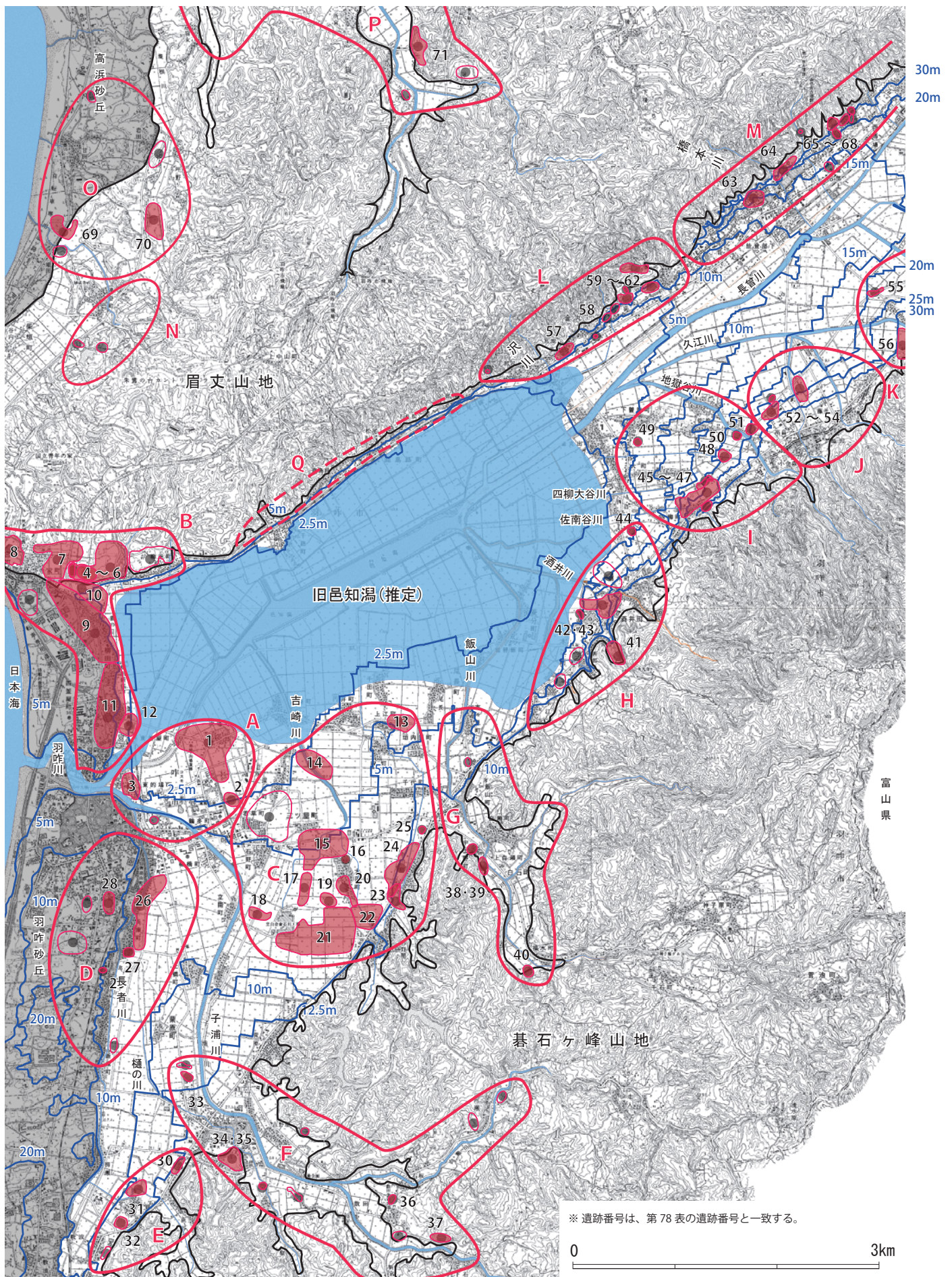
#### 1 比較検討の対象について

四柳白山下遺跡は、第IV面の集落域が成立する7世紀末葉から、第Ⅲ-1面の集落・耕作域が存続した10世紀中葉頃まで、自然災害にも係わらず、長期にわたり継続した大規模集落である点に大きな特徴をもつ。また、土壌堆積を基本とする扇状地形を一因として、多数の墨書土器や転用硯、緑・灰釉陶器を含む土器、土製品、さらに腰帯、銅鏡片、木沓、斎申、和同開珎、漆壺等の特徴的な遺物が出土する点も特徴の一つといえる。以下では、旧邑知瀉に注ぎ込む水系を中心とした周辺地域(旧邑知瀉周辺と仮称)の集落遺跡の消長、墨書土器の出土傾向について整理を行い、その比較検討により、本遺跡の位置付けの一助としたい。また、8世紀末に規模を拡大する吉崎川中流域の集落遺跡群(杉野屋遺跡群と仮称)についても、本遺跡の性格を考える上で重要であることから、若干の位置付けを行う。ただし、旧邑知瀉に注ぎ込む水系のうち、北東側から注ぎ込む長曾川水系については、その流域が広大であるため、中能登町久江－西馬場を結ぶラインより西側の地域を対象とした(第336図)。

#### 2 周辺の古代集落遺跡の消長

県教育委員会製作の「いしかわ文化財ナビ」によれば、旧邑知瀉周辺で7世紀前後～11世紀前半代に、遺物の表面採取を含めて、何らかの遺跡情報が得られる集落遺跡は約101遺跡を数える。このうち、現時点で集落の消長を検討可能な71遺跡を、地形や水系、分布状況等からA～Pの16グループに区分した(第336図、第78表)。第4章8節で述べた弥生時代中期～後期・末の集落遺跡14グループ75遺跡の分布(第283図)と比較した場合、水耕を中心とした生業や旧邑知瀉を介した流通を基盤としながら、限られた適地に集落が営まれるため、飯山川水系・酒井川水系(G・Hグループ)以外は、両期とも近似した集落分布を示す。特に、旧邑知瀉東岸～邑知地溝帯両縁(H～Mグループ)は、1つの遺跡範囲の認定に左右される要素を多分にもつが、本遺跡(No.45)や杉谷チャノバタケ遺跡(No.62)等のように、小扇状地上の限られた集落適地に中心域を少しずつ変えながら、比較的長期間集落遺跡が存続する傾向が強い。以下では、第2章8節末文で述べた旧邑知瀉周辺における集落遺跡の検討に係る制約(現集落との重複、外列砂丘による被覆等)に留意しつつ、71遺跡の消長を6つの時期に区切って概観する。

〔古代I期〕 12グループ21遺跡が確認でき、6世紀後葉に比して確実に集落数は急増する(第337図)。詳細が明らかな集落遺跡のうち、Bグループの寺家遺跡(No.9)砂田地区では数棟1単位の竪穴建物群を検出している。また、同グループに属する柳田シャコデ遺跡(No.6)は、同一丘陵の須恵器生産(羽咋窯跡群)に係わる竪穴建物数棟で構成された集落遺跡である。両遺跡周辺には、滝古墳群オーショージ支群、寺家モスケ古墳、柳田テンジク横穴等が分布し、その関連が指摘されている。子浦川上流のFグループは、現時点で集落遺跡は未確認であるが、小谷屋・寺山横穴古墳群等の50基を越える横穴古墳群の分布から、今後、集落遺跡の確認が期待できるグループである。Iグループに属する曾祢C遺跡



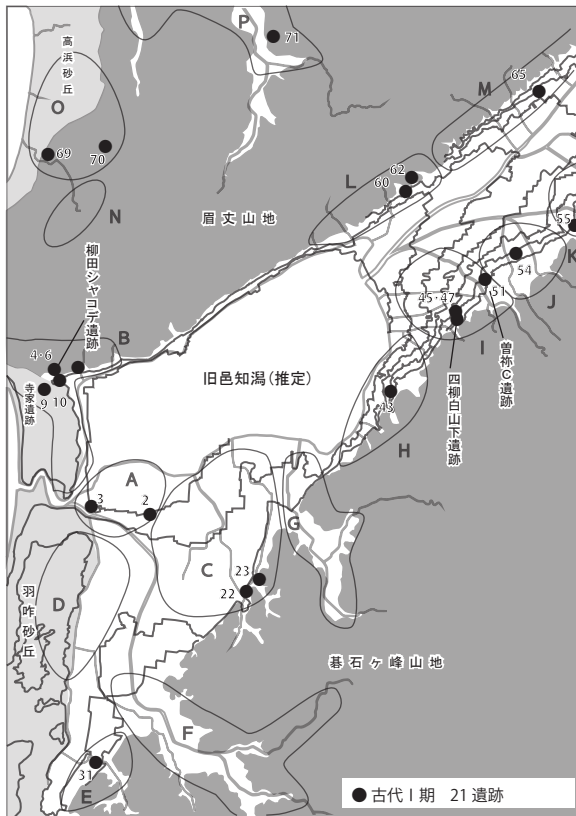
第336図 旧邑知湯周辺の古代集落遺跡分布図(S=1/60,000)

第78表 旧邑知瀧周辺の古代集落遺跡の消長表

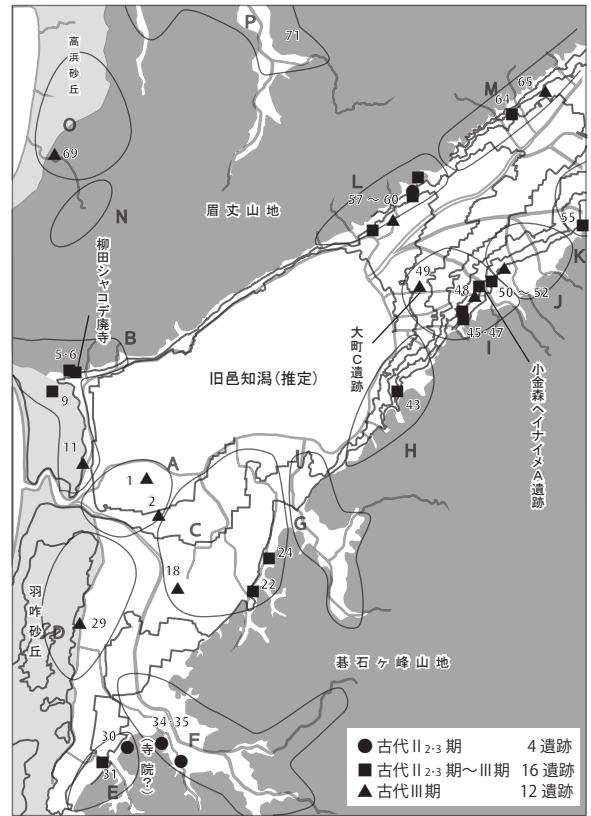
遺物出土 ■ 集落域確認 ○ 墨書土器出土

No.	分布域の区分	遺跡名	墨書土器	帯金具	皇朝銭	施釉陶器	年代																		
							6c 後葉	I	II <sub>1</sub>	II <sub>2-3</sub>	III	IV <sub>1</sub>	IV <sub>2</sub> (古)	IV <sub>2</sub> (新)	V <sub>1</sub>	V <sub>2</sub>	VI <sub>1</sub>	VI <sub>2</sub>	VI <sub>3</sub>	VII <sub>1</sub>	VII <sub>2</sub> (古)	VII <sub>2</sub> (新)	中世 I-1		
計			約1,013	32	61?	101	7	21	2	20	28	31	33	36	36	43	49	38	12	12	12	9	9		
(うち墨書土器など出土遺跡数)			33	-	-	-	0	0	0	2?	3	5	8	11	16	17	12	13	5	0	0	0	0		
1	A: 邑知瀧西縁	吉崎・次場遺跡	1	2	和銅1										○										
2		次場コウレン遺跡(T区)	18			5									○	○		○							
3		的場農業倉庫前遺跡																							
4	B: 柴垣台地南縁・羽咋砂丘東縁	柳田台地遺跡																							
5		柳田シャコデ廃寺																							
6		柳田シャコデ遺跡																							
7		気多社僧坊群遺跡																							
8		一ノ宮遺跡																							
9	多彩23+灰27+緑6	寺家遺跡	314	22	43	57				○?	○	○	○	○	○	○	○								
10		柳田猫ノ目遺跡	1											○											
11		釜屋遺跡																							
12		釜屋倉ノ下遺跡																							
13	C: 吉崎川水系	上江モトオリ遺跡				2																			
14		深江遺跡	1			1																			
15		太田ニシカワダ遺跡	3																						
16		太田C遺跡	1																						
17		太田ツツミダ遺跡	4																						
18		二口かみあれた遺跡	23																						
19		太田A遺跡																							
20		太田B遺跡																							
21		杉野屋ロクハワリ遺跡	14	1																					
22		杉野屋遺跡	43																						
23		杉野屋専光寺跡	約100			2																			
24		中川A遺跡	24	1		3																			
25		宇土野センジョハナ遺跡																							
26	D: 羽咋砂丘東縁(長者川水系)	長者川遺跡	17																						
27		兵庫遺跡																							
28		兵庫オクヤマデ遺跡																							
29		栗生シモデ遺跡																							
30	E: 長者川水系上流	荻市遺跡	1			1																			
31		荻島遺跡	1																						
32		荻島B遺跡	1																						
33	F: 子浦川上流(子浦谷)	子浦ニシリョウA遺跡																							
34		子浦蓮華山遺跡																							
35		子浦旧瓦場遺跡																							
36		散田鍋山遺跡				1																			
37		散田コタン遺跡																							
38	G: 飯山川水系	宇土野ヤノキ遺跡	1																						
39		宇土野クマヤチ遺跡	1																						
40		福水ヤシキダ遺跡																							
41	H: 酒井川水系	永光寺遺跡																							
42		寺境タブ遺跡																							
43		酒井ノバンドウマエ遺跡																							
44		酒井ノギワ遺跡																							
45	I: 四柳大谷川・地獄谷川水系	四柳白山下遺跡	397	6	3	14																			
46		四柳貝塚																							
47		四柳ミッコ遺跡	2																						
48		大町ゴンジョガリ遺跡	2																						
49		大町C遺跡	34																						
50		小金森ヘイナイメA遺跡	1																						
51		菅祢C遺跡	2																						
52	J: 久江川水系a	高島カタタ・スギモト遺跡	13																						
53		高島C遺跡																							
54		高島テラダ遺跡	1																						
55	K: 久江川水系b	小田中おぼたけ遺跡	2																						
56		久江サザミヤシキ遺跡	1	1	3	13																			
57	L: 眉丈山南縁(長曾川水系右岸a)	金丸宮地遺跡	1		11?																				
58		沢ソウケダ遺跡	1																						
59		谷内ブンガヤチ遺跡				1																			
60		金丸テラダヤチ遺跡																							
61		金丸杉谷遺跡	2		11																				
62		杉谷チャノバタケ遺跡																							
63	M: 眉丈山南縁(長曾川水系右岸b)	能登部小学校遺跡																							
64		徳丸遺跡																							
65		宮谷川遺跡																							
66		阿弥陀敷遺跡																							
67		中大門遺跡																							
68		中大門川遺跡																							
69	O: 柴垣台地	柴垣須田遺跡																							
70		甘田タイ遺跡																							
71	P: 旧福野瀧水系	上棚中村畑遺跡	3			1																			

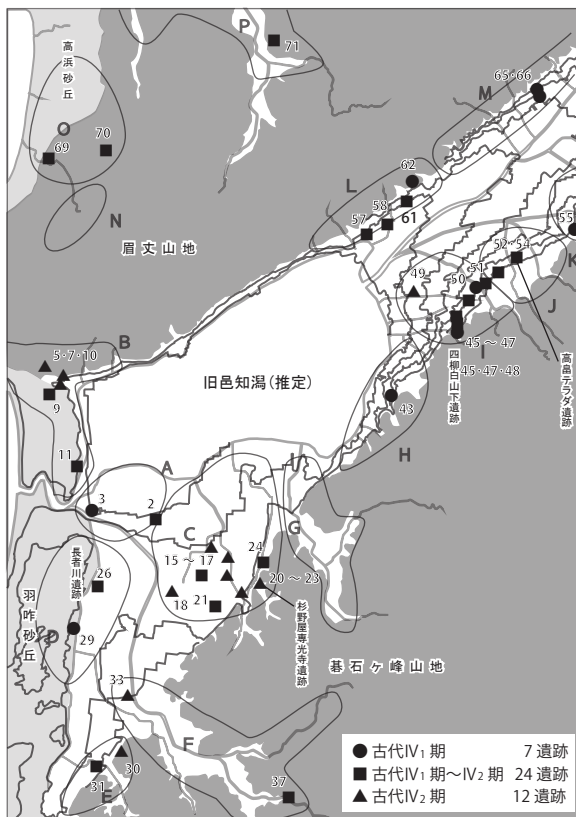
古代Ⅰ期



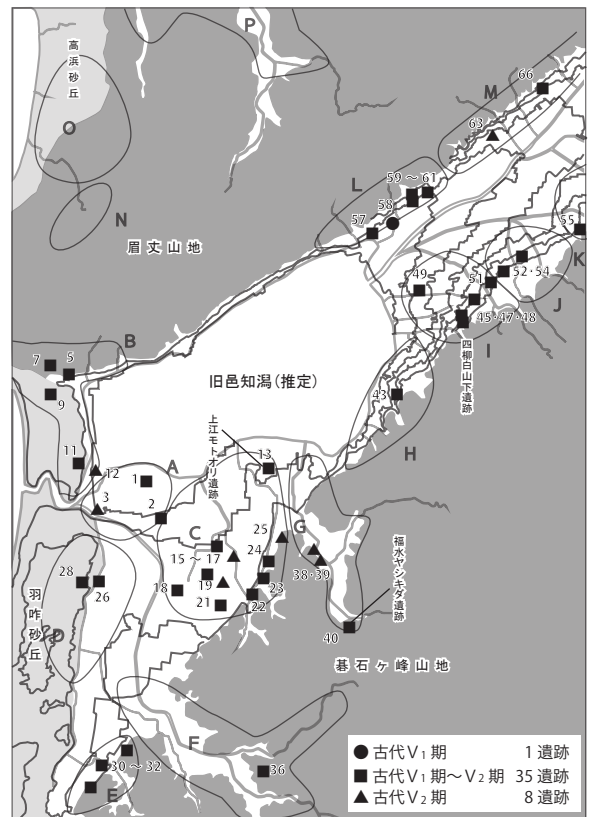
古代Ⅱ<sub>2-3</sub>～Ⅲ期



古代Ⅳ期



古代Ⅴ期



0 3km

第337図 旧邑知潟周辺の古代集落遺跡消長模式図1(S=1/140,000)

(No.51)では、7棟以上の掘立柱建物群(最大床面積43㎡)を高い計画性をもって配する建物域が成立する。地獄谷川右岸の曾祢C遺跡については、近隣に所在する曾祢古墳群(7世紀前葉、金銅装双竜式環頭太刀出土)、高島経塚古墳(6世紀末～7世紀初頭、金銅装圭頭太刀、銅鏡出土)被葬者層の支配、統制のもとで営まれた比較的上位の集落と位置付けられている。なお、飯山川水系(Gグループ)で福水円山古墳、福水・飯山横穴群が、酒井川水系(Hグループ)で酒井古墳・酒井東古墳群がそれぞれ分布するように、各グループで小規模な古墳が築かれた可能性が高い。本遺跡が属するIグループでは、詳細不明ながら四柳横穴群、大町横穴群が分布、一連の調査で7世紀前後の須恵器が少量出土することから、曾祢C遺跡より下位に属する小集団が営む集落が存在する可能性が高い。このように古代I期は、6世紀後半の集落様相を継承しつつ、異なる様相を示すB・F・Iの3グループを中心としながら展開すると考えられる。

〔古代Ⅱ<sub>1</sub>期〕 短期間ではあるが、集落遺跡数は2遺跡に急減し、土器編年上の課題を考慮しても、県内他地域と同様に、集落の大きな再編期にあたる<sup>(36)</sup>。現在、Bグループの釜屋遺跡(No.11)、Lグループの谷内ブンガヤチ遺跡(No.59)で、当該期の遺物が出土しているものの、集落の詳細は不明である。なお、Bグループの経営が考えられる羽咋窯跡群では、柳田タンワリ1号窯、柳田五郎兵山1号窯が活発な操業を行い、集落遺跡の様相とは好対照をなす。

〔古代Ⅱ<sub>2-3</sub>期～Ⅲ期〕 12グループ32遺跡と急増、その大部分の集落遺跡は古代Ⅱ<sub>3</sub>期～Ⅲ期に成立をみる。集落分布からみれば、古代I期の様相を基本的に継承しつつ、Bグループの4遺跡(No.5・6・9・11)、E・Fグループの3遺跡(No.30・34・35)や、本遺跡が属するIグループの6遺跡が目立った存在といえる。また、当期における白鳳寺院の建物が「北」と「南」の2グループ(B・Fグループ)で想定されることは、旧邑知渦周辺地域の勢力や集落動向を考えるうえで象徴的な事象である他、実態は不明ながらDグループの羽咋市街地周辺に羽咋郡衙(前身含む)が存在したとされる。

「北」のBグループでは、柳田シャコデ遺跡(No.6)の掘立柱建物で構成された集落が廃絶に向かう一方、東接した台地上に柳田シャコデ廃寺(No.5)が創建される。また、寺家遺跡(No.9)砂田地区では、主軸方位を規制した竪穴建物群で銅鏡、銅鈴等を用いた神祇祭祀を行い、帯金具、ガラス容器片の出土から「国家的な関与を受ける専門的な祭祀集落の性格を帯びる」と考えられている<sup>(37)</sup>。同グループは、臨海部で土器製塩(滝・柴垣製塩遺跡群)を開始する等、旧邑知渦周辺地域の中でも卓越した存在といえる。「南」の子浦川上流域E・Fグループでは、同一丘陵に分布する3遺跡(No.30・34・35)から瓦片の出土が報告されており、周辺に古代寺院が存在すると考えられている。また、Iグループは、地獄谷川右岸の曾祢C遺跡と入れ替わるように、本遺跡(No.45)や四柳ミッコ遺跡(No.47)が急速に活性化し、集落規模を大きく拡大する。さらに旧邑知渦に面した大町C遺跡(No.49)の成立や、鉄の精錬施設と考えられる小金森ヘイナイメA遺跡(No.50)の稼働等、複数の機能をもつ遺跡群としての性格を帯び始める。

〔古代Ⅳ期〕 14グループ43遺跡と、集落遺跡数はさらに増加し、古代Ⅳ<sub>2</sub>期～Ⅵ<sub>2</sub>期は集落遺跡数における盛期を迎える。新たに成立する集落遺跡数は、古代Ⅳ<sub>1</sub>期が9遺跡、古代Ⅳ<sub>2</sub>期が12遺跡を数え、古代Ⅱ<sub>3</sub>期より若干少ないものの、新たな集落が成立し続ける点に特徴をもつ。中でも、羽咋砂丘東縁のB・Dグループ、吉崎川水系のCグループ、本遺跡が属するIグループ、久江川水系のJグループで、活発な活動がうかがえる。

Bグループの寺家遺跡(No.9)では、砂田地区で竪穴建物群が掘立柱建物群に転換、引き続き神祇祭祀を執り行う。さらに祭祀地区で、大規模な焚火と鎮火を伴う祭祀(下層遺構面大型焼土遺構SF16)が始まる。長者川水系のDグループは、10世紀以降に形成された外列砂丘の被覆により判然としないが、長者川遺跡(No.26)で墨書土器が出土している。同グループは、砂丘上の開発により、粟生シモデ遺跡



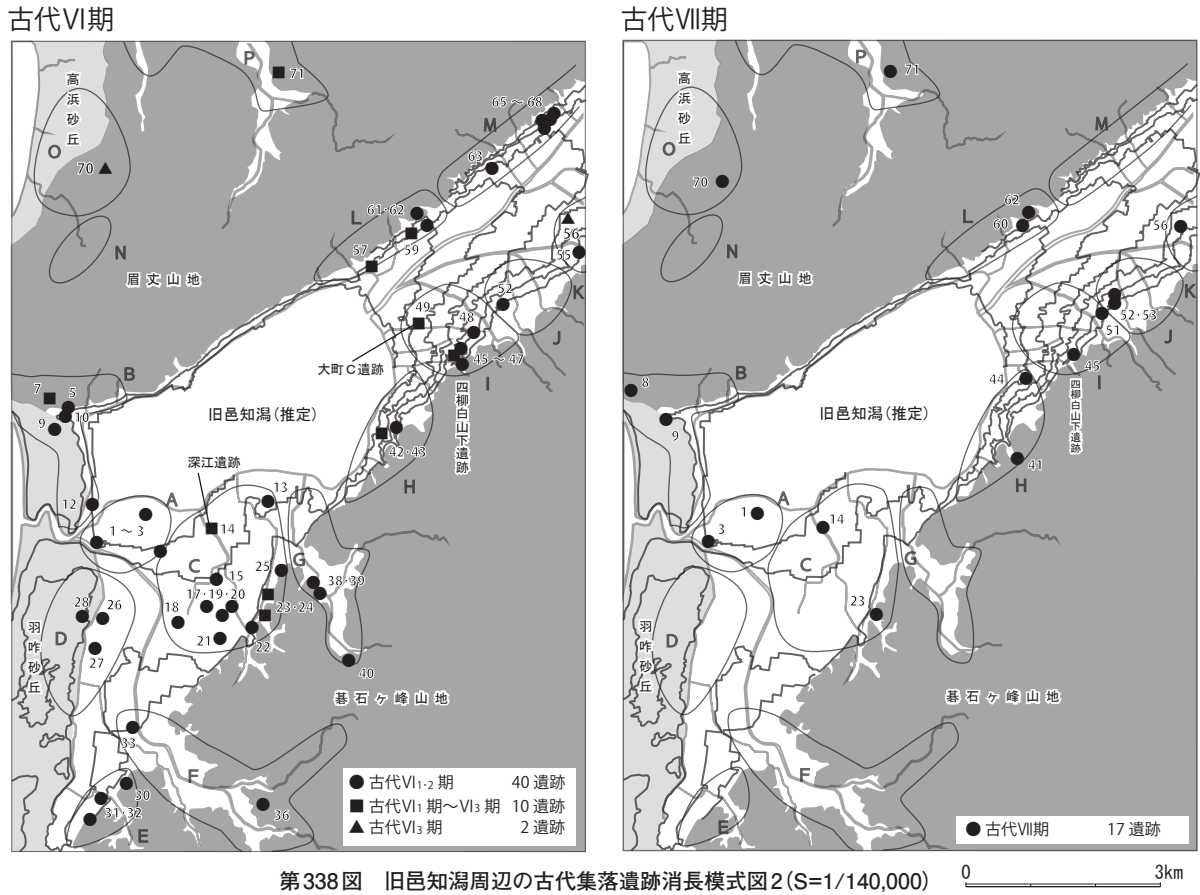
(No.29)が発見される等、今後も新たな集落遺跡が確認される可能性が高い。吉崎川水系Cグループでは、古代Ⅳ<sub>1</sub>期に3遺跡(No.18・22・24)の分布であったものが、古代Ⅳ<sub>2</sub>期には9遺跡と急増する。詳細は、第4項で述べるが、これらの集落遺跡は、条里地割りが施行され、墨書土器の文字共有から一体的な関係を保持した荘園遺跡と考えられる。同グループの中核をなす杉野屋専光寺遺跡(No.23)では、志雄町(現、宝達志水町)教委調査区で丸瓦片や「寺」等の墨書が出土し、後の「東院寺」につながる宗教施設が成立をみる。一方、古代Ⅲ期までの「南」の中心と目されるFグループは、調査が少ないため判然とせず、散田コダン遺跡(No.37)が確認できる程度である。

旧邑知潟北東側では、Iグループに属する本遺跡(No.45)や四柳ミッコ遺跡(No.47)等が集落規模を維持しつつ盛期を迎える。またJグループでは、高畠カタタスギモト(No.52)に加えて、高畠テラダ遺跡(No.54)で耕作域が確認されている。このように古代Ⅳ期は、Cグループの急増により、古代Ⅲ期までのB・F・Iの3グループから、B・C・Iの3グループに中心域が移動する点に特徴をもつ。

〔古代Ⅴ期〕 13グループ44遺跡が確認できる。新たな集落遺跡の成立は、古代Ⅴ<sub>1</sub>期、Ⅴ<sub>2</sub>期とも8遺跡を数え、集落遺跡数からみた盛期を維持する。集落遺跡の分布状況は、B・C・Iの3グループが引き続き活発である他、旧邑知潟縁のAグループで2遺跡(No.1・3)、飯山川水系上流の谷平野であるGグループで3遺跡(No.38～40)が分布するとおり、新たな動きも確認できる。

Aグループでは、詳細不明ながら旧邑知潟に面して吉崎・次場遺跡(No.1)、的場農業倉庫前遺跡(No.3)が成立、吉崎・次場遺跡、次場コウレン遺跡(No.2)から墨書土器「三宅」が出土する。Bグループの寺家遺跡(No.9)では、砂田地区で古代Ⅳ<sub>2</sub>期末に建てられた北部建物群が、Ⅴ<sub>2</sub>期に中央建物群に変わり、いずれの時期も墨書土器が多出する。「宮厨」墨書の出土から祭具管理と饗宴関係を担ったと考えられる、北部建物群周辺では、これまでの銅製品に加え、鉄製品、多彩陶、牛馬歯骨等を用いて、神祇祭祀を中心とした多様な祭祀が執り行われるようだ。大型掘立柱建物SB01(9×2間)を主屋とする中央建物群は、祭祀を管掌する「宮司館」と考えられており、南側には神社遺構(SB21)が存在する。祭祀地区では、多量の土器と金属祭具を用いた律令祭祀が継続する。柳田シャコテ廃寺(No.5)は、同廃寺と主軸方位を異にする大型掘立柱建物2棟(1棟は7×2間)が伽藍東側に建てられるが、古代Ⅴ<sub>2</sub>期のうちに衰退に向かう。吉崎川水系のCグループでは、杉野屋専光寺遺跡(No.23)が宗教活動を活発化するとともに、既存の集落遺跡周辺で新たな遺跡(太田A・C遺跡(No.19・16))や、旧邑知潟に近い微高地に上江モトオリ遺跡(No.13)が成立をみる。Eグループでは、萩島遺跡・萩島B遺跡(No.31・32)が活発化するようだ。飯山川水系の谷平野であるGグループでは、初めて集落遺跡(No.38・39)が確認できる。また、杉野屋専光寺遺跡と丘陵を挟んだ反対側の谷奥に位置する福水ヤシキダ遺跡(No.40)でも、出土遺物の様相から宗教活動が始まるものと考えられる。

〔古代Ⅵ期〕 集落遺跡数は、古代Ⅵ<sub>1</sub>期が15グループ49遺跡(新規成立11遺跡)、Ⅵ<sub>2</sub>期が14グループ38遺跡(同1遺跡)、Ⅵ<sub>3</sub>期が7グループ11遺跡(同2遺跡)をそれぞれ数え、集落遺跡数は古代Ⅵ<sub>1</sub>期にピークを迎えた後、B・C・Iグループを含めた多数の集落遺跡で急速に衰退の様相を呈する(第338図)。Bグループでは、10世紀前後の大規模な飛砂現象に伴い砂丘が移動、寺家遺跡(No.9)砂田・祭祀両地区とも埋没、その機能を一時的に失う。この大規模な飛砂現象は、Dグループ等の旧邑知潟周辺地域にも何らかの影響を及ぼしたと考えられるが、集落遺跡数の推移からは判然とししない。吉崎川水系のCグループは、古代Ⅵ<sub>1</sub>期12遺跡をピークにⅥ<sub>3</sub>期には3遺跡と急減する。Ⅵ<sub>3</sub>期まで確認できる遺跡は、杉野屋専光寺遺跡(No.23)、中川A遺跡(No.24)、吉崎川最下流に古代Ⅵ<sub>1</sub>期に成立した深江遺跡(No.14)に限られる。杉野屋専光寺遺跡(No.23)は、約半町(約50m)の方形回廊状遺構「院」が確認でき<sup>(38)</sup>、「東院寺」等の多量の墨書土器が出土する。隣接する中川A遺跡(No.24)は、出土遺物から杉野屋専光寺遺跡と一



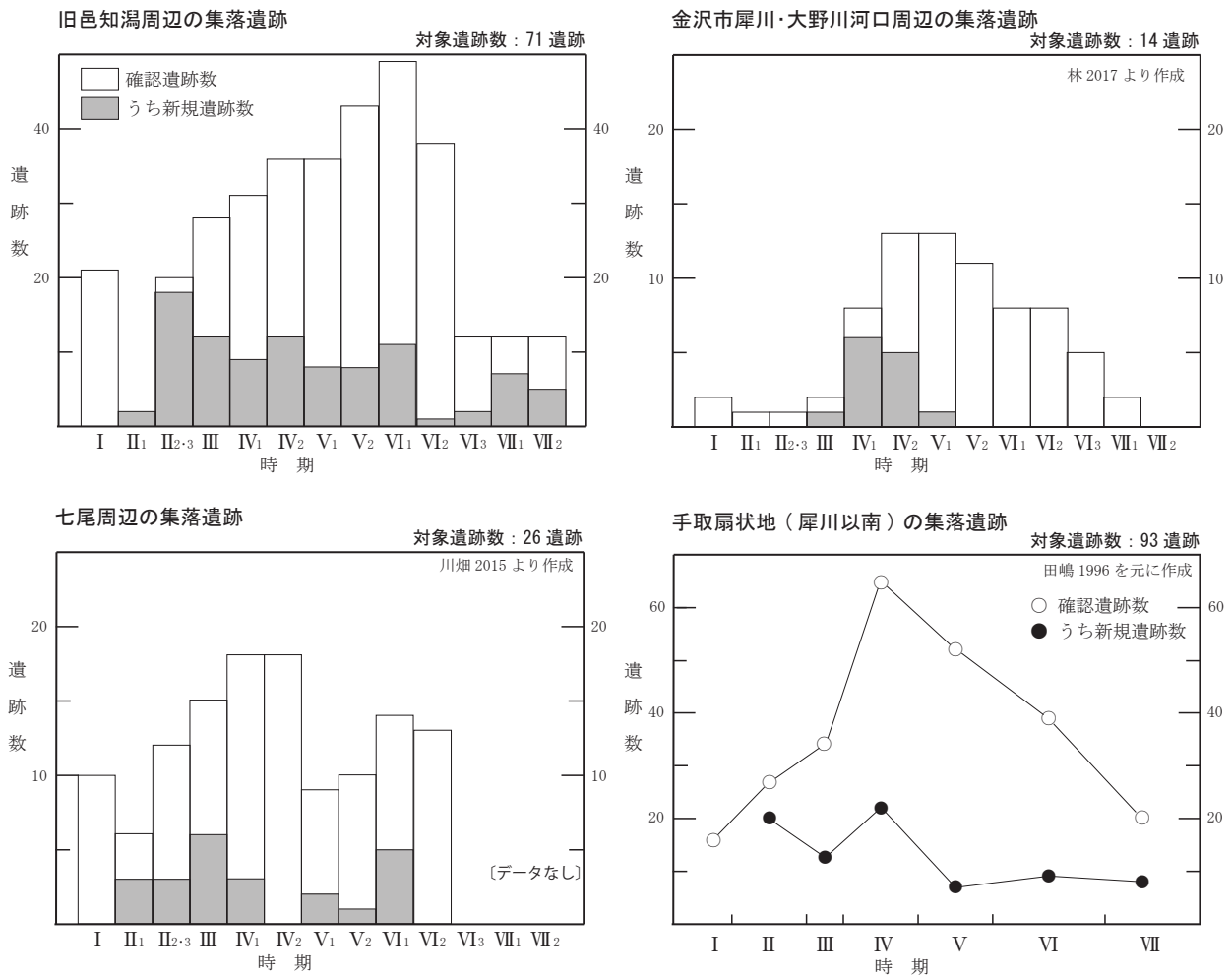
体の集落と考えられる。吉崎川最下流に古代VI<sub>1</sub>期に成立した深江遺跡(No.14)は、詳細不明ながら、腰帯、緑・灰釉陶器が出土し、その立地を含めて新しい動きとして注目できる。Iグループでは、四柳白山下遺跡がE・G地区等で土石流災害が発生し、古代II<sub>3</sub>期に成立した集落域の大部分が埋没、集落域はF地区～羽咋市教委第4次調査区周辺に集約される。同時期には、旧邑知潟北東岸に面した大町C遺跡(No.49)は、相欠式横板組(横板蒸籠組)井戸周辺から多くの墨書土器が出土し、活発な活動が認められる。Mグループは、判然としないものの、VI<sub>1</sub>期に成立する集落遺跡が目立つ傾向を示す。

〔古代VII期〕 集落遺跡数は、古代VII<sub>1</sub>期が10グループ12遺跡(新規成立7遺跡)、VII<sub>2</sub>期が9グループ12遺跡(同5遺跡)を数える。古代VI期より続いた集落遺跡が確実に衰退・解体する一方、VI<sub>3</sub>期以降に新たな集落遺跡が継起的に成立する状況にあり、古代VI<sub>3</sub>期～VII<sub>1</sub>期は集落遺跡の大きな再編期と位置付けられる。また、古代IV期に成立したB・C・Iの3グループを中核とするような集落遺跡の分布は、明瞭に確認できず、県内他地域でもみられる小規模・分散化した印象を受ける。

以上、旧邑知潟周辺の集落遺跡の消長は、集落遺跡数でみた場合、古代I期及びII<sub>3</sub>期以降に急増し、VI<sub>1</sub>期にピークを迎えるまで、集落規模の拡大やCグループに象徴される新規集落の成立を継続するといえる。そして、VI<sub>3</sub>期以降に集落遺跡数が急減する状況から、VI<sub>3</sub>期～VII<sub>1</sub>期に継起的ながら、新たな集落構造に大きく再編されたと整理できる。四柳白山下遺跡でも、第IV面の掘立柱建物が密集する様相から第III面への展開も、同質の流れに位置付けられよう。さらに古代V期以降の、旧邑知潟を意識した低地への集落遺跡(上江モトオリ遺跡、深江遺跡、大町C遺跡等)の進出・活性化も、律令制の変質に起因する新たな動きといえる。

また、グループ間の様相で見れば、古代I期は6世紀後葉の様相を継承しつつ、「北」の須恵器生産を行う羽咋砂丘東縁のBグループ、多数の横穴古墳群が分布する「南」のFグループ、そして計画性の

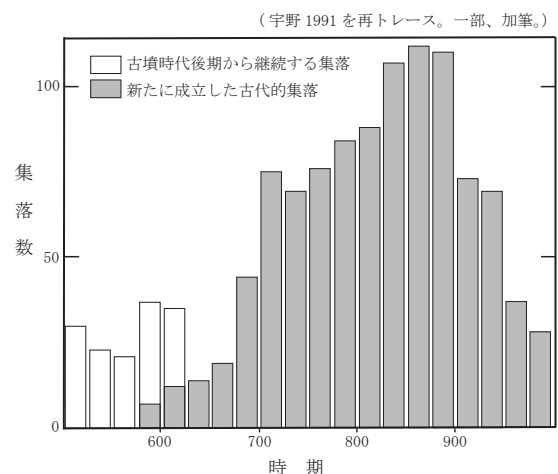
第79表 県内他地域との消長比較表



高い掘立柱建物群が象徴的な曾祢C遺跡が属するIグループが、中核的な3グループと理解できる。この3グループの優位性は、古代II<sub>1</sub>期にみられる集落の再編期を経ても、基本的にIII期まで継続したと考えられる。中でもBグループは、塩や須恵器の生産、律令国家を背景とする祭祀儀礼の執行から、III期までに卓越した存在に成長すると考えられる。また、古代寺院を建立しないIグループは、中心域を地獄谷川に面した曾祢C遺跡周辺から四柳白山下遺跡・四柳ミッコ遺跡周辺に移すとともに、複数の機能をもった集落遺跡群としての性格を示し始める。古代IV期になると、子浦谷のFグループが目立たなくなる一方、IV<sub>2</sub>期以降は吉崎川水系のCグループが急速に集落遺跡数を増加させる。卓越した内容をもつ寺家遺跡が属するBグループ、古代寺院である杉野屋専光寺遺跡を擁するCグループ、四柳白山下遺跡が属するIグループという、異なる様相を示す3グループ(および羽咋郡衙比定地を含むDグループ)を中心とした集落展開は、古代VI<sub>2</sub>期まで継続し、遅くともVII期に解体・再編されると考えられる。

次に、旧邑知瀧周辺地域と県内の3地域<sup>(39)</sup>と比較を行う(第79表)。まず、養老2年(718)に第1次立

第80表 北陸道の集落遺跡数の推移表



国、天平勝宝9年(757)に再び立国する能登国の国府が置かれた七尾周辺地域の様相を整理する。七尾周辺地域の集落遺跡数の推移は、古代Ⅱ<sub>3</sub>期から増加し、Ⅳ期に盛期を迎えた後、Ⅴ期に半減、Ⅵ<sub>1</sub>期に再び盛期を迎えるという、2つのピークが認められる。新規の集落遺跡の成立時期も、古代Ⅱ～Ⅳ<sub>1</sub>期、Ⅴ<sub>1</sub>～Ⅵ<sub>1</sub>期に集中する。前者のピークは、立国に伴う東部・南部丘陵～古府扇状地を中心とした寺院、官衙等を含む各種遺跡の段階的成立を、後者のピークは、承和10年(843)の定額寺の国分寺昇格を含む古府扇状地～西部丘陵の集落活動の活発化を、それぞれ反映したものと考えられる。

金沢市臨海部の犀川・大野川河口周辺地域は、国や郡の管理する「津」を中核として、倉庫・管理を行う港湾施設群や饗宴・宿泊施設、また荘園関連施設や在地有力者の「宅」等の様々な機能をもつ遺跡が集積した地域である。第79表のとおり、古代Ⅳ期に新規遺跡の成立が集中し、弘仁14年(823)の加賀立国に伴う港湾機能の再編を経て、Ⅶ<sub>1</sub>期までに衰退する。また、白山市～金沢市南部(犀川以南)の手取扇状地については、古代Ⅱ<sub>3</sub>期～Ⅳ期に水系を単位とした開発に伴い新たな遺跡が急増、大部分はⅤ期のうちに衰退する。そして、古代Ⅵ期以降は、いくつかの水系に残存した長期継続集落に加え、新たな地点で比較的小規模な集落遺跡が成立する。

これらの3地域と比較した場合、旧邑知潟周辺地域は、新規集落遺跡の成立が古代Ⅱ<sub>3</sub>期～Ⅵ<sub>1</sub>期まで長期にわたり継続すること、集落遺跡数のピークが他地域より遅れるⅥ<sub>1</sub>期にあること、集落遺跡の大きな再編期を6世紀後葉と古代Ⅰ期、および古代Ⅰ期とⅡ<sub>1</sub>期の境、Ⅵ<sub>3</sub>期～Ⅶ<sub>1</sub>期に認められることが指摘できよう。また、旧邑知潟周辺地域の消長は、北陸道(福井・石川・富山・新潟4県)の集落遺跡201遺跡の消長を整理した宇野隆夫氏の集計結果<sup>(40)</sup>と一致する部分が多い(第80表)。氏は、律令社会の形成期である6世紀末～7世紀第3四半期に従来からの集落の再編・集約(集村)化が進み、この集村的集落形態が7世紀第4四半期以降の人口増をもたらしたとする。逆に、中世社会に向かう10世紀初め～11世紀初めには、集村的集落形態が次第に解体し、独立性を高めた小規模・短期の集落が分散化することで、埋蔵文化財包蔵地として発見しにくくなるものと考えた。現時点で、明快な答えを持ち合わせていないが、旧邑知潟周辺地域の集落遺跡の消長を考える上で、示唆に富む指摘である。

### 3 墨書土器等の出土傾向について

以下では、本遺跡の特徴の一つである墨書土器について、これまでの調査を含めて、現時点での整理を行う。A～C・E地区出土分は報告書Ⅲ第23・24表に、G地区出土分は本書第40・41表に、D・F地区出土分、J地区出土の2点(「法師」「吉継」)および羽咋市教育委員会第1～4次調査分は同第81表に、それぞれ取りまとめており、各報告書に掲載された墨書土器の総点数は379点を数える。これらの墨書土器の出土傾向をみるため、本遺跡が立地する扇状地を3等分(南部(A～C・E地区)、中央部(D・F・G地区、市教委第4次調査)、北部(H～K地区、市教委第1～3次調査))し、時期別に整理した表が第82～84表である。第81表のとおり、現時点で北部に含めたI～K地区の資料を欠くものの、中央部を中心にほとんど偏在することなく、墨書土器が出土している状況がわかる。また、時期ごとの推移で見れば、古代集落2期(Ⅳ<sub>1</sub>期)～5期(Ⅴ<sub>2</sub>期～Ⅵ<sub>1</sub>期)の間、各期とも50点以上の墨書が出土しており、古代集落2～5期で全体の77%を占める。その中で、中央部の古代集落5期(F地区中心)、北部の古代集落2期(市第1・2次調査区中心)が比較的多く出土している。

第83・84表は、判読可能な墨書土器約70種220点の文字内容を整理した表である。文字内容の分類に関しては、一般的に役所名・官職・身分、施設・場所、人名・氏名、器名、用途名、数詞・容量、年紀・月日、吉祥句・呪句等に分けられる<sup>(41)</sup>が、本遺跡出土墨書土器については区分を明瞭にできない内容が多いため、便宜的に表のとおり8区分とした。この8区分での点数は、①本遺跡固有に近い特徴的

第81表 県調査D・F地区、羽咋市1～4次調査出土墨書土器一覽表

○県調査D・F地区

地区	調査面	実測番号	押印番号	出土地点	種類・器種	記入部位	文字	時期	地区	調査面	実測番号	押印番号	出土地点	種類・器種	記入部位	文字	時期
D地区	第1面	特46	I・第174図117	北端落ち込み	須・無台坏	外底	□	V	F地区	第Ⅲ面	壘43	IV・第273図613	包含層	須・無台坏	外底	「□□」	IV <sub>2</sub> (古)
D地区	第1面	特48	I・第174図118	北端落ち込み	須・無台坏	外底	「□」	不明	F地区	第Ⅲ面	壘21	IV・第273図614	包含層	須・無台坏	外底	□	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
D地区	第1面	特47	I・第174図119	北端落ち込み	須・無台坏	外底	「□(横カ)」	Vか	F地区	第Ⅲ面	壘52	IV・第273図615	包含層	須・無台坏	外底	「□(門カ)」	VI <sub>2</sub>
D地区	第1面	特8	I・第174図137	包含層	須・無台坏	外底	「□」	不明	F地区	第Ⅲ面	壘44	IV・第273図616	包含層	須・無台坏	外底	「大口(町カ)」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
D地区	第1面	特24	I・第175図139	包含層	須・無台坏	外底	「仔□」	V	F地区	第Ⅲ面	壘74	IV・第273図617	包含層	須・無台坏	外底	田	不明
D地区	第1面	特2	I・第175図140	包含層	須・無台坏	外底	□□	IV	F地区	第Ⅲ面	壘40	IV・第273図618	包含層	須・無台坏	外底	「酒」	IV <sub>2</sub> (古)
D地区	第1面	特4	I・第175図141	整地土	須・無台坏	外底	「□□」	IV <sub>2</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘38	IV・第273図619	包含層	須・無台坏	外底	「木」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
D地区	第1面	特9	I・第175図144	整地土	須・無台坏	外底	「□(酒カ)」	V <sub>2</sub> か	F地区	第Ⅲ面	壘58	IV・第274図620	包含層	須・無台坏	外底	「田地」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
D地区	第Ⅲ-1面	特7	Ⅱ・第98図28	第Ⅱ面ベース土	須・無台坏	外底	「□□(酒田カ)」	IVか	F地区	第Ⅲ面	壘73	IV・第274図621	包含層	須・無台坏	外底	「三□」	IV <sub>2</sub> (古)
D地区	第Ⅲ-1面	特3	Ⅱ・第98図29	第Ⅱ面ベース土	須・無台坏	外底	「□(酒カ)」	不明	F地区	第Ⅲ面	壘70	IV・第274図622	包含層	須・無台坏	外底	「□」「□」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
D地区	第Ⅳ面	特1	Ⅱ・第109図121	SD35	須・無台坏	外底	「□」	V <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘41	IV・第274図623	包含層	須・無台坏	外底	「櫻女」	VI <sub>1</sub>
D地区	第Ⅳ面	特1	Ⅱ・第109図146	河跡	須・有台坏	外底	□	VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘51	IV・第274図624	包含層	須・無台坏	外底	「酒田」	VI <sub>1</sub>
D地区	第Ⅳ面	壘1	IV・第239図123	包含層	須・有台坏	外底	「大町」	IVか	F地区	第Ⅲ面	壘72	IV・第274図625	包含層	須・無台坏	外底	「□□」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第0-1面	壘27	IV・第241図47	1号竖穴	須・無台坏	外底	「□田」	IV <sub>2</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘84	IV・第274図626	包含層	須・無台坏	外底	「櫻女」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第0-1面	壘30	IV・第241図54	SK01	須・無台坏	外底	「□(横カ)葉」	IV <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘57	IV・第274図627	包含層	須・無台坏	外底	□田	不明
F地区	第0-1面	壘64	IV・第241図57	SK02	須・無台坏	外底	□	不明	F地区	第Ⅲ面	壘85	IV・第274図628	包含層	須・無台坏	外底	□田	不明
F地区	第0-1面	壘36	IV・第245図101	SD01	須・有台坏	外底	「大」	IV <sub>2</sub> (古)	F地区	第Ⅲ面	壘93	IV・第274図629	包含層	須・無台坏	外底	「酒」	不明
F地区	第0-1面	壘60	IV・第246図106	SD10	須・有台坏	外底	「□」	VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘81	IV・第274図630	包含層	須・無台坏	外底	□□	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第0-1面	壘32	IV・第246図110	SD14	須・有台坏	外底	「□」	IV <sub>2</sub> (古)	F地区	第Ⅲ面	壘68	IV・第274図631	包含層	須・無台坏	外底	「□」「□」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第0-1面	壘87	IV・第250図169	包含層	須・坏蓋	外天井	「□(酒カ)」	IV <sub>2</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘20	IV・第274図632	包含層	須・無台坏	外底	「酒田」	V <sub>2</sub>
F地区	第0-1面	壘25	IV・第250図171	包含層	須・無台坏	外底	「□」	V <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘75	IV・第274図633	包含層	須・無台坏	外底	□田	不明
F地区	第0-1面	壘34	IV・第250図172	包含層	須・無台坏	外底	「東」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘76	IV・第274図634	包含層	須・無台坏	外底	□(正カ)」	不明
F地区	第0-1面	壘28	IV・第250図173	包含層	須・無台坏	外底	「□(田カ)地」	V <sub>2</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘12	IV・第274図635	包含層	須・有台坏	外底	「□」	IV <sub>1</sub>
F地区	第0-1面	壘26	IV・第250図174	包含層	須・無台坏	外底	「□」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘11	IV・第274図636	包含層	須・有台坏	外底	「土万呂」	V <sub>1</sub>
F地区	第0-1面	壘65	IV・第250図175	包含層	須・無台坏	外底	□□	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘17	IV・第274図637	包含層	須・有台坏	外底	「□□」	IV <sub>1</sub>
F地区	第0-1面	壘35	IV・第250図176	包含層	須・無台坏	外底	「酒」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘78	IV・第274図638	包含層	須・有台坏	外底	「□□」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第0-1面	壘31	IV・第250図177	包含層	須・無台坏	外底	田	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅲ面	壘8	IV・第274図639	包含層	須・有台坏	外底	「十」	V
F地区	第0-1面	壘61	IV・第250図178	包含層	須・無台坏	外底	「□」	VI <sub>1</sub> か	F地区	第Ⅲ面	壘23	IV・第274図640	包含層	須・有台坏	外底	「東」	IV <sub>1</sub>
F地区	第0-1面	壘107	IV・第250図179	包含層	須・無台坏	外底	□	VIか	F地区	第Ⅳ面	壘102	IV・第287図939	SE04	須・無台坏	外底	「□□」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第0-1面	壘33	IV・第250図180	包含層	須・無台坏	外底	「櫻女」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘56	IV・第288図940	SD201	須・無台坏	外底	「田地」	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	壘7	IV・第254図242	P160	須・無台坏	外底	□	VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘91	IV・第288図941	SD601	須・無台坏	外底	「□(酒カ)」	IV <sub>2</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘16	IV・第254図243	P160	須・無台坏	外底	「□」	VI <sub>2</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘82	IV・第288図942	P996	須・無台坏	外底	□(家カ)」	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	壘2	IV・第254図244	P206	須・無台坏	外底	「□女」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘63	IV・第292図1019	包含層	土・無台坏	外側	「酒田」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘13	IV・第254図252	P249	須・無台坏	外底	「□」	VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘49	IV・第292図1020	包含層	土・土塊	外底	「万」	IV <sub>2</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘10	IV・第255図265	P270	須・無台坏	外底	「大口(家カ)」	不明	F地区	第Ⅳ面	壘4	IV・第292図1021	包含層	須・坏蓋	外底	「土万呂」	IV <sub>2</sub> (新)
F地区	第Ⅲ面	壘39	IV・第255図270	P290	須・無台坏	外底	「丸」	IV <sub>2</sub> (新)	F地区	第Ⅳ面	壘5	IV・第292図1023	包含層	須・無台坏	外底	「酒田」	VI <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘15	IV・第255図275	P333	須・坏蓋	外天井	「酒田」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘97	IV・第292図1024	包含層	須・無台坏	外底	「仲」	Vか
F地区	第Ⅲ面	壘9	IV・第255図279	P336	須・無台坏	外底	「酒田」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘89	IV・第293図1025	包含層	須・無台坏	外底	「酒女」	IV <sub>2</sub> (新)
F地区	第Ⅲ面	壘55	IV・第258図340	SD201	須・坏蓋	外天井	「□(大カ)町」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘53	IV・第293図1026	包含層	須・無台坏	外底	「酒田」	VI <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘37	IV・第259図355	SD201	須・無台坏	外底	「方□」	IV <sub>2</sub> (古)	F地区	第Ⅳ面	壘99	IV・第293図1027	包含層	須・無台坏	外底	「大上」	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	壘80	IV・第259図356	SD201	須・有台坏	外底	「□□」	IV <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘100	IV・第293図1028	包含層	須・無台坏	外底	「上」	IV <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘108	IV・第259図357	SD201	須・有台坏	外底	□家カ」	IV <sub>2</sub> (古)	F地区	第Ⅳ面	壘77	IV・第293図1029	包含層	須・無台坏	外底	「田□(地カ)」	IV <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘45	IV・第259図358	SD201	須・有台坏	外底	□(酒カ)田」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘106	IV・第293図1030	包含層	須・無台坏	外底	「東」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘69	IV・第259図359	SD201	須・有台坏	外底	□ □ (習)」	IV <sub>2</sub> (古)か	F地区	第Ⅳ面	壘42	IV・第293図1031	包含層	須・無台坏	外底	「□」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘1	IV・第260図374	SD206	須・有台坏	外底	「土万呂」	IVか	F地区	第Ⅳ面	壘29	IV・第293図1032	包含層	須・無台坏	外底	「□□」	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	壘96	IV・第261図392	SD222	須・無台坏	外底	「□」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘67	IV・第293図1033	包含層	須・無台坏	外底	田	VI <sub>2</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘4	IV・第262図400	SD222	須・有台坏	外底	「□(土または下カ)」	V <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘62	IV・第293図1034	包含層	須・無台坏	外底	「□(十カ)」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘5	IV・第262図403	SD222	須・有台坏	外底	「酒」	IV <sub>2</sub> (古)	F地区	第Ⅳ面	壘71	IV・第293図1035	包含層	須・無台坏	外底	「酒田」	不明
F地区	第Ⅲ面	壘3	IV・第262図403	SD222	須・有台坏	外底	□	IV <sub>2</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘66	IV・第293図1036	包含層	須・無台坏	外底	「□」	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	D436	IV・第262図405	SD222	須・有台坏	外底	「池□」	V <sub>2</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘105	IV・第293図1037	包含層	須・無台坏	外底	「田地」	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘6	IV・第265図461	SD271	須・有台坏	外底	□	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘92	IV・第293図1038	包含層	須・無台坏	外底	「音女」	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	壘24	IV・第267図489	SX201	須・無台坏	外底	「酒田」	VI <sub>2</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘98	IV・第293図1039	包含層	須・有台坏	外底	「□(大カ)」	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	壘79	IV・第267図495	大溝	須・無台坏	外底	「立」	IV <sub>2</sub> (古)	F地区	第Ⅳ面	壘88	IV・第293図1040	包含層	須・有台坏	外底	□	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	壘50	IV・第268図505	河跡	須・無台坏	外底	□	IV <sub>2</sub> (古)	F地区	第Ⅳ面	壘47	IV・第294図1041	包含層	須・有台坏	外底	「上家」	V <sub>2</sub> か
F地区	第Ⅲ面	壘94	IV・第268図506	河跡	須・無台坏	外底	□	IV <sub>2</sub> (古)	F地区	第Ⅳ面	壘104	IV・第294図1042	包含層	須・有台坏	外底	「□」	VI <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘19	IV・第273図609	包含層	須・坏蓋	外天井	「大口(町カ)」	IV <sub>2</sub>	F地区	第Ⅳ面	壘90	IV・第294図1043	包含層	須・有台坏	外底	□	V <sub>2</sub> ～VI <sub>1</sub>
F地区	第Ⅲ面	壘14	IV・第273図610	包含層	須・坏蓋	外天井	「大カ」	不明	F地区	第Ⅳ面	壘48	IV・第294図1044	包含層	須・有台坏	外底	「□(酒カ)」	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	壘22	IV・第273図611	包含層	須・坏蓋	外底	□□	不明	F地区	第Ⅳ面	壘54	IV・第294図1045	包含層	須・有台坏	外底	「大口(町カ)」	IV <sub>2</sub> (古)
F地区	第Ⅲ面	壘18	IV・第273図612	包含層	須・無台坏	外底	「十」	Vか	J地区	第Ⅳ面	H16壘12	VI・	JSB409(P4159)	須・坏蓋	外天井	「法師」	Ⅲか
									J地区	第Ⅳ面	H16壘18	VI・		須・無台坏	外底	「吉箱」	V <sub>1</sub>

○市第1・2・4次調査

調査次	押印番号	出土地点	種類・器種	記入部位	文字	時期	調査次	押印番号	出土地点	種類・器種	記入部位	文字	時期
1次	市I・第2図1	1948年表採	須・坏蓋	外天井	「□(文カ)鳥」	IV <sub>2</sub> か	2次	市II・第9図331	S D 04-1	須・有台			

第3節 周辺の古代集落遺跡との比較検討

第82表 四柳白山下遺跡出土墨書土器集計表

地区	実測点数	集落1期	集落2期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	時期不明
		Ⅲ期	Ⅳ <sub>1</sub> 期	Ⅳ <sub>2</sub> (古)期	Ⅳ <sub>2</sub> (新)～Ⅴ <sub>1</sub> 期	Ⅴ <sub>2</sub> ～Ⅵ <sub>1</sub> 期	Ⅵ <sub>2</sub> ～Ⅵ <sub>3</sub> 期	
南部(県A～C・E地区)	133	3	27	22	28	25	11	17
中央部(県D・F・G地区、市4次)	180	3	25	31	21	63	11	26
北部(県H～K地区、市1～3次)※	66	6	31	8	6	5	0	10
計	379	12	83	61	55	93	22	53
	100%	3.2%	21.9%	16.1%	14.5%	24.5%	5.8%	14.0%

※県I～K地区は「法師」「吉継」2点のみ集計。

第83表 四柳白山下遺跡出土墨書土器内容別一覧表1

文字区分	文字内容	地区区分	実測点数	集落1期	集落2期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	時期不明
				Ⅲ期	Ⅳ <sub>1</sub> 期	Ⅳ <sub>2</sub> (古)期	Ⅳ <sub>2</sub> (新)～Ⅴ <sub>1</sub> 期	Ⅴ <sub>2</sub> ～Ⅵ <sub>1</sub> 期	Ⅵ <sub>2</sub> ～Ⅵ <sub>3</sub> 期	
特徴的 文字 73点	「乙上」 「□(乙カ)上」 21点	南部	18		6	6	1	3		2
		中央部	2							2
		北部	1							1
	「乙」 「乙」 5点	南部	2				1	1		
		中央部	2		1	1				
		北部	1		1					
	「酒田」 12点	南部	0							
		中央部	12				1	8	1	2
		北部	0							
	「□(酒カ)田」 11点	南部	0							
		中央部	10		1			4	1	4
		北部	1		1					
	「酒女」 2点	南部	0							
		中央部	1				1			
		北部	1				1			
「酒」 「酒」 7点	南部	0								
	中央部	7			2		3		2	
	北部	0								
「田地」 「田」 13点	南部	4		1	1	「田地」 「田」	1			
	中央部	6		1	1		3			
	北部	3		1		2				
「田地八十」 「八十」 2点	南部	0								
	中央部	0								
	北部	2	1	1						
施設名 43点	「上家」 「上」 5点	南部	3		1		1			1
		中央部	2		「上」	1				
		北部	0					「上」	1	
	「下家」 7点	南部	7	1	2	2	2			
		中央部	0							
		北部	0							
	「東家」 「□(東カ)」 「□(東カ)」 3点	南部	0							
		中央部	0							
		北部	3	2	1					
	「屋東」 「屋」 4点	南部	3			1	1	1		
		中央部	1		1					
		北部	0							
	「東」 4点	南部	0							
		中央部	4		「東」	1		2(各1)		
		北部	0							
「大家」 「大」 3点	南部	0								
	中央部	3			1				2	
	北部	0								
「青家」 「青」 6点	南部	6			1	2	2	1		
	中央部	0								
	北部	0								
「家」 「家」 7点	南部	4			2	2				
	中央部	3		2	1					
	北部	0								
「榎野一」 「二」 3点	南部	3				2	1			
	中央部	0								
	北部	0								
「小庭」 1点	南部	1		1						
	中央部	0								
	北部	0								
寺関連 文字 5点	「寺」 「□(寺カ)」 4点	南部	3					3		
		中央部	1		1					
		北部	0							
	「法師」 1点	南部	0							
		北部	1	1						

※地区区分は、南部は県A～C・E地区、中央部は県D・F・G地区、市教委4次、北部は県H～K地区、市1～3次を指す。

文字73点(33.2%)、②施設名43点(19.5%)、③寺関連文字5点(2.3%)、④地名的文字10点(4.5%)、⑤人名的文字30点(18.2%)、⑥吉祥句13点(5.9%)、⑦記号的文字14点(6.4%)、⑧その他22点(10%)となり、特徴的文字、施設名、人名的文字で全体の約70%を占める。一方、吉祥句や記号的文字は各6%前後と、かなり少ないことがわかる。

本遺跡固有に近い文字は、集団表示機能を含むとされ、「乙」「乙上」、「酒田」「酒女」、「田地」「田地+数字」の3種に大別できる。「乙」「乙上」は、古代集落2・3期は南・中央・北部とも出土するが、古代4・5期は南部のみとなる。一方、「酒田」「酒女」は南部では出土しない。「田地」は、古代集落2期以降、南・中央・北部とも確認でき、「田地」と「八十」の組み合わせは、古い時期に北部のみに限られるようだ。

施設名は、それぞれが特定の建物を指す、「上家」(略形の「上」)、「下家」、「東家」、「屋東」、「東」、「大家」、「青家」(略形の「青」)、「家」、「榎野+数字」、「小庭」が確認でき、「小庭」は人名の可能性を残す。「家」を記す施設のうち、「上家」「上」と「下家」が対となり、それぞれの出土傾向から「下家」は本遺跡南寄りに存在した施設と考えられる。時期的な変遷は、古代集落1期に南部に「下家」(+「上家」)、北部に「東家」と記す施設が存在、古代集落2期に中央部で「屋東」「東」と記す対象となる「屋」が加わるようだ。また、古代集落3期に南部で「青家」、中央部で「大家」と記す施設が出現する。「大家」が短期間で廃絶するのに対して、「青家」は中央部の「上家」「屋」とともに、古代集落6期まで存続する可能性が高い。「家」墨書は南部・中央部に、「小庭」墨書は南部で確認できる。古代集落4・5期に南部で確認できる「榎野」は、「一」の数字が付すことから複数の建物群を指す可能性をもつ。寺関連の文字は、「寺」「法師」の2種が確認できる。J地区出土の「法師」は、出土墨書群の中でも古く、用途に近い内容といえる。「寺」墨書は、古代集落2期の中央部で1点、古代集落5期の南部で3点が出土、同一の建物を指すかは不明である。瓦片や瓦塔の出土をみないことから、小規模な仏堂程度の建物の存在が考えられ、古代集落5期には灯明痕をもつ坏類や仏器的な土器器大型盤が出土、活発な活動が推測できる。

地名的文字は、「罌本」1点、「大町」6点、「大海」3点の3種10点が確認できる(第83表)。「罌本」は、宝達志水町杉野屋専光寺遺跡からも出土する文字であり、『和名類聚抄』に羽咋郡郷名に同名の郷の記載があるが、その評価は判然としない。「大町」の文字は、北西約1kmの旧邑知瀧縁に立地する大町C遺跡(第4図)からも出土、両遺跡は「大町」と呼ばれるような一体性を有したと考えられる。本遺跡の文字が古代集落2期に出現するのに対して、大町C遺跡は古代集落6期(VI<sub>2</sub>~VI<sub>3</sub>期)の土器に記され、集落規模からも、本遺跡が先行するものと考えられる。南部で出土した「大海」は、やはり『和名類聚抄』羽咋郡郷名に同名の郷記載があるものの、旧邑知瀧を指した可能性が高いように感じられる。

人名の墨書は、男性的な「玉万呂」、「万呂」(略形の「万」)、「小足」、「忍人」の4種27点、女性的な「倉富女」、「足女」、「菅女」、「榎女」、「女」、「若枝」、「□□(刀自カ)」の7種13点を確認、女性的な文字が新しい傾向を示す。「玉万呂」が中央部・北部で、「小足」が南部に偏在するのに対して、「万呂」(略形の「万」)、「忍人」は比較的広範な地点から出土する<sup>(42)</sup>。また、「倉富女」3点は、羽咋市教委第2次調査で検出した倉庫様の総柱構造の建物プラン内から出土しており、建物に対する祭祀行為と位置付けられている<sup>(43)</sup>。「榎女」は、古代集落5期の中央部でまとまって出土する。

低い量比を示す吉祥句は、古代集落2期までは南部出土の「大」「大成」「吉」各1点にとどまるのに対して、古代集落4期以降は特定の文字に偏在せず、「吉継」「福」「満」「得」「本」が少数ながらも各地区から出土、古代集落6期は5点と全体の半数を占める。管理的要素が強いとされる記号的文字は、前述のとおり、全体に占める比率は高くない。古代集落2期まで「×」に限られていたものが、古代集落5期以降は「//」が加わり、その点数も増加傾向を示す。その他に区分した文字は多岐にわたり、文字内容が判読しにくい個体が多い。中では、古代集落4・5期の中央部で「仲」が目立つ存在である。

第3節 周辺の古代集落遺跡との比較検討

第84表 四柳白山下遺跡出土墨書土器内容別一覧表2

文字区分	文字内容	地区区分	実測 点数	集落1期	集落2期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	時期不明
				Ⅲ期	Ⅳ <sub>1</sub> 期	Ⅳ <sub>2</sub> (古)期	Ⅳ <sub>2</sub> (新)～Ⅴ <sub>1</sub> 期	Ⅴ <sub>2</sub> ～Ⅵ <sub>1</sub> 期	Ⅵ <sub>2</sub> ～Ⅵ <sub>3</sub> 期	
地名 的 文 字 10 点	「置本□」1点	南部	0							
		中央部	1			1				
		北部	0							
	「大町」 「□(大カ)町」 「大□(町カ)」6点	南部	0							
		中央部	6		1	3		2		
		北部	0							
	「大海」3点	南部	3			1	2			
		中央部	0							
		北部	0							
人名 的 文 字 (男 性) 27 点	「玉万呂」「土万 」10点	南部	0							
		中央部	4		2		2			
		北部	6	1	2	2				1
	「万呂」「□万呂」 「□万□」万呂」 □万呂」「万」10点	南部	1		「万呂」1					
		中央部	5		「万」1	2	1			1
		北部	4		2	2				
	「小足」「□足」 」2点	南部	2		「□足」1		「小足」1			
		中央部	0							
		北部	0							
	「忍人」 「忍□(人カ)」 「□人」5点	南部	1			1				
		中央部	0							
		北部	4		3		1			
人名 的 文 字 (女 性) 13 点	「倉富女」「倉富 」3点	南部	0							
		中央部	0							
		北部	3		3					
	「足女」1点 「菅女」1点 「櫻女」4点	南部	1				「足女」1			
		中央部	5			「菅女」1		「櫻女」4		
		北部	0							
	「□女」1点 「女」1点	南部	1		「女」1					
		中央部	1					「□女」1		
		北部	0							
	「若枝」1点 「□□(刀自カ)」 」1点	南部	2					「若枝」1		「□□(刀自カ)」1
		中央部	0							
		北部	0							
	吉祥 句 13 点	「大」1点 「大成」1点	南部	2		各1				
中央部			0							
北部			0							
「吉継」2点 「□(吉カ)」1点		南部	2	「□(吉カ)」1			「吉継」1			
		中央部	0							
		北部	1				「吉継」1			
「福□」「福」 「□(福カ)」 」5点		南部	4					2	2	
		中央部	1					1		
		北部	0							
「満」1点 「得」1点 「本」1点		南部	1				「満」1			
	中央部	2						「得」「本」各1		
	北部	0								
記号 的 文 字 43 点	「Ⅲ」「Ⅳ」 「□(Ⅳカ)」 」7点	南部	4					1	3	
		中央部	1					1		
		北部	2		1			1		
	「十」「×」 漆書「十」 」6点	南部	3	漆書1	2					
		中央部	3				1	2		
		北部	0							
	「○」1点	南部	0							
		中央部	0							
		北部	1					1		
その他・不明 181 点	南部		1		「村」1					
			1				「□(蘭カ)」1			
			1				「目」1			
			1				「左□□」1			
			1						「林□」1	
			1						「井□」1	
			1						「知」1	
		中央部		3				「伸」1	「伸」「□伸」各1	
				1	「□物」1					
				1			「三□」1			
				1			「立」1			
				1				「九」1		
			1				「仔□」1			
	北部		1			「住」1				
			1		「□(文カ)易」1					
			1				「秋」1			
			1					「井門」1		
	判読できず	南部	45	0	8	7	5	10	3	12
		中央部	86	2	12	15	11	26	7	13
		北部	28	1	13	3	1	2	0	8





第87表 旧邑知潟周辺の特徴的な遺物出土一覧表

区分	No.	遺跡名	実測点数	内容
A	1	吉備・次場遺跡	2	銅製丸鋸(漆付着)1、銅製蛇尾(漆付着)
B	9	寺家遺跡	22	銅製丸鋸5(うち1漆残存)、石製丸鋸1(漆塗)、銅製巡方5(うち1漆残存)、銅製巡方2、蛇尾3、市16次銅製巡方1
C	21	杉野屋ロクナワリ遺跡	1	銅製巡方
	24	中川A遺跡	1	石製巡方
I	45	四柳白山下遺跡	6	銅製丸鋸1(漆塗、A地区)、銅製巡方2(G地区)、石製巡方1(F地区)、銅製蛇尾1(F地区)
K	56	久江中ザミヤシキ遺跡	1	銅製巡方

総計 32点

銅製丸鋸 99点

区分	No.	遺跡名	実測点数	内容
A	2	次場コウレン遺跡	5	緑銅陶器1(坑1)、灰銅陶器4(坑3、壺1)
B	9	寺家遺跡	23	多形陶(小壺12、小壺蓋6、瓶1、陶杖2等)、他に越州高麗1
	13	上江モトオリ遺跡	7	緑銅陶器(坑3、耳皿1、瓶2、壺1)
	14	深江遺跡	27	灰銅陶器(項頸10、皿2、瓶6、小壺・壺8、壺蓋)
C	23	杉野屋専光寺遺跡	2?	緑銅陶器(不明)、灰銅陶器(不明)
	24	中川A遺跡	1	灰銅陶器(壺1)
E	30	森田遺跡	2	緑銅陶器1(壺1)、灰銅陶器1(皿)
F	36	散田跡山遺跡	3	灰銅陶器3(坑2、皿1)
I	45	四柳白山下遺跡	1	緑銅陶器1(瓶み1)
K	56	久江中ザミヤシキ遺跡	14	緑銅陶器2(坑2)、灰銅陶器12(坑4、皿7、瓶1)他に白磁焼1類1点
L	59	谷内ザンガンヤキ遺跡	13	緑銅陶器9(坑4、皿5)、灰銅陶器4(坑2、皿1、瓶1)
P	71	上柳中村遺跡	1	緑銅陶器1(皿1)

銅製丸鋸61点

区分	No.	遺跡名	実測点数	内容
A	1	吉備・次場遺跡	1	和銅閉片1
B	9	寺家遺跡	43	和銅閉片12、萬年通宝6、神功閉片12、隆平永宝9、富寿神宝3、永相国宝1、曉益神宝1
I	45	四柳白山下遺跡	3	和銅閉片1(A地区)、隆平永宝2(F-G地区)
K	56	久江中ザミヤシキ遺跡	3	延喜通宝3
L	61	金丸杉谷遺跡	11	隆平永寶11。小竈に埋納。他に金丸宮地遺跡で11点出土との記録もあり

銅製丸鋸11点

区分	No.	遺跡名	実測点数	内容
B	9	寺家遺跡	3	他に銅製片を再加工した製品あり
G	40	柳水ヤシキ遺跡	4	3点とも完形。井戸内から銅製三銅鏡1・銅杖頭2と出土。
I	45	四柳白山下遺跡	1	F-J地区第Ⅲ-2面
K	56	久江中ザミヤシキ遺跡	3	

鉄鉢

区分	No.	遺跡名	実測点数	内容
A	1	吉備・次場遺跡	1	
B	2	次場コウレン遺跡	1	
B	5	柳田シヤコヤ原寺	5	
	9	寺家遺跡	3	
	17	太田ツツミタ遺跡	1	
C	18	二口カミアレタ遺跡	1	
	23	杉野屋専光寺遺跡	多数	
	24	中川A遺跡	5	
I	45	四柳白山下遺跡	2	

第86表 旧邑知潟周辺の出土土書土器内容一覧表2

※ 欄内は、2遺跡以上で共通する文字を示す。

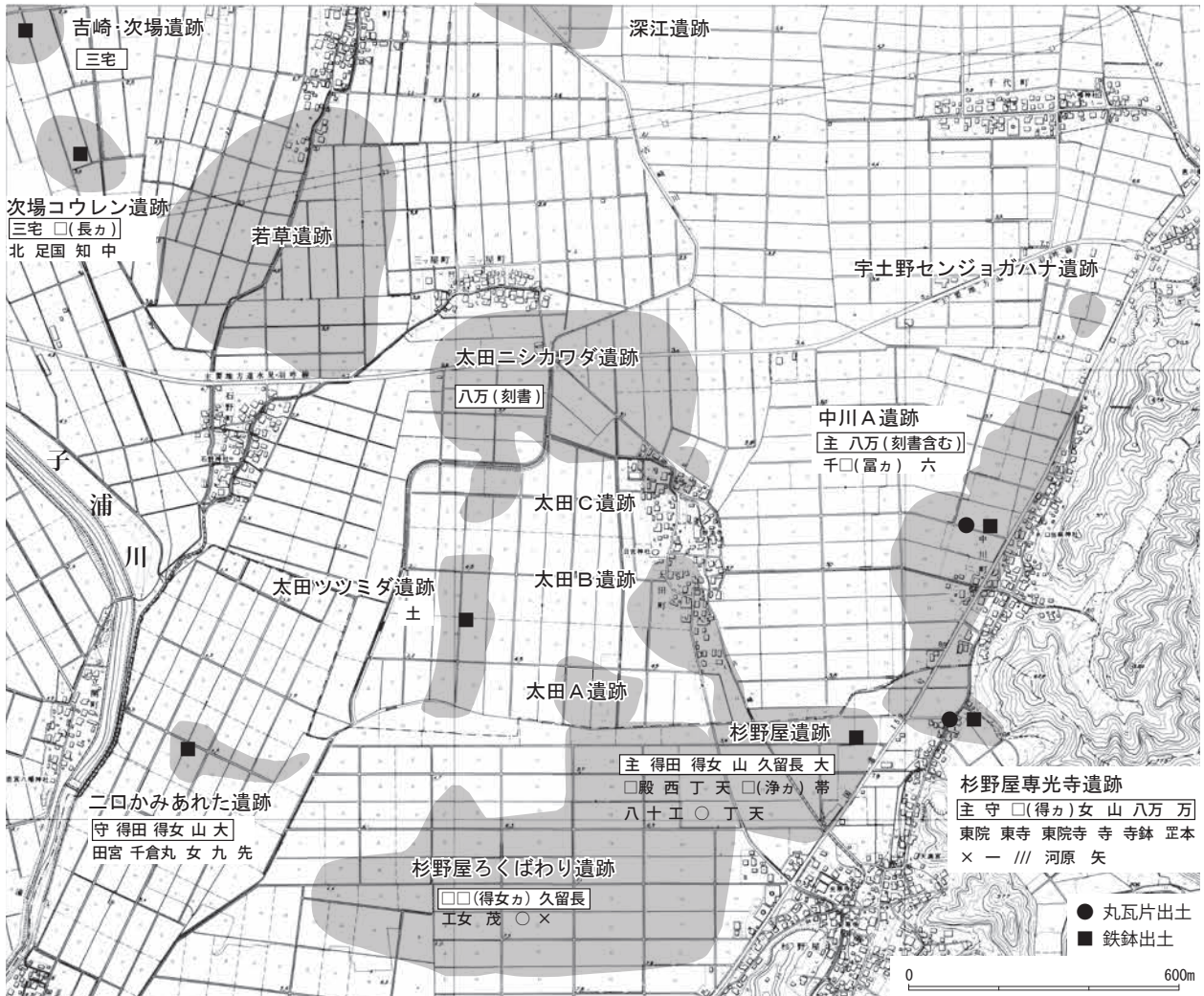
グループ区分	E	G	J	K	L	P
遺跡名	39 萩市遺跡	38 宇土野ヤノキ遺跡	54 高島テラダ遺跡	55 久江中ザミヤシキ遺跡	57 金丸宮地遺跡	71 上柳中村遺跡
出土土器出土時期	VI1	V2	IV1	VIか	VI	VI・VI3
出土土書土器実測点数	1	1	1	1	1	3
うち判読可能点数	1	1	9	1	1	2
文字種類数	1	1	9	1	1	2
乙上、乙						
酒田、酒女						
田地、田地八十、八十						
柳田						
八万						
守						
山						
同前、司、司前、司口						
口(部分)						
宮						
宮前						
三宅						
前宅						
口						
上家、平家、上						
東、扇東、東家						
中家						
北、西、口前、南						
大家						
青家、青						
家						
久留長						
長、長口						
田宮						
寺						
東院、東寺、東院寺、東						
その他						
粟木口、粟木						
木町						
大雅						
玉方呂						
万呂、万						
その他						
倉富女						
裡女						
女						
裡女						
その他						
大、大味、天口、百大						
太						
吉備、吉						
福、福口						
福、得、本						
主						
生						
富						
その他						
△、△△、△△△						
△、×						
○						
丁						
その他(カッコ内は2点以上の点数)	小	口(於カ)	⑤、⑥	⑤	⑤	入

以上、本遺跡出土の墨書土器の特徴を整理すれば、①古代集落2期(Ⅳ<sub>1</sub>期)以降に墨書土器が急増、その点数(397点)や種類(約70種)が多いこと、②判読可能な文字内容は集団表示とも考えられる本遺跡固有の特徴的な文字(「乙」・「乙上」、「酒田」「酒女」、「田地」と、在地性が高い「家」を主体とする施設名(「上家」「下家」「東家」「大家」「青家」「家」「屋東」等)、人名的文字(「玉万呂」「万呂」「倉富女」「梗女」等)で約70%を占める一方、管理的要素が強いとされる記号的文字や、一般にⅤ期(古代集落4期)以降増加する吉祥句が各6%前後と低い比率を示すこと、「長」等の役職名が存在しないことが指摘できる。また、「寺」墨書は仏堂の存在を示す他、「大町」墨書は本遺跡周辺の地名の可能性が高い。

次に、第336図、第78表で示した旧邑知潟周辺地域の集落遺跡との対比の中で、本遺跡の墨書土器の様相を位置付けたい。第78表の71遺跡中25遺跡で墨書土器が出土し、調査面積や調査箇所性格に左右される要素が強いものの、一定の調査面積があれば、数点以上の墨書土器が出土する状況にある。一方、発掘調査報告書等で掲載された墨書土器約1,013点については、Bグループの寺家遺跡(No.3)が314点、Iグループの本遺跡(No.46)が397点、Cグループの「杉野屋遺跡群」(文字の共有等が認められるNo.15～25の遺跡を仮称、後述)が約212点と、全点数の約91%を占めており、強い偏在性を示す(残る22遺跡で計90点)。墨書土器の出土点数が、識字層と用途を背景として、各遺跡の性格を反映することも事実であろう。これらの点数・時期や文字内容の遺跡間共有関係については、第85・86表に示した。全体の傾向として、各グループ内における文字共有がかなり認められるものの、多くのグループで出土する文字は「南」「西」等の方位のみを記す施設名や、職名的文字「長」、吉祥句「大」に限定されるようだ。施設名・職名的文字については、国家が関与して神祇祭祀を執り行う寺家遺跡で「司」「宮」「中家」「長」「南」「神」が、杉野屋遺跡群で「□殿」「久留長」「長」「田宮」「西」が、長者川遺跡(No.26)で「□島家」が、高島カタタ・スギモト遺跡(No.52)で「家」がそれぞれ出土する。四柳白山下遺跡のように複数の「家」が並存する事例はみあたらない。また、旧邑知潟に面した吉崎・次場遺跡(No.1)で「三宅」、次場コウレン遺跡(No.2)で「三宅」「長」、大町C遺跡で「前宅」「長」が出土、庄家の可能性をもつ「宅」の文字は9世紀以降に用いられるようだ。「寺」の文字は、寺家遺跡、杉野屋遺跡群で「寺」が確認できる他、杉野屋遺跡群の杉野屋専光寺遺跡では「東院寺」「東寺」「東院」が出土する。

主要遺跡内での文字内容の構成で比較した場合をみてみたい。寺家遺跡については、9世紀前半の神祇関連の厨施設と考えられる北部建物群・2号井戸周辺では記号的文字「//」「///」が、9世紀後半の宮司館と考えられる中央建物群では吉祥句「大」が、8世紀後半以降に祭祀が始まる祭祀地区では記号的文字「/」「//」「///」と吉祥句「大」「太」が、それぞれ主体を占める<sup>(44)</sup>。寺家遺跡総体の文字構成は、所有・管理を主目的とする施設名・職名的文字と記号的文字、吉祥句が大部分を占め、人名的墨書が基本的に欠落する点が指摘可能である。また、杉野屋遺跡群は、「主」「守」「得女」「得田」「八万」「山」「帯」の文字共有が指摘されており<sup>(45)</sup>、「○」「×」等の記号的文字が比較的目立つ他、「万呂」「女」等の人名的文字や「丁」も散見する(第339図)。杉野屋遺跡群総体の文字構成としては、特徴的文字(「主」「守」「得女」等)を主体に、施設名・職名的文字(「□殿」「久留長」「長」「田宮」)、寺関連文字「八万」<sup>(46)</sup>、記号的文字で構成され、杉野屋専光寺遺跡で寺院関連文字(「東院寺」「東寺」「東院」「寺鉢」)が加わる。四柳白山下遺跡とは、その多様性が近い要素といえ、施設名より職名的文字が多い点が異なる。

次に、旧邑知潟周辺の腰帯、皇朝銭、多彩陶、施釉陶器、銅鏡、鉄鉢の出土状況を概観する(第87表)。腰帯は、Bグループの寺家遺跡22点が卓越し、Aグループの吉崎・次場遺跡で2点、Cグループの杉野屋遺跡群で2点、Iグループの本遺跡で6点、Kグループの久江サザミヤシキ遺跡で1点がそれぞれ出土する。皇朝銭も同様な傾向を示すが、Cグループでは出土をみない。多彩陶はBグループの寺家遺跡でのみ確認できる。施釉陶器は、Bグループの寺家遺跡34点の他、A・C・I等のグループ11遺跡で出

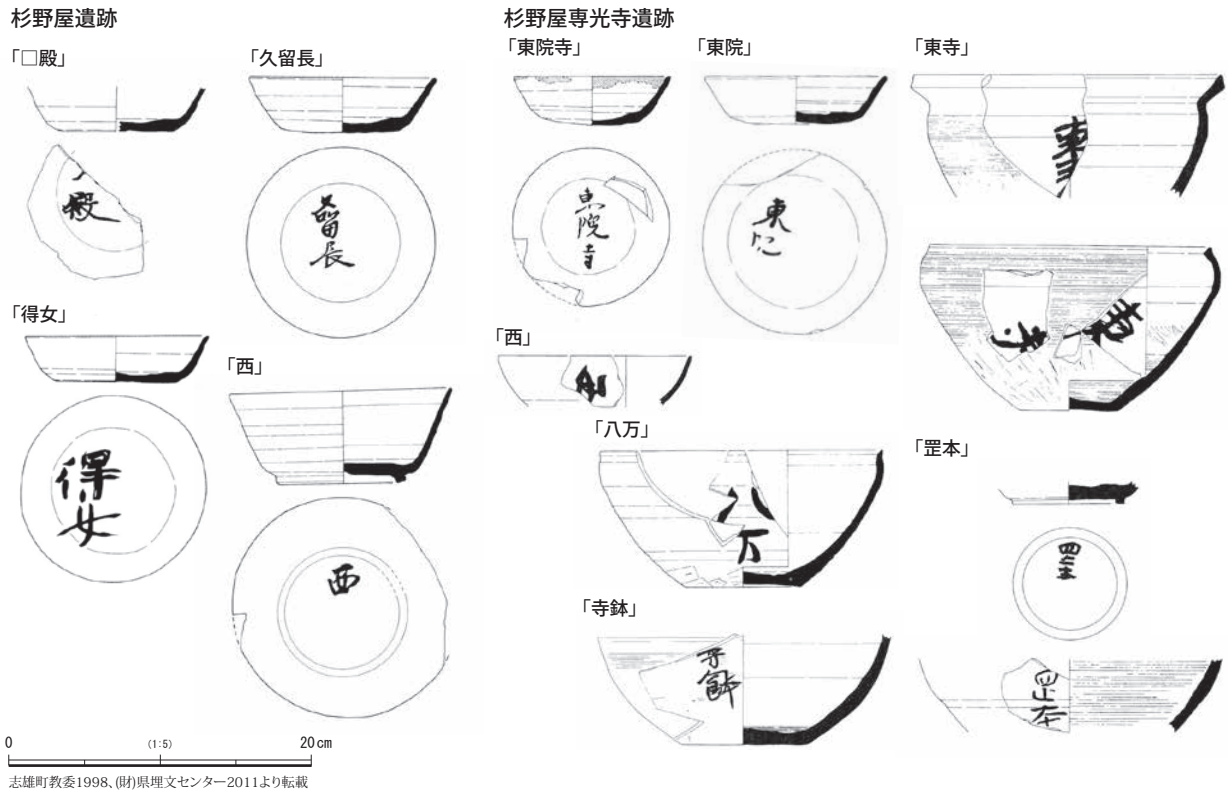


第339図 杉野屋遺跡群の文字共有等関係図(S=1/16,000)

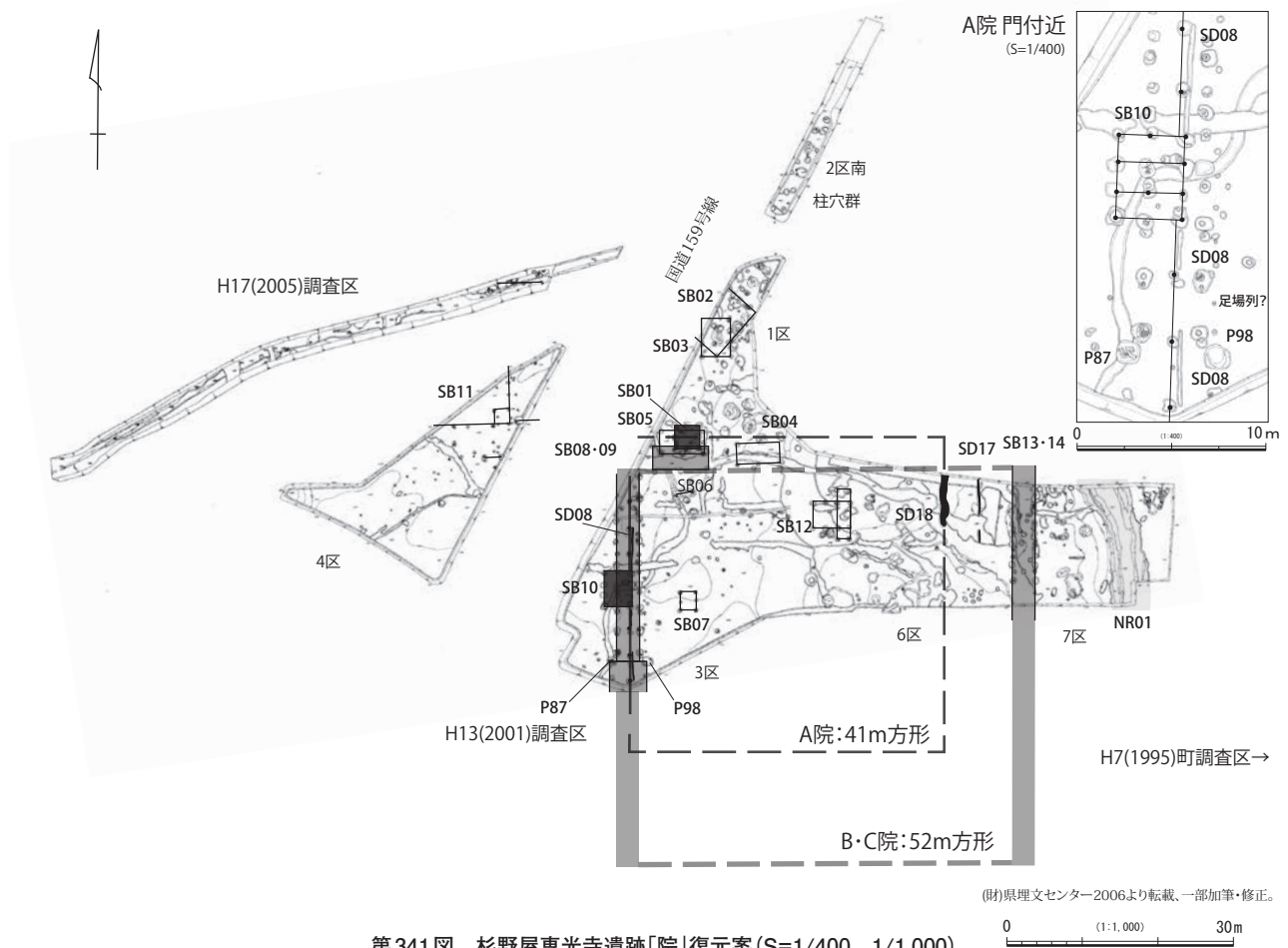
土し、一定の広がりをもった使用が推測できる。仏器である銅鉢は4遺跡で、須恵器鉄鉢は杉野屋専光寺遺跡を中心として9遺跡で、それぞれ出土する。これらから、腰帯、皇朝銭、施釉陶器については、前述の3グループに加え、旧邑知瀨南岸のAグループが目立つ存在であることが指摘できる。

#### 4 杉野屋遺跡群の性格について

本遺跡の位置付けを整理するうえで、旧邑知瀨南側の吉崎川水系に分布するCグループ杉野屋遺跡群の性格について若干の検討を行う。杉野屋遺跡群については、東西約2km、南北約1.5kmの範囲に前述の墨書土器内容の共有関係から、一つの生活圏と考えられる11遺跡(第339図、第78表No.15太田ニシカワダ遺跡～No.25宇土野センジョガハナ遺跡)を総称して呼称するものであり、県営ほ場整備事業、国道改築事業等に伴う発掘調査が相次ぎ、その様相が少しずつ判明しつつある。杉野屋遺跡群の消長は、第2項で述べたとおり、Ⅱ<sub>3</sub>期～Ⅲ期が丘陵寄りの2遺跡(杉野屋遺跡、中川A遺跡)であったものが、Ⅳ<sub>1</sub>期に太田ツツミダ遺跡、杉野屋ろくばわり遺跡の2遺跡が、さらにⅣ<sub>2</sub>期に二口かみあれた遺跡、杉野屋専光寺遺跡等の5遺跡がそれぞれ加わることで、9世紀初めまでに遺跡数は急増、Ⅴ～Ⅵ<sub>2</sub>期に多数の墨書土器を伴いながら盛期を迎える。また、第3項のとおり、遺跡間の強い連携を示唆する墨書土器の文字内容や鉄鉢の共有関係に加え、二口かみあれた遺跡の「田宮」(Ⅳ<sub>2</sub>期)や、杉野屋ろくばわり遺跡の「久留長」、杉野屋遺跡の「□殿」「久留長」「西」(Ⅳ<sub>2</sub>期～Ⅴ期)、杉野屋専光寺遺



第340図 杉野屋遺跡、杉野屋専光寺遺跡出土墨書土器実測図(S=1/5)



第341図 杉野屋専光寺遺跡「院」復元案(S=1/400、1/1,000)

跡の「東院寺」「東寺」「東院」「寺鉢」「西」(IV<sub>2</sub>期～VI<sub>2</sub>期)等の各遺跡特有の文字が確認できる(第339・340図)。さらに、杉野屋遺跡群の特徴の一つとして、8世紀後半(末頃か)に条里地割りが施行された可能性が高いことが指摘されている<sup>(47)</sup>。遺跡群の西端に位置する二口かみあれた遺跡では、南北方向に主軸方位をもつSD201・209(道路状遺構の両側溝、溝心々距離約15m)、SD257(幅4.5～7.5m)を検出、SD201・257間の溝心々距離は約105mを測る。また、約1.8km東側の杉野屋専光寺遺跡(第341図)では、1区SB02(N-48°E)と、その他の建物(N-4°W～N-3°E)のように、2つの方位による土地規制が認められ、後者の方位が後出する。この2つの土地規制は、中川A遺跡等の各遺跡の溝を中心に広範な範囲で確認できる。

杉野屋遺跡群を特徴付ける遺跡として、寺院跡の杉野屋専光寺遺跡がある<sup>(48)</sup>。平成13・17年度に(財)石川県埋蔵文化財センター実施の発掘調査で、葺瓦葺き建物を含む内部の施設は判然としないものの、北を指向する3期の変遷をもつ区画施設を確認している。第341図は、調査報告書を元に3つの「院」を復元したものであり、A院→B院→C院の順に、おおむねV<sub>2</sub>期～VI期(VI期主体)に変遷すると考えられる。A院は、西辺の「遮蔽施設」・SB10と東辺のSD18からなり、西辺のみを整備する約41m方形の「院」を考えた。「遮蔽施設」は、7間分の柱穴列(柱間寸法約3.5m)とSD08で構成される縦板塀(N-3°E)である。さらにSD08が途切れ、柱間寸法が異なるP82-P76間に、縦板塀と柱筋をあわせたSB10(総柱構造の3×2間(4.2×3.4m)と判断)が位置することから、西側を正面とする3間1戸の八脚門と考えたい。また、東辺のSD17・18間は幅約5mを測り、通路ともみれる。B院は、西辺をSB08(9～×1間、桁行柱間寸法約2.7m、梁間柱間寸法3m)、東辺をSB13(4～×1間、同約2.8m、3m)という2つの回廊で画し、約51mの間隔で平行する(N-1～2°E)。報告書では、SB13に南接する大型柱穴P87・98を門支柱(四脚門か)とすることから、P87・98付近を中心線とする約51m方形の区画施設を復元した場合、北辺はSB06南桁行付近に設定できる。南北辺は、板塀と建物で構成された区画施設の可能性が高い。C院は、B院と重複して建てられ、B院と同じ構造をとる(N-3°E)。西辺の回廊はSB09(8～×1間、桁行柱間寸法約2.9m、梁間柱間寸法3m)、東辺の回廊はSB14(4～×1間、同約3m、3m)であり、西側を正面とする西辺の門は、B院の門を建て替えないようだ。なお、「院」の国道159号線を挟んだ西側および北側に主軸方位を同じくする掘立柱建物群が展開し、自然流路NR01を挟んだ東側谷部入口の丘陵裾に志雄町教育委員会調査区が位置する。志雄町教育委員会の調査<sup>(49)</sup>では、当該期の溝状遺構約20条、井戸6基、水場遺構(SX108)等を検出、廃棄された丸瓦片や「東院寺」等墨書土器、多量の鉄鉢の出土から、調査区外の北側丘陵裾を中心とした、「東院寺」の祭祀場あるいは厨房的施設が想定できる。このように、本遺跡は「院」を中心として、周辺に雑舎や厨房施設、祭祀場を伴う空間構造をもつと考えられる。

さて、本遺跡の性格は、「院」外にも拡がる一定の空間を占有した寺院であることは間違いない。その位置付けに関して、杉野屋周辺に設置された羽咋郡衛(Dグループ周辺が通説)の別院「東院」に付属した寺院との解釈が提起されている<sup>(50)</sup>。そして、「東院」の成立要因を、天平13年(741)の能登国の越中国併合を契機とする、能登・加嶋地方と越中国西部を結ぶ陸路・物流の再編・強化に求める。この提起に関して、①隣接地域の発掘調査の蓄積にも係らず郡衛別院「東院」本体が未検出であること、②杉野屋専光寺遺跡出土の「東院寺」「東院」「東寺」の文字は「東」を重視し、「院」と「寺」が同義的であること、③杉野屋遺跡、杉野屋専光寺遺跡から「西」墨書が出土し、「東」の対となる「西」が杉野屋遺跡を指すとの解釈が可能であること、④郡衛別院周辺の寺院建立が全国的には白鳳期に集中すること<sup>(51)</sup>、⑤杉野屋遺跡群の盛期が能登立国より大きく遅れること等の多くの課題が残る。ここでは杉野屋遺跡群を、天平15年(743)の壘田永年私財法以降、遅くとも9世紀初頭までに施行された羽咋郡の条里地割りを前提として、小規模な新規集落・管理施設を点在させながら配した、新たな壘田開発・経営に係る遺跡

群と位置付けたい。その開発主体については、8世紀前半に確認できる2遺跡(「久留長」「□殿」墨書出土の杉野屋遺跡、「八万」墨書出土の中川A遺跡)を本貫地とする在地の中小有力者層と考える。金沢市・白山市に所在する東大寺領横江荘遺跡<sup>(52)</sup>では、条里地割りに基づき、横江荘遺跡を中核に上荒屋遺跡、中屋サワ遺跡等の集落・管理施設・倉庫群・寺院を点在させた土地開発・経営や、杉野屋専光寺遺跡B・C院と近似した構造をもつ回廊状遺構(一辺約50m)の存在、多量の墨書土器や祭祀遺物の出土が確認されており、成立・存続時期にも並行する部分が多い杉野屋遺跡群の空間構造を考える一助となる。初期荘園とする文献や墨書土器等の直接的史料を欠くものの、能登地域における初期荘園事例に整理可能であり、東大寺領横江荘遺跡より「院」の果たす役割が高いようだ。

## 第4節 総括 - 古代の四柳白山下遺跡の評価を中心として -

### 1 古代の旧邑知潟周辺の公的景観について

古代の四柳白山下遺跡を評する場合、これまで旧邑知潟に面した水陸交通の結節点に位置する、能登郡「与木郷」に属した「官衙的」集落であり、古代北陸道能登路に設置された「撰才駅」有力候補地という情景を思い浮かべる場合が多いと考える。以下では、三浦純夫氏の論考<sup>(53)</sup>に導かれながら、本遺跡が能登郡「下日郷」に属した「官衙的」施設や小規模な「寺」を含む大規模集落であるが、古代北陸道能登路「撰才駅」候補地とならないことを説明する。また、古代北陸道能登路ルートや羽咋郡衙等についても若干触れ、本遺跡を取り巻く公的景観の復元を試みる。

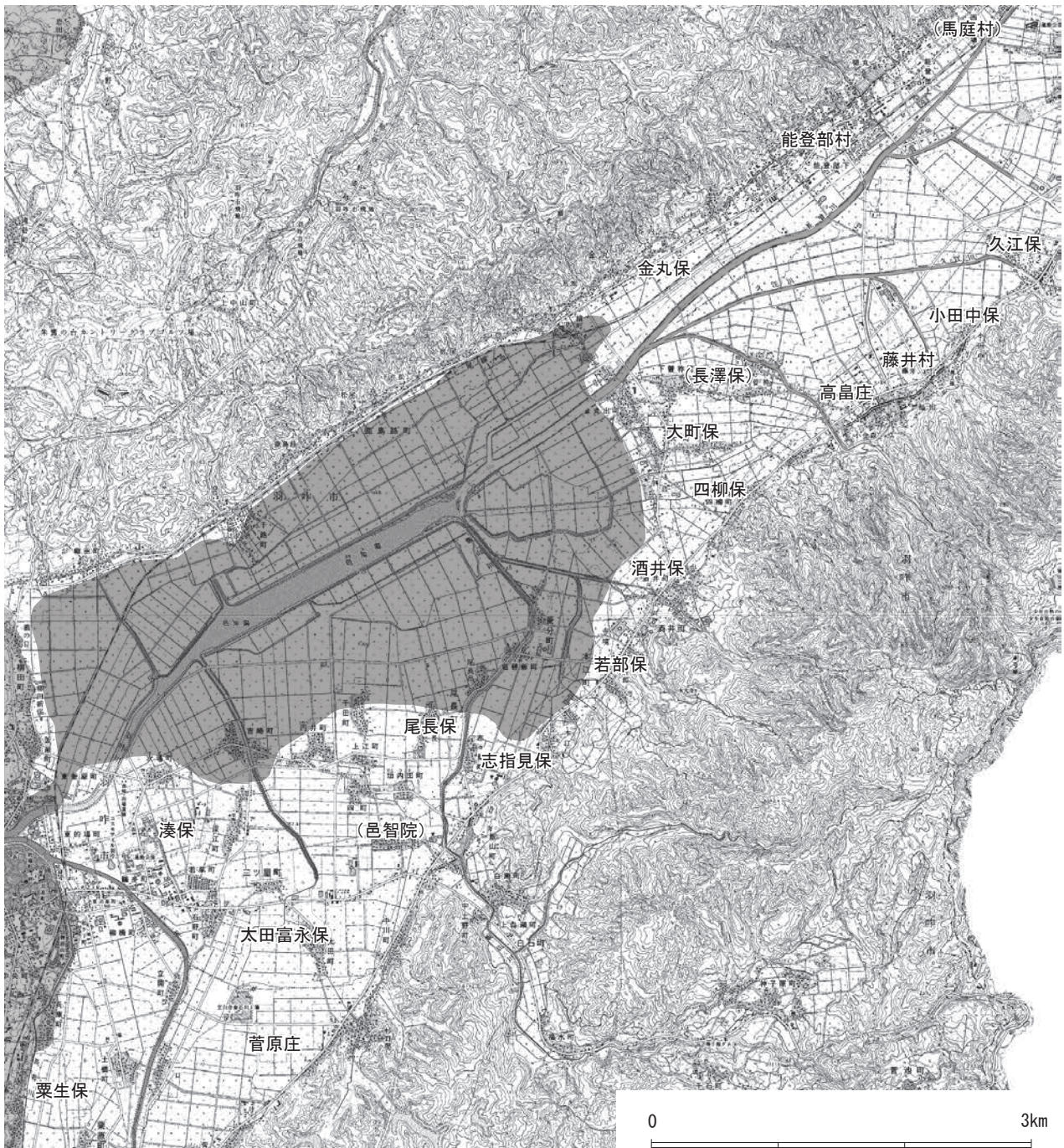
本遺跡周辺の駅家に関する文献史料には、『日本後記』大同3年(808)10月丁卯条「丁卯、廢能登國能登郡越蘇、穴水、鳳至郡三井、大市、待野、珠洲等六箇駅、以不要也」と、『延喜式』兵部省諸国伝馬条「能登國驛馬 撰才 越蘇 各五疋」がある。また、郷名については『和名類聚抄』大東急記念文庫本に、能登郡郷名として「上日 下日 越蘇 八田 加嶋 与木 能來 長濱」があり、「与木」には「与支」の訓が記される。式内社については、『延喜式』神名帳に能登郡十七座の一つとして「餘木比古神社」の名がみえる。

これまで、(a)本遺跡北側の大町集落に餘木比古神社が鎮座することから、神社周辺が「与木郷」比定地であること、(b)「撰才」は「撰木」の誤記であり、「よるき」または「よりき」の読みが「与木」に通じるとして、三段論法的に導かれた「撰才駅与木郷説」が通説に近い位置付けとなっている。三浦氏は、明治時代初めの神仏分離令に係る式内社調べの中で、それまで所在地不明であった『延喜式』神名帳の「式内社餘木比古神社」が、複数の候補の中から、大町村に鎮座する「大將軍社」に定まり、式内社の鎮座をもって、明治22年(1889)に近世まで使われなかった村名である餘木村(酒井、大町、下曾祢、金丸出、四柳5村が合併)が成立した経緯を詳述する。また、承久3年(1221)に能登国衙が作成した『能登国四郡公田田数目録案』鹿島郡の荘園・公領の記載順が、『和名類聚抄』能登郡郷名の記載順を踏襲することを指摘、古代「与木郷」を再編した「与木院」を七尾市大津川流域付近に求めた。氏の論は、(a)が根拠に乏しいことを明らかとし、さらに「与木」を前提とした、(b)及び「撰才駅与木郷説」も根拠を失うと断じた。氏の論旨は、第88表、第342図で示したとおりであり、明らかに本遺跡周辺は与木郷比定地とはなりえない。本遺跡の所属郷は、能登郡下日郷とみるのが妥当と考える。

次に、古代北陸道能登路ルート、羽咋郡衙・郡津について若干触れたい。古代北陸道能登路に設置された駅家は、現在も残る地名から「横山駅」がかほく市横山近辺に、「越蘇駅」が七尾市江曾町近辺に置かれたと考えられる。古代北陸道能登路は、この横山・越蘇両駅(約35km)を直線的に結ぶルートが

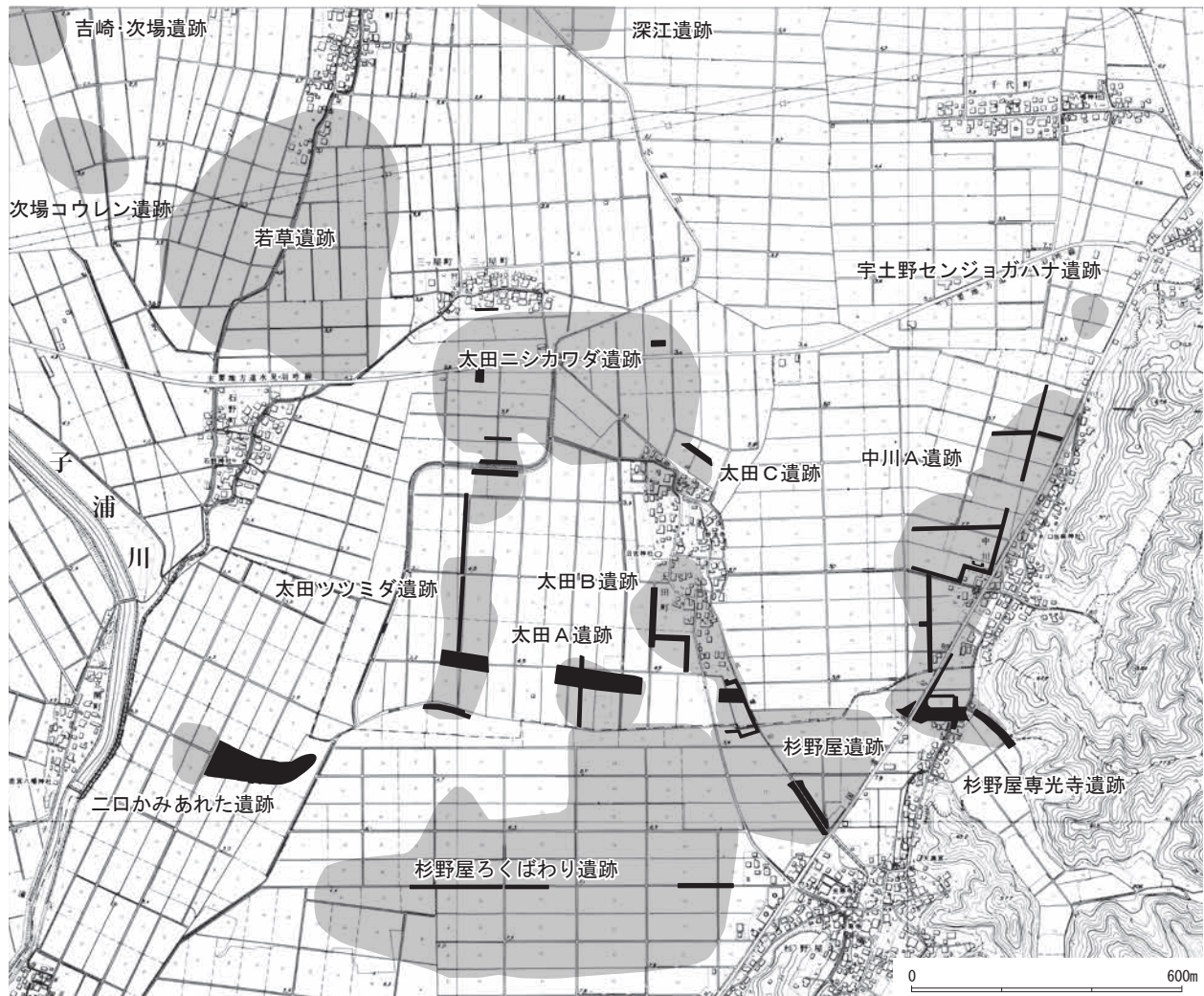
第88表 記載順の比較

神戸	長浜 (奈加波萬)	熊采 (久萬岐)	豊田保	笠師保	与木院	三引保	吉田保	(略)	南湯浦保	八田郷	高堀開発	越曾郷	久江保	小田中保	長澤保	金丸保	大町保	四柳保	酒井保	藤井村	(略)	一青庄	上日庄 (阿佐比)	能登郡	鹿島郡	『和名類聚抄』 郷名記載順	『能登国四郡公田 田数目錄案』 記載順
----	--------------	-------------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	------	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	--------------	-----	-----	------------------	---------------------------



第342図 旧邑知瀧周辺の荘園、公領分布想定図(S=1/60,000)

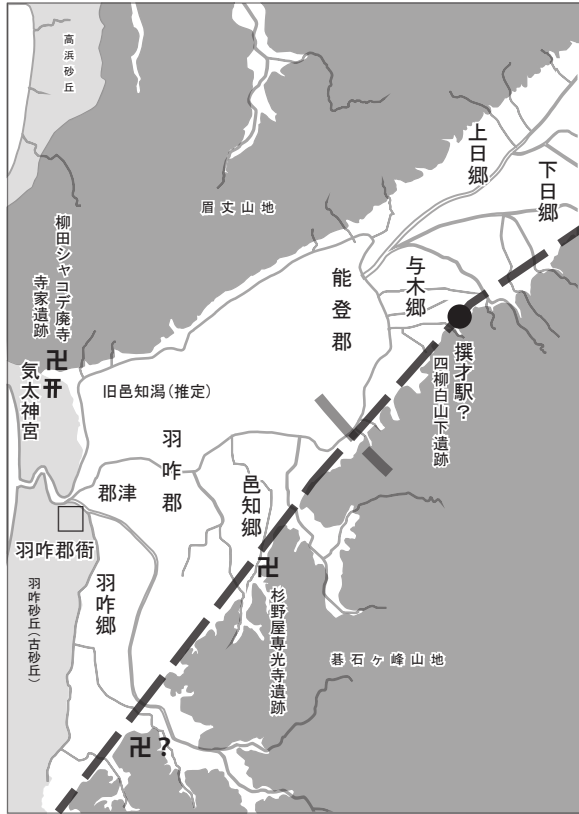




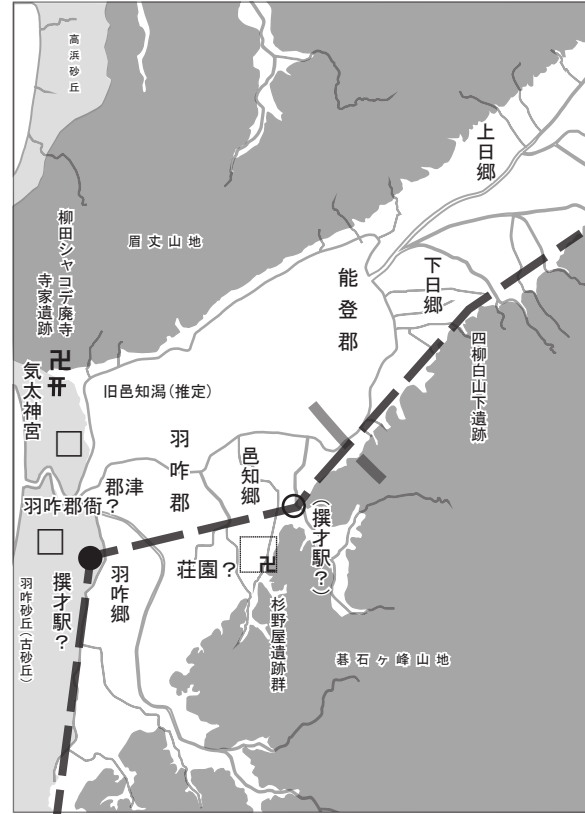
第343図 杉野屋遺跡群の発掘調査地点位置図 (S=1/16,000)

想定されている。このルートは、能登国に入ると、現宝達志水町宿・敷浪付近で若干北東側に折れ、碁石ヶ峰山地前縁に添う通称「東往来」(旧国道159号線)付近を通って、七尾市(越蘇駅・能登国府)を目指すとされ、撰才駅も宿～杉野屋遺跡群周辺のルート上のいずれかに比定地をもつ。しかしながら、第340図に示したとおり、杉野屋専光寺遺跡の院北西隅と国道159号線の位置関係、院外に一体性をもつ建物が想定できることから、現国道幅の中に、古代北陸道能登路(津幡町加茂遺跡で当初の路面幅約8m(側溝を含めれば約10m)と推測)を求めることは、かなり困難と考えられる。また、県営ほ場整備等に伴う試掘調査で、ほぼ遺跡範囲が確定している杉野屋遺跡群の一連の発掘調査(第343図)では、道路側溝と確定できる遺構は確認されない。7世紀末～8世紀初頭が敷設期とされる古代北陸道能登路が、8世紀後半以降の集落適地(微高地)を避けて、意図的に低湿地にルート設定したとも考えにくい。古代道路は「目的地に最短距離で到達するように直線的路線」<sup>(54)</sup>をとる。古代道路敷設当時は、武生に国府を置く越前国に属した時期であり、県内に国府は存在せず、各郡衙は「同列的」存在であったと推測できる。越前国の各郡衙を「目的地」とし、その「最短距離」をルート設定の最重要事項と考えた場合、横山駅から旧羽咋市街地周辺に比定される羽咋郡衙まで旧砂丘上をほぼ直進、その後、杉野屋遺跡群北辺の旧邑知瀧南側を通り、羽咋市飯山付近から旧邑知瀧および低湿地が避けながら、旧国道159号線とほぼ重複するルートをとる可能性も検討すべきと考える。なお、本遺跡周辺の能登路ルートは、酒井バンドウマエ遺跡<sup>(55)</sup>や、本遺跡を含む鹿島バイパス、県営ほ場整備事業に係る一連の発掘

これまでの大方の理解



修正・検討試案



第344図 古代の旧邑知潟周辺の公的景観模式図

調査で古代北陸道能登路に比定しうる道路遺構が未検出であることから、碓石ヶ峰山地裾を走る旧国道159号線とほぼ重複するルートとみるが妥当である。

羽咋郡衙については、羽咋七塚等の古墳分布、羽咋神社の鎮座地、「羽咋正院」と地元で呼ばれたこと、長者川遺跡(No.26)出土の「□鳥家」墨書等を主な根拠として、旧羽咋市街地近辺に比定し、幅約1.5kmにおよぶ厚い新砂丘に埋没しているとの考えが多い。文献史料でみれば、前述『能登国四郡公田田数目録案』の羽咋正院記載順は、現在の志賀町内を比定地とする土田庄、堀松庄の間であり、公領の位置は推測可能であるが、「羽咋正院」自体の所在地は判然としない。また、浅香年木氏<sup>(56)</sup>は、建武5年(1338)の平行兼寄進状に「能登国湊保南方兵庫村」、貞和3年(1347)の無底良韶寄進状に「羽咋湊保吉崎」とあることから、旧邑知潟南西縁～羽咋川・子浦川下流域に湊保及び郡津を求め、その西側に羽咋正院及び羽咋郡衙が位置すると考えた。現時点で明快な解は持ち合わせないものの、①近代まで御陵山古墳を盟主とする羽咋七塚が旧状を保持し、旧羽咋市街地の大部分(標高3～4m台)が14世紀代の新砂丘にほとんど被覆されていないこと、②その旧羽咋市街地で古代の遺物出土例がないこと、③戦後の新砂丘の諸開発によっても古代の遺物採集、遺跡の確認例が限られること、また、④7世紀以降の「羽咋国造」羽咋公一族と関係が深いとされる主要な古墳分布や柳田シャコテ廃寺の建立に象徴される政治的中心が羽咋川以北のBグループに属することは、指摘可能であろう。羽咋川河口周辺と考えられる羽咋郡衙比定地に関しては、今後とも慎重な検討が必要と思われる。

以上、旧邑知潟周辺の郷比定、古代北陸道能登路・駅家、郡衙・郡津の現況・課題等を述べた。卓越した存在であるBグループの寺家遺跡の存在や、Cグループの杉野屋遺跡群を初期荘園とみた場合、第344図のような旧邑知潟周辺の景観も復元可能と考える。

## 2 古代四柳白山下遺跡の評価に向けて

古代(第IV面)の四柳白山下遺跡の評価に向けて、これまでの調査で得られた立地、消長、検出遺構、出土遺物等の概要を整理し、不足する部分については第6・7次調査(H～K区)の報告で補いたい。

**立地** 本遺跡は、旧邑知潟の東側約700mの小扇状地に展開する大規模集落遺跡で、調査区外東側の碁石ヶ峰山地裾には古代北陸道能登路が走ると推定できる。陸運のみならず、旧邑知潟に面した大町C遺跡を介して水運の利便性も高いことから、律令制下では能登郡最南端に位置する水陸交通の重要な結節点の一つといえる。

**消長** 7世紀前半代に盛期をもつ地獄谷川水系の勢力(曾祢C遺跡、曾根古墳群)と入れ替わるように、7世紀末葉から四柳ミッコ遺跡等とともに急速に規模を拡大、内容も充実する。8世紀を通じた最盛期の集落規模は、南西-北東方向で約200m、南東-北西方向で約300mを測り、小扇状地の大部分および東側の舌状台地(四柳貝塚等)にもひろがる。出土遺物の傾向から、7世紀末葉～8世紀前葉頃は集落域北側(および四柳ミッコ遺跡)の活動がより活発であったと推測できる。律令制下では、能登郡下日郷に属し、大町C遺跡を含めて「大町」と称されるようだ。また、本遺跡を中心とする集落遺跡群は、寺家遺跡(および羽咋郡衙、撰木駅?)を中心とする集落遺跡群、初期荘園である杉野屋遺跡群とともに、旧邑知潟周辺地域の主要遺跡群と位置付けられる。この第IV面の集落は、10世紀初頭(VI<sub>2</sub>期)に発生した土石流災害3で、大半が埋没するものの、10世紀前葉(VI<sub>3</sub>期)に扇状地中央付近(県F地区周辺)で新たな集落構造に転じた建物域が形成される。なお、鹿島バイパスに伴う発掘調査は、集落域の西隅に近い部分を幅約30mで縦断したこととなる。

**検出遺構** 黄色粘土粒を混ぜた比較的規模の大きい整地作業(A～C・G地区)を伴いながら、集落域を形成する。建物は、竪穴建物・竪穴状遺構6棟(県A地区SBT1～3、F地区SX402～4)以外は、全て掘立柱建物となる。復元した掘立柱建物は、県A～H地区、市教委1～4次調査で110棟を超え、検出した柱穴数から実棟数はさらに増える。明確に倉庫となる2×2間の総柱構造の建物は4棟(平面積8～15㎡、県C地区SB3、市2次SB04・05)に限られ、総柱構造の倉庫群は周辺遺跡を含めた、いずれかの一定のエリアに集中するものと推測できる。掘立柱建物の大部分は、梁間寸法を狭い幅広の側柱構造であり、その規模は平面積40㎡以下(平面積20～30㎡主体)で、B地区SB22(5×3間、53㎡)のみが突出する。これらの建物は、一定の敷地単位ごとに建て替えを行い、小扇状地の特性もあり、同時期の建物全てを一律に規制する主軸方位はみいだしがたい。また、小扇状地で最も標高が高い県D・F地区では建物が密集・重複する一方、市教委1～3次のように数回の建て替えにとどまる調査区も存在する。井戸は、県B地区SE1・SK8(古代集落3・4期)、G地区SE4001(同4期)に限られ、後者は齋串を用いた小規模な祭祀を行なう。

**出土遺物** ①扇状地の堆積作用を加味しても、須恵器、土師器を主体とした多量の遺物が出土する。②須恵器坏類を主体に約400点の墨書土器が出土する。現時点で、この点数は旧邑知潟周辺地域の中で寺家遺跡、杉野屋遺跡群とともに突出した点数となる。また、須恵器製硯の点数は限られるものの、須恵器坏・蓋類を用いた転用硯は多数にのぼり、本遺跡における継続な識字層の存在と活発な文書作成行為を示す。③墨書土器は多種にのぼり、本遺跡特有の集団表示とも考えられる文字(「乙」「乙上」、「酒田」「酒女」、「田地」と、在地性が高い「家」を主体とする多種の施設名(「上家」「下家」「東家」「大家」「青家」「家」「屋東」、人名的文字(「玉万呂」「万呂」「倉富女」「梗女」)で全体の約70%を占める一方、管理的要素が強いとされる記号的文字や祭祀行為を示す吉祥句の比率は低い。これから、複数の異なる施設が並存するものの、寺家遺跡でみられるような統一的な管理体制や律令祭祀の機能は比較的弱い

印象を受ける。⑤継起的に出土する「寺」墨書から集落内に仏堂が存在した可能性が高く、特に9世紀以降は灯明容器転用の須恵器坏類、土師器大型盤類の出土から活発な宗教行為が復元できる。⑥腰带、木沓、漆器椀の出土から役人層の存在が推定できる(木沓は四柳ミッコ遺跡からも出土)。⑦埴形滓やフイゴ羽口の出土から集落内で小鍛冶作業を行ったと考えられる。

以上、第Ⅳ面は、律令制下で能登郡下日郷に属した、旧邑知瀉東側の水陸交通の重要な結節点に立地する大規模集落で、「大町」と呼称されたと考えられる。集落は、在地の中下級有力層を含んだ税を負担した公民層が多数居住する一方、物流・情報伝達の拠点の一つとして、それぞれが独立性を示す複数の施設において様々な実務的文書事務を継続的に行なったと考えられる。その中には、腰带、木沓等の出土から、下級役人または下級役人を兼務する「大町」の有力者が出仕する、いわゆる「地方末端官衙」も存在した可能性が高い。さらに屋根瓦を葺かない仏堂程度の小規模な宗教施設が存在する他、在地中小有力層の居宅や、税や物品を納める複数の倉庫群も調査区周辺に想定できる。このような様々な機能を集約した集落構造を県内で求めるなら、河北瀉東側の丘陵裾に位置する津幡町加茂遺跡があげられよう。加茂遺跡は、本遺跡と立地が近似し、水陸交通の重要な結節点につくられた「郡雑任クラスの氏族である丈部氏」の「在地統治の拠点として、官衙の様相を持つ南半部と、谷奥のプライベートの様相の北半部とそれに付随する村堂的な鴨寺」に「機能分化した古代地方支配の末端機構」とされる<sup>(57)</sup>。本遺跡西辺部を縦断する一連の調査で得られた諸特徴は、在地性が高いと考えられる加茂遺跡北半部の様相に極めて近い印象を受ける。

また、本遺跡第Ⅲ面への転換は、旧邑知瀉周辺のみならず各地域で認められる集落および社会構造の大きな転換である。本遺跡F地区第Ⅲ面と類似した集落遺跡は、中能登町久江サザミヤシキ遺跡、武部ショウブダ遺跡<sup>(58)</sup>をはじめ、第3節で古代Ⅶ期の点在する集落遺跡の大部分が属し、新しい集落構造・社会背景をもつと考える。その特徴は、小規模な建物域(屋敷地)が独立的に立地することや、施釉陶器や腰带、活発な文書事務を示す硯、宗教的遺物の他、多くの須恵器貯蔵具の所有、さらに土器廃棄・埋納を伴う活発な祭祀行為にある。律令制下で編成された集落が古代Ⅵ期の中で急速に解体する一方、名田経営をおこなう「富豪、田堵、負名」と称される富裕百姓層が各地で次第に成長、その中には「在庁官人」も含まれよう。本遺跡F地区第Ⅲ面で検出した建物群は、「公的施設」「官衙的遺跡」ではなく、これらの富裕百姓層の屋敷地の一つと位置付けたい。

最後に、本遺跡の一連の調査では、小扇状地上で縄文時代以降、近世に至る調査面(生活面)の累積を確認した。この集落の様相は、中能登町谷内ブンガヤチ遺跡、徳丸遺跡でも確認しており、集落適地が山裾の小扇状地に限られた邑知地溝帯南半における集落形成の典型例と位置付けられる。また、現地調査で悩まされ続けた土石流災害痕跡は、一方で集落域のみならず、耕作地を良好に保存する効果をもち、邑知地溝帯における各時代の土地利用や耕作技術を知るうえで、重要な資料を提供することとなった。各調査面の検討に不十分な箇所も多いと考えられ、今後とも再検討が必要であることはいうまでもない。特に第3・4節で述べた古代の旧邑知瀉周辺の様相については、実証不足を認識しながらも踏み込んだ検討・試案を提示した。本地区の調査成果を地域史にどう反映させるか、今後とも大きな課題と考える。

#### 【註】

(30) 岩瀬由美2002『鹿島町 武部ショウブダ遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

(31) 古代の土器研究会1994『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』

(32) 田嶋明人1997「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム 北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会

- (33) 羽咋市教育委員会が実施した第4次調査では、9～10世紀代を主体とする古代の遺構・遺物を確認、第Ⅰ・Ⅲ区で8世紀代の土器が出土する(牧山直樹他2008『四柳白山下遺跡－県営ほ場整備事業(経営体育成型)四柳地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』羽咋市教育委員会)。また、石川県立羽咋高等学校が実施した四柳貝塚の調査では、四柳神社境内・参道の各試掘地点から8世紀後半～9世紀代の須恵器が出土する(高堀勝喜1973『羽咋の縄文遺跡－四柳貝塚』『羽咋市史 原始・古代編』羽咋市役所)。羽咋市教委第4次調査区から四柳神社まで、直線距離で約300mを測る。さらに、谷部を挟んで北側に接する四柳ミッコ遺跡を含めれば、その集落規模はさらに拡大する。
- (34) 土屋宣雄・安 英樹1999『鹿島町御祖遺跡群』(財)石川県埋蔵文化財センター
- (35) 北陸中世考古学研究会2004『掘立柱建物から礎石建物へ』第17回北陸中世考古学研究会資料集
- (36) 北陸古代土器研究会1995『北陸古代土器研究 第5号』
- (37) 牧山直樹・中野知幸2010『寺家遺跡 発掘調査報告書 総括編』羽咋市教育委員会
- (38) 松山和彦他2006『宝達志水町・羽咋市 杉野屋専光寺遺跡』石川県埋蔵文化財センター・(財)石川県埋蔵文化財センター
- (39) 第78表の七尾周辺地域、金沢市臨海部、手取扇状地の集落遺跡の消長は、次の文献を元に作表した。  
川畑 誠2015『素描・古代七尾地域の集落遺跡の動向について』『石川県埋蔵文化財情報 第34号』(公財)石川県埋蔵文化財センター  
林 大智2017『畝田・無量寺遺跡の調査』『金沢市畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡、畝田B遺跡、畝田C遺跡、畝田・無量寺遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター  
田嶋明人1996『第三章 手取扇状地にみる古代遺跡の動態』『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』松任市教育委員会
- (40) 宇野隆夫1991『律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として』桂書房
- (41) 巽淳一郎2003『都城出土墨書土器の性格』『古代官衙・集落と墨書土器』(独行法)文化財研究所奈良文化財研究所
- (42) 『羽咋市史』によれば、天平15年～天平勝宝8年に東大寺写経所の装潢師に能登臣忍人の名がみえる。また『万葉集』に天平20年の羽咋郡擬主帳能登臣乙美の歌があり、本遺跡出土の「乙上」を想起させる。
- (43) 今井淳一1998『墨書土器の機能面から見た地域社会の様相－能登・邑知潟周辺の墨書土器を中心に－』『古代北陸と出土文字資料』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- (44) 註(37)、(43)文献と同じ。
- (45) 三浦純夫2017『能登邑知潟周辺の古代交通路』『地域社会の文化と史料』(株)同成社
- (46) 「八万」は小松市荒木田遺跡に出土例があり、8世紀末に全国的にひろまった八幡信仰との関連で注目できる。また、「八万」の文字は焼成前に刻まれた個体を含み、須恵器生産・流通を考えるうえでも興味深い。
- (47) 上野 敬他1995『二口かみあれた遺跡』志雄町教育委員会
- (48) 註(38)文献と同じ。
- (49) 上野 敬他1998『杉野屋専光寺遺跡』志雄町教育委員会
- (50) 註(38)文献と同じ。
- (51) (独行法)文化財研究所 奈良文化財研究所2005『地方官衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心として－』
- (52) 吉岡康暢・田嶋明人・金山弘明他2013『加賀横江庄遺跡－範囲内容確認発掘調査報告書－』白山市教育委員会
- (53) 註(45)文献と同じ。
- (54) 古代交通研究会2004『日本古代道路事典』八木書店
- (55) 中野知幸・小船井陽2015『酒井ノギワ遺跡・酒井バンドウマエ遺跡』羽咋市教育委員会。県営ほ場整備事業に係る調査で、調査区は東西方向にのびる。調査区西端は標高約4.3mを測り、さらに西側は標高2m台の旧邑知潟につながる低湿地となる。
- (56) 浅香山木1973『古代の羽咋』『羽咋市史 原始・古代編』羽咋市役所
- (57) 和田龍介・岩瀬由美・林大智他2018『津幡町 加茂遺跡・加茂窯跡群』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- (58) 岩瀬由美2002『鹿島町 武部ショウブダ遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター  
三浦純夫・柿田裕司他2007『中能登町 久江サザミヤシキ遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

## 〔引用・参考文献〕

- 秋田喜一・酒井正善1954『羽咋郡飯山町字藪野出土の須恵器』『石川考古学研究会々誌 第6号』石川考古学研究会
- 沼田啓太郎1955『下甘田の調査概要』『石川考古学研究会々誌 第7号』石川考古学研究会
- 秋田喜一1956『羽咋郡押水町発見資料二点について』『石川考古学研究会々誌 第8号』石川考古学研究会
- 高堀勝喜1965『古窯跡と遺物』『能登半島学術調査書』石川県
- 吉岡康暢・橋本澄夫1965『石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡の土師器』『石川考古学研究会々誌 第9号』石川考古学研究会
- 濱岡賢太郎・吉岡康暢1965『隆平永宝を包蔵した土師器壺の新例』『石川考古学研究会々誌 第9号』
- 秋田喜一1965『羽咋郡志雄町蓮華山出土須恵器に就いて』『石川考古学研究会々誌 第9号』石川考古学研究会
- 高堀勝喜・濱岡賢太郎・橋本澄夫・吉岡康暢他1966『鹿島町史 資料編』鹿島町
- 橋本澄夫1968『石川県小松市八日市地方遺跡の調査－県下の櫛目文系土器－』『石川考古学研究会々誌 第11号』石川考古学研究会
- 橋本澄夫1969『七尾・鹿島における土師器出土遺跡の紹介』『石川考古学研究会々誌 第12号』石川考古学研究会
- 嵯峨井亮1971『羽咋市長者川遺跡D地点出土の墨書土器』『石川考古学研究会々誌 第14号』石川考古学研究会
- 濱岡賢太郎・浅香山木・高堀勝喜他1973『羽咋市史(原始・古代篇)』羽咋市役所

#### 第4節 総括

- 橋本澄夫・中島俊一1974『志賀町矢駄遺跡』石川県教育委員会  
桜井甚一他1974『志賀町史 資料編第1巻』志賀町役場  
浅香年木・吉岡康暢・濱岡賢太郎他1974『石川県志雄町史』志雄町役場  
高橋裕1975『羽咋市深江遺跡(第1・2次)』石川県教育委員会  
湯尻修平・左古隆1975『志雄町杉野屋ロクバワリ遺跡 農道整備事業関係埋蔵文化財発掘調査概報』石川県教育委員会  
田嶋正和1975『羽咋市本江B遺跡出土遺物』『石川考古学研究会々誌 第18号』石川考古学研究会  
西野秀和他1976『羽咋郡押水町竹生野トリゲ山遺跡』『石川考古学研究会々誌 第19号』石川考古学研究会  
高一男1978『羽咋市寺家チョウエイジ遺跡発掘調査報告』羽咋市教育委員会  
河村好光1979『羽咋市一の宮遺跡A地区』羽咋市教育委員会  
桜井甚一・高堀勝喜・濱岡賢太郎他1980『志賀町史 資料編第5巻』志賀町役場  
河村好光1980『羽咋市一の宮遺跡B地区-滝古墳群-』羽咋市教育委員会  
河村好光・福島正実1980『能登 散田金谷古墳 -之乎路の族長墓とその周辺-』志雄町教育委員会  
羽咋市教育委員会1981『羽咋市吉崎・次場遺跡 -市道12号線改良工事に伴う発掘調査概報-』羽咋市教育委員会  
河村好光1981『滝古墳群』『石川考古学研究会々誌 第24号』石川考古学研究会  
谷内尾晋司他1982『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ(志賀町中村畑遺跡 志賀町女郎塚遺跡)』石川県立埋蔵文化財センター  
高堀勝喜・桜井甚一・橋本澄夫他1984『鹿島町史 資料編(続)上巻』鹿島町  
谷内碩央1982『釜屋・新保・猫ノ目遺跡』羽咋市教育委員会  
谷内碩央・濱岡賢太郎1982『吉崎・次場遺跡-住宅建設に伴う緊急発掘調査概報-』羽咋市教育委員会  
荒木孝平・小嶋芳孝・谷内碩央1983『寺家遺跡-住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書-』羽咋市教育委員会  
桜井甚一1983『福水出土の古密教仏具からみた能登の山林宗教考』『北陸の考古学 石川考古学研究会々誌 第26号』石川考古学研究会  
石川県立埋蔵文化財センター1984『県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ(昭和54・55年度)』石川県立埋蔵文化財センター  
河村好光1984『羽咋市柳田シャコデ遺跡 能登海浜道関係埋蔵文化財関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』石川県立埋蔵文化財センター  
湯尻修平・越坂一也1984『羽咋市気多社僧坊跡群-能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ-』石川県立埋蔵文化財センター  
石川県立埋蔵文化財センター1985『県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ(昭和55～59年度)』石川県立埋蔵文化財センター  
米澤義光他1985『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』石川県立埋蔵文化財センター  
濱岡賢太郎・浅香年木他1985『鹿島町史 通史・民俗編』鹿島町  
谷内碩央・荒木孝平1985『昭和59年度羽咋市埋蔵文化財発掘調査報告書』羽咋市教育委員会  
小嶋芳孝他1986『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター  
谷内碩央他1986『柴垣須田遺跡』羽咋市教育委員会  
湯尻修平他1986『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団  
福島正実1987『吉崎・次場遺跡 ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 第1分冊(資料編(1))』石川県立埋蔵文化財センター  
木立雅朗他1987『柳田シャコデ廃寺跡 詳細分布調査報告書』羽咋市教育委員会  
木立雅朗他1987『北陸の古代寺院 -その源流と古瓦-』桂書房  
小嶋芳孝他1988『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター  
福島正実他1988『吉崎・次場遺跡-県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書第2分冊(資料編(2))-』石川県立埋蔵文化財センター  
増山仁1988『金沢市磯部運動公園遺跡』金沢市教育委員会  
今井淳一・東四柳史明1988『永光寺遺跡-永光寺川荒廃砂防工事に伴う緊急発掘調査報告書-』羽咋市教育委員会  
谷内碩央他1988『羽咋市内遺跡詳細分布調査報告書』羽咋市教育委員会  
平田千秋1988『杉野屋ロクバワリ遺跡』志雄町教育委員会  
北陸古代土器研究会・石川考古学研究会1988『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』  
今井淳一1989『釜屋遺跡』羽咋市教育委員会  
末森城跡調査団・押水町教育委員会1989『末森城跡』押水町教育委員会  
今井淳一1990『四柳白山下遺跡Ⅰ』羽咋市教育委員会  
金沢大学考古学研究室・(財)古代学協会北陸支部1990『石川県鹿島郡鹿西町における考古学的分布調査概報-1989年-』『日本海文化 第16号』金沢大学文学部  
今井淳一他1991『四柳白山下遺跡Ⅱ』羽咋市教育委員会  
谷内碩央1991『太田遺跡-羽咋市農業協同組合開発事業計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』羽咋市教育委員会  
貞末堯司・金沢大学文学部考古学研究室1991『阿弥陀藪遺跡の発掘(1990年)-阿弥陀藪遺跡発掘調査報告-』『金沢大学日本海  
域研究報告23』金沢大学文学部考古学研究室  
吉岡康暢1991『日本海域の土器・陶器[古代編]』(株)六興出版

- 増山仁1992『金沢市専光寺養魚場遺跡』金沢市教育委員会・(株)本兼建設
- 今井淳一他1992『眉丈台の遺跡群』羽咋市教育委員会
- 安井重幸他1992『石川県鹿島郡鹿西町 能登部小学校遺跡』鹿西町教育委員会
- 今井淳一他1993『寺家遺跡第10次調査報告書－個人住宅建設に伴う発掘調査報告書－』羽咋市教育委員会
- 濱岡賢太郎他1993『石川県内生産遺跡分布調査報告書』石川考古学研究会
- 中島俊一・川畑誠1994『大町C遺跡 小金森ヘイナイメA・B遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 藤田邦雄他1994『藤井サンジョガリ遺跡・高島テラダ遺跡・高島カンジダ遺跡』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 今井淳一・牧山直樹1994『四柳白山下遺跡Ⅲ』羽咋市教育委員会
- 今井淳一他1994『吉崎・次場遺跡 第13次発掘調査』羽咋市教育委員会
- 谷内碩央他1994『三ツ屋遺跡』羽咋市教育委員会
- 牧山直樹他1994『新保ゼンボン遺跡』羽咋市教育委員会
- 栃木英道他1995『谷内・杉谷遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 岡本恭一・久田正弘1995『曾祢C遺跡発掘調査報告書』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 今井淳一・牧山直樹1995『太田ツツミダ遺跡』羽咋市教育委員会
- 上野敬他1995『二口かみあれた遺跡』志雄町教育委員会
- 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1996『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報7(平成7年度)』
- 田嶋明人1996『第三章 手取扇状地にみる古代遺跡の動態』『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』松任市教育委員会
- 平田天秋他1997『永光寺遺跡－境内地の発掘調査－』石川県立埋蔵文化財センター
- 本田秀生・土屋宣雄他1997『寺家遺跡－県営ほ場整備事業羽咋西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』石川県立埋蔵文化財センター
- 坂元勇1997『寺家遺跡第12次調査報告書』羽咋市教育委員会
- 牧山直樹他1997『長者川遺跡』羽咋市教育委員会
- 上野敬他1997『石坂鍋山古墳群・石坂鍋山遺跡』志雄町教育委員会
- 川畑誠・沢辺利明他1998『荻市遺跡 一般国道159号線荻市歩道設置工事に係る発掘調査報告書』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 大畑喜代志1998『大坂A遺跡』志賀町教育委員会
- 宮下栄仁1998『吉崎・次場遺跡第16次発掘調査報告書』羽咋市教育委員会
- 今井淳一他1998『新保ゼンボン古墳群』羽咋市教育委員会
- 上野敬・北野博司他1998『杉野屋専光寺遺跡』志雄町教育委員会
- 芝田悟1998『羽咋郡志賀町坪野中世墳墓の出土銭貨』『石川考古学研究会々誌 第41号』石川考古学研究会
- 土屋宣雄・安英樹1999『鹿島町 御祖遺跡群』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 藤井秀明1999『能登部下仲町遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 今井淳一他1999『太田ニシカワダ遺跡』羽咋市教育委員会
- 上野敬他1999『二口かみあれた遺跡第2次』志雄町教育委員会
- 出越茂和1999『古代北陸における官寺・山寺・里寺』『北陸の考古学Ⅲ 石川考古学研究会々誌 第42号』石川考古学研究会
- 安英樹他2000『鹿島町 久江遺跡群』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 宮下栄仁2000『寺家遺跡－第13次発掘調査報告書－』羽咋市教育委員会
- 牧山直樹・今井淳一2000『住宅建設にともなう吉崎・次場遺跡第17次発掘調査報告書』羽咋市教育委員会
- 出口成治他2000『永光寺遺跡－市道余喜46号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』羽咋市教育委員会
- 山本信夫2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』大宰府市教育委員会
- 久田正弘2001『志賀町 甘田タイ遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 宮下栄仁他2001『羽咋市内遺跡発掘調査報告』羽咋市教育委員会
- 加藤克郎2001『羽咋市四柳白山下遺跡出土の古代銭貨』『石川県埋蔵文化財情報第5号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 牧山直樹他2002『粟生シモデ遺跡』羽咋市教育委員会
- 安英樹2003『鹿島町 久江ツカノコシ遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 三浦純夫2003『鹿島町 金丸宮地遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 澤辺利明2003『羽咋市 兵庫遺跡・粟生B遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘・立原秀明他2003『志雄町 荻島遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 立原秀明・加藤克郎2003『志雄町 荻島B遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 牧山直樹他2003『滝谷八幡社遺跡』羽咋市教育委員会
- 安井重幸2003『沢ソウケダ遺跡・宮地遺跡』鹿西町教育委員会
- 岡本淳一郎2003『「周溝をもつ建物」の基礎的研究』『富山大学考古学研究室論集 蜃気楼－秋山進午先生古希記念－』六一書房
- 岡本恭一・横山誠2004『鹿西町 徳丸遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘・宮川勝次他2004『羽咋市 東の場タケノハナ遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 安井重幸2004『ゴロジヤマ遺跡・テラダヤチ遺跡』鹿西町教育委員会
- 澤辺利明・宮川勝次2005『志賀町 大坂古屋垣内遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

#### 第4節 総括

- 布尾和史・澤辺利明他2005『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
小林直樹・宮下栄仁他2005『長者川遺跡』羽咋市教育委員会  
澤辺利明他2006『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅱ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
松山和彦他2006『宝達志水町・羽咋市 杉野屋専光寺遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
牧山直樹・宮下栄仁2006『寺家遺跡 市内遺跡発掘調査事業 第14次～第18次発掘調査報告書』羽咋市教育委員会  
三浦純夫・柿田祐司他2007『中能登町 久江サザミヤシキ遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
白田義彦・澤辺利明他2008『羽咋市 中川・太田遺跡群(中川A遺跡、太田A遺跡、太田B遺跡、太田C遺跡、太田ニシカワダ遺跡、太田ツツミダ遺跡)』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
宮川勝次他2008『羽咋市 的場農業倉庫前遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
牧山直樹・宮下栄仁2008『四柳白山下遺跡Ⅳ』羽咋市教育委員会  
牧山直樹・中野知幸2010『寺家遺跡発掘調査報告書 総括編』羽咋市教育委員会  
村井伸行・下濱聡2010『子浦ニシリョウA・B遺跡－県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』宝達志水町教育委員会  
澤辺利明・宮川勝次・岩瀬由美他2011『羽咋市 太田A遺跡 太田B遺跡 太田ツツミダ遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
澤辺利明他2011『宝達志水町 杉野屋遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
澤辺利明2012『七尾市 須曾ウワダラ遺跡 中能登町 水白モンショ遺跡 金丸宮地遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
久田正弘・土屋宣雄他2012『中能登町 高島カタタ・スギモト遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
田嶋明人2013『平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の編年』加賀 横江荘遺跡』白山市・白山市教育委員会  
林 大智他2015『羽咋市 四柳ミッコ遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター  
中野知幸他2015『酒井ノギワ遺跡・酒井バンドウマエ遺跡』羽咋市教育委員会  
川畑 誠2015『素描・古代七尾地域の集落遺跡の動向について』石川県埋蔵文化財情報 第34号』(公財)石川県埋蔵文化財センター  
(公財)石川県埋蔵文化財センター 2016『石川県埋蔵文化財情報 第35号』  
樫田 誠・下濱貴子・宮田 明他2016『第Ⅰ章 土器』『八日市地方遺跡Ⅱ－小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』小松市教育委員会  
林 大智2017『畝田・無量寺遺跡の調査』金沢市 畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡、畝田B遺跡、畝田C遺跡、畝田・無量寺遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター  
三浦純夫・久田正弘・白田義彦2018『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅳ』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター



## 報告書抄録

ふりがな	はくいし よつやなぎはくさんしたいせき ご							
書名	羽咋市 四柳白山下遺跡V							
副書名	一般国道159号改築(鹿島バイパス)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書〔本文編〕〔図版編〕							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	川畑 誠、(株)パレオ・ラボ、(株)古環境研究所							
編集機関	公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2019年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よつやなぎはくさんした 四柳白山下 いせき 遺跡	いしかわけん 石川県 はくいし 羽咋市 よつやなぎまち 四柳町地内	17202	711700	36度 55分 53秒	136度 51分 23秒	19970410～ 19971224  19980512～ 19981228	2,800㎡  7,900㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
四柳白山下 遺跡	集落跡 散布地	縄文	竪穴状遺構、 土坑、自然流路	縄文土器		中期～後期後葉 晩期後半		
	集落跡	弥生	平地建物、土坑、 溝	弥生土器、石器				
	耕作地	古墳	水田	土師器		小区画水田		
	集落跡 耕作地	奈良・平安	掘立柱建物、井戸、 堤防・護岸、溝、 水田、畠地	須恵器、土師器、 灰釉陶器、木製品、 帯金具、斎串		土石流痕跡、石積みの 護岸・堤防を検出。墨 書土器多数出土		
	集落跡	鎌倉	掘立柱建物	土師器皿				
	集落跡	室町～江戸	掘立柱建物、井戸、 土坑	陶磁器、土師器皿、 漆器、木製品、 石製品、銅銭、 金属製品				
要約	<p>碁石ヶ峰山地西麓の小合成扇状地上に立地する縄文時代中期～近世の複合遺跡である。土石流災害と各時代の遺構面が累積し、縄文時代の遺構面の深さは4mを超える。国道改築工事に係り7次の発掘調査が行われ、本書は第4・5次調査のうちG・H地区の成果を報告するものである。</p> <p>調査では、縄文時代中期～近世前期までの9面の生活面と、8回以上の土石流災害と考えられる厚い土砂堆積層を確認し、邑知地溝帯における集落形成を考えるうえで典型例となる。中でも、7世紀末葉～9世紀代に営まれた集落は、北東-南西方向で約300mの規模をもち、多数の掘立柱建物や墨書土器、陶製硯、転用硯、腰帯等の出土から、「地方末端官衙」や小規模な仏堂を含む、水陸交通の要衝に位置した中核的集落と考えられる。また、土石流災害で埋没した、古墳時代中期以降の耕作地(水田、畠)は、邑知地溝帯における耕作技術の変遷を知るうえで、重要な資料を提供している。</p>							

羽咋市 四柳白山下遺跡 V  
〔本文編〕

発行日 平成31(2019)年2月28日

発行者 石川県教育委員会  
〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地  
電話 076-225-1842(文化財課)

(公財)石川県埋蔵文化財センター  
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1  
電話 076-229-4477  
E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 鵜川印刷株式会社